
まほろばの虹

堀井 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほろばの虹

【Nコード】

N1920T

【作者名】

堀井 忍

【あらすじ】

出会いが奇跡を呼ぶ・・・そんな奇跡が小川智宏におこる。早瀬沙希という女性に変化して、その存在自体、特異なものとなった。

プログラマーとして、女優として・・・そして、現生唯一の陰陽師として活躍がはじまる。

第一部 第一話

第一部 始

暗闇の中、『シュツ』という音と共に、小さな明かりが灯された。

マッチをもつ細長い指がゆっくりとローソクに火を移す。
そのゆらめきは室内の微妙な空気の流れが演出したもの。

ローソクの灯りが、ベッドに腰掛ける一人の少女を写す時、
少女の輪郭が奇妙に揺れた。

絵画の中の世界・・・だが、少女の微かな息遣いだけが
現実感を与えている。

壁にかかる大きな鏡にいるのは虚構のもう一人の少女。
少女は鏡にむかってゆっくりと手を差しのべる。

・・・手の平が合わさった。
さえぎるのは永遠に隔てる鏡の壁・・・。
でもお互いの温かい体温が伝わり不思議な想いが伝わる。

少女が白いワンピースの背中ファスナーをゆっくりとおろすと、
スローモーションのようにワンピースが足元へすべりおちた。
薄いピンクのブラジャーのフロントホックがパチツと鳴ると
美しい乳房があらわれた。

少女はそこに他人の目があるかのように両腕で乳房を覆いながら
ブラジャーを両腕から抜き取りワンピースの上に置く。

細く引き締まったウエストまである、白いパンティストッキング
を

太腿まで引き下ろして片足つつ抜き取った。
ヒップは小さいながらもスタイルの良さを引き立てている。
身体に残った唯一の薄いピンクのパンティを
脱ぎ去り、小さく折りたたんでブラジャーの上に置いた。
全裸となつて鏡に向かい合う少女・・・形の良いバスト、
細いウエスト、そして、小さいながらも肉感的なヒップ。
しかし、その股間にはひっそりと息づく女性のものと
女性には在る筈のない男の物があつたのだ。

小川智弘は25才にもなつても、
声変わりもしていない華奢な身体の孤独な青年だった。
有名進学校から国立の某有名大学に進んだ、
いわばエリートのお卵だったのだが、
いくつもの優良企業の就職試験はことごとく落されていた。
成績は抜群だったのだが面接試験で全て駄目になっていたのだ。
ボソボソとした小さな声でしか話せない智弘に、
「君、もっと大きな声で話さないか！」
と面接官に怒られると余計に身体が震えだし声が出なくなる。
これではいくら成績がよかつて就職試験に通るわけがない。

大学の教授がそんな智弘を見るに見かねて、
大学のOBがやっているコンピューターのソフト会社を紹介した。
対人間だとうしようもない智弘だったが
コンピューターを相手にすると天才といつても良い。

智弘はすぐに頭角を現し、

智弘の開発したソフトが世間の評判を得たのは入社後、半年たった頃である。

そのソフトのおかげで会社の業績はグンと伸びた。周囲の智弘を見る眼は変わったが、相も変らぬ人間恐怖症・・・コンピューターだけが自分らしさを出せる相手だった。

智弘をこんなに暗く歪んだ性格にしてしまったのは智弘の育ってきた生活環境と共に、智弘自身が抱える大きな秘密に他ならない。

だがそんな智弘を泥沼のような生活から一変さす、ある出会いが待っていていようとは・・・。

或る日、智弘を名指して週刊誌の記者が取材に訪れ、智弘は拒否したが社長に半ば強引に応接室に連れて行った。待っていたのは一人の若い女性記者だった。女性記者は社長に引っ張られるように入ってきた智弘の顔をじつとを見ると

「あつ」

と小さく叫び声をあげて立ちあがった。

その様子には社長は

「なにか？」

と不信げに記者を見つめる。

「いいえ、何でもありません。失礼しました。

それでは、この方が？」

「そうです。彼が小川智弘。我社のホープです。ただ・・・」

「ただ、なんです？」

「彼はなにぶん人と話すのがあまり得意ではないので・・・まあお手やわらかに」

と苦笑いしながら部屋を出て行くこととする。

「あつ、社長」

「なにかね。もう、君は子供じゃないんだからこれぐらいのことは一人で対処したまえ」

と応接室から出て行ってしまった。

智弘は立ったまま相手の顔が見ることが出来ず、下を向いてモジモジしている。

「フフフ」

と含み笑いが聞こえた。八つと顔を上げると、キリつとした女性記者の美しい顔が笑っている。

「ねえ、座りませんか？」

「あつ！・・・す・すいません・・・」

と智弘は慌てて座ろうとしたがイスからひっくりかえりそうになる。

その様子に女性記者の笑い声が応接室に響きわたった。

智弘にはまるで針のムシロの上に座ったような、

落ち着かない時が過ぎていく。

女性記者からどんな質問を受けどんな答えをしたのか全く覚えていない。

いきなり女性記者がパタンとメモしていた手帳を閉じた。

その音にビクンと飛び上がった智弘の様子を可笑しそうに見なが

ら

「小川さん。これじゃあ取材にならないわ。

よかつたら場所を変えませんか？」

女性記者・・・もらった名刺には『講文社編集部 早瀬理沙』と書かれてあった。

・・・がメモを智弘に渡して部屋を出て行ったのさえ気づいていない。それほど自分を見失っていたのだ。

智弘が自分を取り戻したのはどれくらい時間がたっていたのだろう。

応接室を飛び出して女性記者を追ったが

その姿はもうすでにどこにもない。

メモには今日の待ち合わせ時間と場所が書かれてあった。

待ち合わせの喫茶店で早瀬理沙に取材を断ろうとした智弘だったが

少しの時間だけだから・・・と言って腕をつかんで放してくれない。

女性と腕を組むなんて生まれて初めてのことだから

真っ赤になってしまう。

その様子が可笑しいと又、理沙が明るく笑った。

どこをどう歩いたろう・・・理沙に連れて行かれたのは繁華街から少し離れた雑居ビルの地下だった。

『会員制』という白い札が貼つてある木製のドアを開けると

室内はカウンターとボックス席が二つあるだけの

小さなスナックだった。

カウンターに二人並んで座ると

着物をきた女性がおしぼりを持ってきた。

「理沙ちゃん、今日は早いね」

「ええ、ママ。今日はママにぜひ合わせたい人がいてね。連れて来ちゃった」

「合わせたい人？」

「ええ」

といつて俯むいていた智弘の度の強い眼鏡を横からスーっとはずしたのだ。

「あっ、なにを・・・」

理沙の手から眼鏡を取り返そうとしたが、猫のように素早い動きで

スツールから降りカウンターのの中に入ってしまった。

「あっ！・・・さ・沙希！」

という驚愕の音がボウとした智弘の視界の中から聞こえてきたのはそんな時だった。

「ね、よく似てるでしょ。私も今日初めてあったときは腰を抜かすほど驚いちゃった」

と理沙の声が聞こえる。

しばらくは二人で何やら小声で話しているようだったが「ごめんね」

と声がかすくつきりとした視界が戻された。

「ごめんなさいね。理沙ちゃんがいけないことをして」とママが謝ってきたがなぜか目が赤く染まり濡れている。

しばらくは三人で当たり障りのない会話をしていたが、

4〜5人の女性客が入ってきてのをしおに

ママは他の客のところに入り、

理沙は昼間の取材の続きを再開した。

今度は口当たりの良いアルコールを潤滑油として取材をする。

一流の取材記者といわれるの理沙の誤算は

思ってもいない智弘のアルコールの弱さだった。

途中でいきなり智弘が失神してしまったのだ。

混沌とする意識が闇の中を蠢き、
見えぬ己の手がまるで闇を彷徨うように、
手探りで何かを求めている。
そこに一条の光が闇を裂いた！、
その光の粒子があやふやだった己の存在を知らしめ
光自身が生き物のように彼を包み込み動き出した。
光の中で母の胎内にいる赤子のように身体を丸め、
そして、まるでその男という身体がサナギであったように
背中が割れ、その中から美しい少女が姿を現す。

抜け殻となった男の体は一瞬にして塵か埃のように消え去り、
少女は折り曲げた両足を抱える体勢で
ただじつと光の中で前を見据えていた。

不思議なのは男であったときも、
そして美少女として生まれ変わった今も
その股間には男の隆々とした性器と
その下方にひっそりと隠れるような女性の性器が
息づいていたことだ。

闇の中を飛び出した少女はそのまぶしさに目を細めながらも
進み行く光に心を解き放ち・・・安心したように身をゆだねてい
た。

ふと気づくと少女は一面お花畑のその只中、
大きな木の下に座りこんでいた。
少女がゆつくりと顔をあげると、
お花畑の中をこちらにむかって歩いてくる女性を視線にとらえた。

その瞬間、少女はまれて初めて表情を崩した。
その女性に向かって微笑んだのだ。

生まれたばかり・・・赤子同然の少女の横に腰を下ろした女性は
少女をそつと抱く。

（ようやく来たわね。楽しみに待っていたわ）

（わたしを？）

（ええ、そうよ。私が肉体を捨てたのもあなたを待ったためよ。
本当は自ら命を絶つことは絶対にいけないことなの。

でも、わたしは天におられる大いなるお方が私を召されたため
今まで天上界において修行をしていたわ）

（修行？）

（そう。苦しかったけどあなたのことを想い、
なんとかがんばってこれたの）

（わたしを？・・・どうしてです？）

（あなたにはまだわからないけれど、
女性となったあなたにはとてつもない力が宿っているの。

あなたはその力を使って数々の使命を
果たしていかなければならない・・・それがあなたの宿命なの）

（宿命？・・・）

（そうよ。でも・・・あなたは女性としては生まれたばかりの
赤子と同じ・・・だけど時はそんなに待っていてはくれない。
だからわたしが選ばれたの）

（その修行ってどういうこと？）

（あなたの力に負けないようにするため・・・
そしてあなたの中に女性として同化するためよ）

少女は驚いて女性を見た。
だが女性は一瞬にして光輝き・・・
そしてたくさんの光の集合体となって
少女の身体に吸い込まれていった。

消える間際に囁いた女性の言葉はこの先の人生を
大きく変化させていくことになる。

（早瀬沙希・・・これがこれからの一生を
あなたが女性として生き抜くための名前となるの。
・・・そして、この名前こそが私が私であった証なの。
大事にしてね・・・そして、ママと理沙姉をよろしく・・・）

地が一瞬に消えてしまったため、
再び闇にあるまどろみの中へ落ちていく・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ふと目が覚めたとき、少女に変わってしまった夢が
まだ覚めきっていないのか
目の前に自分の両手を持ってきてまじまじと見つめた。
薄暗い中一条の光に映される光景・・・
ホント・・・男らしくない手だ。ほっそりとして白魚のように白
い。

これが手だけならまだいいがこんなのが全身におよぶ。
顔はいまはやりの小顔というか、
睫が長く目がパッチリとして鼻筋がとおり唇が赤い。
いわば女顔。

でも自分は大嫌いではあるが”男”として生きている身だ。
全く正反対のこの外見では、

平穩にそつと社会の片隅で生きていきたいという
自分の願いは叶えられそうにない。

目が悪い事をこれ幸いに分厚いレンズのメガネで
自分を隠そうとしているが

これだけ世間に名前を知られてしまうと

今日のような非日常的な騒動に巻き込まれてしまう。

もう嫌！・・・そう思うと何だか自分が衰れに思えてきて、
すーっと涙が頬を伝って流れてきた。

その時だ。その涙を何やら白いものがふきとっていく。

はっとして現実に戻るって周囲を見ると、涙でボウっとしている
が、

自分の両横から二人の女性が自分を見つめているのがわかった。

つまり、ベッドに横たわった智弘をその両サイドに腰をかけて

女性達が見つめていた

二人の女性・・・雑誌記者の早瀬理沙とあのスナックのママだ。

ママの手に白いハンカチが握られているのがわかるから、

先ほど涙を拭いてくれたのはママに違いない。

そのママが

「智弘くん・・・大丈夫？・・・」

といって持っていたハンカチで涙を拭いてくれる。

「大丈夫・・・でも、心の中がポツカリと穴があいているようで
なんだかとても寂しい・・・の」

つい正直に答えてしまった自分の心の中・・・。

どうしてこんなこと初対面の人に話せるのか・・・

それに思わず口についてしまう女性口調・・・そして、思考も、止めようと思っても、止まらない・・・パニック寸前になる。

でもママが静かに智弘の隣に横たわり強く抱きしめてくれる。するとその温かさにスーッと落ち着きが戻る。

だが今度は心の奥底からなにか熱い物が湧きあがってきてママの豊満な胸の中に顔を埋めて泣き出した。

自分の身体のどこにこれだけの涙があったのか。止め処もなく溢れてきて止めようがない。

脳裏にいろんな思い出が浮かんでは消える。

b学校でのいじめ、祖父母や親戚から・・・

いや古くから男世界としてなりたっている

村人達からのしつけと称する体罰・・・

つらくて包丁で喉を切ったこと。

そのせいかいつまでも二次成長期がおとずれず、

声が甲高い少女の声のまま・・・

その声のせいでいじめがやまず、逃げるようにこの都会に出てきた母と子・・・

その母にも大学入学時に去られてしまった。

・・・こんなことが次々と思い出される・・・

「ヒック・・・ヒック・・・」

ようやく涙が枯れたのか・・・

それとも落ち着いたのかようやく泣き声が納まり、

そのかわり思い切りママにだきつく。

智弘の背中にはいつのまにか理沙が横たわっていて

智弘の長い髪を束ねていたゴムをとり、

ゆっくりと梳いてくれているのだ。

それがとても気持ちがいい……
泣き声が止んだのもそのせいもあるのかもしれない。

理沙がベッドの頭の上に置かれていた水差しからコップに水を注ぎ

ひとくち口に含んでから智弘の口に近づいてくる。

そっと唇が合わさると智弘の薄く開いた唇の間から

理沙の体温を含んだ水が、

少しづつ泣き疲れた智弘の口内に流れこんできた。

初めてのファーストキス……だが、そんなこと考える余裕もな

く

「ゴクツ、ゴクツ」

必死に飲みこむ水はなぜか甘く、

ピーチのいい香りが口内に広がった。

喉の乾きが収まりやっと落ち着くと

今のファーストキスのことが思い出され

なんだか強烈な恥ずかしさが襲ってきて

再びママの胸に顔を埋めてしまう。

「ねえ……どうしたの？……ねえ……」

と智弘のこの行動に驚いた理沙が肩に手をかけて

後ろを振向かせようとする。

肩と腕を振ってその手を離そうとする智弘……。

全く……こんなこと大の大人の男がする行為ではない。

「嫌！……理沙姉の意地悪！……」

こんな声が、理沙の耳に聞こえてきた。

もっと強くママにすがりつこうとする沙希。

その二人を引き離そうとする理沙……。

どうしてそんなことをするのか……といえは
理沙の驚いた目をみれば推察出来るだろう。

「さ……沙希！……沙希なの？……」

驚いた理沙の声に智弘……いや、これは沙希だ。
ずっと想い続けてきた。

忘れるなんてできっこない。

その声……その表情……その言い回し……
ちよつとした身振りから懐かしい想い出が駆け巡った。

早瀬沙希……もう立派な女性として理沙やママの目の前にいる。

目覚めてからどんどん変わっていくのを見つめる二人。

この少女の男から女への変化は沙希がいなくなってから
空虚な日々を暮らしてきた

だが、こうして沙希が幸せと共に帰ってきたのだ。

「沙希はママの胸から顔を離し、理沙のほうに振向くと

理沙姉！……もうそんな意地悪ばかりすると
相手になってあげないからね」

といつてからママの顔を見てから

「ただいま……ママ……」

といつてママに思い切り抱きついた。

「沙希……ちゃん？本当に沙希ちゃんなのね……」

つい声を張り上げてしまうママ。

頷いた沙希に

「ああ……」

といつて力強く抱きしめるママ。

「神様！……ありがとうございます。
愛する娘を私の元に返してくださいました……」

「痛い！……ママ……痛いわ……」

ハツとして抱きしめていた腕の力を緩めるママ……
沙希の實の母の早瀬真理だ。

平安の御世から脈々と伝わってきた早瀬一族の長でもある。

早瀬一族は女しか生まれない一族……哀しい宿命だが
現在まで日本中に散らばる女達は子孫を残すため、
かりそめに男達と交わり、子をなしてきた。

長である真理も、7人いる真理の妹達もそうだ。

真理達の母だって……もう亡くなったが真理達を生むために
いろんな男達と交わった。妹達と同じ父はいない。

真理にしたってそうだ。理沙と沙希の父は違う。

愛するのは女性だけ。母と娘とはいえ女と女だ。

一族の性の概念は一般とは違う。

だから、沙希が死ぬ前までは毎夜のように母子達で愛しあっ
た。

時々妹達も交じることさえあった。

でも沙希が死んでからはそれも無くなった。

……でも……

ママと沙希は熱いキスをくりかえす。

後ろからそれを引き離すようにして理沙が加わってきた。

三人の熱い抱擁はいつまで続くのか……

そして……

「ねえ、ママ！・・・理沙姉！・・・」

「なあに沙希ちゃん」

「どうしたの？沙希」

二人の問い掛けに、沙希は三人の真中に身を横たえてしっかり手をつないだ体勢で天井を向いて話した。

「私の身体を見たでしょ」

「えっ？・・・ええ・・・」

「そうでしょうね・・・こんな格好をさせているものね・・・

で、どう思った？」

という沙希は白いスリーインワンと白いショーツ、

そしてガーター用の白いストッキングというランジェリー姿だ。スリーインワンの胸元は少しだが谷間が見える。

「化け物・・・って思わなかった？」

沙希が二人に向かって少し哀しそうに言う。

「化け物だつて！・・・そんなこと言われてきたの？沙希・・・

頷く沙希に

「化け物だなんてとんでもないわ。・・・私はね、沙希。

とつてもあなたがうらやましい。

私もそんな身体だったら一族の宿命をかえられるかも知れない。

ねえ、ママ」

「沙希ちゃん。今の言葉であなたが背負わされてきた、

苦しい運命がわかるわ。

でもこれからはそんなこと絶対に言っては駄目よ。

こんな可愛い沙希ちゃんが化け物だなんて言われてきた
と思うと物凄く腹がたつわ。……あのね、沙希ちゃん。

私達、早瀬一族に伝わる伝説でこんな言葉があるの。

『男女両性を持つもの、けっして無下にすることなかれ。』

このもの早瀬の伝説の御子なり』」

ママは楽しそうに話す。

だってそうだろう、伝説の御子はこうして私の隣りで

あどけない顔をして横たわっている。そう確信しているのだ。

「だったら、ママ。今の交わりでママのお腹に

赤ちゃんができたかも知れないわ」

という沙希に

「沙希ちゃん、望むところよ。

沙希ちゃんの子供だったら素晴らしいわ。

ねえ、理沙ちゃん」

「そうよ。……これで私も母親か……

そう思うとなんだかとっても嬉しい」

男女両性具有……そんな身体を持ち、苦しい思いをしてきたが
ようやく安住のすみかを見つけた

小川智弘……いや、早瀬沙希。

今までの哀しみや苦しみはこれからの人生の糧となる。

ではこれからの人生は？というと

この物語を読んでいただく他あるまい。

今後の早瀬沙希の活躍はいかに……乞うご期待！というところだ。

第一部 第二話

沙希はパッチリと目を覚ました。・・・なんだかすがすがしい寝起きだ。

沙希にとって性も人生も変わってしまった初日の朝、
幸せに囲まれている・・・と実感ができる。

今まで心と身体に澱んでいたものがスッキリと取り払われて妙に身体が軽い。

起き上がって

「ウーン」

と伸びをしていると、ドアがノックされ

「どうぞ」

というと理沙がはいってきた。

昨日のバッチリ化粧を決めた姿は格好良く宝塚も男役のようできれい・・・

と思っていたが、こうしてスツピンの姿を見てしまうと

5歳くらいは若返り、とても愛らしいのだ。

（ああ・・・この人が私の姉さんなんだ）と思うとなんだか嬉しくなってしまう。

そんなこと沙希が思っているとはつゆ知らず

「沙希、おはよう。起きていたのね」

「理沙姉、おはよう」

と自然な言葉で朝の挨拶が終わる。

「そうしていると本当に沙希なのよね」

と言いながらベットに腰をおろした。

「ねえ、夕べのこと覚えてる？」

理沙は沙希の顔をじっと見てニヤツと笑った。

「イヤツ、馬鹿っ！」

と枕を投げつけた。

顔が真っ赤になっているのが自分でもわかる。

沙希の人生で生まれて初めて女性と交わったのだ。

それも女としてだが、最後にはきっちり男の機能を果たしている。

それをからかう理沙に

「ホントにもう理沙姉って意地悪で……」

「意地悪で……何？」

「う〜ん、……大好きな姉さんよ」

とって飛びつきキスを仕掛けた。

でもまだねんねの沙希にとっては理沙にはかなう筈もない。

逆に組み敷かれてしまって身動きが出来なくなってしまう。

沙希の身体の上になった理沙が

「ねえ、沙希。ママが朝御飯って呼んでいるよ」

「判った、すぐ行くから……ねえ、理沙姉……そんなことしていたら

私……動けない」

身体の下沙希は何故か子供っぽく、そして素晴らしく可愛い……。

平静を装ってはいたが、もう我慢が出来ない……

思わず沙希の身体をガツと押え、その唇に吸い付いていった。

本人達は夢中でそんなに時間はたっていないとは思っていたのだが
沙希を呼びに行ったきり理沙がなかなか降りてこないのを不審にお
もったママが
二人を呼びにあがってきて目撃したものは……。

「うん……いけない子達ね。ママに黙ってそんなことするなん
て……
駄目だわ、こんな目にしてしまっては……ねえ、ママも仲間に入
れて……」

いそいで着ていたものを全て脱ぎさったママが二人の中に飛び込ん
でいった。

三人の幸せのひと時がこうして過ぎていく。
……沙希の上になっていたママが崩れるように沙希の横に転がり
落ちて

荒い息を吐いたのは一体、どれくらい時間がたっていたのか
今日が土曜日の休日でほんとうに良かった……。

ベットに横たわった三人の荒い息からメスの匂いを発散させ、
部屋中に甘い香りが漂よっていく。

ママや理沙の視線がつい沙希のうえに注がれてしまう。

昨日よりも今日……その状態がひどくなっていくのはどうい
う訳か？

沙希を見ていると何だか乙女のように胸を躍らせてしまう。
沙希の眼は深い泉のよう、視線を当てればつい引き込まれてしま
うのだ。

(この子って女を夢中にさせてしまう。．．．そういうフェロモンを持っているわ。
それは私達一族にとって良いことなのか．．．悪い事なのか。
ただどわたしは沙希を守る。絶対に．．．もう二度と放しはしない)
ママも理沙もそう誓うのだ。

下着姿の三人の甘くけだるい時間は沙希の、
「ママ!．．．お腹がすいた．．．」
という言葉で現実感を取り戻した。

性欲が充足した今は食欲のほうが切実な問題となる。
その証拠に『ググ』と沙希のお腹が鳴り出した。

「あらっ．．．ふふふ．．．お腹がなるほど力を使い果たした．．．
．．．ということかしら」
「もう．．．理沙姉ったら、．．．」
とぷくと膨れる沙希。

「そうですよ、理沙ちゃん。沙希ちゃんをからかってはいけないわ。
私達二人の為に沙希ちゃんは充二分にがんばってくれたのだから．．．
．．．」

「私、沙希のこと．．．からかってなんかいないわよ。
こうしていても時間が経てば経つほど沙希のことが大好きになって
いく自分が

何だかいとおしくなってきたからね」
という理沙に

「理沙姉……」
と指をからませ、『チュッ』と軽くその唇にキスをした。

「ほんとう……昔に戻ったようでママはとっても嬉しい。……
あっ、もうこんな時間……朝食っていう時間でもなくなってしま
ったわ。」

「どうする？何か作る？……」
というママの声に

「ママ……わたし操叔母様のところへ行きたい。
久しぶりに逢いたいし、大好きなオムライスを食べたい！」

「沙希！……どうして操叔母様のことを？……」
びっくりした声をあげる理沙に沙希が

「あら……どうしてかしら？……自然と口についちゃった……」

しばらく考えこんでいた理沙が

「沙希！少し教えてほしいことはあるの」
「なあに？……理沙姉……」

「実は少しだけ……ほんの少しだけど昨日から違和感があるの
？」

「違和感？……」
「ええ……じゃあ、ちょっと聞くわよ。」

沙希の身体のこととは別にしてよ。精神的に女性になりたかった？……」

「えっ？……男時代のこと？……あんまり思い出したくない
んだけど……」

仕方ないわ、理沙姉が聞く事だから……うん……って考えることもないかあ

……うん、全然思いもしなかった。

段々身体が変わってきたのも知っていたけど……少づつし胸が出てきたことは

嫌で嫌で仕方がなかった。

……でも、今から思うとそれも女に変わっていいこととするこの身体に

反発していたのね」

「そんな沙希が……たった半日で……こんな短い時間で女性に変わってしまった。

それも完璧によ。前に小さい頃から女になりたかったニューハーフが

性転換した直後に取材したんだけど、なんかちぐはぐだったわ。

女になりたかったはずなのに男の地が出ていて見ていられなかった。

でも沙希は違う……あれよあれよと女性に変わって、

もう誰もがあんたが男だったなんて考えもしないわ。

私でさえそんなこともう思いもしない」

「うん……じゃあ、あれかなあ……」

「あれって？」

「昨日ね、ママのお店で気を失っていたとき、夢の中で……そのときはまだ何もわからなかったから……」

とてもきれいな若い女性に出会った……というのだけ覚えているの。

とにかくその女性が私を待っていたわ。

いえ、待ちつづけていたって言うていた……

その人が私にはなかった女性としての記憶を与えてくれるって……

そして、私と同化するといつて私の身体の中に消えてしまったわ。
……いいえ、今思うとあれは絶対夢ではなかった。

……だって私には……女の子としての記憶があるんですもの」

「何ですって！」

驚いた二人がベットの上で飛び起きた！

なんだかおかしいと思っていた。……でもこんなことがあるなんて……。

「そうでもなければ、いくら私でもこうしてすぐに女性にはなれっこないわね」

そういう沙希にベットから降りて机の引出しをあけて何かを取り出した理沙。

「沙希！あなたメガネは？」

「えっ？……あら、理沙姉に言われるまで気がつかなかったわ……

……どうして？……どうしてメガネがなくても良く見えるの？……

「沙希！……亡くなった沙希はね目がとてもよかったの。」

確か2・0あったと思うわ」

「それが……一体……」

どうしたの？……と、小首をかしげる沙希の目の前に、机から出して背後に隠し持っていた1枚の写真をかざす。

「あっ！……この人……」

といって理沙の手から写真を取り上げた沙希はその写真をじっと見つめる。

「そうよ・・・この人よ・・・」
と叫んで理沙とママの顔を見つめた。

「この人が・・・沙希・・・さん?・・・」
そういわれて頷く二人をじっと見つめてから
再び写真に目を移し食い入るように写真の女性を見る。
そして・・・泣き笑いという表情になり涙が頬を伝わりだした。

その涙を黙って拭うのがママだ。
立ってその様子を見ていた理沙が

「沙希!・・・あんた女になってからの自分の姿、夕べからみていないでしょ」

「えっ?・・・ええ・・・何だか見るの恐くて・・・」
まだ、潤んでいる眼を理沙にむける。

この子が昨日まで男だったなんて誰も信じないだろうし、
昨日からの変化をその目で見続けているママや理沙だって
100%自分の目を信じられないでいるのだ。

「さあ、沙希いらっしやい。女は鏡を見るのが大好きなのよ。
鏡で表情を勉強するし、毎日のメイクも鏡がなければ出来ないわ」
といってベットに座り込んでいた沙希を大きなドレッサーの前に連れていく。

「あっ!・・・」
といてドレッサーの前で立ちすくんでしまった沙希。
「こ・・・これが私?・・・」
そこには夢の中で出会った少女が立っていたのだ。

なんだか慈しむように鏡の中の自分をじっと見始めた沙希を後ろから
ママと理沙が後ろから昨日よりも女らしい線になった肩に手を置く。

「どうお？沙希ちゃん」

ママの優しい声に沙希は鏡を見ながら

「私・・・この身体大事にする・・・決してママや理沙姉を泣かすようなことはしないわ。」

・・・今、ここで約束します」

「ありがとう、沙希ちゃん。その言葉亡くなったあの子が聞けば喜ぶわ」

「いいえ、ママ。早瀬沙希は私なのよ。この身体には沙希さんの心が同化しているんだからね。その証拠に・・・」

と喋って話し出したのが、沙希が5歳のとき忙しい仕事の合間をぬって

理沙と沙希をハイキングに連れていってくれたときだ。

お昼が終わった後、運悪くママがゴミを少し行ったゴミ捨て場にて行った間、

ちよこまかと動き回る妹の沙希をシートの上で見守っていた理沙がお腹が一杯になったことからついウトウトと居眠りをしてしまった。

ほんの1分ぐらいだったと思うが目が覚めたときにはその辺りを走り回っていた

沙希の姿が見えない。慌てて飛び起きた理沙が脱いでいた靴も履かずに走り出した。

「沙希！・・・沙希！・・・」

大きな声で叫びながら駆けずり回る。5歳違いの大事な妹だ。

運悪くというかママが他のハイキングの人達と同じ場所で食事するのを

嫌ったので回りには誰もいない。

そのうち池の中に黄色いものを見つけた理沙・・・

その色はいつも目に付くようにとママが沙希に着せていた服の色だ。

躊躇なく理沙は池に飛び込んで沈んでいた沙希を引っ張り上げた。

運が悪かった中で運がよかったのは、

理沙がスイミングを習いに行っていて優秀な選手だったこと。

その頃に走ってきたママが総合病院の婦長をしていたことだ。

我が子二人を池からひっぱりあげ、仮死状態だった沙希に手当てをほどこす。

その間に理沙は濡れた服にも構わずに近くの店屋にとびこんで救急車を呼んでもらった。

母と姉の連携で命が助かった沙希・・・その頃のことを話す沙希に二人は顔をあわせてから沙希の背中に顔をくっつけて泣き出した。

でもその泣き声はすぐにやんだ。それはそうだ、死んだと思った娘が・・・

妹が・・・こうして手の中に現実にいるのだから・・・。

鏡に映る下着だけの三人・・・この様子をもし他の者が見たとしても

このうちの1人が昨夜まで男で・・・なおかつ今も男の機能をもつ女性である事を例え知ったとしても信じることは出来ないだろう。

お風呂でさっぱりと汗を流した三人、

特に沙希はママが用意した亡くなった沙希が買って一度も手をお
していない

インナーとアウターを感慨深げに身につけていく。

淡い色が好きだった沙希が買っていたものは

パープルのブラジャーにパープルのＴバックショーツ、

そして、パープルのガーターベルトとストッキング。

全てパープルで統一していた。

アウターは白いブラウスと水色のミニのタイトスカートというよう
に、活動的にまとめてみた。

お化粧品は眉はそろえたが口紅だけにとどめる。それだけで充分だっ
た。

ヘヤーは肩まで伸びた長髪をママがセットしてくれた。

前髪を切りカチューシャをはめる。どうみても10代の少女だ。

「まあ・・・沙希！見違えたわ」

そんなことを言った理沙はＴシャツとジーンズのラフなかつこうだ。

「今日は沙希がメインだからね。私は目立たないようにしたわ」
といいながらも、十二分に理沙の美しさを主張していた。

ママは塾女らしく黒いワンピースだが女の色香がプンプンと匂う。

理沙の車で約20分、レストランに着いた。ここが叔母である操の
店だ。

お店に入ると昼時のこと満員だったが店の奥から

「いらっしやい、お部屋とつといたから」

とママとよく似た女性がニコヤカにでてきた。

しかし、沙希の顔を見てハツとして足をとめる。

ママはその女性の手を取って

「お部屋でゆっくりとお話するわ」

女性は気をとりなおしたのか、ママに手をとられたまま部屋に案内した。

「操さん、あなたにお話があるの。ちょっといいでしょ」
三人がイスに座るとママがこう言った。

「お食事のあとでお話があるけどいい？・・・」
操がうなずくと

「少し待っててね」

と言って立ち上がった部屋を出て行く。

「操叔母様・・・驚くかなあ」

沙希がいうと

「そりゃそうよ、さっきの反応見たでしょ。まるで幽霊にあっただみ
たい」

「でも、あんまり驚かさないようにしましょうね。」

そうでないと操、あんまり気が強いほうではないから」

そこへ操が自分で4人分のお茶を持って部屋に入ってきた。

お茶を配りながらもその視線は沙希に注がれ続ける。

「これでゆっくりと、お話が聞けるわ」

といって座るが視線は変わらず沙希に向いたままだ。

「お話はママがするから挨拶はあとでね」

とママが沙希に言うてから、隣りに座った操のほうに向き直る。

「これってどういこと？・・・姉さん」

「今お話するわ」

とママは昨日からの出来事をこと細かく話した。

沙希が智弘という男だと聞くと呆然として沙希の顔を穴があくほど見る。

でも、沙希という女の子になっていくさまや三人の交わりの話に入ると生唾を飲み込みしだいに顔が紅潮し始めた。

ママの話が終わっても、紅潮していた顔色は元には戻らない。

「真理姉さんって、ひどい」

「エっ？」

「だって、こんな話を昼間から聞かせるなんて」

「どうしてなの？」

顔を赤らめながら操はママの手を取って自分の黒いフレアースカートの中に

その手を差し入れる。

「操、あなた……」

「最近私、品行方正なの。姉さんひとつも呼んでくれないから……」

その上、私は姉さんみたいに結婚もしていないし子供もないわ。

こんな私でも子供が欲しいと思うことが最近多いのよ。

とつても寂しくなつて仕方がないんだから……」

「だって、操は死んだ雅彦さんに……」

「ううん、婚約してから私を残してあつというまに逝ってしまったあの人には

もう長年充分につくしてきたと思うわ。御両親ももうすでにこの世にいないし……

最近思うのよ、こんなことしてきた私って悪女じゃないかって……

だって女性しか愛せない私が子孫を残すのが目的だけで彼に近づいたのよ。

いくら彼が亡くなったってそんな不純な目的を持つ私を許されるわ

けないじゃない」

そういつてテーブルに突っ伏した。

大きな声をあげて泣くわけじゃないが、声を押えて嗚咽をしている。

女性の悲しさが沙希の心に迫ってきてたまらなく立ち上がった。

ママと理沙は黙って見ている。

操が座る椅子に手をかけると膝まづく。

そして、操の肩に手を置いてこちらを向かそうとする。

『ビクッ』と身体を震わせた操だが嫌々をしてテーブルから顔を上げようとはしない。

だが女性になったとはいえ昨日まで男をやっていたのだ、非力とはいえ今の操を振向かすぐらいは簡単だった。

操の黒いロングスカートの脚の間に無理やりグツと身をおいた沙希、

だが操は俯いて顔をあげようとはしない。

今の沙希は本能のまま、女性として心の想うまま行動している。

両手で操の顔をもちあげ、営業用のファンデーションも構わず

両目から溢れる涙をペロペロと舐め上げる。

吃驚した操が自ら顔をあげるとその唇に唇を合わせていった。

操の見開いた目が沙希の行動に驚きを物語っていたが、やがて静かに眼を閉じる。

こんな短時間だが操が変わっていく。柔らかい表情になり沙希を受け入れたのだ。

実をいうとママの妹で沙希を認めさすのが一番難関だったのが操だ

った。

気が弱いくせに一本芯が通っていて、姉妹の中で一番頑固だったし、死んだ沙希を一番可愛がっていたのも操だった。

その操が沙希のキスを受け入れているのだ。

ママと理沙はニツコリと笑いあっていた。

唇を離れた沙希は操の唇から滴り落ちそうな二人の唾液をぺろっと舐めるとニツコリと笑った。

その引き込まれそうな笑顔に操はクラクラする。

これが初恋?・・・生まれて初めての胸の高まりは操を一瞬に変えた。

沙希が元男ということとはもう頭にはない。

沙希がいさえすればこれから生きていける・・・操の愛がそこに生まれたのだ。

「操叔母様・・・」

と操の手を握る沙希。

そんな行為に操は・・・もう・・・胸が『ドキドキ』と高鳴るし、頭の中がボウッとしてしまって、沙希の言うなりだ。

「は・・・はい・・・」

理沙はそんな操を見ていられなくなってトイレに立ってしまった。ママも出て行こうかどうしようか迷ってしまうぐらいの操の姿、これではまるで高校生の女の子だ。

「操叔母様、私の好物だったおいしいオムライスを食べたい」

「えっ?・・・いいわよ、そんなこと・・・」

あれはここでのメニューには入ってないの。でも頼まれればいつも私がつくっているのよ。

沙希ちゃんのためならうんと腕をふるうわよ」

「わあ、嬉しい。それでこのあと私達、お洋服や下着を買いに行くんだけど

叔母様はどうする？」

沙希はレストランのことを考え遠慮がちにいった。

でも、このまま操をひとりにはおくことは沙希にはできなかった。

そこにママが助け舟を出した。

「操さん、レストランはマネージャーさんにまかせておいていいんですよ。

このあとお洋服とランジェリーを買いに行くの。靴も買いたいし、小物類も……。だって沙希ちゃんが持っていたものってもう古いから……。

最近のファッションのものが欲しいんだけど

頼りになるのは理沙ちゃんだけ、沙希ちゃんも私もこの方面は全然だめなの。

そこへいくと操さんはファッション関係のお友達も多いし、いつもお客様を見ているから目が肥えているでしょ。

ねえ、お買い物手伝ってくれる？そのあとうちに泊まればいいわ」

パツと眼を輝かす操。真理が言いたい事を察したのだ。

このまま皆と買い物に行つて姉の真理のうちに帰つて食事をして、そして……そのあとの時間は至福の時となる。

すつと立ち上がった操

「私、沙希ちゃんに腕をよりをこめておいしいオムライスを作つて

くるわ」

と部屋を出て行った。だがすぐに戻ってきて

「姉さん達のは私と一緒にいいわね」

こちらの返事を待たずに再び姿を消した。

「ふふふ・・・現金な操さん・・・」

ママが言ったが

「良かった。叔母様が元気になって・・・」

沙希がほっとしたようにいう。

「沙希は本当に優しいんだから・・・」

でも私には操おばさんの様子、いつもと変わらないように見えただけ
「と」

「ううん、理沙姉、叔母様は平静を保っていたけど心の中は空っぽ
だったわ。

何の目的もなくただ生きていくだけ。そんな操叔母様見るのなんて
私は嫌よ！

だから本当の生きる目的が見つかるまで操叔母様には私のために生
きて貰うの。

だから今夜からうんと愛してあげたいわ」

その外見の幼さとは別人の沙希だ。熟成した女の色香が匂い漂って
きて

理沙やママでさえもドキッとしてしまう。

ここがレストランでなければ沙希に抱きついてしまっていた。

それだけ沙希の女性としての魅力には我を忘れてしまえそう・・・。

運ばれてきた料理・・・どれも素晴らしかった。

沙希の好物のオムライスは頬が落ちそうになるほど美味しかった。

さすがに操が腕によりをかけてつくったものだ。

四人は楽しく語りながら食事の時間を過ごした。

デザートのコーヒー・・・これもまた喫茶店で出されるどのコーヒよりも美味しいのだ。

さすがに操が厳選したコーヒー豆だ。

その時ママが

「ねえ、沙希ちゃん。明日の月曜日からお仕事でしょ」

沙希はうなづく。

「あなたの職場がどんなところか知らないけれど沙希ちゃん、昨日までのように働ける？・・・あなたはもう女性よ。」

男としてのあなたはもうこの世にいないわ。どうするつもり？」

沙希はニツコリと笑う。

「ママ、心配しないで。私・・・今のお仕事が大好きなの。」

でも、もし私のようなものいらなくなって言われたら私ひとりでもやるわ」

「ママ、大丈夫よ。来週に私の書いた記事の雑誌が発売されるわ。」

内容は、今世界中で買われて続けているビジネスソフト”ワープス
ロウ”

作ったコンピューターの天才・早瀬沙希とはこんな人・・・ってね」

「えっ？」

「まあ・・・」

二人の姉妹はお互い顔を見合わせていたが

質問しようとして声を出すが、お互いタイミングが合ってしまい言葉が続かない。

でもやっとなママが理沙に聞く。

「じゃあ・・・沙希ちゃんは何？・・・」

「ママ達は知らないかもしれないけれど、沙希はこの業界・・・いいえ、

日本中・・・世界中で今、もっとも有名な女の子よ。

もっとも小川智弘の名前で出しているけど、

本名早瀬沙希という女の子って私がばらしてしまったら、

この先どうなるやら・・・ね」

「嫌だなあ、理沙姉。取材とかそんなの続くわけ？」

「さあ、それは判らないわ。

でも確か沙希のところの社長が海外からインタビューの依頼があるっていつていたわよ」

「もう・・・」

「心配ないって・・・智弘くんなら駄目だけど沙希ならどんなことがあっても大丈夫よ」

「あつ・・・なんか理沙姉に私、ひどい言われ方してる」

「ひどくはないわよ。だって可愛い沙希が世界に名前を売るのはよ。

応援したいじゃない」

「理沙姉・・・」

「ふ〜」

と椅子に腰を落としたママ。

「沙希ちゃんってそんなに有名な人だったの。ママちっとも知らなかった」

「なんだかガツクリするママに

「うっん、ママ。・・・仕事でいくら有名になったってそれだけのことよ。」

でも私には家族が出来た・・・それがとっても大事で嬉しいの」

「でも小川の家の人はず？」

「私には家族って呼ばれるものないんです。

大学入学時に唯一肉親だった母に『もういいでしょ』っていわれて捨てられたのです」

「捨てられた？」

ママも理沙も操も驚いて身体をのりだしてしまう。

なんて肉親の情に薄いのか・・・ママは泣き出しそうになり慌ててバックからハンカチを取り出した。

「泣かないで、ママ・・・私は母には捨てられたけれどママが出来たのよ。」

飛び上がるほどうれしいわ」

操は客観的にこの場面を見ていたつもりだったが、そうはいかない。

沙希の優しさにふれ、沙希に対する恋心が倍増してしまった。

「ママ！お買い物あとでいいけど私の住んでいたアパートに行きたいんだけど」

「そうよねえ、一日でも早く契約を解消するほうがいいわね」

居間で四人はくつろいでいた。コーヒーを飲みながら

「今日は大変だったわねえ」

「ごめんなさい、私のためにたくさんのお買い物してもらって」

「何をいつてるの。沙希の持っているもの、古いものばかりじゃない。

流行おくれもいいところよ。そんなの着られるわけないじゃない」

「女性つて本当に大変だわ」

ふくと息を吐くとソファの背もたれに寄りかかった。

「でも、全部捨ててしまったわね。着るもの・・・」

「うん、必要ないから。あんなゴワゴワして野暮つたいもの二度と着たくもない」

「持ってかえってきたのは結局仕事で使うパソコンと書籍類だけ引越しはあつというまに終わってしまったわね」

と操がいうと

「引越しは簡単だけど挨拶回りは大変だったわ・・・ねえ、沙希ちゃん」

「ええ、なんか私のこと疑ったりしたお隣りさんがいたりして・・・」

「それに管理人の奥さん。沙希ちゃんをみてビックリしていたじゃない」

「なんか私のこと興味があつたみたい」

「帰りがけにいやらしい目をしながら沙希ちゃんをジッとみていたわ」

「それは知らなかった。でも、帰るときに必要な以上に長い時間、握手をしていたのはそれね」

「あの隣の若いOJさんも沙希を熱い視線で見っていたわよ。お隣に挨拶に行った時、

お部屋に引つ張り込もうとしてた」

「フーン、そんなことがあったの。私、持って帰るものを整理していたから知らなかったわ。

沙希ちゃんダメよ。いろんな女に手をだしては・・・」

「沙希にじつと見つめられたら、女はメロメロになっちゃうからね」

「でもそれは沙希ちゃんの魅力でもあるけど、少し危険!」

「操叔母様。男のものはどうしたの?」

「ゴミ捨て場のゴミの中に捨ててきたわ」

夕食の後もこうして沙希の話でもりあがっていく。

しかし、話が段々ときれがちになり妖しい雰囲気が漂いだした。誰からするともなしに抱き合いキスになる。

でもママの

「四人でお風呂に入りましたよ」

といったのを境に皆、着ていたものをその場で脱ぎ去った。

広いお風呂の洗い場でのこと、その後のベットでの甘い時間、静かに……そして甘く時間が過ぎていく。

操が沙希に飛びついて

「私にも、子種をちょうだい」

と言ったのをママも理沙も見ていた。……………

……

明日からは沙希にとっての試練の日々がはじまる。

第一部 第三話

月曜日の朝、沙希は満員電車の中にいた。

黒髪のエーブがつくる柔らかなフォームは、

匂うような女らしさを引き立てていた。

表情は明るい。たった二日で人生が変わってしまった沙希。

白いブラウスにイエローのパンツスーツは女の色香を発散させ、

まるでスーパーモデルのように女性達の目を魅了していく。

この電車に乗ってきた瞬間に沙希は女性達のあこがれの的となった。

着こなしやセンスはまるで『J・J』や『アンアン』の表紙を飾るモデルのように

軽やかで今にもステップを踏みそうだ。

その存在がかけ離れ過ぎて嫉妬の対象にもならない。

この時の沙希のインナーはというとブラジャーと揃いのタンガ、ガーターベルトと

ストッキング……いづれもオフホワイトで統一していた。

女性は察する……こんなファッションセンス抜群な女性は普通の下着はつけない。

高級なランジェリーは当たり前……その通りだった。

背中にはブラの線が見えているのだが沙希は気にしない。

フローラルの香水が微かに匂う。

化粧は化粧水と乳液だけ、紅一つけていないが唇の赤さがルージュ

と同じなのだ。

くつきりした眉だけは昨日、理沙が整えてくれた。

吊革につかまって眼を閉じていた沙希だったがフと視線を感じて眼をあける。

いつのまにか周囲には女性達が自分を守るように二重三重にも囲んでいる。

そして全ての視線が沙希にあつまっているのだ。

沙希が見返すとポツと頬を染め思わずうつむいてしまう女性や、

視線を外さない女性は残らず顔や露出している肌が紅潮し、

もじもじと身体を揺らしはじめ、どうにか吊革にぶら下がっている。

沙希はその中に見知った顔に視線をとめる。

会社の先輩でしかも机を並べて働いている佐野律子が沙希をみつめているのだ。

他の女性達と同じように顔を紅潮させている……。

沙希は思わず小さな声で

「佐野さん！」

と名前を呼んだ。

佐野律子は『えっ？』という驚いた顔をしたが、

首をかしげながらも女性達をかきわけ近づいてきた。

「あのう、どなたでした？……」

沙希は思いがけない反応に笑い出した。鈴をこころがした声……とはよく言ったものだ。

「ホホホ、いやだあ。佐野さんだったら……。私です、小川です」

「えっ？小川さん？」

まだピンと来ないようだ。

首をひねりひねり一生懸命考えている。

毎日、隣同士で仕事をしているのに余りにかけ離れた雰囲気なので気がつかない。

「いやだわ。毎日、机を並べて仕事をしてるのに・・・」

という一言で律子は大きな目をさらに大きく開けて

「えっ、えっ、ええええあなた！！、小川くん？小川智弘くん？」と叫んだ。

「しゅ、佐野さん！声が大き過ぎます」

沙希の注意も耳をかさず

「どうしたの？その格好は。女の子の姿なんかして」

と言っ言葉で周囲の女性達にさざなみのように『男の人だって！』という声が

広がっていく。

女性の輪の外で聞き耳をたてていた男達の

「けっ、なんだ、おかまかあ」

「ややこしい、格好するな！」

と吐き捨てるようにいう声に女性達がいつせいに睨みつける。

その視線に居たたまれなくなった男の一部はその場からと逃げ出してしまった。

そんな周囲をよそに

「佐野さん、私名前が変わったの。これからはその名前で呼んでくれます？」

と沙希がいった。まだ戸惑いの中にいた律子だが

沙希の女言葉を違和感を覚えず自然と受け入れている自分に気づいた。

「どんな名前なの？」

「早瀬沙希です」

「ふーん、沙希かあ。どんな字をかくの？」
周囲の女性達は耳をすませて聞いている。
沙希は律子に説明した。

その時、駅が近づき電車がスピードを落としていった。
プラットホームでドアが開くと人の波が押し出されてしまう。
沙希は律子の背中にピッタリくっついていてる。
ホームにでると沙希と律子は並んで歩きだした。・・・が
「あのう」
と声をかけられた。

振向くと三人の若い女性がたっており、そのうちの背の高い女性が
言った。

「いきなりですみません」

「何ですか」

律子が答えた。

「あのう、沙希さんっていわれるんですよね」

「はい、そうですが」

「本当に男の方なんですか」

「ええ、そうよ。3日前まではね。」

でも本当の私に気づかせてくれる出会いがあつて、
こんな風に私を変えてくれたの・・・おかしい？」

「いいえ」

と三人がいつせいに答えた。

「とってもキュートで素敵です」

「ぎゅっとしちゃいたいくらい可愛いです」

「いつも、どの電車に乗られてるんですか？」

とくちぐちにいう。

「私、この方面の電車は初めてなの。いつもは反対方面からの電車だから」
「よいうと」

「そうですかあ・・・」
と本当にガツカリした声で肩をおとした。

「でも、わたし引越したから明日からも今の電車よ」というと

「ヤッター」

と喜びの声をあげた。

沙希にはこの三人の女性の真意がわからない。

「あおう、絶対今の電車に乗ってくださいね」
「何故？」
と聞くと

「この線の電車って痴漢が多いんです」

「今の電車の前後の電車もダメです」

「私たち同じ車両に乗った女性達がお互いにガードしあっているのは

今の車両だけなんです」

という話を聞くと女性って本当に大変なんだと思う。

「沙希さん、今日危なかったんですよ」

「えっ」

と声をあげる。

「常習の男が2、3人沙希さんを狙っていたんですよ。だから周囲の女性達に合図して沙希さんの周り囲んでガードしていたんです」

「私、全然気がつかなかったわ」

といいながらゾウっとする。男に触られるなんて考えただけで吐き

気がする。

「沙希！私もそのガードした女性達の一人よ。」

沙希ってポーとしていたでしょう。ああいう時に痴漢に遭い易いのよ。ねえ」

と三人に同意を求める。 三人が頷く。

「私達、沙希さんの様子を見ていたら何故か胸がキュンとなってしまつて。

そんな沙希さんを狙う痴漢が憎くて思い切り蹴ってしまいました」

「沙希さんって女優の沢口靖子に本当にそっくり！」

「私達、沙希さんのファンになつてしまつたんです。握手してください」

「そんなこと・・・」

といつて尻込みしたが

「いいじゃない。あなた達、これから電車の中で会つたら守つてあげてね」

「はい」

といつて三人と次々と握手をする。

「あのう、沙希さんってどんな方ですか」

この質問には律子が答えた。

沙希が作ったビジネスソフト”ワープロウ”のことや

そのソフトのことで雑誌に出ることなど。

「そのソフトなら知つてます。あれ、沙希さんが作ったんですか。ウワー、感激だわ。私達仕事がすごくやりやすくなつたんですよ」

「その週刊誌だったらうちの会社が出版しているんです。今度それにサインしてください」

三人の眼が輝いている。

「いっけなーい。真沙子、遅刻しちゃうよ」

とびあがつて三人の女性たちは

「すみませんでした」

とお辞儀をしてから走り出した。

「アラアラ、あの子達あんなに慌てて」

と言ってから沙希の手を取って歩きだした。

歩きながら律子は沙希にそっという。

「ねえ沙希、まだ時間があるからちよっとお茶しない？」

ドアを開けるとブーンとコーヒーのいい香りが身体を包みこむ。

「佐野さん、いいお店ですね。会社の近くでこんなお店があるなんて」

「いいでしょう。仕事にいきづまった時とか疲れたときにここへ来ると」

すっきりした気分になるのよ。それにコーヒーもおいしいし・・・」

「佐野さんはずっとここに来ていたんですか？」

「沙希も誘おうと思ったんだけど、先週末までの沙希、誘いにくかったから・・・」

でも今の沙希だったら私どこへでも連れていくわ」

律子はコーヒーを静かに飲むと思いきったように

「沙希！土曜日からの二日間に何かあったの？」

もし、よかったら聞かせてくれない」

「何かって」

「思い切って言うわね。」

沙希は、女の私がどう見ても違和感のない女性に変わってしまったる。

でもそんなこと100%不可能よ」

沙希は律子の言う事を黙って聞いていた。

「それに、あなた変わったわ。ううん、悪い意味ではなくていい方にね。

とても可愛くなったわ。以前の沙希・・・いいえ智弘くんとは全く別人ね。

それにその眼、女をメロメロにする女殺しの目よ」

沙希の視線は律子の眼をはずさない。

「そうそう、その眼よ。電車の中でも女達は沙希に見つめられて何人も夢中にさせたと思う。本当のことを言つとこんな私でも、沙希に夢中になつてる・・・」

「佐野さん、こんな私だなんて。そんなこといわないで。

私、佐野さんが好きよ。大好きなの」

律子は顔をポーと赤らめた。

「男の時はこんなこと言えなかったけれど、今なら言えるわ。

佐野律子さん。私は貴女が好きです。結婚して早瀬律子になつてく
ださい」

じつと律子を見つめる沙希。

「沙・・・沙希・・・ほ・・・本当のことなの？・・・」

だが沙希はニコリともせず真剣に律子を見詰めていた。

「本当のことね・・・いいわ、今ここで返事をします。私も貴女が好きです。

返事はOKです」

ふふと息を吐く律子、でも胸はドキドキしていた。嬉しさで飛び上がりそうになる。

「でも律子さん、私と結婚するとぶつこの結婚生活は出来ないかもしれない・・・」

その一言で沙希の生活の変化を思い出す。

「訳を話してくれるわね」

その言葉で沙希は話し出した。

土曜になにがあったのか、連れていかれたスナックでの出来事。

そして、夢の中での沙希との出会いと同化・・・

何一つ隠さずに話をした。律子はさすがに女同志の交わりに話しが及ぶと

身体をもじもじさせながら顔を真っ赤にして聞いていた。

沙希の話が終わった。

律子はたまっていた息をフーと吹き出した。

「まいったわね。朝から聞く話じゃなかったわ。

で、沙希は女の子のほうがいいの？」

沙希は頷いた。

「女性が好きだから女性になった。そうなのね」

沙希が再び頷く。

「わかった。これから私、沙希の味方よ。誰から何を言われようとも沙希の味方・・・」

「律子さん、ありがとう」

「こんなところではなかったら、私・・・沙希を押し倒してしまいそう」

「まあ、律子さんったら」

沙希はニッコリと笑う。律子に見せた・・・律子だけにみせた初めての笑顔・・・

結婚を承諾した律子にとってその笑顔は宝物となった。

「で、どうする？沙希。会社は沙希を絶対に手離しはしないわ。だけど、いろいろと陰口を言う人って必ず出てくると思うけど・・・」

「そんなこと・・・大したことじゃないわ」

「うふふ・・・その言葉」

「えっ」

「智弘くんでは絶対に口に来なかつた言葉よ」

「そうかしら」

「その姿が本当のあなただったのよ。・・・さあ、出ましよう」
律子は伝票をもって立ち上がった。

喫茶店を出ると

「ちよつとまっててね」

といてコンビニに飛び込んだ。

沙希が表からガラス越しに見ていると下着を買っているのだ。

律子が出てくると沙希の耳元で

「私の買っているもの見えてたでしょう」

うなずくと

「私、電車の中で沙希を見た瞬間から下着が汚れてしまっていたの」

沙希は顔が赤くなつたが、律子の顔の方がいつそう真っ赤に上気させている。

「沙希だから言うけどね。私・・・学生のころレイプされたんだ。それから、男がダメになつたの。というか・・・とっても恐いの。怖いから戦闘的になつてしまう・・・学生時代、スケバンになつたのもそれが原因・・・」

二人つきりにでもなつてしまつたら、もうどうしようもないの。他に女性がいたらそんなことないのにね。

でも智弘くんだけは違ったわ。

今から思うと沙希のその姿をどこかで知っていたのかも知れないわね。

でも智弘さんと結婚しようと思っても、私からは何も言い出せなかった。

弱虫って言われても仕方なかった」

とって沙希の腕に両腕を絡めてきた。

「だけどあなたとこうして一緒に歩く姿って、何度想像したかな。

それに今の私って、あなたの話だけでこんなに感じてしまうなんて、生まれて初めて……」

律子は自分の重大な秘密を暴露すると、安心したように沙希の肩に頭をくっつけて歩く。

嬉しい告白となったが沙希の心は重かった。

何とかしてあげたい……何とかしなければ……そんな思いがぐるぐる渦巻いているのだ。

いつも明るい律子の心にこんなどす黒いものが澱んでいるとは思ってもみなかった。

……ママの顔が浮かぶ。そうだ、ママに相談して見よう。結婚する愛しい相手のことを。

沙希の姿はまだ誰にも見られてはいない。

広いフロアーに各自のブースで間仕切られているこの部屋は

個人の自由な感覚でゲームやビジネスのソフトを開発できるようにされている。

それに個人を尊重するこの会社では売り出したソフトには必ず会社名と共に

作者の名前を、又グループで開発したのなら全員の名前を載せているのだ。

それは外注の者でも関係ない。この部屋の各隅にはいつでもふらつきときて

作業ができるよう外注者達のためのブースも設けてある。

今やこの世界の寵児となった沙希、日本中に・・・いや世界中にその名前は知られているのだ。

でもこれからは早瀬沙希という名に書き換えられるだろう。

小川智弘というペンネームからは早瀬沙希という本名の女性作者が姿を現した、

・・・そう思われて評判となるに違いない。

沙希は自分の席で今度発売されるゲームソフトの続編を企画していた。

隣の律子の席は朝から空いたままである。

その時、沙希に電話があった。ママからだ。

「どう、沙希ちゃん。ちゃんと仕事してる？」

「ママ、どこから電話してるの」

「おうちからよ」

「ママ、別のところからすぐ電話するから切るね」

と電話を切り、会社の近くにある公衆電話に急いだ。

「あっ、ママ」

「沙希ちゃんに何かあったの？」

「いいえ、私のことじゃあないの」

と聞いて、律子のことを話した。

「へえ、その人に結婚を申し込んで了承してもらったのね、おめでとう。」

「いいわ、今晚にでもお店に連れてらっしゃい」

「いいの？」

「いいわよ。理沙ちゃんにも連絡しとくね。もしかしたら……」

「」

「もしかしたら？」

「私達のお仲間なのかもしれない」

「私もそんな気がするわ」

沙希は電話を切って会社に戻った。

律子は戻ってきていた。

沙希が席につくと小声で

「沙希、専務が呼んでいるわよ」

「えっ、専務が？」

沙希は驚いた。専務の顔は知っているが話をしたことはない。

社長の奥さんだが 事務関係の仕事をしているため沙希には関係のない人だ。

沙希が首をかしげていると

「心配することはないわ。私も付いて行くから」

専務室のドアをノックするとすぐにドアが開けられた。

専務秘書の岡島直子がニツコリ笑って

「どうぞ」

と言って沙希と律子を中に案内する。

専務室の中のパーティションで区切られた応接室に案内された。

すぐに専務が入ってきた。

秘書の岡島直子が出て行くこうとすると

「コーヒーを頼むわね。あっ、あなたの分も一緒にね」

沙希はソファに座ってもその不安からか律子の手をぎゅっと握り締め、

身体を律子の身体にぴったりと寄せているのだ。

こんな姿をみせる沙希の可愛らしさ、女っぽさに専務は眼を見張るが、
持って来たファイルに眼を落とした。

しばらくして顔を上げると

「早瀬沙希さん。ごめんね、まだここには小川君の履歴書しかないから・・・」

今度経歴を書き換えておくからね」といって再びファイルに目を通す。

こんな簡単に沙希のこと受け入れてくれていいのだろうか。不安でモヤモヤしていた気持ちはそのあっけなさからまだ晴れてはくれない。

「あなたの大学の成績つて、本当拔群だったのね」と言いながらファイルを閉じた。

「律っちゃんから話を聞いたわ」
えっと思いい顔を上げた。握っていた律子の手からふっと力が抜ける。

そんな沙希の戸惑いが専務の顔に笑みをもたらした。

「実をいうと律っちゃんはね、私の義理の妹なの。そう、社長の妹になるわけよ。」

でも、このことは他の社員は誰も知らないわ。

だから、ここだけの話にしてちょうだいね」

「どうして私に？」

「あなたは律っちゃんの可愛い旦那様になるんですよ」
とフフフと笑った。

そこに秘書の直子がコーヒーを持って現われた。

コーヒーを配り終わって専務の後ろの席に腰を落すと

「先ほど、律ちゃんからあなたのこと全て聞いたわ。でも細かいことは律ちゃん自身もまだ知らないそうだから教えてね。」

それにしても金曜日からの短期間でよくぞここまで……ねえ、直子さん。この人が金曜日まで男だったって信じられる?」

「いいえ、そんなの思いもよらないことですわ。」

私達よく女性ばかりでそんなお店に行くんですけど

その人ってニューハーフといわれているんなところを手術して女になっっている人が多いんです。

でも人工的につくられた……って感じがどうしても消えません。

それに時々わざとかどうか知りませんが男を見せるんです。

それが面白いつてもあるんですけど……でも……」

「でも?」

「早瀬さんは疑いもなく女性です。私もお話を聞いていたんですが、

その私がどうみても女性そのものです。

例え今からでも実は女性だったんですと言われたら、

ああ……やっぱりそうだったんだって納得するでしょうね。

女性でも男っぽいや人ってたくさんいますから、

早瀬さんが男っぽく振舞われても、そういう女性なんだと思っ
まうだけです」

「さすがね。やっぱり直子さんは優秀な秘書ね。その観察力って素
晴らしいわ」

「えっ?……ああ……いえ、そんな……」

専務にそう誉められて上気してしまう岡島直子。

そんな様子を見ていたら自然と肩の力が抜け、固かった身体もすっ
かり柔らかくなっていく沙希。

「どつやら緊張感もとけたようね、早瀬さん。私も沙希ちゃんて呼んでもいいかしら」

「はい、喜んで……」

そういつてニッコリと微笑む沙希。

「うん……、聞きしに勝る可愛らしさね。

どつお？直子さん。沙希ちゃんを見て……あら……あなた顔が赤いわよ」

「うう……私、レズじゃありません。

でも、そんな私でさえ引き込まれます。ああ、もう……駄目です」

といつてフロアの床に崩れ落ちてしまった。

沙希と目を合わせて見つめられた結果のようだ。

律子でさえ下着を汚すようなその強烈な魅力……どつやら沙希に慣れる必要がありそうだ。

フロアに女特有のぺったんこ座りでタイトスカートがはちきれんばかりの直子、

これはこれで強烈な女を匂わせているが、ここでは気にする者は誰もいない。

女性達同士で直子を助けおこして、椅子に座らした。

「沙希ちゃんのその視線って凄いものね」と専務がいつのを

「沙希ちゃんの目って本当の女殺しですわ」

腰を抜かした直子がいつのだから実感がこもっている。

「さて……」

と改めて切り出した専務、

「沙希ちゃんも女性が好きだから女性になった……そうね」

「はい、……といってもそれだけじゃありません。」

でも、私がこれ以上男でいる限り人間を止めざるをえなかった。

そう思ってください。はっきりいってもう限界なんです。

私は男が大嫌いです。嫌悪します。……わたしの中にある男に対しても同じです」

といつてからにっこりと笑い出した。

「わたし女になって本当に良かったと思います」

「そうねえ、はっきり言ってしまうえば男としての智弘くんは落第生だった。」

でも沙希ちゃんは今後女性達あこがれとなるでしょうね
と予言までするのだ。

「静香姉さん、実は……」

律子は先ほどの電車の中でのことを話す。

「えっ？……もうファンが出来たの？……凄いわねえ」

「沙希が男だったと知っても皆平気なの」

「そうよねえ、きつとそんなこと忘れるぐらい沙希ちゃんを見たことが強烈だったのよ。」

見て御覧なさい、明日はその電車の中、女性で溢れているわよ」

専務の言うことに顔を見合わせる二人だったが

「そうかもしれない、私だったら親しい人に沙希を合わせたいもの」

律子の言う言葉に明日の車内の様子が頭に浮かんでくる沙希だ。

「ところで沙希ちゃん、これ忠告として聞いてね」

「はい、なんででしょうか？」

「今、沙希ちゃんは女に生まれ変わったばかりで喜んでいるけれど女って嫌な面が一杯あるのよ。それは判ってる？」

「はい、でもそんなこと私が男だったことを思えば何でもないことです」

「そうね、沙希ちゃんの強みはそこにあるかもしれないわね。

よし、わかったわ。私は女として・・・会社の専務として

早瀬沙希さん・・・あなたを応援すると共にバックアップします。

もちろん、妹である律ちゃんの可愛い旦那さんとしてもね・・・ウフフフ・・・」

「専務！私たち女子社員たちも沙希ちゃんの味方ですわ」

「えっ？直子さん達が？・・・でもそんなこと直子さん一存で言うてもいいの？」

「実は私、入社したときから小川さんに注目していたんです。

なんて男姿の似合わない男性なんだろうって・・・

でもその後小川さんって、この会社には絶対に必要な人材ってわかりましたでしょ。

だから私だけでなく他の女子社員達も小川さんを注目していました。

けれどその性格って本当、見ているだけで嫌になるんです」

「それでどうしたの？」

「だから私たち女子社員が集まって小川さんを根本から代えようと相談しあっただけです」

「どう相談されたんですか？」

律子には初耳だった。なんか仲間はずれにされたようで面白くない。

それが判ったのか、直子は律子を見て笑いながら

「うふふふ、律子さんが小川さんを想ってるって、皆が知っていましたから」

律子さんを仲間に入れるわけにはいかなかったんです。ごめんなさい……」

「えっ？判っていたの？……」

「だってあからさまでしたも。小川さんが帰ってから小川さんのブースの中を

一生懸命掃除しているのを皆知っていたし、他にもいろいろありますでしょ」

そんなこと何も知らない沙希は驚いて律子の顔を見る。

「おほほほ、女に成りたての沙希ちゃんはともかく、律ちゃん！

あなたは女としての自覚が少し足りないようね」
と笑う静香専務。

「もう……静香姉さんまで……」

とぷつと膨れる。

しばしの笑いの時間……

「直子さん、話を続けて」

「はい、だから去年の社員旅行がいいチャンスだったんです。

私たち女子社員が全員とはいかず、私とあと4名が有志となって計画を進めました」

「その計画って私には判ったけど、そのまま話をしてくれる？」

「はい、小川さんの声つてもうそのままでしたから
あとは外見を女の子に変身させようって計画をしていたんです。
身体検査のデータから下着やお洋服を揃えたんですよ。」

そしたら小川さんは出張でアメリカに行ってしまわれて・・・」

「そこで直子さん達の計画がつぶれてしまったわけね。ねえ、その
下着やお洋服はどうしたの？」

直子はいたずらっぽく笑いながら

「いつか機会を狙って実行しようと、女子の更衣室に置いてありま
す」

「じゃあ、その4人の女子社員を呼んでらっしゃい。無論職場の上
司に許可を得てからね。」

私と呼んでいるからといえば文句は出ないでしょう。

それとここに呼ばれる訳は話さないでね。少し驚かせてあげましょ。

勿論、更衣室に置いてある荷物も忘れないで持ってきてね」

直子は急いで出て行った。

「さて・・・」

と改めて沙希に向き直る静香。

「あとで社長に会って報告しなければいけないんだけど、

先に私から話して置いてもいいかしら」

「それは・・・」

と言いかけた律子の手をギュッと握り締めて押し留めた沙希。

「専務のお申し出・・・本当に嬉しいです。」

でもこうして女性に生まれ変わったことは私自身が報告すべきこと
であり、

また律子さんとの結婚は私自身が社長にお願いすべきことです。

ただ、専務には見守っていてくださいと言っしかありません」

「ふむ……さしづめアメリカでは『ブラボー』って歓声を上げる場面よね。

沙希ちゃんの今の言葉、小川智弘くんではとてもじゃないけど言えないわ。

……本当にあなたって素晴らしく変わったわ」

「私も吃驚よ、沙希。女性という性が変わっただけでなく、

人としても変わったわ……素敵よ」

といって沙希の肩に寄りかかる律子。

「あらあら……ご馳走様！でも律ちゃん、ここが会社だということとを忘れないでね」

と専務が言って足を組みなおしたとき『コンコン』とドアがノックされ

専務の返事と共にドアが開いて直子を先頭に女子社員が4名部屋に入ってきた。

「直子さん、ドアの鍵をかけていてね。

さああなた達、空いている席に腰をかけてちょうだい」

4人の女子社員が椅子に座りながらも視線を留めるのは律子がギョッと手を握る沙希に対してだ。

不信そうな顔で見つめる女達。

その視線に対してニッコリと笑顔で答える沙希……でもそこまですだった。

沙希の視線に平静でいられるわけがない。

頬を真っ赤にする女子社員達……椅子に座っているのでも腰を抜かすことはないが

その視線が怪しい・・・魂が宙を彷徨っているようだ。

「あら・・・この子達も沙希ちゃんの魔力のえじきなね」

「えじきだなんて・・・」

「私だつて愛しい旦那様のことを強く想っていなければ危うかったのよ」

「でも、私そんなこと少しも意識していません」

「意識されたら大変なことよ。ねえ、律ちゃんは何ともないの？」

「えっ？私ですか？」

といいながら身体を回して沙希を見る。

すると律子の目が潤みだし、焦点も定まらなくなって沙希の膝に倒れこんだ。

「律子さん・・・律子さん・・・」

身体をゆすつて律子の気を取り戻そうとする沙希。

そうするうちに沙希の腕の中で薄っすらと目を開けるがまだ焦点は定まらない。

けれど、もう一度身体をゆすると律子はハッと目を開け、

飛びつくように沙希の首にすがりつき、沙希の口にむしゃぶりついた。

いきなりのキスに驚く沙希だが律子の必死な様子に、

やがてゆっくりと目を閉じ身体を硬く抱き締める。

でも直ぐに沙希の首にかじりついていて律子の両手が離れてダラリと垂れ下がりに、

沙希にキスしていた律子の顔も仰向きに倒れこんだ。

又失神？・・・と思ったが、今度はパッチリと目が開き勢い良く立ち上がった。

「どうして？・・・どうしてなの？・・・」

「律ちゃん！・・・落ち着いて！・・・」

・・・あなたが沙希ちゃんの目を見たかと思うと失神してしまうし、目覚めたかと思うと今度はいきなり沙希ちゃんにキスでしょ。それもすぐに失神して・・・いくらも間をおかずに元気良く飛び起きたわ。

どうしてなの？と聞きたいのは私たちのほうなの」

静香専務に同調するように直子とようやく目覚めた4人の女子社員も頷いている。

「私・・・」

と言いながら沙希の隣に座りなおし、その手を再び固く握りそして今度はもっと沙希との密着度をUPさせる律子。

「沙希の目を見たら身体中が熱くなり、まるで宙に浮いた感じだったわ。

その浮遊感の中で見る沙希に夢中で抱きついていったのも覚えてい

る。そして沙希とのキスの時、その唇を通して沙希の身体から凄いエネルギーが

流れ込んできたんです。それこそ疲れなんか吹っ飛ぶほどのエネルギーが・・・」

「じゃあ今、律ちゃんが沙希ちゃんを見ても何ともない？」

「はい、なんか免疫が出来たみたいで・・・嫌でなかったら皆さんも試してみたら？」

「いいの？律ちゃん。あなたの婚約者なのよ」

「ええ、でも沙希からプロポーズを受けたとき言われているの。」

普通の結婚生活を送れないかも知れないよって。見た目でも普通の旦那様と違うでしょ」

と笑うが、どことなく寂しさが混ざっているのだ。だから、静香は何も言わず沙希に目で合図をした。

沙希も律子の心が判る。だから黙って立ち上がり腰掛ける静香に対して

身体を屈めるように口を近づけてキスをした。

少してガクツと椅子の背にもたれこむ静香……。

沙希は次々とキスをしていき皆に元気を与えていった。

あきれるほど元気になる女性達、なんかエネルギーで満ち溢れている。

「さあ、これでここにいる皆が沙希ちゃんを見てもどうもならないからね」

といつてから

「皆には判ったわね。ここにいる早瀬沙希という女性が誰かって……」

「はい、……これって信じられないことですけどね、あの小川智弘くんですね」

「正解よ、でもその男の名前はもう忘れてね。」

こうして早瀬沙希って女性に生まれ変わったんだからね」

「判りました。でも自分の目を疑うってこと本当にあったんですね。」

……あのう、沙希ちゃんって呼ばしてもらってもいいのかしら
沙希が頷くと

「沙希ちゃんが先週の金曜日まで男性だったこと私たちが知っています」

す。

それにこういう方面に全然興味もなかったことも知っています。

それが・・・たった3日ですよ・・・たった3日で完璧な女性になるなんて・・・」

「それを知っても、どうっていうことないでしょ。

3日前でも過去は過去だわ。これから先、皆が沙希ちゃんの味方になつて

どうバックアップして行くかが大切でしょ」

「そうでした・・・だったら女子社員達のこととは私たちに任せてください」

「ただ、一つだけお願いがあります」

「お願いって？」

「さつきみたいなキス、毎日してもらってもいいですか？」

「あら、あなた達にも彼氏がいるでしょうに・・・」

「いいえ。沙希ちゃんのキスは全く別物です」

「仕方がないわね。律ちゃんはどう？」

そう振られても今更嫌とは言えないし、

沙希もあれよあれよと話が決められていくのを呆然とみているだけで

二人して顔を見合わせるだけだ。

「じゃあ、決定ね。もっとも律ちゃんが否やと言っても公私の公で決定させたけどね」

「そんなあ・・・」

「黙ってなさい！あなたは公私の私で沙希ちゃんを独り占めできるでしょ。

少しは会社に貢献なさい。それに最初は律ちゃんが言い出したこと

だからね」

といわれて何も言い返せなくなる。

「ねえ、さつき直子さんに聞いたんだけど去年の社員旅行の前に面白い計画をしていたのね」

「はい、でも沙希ちゃんがアメリカに行ってしまったって中止になったんです」

「あのまま沙希ちゃんが社員旅行に行っていたらもっと早く・・・」

「いいえ、それはないと思います。私は自分が女性になるってこと、少しも思ったことがありませんし、もしかして無理やりそういついとをされたら

女性になるのが嫌になっていたかもしれませぬ」

「じゃあ、沙希ちゃん！その時と今との違いは何？」
直子が聞く。

「はい・・・実は・・・」
と夢の中であつた女性の話をした。

「その女性が早瀬沙希さんだったんです。彼女は私のために自ら命を縮め、

私のために修行をしていたんです。

いいえ、これは決して夢物語ではありません。

彼女が私と同化しなければそんなに早く女性としての生活が出来たかどうか・・・

それには”早瀬沙希”の女性としての生まれてから記憶があるんですよ」

「ふう……さつきから沙希ちゃんの不思議な力を見せ付けられたから、

今の話を聞いても何の抵抗もなく受け入れられるわ」

「専務！私だつて同じです……」

「私だつて……」

女性達全員が改めて沙希を見つめて……そして、頷くのだ。

沙希の力を信じた……沙希の言葉を信じた。そして何より沙希の優しさを愛したのだ。

「じゃあ、沙希ちゃんに着せようと思ったお洋服を見せて頂戴！」

女子社員達が袋から出してきてテーブルに並べたのはドレスと下着だ。

「まあ、可愛いドレスね」

「あのおう、専務。制服も着せてもよろしいですか？」

「そうね。沙希ちゃんのファッションショーも悪くないわね」

と言つて制服を取りに行かせた。

「専務このドレスせつかく用意していたのですから 一度手を通してほしいんです」

「そうね、私も見てみたいな」

といたずらっぽく笑った。

結局、恥ずかしいから見ないでという沙希に対して、

女の子は更衣室で平気で下着姿になるのだし、ここには女性しかないのだから

と目の前で着替えをするように強要するのだ。

それに『J・J』や『アンアン』の表紙のモデルなみのファッションセンス・・・
沙希ちゃんの着こなし方を見ていたい・・・という皆の意見が通った。

少しウオーキングさせると、

白いブラウスにイエローのパンツスーツという衣装の沙希の姿がまるでスーパードモデルのように女性達の目を魅了していく。

ドレスに着替えるためにパンツスーツを脱ぐ沙希・・・

この時の沙希のインナーは、ブラジャーと揃いのタンガ、ガーターベルトと

ストッキング・・・いづれもオフホワイトで統一していたのだ。

「まあ、可愛い・・・」

「ガーターベルトをしているのね。私なんか一度もしたことがないのに」

「私も・・・今度買いにいこうか」

沙希の姿を見ながらそんな話しをしている。

律子が手伝ってドレスを着せた。

自然に流していた長髪を後ろで束ってUPにする。

こうするといわば何の変哲もない赤いロングドレスが映える

沙希の歩く姿がまるで社交界の高貴な令嬢のように見える。

「ワァー、素敵！あんな安物のドレスなのに」

「お洋服の安い高いはどうやら関係ないみたいね。ようするに着る人次第ということかも・・・」

直子がいうのを笑って聞いていた専務が

小さなファッションショーを終えて律子の隣に座った沙希を見て

「沙希ちゃんあなた、お化粧していないの？」

「えっ？・・・はい。化粧水と乳液だけですけど」

「なんですって！・・・ノーメイクでその顔！・・・」

「それって違反だわ！」

「はあ・・・すみません！」

訳も判らず怒られて、謝ってしまう沙希。

「おほほほ・・・いいのよ、沙希ちゃん。謝らなくて。

この人たちはあなたの事が羨ましいだけなのよ」

「ええ、そうですね。私、沙希ちゃんに嫉妬してますよ」

「こうなったら沙希ちゃんにバッチリ化粧してもらいますからね」

「わかったわ、直子さん。メイクお願いね」

「はい、沙希ちゃんのメイク、まかせてください」

岡島直子は素人ながら専務秘書として、

Time (時)、Place (場所)、Occasion (場合)
・・・TPOを心がけた

装いとメイクで業界でも有名なのである。

レッドというよりピンクに近い赤の口紅を塗り終わって

「さあ、これで終わり・・・モデルがいいせいかしら我ながら驚く
仕上がりよ」

と言って椅子を回転させ、皆に沙希の顔を見せる。

もう呆然である。たしかに素顔の沙希も女らしく可愛かった。

しかし、メイクをした沙希・・・この女っぷり・・・尋常ではな
かった。

このドレスで舞台にたったら観客はどんな反応を示すのか。

律子の話でもうすでにファンが出来たというのもわかる。

ボタン！と椅子の倒れる音がした。

振りかえると一人の女子社員が倒れながらも視線は沙希から離さな
いでいた。

「きれい、……沢口靖子にそっくり……」

と清纯派女優の名前を言う。

なるほどこうしてメイクをしてみると頷けるそっくりぶりだ。

でも沙希はその女優よりも、もっともっと引き付ける何かを持っ
ていた。

静香専務はかすれた声で言った。

「さあ、もうお昼まで時間がないわ。ドレスを脱いで制服に着替え
なさい」

沙希はいそいでドレスを脱いで制服に着替えた。

白いブラウスに水色のベストと同色のタイトのミニスカートだった。

あつらえたように身体にフィットした。

「今日は目立たないようにその制服でいなさい。でも沙希ちゃんは
何を着ても駄目ね」

「えっ?……」

「その目立つこと……」

と言って笑う専務。沙希を抱き寄せ軽く唇にキスをする。

「あっ、専務だけずるい」

「私も……」

と喋って次々とキスをしていく女子社員達。

こうなったら私も……と律子までが加わるのだから笑ってしまっ
つ。

でも律子のキスだけが時間が長かった……のはあたりまえか。

さきほどすでにキスをしているのだから失神することはなかった。

専務はニコニコして見ていたが、

「これが当社の女性だけの特権よ。無論、秘密でもあるわ。

男性社員には絶対に内緒よ。勿論、私も社長には言わないわ」
皆は笑った。

「私達女性は沙希ちゃんの味方よ。他の女子社員にも言うておくのよ」

「今の秘密の行事は女子社員皆に言うていいんですよね」

「勿論よ、当社の女性にわけへだてはだめ。でも、沙希ちゃんの仕事中は禁止よ」

と専務が皆に言い渡した。

「もう一つ。沙希ちゃんがいじめられたら守ってあげるのよ。

沙希ちゃんがこの会社で働きやすくするのは判るわね。

それって皆のお給料にも跳ね返ってくることなんだからね」

ハイと大きな返事が聞こえた。

沙希が口を出すこともなくいろんなことが決まっていっく。

「専務。沙希ちゃんのヘアースタイルはどうしましょうか」

「そうねえ、素人目にも今のヘアースタイルと黒い色は重たい気がするのよ。

美容室で少しカットしてもらって栗色位に染めてもいいんじゃないの？」

「律ちゃん、美容室を紹介するからその先生に相談してみてくださいる？」

「さあ、あなたたちは職場に戻りなさい。沙希ちゃんと律ちゃんは私といっしょに社長室にね」

沙希はビクっとして少し身構える。

その様子をみて律子が

「大丈夫よ、私がついているわ」

「私もいるわよ」

専務も声をかけるが、

「あつ、直子さん」

といて隅のほうで何やら話しをしていた。

「じゃあ、頼むわね」

といてから専務室を出て奥の社長室に向かった。

沙希は身体を固くしてソファに座っていた。

少し汗ばんだ手は律子が変わらずにギュッと握っていてくれる。

社長秘書の大崎恵がお茶を持ってきた。チラチラと沙希の顔を見ているのだ。

不信そうな顔をしている。恵はこの社長室で幾度ともなく顔を合わせているから。

専務は社長の机の所で話しをしている。驚いたような顔をして沙希をみていた。

社長と専務がソファに座る。沙希は俯いていたが、社長の鋭い視線が身体中につきささっていた。

社長は何も言わない。沈黙に我慢しきれなく顔をあげた。

社長の顔が一瞬驚きに変わる。

「君が律子の結婚の相手なのか」

「はい」

「でも律子は女だよ」

「はい、判っています。それでも許して欲しいんです」

「そんなこと言われても、日本の法律では女同士の結婚は認められて居ないだよ」

「私には律子さんしかいないんです。どうか許してください」

強硬な沙希の態度に弱り果てた社長がとつたのは、

「おっと・・・君の名前を教えてくれないか」

「早瀬沙希と申します」

「年は？」

「25歳です」

「で、何の仕事をしているんだ」

「はい、ソフトの開発をしています」

「ほう、同業じゃないか」

はつきり言って律子はもう顔が上げられなくなっていた。

だって・・・もう可笑しくって可笑しくって・・・

でも沙希のことに気づかない兄のうかつさよりも沙希って凄いと思ってしまう。

こんなポーカーフエースをされれば誰も勝てっこない

「沙希ちゃん！もう止めましょ。あなたって段々手に負えなくなるわ」

と行って専務が笑いながら止めに入った。

それまで無表情だった沙希がニツコリと微笑むと急に部屋の中が明るくなる。

「おおっ」

とそんな沙希に思わず声を上げてしまう社長。

社長の言葉にそばに控えていた大崎恵が

「えっ」

と声を上げた。

「大崎君。どうしたんだ？」

「どうやら大崎恵にも沙希の正体がわかったらしい。」

「いいわよ、恵さん。その鈍感な人に沙希ちゃんの正体を教えてあげて」

「おいおい、正体って一体なんだ。それに鈍感な人って・・・」
「そんな声をあげる社長のそばで大崎恵が」

「社長！そこの早瀬沙希さんって・・・あの小川智弘くんですよ」

「何を馬鹿な・・・この女性があの小川君だって？・・・
ええ・・・まさか・・・本当なのか」

「驚きましたわ。私は最初沙希さんを見たときは
今回の企画のモデルの方かなっと思っていたんです・・・それが」

「でも酷いよ、こんなの俺に判るわけがない。でも小川君にこんな
趣味があつたなんてね」

その言葉に沙希はキツとした顔で、

「すみません。お言葉を返すようですが私は趣味でしているのでは
ありません。」

女性として生まれ変わったんですから・・・」

沙希の眼に涙が溢れる。

「兄さん。沙希ちゃんをいじめたら私、許さないわよ」
と律子が鋭くせめ寄る。

「そうよ、あなたの言い方はよくないわ。ねえ、恵さん」
「はい、私もそう思います」

女性陣に攻め寄せられて社長もたじたじた。

律子が社長を睨みながら沙希にハンカチを渡した。

「スマン、スマン。でも驚いたなあ」

「何度も驚くのね」
と律子のきつい一言。

「違う、違う。今言ったのはこれが同じ人間なのかつという驚きなんだ」

社長の顔を沙希はジッと見つめる。

「ほら、その視線」

社長の言うことは沙希には判らない。

「僕は社員一人一人の性格や趣味を把握しているつもりだ。

確かに小川君は天才だ。小川君の開発したあのソフト一つで

会社はこの先も飛躍的に伸び続けるだろう。

でも、僕は小川君の態度とか性格とかが嫌で嫌でたまらなかった。

話もろくに出来ないし、何を考えているか判らないお宅的な性格なんて最低だった。

今、君は僕の前で涙を流し、律子との結婚の申し込みも堂々と一人でおこなった。

これが同じ人間だったなんて驚きで一杯なんだ」

沙希は社長の言葉をジット聞いた・・・その通りだったからだ。

「君は外見が変わったのもそうだが性格も変わったようだね」

「はい、私はこれから心のままに生きていきます」

「いいだろう。僕は君を認めるよ。君に止められたら我が社の損失は大きすぎるし、

今の君ならもつともつといい仕事をするに違いないからね」と笑った。

「一つ聞きたいが君は男が好きなのか」

「まあ、あなた何ということを」

沙希は首を横に振った。

「私、男が大嫌いなんです。そして女性が大好きなんです。

女好きと言ってもいいですよ。そして女性の私自身も大好きです・
・
ナルシストですよ、これって……」

社長はハキハキとものを言う沙希に感心したように首を振ってから
「それで専務はどうする気なんだ？」

「いろいろと考えたの。でも、このまま何もせずに自然のままでもいいと思っただわ」

「ほう、どうしてなんだ？」

「私達女性達はみんな沙希ちゃんの味方よ。ねえ、大崎さん」

大崎恵はニツコリとしてうなずく。

「あとは男性社員だけ。最大の難関だった社長に堂々と言い合える沙希ちゃんなら

変な小細工はいらないわ」

「それでいいのかね」

と沙希の顔を見て言う。

「私がかまいません。こそこそしたくありませんし、

それに女として仕事で男の人に負けたくありません」

「それは頼もしい」

と社長は笑う。

「今言っておくけど律子との結婚はOKだからね」といってから

「律子！おめでとう。想いがかなったね」

兄の優しい言葉と義姉の微笑みに思わず涙を流し、

沙希がバツクからオフホワイトのハンカチを出し、律子の涙を拭く光景は心温まるものであった。

沙希と律子が社長室を出たのがもうすでに12時を過ぎていたこともあり
その足で食事に出かけ、部屋に戻ってきたのが13時きっかりだった。
偶然にも誰に会うこともなく沙希は仕事に没頭していった。

突然肩を叩かれ、はっとして振り返った沙希、そこには律子がニコニコ笑いながら立っていた。

「相変わらずの仕事人間ね、女性になっても変わらないって素晴らしいわ」

「どうしたの？律子さん。そんなことを言うために仕事の邪魔をしたんではないでしょ」

「何を言ってるの、沙希！もう5時を過ぎているわよ」

「えっ？・・・もう、そんな時間なの？・・・でも、もう少し残業を・・・」

「駄目よ！・・・今日は残業は駄目！今、会議室にはもう女子社員が全員集まって、

沙希が来るのを待ってるの」

「えっ？会議室に？・・・」

「そうよ、それにさっき言われた美容室には予約をいれてあるし・・・」

「あっ！私も律子さんを連れて行くところがあるんだ」

「私をどこに連れて行ってくれるの？」

「私の家族のところよ」

ええ〜と驚く律子、肝心なことを今まで言わないなんて・・・
何だか今から少し心臓がドキドキとした。

良く考えればこの後予定が詰まっている二人だ。

足早に化粧室でメイクを直し、会議室へとかけて行く。

「じゃあ、少し経ったら呼ぶからここで待っていてね」と言つて律子がドアを開けて中に入る。

とたんに歓声と拍手が起こった。もう律子の結婚の話が広まっているのだ。

律子は照れくさそうに・・・だが堂々と

「私の大好きな、そして可愛い旦那様になる人を紹介します」と言つて部屋の外にいた沙希を招き入れた。

固く握り合つた手・・・身長165cmの律子に比べて少し低く、160cmそこそこだろうか・・・

でも事務系の制服に身を包んだスタイルつて・・・そしてメイクをしたその顔・・・

律子の結婚の発表だとしか聞かされていなかった女子社員達、社長の妹だとは知らされていないが姻戚関係にあるのは全員が知つており、

又、そんなことは関係なく普段の面倒見が良く姉御肌の律子が誰からも愛されているのはこうして女子社員全員が集まつたので、良く判る。

内容を良く知っている4人の女子社員と専務秘書の岡島直子、社長秘書の大崎恵、そして専務の佐野静香がニコニコ笑つて見ているのだ。

まさか・・・律子さんの結婚する相手が女性？・・・

そんなあ・・・どう見ても女性に真違いない、不信なところなんてない。

それにこの女の人ってトップモデルか女優さんみたい・・・
なんか見ているだけでクラクラちゃう・・・
ああ〜もう駄目！・・・と机に倒れこむ女子社員達が会議室のあちこちでも見られた。
よく知っていたはずの大崎恵もとうとう魔力に魅入られてしまった。
知っていたと言っても沙希の魔眼のことは知らなかったからあたりまえだろう。

「仕方ないわね」

と立ち上がったのは専務の静香だ。

静香は二人の横に立つと

「皆、聞いてくれる？」

と言ってから

「佐野律子さん・・・律ちゃんの横に立つのが、律ちゃんにプロポーズをして

了承をもらった早瀬沙希さんです。

沙希ちゃんの目を見ないでお話を聞いてくれる？

目を見たら沙希ちゃんの魔力に魅入られてしまうわよ。

でも魔力というとまるで魔法使いみたいで嫌ね。

こう言った方がいいかも・・・今各業界で活躍している女性達が持っているもの、

カリスマ性といったほうがいいでしょうね。

あとで沙希ちゃんそのカリスマ性に魅入られて倒れこまないよう処置をしてあげるけど、

それは女性だけの秘密ね。

これは私の推理だけど、沙希ちゃんから凄い元気をもらえるのは沙希ちゃん自身が大の男嫌いなのと女性として生まれ変わったことが原因だと思うの」

「ええ〜〜〜〜」

と何人もが立ち上がり、両手で口を押さえたりして専務の言葉による混乱が

会議室に充満しているのだ。

その空気を読んだ専務は直ぐに沙希に言う。

「沙希ちゃん！挨拶なさい」

と言われて沙希は頭を下げてから口を開いた。

「早瀬沙希といます。今日佐野律子さんにプロポーズをしてOKをもらいました。

その時は本当に飛び上がるほどの嬉しさでした。

先週末での性格破綻者のような私だったら、勿論プロポーズなんてできなかったし、

律子さんも受けてくれなかったでしょうね」

女性達の中では律子が今迄、誰が一番好きだったのか思い出し、

「ほ……ほんとうなの？……あなたが……小川……小川智

弘くん？……」

「ええ！〜〜〜〜」

まだ何も気づかなかった女子社員達が悲鳴のような叫び声をあげる。

沙希がコクンと首を縦に振ると会議室が蜂をつついたような騒ぎとなった。

律子は律子で今の沙希の仕草の可愛らしさに胸がドキンと高鳴って思わず抱き締めたくなっていた。

こんな中でさすがだったのは専務だ。年の功と言っても良いが社会的な地位によりその責任を担ってきたせいなのか

この場の空気を読み取り、誰よりも冷静な沙希にこの場の雰囲気を終止符をうつつ為に下駄を預けた。

専務の視線を受けて口を開く沙希、

「私が……」

というところであれほど騒がしかった会議室の中がピタッと収まってしま

う。さきほど専務がカリスマ性といったがなるほど納得がいく言葉だった。

「私が女性と生まれ変わった今から思っても、先週までの男だった自分は本当に最低の人間でした。

男が大嫌いと言う自分がそんな男だったことを思うと唾棄したくなります。

よくぞこんな人間を今迄雇ってくださったと、会社にも同僚として我慢して頂いた皆さんにも感謝しています」

「でも……でも、そんなことを聞いた今でも信じられない。

男性が女性になるってそれはたいへんなことよ。

女性が男っぽくなるまってもそれは女性だわ。

でも女性になりたかった男性が女性になったとしても、

少しでも男が出ればそれは男なの。良く見積もってもても人工的な女性ね。

でも、沙希ちゃんは……私も沙希ちゃんって呼んでもいい？」

「はい、喜んで！」

といいながらも急に恥ずかしくなりポツ赤くなって下を見る。

「それよ、それ！……そんな仕草、どう見てもどう考えても女性

なの。

生まれながら女性をやってきた私が言うのだから間違いないわよ。
ねえ、皆！」

沙希は少し迷っていたようだが

「私これから話すことは自分でも不思議って思っんです。

だから、信じる信じないは皆さんの判断に任せます」

と思いついたようにあの夢での女性との出会いを話し出した。

自分に持つ力に負けなため、

自ら命を絶って修行に励んだ女性の名が早瀬沙希……

夢の中でその女性と同化し、女性としての記憶と統べを持って目覚めたこと、

そして、鏡を見せられ女性となった自分が夢の中の女性と酷似していたこと、

を打ち明けたのだ。

シーンと静まり返る会議室……でも

「私、今の話……信じるわ。だって……これ悪口じゃないわよ。

あのいわばパソコンお宅で不器用な小川君が突然沙希ちゃんみたいな完璧な女性に

変身するってことのほうが辻褄が合わないもの。

たとえば、夢と言われても今のお話の方が納得できるわ」

「なんか変な話だけどミキちゃんの意見に賛成！」

「私も……」

「私だって……」

と次々と声が上がった。

「私、これからもこの会社で女として働いてもいいんでしょうか？」

沙希が言うと

「当たり前じゃないの。沙希ちゃんは女性よ。女性として働いて何が悪いものですか」

「いろいろ言うとしたら男だわよね。あいつら偏見の塊みたいだもんね」

「ひどいこといわね、あなた」

「あははは・・・和代にはここに恋人がいるものね」

「だからといって、あいつが沙希ちゃんの事悪く言ったらひっぱたいてやるわ」

「おお怖っ!」

くすくすと笑いが洩れやがて大きな笑いの渦となった。

笑いが収まったとき、一人の制服を着た女子社員が言う。

「これ、専務さんが聞いているから話にくいんだけど・・・」

「話でいいわよ、別に会社で隠し事なんてないから」

専務が笑いながら言った。

「じゃあ、言わせてもらいます。」

これ社内の人が聞いたらがっかりする人がいるかもしれないけれど、

会社って皆の力で守り立てて発展させていくわけですよ。

でも、うちの場合少し違うの。私、事務職で会社の利益を

数字で判断出来る立場だから会社の状態って直ぐわかるのよ。

会社が設立された当時からいえば社長と専務の情熱だけで持っていたわ。

社長の資産で食い繋いでいたようなものよ。

でも沙希ちゃんが入社してから・・・

特にあのビジネスソフト”ワープスロウ”を発売してから会社の状

態が変わったわ。

社長の食いつぶしていた資産を取り戻し、こんな自社ビルも手に入れた。

いいえ、まだまだ伸びつづけているのよ」

「何か実感できる・・・凄い！」

「ただし、よ・・・沙希ちゃんの分を引いてしまえば少しは良くなっただけ」

利益があるかないかの最悪の状態・・・これが現実なの。

だから、この会社で暮らしを立てていく以上、沙希ちゃんに辞められたら困るの。

・・・ごめんね、沙希ちゃん。せつかくの婚約のお祝いなのに私、欲得でお話しているわ」

「ううん、いいの。誰だって生活を安定させ向上させたいっていうのあたりまえよ。

でも、安心して。私辞めないわ、どんなこと言われても負けないもの。

だって、今までの事を思えば天国のようなものなんだから」

そう言ってニッコリ笑うと又、机に倒れこむ女子社員があちらこちら・・・。

「もう、しょうがないわね。あれほど沙希ちゃんの目を見ては駄目って言ったのに」

「専務！沙希ちゃんがあんな可愛いこというんですもの、つい目を見てしまうのは仕方ないですわ」

そう直子が言う。隣の2回も倒れてしまった大崎恵をかばってのことだ。

「それじゃあ、沙希ちゃん。恵さんからお願いね」

沙希は頷くと、律子の顔を見てから前列左の机に倒れこんだ大崎恵の顔を上げて

キスをした。

「あっ！」

と言う声があちこちから上がる。

急に力が抜けた恵が元気に立ち上がったのは10も数えないうちだ。

「ど……どうして？……沙希ちゃんから凄いエネルギーが身体に流れてきたの。」

今はって？……うん、物凄い元気よ。それに沙希ちゃんの目を見てもなんともないわ」

その声で一斉に専務を見る女性達。

「これは、当社の女性だけの特権だと思って頂戴。そして女性だけの秘密よ。」

1日1回沙希ちゃんから元気をもらうの。

ただのキスって考えては駄目よ。栄養を補給する感謝の元……どうお、恵さん。元気だけ？お肌の調子は？」

「あら、……ほんとうです。ファンデーションの上からだけとお肌がしっとりしているのがわかります」

皆の目がキラキラと輝きだした。

「沙希ちゃん、順番にお願い……」

沙希が次々とキスをしていくのを横目に専務は

「こんな凄い沙希ちゃんの力を律ちゃんの独り占めをさせないよう

『公私の公』という立場を沙希ちゃんにのんでもらったんですよ

「じゃあ、このキスは？」

「そうよ、女性に元気になってもらって一生懸命仕事をしてもらうという

専務の立場から沙希ちゃんの公務としました」

『ウワ〜』という声が歓声にかわる。

全員が沙希のキスを受け元気になったのはそれからしばらくしてからだ。

免疫効果で改めて沙希の顔をジツト見つめる女性達……。

「きれいだわ……」

「もう、うつとりしちゃう……」

「私、沢口靖子さんに似ているって改めて思っちゃった」

そんな言葉を口に出す女子社員達、会議室での集まりも終了し女子更衣室に行くまでも

「沙希ちゃん、一緒に帰ろうよ」

と女子社員達から誘いを受けるが

「ごめん、今日は約束があるので、許して」

と両手をあわせて断ると

「あゝあ、そんな沙希ちゃんを見ると何だか胸がキュンとしちゃうわ」

と言って許してくれる。

律子に連れられて初めて入る女子の更衣室、

沙希のロッカーも決められていて、朝着てきた洋服もそのロッカーに入っている。

驚いたことに専務秘書の岡島直子と社長秘書の大崎恵が待っていて、

「はい、これ」

と紙袋を渡された。

「女性としての誕生日祝いだそうよ。これは専務から」

「これは社長から」

二人の秘書から渡された紙袋の中身……

通勤用のスーツ、ワンピースが入っていた。バックやアクセサリもあつた。

「律子さんこれ……」

「頂いておきなさい。後でお礼をいえばいいわ」

「着てきたら見せてね」

と言つて二人が出て行く。

残つたのは沙希と律子だけ。沙希はプレゼントのワンピースに腕を通した。ピッタリだった。

朝はパンツスーツ、帰りはワンピース……

女性の生活での変化がなんだか実感できるのだ。

女性としての喜びはそれだけでない。

こうして律子と腕を組んで歩いているとその温かさ柔らかさ……

その律子に『沙希』って呼び捨てにされる嬉しさ……

そんなことを心に思いながら歩いた沙希。

「さあ、ここだわ」

と律子の声に立ち止まって総硝子張りのファッションビルを見上げた。

女性としてこういう場所は初めてだったので思わず律子に腕を絡ます沙希。

そんな沙希に

「だいじょうぶだよ」

と小さな声をかけてドアに進む。

中に入るとなるほど女性の専門店ばかりのビルである。

化粧品の香りや明るい照明に飾り立てた洋服の数々の色が目に飛び込んでくる。

正面にある上りのエスカレーターに乗る二人……

じつと前を見詰める沙希の耳に

「あら、あの人……」

「ほらほら、女優の……」

とかいう声が飛び込んできた。

思わず振り返ると大勢の人が立ち止まって沙希を見ているのだ。

「ねえ、律子さん。何か変……」

「どうしたの？……」

「うん、大勢の人が私を見ているような気がするのよ」

「沙希！気がするんじゃないかって見られているの！」

「えっ？」

「気が付かなかったの？」

「気が付かないって？」

「あんたが、会社を出てからどれだけ注目されていたか」

「ええ……」

「皆立ち止まったり振り返ったりしながら見ていたの知らないの？」

特に交差点では大勢の人に囲まれたじゃない」

「ええ……でもあの時怖かったから目を閉じていたの」

「もう、しょうがない人ね」

律子は自分の可愛い婚約者がこうして注目されることに心中複雑だったが

何もかも自分に頼りきって歩く沙希を見ていると嬉しくなって自慢したくなるから現金なものだ。

「ここだわ」

と美容室のドアを開けて中に入る二人。

「いらっしやいませ！」

と元気な声がフロアのおちこちから聞こえる。

「いらっしやいませ」

と出てきたまだ若い美容部員、律子と沙希を交互に見るが

沙希を見てあらっと言う顔をするがすぐにその顔が紅潮してくる。

やはりこの子も・・・と思って沙希の前に出るようにして沙希を身体の後隠した。

「佐野静香の紹介で予約を入れた早瀬沙希ですが・・・」
というと

「あっ！先生の御予約の方ですね、そこにお掛けになってお待ちください」

という奥に歩いていくがフラフラしているようだ。

「あゝあ、あの子も沙希に魅入られちゃったわね」

「でも、私・・・」

「そうよ、別に沙希が悪いんじゃない。

あなたの持つ力・・・まだ見ぬ力が無意識に表に出ようとしているのよ。

カリスマという力がね」

「どうしたら・・・いいのかしら」

「今はまだ五里夢中ね、だからジタバタせずに沙希は沙希らしくしてればいいのよ。

そうすれば自然と道は開けてくる。私はそう思うわ」

「ありがとう、律子さん。・・・なんだかそれを聞いて楽になった感じがするわ」

「おまたせしました。私が当店のオーナー千堂ミチルです、早瀬沙希様は？」

「あつ、私です」

と立ち上がった沙希。

「こちらです」

と歩きかけた千堂オーナーに

「あのう・・・」

と声をかける律子。

「なにか？」

と問い掛けるオーナーに

「私そばにいてよろしいか？」

「瞬、『えっ？』という顔をするがすぐに

「どうぞ」

と行ってニツコリと笑って案内をするのだ。

一番奥の席に座った沙希に手の空いている美容師達がこぞってタオルや

美容器具を準備する様子が何故か壯観だ。その横に用意された椅子に座る律子。

いつもなら雑誌を読んだりするのだが、こうして沙希を見ているだけで

あきないし時間がかかっても平気だった。

「さて、どうしますか？」

とオーナーに聞かれて困っている沙希に

「先生、この子最近女にやっと思覚めたんです。」

毛先が少し乱れているのと、色が黒いから重たく感じるということを

解消していただければ、先生におまかせしますからこの子に最も合ったヘアースタイルにしてください」

「おほほほ、面白い方ですねえ」

「でも先生！今律子さんが言ったこと本当なんです。

ワンピースを着るのも、お化粧をするのも今日が初めてなんです」

「それ、本当なの？」

「はい」

「わかった、そんなことを聞いたら私の腕が黙っちゃいないわ。

あなたを跳びつきりの美人・・・といってもそのままあなたは超ど級の美人だけど、

もっともつと質をあげてあげるわ」

といて腕まくりをする。

ここの美容師は女の子ばかりのせいなのか

オーナーの厳しい声に甲高い声の返事が飛び交っている。

オーナーは沙希の髪をカットしながらもどこに目をつけているのか技術的な注意が飛ぶので美容師達は気が抜けない。

緊張感を持ってきびきび動く美容師を見ていると

なにかこちらでも背筋が伸びる気がしてくるから不思議だ。

律子はその合間をぬって、疑問に思うことをオーナーに聞いてみた。

「先生！少し聞いてもよろしいでしょうか？」

「なんででしょう」

穏やかな声が返ってくる。

「沙希の目を見ればどんな女性でも魅入られてしまうのに、先生はどうして平静にいられるんですか？」

「そうですねえ、慣れてるっていえばいいかしら」

「慣れてる？」

「名前は言えないけれど、私の姉が女優をしているんです」

「だからって……」

「そうですねえ、女優でもピンからキリまでいろんな人がいるけど姉はピンの中でもトップなんです」

「だったら……」

「いいえ、やっぱり言えませんわ。だって姉の七光りって嫌じゃないですか」

「そ……そうですね……というか……」

まだ納得が出来ず首を振る律子。

「とにかく、その姉と早瀬さんの目がそっくりなんです。だから、慣れてるんですよ」

「ふ〜ん、そんなことがあるんですね」

「ありますわ、でも……今も姉のメイクに私が刈り出されますけれど」

実を言うと姉と同じ目を持った女優さんってまだ会ったことがないんです。

姉以外ではこの早瀬さんが初めなんですよ。ねえ、早瀬さんってどういう方なんですか？」

「えっ！どういう方って……沙希はコンピューターソフトの開発者なんです」

「コンピューターの?・・・なにか凄い!」

「たいしたことないです」

一言そう言っただけで否定する沙希。

その時、『ピーピー』という電子音が

「沙希!携帯が鳴っているよ」

「律子さん、バックをあけてとってくださいな」

と携帯を渡された沙希、

「私、携帯って好きじゃないからなるだけ使わないようにしているのに・・・」

誰なのかしら・・・」

と電話に出る。

「もしもし?・・・」

不信そうな顔が一度に晴れる。

「なんだ理沙姉・・・」

と言う声にピクツと反応するオーナー・・・しばらくハサミを止めて鏡の中の沙希を見つめる。

「うん、ごめん。遅くなって・・・そう律子さんと一緒だよ・・・」

違うよ、会社の専務さん達に言われて美容室に来ているの。

・・・えっ?どこかって?・・・あのファッションビルよ・・・

ええ、オーナー先生にしてもらっているわ。・・・

ええ!〜電話を変わって?・・・ちよつと理沙姉!・・・

初めてなのに失礼だわよそんなこと・・・えっ?初めてではないの?

「・・・じゃあ・・・」

と言って電話をオーナーに差出し

「すみません、電話を変わっていただけですか」
首をかしげながら沙希はそう言った。

「もしもし……やっぱり理沙ちゃん。……」

ええ、そんなこと忘れるものですか、私にとって姪よ。……

ええ……言っている意味がよくわからないわ……

妹？……本当にあの沙希ちゃんの……

そんなこと信じられないわ……迎えにくるって？……

わかった……私もこんな気持ちで家にかえれない……」

そういつて黙って携帯電話を沙希にかえす。

でもその手がブルブル震えているのを沙希も律子も見逃さなかった。

それからハサミを持つ右手が震えて止まらなく左手で身体に押し付けていた。

「杏奈！……」

と呼ぶオーナー、やってきたのは最初に対応したあの美容師だ。

まだ左手で右手を身体に押し付けたまま……青白い顔のオーナーが

「紹介します。私の次女です。長女はパリで修行中なので

彼女が私がないときのカバーをしてくれています」

と紹介するが再び杏奈は沙希の目を見たことよって顔を赤くしてふらふらとしている。

「駄目だわ、完全に沙希に魅了されているわ。このままでは失神ね。

オーナー少し荒療治してもいいですか」

「荒療治？それって……」

「いいえ、別に身体を傷つけようというんじゃないんです。沙希！

いいわよ」

というとき沙希はフラフラしている杏奈の手を取って引き寄せ抱きついて

唇を合わせる。いきなりだったので他の美容部員達も呆然と見ているだけだ。

「あつ！」

と声をあげたのはオーナー、肝心の杏奈は目を真ん丸く開けて驚いた表情だったが
いきなり白目をむいて失神したのだ。

娘の方に行こうとするオーナーを押し留めて

「効果はすぐわかります」

という律子。

沙希に抱き締められていた杏奈が

「ええ〜！・・・」

という大きな声を上げて飛び起きたのは直ぐだった。

「嘘！・・・こんな・・・」

「どうしたの？杏奈！」

「キスをするこの人から凄いパワーが私の身体に流れ込んできたの。

私・・・今、元気一杯よ。それに今ではこの人を見ても何ともないわ」

娘の言うことに言葉も出ないオーナー。

「これが沙希の力なの。自分の目の魔力を打ち消し、癒しを与えるのよ。」

沙希！ここにいらっしゃる皆さんを癒してあげなさい」

そういう律子が

「杏奈さん、それから続きをお願いしますね」

とお願いすることになる。

「ねえ、ママ！……いいえ、オーナー……
このお客さん……いいえ、早瀬沙希さんのこと私にまかせて頂けな
いでしょっか」

「杏奈！……唯々諾々と私の指示に従ってきたあなたがそんな事
をいうなんて……」

早瀬さんのことがそんなに気にかかるの？」

「はい、何故だか私……この沙希さんの先行きを見たくなったの。

だから、今日限りここを辞めて沙希さん個人のファッションコーデ
イネーターになる」

沙希の癒しのキスはすべて終っていた。

元気になった美容部員達が店をクローズにしてカーテンを引き、皆
沙希の周りに集まってきている。

「でも、早瀬さんはいつでも普通のOLでしょ。あなたを一人雇う
なんてできっこないわよ」

「私、お給料なんていらさないわ」

「だって……杏奈」

「心配いりませんわ、先生。OLと言っても沙希は特別な」

こんな話をしながらも決して手を止めない杏奈。

カットも終わり、カラーを巻いて毛染めの準備にかかっている。

「沙希は今、世界で最も有名な女性よ。

でもそれは男名で発売されているから早瀬沙希っていう名前はまだ
誰も知らないけれど、

もうすぐ週刊誌で発表されるから、そのうち本名のほうが有名にな
るわよ」

「沙希さんって一体何をされているんですか？
いちおう先ほどコンピューターソフトの開発者って聞こえていまし
たけれど」
と杏奈が聞く。

「2年経った今でも世界で売れつづけているビジネスソフト”ワー
プスロウ”の
開発者なの」

「ええ〜」
と悲鳴が上がる。

これが本当なら”世界で最も有名な女性”という意味がわかるのだ。

一人の美容部員が小走りですり足でノートパソコンをもってきた。

「これ、お店のパソコンなんですけれど最近調子が悪くて・・・
勿論ワープスロウがはいつていますけれど・・・見ていただけます
か？」

「いいわよ」
とパソコンを起動させる。

パソコンが調子が悪いというのは本当だろう・・・でも沙希が本物
かどうかを見たいに違いない。

そんなことちつとも気にしない沙希。

髪を触られながらもパソコンのキーを叩きつづける。

「これでいいわ」

「えっもう直ったのですか」

「ええ、かなりのファイルとレジストリが壊れていたから修復ソフトを入れて直しておいたわ。

駄目よパソコンをほうっておいては。

1週間に1度でも修復ソフトを起動してパソコンの治療をしなくては」

と行って修復ソフトの使い方を教える。

杏奈はそんな沙希の髪に毛染め液をかけてカバーをする。これで時間を待っただけだ。

目を閉じて時を待つ沙希。

先ほどの喧騒が嘘のような店内・・・皆の視線は沙希に集まっっている。

先ほどのパソコンの修理を見てもその手早さ・・・

何も無いところから修復ソフトを作り出す能力・・・本物だった。

その沙希の目が開いたとき沙希はオーナーに話し掛けた。

「ねえ、先生・・・いいえ、ミチル叔母様、

私の心の奥に仕舞いこまれた記憶を思い出しました。

あれは5歳のとき・・・叔母様が遠いところに旅立つ前日だったはずです。

叔母様は薄いピンクのワンピースとつばの広い真っ白なお帽子を被っ
つていなさったわ。

私と一緒にお庭で遊んだあと、私にキスをしてから抱き締めてこ
う
言われました。

『沙希ちゃん、叔母さんこれから長い間、遠いところへ行くけど決
して忘れないでね。』

叔母さん一生懸命勉強するから沙希ちゃんが
お嫁に行くとき

叔母さんが誰にも負けない綺麗な花嫁さんにしてあげる。寂しいけ
れどそれまで待っていてね』

そう言つて、白いハンカチを振りながらお庭から姿を消されたわ。私、いつまでも手を振っていた」
そういつて沙希は口をつぐむ。

「やっぱりあなたは沙希ちゃん」

「えっ？ママどういうこと？」

「沙希ちゃんはあなたのことよ」

「でも亡くなつたつて聞かされたけれど」

「そうよ、沙希は一度死んだの。そしてこうして生まれ変わつてくれたわ。伝説の御子としてね」

「あっ！理沙姉」

「沙希！半日逢わなくても寂しかったわ。．．．あなたが律子ね」

「理沙．．．さん？」

「律子、タメだから呼び捨てでいいわよ」

「じゃあ、理沙、今日は呼んでくれてありがとう」

「お礼いうのはこつちだよ。よく沙希のプロポーズをつけてくれたね。」

ママも肩の荷を下ろしてホッとしているよ」

「ホッとする？」

「これからは律子も大変だけどね．．．平安期から1000年以上たつた

我早瀬一族に現れた伝説の御子．．．その御子の妻となる律子は日本中に散らばる女達の長となるの」

「ちよつと待つてよ女達つて？．．．女だけ？．．．」

「そう、血を流しつづける男達の戦いをやめさすよう

時の帝の三女、早瀬の沙希姫様に女しか生めない術を施したのが陰陽師の安倍晴明様．．．

それから我一族に女しか産めない・・・女の悲劇が始まったの。その証拠に私も沙希も父が違うし、ママたちも長女と次女は父が一緒だけれど、

それから8女まで全て父親が違うの」

「それと沙希のこと伝説の御子って言ったでしょ」

「ええ、言ったわよ。男女両方の性を持つ者のことよ」

「ということは沙希って・・・」

「あら、まだ何も聞いていなかったの？・・・そうよ、沙希は両方の性をもっているの」

「律子さん、私のこと化け物と思ったら婚約解消してもいいわよ」

「化け物だって！・・・誰がそんなこというのよ。沙希そんな言葉で自分を蔑むのを止めなさい。」

私・・・嬉しいの。あなたが男性の身体だけで

今後メスを入れなければならぬと哀想でやりきれなかったの。

でも・・・女性の身体を持っているのだったらとても嬉しいのよ。

そしてこれ、お願いというより私の命令・・・律子さんだなんて他人行儀な呼び方は止めて。

理沙と同じように律姉と呼ぶこと、いいわね」

「律姉！・・・」

「よろしい！」

「おやおや、今から恐妻教育ですか・・・やれやれ・・・ということですよ。ミチル叔母様、何か聞くことは？」

「理沙ちゃん！沙希ちゃんは本当に男性だったの？」

「ええ、身体はさっき言ったとおりだけどそれを別にして先週の前までは男性として生活していたわ。」

女になりたいとかそんな気持ちは全くのゼロだったわね」

「最低の男でした」
と沙希が言い添える。

「そんなあ、金曜日からいつてもたった3日よ。
そんな日にちでどうやってここまで完璧な女性になれるってのよ」
誰が聞いてもそこでひっかってしまうのはあたりまえだろう。

今は理沙が夢の話から説明してくれるから聞いているだけでいいの
だが。

「そんなことがあったの・・・普通聞いただけでは信じられないけ
ど

さっきの沙希ちゃんの5歳のときの思い出は二人だけしか知らない
わ。

それがいちいち符合するの」

「それじゃあ、ママ・・・」

「ええ、この沙希ちゃんは私の姪の沙希ちゃんよ。間違いないわ」

「じゃあ、この方が伝説の御子さまなんですな」

美容部員達が口々に声をあげる。

「沙希ちゃん！この人達全員が早瀬の里の女の子達なの」

「えっ？そうなんだ・・・」

その時『ピッ・・・ピッ・・・』とタイマーの音がした。 自然と
身体が動くのは美容師達だ。

色の染まり具合を見てからカーラーを外していく杏奈、
手伝うのは美容部員全員だ。皆嬉しそうに手伝っている。

外したカーラーを受け取るのも順番に並んで受け取ったりしている

のだ。

「でも、沙希！そのワンピースよく似合っているじゃない」

「うん、これ会社の専務がプレゼントしてくれたの。」

「まだまだあるけど持ち切れないからロッカーに置いてきたのよ」

「そう、良かったじゃない」

「律姉ってね、うちの社長の妹だったの」

「律子が？・・・」

「そうたいした会社じゃないわ、だって沙希の力で急成長しただけだから」

「ふ〜ん、やっぱり沙希って凄い才能なんだ」

「凄い才能？・・・理沙、そんなところで沙希を語れないわ。」

「コンピューターの人才と言っているわ。」

「同じ職場で働いているからその異能ぶりはよくわかるのよ」

「でもそれだけかしら」

「えっ？」

「私、それ以外でも沙希の才能が開花する場所があるような気がするの」

「沙希の才能？」

「なんだか私もそんな気がする。」

「理沙ちゃん、律ちゃん、こんな仕事をしているとね」

「輝いている人や輝きを失っていく人がようわかるのよ。」

「なるほどねと思うことが多々あるわ。ほとんどが傲慢になって輝きを無くしていくわね。」

「でも沙希ちゃんを見てみるとこの美貌と内面の輝き・・・」

「人を取り込んでしまうカリスマ性というのかしら・・・これからが楽しみだわ」

「セットをしてからメイクをする杏奈。」

さすがプロだ。やはり素人の岡島直子のメイクとは雲泥の差だ

会社を出るときこれ以上はと思っていた沙希の美しさ・・・

椅子を下りた沙希、・・・その姿は全く別人だった。

いうにいわれぬその美しさ、輝きは何倍にも膨れ上がっていた。

「あとう、写真とつてもよろしいか？」

「あんた達！・・・」

「いいのよ、叔母様」

といつて皆でわいわいと写真をとる沙希。

見ているだけで沙希の内面の優しさが伝わってくる。

ああ・・・どうかこの優しさをこのままにと願わずにはいられないミチルだった。

美容部員達の見送りにニッコリと笑って手を振る沙希。

結局、ママのお店に着いたのは夜遅くなってからだった。

ママのお店のこと？それは語るまい。

ただ皆の祝福を受ける二人にファンファーレが鳴ったことは確かだ。

そして、沙希の部屋での睦み事は律子に女としての自信を持たせ、

可愛い旦那様への愛情が満ち溢れていくのだ。

子供が授かったと実感したこともあり、

可愛い旦那様のまだ中学生みたいな肉体が女性へと変化する楽しみは

妻となった律子の楽しみとなった。

可愛い旦那様をその腕にしっかりと抱き締め眠りについていく。

その二人の夢は果たして・・・。

第一話 第四話

駅まで続くゆるやかな坂道を律子は軽やかに下っていく。

その律子の腕には沙希の腕が絡みついていた。

律子は理沙に借りたスーツをビシッと決め、

沙希は昨日、専務に買ってもらったワンピースを着用して、

今日早くに来た杏奈にヘヤーのセットとメイクをもらったのだ。

済まなそうにする沙希に

「いいから、いいから。これが私の仕事よ。気にしないで」

と笑う杏奈、今日これからママの家に引越しをしてくるという。

「ねえ、沙希」

「なあに、律姉」

会社では今まで通りに『沙希ちゃん』『律子さん』と呼び合っているが、

外に出たら『沙希』と『律姉』だ。

「沙希。ママに私も早く引越してきなさいっていわれているの」

「律姉はもう実質私の妻だし、同じお家に住むのは当然だわ。それ

に……」

「それに？」

「一瞬でも離れて住むなんて嫌！」

「沙希の甘えた！」

「だって、しょうがないもん」

律子は組んでいた腕をほどいて沙希の手を握った。

「わたしも本当はもう沙希やママ、理沙と離れて暮らすなんて出来ない。」

今日、アパートから大事なものだけとってくるわ」

「じゃあ、わたしもお手伝いする」

駅からは、昨日言われた通りに同じ電車の同じ車両に乗った。

あの三人は勿論、昨日見覚えのある女性達が・・・いやこの車両の半分以上、

女性ばかりが乗り合わせ沙希と律子を迎えた。

ざっと車両を見渡しても7割が女性だった。

男達は身体を縮めて何か居心地が悪そうにしている。

「沙希さん！！・・・凄い！」

「きらきら輝いてまぶしいわ」

「昨日の沙希さんも素晴らしかったけれど、

今日は何て言ったらいいか言葉もないって感じ・・・」

女性達は沙希の美しさに呆然といったところだ。

「ねえ」

と律子が聞く。

「昨日より人数が多くなってるんじゃないの？」

「ええ、そうなんです。わたし会社で沙希さんのこと何人かに話しただけなんです。」

でも昨日いた人達がそれぞれ話をしていたみたいですね」

「明日になったら、この車両には女性しか乗っていないんじゃないかしら」

「そうなると思いますよ。確実にね」

「沙希さんて本当に女優の沢口靖子に本当にそっくり！」

「・・・ああもうだめ！見ているだけで卒倒しそう・・・」

「わたしも・・・」

「私も・・・」

と女性達はお互い身体をささえあっていないければ大変なことになりそうだ。

「あんだ達！沙希の目を見たら駄目よ。見たら魔力に魅入られちゃうから」

と律子の注意もどこまでわかって貰えたか・・・

「私、今日カメラ持ってきたんです。駅に着いたら一緒に撮って頂けませんか？」

「沙希！いいわよね。ファンを大事にしなくっちゃ」

と沙希の肩をポンポン叩く。

多くの女性達がうらやましそうに聞いている。

着いた駅での撮影会、明日からはカメラがもっともっと増えていきそうだ。

撮影会という思わぬ出来事のため、

「はあ、はあ」といって荒い息をはきながら二人が跳び込んできたのは

仕事の始まる2分前だった。

「疲れた〜」

「律ね・・・いえ、律子さん。明日からどうしよう」

「毎日こんな状態ではたまらないわよねえ」

お互いに顔を見合わせて

「フー」とため息をつく。

昨日からの沙希の変化を知らない男達、

今日改めて掲示板で知らされて戸惑ってしまったのは事実だ。

「けっ！おかまだったのか」とかいう悪口を発するのは

いづれも実力のない者達ばかりだったのは面白い。

だが、そんな男達でさえ実物の沙希を見た驚きは言葉にできないほどだ。

呆然自失といったらいいのか、はるかに想像を超えた存在、だから悪口を言うことさえ憚れてしまう。

あこがれてしまうといったらいいのか、声さえかけられないのだ。

いづれにしろ女達にガードされた沙希は会社での立場にしても実績と存在は特別な位置に祭り上げられたとっていい。

そんなことを誰より気づかずマイペースで仕事をする・・・それは沙希自身だった。

そんな沙希の身の上に大いなる変化が始まったのは仕事に取り掛かっただけから

かかってきた1本の電話からであった。

いつものように沙希のデスクにおいてある電話機を取り上げたのは律子だ。

「はい。・・・あつ社長！・・・では、すぐまいります」
受話器を戻しながら

「沙希ちゃん・・・沙希ちゃん！」

と仕事に夢中の沙希の肩を強く揺さぶる。

「あつ、律ね・・・いえ律子さん」

「フフフ・・・変わらないわね。仕事に対するあなたの情熱は大したものね。・・・でも、今は手を休めて行きましょう」

「えっ、どこへ？」

「社長室へよ。社長が呼んでいるの」

慌てて立ち上がった沙希へ

「バックを忘れちゃだめよ。トイレでお化粧を直してから行きまし

よう」

社長室のドアをノックすると

「お入りなさい」

直接、社長室のドアを開けたのは専務だった。

一歩足を踏み入れ、部屋を見回しても社長の姿がない。

でも部屋の隅のすりガラスのパーティションで区切られた応接室の中から社長の話声が聞こえる。

専務が応接室のドアをノックすると

「ああ、来たようです。入りたまえ」

という社長の声に

「さあ、お入りなさい」

専務に促されて室内に入ると、一人の女性の姿が、眼にとびこんできた。

ソファに浅く座りながらも組んだ脚の美しさ。

肩までがあらわになった鮮やかなピンクのワンピース、

胸の谷間から女の色香が匂いたってくる。

かけられているサングラスが女性の妖しい魅力を押しだしていた。

沙希は身体の奥から熱い物が湧き上がってくるのが感じられ、なぜ

か小刻みに震えがきた。

右手が自然と律子の左手をさぐり固く握りしめる。

律子はその手の熱さと震えを感じて不思議そうに横目で沙希を見つめていた。

沙希の五感の全てがその女性をとらえ、

小さな息遣いから、その女性の身体から沸き立つ女性の香りまでを嗅ぎ分けていた。

だから、その女性が沙希を見た一瞬に「あっ」と発した微かな声を聞き分けたし、
顔色が一瞬変わったのも知った。

(どこであったのかしら。この人私のこと知っている・・・)

はっと気が付くと社長も専務も、
そして律子までもが二人の雰囲気呑まれたのか言葉をかけられな
いまま交互に見つめている。

その女性は沙希を見ながら立ち尽くしていた。
でも一番先に動いたのもその女性であった。
ニッコリ笑いながらサングラスをはずした。

「あっ、あなたは！」
その顔を見て驚いたように声をかけたのは律子だ。

「女優の早乙女薫さん！」
その女性は世間知らずの沙希であっても、日本でも指折りの天才女
優だということは知っていた。
毎年の様にいろんな賞を受賞している。

「さすが社長さんね。例の件、断ろうと思っていたのに、これじゃ
断れないじゃないの。
まるで蜘蛛の糸に雁字搦めにされたみたい・・・少し待っていてね」
といいながらバッグの中から携帯電話を出すとどこかにかき始めた。

「ああ、まゆみ。CMの件OKよ。ええ・・・相手役はあの女優じ
ゃあないわ。」

ええ……ええ……私が連れていくから……ええ、そう監督にいつといてちょうだい」

最後に薫は沙希を見て、ニヤッと笑いながら電話を切った。

「では、プロモーションビデオの件は……」

社長が喜びの表情でソファーから立ち上がった。

「ええ、いいですね。ただ……」

「ただ……?」

天才女優は沙希を指差し

「その子をしばらくの間……いえ撮影の期間中だけでもいいから
付き人として私につけてください。それがたった一つの条件よ」

「えっ、沙希ちゃんを?」

律子が沙希を守るように肩をだきながら叫ぶ。

「沙希ちゃん?」

「ええ、この子の名前なんです」

「わたし早瀬沙希といいますけど、何故わたしを?」

「まあ、名前まで同じ。いえね、わたしの知っている子があなたにそっくりなの。」

なつかしいから少しそばにいて欲しいだけなの」

「その人、沢口靖子さんじゃあないんですか」

律子は沙希が早乙女薫に取られてしまうような錯覚に陥り、必死に沙希を庇おうとする。

「ああ、靖子ちゃんね。そういえば靖子ちゃんにもそっくりね。

あら……フフフ、あなた沙希ちゃんが好きなのね。

そんなに心配ならばあなたも一緒にどうお?」

「えっ、いいんですか」

「ええ、いいわよ。でも会社の社長さんの許可を得なくてもいいの？」

律子は社長と専務のほうに振り向くと

「いいでしょ、兄さん。お義姉さん」

「律子。ここは会社だぞ。公私のけじめはどうした！」
社長はきつい声で叱る。

「今はそんなこと言ってられないの。ねえいいでしょ」
と哀願するような声で言う。

専務は笑いながら

「これは会社のためにもなることだから・・・」
専務は、まだここでは二人の婚約を知らせない。

「えつ、じゃあこの人は・・・」

「ええ、わたしの不肖の妹です。
でもこのことは社員達には内緒ですのでどうかその点おふくみ置きを・・・」

「律子さんっていったわね。これからよろしくね」
ニッコリと笑って握手をしてくる。

その何のくったくもない態度には

沙希を固くガードしていた律子もホッとするように全身から力を抜いていく。

「小川・・・いや早瀬くん、今度発売される君の企画開発したあのゲームソフトに会社の将来がかかっているんだ。

幸いこうして早乙女薫さんにプロモーショントビデオ出演を承諾していただくことができた。

あとは君が担当者として、開発した最高責任者としてプロモーショントビデオを完成させてくれたまえ」

と言ってから

「彼女は天才なんです」

社長が大きな声で太鼓判を押す。

こうして沙希自身、口をはさむことなく次から次へ物事が決められ大きな渦中の中心へと押しやられていく。

「じゃあ、社長さん。今日からよろしいですね」

という薫の一言で、いまこうして薫の車の後部座席で律子と薫の間に挟まれて沙希は座っている。

両の手をそれぞれの女性に固く握られ、熱い視線を沙希に浴びせながらも、

女優である薫の誘導で最近の沙希の変身を律子から全て聞き出していた。

沙希の本当の性を聞いたときは、さすがに驚きの声をあげた。

「ええ〜っ、沙希ちゃんて男の子だったの」

しばらく沙希の顔をのぞきこんでから

「それで判ったわ。沙希ちゃんの不思議な魅力が・・・」

「何がわかったんですか？」

「フッフ、あなたにもわかってはいるはずよ。同じ仲間なんだから」

そして沙希を変身に誘い込んだ新しい家族の真理、理沙・・・

そして偶然とはいえ、美容室で出会った千堂ミチルと杏奈親子。

それを聞くとニッコリと笑って頷き、

「やっぱりね」

と囁くように言った。

沙希は二人に挟まれ身動きできないし、握られた二人の手から熱い体温……

いや熱い想いが伝わってきて息苦しいほどだった。

だが先ほどから沙希が気になっていたのは

運転する薫の事務所の社長浅香まゆみがルームミラーでチラチラと沙希に送る視線であった。

その視線の中には他の女性と同じ熱さとともに鋭さがあった。

沙希が男性と知ってからはその視線の鋭さが余計に増していた。

先ほど紹介されたとき早乙女薫の敏腕マネージャーであり、早乙女薫事務所の社長と聞いた。

といつても個人事務所だからって笑っていたが、どうも気になるまゆみの視線だ。

「ここよ」

と薫に連れてこられたのは撮影所のスタジオであった。
広いスタジオにはたくさんの人が働いている。

「やあ、薫くん。やっときたな」

撮影カメラの横の椅子からたちあがったいやに身長が高い……
180cm以上あるだろうか……中年の男が薫に声をかけた。

「あら、小野監督。私このお話断りに行ってきたのよ。」

「ほう……、一度決めたらテコでも動かない君がどうして
一度断ったこの仕事を再びする気になったのかな。

まあプロモーションビデオとはいえ、この役ができるのは君しかないからなあ」

「この子がいたからよ」

「この子？」

「ええ、この子！」

と言って律子やマネージャーのまゆみの後ろに隠れるように立っていた沙希の手を握って小野監督の目の前に引っ張り出した。

「あつ、あのお私……」

生まれて初めての雰囲気の撮影現場と付き人だという自覚から目立たぬように隠れていたからいきなり引っ張り出されて驚いたのだ。

「君は……君は沢口靖子くん……ん？」

と行って小野監督は頭の前から脚の先までなめるように見つめる。

沙希はその視線に思わず身体を震わせ、身を縮める。

まるで裸にされて見つめられているような異様な視線には恐れさえ感じるのである。

「違うな、この子は沢口くんではないね」

さつきから周りを囲むようにして話を聞いていたスタッフ達が

「えー」

と驚きの声をあげる。

「沢口くんは今や日本を代表する若手女優だが、普通の女性でしかない。」

でも、この子は普通の女性では持ち得ない妙な匂いがする」

その話に周りのスタッフの一人が

「監督！僕にはここにたっている方が沢口靖子さんにしか見えないんですが、本当に違うんですか。」

それにその妙な匂いってなんですか」

監督は声をかけたスタッフのほうを向いて

「この子をよく見るんだ。そして感じるんだ。そうしたら見えないものも見えてくるし、人の匂いというのも感じられるようになる。」

諸君もこの先、上に登っていきたいのなら勉強したまえ」

と話を終えたが、そのスタッフを見てニヤツと笑って

「この子を一言で言い表す言葉は・・・妖精・・・だな」

「妖精？」

スタッフ達がざわめく。

「さすがね、監督」

といつてから周囲を見回してから

「この子は素人だし、何も知らないからみなさんに迷惑をかけるかも知れないけれどよろしくね」

と言っている。

「えっ」

どういう意味？と首をかしげる沙希だったが

そんな小さな動作にも何か不思議な魅力をスタッフ達に与える。

「みんなに紹介しておくね。名前は早瀬沙希ちゃん。このゲームソフトを作った張本人よ」

スタッフ達から

「ウオっ」

という声があがった。スタッフ達にもこのゲームの面白さがよくわかっていたからだ。

「えっ、このソフトを作ったのがこの女性なんですかあ・・・凄い！」

「うふふ」

と笑ってから小野監督にむかって

「ねえ、監督。相手役にピッタリでしょ」

「そうだな。なにもかも怖いぐらいだな。」

よし！このプロモーションビデオは評判になるぞ。そうと決まったら早く準備したまえ」

「げんきんね、監督は。・・・はいはい、じゃあ沙希ちゃん」と手を引いて歩きだした。

「どういうことなんですか？」

広い控室に入ると沙希は薫に訴えた。

「ごめんね、沙希ちゃん。付き人だなんて嘘を言っつて。」

わたしね、今日会社にこのお仕事お断りしようって思っつてお伺いしたの。

どうしてもこのプロモーションビデオの相手役が気に入らなくてね。

社長さんが強く推薦した若い女優だったけれど、

以前一度共演したときどうしても息があわなくて役を降りたことがあったの」

薫は沙希の手をとってソファに座らせて話だした。

律子は沙希の後ろで、まゆみはドアの前で腕を組んで立っつて話を聞いている。

「結局、社長さんは相手役を変えることであつたしにどうしても出たほしっつて。」

でも、相手役を今からオーディションできっつこないし、時間もないから、やはりお断りしようと思っつたときに

奥さんの専務さんからゲームを開発した社員に会っつただけませんかっつて言われたわ」

薫の話が続いている。

「この専務おかしいんじゃない。わたしがゲームを開発した人に会ってどうするのよ。」

「って沙希ちゃんと律子さんには悪いんだけど」

「この人が専務だなんてこの会社大丈夫？って思ったの。」

「でも、部屋に入ってきたのが沙希ちゃん、あなただった。」

「その一瞬に『相手役はこの子しかない！』って思ったのよ。」

「お宅の専務さんはたいした女性だわ。」

「きつと台本を読んでいらっしやっただのね。専務さんも思ってたのよ。」

「相手役は沙希ちゃんしかいないって」

「でも、わたしお芝居なんてしたことはありません」

「いいのよ。何もなくて。だってこの役そのものが沙希ちゃんなんだから」

「わたしも言っただけかしら」

「とドアにもたれて立っていたまゆみが」

「長いソファに座る沙希を薫と挟みこむように腰をおろして」

「沙希のあごに手をかけて自分のほうに振り向かせた。」

「「たいしたもんだわ、ついこの前まで男だなんて思えないわ」

「「まゆみ！・・・ごめんね、沙希ちゃん。まゆみは男が大っ嫌いな
の。」

「「わたしも・・・わたしも男なんて大っ嫌い！」

「沙希が言い放ったとき、まゆみの沙希を見る眼が変わった。」

「「えっ、あなたは男が好きで女に変わったんじゃないの？」

「「違います！」

「「違うんです。沙希は違うんです」

「同時に沙希と律子が否定した。」

「詳しくは話せませんが、沙希は男が好きだから女になったんじゃないんです。」

沙希は男としては生きられないんですよ。だから、女になったんです。女になっても愛するのは女性だけなんです。」

そして私は沙希の婚約者なんです。沙希、立って！」

律子は啞然とする女性二人の前で沙希を抱きしめ熱いキスをした。それはとても長く感じられ

「わかった、もういいわよ」

とたまらなくなつてまゆみが声をかけて二人を引き離した。

律子は立っているのが出来なくなつて対面のソファに倒れるように腰を落とした。

沙希も二人の間に崩れおちる。

「ねえ、まゆみ。若いつて凄いわね」

と薫が苦笑いを浮かべる。

「薫、わたし勘違いしていたみたい」

「まゆみは、早瀬沙希つて名前は忘れっこないよね」

「あたりまえじゃないの・・・えっ、じゃあ・・・」

「あなた運転してたから私達の話は余り聞こえてなかったんじゃない？」

「ええ」

「どうやらこの二人、姉の真理と同居しているらしいわ」

「だとしたら・・・」

「そう、この沙希は私達が探し求めていた伝説の人なのかも知れない」

(律姉つたら・・・いきなりなんだから)

律子に抱きしめられ強烈なディープキスをされて
気が遠くなっていた沙希には薫とまゆみの会話は全く聞き取れてい
なかった。

「さあ、そろそろ着替えてメイクにかかりましょうか。

まゆみ、衣装さんとメイクさんと呼んできて」

「薫！あんなのを見せ付けられて良く平気ね」

「平気じゃないわよ。でも楽しみは後でと言うでしょ。

今夜は姉さんのところに押しかけていくんだから。まゆみ、あなた
もいくでしょ」

「あたりまえじゃないの」

無理やり平安時代の女性の旅姿の壺衣装に着替えさせられた沙希は
薫に読んでおきなさいと渡された台本に眼を奪われていた。

そんな様子をメイクをされながら鏡越しに早乙女薫は軽く二度三度
と頷いている。

実際に沙希は台本の中に魅入られて入っていった。

自分が企画して製作したゲームソフトとはいえ、

こうして台本を読んでいくと主人公の心の動きや立場が今の自分と
瓜二つなのに驚かされる。

最後の雪夜叉との戦い、そして明かされる自分の正体。悲しい別れ
もある。

母との別れが思い出され自然と涙が溢れ出てきた。

「あらあら、今そんなに涙を流しちゃうと本番はきついわよ。ほら、
メイクさんが待ってるわ」

まゆみがハンカチを手渡す。沙希を見つめる視線にはもうすっかり鋭い険は消えていた。

その声に沙希が顔を上げると鏡の中から自分を見つめる薫の笑顔があった。

元々の美しさにこうしてプロが完璧なメイクをすると美しさが数段と引き立って思わず

「きれい………」
と自然に声がでていた。

「沙希ちゃんに言われると凄く嬉しいわ」

とニッコリと笑ったがそこで初めて見せるきつい表情を浮かべて

「でも、これからは敵だからね。まゆみ、これから役に入るから別の場所に移るわ。」

沙希ちゃんの世話をよろしくね
と行って部屋を出て行く。

それから大きな声で

「判つてると思うけど、誰も来ちゃあ駄目よ」

訳もわからず呆然と見送っていた沙希にむかって

「心配しないで。いつものことよ。ああして薫は役になりきっていいのよ。」

さあ、沙希ちゃんのメイクの番よ
と鏡の前に座らされる。

初めてのことなので緊張して固くなっていたが、存外、人に顔を触られるのは気持ちが良い、

いつしか意識が台本の中の平安の世に飛んでいく。

沙希の手の中にある台本にはこう書かれてあった。

『妖・平安京 雪の章』

『時は平安の世、悪鬼や怨霊という妖かしが現われ人心を惑わし、命を奪っていく。そんな時代の或る日、雪深い山道を赤ん坊を抱いた若い妻とそんな妻を庇う様に若い夫が歩いてた。

そこを山賊に襲われ切り殺される若い夫、悲鳴をあげながらも赤ん坊を抱きしめ逃げる妻。

だが追いつかれ赤ん坊を取り上げられ、谷底に投げ捨てられてしま

う。

山賊に攫われようとした若い妻だったが、

そのあまりにも深い悲しみと絶望に心が枯れ、悪鬼に変化した。

若い妻は夜叉になったのだ。

白い雪の中に立つ雪夜叉、その足元には喉を喰いちぎられ、鋭い鎌で切り刻まれた山賊達の死体が白い雪の中に消えようとしていた。

一方谷底に投げ捨てられた赤ん坊は張り出した生い茂った木々の葉に速度がゆるめられ、谷川で洗濯していた中年の妻の洗濯桶に嵌りこんだ。

子供のいない中年夫婦にとって天からのさずかりものとなった赤ん坊。

不思議なことにかすり傷ひとつ負わずすくすくと育っていく。

夫婦には子供は何事にも替えがたいものだが

たった一つの恐れは最近近隣を騒がす雪夜叉のうわさだった。

男の子ばかりを攫っていく雪夜叉。

「違う！この子じゃない」

と違って食い殺す。そういう話が人々の口から口へ伝わっていたの

だ。

夫婦は赤ん坊を女の子として育てることにした。

すすくと育つ子供、もう自分は女だと信じきっていた。

少女が14歳になったある日、夫婦は流行り病であっけなく死んでしまう。

死の床で聞いた自分の身の上の話。

肌身離さず持っていたお守り袋から京にむかった少女。

当然そこには生みの親の姿はない。父恋し母恋しと京をさまよい歩く少女。

歩き回った疲れから一条戻り橋のたもとで意識を失ってしまう少女。

そこに通りかかったのは当代随一といわれる陰陽師『安倍晴明』だった。

少女から何か不思議な力を感じた晴明は少女を連れ帰った。

晴明は少女の世話をする式神たちから、少女は男であると教えらるる。

しかし、2日たっても3日たっても眼をさまさない少女。

そのうち少女の身体が変化してきた。

盛り上がる二つの乳房、女性らしい柔らかな身体に変わっていく。

下半身には男女の二つの性器を持つ男女両性有と変化していた。

身体の変化とともに内から秘められの力が強くなっていく。

10日たってようやく眼をさます少女。驚いたことに寝ている間のことは全て知っているといるという。

「安倍晴明様。私を弟子にしてください」

そう言って少女は寝間の床の上で晴明に頭をさげる。

聞けば寝ている間に菩薩様から

「そなたを安倍晴明に預ける。そこで修行をして里に帰り、雪夜叉を哀しみから解き放て」といわれたという。

安倍晴明も雪夜叉のことは聞いていた。

男の幼子ばかりを喰い殺すと聞いて母達の哀しみに心を痛めていた。

しかし、安倍晴明がこの京からは出ることには許されない。

悪鬼・怨霊から平安京を守る要となっていたからだ。

少女は安倍晴明の厳しい修行に歯を食いしばって耐えていた。

当代一といわれる晴明の陰陽師の修行は生半可なものではなかったのだ。

とうとう式神を持つことを許され、鬼を捕まえて式神として育てていく。

力も暴走することなく制御できるようになった。

最初の頃は油断すると力が暴走して物が飛んだりして危険きわまりなかった。

そんなときには必ず悪鬼がうじゃうじゃと集まってきた。

三度に一度は自分の式神に退治させて成長させていく。

ようやく修行を終えて許されて里に帰る少女。雪が雪夜叉との対決の舞台を用意していた。

ここからがこのプロモーションビデオの舞台となる。

山に囲まれた裾野。一瞬のうちに男達を殺していく雪夜叉。

鮮やかな赤い血潮が何もなかったように雪の白に溶け込んでいく。

駆けつけた少女、その気配に振り向くが相手が女と知ってか、恐ろしい表情が消え無の表情に変わっていく。

そして、静かに雪の中に消えて行こうとした。

「お待ちなさい、雪夜叉。お前のこれまでの悪行の数々、許されるものではない」

と声をかけても歩みは止めない。

少女は目の前で印を結びなにやらブツブツと唱え始めた。

すると雪夜叉の白い着物がボウッと燃える。

雪夜叉は振り返って少女にむかって走りだした。表情のないままに・
・・・・

少女は式神を放った。

式神は雪夜叉を雁字搦めにし雪の上に横倒しにする。

そして雪夜叉を喰おうとしたが力はまだまだ及びはしない。

雪夜叉が内から力をいれるとブチッと絡めの縄が切れる。

「ぎゃっ」

といって式神が消滅した。

再び少女に向かう雪夜叉。

その表情は今度は憤怒の形相に変わっている。

「おのれ！おのれ！謀りおって」

少女と雪夜叉の戦いが始まった。

少女の身軽さ、武芸も安倍晴明に叩き込まれただけに

雪夜叉にひけはとらない。

しかし、16歳になったばかりの若さとはいえ

相手は百戦錬磨の妖かしである、じりじりと追い詰められていく。

「おのれは女子の格好をして・・・本身は男なのか女なのか」

「わたしは男ではない！女子じゃ」

「式神が語っておったわ。お前は男でもあると・・・」

少女の身体に宿っている男の性、少女には嫌悪するものだったのだ。

少女の心が揺れた。そして隙ができた。

雪夜又は少女を押し倒した。

少女は押し返そうとしたが心の迷いの中では力が出ない。

男と言われている動揺は心に住みつく闇がもたらすもの。

少女の心の奥底から含み笑いが聞こえていた。

雪夜又は少女の着物の上から小さな男根を握り

「それでも、お前は女子だというのか」

握りつぶさん勢いで力を入れてくる。

少女は襲ってくる痛み在眉根をよせて耐えていたが死の影は目前に
せまっている。

それなのになぜかこうして雪夜又に押さえられながらも
その冷たい肌からとても懐かしい匂いがしてくるのだ。

雪夜又も何か感じているのか、じっと少女の顔を見つめている。

おのが手が男と知らせているのに

まだ硬さが残るその肌から乙女の匂いが漂ってくる。

その匂いは雪夜又に遠い過去、まだ人だった頃、女になる前の匂い
に酷似していた。

雪夜又は確かめるように、少女の着物の胸元を広げる。

少女のまだ成熟していない雪のような白い肌と二つの乳房・・・。

しかし、雪夜叉が見つめているのは少女の胸元にかけられている古びたお守り袋だった。

「そなた、名をなんと申す。・・・そなたの名は！」

雪夜叉に押さえつけられ苦しい息の中から

「あ・・・き・・・あ・・・」

雪夜叉の身体が一瞬ビクッと震える。そしてしばらくの沈黙！

雪夜叉が静かに声をかける。

その声の中に何故か妖かしとは思えない人間くささが含まれている。

「これはそなたのものですか」

と雪夜叉がお守り袋に手をかけようとしたが

「触るな！」

どこからそんな力が出てきたのか、勢いよく雪夜叉をはねとばす。

「これに触ってはならぬ！これはわたしのたった一つの宝だ！

そなたのような妖かしには触らせぬ」

弱々しく立ち上がる雪夜叉、その無表情の中に哀しみと喜びが渾然一体となり。

心なしかその眼が潤んでいた、妖かしとなって初めてみせた涙だった。

我が子が生きていた喜びは妖かしとしての力を奪っていく。

少女は再び印を結びブツブツと唱しはじめると雪夜叉の身体から炎があがる。

今度は雪夜叉はその場で立ち尽くしているだけで何も抵抗しない。

ようもここまで成長してくれたと、ただ二つの眼から溢れるふた筋の涙。

「ん？・・・」

雪夜叉の変わっていく変化に気づき少女は印を解いた。その様子にわざと憤怒の形相を浮かべて抵抗するさまをみせるが、さきほどまでの雪夜叉ではない。

滅茶苦茶な攻撃で我が子の手にかかろうとする。

その心を知らず再び印を結ぼうとしたとき

『やめなさい、もうやめるのです』

と天から声が聞こえ金色の光（瑞光）が降り注いできた。

「あつ、菩薩さま」

「もういいのです」

雪夜叉は抵抗して少女を襲おうとしたが

「やめなさい、雪夜叉！そなたはこの子に親殺しの罪を着せるつもりですか」

「親殺し？・・・」

不思議そうな表情を浮かべる少女、そしてハッと悟った。

「う・・・嘘だ！嘘だ！嘘だ！嘘だ！嘘だ！・・・」

少女は細い首を激しく振りながら泣き叫ぶ。

「こんな妖かしが、こんな妖かしが、わたしの母さまではあるものか！！！」

激しい否定の内、段々声が小さくなっていく。

そんな少女を見つめ立ち尽くす雪夜叉・・・

無表情の頬に流れ落ちる二筋の涙、表情で表せないだけに何故か余計に哀しい。

静寂が訪れ、その中で少女はじつと雪夜叉を見つめている。

少女にとって恐ろしい妖かしであった雪夜叉・・・、
だが涙がかすむその無表情の中に、夢でみていた母の優しい顔が重

なつた。

少女の表情が突然クシャクシャにくずれて雪夜叉の胸に飛び込んだ。

「あああ、母さま・・・母さま・・・」

そして、両の手で雪夜叉の胸を交互に叩き出す。

「ひどい、ひどい・・・わたしを捨ててこんな妖かしになるなんて・・・」

瑞光が二人を照らし出す。その中で雪夜叉の姿が変わりだした。

母として妖かしになる前の若々しい姿、

そんな母に少女は生まれて初めての母の温もりを知った。あつというまの幸せなひと時。

やがて瑞光が消え、母の姿が光だす。

「あつ、母さま、いやだ、・・・どこにも行かないで」

母のやさしい手が少女の流す涙のあとを二回三回と拭いていく。

「わたしも・・・わたしも、一緒に連れてって・・・」

「あきあ、母は我が子恋しさとはいえ、多くの人を殺めてきました。

その罪は消えません。母は天に上ってその人達に償いをします。

天からいつまでもあなたのことを見守っていますよ」

優しい母の笑顔が少女の心に刻みつけられる。

やがて母の姿が小さな光の玉となって天に上っていった。

「カット!」

という声が聞こえてスタッフ達が緊張を解いた。

「フー」

全員が息を吐く。リハーサルとはいえ二人の演技の凄まじさ。

雪夜叉の早乙女薫と対等に・・・いやそれ以上の演技をしていた早瀬沙希というこの女性、

いったい何者なのか。素人なんてとても思えない。

スタッフの目がこの若い女性に集中する。

沙希は呆然と立っていた。

自分がいったい何をしてたのか覚えていないが、ただ何故か幸せの中にいたことは確かだった。

薫が沙希を抱きしめる。

「よくやったわね、沙希ちゃん。期待以上よ。いえ、想像を越えていたわ」

まゆみも律子も沙希をだきしめた。

「沙希、よかったわ。ほんとうに良かったわ」

という律子の声だが、沙希が小さな声で言ったのは

「律姉、わたしの胸がもう少し大きかったらなあ」

と胸を着物の上から両手で触っている。

「まあ、なんて子、こんなときに」

と律子が沙希の頭を軽く叩く。

「ホホホ、そうねえ、もしかしたら少しぐらいなんとかなるかもね」

「ほんとう?」

「本当よ、でも少しだけよ。あとは自然のままにね」

薫の手が沙希の頭を撫で上げる。先ほどの母の手と一緒にだ。

「薫くん、本番はもつと先に延ばしたいんだ」

「えっ？」

「こんな舞台装置では駄目だ。君達の芝居に全然ついていっていない」

監督の言葉に薫が頷く。

「そうね、本当は映画にしてみたいわ」

「よし、考えてみよう。ところで、早瀬くん。君の役名なんだが」

「あきあ……」

「えっ？」

「あきあって名前なんです」

「あきあ？、変わった名前だね」

「このソフトをつくっているときからその名前で呼んでいたんです。

それに名前はゲームを買ってくれた人が各々でつけますから」

「あきあか、……うん、いいだろう。この主人公は”あきあ”でいい」

車に乗ってすぐに薫の胸にもたれるように寝入ってしまった沙希。

両手は薫と律子にしっかりと握られている。

「うーん、本当に可愛いわ」

薫は空いている手で垂れている前髪をかきあげると

汗ばんだおでこに髪の毛がべったりと張り付いていた。

「ウッフ、赤ちゃんみたい」

バックからハンカチを取り出すとそつと汗をぬぐう。

そんな様子を律子は横眼でみていたが、もつすっかり敵意はなくなっていた。

「薫さん、沙希の男時代のお話してあげましょうか」

「男時代？」

「ええ、沙希の男時代ってもう箸にも棒にもかからなくて」

「そんなに悪かったの？」

「いいえ、人嫌いが激しかったんです。眼をみて話しをしない。

声が小さくて何を言ってるのかわからない。

ただ、コンピューターを扱ったら本当に凄かったですよ。

だから、いつのまにか私、大好きになっていました。

でも、わたしには昔男にレイプされる過去をひきづってどうしてもこの人に告白できなかつた。

それがいつのまにかこんなに可愛い女の子になっちゃって」

泣き笑いになった律子に薫が手を伸ばして肩をだきよせ沙希とともに律子も慈しむように

「いいわよ、ここで泣いて悪い思い出なんて流し出しちゃいなさい」

しばらく泣いてからやっと落ち着いたので

「わたしさっきの沙希のお芝居みていて何故か

わたしの手が届かない遠くに行っちゃったみたいに思えたんです」

「そんなことないわ。沙希ちゃんは沙希ちゃんよ。

何も変わることがないのよ。だってさっき聞いていたでしょ

この子ったら演技の感想も言わないで乳房をもう少し大きくしてほしいって。

正直言っただ演技している途中から沙希ちゃんのこと怖くなっていたわ。

どんどん私にせまってきて追い抜こうとしてるもの。

いままでどんな有名な女優とお芝居してもそんなことなかった。

沙希ちゃんのお芝居にどんどん引き込まれていくの。でも、今度の

本番では負けないわ」

「薫のそんな言葉初めてきいたわね」

「まゆみ！駄目だからね。この子を女優に引き釣りこもうとしているでしょ」

「だってうちの事務所って薫だけでしょ。せつかく凄い戦力が目の前にあるっていうのに手をこまねいてはられないわ。それにきつとスタッフの口からこの子のことがもれる。

よそのプロダクションに取られてなるものですか」

「ウフフ、まゆみさん、がんばってくださいね」

「あら、律子さんは反対しないの？」

「ええ、素人のわたしからみても、沙希は凄いつて思いました。

有名な天才女優の早乙女薫とお芝居してても少しもひけをとらなかつた。

それどころか………あっ！」

「いいわよ、遠慮しないでどんどん言っちゃっても」

「すいません。……わたし、途中からどんどん沙希のほうに引き込まれていきました。

こんな才能もってるなんて気づかなかった」

「本当にそう思う？」

「えっ」

「沙希ちゃんの才能に気づいていなかった？」

「どづいうことですか？」

「だって沙希ちゃんってつい最近まで男だったんでしょ？」

「はい」

「今のこの子から男を感じる？」

「いいえ」

「律ちゃん、さっき言っていたわねえ。夢であった沙希ちゃんと同化したから」

「完璧な女性になっているって……でも果たしてそれだけかしら」

「どういふことですか？」

「確かにそれで今の沙希ちゃんを論じるのって簡単よ。

でもこの子の才能って恐ろしいものだわ。長年女優をやっている私が震えるぐらいよ」

「沙希ってそんなに？」

「そうよ、この子って根っからの女優なの。

だから人を魅入らせる目を持っているのよ。……それに」

「それに？」

「この子の才能はわたしなんて足元にも及ばないわ」

「天才女優と言われる薫さんよりですか？」

「この子には演技の神様がついているのよ」

「薫！それって……」

まゆみは呆然と薫の話の話を聞いている。

「でも、今のお仕事もやめて欲しくない」

「そうね。……ああ、まいったな。わたしがこの子の大ファンになっちゃったわ」

「あっ、そういえば……」

と通勤電車の中での増えつづける沙希のファンのことを話す。

「えっ！もうファンがいるの？」

「はい、女の子達はどついうわけか沙希にひきこまれていってしまつて」

「まゆみ、こつなつたら……どつするっ」

「もち、即契約よ。別に今の仕事を続けてもいいわよ。そして、お芝居もね」

「まゆみ、今度の本番までにこの子の身体検査するわよ」

「わかったわ。澁さんのとこね。さあ、着いたわよ」

「あれ、ここって」

律子は周囲を見渡す。

「ふふふ、沙希ちゃん・・・沙希ちゃん・・・着いたわよ」

薫が沙希を身体を軽く揺すって声をかける。

「うん・・・」

といて両手を上げて伸びをすると目をパツチリとあける。

「あゝあ、良く寝ちゃった。・・・あれっ、ここって・・・」

沙希は律子と同じ反応をして車から飛び出した。

第一部 第五話

「こっつて……」

周囲を見渡しながら沙希と律子は呆然と立っていた。

「ほら、何してるの？早く来ないと置いていくわよ」

薫とまゆみが夕闇の中で二人を呼んでいる。顔を見合すと慌てて駆け出した。

二人はあの雑居ビルに入っていく。そして、あの店のドアを開けた。

沙希と律子は首をかしげながら二人のあとから店に入った。

「いらつしゃい、あら……」

「姉さん、久しぶり」

「姉さん?!」

沙希と律子は思わず大声をあげた。

「沙希ちゃんに律ちゃん、それに薫ちゃんとまゆみちゃん……なにか珍しい顔合わせねえ」

「それはねえ、ママ」

と後ろから声がした。

「あつ、理沙!」

「理沙姉!」

「天才女優早乙女薫と演技で競い合う沢口靖子に瓜二つの謎の美少女!ってね」

「あちゃあ、もうばれているの?おしゃべりなスタッフがいるのね」

「違うわよ。薫叔母様は気がついていなかったただろうけど、あの小

野監督がメガホンを握り、
天才女優早乙女薫の初めてのCM出演ということで取材陣が大勢いたのよ」

「まさかマスコミ各社？」

「そうよ、かくいう私もあの現場にね」

「理沙姉も？」

「驚いたわよ、あんな場所に沙希と律子が現れるんだもの。それも薫叔母様と一緒にね」

「理沙！薫姉さんといいなさい」

「いいじゃない。ねえ、それよりも沙希と律子どうしてあそこに？」

「だって、あのソフト作ったの沙希だもの」

「えっ、あれ・・・沙希がつくったの？。ものすごく前評判がいいらしいわ」

「もう、のんきねえ理沙は。もっと下調べしてから取材しなさいよ」

薫が笑うのを

「薫！私急いで契約書を作ってくるから待ってて」
まゆみが慌てて飛び出していった。

「契約書って？」

理沙が聞くと

「沙希ちゃんだよ。うちの事務所に入れるの」

「えっ！」

驚く理沙と当の本人の沙希。

「でも、わたしが女優なんて・・・」

「あら、もうしたくない？・・・気持ちよかったんでしょ？」
頷いてしまう沙希。

「それに沙希ちゃんをうちの事務所に縛り付けておきたいの」

「あゝあ、薫叔母様らしい。気をつけなさいよ、沙希」

「気をつける?」

「そうよ、薫叔母様って女優だけに社会的な常識に疎いから」

「こら、理沙!人聞きが悪い・・・」

「わたし、今の仕事辞めたくありません」

沙希がいう。

「いいのよ、今の仕事をしていても。だけど時々私の仕事を手伝ってほしいの。」

「いいでしょ。それぐらいだったら」

「やりなよ、沙希。わたしが沙希のマネージャーやってあげるから」

「あつ、それいいねえ。じゃあさっそく」

と行ってバックから携帯電話をとりだした。

「あつ、まゆみ。ついでに律子の契約書も一緒にね。敏腕マネージャーって書いて」

薫は二人にウインクしてから電話を切った。

そこに理沙のバックの中の携帯が鳴った。

「はい、わたし・・・ええ?そんなの知らないわよ。」

今日は誰もいないからってついていただけよ・・・ええ?会社に行くって?」

「・・・どこにいったかわからない?・・・わかったわ。」

明日からそつちを追えばいいのね・・・はい、じゃあね」

電話を切ると理沙は沙希を見つめる。

「沙希、大変なことになっているわ。マスコミ各社が動き回っているぞつよ」

「マスコミ?」

「そう、沙希を探し回ってインタビューしようとしているの」

「理沙、会社について言ってたわね」

「そうそう、お兄さんかお義姉さんに電話しておいたほうがいいんじゃない?」

と持っていた携帯を差し出す。

「いい。私持っているから」

携帯電話を取り出し短縮ボタンを押した。

「あつ、お義姉さん?私、律子。ええ?、会社にマスコミが押しかけてるって?」

明日の13:00から記者会見をするの?でも……ええ、わかってる」

とそこに薫が

「律ちゃん、ちょっと替わって」

と行って律子から携帯を渡されると

「専務さんですか、私早乙女薫です。明日の記者会見ですが、私も出席します。」

ええ、そうお願いできます?……はい、律子さんに替わります」

「はい……はい……あつそれから、今日言えなかったけれど、私、今のマンションからママのお宅に引越すの。」

ええ、一時も沙希のそばから離れたくないから……はい、そばに」

「へへへ、ごちそうさまだって……ママ、すみません。お義姉さんが替わってくださいって」

と今度はママの真理に携帯を渡す。

「はい、早瀬真理と申します。……こちらこそ。……いえいえ、

私律ちゃんのこと他人とは思っていませんから……

あのう、私のお店でよかったですからこれからお立寄りくださいませんか
?.....

じゃあ、お待ちしております」

電話を切って律子に渡しながら、

「お義姉さん、来てくださるそうよ」

「さて、どうするの？薫叔母様」

「なるようになるわよ。でもこうなったら急がなくなっちゃ。姉さん、
漣を呼んでよ」

「漣って？どうする気なの？」

「沙希ちゃんとの約束を果たすの」

「わたしとの約束？」

沙希が薫をみる。

「そう、演技のあとの沙希ちゃんの言葉すっかり覚えているからね」

「あっ」

と顔を赤くしてうつむく。

「まさか、薫叔母様」

「そう、理沙の思っている通り。沙希ちゃんの身体の検査よ」

「沙希の検査？」

「そうよ、今度の本番までには間に合わせないとね。」

今のままじゃ、沙希ちゃんが可哀想よ。だからもう少し大きくした
いの」

「薫ちゃん、わかったわ。」

私もいづれ沙希ちゃんの身体の検査をするつもりだったの。
ちょうどいい機会ね。じゃあ電話するね」

「ねえ、ちょっと理沙。どういうことなのよ。」

今までの経過から薫さんがママの妹だったことわかったけれど・・・

「うちの家系のこと昨日ミチル叔母さんのところで話したでしょ。」

薫叔母様の早乙女というのは芸名だけど姓は長谷川といって、

ママの6女なの」

「だったら？」

「生みの親や兄弟のことは知らせないというんでしょ」

「ええ」

「里子に出すときのたった一つの条件。」

物心がついたときから親には会わせないけれど、兄弟には会わずというの。

つまり、兄弟力合わせて一族の宿命から抜け出すようにというのが昔からの我一族の掟なの」

「宿命から抜け出すって？」

「今までただ一人の男が生まれていないの。それともひとつの言い伝えがあるの。」

『男と女、二つの性をもつもの一族の呪いを解く』という伝説がね」

理沙と律子二人の視線が沙希に注がれる。

「沙希！私決心したわ。あなたには思い通りの人生を歩いてほしい。」

ソフトの開発でも、女優でもね。そして私は妻としてあなたを見つめそして守っていくわ」

「沙希、わたしもよ」

「理沙姉・・・律姉・・・」

沙希が二人の手を握った。

「わたしね、今日生まれて初めての演技の中、何故かとっても幸せだったの。
演技なんていえないかもしれないけれど、カーツと身体が熱くな
って……

フワフワとして何かとつてもいい気持ちだったなあ……。
初めは緊張してたけど、いつのまにか”あきあ”になっていた。
でも薫さんの雪夜又は最初震えるほど怖かったの。本当に冷気が襲
ってきて

寒くて寒くて……。でも、最後は薫さんが本当の母さんみたい
に思えて……。
涙が止まらなくなっちゃった」

「それはね、沙希ちゃんが生まれながらの女優だからよ」
ママと何やら奥で相談していた薫がいつのまにか戻ってきていて言
い切った。

「わたしが女優？」
沙希が聞く。

「そうよ……。生まれながらのって言ったけれど、
生まれ変わっての……。っていったほうがいいかもしれないわね。
生まれ変わって、沙希ちゃんの女優としての才能が開花したのよ。
そして……。私が女優としてのあなたの第一号のファンよ」

「凄いじゃない沙希ちゃん！」

入口のドアのほうから声がかかった。

「あつ、お義姉さん」

「専務」

律子と沙希がカウンターのスツールから立ち上がった。

「初めまして、律子の義理になりますけど姉の佐野静香と申します。

沙希ちゃんは律ちゃんのことをどう呼んでるの?」

「会社では律子さん、会社を離れれば律姉……です」

「じゃあ、私は律っちゃんの姉だから……静姉ね。これからはそう呼んでちょうだい」

「静姉……」

「いいわねえ、……あら、ごめんなさい。

私って一つ一つ気にかかったことを解決していく主義なので」

「いいんですのよ……さあ、お座りになって」

「薫さん、沙希ちゃんはどうでした?」

「もう痺れちゃう、最高!ってところね」

「台本を読んだ瞬間にこれは沙希ちゃんしかやれないって思ったものですから」

「静香さん……いえ、静ちゃん。あなたの眼はたいしたものねえ」

「静ちゃん、そう呼んでいただけるんですか」

「ええ、静ちゃんも今日から家族だからね」

とママがニツコリ笑っている。

「で、どうなの?沙希ちゃん。女優になる?」

「わたし、どちらも辞められません」

「わかったわ、会社の専務として沙希ちゃんに辞められたら困ります。」

だから、沙希ちゃんの考えを支持します」

「お義姉さん、私沙希のマナージャーすることにしたの」

「それ、いいわねえ」

その時、勢い良くドアが開いてまゆみが入ってきた。

「まいったわ、事務所にもマスコミの連中が張っていたのよ」
「見つかつちやったの？」

「そんなへまするもんですか。はい、これ」と沙希と律子の目の前に白い紙を置く。

「なんですか、これ」

「貴方達との契約書よ」

「契約書？」

「うちの事務所に所属する契約書」

「ちよつと待つてください。これは正式なものですね」と静香が口をはさむ。

「薫、こちらは？」

「律ちゃんのお義姉さんで会社の専務さんよ」

一応、公私の公の立場として話しをするので、お互いに名刺を交換する。

「もう一枚作っていただけないでしょうか」

「もう一枚？」

「沙希ちゃんの占有権は会社にありますが、女優をしているときは、レンタルしている形をとりたいのです。

だから、うちの会社と事務所の間でレンタルの契約をかわしたいのです」

「レンタル？」

「ええ、それと」

「それと？」

「今回のソフトからのこれから沙希ちゃんが開発するソフト全てのCMの放映権や広告、宣伝等のメディア向けの委託の契約です」

「ええ〜！うちの事務所で沙希ちゃんの開発するソフトのメディア向けの」

業務をまかせていただけれるんですか・・・
こりゃ大変だ、薫。事務所の狭さと人が足りないわ。
今から人を育てても間に合わないし、・・・ヘッドハンティングし
なくちゃ」

「フッフ、その一つだけ解決してあげましょうか」
という静香の言葉に薫とまゆみが顔を見合わせた。

「うちのビルの3階のワンフロアを倉庫として使っているけど
ワンフロアも倉庫として使うなんてもつたいなくて。
それより家賃収入があつたほうがいいでしょ」

「あのー、お家賃つていくらなんですか」
と心配しながらまゆみが聞く。これぐらいならという料金を静香が
いうと

「ええー、そんなんでいいんですか。それじゃ今の事務所の家賃と
変わりませんよ」

「まゆみ、今日来なかったからわからないでしょね。今の事務所の
数倍はあるわよ」

「そんなに?!」

「静ちゃん、いいの?無理していない?」
薫が聞く。ママも心配そうに見つめている。

「いいのよ。今のビルを手に入れたのだったって沙希ちゃんが
開発したビジネスソフト”ワープスロウ”の売上のおかげだし・・・
凄いのよ。」

あれ、今でも世界中で売れつづけているの。
それに、メディアに対するお仕事ってうちの会社苦手なの。
何せコンピュータ相手のお仕事でしょ。

それに、天下の天才女優早乙女薫と新人女優早瀬沙希が所属する
事務所が同じビルにあるなんてなんかワクワクするわ」

とのんきに笑っている。

「は〜い、みんな元気？」

やけに明るい声が聞こえた。

「姉さん、あいつのあの明るさ何とかなんないの？」

薫がママに言っている。

「いいじゃないの。お医者さまが暗かったら患者さんが可哀想じゃないの」

理沙が沙希と静香と律子に小声で話した。

「今入ってきたのが7女の澁叔母様よ。」

ママの真理が長女でしょ。沙希はもう会ったわねえ、レストランの操叔母様が次女なの。

えーっと、三女四女五女とはして、六女が薫叔母様、で七女が今入ってきた澁叔母様よ。

そして昨日あったミチル叔母様が8女ってわけ

「ねえ、ミチル叔母様って？」

「昨日、静姉に紹介された美容室の先生よ」

「えっ？・・・あの人か？・・・」

「ねえ、ちよっと。三女四女五女は飛ばしてってどういことなのよ」

律子が詰め寄ると

「いいじゃない、今後のお楽しみ！・・・ただ、それぞれの叔母様って

個性が強くて可愛くていろんな業界で一流の仕事をしているのよ」

「さて、薫姉さん。沙希って子はどの子？ 死んじゃった沙希と同

じ名前だけど……」

「そこにいるでしょ、見りゃわかるわよ」

薫が答えた。

「ありやりや、沙希ちゃんだ。あんた生きてたの」

「医者が何馬鹿いつてるんだろう」

薫は呆れ顔だ

「あつ、そうか。そんなわけないよね。じゃあ、あんたが今度の沙希ちゃんってわけか」

「今度の沙希ちゃんだって」

うふふと律子と理沙が顔を合わせて笑っている。

すると

「あつ、小谷澪先輩！」

と静香が立ち上がった。

「あれっ、静香！なんであんたこんなところにいるのさ？」

「静ちゃん、澪を知っているの？」

「はい、同じ大学の先輩なんです。それに澪先輩は命の恩人なんです」

「命の恩人？」

澪が首をかしげる。

「先輩、あつたじゃないですか。私、女子寮でお腹がいたくてウンウン唸っているとき、

当時医学部の学生だった先輩が運良く通りかかって診断してくれたの覚えてません？」

「そういうこともあつたっけ」

「電話しても凄い台風で救急車が出動できないって。」

わたし先輩の車で病院に連れて行ってもらってようやく助かったの

よ。

あとで聞いたら、酷い腹膜炎であと数時間遅かったら危なかった
て」

「そうそう、あの日の暴風雨は凄かったっけ」

なんか噛合わない会話だったが湊の暖かさが伝わってきた。

（いい人だなあ・・・このお店に集まってくる人ってなんていい人
ばかりなんだろう）

「沙希ちゃん、湊にまかせていいわね」

「はい、湊叔母様なら・・・。お願いします」

素直に頭が下げられる。

「そこで静ちゃん。あのボックス席で姉さんと沙希ちゃんのことを
この湊に教えてあげてくれる？」

「あら、ここで話せばいいじゃない」
とママ。

「記者会見が明日の昼一でしょ。」

沙希ちゃん達と打ち合わせしとかなくちゃあ・・・時間がないのよ。

それに私、湊と話しているとイライラしてきちゃっ」

「はいはい、それじゃ真理姉さんと静香。私達向こうで楽しくおし
やべりしましょ」

と湊がボックス席に移動する。

「いいんですか？」

心配そうに沙希が薫に言ったが

「いいわよ、こんなことにこたえるような湊じゃないの」

「それもそうね」

と理沙。

「あつと、沙希ちゃん。私のこと理沙みたいに”薫叔母様”なんていつたら承知しないからね。薫姉・・・でいいわ」
「薫姉・・・何かいいにくいわ。薫姉さんじゃ駄目ですか」
「うーん、しかたない。それで我慢するわ。」
公式のときは、薫さん、早乙女さん・・・どちらでもいいわ
「わかってます」
ニッコリ笑う沙希。

「あつ、それから沙希ちゃんは名前はどつするの？
本名の早瀬沙希でいく？それとも芸名をつける？」

「わたしもそれを聞きたかつたの」
まゆみも口を添えて言つた。

「名は”あきあ”ではだめですか？」

「あつ、それは沙希ちゃんが監督に言つていた少女の名ね」
沙希が頷いた。

「あきあかあ・・・あきあ・・・ねえ・・・上の姓は？」

「日野・・・日本の日に野原の野と書いて”日野”なんです」

「日野あきあ・・・かあ。なんか神秘的ねえ。いいんじゃない。まゆみはどう思つ？」

「私も戻つてくる途中、いろんな名前を考えてきたんだけど・・・
うーん・・・日野あきあ・・・私の考えた名前どれも失格。」

これでいきましよう。さつそく明日商標登録してくるね」

「商標登録？」

「芸能人の名前つてねえ、勝手に使われることが多いの。沙希ちゃん是有名になる。」

うーん、もうすでに有名になつてゐるわ。

謎の美少女つてことだね。テレビもラジオも雑誌も多くの記者達やレポーターを繰り出して血眼で沙希ちゃんを探し回つてゐる。

だから”日野あきあ”って名前が勝手に使われないように法律で縛りをかけておくのよ”

「縛りかあ・・・呪しゅをかけておくのね」

「シユをかけるって？」

「呪しゅいをかけると書いて”呪しゅをかける”っていの。

呪まじないとは縛り付けるといふ意味なのよ。

わたし、この『妖・平安京』というゲームソフトをつくるとき勉強しまつったわ。

平安時代のこと・・・そして陰陽師のことも。陰陽にあるの。

”呪まじなをかける”ってね。呪の一番身近なのが名前なの”

「陰陽師かあ・・・神秘的よねえ。・・・何かはまってしまいそう”

理沙がいう。

「じゃあ、明日の会見の打ち合わせをしよう。ねえ、理沙。

今日の沙希ちゃんの印象は記者として見ててどうだった？」

「最初はね・・・印象はなし」

薫は首を傾げて

「印象なし？」

「だって沙希がいるなんて思わなかったもの」

「それから？」

薫が話を促す。

「薫叔母様が小野監督の前に沙希を引っ張りだしたとき、

あつ沙希がいるって初めてわかったもの。周りの記者達は沢口靖子だつていつてたけれどね」

「嘘おつしゃい、律ちゃんの姿も見たからでしょ」

「へへへ、ばれたあ？」

「それからは」

と理沙が話を続ける。

「この子、ますます輝くばかり・・・だって、薫叔母様はやってあたりまえ。

でも沙希は、何よ！・・・こんな・・・こんなことができるの・・・
・？って

途中から本当に一つ一つの動きに眼が離せなくなったわ。

私だけじゃなかったの。時々周りに目を向けると

百戦錬磨の芸能記者達も夢中になって二人の演技を見ていたわ。

もう少し周りを観察しようとしても、どうしても我慢が出来なくな
って沙希に目がいつてしまうの。

あゝあ、私もあんな顔をして沙希を見ていたのかなあ・・・」

「あんな顔って？」

律子が聞くと

「こんなの・・・」

といつて眼を寄せてポカンとした顔をする。

「きゃ・・・ははは・・・」

と沙希、律子が笑っていたが

「律ちゃん、あんたもよ・・・同じ顔してたわよ」
とまゆみがばらす。

「えっ、いやだあ・・・」

律子が叫び声をあげた。

「私、つくづく沙希ちゃんが怖いって思うの」

薫がそう言い出した。

「私が怖いんですか！」

沙希が悲しそうな声をあげる。

「違うわ。そういう意味でないのよ。沙希ちゃんそんな顔しないで」

薫が後ろから沙希を抱きしめる。

沙希の頭を撫でながら

「みんな沙希ちゃん的身體を匂ってみて……」

沙希の身体に律子や理沙、まゆみまでも鼻を近づけクンクン匂う。

「やだあ……」

沙希が悲鳴をあげる。

「沙希ちゃん、ごめん。少し我慢してね」

薫の声におとなしくなる沙希。

「わかる？」

みんなが何のことかわからないようだ。

ただ一人まゆみが

「あつ、ラベンダーの香り……」

「えっ」

と理沙と律子が再び匂いだした。

「本当……」

やがて顔をあげた二人が言った言葉だ。

「でもこの香りって……」

とまゆみがいいかけると

「ラベンダーの香りの体臭ってこのお店の中に一人もいないわ。」

勿論香水なんて論外……でしょ。みんな……」

「だったら……」

「いいえ。午前中の車の中での沙希ちゃん的身體は無臭だったわ」

「じゃあ、この沙希ちゃんの匂いは？」

「このラベンダーの香りはね、私が乙女だったころの匂いな」

「じゃあ・・・」

「ええ、この子あの演技の中でわたしのこの細胞の中から微かに残っていた遠い過去の私の体臭を嗅ぎ取って自分の体臭にした・・・ってのは解答になるかなあ？」

「わたしが問題の提出者なら0点しかあげられないわね、薫姉さん」
振り向くといつのまにかボックス席から抜け出した漣たち3人が皆の後ろに立っていた。

「そんなこと人間に出来るわけないでしょ。常識からいって」

「そうよね、でも説明がつかないのよ」

「どれどれ・・・」

と漣が沙希の身体を匂う。

「本当だ、これ高校1年生の夏休みまでの薫姉さんの匂いだ」

「こら、漣。余計なことをいうな」

「へええ・・・薫叔母様って高校1年の1学期に処女を捨てたんだ」

「ねえねえ、相手はどんな人？」

理沙と律子それに沙希までもが興味深々と薫をみつめている。

「もう、漣がいらぬことをいうから、この子達・・・」

「いいから、いいから・・・でも、この子の身体って不思議だね。聞いたら女になってそんなに時間が経っていないそうじゃない？

きめが細かくて、スベスベしてて透明感があつて・・・

まるで吸い付くような肌触り。うん、抱きしめちゃいたい。

ねえ、沙希ちゃん。無理にでも個室あけちゃうから

明日といわずに今日から検査入院しない？そして、この漣さんといいことしようよ。ねえ、いいでしょ・・・」

「ボカッ」

ていうのが薫が漉の頭を叩いた音。

「フーフー」

というのが、余程叩いた手が痛かったのか、薫が息を吹きかけて冷やしている音。

「あ〜ん、真理姉さん。薫がぶつたあ〜ん」

「誰が薫じゃい。うえ〜んって泣きまねして、

姉さんに助けを求めてるなんて姑息な手段をつかいおって」

薫の言葉遣いがめちゃくちゃだ。

「まあまあ、薫も漉もいい年をしてまるで子供の喧嘩みたい。

いつも、この二人会ったらこの調子なの。・・・我慢してね。オホ

ホ」

とみんなにつくり笑いをしている。どうやら喧嘩の仲裁をする気はないらしい。

一方、まゆみと理沙の

「今に面白いことはじまるから・・・」

という言葉に静香、律子、沙希の三人は薫と漉の予想以上の喧嘩の面白さに、

大声を出して笑うのものはばかられ、お腹を押さえながら笑っている。

「ヒー・・・ヒー・・・」

って笑っているから苦しい。

「あら、あなた達なに笑ってるのよ」

という薫の声もなぜか可笑しい。

医者である漉が三人の状態に慌てて

「あなたたち、そのままじゃ内臓を痛めちゃうよ。」

もう、いいから我慢しないで大きな声で笑っちゃいなさい」

その声でいつせいに

「あははは……」

「うほほほ……」

と笑いだした。

しばらくしてようやく収まった笑いの時間。

お腹をさすりながら静香が

「いい家族よねえ……」

つてぽつんと言った。

「そうよ、ここにいるのは私の妹達と娘達よ」

ママの言葉にみんな”笑い”泣き”の連続となった。

「ねえ、澪。本当のところどうなの？沙希ちゃんのラベンダーの香りのこと」

「判らないの。そんなことありえないと否定してしまえばいいんだけど、

確かにこのラベンダーの香りは薫姉さんの若かりしときの体臭だわ。

演技の中で若い時の母の香りを再現するなんて……そんなことできるのは」

「そんなことできるのは？……」

「演技の大天才か……宇宙人ね」

「ふーん、演技の大天才ねえ……沙希ちゃん、どうしてラベンダーなの？」

今の私の体臭にはもうラベンダーなんて含まれていないんだけど」

「わたし……あのときは夢中でよく覚えていません。でも、

雪夜叉……いえ薫さん」

「薫姉さんでしょ」

「あつ、ごめんなさい。薫姉さん……の身体からラベンダーの香りがしてきて、懐かしい……と思った瞬間に柔らかい乳首を口に含んでいる感触と

甘く美味しいミルクの味とラベンダーのほのかな香りがしたんです。

あつ、母様と思った時……雪夜叉の恐ろしい顔が

いつも優しく私をあやしてくれていた母様の笑顔と重なってしまった……」

みんな呆然と聞いていた。

「フツ」

薫が自嘲的に笑った。

「まいったわね、沙希ちゃんには。

天才早乙女薫といわれた私なんか、ととても足元にも及ばないわ。

この子にはね、世界中の俳優達が手に入れたいと願ってやまない

”演技の神様”がすでに宿っているのよ。

まゆみ……あなたならきつと気づいていたよね。

後半の私の演技ガタガタにくずれてしまったのを」

「あんな薫を見たの初めてだから私も驚いたわよ。訳を聞こうかどうか。

でも、最後は立ち直ってたじゃない」

とまゆみが言う。

「訳はね、今沙希ちゃんが言った場面なのよ。急にこの子の身体から

ラベンダーの香りがしてきて……あつ、私の香りだと思った瞬間に

私がかぶっていた仮面が剥がされてしまったの」

「仮面が剥がされるって？」
澗が聞く。

「雪夜叉という演技の仮面を剥がされしまつて素の早乙女薫に戻ってしまったの。」

あんな恐ろしい目にあつたのは生まれてはじめてよ。

それからもうパニック！台詞が出てこない、動かないの棒立ち状態よ。

そんな時、沙希ちゃんが必死に語りかけていたのに気が付いたの。

（いや！いや！ここで止めるのはいや！続けましょ！・・・続けましょ！）

つて、確かに頭の中で聞こえたの。それから、フッと沙希ちゃんの手が

私の顔を触れたとき、私は雪夜叉に戻っていたわ。

・・・あのスタジオで何人の人が気が付いていたかしらね」

「えっ？」

「最後の最後、天才女優といわれたこの早乙女薫が初めて演技するこの子に

引きづりあげられて演技していたのを・・・小野監督は知っていたわね。

・・・憎い、憎い・・・何度思ったか知れないわ。

でも、駄目だった。沙希ちゃんの可愛い笑顔、その一つ一つの動作が頭から離れない・・・

頭から消えないの。いつそ憎めたら・・・

そう思つても・・・愛しちゃつたの・・・どうしようもなく愛しちゃつたのよ」

薫は沙希の後ろから抱きついた。

「薫姉さん・・・」

沙希は薫の告白に凄く驚いたけど、その溢れる熱い想いに胸がいっぱいになった。

「ふふふ、直情的な姉貴らしいや」

立ち上がった薫は

「久しぶりね、澁から姉貴なんて呼ばれるの」

「でも、想いは皆同じだよ」

理沙がいう。

「律子もそうだよ。ママだって。みんな沙希に対する想いは変わらないと思うよ」

みんな頷いている中

「あゝあ、私一人仲間はずれかあ。・・・でも私には大事な旦那さまいるもんね」

という静香の言葉が何故か可笑しい。

この後、静香だけが名残惜しさか悔しさか涙を含んだ笑顔で幾度も振り返りながら、

ビルの前で手を振る新しい家族に軽く礼をして帰っていった。

残ったみんなもお店の後片付けを手伝い、

それぞれの車に分乗してママの家に向かった。沙希はといえば薫が放さない。

みんなも律子までもが薫の心のおもってか

まゆみの運転する車の後部座席に二人つきりにしてあげた。

ママの家では留守番をしていた杏奈とともにたった二人きりの肉の宴を、

耳を塞ぎながら抱き合う女達・・・夜が更けていった。

今日は沙希を真中に律子と杏奈が腕を組んで歩いて行く。
沙希が昨日と違うのはその身体から匂うラベンダーの香り・・・
勿論、香水ではなく沙希の女の体臭である。

「沙希、その香り昨日より強くなったみたいだよ」

「えっ、本当？」

と沙希が腕をあげて自分の匂いを嗅ぐ。

「あっ、本当だ。・・・でもどうしてかしら？杏奈ちゃんはどう思う？」

「私もわかりません。でも完全に沙希さんの香りになったようです
ねえ」

と首を傾げながらも沙希に腕をからませて歩く。

そんな様子を横目で見ながら律子は朝の出来事を思い出していた。

「送っていくわよ」

やけに晴々しい薫の声に思わず

「駄目です。薫姉さんは夕べ沙希を独占していたくせに

唯一私が今、沙希を独占できる時間を奪うつもりですか」

律子の強い口調に薫は一步引いて

「ごめん」

とあやまる。周囲のみんなの目が（そうだ、そうだ）と応援していた。

その前にまゆみに

「薫は調子に乗るほうだから、一発ガツンとやってやらなければ
と言われていた。

まゆみも杏奈も沙希と抱き合うことを楽しみにしていたのが
薫の告白以来、遠慮してしまった愚かさ悟っていた。

律子はこうした通勤時間が明日からはもう訪れないことが判っていた。

だから、この幸せな時間の一分一秒を大切にしたかったのだ。

ホームに電車が入ってきた。電車に乗り込むいつものメンバーがいた。

「あれ？女性ばかりじゃない？」

良く見ると男性の姿は一人もなかった。

「ふふふ、男の人遠慮しちゃったみたいですよ。二三人乗ろうとした男の人も

女性ばかりなので、びつくりして隣の車両へ行っちゃたし……

「

「ねえ、それよりこれ沙希さんのことじゃありません？」

とスポーツ新聞の一面をみせる。

そこにはデカデカと

『天才女優早乙女薫と堂々と共演する沢口靖子に瓜二つの謎の美少女！』

サブタイトルとして

『美少女はプロモーションビデオのゲームを開発製作した天才ソフト開発者か？』

と書かれてあった。

初めてこういう場面に立ち会う杏奈は声も出ない。聞いていた話以上の沙希のファンの熱気だ。

「あっちゃあ、沙希。もう後戻りできないよ。こんなに派手に書かれちゃあ」

律子の声に沙希は頷くと一歩前に出て

「みなさん、ごめんなさい。昨日いろいろあって環境が変わってしまいました。

だから明日からこの電車に乗れません。本当にごめんなさい」といって頭を下げた。

シーンとした電車内だったがいきなり

『パチパチ・・・パチパチ』

と大きな拍手が鳴った。

頭を上げると、いつものメンバーも律子や杏奈までが拍手している。

みんな泣き笑いだ。

「沙希さん、あやまることなんてないです。

沙希さんのおかげでこの車両女性専用になったし・・・

そっだこの車両を女性専用車両としてこのまま続けていこうよ。ねえ、みんな」

「他の時間帯もね・・・」

「沙希さん、有名になっても私達のこと忘れちゃ駄目ですよ」

「私達が沙希さんの最初のファンだものね」

「あれっ？、沙希さんの香り昨日と違うわ。とってもいい香り」

「あっ、ラベンダーの香りだ。どこのメーカーの香水なんですか？」

困った顔の沙希に律子が助け舟をだす。

「ごめん、この香り香水じゃあないのよ」

と昨日のエピソードを少しだけ話してあげた。

「えっ、じゃあこの香りって沙希さんの体臭なんですか？」

「凄い！早乙女薰って若いときはこの香りだったんだ」

と思いつき香りを吸い込むと

「駄目！他の人の香水の香りも吸い込んだじゃった」

と笑いを誘っていた。

「でも、そんなこと出来るんですか？」

半信半疑で聞いてくる女性もいる。

「できないでしょうね。お医者さんに聞いても出来るわけないって
いったもの」

みんな興味津々と聞いている。

「だから、もし出来るとしたら沙希だけかもしれない」

不思議と納得できる言葉だった。

「わたし、そのプロモーションビデオ早く見たい。

ついこの間、京都の清明神社へ行ってきたのよ。陰陽師に興味があ
ってね」

みんな好きなことを言いだしている。

沙希は一人一人の会話に耳を傾けて頷いたりニコニコ笑っている。

「あのおう、聞いてもいいですか？」

とセーラー服の女子高生が前に出てきて質問してきた。

「私、今日用事で学校にいくのが遅れてしまって

偶然にこの車両に乗り合わせたんです。

さっきの駅で沢口靖子さんが乗ってきたのに吃驚して

『えっ、どうして？何かのロケ？』ってカメラをさがしてもないし、

皆さんの話を聞いていて別人なんだあと納得したんです。

その時、後ろのおばさんが沙希さんのこと男だと言ってたんです」

少女の潔癖さであっさりとした質問にかえたが

二人のおばさんの会話は聞くに耐えないものだった。

「ホラ、あれが噂のおかまだよ」

「ほう、なかなか別嬪じゃあないか」

「ふん！アバズレだよ。どうせ、ホテルで男とよろしくやっつての帰
りさあな」

「何の商売だろうね」

「ニューハーフヘルスか男娼だろうよ・・・フェフェフェ」

「本当よ」

沙希が顔色を変えずに答えた。

周囲の乗客も知っていることなので黙って聞いていた。

「あのう、ニューハーフなんですか？」

沙希は少女の質問に真摯に答えた。

「ちよつと違うと思うわ。」

全部とは言わないけれどニューハーフの人は小さいときから男の人が好きになって

女になる人が多いでしょ。・・・そう、あなたは男尊女卑って言葉知ってる？」

少女が頷くと

「私はね、その男尊女卑の思想が強烈な土地で生まれたの。ううん、あんなの思想とはいわない。狂気だと今でも思ってるわ。・・・男とは力と教育されるの。力と喧嘩が強いものが上にあがれる。」

ひ弱に生まれた私は徹底的に苛められたわ、家でも学校でも・・・少女の眼が真剣に沙希を見詰めている。

「私は争い事が嫌いだった。それでも理不尽なことには徹底的に反抗したの。」

そんな私に男達は言ったわ。優しさ＝女だと」

「そんなあ」

と聞いている女性達が不満をもらす。

「そうよねえ。・・・そして私は子供心に疲れてしまっていたの。安らぎの時間なんて一つもなかったから・・・」

とスーと顔をあげ首を指し示すと

「まだ薄っすらと残っているでしょ。この傷！包丁で刺したあとなの」
みんな息を呑んで聞いている。

「子供の行為とはいえ馬鹿なことをしたわよね。

神様もそんな私に罰を与えたの。判る？・・・この声よ。

男時代は苦痛以外何者でもなかった。だって、いじめの標的だもの。

でも、こうして女に戻った・・・本当の私は生まれたときから女だと今では確信してるわ。

この声、神様から与えられたものだと感謝してるのよ」

沙希は少女を見ながら

「判るでしょ。私にとって男は嫌悪すべき生き物なの。

触られるのもいや！虫唾が走るの。だから、私が愛するのは女性だけなの」

「身体をかえられるんですか？」

沙希は首を縦に振る。

「一つでも自分の男の部分が消してしまいたいから・・・でも最終的に全て変えるのは神様次第よ。だってそうでしょ。

神様が目的を持って男の身体を私に与えたのだから・・・」

少女にとって沙希の最後の言葉の意味が判ったかどうか・・・でも、すぐに手を前に差し出した。

えっと思うと

「握手してください。どうしても・・・」

沙希が少女の手を握ると

「素敵でした、今のお話。何かうまく言えないけれど・・・何か清

々しい思いがします。

私、本当は学校でいろいろあつて嫌々ながら登校する途中だったんです。

でも、今は素直に友達に謝れます。学校では聞けないお話を聞けて何か得をした感じですよ。

・・・ちよつと遅刻もいいかな・・・なんて思っています」

みんな涙を拭きながら笑っている。

「まあ、この子は。駄目よ、今度から遅刻しちゃうあ」

赤くなつた眼で律子がさういうと、まだ沙希の手を握つたままのこの女子高生

「なんか、くせになつてしまいそうよ」

と笑いながら手を離れた。

「一ついいこと教えてあげる。ビジネスソフトのワープロスロウって知ってる？」

「知っています。あのソフトめちゃうくちゃ有名じゃあないですか。

えっ？あのソフト沙希さんが作ったんですか・・・」

「そうよ」

「うわっ、凄い！あのソフトいま世界中で販売されてめちゃくちゃ売れているじゃないですか」

と飛び上がって手を叩いている。

電車が駅に着くと

例の如く撮影会が始まった。今日はほとんどの人がカメラを持っていたので

その時間がかかること・・・おまけにサイン会も始まってしまい時間がどんどん過ぎていった。

たまりかねて律子が

「みんな、遅刻するわよ」

と叫んでも

「今日はいいの」

と平気で列に並んでいるので

杏奈は事故が起こらないよう飛び回って注意を怠らない。

他の乗客に注意されたのか駅員が飛んできたが、列の中に駅長の姿を発見すると

「駅長どうしたんですか、これ何の騒ぎですか」と駅長に近づいて聞いた。

無口な駅長が指し示すところには懸命にサインペンを走らす沙希の姿があった。

「あつ、沢口靖子!」

といった駅員に駅長は首を横に振ってから前に並ぶOLのもつスポーツ新聞を指差す。

「あの第一面の……でも、ホームの上でこんな騒ぎでは……」

と駅員が注意しに行こうとしたが、駅長が押しとどめて始めて口を聞いた。

「あの三人を良く見ていたまえ。」

決して並んでいる人を危険なことに巻き込まれないよう常に注意をしている。

飛び回っているセーラー服の女の子とはどういう間柄なのか知らないが……」

するとその女の子が駅長のところにきて頭を下て言った。

「すみません、駅長さん。もう少しだけでもう少しだけ時間をください。」

沙希さん、必死でサインしています。ファンの人と最後の挨拶をしているんです」

「最後の挨拶？」

「ええ、沙希さん。今日で電車に乗れなくなります。午後に記者会見をするそうです。」

そうしたら明日からは電車に乗ったら絶対今日以上の騒ぎになって危ないし、

駅員さんに迷惑をかけます。

お願いです。今日だけ、後数分だけ我慢して待ってください」

黙って眼を瞑って少女の話を聞いていた駅長が

「たいしたもんだ。・・・今の言葉は君が考えたのかね」
優しい眼で聞いた。

「いいえ、これは沙希さんが口移しで教えてくれました。」

私馬鹿だから、口移しだと沙希さんに言われたとき

こんな大勢の中でキスするのかな、と恥ずかしいこと考えたんです。

でも、口移しって言葉の伝言のことなんですね。・・・

沙希さん必死でサインしながら私に伝言されたんです」

少女がぺこつと頭を下げて戻ろうとしたとき

「ちょっと聞きたいけれどいいかね」

と呼び止めた。

少女は立ち止まってから振り向き、何だろつという眼を向けた。

「きみは、あの女性と知り合いかね」

少女は何だという顔をして明快に答えた。

「いいえ、今日初めて会いました」

「それでは」

という駅長の言葉に

「私、最近学校へいくのがすごく嫌だったんです。」

親友と喧嘩して顔を見るのも嫌になって……今日もわざと遅れて電車に乗りました。

しばらくして違う駅で沙希さんが乗ってきました。するとみんなが沙希さんに拍手しているんです。

そして、この車両を女性専用にしようっていつてるんです。その理由は私自身よく知っています。

この線って凄く痴漢が多いんです。だからの女性専用車両なんです。

そんな時私の後ろの叔母さん二人が沙希さんに対して嫌なことっていったんです。

だから私、思い切って沙希さんに質問しました」

少女は顔を紅潮させながら喋る。

駅長も駅員も自分達の仕事に関する事が出てきたので黙ってきいていた。

「質問の内容は聞かないでください。二度と口にしないと自分に誓いましたから。」

話してみてすごい人だと思いました。あこがれます。

今日から大・大・大ファンです。そして女性としての目標です」

少女が頭を下げて戻ろうとしたとき

「きみ、あの女性に言ってください。駅の安全は駅員が守るから安心してファンの人にサインしてあげなさいってね」

そういうと横の部下に

「豊島君、君は今の言葉を聞いて何も行動しないのかね」

ハツとした豊島駅員は走り去って、やがて大勢の仲間を引き連れて戻ってきた。

そしてテキパキと指示をして若い女性のサイン会を見守り続けた。

結局会社にたどりついたのは、始業時間から1時間も後だった。会社についてもマスコミ各社に囲まれて玄関にたどりつくのが30分もかかるしまった。

三人はゼイゼイいながらドアを開けた。

「おはよう、大変だったわねえ」

と専務が迎えた。

「おはようございます。いえ、申し訳ありません」と遅刻をあやまった。

「ふふふ、何を言ってるの。あれを見なさい」と専務の指差すほうを見ると、昨日までなかったテレビが置いてあり

部のみんなが円座になってニヤニヤ笑いながらこちらを見ていた。

テレビはというと、ヘリコプターから撮った映像に

駅のプラットホームで一列に並んだ大勢の人とその先には……

段々ズームアップしてくる。あっ沙希だ、

人をさばいている律子がいる。杏奈がいる。

そして、飛び回っているあのセーラー服の少女がいた。

「ゲッ、私が写ってる」

律子が大声をあげた。

「あっ。本当だ！」

「どうして？」

「どうしてって、今日記者会見をするだろう？マスコミが張ってても不思議はないよ」

とテレビの一番前でドンと座っている社長が言った。

「あっ、誰か私達の出勤時間と出勤ルートをマスコミにチクツたな」

律子が社員達を睨みつけた。

「チクツたとは人間きが悪い、なあみんな。

わが社あげて時間とルートをマスコミにFAXで送ったのさ。

こう書いてね。『沢口靖子似の美少女はこの時間にこのルートを来ますが』

この二人に100mより近づいたマスコミは今日の記者会見には出席できません』ってね」

「だって、会社の前では・・・」

「文章にはこう続けてあったよ『但し、会社の前は別です』ってね」

「どうして?」

専務が苦笑いを浮かべている。

「だってさ、こんなの肉眼で見たいじゃないか」

二人はドンと椅子に腰を落とした。

疲れが身体を覆っていく。

「ねえ、律子さん。私、手が痛い!」

律子は沙希の手を揉みながら

「専務、他の女性達は?」

専務が答えようとするのを、社長がさえぎった。

「あつ、これこれ」

とテレビを指差す。そこには『本名 早瀬沙希、芸名 日野あきあ』

とさつき書いたばかりのサイン色紙と

『妖・平安京』のゲームソフトが写っている。

「この画像がテレビに出て以来、うちの電話回線がパンク状態だよ。

回線が違わずの社長室の電話も鳴りっぱなしで

とうとうあとは女性にまかせて避難してきたのさ。
おかげで朝からテレビにかじりつきとおし。みんなも仕事にならな
いからテレビ観戦だよ」

沙希がパソコンを立ち上げようとする

「おっと、そのパソコンのLANケーブルは抜いておいたよ。

さっき電話のことだけいったけどインターネットも

メールが次から次へと受信してくるんで4階のパソコン20台も女
性達がつきつきりなんだ」

「私、様子見てくる」

「あつ！ちよつと待って！・・・あなたが千堂杏奈さんね」

「はい」

「あなたには美容室であつていたわね」

「私もお手伝いしたことがあります」

「さつき真理ママとミチルさんから電話をもらったのよ。

あなたが沙希ちゃんの専属のファッションコーディネーターになっ
たからよろしくって」

「はい！私の希望なんです」

「ふ〜ん・・・真剣なのね・・・わかったわ」

「といってからぐつとくだけた口調で

「杏奈ちゃんのこと応援するわ」

「といって小さなケースを2つ渡す。

「律ちゃんもこれ・・・」

と同じものだ。見てみるとそれは名刺だった。

『早乙女薫事務所・ファッションコーディネーター 千堂杏奈』
と書かれてある。

「あのう・・・これって・・・」

「急いで作らせたらしいわ。杏奈ちゃん、あなた持ち出しで沙希ちゃんにっこうとしたでしょ。

でも沙希ちゃんは杏奈ちゃんが思っている以上に大きくなっていくわ。

だから早乙女薫事務所の一員として沙希ちゃんにつく必要があるの。わかった？」

「はい・・・実を言つととても嬉しいです」

「うふふふ・・・あなたの持つその大きな箱はメイクボックスね」

「はい」

「じゃあ、今日の記者会見さっそく役立つわね、よろしくね」

「あつ、それから早乙女事務所とのレンタルの契約と

この事務所3階の賃貸契約、それにメディア業務に関する契約も、もう済ませたからね」

「もう事務所の社長、来られたんですか？」

「ああ、契約が済んでから、社内が大騒ぎになるのを見て

事務所の女性社員と知り合いのプロダクションの女性達を10人連れてきてくれたよ。

『猫の手よりもましでしょうから』っていつてから慌ててかえったけど

記者会見用になにやら取りに撮影所に寄ってから早乙女薫を連れてくるって・・・

あの社長も忙しい人だねえ」

社長の最後の言葉を背に二人は部屋を出て行った。

第一部 第六話

「おはよう!」

静かにドアを開け三人が顔を覗かせ小さな声で挨拶すると手が空いていたらしい女性達が小走りに寄ってきた。

「どんな様子?」

女性達も部屋の中を振り返りながら、これまた小さな声で

「今やっとピークが過ぎたところよ。でも、記者会見が終わったら今より凄いでしょね」

「ごめんなさいね、こんなことになって」

「何言ってるの、沙希ちゃん。私今から、もうワクワクしちゃってこの会社の社員でよかったと思ってるわ」

「沙希ちゃん会社辞めるわけではないんですよ。」

それに3階が早乙女黨の事務所になるって本当なの?」

「ええ、もう契約を済ませたと社長が言ってたわ」

女性達は小さな声ながら躍り上がってよろこんでいる。

沙希がフト気づくと手が空いた見知らぬ女性達はこちらを見ている。

「あの人達は?」

「早乙女事務所の人達と知りあいの子たちよ。よくやってくれてるわ」

「あと何人かは上の階に行ってるのよ」

「あんだ達、いらっしやい」

初めての顔ばかりがやってきた。

その中の一番年高の女性が、

「貴女が早瀬沙希さんですか、私、早乙女薫事務所の営業担当の山瀬順子です。」

これから沙希さんの担当になります。よろしくお願いします」

「みんなは知らないけれど、うちの会社の女性達は皆、沙希ちゃんの味方なのよ。」

だから公認で沙希ちゃんにキスできるの」

「私、彼がいるけど沙希ちゃんとのキスだけは別よ。」

沙希ちゃんのキスのあとは元気も出るしし、勇気もでてくるのよ」

「ねえ、沙希ちゃん。お願い今日一日のやる気をちょうだい」

「いいわよ」

女子社員が沙希を抱きしめ濃厚なキスを展開する。

女子社員達は我先に並ぶが初めてこの光景を見た女性は

少し引いていたが段々と沙希を見つめる眼が潤んできて一人また一人と並びだした。

二人目、三人目とキスが終わった女性が近くの椅子に腰砕けのようにして腰を下ろす。

回復した一人目の女子社員が律子に言った。

「ねえ、律子さん。今日の沙希ちゃんどうしちゃったの？」

何か私、すごいパワーをもらった気がする。

それに、そのラベンダーの香り香水じゃないわよね。

自然な香りだもの。昨日までは無臭だったのに・・・わからないわ」

「あつ、私もなんだか無性に力が湧いてきたわ」

「その香りは早乙女薫の若いときの香りよ」

「えっ？うちの薫の？」

「ええ、このことはまゆみ社長も知ってるわ。」

この沙希はね、昨日のリハーサル中に『母を思い出し、子供を思い出す』

というシーンで同じ香りというキーワードだったの。

そのシーンで早乙女薫の昔の香りを再現してしまったのよ」

「そんなこと出来るはずないわ」

「私もそう思うわよ。でもそう考えないと理屈に合わないの。

何秒か前まで体臭が無臭の人がいきなりラベンダーの香りが身体から匂いだすと思う?」

「そんなことありえないわ」

「薫さんいわく、本当にその時に匂ってきたらしいわ。そしてこうも言っていたの。

沙希ちゃんの身体には”演技の神様”が宿ってるって」

「薫がそんなこと言ったんですか。あつ、駄目！次は私の番なのよ」

と沙希を抱きしめ激しいキスをする。

やがて、その山瀬順子もフラフラと椅子に倒れこんだ。

だが、しばらくすると

「ん?.....」

と顔をあげた。

「あれ?本当だ。さっきまでの疲れがなくなってるわ。

昨日いろいろと書類を作成するのに徹夜したけど

眠気もなくなってるし。なんか充分な睡眠のあとみたい」

「不思議だけど私、薫の香りの再現の話信じるわ。だってこんな不思議な力をもっているんだもの」

「順子さん、よろしくね。皆さんもよろしく願います。」

私、女優というお仕事、今やってるお仕事と同じくらい好きです。だから、一生懸命がんばりますのでいつまでも見守っていてください」

そんな挨拶をする沙希を順子は一度に惚れ込んでしまった。

口先では何でもいえるが、この沙希という子の挨拶には実があった。

せちがない芸能界、鬼畜みたいな連中が多い中、

こんな清々しい女の子には生まれて初めて会った気がする。ここに来て本当に良かったと思う。

部屋のだれもが交代でキスを受けて、より以上のパワーを受けとったあと

清々しい仄かなラベンダーの香りを残して三人は階上へと消えていった。

このあと、交代で休憩しているとき、今退職の相談を受けている同じ事務所の玲子と

違う事務所だが玲子の友達の亜紀が順子の所にやってきて

「順子さん、あの話はもう忘れてください。私決心しました。

このお仕事続けます。あの方が同じ事務所に入られるなら私止めません。

あんな素敵の方に巡り合うチャンスなんてもう一生ないと思いますから」

亜紀がいった。

「順子さん、以前からお誘い受けて頂いていましたが今日決心しました。

この事務所で働かしてください。聞けばこのビルに越してくるとか」

「ええ、あとで社長が詳しく教えてくれるけど」

契約が済んだことはきいたわ、3階のワンフロアだとか」

「順子さんは聞いてます？」

「なにを？」

「あの方が男だったということ」

「えっ、早瀬沙希が男？」

横で話を聞いていた女子社員達が口を挟んできた。

「そうなの、聞けば同じビルの住人になるそうじゃないの。」

いづれ判ると思うから教えてあげる」

「あんだ達、沙希ちゃんが男が好きだから女になったなんて思わな
いでね」

「あの子の恋愛相手は女性、しかもあの律子さんと婚約が成立して
いるんだから」

「律子さん良かったわね。先見の明があったというべきかしら」

「誰だって沙希ちゃんがあんなに変わってしまったって思わなかった
もの」

「そうよね」

話が横道になりそうになったので慌てて順子が口を出した。

「沙希さんの男時代ってどんな人だったのですか？」

「うじうじして引っ込み思案でそして男の姿が何とも似合わなかつ
たわ」

「だから私達社員旅行で計画していたの」

「何の計画？」

「沙希ちゃんの女性化計画よ」

「でも沙希ちゃん、アメリカに出張いっちゃって計画がパーよ」

「ではどうして？」

「私、自分の目が信じられなかったわ」

「信じられる？三日よ、たった三日。……男から女になっちゃったのが。」

姿、形はすぐに変えられるけれど、精神的なもの・女性らしさ・柔らかい動作

なんて出来っこないでしょ。それがどうお？今の沙希ちゃんを見て」

「昔から女性になりたかったのでは？」

「そんなこと全然なしよ。声はもともと少女の可愛い声だったけど、

そんな人だったら、勘の鋭い女性の目からみればどこがおかしいと判るものよ。」

外見は女性だったけどその他は男性そのもの。それも下の下のクラスのね！」

「マキも酷いこと言うわねえ」

「だって、虫唾が走るくらい大っ嫌いだったもの」

「そうねえ私も律子さんに注意したことあったわ。あんな男止めなさいって」

「うじうじしたあの姿にはゾツとしたものね」

「不思議な話は聞いているんだけど・・・」

今、ここでは言わないわ。いずれ判ると思うから・・・」

順子は二人の話を聞きながら考えていた。

男が女の格好をするなんて見るに耐えられない。

世間ですごく綺麗なニューハーフといわれる人でもどこか男が感じられ、

順子は見ていると気持ち悪くなる。

だから、ニューハーフといわれる人口的な人種は大嫌いだった。

でも沙希は？気持ち悪い？否。沙希の男姿を見てみたい？それこそ

否。

沙希の容姿は？女の私からみても抱きしめたいほど可愛い。

女としての沙希は？その心意気は？それこそ女の中の女。

そして清々しいほど気持ちいい性格だ。

沙希の可憐な姿を思い浮かべると、抱きしめたい欲求が強くなってくる。

早朝、契約書の作成のため完徹していた順子に

出勤してきたまゆみ社長から事務所の移転と業務の新展開のことを聞いて驚いていたが、

それより命令された担当変更には吃驚したし腹が立った。

自分が今まで早乙女薫のためにやってきたことがなんだったのか。

聞く演技することが初めての女性で、

プロモーションビデオの元になったゲームソフトを製作した本人だという。凄い女性だとは思った。

でもこれはその会社のごり押しに違いない。

だって、その会社で相手女優を決められて薫が怒って断りにいったのは順子も良く知っていた。

順子はその女優が大嫌いだっだし

薫が怒って役を降りてしまったとき順子自身が周囲に謝りまわったのだから。

薫がりハーサルを行なったと聞いて信じられなかった。

一度、こうと決めたら決して信念を曲げない薫が

本番の衣装までつけて行なったと聞いて、開いた口が塞がらなかった。

そして、まゆみ社長にりハーサルの内容を聞いたことで

沢口靖子に瓜二つな早瀬沙希という女性に俄然興味が湧いてきた。

「だってね。薫が『憎い！憎い！』って、早瀬沙希の背中から抱きつき泣くのよ」

「薫が泣いたの!？」

思わず大声をあげてしまった

「まあ、驚くわよね。他人に涙一つ見せたことがないあの天下の早乙女薫が

オイオイ泣いていたの」

倒れこむように椅子に腰を下ろした順子に

「確かに私がみても早瀬沙希の演技は背筋が寒くなるほどのものだったわ。

だから、沙希をいち早く契約しておきたいの。

なにしろ薫が”演技の神様”が宿っていると言いつつ切っている子だから」

「演技の神様って、薫がいつも言ってる？」

「そうよ。あつ、それから早瀬沙希はもう世界的に有名な女性なのよ。

ビジネスソフトのワープスロウって知ってるでしょ」

「それならうちでも使ってるじゃない・・・えつまさか？」

「そのまさかよ。沙希をうちの事務所にレンタルでも契約することです

思わぬ福音が事業の新展開よ」

「事業の新展開？」

「そう、早瀬沙希が開発したソフトに関するメディア・・・

宣伝とかCM等の業務全てを委託されたの」

「凄いじゃない」

「そう、でもこのままでは人が足りないの。顔の広い順子しかでき

ないこと。

ヘッドハンティングして人を集めて欲しいほしいのよ」

「ヘッドハンティング？ いったいどういう人を何人ぐらい？」

「そうね。その業務を安心して任せられる人が2〜3人に

その他一般社員として6〜7人ね、そのうち若い子を育てていくから」

「今の人数より2倍も増やすの？」

「でもそれでも少ないと思う。」

何しろこの事務所の5倍くらい広い事務所になるんだから・・・、

あつ、一つ条件が・・・」

「全員女性ばかりでしょ」

「そうよ、私も薫も男は嫌いですからね。」

そうそう、今向うの会社えらいことになってるの。

今日はこの事務所を閉めていいから、順子も一緒に手伝いに行つてほしい」

「手伝いつて？」

「昨日のことで電話とネットのメールがパンク状態なの。」

うちの子4人と誰か手伝える子を5人と順子で10人くらい必要ね」

他の事務所や友人を探して車でここまで来た順子達。

そして・・・『コンコン！』と軽く叩くドアの音。

振り向くと、ドアから覗く見知らぬ女性の顔。

「おはよう」

言ってから入ってきた女性の後ろ・・・何？・・・あの子・・・？

隣で仕事をしていた同じ事務所の玲子が持っていたペンをポタンと

落としました。

「うそ！・・・なぜ沢口靖子が？・・・」

「違うわ。あの子が早瀬沙希よ」

何故か順子には一目で沙希が見分けられた。持っている輝きが違った。無論、沢口靖子の輝きはうちの薫に匹敵する。

でも彼女は何か違った。

「こつちへいらっしやい」

と呼ばれて近づいて行こうとするとブラウスの背中を掴まれた。

「凄い！・・・あの子・・・」

掴んでいる玲子の手が震えている。

”姉御”と呼ばれている順子にしたって同じだ。ガクガクと足が自由にならない。

いつのまにか”スター”を前にした女子学生のように憧れの目で見つめていた。

そしていつのまにか始まった激しいキスの時間。

あれよあれよと腰砕けになって椅子に倒れこんでいく。

(何？・・・ちょっと何やってんのよ・・・)

と沙希の身体から匂いたつラベンダーの香りに気づく。

ちょうどタイミング良く元気を回復した女子社員が

ラベンダーの香りのことを聞いていた。

答えたのは律子と呼ばれた女性・・・きっと沙希のマネージャとして契約した子に違いない。

(えっ、何だっ？・・・この香りは薫の若いときの体臭だっ？)

・・・それをあのリハーサルの中で再現したっ？・・・そんな馬

鹿な！！)

「えっ、うちの薫の？」

思わず口にしていた。沙希を見るとおとなしく女性に抱かれている。その姿からは何のいやらしさも感じられないのだ。

女性の身体が離れた。その時、フラフラと玲子が順子の後ろから沙希に向かっていこうとした。

「駄目！・・・次は私の番よ・・・」

何か一刻も早く沙希を抱きしめたい。

ぐっと抱きしめると、今にもポツキリと折れてしまいそうな身体だが

押し付けた柔らかい小さな口、舌を入れるとこちらの動きに合わせてくれる。

なんだかホワツとする暖かい空気に包まれる。

そのうち、沙希の身体・・・いや魂から不思議なパワーが順子に流れこんできた。

でも、最早身体の状態がもたない。

膝がガクガクして腰から落ちてしまいそうなの・・・

他の女性と同じ状態で近くの椅子に崩れ落ちた。

しかし、身体のうちに入った沙希からのパワーが順子の細胞の一つ一つに満ち溢れてくる。

昨夜からの眠気・疲労がいつのまにか消え去っている。消えていく状態が自覚できるのが凄い！

もう順子には迷いはなかった。もう担当を外れた薫の存在は頭にはない。

今の順子にとって沙希のことは絶対となった。

沙希のことなら何でも信じられる。そして、私の力で薫より大スタ
ーにしてみせる。」

その時ドアが開いてまゆみ社長と早乙女薫が何人かの女性スタッフ
を連れて入ってきた。

「あつ、社長！」

順子が立ち上がった。

「順子、沙希ちゃん知らない？」
薫が言った。

「あつ、早乙女薫よ」

「本当だ」

と順子の背中から女性社員達の騒ぎが聞こえてくる。

「先ほど上の階へ上がられましたよ」

薫はそんな社員達にニッコリ笑って

「ありがとう」

というと女性スタッフを連れて出て行った。

女子社員達は

「キヤーキヤー」

と飛び上がって喜んでいる。

「そうだ、順子。あなたも来て会見の準備を手伝ってほしいの」
順子は玲子達に後を頼んで、まゆみのあとから部屋を出て行く。

5階は役員室と応接室のフロアだった。

『第一応接室』の下には白い紙で『記者会見場』と貼ってあり、

『第二応接室』、『第三応接室』にはそれぞれ『早乙女薫控え室』

『日野あきあ控え室』と同じ白い紙で貼ってあった。

いづれもまゆみが専務の静香に依頼していったのだ。

薫が沙希の控え室のドアを少し開くと

「あら、ごめんね」

と小さな声でいって静かにドアを閉めた。

「ふふふ・・・」

「どうしたの？」

とまゆみが聞くと胸を少し押さえて

「着替え中よ」

と行って自分の控え室へ入っていった。

まゆみと順子は記者会見場に入ってしまった。

「うん、これで充分でしょう」

「何人入れるんですか？」

「ちようど50人よ。マスコミ全て入れてね」

なるほど簡易椅子が50脚ならんでいる。

ひな壇には3脚、薫の記者会見には寂しい数である。

順子の視線に

「もう一人は小野監督よ、今朝電話があって『記者会見には俺もでる』ってね」

「あの小野監督がですか？」

「そう、あの小野監督がね」

「よほど気にいったんですね」

誰を？とはいわないし、聞かなくても判ることだ。

「記者会見が終わったら、自らロケハンに行くそうよ」

驚くことばかりだが、何かワクワクしてくる。

記者会見でも何かが起こりそうな予感がしてきた。

「会見・・・何かおこりそう・・・」

「順子もそう思う？私もよ」

何かが起る、その第一弾がいきなりやってきた。

「社長！」と言う声に振り返れば

「あつ、静……いえ、専務。どうしたんですか？」

専務が自分の秘書を従えて困った顔で立っていた。

「今、マスコミの代表と言う人たちが見えて、50人では少なすぎる。」

もし、入れるスペースがないのなら屋上で会見をやってほしいって

「もう、マスコミはこれだから嫌になっちゃう。

あれだけ人数制限を約束していたのに……で専務、何人入れろって
いうんです？」

「350人……」

「350!!」

まゆみは天井を見上げた。

その時、

「専務！」

と廊下を小走りで近寄ってくる女性が一人。

「あつ、大崎さん」

社長秘書の大崎恵だった。少し顔を紅潮させて

「社長からの伝言です。屋上よりも3階を使ったらどうかと
おられます」

「3階？」

「はい、3階です。社長はこういっておられます。

どうせ3階は早乙女薫事務所との賃貸契約が済んだことだし、
フロアの間仕切りもしていない状態だから500人だっ
て入れます。あとは荷物だけです」

「その荷物が……」

「こうもいつておられます。壁際に積み重ねてもいいのだがこの際、4階と2階に振り分ければなんとかなるだろう・・・と」

「でも時間が・・・」

「あと2時間あります。男性達が荷物の運び出しをしてくれませう。部屋の掃除は手の空いた女性達がします。椅子が足りなかつたら近くの会社から借りてきます」

まゆみは静香をじっと見詰めていた。静香の眼のなかに決意の色がともる。

「やりましょう！手すきの社員を3階に集めてちょうだい。」

男性社員は全員ね。勿論、社長もよ」

専務の声が力強く響いた。

「じゃあ、私も・・・」

とまゆみと順子も付いていこうとしたが

「いえ、社長さん達は記者会見のソフトの面をお願いします」

「ソフト？」

「ええ、記者会見のハードの面は私たちがやります」と歩みさつた。

「社長さん、沙希ちゃんのことお願いします」

と言って二人の秘書が専務のあとを追う。

「記者会見のソフトとハードか・・・パソコンソフトの会社だけに言িয়েて妙だわ」

「何か凄いことになってきましたね」

「順子、絶対に記者会見もビデオ製作も成功させないとね」といつてから

「順子は沙希ちゃんのこともう知っているんでしょ？」

「男ってことですか？」

「ええ、大勢の人が知ってることなの。あの子も知られてもいいって思ってるわ。
でも世の中にはいろんな人がいるから律子さんと二人で守ってあげてね。」

あつといけない。あきあにはもうファッションコーディネーターがついているの」

「それって・・・」

「ミチルさんの次女の杏奈ちゃんよ。順子と仲良しのね」

「ええ〜」

「あの子が買って出たらしいわ。しかもあのCM撮影の前日によ」

「それでは・・・」

「そう、何か沙希・・・いいえあきあに感ずるものがあつたのね。」

あの子って感が鋭いでしょ」

「そうなんです。時々ヒヤツとする直観力を働かせて・・・」
と二人はため息をつく。この激しい展開に気持ちがついていけないのだ。

戦場のような会場設営の時間があつというまに過ぎていった。

埃だらけのワイシャツ、ジーパン、ブラウス、スカート姿の社員達の横を

テレビクルーやラジオクルーが通り、会場内の各社マイクの設定など忙しい時間が過ぎ、

とうとう記者やレポーターが全員椅子に座った。

といつても数が増えたらしく立ったり壁によりかかったりの記者がかなりいて、

その数400近くに膨れ上がっていた。

時々新たに椅子が運び込まれており、椅子をかってに移動させるも

のもいた。

その頃、5階の控え室では

鏡の前の沙希の唇の赤いルージユをグロスで光らせ終わった杏奈ガ

「ふ〜」

と吐息をついた。我ながら素晴らしい出来だ。

へやーをブラシでセットしながら心が浮き立ってくる。

沙希の身体からエネルギーがほとばしっているのを感じるのだ。

全て用意ができた沙希が律子の手をぐつと握りながら深呼吸を繰り返していた。

「律姉……なんだか怖い……」

「何言ってるの、リハーサルするときあんなに度胸よく演技した人が・

……」

「そうですね、それに沙希さん凄く輝いていますわ」と

「は〜い、沙希ちゃん。準備できた？」

雪夜叉姿の薫がまゆみやスタッフを従えて入ってきた。

「まあ、……本当にきれい！」

スタッフ達も魅入られたように見つめている。

そこに小野監督が顔を出した。

「やあ、用意できたねえ……ほう……こりゃあ……二人

そこに立って！」

と両手で四角の形をつくって二人姿を覗きこむ。

「うん、一段と映えるねえ……よし！これで自信をもって発表できる」

「さあ、時間よ。行きましようか」

まゆみに促されて部屋をでる。

と、そこには社長、専務をはじめとする社員達が待ち構えていた。
「キャアア……綺麗！」

「すげえ！……早乙女薫をこんなに間近に見れるなんて……」

「沙希ちゃん……凄い！……早乙女薫に負けてない！」

「輝いてるわねえ……」

『ワーワー、キャーキャー』

という嬌声と拍手に見送られながらエレベーターに乗り込んだ。

3階で降りるとまゆみ社長が

「まず私が挨拶してから呼び込みをしますから

それから入場してください。監督、よろしいですね」

「ああ、頼む」

「順子は薫の付き添い、律子は沙希……いいえ、日野あきあの
付き添いをお願いね。」

杏奈は二人の傍にいてメイクや衣装直し頼むわよ。

3人が着席したら両袖に分かれて立っていて頂戴ね」

と、いってドアを開けて入っていった。

「沙希ちゃん、しっかりしなさい。どうしたの？そんな不安そうに」

「だって……何か怖い……」

「沙希ちゃん！あなたは早瀬沙希ではなく、日野あきあという女優
になのよ。」

女優がこんなことで怯えてはいいい仕事が出来ないわよ。ねえ、

監督」

「そうだよ、君と薫くんとで映画史に残る凄い映画を撮ることにな
るんだ。」

期待を裏切ってもらったら困るよ」

(えっ?映画?・・・)

薫も驚いて監督の顔を見ていたが、その答えを聞く暇もなくドアが開いて

「さあ、入って。・・・あきあ、がんばってね」

まゆみの入場を促す声に小野監督がさつさとドアの奥に入っていた。

「さあ、行きましよ。あきあ、あなたから入るのよ」

順子に手を引かれた薫の声に

「判りました。さあ、あきあ、行きましよ」

律子に初めて”あきあ”と呼ばれ、

(ああ・・・私は日野あきあなんだ。・・・そして、今は若き陰陽師の”あきあ”)

そう言い聞かせて歩みを進める。

『チリーン・・・チリーン』

手に持つ細い杖につけた鈴の音があきあを女優の道へ導いていく。

なぜかシーンとした会場、400人近くの記者やレポーターが固唾を飲んで見守っているなか、

小野監督が着席し静々と女性マネージャーに手を引かれて入ってくる二人。

テレビカメラに映し出され全国で流れるこの場面、

雪夜叉の扮装で白塗りされて何か不気味さがあるが妖艶な美しさは相変わらずだが、

その前を歩く平安の壺衣装の娘の・・・その顔は・・・・。思わず会場内から『ホー』という魅惑のざわめきが聞こえはじめた。

呆然と魅入るマスコミの前で静かに座る主役の二人、

二人のマネージャーは左右に別れて袖に立ち、二人を見守る。

「お待ちせしました。『妖・平安京 雪の章』の記者会見をはじめさせていただきます。」

不束ながら司会は私、早乙女薫事務所の浅香まゆみが務めさせていただきます。」

その挨拶に沙希は

（へえ、まゆみ社長の姓って”あさか”っていうんだ。

女優さんにそういう人いたっけ）

とまゆみの方を見てニツコリと笑った。

その笑顔をみてまたもや会場から『ホー』とため息が流れた。

「可・可愛い過ぎる……」

そんな声があちこちから聞こえてきた。

「それでは、二人の女優を紹介する前にみなさんご存知の小野監督から

重大発表をしていただきます。では小野監督どうぞ」

というまゆみの司会進行に薫も聞いていなくなったらしく

何か聞いてた？と小声で沙希に問い掛けてきたが

勿論、沙希も知るはずはなく首を小さく横に振ると

立ち上がった小野監督を仰ぎ見た。

「では、発表します。まず私は『妖・平安京』というゲームソフトのプロモーションビデオを依頼され、実際私がゲームをやってみてその面白さに惚れ込んで、撮影を引き受けました。

そして、昨日のリハーサルとはいえ二人の天才女優の演技をみて

これは…….と思いました。

これは、日本映画史上稀に見る優秀な作品になり得ると判断したのです。

だから、この会社の社長に話をもちかけました」

と行ってから、ニヤツとして沙希をみた。

「あなたは、プロモーションビデオという小さな画像の製作よりもっと大きな枠の映画の製作を試みませんか……とね」

「ウオー」
と会場が揺れた。

もう二度とメガホンを握らないといていた日本屈指の名監督の小野監督が

再び映画を撮るという大ニュース、昨日のリハーサルをみた記者達からの

報告による天才女優早乙女薫に勝るとも劣らない演技を發揮したという謎の美少女……

この記者会見は久しぶりに芸能界を揺るがす大ニュースであった。

「結果はこの記者会見を今開いているということでお判りになるでしょう。」

劇場公開はゲーム発売日と同じ日に大々的におこなわれます」

すかさず記者席から

「小野監督！昨日の今日でそんな大事なことを発表してもいいんですか？

まだ共演者とか何も決まっていけないんでしょう」

司会をしているまゆみから

「すみません、質疑応答はこのあとたつぷりと時間をとってありますから……」

というのを小野監督が手を上げてさえぎってから

「詳しいことは後で話しますが、今の質問だけは先に答えおきます。」

昨日からマスコミ各社は血眼になってこの二人の行方を追っていたでしょう。

その間に私はあらゆる手を各方面にうつておきました。

スポンサーの件もそうです。この会社に断られたときのためのスポンサー各社、

大手映画会社・・・、おかげで製作費は映画一本分としてはかかってないほど集まりました。

わたしが選んだ共演者の俳優たちからは無報酬でもいいから

出演させてほしいという返事をいただいています。

・・・不思議でしょう？どうしてこんな短時間に色々決められたのか・・・。

実は諸君たちが眼を放した隙・・・といつては言い方が悪いが

わたしは或る劇場に今言った人たちを集めて・・・」

といいながら足元に置いていた大きなバツクの中から何やら取り出して上に掲げた。

・・・それは映画の撮影フィルムだった。

「このフィルムを映写しました・・・勘のいいマスコミの記者さん達だ。

このフィルムに何が写っているのかももうお判りのはずでしょう。

・・・そう、この中には昨日のこの二人の演技が映っています。

このフィルムはわたしの宝です。今度の映画ではもつと凄い演技がみられるはずですよ。

でもこの中の・・・」

とフィルムを振ってみせる。

「新鮮さと驚きはもうないでしょう・・・」

記者席からのざわめきが一段と大きくなる。

或る記者が立ち上がった

「ぜひそのフィルムを見たいのですが・・・」

と声を張り上げた。

小野監督はニヤツと笑ってみせて

「そういう声は必ず上がると思ってた準備はしてあります。

しかし、上映することによって質疑応答の時間が少なくなりますか。

「」

記者達は顔を見合わせて各々相談しあっていたが、

目の前にぶら下がっている餌に耐え切れなかったのか

「ぜひ、フィルムのほうを……」

と言う声があちこちから聞こえてくる。

「では、小野監督に準備してもらおうとして主演の二人を紹介しまし
よう」

まゆみがまずは薫を促した。

「皆さんご存知の雪夜叉役の早乙女薫。……さあ薫、挨拶を
……」

雪夜叉の衣装で立ち上がった薫にテレビライトや『カシャツ・カ
シャツ』という

多くのカメラのストロボの光の中の薫はさすがに天才女優早乙女薫
だった。

その圧倒的な存在感に並み居るマスコミ各社の記者達もただ見つめ
るだけだ。

薫は役に対する思いを淡々と語り終えると、

平安期の女性がしていた旅姿の沙希を立たせてから

まるでマネージャーか恋人のように甲斐甲斐しく世話をする姿に

天下の早乙女薫の以外な一面と、その薫をここまでさせるこの少女
・
・

一体どういう少女なのか……。

海山千山といわれるマスコミの記者達があこがれのスターを間近で

みる

少年少女のように固唾を飲んで見つめている。

「先輩！あの顔は・・・やはり沢口靖子じゃないですか」

「いや、違う！今、沢口靖子は京都の太秦で撮影中だ」

「だって・・・」

という若手の記者に新聞に自分の名前でコラムを書き続けているこの記者は自分の携帯を渡して、怪訝な顔の若手記者にむかって

「この電話の相手は京都の支局長だ。今彼は沢口靖子に張付いている。」

自分で聞いてみるといい」

若手記者は慌てて携帯に向かって話しだした。

「どうだった？」

しばらくして携帯を返されるのに

「今、ちょうど本番中だそうです」

そんな様子があちこちでみられる。

少し落ち着いたのか、マイクを持つ沙希の手の震えがピタッと止まった。

「陰陽師あきあ”役の日野あきあと申します。」

生まれて初めて経験することなので、皆様にご迷惑をかけるかもしれません。

その時は御指導御鞭撻をよろしくお願い申しあげます」

と言って、ニッコリ笑った笑顔が記者達・・・

いや、この生中継を見ている人達の心を掴んでしまっていた。

「先輩！・・・もう俺、あの子に痺れた・・・」

「馬鹿！・・・記者たるものもっと冷静になれ」

頭を小突かれながらも、うつとりと見つめる後輩の記者に

「うつふおん……確かに惹きつけられてしまつのも無理ないな。

久々の銀幕のスター誕生ということか……」
とワクワクするように言い放っていた。

薫とまゆみは堂々とした沙希の様子に安心したのか
特に薫は誰はばかりなくうつとりと沙希を見つめていた。

そんな様子をいち早く見抜いたのは女性記者、女性レポーター達であつた。

「はい」

と手を上げてから

「早乙女薫さんに質問します」

と立ち上がった女性記者は早瀬理沙だつた。

「あつ……理……いえ、ご質問は何でしょうか」

思わぬ相手からの質問に少ししどろもどろになりながらも流石にまゆみ、

素早く立ち直つた。

「さつきから見てますと、日野あきあさんを見つめる早乙女薫さんの様子は

ただことではありません」

「と、いいいますと?」

「はい、まるで恋する乙女です」

ストレートで意地悪な質問にまゆみは困り果てた。

夕べから沙希を薫に独占された怒りが今のような質問になつたのは容易に納得できるまゆみであつた。まゆみにしても同様である。

だから、男嫌いで通っている薫の巷での噂・・・レズでは？というのは
本当かも知れないと今の質問で納得するような空気が女性達の間で
流れ出しているのが女性であるまゆみにも充分感じとれた。

でもそこは大女優の早乙女薫である。

（やったわね）と理沙を少し睨んでから立ち上がった。

「質問にお答えします。恋する乙女・・・けっこうですね。

そのように見られたのなら女優としては少しは成長したかなと満足
しています。

だって、演技するのではなく自然に我が子に対する愛情がみなさん
に

判ってもらえたんですもの・・・。

それに私は日野あきあのファン第一号ですよ。

あきあのファンクラブをつくるのならこの早乙女薫が会長を務めま
すわ」

と堂々といいきって腰を下ろした。

テーブルクロスに隠れて薫は沙希の手を熱っぽく握っている。
それがわかつているだけに悔しさが溢れている理沙であった。
袖にいる律子しだって順子も杏奈も同じだった。

しばらくは質疑応答が続き

「では、もう上映の準備も整いましたので最後の質問とします」

「はい」

と手をあげたのは又、理沙であった。

意地悪な質問をしなれば・・・と困ったが

「日野あきあさんをお願いします。役柄が陰陽師と聞いていま
すが

「ここで何か陰陽師の決めポーズをしていただけませんか」
あきあに対しては優しさが感じられる質問となった。

あきあが薫と小野監督にどうしようか・・・と視線を向けると二人共笑いながら頷いたので、あきあはゆっくりと立ち上がり一歩後ろに下がると自然体になる。

そして両手を胸のところ構えると印を結びながら

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」

と呪文を唱えると不思議なことがおこった。

それまで窓の外はカンカン晴れて日差しがきつくありあわせの布切れで

カーテン代わりにしていたが、一転にわかにかき曇り青白い稲光とともに

大粒の雨と風で大荒れの天候となった。

おまけに停電で周囲が暗くなる一方、青白い雷光の中で若き陰陽師”あきあ”の姿がくつきりと浮かびあがり

腰を半分つかせていた記者達の身体を椅子に縛り付けていく。

「おいおい、本物かよ」

そんな声があちこちから聞こえてくるほど劇的な天候の変化となった。

そして、あきあが印を解くと暴風雨がピタッとおさまり

陽光が窓から差し込んでくる。

記者達は静かに礼をして椅子に座りこんだあきあから眼が放せなくなっていた。

偶然なのか天をも味方にするこの少女の演技を早く見てみたい。

・・・そんな欲求が強くなってくる。

昨日の現場にいた者も、現場での話を後で聞いた者もだ。

テレビ中継は終わっていたがテレビクルーも誰一人動こうとするものはいない。

これから始まる二人の天才女優の序章をいまかいまかと待ち受けている。

ひな壇の机と椅子が袖に移動し、二人の女優と監督が席につくとスタッフによってひな壇後ろを覆っていた布切れがはずされる。いつのまに用意されていたのか大スクリーンが壁にかけられていた。

「では、今から上映を開始します。なおこのフィルムは何の編集もしていませんが

これはこれで一つの作品になっていると自負しております。

上映が終わってからの皆さんの感想が楽しみです」

窓には暗幕がかけられ、照明が消されるとスクリーンに映し出される昨日の

リハーサル・・・マスコミの記者達は完全に観客となって二人の女優に心を奪われていった。

あきあとなった沙希にとっても新鮮な驚きであった。

フィルムの中の若き陰陽師”あきあ”・・・まるで別人であった。

あんなこと・・・こんなこと・・・演技をしているとは思えない。

本当に平安時代にタイムスリップしてそれを現代から覗いている・・・そんな錯覚に陥っていく。

小さな声で

「ねえ、薫さん」

「なあに？」

「わたし、あんな演技してたの全然覚えてないわ」

「そうね、沙希ちゃんのは演技という生易しいものではないわ」
「演技ではない……?」

「そうよ。あなたは陰陽師”あきあ”そのもの……。」
あなたは役柄そのものになれる才能があるのよ。」

だから、見て御覧なさい。ほら、話をするとき片側の頬にエクボを作っているわ。」

……覚えていてでしょ。リハーサルを始める前に監督が言っていた言葉……。」

私がエクボがあることから、その子である”あきあ”にもエクボがあれば

完璧なのになあ……て、ポツンとってたのを」

「はい、でもそんなの無理だって思っていました。エクボなんてつくれっこない」

「でも、スクリーン上のあきあって子はエクボをつくってるじゃない。」

沙希ちゃんのアキアは本編ではもっと変わってくると思うの。ねえ、監督……。」

横で耳をすませて二人の会話を聞いていた小野監督は頷いてから

「そうとも、本編ではもっとぎりぎりの二人の対決を考えているし、

”あきあ”という陰陽師をもっと複雑な個性を持たせようとおもっているんだ。」

日野あきあという女優はこちらの注文に全て答えてくれる可能性は大だからね」

期待をこめていう小野監督の言葉は沙希の肩にズシリと重く押し掛かってくる。

リハーサルだけなのに、なるほど小野監督が言われるように一本の作品として完成されていた。

これが本編となるとどんな面白い作品に仕上がってくるのかワクワクするような期待が膨れ上がってくる。

上映が終わり、照明がつくと思わず会場から拍手が沸きあがってきた。

沙希が頬を紅潮させながら会場を見渡すと、いつのまに入っていたのか

社長をはじめ会社の同僚達、そして今日手伝いに来ていた事務所の人達が

会場の後ろで拍手を続けている。

女性達は記者もレポーターもそして、女子社員達もハンカチで涙を拭きながら拍手をしている。

思わず立ち上がって頭を下げると、

「きゃあ、可愛い……」

「あきあ……」

「あきあちゃん、こっち向いて！」

と女性達から黄色い声がかかり始めた。

「監督！……私からあきあのエピソードを話してから二人で消えるから。」

あとは頼みます。連絡はまゆみの携帯にお願いしますね」

小野監督は薫の言葉に理由も聞かず頷いただけであった。

薫は立ち上がって

「さて、皆様」

と話始めた。

あつげにとられていた会場の記者達……、早乙女薫が他人の工
ピソードを楽しく話すなんて、

天地がひっくり返ってもありっこはなかった。

よほど日野あきあという女優に入れ込んでいるのかよくわかる。

序々に話の内容に引き込まれていく会場の人々……。

演技中、突如発現した早乙女薫の若き時の体臭『ラベンダーの香り』

そして、映像の中の片エクボ……不可能でありっこない現象・

・

でも、この少女なら……と納得出来てしまふのが不思議であ
った。

そして最後に言った天才女優早乙女薫の言葉

「私は天才ではない。天才とは『演技の神様が宿っている』日野あ
きあのこと。

羨ましくて、悔しくて……そしてなぜか自分のことのように嬉し
い……」

複雑な心境を話してマネージャー達に手を引かれながら会場を出て
行った。

「では、本編『妖・平安京』のスタッフと共演者を発表します」

という小野監督の言葉に後を追いかけてようとした記者達が再び腰を
下ろしてしまう。

薫と小野監督の共同作戦で記者達を会場内にくぎ付けにする。

こここの社員達の姿も会場内にはもうない。

小野監督が淡々と発表するスタッフ達、現在の日本映画の超のつく
一流人ばかりであった。

そして、共演者かというと……

重要な役どころ”安倍晴明”には若手で実力も人気もナンバーワンの飛龍高志が選ばれた。

彼は最近人気女性歌手との間に女子が誕生したばかりで乗りに乗ってる男優である。

そして、新派の大御所や大女優が脇を固めており、これはこれで芸能界のビッケニューズとなった。

一方、薫と沙希は律子と杏奈とまゆみに連れられて裏口に用意された車に乗り込んだ。

勿論、会社の同僚達にガードされてだが……。

運転席に乗り込んだまゆみが見送る順子に

「じゃあ、後を頼むわね。しばらくは出て来れないから」

「わかったわ。まかせてちょうだい。こちらの専務さんとうまくやっておくから」

何も聞いていないのは沙希だけで、薫も律子も杏奈も……

あと会場内に残っている理沙にしても今後の予定の打ち合わせは綿密に出来上がっていた。

第一部 第七話

沙希は日野あきあとして一つの大きなハードルを越えたことにより緊張がとかれ、

いつのまにか眠りこんでしまっていた。

いつものように律子と薫はラベンダーの香りが漂う沙希の身体に密着させ、

その手を握って車の振動に身をまかせていた。

ときどき沙希の寝顔を見ながら

『クスっ』と笑う。

こうしていると何故か幸せな気持ちになっってしまう。

「二人ともズルイ！」

運転しながらまゆみがバックミラーを見ながら言ったのは当然といえは当然なことであった。

助手席にいる杏奈も後部座席を見ていう。

「しかたないわねえ、じゃあ律ちゃん。あなた運転できるんですよ。少しの間変わってあげて」

「そんなあ……」

「あら、お姉さんの言うことがきけないの！」

「もう、薫姉さんって勝手なんだから……」

まゆみは喜んでハザードランプをつけてから路肩に車をとめた。

「わたし、行き先がわからないわ」

「大丈夫よ、ナビをセットしてあるから。案内通りにいけば行き着的わよ」

とさっさと後部座席に乗り込んでしまった。

律子はしかたなく運転席に座ったが、つい気になってバックミラーで後ろの様子を覗き込んでいた。

「あら、私は？」

「杏奈は一番年が若いんだから我慢する」

「そうよ、誰があんたのオムツを代えたっけね……」

ミチルが幼い長女の手を引き、産まれたばかりの杏奈を抱いて帰国した

ミチルをバックアップしたのはまゆみだったのだ。

まゆみもまだ子供もいなく、大手プロダクションに入っていた薫と秘密裏に事務所の設立の相談をしている頃だった。

ミチルが美容室の開店を前に忙しかったとき、
請われてまゆみが幼い二人の面倒を見ていたのだ。

「もう……いつつもそうやって子ども扱いばかり……」
とぷつと膨れる。

「ほらほら、律ちゃん。早く車をスタートさせて。皆、首を長くして待っているわよ」
薫の言葉に律子も『プー』と膨れながらもアクセルを踏み込んでいく。

なるほどカーナビは便利な機械だったが、

今の律子にとってそのデジタルな声は苛立ちのもとであった。

「もう、何なのこの声は！……頭にきちゃう……」

「律っちゃん、機械にあたってもしようがないじゃないの」

という薫の声に

「だって、この声にはイライラしちゃうもの。ねえ、杏奈！

これじゃあ、誰だって運転が荒くなって交通事故をおこしてしまうわよ。そう、思わない？」

「よかった。私だけじゃないのね。機械は便利だけどその案内の声には私もうんざりだったのよ」
まゆみも同調してくる。

「これ、沙希さんの声だったらしいのに……」

「沙希ちゃんの声？」

「だって、沙希さんの声をきいているとなにかフルフルって空気が震えて心地いいんだもの。」

ねえ、律子さん。薫叔母さんもまゆみ叔母さんもそう感じませんか？
……私だけかなあ……」

「もう、杏奈！いつも姉さんと呼びなさいって言っているでしょ……」

「そうそう、私たちまだまだ若いんだからね」

「だって、不自然だもん。2人共ママより年上なんだから……」

「いいの、いいの……そんなこと気にしないって……」

「もう勝手なんだから……わかったわ。薫姉さん、まゆみ姉さん……」

「そう、それでいいのよ。最初からそう言っておけば叱られなくて済んだのに」

杏奈はヤレヤレと身体を前に向けてから運転席の律子に向けて
欧米人のように両手を腰の所で広げ肩をあげて見せる。

「そうねえ……ねえ、まゆみ！杏奈の言うとおりかもしれない。

私の雪夜叉と沙希ちゃんのおきあが対決した最後の場面で

母とわかったときの『母様……』というこの子の声……

恐ろしい悪心に染まった妖かしの心が自然と消えていって人間らしい優しさが出てきてしまったの」

「だってそれは……」

「まゆみの言いたいことわかってるわ。演技だからって言うんでしょよ。」

でもこの子恐ろしい子よ。この子と対峙していると見境がなくなってしまうの。」

あるとき私は本当に雪夜叉になっていたわ。私にとってあんな経験初めてよ」

「それって、凄いことなの？薫姉さん」

と杏奈が聞く。

「それはそうよ。今回映画で共演する人達、沙希ちゃんに夢中になっってしまうわ。」

演技を追求している真摯な役者さんばかりですもの」

「困るわ……そんなの困る！」

と律子。

「どうして？」

と杏奈が横を向いて聞く。

「だって、私はソフトを開発している沙希ちゃんが一番好き！」

今開発中のゲームソフト『妖・平安京 風の章』ももうすぐ出来上がるのに……」

「そうね、私としてはずっと女優でありつつけてほしいけど」

ソフト開発者としても、今では世界的にも有名なのよねえ……」

「まかしてちょうだい。そのことはうまくマネージメントをするから。」

そのかわり律ちゃんも私を全面的に手伝ってね」

「ええ、わかってます。今のは完全に私の我儘ですから」

「ねえ、まゆみ。これっていけるかも知れない」

「えっ、何が？」

「カーナビよ」

「あっ！私もそう思うわ。薫姉さん」

「杏奈も賛成ね」

「ええ・・・」

不信そうに見つめるまゆみにむかって

「わからない？」

「あっ、もしかして・・・」

大きな声をあげた運転中の律子。

「わかった？・・・じゃあ、律ちゃんが言ってみて・・・」

「沙希の声が入ったカーナビのソフトを作ろう・・・ってことでしょ」

「そうよ。出来るわよね」

「はい、でもハードの会社とは提携する必要があると思います。

でも、発売されたら交通事故も減るかもしれない」

「まあ、そこまではどうかと思うけれど、売れることは確かね」

そんな四人の話にも沙希は眼をさまそうとはしない。

よほど疲れているのか、綺麗にメイクされた唇から微かな寝息が聞こえる。

相も変わらずカーナビのデジタルな声に導かれて車は国道から離れて山奥へと入っていく。

「ねえ、まゆみさん。この道で間違いないの？」

律子が舗装されていない曲がりくねった道をつきながら運転し

ながら聞くと

代わりに答えた薫の言葉には驚いてしまった。

「いいわよ。ここはもう早瀬一族の山だから……でも気をつけてね。」

道は何も手入れしていないから、間違ったら谷底ってこともあるから……」

「ねえ、薫姉さん。私も2回ぐらいしか来た事がないの。それも夜ばかりだったでしょ」

「それは仕方ないわよ、杏奈。だってお店が引けてからでしょ」

「ええ……」

「じゃあ、律ちゃんも杏奈も良く見ておくのよ。ほら、霞んでいるあの山」

とまゆみの指差す方向には山のまた山……を越えてずっと奥に微かに見える一段と高い山。

「あの山までがうちの土地なの。そして、今から行くところが早瀬一族の隠れ里というわけ」

「隠れ里？」

「そう、いいところよ。温泉も沸いているし、季節の食べ物がまたおいしいの」

「いいわよ、私も仕事に疲れたらいつでもここにくるの。」

そして、リフレッシュして都会に戻っていくのよ」

まゆみが沙希の寝汗をハンカチで拭きながらいう。

「さあ、もうすぐ着くわよ」

山あいには囲まれたところに早瀬一族の屋敷が転々と存在していた。

古い屋敷群の中で一際大きな屋敷・・・それが本家であった。
車は薫の指示で大きな門をくぐり玄関先に止められた。

ママの真理とレストランを経営している操、そして杏奈の母ミチルと

そこで働いている美容部員の女性達・・・年齢差はあるが、多くの女性達が出迎えていた。

薫とまゆみに起こされて『キョトン』とした表情でまゆみに続いて車から降りた沙希・・・

ぼんやりと周囲を見回している。

「どうしたの？沙希ちゃん」

とママの声に初めて気が付いたように

「あっ、ママ・・・ここはどこ？」

「ここは早瀬一族のルーツの隠れ里よ」

「隠れ里？」

といいながら

「うっん」

と力いっぱい伸びをして思いつきり空気を吸い込んだ。

「ああ、おいしい・・・何か気分がすっきりしたわ」

「どうしたの？沙希ちゃんも薫も映画の扮装のまま帰ってくるなんて」

「だって、ブンヤさん達に後をつけられないように慌てて記者会見から逃げ出してきたんだもの」

「じゃあ早く着替えなくちゃあね。」

でも先に沙希ちゃんの襷の儀式があるから地下の黄金の湯にいきましよう。

濡もすぐに来るでしょうから」

「奥様、この方は沙希お嬢様の・・・」

「ええ、そうよ。お梅さん、あなたが手塩に育ててくれた沙希ちゃんの生まれ変わりよ」

「おおう・・・おおう・・・」

と沙希の身体を必死にさわっている。眼が見えないのであろう。

白く濁ったその眼。でもそこらながれる涙はきれいに澄んでいた。

「おお・・・これはどうしたことじゃ。沙希嬢様の身体から薫様の香りがするぞえ・・・」

「どれ、お梅。薫様はワシがお育てしたのじゃ。ワシのほうが良く知っているわい・・・」

とこれまたお梅とそっくりな老婆が出てきた。

この老婆も同じく眼が不自由なのであろう。必死に沙希の身体にすがりつき体臭を匂っている。

「これは、薫様じゃ。薫様の小さな頃とおなじじゃ・・・」

「お篠さん、薫はここよ」

と手を伸ばして合図をするが

「嘘じゃ、薫様はここにおられる」

二人の老婆にすがりつかれて戸惑っていた沙希だったが

やがて二人の暖かい情愛に沙希のほうから二人に抱きついた。

「お梅さん、お篠さん・・・私、あなた達が大好きよ・・・」

そして、どうしてそんなことをしたのか沙希にはどうしてもわからなかった。

自然と身体が動き、左手の人差指と中指のみを伸ばし二人の濁った

眼に

交互に当てながら右手で印を結んでぶつぶつと唱えてから

『フィット』と空気を裂く音を口から放つと

一瞬、空気が変わり庭の枯れたはずの桜の木から桜吹雪が舞い落ちてきた。

呆然とする女達・・・どんな不思議の術をつかったのか

くたくたと崩れ落ちる沙希の身体を慌てて律子と杏奈がささえた。

「おう・・・おう・・・どうしたことじゃ。ワシの眼が見えるわい・

・・・」

「おう・・・わしもじゃ・・・」

二人の眼から濁りがすっかり消え、黒い瞳に光がともっている。

「沙希ちゃん・・・あなたは・・・」

ママが沙希の手をとる。

「あっ、ママ。私どうしてしまったの？身体から力が抜けてしまっ
たわ」

どうやら沙希は自分がおこなった不思議な術のことは覚えていないらしい。

ママは沙希に負担をかけまいとそこにいた女達に黙っているように無言の合図を送った。

あとで真理とその妹達に二人の老婆は

「奥様、あの沙希嬢様は古より伝えられている伝説のお人じゃ。間違いはない。

伝説のお人は不思議の術を使うことができ、そしてこの一族の呪いを解いてくれますのじゃ」

と交互に言っていた。

20畳という広すぎる大広間に分厚い布団にくるまれて横になっている沙希の傍には
ママの真理と操を除いて他の早瀬の面々が
心配そうに付き添っていたが軽い寝息をかき出したのでホッとした
ところだ。

律子は横に座る薫・・・映画の扮装をとりてノーメイクにワンピ
ース姿、

実年齢よりも若々しい・・・に

「ねえ、薫姉さん。沙希のあれ、どういうことなの？」

「判らないわ、でもどうしても理由をつけるとすれば・・・」

「理由をつけるとすれば？」

「この子が演技をすれば、演技ではなくなるわ。」

全て本物なのよ。だから陰陽師あきあは本当に術を使えるわけ」

「術が使える・・・」

「それでは納得できない？」

「誰がきいても、そんな馬鹿なっていうでしょうね」

「そうよね、私だって信じられないもの」

「沙希さんってとても不思議！どんどん心が引き付けられていくの」

律子はそういう杏奈の手を固く握った。・・・と、廊下から

「あら、貴女達。そんなところに集まって・・・」

ボソボソと答える声がかして

「いいから、お入んなさい」

と障子が開けられてママと操が入ってきた。

その後ろからお梅やお篠・・・そして、女達がゾロゾロと入ってきた。
た。

薫が立ち上がって入ってきた女達を座らせる。

「あらあら、隠れ里の全員が揃っちゃったわね」

「沙希嬢様は大丈夫ですかのう・・・」

「大丈夫よ、お梅さんとお篠さんに使った術で体力を使ってしまっただけよ」

「それなら、ワシらのために沙希嬢様は・・・」

「いいから、いいから。気にしないの。沙希が言っていたでしょ。

お梅さんもお篠さんも大好きだって」

「おう、ありがたいことじゃ・・・ありがたいことじゃ・・・」
二人して眠っている沙希をおがみ始めた。

「止めなさいよ、まるで沙希ちゃんが死んじゃったみたいじゃないの」

「へいへい・・・」

といいながらも拝みつづける。

「いいから、薫ちゃん放っておきなさい。満足するまでやらせておきなさい。

眼が見えるようになって、本当に嬉しいだろうから・・・」

そのとき、廊下のほうから

「お乳母さん達、眼が見えるようになったんだった？・・・」
と大きな声が聞こえてきた。

「ようやく溲がきたわね」

「あら、皆揃っちゃってどうしたっていうの？」

と溲が二人の看護師を連れて大広間に入ってきた。

そして、目ざとく横になっている沙希をみつめて

「沙希ちゃんじゃないの・・・どうしたっていうの？」

「溲！あんた曲りなりにも医者でしょ。さっさと沙希ちゃんを診断

しなさいよ」「
とまた薫が澪を挑発する。

「あんた達、場所柄を考えなさい。今はそんなことしている場合ではないでしょ」

操のきつい言葉に、薫はペロつと舌を出して

「怒られちゃった・・・」

と肩をすくめる。

澪が足を進めるとサーツ女達が道をつくった。

「どれどれ・・・」

と沙希の手をとり診断にかかるが、すぐにほつとした表情で

「大丈夫よ、良く寝ているだけ・・・あら姉さん、それは？」

「起きたら食べさせようとおもって、おかゆをつくったの」

「駄目よ！今から身体の検査をつける人間にそんなものたべさせちゃあ」

「えっ、今から検査？」

「そうよ、時間がないのよ。今下界じゃあ、あの記者会見以来、すごい騒ぎになってるんだから」

「そんなに？」

「ああ、偶然だとは思っけど沙希ちゃんが変な術を使ったように見えただしょ。

あれが拍車をかけて、どの局も特別番組をやってるの。

自称オカルト評論家みたいのが出てきてカンカンガクガクやってるし、

ゲーマー達がゲームソフトの解説をやってるし、

芸能記者達は共演者やスタッフ、監督に張付いてコメントをとろうと必死だし・・・

ねえ、琴ちゃん。千佳ちゃんも必死でテレビを見ていたものね」

最後に、連れてきた二人の看護師に話をするよう促す。

「はい、何か勝手に話をつくったりしているので腹がたつて・・・腹がたつて・・・」

沙希お嬢様がお可哀想で」

と涙ぐむ。そして

「祖母の眼までなおしていただいて・・・」

「私の祖母も・・・私、沙希お嬢様のためならこの命を捧げるつもりです」

「おおげさなんだよ」

「いえ、大恩ある溇先生でも沙希お嬢様の悪口は言わせませんよ」と二人の看護師が溇を睨む。

横でこつそりと薫が律子に教えている。

「あの看護師の琴乃ちゃんは乳母のお梅さんの孫だし、千佳ちゃんはお篠さんの孫なの。」

そしてまゆみは琴乃ちゃんの姉なの」

まゆみ社長は連絡係として先ほど事務所に戻っていった。

「じゃあ、事務所の皆さんは・・・」

「ううん、違うわ。皆、現地採用よ。あつ、でも順子だけはあなたと同じなの。」

あの子も高校生のころレイプをうけてこの山の中で自殺しようとしていたの。

だから、律ちゃんと同じ境遇なのよ。仲良くしてあげてね」

常に冷静で冷たい雰囲気で何か近寄りかかった山瀬順子がグンと身近に感じられてくる。

「もう、うちの看護師まで沙希ちゃんの親衛隊になっちゃって・・・
どういう子なんだろうねえ」

としみじみと澪は穏やかな寝息を立てている沙希の顔を見つづけていたが

「駄目・・・駄目！私まで魅入ってしまいそう・・・」

あんた達、このまま検査室まで沙希ちゃんを運んできてちょうだい」
準備のために大広間を出て行く澪。

二人の看護師は手早く沙希をストレッチャーにのせる。

ぐったりと力が抜けた沙希の身体・・・静かに毛布をかける。

はじめての律子にとってこの隠れ里は驚くことばかりだった。

時代錯誤の家だと思っていたのが、地下のこの医療施設はどうだろうか

最先端の医療設備がズラリとならんでいる。

検査室に運びこまれた沙希は手早く術衣に着替えさせられ、

メイクも落とされてベットに横たえられた。

「さあ、皆出ていって・・・」

と澪にいわれて検査室から追い出される。

「大丈夫かしら」

「あとは澪にまかせておけば安心してよ。さあ、お腹が空いたから
食堂へいって何かたべようよ」

薫が律子の背を押していく。

「薫ちゃんも杏奈ちゃんも先にお湯に入ってきたら？ その間にお

食事の用意をしておくから」

操にいわれて

「じゃあ、そうする。操姉さん、少し精のつくものをお願いね」

「わかったわ。まかせておいて。二人で律ちゃんを案内して温泉に入ってらっしゃい」

「律ちゃん、行こう・・・」

律子は薫と杏奈に手を引かれてこの地下の奥へと進んで行く。

するとゾロゾロと・・・10代だろうか澁刺とした12人の少女が付いて来る。

廊下のつきあたりにドアがあり、開けると広い脱衣所になっていた。

律子がスーツのボタンに手をかけようとする時、

いつのまにか4人の少女達が律子の周りにあつまっていて『ギョッ』としたが

「私たちに、お世話させてください」

と喋って律子のスーツに手をかけていく。

「律ちゃん、おとなしく彼女達にまかせておきなさい」

見ると薫にも杏奈にも4人の少女がついていて

甲斐甲斐しく世話をして服を脱がせていく。

素裸になると頭から白い布を被せられてウエストのところ結びつけられた。

薫も杏奈も同じ格好をしていたが、シースルーになっているので

くびれたウエストやその下側の黒い鬚りがドキドキするほどエロティックで

カーツと顔が紅潮してしまうのがわかる。

「律子様・・・きれい・・・」

少女の手が律子の乳房をそーっと触れる。

『ビクン』とする快感が身体中をめくりはじめた。

「やめて……」
と言おうとするが、声にならない。

「律ちゃん……快感を受け入れなさい……」
薫も杏奈も感じているらしく甘い声を出しながら
律子は夢の世界に誘い込まれていった。

いつのまにか湯の中で横たえられて浮かんでいた。
気だるい夢に誘われて時間がたつのを忘れている。

フと気づくと少女達の姿が消え、ニツコリと笑った薫と杏奈がいる
のに気づく。

「あつ薫さん……杏奈ちゃんも……」

「どう？日ごろの疲れなんて飛んじゃってるでしょ」

「私、里に帰ってくると温泉に入るのが楽しみなの」

「本当……いいわよねえ。肩の凝りもなくなっているもの」

と首を振ってみせる。

「彼女達は？」

「そのこの壁の隙間から覗いてごらんなさい」

大きな岩壁に20cmほどの隙間があり、律子が覗いてみると
10人の少女達がキラキラ光る広い砂浜で波にたわむれていた。

(えっ？波？……光る砂浜？……)

驚いている律子に

「凄いでしょ。光る砂浜に湧き上がる温泉でつくられる波……」
とってお尻の下の砂を一掴み握って律子の眼の前で静かに開いて
みせる杏奈。

「これって……」

「わかった？・・・これが早瀬一族が山持ちになった秘密よ。砂金なの。混じりつけなしの100%の純金よ。」

「今も温泉とともに湧き上がってきてるの。そして・・・」
「といって壁を指し示す薫。」

「白くキラキラ光ってるのがダイヤモンドの原石だし、青いのはサファイア、

赤いのはルビー・・・他にもいろんな宝石が混じっているらしいけれど

「そんなのわからなくてもいいのよ」

「どうしてですか？」

「早瀬一族にとって、もつと大事な宝が見つかったんだもの」

「それって・・・」

「そうよ、沙希ちゃんよ」

「沙希は私にとって大事な人なんです」

「そうね。律ちゃんの可愛い旦那様ですものね。」

「でもわたし達、早瀬一族にとっても大事な人ってこと忘れないでね」

薫の笑顔で何もいえなくなってしまう。

「これ理沙から聞いたと思うけど重ねて言っておくね。」

「沙希ちゃんは律ちゃんと結婚してこの早瀬一族の長となるのよ。」

「そう運命づけられているのよ。だから、あなたの身体も大事にしてね」

「こう聞くと律子にとって純金も宝石も色あせてみえる。」

「一刻も早く沙希の傍にいたい・・・いきなり立ち上がる。」

「あらあら、・・・でも、私も同じ想いのよね」

「といってから大声で」

「貴女達、あがるわよー」

と叫ぶと

「はい・・・」
と元気な声が聞こえてきた。

壁からの自然の打たせ湯で身体にキラキラとついていた砂金を洗い流すと

少女達がシースルーの浴衣を脱がせ、乾いたタオルで湯を拭きとってくれる。

かいがいしく世話をされるのに慣れてしまつとこれほど気持ちいいものはない。

用意された真新しい下着をつけ、お揃いの浴衣を着せられると大きな鏡の前に座らされた。

「メイクされますか？」

「いいえ、ここは女性ばかりでしょ。素颜を見られてもかまわないからメイクはいらないわ」

「では、化粧水と栄養クリームだけにしておきます」

少女の手際よい手さばきでクリームが塗られ、顔のマッサージが繰り返されていく。

「その子はメイクアップアーティストなの。今度の映画にも連れていくわ」

薫の言葉で納得がいく。

「どうお杏奈！立場が逆になって自分が顔や髪を触られる気持ちは？」

「うん・・・楽でいいけど、いつも仲間達で交代でやっているからその延長って感じかな。

やっぱり私は沙希さんにするほうがいい」

ヘアもアップにされ浴衣の上に丹前を着せられ立ちあがった。

「さあ、食事をしてから沙希ちゃんの様子をみに行きましょうか」
薫に促されて食堂へと足を向けた。

まるで一流レストランのような豪華な食堂に思いがけない女性達
いた。

まゆみ、順子、理沙そして律子の義姉の静香が美味しそうに食事を
とっていたのだ。

「あら、義姉さん……」

「律ちゃん、見違えちゃったわ」

「似合うかしら」

「ええとっても……」

「で、下界のほうは？」

薫が順子に聞く。

「もう大変な騒ぎよ。事務所は電話がかかりっぱなしだし、仕事に
ならないから逃げてきちゃったわ」

「引越しのほうは？」

「それは、若い子ばかりで何とかうまくやってたみたい。

あとはうちの事務所となるフロアは静ちゃんが大急ぎで内装屋さん
を頼んでくれたので、

明日までには打ち合わせ通りの部屋割になっていると思うわ。明日
は出勤して皆の陣頭指揮よ」

「パソコン類は静ちゃんの会社が全て用意してくれるそうよ」

「静ちゃん……ありがとう」

薫に言われた言葉に照れたのか、顔を赤くしながら

「何いつてるの、家族でしょ」

「そう家族よ家族……みんな家族なのよ……」

とって溇が二人の看護師を従えて入ってきた。

「溇、沙希ちゃんどうだった？」

操が心配そうに尋ねたが

「検査の結果は1週間ほどかかるけど、男女とも正常よ。

でも、年齢差はあるはね。男性は成人だけど女性は中学1年ぐらいかな。

女性ホルモンが段々と活発になっていこうとしているってところよ」

「だったら、男性ホルモンは・・・」

「それが不思議なのよねえ、女性ホルモンになんの影響も受けていないの。」

それに精子の数ったら男性の平均の2倍もあって元気もりもりってとこよ。

まあ、これから私が沙希ちゃんの主治医として見守っていくけどね」

「じゃあ、沙希ちゃんのバストをもうすこし大きくできるの？」

「ええ、できるわ。まあ私の処方箋で無理をしなければ身体に何の影響も与えなくバストは大きくなるわ」

「本当ね」

「私を誰だと思っているの、天才と言われるこの溇さまよ」と姉妹内だけでの、溇のこんな口癖だ。

「で、沙希ちゃんは？」

「よく寝てるわよ」

「じゃあ、私・・・」

と律子が立ち上がると

「いいの、いいの。あんた、まだ食事をしていないじゃないの。」

今、真理姉さんがついていてから心配いらないわ。
はやく食事をしてしまいなさい。私たちも一緒に食事をお願いね」と操に言う。

まゆみや順子、理沙、静香は立ち上がった

「じゃあ、私達温泉に入ってくるから・・・」
と行って食堂から出て行った。

出された食事はコースのフランス料理になっていた。

こんなところで食べられるような美味さではなかった。

聞くと操のオーナーレストランで厨房を任されている女性の料理人を

連れてきているという。勿論、レストランは臨時休業だ。

彼女達も全員この隠れ里の出身者であった。

操がこれと眼をつけた女性達を海外や一流日本料理店に修行に出しているのだと聞いた。

「ああ、美味しかった。久しぶりに美味しい料理を食べたわ」

律子の思わずもらった賛美の声に厨房から女性達が飛び出してきて頭をさげた。

料理長らしい女性が

「今のお言葉とてもうれしいです。励みになります。ありがとうございます」
「ございました」

と行って厨房にもどっていった。

「律ちゃん、ありがとう。今の言葉で彼女達の苦勞が報われるわ」
操にいわれて

「とんでもない、私何も特別なことしていないのに・・・」

「いい子だわね、律ちゃんも沙希ちゃんも……」
薫の言葉に漣たちも頷いていた。

「さあ、私達も温泉に行こうか……それから、私は一眠りさして
もらうわよ」

「漣先生、朝から大きな手術を2件もされていたんですよ」

琴乃の話に

「余計なことというんじゃないわよ。……さあ、いくよ……」
と立ち上がった。

「クスッ」

と笑ってペロリと舌を出して漣のあとに続いた。

その後、病室でママと交代した律子は沙希の手を握りながら
いつしか自分もベットの片隅に顔をうずめて眠りについていた。

夜中に

「風邪をひくわよ」

という声を聞いた覚えがあるし

「あらあら、すっかり手を握っちゃって……これじゃあ沙希ちゃ
ん痛いわよ」

というママの声にも起きられなかった。

沙希の手を握ることによって安心しきっていたのだ。

そっとかけられた毛布の暖かさがなぜか心地よかった。

夢見心地に

「律姉……律姉……」

という沙希の声が聞こえる。(あっ、沙希の声だ……)

夢の中で聞いていた。しかし、いやに現実感のある声だ……

(ハッ)として身体を起こした。
目の前にニコツと笑う沙希の笑顔……でもまだ寝ぼけ眼だ。
でも次第に頭の中がはつきりとしてくる。

「沙希！……沙希なのね」

「何いつてるの。律姉……寝ぼけているの？」

沙希の声に霞が晴れるように頭の中がスッキリとしてきた。

沙希は身をおこしていた。

「あんた、大丈夫なの？ずっと寝ていたけれど」

「うん、寝だめしていたみたい」

沙希の元気な声……何より嬉しい。

「あら、もう起きたの？」

振り向くと漣と杏奈が入ってきた。

「どれどれ」

と漣が沙希の眼を調べる。

「うん、大丈夫。元気元気」

「ねえ、漣姉さん。沙希の身体って……」

「律ちゃん、心配しないでいいよ。」

何か疲労というより沙希ちゃんの身体がエネルギーの蓄積をしていたみたいなの」

「ふ〜ん……でもそれって……」

「それ以上は聞かないで、理由はまだ不明よ」

漣は首を振りながらも、今から朝の検診だからと律子と杏奈を部屋から追い出した。

仕方なく朝食に向かう二人。

食堂にはすでに多くの女性達がバイキングの朝食を楽しんでいた。

「おはようございます」

大きな声が飛び交う。

年齢差はあるが皆自分の皿に好きな分を取り、毎日食事をしているのだという。

しかし、早瀬の本家に人間がこんな大勢戻ってくるなんて年に何度もないらしい。

だから、里に住む若い女性達は都会から戻ってきた女性達から洗練された会話に耳をすませている。

現に今も律子のテーブルには少女達・・・高校生なのだろうか・・・が

ミチルと杏奈母子と律子の話をする内容に眼を輝かして聞いている。

周りにはミチルの美容室の美容部員達も取り囲んでおり

高校生達にとってこの先輩達は肉親であったり顔見知りばかりなので

判らないことや補足説明は彼女達にこっそりと聞いているのだ。

杏奈が見回すといつのまにか2重3重にも少女達が律子の周りを囲んでいる。

「じゃあ、律ちゃん。私これから姉さん達に話があるから、この子達のこと頼むね」

とミチルが行ってしまった。

まゆみも順子も義姉の静香もすでに姿はない。

ただ、いつのまにか律子と杏奈、そして美容部員達を取り囲むように、

高校生の女の子達が輪になっており、その傍で笑顔でたっている操がいるだけだ。

「律ちゃん、この子達の臨時教師をお願いね」

「律子さま、よろしくお願いいたします」

少女達が立ち上がって挨拶をする。

「ちょ……ちょっと待ってよ。その律子さまってのやめてくれない？」

何か背中がムズムズするのよ」

律子のざつくばらんな言い方に少女達は『うふふ』と笑った。

「では、どうお呼びすればいいんでしょうか」

利発そうな少女……『キュウチヨウ』と呼ばれていたの
なんだろうなと思っていたが『級長』と気づき納得する。

「そうねえ……私ね、高校のときから家庭教師をしていたの。

勿論、小学生のよ。そのとき”律ちゃん先生”って呼ばれていたの。

……そう……それがいい、そう呼んでちょうだい」

「はい、わかりました。では、律ちゃん先生！」

「はい、何かしら……」

「あのう……」

と声をひそめながら

「沙希お嬢様って、どういう御方でしょうか」

「うん、予想通りの質問ね。沙希って貴女達にとって謎だらけよねえ。」

私にもわからないことばかり。でも、とても優しい子よ。沙希の身体のこと知ってるわね」

「はい、なんでも男と女の両方のお身体をされているらしいってことは……」

「そう、それが神様が沙希に与えた試練だったのかもしれない。
小さい頃から『いじめ』『迫害』ばかりだったらしいわ。」

でも神様はその苦しみの中から少しづつ沙希に贈り物をしていったの。
あの可愛い声もそうね。これからも辛い試練はきつとくると思っけど、
きつと、平気な顔で乗り越えていくわ。
それに、もう一人じゃないもの。私もいるし、皆もいるから・・何かあったら沙希を助けてあげてね」
杏奈にしても美容部員にしても、初めて聞く話だったので思わず聞きいつていた。

律子の言葉に一齐に頷く少女達、何だか微笑ましくてうれしい。

「では沙希お嬢様は・・・」

「沙希は妖精なの。妖精って性別がないでしょ。」

そして、皆に幸せを与えてくれるのよ。あの不思議な力をみただしよ

「はい、なんだか震えるほど沙希お嬢様が気高くみえました」

「その沙希にはもうすぐ会えるから楽しみにしていなさい」

「はい」

少女達の溢れる元気が律子にも伝染してくる。若さつていいなあと思う。

「それはそうと、貴女達学校は？」

「はい、今日は臨時休校になっています」

「ここから町まで通ってるの？」

「いいえ、ほらあの窓から私達の学校が見えます」といって指を差す。

窓から見えるのは少し高台にある学校の校舎と満開になった桜だった。

(えっ?桜……?満開の桜……?)

季節はずれの満開の桜に思わず

「何よ、あれ?!……満開の桜だって?……季節はずれもいいところ」

と声が出てしまった。

「不思議よねえ、本当に」

と傍にいた操が口を出す。

「昨日までの寒さが嘘のように消えて、この里全体が四月の氣候にかわってしまったているの」

「じゃあ、昨日の沙希がやったことが……」

「ええ、里の氣候をかえてしまった……と考えれば……」

「嘘みたい……」

「この里はね、冬は雪が積もってとても寒いよ。特に年を取った人には暮らしにくいわ」

「では、沙希のせいね」

「そうとしか思えないもの」

「あの二人のお乳母さんのこと、とっても大好きだって……」

「ええ、私も聞いたわ」

と杏奈の言葉に頷きながら操は

「外に出てみなさい。沙希ちゃんの優しさが漂っているのがよくわかるわ。なんだか凄いのよ」

操の言葉に立ち上がった皆が早足で外に飛び出していった。

「何?……これ!……」

思わず両手を広げて空を見る杏奈。

「暖かいわ。これって……」

と美容部員達。

「そう、これが沙希だわ。……沙希の心の中なの……
という律子の声に少女達が踊りだした。」

いずれも暖かい沙希の心に触れて身体を動かさずにはいられないのであろう。

「これが沙希お嬢様なんですか・・・何か嬉しい！」

「お心に触れて・・・あれ・・・いやだ私涙がでてる・・・」

「本当だわ。級長の眼から涙が溢れている・・・初めて見たわ・・・綺麗！」

「みんな、この気候は沙希からのみんなへの贈り物だって」

「えっ、沙希お嬢様・・・どこにいらっしやるのですか・・・」

「私の心に聞こえてきたの。どうしてそんなことが出来るのか判らないけれど今私の心に聞こえてきたのよ。」

「・・・信じられない？」

『えっ？』という顔をして律子を見つめる杏奈。

誰にも聞こえない沙希の声が律子だけに聞こえる。

その魂の結びつきは二人だけのものなのか。

嫉妬ではないが、仲間外れにされたようで少し癪に障る。

でもそんな杏奈の心に沙希の声が聞こえたときは飛び上がるほど驚いたし嬉しかった。

（杏奈ちゃん、これからあなたが私の傍を離れないつもりなら

あなたは律姉のことをしっかりと見ていかなければならないわ）

（律子さんのことを？）

（ええ、そうよ。前に律姉は死ぬほど辛い目にあつたのよ。そして慟哭の中で律姉は成長していった。

でもそれとともに律姉は小さく縮こまってしまったわ。つまり臆病になつていったの）

(それだったら律子さんは……)

(駄目になったはずと言いたいでしょ。……そう、普通の人だったらね。)

律姉は違った。小さく縮こまったのは成長への前触れだった。あるきっかけで……)

(あるきっかけて?……)

(私と出会ったことよ。……律姉はこうして大きく羽ばたいて、私が変わるのを待っていてくれた。だから私はプロポーズしたのよ)

(ふゝ……なんだか羨ましいな)

(ふふふ……これだけは言っておいてあげるわ)

(えっ?……)

(あなたも早瀬一族ってことよ……ふゝ疲れちゃった。少し眠るわ。また後でね)
心の通信が切れた。

「杏奈！沙希と話をしていたでしょ」

「えっ？わかるんですか、律姉は」

「何故かしら？わかってしまうのよ」

「私と話していたのが沙希さんだからだわ。律姉ってほんと、いい奥さんね」

スーッと津姉で言えたし、なにか頑なだった杏奈の心も変わっていく。

「わたし……律ちゃん先生のこと信じます」

と級長……まゆみの子供、夕実だと聞き驚いてしまったのは後の話。

「私、沙希お嬢様と律ちゃん先生のおっしやることは全て信じます」

「私も・・・」

「わたしも・・・」

と律子の周りに集まってくる。

「では、もう一つ沙希の言葉を伝えます。律姉・・・わたしのことよ。

わたしが貴女達を導きなさいって・・・

でも、私が貴女達を教えることができるのは仕事で使っているパソコンしかないわ」

「あのう・・・」

と急に声が小さくなって

「私達パソコンってとても苦手なんです。教えてくれる先生もいなくて・・・」

「まあ、それではいけないわ。都会に出て仕事をしようとするパソコンができなくちゃあ就職もできないのよ」

「そうなんですか」

「そうなんです！・・・じゃあ、パソコンの設備は？」

「よくわかりませんが一人一台は揃っています」

「それじゃあ、行こう・・・。杏奈達も行く？」

「あたりまえでしょ、私、沙希さんから律姉から目を離すなんて言われているから」

「いやあねえ何か悪い事しているみたいな言われ方・・・まあいいわ、操叔母様行ってきますね」

「この子達のことよろしくね」

という言葉に送られて少女達に手を引かれ背中を押されながら坂道を登っていく。

外見は古びた木造の校舎だったが、いざ中に入ると驚いてしまった。近代的な設備がならんでいる。

最大2GBのCPUと256MBのメモリなど今の状態では宝の持ち腐れと

いわれても仕方が無いほど最新式のパソコンが広い教室の中で100台以上並んでいた。

律子が教壇に立つと、少女達がサッと自分の席に座りこんだ。

杏奈や美容部員達も空いた場所に座る。

すると後部のドアが開いて

「私達この学校の教師ですが、パソコンは全くの素人です。

すいませんが、私達も律子様に教えて頂きたいのです」

と十数人の教師達が入ってきた。

「いいですよ。でも、教える教えられると堅いことを言わずに一緒に勉強していきましょう」

律子の言葉に礼をしてから各々パソコンの前に座り込んだ。

「今、言ったように私はパソコンで仕事をしている関係上、人に教えるだけの知識があります。

でも、私には沙希のように世界的に販売されて売れつづけるようなソフトを

開発する能力はありません。

でも私がおしえる基本の知識がなければ沙希のようにには絶対になれないのです。

沙希も基本が大事だと言っています」

と言ってから

「パソコンはハードとソフトに分かれ……………」

とパソコンの授業が始まった。

律子もまた、いつこの教壇に立てれるかわからないので、真剣に教える。

生徒達も律子の態度に答えるかのように懸命についてくる。

いつのまにか、昼食の時間になり操達が学校の食堂に食事を運んできた。

生徒達と楽しい昼食の時間・・・操がこそっと律子に伝える。

「沙希ちゃんがね。ここにこしながら・・・律姉、がんばって・・・」

「沙希が？」

「ええ、その教え方でいいから。律ちゃんが知っていること全て伝えてあげてって」

「はい、わかりました」

沙希が見ていてくれると思うと、嬉しくて肩に入っていた力がスーッと抜けてきた。

昼からの授業も順調に進む。気が付くと陽がすっかり落ち暗くなっていた。

「以上がパソコンの基本です。」

部門によっては端折って進んでしまいましたが、違う部門は必要以上時間をとりました。

それはパソコン教本ではなく実社会で必要なものを優先させたからです。

いづれ又、この教壇にたてる日があると思いますが、

それまでみなさんはパソコンに触れること慣れることです・・・

以上、授業を終わります」

「規律！・・・礼！・・・律ちゃん先生、ありがとうございました」

生徒達が律子の周りに寄ってくる。

握手攻めにされて、何か目頭がジンと熱くなってきた。

「律姉、ご苦労さん」

ベットに座り込んで、ニコニコ笑っている沙希にとってても素敵！

「フー」

と息を吐いてベット横の椅子に座り込む。

何もしていなかったはずの杏奈も久しぶりの生徒だったので、やはり気疲れはあるのだ。

「はい、2人共手を貸して」

と律子と杏奈の手を取ると片方ずつ『フー』と息をかける。

すると身体がポカポカと暖かくなり疲労が溶けるように消えていった。

「不思議でしょ。私にこんな力があるなんて。これって安部あきあ
の力だって、

安倍晴明様が夢に出てきて教えてくれたの。

でも、悪いことにつかってはいけないうって言われたわ。

この里には力を強くする不思議な作用があるのですって」

「だから、里の気候を替えたり、遠くから私達を見ていてくれたの
ね」

「ええ、お梅さんもお篠さんも長生きしてほしいし、律姉や杏奈の
ことも心配だったし」

「ありがとう……」

と沙希のパジャマの一番上のボタンが一つはずれていて、そこから
少し谷間が見える。

「沙希、それって……」

「不思議でしょ。私が眠りにつくたびに少しづつ大きくなっているみたいなの」

「じゃあ、澪姉のお薬は？」

「飲んでいないわ。澪姉も少し様子をみるって……」

「ねえ沙希さん、みせてよ」

「ええ、恥ずかしいな……」

「何言ってるの、お姉さんのいうことは聞くものよ」と律子も口を挟む。

おずおずとパジャマのボタンを取ると、

「まあ、可愛い乳房！」

「本当？」

「本当よ、沙希の身体つきにはまだ少し小さめだけど……」

「その大きさがいいのよ」

とドアが開き薫がはいつてきた。ママと澪とミチルも続いている。

「それ以上大きかったら、陰陽師あきあのイメージではなくなっちゃうでしょ」

「あつそうか、あきあは10代だったんだわ」

律子が気が付いて薫に確認する。

「そうよ。今の沙希ちゃんの身体が処女のあきあにぴったしなのよ」

「沙希ちゃん、綺麗だわよ」

「ありがとう、ミチル叔母様……」

「でも何だか不公平ね」

とミチル

「何が不公平なの？」

とママが聞く。

「だって、薫姉さん・・・澪姉さんって呼ばれることよ。

一番若い私がどうしてミチル叔母さんなのよ」

「ふふふ・・・ママって可愛い・・・」

と杏奈のちゃちゃが入る。

「だってあなたには長女の有紀や次女の杏奈という大きな子供がいるじゃない。

それに比べて私たち孤独な独り者だものね、澪」

と喋ってヨヨと泣き崩れる薫。

プツと膨れるミチルだが、いわばこれは沙希の取り合いなのだ。

ニツコリ笑った沙希が

「いいわ、ミチル姉さん・・・これでいいでしょ」

その言葉にニツコリ笑うミチル。まるで子供だと頭を抱える杏奈。

「あつ、まゆみさんの車が帰ってきたわ。理沙姉の車も続いている」

沙希が突然言い出した。

「沙希ちゃん！一体どうしたのよ」

「澪姉さん、この里が私の力を強くしたの」

「力？」

「ええ、安倍晴明様の陰陽道に通じる秘術よ。

でも本当の秘術を会得するには晴明様の元で修行しなければ駄目なの」

と沙希が真剣な顔をして澪の顔を見る。

「沙希ちゃん。じゃあ、まゆみ達どのへんにいるの？」

とミチルが沙希をじっとみながら聞く

「山の入り口よ。私、里の人達以外入って来れないように結界を張

っておいたの。

えーっと……今、結界の扉を開けるからといったら

まゆみさんきよるきよるしてるわ……あっ車をスタートさせた」

ママが話しかけようとして漣が押しとどめた。そして、真剣な顔を
して沙希を見つめる。

「沙希ちゃん、まゆみの車に誰か乗ってる？」

「えーっとね、静姉と順子さんと他、知らない女性が二人……
あっ、二人共そっくり……きつと双子なのね。」

え〜、二人ともバツクの中に黒い手帳が……警察手帳だって
名前は……『警視庁捜査第1課 警部 飛鳥泉』

もう一人は……『警察庁広域捜査課 警部 飛鳥京』ですって」

「そう、では理沙の車には？」

「理沙姉のほかは……助手席に一人……後部座席に二人……
皆ママにそっくり……あっ、この女性達つてきつとママの妹、私
にとって叔母様達ね。」

え〜と……助手席の女性は……あつとこの人も

バツクに黒い手帳が……『警察庁長官付き秘書 警視正 飛鳥日
和子』

さっきの双子の方のお母様ですね。後ろの女性は……この人、私
知ってる。

検察庁の一番えらい人。え〜と確か検事総長の牧美香子さん。
もう一人の方は……わからないわ。バツクには名刺もなにも
持ってらっしゃらないのよ」

「それでいいの、最後の人は薫姉さんのすぐ上の姉、松島奈美って
いうの。」

仕事は今知らないほうがいいわ」

啞然としていた薫が澪に

「どうなの、沙希ちゃん的能力は……」

「私、精神科じゃないからわからない。

でも、もうすぐまゆみ達がつくとわかるんじゃないの。

でも私は信じてもいいと思ってる。不思議だけでもね」

「わたしは全面的に沙希のいうことなら信じます」と律子がいうと

「わたしだって……」

と杏奈も横から口を添える。

「ママも信じてるわよ。だって桜が証明してるじゃないの」

「そうね。澪みたいないなエリートさんには信じられないかも」

「あれ、薫姉さん。馬鹿にしてる。本当は私だって」

「澪姉さん、私も皆と一緒にいてもいい？」

「そうね。では昨日から寝てばかりいたからベットからおりて少し歩いてごらんなさい」

律子の手をかりてベットからおりた。

最初は少し足元がおぼつかなかったけれど、

ドアまで行って帰ってきたときには、しっかりした足取りになっていた。

「どう？ふら付かない？」

「ええ、大丈夫。ただ、なんだか胸が揺れる感覚がする」

「しかたないわね。それは、慣れるしかないし、ブラをつけるのは今はまだいいでしょ」

「ええ、我慢します」

みんなで沙希をかばいながらも、足取りがすっかり地に付いた歩き

方に安心したが、
途中パジャマでは恥ずかしいからと
白いワンピースに着替えたので食堂に行くまで少し時間がかかって
しまった。

食堂にはすでにまゆみ達が座っていた。

沙希があらわれると

「沙希ちゃん、ここに座りなさい」

と中央のテーブルのクッションをおいた真中の椅子に操が案内する。

「さあ、律ちゃんは沙希ちゃんの隣に座りなさい」

そして各自がテーブルにつくとそれを待っていたかのように
数人の女性ウエイトレスがスープを運んでくる。

豪華な夕食が始まった。沙希はまだ軽い食事だけだったが
楽しそうにニコニコしながら皆の話を聞いていた。

律子が見ていると、沙希とは初めてあつた5人の女性達は
楽しそうに食事をしながらも双子の二人は沙希の存在が気になるら
しく

ときおりチラチラと視線をおくっている。

ママの妹の3人はさすがに堂々と食事をとっていた。

食事が終わりコーヒータイムになると

オレンジジュースを飲んでいる沙希のほうに理沙が双子の二人を連
れてきた。

どうやら理沙に仲介を頼んだらしい。

「沙希、ちよつと・・・」

「理沙姉、判ってるわ」

といって双子の一人に手をだして握手を求める。

「あなたが双子のお姉さん・・・『警察庁広域捜査課 警部 飛鳥京』さんですね。」

始めまして、早瀬沙希です。・・・」
「と、いつてからもう一人の方に手を出す。」

「双子の妹さん・・・『警視庁捜査第1課 警部 飛鳥泉』さんですね。」

驚いたように見つめあう二人・・・戸惑いと不信感が二人を襲う。

「京ちゃんに泉ちゃん、沙希ちゃんは誰にも貴女達のことは教えていないわよ。」

それは、そこにいる律ちゃん、杏奈ちゃん、

薫ちゃん、澪ちゃん、ミチルちゃんも証明してくれるわ」

「じゃあどうしてわかったんですか？」

「私が張った結界を一度開けたとき調べさせてもらいました」

「結界？」

「あっ！あれは気のせいではなかったの？」

とまゆみが叫んだ。

「山に入ってくるとき車を一時止めたことがあったでしょ。」

あのとき気のせいだと思っていたことがあったの。道がぼやけて見えなくなったのよ。」

疲れ目かとおもって目をこすったとき、『まゆみさん、どうぞ』

って沙希ちゃんの声が聞こえた気がしたのよ。じゃああれって現実だったの？」

「私はまゆみ姉さんの車の後ろについていたから判らなかつたわ」

「私にはあなたの声が聞こえましたよ」

と双子の母親が立って挨拶にきた。

母親は優しい笑顔で

「もう私のことなんて判っているんでしょ。沙希ちゃん・・・そう

呼んでいいのかしら」

「もう、もう・・・嬉しいです。『警察庁長官付き秘書 警視正
飛鳥日和子』叔母様」

「やはりね・・・」

「では、私は？」

「検察庁の一番えらい人。検事総長の牧美香子叔母様」

「うーん・・・」

とうなっている検事総長である。

「じゃあ、私は判る？」

「いいえ、すみません。お名前だけは聞きました。松島奈美叔母様。
お仕事はわかりません」

といつてから、何事か小声で耳打ちする。

「まあ・・・」

と驚いている奈美。沙希はにこにこ笑っているだけでそれ以上何も
言わなかった。

「あのう・・・」

と泉が沙希に声をかけた。

「はい」

といつて泉の眼を見つめる。恐ろしいほど澄んだ瞳だった。

引き込まれそうになる。でも、警視庁捜査第1課で男達をあごで使
っている身だ。

負けん気が顔を出す。母親も我娘のそんな様子を面白そうにみてい
る。

沙希を観察する絶好の機会でもある。

「泉さん・・・悲しそうな目をしているわ。仕事のことと悩んでい
るのね。」

そうだ、いいお薬をあげます」
と、いつて食堂の隅につれていつて何事か話し込んでいる。

ときどき

「そんな・・・」

とか

「どうして・・・」

とか

いつていたが

「わかつたわ、部下に命じて確認してみる」

と、いつて食堂を出て行つた。

戻つてきた沙希に皆の視線があつまる。

「悲しい事件です。どうして人つてこんなに弱いんでしょう。間違
いであつてほしい・・・」
と唇をかむ。

「今度はわたしの番・・・」

と、いつて京が沙希の前に座る。沙希の潤んだ眼・・・澄んだ瞳には
京も引き付けられてしまった。

「京さん・・・あなたの眼には怒りが見える。余程憎い犯罪だつ
たのでしよう」

と、いつてまた食堂の隅に連れていつた。二人の声は聞こえてこない。

最後に

「ええ〜」

と、いつて京の声が聞こえ

「判つた。調べてみる」

と、いつて京も食堂から飛び出していつた。

皆どうなっているのかわからないから余計に興味が引かれていた。でも沙希はなにも話さない。

ただ、淡々とティッシュを一枚一枚とりだしては何かを折っている。

律子も理沙も杏奈も手持ちぶさたなので見様見真似で沙希と同じものを折りだした。

折り紙がテーブルに山盛りとなったところ、泉が食堂に入ってきて沙希の前に立った。

そして、どうしてか

「ごめん、間に合わなかった」といって頭を下げた。

「そうですか、駄目でしたか。律姉、窓を開けてください」

律子が窓を開けるとテーブルの上の折り紙を一枚手の平にのせると印をむすび『フツ』と息を吹きかける。するとたちまち白い鳩となつて窓の外に飛び出していく。

「白い鳩は神様の使いです。幼い子供の魂をあつ鳩が天国へ導いてくれるでしょう」

悲しげに話す。

「沙希ちゃん、今のは何だったの？」

薫が聞くと

「式です。私が呪をかけて白い鳩にかえました。私の式は結界を通りぬけます」

沙希に初めてあつた女性達は沙希の術をみてあつけにとられている。

「沙希ちゃん……そう呼んでもいいわね」

「はい、泉さん」

「駄目！・・・沙希ちゃんには泉姉せんねえって呼んでほしいの」

「わかったわ・・・では、えっへん泉姉・・・」

「何か、うれしい・・・私に妹ができたわ」

「泉さん、いいこと教えてあげる」

と静香が言い出した。

「あなた、疲れているわね」

「そうねえ、しばらく家にも帰っていないなくて満足に睡眠もとっていないかったわ」

「じゃあ、元気をあげる。沙希ちゃんとキスしてごらんさい」

「えっ、キス！」

「そうよ」

「だって・・・」

「だってじゃないの・・・早く・・・」

見ると沙希が泉のほうを向いて目を閉じている。

ええい、ままよと沙希の可愛い唇を吸いだした。

そうしたら・・・何か心地良い気分になって急に腰くだけになってしまう。

椅子に座りこみ眼を閉じていたが急に身体に力が湧いてくるのがわかった。

「あれ？」

思わず声が出て顔をあげると、

静香や律子、理沙、杏奈などがニヤニヤ笑っているのが少ししゃくだったが

思わず立ち上がりさっきまでの疲労感が全くなっているのに気づく。

「何・・・これ！」

「でしょう。沙希ちゃんとキスすると元気がもらえるのよ」
「そうそう、これが常識！」
と理沙。

そこにまた京が飛び込んできて、沙希の前に立つ。

「ありがとう、時効だと思ってたのが明日の12時までには伸びたので犯人を逮捕できたわ。」

犯人も12年前の一泊の香港旅行のこと等、すっかり忘れてたらしいの」

「でも、犯人がつかまっても犠牲になった4人の女性は帰ってきてきません」

「といってからテーブルの上の4枚の折り紙を同じく白い鳩に変え

「お願い。お前達、犠牲になった4人の魂を慰めてきてちょうだい」

という白い鳩達は窓から飛び出していった。

京以外はさきほど目撃しているのもう驚かなくなっていたが

「何よ、あれ。手品？」

「式だって」

「式？」

「いいから、あとで教えてあげる」

「あのう、京さん・・・泉姉・・・」

「ちょっと待った！」

「えっ？」

「沙希ちゃん、泉のこと泉姉って呼ばなかった？」

「ええ、呼びました」

「じゃあ私のこと、京姉って呼んでくれなくちゃ不公平っていうも
んよ」

「ごめんなさい。じゃあ、京姉に泉姉。前もっていつておきます。今回のお二人の事件、運がよくて解決しましたが、私は神様ではありません。普通の女の子なんです」

「わかりますよ、沙希ちゃん。あなたの言いたいことは。京も泉も沙希ちゃんの力ことはもう忘れなさい」

「わかったわ、母さん。私も警察官よ。自分の能力で犯罪を解決してみせるわ」

「私も」

と泉。

「では、沙希。わたしからお願いが・・・」
とまゆみが言い出した。

「わかっています。結界のことですよね」といってから印を結んで呪文を唱えると

テーブルの上の折り紙がたくさん白い蝶に変化して窓の外に出て行くもの

食堂にいる全員に一匹一匹、そして厨房にも・・・

耳の後ろに止まり姿が消え、小さな黒子となってやがて皮膚の中に溶けていった。

みんな最初は慌てて追い払おうとしていたがなぜか不思議な感覚に陥り、身体が動かなくなっていた。

「さあ、これで里の人達全員が自由に結界を行き来できるようになりました」

「何だったの？いまのは」

とママの真理が聞く。

「通行手形のようなものなの、ママ。結界は私がいなくてもこの先

何百年と持続していくのよ」

「でも、今の蝶は……」

「ええ、そうだね。操叔母様、あの空になっっている水槽使ってもよ
ろしい？」

「いいわよ、でもどうするの？」

沙希はティッシュを細かく引きちぎり水槽にむかって息を吹きかけると

小さな蝶となって水槽の中を飛び回っている。

「えさもなにもいりません。通行手形をもっていない里の人が帰ってきたら

自動的にこの子達が里の人達に取り付いて通行できるようになります。

一匹が減っても一匹が生まれます。この水槽を割らないように大事に扱ってくださいね」

もうなにも驚きはしない。伝説の申し子沙希はここにいる。

第一部 第八話

隠れ里での10日間、沙希には忙しい日が続いていた。カーナビのソフトは沙希が面白がって声の吹き込みをこなし、吹き込みだけではなくまゆみと順子そして静香の3人と相談していろんな機能を兼ね備えたソフトになった。

律子も中に入って行こうとしたら

「駄目！律姉と理沙姉はこのソフトを使う第一号となるんだから驚いてもらわなくちゃ」
と喋って蚊帳の外におかれている。

理沙と二人で面白くないというのは自棄酒・・・いや、自棄食いをしている。

だってこの食堂のシェフのつくる料理って美味しすぎて・・・ほら、ウエストのくびれがなくなってしまうそう・・・あゝあ、ブタさんになったら沙希のせいだからね。

あの夜以来、すっかり沙希に魅せられたのか双子の飛鳥姉妹は交代でこの里にやってきている。

世間での沙希に対する動きを報告にきているのもあるが4人がやっているカーナビのソフトの開発に関心をしめしてあれってすごい、真っ先に警視庁のパトカーに常備するわ。犯罪捜査の必須アイテムになりそう・・・と

蚊帳の外におかれている律子と理沙の前でわざとというのである。おまけになにやら沙希に頼んでいたものがあるらしい。

次の日

「京姉・・・出来たわよ」

となにやら小さな機械を渡している。

よく聞いて見るとスキヤナ装置を備えたモバイルで

犯罪現場で一時も早く指紋照合するときのため作ってもらったという。

警視庁にあるスーパーコンピュータとつながっているらしい。

「勿論、松島の叔母様に言っつて沙希ちゃんの特許申請をしておくからね」

と妹の泉の分の2台、テストもクリアして大事にバックに収められた。

或る日の午後、静香が一人で里にやってきて

「はい、理沙ちゃん」

と理沙に紙包みにはいったものを手渡した。覗いてみると入っていたのはCD-ROMだった。

「あつ、出来上がったのね」

「そうよ、これが第一号のCDなの、沙希ちゃんが理沙姉につて。少し特別の機能を備えたものなの。里の人にはみんな特別版になつてるわ」

理沙の車のカーナビにCDをセットすると運転席に理沙が乗り込む。

助手席には律子、そして後部座席にはどういいうわけか来合わせていた双子と杏奈がちゃっかりと座っている。

「じゃあ、少しドライブをしてきます」

といつて理沙の車がすつとんでいく。

「あらあら、もう行ってしまったの?」

とママの真理が様子を伺いに出てきた。

「ええ、何やらわくわくしていたみたい。もう子供のよう……」

「で、どうなの？」

「はい、評判を聞きつけて、もう注文が殺到してます。

まゆみ姉さんの事務所の引越しが終わったとたんの電話注文でしょ。まゆみさんも順子さんも対応に追われて映画の方のマネージメントが出来ない状態なんです。

で、ママにお願いにきました」

「わかりました。里の女の子の手がいるんですよ」

「はい、事務所の手の絶対数が足りないんです。そばで見えていて可哀想なぐらい。

休憩もとれないんです。私の会社の女性達も2〜3人手伝わせているんですが

適材とはいえません」

「そうね、誰でもとは言えないわね」

ママは少し考えこんでいたが

「あの子に頼んでみましょう」

「あの子って？」

「この間きていたでしょ。松島奈美……私の5番目の妹……謎の多い子だけど、

人を動かすことにかけては日本でも屈指の子よ」

「私も感じました。ニコニコと笑っておられました。が眼の奥には冷静で何かヒヤツとしたものを感じました」

「さすがね。仕事の内容は話せないけれど、

今までの経験があの子をあんな風に変えてしまったのよ。じゃあ、電話してくるね」

「あつ、沙希ちゃんは？」

「なんかソフトを今日中に完成してしまうって学校のパソコンの部屋にこもっているわ。・・・ちよつどいいわ、まだ何も食べていないはずだから、お昼をもっていつてくださらない？」

「はい」

と行って食堂に向かう。

「あつ 静香ちゃん、お昼まだなんですよ。ちよつと待っていてくれる？」

「私のは後でいいです。沙希ちゃんにお昼を運んであげたいので・・・」

「じゃあ、これをお願いできるかしら」

とポットと温かいお弁当を渡される。

「では、行ってきます」

学校のパソコン教室の前までいくとたくさんの少女達がドアの間隙から懸命に覗いていた。

「あら、貴女達どうしたの？部屋に入ればいいのに」

「でも沙希お嬢様の邪魔をしてはいけないと先生に注意されましたから」

「いいのよ、沙希ちゃんは全然気にしないわ。」

「・・・というより仕事に没頭してしまつたら、あの子何も聞こえなくなるの」

と行ってわざとガラガラと音をさせてドアをあける。

でも沙希は何の反応も示さなくキーボードを叩き続けていた。

そのスピードといったら・・・

「凄いー！」

少女達はその眼にも見えないようなスピードに眼を白黒させている。確かにキーボードを叩くスピードは以前より数段速くなっていた。静香の知る沙希のスピードではない。

「静香様！・・・沙希お嬢様の眼が・・・」
少女の一人が沙希の顔を指差している。

静香が見ると、沙希は眼を閉じたままキーボードを打っているではないか。

もう尋常ではなかった。

呆然と立ち尽くしていると、いきなり指が止まった。

そして、椅子を回転させて静香のほうに向くとニコッと笑う。

その笑顔の可愛いこと。先ほどの恐ろしいような仕事に対する姿勢とは全然違って、

少女達がいなかったら思わず抱きしめてしまいたくなる。

「ほーーー」

というため息が聞こえ、見てみるとどの少女達の瞳の中にハートマークが宿っている。

乙女らしく頬が紅潮して初々しい体臭が漂ってくる。

その中でも沙希のラベンダーの香りが一段と匂ってくらくらするよ
うな瞬間である。

平静を装って

「どうお？はかどっている？」
と聞く。

「ええ、もうすぐ完成します。この里の空気が私に合うのかしら
普段の数倍ものスピードで仕上がっています。」

眼を閉じているとその情景の画像が次々と完成していくんです「

「だったら、少し休んでお昼を食べなさい。余り根をつめると体に毒よ」

「はい、ちょうどエネルギーが切れかかって・・・お腹がすいちゃったわ」

その言い方が可笑しいと少女達がくすくす笑う。

神のように思われた沙希の人間臭さにホツとしたのだ。

ちょうどそこに

「はい、皆のお昼もってきたわよ」

といって操が入ってきた。

「静ちゃん、それ預かるわ」

といって沙希のお弁当をとりあげウエイトレスに渡す。

「では、お願いね」

ウエイトレスが行ってしまおうと

「今日は沙希ちゃんを囲んでの最後の昼食会をしましょうね」

「えっ、というと・・・」

「そうよ、静香ちゃん。今、まゆみさんから電話があつてね。

明日、京都に行くの。そして明後日から克蘭クインするそうよ」

「いよいよですね」

「そうよ、沙希ちゃん。がんばってね。

食事の面はうちのシェフを二人連れていくから何の心配もないわ」

「沙希お嬢様もう行ってしまわれるんですか」

少女達のがっかりした声が響く。

「里が寂しくなってしまう」

「本家の奥様方も行ってしまわれるんですよ」

口々に寂しさを訴える。

「大丈夫よ、すぐ帰ってくるから。だってここが私の故郷ですもの」
沙希の言葉には故郷に対する強い思いが含まれていた。

昼食会は盛大におこなわれた。

先生達も手が開いたシェフ達も・・・そして、帰ってきた理沙達も

特に理沙や律子、双子の京、泉と杏奈までもが沙希の顔を見るなり
「沙希、あなたって本当の天才ね。あんなことカーナビで作っちゃ
うなんて」

「沙希ちゃん、私驚きを通り越して今だに信じられないの。あんな
の常識では考えられない」

「沙希さんが天才ってこれで実感しました」
と次々と賞賛してくる。律子だけが冷静だった。

「どうしたの？律ちゃん。あなたは驚かないの？」

と義姉の静香が聞くと

「あんなの沙希にとってはあたりまえのことよ。沙希のすることは
全て私には常識だから」
と至極冷静に答えた。

昼食会が終わり、沙希は最後の追い込みのためパソコンの前に座つ
た。

横に律子、周りに昼食会に出ていた女性達が見つめていてもすぐに
仕事に没頭していく。

「すごい集中力だわ」

と京が泉にささやく。

『カチャカチャ』というキーボードを叩く音だけが部屋に響く。

その間3時間。誰も椅子から立ち上がろうとしなかった。

不思議なことだが全然退屈しないどころか沙希のイメージする画像

が
次々と見学者達の頭の中に映像として映し出されていくのだ。

『妖・平安京 風の章』は映画化される『妖・平安京 雪の章』とくらべても

数段面白いゲームソフトとなっていた。

雪夜又となっていた母を人に戻し、天へと誘った若き陰陽師あきあ・
・
・

平安京には師の安部清明の厳しい修行と京に暗雲をもたらす悪霊や鬼達との戦いが待っていた。

師の安部清明に対する源頼光の確執、そしてあきあに対する坂田金時等、四天王の恋慕、嫉妬・・・それに大江山の鬼シテン、嫉妬に狂った天皇の側室の生霊、そして最大の敵、
内なる心と身体から生まれた男のあきあ

『風の章』は平安京に吹き荒れる風の中であきあの戦いが始まり・
・
・ 終わりをつける。

『カチャカチャ』というキーボードの音はすでに消えており

「ほーうー」という全員の吐息が部屋の中に響いていた。

「静姉、出来たわ」とCD-RWのメディアを取り出す。

「これ、あとでバグを見ていてくださいね」

『妖・平安京 風の章』とマジックで書かれたCDの表、
今は何の変哲もないメディアだが、これがいくらの利益を生むのか
計りしれない。

京も泉も初めてみるゲームソフト開発の裏の世界、

こんな可憐な沙希が見せた天才の一面・・・

これが女優としても薫叔母から天才と呼ばれるのだから、

計り知れない可能性を秘めたこの少女に恐れさえ覚える。

この間、ちらつと見せた犯罪捜査のひらめき。

しかし、この可憐な少女には決して人の汚れた面は二度と見せまいと誓った。

夜になり全員が揃った大広間でママが

「明日、出発することで今日まで伸び伸びになっていた私達早瀬一族の

沙希ちゃんに対する禊の儀式を行ないます。

なお、今回早瀬の家族となった静香さん、律子さんに対しても家族の誓いの儀式を執り行います。

では、地下の黄金の湯まで……」

と言って立ち上がった。

黄金の湯……それは温泉に含まれる純度の高い砂金が砂丘のようにたまった場所である。

沙希の周りに集まった少女達が沙希の服を脱がせ素裸にすると

頭から被せる黄金色のシースルーの浴衣……

律子にはピンク、静香はブルー、他の女性達は真っ白のシースルーの浴衣だった。

少女達が沙希を横にしたまま担ぎあげ、厳かに砂金の砂浜へと誘う。

真理が用意された祭壇の上で祝詞をあげて厳粛な儀式が始まった。

突如、広い湯の中から長方形の岩が浮かびあがってくる。

動きが治まると沙希を担ぎあげた少女達はその岩に向かって歩みだした。

岩の前で止まり沙希を岩の上へと移す。

良く見ると岩の上には人型の窪みがあり、沙希はそこにスッポリとおさまった。

次に少女が一人づつ律子と静香の元に歩みより、手を引いて沙希の元へ連れていく。

沙希の寝る岩の両横にはそれぞれ双つの丸い窪みがあり、座るとお尻が

ピッタリとおさまるようになっていたのだ。

急にブーンと唸るような音が聞こえ、二人の感覚が異常になっていった。

上下左右の区別がまるでわからない空間。目の前が光の渦となり、光のトンネルを通りぬけるジェットコースターに乗っているような感覚……

異次元の空間を通りぬけているようだ。恐れもなにもない無の心境になる。

いきなり光のトンネルを抜けたと思うと宇宙空間に飛び出していた。

無限大の宇宙空間……無数の星が輝いている。明るさも違えば色も違う。

いきなり黒い大きな星が爆発した。無数の星のかけらは銀河を形成し

その中に1個の燃えるようなコアを持つ太陽……の周りを回る地球とその地球を周る月が誕生した。

気の遠くなるような長い年月をかけ、地球の環境が変化し空気ができ、海と陸地に分かれた。

大陸の大変動とか火山の爆発、そして氷河期という環境変化に生物

が生まれ死滅していく。
宇宙より飛来しつくられた超古代文明・・・
それも長い歴史の中の一瞬の出来事で古代科学と共に忘れられていた。
地球上では種が生まれ猿人類、ホモサピエンスと移りかわり文明が生まれた。
そして、人と人が・・・いつ消えることの無い戦争という愚かな血肉の争い。

日本でも天皇の位をかけての勢力争い・・・きりが無いほど血が流された。

そして・・・頃には平安京、安倍晴明という当代随一・・・

いや、現代までの時の流れの中、唯一の陰陽師が早瀬の沙希姫という姫に術を施した。

女性しか生まれ出ない家系をつくりだしたのだ。

なぜなら、愚かな争いしかうみだせない男の世界。止められるのは女性だけだ。

女性が男の上に立つ世界・・・平成の世までかかってしまった。

しかし、まだまだ時間がかかる。でもたった一粒の芽が生まれた。

沙希姫の生まれ変わりである早瀬沙希。希望の一つの命・・・。

大スペタクルを見ているようだ

・・・と急にスピードをあげて後退をはじめ、再び光のトンネルに戻っていく。

ブーンという唸りも消えて目を開けた。女性達の驚いたような眼が自分達に集中している。

ママを先頭に全員が駆け寄ってきた。

「どうしたの？・・・大丈夫？」

静香は立とうとしたが足元がふらつき崩れ落ちるように湯の中に落ちた。

ママが慌てて助け起こす。少女達が静香を抱えて砂浜につれていき横にする。

「どうしたのよ、静香ちゃん。それにそのブレスレットは？」

と左手の腕を示す。

「あら、本当だわ」

といってとろろとするが腕から外れない。散りばめられた宝石がキラキラ光っている。

「三人とも急に消えてしまったの。こんなこと今までになかったわ」

静香が体験したことを話していくと段々と皆真剣な様子を見せ

「では地球の創世記から平安時代までを体験してきたのね」
澪が聞く。

「ええ、まるで3次元のパノラマ映画みたいだったわ」

「そのブレスレットといい・・・」

と横に気を失ったまま寝ている律子の足元を示し

「律ちゃんのアンクレットといい、まるで皮膚にはりついてしまっ
て取れない不思議さ。」

「こんなの初めてよ」

と超のつくエリート女医のお手上げの現象が起こっていた。

「あつ、沙希ちゃんは？」

「もっと不思議なの」

と指してあの岩を指し示す。

岩の上は透明のドームで覆われていて、

その中には乳白色の霧が充満していて沙希の姿がまったく見えない。

何人かの少女と京と泉がドームを開けようとしていたがビクともしない。

「こんなこと、一度もなかったのに」
と何事にも動じなかったママの真理が泣きそうな声を上げている。

「うーん……」

と律子が声をあげてパチッと眼をあげた。

「ここはどこじゃ」

律子の声とは別の声をあげる。

律子の体を世話していた杏奈が律子から飛びのいた。

律子でない存在が体を起こして周囲を見渡す。

「おぬしら、なんとというはしたないなりをしているのじゃ」
といつてから自分の体を見る。

「キヤー、わらわの衣を……わらわの衣……かえしてたもれ」

といつてさめざめと泣き出した。

外見が律子なだけに稀有な感じがしてならない。

「ごめんなさい」

といつて飛鳥日和子が律子の前に座って

「ごめんなさい、ここはお風呂なの。だから衣をぬいで体を洗っているのよ」

「お風呂？」

「そうです。昔はどのような名前か知りませんが女性なら汚れているのはいやでしょ」

律子が頷く。

「それより、あなたのお名前を教えてください」

「名前？・・・おつわらわの字あだなのことか」
日和子が頷くと

「わらわは時の帝の娘、早瀬の沙希姫じゃ」

「早瀬の沙希姫？」

「そうじゃ。あつ、晴明はどこじゃ・・・晴明にあわせてたもれ・・・」

「晴明？」

「そなた晴明も知らぬのか・・・」

と気の毒そうに日和子を見ている。

「当代きつての陰陽師安倍晴明じゃ」

「あつ」

と静香が声をあげる。

早瀬の沙希姫のことはさきほど耳にしたばかりだ。

静香は律子に向き直り、

「あなたは晴明様に術を施されましたね」

「ああそうじゃ、後の世の争いをなくするため女子しか産めなくする秘術じゃ」

「あつ、じゃあ・・・」

と言つてから真理が口を押さえる。

「沙希姫さま、晴明様はもうこの世にはおられませぬ。

今の世は姫様が生きていた世から1000年以上もたっているのです」

「何？晴明はもうおらぬのか」

沙希姫が寂しそうにいう。

「そのかわりといつてはなんですが、ここにいる女達全てあなたの何代もの先の子孫なのです」

「なに！おぬし達がすべてわらわの子孫だと申すのか・・・」
「はい」

「では、争い事は・・・」
「残念ながら、まだまだ女の地位は男に比べて低いのです。でも、小さな芽ですが段々と育っています。」

醜い争い事は私達の代では無理かもしれませんが
後に続く娘・・・孫たちが平和な世をつくってくれるでしょう」

静香の言葉にうなづく沙希姫・・・。

「では、沙希姫様。どうか天におかえりください。」

そして私達をつくる平和な世を見守ってくださいませ」

沙希姫は静香のいうことに大きく頷いて眼を閉じたが、

「駄目じゃ、駄目じゃ・・・わらわには天に帰る道がわからぬ。どうしたらいいのじゃ・・・」
と泣き出してしまった。

「私がお手伝いしましょう」

という声が聞こえた。この声は沙希の声だが少し変だ。いつもより声が若い。

見るといつのまに開いたのか透明のドームが消え、沙希が岩の上で身をおこしてこちらを見ている。

そして岩から降りるとすっかりとした足取りで近づいてきた。

「そなた、どこぞで見た顔じゃ」

「はい、私はあなたなのです」

「そなたがわらわだと？」

「はい、私は貴女の生まれ変わり。字は早瀬沙希と申します」

「おう、おう・・・わらわと同じあざなじゃ。わらわの生まれ変わ

りがおったのか……。

ふむ、そなたから不思議な強い力を感じるぞえ。清明と同じ力じや。

そなたの身体から清明が好きだった香りもする。

不思議な子じや。女子の匂いも男子の匂いもするが……

ふむ、そなた婦女子が放って置くまい」

「私はあの中で
と岩を示す。」

「安倍清明様に厳しい修行を受けていました。今の時では短い時ですが

あの中では10年の厳しい修行を受けております。

修行を終え師の清明様から名もいただきました。安倍あきあと申します」

「安倍あきあか……いい名じや」

「では、沙希姫様」

「わかつておる。そうじや、この身体の持ち主……律子といわれるか。

わらわの姉と同じ名じや……その律子に後であやまっておいてたもれ。

かつてに身体を使ったわびじや。

わらわがこの身体から去ってもわらわは律子を見守ることになる……

・それが天の掟なのじや」

沙希が印をむすんで空に五芒星を描き呪を唱えると

小さな光の粒子が天より降りてきて沙希姫の身体を包み込んだ。

「わらわの子孫たちよ、さらばじや。心正しく生きよ……」

と言って光の粒子の中にとけて天に消えていった。

一同『フー』と息を吐きどんとお尻を砂金の砂浜に落とす。異質な体験をして気疲れしてしまったのだ。

『パチ』と眼をさました律子に

「律ちゃん、気がついたのね」

と静香が寄り添うと

「いいえ、ずっと聞いていたのよ。」

沙希姫様がいるあいだ、身体を自由に動かせなかったけど、何だか心地よい空間に浮かんでいたの」

そこへ沙希が近寄ってきた。

「律姉、これから沙希姫様と自由に連絡がとれるわよ」というと

「沙希のいうとおりじゃ、私はそなたをいつまでも見守っておるぞよ。沙希と夫婦になる娘よ」

頭の中に声が響いてきた。

きよるきよると見回す律子に何も知らない女達が不思議そうに見守っていた。

気を取り直して

「それより沙希。あの中で10年間修行したってほんとう?」と聞くと頷く沙希。

「10年間の修行は本当に辛かった。」

力が強くなっていた分、中々コントロールできなかつたわ。

安倍晴明様のところで修行しなければ力の暴走で私自身どうなっていたのか見当もつかない」

「力の暴走?」

「ええ、無理な術は闇を呼ぶって晴明様から随分叱られたし現に本当に鬼が現れて危ない目に何度もあつてしまったわ」

「鬼?」

「そうよ、信じられないでしょ。でも鬼は本当にいるの。絵で見るような鬼や人の皮を被った鬼。今の世の中にもいっぱいいるわ。」

欲望、嫉妬が人を鬼にかえるの。そうですわね。日和子叔母様」

「沙希ちゃんのいうとおりね。平安時代も今も何も変わっていないのよ。」

欲という皮をかぶった人間、自己中心的な人って今のほうが多いかも」

「沙希ちゃん、安倍晴明様ってどんな人だったの？」

薫が聞く。今度の映画では大事な役柄だから興味がわくのだ。

「帝に仕えとんとん拍子に出世したけど、どんな偉い人にも妥協しなかったわ。」

人の優しさを愛し、花を愛し、生き物を愛していたわ。

晴明様は狐の子といわれていたけど本当だったかもしれない。

ときどきフツといなくなつては帝の呼び出しにも応じない気まぐれ屋さんだし

鬼たちの横行する闇夜にも平気で出かけていくのよ。

そして肝心なのは平安京に結界を張って大災害を防ぐ守りの要でもあったのよ」

そして、静香のブレスレットと律子のアンクレットをみて

「それは、静姉と律姉が沙希姫様の姉君だった証拠の品なの。命を守る品だから大事にしてね」

と結ぶ。

「それと……」

と岩まで行き、途中の裂け目に手を入れると、『ゴー』と音がして先ほどまでの岩が反転した。

岩は長持のようになっていらく、沙希が蓋を開けると、ママと操、日和子呼んだ。

「ママ、操叔母様、日和子叔母様。これは早瀬一族に伝わる三種の神器なの。」

一族を守る大事な宝だから、鳳凰の間に置いておかなくてはならぬの。」

と黄金の器をママに、黄金の鳳凰像を操に、そして黄金の豎琴を日和子に渡した。

ママが戸惑ったように

「沙希ちゃん。ここには鳳凰の間なんてないのよ。」

というとき沙希が

「ごめんなさい。この里にはまだまだ隠された財宝と秘密の部屋がたくさんあるのよ。」

といつてから

「すいません、日和子叔母様。黄金の豎琴を持って付いてきてください。」

といつて砂丘の上へと誘う。隅の岩の所に窪みがあった。

「叔母様、ここに豎琴を差し込んでください。」

日和子は言われた通りに差し込むと、ぐるりと自然に一回転すると綺麗な豎琴の音色が聞こえてきた。

皆も遠巻きに見つめている。

「この音色は悪心を持ったものには激しい雑音に聞こえ、一時聴覚が麻痺してしまうそうです。」

この中には誰一人そんな者はいない。

音色が終わると足元の一部が序々に持ち上がって地下への階段が現れた。

沙希が先に階段を二三段降りると、どろいっ仕掛けになっているのか

照明もないのに壁や天井が光だす。

「ママの後に操叔母様、日和子叔母様は豎琴をぬいてお持ちください。

大丈夫です。もうこの蓋は閉じられません。

あとの方達は日和子叔母様のあとに随意についてきてください。

ただ、日和子叔母様を追い抜いてはいけません」
とってから階段を下りていく。

こわごととママ達が続いて、そして律子や静香、無論京や泉、少女達が続いてくる。

通路の真中あたりに通せんぼをするように鏡が置いてあった。

沙希が説明する。

「この鏡は正邪の鏡です。悪心を持ったものがこの鏡を通ろうとすると死があるのみです。

正しい心の持ち主だけが鏡の向こうにいけるのです」

とってから鏡に手をのばす。

するとまるで鏡が水のようになり沙希は鏡の中に入ってしまった。

続いてママ、操、日和子、あとは女性達が続いて鏡の中に入ってくる。

「どろいやら全員が揃ったようですね。ここからは自由に行ってください」

沙希の言葉にほっとするが今まで我慢してきた好奇心が頭をもたげてくる。

「沙希ちゃん・・・」

と声をかけるが

「詳しい説明は鳳凰の間に入ってからします。もう少し我慢してく

ださい」

と軽くかわされてしまった。

そこからすぐに地下通路が終わり、上への階段に変わった。階段はすぐに終わり、行き止まりとなっている。

「ママ、その器をこの丸い窪みに差し入れてください」

ママは沙希にいわれた通りにすると器が回転をはじめた。

何十回転したのだろう。横手の岩が音をたてて崩れ砂になった。驚いたことにその砂も砂金だった。

そこから現れた黄金の扉に沙希が手をかけ横に引くと軽々と扉が開く。

これもどんな仕掛けがあるのか自然に部屋の明かりが点った。

「ママ、黄金の器をとってきてください」

もうママが器を壁から離しても何も起らなかった。

「操叔母様、あの壁のところに鳳凰の像をおいてください」

操が像をおくと『ピーピー』と鳳凰の像が鳴いた。

「ママの黄金の器はあの像の下の窪みに、日和子叔母様の豎琴はその上の窪みに置いてください」

もうママも日和子も沙希のいうことには従っただけだ。

三種の神器を置き終わると鳳凰の嘴から砂金を含んだ水が流れておちる。

そしてその下の豎琴に落ちた水は糸を通って下の器に……器から落ちた水は川となって壁の向こうに流れていった。

「この水は砂金よりも尊い聖水です。悪心を洗い流す効果があります」

「沙希ちゃんこのお水はどこへ行くの」

「あの温泉と合流するだけです。では戻りましょう」

「この隠れ里を見つけたのは安倍晴明様です。」

平安京にいながらも術で日本中を見回っていたとき偶然にここを見つけたそうです。

誰にも言わずにおこうとしていたのが、沙希姫様に術を施したことで

世の平和のための軍資金にするのに早瀬一族にここを守らせたのです。

世の中が乱れていたため”黄金の湯”だけを教えておいたようです」

「ここは誰がつくったのかしら」

京の疑問に

「京姉は竹之内文書を知っています？」

「余り知らないけれど太古に栄えた文明を書いた古文書でしょう。でも、でたらめだと聞いているけれど」

「ええ、竹之内文書が正しいのかでたらめなのかは知りませんが、晴明様曰く、平安時代よりもっと大昔に大変な文明を築いた黄金族がいたそうです。」

地下のあの施設を見てみると現在の文明よりも遥かに優れていたようですね」

「黄金族かあ……」

「他にもあんな宝がここにはあるんですよ」

「ええ、でも今はそれを話す時期ではありません。」

映画の撮影が終わったらもう一度皆さん集まってください」

沙希の言葉に皆頷く。この里には欲の突っ張った人間は一人もいなかった。

「ところで沙希ちゃん何か変……」

「といたしますと……」

「その言葉使い」

「ごめんなさい。これ清明様の話し方なの。ついうつってしまって……」

「それになんか幼くなつたみたい」

「えっ、わかりました？……苦しい修行の途中でなぜか若返ってしまつて……」

清明様に時判断では今、16歳だそうです……いえ、16歳になつてしまつたの」

何か今後大変なことになりそうな予感を残して沙希たちは映画の撮影のため京都にむかつた。

新幹線に乗るとき、どこから情報がもれたのか東京駅にマスコミ各社がつめかけ

それに一般の野次馬が押しかけて大変な騒ぎになった。

薫は早乙女薫として堂々と新幹線に乗り込んだが、日野あきあの姿が見えない。

マスコミは騒ぎだした。インタビューをうけた早乙女薫も

「さあ、あの子は皆さんもご存知のように謎が多い子ですよ。

私にもわからないわ、もしかしたら……」

「もしかしたら？」

「陰陽師の術で空を駆けていったかもしれなくてよ」とすつとぼけていった。

「そんな馬鹿な……」

と記者達は一笑に付した。

薫にインタビューをしている間、少し時代遅れのガン黒の化粧をしたセーラー服の女子高生が三人、『きゃっきゃっ』といって薫に向かって騒いでいる。記者達は迷惑がって邪険にあつかっていたがそんなことにめげる現代ツ子ではない。いつの間にか輪の先頭まできて薫の手を握ろうとしている。

「だって、私たち薫さんの大、大、大ファンだもん。学校休んできちゃった」

と若い女子高生が二人地団太を踏みながら薫に声をかけている。

この若い女子高生達、素顔はとても可愛いと思うのに、こんな化粧どこがいいのか

おじさん達にはとても謎だった。もう一人の女子高校は少し年齢がちぐはぐのようだ。

それをいうと

「おっさん、よういうた。わし、ねりかんあがりやから、年が合わへんねん。

こいつら、わしの妹達や。こいつらを守らなあかんから女子高生やってるんや」

と大きな声で話している。

このスケバンの話を聞いて女性記者達はこの二人から少し離れた。た。

「あなた達、そんなことをこんなところで話しちゃってもいいの？」

「あっ」

と口を押さえたしぐさが何とも可笑しい。

薫も笑いながら

「さあ、早く学校へ行きなさい。こんなところ見られると補導され

るわよ」

「いいです。そんなのへっちらです」

と姉がいう。

「わたし達を薫さんの付き人にしてください」

と姿に似あわぬ可愛い声で一生懸命お願いしている。

「おうちの人はしってるの？」

「とうちゃんとかあちゃん、二人共小さい頃死んじゃったの」

「お願いします。付き人にしてください。ほら、京都までの切符買ってきちゃいました。」

もうお金が残っていません。お願いです……」

三人のガン黒女子高生に手を握られた薫は困った顔をしていたが

「しょうがないわね。京都までは貴女達を連れて行ってあげる。」

その間お話を聞いて決めるから……でも学校は卒業しなくちゃ駄目よ」

「は〜い！」

薫の許可を得たのが嬉しいのか、『きゃっきゃ』と喜びながら新幹線に乗り込んでいく。

「では」

と行って薫が乗ると『ス・』とドアが閉まった。

薫が席について、ホーム上のマスコミや野次馬にニッコリと笑っていたが

あの女子高生達はなぜか『やったー』と行って飛び跳ねている。

姉といったスケバンがマスコミ陣に『アカンベ』をし、妹達は恥ずかしそうに頭を下げている。

マスコミの中の老練の記者が

「あつ、やられた！」

と大きな声をだした。

「どうしたんですか？」

若手が聞くと

「あの三人・・・あの妹の一人が日野あきあだ。もう一人と年上のほうはわからないが

きつとマネージャーと付き人だろう」

大騒ぎとなった。

新幹線で帯同している同僚達に電話する者、

京都駅に待ち構えている支社の記者達に連絡する者・・・。

老練の記者はなぜかすつきりとした顔を見せている。

「どうしたんですか、そんな嬉しそうな顔をして」

「いやね、久々に何かすつきりとした気持ちなんだよ」

「すつきり？」

連絡の終わった記者達が聞いている。その記者達にむかって

「どうかね、あの子達にだまされたくやしきで辛らつな記事を書くかね」

「いいえ、そういえば、あつ、やったな。くそ、今度はだまされないからな。

つていう気持ちになっています」

「そうだろう。我々マスコミにむかっつての演技・・・何度もやっつてほしい。

今度は・・・今度は見破つてやる・・・なんてね」

「私たちが相手のお芝居・・・なんだか自分もドラマの出演者みたいだったわ」

女性記者の声にうなづく女性陣。

「なんか私、日野あきあの大ファンになっちゃったわ」

「わたしも・・・」

そんな女性達に

「おいおい、ファンになったからって記事に手ごころを加えたりしないだろうな」

「いやあね男って・・・失礼しちゃうわ・・・ねえ」
「そうよ、そうよ」

女性達の反撃にたじろじる男性陣。

「それにあきあは期待に反した演技は絶対しない。そう確信してるわ」

「どうしてそんなこといえるんだい」

「女だからよ、女にしかわからないの」

「女だから、男だからというのはともかく、わしは今度の映画見たくてたまらない。

久しぶりだよ、映画に対してこんな気持ちになったのは。

昔、スターがキラ星のごとくでて銀幕を飾ってた時代以来だよ」

なつかしそうに話す老練記者の目に日野あきあの姿が輝いている。

一方、ホームでの記者達の様子を知らない薫たち。

「沙希ちゃん、そのメイク早く落としてらっしゃい。杏ちゃんも律ちゃんも・・・」

私・・・私・・・その姿みていると・・・もう笑い出して止まらなくなっちゃいそう」

慌てて洗面所でメイクを落とす三人。薫の笑い声が聞こえてくる。

杏奈も杏ちゃんと呼ばれるようになってなんだか嬉しい。

実は沙希の年齢が若返ってしまったことで杏奈と沙希の呼び方が逆転してしまった。

沙希は杏奈を杏姉と呼び、杏奈は沙希と呼ぶ様になった。

「あら、セーラー服着替えないの？」

「ええ沙希がこのままでいたいって、でもわたし・・・」
「恥ずかしそうに俯く。」

「私だって恥ずかしいよ」

と杏奈。

「そうね、沙希ちゃんは現役だし、杏ちゃんは現役のようなものでも、律ちゃんね……」

「もう、まゆみさんは」

まゆみのからかうような言葉に乙女のように恥ずかしがる律子。

これもセーラー服をきているせいなのか。

「いいじゃない、このコートを貸してあげるから」

律子は薰からコートを受け取るとすぐにセーラー服の上に羽織ってしまった。

「律姉、せっかく似合っていたのに」

と残念がる沙希。

「でも、律ちゃんのスケバンよく似合っていたわね。それにあの大阪弁って……」

「女子高のときちょっとだけ……」

「よく言うわ、静ちゃんから聞いたわよ。女子高時代スケバンの番長だったって」

「えっ、律姉ってほんものなあ」

と杏奈が喜んで手を叩く。

「でも沙希ちゃんたち、あんなのよく考えたわね。私もすっかりだまされるとこだったわ」

「あれ、沙希が考えたんです」

「というより、一度セーラー服着てみたかったし、ガン黒の化粧をして変身してみたかったのよ」

「でも、杏ちゃんはさすがね。もしかしたら現役時代に……」

「少しだけね」

と恥ずかしそうにいう。

「わたしはすっかりだまされていたわよ。車内で『やったー』って

喜んでいたでしょ。

なんて子達だろうつて正直腹をたてていたのよ。
でも薫が『沙希ちゃんよ』って言うてくれたからわかったの」

「私はね、三人に手を握られたとき微かに香ったラベンダーだね。
あつ沙希ちゃんだつてわかったの」

といったとき、車両のドアが開いてマスコミの記者達が入ってきた。

「ふふふ、やっときたわね」

薫がこつそり笑う。

先頭の記者が

「早乙女薫さん・・・えつと・・・こちらが日野あきあさん？」

と首をかしげてる。

「素顔は幼いでしょ。でも日野あきあで間違いなくつてよ」
と薫が紹介する。

「あのソフトをつくったのはこんな若い方でしたか」
と感心しきりだ。

「で、こちらは？」

「私の専属のファッションコーディネータの千堂杏奈さんです」

「千堂つて・・・千堂ミチルさんの？」

「はい、次女です」

「なにか、凄い布陣ですねえ」

「そうですね、それだけこの映画に対する私たちの想いつて凄いものがあるの」

「駅でのあのお芝居はどういうことだったのでしょうか」
記者のインタビューがはじまった。

「あのとき、すごい人だったでしょ。」

お年よりの方が押されて倒されそうになったり、子供さんの泣き声があちこちから……

これではいけないと思って、いそいで駅のトイレで着替えましたのよ。

お芝居する予定なんてなかったんですけど、あの場所では異質な格好だったでしょ

だから急遽お芝居をしてしまいました。怪我人がなくてほっとしています。

そして、マスコミのみなさん。騙したようになってしまっでごめんなさい

と頭をさげる。

『パチ……パチ……』カメラのシャッター音とフラッシュの光が

日野あきあとしての沙希にふりそそぐ。

「でも、とっさにあんなお芝居をするなんて」

と女性記者は感心している。

「だから、この間の記者会見でも言っているでしょ。この子には『演技の神様』が宿ってるって」

薫のいうことを一字一句もらさぬメモを取る音……

「ごめんなさい、今から京都につくまでこの子と本読みをしたいので

これでインタビュー終わりにしてくださいさらない？」

記者達は顔を見合わせている。もっといろんなことが聞きたかったが……

そこで一番年嵩の記者が

「わかりました。そのかわりといっではなんですが、そばで聞いていてもいいですか

いえ、決して邪魔はしませんから・・・」

薫は困った顔をしたが沙希が頷いたので

「では、カメラは厳禁ね。立って聞くのもやめてほしいの」
「こんどは沙希が」

「ごめんなさい、恥ずかしいから眼を閉じていてくださいね」

「いいでしょ」

と記者達は空いている椅子に腰かけた。

どうせわからないだろうから椅子の隙間からこの小型カメラで・・・
と思っていた記者は本読みが始まるとそれどころではなくなった。

閉じた眼の奥でその情景がリアルに浮かんでくるのだ。

眼を思い切つて開けたら情景が消えてしまふ。

慌てて眼をとじると再びリアルな情景が浮かんでくる。

不思議なことだが二人の天才女優がその情景の中に納まり、

かたや雪夜叉としてもう一人は若き陰陽師あきあとして動きだす。

立体映画を見ているようでもう夢中になって見てしまっている。

どれほど時間がたったのか、急にその情景が消えてしまった。

慌てて眼を開けると、ちょうど京都につくアナウスがきこえてきた。

もう少し見ていたかったのに！記者達は顔を見合わせて残念がつて
いる。

つとみると薫達が立ち上がって荷物の整理をしているが日野あきあ
だけがない。

「あのう、日野あきあさんは？」

「えっ、今までそこにいたのに」

四人とも戸惑った顔で周囲を見渡している。

「あつ、帰ってきたわ」

「いえ、何だか様子が変」

セーラー服の女の子はメガネをかけて髪の毛を後ろでくくっている勉強家タイプだった。

つまり全然別人だ。それにスカートの色も赤から黄色に変わっている。

「あのう、早乙女薫さんですか」

「ええ」

「よかった。私って全然世間に疎いので、有名女優といわれてもわからなくて」

「で、わたしに何の用なの？」

「あつ、すみません。」

今、トイレにいたら赤いスカートのセーラー服をきた女の子にこれを渡されたのです」

薫が封筒に入ったその封筒から手紙を出して見ると

『薫さん、またホームで事故が起らないか心配でたまりません。だから、薫さんと離れて先にホテルに向かいます。』

我儘言つてごめんなさい　日野あきあ
と書かれてあった。

「しまった、あのう・・君、この女の子は？」

「ドアがあいたら、ホームを走っていききましたけど・・・」

「おい、追いかけるぞ」

半数の記者が急いで降りて走っていく。

残りは薫に張り付いている。薫の番記者らしい。

「あなたはどうしてこの新幹線に？」

「はい、母が一度、里の祖母のところに行ってきたさといって」「お婆さま?」

「はい、母の里はとてもいいところなんです。桜もきれいし、温泉もあるんです。」

祖母は梅っていうんですけれど、とても元気で・・・それが私にとつて凄く嬉しかったんです」

「そう、お婆さまの名前って梅っていうのね」

「はい」

「貴女、お名前は?」

「佐野沙希っています」

「ふ〜ん、沙希ちゃんかあ。いいお名前ね」

「はい、母には感謝しています」

「あなた、おうちは?」

「はい」

とちょうど薫達が泊まる京都撮影所と同じ町名をいう。

「あら、私達のホテルと同じ町内じゃないの。いいわ、送ってあげる」

「いいですよ、ご迷惑でしょうから・・・」

「いいのよ、なんだか貴女とは他人のようにには思えないから」

そばで聞いている記者達は物好きになっていう顔をしている。

まあ、早乙女薫の気ままな性格は世間が周知するところだから。

まゆみがレンタルしておいた車が横付けされると困んだファン達を

「ごめんね、急いでいるから」

と車に乗り込む。

「さあ、沙希ちゃん。いらっしやい。」

おずおずと乗り込むセーラー服の少女。

ファン達はそんな少女を何者だろうと怪訝な面持ちでみつめる。

律子はその後ろから乗り込むとすぐにまゆみが車をスタートさせた。

薫が後ろを振り返って

「ふふふ、追いかけてくるわ」

「薫姉さん、沙希はホテルに無事についたかしら」

杏奈が心配そうにいうと

「杏ちゃん何言ってるのよ、ねえ律ちゃん」

「そうよ、しっかりしなさいよ」

杏奈には何を言ってるのか訳がわからない。

「まゆみはどこからわかっていたの？」

「母親の里……よ」

「私はね、この子の手紙を読んでいる時に微かに香ってきたラベンダー……」

「律ちゃんは？」

「私は全般的だけどやはり”佐野沙希”っていう名前だわ」

「えっ？……では……」

「この子の名前、聞いていたでしょ」

「確か佐野沙希って……ええ〜」

と思わず声を上げてしまった。

「杏姉ったら、一度も私を見ずに違う方向ばかり見ているもの……」

「だって、心配だったもの。沙希ちゃんって京都はじめてでしょ。

迷子になったらどうしようって」

「まったく心配症なんだから……でも、そんな杏姉って大好きよ」

と『チュッ』と唇にキスをする。

「私ねえ、京都は初めてではないの」

「修学旅行で？」

「違うわよ。平安時代の京都ってことなの。町の様子は面影はないけど」

神社とか周りの地形は変わっていないわ」

「あつ、そうか・・・ちよつと、ちよつと沙希。その顔で話されると」

違和感があるのよ。もとの顔に戻ってくれない？」
と律子が言う。

沙希はメガネをとると、静かに印を結ぶと一瞬のうちに沙希の顔に戻る。

「へえ、便利なものね」

「でも、あまり使いたくない術なの。自分の顔を忘れてしまったら大変」

と笑う。

車がホテルに横付けされた。

続いて報道陣の車が入ってきて、薫達の車を囲む。

律子が降り、続いて杏奈とあきあが降りると

「ええ〜？」

といった驚きの声があがった。

最後に降りてきた薫が

「あら、皆さんどうなさったの？そんな声をあげて」

「すいません、あきあさん。あなたはどこでこの車に乗られたのですか。

そして、あの少女はどこに消えてしまったのですか？

後ろを続いていた我々の車から見ると乗り代わる隙はなかったはずです」

「あつ、そうだわ。いいことを思いついた。」

この乗り代わりの答え・・・満足のいく解決編を答えた記者さんには

私とあきあとの単独インタビューの時間を1時間差し上げます。

どうお？このゲームやってみます？・・・」

「あのう、私達テレビクルーが正解しても映像として流せるんですか？」

「いいですわよ。なんだったら、お部屋でお食事しながらってのはどうお？」

「よし、同じ会社でも部が違ったら今から敵だからな」

「おう、わが部が正解しても、お前のところには記事は渡さないからな」

「ふふふ、面白くなってきたじゃないの」

「いいんですか、薫さん。こんなことをしても律子がいうと」

「いいじゃないの。映画の宣伝にもなるし、マスコミの知恵比べを見ているのも面白いわ」

「すみません、早乙女薫さん。その解答ですが、その時になって違うといわれても困るんですが」

「嘘をいうというの？」

「いいえ、そこまでは・・・」

「ふふふ、いいわ。では・・・」

とロビーのチエックカウンターにいつて支配人を呼び出している。やがて現れた支配人になにやら言うつと、白い紙にサラサラとメモ書きをして

その用紙と白い封筒をもって支配人とともに報道陣の前に立った。

「皆さんご存知の通りここは京都のホテルの中でも一流のホテルで

す。

「この支配人といえば口の堅さでは日本一と聞いております。その支配人にこのメモの内容を読んでもらいます」

と言ってメモ用紙を渡す。

支配人はその内容に驚いた顔を一瞬みせたがすぐに表情を消した。

「はい、わかりました」

「これを、この封筒に入れて厳重に封をします」といって支配人に糊付けをしてもらった。

「これをホテルの金庫に保管します」

と支配人が封筒をもってカウンターの裏に姿を消した。

「2日後にこのホテルの大宴会場で映画のクランクインをお祝いする記念式典がおこなわれます。」

その開始1時間前が解答編の投票締め切り時間とします。

投票箱はそのチェックカウンターにおいておきますが、

一分でも一秒でも遅れたら無効とします。いかがでしょう……」

「あっ、もうひとつ条件が……、映画の関係者や私の家族、マネージャー、

事務所の人間に接触したらカンニングしたとはいいませんが、カンニング行為をしたものとして無効ですし、映画の現場にも立ち入り禁止です。

一人一人、又はグループで独自で解決編を見つけてください」

報道陣はこれから2日の間、頭を働かせなければならぬ。

謎の多い日野あきあに対する単独インタビューとなると局長賞が社長賞また、

フリーだったら記事を売り込む金額がどれほど跳ね上がるか想像もつかない。

こうして、舞台は平安京のあった京都に移り、京の守護安倍晴明とのかかわり

映画の中でのあきあの活躍がまたれる。

第一部 第九話

映画の共演者やスタッフの初顔合わせは沙希たちが京都についた次の日に

太秦の撮影所で行なわれた。

この後衣装合わせがおこなわれ、そして、皆揃っての写真撮影とスケジュールがつまっていた。

小野監督率いる小野組には日本でもトップのカメラマンなどのスタッフが一同、

日野あきあを見つめている。

この子が・・・リハーサル時よりも幼く見えるこの子があんな凄い演技をみせるのか・・・

背中がぞくぞくするような嬉しさがこみ上げてくる。

そして、共演者・・・あきあの子供時代を演じる天才といわれる天城ひづる、

宝塚のトップスターだった母と歌舞伎役者の父との間に生まれた小野監督の秘蔵っ子。

日野あきあという年上だけど素人同然のこの女優には絶対負けないという根性が表情に表れている。

肩肘はつっているので硬質な感じで女の子らしい柔らかさがないのだ。

もっと肩の力をぬいたらいいのに・・・と沙希は思う。

映画の中で重要な役柄を占める安倍晴明役の飛龍高志、

彼には人気スターらしい輝きがあるが、

安倍晴明を良く知る沙希にとって異質な感じがしてならない。

話し方も声も・・・。

その他、母は勿論早乙女薫だが、すぐ殺されてしまう父には
ドラマでナレーターをしたりすることが多い癒し系のタレントが・
。

沙希とは直接絡むことがないので感想といっても・・・。

あきあを拾い育てる老夫婦には

往年の新劇の名優、幸田朱尾が・・・感想は何かいいおじいちゃん
というだけだ

そして大女優大空圧絵はまだまだ眼に力があり沙希なんか吹き飛ば
されそう・・・

他大勢の脇役陣・・・沙希を見つめる目は鋭い。

こうした雰囲気は初めてなのだが沙希は先々何か楽しみでわくわく
しているのだ。

横でニコニコしている沙希をみて薫がこそっと

「沙希ちゃん、この雰囲気楽しんじゃってるみたいね」

「ええ、なぜか不思議・・・私ってこんな雰囲気嫌いじゃないわ」

「でもみんな、沙希ちゃんを睨みつけているわよ」

「だからなの。あの人達とどうしてお友達になろうかって考えると
わくわくするわ」

「こらこら、沙希ちゃん。お仕事なのよ」

「だから、ここでお友達になろうと思ったら仕事で認めてもらっし
かないでしょ。」

あの人とあの人とどんな演技で体当たりしようかなって・・・」

「沙希ちゃんにはあきれてしまうわ」

薫もお手上げの沙希の・・・いや日野あきあの度胸の良さ。

昼食後、衣装合わせとなり本格メイクをしての写真撮影となる。薫は雪夜叉、あきあは菅笠を被った娘の旅姿となった。

薫のメイクは里から連れてきた女性が担当、あきあは勿論杏奈が担当だ。

監督からあだこつだという支持に二人は的確に答えていく。

「薫くとあきあくんが連れてきたメイク係りは優秀だねえ」

あきあの衣装もメイクもすんなり決まったが、

今回映画の中で追加になった男のあきあがなかなか決まらない。

あきあは安心して杏奈にまかせているが

今、杏奈のファッション・コーディネートとしての才能が

映画人に認められるかどうかの瀬戸際だった。

杏奈は撮影所の衣装係の示す衣装をチェックするがどうもピンとくるものがない。

小野監督は小さなことでも決して妥協はしない。

だから杏奈自身も台本での男のイメージの沙希を頭に思い浮かべ1着1着沙希に着せてみるのだがどうも納得が出来ない。

小野監督やスタッフ達もそんな杏奈をじつと見詰めていた。

全てのキャストの衣装合わせが終わってあとは男のあきあだけだが、

男のあきあがイメージ通りでなければ映画の出来が半減してしまう。

男のあきあというのは晴明からの修行の途中、

男の身体を嫌悪して消し去る呪文を唱えたことにより

あきあから分離した男のあきあ・・・さしづめあきあの弟になる。

闇を呼び、人間の欲望に付け込み鬼にかえてしまう悪の陰陽師。

この対決が映画中盤の呼び物となるのだ。姉と弟の争いには決して勝ち負けはない。

弟が死ねば姉も死ぬ・・・二人の対決の結果は死あるのみ。だが判つていながらも姉への憎悪と怒りが弟を狂わせ、弟に対する罪悪感が姉を哀しみの淵に追いやって闘いを鈍らせていた。

弟を消し去れない姉のあきあの苦しみ・・・この姉弟の対決が続編の製作を予測させるのだ。

杏奈は吊り下げられた衣装の中から黒のチャイナ服を引っ張り出した。
てきた。

そして、引出しの中からも黒いものを出してきてチャイナ服の中に入れてみる。それは手先、足先まである黒い全身タイツだった

杏奈はチャイナドレスにハサミを入れた。

膝下まであったスカート部を膝上15cmぐらいの所で切り取り、両サイドに腰上までスリットを入れる。

切った所は仕付け針で止めていく。

両袖は切り取りノースリーブにし、両方の肩先に黒い紐で小さな蝶々をつくり針で止め、

お臍のあたりから襟まで鋭角なV字に切り取り、

さらにお臍から鳩尾ぐらゐまで先ほどの黒い紐で編みこみを作った。

杏奈の作業はハサミを入れたしてから10分ぐらいで全てが終った。

「あきあ！ちよつと着てみてくれる？」

立ち上がって杏奈の近くにきたあきあに全身タイツを渡してカーテンを閉める。

「杏奈さん、着替えたわよ」

あきあの声が聞こえたのはしばらくしてからだ。

「じゃあ、入るわよ」

と自分が加工したチャイナドレスを持ってカーテン内に入る。

「うん．．．やっぱりあきあはスタイルがいいわ。胸も少し大きくなったし．．．」

「しっ．．．杏姉．．．」

「恥ずかしい？．．．ふふふ、やっぱりあきあは女の子ね．．．」

さあ．．．これ、頭から被ってね。仕付け針がたくさんあるから気をつけるのよ」

杏奈はもうすっかり沙希を妹扱いにしている。

沙希も杏姉と呼びなれたし、皆の前では杏奈さん．．．だ。

杏奈は衣装の形が崩れないよう、あきあをマネキンみたいに前後．．．

そして横と向かせながら形を整えていった。

「よし．．．これでいいわ。監督！出来ました」

とカーテン越しに大きな声をあげてからカーテンをあける。

「あきあ、針がいつぱいだからそろそろと歩くのよ。

それでないとも身体のおちこちが傷だらけになるから．．．」
と手を取って歩き出した。

小野監督やスタッフ．．．そして薫達が目をぱちくりしてあきあの姿を見る。

「おっ．．．いいねえ、怪しい雰囲気は良く出ているね」

「あきあ．．．それ、．．．凄くいい．．．」

薫の感嘆の声だ。

「だが、杏奈くん・・・」
「少し、物足りないでしょ。監督」
「ほう、そこまでわかつているのかい」
「はい、後は監督達の意見を取り入れながら最終調整をするつもりなんです」

「判った。じゃあ、ヘアスタイルからだな」

「はい、男のあきあは・・・」

と手早くブラシでヘアをセットしながら

「男のあきあはあきあ自身、男の身体の部分を嫌悪して自ら術をほどこして生まれた登場人物でしょ。だから、”男”という感じではなく少し中性的にしてみました」
と手早く仕上げたヘアスタイル・・・若衆鬘とポニーテールをあわせたような。

「メイクは直線的な少し太めの眉と目のふちには青いアイシャドウ・・・
そしてルージユは濃い青・・・」
杏奈は話と共に手を動かしてメイクも完成する。

「ふむ・・・イメージ通りだよ」

「後は衣装ですが、青い縁取りも考えましたけど、それを黒にして目立たなくします。そのかわり右手の甲に小さな・・・
バストの少し上に大きい目の蝶の刺繍を青く光る糸で取り付けようと思っただんです」

「ほう・・・なぜ蝶かね」

「闇の蝶”本を読んでいて男のあきあには私そんなイメージがあるんです」

「暗闇にユラユラ飛びまわる青く光る闇の蝶か・・・いいねえ」

「あとは足元ですが、全身タイツと靴を一体型にしようかなって考えました。」

「ヒール部はハイヒールとローヒールの間ぐらい、6〜8cmぐらいですね・・・以上です」

「ふうむ、・・・杏奈くん、さすが千堂ミチルの娘だ。」

「あの本から全体像を読み取って、ここまで仕上げるとは・・・」

「ありがとうございます」

「それでいつまでに仕上がる？」

「はい、材料さえあれば明日にでも」

「それじゃあ、衣装係に手伝わせる。出来るだけ早く完成させてくれ」

「はい」

こうして新しい才能を発見して衣装合わせは終わった。

薫には一言も口を挟むことが出来なかった。

初めて見た杏奈の才能、生まれてきてからその成長を見つづけてきた自分の姪が

こんなになりっぱになって・・・という感慨が口を閉じさしたというのか・・・

いや、違う。・・・薫には判ったのだ・・・

杏奈に”男のあきあ”というイメージーションを与えて、その才能を引き出したのはあきあだ。

ただマネキンのように立っただけで杏奈にあった有り余る才能のはけ口を与えたのだ。

人の才能を引き出すのにこんな方法があったのか、改めて沙希の凄さを思い知る薫だ。

全てを終えてスタジオ内にあつまってきた共演者達。

皆が舞台にあがったころ、主演の二人、雪夜叉と陰陽師あきあが登場した。

さきほどの顔見世とは全然雰囲気が変わったことに出演者やスタッフが気がついた。

雪夜叉の早乙女薫はともかく、陰陽師あきあがめちやくちや可愛いのだ。

可憐といってもいい。それでも、陰陽師らしい力強さも感じる。衣装を着けただけでもこんなにかわるものなのか。

子役の天城ひづるは今まで自分が天才といわれてきただけに悔しさで唇を噛み締めている。

その姿をみただけでも小野監督はひづるを子役として採用して正解だったと思った。

今のひづるは箸にも棒にもかからない我儘娘だ。

父や母からもお手上げなのでどうかして欲しいと相談を受けていたのだ。

あきあなら・・・日野あきあならひづるを立ち直らせてくれると思っていた。

あの不思議な少女なら・・・どうしてなのか若返ったあの子なら・・・
期待通りの筋書きが進行していく。

あきあは監督より先にひづるの状態を見抜いていた。

だから、舞台上上がったとき、ひづるの手をぐっと握り自分の横に座らせた。

握られた手の痛さに悲鳴をあげそうになる。

我慢をすることにより余計涙が溢れそうになった。

横目で日野あきあをにらみつけても、涼しい顔で前を向いている。

手を振り払おうとしても、この細い体のどこにそんな力があるのか
びくともしない。

「放してください」

しかたがないからそういうと、

「駄目！」

という返事、声が可愛いだけに余計に腹が立ってきた。

「放して！」

強くいつても

「静かになさい」

と小声で注意される。

この二人の戦いを見ているのは小野監督とあきあの隣に座る薫だけ
だった。

薫にしても沙希が天城ひづるにしている行為の意味はわからない。

「お願い……」

「その手痛いでしょ。その痛みはお母さんの心の痛み……」

「放して……」

「その手痛いでしょ。その痛みはお父さんの心の痛み……」

呪文のようにあきあがひづるに言い聞かす。

場内ではマスコミがよばれ写真撮影が始まっていた。

フラッシュがたかれシャッター音がすさまじい。

しかし、その音に隠れてあきあとひづるの闘いがおこなわれていた。

「そんなの、あなたには関係ないでしょ」

「いいえ、貴女は私なの・・・子供時代の私・・・
そんな貴女がご両親を我儘で泣かせているなんて、私は許さない」

「そんなこと・・・私の勝手でしょ」

「いいえ、わたしはあなたの本質を知っている。あなたの優しさ・・・

道端の花を踏まれないように植え替えるなんて普通の人には気がつかないし、出来ないわ」

「どうして・・・？、どうしてそれを？」

「気付かない？」

「えっ、何を？」

「私は陰陽師あきあだってこと」

「そんなの、映画の役柄じゃない」

「じゃあ、これでどうお？」

といて素早く印をむすんで呪文を唱える。
とたんにひづるの身体が硬直して目の前がまっくらになった。

闇の中に声が聞こえてきた。自分の声だ

「ママ！どうしてあんなドラマに出したの」

「だってあなたのために・・・」

「私、お母さん役のあの女優嫌い！・・・もう行かないからね」
自分がドラマを降りたときの出来事だ。

「すみません。ごめんなさい。ひづるが体調を壊してしまって・・・

「お母さん、あなたねえ・・・」。

もういいです。うちはもう二度とお嬢さんを使いませんから・・・

「そんなこと言わずに次ぎの機会には必ず・・・」

「お母さん、あなたねえ。お嬢さんが元気に学校へ行ってるのは判

ってるんですよ。

私あなたの大ファンだったんです。でも今は幻滅しています。自分の子供に振り回される親なんて……」

そんな場面がいくつも繰り返し返される。

父にしても歌舞伎の役者だというのに情けないほど局の人間にあやまっているのだ。

そんなこと少しも知らなかった。自分の才能でここまで来たと思いついて入っていた。

パパとママは自分に知らせず、駆けずり回ってあやまってきたのだ。

それで自分がここにいる。子供ながら情けなかった。

なんてことをしてたんだとパパやママに謝りたかった。

「もういい、……ごめんなさい。……あきあさん……ごめんなさい」

「わかった？……でも、私に謝るのはお門違いよ。あなたが謝るべき人は……ほら……」

と急に目の前が元に戻って……あれは……と舞台から飛び降り、監督の横に立っている両親の懐に飛び込んでいった。

「ああ、ママ、パパ、ごめんなさい……ごめんなさい……と泣きじゃくっている。

マスコミや共演者、スタッフは急に子役の天城ひづるが

両親の胸に飛び込み泣きじゃくりながらあやまっている場面に立会い面喰らっていた。

……でも日頃の我儘ぶりを知ってるマスコミ各社はいい記事が書

けると取材を開始した。

「そういうことだったの、あきあ」と薫が囁いた。

「ええ、でもあの子はあの子なりに苦しんでいたの。」

でもそれをどう表現していいのか判らなかつたみたい」

「いい子役がね」

「だからだと思うの。こんな役がいやだと、だだをこねていた役だったから」

「なるほどね……これからはいい役者になるでしょうね」

そこに小野監督が近づいてきて

「ありがとう、あきあ君。君ならやってくれると思っていたよ。」

あの子、赤ん坊のころから知ってるけど、本当は優しい子だったんだ」

「ええ」

「あんな子にしまったのは私達、映画人かもしれない。」

才能があるって、チャホヤしてしまったからね」

「監督、私一度あの子とお芝居してみたい……お願いできますか？」

「そうか……うん、考えてみよう。成長したあきあと幼い頃のあきあの回想シーン……うん、これでいこう。」

弟のあきあと幼い頃のあきあとの正邪の対決シーン……いいねえ。

……よし、佐竹！谷は？」

「ホテルに帰ると言って、出て行ったところですよ」

「すまん、呼び戻してくれ」

「はい！」

と飛び出していく。

「よし、俺も行く」
と後を追った。

「沙希ちゃん、この映画いろいろありそうで楽しみだわ」と『ポン』と薫の肩を叩いたのは大女優大空圧絵だった。

「薫、久しぶりね」

「圧絵さん、今度の映画のことよろしくお願いします」

「あなたが日野あきあさん……うん、いい目をしてるわね。

それに不思議な力を感じるの……どうしてなのかわからないけど」

「日野あきあです。よろしくお願いします」

「あきあ……いえ、沙希ちゃん。圧絵さんは里の出身なの」

「えっ、そうなんですか」

「しばらく里には帰っていないけど、どうお？」

「はい、沙希ちゃんのおかげでいろいろ変化しています」

「変化？」

「すごくいいほうへですけど……」

「大空圧絵さん！」

「圧絵でいいわよ」

「では圧絵さん、今度の映画が終わったら一度里に帰っていただけませんか」

「里に？……もう何十年も帰っていないけど」

「構いません、里へ帰ることは圧絵さんにとってとてもいいことがあります」

「いいこと？」

「はい、今は言えませんが……」

「何かしら？」

と首をかしげる。

とそこへ天城ひづると両親があきあの元にやってきた。

「日野あきあさん」

「この子があなたに謝りたいと……」

ひづるがおずおずとあきあの前に進みでた。

「ごめんなさい」

といって頭をさげる。

それから頭をあげニコニコと笑っているあきあの顔をみると自分も固かった表情を和らげた。

「はい」

といってあきあが手を出すとゆっくりと手を握ってきた。

ひづるはあきあのこと大好きになっていたのだ。

あきあはひづるの手を握りしめたまま

「お父様、お母様、この子を許してくださいとさってありがとうございます」

と自分の事のように言って頭をさげる。

「私、この子の優しさが大好きです」

ひづるがあきあの顔を見上げる。

その綺麗な顔に浮かんだ微笑がひづるも両親もそして圧絵さえも魅せられていく。

思わず歌舞伎役者の父親が

「あなたは人間なんですか、……まるで菩薩様を見ているようだ」

と叫んでいた。

「私は普通の女の子ですよ、菩薩様だなんてとんでもない」

「でも、私にもそう見えます」

今度は宝塚のトップスターだった母親がいう。

あきあはひづるにむかって

「ねえ、ひづるちゃん。私って陰陽師のあきあだよねえ」

「うん、不思議な術を使うのよ」

「というわけですよ」

と話をはぐらかせてしまっ。

「お父様、お母様、今度の映画楽しみにまっていてくださいね」

そう言ってひづるが両親とスタジオを去るのを手を振って送っ
た。

「ふ〜ん、そうだったの。何かあると思っただけれど」

と庄絵がいう。

「そうでしょ、いつも沙希ちゃんには驚かされるの」

「これからが、楽しみだわ」

庄絵が離れていくと待ってましたとばかりマスコミが二人を囲む。

「あら、貴方達反則よ。それとも棄権するわけなの？」

「いえ、いまスタジオでおこったことどういっことか理解できなく
て」

「我儘な天才子役が急に泣き出したかと思っくと両親に謝りながら抱
きつくし

そのあと天城ひづるが日野あきあさんと仲良く手をつないでいるの
が、

どうもちんぷんかんぷんで……」

「あっ、そのあとの言葉も……日野あきあさんは菩薩みたいだと
か……」

「ふふふ、つまり天城ひづるといっ天才子役が復活して、いい役者
が一人増えたといっことよ」

「それが……」

「却下します。それ以上のインタビューは反則とみなし棄権を宣告

します」

「そんなあ……」

「これ以上追いかけてきたら反則だからね」
と釘をさして着替えにかえっていく。

『妖・平安京 雪の章』の映画クランクイン記念式典の1時間前、
約束の投票が締め切られた。

「ねえ、この答えが一番多いわ。車の中に日野あきあが隠れており
車の中で入れ替わった」

「まあ、無難な答えね。……でも、いないのかしらね」

「何が？」

「もっと人が考えつかないような答えを出す人……」

「そうね」

「最近の記事ってどこも同じで全然面白みがないのが、これでよく
わかるわね」

「あっ、あったわ。日野あきあは変装の名人で、一人二役を演じて
た」

「パーフェクトじゃないけれど、どうお？沙希ちゃん。これを正解
にする？」

「仕方ないでしょうね。術を使うなんて誰も信じないでしょうから」

「えーっと、どこのマスコミかしら、『女性の友 記者 鳴海京子』
って書いてあるわ」

「どんな人かしら」

薫、沙希、まゆみ、律子、杏奈がドレスアップしてロビーまで降りていくと

マスコミ各社が玄関に詰め掛けていた。

公正を期するため、ホテルの支配人に保管していた封筒を持ってきてもらい

それをマスコミの目の前で開けて発表してもらった。

『日野あきあとの少女は同一人物』とだけ書いてあった。

「正解は一社だけ、『女性の友 記者 鳴海京子』さん」と薫が発表すると、『キヤー』と飛び上がった女性記者がいた。

「鳴海京子さんですね。前にいらしてください」とまゆみが誘う。

悔しそうな記者達の間を縫って京子が前に進んでくる。そして

「あのう」

と言う声にあきあが優しく

「あの解答あなたが考えたのではないですね」

「はい、どうして判ったのですか？」

「あなたが正直な人だからですよ」

と禅問答のような答え方をする。

「どなたが考えたのですか？」

「はい、あの後ろにいる先輩記者の城田さんです」

と白髪の老記者を指し示す。

「では、あの方も連れていらっしやい」

という京子は嬉しそうにとんでいった。

老記者は若者に手柄をゆずるように辞退していたが、京子に引っ張られるように前に進んできた。

そこで前にいた悔しそうな顔をくずさない若手記者が

「日野あきあさん、我々はあなたがあの少女と同一人物なんて信じられない。

何か証明してください」

とひつこく食い下がる。

困った顔をしていたが薫が言い換えそうとするのを押しとどめ

「では」

と『妖・平安京 雪の章』映画クランクアップ記念式典と書かれた立て看板の隙間をあきあが通れるぐらい空けてもらってまゆみと律子に持たせた。

「ではこの中で変装します」

と立って立て看板の後ろに回ってすぐに出てくると

あきあがあのメガネをかけた少女に変わっていた。衣装はそのままだから顔が変わっただけだ。

「そんな馬鹿な・・・何か手品を使っているに違いない」

と立って立て看板の後ろをみたが元よりなにもあるはずがない。

「もう一度お願いします。あつロビーに入って見てもいいですか」

とひつこく頼んでいた。

マスコミの見守る中、もう一度看板の後ろを通る。

今度はあきあの顔だ。ロビーの中で記者達も呆然とあきあの変身するのを見ていた。

もとよりこの騒ぎを見ていた共演者やスタッフも大勢いたのだ。

「俺はまだ信じない」

と同僚が止めるのを振り切って

「すいません。このナイロンに手形を押ししてくれませんか」

「あなたねえ」

とまゆみが怒り出したのを止めて

「いいですよ」

とナイロンに両手を押し付ける。

記者はそのナイロンを大事に半分に折って『あきあ』と書いた。

「すみません。もう一枚に少女の手形が欲しいのですが」

とつくに記者のやることを見通していたあきあはさつと

立て看板の後ろを通り少女に変身すると記者が用意したナイロンに
すぐに手形を押しした。

記者は再び二つ折りにすると『少女』と書いた。

記者は立ち上がるとにやつと笑って

「これを警察に持ち込んで指紋の照合をしてもよろしいね」

といった。これで化けの皮をはがすぞという風に聞こえる。

「どうぞ」

と簡単に答えたあきあに拍子抜けしていたが車に乗って飛び出して
いった。

「あきあ、ご苦労さん」

「いえ、では京子さん、城田さん行きましょう。記念式典にご招待
いたしますわ」

ロビーを進んでいくが

「あきあ、その顔」

「あっそうか」

と言って、印を結ぶと『フー』と息を吐く。

一瞬の中に顔が元にもどった。

二人の記者はあきあの術に呆れ顔だ

「あきあさん、それって」

「ええ、陰陽道の術の一つよ」

「えっ、では噂は本当でしたの？」

「噂って？」

「あきあさんが本当に術が使えるって」

「そうよ。だって私、陰陽師あきあだもの」

「そんなこと記事にはいけないでしょう」

「いいわよ、でも誰も信じないでしょう。噂は噂でしょ」

「そうね、こんなこと書いたら馬鹿にされちゃう。城田さんはどう思う？」

「そうだな、噂は噂で終わらしたほうが無難だな」

「でもあきあさん、映画で術を使うのですか」

「そうせざるを得ないでしょうね。正邪二役をしなければならぬから」

城田記者は感心するように

「あなたは恐ろしいほど頭のいい方だ。マスコミに対する扱いを心得ていらっしやる。」

こうなんでも正直に答えられると隠すべきものは我々の手で守り通さなくてはならなくなる」

こうして四人と二人の記者は会場内に入っていった。

招待客や映画関係者でこったがえしていた。

「さあ、京子さん、いろんな方にお話を聞いていらっしやい」

「いいえ、私。あきあさんに張り付いてもいいですか？」

「私に？」

「ええ、あなたのことをもっと知りたいから」

「京子さん、あなた一流の記者になれるわよ」

と早乙女薫が感心している。

「えっ、私ですか？・・・いいえ、とんでもない。いつもどじ

ばかりしてるから

支局長からも城田さんからも怒られてばかりなんです」

「あたりまえよ。あなたはまだ若いから鍛えられているのよ。ねえ、城田さん」

「はあ、京子はいつも人とは違う観点から見て記事を書くので突拍子も無いことを書くときもあるけれど、やられたと思う記事を書くのですよ」

「といってから」

「よし、京子。今日はあきあさんの密着レポートだ。」

おまえの思うように記事を書け。あとのフォローは俺がやる」

「はい」

と元気な声で返事をする。

「やあ、城田。やはりおまえさんか」

と小野監督が声をかけてきた。

「やあ、小野さん。お久しぶりです」

「薫くん、あきあくん。城田はね、以前一流新聞の敏腕事件記者だったのだよ」

でも、映画が好きでね。芸能記者に転身した変わり者なんだ」

「小野さん、それ以は言わないでくれ。身の置き場がなくなってしまっ」

「ははは、相変わらずだな。」

どうだ、向こうにお前さんと同様記者から脚本家に転身した谷がいるんだ」

とひっぱっていった。

薫、あきあ、まゆみ、律子、杏奈、京子とおもいおもいの食事をしながら

談笑していると

「あきあお姉さん!」

とひづるが駆けてきた。

「おはよう、ひづるちゃん」

「おはようございます」

ときちつと礼をする。後からにこにここと笑顔の両親がついてきた。

「おはようございます」

「おはようございます」

昨日、その表情にあった黒い影が嘘のように消えている。

「この子ったら、早く行こう、早く行ってあきあさんに会いたいて
て

私達を追い立ててね。もう、しょうがない子で……」
といいながらも、あきあにくつつきまわるひづるを笑顔で眺めている。

「どうお？ 楽になったでしょ」

「うん、素直になるのがこんなに楽だなんて。つっぱっていたのが
馬鹿みたい」

といいながらあきあの手をしっかりと握っている。

「あきあお姉さん、いいこと教えてあげようか」

「なあに？ いいことって」

「パパとママったらね、今日あきあさんに会えるからって朝からそ
わそわしてるの。」

その上、何を着ていこうかってことから夫婦喧嘩をはじめしまっ
て、

こんなに遅くなってしまったの。私のせいじゃないのよ」

「これ！ ひづる！」

と我が子を叱り付ける。我が子を人前で叱り付けるなんて昨日まで
見られなかった。

「へへへ、叱られちゃった」

といいながらとても嬉しそうに笑っている。

「お父様、お母様」

といつてからあきあはさつと手を出した。

「握手をさせてください。とてもいい子と共演させていただきお礼です」

そんなあ……といいながら、嬉しそうにあきあの手を握っている。

後で両親はひづるに

「あなたのいったとおりね。とてもあったかで柔らかくて優しい手ね」

とうつとりとしていた。あきあの大ファンになった両親の感想だ。

「ねえ」

と、ひづるがあきあを不信そうな目で見上げる。

「さつき、あきあお姉さんがひづると共演と言ってたけど、

台本には絡むシーンは一つもないんだけど」

と残念そうにいったが

「昨日ね、急遽に台本を書き換えてもらったの、ほら新しい台本が配られているわ」

嬉しそうに

「ひづる、貰ってくるね」

といつて走っていく。

「可愛い子ですね。あの子が天城ひづるですか？」

といつてから首をひねる京子。

「全然、印象が違ってる」

「あの子いい子なのよ」

と横から薫が口を添える。

「はい、これ早乙女薫さんの分。はい、あきあお姉さんと台本を配ると、ばらばらと台本をめくって

「あつ、このシーンですね。闇を支配する弟のあきあ……弟のあきあって男でしょ」

「ええ、陰陽師あきあは男と女両方の身体を持つてるの、男女両性有というの。」

あきあは悩んだわ、そして呪文で男を消して完全な女性になろうとするのよ。

でも失敗しちゃったの。弟のあきあが姉のあきあの術で消えてしまふのがいやだつて

反乱を起こすの。暗い闇の力を手に人々を陥れ、鬼をあやつり、怨霊を復活させるの

そんな闇の弟のあきあと、光である姉のあきあが戦って傷つき倒れたのは姉のあきあなの」

「死んじゃったのですか姉のあきあ……」

と心配そうに尋ねる。あきあは首を振って

「いいえ、同じ身体なのだから姉のあきあが死んじゃうってことは、弟のあきあも

死んじゃうってことですよ」

「よくわかんない」

「ふふふ、いいのよ。だから姉のあきあが弱ってしまふのをまっつて弟のあきあが、姉のあきあの身体も心も乗っ取るうとするのよ」

「何かわからないけど凄いい！」

「そこに現れたのが、幼い頃のあきあなの。これがひびくるちゃんね。」

幼いあきあは弟のあきあを『そんなことではいけない』ってたし

なめるんだけど

弟のあきあはきかないわけ、そこで対決するの。

幼いあきあは修行したわけじゃないから、術を使えなかったけど倒れている姉のあきあから、ロールプレイングゲームでいえば経験値を借りるのね。姉との凄い闘いで・・高い屋根に飛び移った

空を飛んだり、術で龍を呼んだり、雷、風、雨はもちろん怨霊、鬼

が出てくるのよ。その結果、弟のあきあも疲れきっていて、幼いあきあに倒されてしまうの。でも死んではないの。

さっきもいったけど弟のあきあが死ぬってことは

姉のあきあも死ぬってことでしょ。体力を消耗した弟のあきあは再び

姉のあきあの身体の中に隠れてしまうのよ。これが対決シーンのあらすじね」

そばで聞いているものにとって台本を見もしないでスラスラと答えるあきあ、

そしてその内容の迫力には圧倒されていた。

「凄い！凄い！早くやっていたい」

ひづるがいうと

「そうね、私もとても楽しみにしているの。ひづるちゃん、負けな

いわよ」

「ええ、私だって」

とひづるの負けん気が顔を出す。

両親も追加されたシーンに驚きを隠せない。演技の経験が豊富なだけに

このシーンがどれだけのものかわかってしまうのだ。

ハリウッドにも負けない特撮なのか？今でいうCGを使うのか？次に言ったあきあの言葉には仰天させられた。

「ひづるちゃん、このシーンの撮影はとても危ないシーンが出てくるから

絶対に自分勝手なことをしちゃ駄目よ。私がひづるちゃんを守るから

安心していいんだけど……」

「危ないシーン？」

「ええ、術で鬼や龍を呼び出すから……」

「じゃあ、本物を使うのですか……凄いです！」

両親には良くわからなかったが、本物といった我が子の言葉……術？

何かこの映画の撮影はとんでもないことがおこりそうだ。

「あきあ、監督が呼んでいるわよ」

まゆみの声に振り向くと、舞台袖で小野監督が手招きしている。

「ちよつと待っててね」

ひづるとつないでいた手を放して監督のところに進んでいった。

薫が見ていると小野監督が熱心にあきあを、かき口説いているように見える。

あきあがうなづくとぽんぽん肩を叩き、監督は舞台にあがっていく。

あきあが薫のほうを向いてうなづいているので安心して椅子に腰掛けたが、監督とはいえ男だ。

男と話をするあきあが心配で仕方がない。

「あああ、では、一応今後の予定を言っておきます。

今日はもう早く帰って、嫁さん孝行するなり彼女とホテルにしけこ

むなり

自由ししてくださっても結構です」

また監督のいつもの口調が始まったとニヤニヤするスタッフ。

「明日は追加されたシーン10の撮影をおこないます」

といった監督の言葉で会場が割れた。

「監督！いくら監督の言葉でも承服できません」

「そうですね。シーン10といえば特撮かCGか決めてませんしそんな大掛かりなセットすぐにはできません」

監督はニヤニヤ笑って皆の声を聞いている。

「いやだなあ、監督。笑ったりして、いつもの冗談でしょ」

「俺が映画の撮影に関して今まで冗談を言ったことがあるかね」

「えっ、では……」

「出来るんだよ、彼女がいてくれれば」

と言って袖に待機していたあきあを呼んだ。

静かにドレスの裾を持ちながら舞台上上がるあきあ。会場では何がはじまるのか見当がつかない。

「薫、いよいよね」

「薫さん、私の目を通して沙希姫さまが見ていらっしやるの。けらけら笑っていられるわ」

「沙希姫様もこういうお祭り騒ぎがお好きなのね」

三人のそばでひびるが両親に

「パパ、ママ、よく見ておいてね。あきあ姉さんの陰陽師としてのデビューを……」

我が子の言葉ながら不信そうに舞台を見ている。

「監督、いくらなんでもこの衣装では我慢できません」

と情けなさそうに監督に訴えるあきあ。

「そうか、じゃあ。君の衣装を変えるところを最初にしよう」

「諸君、今からこのあきあくんがどうして大掛かりなセットが必要でないかを証明してくれる」

ではとスタンドマイクの前に立つあきあ。

「みなさん、これからお見せすることはこの会場内だけの人の秘密です。」

マスコミの方にはお話されないよう頼みます。

一応皆さんには呪をかけておきますから、話したくても話せませんが。

あっ、そのマスコミのお二人は別ですので……
「シュ？何のことだろうと首をひねる会場の人々。」

「あっ、それからこの会場内に結界を張っていますので、しばらくは出入り出来なくなっています」

結界？また不思議な言葉が出てきて首を振りながら試しに

ドアを押したり引いたりしてみる。びくともするものではない。

「だめだ。開かない」

力自慢の男達の声だ。

「では」

と印を結び呪文を唱える。

するとどうしたものか、いきなりドレスがああ陰陽師あきあの旅姿の

衣装に変わってしまった。早代わり？そんな一秒もかかっていないのに……。

会場後方にいた人たちも舞台のほうに寄ってくる。

動かないのはまゆみ、薫、律子、杏奈の四人だけだ。

「すみません、そのティッシュをとっていただけませんか」

箱入りのティッシュを渡されると一枚抜き取り、箱は足元に置いた。

丁寧に折り人型にちぎると

『ふっ』と息をかける。

するとたちまちあきあの横に黒い烏帽子をかぶった平安時代の衣装の公達がたっていた。

『ウオー』声無き声が響きわたる。

「これは式神です。安倍晴明様を写しとっています」と説明する。

「どうぞ、晴明様ご挨拶を」

「我名は安倍晴明、ここにいる安部あきあの師である。

あきあは時空を越えて我元へきて、厳しい修行の末、我は安倍という字を与えたものである。

術は我と遜色ないものであるが、なにせ若い。時には失敗することもあるうがよしなに頼む」

と行って一度消えかかったが

「今、京の守りが緩んでおる。北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎

守りを固める四神相應の陣で結界をあらためて張ってほしい」

と言つ言葉はあきあにとつても思わぬことであつた。

「あっ」

と声をあげたのは会場にいたこのホテルの支配人だ。

その声を横目に落ち着いたあきあに

「今のが安倍晴明ですか、少しイメージが違ったけれど、よし本物にちかづけてみよう」

と舞台下から飛龍高志の声がかかる。

「飛龍さん、私の術を信じていただけるのですか」

「今を見て、信じないわけにはいかないでしょう」と笑っている。度胸のある方だ。

もう一枚ティッシュを取り息を吹きかけると

黒い全身タイツを基本にした・・・

杏奈がデザインした衣装を着たあきあとそっくりの人物が現れた。胸と右手の甲には青い蝶の刺繍が輝いている。でもどこか違っていった。

そう身体つきが女というより、どこか男っぽく中性的な体つきであり

チャイナドレスを加工した衣装で隠れてはいるが股間の膨らみが感じられる。

何故か暗い闇の底から浮かび上がってきたような雰囲気があった。

あきあが飛び上がり会場後方まで宙を飛び身を翻して薫達の傍に降り立ち

追いかけてくる男のあきあの鉄扇をぐりぬけ、手刀で手首をうつ。

落とした鉄扇を会場反対までけりつけ、手刀での争いになる。

再びあきあが飛び上がり舞台の上にもどってきた。

会場は物音一つ、声もあげずにこの二人の闘いを見ている。

男のあきあも舞台に戻り、今度は宙で・・・そう舞を見ているような

術者とはこんな闘いをするのか、眼が覚める思いで殺陣師は見えていた。

監督は予想以上の術に心が躍っている。

争いは終わった。あきあの吹きかける息で男のあきあは消えた。ただの紙もどり空中をふわりふわり舞い落ちる。

宙にいたあきあも静かに舞台上に降り立った。

シーンと静まりかえった会場……突如『ワーオウ』という歓声が響き渡る。

会場の結界も解かれ、開け放たれたドアから何事かと覗き込むホテルの泊まり客や従業員。

「凄い！凄い！……凄い！の一言だ」

舞台上の小野監督が大声でいつている。

こんなこと慣れてはずの薫たち五人も呆然と立ち上がっていた。

いまさらながら術の凄さ、沙希の素晴らしさに感動さえ覚えている。

「あきあ姉さん……って」

と言葉にならないひびく。

父親はあきあの動きに眼を奪われっぱなしだった。

歌舞伎に通じる円の動き、舞に通じる……いや、舞の原点を見ていたのだ。

母親は娘に嫉妬していた。私をもっともっと若ければ……

あきあと共演できる娘の幸運……悔しいが嬉しい、複雑な想いが交差していた。

薫達の元に大空圧絵がかけてきた。

「薫……あの子って……あの子って……」

「そうなの、伝説の子。私達一族を呪いから救ってくれる子なの」

「私帰る……私、映画が終わったら里に帰る……あの子の元で暮らしたい……」

「待っています、私達みんな、貴女をまっています」

「律姉・・・私、沙希についてきて良かった・・・本当によかった・・・」

「そうねえ、杏奈！あなたは沙希についていればもっともっと大きな仕事が出来るわ・・・」

私はそう感じる。だから、杏奈は決して沙希の手を離しちゃ駄目よ」「わかった。絶対に手は離さない。だって、律姉のお墨付きだもん」

「こいつ・・・」

京子は近くにいた城田の背広の袖を掴んだまま震えていた。

「城田さん・・・城田さん・・・これって一体・・・」
言葉になっっていない

城田にしても、平静を装っているだけで声の震えはどうにもならない。

「俺だって・・・俺だって・・・」

「よう、城田。どうだった？」

脚本家の谷が声をかけてくる。

「どうだった？だってえ・・・お前なあ、あんなの見てどうも思えないのか。」

そこまでお前は鈍感になってしまったのか。そんなことじゃあ、いい台本なんて書けない。

やめつちまえ！」

おこった城田に

「アホっ、平気なことないじゃないか。この手の震え、この足の震えを見る」

なるほど、小刻みに震えている。

「この震えどうにか止め様としてるんだが全然止められない・・・あの人を見るよ」

と舞台上の小野監督を指差す。

「あの人は日野あきあの術のこと知ってたんだ。でも実際目の前でみたら、あのとおり、笑い顔が引きつってるよ」「谷、おまえは事前になにも聞いてなかったのか」「聞いていたとも、でも信じられるか？タイムスリップして1000年も前の安倍晴明のもとで修行をしていたなんて・・・お前、日野あきあは何歳だと思う？」「見た目は16〜7か・・・でも、経歴で不肖なところがあるんだが・・・」「25よ。修行の途中で若返ってしまったんだとよ」「若返った？」「そう、あきあと付き合っていると常識なんてくそ食らえだ」とやけっぱちに言い放つ。

スタッフや共演者は輪になって話している。
「この映画って・・・この映画って・・・」
「なにが言いたいんだよ」
「どうなるんだよ、この映画・・・」
「そりゃあ、大スペタクルだよ、全て本物の鬼や怨霊を使って・・・」
「俺やだよ、鬼に対して待機命令だしたり、怨霊にカチンコ鳴らしたりするの」

「あほ！そんなの。あの子がすべてやってくれるよ」と舞台で監督と話をしているあきあを見る。
「あんな可愛い顔をしてさ」
「俺、あの子が怖くなったよ」

「二役だって、あきあにそっくりな沢口靖子を使っと思ってた」「それが、式神だって・・・ついていけないよ」

情けなそうに話すスタッフたち。

舞台上では小野監督があきあに

「さっそくだが、あきあくん。明日のロケする場所だが」

「ええ、広い場所さえあればいいですわ」

「広い場所ねえ、・・・そうだ、野球場はどうか」

「それくらい広ければ」

「何も用意はいらないのだね」

「撮影機材だけで」

「よし、場所はこれから探させる」

あきあは薫のところに戻っていった。

「あきあ、何を話していたの？」

「明日のロケ場所のことなの」

「ロケ場所？・・・まだ決まってるの？」

「ええ、広い場所ならどこでもいいって言うといたわ」

「あきれた」

「明日はマスコミを招いて大々的にロケするんだって」

「そんなことしたら、あきあのこと日本中にはれてしまっじゃない」

「大丈夫よ、律姉。結界を出たらマスコミの人達の記憶を消しちゃ

うから」

「えー、私の記憶も消えちゃうんですか」

と京子。

「京子さん、あなたと城田さんはいいの。そのかわり私達のそばから離れたら駄目よ」

記念式典は終わりをつげ、三々五々にみんな帰っていったが

あきあの前で畏怖するかのようになり立ち止まり、礼をすると足早に帰

っていく。

それでもあきあの可愛い笑顔を見るとなぜか強張っていた顔がホツとしたように変わっていく。

そんなあきあの前にホテルの支配人がやってきた。

「日野あきあ様、折り入ってお話があります」

「なんでしょうか」

とマネージャー役の律子が答える。

「あきあは術を使うと疲労が激しいので」

と断りをいれるが

「申し訳ございません。」

私めの弟が『晴明神社』の神主をしているといえはお分かりになるはずですが・・・」

「あつ、晴明様からの手紙」

「ほう、よくお判りで。封の表には『先の世に我つたえし術者現われしとき

この手紙託すものなり』と書かれており『何人もこの手紙あけるなかれ』となっております」

「どうして私に？」

と聞くと

「昨日よりの早代わりの術、そして本日の大変な術をみれば一目瞭然でございます」

「一度も封をあけてないんですね」

「はい、封を開けようとしても開けられなかったというのが真実です」

「わかりました。では着替えたらすぐに」

「あきあ、でも表にマスコミが張ってるわよ」

「そうねえ」

「あのう、今従業員の出入り口に従業員送迎用のバスが止まってい

ますが」

「ああ、それいいわ。それで出かけましょう」

「あら薫さんも行くの？」

「あきあ、この私を置いていく気？」

「わかりました、わかりました。薫さんを置いていくと、あとでどのような仕打ちが……」

「こら、あきあ」

「うえ〜ん、ごめんなさい」

薫とあきあの言葉にほっとする一同。

「あのう、私達も行つていいですか。ねえ城田さん」

「支配人さん、ご迷惑でなければ」

「ええいいですとも、送迎バスは大型ですので」

「じゃあ私も……」

ということ、あきあ、薫、まゆみ、律子、杏奈は勿論、京子、城

田のマスコミ組、

天城ひづると両親、そして

「わたし、晴明神社つて行つてみたかったの」

ということ、大空圧絵も加えられた。

支配人を入れ、計12人がバスに乗り込んだのはそれから1時間後となった。

バスはマスコミの車を横切つて町の中に出て行く。

誰も気がついていない。

「ふふふ、やったね」

と屈みこんでいた体を伸ばすと

「やあだ〜、薫さん。その変装まるでキャディさんみたい」

「誰がじゃい」

とあきあの頭を両手でぐりぐり押す。

薫とあきあの子供っばさ、凄いギャップに京子はクスクス笑い出す。

「ねえ、あきあ。次のゲームソフト出来たんでしょ」

「ええ、『妖・平安京 風の章』はもう会社に渡したからバグがな
いか調べているはずよ」

「でも、まだ続くんでしょ」

「ええ、5部作にする予定なの」

「あきあさん、もう次のソフト出来ていたんですか」

「ええでも、発売されるのは半年ぐらい先ね」

「でも、たいしたものですね。いつ仕事をするのかしら」

「そうでしょ、私なんか。喰っちゃ寝、食っちゃ寝だから・・・」

「薫さん、もうすぐ狸になっちゃうもんね」

「こらあ、あきあ・・・でも、早くなりたいな」

最後の言葉は沙希を見ながら熱っぽく語ったが小さな声だったので
聞こえていたのは沙希だけだった。

バスが清明神社についたのはそれからしばらくだった。

ぞろぞろと大型バスから降りてくるのは

変装しているといっても人気者達ばかりだからすぐに観光客の目
とまり輪が出来てしまった。

薫の影に隠れていたのであきあは見つからず支配人と共に神社の中
に急いで入っていった。

薫と大空圧絵だけが捕まっている。

しかし、すぐに追いついてくるだろうから皆、先に神社に入ってい
った。

支配人の弟は少し年が下だけでそっくりな神官であった。

支配人から電話で聞いていたらしく安倍晴明の手紙は用意されていた。

しかし、兄からの電話だといえ俄かには信じられない話であきあを不信の目で見ていた。

手紙を受け取っても封を開けることができない。

やはり・・・という顔になったが、あきあが印を結んで呪文をあげると驚いた顔になった。

封に『フツ』と息を吹きかけると、今まで開くことの無かった封がふわっと開いた。

「あっ」

という神官の声があがる。

封の中から巻き紙を出す。

「あきあ、声に出して読んでちょうだい」

閉められていた障子の向こうから声がかかり、薫と圧絵が入ってきて皆の隣に座る。

「はい」

と言ってから、巻き紙を読み出した。

師の手紙だと思つとホロリと涙がでる。

『安倍あきあ殿』

「あつ、私への手紙だわ」

神官が驚いてあきあの顔を見直している。

「この手紙の封を開けられてより、そなたに教えられた時に直すと
1時間後

綻びかけていた結界が破れ、朱雀門が開くなり。

かねてより、そなたに教えておいた結界の術を施さねば、幽界より悪鬼の数々が世に出でて京をいや日の本の国を滅ぼさん。

くれぐれも結界の術、忘れるものなかれ。

次代の第二のあきあにもこの術、継承されん 安倍晴明」

「大変だわ、朱雀門が開いてしまうなんて……」

「どうするの？あきあ」

「神主様、封の切られていない新しい墨と清らかな水をすぐに用意できますか？」

「いえ、墨はともかく清流なんて」

「では、どこへいけば」

「たしか和歌山の熊野古道に流れる清流が……でも駄目です。1時間の内なんてとてもとても」

「この懐紙をいただきます」

「といって器用に折りだす。」

そして、印を結び宙に五芒星を描いて折り紙に当てる。

すると、指先から光が出て折り紙を変化させた。

『カアッ』

と鳴く黒い鳥が出現した。

「ヤタカラスよ、そなたの故郷に帰りこのつばに清流から生まれし

清水を汲んできておくれ」

とあきあがいうと薫が開け放った障子から

『カア』と一声鳴いて凄いスピードで飛び去った。

この様子を見ていた神官とその弟子達、眼を白黒させながらあきあを見ていただけだった。

「ねえあきあ、何か手伝うことはないの？」

律子がいう。

「お姉さまたちはそこで私を見守っていてください」

あきあの言葉使いが変わってきている。

「お姉さまたちの後押しがなければ、この術最後まで出来る自信がありません。」

じっと見守ってくださいたださるだけでいいんです」「
薫達は頷くしかなかった。ひづるにはそんなあきあが天女のように
見えた。

「神主様、祭壇をここに用意していただけませんか。

術はもう始まっています。私はもうここから動くことはできません」

神主はあわてて弟子達を総動員してあきあの前に祭壇をつくった。

「ひづるちゃんいらっしやい」

とあきあが手招きする。

ひづるが行くと

「お願い、この役目はあなたしか出来ないの。

私の手をもってそのローソクに火をつけてくださいな」

ひづるはあきあの顔を覗くと眼に光が無く、一点を見つめたまま動
かないのだ。

「あきあお姉さん、眼が」

「ええ、今私の眼はヤタガラスがもっていつてるので見えないの」

「いやよ、あきあお姉さんの目が見えなくなるなんて」

「大丈夫よ、ヤタガラスが帰ってきたら眼は元通りになるから。ね、
お願い」

あきあの頼みにひづるはあきあの手を添えてローソクに火をともし
た。

「ごめんね、ひづるちゃん」

どうしてあきあが謝ったのか、つぎの言葉で判明した。

「私の命をこのローソクに移しました。ローソクの火が消えてしま
えば私の命も消えてしまいます」

「いやあ……」

ひづるが叫んだ。

「ごめんね、ひづるちゃんこんなことあなたに頼んで、でもあきあは負けないわ。」

約束する・・・生きてあなたの前に戻ってくることを・・・」

「だから、必死でこのローソクの火を見ていて」

見ているだけでは、どうにもならないが皆の願いを無碍にはできない。

そしてニツコリ笑う。

「戻ってきたわ」

『カア』

黒い鳥が飛び込んできた。

とたんにあきあの眼に光がともる。

壺には満タンの清水が・・・。

「ありがとう、あなたの役目はもう終わりよ」

ヤタガラスは嫌々をすることがとく首を振りつづける。

「困った子ねえ。いいわ、そこでおとなしくしていてね」

『カア』と鳴く

ひづるの好奇心はいつぱいになる。

「鳥さん、こつちにいらっしやい」

「これ、ひづる」

「いいのよ、本物ではないから」

ヤタガラスはちょこちょこ歩いてひづるの前に来てから肩の上にポンと乗る。

まるで手乗り文鳥のようだ。

時間の瀬戸際の中のホツとする場面だ。

こんな場面に遭遇するマスコミ代表の二人、声もでない。見守っているしかしかたがないのだ。

一番はらはらしているのが薫、まゆみ、律子、杏奈だ。
沙希の身に何かあれば皆にどんな申し開きをすればよいのか。

墨を摺りながらあきあの祝詞がはじまった。

ときどきローソクの火がゆらめいてヒヤツとする。

薫達は風がはいらぬように注意深く周囲を見守る。

「京子さん、半紙を4枚に切ってくださいな」

京子は言われたとおり注意深くペーパーナイフで4枚にきりわけ。

それにすりあがった墨をたっぷり筆につけ

1枚1枚、さらさらと何事か書いていく。

達筆すぎて読み取ることが出来ない。

そして

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎　これを四神相應の陣
なり」

と書いて書いた半紙を火にくべる。

祝詞は続いている。神官たちもあきあに続いて一心に祝詞をあげる。

心がひとつになっているのだ。

するといきなり火が燃え盛り、それが鬼の顔となっていた。

「邪魔をするのはお前か・・・結界を破らせる！・・・邪魔をするな！・・・」

「みんな返事をしてはいけません。返事をするのは呪をかけられるのと同じです

鬼に食べられてしまいますよ。姉上達、この半紙をちぎって耳に入
れなさい。

そして、眼をとじていてください。

神官様のお弟子さん、怖ければ出て行ってもいいのですよ。誰も邪

魔をしません」

皆に注意をすると再び力強く祝詞をあげていく。

「邪魔をするな。朱雀門をあける！久しぶりに人間を食べさせる！」

鬼の顔が伸びてきて祝詞を上げる神官達の目の前にくる。

中年の神官がとうとう我慢が出来ず悲鳴を上げた。

そのとたんその鬼は悲鳴を上げた神官を襲った。

グイと飲み込みバリバリと骨の砕け散る音、

好奇心で耳栓をはずし、眼をあけていたひづるにとって我慢ができない

光景でおもわず悲鳴をあげてしまった。

鬼の首がぐいっとカーブするとひづるの前に顔をみせる。

「おお、女ではないか、しかも一番美味といわれる子供の女」

「わしに食わせる！」

別の鬼が近寄ってくる。

(しまった) あきあはひづるの好奇心の強さを見逃していた自分に腹を立てた。

しかし、ひづるをすくったのはヤタガラスだった。

ヤタガラスは鬼の顔に飛び掛り、鋭い爪で鬼の顔をひっかく。

しかし、式神の身でかなうはずのない相手であった。

跳ね飛ばされ、一瞬のうちに元の懐紙にもどってしまった。

あきあはひづるを背にかばい、鬼の前に立ち尽くす。

「なんだお前」

「お前こそ……お前の名は……」

「俺は青鬼」

「お前の名は……」

「俺は黒鬼」

「では青鬼、では黒鬼」

「なんだ」

という声とともに

「しまった」

といて動かなくなってしまった。

「おのれ、呪をかけたな」

あきあは鬼の言葉に耳をかさず、

「神様、その火に残っている壺の清水をかけてください」

といわれても、壺は鬼の顔の下だ。

恐る恐る手を伸ばして壺を取ろうとするが、動かないとはいえ恐ろしい鬼の顔、

かあつと睨まれて思わず手がすべり壺を倒してしまった。

零れ落ちる清流から汲んだ清水、これで鬼を倒すことができなくなつた。

結界も張れない。窮地に陥つたあきあ……。

ついに鬼があきあの命の火を見つけてしまった。

にやりと笑いながら、火に『フー』と息をかける。

たちまち苦しがつて崩れ落ちるあきあ、薫も皆もどうすることもできない。

『フー』と鬼が息をかけるごとに脂汗を流しながらあきあが転げまわっている。

「あきあ姉さん、しっかりして……大丈夫っていったじゃない。

生きてひづるの前にいるんでしょ」

ローソクの命の火が消えようとしていた。

そのとき少女の眼から清らかな涙が流れ落ち、あきあの瞳に降りか

かった。

涙は形を変え、あきあの上に公達姿の安倍晴明が現れた。宙にある晴明は印を結ぶと零れ落ちたはずの清水が逆回転のビデオを

見ているように壺にもどり、壺が宙をとんで鬼が現れた火にかげられた。

すると『ギヤア』といって鬼は消滅したのだ。

宙から降りた晴明はあきあを抱き起こして

消えかかった命の火を力強い炎にかえあきあにそそぎこんだ。

『パチっ』と目覚めるあきあ、そこに思わぬ師の顔を見て慌てて座りなおす。

「これは、晴明様。思わぬ失態を見せ申し訳ございませんぬ」

「よいよい、そなたはそなたを助けるために命を犠牲にしようとしたのではないか」

「ほほほ・・・相変わらず安倍晴明様は幼いお子に甘うございますな」
と声がかかった。

見ると律子が横になって、その上に沙希姫が宙にいた。

「おおう、これは沙希姫殿。おひさしぶりでございまするなあ」

「これはのんき・・・京の結界はどうされるおつもりか」

「いかん、いかん、これあきあよ。わしは写し身、結界は張れぬ。

おぬしがすべてするのじゃ」

「はい、晴明様。お願いがございます。そこの沙希姫様とそばにて見守っててくださいませ」

「ほほほ、沙希。甘いのはわらわも同じじゃ。

わらわの生まれ変わりのそなた、充分に見守っておるぞえ」

信じられぬ情景だが神官としてこの神社を守る身、

安倍晴明から直接声をかけられ一段と感激が強くなる。
しかも、年に一度弟子の安倍あきあがここを訪れ結界の綻びを点検
していくという。

結界を張りなおして、ここを去る際、沙希姫と晴明はともに天に帰
っていったが

沙希姫のこの世を律子の眼を通して見る楽しさがもう止められず、
ずっと続けていくという。

律子は困ってしまった。あんなことこんなことも沙希姫に見られる
とおもつと……。

安倍晴明も沙希姫にあおられ、しばらく弟子のあきあの眼をとおし
てこの世を見ていくという。

なんかこの世で無い人がこの世を楽しむ、変なことになったものだ。

ぐったりとバスの座席に座り込むあきあ。

そんな状態をみて単独インタビューが出来るかどうか心配な京子。
でもあきあは忘れていなかった。

「いろいろあつたけど、薫さん。」

京子さん達のために単独インタビューお食事しながらしましょうね」

「あきあ、大丈夫なの？あんなことあつたので疲れているんじゃないの？」

「大丈夫ですよ、若いから……それに晴明様に強い命の炎を入れて
もらいましたもの」

こうしてホテルに帰った沙希たち。

ゾロゾロと従業員送迎用のバスからあきあ達が降りてきたのを見て
マスコミの連中は慌てて皆を囲んで話を聞こうと必死だった。

あきあの前にあのひつこい記者が現れた。

そして、頭を下げると

「申し訳ありませんでした」

といった。

「どうしたの？」

「いえ、あの指紋警察で照合したら同一人物という結果ができました。疑ってすいませんでした」

とあやまった。

あきあがロビーに入っていく寸前、あの記者に耳打ちをした。

驚く記者に同僚が

「どうした、何かいわれたのか」

「いや、『くまさん、愛妻のしずちゃんのおいしい卵焼き食べてが
んばってね』」

だって・・・おい、お前が俺のこと話たのか」

「馬鹿いえ、なんでお前のこと話すことがあるんだ」

「そうだろうな・・・うーん、わからん」

ロビーではエレベーターを待つ間

「ねえ、あきあ。あの記者に何をいったの」

「へへへ、ちよっとしたいたはずらしちゃった。こういったの。」

『くまさん、愛妻のしずちゃんのおいしい卵焼き食べてがんばって
ね』って」

「へえ、あの記者、くまさんっていうんだ」

そこへエレベーターが下りてきた。

乗り込むと

「ねえ、みんな私の部屋で食事しない？このまま別れてしまつの寂
しいもの」

「いいんですか？」
とひづる。

「私もいいのかしら」
と大空^三庄絵。

「ここにいる全員よ」
「じゃあ、みんな着替えてから薫さんのお部屋に集合ね」
とあきあがいった。

みんな着替えていくと驚いたことに食事の用意は全て終わっており支配人がにこにことして待っていた。

「今日の食事はすべてこのホテルもちとさせていただきます。
京都のために大変な目にあわせてしまい申し訳なかったとおもいます。」

おまけに絶対会うことのないあんな有名な名人に会わせていただいて身に余る光栄でございます」
と、いって頭をさげた。

その後の食事での単独インタビューの結果はここには書かないただ、マスコミに送られる大賞に選ばれ、
載った週刊誌は3倍増の版をかさねて単行本にまでなってしまった。

京子は結果フリーになってあきあのそばにいてもいる。
天蓋孤独の彼女は里の住民になる資格が充分にあったのだ。

城田はまゆみにスカウトされ、早乙女薫事務所のメディア部、つまり沙希の

開発するソフトの宣伝等を担当するのだ。
悠々自適をしようと思っていたがそうは沙希がさせなかった。

第一部 第十話

昨日の清明神社の一件以来、天城ひづると両親、大空圧絵との距離がグンと近づき、いづれも個人事務所だったので昨夜の話合いで早乙女薫事務所に席を移すことになった。

大空圧絵はマネージャーと二人三脚だったので何の問題もなかった。東京の事務所に電話すると残っていたマネージャーも仕事が軽くなつたと喜んでおり、さっそく薫の事務所へ行って今後のことを打ち合わせてくるという。事務所もすぐにも閉める予定だ。

天城ひづると両親も三人の家内事務所で母親がマネージャーを務めていた。

しかし、父親と子供の二人をマネージメントしていたのでつい眼が届かなくなりひづるを我儘にしまったのだ。父親にしてもつい手薄になり活躍の場がせまくなっていた。

薫の事務所に移ることにより母親も以前の天城鶴世の芸名でカンバツクするという。

ひづるがあきあと共演することが凄く刺激になったらしい。そして、ひづるはあきあのアドバイスでこの映画が終わると学業を優先さす。

そのかわり学校の休みの日や夏休みや冬休みなどは忙しい。女優の仕事があればそちらが優先だが、なければコンピューターの仕事の助手や

もしくは杏奈の仕事の助手をさせて、社会の一般常識を覚えさすのだ。

父母もあきあの方針には全面的に賛成だった。

城田は退職して田舎に引つ込むというのをまゆみが説き伏せて、城田のいままでの人脈と経験を沙希のつくるソフトのメディア関係のヘッドに据えた。

鳴海京子は単独インタビューの記事をひっさげてフリーになる。実際はあきあのそばを離れたくなかったというのが真実らしい。天涯孤独だというこの京子いづれは里につれていくことになるだろう

しかし、たった一日でこれだけの人間を自分の周りに引き付けてしまっ
まう沙希に

「あんたつて子はまあ・・・」
と薫、まゆみ、律子、杏奈が顔を見合わせてあきれ返ってしまっている。

支配人とホテルオーナーの心づくしで朝食を終え、
美味しいコーヒーを飲んでいた一同にロケバスの到着を知らせてきた。

東京へ帰る京子と行く城田もこの日のロケは見逃せないと一同についていく。

ロケバスは市民球場についた。バスを降りるとさっそくあきあは球場周囲を見て歩く。

あきあはひづると律子と杏奈を連れて行く。
というのも杏奈もひづるもあきあにくつついて離れないからだ。

球場周囲を警備する助監督にその周囲5mを安全区域と定め
マスコミの車をその中に入れるよう依頼する。

もしそれ以上のところに止めると何も映らなくなるとアドバイスを

した。

一度張った結界内には出入りは出来ない。

昨日会場にいた助監督には身にしみてわかっていることだ。

あきあ達が球場内に入ると次々とマスコミの車がやってきた。

場所をとるのは大きなテレビの中継車だ。

場所取りが始まると弾き飛ばされ、結界区域内に入れない車が出てくる。

泣く泣く手持ちのビデオ撮りとなるのだ。

しかし、中継といっても生では流せないからビデオ撮りと変わらない。

そのビデオの映像も肝心なところは砂嵐で映像を見せないとあきあが言う。

スタンドに立つ関係者、マスコミ陣、撮影スタッフはスタンドのあちらこちらに配備され、

決死の覚悟のカメラマンと助手がグラウンド上にたつ。

今日はシーン10、出演者は姉のあきあと弟のあきあ、

そして天城ひづるが演じる幼いあきあの3人だ。

しかしどんな怨霊、鬼の類があきあの術によって生みだされるのか知れたことじゃなかった。

共演者は出番がないのにすべて顔を揃え、映画会社の役員も揃って来ている。

時間となった。あきあが球場外の人から中を隠すため結界を張る。

烏帽子と公達姿は安倍晴明と同じ、その凜々しさと可憐さにどよめきがおこる。

高々と祝詞をあげる、今日のロケの安全も願っているのだ。

そして始まった……。

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これ四神相應の陣と

いう」

そして、高々と宙に五芒星を描きその手で地を刺し貫いた。

広い空間が揺れ周囲に広がっていき、あきあが示した球場から5mのところまで止まった。

透明のドームで球場が覆い尽くされている。

あきあは次々と術を使っていく。

平安京の建物が空間から現れ、平安の庶民が歩き出した。公達もいる。

何だこれは・・・何も聞かされていないマスコミは仰天した。

こんなの本当とはいえない。マジックにしても大きすぎる。

或る記者はスタンドから飛び降り、通り過ぎる人たちにインタビューしようとした。

しかし、捕まえようとしても身体を通過してしまう。

つまりSFというホノグラムのようなものである。

つぎに平安京の建物の壁を人々と同じくホノグラムとおもって激突してしまう。

スタンドの失笑をかって戻ってきた記者は

「わからん、全然わからん。あの建物は本物だった。

でも人々は・・・俺この世界にホノグラムがあるってこと聞いたこと無いぜ」

あきあが話だした。

「今道を歩いている人々は平安時代の人々です。いま時の流れをさかのぼって

ここに再現しました。実体はありません。つまり影だけです。

この平安京の建物は私が術で再現したものです。実体はありません。

これより撮影の中で術で出現させる怨霊悪鬼の類は実体があったり

影だったりします。

つまりこのグラウンドに下りないでください。

グラウンドのカメラマンも危ないとおもったらスタンドに逃げてください。

撮影のために大切な命をかけないでほしいのです。

スタンドは二重の結界内ですので安全です。

グラウンドに降りると鬼は人間の匂いに敏感に反応します。

昨日もある場所で人間が鬼に食われるのを見たところです。

あんなこと二度と嫌なんです」

と区切り

「ひづるちゃん聞こえる？」

「はい」

広い砂利道に模したところから声だけが聞こえる。

「いま、ひづるちゃんは或る場所で小さな結界内にいます。

今は姿はみえませんが闘いが始まると術で見えるようになります。

だから安全なんです。ひづるちゃん、絶対にそこから出たら駄目よ」

「わかりました」

と声だけが聞こえる。

「では」

とあきあは公達姿を解いていった。

杏奈が手伝って素早く杏奈デザインの黒い衣装に

皮を黒く塗って作ったケースを上下2本の黒い紐で太腿に結わえ付ける。

そのケースには黒い鉄扇が入れられた。

胸の膨らみを無くす為サラシを巻く、股間に膨らみは強調しない。

ただ、アクション中にチラツと見えるだけだ。

メイクをしている間、肩で息をくりかえす。

「こんなに締め付けなくつちやだめなの？胸が苦しいわ」
「何を言っているの。この間からのことを考えれば贅沢な悩みよ」
とメイクをする杏奈にくぎをさされてしまう。

「できました」

杏奈の声で立ち上がるあきあ。

「じゃあ、あきあくん。姉のあきあを頼むよ」

頼むよっていったって・・・と記者が笑っていると
律子が手渡した人型にあきあが息を吹き込む。

いきなり白い衣装の姉のあきあが現れた。

「あなたわかつてるわね」

「はい、ご命令通り」

「監督、始めてもらってけっこうです」

「よし、助監さん、合図を」

助監督が無線で合図をする。

しかし、こんなこと初めて見せられた記者達は驚きで頭の中が真っ
白となっている。

まるで現実とはおもえなかった。

助監督に

「記者さん達嫌いよ」

と注意されても混乱が続いている。

携帯で連絡しようとしても結界内は電波も通さない。

なんだこれ・・・と携帯を投げ捨てる記者もいた。

日頃から傍若無人な記者に腹を立てていた映画人は失笑している

「一発本番」

「一発本番」

「ヨーイ・スタート」

カチンコの音と共に男のあきあ（＝弟）、女のあきあ（＝姉）が対峙し、横に走りながら弟は鉄扇、姉は杖を振りかざしている。弟が飛び、それを追いかけて姉が追う。

『ガッ』と音がして火花が散った。姉の杖は仕込みの杖だ。

双方立場が逆となった。弟が飛んで姉の頭を掠めるとまた『ガッ』と音がして激しい火花が飛んだ。

鉄扇で頭を打ってきたのを杖で防御したのだ。

弟は塀の上に立った、姉も地の利の不利を悟って相対する位置の塀の上に飛び乗った

「弟よ、闇を支配し人の命を奪うのは止めなさい。そして、私の中に帰るのです」

「姉上！そうして、僕を縛りつけるのですか、そんなの真っ平です。

姉上こそ、僕の軍門に下るのです。

どうです、僕と闇を支配しませんか。ずっと気持ちがいいですよ」
声はひくいがさすが兄弟よく似ている。

「そんなことで人の命を奪っているのか、もう許さぬ」

キツと鋭い目で睨みつけ、血が出るほど強く唇を噛み締めた。

姉は飛行術で弟の上を飛び越え、地上に降り立った。そして、地のうりにやら書き記す。

その様子を見て『フン』と冷たく笑う弟。

どうやら弟は姉の手の内を知り尽くしているらしい。

やおら鉄扇を広げると、闇の亡者よ再びこの地上へ生まれ出よ。

全ての人間共の血を吸い、肉を食らい尽くせ。と鉄扇を振り下ろす。

するとどうだろう地の底より穴があきゾンビの兵士があらわれた。

『ヒ』女性記者の悲鳴が聞こえる。

姉も負けず壁の中より土の兵士を呼び出す。

兵士同士の鬭い、敗れたものは土に返っていく

残り少なくなつた兵士を見て、弟は再び鉄扇をもつと大きく振り下ろす。

「地獄の悪鬼、青鬼、黒鬼よ、地獄より我の申し出に応じよ。さすればいくらでも人間を食わしてやるぞ」

「お〜う」

とすさまじい声がして天より黒雲が降りてくる。

そこから大きな手がでて雲を掻き分け頭が出てきた。

一本角の恐ろしい顔をした鬼だつた、

牙がとがっていかにも人間を噛み砕いてしまいそうだ。

「ぎゃ〜」

気の弱い男性記者が凄い声を上げて気絶した声だ。

身の丈が5mの鬼が二匹残っていた兵士を敵味方構わず、ムシヤムシヤ食べ散らかしている。

「う〜、まずい」

どこかのCMのような台詞だつた。

「ん〜」

つと鼻をピクピク動かして何やら臭っている。

「こりゃ、生きた人間の臭いだ。う〜美味そうに、酒の匂いもしていやがる」

と、カメラマンの方に寄っていく。

「おう、いたいた。随分太つてうまそうだ。二人もいるなあ。

黒鬼の太郎ジャ、お前はあの細い方を喰え。わしはあの背がちつちやいが太い方を食らう」

「何をいうだ、青鬼の次郎ジャ。逆だ。俺が太い方を食らうからお前が細い方を喰え」

「なんだと！」

と喧嘩を始めてしまう。

「今のうちにはやく！」

逃げろというあきあの声にスタンドのほうに走りだした。

必死に走るが日頃の酒びたり生活が長いため、すぐに『ゼイゼイ』と息が上がってしまった。

足が動かない。それでも生きるために走った。スタンドの上から監督が腕をグルグル回し、

「走れ、走れ・・・馬鹿！何をスピードを緩めるんだ。早く早く！ 大事なカメラは落とすな」

何故か、この言葉で笑ってしまった。

走りながらわらう？気が可笑しくなってきたのか・・・でも恐怖と背中あわせだ。

急にドスドスという大きな足音が聞こえてくる。

何故か足が止まりカメラの照準を当てて撮影体制に入ってしまった。

恐怖と仕事、ファインダーの中で二匹の鬼が恐ろしい顔でゆっくりだが序々に大きくなってきた。

「先輩！なにやってるんですか・・・早く早く・・・」

再び走りだしたが、今度は逆にカメラを構え撮影しながら走りだした。

（俺って馬鹿だ！何をやってるんだ。此処で喰われてしまったら仕事なんて関係ないのに・・・）

俺、根っからの映画馬鹿なんだなあ）

大きな手が下りてきて、カメラマンを握り潰そうとしたとき

弟のあきあが投げた鉄扇が鬼の頭に当たり、後ろに倒れこむ。

「あにするだ！」

鬼が怒りだした。

弟を捕まえようとするが、飛行術で飛び回り、鬼通しがぶつかり合う等、鬼は手も足も出ない。

その間にカメラマンと助手はスタンドに飛び込み助かった。スタッフ達が駆け寄り、二人をスタンド上に運びあげる。

「よかった、よかった・・・」

監督や皆に小突かれながら、ほつと息をはいた。

と急に二人とも大声で泣き出した。恐怖から開放された瞬間だ。

「判った。判った。あとであきあにお礼を言っておくんだな」

と宙を飛び回っている。不思議な少女に眼を向ける。

一瞬目が合った瞬間『ニコッ』笑った気がした。

すると頭の中に（良かった、本当に助かって良かったわ・・・

でも、これからはもっと身体を鍛えた方がよくてよ！愛する富士子

さんのためにもね）

という声が聞こえた。

助手のほうには（良かった、本当に助かって良かったわ・・・

でも、これからはもっと身体を鍛えた方がよくてよ！

監督の横にいるストップウォッチを持った愛する山本和子さんのためにね）

という内容だった。慌てて監督の横を見ると座り込んで泣いている彼女がいた。

カメラマンと助手は再びあきあに目を移すと、鉄扇で鬼を懲らしめていた。

まだ芝居が続いていたのだ。

「凄い！」

「ええ、凄い子だ」

お互いにいいあっていた。因みにこの二人は自堕落な生活から足を荒い、

馬拉ソンや水泳で身体を鍛えてカメラマンは映画にテレビに大活躍をし、

助手は戦争カメラマンとして世界各地を飛び回っている。

カメラマンとして、また子供達の保護者として有名だ。

弾丸の飛び交う中、なん人の女子供を危ない場面から助けたかわからない。

勇気ある行動を誉めると

「いやあ、ぼくは昔、一度死んでいるんです。鬼に食われかけたとき少女に命を助けられましてねえ」

と冗談を言っていた。表情は真剣に・・・だが

話をもどす。

鬼を完全に制圧した弟は

「この馬鹿鬼！」

ときつい言葉を言い放つ。

「あの女がお前達をきりきざんで、地獄の業火で焼こうとしているのが判らないのか。」

お前達の肉を狙っている他の鬼達の餌にしようと思ってるのを・・・
「」

「ええ〜・・・そんなのいやだ！」

「俺達をあいつらの餌にだとう・・・」

鬼達は弟の指差す、平安京の大屋根に立つ女を見て怒り狂った。

鬼は壁を壊し、木々を踏み潰し姉にせまっていく。

姉は一つ大きな息を吐き、天と地に願い、雨を呼んだ。

グラウンド内は大雨だがスタンドは晴れている不思議な光景だ。

雨は溢れ洪水となった。姉は雷を呼び、龍神を呼んだ。激しい雷の中厚い雲の間から何かが降りてきた。大きな龍がとぐるを巻き、その中から龍が口をあけ火の玉を鬼に向け吐き出した。

頭を押さえしやがみこむ青鬼……火の玉を浴びた黒鬼の片手がない。

龍と鬼の闘いは鬼の捨て身の攻撃で片足を失い、しかし、青鬼は火の玉をまともに浴びて消滅した。

片手を失った黒鬼はもう一方の手も失い、慌てて自ら開いていた地獄へと通じる穴に飛び込んで逃げていった。

龍は『キュウーン』と一声泣いて雷雨の中を天に戻っていく。

雷雨が止み、分厚い雲間から光が差し込むとあつというまに雲が消滅する。

残ったのは破壊された建物と敵対する姉弟だが……場面は倒れこんだ姉を見下ろす弟の冷たい微笑だった。

「どうだ、姉上。僕のほうが貴女より強い、貴女は僕の軍門に下つたのだ」

「いえ、そうじゃない。そうじゃないのよ、弟よ。」

闇は光あればこそその闇、光なければ闇は存在しないのよ。この世から光を消しては駄目！」

「言うな！姉上。僕は貴女が大嫌いだ！いつもそうそんな冷たい目でぼくを見ていた。」

姉上の熱い血潮……でも僕の血潮は冷たい……身体が寒いんだ」

そんな情景をみている記者達

「私なんだかあの子が可哀想……」

「でも、あいつ悪いやつだぜ」

「でも、あの子はじめからあんな冷たい目の子じゃなかったはずよ。

きつと赤く熱い血が身体に流れていたのに違いないわ」

心の思いを激しくぶつける弟。そして

「姉上！とうとうこの時がきたのだ。貴女は僕になる。

姉上を僕が吸収するのだ。アハハハ……」

狂ったように笑う弟のあきあ。

どうやら姉の意識が閉ざされたようだ。光が消え、闇が襲つ。

ただ一点、月の光がスポットライトのように姉の姿を映し出す。

たじろぐ弟……。

「いけない！いけないわ……」

「誰だ！」

「いけないのよ、あなたがそんなことしたら……」

「誰なんだ、何処にいる」

「わたしはここよ……」

と弟の心の臓あたりから青い小さな光の玉、

姉の心の臓あたりから赤い小さな光の玉が飛び出してきて

お互いが反発しながらも惹かれあい上から下へと降りてきて

二つがとけあつた瞬間、明るい光の玉となった。

その光が幼い少女の姿にかわる……天城ひづるの幼きあきあだ。

スタンドにいた母親が父親の袖を強く握り締める。

「ああ……」

父親の手が母親の肩に回り強く寄り添いあう。

娘の登場の仕方が思いがけなく、舞台人として娘があきあと出会う

た幸運を言った。

こんなこと一生あるものではない。

演技が続く。

「お前は……?」

たじろぐ弟のあきあ。

「私はあなた。あなたの幼いころのあきあよ」

「幼いころのあきあ? 僕はお前なんて知らないし、知りたくもないね」

弟の反発は強い。でも天女のような微笑をうかべて

「そうね、あなたには生きていく上で大事なものが欠けているものね」

「僕は完璧だ……欠けているもんなんかない」

「わからないの?」

「僕の術も姉より強い。師の安倍晴明よりも強いんだ」

「馬鹿ねえ」

「何? 馬鹿だと……」

「ええ、あなたはお馬鹿さん。子供といっしょね」

「ええい、言わせておけば」

と少女に手の平から衝動波を浴びせる。

でも少女は片手でそれを掃うだけでその衝動波は、

とんでもない方向へとんでいき壁にあたって壁が爆発する。

「そんな子供だまし私には通じないわ」

「子供だましだと……」

完全に頭に血がのぼり、少女に対して攻撃をしかける。

しかし、術とは冷静でなければ威力が欠けてしまう。

現に少女に仕掛けた衝撃波は尽く威力を失い、手の平から『ポウン』

と

音がするだけでなにも飛びはしない。

「あら、どうしたの？それがあなたのいう闇の支配者の術なの？
そんなもの女子供にだって通じないわ。」

私だって何の修行もしていないのよ。そんな子供にあしらわれているなんて・・・」

「くそっ」

と今度は鉄扇で少女に打ちかかる。少女は軽くかわすだけで当たりもしない。

弟は座りこんでしまった。

「こんなこと・・・こんなこと・・・」

あまりの悔しさにわれを忘れて泣き出してしまった。
何か人間らしさを取り戻している。

幼いあきあはそんな弟の頭を撫でていった。

「可哀想に！、寂しかったのね。あのね、あなたに欠けているものは”思い出”・・・」

人は思い出がなければ生きて証がないのよ。

人は感情で左右される。感情は思い出が抑制してくれるの。

貴方は感情を爆発させてしまった。思い出がないから抑制できない。

だから、私みたいな子供にあしらわれてしまったのよ。

もう、あなたには力が残っていないわ。ゆっくり眠りなさい」

と、って手をかざして弟のあきあに光を当てる。

弟の姿が消え、青い光の玉に変わって幼いあきあの手の上で浮かんでいた。

すると声がかかった。

「やい、子供！僕はお前に負けたんじゃないからな。ぼくは姉の身体で少し眠るけど今度は負けない」

といつて倒れている姉の身体に入ってしまった。

「ふふふ、面白い。あの子、面白い。ええ、いいわ。いいわよ。今度あなたが出てくるの楽しみにしているわ」

姉の身体が青白く光り、その光が身体に吸収されていく。

「さあ、あきあ起きなさい。私の力を分けてあげるから立ち上がりなさい。

あなたはこれから、あの雪夜叉という鬼を退治にいかなくてはならないのよ。

こんなところで倒れている暇はないはずよ」

といつて手をかざし光を当てると、

幼いあきあの姿がああ光の玉となってあきあの身体に吸い込まれていった。

『パチツ』と眼をあけるあきあ。

すくつと立ち上がると呪文で菅笠を被った旅姿に変わり歩き出した。

もった杖から『チリン・・・チリン・・・』と小さな鈴の音が鳴っている。

いつ出てきたのか、白い霧がかかりその中に姿が霞んでいく。

一度立ち止まって、振り向き少しあげた菅笠から覗く横顔の唇の赤さがとても印象的だった。

静かに静かに、霧が濃くなり姿が見えなくなった。

『チリン・・・チリン・・・』鈴の音が小さくなって消えていった。

「カーツト」

監督の大きな声が鳴り響いた。

思わず『ハー』という大きなため息があちらこちらから流れた。

「監督お疲れ様です」

監督の背後から声がかかる。

「おお、そこにいたのかね」

「はい、先ほどからずっと」

「あきあくんあれは……」

白い靄は晴れていたが、破壊された平安の建物の無残な姿がそこにあった。

しかし、あきあが

『ピー』と口笛を吹くと

さーっと跡形もなくなりもとのグラウンドに戻っていた。

「凄い！」

助監督が一声あげる。

共演者達が全員あきあの元に集まってきた。握手を求められる。

「君に負けない演技をするからね」

「今からわくわくする。明日からの演技を楽しみにしてくれ」

など、口々にあきあに戦線布告をしていく。輪の外では薫がにこにこしている。

「監督！では結界を解きます」

「おお、そうしてくれ。でも大丈夫なのか？マスコミの連中」

「ええ、変な反応をするとは思いますが、スタッフの人達には？」

「伝えてある。マスコミの記者達の話に合わせておけて」

「じゃあ」

と宙に五芒星を描き、拳で地面を叩く。

空間が揺らめき、あきあの身体に入ってきた。静かだった世間の音が聞こえてくる。

マスコミの記者達は一瞬頭を振り、あれっという顔をしながらすぐにそれも忘れてしまったのか、監督の傍に集まってきた。

「あれれ、監督！もうあのセット片付けてしまったのですか。いつのまに？」

「君が気絶している間にさ」

小野監督はにやにや笑ってる。

「いやだなあ、気絶なんてしていませんよ」

「こんな広い場所を借りる必要があったのですか？」

「ちやちなセットでしたよねえ」

「ああ、急につくった張りぼてだからねえ。」

こんなところ借りたのだから、ここしかなかったからだよ」

「あの鬼の衣装どうしたのですか？」

「ああ、あれか。友達に着ぐるみマニアがいてねえ。」

彼から借りたんだよ。今、取りにきてもって行っちゃた」

「でもあんなので、この映画大丈夫なんですか？」

「ああ、特撮の腕のいいのがスタッフにいるし、CGもあるからねえ」

監督のでたらめを聞いていると噴出しそうになるのでそばから一歩離れていき、

走ってスタンド外まで行って笑い出す共演者やスタッフ達……。

あきあは律子や杏奈、まゆみ、薫がつくる壁の中で全身タイツから胸に巻いた

黒い晒しをはずして、ホッと息をついた。

「あきあ姉さん！」

ひづるが走ってくる。術で外野のスタンドに移しておいたのだ。

「凄い！凄かった。わたし途中でおしっこをちびりそうになっちゃったわ」

「えらかったわよ、ひづるちゃん」

「わたしね、ママに『あなた、あんなにお芝居が上手だったのかしら』って言われちゃった。

変な誉め言葉よねえ」

ひづるはあきあの隣に腰掛け、身体を持たれかけていた。

「私ねえ、あきあ姉さんの演技にひっぱられるのがわかったの。

だって、あれってあきあ姉さんじゃなかったわ。本物だったもの。

薫姉さんが言っていた、あきあ姉さんがやるのって全て本物だっていうの。よくわかったわ」

ジロリとまゆみが薫を睨みつけ、

「誰が薫姉さんなの？」

「私のことよ……」

「薫はひづるのママより年上じゃないの、ねえひづるどうして？」

「だって薫姉さんって呼ばなければいろんな手を使ってお芝居中に笑わすっていうの

もし、薫姉さんって呼べば、あきあ姉さんが作ったソフトを買ってあげるって」

「まあ！あきれた。薫！よくもそんな子供だましの手を使って……」

それにあきあの作ったソフトを買って？どうせ、静ちゃんから手

ヨロマカス気でしょ」

「へへへ、ばれたか」

「ひづるもひづるよ。そんなことで買収されるなんて」

「ごめんなさい」

っていつてからあきあの影にかくれてまゆみを見つめる。

でも眼が笑っておりペロリと舌を出していた。

傍で見ていた両親も、我が子に出てきた子供っぽさを喜び、
訳隔てなく事務所の代表格の天才女優早乙女薫も新人女優天城ひづ
るも

しかりつけるまゆみ社長を頼もしく思い事務所に入った喜びを噛み
締めていた。

「さあ、今日はお仕事が終わりだから……」

「え、やったー。ねえどこか遊びにつれて行ってほしいな」

「駄目！ひづる貴女最近学校をさぼってばかりでしょ。」

これから、ホテルに帰ってお勉強よ。家庭教師もいるし……」

「家庭教師って？まさか……」

と聞いて薫がまゆみを指差す。

「うん？」

と自分を指差し無言劇。

「馬鹿！なんで私が家庭教師をやらなくちゃならないのよ。家庭教

師っていえばそこにいるでしょ」

と律子を指差す。

「えっ、私？」

と輪の外で面白がっていた律子だったが急に自分におはちが回って
きて驚く。

「静ちゃんから聞いているわよ。高校のときから小学生の家庭教師
をしていたらしいじゃないの。」

その子を最後まで面倒をみて東大法学部に入学させたのは誰でした
かね。さぼるんじゃないわよ。

律ちゃんはこれからひづるの学業を最後までみることに。

これは昨夜、静ちゃんとお兄さんの社長に了解を取っているわ。

お二人とも律子を自由にお使いくださいって……」

「うっん、頭が痛くなってきた」

「凄い！」

このマネージャーさんにこんな才能があるなんて・・・ひづるの関心がピークになる。

「あきあ・・・いや、沙希ちゃん！」

「えっ、今度はわたし？」

「ええ、例のカーナビのCDのことで、警察庁の長官付き秘書、飛鳥日和子警視正

つまりあなたの叔母様の紹介で京都府警の広報の方が三人、一時間後にホテルにきて沙希ちゃんの説明を求めています。

それに、あなたが『警視庁捜査第1課の警部 飛鳥泉』と

『警察庁広域捜査課 警部 飛鳥京』のために作ったスキャナー付きモバイルも

京都府警が採用・・・いえ、ひつきりなしに事務所に全国の警察から紹介がかかっているそうよ」

「凄い！凄い！凄すぎる」

ひづるが叫ぶがこの少女の才能に唖然とするひづるの両親。

「それから、モバイルをもう少し改良してくれと、夕方にも京も泉もくるそうよ。」

それに時間があれば第三弾のソフト開発を急がしてくれと社長がね・・・」

「もう、兄さんったら。沙希の身体を休める時間もとってしまう気なの？」

「律姉、心配いらないわ。第五弾までの構想は頭の中に出来上がっているから」

「それから、母親の天城鶴世さん。

父親の片岡新三郎さん。あなたたちはわたしと東京に戻っていただ

きます。

今後のスケジュール調整をします。

特に天城鶴世さんあなたはNHKの朝の連ドラの出演が決定しました。

主人公の義理の母親役です。半年間の拘束を覚悟してくださいね。

そして、父親の片岡新三郎さん。貴方は1週間後に金毘羅歌舞伎に出演が決定しました。

共演は中村勘三郎さん、市川団十郎さんです。演目は東京に帰ってからわかります。

そして、大河ドラマ「織田信長」の出演です。明智光秀役です。

スケジュールがびっしりつまるかもしれませんが、

ご家族の団欒をなるべく取る様にしますが、

すれ違いがあっても電話で連絡するようにしてくださいね。携帯電話は持っていますか？

えっ？持っていない。明日事務所で契約してお渡します。

ええ、扱いやすい機種にしますので安心してくださいね。

ひびる、事務所の経費だからって無駄に電話したら駄目よ

「やったー、携帯持ちたかったの。でも電話するのって、

パパとママと律子先生とあきあ姉さんだけかな」

「こら！私は？」

「あつ、薫姉さんも」

「それに、事務所にもね。事務所には朝昼晩の連絡を欠かさないとね」

「はい」

元気のいいひびるの返事だ。

「あつとそれから・・・」

「何よ、まだあるの？」

じっと薫の顔を見ながら

「わたしは東京へ帰ったら事務所の体制変更の為、しばらくこっちにはこれないけれど、
順子と澪先生が・・・特に澪先生は1週間の休暇をとってくるそうよ。薫、絶対に喧嘩はだめよ」

「ええ、澪が来るの？あつちやあいつ何しにくるのかしら」

「なにしに来るって・・・あきあの・・・」
と沙希をみる。

「あつそうか。でもあいつ、何かしかけて早く返しちやえ・・・」

「ねえ、あきあ姉さん。澪先生って？」

「私のママの7番目の妹なの。薫姉さんは、6番目の妹なのよ」

「じゃあ、あきあ姉さんって、早乙女薫さんの親戚なんだ」

「そうなの姪にあたるのよ」

「でもなんで薫姉さんって・・・あつ」

「判るでしょ。薫姉さん、澪姉さんって言わなければどんな目に合
わされるのか」

「怖い！」

「でしょ・・・特に澪姉さんは腕のいいお医者さまなのに薫姉さん
と喧嘩するの。」

「でも、誰も止めないのよ」

「お医者様なのに・・・何故？」

「とても面白いから」

「うわあ、見てみたい」

「ふふふ、これからいやでも見れるわよ」

「あきあくん、今日はこれでいいから」

「監督！どうでした？ものになったでしょうが」

「ものになったでしょうかって？これほどの迫力がある撮影って今

までやったことがないよ。

何の特撮の要しない大スペタクルだからなあ、時にあの鬼って君の想像したものかね」

「いいえ、地獄での暴れん坊を連れてきただけですから」としらつと答える。

「じゃあ、本物じゃあないか」

「はい」

「ではあの龍は？」

「琵琶湖に眠っていた龍を連れてきました。無理やり起こしてしまったので怒ること怒ること、でも龍の子を助ける約束をして許してもらいました」

「龍の子を助ける？」

「はい」

「ちょっと待つてくれないか」

「といってスタッフを呼び集めた。」

そして、スタンドであきあの話聞くことになった。

スタッフ全員と残っていた共演者、そしてあきあ達、無論京子と城田もいる。

もういくら奇想天外の話でもあきあの話となれば別だ。

もう神経が麻痺しているのか嘘！とはもういええない心境となっている。

「話は簡単です。江戸時代の初期、

ここから遠い東北の地に母の龍が住む大きな湖と女の子の龍の住む小さな湖があったそうです。

でも、女の子の龍はお転婆で湖を氾濫させたり、

農作物を食い荒らしたりで住民達をとて困らせていました。

住民達は江戸の偉いお坊さんに頼みこみ、その地に来て貰って結界を張って湖から出さないようにし、その地の高い山の土を術で湖に持ってきて埋めてしまいました。

子供の龍の泣き声で大きな湖から母の龍が助けようとなりましたが位の高い天の神がついている偉いお坊さんにはかないません。

母の龍は逃げようと天高くあがった龍に偉いお坊様は般若信教の巻物を飛ばして

龍の身体に埋め込んでしまったのです。

龍はたまらずに落下して琵琶湖の湖底深くで眠りにつきました。・

・

以上です。簡単なお話でしょう」

沈黙が続いたが、監督の横にいたプロデューサーの一人が手をあげて

「質問よろしいですか？」

と聞いてきた。

「その龍に埋め込んだと言われる巻物はまだ龍の身体の中ですか？」

「いえ、わたしが取り除きました」

と喋って手のひらを開けると巻物が出現した。

「では・・・」

「いえ、龍の暴れるのを心配されているのでしょうか」

「はい」

「心配いりません。この巻物よりもっと強烈な呪詛の紙を埋め込んでおきましたから。」

いまごろはかの地の湖の底で眠っています」

「子供の龍は？」

「地の中でお坊様を呪いながら成長しています。」

今では母親より大きくなり力が強くなっています。だから、かの地は地震が多いはずですよ」

「あとう、江戸から呼んだというお坊様の名前はわかっているのでしょうか」

「はい、徳川家と繋がり深いお坊様、天海上人様ですよ」
「やはり……」

みんな

「ん？」

と言う顔で木村プロデューサーを見つめた。

「実は……」

といいかけるのをあきあが止め

「あなたはかの地が故郷ですね」

「はい」

「これから少し言いにくいことをいいますがよろしいでしょうか？」

木村が頷くとあきあがズバリ

「あなたは後3年しか生きられません」

みんな『えー』という顔で二人を見つめなおす。

木村は驚いていない。

「実は私の父も祖父も又曾祖父も……」

江戸時代をたどれば全ての長男が40で亡くなっているんです。私もあと3年で40です。

覚悟は決めているんですが、私も人間ですね。

あなたのような女優が現れたことで、もっと生きなくなりました。

この話が出なければ、あきあさん貴女に相談したでしょう」

「原因はわかっています」

とあきあ。えつという顔の木村に

「あなたのご先祖様が江戸から天海上人様をお呼びになった」

「はい、7人の村人が血判状を書いて私の先祖が天海様のもとに向かったそうです。」

他の6人の子孫はいづれも江戸時代のうちに絶えてしまいました」

「どうしてうちだけが残ったのかわかりません」

「そうですしょうか？」

「えっ？」

「そうですしょうかといったのです。あなたのうちには天海上人様からの
お手紙が残っているのではないですか？」

「はい、今は額にいれて飾ってあります。なにが書いてあるのか達筆過ぎて読めませんが」

「天海上人様はやはりこのことを見越して呪詛破りを書面にしたためていたのでしょう。」

でも、天海様の予想された以上に呪詛が強かったのです」

「あきあ、その龍さえ自由にしてやれば・・・」

「いいえ、わからないわ、薫さん。自由にしてやれば呪詛をやめるのか。」

だって何百年も自由を奪われていたでしょ。それだけ呪詛は強くなってるのよ」

みんながあきあを見ている。

「わたしが呪詛破りをして、どうかしら・・・龍と対決しなければどうなるのか・・・」

でも、やってみる価値はありそうね。

母親の龍からくれぐれも頼むって言われちゃってるから・・・」

みんな呆れ顔だ。龍から頼まれごとをされるこの少女は・・・。

「あのう」

と手をあげた木村と同様のプロデューサーの畑中、この人はテレビ局からの
出向だった。

「小野監督に伺います。この龍の救出劇を映画では使わないんですよ」

「ああ、無理だな。これはエピソードとしても話につながりがないし

無理やりいれてしまうと話が散漫になってしまう」

「木村さんに伺います」

「何？」

「さきほどからの地といわれていますが、東北のどのあたりですか」

「ああ、蔵王の近くだよ」

「シメタ」

思わず口にしてしまった畑中、でもテレビ局員独特の図々しさで

「監督」

「何だ」

「雪夜叉との対決は蔵王でしたね」

「そうだ」

「ではこの企画うちでいただけませんか？」

「また、龍を救おうってお笑いタレントなんかでお茶っを濁すあんな茶番か？」

「いやだなあ、テレビ局はあんな下劣なものばかりじゃありませんよ」

「違うのか。でもあきあばかりでお茶を濁すのも反対だ。そんなの
にあきあは出させない」

「判っていますよ。あきあさんは少々の企画じゃ僕も反対です。でもそれが少々の企画ではないとしたら？」

「なにがいいたい」

「どうもあきあさんはノンフィクションのドラマをフィクションに変えてしまふ女優さんだ」

「いいとこ見てるじゃない、あの畑中つて男」

と大空圧絵が薫に耳打ちする。頷いた薫。

「でも、あくまでもドラマ仕立てで実際に龍を救おうと考えています。もつとも、今考えたのだから筋もなにもまだありませんが」

「ふん、テレビ局としては上出来だ。よし、谷を貸してやろう。」

・で、何時間番組だ」

「はい、どうしても4時間がほしいです」

「駄目だ！5時間だ。前半の2時間はドラマ部、後半3時間は地下の龍との対決だ。」

その呪詛がどうなるかはあきあと龍次第だ。

もし、時間が短くなったら今日のロケのフィルムを貸してやろう、問題は長くなったらだ・・・」

「はい、うちがスポンサーになりましょう」と声がかかった。

振り向くと静香と漣と順子が立っている。

「おお、専務さん」

「よく野球中継が長くなったらやってるじゃありませんか」

「おお、あの手か」

「私のところも乗りますよ」

と来ていたスポンサー全員が申し込んだ。

「さて、出演者だが」

「ここにいますよ。何でもします。お手伝いさせてください」
飛龍高志が手をあげた。すると全員があげていく。

「薫さん、あんたもか」

「あたりまえじゃないの、わたしはあきあの保護者だもの」

「そうよ、今更何を寝とぼけたことを」

「庄絵さんもか」

「じゃあ、全員じゃないか」

「監督、僕らは駄目なんですか」

「お前達テレビは……」

「へへへ、あきあさんのはテレビでも映画と同じですよ」

「仕方ないなあ、俺だけ行こうと思ったのに」

「監督はズルい」

「うるさい……」

映画の脚本は一段落していたので、谷はさつそく今日から本書きに取り掛かることになった

まゆみは後を順子にたくし、ひづるの両親と城田、鳴海京子連れ
て東京に向かった。

ホテルに向かうロケバスの中……さつそく、やってる

「遷、何しにきたの」

「何しにつて、決まってるじゃないの。沙希ちゃんの様子見よ」

「へえ、沙希ちゃんは元気よ。もう帰ったら？」

「何よ、それ」

「だって、遷がいると落ち着かないの」

「へええ……何か悪いもの食べたの？」

「ホテルじゃ、VIP待遇なの。悪いものなんか何も無いわ」

「じゃあ、薫姉さんの頭に出てくるおできのせい？」

「おできだって？どこにじゃい」

「だって、薫姉さんの脳みそって腐っておできだらけじゃないの。私が手術してあげようか」

「凄なんかに手術してもらったら私死じゃうよ」

「死んだら香典あげるよ」

「いくら？」

「10円」

「ええい……二人共うるさい！」

順子の怒りに首を竦め

「ごめんなさい」

とあやまる。

「ね……」

とあきあにいわれて隣に座るひづるは

「ひひひ……」

と笑いこぼる。想像以上だった。

天才女優といわれる早乙女薫の以外な子供っぽさ、そして、こんなお医者様がいたのだろうか。

それにしても

「順子さんって凄い！」

天下の二人を叱りとばすのだ。

「だって事務所のナンバーツウだからね」
と律子。

「まゆみさんがいなくなって少しほっとしたけど……」

「とんでもないわ。ある面ではまゆみ社長より度胸があるし
どんな人でも遠慮なく叱り飛ばすわよ。ひづるも気をつけなさいね」

「芯は優しい人だからお母さんの代わりに甘えてもいいわよ
とあきあ。

「あきあ姉さん」

「なあに」

「沙希さんって呼ばれているんですよ」

「本名が早瀬沙希っていうからね」

「あの晴明神社で出てきたお姫様は沙希姫っていうんですよ」

「ええ、私あの人の生まれ変わりだって」

「凄い！・・・あのう、私も沙希さんって呼んでもいい？」

「いいわよ。でも女優やってて皆の前じゃあ、あきあだからね」

「わかりました」

ホテルに帰るとロビーで思わぬ人が待っていた。

京姉と泉姉がくることは聞いていたが、まさか日和子叔母様まで
きているとは思わなかった。

ひづるを紹介すると目をぱちくりとして挨拶をした。

大空庄絵は良く知っているのか、日和子と懐かしそうに挨拶をして
いる。

薫と澪は日和子の前では年が少し年が離れているせいか 借りてき
た猫のようにおとなしい。

その様子が可笑しいとひづるが笑う。

京も泉もひづるが気に入ったのか自分達の間で座らせている。

ひづるも双子が珍しいのか二人の顔を見上げては悦にいつていた。

「沙希ちゃん、ここの支配人に聞いたけど凄いことしたそうじゃない」

「凄いこと？」

「晴明神社のことよ」

「あれは、私というより私の師のおかげです」

「師というと安倍晴明様ね」

「はい」

「今もわたしの目を通してこの世を見ておられます。さっきの口ケだって」

師は大笑いされて楽しんでおられました」

「へえ、いつも見守っていたいただいているのね」

「はい」

そこに京都府警の広報の担当者が3人訪れ、警察専用のカーナビについて説明を求めてきた。

沙希と警察関係者だけの打ち合わせとなった。

沙希側には飛鳥日和子警視正、飛鳥京警部、飛鳥泉警部が出席した。

京都府警の係官からいえば警察庁は警察の本山であり

その本山の警察庁長官の秘書とはいえ警視正である。

目の上のその上の又上、雲の上の存在の人が目の前にいるのである。

恐縮しきりであった。又双子の娘が花の警視庁捜査第1課の警部であり

もう一人が警察庁広域捜査の警部であるとはもつただ事ではない布陣であった。

その上肝心の早瀬沙希という少女といってもいいこの若い女性が

今評判の日野あきあという天才女優でもあり、ソフトの開発者として世界の有名人でもあるのだ。

その天才がまた警視正の姪だなんてもうなんという家族なんだろう。

1日でつくりあげたというカーナビのソフトは警察専用の凄いソフトであることは

試作品を使ってみて一目瞭然であった。

そして今、噂のスクヤナー付きのモバイルを見せられては生唾を呑みこみ喉から手が出そうになる状態に陥った。

その上、二人の警部から改良してほしい内容を聞くとこの少女は「そんなこと」

といって、ノートパソコンにつなぐとほんの5分もかからずに改良してしまった。

パソコンのキーボードを叩くスピードの速いこと速いこと、本当の天才を目の当りに見た脅威。

改良された商品は今まで以上に魅力的だった。

さっそく予算計上の上・・・といったが警視正が首を振り

「捜査官全員のは無理だが係りに2台はいきわたるように警察庁が購入します」

という嬉しい話が出たときはガッツポーズさえ出してしまうところだった。

京都府警との打ち合わせが終わり係官が帰っていくと、やっと食事ということになった。

最上階のレストランの特別室に集まった全員は美味しい料理に舌鼓をうつ一族の団欒だった。

そこに小野監督から本日のロケのダイジェスト版ができたと連絡が

あり

一同タクシーに分乗して京都太秦撮影所に向かった。

撮影所には殆どのスタッフ、共演者があつまっておりあきあ達が一番最後だった。

見知らぬ客も大勢おりスポンサーの関係者と

畑中のテレビ局の直属の上司や社長、役員などが顔を揃えていた。

あきあの関係者の新しい顔、飛鳥日和子、京、泉が

警察関係者であると判ると少し驚いた様子で、あきあの叔母であるとわかると

何かほっとしたようだ。

ロケのダイジエスト版の試写が始まると、ロケに来ていなかった人にとって

思いもかけないその迫力に声をあげ、生唾を飲み込む連続で試写が終わり明かりが点くと、皆汗ビツシヨリで

沙希を良く知っている日和子、京、泉にしてもすぐには立てないくらい緊張の繰り返しだったそうだ。スタッフにしたって現場にいたもの全員がああ恐怖を思い出していた。

ひづるにしても結界にいたのでロケの様子は全然見ていない。

今、あらためてどんなことが起こっていたのかを知って青ざめた顔と

パクパクあくだけの声のでない状態がしばらく続いた。

女医の滲がいたおかげで、大事にはいたらなかったが、あらためてあきあの凄さと自分を守ってくれていた優しさに感謝した。

小野監督が前に出てきて

「このロケは全て本物です。あきあくんの陰陽師としての術が

このロケの映像をここまで迫力のあるものにしました。
この場にはマスコミ関係者を大勢呼んでいましたが
術を使えるということであきあくんの今後に悪影響が予測され
球場の結界を解くと同時にマスコミ関係者たちの記憶を操作しまし
た」

「ちょっと、そんなことが出来るのかね」

畑中の会社の大下社長が聞いてきた。

「はい、ここにいます。共演者、スタッフ達が証人です。

間違った記憶で、特撮をしていたと思ひ込んでいます。

これを見ても特撮プラスチックだと思つてでしょう。

実際はこんなもの現在の技術ではとてもできるものではありません」

「本当かね」

社長は自分の会社の技術スタッフに聞いている。

「はい、このフィルムをどこからみても。CGではありませんし特撮でもありません。

こんなフィルムが存在することが驚異です。出来るとしたら本物だけです」

「ふむむ」

と考えこんでいる。

「よろしいでしょうか」

と日和子が発言を求めた。

「今、大下社長さんが考えていることは、このあきあがペテン師か
このこの大勢の人にかつがれているのでは、と心で思つてると想像し
ます」

「その通りです」

「ですから私はこの日野あきあおの叔母という立場ではなく、

警察庁長官付き秘書 警視正 飛鳥日和子という公の立場から報告します」

「おお〜」と言う声が響く。

「このことは京都府警が調査して大勢の目撃者から調査の結果真実だと証明されています。

でもこのことは絶対表に出さないでいただきたい。

もし、これを誰かに話したとしたら・・・家族でも恋人でも駄目です。

死ぬまで心に秘めていただきたい。

全国の警察網があなたを追い詰め世間を騒がす騒乱罪で摘発し、微々たる罪を加えて刑務所の独房で一生を過ごしてもらいます。

何せ一人が鬼に食われて死んでいるんですから」

みんなビクつし背をのばす。

「この中で目撃者は？」

そんなものいるのかいなと思っっていると

あきあを中心に杏奈、律子、薫、庄絵、ひづるの6人が手をあげた。

みんな吃驚して声もない。

「それだけですか？」

薫が答える。

「東京に帰った事務所のまゆみ社長、その天城ひづるの両親、そして女性の友の記者鳴海京子、先輩の城田老記者」

といったとき、眼をむくように反応する脚本家の谷と小野監督。何も聞いていなかったのだ。口の堅いやつめ・・・そう思った。

「そして、ホテルの支配人です。後は清明神社の神主さんとお弟子さん達です」

「わかりました。東京に帰った人は明日さっそく口止めをしておきます。」

さて、日野あきあは当事者ですから発言を控えさせますが、当日どのようなことが

あったのか順番に話しなさい。では早乙女薫から……」

恨めしそうな顔をしたが、根が話し好き女優であることも手伝って皆の想像力をかきたてるように話し出した。

ホテルの支配人からの話で清明神社に行った皆は何百年開かなかった封が

あきあの術によって開いたこと。

その手紙こそ師の安倍晴明からあきあに託された手紙であったこと。

（ここであきあを知らない人はそんな馬鹿なという顔をしている）
そして、手紙を開けたことにより清明の結界が長い年月の末のほころびにより最終段階を迎え、

あと1時間で結界が解かれ、朱雀門が開いて悪霊、鬼たちが出現することを語った。

次は大空圧絵が引き継いで話し出した。

これまた、大女優の風格で話しがうまい。

「あきあさんが……」と話が始まった。

京都の結界を張りなおすには、清流から汲んだ清水、新しい墨がいること。

墨は京都であることですぐに用意できたが清水はもう京都にはないこと

和歌山の熊野古道にある清流の清水が一番近いことが話された。

和歌山の熊野古道……と聞いてビクッと身体を動かしたのがテレビ局の天下社長だった。

「よろしいか……」

と発言をすぐに求めた。

「では。その熊野古道の清流の清水とやらを用意されたのですか？」

あきあは発言を封じられているので庄絵が答える。

「はい」

「でも、この京都から熊野まで何百キロ離れていると思いますか？
1時間以内なんてとてもとても・・・」

と笑い出す。嘘を見つけたというばかりに・・・。

でも庄絵は淡々と答えた。

「ええ、そうでしょうね。普通はそう思いますわ。

その時実際、私もこれは出来ない・・・京都はどうなるのか・・・
と

震える思いをしていましたもの」

社長は次にいった庄絵の言葉にあっけにとられた。

懐紙で作った式神？ヤタノカラスだと？・・・話についていけそ
うもない。

だから、こつきりでした。

「実は、私は今言われた熊野の出身で今いわれた清流は、代々私の
家が守ってきています。

その清流は私の実家の庭から沸き出でているのです。

今も実家で私の弟が清流を守っています。

いかがでしょう。私にはにわかには信じられないので、

もう一度その式とやらで清水をくんできていただけないでしょうか」

といった。

日和子はあきあを見ると頷いたので

「よろしいでしょう」

とスタッフの手により懐紙のかわりに半紙、それと水を汲む壺が用意された。

スクリーン前の机の前にあきあが立った。

「少し待っていただきたい」

と社長の大下は携帯を取り出すとどこかへかけはじめた。

「ああ、わしだ」

どうやら熊野の実家にかけているらしい。みんなこの展開に固唾を飲んで聞いている。

「どうだ、信じられない話だろう……。えっ、お前は信じる？

えっ、昨日の昼間見かけただと？式かどうかは知らないが、

カラスが器用に壺に清水をくんでいただと？夫婦でみていた？

ああ幸恵さんにかわってくれ……。わたしです。

今の話、本当ですか？。はい？ただのカラスではなかったですと？

熊野権現の熊野誓詞のヤタカラスにそっくりだったのですか？

……。はい、かわってください……。ああ、わしには信じられない。

そこでどうだろう。今からその式を飛ばして清水を汲んできてもらうので

その式のヤタカラスがきたら、ワシの携帯に電話くれないか？ああ、すまんがお願いする」

といって携帯を切った。

社長はあきあをみて

「ではお願いする」

あきあは半紙を器用に折ってから、左の手のひらに置き、

右手で印を結んで呪を唱える。

『フツ』と半紙に息を吹きかけると『バタバタ』と羽をばたつかせて黒いカラスが現れた。

「おおっ・・・」と声をあげる観客席。初めて見る人の驚きはすさまじいが
なんどもみている人でもその術には声をあげてしまふのだ。
机の上に降り立つとあきあの顔を見上げている。なるほど、普通の
カラスと違っている。

「昨日はごめんね。ひづるの命を守ってくれて・・・
ええ今日も昨日と同じことをしてほしいの、この壺に清水を汲んで
きて」

するとヤタカラスがなにやら言っているようにみえた。あきあがに
っこり笑った。

初めてあきあを見る人はまずその笑顔に魅せられる。あきあは観客
席にいるひづるを呼んだ。

ひづるはいそいであきあの元にかけてつける。するとちよこつと飛ん
でひづるの肩の上のった。

「その子、ひづるのこととても心配していたんだって。
だから無事な姿をみてからお役目はたしたいだって・・・」
ヤタカラスはまるで猫が人に甘えるようにひづるの首に頭をこすり
つけている。

ひづるはもう胸がいっぱいになった。

「さあ、あなたの手であの窓をあけて飛ばしてあげて」
ひづるはいわれたとおり窓をあけると手のひらを前に出す。
ヤタカラスはちよこつと跳んで手にうつり、

『カア』と一声泣いてからものすごいスピードで飛んでいった。社
長は生唾を呑んで見ている。

「ねえ、あきあ姉さん。あきあ姉さんの眼は大丈夫なの？」

「ええ、今は前みたいに切羽づまった状態じゃないし、あの子も二度目で慣れているでしょうから」

二人が話しているとスタッフによって椅子が用意されスクリーンの前に腰をおろしてヤタカラスが帰ってくるのを待つことになった。

「さて、この間にに話の続きを聞いていきましよう」
日和子の進行で再び圧絵が話した。

あきあの眼をヤタカラスに与えたことによって動けないあきあの指
示で

あきあの前に神官達の手によって祭壇がつくられたこと。

そこまでの話がやく10分間・・・社長の携帯が鳴り出した。

「何・・・もう来ただと？この京都から熊野まで10分じゃないか、器用に水を汲んで、もう飛び立ったあ？神の使い？

いいから次を・・・えっ、写真をとったのか。それじゃFAXで送
つてくれないか」

と携帯を耳からはずし、

「このFAX番号をおしえてやってほしいんだが」

スタッフが急いで替わるとFAX番号を教え、電話を社長に渡して
から急いで部屋を出て行った。

息つく間もない展開に初めてこの場にいる人達は目を白黒させてい
る。

眼の前の少女により世間での常識が崩れ去り、新しい常識・・・

いや、失われていた常識といったほうがいい、平安時代にあった陰
陽道・・・

現代にも脈々と続いているらしいが、眉唾ものばかりだ。式を使い、結界を張り、鬼や悪霊を呼び出すこの少女、薄ら寒いものを感じる。

マスコミにこの少女の力を隠す・・・我々もマスコミの一員だからこの少女の力を暴露すればどのような展開になるかわかりきっている。

だが、これだけは隠しとおさねばならない。

マスコミといっても、いろんな連中がいるのだから・・・金のために人の秘密を嗅ぎあてる。

金・・・金・・・金の亡者がマスコミを動かしていることが多いのだ。

今後のマスコミの道義をとわれる瞬間なのだ・・・と思う。

目の前に座ってなにやら楽しげに天城ひづると話しているこの少女・・・

日本という歴史ある国の乱れを正していくかもしれないのだ。

とテレビ局の天下社長は考えている。ともかくテレビ局各社が集まって相談する必要を感じていた。

スタッフがとびこんできて

「社長、送られてきました」

もう見る必要のないものだったがこうして実際見てみると

少女の術に対する恐れというものを感じる。

もし、少女が穢れてしまつて術を悪用すれば・・・しかし、今はそうならないことを願うだけだ。

『バタバタ』という羽の音がすると窓からヤタカラスが飛び込んできて

机の上に壺をおいて『カア』と一声叫ぶとひづるの肩の上に飛び乗った。

社長はもう何もいわない。

「ひづるちゃん、そのヤタカラスあなたに預けるね」

「えっ?・・・本当?やったー、ヤタさん、これからよろしくね」

「ヤタさん?」

「ええ、この子の名前よ」

「ふふふ、じゃあ『ヤタさん』あなたはその字を呼ばれたらこの世に姿をあらわし、

この子を守るのですよ。・・・これでいいわ」

「ねえ、あきあ姉さん。今のは何だったの」

「このヤタカラスに呪シユをかけたの」

「シユ?」

「呪いと書いてシユというの」

「えっ、呪い?・・・怖い」

「そうじゃないの。人の一番身近な呪シユは名前なの」

「名前?」

「ええ、たとえばひづるちゃんは天城ひづるという”シユ”によって縛られているの」

「縛られている?」

「そうよ、例えば天城ひづるさんって呼ばれると、振り向くし立ち止まるでしょ。」

これでもし違う名前を呼んだとしたら、ひづるちゃんは知らない顔で通り過ぎるでしょうから。

名前で縛られているってのはそういうことなの」

「じゃあ、もし天城ひづるって名前がなくなったら私も消えちゃうの?」

「いいえ、消えたりはしないわ。それはそれであなたは存在するのよ。どうお?少し難しいかな」

「はい、何となくわかるけど」

「じゃあ、ヤタさんを何に入れておこうかしら」

「入れる？」

「ええ、いつもそのままではね。呼ばれたら出てこれるようにしなくちゃ……」

「???」

「ひづるちゃんはいつもその熊のお人形のキーホルダーぶら下げているわね」

「ええ、これ私のお守り」

「ちょうどいいじゃない。そこにヤタさんをいれるわね」

「といってから『フツ』と息をかける。」

いきなり姿がきえてしまった。

そのかわり人形の足が『ぼんぼん』とひづるの身体をけている。

どうも不思議な光景だった。

「ひゃあ、くすぐりたい」

といいながらけらけら笑う。

「出てきて、と言葉に出したり願いをかければヤタさんが現れるし入っていないさいとか眠りなさいといえはお人形の中にはいるわ」

観客の大部分は不思議な面持ちで二人の会話を聞いていた。

見ようにみれば舞台の上で二人がお芝居をしているように見える。

ただこの話が現実なだけだ。

「では、話のつづきを……」

と日和子の言葉に律子が立ち上がる。

薫、圧絵と話がうまい女優のあとでは話し方のつたなさが目だつてしまったが

かえってその話かたが現実味をもたせ、迫力のあるものとなった。そして律子の次にこれも素人の杏奈が引き継いだ。

燃やした半紙の炎が鬼の顔になりその場にいたものにせまってきた話は観客の怯えをつのらせ、

臆病な神官の弟子を鬼が喰らう様は観客を震えあがらせた。

そしてひづるに危険が及んだときのあきあの行動、

そしてあきあの命のローソクの火を鬼が吹き消す有様は

「わたしが悪かったの・・・わたしのせいであきあ姉さんは死んでしまつところだったの」

と泣き出してしまったひづる。

好奇心により呼んでしまった命の瀬戸際のやりとりとが

恐ろしい情景を観客に想像させることになった。

次にひきついだひづるの話

「わたし、あきあ姉さんが死んでしまったと思つたの」

だから、あふれた涙によつてあきあの瞳の奥から現れた安倍晴明。

術によつて炎に清水がかけられ鬼が退治された話は観客をほっとさせた。

その結果、危なかつたあきあの命は力強い炎で復活し

京都の結界は四神相応の陣という術で再び再生した。

この先、幾年月持つかわからないが、第二のあきあの誕生が待たれる。

そう締めくくられた。

「ほう・・・」

という声で静寂が破られた。

「畑中くん、急ぎ特別枠を準備したまえ。放送時間は何時間かかってもかまわん。

これはテレビという枠では納めきれない。だから、監督は小野さん。あなたに頼む」

小野監督の頷きによつて話しが進められる。

「しかし、新たなスタッフや共演者は入れたくない。ここにいるスタッフ共演者でカバーしてくれ」
みんな

「うおー」
という喜びで沸いた。

「しかし、これだけは絶対守っていかなくてはならん。
日野あきあくんの力のことだけは絶対秘密にするんだ。
あきあくんも術のことはここにいるみんなの前だけだ。

見知らぬ人の前では絶対にみせてはならない。・・・いいね。

我々もマスコミだがマスコミの者には気をつける。

社内といっても他の部のものにも口を閉じていろ、畑中。

トップ屋、一匹狼の記者には特に気をつける！

できたらそんなブラッくな記者のデーターを作って皆にくばれ」

風雲急を告げるとはこのことだった。大下社長の言葉によって次々と決まっていく機密事項。女性スタッフによって纏められいくが

あきあのことは全て機密事項の中からも削除された。

そして、日和子によって

「今言われたブラッくな記者については警察のほうでデーターを渡しましょう。とにかく今息吹いた芽はこの先の日本を救うことになるでしょうから」

第一部 第十一話

今日は朝からいよいよ太秦の撮影所において本格的な撮影が始まる。

カーナビとモバイルについては夕べ飛鳥叔母、京、泉と静香、順子
が

沙希の部屋に集まって打ち合わせをおこなった。

警察庁より発注されたモバイルについてはメーカーを選定しなければならぬので

社長と幹部達にまかせることになった。

警察が使用する機械なので変な会社とセキュリティがしっかりしていない会社には

まかせておけない。

会社が決まれば沙希が出向いて打ち合わせをするのだ。

事務所の順子と城田も会社の静香も同行することになった。

CDについては警察向けと一般向けに分けられ、警察向けには試作品と同様、

特殊な内容が含まれる。

飛鳥叔母と京、泉はいつまでも東京をあけることができず、これから帰京することになった。

静香も今の報告をもって飛鳥叔母達と帰っていく。

「沙希ちゃん、がんばってね」

「ええ」

「沙希、いい映画期待してるわよ」

京と泉だ。

「寂しくなるけど・・・」

「いいえ、静姉。これから騒がしくなっちゃう。だって飛鳥叔母様

が
いると猫のようにおとなしいのになくなると、とたんに喧嘩だも
ん」

「ああ、あの二人。・・・ガツンと行ってやればいいのよ。ガツン
とね」

と京と泉。

「でも、面白いもの」

「そんなこといつてるから、図にのるのよ。あの二人」

「でもあの二人、沙希のこと大好きだからということ聞くかもね」
とけらけら笑っている。

「これ、あんた達。沙希ちゃんをけしかけるんじゃないありません」

と日和子も笑いながらいうもんだから、自らけしかけているような
ものだ。

こうして、4人は帰っていった。

沙希と杏奈と、律子とひづるの同室は変わらない、

そして、薫、漣、圧絵、順子は一人部屋だ。

朝食を軽く最上階のレストランでとってから迎えにきたロケバスに
乗り込んだ。

「あら、漣もくるの?」

「あたりまえよ。わたしや沙希ちゃん的主治医ですもの」

「何が沙希ちゃんの主治医ですよ」

「ふん、うらやました。薫姉さんは」

「何がうらやましいのよ」

沙希の隣に座るひづるの身体が震えている。

「くくく・・・」

口をおさえて笑いをこらえているのだ。

心配そうにヤタさんの人形が『ぼんぼん』とひづるを軽く叩いている。

「ヤタさん、いいのよ心配しなくても……」
とやさしく人形をなでる。

通路を隔てた隣の順子の顔が怖くひきつりだした。

「ひづるちゃん、順子さんの雷がもうすぐおちそうよ」

「ええ、わかつてる。さつきから、すごく怖い顔になってきているの」

横目で順子を観察していたらしい。

でも順子の怒りが爆発する前にロケバスが撮影所についてしまった。

「ひづるちゃん、今日の撮影は？」

「今日はないと思うんだけど……あきあ姉さんもないんでしょ」

「ええ、でも……」

「あつ、そうか……例のね」

例の……という言葉が昨夜の試写からこの小野組の隠語となった。

『術』という直札的な言葉を止めよう、言い出したのはテレビ局の
大下社長だった。

そして、共演者の全員が出番が有っても無かつても顔を出している。

他の仕事を全てキャンセルにしてしまった飛龍高志なんかは

「だって、こんな心臓が飛び出ちゃうような撮影一瞬だって見逃せないよ」

マネージャーも同行していたので二人して言葉を合わせてキャンセルにしたらしい。

新劇の大御所幸田朱尾にしても付き人ともどもあきあの大ファンとなり、

あきあの術に一喜一憂しているのである。

他の脇役陣も食べるためにいろんな仕事をしているので抜けることもあり

そんな時は仲間達を困らすぐらい細かいところまで話を聞くという。

今日も撮影がないのに撮影所入りしたあきあに視線が集中する。

出番がある薫がメイクが終わりスタジオ入りしてきた。

スタジオには何も無いということは……例の……という言葉が飛び交った。

山賊達、赤ん坊を抱いた薫、そして父親これだけが今日の出演者全員だった。

カメラテストが始まる前に、監督とあきあ、そして舞台監督の北条が何やら綿密に相談している。

今日の出演者、出番の無い共演者、スタッフ、そして昨日よりのスポンサー各社とテレビ局関係者が固唾を飲んで見守っていた。

「ようし、今から例の……が始まる。全員スタジオ入りしてるか確認しろ!」
しばらくして

「全員います」

「例の……が始まるとスタジオの出入りができないからな。もう一度だけ確認!」

「間違いありません」

という声に監督が

「あきあくん、頼む」

「はい」

と答えたあきあの今日の衣装は薄いクリーム色のパンツスーツだ。

「では、このスタジオに結界を張ります」

と行って宙に五芒星を描き

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これを四神相応の陣
という」

という結界の呪文を唱えはじめ、右手の手刀で地面を刺した。空間
がゆがみ広がっていく。

「これで結界を張り終えました。ではこれから物語の始めとなる雪
の深山をスタジオに再現します。

なおこれは実物の風景と舞台監督の北条さんの絵を融合したもので
すから

同じ風景はないと思われます。寒くなりますので、皆さん防寒の用
意を……」

前もって言われたことなのでみんな防寒衣を着る。

あきあの術はまたもや奇跡のような舞台を出現させた。

スタジオの現代の建物は全て消え、一面の雪の中に全員が立っ
ているのに気づく。

雪を口にする女性スタッフ

「これ、本物だわ」

「はい、この景色の全てのものが本物です」

「あきあくん、雪を降らせてくれないか」

「はい」

雪が降り出す。急に激しい吹雪となった。

「待った待った。止めてくれ」

「はい」

あきあは天候をも自由自在に扱った。

「凄い！素晴らしい・・・これほどものだとは思わなかった」
大下社長はあきあの秘術に感嘆の声をあげる。

「もつとゆるやかに・・・そうそうだ。いい・・・いい・・・」

「監督！イメージとおりです。これでいきましょう」

「じゃあ、カメラテスト！」

こうして撮影がはじまった。

赤ん坊を懐に勘当をゆるされて京へ帰る若夫婦。

喜びで寒さもものとせず足どりが軽い。

しかしなかなか監督のOKが出ない。撮影となれば妥協しない小野監督だ。

今のところ雪の降り方が悪い。とか谷そこへ落ちる赤ん坊の表情が悪いなど

出演者の演技より天候や本当の赤ん坊を谷そこに落とすわけがないので式を使つての撮影だ。

薫なんて本物の赤ん坊よりこの式の赤ん坊のほうが気に入ってしまった
って

撮影の合間も抱いてばかりいた。この式、薫に気に入られ様と

「あばあば」

と可愛く笑い薫の胸をもみじのような手でつかんでいる。

「やだあ、この赤ちゃん。私の胸にタッチするのよ。うん、だめでちゅよ」

なんて赤ちゃん言葉で騒いでいる。

ひづるも薫のそばで抱かせてもらおうと必死だ。抱くとこれまた赤ちゃん言葉であやしている。

おかげで人形に入っているヤタさんが拗ねて拗ねて呼んでも出てこようとはしない。

あきあはあちこちからの指示で飛び回り、背景を変えたり、天候を変えたり

「自分で出演しているほうが楽だわ」

とディレクターチエアーに腰を下ろすと足を投げ出した。なるほど額に汗をかいている。

「あきあ、風邪引いちゃうわ。はい、タオル」

と杏奈に渡されたタオルで汗を拭いている。

「ねえ、寒くないの？」

という順子の声で周囲を見回すと皆厚い防寒衣をきながらも震えている。

「あきあくん」

「はいー！」

と跳んでいく。ひよいひよいと雪の上を進んでいく。

なるほどこれでは汗もかくはずだ。寒がっているひまもない。

「あきあさくん」谷ぞこのほうでも呼ぶ声が……。

今日のもっとも大切な撮影……赤ん坊を谷ぞこに落とされ悲嘆、絶望から

夜叉に変化していく薫の女優生命をかけての撮影がはじまった。

あきあの式を使っての撮影を断り、自分のいままで培ってきた女優として才能を100%発揮する演技をしようとしていた。

ただ、身体での表現は出来るが衣装と髪の毛の変化だけはできないのであきあの術だけが頼りになる。

本番がはじまった。

「ああ〜坊や〜……………」

目の前で赤ん坊を谷ぞこに落とされた母親を山賊たちが襲い掛かる。悲嘆の果ては絶望が……. 呆然と山賊のなすがままに…….

しかし、男の手が着物の懐に手を入れて乳房に触れようとした瞬間、

母親は絶望の果てに憎しみが襲いかかってきた…….

気が狂うような憎しみの果てに人ではなくなったのだ。

女は憎しみの果て夜叉になる。

「ぐう~~~~ぎゃう~~~~」

雪の上での変化……. 四つんばいになった母親は苦しげに肉体の変化に

耐えて唸り声をあげる。結われていた髪がはずれ黒髪が白髪に

若女房の着物が真っ白な着物へと変わっていく。

立ち上がったのはもう人ではなかった。

人の欲望がまた一人の人間を鬼に変えたのだ。雪夜叉の誕生である。

山賊達はあつというまに命を絶たれた。

真っ赤に染まった雪夜叉の着物も雪も降り積もる雪によって

跡形もなくなくなり、雪夜叉の姿も雪の中に消えていった。

「カット」

監督の声が雪の中に響きわたった。

「おい、みんなあつまれ」

この雪の中に散っていたスタッフ達が全て集まり、撮影済みのテープをみていく。

雪夜叉の姿の薫も監督の後ろでみている。

ひづるがあきあに

「薫姉さんって、本当に素晴らしい。あの変化の瞬間の表情みていてぞっとしたわ。」

漣先生との喧嘩の姿から全然想像なんてできない」

と余計なことをつけたして薫から頭をこづかれていた。

「よし、OK！ 今日の撮影はこれで終了。あきあくん頼む」

「はい」

と行って術をとくとあの広い雪の景色はなくなり、せまいスタジオに戻っていた。

「では結界を解きますから」

とすべての術をとき撮影所内での初日の撮影が無事におわった。

こうして京都での撮影が進んでいき、ひづるの撮影も全て順調に終了した。

ひづるはあきあに花束をもらい涙を流したが、

律子があきあに付き添っているため、ひづるも一緒に付き添うことになった。

というのは表向きで泣き叫びだをこねた結果だった。

「もう、今回だけだよ」

という順子の言葉にくすつと笑ってピースをする。

「やったな」

という順子。どうやら薫に対しては強い順子だがひづるには甘いよっだ。

撮影の終わった大空圧絵にしてみついてきたそうにしていたが自分の体力のこともあり、

一度東京に帰って事務所に顔出しをすることになった。

あのテレビの特別番組出演までの間、里に帰っての休養も考えているよっだ。

明日からは本格的にあきあの撮影が始まる。

京の一条戻り橋、この世とあの世を結ぶ入り口、ここが撮影現場となる。

昼間のうちはスタジオで平安京を出現させ父母を求めて彷徨い歩くシーンを撮り

そして夕暮れ近くなつて、実際の一条戻り橋にて安倍清明との出会いを撮影することになった。

というのは清明の屋敷、つまり清明神社が近くにありこの間訪れたとき

この一条戻り橋から異様な雰囲気を感じたからである。

景色は術で再現できるが、この異様な雰囲気までは再現はできない。

392

小野監督にいうと街中の撮影は警察の許可が必要なのだそうだ。許可はなかなかでないという。

一応プロデューサーに警察に行ってもらうが・・・という返事だった。

その京都府警に行ったプロデューサーがあっけにとられたような顔をして

戻ってきたのは1時間を過ぎていた。

プロデューサーの話によると、撮影の内容をいうとすぐに署長室に通され

署長直々に撮影許可書を渡されたという。

そして、

「これは京都を守っていただいたお礼です。いろんなところで出て

いた

結界のひずみからの怪奇現象による殺人や行方不明事件が
晴明神社での結界の再生からピタツと止みました。

怪奇な犯罪は警察がとも解決できるものではありません。

京都の結界のことは京都の人間にとって大事なものであり常識として信じられているものです」

とってから握手を求められ

「日野あきあさんに対する我々京都人の感謝のお礼です」
と許可書を渡されたという。

「撮影場所を前もっていつてくだされば、警察が警備しますので
よろしくお伝えください」

といわれましたと監督に報告した。

「ほう・・・それは、それは」

と嬉しそうにいつてあきあ達を呼び

「街中での撮影がOKになったよ」

と報告した。全てあきあによることは誰もが認めることなのだ。

夕暮れ的一条戻り橋、やはりあきあに妙な感じをいだかせていた。
報告がいったので京都府警交通課の警察官たちが警備をしてくれて
いた。

何事が始まるのかと集まっていた野次馬達、

先行していたスタッフ達が集まるなかロケバスが到着し、

1台からは烏帽子に公達姿の安倍晴明役の飛龍高志が降り立った。
野次馬の中から

「きゃあ、あれ飛龍高志じゃない。高志！こっちむいて・・・」
と嬌声がとぶ。

もう1台のロケバスからは平安期の女の子の格好だがその衣装は薄
汚れている。

「なによ、あの子・・・汚い衣装で」

髪もボサボサなのでこの少女の顔がよく見えない。

ディレクターチェアーに座った少女にメイクがはじまるとやっと顔が判ったらしく

「きゃあ、沢口靖子よ・・・」

「違うわよ。あれ、飛龍高志の演じる安倍清明でしょ。

だということ、あの子はほら・・・今騒がれている日野あきあよ

「えっ、嘘。違うわよ、沢口靖子よ」

と口喧嘩を始める始末だった。

だが、

「おおい、あきあ。準備はいいかあ」

という監督の声で

「ね、そうでしょ」

と女性の声。

だが、まだ納得出来ないようだ。

「ようし、カメラハOK」

「用意、スタート」

とカチンコが鳴ると

重い足取りで橋の向こうから歩いてくる。

ときどき足をよろつかせているのは足の疲れだけではないようだ。

『ぐぐー』となるお腹の音、橋の手前までくるともういけない

少女は橋の欄干に座りこんでしまう。

そして、目の前が霞んでいきとうとう少女は気を失ってしまった。

そこに通りかかった一人の公達、橋の欄干にもたれかけ死んだように眠る少女。

その少女から何かを感じたのか、『ふゝむ』といってたちどまる。少女に手をかざし

「不思議な力を秘めておるのう・・・」
と喋ってから印を結ぶと橋の下から大入道が現れて少女を抱き上げ
た。

「わたしの屋敷にな」

と指示をだす。大入道は少女をかかえて橋の向こうに姿を消す。
ゆっくりとあたりを見ながら公達も橋の向こうに消えていく。

あまり台詞のない場面だが、二人が出会う印象的なシーンとなるた
め撮影は慎重に進められた。

カメリハは2回行なわれ、本番となった。

野次馬達が不思議におもったのは大入道の存在だった。

着ぐるみとおもっていた野次馬達だったが待ち時間にも、何も脱ぐ
気配がない。

ただ、あの子役の天城ひづるが『きゃっきゃ』といって

大入道と手をつないだり抱いてもらったりしているのが印象に残る。

395

実は飛龍高志が呪文をかけてだしたとされる式の大入道は
前もってあきあが呼び出していたものだった。

あきあの式に対しては怖がりもせず相手ができるのはひづるのみだ。

こうして本番も無事に終え、スタッフ達が片付けをしているときに
あの現象がおこった。

あきあの背中を叩く者がいたのだ。

振り返ってみても誰もいない。

もしやと思って街路樹の葉を一枚とって術をかけた。

それで目をこすると、

冷気の中舞妓姿の霊体や亡者達がうろつろつこの一条戻り橋の上に
漂っていたのだ。

あきあの背中を叩く者は舞妓姿の少女だった。

少女は悲しそうな目であきあを見ていた。

「あなた、どうしたの？」

少女は何か話し掛けていているが声が聞こえてこない。

「何も聞こえないわ」

といつてもう一枚街路樹の葉を取り術をかける。それを少女にもたせた。

「ええ〜」

と言う声。

あきあの様子が変なのでロケバスから降りてきた薫、彼女はあきあに付いてきていたが野次馬に騒がれるのがいやでロケバスから撮影風景をみていたのだ。

「何よそれ、葉っぱが浮いてるわ」

「もう薫姉さん、静かにして・・・」

といつて薫の目を葉でこする。

「ええ〜」一段と大きな声をあげたが

野次馬は飛龍高志からサインをねだるのに必死で誰も気がついていない。

薫の身体が震えている。

「薫姉さん、どうしたの？」

とそばに寄って来た杏奈が聞いても震えるだけで何もいわない。

「あきあ姉さん、その舞妓さん誰なの？」

「ひづるちゃん、見えるの？」

「えっ、みえるって？」

「ふ〜ん、やはり純粋な子供達には見えるのね」

「といことは・・・」

と顔がこわばってくる。

「別に怖いことないのわ。この舞妓さん、私に何か訴えたいのよ」

「だって……」

「ひづるちゃん、どういうことなの？」

と漣と律子と順子も聞いてくる。

いきなり薫があきあの手に乗っているあの葉っぱをとりあげて漣達の目にこすりつけた。

「あっ」

と一瞬、呆然とする三人。

さすがに漣だけは平然と……いや、その足が『ガタガタ』と震えている。

「ねえ、あなた。もう話せるはずよ。あなたのお名前は？」

『菊奴』

「菊奴さんっていうの。どうして死んでしまったの？」

『うち、誰や知らん人にいきなり薬かがされて車につれこまれてしまったんです。』

その後のことは覚えておへん。気が付いたらここに立つとったんです」

「だったら、自分の力で」

とようやく落ち着いてきた杏奈が聞く

『いえ、うちここから1歩も動かれまへん。』

こうして立ってるだけで1日が過ぎてしまつんどす」

「じゃあ亡くなってからずっと？」

『はい、動かれるんやったら、うち飛んで帰りたい』

「わかったわ、今調べてあげる」

といって両手の人指し指と親指を合わせて菊奴を覗きながら

「アブラ・ウンケン・ソワカ」と3度繰り返した。

「わかったわ、貴女はここで3回殺されているの。
1回目は真田の忍者として、2回目は京都所司代の役人として
3回目は勤皇の志士として新撰組に切られて死んでいるの。過去の
因縁がここにあるからなのよ」
『どうしたら?』
泣きそうな声で尋ねてくる。

「じゃあ、過去の因縁を切ってあげる」
と街路樹の葉を再び取り手の平にのせて『フツ』と息を吹きかけると

葉が飛び菊奴の足元に突き刺さった。
『プチ』と言う音が皆に聞こえたように思えた。

『あっ』という声で菊奴の身体が地面より離れ、
移動ができる他の幽体と同じように身体が横にながれた。

『うわあ、嬉しおす。動けるようになりました』

「でもあなた、これからどうするつもり?」

『へえ、まずはお母ちゃんの無事な顔見とっおす』

「それから?」

『うちの身体を捜します』

「どうやって?」

『へえ、・・・どうしましょ』

再び泣きそうな顔になる。

「菊奴さん、あなたわかってるの?」

『何がどす?』

「ああ、やっぱりわかってないのね」

『何がいいたいのどす?』

「あのねえ、死んで49日までに自分の身体を見つけないと

無限地獄に行ってしまうの」

『ひえ〜、無限地獄！そんなの嫌です。うち嫌です』
とうとう泣き出してしまった。

「あきあ！無限地獄って？」

と杏奈が聞いてくる。

「杏姉！無限地獄ってね。この世で私利私欲にはしつたり、人を騙したり

人を殺したり・・・そして、自分で自分を殺すつまり自殺をした人があの世で地獄に落ちるの。

血の池地獄、針の山や、いろんな地獄がまってるわ

痛みの中でまた切り刻まれたりするけど何度も何度も生き返ってそれこそ無限に繰り返されるの」

『そんなの・・・そんなの・・・うち、いやです』

「いやだっていっても因縁を切ってしまった以上いかざるをえないのよ」

「あきあ姉さん、何とかならないの？」

幽霊は怖いけどすぐ泣いてしまうようなこの菊奴の幽霊にひびるはつい肩入れしてしまった。

「そうねえ、一番肝心なことだけど、あなたが死んだのはいつ？」

『はあ、うちが死んだの？・・・わからしません・・・だって気がついたらここにいてましたから』

「しょうがないわね、大体の日にちを掴むには菊奴さんのお宅に行くのが一番ね」

この様子をようやく気づいた監督やスタッフ達。

「どうした」

という声に薫は黙ってあの葉っぱで監督の目をこする。

「うわっ」

と声を上げる監督。

集まってきたスタッフ共演者達に薫から葉っぱを取り上げ順番に目をこするように指示をする。

この頃には野次馬も去り、スタッフ達の警備だけで機材も全て運び終わっていたので

ロケがあつたとはもう気づくものはいない。

どうも最近スタッフ達の恐怖に対する感覚が麻痺しているようで、霊魂たちにもカメラを向けている強のものもいた。

「ねえ、この人。薬で眠らされて殺されたらしいの。」

だから自分の身体がどこにあるのか判らないんだって」

「薬で眠らされて殺された」

『へえ、お座敷からの帰りに八坂はんにお参りに行ったんです。』

そこからの帰りにうち、車で襲われてしまいました』

「どんな車だったんだい」

『そんなのわからしまへん、いきなりうちの横を車が止まったと思つたら』

黒いマスクをした人にいきなり口と鼻を押さえられまして気が遠なつたんです……」

あつ、車は黒いワゴン車でした。

ドアが横に開けられて全身真っ黒の人がうちを襲ってきたんです』

「ふん、一人じゃないな。二人か三人かもっと人数がいることもある」

「ええ、そうおもいます……そして」

「そして？」

「計画的な犯行」

『いやや、うち狙われていたんですか？』

「そういう可能性があるわよ。もう一つは女の子を襲う目的としたレイプ犯」

レイプ犯ときいて順子も律子も表情が固くなる。

「あのう、監督。お願いがあります」

「判ってる。この人の身体を捜すから明日の撮影を休ませろ。ということだろ」

「はい、あとは徹夜でのなんでもしますから・・・お願いします」

「いいだろう、そのかわり明日1日だけだよ」

「はい、それともうひとつ。レイプ犯ならもつと大勢の女性が被害にあってるかもしれません。」

そういう噂と行方不明の女性のいたら調べてほしいのです」

「君の例の・・・では？」

「陰陽師は神ではありません。データが少なすぎます。例の・・・は使えません」

「いいだろう、こちらもスタッフ全員をことあたらせる。」

とにかく明日1日が勝負だからがんばってくれたまえ」

小野監督の激がとぶ。

「菊奴さん、あなたの家族は？」

『へえ、祇園でけっこう有名な置屋どす。」

でもおかあちゃん、うちが死んだこと知りはらへん。どないしよう」

とまた泣き出してしまふ。

もうすっかり暗くなった頃

幽霊の菊奴に案内されるといふ変な設定だが、菊奴の母が経営する置屋についた。

『ごごどす』

「じゃあ、入るわよ」

と引き戸をあけると

「こんばんわ。ごめんください」

「は〜い」

と出てきたのはまだひづると年がまだそんなに離れていない少女だった。

『この子、花世ちゃんといいます』

「すみません。この置屋の女将さんおられますか」

花世が入ってきた女性達を見て

「あっ」

と行って立ち止まってから

「お母ちゃん・・・」

と行って呼びに戻っていつてしまった。

『またあ、行儀の悪い！うちがあれだけ教えたのに』

と菊奴は怒っている。

「まあまあ、これだけの顔ぶれがそろえばしかたないわよ
と薫がなぐさめる。

「花世！またあなたは・・・」

と怒りながら出てきた置屋の女将、背が小柄だが菊奴にそっくりだった。

「あらまあ、これはこれは・・・」

といいながらもこんな有名人がなぜ？という顔をする。

「おかみさんに菊奴さんのことでお話を聞きにきました」

「えっ、あの子のこと？」

と顔の表情が変わる。

「よろしいでしょうか？」
と重ねていうと

はっと気づいたように

「あっ、これは・・・どうぞこちらに」

と奥の部屋に案内される。

みると、階段に若い女の子たちが顔を覗かせている。

「やだあ・・・素敵」

「あの子が日野あきあだつて」

とそこそそはなし声が聞こえてくる。

「これあんた達、もうお座敷に行く時間どすえ。早く用意なさい」
と階段近くまで行って大声で叱っている。

「きゃあ」

といつて駆け上がる舞妓と芸妓達。

「すんまへん。うるそうて・・・」

「いえいえ」

とニツコリ笑うあきあ。

あつというまにこの少女の笑顔に引き込まれていく女将。

「単刀直入にお伺いします。菊奴さんが居なくなったのはいつですか？」

「へえ、もう一月以上にもなりますが」

「すみません、詳しい日付がわかりますか？」

女将が日にちをいうと

「大変だわ！すぐに殺されたとして明日が49日だわ・・・」

あきあのいう言葉に

「ころ・・・殺されたあ？・・・ちよ・・・ちよつとあんたはん、

いくら有名な方かも知れまへんけれど、いきなりうちにきてそんな縁起でもないこと・・・」

さあさ・・・帰っておくんなはれ、・・・帰って!」
と完全に怒ってしまい、最後には大声でどなられる。

その声で再び階段から女達が様子を伺っている。

菊奴は母親の隣で悲しそうに座っていた。

「女将さん、ごめんなさい」

と行って強硬手段に訴えた。女将の目を葉でこすったのだ。

「あつ、何をするんや」

怒りが爆発する。

「あんたたち!」

と行ってふつと見ると、我娘が悲しそうに座っているではないか
女将は身体をのけぞらせ

「ひく・・・あんたは菊ちゃん・・・」

『おかあちゃん、ごめんね。うち、また親不孝してしもた・・・』

「あんたは・・・あんたは・・・」

どつと腰を落として菊奴に触れようとするが

もとより生きた人間と魂・・・通り抜けてしまい娘に触れられない。

その現実が母親を哀しみのどん底に落としてしまった。

菊野屋の女達は

何も無い空間に菊奴の名を呼び、泣き出してしまったことに驚き女
将の横に

跳んできた。

「お母はん・・・どないしあはったん?」

一番年嵩の女・・・芸妓の花江が女将の肩を激しく揺する。
その行為に

「あゝあゝ・・・花ちゃん、菊ちゃんが菊ちゃんが・・・」

と何も無い空間を指さして大声で泣き出した。

「菊ちゃん？……」

とポカンとしていたが、日野あきあというこの少女が葉を差し出し、目をこすってごらんさない……ジェスチャーでいつていたので言われた通りにすると何も無い空間に悲しげに母親を見つめる菊奴の姿が見える。

「菊……菊ちゃん……」

花江も大声をあげる。

他の女達も争うように葉を手にとる。

「菊奴ちゃん……」

「菊奴姉さん……！」

とこれまた菊奴の姿が見えるようになって大騒ぎで泣き叫んでいる。あきあ達はこの愁嘆場をしばらくこのままにして次の間に控えることにした。

「無理もないわねえ……」

薫も真つ赤になった目をハンカチで押さえている。

澪も、順子も、律子も、杏奈も……ひづるにしたってそうだ。

しかし、あきあは泣いてはいなかった。

目を大きく開き、怒りで燃えていたのだ。

まずはひづるが気がついた。

「あつ、あきあ姉さん。怖い顔……」

皆があきあを見る。

あきあの身体から激しい怒りが、女達の間からも感じ取られる。

「許さない！！」

その姿が可憐なだけにすさまじい美しさだ。ひづるはポカンとあきあを見つめる。

障子が開いて女将が顔をみせる。

しかし、あきあのその様子に思わず立ち止まってしまった。菊野屋の女達もあきあの様子に身体が動かなくなる。

その美しさはこの世のものではなかった。

『あつ、あのお方には阿修羅様が乗り移っておられる・・・』

菊奴の言葉に驚く女達・・・阿修羅といえはインドの鬼神

その阿修羅が乗り移ってあきあに何をさせようというのか・・・。

「沙希ちゃん」

と薫が大きな声をかけてみる。

ゆっくり女達を見る。

こんどはおおきな微笑で答える。魅入られ引き付けられる。

菊野屋の女将を始め、女達は腰を落として座ってしまい呆然とあきあに魅入っている。

『あつ、今度は菩薩様』

と菊奴はあきあを拝みはじめた。身体から後光がさしているのだ。女将も菊奴の言葉にあきあを拝みはじめた。女たちもだ。

『菊野』

という声に驚いたように顔をあげる。

『そなたの嘆き哀しみ、いかばかりか・・・察します。

娘の魂、今瀬戸際にあります。

しかし、このあきあという娘、そなた女達、信ずるに値する女達です。

きっと娘を成仏させ天にかえしてくれるでしょう』

『菊枝』

という声に菊奴は又顔をあげる。

自分の本名は言ってなかったはずだった。

『そなたの苦しみ、若い命を天にめされる、菊野に対する申し訳な

さ、察します。

そなたの肉体きつとあきあ達が見つけてくれます。
天であなたのくるのを待っていますよ。我娘よ』

あきあの身体からの後光が消え、くたくたと崩れ落ちそうになる。
慌ててささええる杏奈と律子。

菊野屋の女将はあらためて、あきあ達をみつめる。
いきなり尋ねてきて娘の死をしらせた日野あきあ。

葉を目にするだけで娘の靈魂を見えるようにする不思議の術。
そして先ほどの不思議な現象。

天才女優だから？・・・でも違う。

こういう仕事をしていると人を見抜く力がついていると自負してる。
菊野屋の芸妓や舞妓達、今ではすっかりあの少女のとりこになっている。
いる。

いや、私も・・・横に座る靈魂の娘だつて・・・。

「女将さん、菊奴さんが亡くなって明日がちょうど49日です。
明日の24時まで菊奴さんの身体をみつけないければ菊奴さんは無
限地獄におとされてしまいます」

「えっ、無限地獄といえば永遠につづく痛みと苦しみの地獄・・・
いやです。娘をそんなところにやるのは・・・」

「だからです。だから皆で協力して菊奴さんを成仏させましょう」

「菊奴さん」

『はい』

「あなたの身体が大分薄くなってきたようですよ」

『えっ』

つと自分の身体を見る。なるほど薄くなつて向こうの景色がみえるようになっている

『どうしましょう』

「大丈夫です。因縁から切り離されたため、靈魂のエネルギーが消耗しただけです。」

「さあ、私の身体に入りなさい。私の身体からも外の様子は見えはずです」

「といって菊奴に手を差し伸べる。」

するとちいさな赤い玉になって宙を浮いているのだ。

あきあが両手で玉を囲むようにするとゆっくりとあきあの胸の中に入つていった。

「お願いがあります。私達、菊奴さんが殺された原因は二通りあると考えています」

「二通り？」

「ええ、ひとつは菊奴さんを目的にした殺人。つまり、恨みをかつていたとか」

「恨み？・・・とんでもおへん。あの子に限つて・・・」

「いえ、逆恨みということもあります。それと、遺産相続の問題は？」

「いえ、それもおへん。あの子の父親は西陣の職人でした。」

あの子の小学生のときに交通事故でなくなりました・・・」

「そうですね、それではあとひとつの動機しかかんがえられませんね。」

「・・・それは、いいにくいことですが・・・」

「いってください・・・」

「女性を標的にしたレイプ殺人です」

「レイプ・・・？、そんなあ」

「そこで皆さんにこの祇園界限で、いたずらされそうになつたとか

車の中に連れ込まれそうになったとか、
または行方不明になっていて人がいないか調べてほしいんです。
・・・あっ、菊奴さんによると連れ込まれた車は黒いワゴン車だ
そうですが、
それに限定しないで聞いてくださいね。車をかえての犯行が考えら
れますので・・・」
とってから女達に
「今日はやめてね、危ないから。明日にしてね」
と注意する。

出て行こうとした彼女達

「じゃあ、電話で聞いてみます」
と行って2階に上がっていった。

あきあは落ち着かない女将に

「女将さん、京都人は口が固いといわれていますが」

「へえ、口はかたあおます。しゃべるなといわれたら死んでもしや
べりまへん」

「じゃあ、私達が動きまわっても無理ね」

「そつでっしゃるなあ」

あきあははっと思いついて女将にたずねる。

「じゃあ、この京都に強力なバックボーンがいてその人が声をかけ
れば？」

「バックボーンですかあ・・・仕方おへん、そのお方になら」

「では、おかみさん。この京都、いえ祇園でそのような方は？」

「そつでっしゃるな、京舞のおっしょはんで人間国宝の井上貞子先
生だったら」

「そのお方に会うことは・・・」

「駄目どす、あのおっしょはん。一見の方には会わへんお人どす」

「どうしてもって頼んだら?・・・」

「へえ、そうどすなあ。舞妓ちゃんになら・・・」

「では女将さん、明日私を舞妓にしてください」

「あんさんを?」

驚く女将だが・・・あきあを見つめるうちに

「へえ、よろしおす。うちにまかせておくれやす」

といつてから・・・

「あきあはんはさぞかしべっぴんの舞妓ちゃんにならるやるなあ」

という。このときのあきあ、真っ赤な顔をして恥ずかしがっている。

「あのう・・・女将さん、私も手伝わせて・・・」

いいえ、勉強させてもらってよろしいでしょうか?」

「あんたはんは?」

「はい、あきあ専属の衣装係兼お化粧係をしています。千堂杏奈と
いいます」

「へえ、あんさんがこのあきあはんのおべべとお化粧されとるん
どすか」

「はい、でも私着物までまだ勉強をしていません。よろしくお願
いします」

菊野は少し考えていたが

「よお、わかりました。教えてあげまひよ。その代わり早う起きな
あきまへんえ」

「はい」

それをじつと聞いていた薫が

「じゃあ、うちも舞妓に」

と言い出した。

「アホ！そんなトウがたつた舞妓がいるものか」と澗が言つて喧嘩が始まるうとしたが

「止めなさい、こんな時に大人気ない喧嘩をして！」と順子に怒鳴りつけられて二人共黙つてしまふ。

「プツ」と噴出すひづる。

おかみはあつけにとられていたが、

「くくく……」

と笑い出す。なぜか可笑しくてたまらない。

あの天才女優がかたなしだった。なんだか久々に笑つた気がした。

菊野屋の女達が起きてくると、

昨日の夜にここに止まつた女性達はもう洗顔をすませメイクもばっちり決めていた。

女将とあの日野あきあと千堂杏奈の姿が見えない。

「あのう、うちのおかあはんは？」

「今、あきあの着替えを手伝っているの」「では」

と閉められている障子を開けようとすると

「だめだめ、今あけると怒られるわよ」

「私たちも、開けることができないのよ」

菊野屋の芸妓たちと薫たちが顔を見合せてまっついていると障子を開けて女将がにこにこ顔で部屋に入ってきた。

「へえ、おまちどうさん」

と障子を全開する。

すると一人の舞妓が両手を前について頭を下げている。

「うち菊野屋の舞妓、小沙希います。

はじめておめもじいたします。これからよろしゅうおたの申します」

と行ってから頭をあげる。

ニツコリ笑ったその笑顔、舞妓の濃ゆい化粧も関係なく美しい。

「あっ」

と声をあげたまま、固まっているそのさまは長年この祇園の水でもまれてきた芸妓達にとってはじめての経験だった。

魅入られるように見つめている。見つめても見つめても、新鮮さは消えない。

「うち、はじめてや。こない綺麗な舞妓ちゃんみるの」

「へえ、うちもや・・・」

「前にいやはったあのアイドルと噂になった舞妓ちゃんより何倍も何倍も上や・・・」

女達の賛辞に耳をポっ赤く染める小沙希。

置屋の玄関先、女将に連れられ出かける小沙希。

「ほな、おかあはんも小沙希ちゃんも杏奈ちゃんもおきばりやす」と菊野屋の女達や薫達が見送る。

残った彼女達は今日は洋装のまま、手分けして祇園での調査をするのだ。

置屋はあけられないので、花世とひづるそれに薫が連絡係として残っている。

漣は芸妓の花江達を車に乗せてこの祇園を回ることにした。

なにしろ時間がないので機動力を發揮しなければならぬのだ。

一方おかみと小沙希は、打ち水をした京舞の家元井上師匠の家の前に立っていた。

二人の後ろに従うのは初めて着物を着たという杏奈が何かの為にとあきあの私服を風呂敷に入れて右腕に抱えて持っていた。

「小沙希ちゃん、ここえ」

「おかあちゃん、うちがんばるから。見守っててね」

「小沙希ちゃん、ありがとう。うちの子のために」

「なにいつてんの。うちも今日からおかあちゃんの子です」

「そんなこと、いつてくれるの・・・」

女将は小沙希の優しさに思わずジンとくる

「お邪魔します」

打ち水をされた庭先から玄関までの敷石をぽつこりで歩く。

女将の後ろから歩く舞妓としての立ち居振舞いには寸分も隙がなかった。

稽古場に通され、ふすまの開け閉めを見つめる痛いほど突き刺さる鋭い視線。

両手をつき頭を下げ耐えていた。

「あなた、何者ですか？ただの舞妓ちゃんとは違いますやろ」

やはりただの人ではなかった。長年の修行の末培った目は騙せない。

「うち、菊野屋の舞妓で小沙希います。よろしゅうおたのもうします」

といたが

「嘘でつしゃろ、そない隙のない舞妓ちゃんどこにもおへんえ」

しかたなく両手をついたまま頭をあげてニコツと笑う。

高弟達に囲まれていた師匠の井上貞子はおやっとおもった。

それほど見事な笑顔だった。心になんの翳りも無い証拠だ。一度にあきあに対する警戒を解いた。高弟達には鋭い視線を向けるものも

いたが、概してその笑顔で警戒を解いていった。

「あんだ、どなたはんでつしゃろ」

「はい、本名早瀬沙希、芸名を日野あきあと申します」

と答えた。高弟の中には知っているものいて少しざわついたが井上貞子は知らなかったらしく、高弟に耳打ちされていた。

「ほう・・・それは・・・」

なにやら詳しく聞いていた。そしてあきあに向き直ると

「日野あきあはん、あんだの目的はなんだつしゃろ」

「私は井上先生のお力を貸していただくためにまいりました」

「力を貸すというと？」

「はい、一人の舞妓の遺体を捜すためと、その舞妓を殺した犯人を捜すためです」

「ほう・・・あきあはん、あんだは警察のお方ですか」

「いいえ、そうではありません。今は、女優をやっています」

「その女優はんが警察のまねごとをして、どういっおつもりですか」

「はい、実はこの事件のことは警察はまだ知らないのです。

もし、警察が知ったとしても動いてくれるかどうか・・・」と話を切った。

師匠は少し考えてから

「ではその話詳しくうお聞かせ願いますか」

「はい、信じられないでしょうが、今は信じていたなくてもよろしいです。

ただ、話を聞いてくだされば・・・」

とって、昨日夕暮れ時におこった一条戻り橋の撮影終了後におこった、

怪奇な現象からの出来事を残らず話した。

信じられないことであつた。

傍で聞いている高弟達、眉唾な話だと頭から否定するもの、

一条戻り橋のことは子供のから信じていたもの、いろいろであつた。

肝心の師匠はというと、この日野あきあという女優に

優しさと真と力強さを感じていた。話は突拍子もない話である。

だがここまで年をとると今まで生きていた過程でその突拍子もない出来事に

遭遇することはままたつたことである。あきあの横にいる置屋『菊

野屋』の

女将の師匠を見つめる必死な形相で日野あきあの言葉に嘘がないということがわかる。

しかし、師匠はわざとこう言い放つた。

「信じられませんかあ、今の話。そして小沙希ちゃんという舞妓ちゃんも」

と日野あきあという名をいわずに小沙希の名前を使う。

あきあは師匠の心を素早く読み取つた、再び両手をつき頭を下げたと、

「いかにすれば私を信じていただけるのでしょうか」と頭を上げて問い掛けをする。

師匠は今の高弟達の心にある不信感を言葉にかえる。

「うちは舞だけで生涯をかけてきた人間どす、舞うことで人間を見抜く力もやしなつてきたんどす。

小沙希ちゃんとやら、何か舞ってもらいまひよか」

慌てたのは菊野屋の女将と杏奈だった。

あきあが舞を舞えるなんて2人共聞いていなかったから。

「おつしよさん、それは・・・」

といいかけたのを

「おかあちゃん、よろしゅおす。うち、舞ってみます」

と舞妓言葉で留める。

そして、師匠に

「うち、京舞はできまへん。でも、それに代わるものでもよろしゅうどですか？」

ときく。

「現代もんは駄目どすえ」

「へえ」

といつてから、立ち上がって、舞台へ上がる。

師匠や高弟達は舞台の方に向き直った。

「舞はなんどすえ？」

と、聞かれた答えは耳を疑うようなものだった。

「これは当時の帝、五代天皇様に私が献上した『紫の舞』でございます。まず。」

白拍子の舞姫、白河の厚保姫様が創作され、私に贈ってくださいました舞で

師である安倍晴明様が最もお好きな舞でもございました」

といつて両手をつき頭を下げると、いきなり烏帽子を被った

白い衣と赤い袴の白拍子の衣服に変わっていた。

「おおっ」

といきなりの変化に高弟達の大きなざわめき。

「これ、あんたら静かにしなはれ」

と井上貞子の一番の高弟が注意する。なかなか静まらないが小沙希が立ち上がると、潮を引くように声が聞こえなくなっていく。

静寂の中、いつのまに持ったのか鮮やかな紫の舞い扇が小沙希の身体の一部となって舞っている。

師匠がいつも言ってる

「扇は舞いの道具です。けど舞うときは身体の一部にならないけまへん。

けっして邪魔をしたらあかんのどす」

を実践しているこの舞妓ちゃんの舞に高弟達は引き込まれていった。

足元はあくまでもゆるやかな波のごとく、腰は安定され上下に微動だにしない。

手の動き、足の動き、身体の動きは現代の舞にも応用されているが、それはそれは見事なものだった。

調べは小沙希の身体の中にあり、口元からは聞いたことのない唄が旋律にのり

狂いのない澄んだ声がこの稽古場に流れていく。

平安京の帝の前で舞うこの少女の姿がこの情景にかさなってそして消える。

あつというまに終わってしまった。もつと・・・ずっと見ていたい・・・。

この感動は師匠の舞をみている時と酷似している。高弟たちは全員そう思った。

小沙希に対する不信感はすっかり消えていた。舞によって信頼感が出来たのだ。

これは師匠の狙い通りだった。感じていた高弟達の不信感はすっかり消えていた。

日野あきあという少女から只者でない雰囲気はその優雅な動きからわかっていたが、これほど見事な舞は正直これまで生きてきて見たことがなかった。

平安京で修行したという話、信じることができた。

菊野の女将と杏奈は小沙希を呆然とみていた。

「ごくろつどした。見事どしたなあ・・・」

「ありがとうございます」

「舞の話は後ほど、・・・先に気になることを済ませてしまいまひよ」

「はい、どういふことでしょう」

「菊奴ちゃんは、今どこにいやはるんどすか？」

「はい、私のこの中に・・・」

と胸を押さえると小さな赤い玉が出てきた。

ふわふわと小沙希の眼の前に浮かんでいる。

「うちに菊奴ちゃんの姿、みえまつしゃるか」

「はい、すいません。その葉を一枚」

というが高弟が葉を持ってきてくれる。

小沙希は葉を持つと印を結んで呪文を唱える。

「菊奴ちゃん、姿をみせて」

という小沙希の横に舞妓姿の菊奴が座っている。

今見えているのは母親である菊野の女将と杏奈と小沙希だけである。

「すいません、この葉を順番に目に当ててください」

というが高弟に渡した。師匠から順に目にあてる。

「おお、菊奴ちゃん」

とその姿をみて元気なころの彼女を思い出して涙するものもいる。寂しそうにわらう菊奴。

「菊奴ちゃん、おかあさんの所についていなさい」
うなずくとすーっと移動する。それをみて、ああ本当に死んだのだと実感する高弟達。

「では、小沙希ちゃん。お約束を守りまひよ」

「すみません。ではお弟子さん達にお願いします」

といて舞台上から声をかけた。

そして、菊奴が殺された動機についての推理を話す。

そして

「お願いしたいのは……」

と第二の動機と考えられる女性を狙うレイプ犯の犯行を裏付ける他の被害者を捜す調査を依頼したのだ。

言葉を続けて

「菊奴ちゃんが連れ込まれたのは黒のワゴン車だったそうです。今言った不信なワゴン車をみかけたかどうかもお願ひします」

高弟達が飛び出していった。

2・3の高弟達は自分の弟子達に依頼を告げて師匠の元に戻った。

師匠は舞台上の小沙希に言った。

「さて、小沙希ちゃん。あなたの正体を教えておくれやす」

「正体といわれましても……」

「安倍晴明はんのお弟子さんとか、天皇はんには舞を献上したとかいわれても……」

「わかりました。お師匠様には何だか私のこと全て知っていてもらいたいんです」

とはにかんだように答えた。何か『おやつ?』という反応だった。

「すみません、ごめんなさい。失礼だと思えますが、私なんだかお師匠様のこと

本当のおばあちゃまみたい思えてきて……本当にごめんなさい」

と行って頭をさげる。

師匠はこのいきなりの告白に一瞬戸惑ってしまったが、その正直な告白に師匠は久しぶりに晴れ晴れと笑ってしまった。嬉しかったのだ。高弟達に囲まれてはいたが、舞に命をかけ結婚もせず

気が付いてみれば、その寂しさに愕然とする思いだった。

小沙希は生まれたときからのことを淡々と語り始めた。

男だときいて、仰け反るおもいの高弟たち、でもその血を吐くような思いは

自分の男の部分で憎んで幼いながら自殺を決行した心情、胸を締め付けられ苦しくなってくる。

そして、大学進学とともに母にさらわれ男として自信のなさから

「今から思えば最低の男でした」と苦笑いをする舞台上の小沙希。

「でも・・・」

と続ける。環境がガラリと変化する早瀬一族の女達との交わり結びつきによって

その性や性格まで変ってしまったことは何故かほっとする思いだった。

女は女を知り尽くしている。女しか産めない早瀬一族の苦しみ、平安時代から術によって争いを無くす役目を背負わされて脈々と生きてきた女達、

この京に住んでいる女の強さと共通するもの感じて共感を覚えるのだ。

自分が平安京で安倍晴明に術をかけられた早瀬の沙希姫の生まれ変わりだと知る。

平安京との深い係わり合い生まれ、

不思議の術によって安倍晴明に師事した10年間の修行時代の話はまるで映画をみているようで血と肉が沸き立つおもいだった。

小沙希の話が終わると師匠がぼつりといった。

「その早瀬のおなごさんたちにあいたおすなあ」

その一言が京の女達の中に小沙希を受け入れた言葉となった。

「今はここにいる早瀬の女はうちとお母ちゃんの横にいる杏奈姉ちゃんなんです。」

けれど、いままでの話は内密にお願い申します」

「京のおなごは口がかたおす。言うなといわれれば死んでもいいまへん」

高弟たちは全て戻ってきていた。

内容のある話がなかなか聞けなかったが、

その中でこの春、中学を出て舞妓修行にきていた女の子がこの2、3日、

行方がわからなくなっている情報と小学生の女の子が親と喧嘩してブイと家を出たまま帰ってこない情報が聞き出されてきた。

そのうち、小学生の女の子の一件は家出と思われていたが

黒いワゴン車がその小学生の学校の周りや家の周りで見かけられた情報があり

俄然真実味が出てきたのである。

「その小学生のお宅はどのあたりなんですか？」

聞き出してきた高弟に聞くと比叡山の近くだという。

そのとき、この情報を裏付けるような新たな情報が飛び込んできた。

舞台上に黒いものが庭から飛び込んできたのである。

『カア』と鳴くそれはひづるが可愛がつているヤタさんであった。

何かあったときのヤタさんに連絡を伝える方法を教えておいたのだ。

「ヤタさん、何かあったのね。いいわ、じっとしておいてね」
みんな啞然とみている。

印を結ぶと呪文を唱え、ゆっくりと息を吹きかける。

するとヤタさんの両目から光が溢れ、その前の空間が歪んで
天城ひづるの姿が映しだされた。

「あきあ姉さん、あきあ姉さん、わかりますか。

今、調査に回っている小野監督さんのスタッフから連絡がありました。
た。

調べまわった結果、情報は少ないんですが比叡山をなんども行き来
する

不信な黒いワゴン車の情報は数多く寄せられているそうです。以上
です。

あきあ姉さん、早くかえってきてください。寂しくてたまりません。

その上薫姉さんは我儘ばかりいって……」そこでポコッと
頭を叩かれる音がして泣き声をあげてるひづるの声で映像が終わっ
た。

あつけにとられている高弟達にも最後の場面が愉快だったらしく笑
い声が漏れた。

あきあは返事をヤタさんに伝える。

印を結んだままヤタさんにむかって

「ひづるちゃん、急いでしてほしいことを伝えます。

比叡山の麓に行方不明の小学生のお宅があります。

行方不明になって2日だそうですからまだ術につかえます。

なんでもいいからその小学生が直前まで身に付けていたものをヤタ
さんに持たせてください。

京姉さん、泉姉さんにはその小学生宅に急行してもらってそのお宅

で待機願います。

そして、これが肝心です。

薫姉さんに言つて、日和子叔母様に比叡山の結界を一次あけてもらつてください。

理由を聞かれたら、比叡山に埋められている女性達の遺体を捜すため式神達を飛ばします。

といつてもらつてけっこうです。

なお、薫姉さん、ひづるちゃんをいじめないように！」

といつてからヤタさんに庭を指差すと『カア』と一声鳴いて凄いスピードで飛んでいった。

目を向けると高弟達みんな目を向いて驚いている。

師匠だけが微笑んでいる。小沙希のすることはもう全て受け入れているのだ。

「あの鳥、あれは？」

と聞くので

「あれは式です」

「式？」

「はい、式神といつてある事件のとき熊野古道の清水を汲みにいくのに

あのヤタカラスをつくりました」

と答えた。

「小沙希ちゃん。ついでにその事件のこと話しておくれやす」
にこにこしながら聞いてくる。

お婆ちやまに孫が話すように京の結界の事件を話だした。

「ほう……」

「それは、それは……」

鬼に食われた神官の話になると

「鬼さん、ほんまにおりなさるんやなあ。．．．その人、可哀想に」
と手を合わせている。

じりじりと報告を待つ間、小沙希のお婆ちゃまとして軽い気持ちで舞の所作を教えはじめたが、段々と京舞の家元、人間国宝井上貞子として真剣にならざるをえなかった。

その吸収力は驚異的で高弟達も小沙希の舞姿に師匠の若い時の舞姿がダブって見え始めた。

「まあ．．．あんたはんは．．．．．」
と開いた口が塞がらないとはこのことだ。

菊野屋の女将、幽霊の菊奴さえ．．．いや、初めて京舞というものを目にする

杏奈でさえ小沙希の舞を舞う舞妓姿には見とれてしまっていた。

その時、再びヤタさんが飛び込んできた。

小沙希が日野あきあに変わった。きりりとした立ち姿、その顔は今舞いを舞っていた同じ人物とは思えない別の気品と凜々しさがあった。

ヤタさんが持つてきたのは黄色い小学校の帽子だった。

ひづるよりの報告が始まる。

「あきあ姉さん、言われたとおりのものヤタさんに持っていてもらいます。

その日の直前まで被っていた帽子です。

京姉さん、泉姉さんはもう小学生の千秋ちゃんのお宅についています。

なお、比叡山の結界ですが、あまり言い返事がこないそうです。

こっつ？．．．えっ？．．．なによ薫姉さん．．．こっつ？．．．

だってこんな字習ってないもの。・・・薫姉さんに教えてもらいました。

ごうというんだそうです。業を燃やした日和子叔母様からの伝言です。

結界破りしてしまえといっています。

あきあ姉さん、早く帰ってきてください。薫姉さんがいじめます」といって画像が切れたが、再びボコっという音がしてひびくるの泣き声があがった。

「ほほほ・・・面白い姉妹だこと・・・」

あきあは薫のことは話さない事にした。だってイメージダウンすること請け合いだ。

「比叡山の結界を破る・・・並大抵のことではおへんえ」
師匠のいう通りだった。

少し考えて手に持っていた懐紙を取り出しなにやら折り始めた。それを手にとって印を結んだ。呪文は簡単だった。

指先を当てると烏帽子の公達が現れた。

その公達は立ち尽くすだけで動きもしない。

「ほう・・・小沙希ちゃん。そのお方は？」

「安倍晴明様です」

といっってからなにやら祝詞を唱え始める。

そして、祝詞が終わると同時に公達が動きだした。

首を左右に振り、肩を回してからあぐらを組んで座った。

「人使いのあらい奴だのう」

「晴明様」

「聞いておったわ、比叡山の結界、あきあの力ならたやすく破れよう。」

されど結界破りのあとの式を使つての探し物は辛いもの。
無理をすれば、あきあそなた自身があの世に行くことになるぞ」

「いいえ、私の命なぞ惜しいとは思いません」

「どうしてそこまで命をはる」

「はい、ひとつは母の娘を思う心、もう一つは女を虫けらの如く殺す憎い犯人を捕まえるため・・・

どうしても許せませぬ」

とキツと唇をかむ。

「ははは、おまえらしいもの。あきあよ。わしを呼び出してどうするつもりじゃ」

「はい、私の術を見守ってもらつたためと菊奴ちゃんを天に導いてもらつたためです」

「いいじやろう、おまえの好きにすればよい。見守つておいてやろう」

「あなた、安倍晴明はん」

と師匠が声をかける。

「うち、あなたのこと尊敬してました。けどそんな大事なこと大事な大事な」

お弟子はんにおまえの好きにすればよい。見守つてやろうだなんてあきれ果ててものもいえまへん。

うち、この小沙希ちゃんとは今日はじめて会いました。

けど、はじめてあつてもズーとあつても同じです。

うち、この子に惚れてしまいました。こんなに優しく不思議なおなごはんは

どこさがしてもいてえしまへん。

あんたはんはこの子が死んでもええいわはるんどすか・・・」
とえらい剣幕で怒りだした。

そして

「この子はうちの可愛い可愛い孫どす、勝手なまねはさせまへん」といつてから

「こんなお人が京の守り神だとは、なさけのうてなさけのうて涙もでまへん」

と安倍晴明を叱りつけ、涙をながしている。

「あきあよ、えらい惚れこまれようじゃのう。さすが、沙希姫の祖母じゃ。」

魂と魂の結びつきの因縁とは恐ろしいものじゃ」

「ええ？今、なんと申されました？」

「この女子は沙希姫の祖母だったのじゃ。琵琶と舞の名手でのう、特に五代天皇の父帝に献上の舞の素晴らしさは後々まで語り継がれたものじゃよ」

「じゃあ……」

「ああ、もともと沙希姫とその祖母、この世で会うべくして会った」

「私の姉、静香と律子は？」

「静姫と小律姫のことじゃな。血は血を呼ぶ。因縁じゃ。ほれ、もうそこに……」

その声にすぐ、

「ごめんください……」

と客の訪問の声。

「あつ、静姉の声……」

しばらくして通されてきたのは静香と律子……そして、驚いたことに

飛鳥日和子が続いて入ってきた。

舞台上の様子をみて

「あっ、これは安倍晴明様」

といつて、座つて挨拶をする静香と律子。

「おう、早瀬の女達……そこな、小律姫。沙希姫は健在か？」

「はい、いまも『早く出してたも』といわれています」

と律子が晴明に答えている。

日和子は初めてあつたのだが、

「そこな、女子」

といつて晴明が日和子を扇でもつて指し示す。

「はい」

といつて興味深げに晴明を見つめている。

「あきあ、お前はよくよく人に恵まれているのう」

「どういうことでしょうか」

「そこな女子は沙希姫の母御じゃ」

「日和子叔母様が沙希姫様のお母様……」

呆然とするあきあ。

「晴明はん、といつとそこのおなごはんはうちのむすめ、といつとどですか」

「そつじゃ……それに、よくよく見るとここにあつまっている女子達、全て早瀬の家につかえていた女房たちではないか。そこな女子」

と師匠の一番の高弟を示すと

「おぬしは沙希姫の乳母……おお、そこな女子は沙希姫の母御の乳母……」

と晴明が説明するとみんな呆然と顔を見合わせている。

沙希姫の母といわれた日和子は

「わたし記憶はないのですが、沙希ちゃんを見たとき初めて会った気がしなかったのはそのせいでしょうか」と晴明に尋ねる。

「そうじゃ、人の記憶ほど不確かなものはない。したが魂の結びつきは永遠なのじゃ」

「おお、あなたが母様の生まれ変わりだったのですか」という声に、見ると律子が横になって、その上に十二単姿の沙希姫が浮かんでいる。

スーと日和子に近づくと腰をかがめて手をとろうとする。でも、魂と生身の人間では交わりが出来ない。なぜか懐かしさに涙が溢れてくる日和子だ。

しばらくは日和子を見つめていた沙希姫、
師匠の井上貞子を見るとそのそばにすーっと移動する。

「おばあさまですか、沙希です」というと

「おお・・・おお・・・」
と手を出すが、勿論触れることができない。

沙希姫の乳母だといわれた高弟はなぜか沙希姫を涙を流しながら見ていた。

そこに再びヤタさんが飛び込んできた。
ひづるの報告は緊急を要するものだった。

「あきあ姉さん、電話があつて比叡山を上がっていく例の黒いワゴン車が

今日撃されたという報告がありました」

「晴明様。私、結界破りの術をしかけてみます。後はこの命をかけるまでです」

「まあ待て。わしがなぜ静香と律子と呼んだと思う。沙希姫はわかるであろう」

「静香と律子が身につけた早瀬に伝わる宝玉ですね」

「そうじゃ。沙希姫、早く律子を起こすのじゃ」

沙希姫は名残惜しそうにしていたが律子の身体に入っていく。乳母だった高弟は少し腰をあげて

「あっ」

と引いて引き止めるようなしぐさをしていたが、今の状態ではあきらめる他はなかった。

目を覚ました律子と静香にはさまれて座った小沙希。

今までとは違う感情を持った高弟と師匠に見つめられて結界破りの術を施していく。

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これを四神相応の陣という……」

と呪文を唱えていく。さすがに比叡山、抵抗が激しかったが静香と律子が身に付けた宝玉の力で結界を破ってしまった。

これではらくは比叡山の結界を再生できることはない。

続いてあの小学生の帽子に術をかける。式ではないがものに宿る精霊を呼び出し、

白い鳩の姿にかえさせた。

そして

「菊奴さん」

と菊奴を呼ぶと

「あなたはこの鳩の身体に入っていないさい。

この鳩が小学生の千秋ちゃんの元に運んでくれます。

その傍に菊奴さんの身体があるはずです。

日和子叔母様、この鳩の首にかけるのは発信機です。

ごく弱い電波ですが京姉と泉姉が持つモバイルの受信装置ではたとえ地球の裏に

行っても追いかけることができます」

「沙希ちゃん、そんなのいつのまに？」

「昨夜、菊野屋さんでつくりました」

ああ、あれかと女将は思い出した。菊奴がかんしゃくを起こして壊してしまったゲームの機械。

いろいろいじっていた小沙希ちゃんが

「できたわ」

と笑っていたのを思い出す。

でも……でも……あれって30分もかかっていなかったはずよ。

『天才!』そういう言葉が頭に浮かんできた。

菊奴が小さい玉になって白い鳩の身体に入って飛び出す。

いよいよ追跡がはじまった。

こうなれば日和子もじっとしてられない。

この場を離れがたい思いがあるが、

「行つてきなはれ、そしてまたここに……」

『戻つてきて欲しい』という言葉のみこんで笑顔で送りだす。

「沙希ちゃん、あなたは？」

「私もうこれ以上表に出たくありません。裏方に徹してここでお婆ちやまと待っています」

『お婆ちやま』といわれて師匠は満面の笑顔にかわった。

日和子の乳母だったといわれた高弟を先頭に玄関さきまで見送りに

でる高弟達。

菊野屋のおかみを乗せて覆面パトカーが走りだした。

待つという落ち着かない気持ちを感じて晴明は

「さて、あきあ。わしは久しぶりにお前の横笛が聞きとくなった。なにか一曲聞かせてもらえぬか」

という注文に

「すみませぬ。今笛を持ち合わせませぬ」

「ほう……お前がいつも肌身離さなずもっていた『緋龍丸』はどうした」

「はい、あれは朱雀門での怨霊との闘いのおかげにこの身から離れ、どこへやら行ってしまいました」

「ほう、残念よのう。あれほどの名笛が……」

師匠は『緋龍丸』という言葉でビクンと反応を示し、

高弟になにやら指示したのを晴明は横目で見ていたが、小沙希は気がつかなかったようだ。

しばらくして三方の上に緋色の袱紗に包まれたものを

小沙希の乳母だった高弟がしずしずと持って小沙希の前に置いた。

「あのう、これは？」

「姫様ご自身でお開けください」

高弟は小沙希のことをもう姫様と呼ぶように変っていた。

「姫様だなんて……」

と訂正させようとしたが

「いいではないか、お前は早瀬一族の姫様で間違いあるまい。伝説の御子なのだから」

「伝説の御子？」

「まあいいではないか、早くその袱紗をあけて中身を確かめてみよ。しかたなくいわれたとおり袱紗をとると長細い桐の箱があった。」

それをあけると箱の裏に達筆で緋龍丸とかかれていた。驚いて入っていた金糸模様の袋を取り出し、紐を緩めると懐かしい名笛緋龍丸が出てきたのである。ひさしぶりに持つ手が震えている。肌に吸い付くような肌触り。横からも縦からも見ていても傷ひとつない状態だった。

「因縁どすなあ、この笛は我家に伝わってきたんどす」という師匠。

「あきあはその笛をどうして手に入れたのじゃ」

「はい、これは大江山の鬼といわれたシテン殿を

源頼光殿の手から逃がした時にシテン殿から頂いたものなのです。シテン殿は鬼ではありません。唐じくよりもっと遠い国から流されてきた異邦人だったのです」

「やはりのう、ではあの頼光殿が意気揚揚と持ち帰ったあのシテンの腕といわれるものは？」

「はい、あれは私が土でつくったでく人形。魂は捕まえた邪鬼のもの」

「はははは……愉快じゃ愉快じゃ……」と清明の笑い。

しばらくして舞台下に座る清明や師匠の井上貞子、そして高弟達、静香と律子も

杏奈にしても、はじめて聞く沙希の奏でる横笛を楽しみに待っていた。

静かに横笛を唇にあてる小沙希……そこから細いがしっかりとした

音色が聞こえてきた。『雪』というこの曲、緩やかに綿のようにふわりと舞い落ち

はかなげにとけ、ときには狂ったように激しくふりつもり大地をかくして

木をも押しつぶす。そして、温かい陽がふりそそぎ雪がとけ、水となって川に消えていく。

静かに唇から名笛がはなれる。久しぶりに吹く緋龍丸であったが衰えてはいなかった。より以上に心を笛にのせて奏でることが出来たのである。

『ほっ』誰かが息を吐いた。何だかこの稽古場に涼風が吹き清浄な空気が流れていた。

「さすがじゃな、あきあ。衰えるどころかすでに名人の域にたっしておる。

邪鬼がすっかり祓われて、清い風がながれておる」

「ほんに、清明はんが言われるとおり、小沙希ちゃん。あんたは名人どす。

その笛、あんたに返すから……」
時々でもいいからこのばあさんのところに笛の音を聞かせにきてほしいといった。

返すといわれて、戸惑ってしまったが

その笛はもともとあんたのものといって耳をかさない。

小沙希は笛を抱きしめ

「お婆ちゃん」

といった。

「そうそう、小沙希ちゃんにそう呼ばれると10年も20年も寿命が伸びる

気がするえ」

とこれからはそう呼んでおくれと頼み込む。

そこに黒い影が……

三度のヤタさんの連絡であった。

「あきあ姉さん、事件は解決しました。でも私悔しいです。千秋ちゃんのこと間に合わなかったんです。家をでたあとあの車に連れ込まれてすぐに殺されたそうです。私も薫姉さんも帰ってきた澁姉さんと順子さんと千秋ちゃんの家のそばで待っていました。あとで日和子叔母様に捜査の邪魔をするなって酷く怒られました。」

菊奴さんの体もその他4人の女の人と埋められていました。犯人は若い3人の男でした。京姉さんと泉姉さんが捕まえましたがお姉さんたち、鬼みたいにめちゃくちや強かったです」
と急に両方から手が出てきてひづるの頬をひねる。

『うわあ〜』と泣くひづる。

「京と泉がいじめた〜」

と大きな声で叫んでいる。

「誰が京じゃ」

「誰が泉じゃ」

と最後に両頬に片手をつつ当てられ、いびつにゆがんだ顔で画像がおわった。

頭をかかえる小沙希。

でもこんなひどい事件の結果の深刻さを少しでも和らげてくれたひづるに感謝した。

「ひづるちゃん、ありがとう。少しでもいやな雰囲気や和らげようとした

あなたのお芝居とてもうれいいます。

そこでお願いがありません。菊野屋さんではお通夜やお葬式の準備で忙しくなると思います。

おじゃまになってはいけけないので預けてある私のお洋服をもって皆

でこちらにきて下さい。

その時、菊奴さんも連れてきてください」

ヤタさんにはご苦労だが連絡係としては今日十二分な活躍に感謝して嘴にキスをしてあげる。

『カア』といって飛び出していったが何故か木や壁にぶつかっている音が聞こえた。

「ふふふ、ヤタさんにも沙希ちゃんのキスの効果があったみたいね」

静香のその言葉に律子も笑い出した。

事件は悲しかったが、解決してほっとしたのが実情だった。

「沙希ちゃん。明日は撮影があるんですよ」

「ええ、撮影所の中で晴明様のお屋敷での撮影なの」

「ほう、わしのか」

「はい、一条戻り橋で晴明様に助けられ、10日の意識不明のなかで

男のあきあが女性の身体をも持つ男女両性具有という身体になっていくという撮影になります」

「面白そうじゃのう」

「晴明様、そのときに晴明様の式であった、

玉藻さま、葛葉さま、紅葉さまを私の式で模したいのですが、お許し頂けないでしょうか」

「何、わしの式をとな……ふむ……」

じっと見つめるあきあ、考えこんでいた晴明は

「よし、あきあよ。お前にわしの式を与えよう。お前ならわしの式をうまく御していくだろう」

といって晴明は両手を広げてゆっくりと近づけていく。

その手の間に小さな赤い玉、青い玉、黄色い玉が現れゆっくりと飛

んでいる。

その手を押し出すと舞台下に頭を下げ十二単を着た3人の女達が現れた。

3人は一斉に頭をあげて

「これは晴明さま、お久しゅうございます。お呼びをくびを長くしてお待ちしておりましたのに」

「ちつともお呼びがなくて・・・」
と怨むようにみつめる。

「わたくし、待ちくたびれてしまいました」

「すまぬ。3人とも、わしももう肉体を持たぬ身、これからはこのあきあ、

存じておろう、そのあきあに仕えるが良い」

しかし、3人はキツと晴明をみつめ

「これは晴明様とは思えぬお言葉、我ら元はといえば晴明様にはむかって

術で破れて式神となった身、いくらあきあ様でも我らに勝たなければお仕えするわけにはいけませぬ」

「いけませぬ」

「わははは、許せ。そうであったのう」

「はい、我らは鬼、我らに負ければあきあさまはいえ喰ってしまいます。」

それでも我らを下僕にといわれますか」

「いわれますか」

驚く皆をよそに、にっこり笑って

「いいでしょう。晴明様の式神とはいえ貴女達がいわれるように元は鬼、

私も遠慮はいたしませぬ。ただここではこの家に迷惑がかかりまし

よう。

この当たりに広い地はありませんか」と高弟に聞く。

「はい、この裏手が広い敷地になっております」

「では、そこで」

と庭に出て飛行術で飛んでいく。

後に続く3人の式・・・十二単で軽々ととんでいった。

「私たちも・・・」

と立ち上がるうとした静香を晴明が押し留めた。

「よいよい、ここで術比べを見ようぞ」

といって舞台上に膜のようなものを張った。

現代でいうスクリーンだ。

あきあも心得てこの家を含めた結界を張った。

勝負はあっさりと決まった。上には上があるというが

3人の攻撃をかわしながら地面に書いていった、五芒星の枠の中に

3人が捕らえられてしまったのだ。

しかし、一番あきあのが好きなくせに負けず嫌いな紅葉が十二単を脱いでしまった。

夕ガがはずれた紅葉は牝鬼に変身してしまった。

「やめなさい」

玉藻、葛葉の声も聞こえずあきあに襲いかかる。

あきあは八方に飛び移り、紅葉の攻撃を一瞬の差で次々とかわしていった。

そして、1本の竹の棒をひろうとそれを上段に構え目を閉じた。

そして、紅葉があきあにつかみかろうとした瞬間・・・。

稽古場の庭先から

「危ない！あきあ姉さん」

という声が聞こえた。

静香達が振り向くと、あきあが結界を張る前、間一髪というところ
で

この家の玄関先まで入っていた、薫、漣、順子、ひづるの4人と菊
野屋の女将、

菊奴と他芸妓と舞妓達だった。

「ごめんください」

と案内を請うても誰も出てこないのしかたなく庭沿いにここまで
入ってきたというわけだ。

一方、ひづるの声が聞こえたのかどうか

「えい」

と飛び上がると棒で紅葉の頭の角を『ポカリ』と叩いていた。

角は鬼の急所だ。一度にボタンと気絶してしまった。

あきあは術を唱えると脱ぎ捨てた十二単を裸の紅葉に着せると人に
変化していた。

這いつくばるようにあきあの前に手をつく玉藻と葛葉……

そして紅葉もようやく気づいてこれも二人に続いた。

「あきあ様、申し訳ありませんでした。これで我らはあきあ様の式
神となります。

これからよろしゅうにお願いいたしまする」

「いたしまする」

と玉藻が代表して挨拶をし、あとの二人が唱和していた。

あきあは三人を立たせ、特に紅葉の汚れた十二単を掃ってやった。

じつはあきあは紅葉の気持ちが悪かったのだ。

あきあが大好きな紅葉、でもあとの二人の気持ちが悪くない。

聞くわけにはいかなかった。だから、自分が盾となつてわざとあき
あを襲ったのだ。

もし、あとの二人が自分と同じことをしたら紅葉が玉藻と葛葉を殺していた。
でもそうはならなかったことでホッとしたところだ。
自分の気持ちをわかってくれるのはあの偉大な安倍晴明とあきあだと知っていた。

あきあ達が結界を解き戻ってくると、ひづるが晴明の膝の上に座ってなにやら話している。

他の皆、特に菊野屋の女将達を見て

「あら、おかあちゃん。どうしはったの？お通夜の支度で忙しいんでは？」
と聞くと

「小沙希ちゃん。この子の身体は警察で司法解剖とやらで帰ってきてはるのが明日の夜になるそうどす」

「今日でお別れなのでおかあちゃんと皆にきて貰いました」
と菊奴が悲しそうにいう。

「私の身体がみつかったことで、もうこの身体を維持できまへん。ほら、もう薄くなってきました」

なるほど、身体が薄っすらとなって足のほうはもう見えなくなっていた。

「よし、もうころあいじゃな、他の者達とも充分に別れを済ませたのであるっ」

と行って立ち上がった。
ひづるの頭をなで

「いい子にしておるんだぞ、あきあの眼を通していつでもみているからな」

ものおじしないひづるを晴明は気に入ったらしい。

「そうだ、これをひづるに預けよう」

といて手の平を上に向けると何も無い手のひらから緑の蝶が飛び

出した。

ひらひらと飛び回ってからひづるの頭にとまる。

「それは、それぞれの人形に入っておるあきあの式と共にひづるを何かと

助けてくれよう、大事にな」

といて庭に降りていき、菊奴を手招きした。

「では、おかあちゃん。うち、もう行きます。充分に身体に気を付けて。

皆もおかあちゃんのこと、おたのもうします。……

小沙希ちゃん。ありがとう、お世話になりました。一生……いいえ、永遠に忘れません。

おかあちゃんのことよろしくおたのもうします。

皆さんのこと天国から一生懸命見守っています」といって晴明のもとへ移動する。

「菊奴ちゃん、おかあちゃんはうちの京都のおかあちゃんやから、

安心して天国にいつてね」

小沙希がいうと、にっこり笑って頷いている。

「菊枝〜」

悲しい母の叫び声だ。

「菊ちや〜ん……」

「菊奴ちや〜ん……」

「菊奴姉さ〜ん……」

判っけていてもやはり別れはつらいし悲しい。

師匠も高弟達もしばし呆然と見送るだけだ。

菊奴は晴明に肩を抱かれながら、光となっていく。

小さな小さな光の粒子はゆっくりとゆっくりと天に上っていく

そのとき天から瑞光が降りてきてその光の中の大きな手に光となった菊奴がつつまれていった。

「あつ、菩薩様」

という菊奴の母……我が子に手を合わせてから、小沙希にかけよった。

「小沙希ちゃん、あんたは菩薩様の申し子。あんたには菩薩様が乗り移っておられるんや」

と今度は小沙希を拝みだした。

そんな女将の手を押さえて、首を横に振る。そして、天を指差すと星のまたたきのなかから、笑顔で手を振る菊奴の姿が大きく写ってすーと消えていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その夜の9：00頃の八坂神社、

近くの路上に白い落下傘のペチコートの上に、黒のフリフリ衣装・

・・・

スカート部には腰の周囲にスカート丈がかくれる位の

長さ20cmぐらいの幅の黒い布……1枚1枚の模様が違う事で派手な印象を与える。

襟のない丸首にちいさなアンティークのトンぼ玉のネックレスをつけ、

パーマを当てた濃い栗色の髪が細長い首筋を隠している。

その髪にちょこんと乗ったつばひろの黒い帽子……

つばの部分になにやら一杯貼りつけている。

よくみれば全身真っ黒な衣装なのにそう見えないのは全身に飾り立てる小物の存在だろう。

女性・・・いや、真深に被った帽子から見え隠れする口元・・・時折、斜め上に顔を上げりその顔は幼い雰囲気を残す少女の顔だ。

少女はコンクリートに背を預け、座り込んでいる。

スカートの中は胡座を組んでいるのか・・・

少女の右には紙袋とバツクが・・・

左にはなにやら布袋に入った長いもの2本が立てかけられていた。

まだ、人通りが少なくはないが

でもこんな少女に声をかけるものはいない。うすっ気味悪さを感じてか避けて通っているのだ。

そこに八坂神社から出てきた二人の舞妓、物珍しげにジロジロと少女を見て

行き過ぎようとしたが、どうやら興味深々になったらしい。

二人で何やら相談して戻ってきて少女に声をかけた。

「おうち、どうしたんえ？」

でも少女は下を向いたたまま動かない。

「ちよつと！あんた！・・・」

もう一人の舞妓さんにそう大きな声を上げられて、はっとしたように首をあげる。

「うちのことですか？」

「おや？おうちは京のお人なんどす？」

「へえ・・・」

「珍しおすなあ、その格好で京言葉は・・・」

「おかしおすか？」

「そんなことあらしまへん」

「あおう」

「へえ?・・・」

「それ、お三味や思っんどすけど」

「へえ」

と行って袋から三味線を取り出した。

弦を調整する様子が手馴れていて素人ではないと普段から稽古に励む舞妓には読み取れた。

「何かやっておくれやす」

その言葉に三味の音色が流れ出した。・・・そして・・・

『 三千世界の鴉を殺し 主と朝寝がしてみたい 』

と少女の声とは全く異なるテノールの声がこの夜のしじまに流れたのだ。

「あんた何者なんどす?そのお三味の達人ぶりといい、そのお声・・・只者ではおへん」

「うちは・・・うちどす。他の誰でもあらしまへん」

「うち、いまの曲、なんか聴いたような覚えが・・・」

「へえ、昔長州の高杉晋作はんがこの祇園の芸妓はんに作らはったんどす」

「そんな昔の音曲よう知ってはりますなあ」

「あんたのお仕事は何どすか?」

二人の舞妓にとって目の前の少女が不思議の対象となって興味がつきない。

そしてそんな様子を見物する人の輪が増えてきた。

「うちの仕事どすか」

といいながらも一つ一つ立てかけていたものの袋をあける。

「え？・・・それは・・・」

「琵琶どす。本当はこれがうちの商売道具どす」

「商売道具って何なんどすか？」

「うち、” 謡詠み（うたよみ） ” なんどす」

「謡詠み？」

「へえ、心の中の屈託をうちが読み取って開放してやるのが商売どす」

「心の屈託を？・・・」

「へえ、例えばあんたはん・・・」

と指差したのはスリリとした・・・というよりも痩せすぎの女性だ。

『ジャーン・・・ジャーン・・・ジャジャジャジャ・・・ジャーン』
と琵琶の音が流れ出した。

そして、地の底から流れ出てきたようなテノールの声が見物している者たちの腹の底から響き渡ってくる。

それは女性の純愛と裏切った男の卑劣さの物語だった。

女性の愛は一途だったが男は地位、名誉・・・典型的な失恋の形だった。

男が女性に近づいたのは肉体を弄び金を引き出すだけであり、その金がなくなれば何もかも失った女性は用済みだった。

男の卑劣さは女性の日々の生活さえも破壊した。

使い込みの汚名を着せ会社を追い出し、噂を流してその区域に生活できなきなり引越しをせざるをえなかった。

女性が絶望の中で京都にきたのも最後の旅行であり今日は京都の最後の夜だった

あとは死地を求めるだけ・・・でも謡詠みは終らなかった。

女性がいなくなった後の男の様子が語られた。

男は会社で上つていこうとしていた。

けれどそんな様子を不信の目で見ていたのは女性の同期の友人。

会社での使い込みも、女性の近くで噂を流したのも男の仕業と調べ上げた。

友人は会社の顧問弁護士に相談した。

顧問弁護士の調査も友人の調べと一致することで男を警察に告発したのだ。

こうして男は逮捕され、女性の名誉は回復した。

……謡詠みは終わった。

女性は座り込んで泣いていた。周りの女性達も白いハンカチをだして涙を拭いている。

「さあ、しつかりしなはれ……」

舞妓の一人が腰をかがめて女性の背を摩っていると、

突然『ピー・ピー』と携帯が鳴り出した。

おぼつかない手でバックを探っていたが携帯電話がバックから飛び出し道路に滑り落ちる。

それを拾ったのがもう一人の舞妓だ。携帯を開けてスイッチを入れて女性に渡してやる。

「もしもし……あっ！恵理さん？……ええ私です……」

えっ！本当ですか……逮捕された……じゃあ……

使い込みも？……噂も？……私……私……

えっ？迎えにくるって？……うん、祇園の ホテルに泊まっているわ。

うん、ありがとう……食べているわよ……

でもすっかり胃が小さくなつたみたい・・・うん、待つてる・・・
「
とって電話を切った女性、立ち上がつて琵琶を持つ少女を見て
「あのう、あなたが今歌つたとおりのことを私の同期の友人が知ら
せてくれました。
でもどうして判つたんですか？・・・まさか・・・」

「うち、千里眼やおへんえ。これはすべてあんたはんの心の叫びだ
つたんどす。

ただ、それをうちの口を通じて”謡詠み”しただけなんどす。
あんたはんの心が死んでいたら”謡詠み”は出来まへんえ」
とってニツコリ笑う口元だけみえる。

「けんど良うおしたなあ。死んで・・・あんた、知つとるんどす
か？

人を殺したり悪い事をした人と同じ罪なんが自殺する人どす。
自殺したら無限地獄へ行かなあきまへん。痛みと苦しみが永遠に続
くんが無間地獄どす」

「そんなん知りませんでした。ただ死んだら楽になれるとおもつた
んどす」

「みなはん、なぐんにも知らへんのどすなあ」
とため息をつく少女。

舞妓は顔を見詰め合っていたが

「ねえあんさん、名前教えておくれやす」

「名前どすか？・・・うち紫苑います」

「紫苑？・・・その上はの姓は？・・・」

紫苑は首を振る。

「うちには紫苑いう名前しか覚えておへん・・・」

「覚えてえへんのどすか？」

「うちには余計な記憶は消えているようどす」

「お医者はんへは？」

「もつとつくの昔に・・・けんど、今はなんの支障おへん。

謡詠みがうちの生きがいになつとるさかい」

「じゃあ、紫苑はんはいつもここに？」

「ううん、そうとは限りまへん。けんどうち祇園が好きやさかい・・・」

「うち、菊野屋の花世います。覚えていておくれやす」

「うち、菊野屋の豆奴います。覚えていておくれやす」

と二人の舞妓が名前を名乗った。

「うちら、これからとつても大事なお人に合う約束があるんどす。

そやから残念やけどこれでお別れします。けんど又逢いたおす」

「へえ・・・」

「きつとどすえ・・・」

といつて立ち去った舞妓二人。

だからその後のことは何も知らない。

・・・こうして、もう一つの物語が始まった。

第一部 第十二話

おはようひづるちゃん。早いわね」

「おはようございます。沙希姉さん」

庭で緑の蝶とたわむれているひづるが明るく挨拶する。

「おはようございます。あきあ様、杏奈様」

といて十二単姿の玉藻、葛葉、紅葉がお茶をもってあらわれた。

その後ろからあの高弟で一番弟子の山野葉志保が困った顔でついでにきていた。

「みんな、おはよう」

といてから、志保の顔をみて

「どうされたのですか？」

聞く。

「いえ、沙希お嬢様にお茶をお持ちしようとしたのですが、玉藻さんたちが

これは私達のお役目だといって……」

「すみません、この子達一生懸命なんです。少し大目に見てやってください」

と頭をさげる。

「あらあら、いけません。私のようなものに頭をさげては……
それでは、沙希お嬢様……」

「山野葉さん、その沙希お嬢様というのは止めていただけませんか？」

「いいえ、だめでございます。前世とはいえ私は沙希お嬢様の乳母でございました。」

それに沙希お嬢様は大恩ある師匠のお孫さんにあたる方、
どうして、粗略に扱えましようか。それに沙希お嬢様こそ私を山野
葉さんだなんて
他人行儀な……志保とお呼びくださいませ」
と言いつつ。

やれやれと困った顔の沙希だったが3人のあたりまえですよという
顔で

助けにはならない。

「沙希！あんたが少しだけ我慢すればいいのよ」
と杏奈にまで言われては何も言えなくなる沙希。

庭ではひづるが蝶といっしょに相変わらさずとびまわっている。

そこに玉藻が声をかけた。

「これ、胡蝶。そろそろ姿をあらわしたらどうじゃ」
その声で蝶が垂直に舞い降り、そこから美しい黒髪の着物をきた少
女があらわれた。

「だって、お姉さま。わたしひづるが大好きなんだもの。
姿をみせて嫌われたくない」

「胡蝶さん、相変わらさねえ。もっと自分に自信をもったら？」
と沙希が声をかける。

「わたし、あきあみたいにきれいじゃないもの」

「これ、もうご主人様でしょ。それを呼び捨てにして」

「だって晴明様からはこのひづる様がご主人だといわれているのよ」
ひづるはびっくりしたようにこの光景をみていた。

「でも、その十二単姿はこの現代には合わないわねえ。山野葉さん」

といつても返事をしない。

「仕方ないわね、では志保さん」

「はい、なんでございましょう。沙希お嬢様」

「この子たちに合う着物を選んでくださいな」

「はい、承知しました」

「ご主人様、この十二単ではいけませんか」

「今では誰もそんなものは着ていませんよ」

「でも……」

「目立つてはいけないでしょ」

といわれると、しかたない。

「わーい、胡蝶ちゃん。私が着るもの選んであげる」

といつて胡蝶の手をとり自分の部屋につれていく。

「あつ、すっかり忘れておりました。お師匠様がお呼びでござい
ます」

「えっ、お婆ちゃまが……」

もうすっかり師匠を『お婆ちゃま』と呼ぶようになっていた。

「じゃあ、志保さん。この子達の着物のことお願いしますね」

「はい、わかつております。沙希お嬢様」

沙希が師匠……いやこれからは祖母と呼ぶことにする。

祖母の部屋の前で正座して手をつく。

「おはようございます。お婆ちゃま、小沙希でございませう」

「おお、小沙希ちゃん、おはいりやす」

沙希はきょうは撮影のため白いジャケットのパンツスーツを着て
いたが

作法はきちつと守っている。杏奈も沙希を見習っている。

「小沙希ちゃんは何着ても似合いはるなあ」

沙希は祖母が座っている反対側に座る。

「ほんに」

と後ろにひかえる高弟が相槌をうつ。

高弟にとつても沙希はもう、いなくてはならない大切な存在なのだ。

「お婆ちゃま、で御用事はなんでしょうか」

「そうどした、小沙希ちゃんは今ホテルに泊まりはるんどすか？」

「ええ、余りお邪魔をしたら」

「何をいいはるんどすか、小沙希ちゃん、あんたはうちの孫どす。

ここはあんたの家どすえ。それに時間があればあんたの舞を皆に教えてくだされ」

その時

「失礼します」

といて入ってきたのは薫達、昨夜から泊まっていた全員だ。

日和子叔母達3人は京都の警察にすべてをまかせてひとまずこの家に戻ってきていた。

昨夜のうちに東京に帰るといふのを祖母は強引に泊めたのである。

「日和子はん、あんた東京に帰りはるんどすか。寂びしなるなあ」

「何をいわれますか、またいつでも泊まりにきますよ。」

私にとつてもう京都に家ができたんですからね。お母様」

といて祖母をうれしがらせる。日和子の乳母だといわれていた高弟も

「本当どすえ、必ずどすえ」

と日和子に約束させている。

「京はん、泉はん。あんた達もどす」

「はい」

と嬉しそうに返事する双子達。

「ねえ、沙希ちゃん」

と日和子が沙希にいう。

「もう、みずくさいことはいいつこなし。」

沙希ちゃんは、お母様のところに皆と一緒に泊りなさい。そしてお母様に甘えなさい。それがお婆ちゃま孝行ですよ」といわれた。皆の顔を見みるとそれぞれが頷いている。

日和子が

「お母様、ここにいるのは早瀬一族の女達、後のことはよろしくお願ひします。」

澪さん、お母様の身体のことよろしくね」

「日和子姉さん、まかせておいて」

というと、薫がつい

「へえ、澪が人間国宝のお母様の主治医ねえ」

といっけてしまひ

「これ薫、どうしてあんだ達、顔を見合わせればいつも喧嘩ばかり、

それもつまらないことばかりで」

と日和子に叱られ

「すいません・・・」

と首をひっこめてあやまる。

いつも見慣れている早瀬の女達も初めてみる高弟や祖母も

この天才女優とエリート女医とのちわ喧嘩には笑いがもれてくる。

「わかりました、お婆ちゃま。遠慮したんでは駄目なんですわ。

こうなったら遠慮なく甘えさせてもらいますわ」

「私もいいの？」

庭先からもう一人少女を連れてひづるがいった。

「いいどすえ。ひづるはんのことは晴明はんからも重々頼まれているんどすから」

「わ〜い」

と庭先を跳び回る。

「ちょっと、ひづる。その子は誰なの」

順子が聞く。

「何言ってるの。この子は胡蝶ちゃんよ」

「胡蝶ちゃん？」

「わからない？・・・昨日晴明のおじさんからあづかった、緑色の蝶々の・・・」

「えっ？あの蝶がこの子？」

「順子さん、どういうわけかひづるちゃんは式神に好かれてしまうの。これも才能ね」

「わたし、少し頭が痛くなってきた。式神にすかれる天才子役か・・・」

「私天才じゃないもん・・・天才は沙希姉さんだもん」

まあいいかと順子は思った。ここまでのいい子になったもの。

「ご主人様、これでいいんでしょうか」

とって山野葉志保がつれてきた玉藻、葛葉、紅葉は現代の着物をきせられ、

あの腰までであった黒髪もアップにされていた。

沙希の顔をじつと心配そうにみている。

「良く似合っているわ。いきなり洋装は無理だと思っていたけどやはり着物はよく似合っているわ」

と沙希にほめられて嬉しそうに顔を見合わせている。

「その着物をこの時代のタガにします」

とって術をかける。

ほっとしたような三人。

「さあ、私の中に……」

という小さな玉に変わり沙希の身体の中に入っていく。

いつみても不思議な光景だった。

「じゃあ、私達はこれで失礼します。お母様、又近いうちにまいりますので。」

澪さん、お母様のことお願いね」

とって京、泉とともに立ち上がった。

「私達も撮影所にいきましようか」

と順子が促す。

「じゃあ、胡蝶ちゃん」

ひづるがいうと、いきなり緑の蝶になり胸に止まると蝶のエンブレムとなった。

そして、東京へ帰るもの、撮影所へいくものにわかれ

井上貞子宅を後にする。澪だけが残って高齢の貞子の主治医として診察をすることになった。

東京の姉である真理に電話して今日までの経過を話すと

姉の松島奈美をつれて京都にくるといふ。

井上貞子、前世では早瀬一族の沙希姫の祖母に挨拶をするのだという。

もしかしたら、裏の空き地を買い取って診療所をつくるという計画が練られたのだ。

気の早い決断かもしれないが、高齢の貞子のためには早いほうがいい。

撮影所に入ると、いつもより多いマスコミが日野あきあを取り囲む。

「あら、どうしたんですか？」

「今日の新聞見ませんでしたか？」

「すみません、今日は少し忙しかったので新聞をみる暇がなかったんです」

これは、本当であった。本日新聞第一面を賑わしている大事件のことを見ていない。

「でも、日野あきあさんに良く似た人が事件の置屋さんに入りまするのを

見ていたものがいるのですよ」

「わたし、昨日熱を出して撮影所を休んだんです。

だから、今日監督さんに謝ろうと思って早く来たのですが……」

マスコミの追求をかわす。

そこへ

「おーい、あきあくん。どうだ身体の調子は？」

「はい、昨日お薬をのんで一日寝ていたらすっかり元気になりました」

「ははは、いつも元気ものの君が熱を出すなんて、……鬼の霍乱かなあ」

「まあ、いやな監督！」

と喋ってぶつ真似をする。

それをみていたマスコミの記者達、どうも違うのかなあと首を振り

ながら撮影所を出て行く。

「ははは、さすがだね。うまいうまい・・・」
と監督があきあの顔をみて笑い出す。

通り過ぎて様子を見ていた薫達も笑いながら戻ってきた。

「まあ、あきあにとつてはチヨロイものね」

「まあ、薫さん、人を詐欺師のようにいって」

と睨みかえす。その顔が可愛いと思わず

「うわあ、沙希ちゃん素敵！」

と飛び上がった。いるのだ。

「ちょっと、ちょっと薫さん。皆見てるわよ」

撮影所に入ってきたスタッフや出演者たちが

そんな早乙女薫の様子を見て笑っている。

「かまうもんですか」

と行って沙希の手を握ると急ぎ足でスタジオに入っていくのは、
さすがに恥ずかしくなった結果らしい。

スタジオに入っていくと、スタッフや共演者、そして来ていたスポンサー、

テレビ局の天下社長やそのスタッフが拍手であきあ達を迎えた。

テレビ局のスタッフ達はメイキング編を作るといって張り切っている。

ひそかに昨日の事件もカメラに収めていた。

もちろんあきあの関連を裏付ける事実を削除してだが・・・、
だから筋立てが相当苦しくなるのはしかたがない。

彼らはこの事件をすべて推理し術を使って解決したのがあきあだと
知っていた。

しかし、あきあを表に出せない理由は知ってのとおりだ。

あきあに対する信頼感は絶大だ。

だから、女性スタッフなどひそかにあきあにいろんな相談を持ちかけているらしい。

恋愛や子供の問題、家庭の問題など・・・

だが、あきあのいうことはズバリと当たっているのだそうだ。

小野監督はそんなあきあに対し全面的なこの映画への参加を持ちかけた。

勿論、今までもほとんどがあきあの力によるものだが

さきほど聞いた人間国宝の井上貞子が驚いたという舞いの才能や名人級の横笛を映画に生かしていきたいのだ。

いろんなものを映画に入れれば話が散漫になるのだが

主人公の陰陽師あきあの才能だと考えればそんなことはなくなる。

日野あきあが後、どんな才能を秘めているのかそれを考えるとわくわくしてくる。

だから、いろんなことをさせたいのだ。

そんなときこのスタジオに、黒い服を着た年寄りが尋ねてきた。

「日野あきあさまにお会いしとうございます」

といったこの年寄りがスタッフに渡した名刺には

『土御門家 執事 林六右衛門』と書いてあった。

「土御門家？どこかで聞いたことがあるが」

という小野監督の言葉に

「それ、俺知っています。一度取材にいったことがあるんです」

というテレビクルーの若いカメラマンが言った。

あきあにとって初めて聞く名前だったのでそのカメラマンの言葉に耳をかたむける。

「何しろ京都の古い名家で、平安時代より続いているそうです。

聞いた話ではあの安倍晴明を開祖にしていると、陰陽道に通じて

いるそうですが

今ではすっかり没落して、当主も先年なくなり今はその執事と若い娘が暮らしているだけです」

と簡単な説明だったが安倍晴明を開祖にしているという土御門家には非常に関心が寄せられた。

「会ってみるわ」

と行って立ち上がって、通されている控え室に向かった。

「わたしが日野あきあですが」

という立ち上がった老人、ほつそりとした背の高い人だった。

70をもう超えているが、眼光は鋭く鷲鼻が特徴的だった。

老人はあきあの若さに驚いていたが、それを表情に出してはいない。

「あなた様が日野あきあ様ですか」

「はい」

「お若い方ですなあ」

「すみません、これから撮影が始まりますので・・・ご用件は何でしょうか？」

「おお、これは申し訳ありません。昨日、比叡山の結界をお破りになつたとか」

「どうしてそれを？」

「やはりあなたでしたか。あの結界は我主人の開祖安倍晴明様がお張りになつたもの、

昨日比叡山のお上人様からご連絡を頂きまして素人同然の人間に結界を破られた。

これは結界を守ってきた土御門に問題ありとお叱りを受けたのでございませす」

「そんなあ。あれは結界を1次的に開けてください。

とお願いしたのにしてくれなかった比叡山側に問題ありと思います。

私は警察のお手伝いとして結界を破ったのであり、その結果可哀な女性達の遺体と犯人を捕まえることが出来ました。何も文句ができることはないと思います」

あきあは何か自分達が悪いことをしたのだといわれているようではない口ぶりがきつくなっていた。

「いえ、別に貴女様をどうのこうのというつもりはありません。土御門の家が守ってきた結界を破った方がどういう方なのか

見てきてほしいと我家の主人である瑞穂お嬢様に頼まりましたので」

「お嬢様に頼まれて？・・・ではそのお嬢様が直接・・・」

「いえ、瑞穂お嬢様は身体が弱く、お目もお見えにならないので」
「ざいます」

「そんな人が土御門家のご主人・・・」

「はい、昨年にお父様である土御門善次郎様が事故でお亡くなりになられて

お嬢様が後を継がられましたのに急にお体を悪くされて・・・」
「

「お父様がなくなられ、瑞穂さんの身体もわるくなった・・・？」

とあきあは考え込んでしまった。そして・・・

「お父様のお名前は善次郎といわれる・・・もしかや御長男ではなく、御次男・・・」

「ほう、・・・よくわかりです。その通りでございます。

御長男善太郎様と善次郎様はお母様が違う異母兄弟でしたが

お若い時に善太郎様は悪い仲間に入られてしまい父親善造様に勘当され

それ以来、行方不明になつておられます」

「それは今でも?・・・」

「はい、善次郎様はいろんな手をつくされ兄上をお探しになつていましたか

とうとうそれもないませんでした」

「もう一つお伺いいたします。土御門家は陰陽道に通じていると聞いておりますが」

「はい、兄善太郎様は平成の安倍晴明といわれるほどの術者でございます。

でも道を踏み外されたのも陰陽師としてありあまる才能におぼれてしまったのが原因でした。

その才能に比べお心は弱うございました。

善次郎様は術者としては兄上にととてもかなうものではありません。

しかし、名門土御門家を維持していくのは天才の兄上善太郎様よりも

平凡だった善次郎様のほうが適していたのかもしれない。

多くの弟子達も善次郎様を慕いお仕えしてきました」

「そのお弟子さんたちは?」

「はい、比叡山につめています」

「それで、比叡山のお坊様がお怒りになつたのですね」

「はい、まことにもつて情けない話ではございますが」

「初対面である私によくそこまで打ち明けていただけました」

「いやあ、日野あきあ様。あなたは不思議なお方だ。

人をここまで引き付けるお方は私は初めてでございます。

お嬢様が元気であられたら貴女様とはよいお友達になれるものを

・・・」

と涙をながす。

「その瑞穂さんについて聞いてもよろしいですか」

「はい、御年18歳でお小さいときは元気なお嬢様でございました。でも14歳のときに原因不明の高熱を発症され下半身が動かなくなられ、

お目もその高熱が治まったときにお見えになれなくなっていました。

お医者様に見せてもとうとう原因がわかりません」といってから頭をさげる。

「日野あきあ様、お願いでございます。あなた様のお力でこの土御門家をお救いください。

そして瑞穂お嬢様をお救いください。

こうしていてもあなた様から凄いお力を感じられます。このままではお家がつぶされてしまいます」

「すみませんが私には家がどうなるうと関係はございません。でもそこまで追い込まれたのは私の責任、比叡山の一件は私におまかせください。

そして瑞穂さんのこと。今はなぜだか判りませんがこのままお宅にいてはお命が危ないです。

どこか安全なところに避難しなくてはなりません」

「はい？お命があぶない！」

頷くあきあ……しばらく考えていたこの執事は思い切って

「どうぞでございますよう、ご迷惑をおかけついでと申しては言葉が悪いのですが

日野あきあ様にお嬢様を預かってはもらえないでしょうか」

「私もそう考えていたとこです。……であなたは？」

「私はお家を空けることができません。いろいろとお家の習慣がございます。」

毎日毎日する仕事は多すぎます」

「そうですか、でも気をつけてくださいね」

「あのう・・・さっそくですが、お嬢様を車に乗せて連れていてくれるのですが」

「それを早く言ってくださいな」

と行って律子と順子呼び出して、スタジオにつれてくるように頼んだ。

「では、私はこれで・・・」

と執事は順子達と出て行った。

あきあはスタッフのミーティングルームに顔をだした。

広いこの部屋には監督やスタッフ達そして共演者達、当然のごとく薫の姿もみえる。

皆しらっとした顔をしていたのを、あきあが『ぶっ』と吹き出して言った。

「監督も皆もそんな顔をして、どうせ今を見ていたんでしょ。」

ヤタさんが天窓から覗いていたのを知っているんだからね」

「ほらね私、あきあ姉さんにきつと見つかるから止めようといったのに」

薫姉さんがやれやれって・・・」

ポカッと薫に叩かれるひづる。

「こらっ、ひづる！あんたが率先して嬉しそうにヤタさんに命令してたんじゃないの」

それにヤタさんをその人形から呼び出せるのあんただけだからね。

空涙はやめなさいって。そんなのこの薫様の前でみせるの10年早

「いつて」

泣きまねしていたひづるは急にあきあにせまった。

「ねえ、あきあ姉さん。これも事件なんですよ。瑞穂さんが家にいたら命があぶないって」

「あらあら、皆さんどうしてこう好奇心が強いんですよ」

「それはこっちが言いたいよ。」

君にはどうしてこつも次から次へと事件が飛び込んでくるのか。なあ、みんな」

「はい、それがあきあさんの凄いとところだとおもいます」とスタッフの一人。

「で、あきあさん今回我々がする役割は……」

「しようがないなあ……」
「いいながらも、本当に私ってお騒がせ屋のかなあとつい思ってしまう。」

でも、事件を通じていろんな女性達が自分の周りにあつまってくるのが嬉しくてたまらない。

「では、あの土御門という家のことをもっと詳しく調べてください。」

そして、長男の善太郎氏を悪い道に誘った原因となるもの。

次男の善次郎氏が死亡した事故とは、そして現在の土御門家の役割です」

「よしわかりました」

「といって若いスタッフ同士が役割を割り振っている。」

「おいおい、我々の仕事は映画づくりだからなあ」

「わかってます、監督」

「でも、監督が一番楽しんでるんじゃないかな」
「そうそう、あとで根掘り葉掘り聞くのは監督だからな」

そこへ順子が車椅子をひき律子がバツクをもって入ってきた。
サングラスをかけ、背筋をピンとのばすこの少女、さすがに名門の
後継ぎである。

美少女とはいえないが清純な可愛らしさがあった。

「あの、日野あきあさんは？」
少女は多くの人の気配を悟ってか周囲を見回している。

「私が日野あきあよ。貴女が瑞穂さんね」
と車椅子の前にかがみこんで瑞穂の手を握る。

「まあ、想像した通りだね。いい香り、これラベンダーですね。そ
れに温かい手」

「ありがとう、瑞穂さん。あなたは二つ年上だから私のお姉さんよ」

「えっ、日野あきあさんは16歳って聞いたけど本当だったの？」

「ええそうよ」

「それにしても私よりも年上って感じがするけど」

「そうよね、いたらぬ姉達を持って私、苦労しているもん」

ポコっという音。目のみえぬ瑞穂さえ顔をしかめたほど痛そうな音
だった。

「痛あ~~~~い~~~~！薫姉さん・・・酷い」

「誰が至らぬ姉なのよ」

手をふりながらいう。

「それにこの石頭！・・・手が腫れてきちゃったじゃないの」

「はいはい、姉妹漫才はそこまで。さあ撮影開始だよ」

とニヤニヤしながら小野監督がいった。周囲の皆がこれが楽しみ・・・という顔で笑っている。
普段のあきあから見られぬ姉達との会話を『笑いの会話』としてひそかに収集して売り出そうとよからぬ企みをしている連中もいたのだ。

眼の見えぬ瑞穂には判らないだろう、あきあの秘術で結界を張り帝の御所を出現させて舞と横笛の撮影をするのだ。

しかし、眼の見えぬ瑞穂には特別な感覚がある。

御所の出現時に空気が変わったのを敏感に察知していた。

「何か変」

横にいた薫、順子、律子、杏奈、ひづるにしか聞こえない小さな声。

「どうしたの？」

と薫が聞く。

「こここの空気が変わったの。何だか清々しい空気がする」

といったところに笛の音が・・・その笛の音したら・・・なんと
いう音色だろう。

初めて聞く薫、順子、ひづるというこの横笛という音曲に精通して
いないものにも

ただことではない上手さを感じ取れた。

「凄い！凄すぎる。・・・この笛、あきあさんが吹いているんです
ね」

見えない眼から涙を溢れさせ薫のほうをじっとみている。

笛の音が消えていった。スタジオ内に静寂が訪れる。

「カット」

という声は余りの見事さに遅れてしまった。

「なんて見事な・・・」

この映画の音楽を担当する音楽家がつばやいている。

「私の家に伝わる伝説にちょうどこの横笛というものが出てくるんです」

その横笛に感動している瑞穂が話す。

「その横笛『緋龍丸』を吹いて怨霊や鬼を退治する安倍清明様の弟子に

安倍あきあ様という方・・・ちょうど日野あきあさんと同じ名前ですが

その方が吹く笛は悪霊、怨霊を消し去ってしまったそうです。

その方は突然、安倍清明様のところからいなくなってしまうたのです。

あきあ様は龍に乗って天に帰ったとか、

安倍清明様の命令で唐天竺のほうにいつてしまわれたとかいうお話が残っています」

という話に薫達が顔を合わせる。

そして、ポツンと瑞穂にいう。

「その話の続きを教えてくださいませんか」

「えっ？」

「安倍あきあつて人がどこへ行ったかということよ」

「ええ、ご存知なんですか？」

「これはいずれ瑞穂ちゃんが知ることになるから、早いか遅いかだけだから教えておいてあげる」

「安倍あきあという人は、実は男の子と女の子の二つの体を持っていて、

時空を越えて安倍清明様の元で10年間の修行をし

そして現代に戻ってきて今、『妖・平安京』という映画に出ているわ。

映画の中では術で平安京を再現し、本物の鬼や龍と闘い

一条戻り橋では幽霊となった舞妓さんの体を捜すために
比叡山の結界を破った結果、その身体を探し出し犯人を捕まえたの。

その舞妓さんは安倍晴明様に連れられて天に上っていったわ」

薫の話を呆然と聞いている。話がすぐに理解できなかったが

その話の奇想天外さに

「え〜」

と声をあげている。

「嘘でしょ」

「いいえ、これはこの映画の関係者は全て知っていることよ」

「それに、今でもあきあの眼を使って晴明様はこの世を見守っているの」

「では・・・本当？」

と律子やひづるや杏奈と順子の顔を見回す。

無論目が見えないので直接は見えないがその気配でわかるのだ。

全員が頷いているのを悟ると、思わず口を両手で押さえてしまう。

そこへ撮影の終わったあきあが戻ってきた。

汗ひとつかいていないが、匂うラベンダーの香りが一段と強く漂っている。

「あきあさん、一つ聞いてもよろしいですか？」

「なあに、瑞穂さん」

「今の笛は？」

「ああこれ？これはねえ『緋龍丸』といって昔無くしてしまったの。

でも昨日思わぬところから私の手元に帰ってきたのよ。

久しぶりにこの曲吹いたからうまくいったかどうか」

「いいえ、すごく・・・すごく素敵でした」

「ありがとう」

「あの、あきあさん・・・」

「なあに」

「今あきあさんが吹いていた場所に連れて行ってほしいの」

「どうして？」

「なんだかそうつい気分になってしまつて」

「いいわよ・・・」

「といって車椅子を押していく。」

しばらくの間、撮影は休憩だから皆スタッフルームに戻っている。

残っているのはあきあ達、早瀬の女達だ。

車椅子は白砂利の上を押されて御所の帝が座っていた場所近くにきた。

「やはり・・・」

「どうしたの？」

「これ薫さんのいわれた通りですね」

「ん？」

「私も土御門に生まれた女です。」

目が見えなくてもこの場所が術でつくられているかどうかはわかり
ます」

「薫姉さん!」

「だって、隠しておけないでしょ。話すのが早いか遅いかだけで・・・」

「いいわ、そのとおりよ。ここは私が術で呼び出した場所なのよ」

「安倍あきあというのは？」

「わたしの名前なの」

「家にあなたのお話が伝説として伝わってきているのです」

「ええ〜・・・私が？」

と伝説となっているあきあの話の話を聞かせた。

「そうかあ、あの時突然戻ってきたから、そんな話になっていたのね」

「でも年が・・・」

「そうねえ。私が平安時代に行ったときは25歳だったけど、修行途中で16歳に若返ってしまったの」

「若返ってしまったのですか？」

「そうよ」

「では今度は私が聞く番よ」

「なんででしょうか？」

「聞きにくいけど、瑞穂さんがそんな身体になった病気の原因ってわかってるの？」

「いいえ、私が中学に入学したその日に急にめまいを覚えて倒れてしまったんです。」

それから三日三晩高熱でうなされ、その次の日には平熱に戻ったんですけれど

下半身が麻痺し、目も見えなくなっていました」

「変ね」

「どうして変なの」

と薫が聞く。

「瑞穂さんって帝の女御様にかけられた呪いと同じ症状なの。」

そのときは、呪いをかけた術者を倒して呪いを解いたのだけ・・・

「

「その術者って？」

「蘆屋道満っていうの」

「あっその人知ってる。小説に出てたけれど清明様を倒そうとした悪い陰陽師・・・」

「良く知ってるわね」

「だって清明のおじさんの事をもっと知りたいと思って勉強してるの」

「律師！」

「わかつてるわよ。でもこれは歴史の勉強よ」

「薫姉さん、澪姉さんに一応診察してもらいましょ」

「いいわ、私が連絡しておくわ。あきあはもう撮影でしょ」

「ええ、こんどは舞なの」

撮影は順調に始まり……終了した。

舞もあきあの独断場で振り付けの師匠が口を出す隙などない。

迎えにきた澪は全員が乗れるワゴンタイプのレンタカーを借りていた。

井上貞子の家にはすでに高弟たちが迎えにでており、

驚いたことにママの真理、操、理沙、そして松島奈美の顔がのぞいている。

久しぶりの再開だった。

広い稽古場が全員の顔合わせの場所となった。

今別室で瑞穂を澪が急遽呼び寄せた看護師二人と診察している。

祖母とママ達はすでに挨拶が終わっているらしく、祖母がニコニコしているのがとてもうれしい。

あきあの式神、玉藻、葛葉、紅葉も呼び出し、ママ達に引き合わせたおいた。

あきあが主人だが、その縁に続くこの場所に集まった女達、この3人も高弟たちに混じって一生懸命に世話をしている。

操は日本料理の料理人を連れてきており、すでにお昼にその腕をみせているらしく

「とてもおいしかった」

「久しぶりに本当の料理を食べた気がします」

と高弟たちから声が聞かれている。

驚いたことにこの家の裏の空き地を早瀬一族によってすでに買い取られ

この家の女性達の診療施設等をつくる予定だと聞いた。

表面上は普通の家としてつくられるが地下3階の近代的な施設になるのだ。

そこに瑞穂の診察を終えた漣が二人の看護師が押す車椅子に乗った瑞穂を連れて現れた。

「お婆ちやま、この人が土御門家の現在の当主、土御門瑞穂さんです」

「おお、あの京都でも名家の、でもその姿は……」

「漣姉さん、いかがでしたか？」

「うん、この人の身体は現在の医療の上から診察してどこも異常なし、

目も見えないはずはないし、下半身も動かないはずはないの。

でもおかしいのは何かが神経組織を阻害しているのよ。こんなのいままで見たことないわ」

「やはり……」

「やはりってどういうことよ」

「瑞穂さん。呪いをかけられているわ」

「呪い!!」

「ええ、私が帝の女御様を診たときと同じなの」

「悪いのは蘆屋道満だったのでしょ」

「ええそうよ。あの男は清明様の秘術『泰山府君の祭り』を盗もうとしていた。

だからわたしはあの男と対決した。そして確かに地獄へおちていったわ。

だから身体を炎で焼き残った骨と頭蓋骨を古井戸に埋めたことは、

私しか知らないはずなのよ……」

「いいえ、家の古文書に蘆屋道満が埋められた場所を示す地図があったのを」

幼いときに見つけた記憶があります。

道満が焼かれたとき清明様の弟子があきあ様を心配して様子をうかがっていたそうです。

そして心覚えにその場所を書いた図面を残していました」

「しまった。あの時の人の気配が兄弟子広遠のものだったのか。

いそいで女御様の様子をとあせっていたのが悪かったわ」

「でも、その道満は死んでいるのでしょ」
ひづるが聞く。

「ええ、恐ろしい術者だった道満は死んでいるわ。

でも術者が志を曲げて道満の頭蓋骨を持てば力が強大になり第二の道満になる可能性があるの」

「じゃあ、それって」

何か恐ろしい予感がしてくる。

「こうなれば、その頭蓋骨の行方ね」

「あきあはどこに埋めたかわかっているのね」

「ええ、はっきりとね」

「それって……」

地図を広げてあきあが指さしたところは………。

「ここは土御門家の敷地の中……」

「ねえ、瑞穂さん。お宅に古井戸がありますか？」

「ええ……。でも……」

「でも?……」

「はい、でもあの古井戸に近づくとびに何だか嫌な感じになるんで

す

「これは何かありそうね」

と沙希は思案顔になる。

「少し考えさせて……。あつ、律姉。静姉は？」

「今日は京都府警と例のモバイルの試作品の実験なんだつて。」

それに昨日の発信装置も京や泉に見せられたらしく、その打ち合わせもかねて。

でも、もう戻ってくると思うわ」

「あつちゃあ、あれもう京都府警が知っちゃったの？」

「だって京と泉よ、もう自慢たらたらよ」

「あれだけ、黙っててといたのに」

「無理よ無理！あの子達にとって自慢の妹ですもの。あなたの手になるものは

全て相手の鼻先にぶら下げてしまうのよ」

「もう、何もつくってやらないから」

「それも無理、沙希あんたは姉たちに頼まれると全然断ろうとしないもの」

「ふふふ……」

深刻な話題の中に姉妹たちの明るい話題は周囲をほっとさせ笑いを誘う。

「小沙希ちゃん、気いつけなあかん。」

いろんな事件があんたを呼ぶのや。それがうち心配で心配で……」

「大丈夫、お婆ちゃま。今度の事件かて半分とけてます。あともうちよつとなんや。」

それにおばあちゃまが心配するようなこと、うちしまへん」

祖母が一番好きなのは、日野あきあでもなく早瀬沙希でもなく無論

安倍あきあでもない。

あの舞妓姿の小沙希であった。だから小沙希と呼ぶ。

高弟達も小沙希のあきあが一番好きであった。

でも事件が小沙希を放っておかないらしく次から次へとふりかぶってきている。

だからこうして話を聞いているだけでも心配で心配で……。

静香が帰ってきたのはそれからしばらくたったところで皆に今日の結果を報告する。

「あのモバイルに発信機を1つつけることにしたわ。

でも沙希ちゃん、もう次から次へ新しい発明しちゃうものだから、私もう右往左往よ」

「いえ、あれは菊奴さんの壊れたゲーム機を見ててふっと思いついただけだから」

「思いついただけであんなものつくちゃうの？」

あれを見て科学警察の偉い技官さんはもう驚いていたわよ。これは21世紀最大の発明になるって」

「おおげさよ」

「いいえ、あれ一つで世界中の飛行機の様子がつかめるしそれにきつとNASAが抛っておかないっていったわ。

宇宙開発や探査衛星につければ宇宙のことがもっと解明されるって……」

「凄い！凄い！……沙希姉さんて凄すぎる」

ひびるが飛び上がっていると

「ほんにほんに」

と祖母もにこにこ顔だ。

そんな凄い発明をこんな少女がやりとげる。

まだ顔を知らない瑞穂にとって凄い神秘に思われるのだ。

「そんなことより……」
と自分のやったことはもう頭になく静香にお願いをする。

「今から『時追い』をするから律姉と共に私のそばをはなれないでほしいの」

というのだ。

『時追い？』

と聞くと魂を時とともにさかのぼらせ、目的のものを現代まで監視するという術なのだそうだ。

凄いエネルギーを使うからブレスレットを持っている静香とアंकレットを持っている律子に

そばにいてもらってその宝石のエネルギーで力のカバーをしたいということだった。

もし、途中でエネルギーがなくなったら時間軸から離れ『時の放浪者』になるという。

無論皆強硬に反対した。

「いやや、そんなのいやどす」

祖母の反対は強烈だった。

でもあきあは順々に皆を説得していく。自分しかやれないのだ。みんなしぶしぶと頷いたが、澪がいった。

「では、こうしよう。私が沙希ちゃんの状態を監視するわ。危ないと思ったら呼び戻すから……」

これは皆賛成した。今度はあきあがしぶしぶ頷く番だ。

庭に用意された一角にしめ縄を張った四角の空間、その中に横になった

あきあ、あきあを見守る澪、エネルギーの宝玉の持ち主静香と律子そして式神の3人がこの結界の中にいた。

3人の式神は以前の十二単で術を促す祝詞を唱えるのだ。失敗はゆるされない。

「あるじ殿、よろしいでしょうか」

頷くあきあに祝詞が開始された。

横になって印を結び、

「アビラ・ウンケン・ソワカ」

と3回唱える。

すると、徐々にあきあの身体が浮き上がってきた。

3人の祝詞が続く、結界外の薪が消えないよう高弟たちが見守っている。

稽古場から見守る祖母。その手にはママの真理の手がしっかりと握られていた。

目が見えない瑞穂は車椅子で座りその手を握るのはすっかり仲良くなったひづるだった。

みんなの見守る中、あきあの魂は時の流れに逆らって、昭和・・・

大正・・・明治

と時代をさかのぼっていく。

魂を跳ね飛ばすような時の抵抗に合い、スピードが弱くなっていく。

江戸・・・安土桃山・・・ときどき『時の放浪者』たちがあきあにすがろうとする

しかし、そのつどその者達は土に返っていった。

光があきあに近づいてくる。温かいその光には思いがけなく師の安倍晴明がいた。

「さあ、あきあよ。もうすぐだ」

師の励ましに徐々にスピードがあがり・・・そして、おちていった。

「ここです」

あきあの声に頷く晴明。

炎に焼かれる蘆屋道満と剣に身をゆだねるあきあ、

「おのれおのれ・・・この仇は地獄の炎に焼かれても忘れはしないぞ。」

安倍晴明、安倍あきあよ・・・」

といて全てが焼かれ骨となって体がくづれていった。

古井戸にその骨を捨てるあきあ、それを見ていた兄弟子の広遠・・・

そして、目的の監視がはじまった。

はや回しのように時が進む。晴明を案内する広遠、

そして安倍家本流として土御門家の設立、古井戸に結界を張った広遠の死、

「広遠は道満を憎んでいたのだ。兄を殺され、妻を奪われた仇だったのだ。」

だからあの古井戸のある土地に土御門を安倍の本流としてつくらせた。

結界を張ったのも地獄からよみがえることを信じた結果だ。

だが広遠の結界はもろい。時代と共に消え去ったとみえる」

「晴明様、道満は道満はどうしたのでしょうか」

「やつは地獄から蘇っている。頭蓋骨を手にした奴に乗り移ってな」

「でもどうして道満は晴明様を目の仇にするのですか？」

「道満はわしのもとへやってきたのはつきりとした目的をもってのことだった。」

奴の術者としての実力は高い。だがその心持は感心せんかった。

だから道満の目的である『泰山府君の祭り』を奴に教えることはせなんだ。

それでわしから術を奪おうとして呪いなど小癩な卑怯な手を使ってきたのだ。

だが今の道満、あきあにとっても強敵だぞ」

「はい、わかつております。あの瑞穂にかけた呪いの強烈さ、以前の道満ではありません」

「そうか、そこまでわかっているのなら何もいわん。重々気をつけるのだぞ」

といって晴明の光は去っていった。

時代がゆっくりと下っていく。井戸に変化はない。

土御門家ゆかりの小さな子供達が時々覗きに来ては母親に叱られては戻っていく。

時代は昭和まで帰ってきた。太平洋戦争が起こっていたが戦火はここまでこない。

平成の世に移り変わった。……そして

ある夜、古井戸のそばに二つの黒い影……

一つは投げ入れた縄梯子から古井戸に入っていく。

もう一つは古井戸からの土をせっせと運び出す。

あくる夜も……あくる夜も……二つの影を邪魔するものはいない。

そしてついに、白い髑髏が古井戸から出てきた。

井戸の外の影は髑髏をもち、四角い箱に入れている。

そこを素早く井戸から這い出た黒い影が白く光る短刀で黒い影の背中を刺し貫いた。

何度も何度も刺し貫く。絶命したのを確かめその死体を古井戸に投げ込む。

そして古井戸に入りなにやら音をさせていたが

古井戸から出てきた影は運び出していた土をもう一度古井戸に投げ入れる。

古井戸の中を覗きこんでいた影の素顔を月明かりが照らし出す。

醜悪に歪んだその顔……。

「やはり」

とあきあは自分の推理の正しさに頷いたが、犯人の醜悪さに吐き気を覚えた。

その後、犯人は注射液で当主の善造を薬殺し、後を継いだ善次郎を車の運転中、

術で身体を自由を奪って、谷そこへ転落させて殺したのだ。

そして、床下に呪いの札を埋めて土御門家の最後の後継者である瑞穂の身体を不自由にしたのだ。

目的を達したあきあは元の時代に帰っていく。

それとともに浮かび上がっていたあきあの身体が緩やかに降りていく。

ひかれた布団のうえで『パチツ』と目覚めたあきあ。

でも犯人の醜悪さを思い出し思わず吐き気がこみ上げてきた。

「どうしたの？」

溼の言葉に吐き気を飲み込み思わず涙ぐむ。

「どうしたのよ？」

「いえ、犯人の醜悪さを思い出したら気分が悪くなったの」という。

「犯人がわかったの？」

冷たいタオルで頭を冷やされ、ようやく気分が楽になったあきあは「ええ、私が推理した通りだったわ。本人の悪心もあるけど完全に道満に乗り移られているのよ」

「誰だったの？」

「いえ、今は言えないわ」

「どうして？」

「道満に悟られてしまう恐れがあるから」

「そんなあ」

「あの男は油断がならないわ。術で人をあやつるなんて朝飯前よ」

「怖いひとどすなあ」

「ええ、だからお婆ちゃま。早く道満を再び地獄に返す必要があるのよ」

「どうするの？」

「罫體を破壊するの。そうすることによって道満の力は消滅するわ。」

でも乗り移られている人間は………」

「どうなってるの？」

「もう駄目かもしれない。あの男は人の魂、エネルギーを食い物にするから。」

だから慎重にも慎重を重ねねば………作戦かあ………」

とって考え込んでしまった。

こうなったら沙希は外から何を言っても聞こえない。

それを知っている静香と律子は縁側に座り込んでいる沙希を残して皆奥へと引つ込むよう指示をした。

残っているのは式の3人、彼女達は主人の考えを邪魔しないように気配を消して待っていた。

「小沙希ちゃんて本当に頭のいい子どすなあ」

としみじみ祖母になった井上貞子がいう。

「ええ、それに優しくて思いやりがあって、私達の宝ですわ」

とママの真理。

「ええ、ええ。うち、早く逝ってもいいなんて思っていたんどっせ」

「何を言われるんですか、貴女は前世とはいえ私達の親、

今度沙希ちゃんの映画を取り終わったら早瀬一族の隠れ里にきてい
ただきますわ」

「ほんまどすか？」

「ええ、その時は皆さん一緒にね」

と高弟達を見回している。

皆顔を見回して嬉しそうだ。

その時、緩やかだが力強い笛の音が聞こえてきた。聞いていると心
が穏やかになる。

「あれが……」

初めて聞く笛の音。聞いてはいたがこれほどのものだとは思いまし
なかつた。

笛を吹く沙希の姿が浮かんでくる。

琴の名手として隠れた存在だったがもうたまらなくなってきた。

ふとみると、立てかけられた琴が師匠のうしろに……

「すいません……あれを……」

弾いてもよろしいですかともいえず師匠の顔を見る。

驚いてはいたようだが、興味が湧いたのか『コクン』とつなずく。

いそいで琴を用意すると、いつも肌身はなさずもっている形見の琴
爪。

目を閉じ、じっと耳をすます。

そして笛の音に合い和するように弾き出した。

山のようなうねりも、谷川のせせらぎのような旋律にも笛の音との
濁りがない

笛の音がゆっくりと近づいてくる。

沙希は琴の音の奏者が真理だと知って一瞬驚いたが乱れはない。そして、目を閉じ再び音曲の世界に入っていく。皆……特に井上貞子はこの二人の名手に感銘を受けていた。いわば両者とも名もない奏者……したが今の世ではこれほどの技量の持ち主はいない。

二人の合奏はおわった。静かな余韻は風の音。

真理は琴の前で頭をさげ

「つたない演奏でお耳を汚しました」という。

「何をいわはるんどすか。今日はいいものを聞かせてもらいました。寿命が数年延びた気がします。真理はん、お願いどす。ときどきここでお琴を聞かせておくれやす。」

小沙希ちゃんとの演奏が一番だけど、

あんたはんのお琴だけでもここにいる弟子達に教えてくれはらへん？」

「はい私でよければ……でも私の琴でいいんですか？」

「あんたは名人どす。こないな人、今まで世にうづもれていたとは驚きどす」

人間国宝に感銘を与えた二人だったが、土御門家の出来事には沙希はまだ迷いがあった。

この事実を瑞穂に知らせるかどうかを……だがこのまま事実には蓋はできない。

沙希は祖母と真理に事実を知らせ了解をとった。

驚愕の事実にいたまじげな祖母の顔、真理は静かに車椅子の横で瑞穂の手を握った。

沙希は『時追い』での見知った出来事をみんなに淡々と話し出した。

その淡々とした話にどれだけの事実が隠されていたのか。

「いや〜、嘘でしょ！……」

瑞穂の叫び声だけがこの家に響きわたる。

痛ましそうな女達。

「もうこれだけの事実はあなたに隠してはおけないの。

つらいかも知れないけれど、瑞穂さんあなたは自分の力で乗り越えなければならぬ。

誰も手助けはしてくれないわ。冷たいと思うかもしれないけれど、

これはあなたの為なのよ。

これからの土御門家、あなたの手でもりかえしていかねければならぬの。

『時追い』をしているとき、

清明様が現れて私に土御門家のことよろしく頼むって言われて天に帰っていったわ。

でも土御門家は私では駄目なのあなたしかいないのよ。今は私、頑張れとしか言えない」

突き放すようだが、その中に含まれている沙希の温かさ。

年配の祖母や真理は沙希の心がびんびん響いてくるのだが、

この若い瑞穂にはどうなのだろうか？

落ち着かせるため静香と律子によって瑞穂は別室に運ばれていった。

静香の『まかせて』という胸をポンと叩いたジェスチャーに少し肩

の荷をおろした沙希……

いや安倍あきあ。

「沙希ちゃん、これからどうするの？」

「ええ、私。これから比叡山の結界を張ってくるわ」

「大丈夫なの？」

「大丈夫よ。殺されたりしないでしょうから」

「そんな、危ない冗談はしないで！」

と真理に叱られ、ごめんなさいと謝る。

黒のパンツと黒い長袖のシャツ、暗闇に紛れて走りつづける。

空中の飛行術を駆使して障害物を乗り越えていくあきあ。

あきあの周りには光る小さな玉……式の玉藻、葛葉、紅葉がついてくる。

比叡山は目の前だった。なるほど結界がなくなっているためか邪鬼、怨霊が飛び回っている。

あきあが指示すると喜んで式神は邪鬼たちを消滅させていく……というの言葉がよいが餌として食っているのだ。主人はこうして式神を成長させていく。

比叡山の奥院に進入した。

「誰だ！」

さすが奥院までくると修行僧の格が上になっている。少しの気配でも悟られる。

あきあは闇の中から

「お上人さまにお会いしたい」

「正体もあらわさぬやかに会わせる訳にはいかぬ」

「なるほどいわれるとおり」

といて月明かりの中にでる。

黒い衣服のほっそりとした少女の姿があった。

その周りには3つの光る玉が少女を守るように飛び回っている。

「やや、女か。ここは女人禁制の比叡山奥院、それを知つてのことか」

「もとより」

「それにその光る玉はなんじゃ」

「これは私の式神」

「何？式神だと？妖しい奴、みんな出会え……」

修行僧が木々の間から飛び出してくる。

女だという遠慮もない。鋭い太刀筋さすがのあきあも簡単には倒せない。

「さすが、比叡山の武者僧」

「なに！それを知っているお前は……」

四方からとびかかる僧をあしらいながら……なるべく怪我をあたえないように当身を使っていた。

「昨日、結界を破つたものといえば……」

「おおお、お前なのか。この比叡の結界を破つたお前が一体なんの用だ」

「土御門家……」

「えっ？」

「土御門家を助けたい」

「なにを？」

「そのために参上した。結界も張りなおそう。私が土御門家を助けるために協力をお願いしたい」

といて持っていた棒を放り出し、その場に座ってしまった。

「こしゃくな」

といて打ち倒そうとする武者僧、あきあは静かに目を閉じたままだ。

「待て！天鏡！」

建物の扉が開いた。

「お前は覚悟を決めたそのものを打とうとするのか」

「すいませぬ。結界を破ったこのものが憎うございました」

「そもそも昨日の警察からの申し出を断ったお前のせいではないのか」

「はい、申し訳ございません」

「その女、一体お前は何者じゃ、この比叡山の結界を簡単に破るその力……」

いぶかる上人に正直に答える。

「はい、安倍晴明様に直接の修行をつけ安倍あきあという名前をもらったものです」

「なにをたわけたことを」

と再び天鏡がとなりつける。

「まあよい。その安倍晴明の弟子がこの比叡山の結界を張りなおすというのか」

「はい、ついこの間は京の結界を張りなおしたところです
振り上げる棒を押さえる上人。」

「では、結界を張ってもらおうか」

「はい、その前に土御門家の弟子衆を集めてもらいたい」

「土御門の手をかりるつもりか」

「いいえ、結界は私一人で充分でございます。」

弟子衆を呼ぶのはその後の話をしやすくするため……」

上人は天鏡に命じ土御門家の弟子達を呼び集めた。

集まった弟子達は女人禁制のこの場に少女の姿をみて吃驚している。

あきあは上人に

「一言いっておきますが女人禁制のこの場に侵入したことをおわび

しておきます。

しかしながら私は女性でもあり男性でもあるのです。

でもこれは女人禁制の場に入った私の気休めの言葉なのでしょうか」

と喋ってニツコリ笑った。

「おおお・・・」

と集まった皆に驚きの声。

上人の驚きははその笑顔の見事さにだったのだが。

「では、始めます」

と喋ってから玉藻、葛葉、紅葉と声をかける。

そのつど姿をあらわす十二単の女達。

驚きの声はもうでない。少女の強力な力がこの一端でもわかる。

少女の後ろにかしづく3人の式神、

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これを四神相應の陣
という」

祝詞をあげて

「ええい！」

と地面を手刀で刺し貫く。

すると空間が揺れてサーっとその揺れがひろがっていった。

「おおお・・・」

土御門家の男達、比叡山の修行僧、武者僧が果たせなかった結界を
この少女が一瞬にしてこの張ってしまったこの事実。

天鏡はその強大な力に屈服してしまった。

「申し訳なかった」

その言葉であきあはこの男の純真さに好意をもった。

「お上人さま、結界を張ったとはいえこの中はまだ邪鬼、怨霊の類

は残っていきましょう」
と、いつて名器『緋龍丸』をとりだし吹きはじめた。
比叡山の山並みに流れる笛の調べ、その清涼とした音色が邪鬼、怨
霊を消滅させていく。

「見事な……」

笛の音が終わった。

比叡山に流れる清々しい風、心の汚れが洗い流されいく。

「上人さま、この方は……」

「菩薩様じゃ」

月明かりがその顔に神々しい姿を二重つつしのように見せていた。

思わず拝む天鏡と上人……。

はっと気づき

「止めてください、お上人さま」

と手をとる。

「では、今土御門家が危機に瀕している事実をお話します」

奥の院の別室、集められた弟子達と武者僧、そして上人。

あきあは話し出した。

蘆屋道満と師の安倍晴明の確執、道満が狙っていた『泰山府君の祭
り』の秘術、

悪行をつくした結果のあきあとの対決。火が道満の身体を焼き尽く
した。

道満の白い髑髏を古井戸に投げ捨てたあきあ、

事実を見た兄弟子が残した土御門家に伝わる古文書。

祖父善造の死、長男の行方不明、次男の善次郎の事故死、

そして最後の後継者の瑞穂の身体の問題。

「以上が土御門家が直面している危機の前兆なんです。」

私は陰陽道の秘術『時追い』で平安時代に戻って古井戸を監視して
いました。

そして、犯人を知りました」

「誰なんですか？犯人は」

「いえ、今は知らないほうがいいでしょう。

知ったら、あなた達は前後の見境なく犯人と対峙するでしょう。

犯人は恐ろしい蘆屋道満です。

犯人は道満の力を手に入れようとして逆に道満に身体を乗っ取られ
たのです」

「どうしたらいいのですか？」

「道満の術を破るしか仕方がないのです。そこで皆さんにお願いが
あります。

道満を倒す手段として瑞穂さんにかけてくれた呪いを解く手段として

……」

「えっ、呪いですと？」

「はい、瑞穂さんは呪いによって身体が不自由になっているのです」

「ちくしょう！」

「だから皆さんにこの犯人との対決の舞台を作ってほしいのです」
ということであきあが授けた作戦が決行される。

その日の土御門家、電話に出た執事の林六右衛門。

「はい、えっ皆さん帰ってこられる？そうですか。ではお嬢さんに
連絡します。

ええ、お嬢さんは今お知り合いのところについておりますが。

いえ、連絡と言われましても……。はい、明日には戻られる
とおもいます。

ええ、修業道場をあの古井戸のあたりに？……。はい？……。明

曰から？

急にされるんですねえ、比叡山のお上人様がこられての法要に間に合わせる？ わかりました」

首を振りながら電話を切る。急な話に戸惑いがあらわれているのだ。

そして、月が雲に隠れ闇が訪れるころ、

ひたひたと足音がして影が移動してくる。古井戸の前でぴたっと立ち止まった。

肩にかついだ縄梯子を古井戸に投げ込む。

縄梯子に足をかけ古井戸に降りようとした瞬間、ライトが一斉にその影をうつしだした。

腕を上げて必死に顔を隠そうとしながらも、逃げ場所を捜している。

そして古井戸の中に逃げ場所を求め飛び込もうとした瞬間、

「私たちの仕掛けた罠にかかりましたね、修行道場を建てるからという電話に

古井戸にあるものを隠しておいたおまえは、古井戸を攫われては見つかってしまうと

それをどこかに移動させようと思いましたね」

樹の上の張り出た枝に腰掛け話しをするのは、あきあだった。

黒い衣装に顔には覆面、そして般若面をかぶっているのだ。

これはこの瞬間を映画のスタッフとテレビクルーがカメラに収めているため

あくまでも正体を隠そうとする苦肉の策だった。

ライトは撮影用の照明で昼間のうちにわからぬようセッティングしておいたものだ。

「お……おまえは誰だ！」

「私か……、私はおまえを地獄へ送り返す使者、そして、この京都の守護をまかされているもの……」

『般若童子』とでも覚えていておいてもらおうかと男の前に飛び降りた。

「私が何をした」

「おや？……この場に及んでそう聞き直りましたか。

では、私がおまえのやった犯行の全てを説明してあげましょう。

お前はある目的でこの土御門家に入り込み、一步一步だが着実にその目的を達成していこうとした。

その目的を達成するためあるものを手にする必要があった

おまえは当時、当主であった善造氏の長男である善太郎氏を土御門家の古文書を見せ

あるものを探し出そうと持ちかけた。安倍晴明の再来といわれている善太郎氏は

陰陽道を深く追求するあまり、おまえの悪辣な罠にかかってしまった。

つまり善太郎氏は行方不明などではなくおまえの手にかかりその古井戸の中に埋められているのだ」

このあきあの声は遠く離れた場所に設置してあるテレビモニターに映しだされ、

テレビクルーと見ていた土御門家の弟子達は思いもかけないあきあの推理に

犯人に対する怒りで飛び出そうとしていた。

止めたのは比叡山のお上人と来ていた武者僧の天鏡だった。

天鏡はすっかりあきあに惚れこんであり、あきあに身を守りたい為にきていたのだ。

「たとえば、そんな死体が出てきたとしてもワシがやったという証拠があるのか、

証拠があるのなら出してみろ」

「おや、そのいなおりがおまえがやった証拠……」

「そんなもの……」

「そうよ、そんなもの証拠にはならないわね。

でも、おまえは忘れている。善太郎氏の遺体に残されているあるものを……」

男は考えていたようだ、いきなり『はっ』としてあきあの般若面をみた。

「思い出したようだね。そうおまえがめったづきにした短刀の柄、おまえが古井戸から取り出してきたあるものを大切に木の箱にしまつ間に

刃に巻きついてしまった善太郎氏の肉が短刀をぬけなくした。

つまり善太郎氏が命を引き換えにした犯人を告発する品！

そう、べつたりとおまえの指紋がついた短刀がね……」

「ちくしょう！……」

「だが、お前には計算違いがあった。土御門家を乗っ取るつもりが土御門家を根絶やしにする行動に出ってしまった。

善造氏の薬殺、そして善次郎氏を悪意の術で事故死させた。

いづれもおまえを操った”あのもの”がさせたもの。

そして、今度は最後の土御門家の後継者、土御門瑞穂を呪い殺そうとした。

だが、まだ”あのもの”の力が弱く、目と下半身の自由を奪うだけだったが、

いづれ殺してしまうつもりだったのだらう」

そして、男を指差し

「そうですね。土御門家の執事、林六右得門！」

「え〜」

弟子達から驚きの声もれる。照明のせいではっきりと顔がわからなかったのだ。

一斉照明が消えて、あきあき般若童子と執事の林にスポットライトがあたる。

「執事、林六右衛門こと、善造氏の双子の兄土御門善一、顔を変えて土御門家に入り込みその強大な力を手にいれ、再び顔を戻して

善造氏と入れ替わって土御門家を我が物にしようとした。

これ明白である。だが、おまえはもう”あのもの”に支配され、その意識一片たりとも、残っていない。

出て来い！・・・地獄から蘇りし蘆屋道満！！」

その言葉で男の肩が上下に揺れ始めた。

「クツクツクツ・・・」

笑っているようだ。

「ふふふ・・・良く見破ったな・・・」

男の顔が崩れ始め、その下から総髪（おんがみ）の鬼の顔が現れた。

「どうやら、地獄で変ってしまったようだな」

「そうだ！・・・地獄の業火（ごう）な焼かれ、針で全身を貫かれその痛み永遠（とこ）に続く無限地獄・・・」

だが、安倍晴明への復讐のため、耐えてきたのだ」

「哀れな・・・」

「哀れだと？・・・あともう一人・・・」

あの娘さえ呪い殺すことができれば、我目的達成できたというのに・・・」

「それだけではあるまい・・・そのあと、恐ろしいことを考えてい

たのである。」

「よくわかったな。……ワシは闇の入り口を開け鬼や怨霊をこの世界に解き放つつもりだ。」

この世を地獄にかえてやる……
と云って般若童子にかかつていった。どこに隠していたのか太い杖で……。

般若童子は飛び上がり空中で回転して井戸の淵に立った。

その手には黒い鉄扇をもっている。これで相手をしようというのが道満は杖を途中から二つに分けるとキラリと光る刃があらわれた。仕込み杖をもつ道満、般若童子を追いかけながら呪文を唱える。

どこからきたのかこうもりの大群が般若童子に襲い掛かる。

こうもりに身体の自由を奪われて倒れる般若童子、

「ふふふ……どうじゃ、わしの術もこうして復活してきた

おまえのようなものに負けるはずがない」

「道満、おごりじゃのう。……上には上がいるものと知れ」

つちにかえってしまうこうもり。どこにいったのか般若童子の姿が見えない。

「ははは……こうじゃ、こうじゃ」

と月の中に般若童子の姿、宙に浮いていたのだ。

「今度は私の番じゃ」

というと印を結ぶ。般若の唱える声に呼応したのか

月の中からバツタの大群が道満を襲う。

逃げ惑う道満。しかし、さすが道満。術をかけるとバツタはただの紙にもどってしまう。

今度は体術とばかりに道満も宙をとび般若を襲う。

杖の刃と鉄扇がぶつかる outcomes 赤い火花……

だが道満は、じりじりと般若を追い詰めていく。

さがる般若が石につまづいたのか倒れこみ、道満の杖が般若に打ちかかった。

「あっ」

みんなが立ち上がったその時、般若の姿が木に変わっていた。

「ふふふ……変わり身の術じゃ」

「おまえは……こんな術を使う……おまえは……?」

「忘れたか、お前を地獄に追いやったこの私を……」

「なに!……そんなはずは……そんなはずはない!」

「そうかな、道満。お前がこうして蘇ったのだ。」

私が蘇らないというのは、お前の身勝手な考えかたじゃ」

「おまえは安倍……」

と言ったところで

「あるじ殿……あるじ殿……」

と3人の式神が十二単姿で宙をとんでくる。

その手には頭の大きさの木箱が……。

「しまった……」

慌てる道満。いきなり式神たちに襲い掛かろうとする。

しかし、元はといえば安倍清明の式神たち、そんなことには驚かない。

道満にしても本体ではなく、身体が微にわたって自由には動かない。

「玉藻! 葛葉! 紅葉! ……その箱の中の道満の髑髏を破壊せよ」

と言う声に

「はっ」

といて地上に降り立つ。

取り戻そうする道満だったがすでに遅く、

紅葉の手が思いつきり道満の髑髏を敷石に叩きつける。

「ぐえっ」

という叫び声とともに

地上に落下した道満。身体をえびのように反らしながら、顔を押しさえ地上をころげまわっている。

そして……両手をひろげ動かなくなった。

顔が崩れ……肉体が崩れていく……そして服だけで肉体が土に返ってしまった。

立ち尽くす、般若。みんなが駆け寄ってくる。

比叡山のお上人と武者僧たちが経を唱えながら寄ってきた。

「あっ、お上人さま」

といて般若の面と覆面をとって玉藻に渡した。

「恐ろしい男であったのう」

「はい、林執事はとうに道満に肉体を奪われていたと思われます」

「哀れな男よのう」

「はい」

「この髑髏は封印をして比叡山に納めて置こう」

といて武者僧に入っていた木の箱に破壊された髑髏を

一片の残りもなくひろい集めるよう指示をした。

「それにしてもあきあ殿、おぬしはすごい」

という天鏡に

「そんなこと……」

といて照れるあきあ。

「天鏡、おまえももつと修行しなければなあ」

とお上人にいわれて、

「はははは……」

とテレ笑いをしていた。

「あきあくん、一応警察に電話をしておいたけれど」

「小野監督、あとはおまかせします」という。

「そうか、じゃあ早く帰んなさい。警察にはうまいこといっておくから」

「ややこしいことになったら飛鳥叔母様に頼みますから」

「ああ、そうならお願いします。ただ心配なのはこれをこのまま放送できるかどうか」

「でも、信じないでしょう」

「そうだろうなあ。ま、ロケをして本物にぶちあたったとしても言おうか」

ということでは叡山に帰るお上人さまを送ってから、あきあは祖母の家に帰った。

危険だからといって家に待機してもらった女性達は心配でじりじりしていたらしい。

玄関でみんなに抱きつかれ大騒ぎになった。

祖母の部屋に行くとき余程心配していたらしい、涙をうかべながら

「あんた、もうこんなことやめなはれ。うち、もう心配で心配でたまりまへんかった」

こんな思いもう二度といやどす。なあ、約束して……」

「はい、お婆ちやまも心配させるなんて、うちもあほや。」

もうこんなことしまへん。やくそくします。ごめんなさい」

とあやまってようやく安心させた。

「ごめんなさい。私のために……」

「なにいつてんの、みんなうちがやったことだから、あやまんのはあたりまえどす」

と舞妓言葉でいうとはじめてあきあの口から聞いたことなので目を白黒させている。

「そつちや、瑞穂さんにいいはなしどす。玉藻はん、あれを」
「はい」

と行ってわら人形をわたす。
わら人形には両目には1本づつ、下半身にはたくさん針がさされている。

「瑞穂さん、目を閉じていて」
と行ってから、あきあは印を結んで呪文を唱えながら一本づつゆっくりと

針を抜いていく。
全部を抜き終わると、縁側に出て庭に降りわら人形に火をつけた。
ポーツと火がわら人形にかかっていた呪いを消していく。

「瑞穂さん、もう目をあけてもいいわよ」
その声に徐々に・・・だが、恐る恐るといったほうがいかもしれない。

すぐには視力は戻らないのか『ポー』とした目の前の様子が段々とくつきりはつきりとしてくる。

『につ』と笑う一人の少女、黒い衣装をきているがその笑顔が『どきっ』とするほど美しい。

胸が苦しいほどきどきどきしてきた。
急に涙が溢れ出す。目の見える嬉しさか少女への恋しさなのか

「どつしたの？」
と行って庭からとんできた。

この声は日野あきあの声だ。こんな少女だったのか。
恋しさ愛しさがつのつてくる。目が開いたうれしさに比べてもより以上の恋心。

そしてはっと気づく、この人は男の身体をも持つと聞いている。

周りの人の目が気になった。でも私を優しく見ているだけ、あきあを見つめる

その人たちもまた恋をしている。そして『あなたもなのね』といっている。

あきあは神秘の人、そして女性をひきつけ恋をさせる。

あきあが瑞穂に手をだした。

「つかまって！」

という少し強くいわれても、甘く聞こえてくるのが不思議。手を出すと、握ってくれる手の優しさ温かさ……。

「はい、立って！」

従順にしたがってしまふ。

立てる筈がないと日頃は拒否してしまう身体の筋肉も何故か動いているのだ。

「はい歩いて！」

足が片方づつ動いていく。痛みはないが固まってしまっている筋肉が

悲鳴をあげる。だが一步一步と歩幅が広くなる。

「はい、今日はこれまで」

澗先生の声が響く。

「じゃあ、今日は終わり、又明日ね」

その優しさに又涙ぐんでしまふ。

「あきあ、撮影の予定聞いている？」

「ええ、明日は横になっての撮影ばかり」

そうだ、この人はこの京都に撮影に来ているのだ。

撮影が終われば帰ってしまう。急に寂しくなってくる。

さつきからずっと瑞穂を観察していたのが薫だった。

表情がくるくるかわる面白さで観察していたが

「この子も沙希ちゃんを好きになってる」

と思うといじらしくなってきた。

「ねえ、瑞穂ちゃん。あなた土御門の家をどうするの？」

「はい、私家を出ようと思っています。土御門家は陰陽道の名家です。」

でも私にはあきあさんのような力はありません。

私がいなくても土御門家はお弟子さんたちが守り立ててくれます。

かえって私のようなものがないほうが良いかもしれないのです」

「では、瑞穂ちゃんはこれからどうするつもりなの？」

「考えていません。でも身体が不自由だったために学校もいっていませんし

勉強もしていないから……でもこの年で学校へ行くにしても……」

「じゃあ、こうしない？私の付き人をするのよ。そうしたら、

学校へいくよりももっと勉強できるように優秀な家庭教師をつけて

あげる」

そばで聞いていたのが律子。

「薫姉さん、もしかしてその優秀な家庭教師って」

「あら、もしかしなくても律ちゃんしかいないじゃないの」

「だって私には……」

「一人面倒みるのも二人面倒みるのも一緒じゃない」

「もう……薫姉さんは勝手に次々と決めていくんだから……」

「あら、いやなの？」

と睨むと

「嫌じゃないわよ。ふ〜」

とため息をつく。

自分の歩むべき道をこうして人に決められて普通、腹が立つのにこの人たちがこうして決めていってくれると何故か嬉しくなってしまうのだ。

「いいんでしょうか？」

「いいわよ、そのかわり覚えることが多くてよ。

とくにあきあの身の周りは大変、女優一筋じゃあないから普通ではつとまらないわ。いっぱい努力をしなければね」

とあんにあきあの身の回りも見させてあげようという薫の優しさだった。

こうして今日も大変な1日が過ぎていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ、花世さん姉さん！小沙希さん姉さんの映画もうすぐ京都での撮影終るんやて」

「えっ？ほんまどすか？・・・どうして豆奴ちゃんがそこまで知っているんえ」

「うち、ついこの間、簪が壊れてしてもて修理に小間物屋はんにいったとき、

杏奈はんに会ったんどす」

「杏奈はんに？」

「へえ！・・・杏奈はんあの時より着物に興味持たれていろんなもん見に来てはったんえ。そうそう高弟の志保先生も一緒どした」

「じゃあ、豆奴ちゃんは？」

「へえ、お仕事まで時間があつたさかい・・・」

「よかつたなあ……うくん、やつぱりうち、悔しい……」
「そやけど、花世さん姉さん。あんとき……」
「へえ、お母ちゃんと一緒にいるんなお寺さんを回ってきて、お守りいっぱいもらってきたんえ」
「そやつたら花世さん姉さん……」
「へえ、身体が二つ欲しかったです」
「いややわあ、花世さん姉さん」
と叩く真似をする豆奴。

「あつ！……シツ！……」
と急に花世が豆奴に黙るよう促した……。
何がなんやら判らず花世を見る豆奴。

「やつぱりや、この琵琶の音……この声……紫苑ちゃんえ」といって声のする方へ小走りに走りだした。
「あ〜ん……待ってえ……」
と言いながら花世の後を追う豆奴……。

花世の目にちょうど清水さんの境内に上がる階段のそばで見物人が輪になつて見えているのが見えた。

見物人の首と首の間から見ると……

(あつ！……いるいる……)

琵琶を弾きながら謡っている紫苑の姿があつたのだ。

紫苑の前にはセーラー服の少女が一人膝を立てて座っている。

あつかましいと思いなから

「すんまへん、ちよつと通しておくれやす」

と花世と豆奴は見物人に声をかけてから身体を横にして進む。

見物人も相手が二人の舞妓とあつて『おっ』と驚いた顔をしながらも道をあけてくれた。

セーラー服の少女の横に腰を下ろす二人、吃驚する少女だが気にする二人ではない。

紫苑のほうも気にすることなく琵琶を弾き終えた。

「紫苑ちゃん、元気でした？」

「へえ、つつがなく」

「今日は謡詠みやってえへんの？」

「へえ、やれるお方がいまへん」

「じゃあ、リクエストしてもよろしゅおすか？」

「へえ」

「平家物語やっておくれやす」

「平家物語って長おすえ」

「そやから、祇園精舎から・・・塵に同じ。まででよろしおす」

琵琶の音曲と共に、テノールのいい声が流れだした。

『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢の
とし。

たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風
の前の塵に同じ』

なんか物語りの景色が頭の中をよぎっていく。

「ふ・・・」

と思わずため息が出る素晴らしさだった。

紫苑は琵琶を横に立てかけると

「今日はもう琵琶は終わりどす。お三味でなんかひきまひよか」

という目の前に舞妓がいるせいか

「祇園小唄を弾いてくれないか」と見物人から声がかかった。

「へえ」

といて三味線を手に取ると撥で糸を奏でながら糸巻きを絞り込んで

絞り込んでいく。

そして今度は先ほどと違ってもっと高音の澄んだ声で謡だした。

『 つきはおぼろに ひがしやま

かすむよごとの かがりびに

ゆめもいざよう べにざくら

もゆるおもいを ふりそでに

祇園こいしや だらりのおび

よ
』

いつもお座敷で舞っているので聞きなれているとはいえ

この紫苑の声は特別だった。

この紫苑の三味線で舞ってみたい……

いや、あの小沙希ちゃんと紫苑ちゃんの競演が見てみたい……そんな欲がふつふつと湧き上がってくる。

「なあ、紫苑ちゃん。お願いがあるんですけど」

「なんですか？」

「直ぐとは言わへんけど、わてら紫苑ちゃんのお三味で或る舞妓ちゃんの舞を見たおす」

「或る舞妓ちゃんて？」

「へえ、うちらのおっしょはんの井上先生がその舞妓ちゃんの舞に何の文句もつけはらへんほど名人なんです」

「へ〜・・・けんどうち、この祇園界限でいろんな舞妓ちゃんや芸妓はんの噂を聞きますけど、
そんな舞妓ちゃんのこと聞いたことおへんえ」

「そりやそうどす、その舞妓ちゃん本式の舞妓ちゃんと違うんどす」

「えっ？偽者どすか？」

「偽者？・・・違う・・・違う・・・違いますえ。」

その舞妓ちゃん、その気になったたらこの祇園で大看板になられはります。

けんど皆さんそんなことさせまへん。ものすごう大事なお方なんですから。

その舞妓ちゃん、小沙希さん姉さんいわれるんどすけど、

小沙希さん姉さんは京舞の名人やし、横笛も名人なんです。

こんなお方、この日本に・・・いいえ世界中搜したつておへんえ。もし、いるとしたらうちの目の前にいる人だけどす」

「えっ？・・・うち？・・・いえ、いえ、うちはただの謡詠みどす」

「紫苑ちゃん、うちら舞妓いうても、まだまだ素人みたいなもんどす。

けんどそんなうちらの耳にも紫苑ちゃん、あんたの琵琶とお三味はただ事ではおへん。

そしてその声・・・その節回し・・・言っちゃ悪いけど、

うちの芸妓のお姉ちゃんやおっしょはんにも紫苑ちゃんみたいな人おられへん。

そやからうち、見たいんどす。

小沙希さん姉さんと紫苑ちゃんの競演・・・ねえ、お願いどす」

「う〜ん・・・しょうおまへんなあ。けんど、いついつって約束で

きまへんえ。

うち、浮草家業が身についてしまってるさかい……。。
どうも足任せ風任せという暮らしが性に合ったんどすなあ」

「いいんどすえ、約束さえしてしててくれたら。

うち、それだけでこれからの修行がんばれます。

少しでもお二人に近づけるよう修行ができるおもつんどす」

「それやったら、約束もつともつと先に延ばしてもええなあ……」

「いやあ、いけず！……」

そついいながらも、紫苑の爪弾く三味の音にいつ時をたつのも忘れて語り合う。

第一部 第十三話

何か京都に事件があった日は太秦の撮影所にマスコミが多くあつま
る。

そんなことが恒例になりそうだ。

「またあ？今日はどうしたのですか？」

「ええ、朝の新聞とテレビは見ました？」

「いいえ、それどころではなかったの。なにがあったのですか？」

「『般若童子』のことですよ」

「『般若童子』？なによそれ！」

「本当に知らないんですか？」

「本当に知らないわ！」

「今朝、放映されて大評判になっているんですよ」

「そのテレビと関連の新聞社がまたこれ第一面に『京都の守護者般
若童子』

ってデカデカとトップニュースで載せていまして」

「全く寝耳に水とはこのことなんです」

「つまり『トップを抜かれた』ってこと？」

「いえ・・・それは・・・」

「じゃあ『ネタを抜かれた』？」

「いやだなあ、同じことですよ。それ」

「でも、どうして私を？」

「不思議なんです。上のほうからの命令なんです」

「上のほうから？・・・上って？」

「つまり、社の一番偉い人から・・・」
「じゃあ社長じゃない・・・どうして？」
「わからないんです。『日野あきあ』から眼を離すなって」
「私から目を離すなって？」
「つまりここにいるのは各社の『日野あきあ』の番記者なんです」
「これからあなたにピツタリ張り付きますのでよろしく」
と男女の記者から挨拶される。

「いやだなあ。まるで私が悪いことするみたい・・・」
「いえ、とんでもない。上のほうでついこの間あった女性連続殺人事件も

今回の事件もあなたが関連というか・・・日野あきあが解決したんじゃないかとみているんです」

「ええ〜、私が？」
「そうそう、あなたは天才女優だから、惚けられるとつい本当と思ってしまうが

絶対あなたが関係していると断言しているんです」

「でも、貴方方はそう思っていないんですよ」
「わからないんです。こうしてあきあさんにお会いしているとそんなこと出来る訳はないと思うんですが、
例の不思議な早代わりのことを思うと一方では出来るんだろうなと思ってしまうんです」

「あゝあ、じゃあこれから私の自由がなくなるってわけか」
「いえいえ、自由にしてくださいっていいんですよ」

「それで、今日の記事のことなんだけど」
「やっぱり、あきあさんですか」

「何言ってるの。記事の内容も知らないのに・・・」
と憤慨してみせる。慌てた記者がその内容を伝えた。

「小野監督！困っちゃった。」
スタジオに入ると早速監督にくちる。

「ははは・・・仕方ないよ。事件が君に引き付けられるように飛び込んでくるんだから。」

いくら君じゃないっていつても我々スタッフがいろいろ動いているんだから

可笑しいと思うのが普通だよ」

「私の番記者ですって」

「それも有名税だと思っただけであきらめなさい。」

それにあきあくくんは例の・・・を使えばいくらでも記者達の目をくらませるんじゃないのか」

「それはそうですけれど・・・それで昨日のことは記者さん達に少し聞いたんですが・・・」

「おお、それぞれ・・・あれから警察がきてあの古井戸を掘ったら善太郎氏の遺体がそれも短刀共に出てきたよ。」

君の推理通り、あの家に残っていた林の指紋がべったりさ」

「その下からは？」

「あつたよ。はつきりとした鑑定は出ていないが死後約1000年らしいよ。」

道満には間違いないな。・・・どうする？」

「そのままでもいいでしょう。頭蓋骨と違って蘇るってことはないんですから」

「じゃあ、今回の事件はここで幕引きだな」

「でも、あれはなんとかならなかったんですか？」

「あれって？」

「京都の守護者般若童子って」

「あはは・・・いいじゃないか。これで少しは京都に貢献できる

わ」

「とうとう?。」

「般若童子のマスコット人形、饅頭、記念はがき・・・もう今から売り出そうとしているらしいよ」

「いやだなあ、あんなことするんじゃないわ」

そんなあきあを不思議な表情で眺めていたのが順子に車椅子を引かれた瑞穂だった。

「ねえ順子さん、沙希さん別人みたい」

「そうでしょ、沙希は撮影に入ると日野あきあという女優になっているの。」

だから、ほら今髪を触ってたでしょ。沙希にはないけどあれがあきあのくせなの」

「えっ、演じている人にくせが?」

「だから、あの早乙女薫が言ってるの。沙希が演じると本物になるって」

「凄い!」

「あとで映画の中の日野あきあが演じる”陰陽師あきあ”を見ていてごらんさい。」

あのあきあには考えるときに爪を噛むくせがあるんだから」

「とにかくこれからの京都には『般若童子』が溢れ返るだろうな」

「でも、あんな面がよく用意してありましたね」

「ああ、顔を見せないようにと思って撮影所にあつたのを持っていっただけさ」

と監督との話がつづいていたが

「さあ、撮影に入ろうか」

「はい、でもマスコミの記者さんたちが多いからスタジオ内は大丈夫かしら」

「ああ、心配はいらない。スタッフに見張らせているから」

スタッフのOKの返事で恒例の結界を張る。

その目で初めてあきあが術を使うのを見る瑞穂は土御門家の陰陽道
が

いかに廃れているのかまざまざと知ることになった。

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これ四神相応の陣と
いう」

結界の呪法をあげる。手刀を地面に刺し貫くと空間が揺れてそれが
広がってスタジオを覆っていく。

「すみません、監督！」

とスタッフが一人の女性をひっぱて来た。

「この人がトイレに隠れていました」

と監督の前に連れていく。

「まさか、トイレの天井裏に隠れているなんて」

女性は衣服を埃と髪の毛にくもの巣を張りつけている。

女性はいきなりスタッフの手を噛んだ。

「いててて・・・」

その痛みに掴んでいた手を離してしまった。

女性は身を翻してドアのところに逃げていく。

ドアを開けようとしても1mmも動かない。

もうひとつのドアのところに行っても同じだ。

ガックリ膝をついてしまう。

あきあは

「杏奈さん」

と合図を送った。

杏奈が頷くと女性のところに行つて立たせて膝や服についた埃を掃
っている。

「監督！」といってあきあが小野監督に何かを囁くと、
「おおい！」

とスタッフ達を集めるとミーティングルームに入っていく。

あきあは不信そうな瑞穂に

「女性は女性同士よ」

といってニツコリ笑った。

杏奈は女性を連れて戻ってきた。これからどうされるのか不安そうだったが

性格なのか突っ張って頬を膨れさせている。

あきあはじつと女性を見つめていたがニツコリ笑って近づいていく。

女性はその笑顔にぎくつとしたが突然『ポオッ』と頬を染めていくのだ。

「女性の友の記者さんで大原智子さんね」

どうしてわかったのかあきあがこつきりだした。

女性は『えっ』と言う顔になってあきあの顔を呆然とみている。

「鳴海京子さんの後輩だわね。京子さんは25歳だったから

その3つ下なのね。あっそうか、京子さんがフリーになったからあなたが代わりに京都にきたのね」

「どうして、どうして・・・そんなことまでわかるのですか？」

「京子さんに聞いてこなかったの？」

「ええ、日野あきあという人はとにかく不思議で、怖くて、可愛い人だって」

「その怖いって余計だわ、京子さんがきたら怒らなくっちゃ」

「ええ・・・私が言ったことは内緒にしてください」

「判ってるわよ。そんなこと」

「どうしてあなたのこと判ったのかは言わないわ。だって信じてくれっこないもの。」

でも、それがわかってもあなたの心に秘めていてほしいの。これ約束してくれたら私のそばにいてもいいわ。

それが出来なければ、ここから出て行って何もかも忘れることになるの。」

「何もかも忘れる?」

「ええ、ここで起こったことは全て忘れてしまう」

「そんなことできっこない」

「そうねえ、そう思っていたらいいわ。でも、このスタジオを覆っている結界を」

解いたときあなたから記憶がなくなっているの」

「結界?何を言ってるの?」

「じゃあ、その瑞穂さんに聞いてみなさい」

「瑞穂さん?」

といて車椅子の瑞穂を見る。

つかつかと寄ってきて

「ねえ、この人の言っていること本当?」

どういっていいかわからなかったので頷くだけにした。

「結界って?」

「陰陽師がおこなっている呪法です。この京都も安倍晴明によって結界に守られているそうです。」

さきほどドアが開かなかったのも、このスタジオにあきあさんが結界を張ったからです」

ちよつと話過ぎたかなつと思っただが思わず口から出ていた。

「あんた何者?」

呪法とか結界とか話すこの車椅子の少女に俄然興味が湧いたのだ。

「私？私、土御門瑞穂といます」

「土御門？・・・あつ、あなたって今日新聞に出てた・・・」
返事をしないわけがいかなかったので

「はい」

とだけ返事をした。

「どうして貴女がここに・・・」
とってから何かに気づいたのか、あきあと瑞穂の顔を交互に見比べて

「まさか・・・京都の守護者般若童子って・・・」
とあきあの顔を見つめている。

あきあはニツコリ笑って、『シー』という唇に人差し指を一本縦にする

ジエスチャーをする。

「そんなあ・・・」

とってから口をぱくぱくさせるだけだ。

撮影がはじまった。あきあは智子にはもう何もいわない。

「よし・・・あきあくん、いいぞ」

「では安倍晴明様のお屋敷です」

とってから印を結んで呪文を唱える。

空間が揺れ屋敷が現れた。何も手入れしていないのか

庭は草が生え放題だが花がきれいに咲いている。

「何よあれ・・・」

驚く智子、実際目の前でこんなありえないことを見せられると
身体が自然と小刻みに震えだして止まらなくなる。瑞穂だってそう
だ。

土御門家で術を使えないとはいえ陰陽道の名家である。

このあきあの術の凄さが普通の人よりわかるのだ。

「我式神。玉藻、葛葉、紅葉よ……いでよ」
あきあの身体から小さい光る玉が現れて、喜ぶように飛び回り消えたかと思うと十二単姿の3人があらわれた。

「あるじ殿、まかり出でました」
撮影を手伝わせるために呼び出したのだが二人の女性はもう驚きっぱなしだ。

式神の3人は屋敷をみて

「おお、嬉や。ここは清明様の屋敷」

といつて入っていく。

中ではカメラや照明をセットするスタッフが右往左往していた。

そこに安倍清明役の飛龍高志が烏帽子に公達姿で現れた。

記者発表のときは異質な感じがしていたが、一条戻り橋の時、そして今と段々清明と見間違わんほどになっていく。さすが実力派の役者であった。

式神たちも

「おお清明様……」

と声をだして喜んでいる。

撮影が始まった。カメラテストを繰り返すうち

始めはぎこちなかった式神たちも段々なれてきた。

最初のシーンのあきあは男の身体だから、あきあと瓜二つの式神を出演させる。

例のごとく半紙を折って人型をつくって呼び出すあきあの式神。

「ねえ、あれって……」

「あれは式神というの」

順子が説明する。

「陰陽師あきあが男から女の身体をも持つ男女両性有になるシーンなのよ」

段々と乳房が膨らむシーン、玉藻が清明に男から女の身体をもったことを話す。

そして、変化が終わったあとの撮影はあきあが出演するのだ。

目覚めを迎えるあきあ、そして陰陽師として弟子入りを果たす・・・そこまでのシーンだ。

撮影が終わると玉藻、葛葉、紅葉が寄ってきて

「あるじ殿、おもしろき一日でした。又かような役目がありましたらいつでも言ってくださいませ」

と喋ってあきあの身体の中に消えていった。

「ようし、あきあくん。いいぞ」

その声で清明の屋敷が消えもとのスタジオになる。結界も消した。もう自由に出入りできるのに智子が逃げ出す様子もない。

順子に代わり瑞穂の車椅子を押しているのだ。

「あら、智子さん。もう帰ってもいいのよ」

「いいえ、こうなったらとことん日野あきあって人を研究するの」

「いいんじゃないの」

と順子は平気な顔をしている。

家につくと留守番で残っていたひづるが飛び出してきた。

薫もママ達の用事で残っていたから顔を出す。共に有名人である。目をぱちくりしながら見ている智子。

「沙希姉さん、そのお姉さんは？」

「大原智子さんって言ってね。京子さんの後輩なの」

「あら、京子姉さんなら来てるわよ」

と呼びに家に飛び込んでいく。

「沙希ちゃん、どうだった？」

「もう大変！私の番記者まで出来て智子さんまで懐に飛び込んでくるし……」

「あら……私……」

「いいのよ。後でみんなに紹介するから」

とニコニコ笑っている。その笑顔でまいてしまう。

「あら、智子」

「京子さん！」

「どうやらあなたも日野あきあにまいてしまった口ね」

「ええ、とことんつきあいたくなつたの」

「いいんじゃない。あきあは隠し事しないから懐に飛び込んでしまえば」

毎日が驚くことの連続であきつこないわよ」

「京子さん！それって私、馬鹿みたいじゃない」

「ある意味ではね。でもその他は私にとって天女様よ」

「ひどい言われ方。でも私天女ではないわよ。みんなに可愛がられているただの我儘娘よ」

「言つてなさい」

「だって、皆私のすること見ていてくれるだけ」

「その実みんなはらはらしているのよ。……聞いたわよ。」

蘆屋道満って蘇った悪い陰陽師をやつつけるため、

女人禁制の比叡山奥院まで押しかけていって荒っぽい武者僧とやりあつたって」

「酷い言われ方！でも女人禁制つていわれたつて、私……」

「ストップ！そんな話題こんな場所で大声でするもんじゃないわ。」

それに井上先生が早く孫の顔が見たいつて首を長くしてまつてるわ
よ」

「あつ、いけない」
と喋って急いで家に入っていく。

「本当にあの子だったら……」

「そこがいいんじゃない」

と順子

「でも、京都へきてからはらはらしっぱなしよ」
これは薫。

「沙希姉さんってママみたいなのもあるし、

私の妹みたいに可愛いつて思ってしまうこともあるのよ」

「不思議！いろんな面が次々でてるから……」

「あきないっていうでしょ。静姉さん」

と律子。

「でも私ったら、いつのまにかあきあ……いえ、家では沙希ちゃんね。」

姉みたいな口を聞いてしまって

と京子。

「いいのよ、それで。今まで肉親の情つでものが薄かったのだから、

もっともつと可愛がつてあげなくちゃ」

「ママって甘い。沙希は最近少しつけあがつてるわよ。」

いつも心配ばかりさせるくせに、事件を解決してからしか内容を話してくれないもの。

もっと姉達に相談してほしいわ」

と最近出番の少ない理沙。

「ママア、理沙ちゃん。膨れない膨れない……」

「でも本当、沙希さんって不思議な方……」

「方って……瑞穂ちゃん。貴女のほうが年上なんですよ」

「ええ、それなら。沙希は妹なのよ。もつと遠慮のない話し方をしなくっちゃあ。」

例えば、瑞穂だから、瑞姉と呼ばせるのよ」

「えっ、いいんですか。私一人っ子だったから姉妹が欲しくって」

「なにいつてるの。貴女はママの娘の一人ですよ」

というママの言葉に涙ぐむ瑞穂。

「あのう、瑞穂様。澪先生がお呼びです。」

『帰ってきたなら、早くリハビリをするように』といわれてます」

「あつ、いけない。志保さん、澪先生怒ってはりますか」

「大丈夫ですよ。今までお師匠様の診察をされていましたから」

「よかった」

といって自ら車椅子を降りソロソロと玄関を上がっていく。

みんな思わず手を出したいのだが、そんなところを澪にみられたらどんなに怒られるのかわからない。

室内用の車椅子に乗り換えると、高弟の山野葉志保が押していく。

いつも黙ってにこにこ笑っているだけの松島奈美、わからない人だ。

みんな稽古場に入っていく。

きちつとした姿勢で、着物に着替えた沙希を見つめている祖母の井上貞子。

高弟達に混じって今日お稽古に来ている芸妓や舞妓さん。

菊野屋の芸妓や舞妓の姿もある。

「じゃあ、小沙希ちゃん。昨日のおさらいどす」

「はい、よろしゅうお願いします」

といって両手をつき頭をさげる。

「みんなも、よくみときなはれ。これが舞どす」

「はい」
と芸妓、舞妓の大きな返事。

舞を舞う沙希は、日野あきあでもなければ早瀬沙希でもない。
祖母が大好きな小沙希となって真剣に舞を舞う。

「これが舞どす」

「へえ、小沙希ちゃん。ありがとうどすえ」
みんなの言葉にニッコリと笑うのだ。

「じゃあ、真理はん。小沙希ちゃん。お願いどす」
「はい」

といつて真理がお琴、小沙希が横笛を取り出す。
早瀬の老婆たちに教えてもらった昔から伝えられてきた数少ない曲
を

気に入った祖母が毎日順番に二人に演奏してもらっているのだ。
そして、京都にいる間だけでもといつてこの後真理が芸妓や舞妓達
にお琴を教えている。
教え方がいいせいかどの妓も上達が早く、井上貞子師匠や置屋の女
将たちに喜ばれている。

こんな様子を初めてみた智子は京子に

「みんな凄い人ばかりだけど、本当に仲がいいのね」

「そうよ、みんな沙希ちゃんのおかげなの。」

あの子によってここまで大勢の女達があつまり、どんなに癒され
どんなに励まされているのかわからないわ

「なんかうらやましい」

「何いつてるの、智子ももう家族なのよ。あなたも私同様、天涯孤
独の身ここにいたらいいわ」

「でも……」

「いいのよ、智子さん。あの子つてね。不思議に家族運のない人や不幸を背負ってきた人を引き付けてくるのよ。だから、ここに居るのは皆あなたと同じ境遇なの」
静香の言葉になんだか不思議な安らぎが。

「花世ちゃん、おかあちゃん元気ですか？」

「へえ、小沙希さん姉さんのおかげです」

「来てくれはつたらいいんえ」

「おかあちゃん、小沙希さん姉さんの邪魔にだけはならへんつて」

「なにいつてはるの。花世ちゃん、おかあちゃん怒つといて。」

それに、今晚こなかつたらおしかけるつて」

「えっ？今晚きてくれはるの？」

「へえ、菊奴さん姉さんにお線香もあげたいし」

「うわあ・・・おかあちゃん、喜ぶえ」

と花世が飛び上がつて喜んで居る。

菊野屋にとって小沙希は特別の人なのだ。

「そうそう」

と芸妓の花江がいった。

「今、この京都で大評判になつて居る人いるんどすえ」

「大評判つて？」

「へえ、ほら般若童子様どすえ」

「うち、こんなの買いました」

といつて小さな般若面をかぶつた人形をとりだす。

「えっ、もうこんなの売つてるの？」

と思わず標準語になつてしまふ。

「今、このお人形、お守りみたいになつて居るんどす」

「そんなに・・・評判に？・・・」

とつい声をひそめてしまふ。

「へえ、それはそれは大評判。お寺はんや京都の旦那衆で懸賞を出して

般若童子様の正体を見つけようとしてはるそうどすえ」

「困ったわ」

「どうして、小沙希ちゃんが困るんどす？」

さつきから反応がおかしい小沙希をみつめている花世。

「あっ」

勘のいい花世が気づいてしまった。

「京都の守護者般若童子様って小沙希さん姉さん！」

「えっ、小沙希ちゃんが？」

「みんな、内緒どすえ」

と黙っているように懇願する小沙希。

驚きながら頷く菊野屋の芸妓や舞妓達。良く考えれば

あんなこと出来るのは小沙希しかできるはずはなかったのだ。

でも花世が強硬に発言する。

「また危ないことしたんどすか。おかあちゃん、そんなことばかりする

小沙希さん姉さんのこと心配で心配で、毎日お百度踏んでいるんどす

「ごめんなさい」

と頭を下げるばかりの小沙希。こんなに心配してくれる人がいることを考えてはいなかった。

「約束しておくれやす。もう二度と危ないことをしないと」

「へえ」

こうして年下の花世に叱られている小沙希をみつめている周囲の女性達、

よくぞいつてくれたと花世に拍手をおくっているのだ。

「ほんまどすえ」

「ほんまどす・・・でも事件が向こうから飛び込んできたら？」

「いけまへん。逃げるのも勇気どす。」

小沙希さん姉さんは飛び込んでから考えるから怖うて怖うて・・・
何かあつたらどうするんどす。

今夜きたら、おかあちゃんから説教どす」

「ごめん、それだけはかんべんえ」

情けなそうに泣き声をあげる小沙希。

誰も小沙希をかばうものはいない。日頃思っていることだから・・・。

でも、瑞穂と智子はこんな沙希に親近感をもった。凄い才能と人が
持ち得ない力、

そんなものを持つと人は変わってしまうだろう。だが沙希は違った。
あくまでも可愛い女の子なのだ。偉ぶらずに普通の女の子をしてい
る沙希。

年下にも怒られながら素直にあやまっている。

こんな子を好きになるのはしかたがない。そう自分にいきかす。

「でも、沙希つて男でもあるのよね」

「えっ？」

思わぬ言葉。

「あら、あなた知らなかった？公然の秘密なのよ」

「ニュースソースとしては出ていないから、当然といえば当然よね」

と律子。

沙希のことを良く知る律子から詳しくは知らない瑞穂と全く知らない
智子は

男時代からのことを聞くことになった。

虐げられた幼年時代自殺までしようとしたことを聞かされると胸が締め付けられるように痛くなった。

女になってほっとする二人。女を愛す女。不思議だが納得し身体が熱くなっていく。

「私もこの話をするやと身体の芯から熱いものが溢れてくるのよ」といって律子が笑う。

やはり般若童子のことは京都の町に活気を取り戻すほど大評判になっていた。

面映いのは沙希だった。リハビリのおかげですっかり歩けるようになった瑞穂と

最近くつつき虫のように沙希から離れない智子と

例によって沙希に影のように寄り添っている杏奈の四人、清水寺へと散策にきていた。

京都での撮影はもう終わりあとは東北の蔵王でのロケを残すだけになっっていたから、

京都観光をしようとして三人をさそってつい近い清水寺にやってきたのだ。

なぜこの三人かというやと律子とひづる、順子と薫はテレビドラマ出演のため

東京へ帰っている。

（律子はひづるの家庭教師でもあるが今はマネージャーも兼ねていた。）

残っているのはママの真理と松島奈美だけだった。

さすがに京都、修学旅行生が多い。とくに女性の観光客が多いのは京都の特徴だった。

「ねえ、あの人。沢口靖子じゃない？」
「本当。でもどこか違うんじゃない？」
「サインもらおうか」
なんていう声が聞こえてくる。

道の両端に並ぶお土産物屋にはどこでも般若童子の人形がぶら下がっており

沙希は見ないように歩いていく。

「あおう、すいません。サインしてください」

と二人の女子高生がどこで買ったか色紙を持ってやってきた。

急いでさらさらと書いて渡すと

「やっぱり！日野あきあさん」

と女子高生。

「あら、私を沢口靖子さんと間違えていたの？」

「いいえ、でもどちらかなと思って」

と正直に答えた女子高生。

「ねえ、あの人日野あきあだって」

と立ち止まって『ひそひそ』と友人同士。

「沙希、急ごう」

と智子がいそがせるが

「おう、あきあ殿ではないか」

大きな声に振り向くと

「あつ、天鏡さん！どうしてこちらに？」

「お上人さまのお使いでな」

「お上人さまはご健勝でしょうか？」

「ああ、健在じゃ。いつもあきあ殿のことばかりいわれておる。

又、あの笛の音が聞きたいといわれてな。

おおう、そうじゃ。今夜にでも来てはくださらぬか」

「でも女人禁制の奥院。とてもとても」

「何をいわれる。あの深夜にあきあ殿お一人で

荒っぽいのが評判の比叡山に殴りこみをかけてこられたではござらぬか」

「しーっ、殴りこみとはお言葉が悪いですわ・・・」

「あははは・・・とにかく、今夜お待ちしていますぞ。

急ぎますのでこれにて失礼！」

と、急ぎ足で人ごみの中に消えていった。

「沙希！あんた比叡山に殴りこみをかけたの？」

「それってうちの土御門のせいなんですよ」

と瑞穂。

「いやだなあ、智姉に瑞姉。そんな目で見ないでよ。

天鏡さんが大げさに言っただけよ」

「そんなことないわよ。私何もかも知っているもんね」

「またあ・・・杏姉もそんなこという・・・」

「どんなことをしたの？正直にいいなさい」

「えっ・・・ええっ・・・」

「早く！」

「ちよつと天鏡さん達武者僧さんとやりあっただけ・・・でもちよつとだけよ」

といそいで付け加える。

「ええ、あの武者僧と？だってあの人達修行僧の中でも荒っぽいので有名なのよ」

「もう、みんな心配するの当たり前ね。そんな無茶苦茶ばかりしてるのだから」

「そう思っつでしょ」

「ごめんなさい・・・」

と上目使いに三人を見ている。

その様子が可笑しいと『ぷ』とつい噴出してしまふ。

「もうかなわないわね。沙希には・・・」

と二人は杏奈のようにもう姉の気分になっている。

沙希と親身に話しているとどうしても皆同じように感じてしまっから不思議だ。

「杏奈が沙希のことどう思っているのか充分に理解できるわ」

4人は話ながらも清水の舞台から景色を楽しんでいた。

もう瑞穂にも智子にも沙希に対する遠慮はない。

「ねえ、あの人・・・あの人・・・」

「撮影中じゃないかな」

とカメラを探しているカップルもいる。

どうしても目がいつてしまふ沙希だったが、三人ともそれなりに目立つ存在なので

撮影中の女優達と間違っているらしい。

日野あきあとして本当のデビューを飾ったわけでもないので本当に知っている人はまだ少ない。

「もう出てきなさいよ。・・・そこにいるのは判っているんだから」

というと、柱の影からぞろぞろ出てくるのは

カメラや手帳をもった番記者達だ。

「そんなにぞろぞろと後をついてこられたら、京都観光している気分じゃあないわ」

「いつから判ってたのですか」

「最初からよ」

すっかり女優日野あきあになっている。

「もう、京都での撮影は終わったんでしょ」

「ええ、あとは東北でのロケだけ、それが終わるとテレビの特別番

組だから」

「ああ、それぞれテレビの方は完全取材シャットアウトになってますけど・・・」

「そうらしいわね」

「そうらしいって？でもどうして？」

「知らないわよ。そこに同じ会社の記者さんもいるじゃない。その人に聞いたら？」

「冗談ではないですよ。我々新聞社もどうしてかテレビ局にシャットアウトされているんです。

もう今から出入り禁止なんですからね。

友人もいるんですが、一言も話してくれないんですよ。

その上・・・その上ですよテレビ局の中でも番組を制作する部はもうどこに行っているのか行方不明・・・家族にも内緒らしいです。

家族には社長から出張のことをいっているので変な誤解はないそうですが」

「へえ、そんなに嚴重なの。そうすると私達も映画が終わるとどこかへ連れていかれるのね。何か少し怖い・・・」

いけしゃあしゃあと答える沙希・・・いや日野あきあの女優ぶりに

杏奈と瑞穂、智子はほれほれとせざるをえない。

律子がひづるのドラマ出演のため撮影には同行できないため、

早乙女薫事務所の新入りマネージャーとなった土御門瑞穂が同行するのだ。

無論、杏奈の同行は外せない。

同行する三人は、昨日できたテレビ特別番組の台本を見て、わくわくするやらどきどきするやら史上に残る番組になると実感する。

大原智子もテレビ局スタッフとして社内報に掲載する製作裏側のルポを担当することになった。これはあきあをよく知る人物しか担当できない。始めは鳴海京子が予定されていたが、本の原稿が遅れているため同行取材が出来なくなったからだ。

社内報はこんな嚴重な番組制作をせざるをえなかったことを終了後に家族、他の部署の製作者、又組合に納得させる意味があった。

明日が東北へロケに出発という夜、井上貞子宅ではささやかだが豪華な別れの宴が開かれた。

東京からかけつけた沙希の叔母や姉妹達、ひづるもドラマの合間をぬってかけつけていた。

寂しそうな祖母だが、隣家や地下3階の最新医療施設やリハビリ施設又、

里から汲み上げてきた温泉が24時間楽しめるのもそう遠くはない。

そこで働く若い女性達も里からやってくるのだ。

ママの真理や医療施設の院長となる漣、そして琴乃、千佳の二人の看護師長。

全て女性達が占める。

祇園の一角にこんな施設があるなどは誰も思いはしないだろう。

そのうち菊野屋の女将や芸妓達みたいに他の置屋の女達にも秘密の施設として開放していくことになる。

「小沙希ちゃん。寂しゅうなるけど遷先生たちがいやはるからあんたのことが身近に感じられるんどす」

「お婆ちゃん、時間があつたらすぐかえつてくるさかい、元気にま
つてておくれやす」

今日は祖母の好きな舞妓姿で菊野屋の皆と盛り上げているのだ。
女将も真理や操と一緒に皆の世話をしている。高弟達も今日はお客
として接待しているのだ。

「おかあちゃん、おかあちゃんも座っていたらいいのに」
「なにをいわはるんどす。今日はあんたの門出どす。」

その席におかあちゃんがどんと座っていられますかいな」

「そうよ、沙希ちゃん。それが親心なのよ」

と真理までが女将を応援している。

その後、菊野屋の舞妓達と『祇園小唄』を踊ったり、横笛を吹いた
りと

皆を楽しませていたが、その小沙希がふらつと外に出て行く。
皆も知らない振りをしていたが、黒いパンツに着替えて比叡山にい
くのだ。

「天鏡殿・・・天鏡殿・・・」

「おお・・・その声はあきあ殿」

「お上人様は、もうおやすみになっていられるのでは」

「あははは・・・あきあ殿のこられるのを首を長くしてまってお
られるわ」

と扉が開いてお上人が出てきた。

「お上人さま、遅くなって申し訳ありません」

「何をいわれる、せつかくの別れの宴を中断させこちらこそ申し訳
がない。」

だがおぬしの横笛をしばらく聞けぬと思うともう我慢ができぬ。
年寄りの我儘だと思つて許してくださいな」

と申し訳なさそうに話されると恐縮するあきあであった。

しばらくの別れだとおもうと月を見ながら岩に腰をおろして吹く横笛に
さらに情感がこめられあきあにとって二度とないような演奏になっ
た。

比叡山に吹く風も清涼感が溢れ、邪鬼など一度に消滅するような強
烈さがあつた。

横笛の響きが終わってもしばらくは誰も動くものはいなかった。
無骨者の集まりの武者僧達にも今あきあがおこなった演奏には
沙希の想いが十二分に込められているのを肌で知つたからだ。

「おうおう……、凄い調べを聞かせてもらった。何万編のお経
よりも

この調べ一つで世の穢れなど消してしまい、迷う魂も成仏するに違
いない。

いいものを聞かせてもらった。ほんに……ほんに……」
と喋って数珠を鳴らしてあきあを拜む。

こうして比叡山での別れを済ませて一人山を下りていく。

これが同じ日本かと思うほどの京都とこの東北の蔵王の景色の違い、

その中でいよいよ明日から撮影が始まる。

宿泊するロッジの支配人に聞くとこの地方には『雪女伝説』がある
という。

雪女郎と雪夜叉、共通するのは子供に対する哀しい思い、
今から陰陽師あきあとして役に没頭していけそうな思いがする。

薫もこのロッジに入ってから、あきあと顔を合わそうとはせず一

人役作りに入っている。

世話をする順子にしても腫れ物を触るように接している。

マネージャーとして初めての瑞穂はこの緊張感ある雰囲気に向が痛む思いだ。

でもそんな瑞穂にあきあは

「瑞穂、そんな青い顔して・・・もつと楽にしてようよ」

とアドバイスする。

智子は映画には関係していないので楽だったが、プロの女優の役に対する思いが

少しはつかめた気がする。

小野監督やスタッフ達はそんなことにもう慣れていたので自然に接している。

ロッジでのミーティングは微に入り細に入り行なわれた。

映画の最後の締めくくりをいい形で迎えようとするためだ。

これからおこなわれる撮影はこの映画を左右する。

もとはといえばこの二人の対決がこの映画を製作するきっかけになったのだ。

撮影は順調に行なわれた。心配だったのは天候だったが

それまで吹雪いていたのが嘘のようにおさまり

雪夜叉を取り巻く腕自慢の男達を一撃に倒す場面からはじまったのだが

天候はまるであきあが術で操作しているがごとく撮影にあわせて変化していく。

でも今回は多くのマスコミが見ている前での撮影なので術は使えない。

雪の中で雪夜叉にその身を押しさえつけられ、そして胸元を開けられ

たあきあ・・・

白い雪のような肌にこんもりと盛り上がった少女の乳房・・・・・・・・

撮影を見ている者たちにとってどきっとしてしまう光景だったが
いやらしさは全く感じられず、男として女になつての不思議な乙女の
恥ずかしさが

『ポツ』と赤く染まつた白い肌によく表現されていた。

雪夜又はその白い肌から急に匂い始めた昔の自分の香りを思い出し、
少女をいたぶる手を緩めてしまう。

そして、少女の首にかかる古びたお守り・・・・時間が止まってし
まう瞬間だ！

「止める！・・・・これに触るな！・・・・お前みたいな妖かしに
・・・・」

思いもかけない少女の強い力ではじきとばされてしまう雪夜又・・・・
。。。

もう立ち上がる気力もなく少女を万感の思いで見つめるだけ・・・・

人ではなく妖かしとなったその身の上・・・・あるのは後悔だけ・・・・

・
手にかけてきた男や子供達の復讐なのか・・・・

撮影は順調に行なわれていく。

初めてみるこのシーンに演技とわかっていても母と子の哀しい定め
に

胸を締め付けられ、自分の身と重ね合わせている瑞穂は
シーンの撮影が終わる毎にあきあに走りよって冷え切ったと思われ
る

肌を防寒衣で覆うのだった。

でも不思議なことにあきあの身体はこの寒さだというのにポカポカと温かい、
かえって自分の手のほうが手袋をはめているのにも関わらず
あきあの肌にふれることにとびくっさせてしまうのだ。
「瑞姉、手が冷たいわよ。もっと暖めなくっちゃ、風邪ひいちゃうよ」
とかえって心配させている。

あきあの素肌からラベンダーの香りがこの寒さの中で段々と強く匂ってくるので
瑞穂とその横で見ている智子にしても
何だか胸がどきどきしてきて思わず抱きついてしまいそんなある感情が芽生えてきていた。

撮影が全て終わり、打ち上げも終了した後、
久しぶりに薫の部屋で過ごす沙希、順子、杏奈、瑞穂、智子達の6人。

「ねえ、うまいこといくかしら」と杏奈。

「いかさなきやあ駄目よ」

「だって、このロッジも隣もみんなマスコミで一杯なんでしょ」

「ええ、だから面白いんじゃない。朝起きたらみんないなくなってたなんてね」

「小野監督さん達は？」

「映画が終わったので、京都で編集にとりかかるとてもう帰ったわ」

「ええ」

「というのはマスコミに対するフェイントで途中から戻って

あの湖のある村に直行しているはずよ」

と智子。小野監督との連絡を全て取り仕切っているのが彼女だ。

いわば智子もマスコミの一員。だからその行動は良くわかっているのだ。

「スタッフの人は？」

「彼らは一人一人ばらばらで現地に向かっているはずだわ。だって彼らをマークするマスコミなんていないもの」

「うふふ・・・」

「どうしたのよ、瑞穂ちゃん」

「効果さんの若いスタッフの人たちナンパした女子大生達と

この上のスキー場にはスキーに行くつもりで出発したわよ」

「まあ、やらしい。男ってすぐそうなるのだから」

と順子がいうと

「順子さん慌てないで。ナンパって嘘。アルバイトでやとった彼女達をだしにして、

スキーで現地に向かうって」

「まあ・・・」

「だって彼ら達、どう見たってナンパなんて成功するはずないもの」

「うわあ、瑞穂ちゃんもいうわね」

「だって、薫姉さんのお仕込みですから」

「こいつ」

と薫に頭を小突かれる瑞穂。

「もう共演者の人たちも現地に行っているし、

さつき律子さんからもひづるちゃんと旅館についたって連絡があったわ」

智子の言葉に

「さて、後は私たちだけよねえ」

「沙希、何かいい考えがあるの？」

「ええ・・・あつ、きたきた」

とってソファから飛び降りいそいでドアを開ける。

「記者さん達に気づかれなかった？」

「ええ、支配人さんから言われてそっとききましたから。で、どのような御用ですか？」

「あのね、私達映画の撮影が終わってほっとしたところなの。

だから、後は休暇を楽しもうって思ってるんだけど

マスコミの記者さん達が目を光らせていて自由にならないのよ」

「女優さんで大変なんですわね」

「今日、最終列車で北海道に渡って誰の目も届かないところで休暇を楽しもうって思ってるの。だから、お願い！

私達がここから抜け出すのを手伝って！」

と沙希が手を合わせて頼むのだから、誰もいやとはいえなくなる。

「どうすればいいのですか？」

「ええ、別に特別なことする必要はないの。この部屋で6人でパーティを開いて

騒いでほしいだけなの」

「えっ、パーティ？」

「そうよ。もう食べ物や飲み物は注文してあるからもうすぐ届くはず。

でもパーティといってもあまりはしたない真似はやめてね」

とってニツコリ笑う。ぽつと頬を染める6人。

「いいんですか？この部屋でパーティをしても」

「いいわよ。明日の朝までの料金やパーティの支払いも終わっているから。

だからってこの部屋をかたづけするのは貴女達ですからね。ほどほどにね」

こんな企みにマスコミは誰一人気づかず、朝遅くに6人が消えていることを知り、慌ててこの地域一帯を捜しまわる記者達、だがもう6人はそんなところにはいなかった。

山合いに隠れた湖・・・母湖≡母龍の緋龍が住むという。

子湖≡子龍の紅龍が住む・・・しかし、実際母湖の湖畔に立つてみると

そんなに大きな湖とは思えない。こんな湖に龍がいるのか？

そして、天海僧正が埋め立て封印したといわれる子湖の上には

古ぼけた社がたっているだけだ。不思議なことに草一本生えていない。

まさに今埋め立てられたといわれてもいぐらい時代が感じられないのだ。

沙希はその上に立ち、山から吹き降ろされる風に髪の毛をなびかせている。

「沙希ちゃん、どうなの？」

「ええ、哀しい声と人間に対する激しい怒りしか聞こえてこないの」

「人間に対する激しい怒り？」

「ええ、何か少し聞いていた話と違うの」

「話が違っつて？」

「ええ、ちがが・・・ちがが・・・って言ってるの。ちがって人の名前みたい。『千賀』かしら？」

「詳しくは判らないの？」

と杏奈が沙希の顔を見ながら聞く。

沙希の顔が少し青白くなっていたからだ。

「沙希、少し顔が青いわ。どこか悪いの？」

「ここに立っている私の生命エネルギーが少しずつ吸われていくみたい……」

「大変じゃない。早くここを離れましょ」

薫がいうのを

「薫さんのいう通りよ。それに木村プロデューサーの実家にいったみれば

何かわかるんじゃないの」

5人に言われて歩きだしたが、何か後ろ髪を引かれる思いだった。

この村に1軒ある旅館は小野監督やスタッフで満員になり

沙希たち女優陣は木村プロデューサーの実家に泊まる事になった。

さすが古くから伝わる家で部屋も多いうえ広いので

女性達は大喜びだった。その上、温泉も引かれており最近改装したとかで

トイレなんかもきれいになっていた。

木村プロデューサーは仕事の打ち合わせなどがあり小野監督が泊まる旅館に

一緒に泊まるのだが、沙希達が着いたときはちょうど居合わせていた。

「あつ、木村さん。ちょうどよかった。少し聞きたいんだけど」

と先ず薫が話し出す。

「今、ここに来る途中に湖によってきたんだけど、沙希ちゃんの顔色青いでしょ。」

何か生命エネルギーを吸い取られるって言うてるの」

「何？生命エネルギー？……そうか、それで……」

いやなに、こんな村にも旅館があるくらいだから観光客がくるんだが

ときどきあの子湖のあとで女性が気分が悪くなって倒れることが少なくなっているんだ。

不思議なのは女性だけで男は一人もいない」

「あのう・・・木村さん。ちがつてご存知ですか？」

「ちが？・・・なんだいそれ」

「子龍が哀しい声でそう言ってるの」

「子龍が？・・・そうか、君には聞こえるのか」

「ええ・・・ちがつてたとえば名前だとか・・・」

「名前？・・・俺は知らない。お袋に聞いてみようか」

と立ち上がって奥へ入っていった。

しばらくして小柄な木村とそっくりな顔の母親がでてきた。

「まあまあ、有名な女優さんがこんなボロ家に・・・」

まあまあ、おまえは・・・お部屋にお通しせんと・・・さあさあ

どうぞ

と奥へ案内しだした。

「ああ、しまった。玄関先で・・・まあ、部屋でゆっくり話そう」

とみんなの荷物をもって母親の後をついていく。

「律姉にひづるちゃん・・・庄絵さんまで・・・早かったのねえ」

大広間にいた3人とは久しぶりの再会となった。

各部屋に行くのは後にするとして、気になっていたことを先に聞く。

「ちが？・・・はて・・・？・・・うん、どこかで聞いたような」

と母親が考えている様子にじりじりと時間がたっていく。

その時、お寺の鐘が『ごん』と鳴り響いてきた。

『はっ』と顔をあげた母親。

「そうだ、そうだ・・・昨年、お寺の倉庫の片付けと古い書類の虫干しを

したときに古文書に書かれていた名前だったわ。

あまり達筆で読めなかったけど、和尚さんが研究してみると言っていたわ」

「その和尚さんは？」

「ほれ、今鐘をつけていますじゃ」

との母親の言葉にすぐ沙希が立ち上がった。

「私行つて来る」

「まあまあ、今日はお疲れでしょうからゆっくりされて・・・」
という母親の言葉も聞こえないかのように大広間をでていく。

あきれかえる母親に

「じゃあ私も」

と行って立ち上がる女性陣。

「俺が案内してくるから」

と木村プロデューサーも女性達を追いかける。

「東京のお人はお忙しいことじゃ」

という母親の言葉は誰の耳にも届いてはいない。

お寺は少し山をあがった丘の上にあった。鬱蒼とした木々の間から
母湖がくつきりとみえる。あの湖の下に龍が眠っているなんて信じ
られない

静かな景色だった。

「ほう、東京からわざわざ・・・えっ、母龍の頼みで子龍を助け
にじゃと？」

それをテレビ番組にするじゃと・・・なんとバチあたりめが・・・」

と、怒って立ち去ろうとした。

「和尚様、ちが……ちがって人のこと教えてください」
その沙希の声で、いきなり和尚の足が止まってしまった。
くるっと振り向くと驚愕の目で沙希をみつめる。

「どうしてそれを……」

「子龍の紅龍様がちが……ちがって叫んでいました」

まるで紅龍様自身が『ちが』って人を追い求めているように……
「・」

「本当か……本当に子龍の声が聞こえるのか」

和尚の声に頷く沙希。その見詰め合う視線はまるで真剣勝負の剣士
みたいに鋭い。

「まいったわい。おぬしのその目、嘘をついている目じゃない」

とふっと力を抜いた。そして沙希の前にどんとあぐらをかいた。

「これ、お前」

とひづるを指差し

「その般若湯をとってくれ」
という。

「お前？……」

といわれ何か言い返そうとしたひづるに律子が慌ててとめる。

『ぶ』と膨れながら般若湯を和尚の前に『ドン』と置く。

コップを沙希の目の前に差し出す和尚、注げというのが

溢れんばかりの酒に目を細めながら口を持っていつて啜るように呑
み、

そして、一気に口の中へ。

「おぬしは……」

「すいませぬ。不調法で……」

「気の毒に。人生を半分損をしているのう」

と言ってから、再び鋭い目で

「おぬし、一体何者だ」

「わたしは普通の女優ですが」

「いや、そうではあるまい。おぬしから不思議な力を感じる。それに子龍の声を聞けるとはただの人間ではあるまい」

「沙希ちゃん。この和尚さんただのうわばみじゃあないわ。

私は沙希ちゃんのこと全て話してもいいと思う。

そら、沙希ちゃんのお友達になった比叡山の奥の院のお上人様や武者僧の天鏡さんと同じだと思っわ」

「何！比叡山の奥の院の上人だと？・・・蓬栄のことか」

「えっ？和尚様はお上人様のことご存知なんですか？」

「おう、そうじゃ。わしはあの男と修行しあつた仲なのじゃ。

だが、堅物でう。それに天鏡じゃと？あの泣き虫小坊主か・・・」

「和尚様、この沙希ちゃんって一人で女人禁制のあのお山に殴りこみをかけたんですよ」

「殴りこみ？」

と驚いた顔で沙希を見つめる。

「いえ、その前の日に殺人事件の被害者の女性達の遺体を見つけるのに比叡山の結界を破つたんです。そして、そこにいる土御門瑞穂ちゃんの家の事件で

再び沙希ちゃんが比叡山の結界を張るためにいったときに

天鏡さんたち武者僧とやりあつたんです」

と両手の人指し指でちゃんばらのジェスチャー。

和尚は目を丸くして聞いている。沙希も黙ったままだ。

「ええ、比叡山の結界を破ってから再び張りなおした？」

「土御門家？」

今度は瑞穂の顔を見る。

「ほう、安倍晴明の直弟子じゃと？京都の結界をも新しく張りなおした？」

映画の口ケで地獄の鬼を呼び出した？……」

と薫の話す今までの出来事に反応する和尚。

そして、やっと出てきた母龍との約束。

「ほう、母親の緋龍と約束を果たすために来たのか」
頷く沙希に感心したように言葉を添える。

「お前は『ちが』と同じ血が流れているのかもしれないなあ」

としみじみとつぶやいた。

「ちがとはこう書く」

と縁側の板の上に酒で『千賀』と書いた。

「あの古文書に書かれてあったのは、千賀は行き倒れになった巡礼の子じゃった

そうな。千賀を哀れに思った村人達は仕事の報酬に食べ物を与えた。

着るものは、いらなくなった女達の着物を……、寝るところは誰もいなくなつた

納屋に住ませた。

そして成長した千賀の美しさは近隣の若者を惑わせ狂わせていったのじゃ。

だが、それは千賀の知ることではない。千賀は仕事以外口を聞かなくなつた。

というのも長ずるにしたがって、自分に人とは違う力があることに気が付いたのだ。

その力というのは人にあらざるものと会話ができること。

あるときは風であったり、木であったり、蔦であったり、……

そして、蛇や犬であったりした」と和尚の話が続いていく。

.....
あるとき、千賀は自分を見つめる少女に気がついた。少女は千賀の視線を感じると

姿を消してしまう。それも『フツ』と目の前で消えてしまうのだ。千賀は悟っていた。少女は人ではない。・・・無口ではあるがどうしても

少女と話したくなかった千賀はある日、少女の手をつかむことに成功した。

そして思いっきり引つ張ると少女が千賀の胸の中に倒れこんできたのだ。

少女からの甘い香りと赤い唇が千賀の心を狂わせてしまった。

少女の唇を思いっきり吸い込んだのである。

それから記憶は定かではない。ただ干草の上で裸になった二人が固く抱き合っていたのである。

それからの二人は密やかな逢瀬を楽しんでいた。

だが、それも村人に知られることとなった。

村の実力者の息子が最近の千賀の行動を怪しんで見張っていたのだ。

二人の睦言も見たり聞いたりした。女同士のこんな行為は当時、

こんな田舎の村ではおぞましいものと忌み嫌われていたのだ。

それどころではない、若者の目に飛び込んできたのが

千賀と抱き合う少女の背中にびっしりと現れた龍のうろこであった。

若者は少女の正体をネタに千賀を脅かし凌辱した。乙女の証の血を流しながら

千賀は穢れてしまった我が身を呪い、少女への謝罪と絶望を胸にか

かえながら

母竜の住む母湖に身を投げて死んでしまった。

紅竜は千賀の死を哀しみ、その復讐を遂げるために村に災いを起こしたのである。

あとは伝説通りである。災いを無くすため天海僧正に子竜を封印し湖を埋めたのである。

千賀を凌塾した若者が木村プロデューサーの祖先であるのは間違いない。

『ふ〜』と木村プロデューサーが吐息を吐いた。

「祖先の悪い因果が子孫の俺まで祟っているのか」
哀しげにいう。

「でも、何とかしないとお母さんの龍との約束を果たせないんですよ」

「ええ、でもあの千賀さんを呼ぶ紅龍の声が忘れられないの。しかも人間をとて憎んでいるのよ」

「といっていつも持っている『緋龍丸』を取り出した。

何だか、やりきれなくなつて吹かずにはいられない心境だったから・・・

母湖と埋められてしまった子湖を見下ろすこの山の上から
我心が届けとばかりに横笛の調べが風にのる。

聞いている女性達は・・・いや、和尚も木村プロデューサーも
沙希の心がびんびん身体に響いてきた。

女性達の眼からは涙が溢れ・・・この笛の音が届けとばかりに
山上から吹き降ろす風も強くなつていった。

笛の調べが薄く消えていった。

「なんと！・・・何と見事な・・・」

和尚が驚いた声を出した。

「穢れが消えていきおった」

「お粗末な笛で申し訳ありません」

沙希は本当にそう思っているのだ

「沙希・・・といわれたな。おぬしをあの女人禁制の比叡山に黙って迎えておるのはもつともじゃ。

おぬしにはあの阿修羅のような強さと菩薩様のような優しさがある。

その笛は退魔の笛じゃ。その笛をそのように見事に吹ける人間はおぬししかおるまい。

今日は良い日じゃ。母龍の願い、おぬしだったらかなえられるじゃろう。

沙希よ千賀になれ、千賀の弱い心を捨てた強い千賀になれ。

そして、子龍の紅龍を救うのじゃ」

と云ってから、自分で手枕をし『ゴゴゴ』といびきをかいて寝てしまった。

第一部 第十四話

何もかもを知った沙希達は小野監督らと打ち合わせをおこない、冒頭に挿入する事件の発端の録画撮りを済ませた。

そしてあとはぶっつけ本番で生放送を迎えるその日……。

京都の京舞の家元井上家では

早朝から人間国宝の貞子が妙に落ち着かなくソワソワとしていた。テレビ放映は夕方からだというのにテレビをつけたり消したり新聞のテレビ版をメガネをかけて眺めてはまたメガネをはずしたり・

そんな様子にお茶を持って現れた真理が

「お母様。今からそんなこととしてはお体にさわります」と注意すると

「おお！真理さん。うち、小沙希ちゃんのこと心配で心配で……何か普段にないオロオロした様子に、

真理は貞子の前においた湯呑みにお茶をそそぎながらニッコリ笑った。

ちなみに真理がこの家に来てからは貞子にお茶を出すのは真理の役目となっていた。

初めて真理が差し出したお茶を含んだ貞子が唸ったのである。

お茶の葉はこの家にあつたもので特別なものではない。

ために同じお茶の葉とお湯をいまままで世話をしていた高弟と真理に

目の前でお茶を入れさせたのだが特別変わった入れ方ではない。

しかし、一口呑んでみたら全然違うお茶の味なのである。眞理当人も首をひねっていたのだが、その日以来眞理の役目となった。

眞理がお茶を入れ始めると高弟達もその技を身に付けようと集まってくる。

だから、今も眞理の周りには何人もの高弟が座っていた。

「お母様、大丈夫です。」

沙希ちゃんはある安部晴明様が太鼓判を押す陰陽の術を身につけていますし、

安部晴明様自身にも見守っていただいております。

それに、いつも近くには沙希姫様を宿す律ちゃんもいるんですもの」

「眞理はんは強いお人どすなあ、うちは小沙希ちゃんのことになったら

もうどうにもならへんのどす」

といつてから空になった湯呑みを眞理に差し出す。

「今日のお茶は特別美味しゅうおすと催促している。」

一方、井上家からそんなに離れていない祇園の御茶屋「菊野屋」では朝早くからバタバタと騒がしい。

2階で寝ていたタバ遅くまで働いていた花世達にはたまったものではない。

いきなりガバツと起きた花世がドスドスと階段をおりていく。

床から這い出た花江達が畳に耳を押し付けて階下の様子に聞き耳をたてた。

花世が大きな声で女将を叱りつけている。

「お母ちゃん、何しているんだす」

どうも花世はついこの間、沙希を叱りつけたことで自分に自信をもつたらしい。

いつも相手の顔色を伺っていた同じ少女とは思えない。

ボソボソと女将の謝るような声が聞こえる。

「いいですか、お母ちゃん……」

とガミガミ注意する花世……少し気持ちが治まったのか2階へあがってくる花世の足音。

慌てて布団にもぐりこむ芸妓や舞妓達、

そんな様子も百も承知だった花世の声が大きく響いた。

「お姉さん達、もう起きてはるんでしょ。……さあ、起きた起きた……」

と掛け布団を引っ剥がしていく。

「何するんだすか」

と文句をいうと

「あら、お姉さんだけお留守番するんだすか」
と冷たい声でいう。

「えっ？」

「今日はホラッ、小沙希さん姉さんのテレビがある日です。」

井上先生のところでお手伝いを兼ねて皆さんと一緒に見る約束した
んを忘れたのどすか？」

「あっ！」

という声でみんな飛び起き、慌てて布団をしまったり身支度を整え
始めた。

「じゃあ、お母ちゃんがバタバタしていたのは……」

「へえ、朝早うからお百度ふんできはってから菊奴さん姉さんにお灯明をあげて

ついでに安倍晴明はんにもお祈りして部屋の中を行ったりきたり今日着ていくおべべを用意したり、あんなお母ちゃん初めてやわ」

「そりゃ、仕方あらしまへん。小沙希ちゃんが今日凄いいことしはるもの。

お母ちゃんかて心配たまりまへんのか」

「うちかて。心配でたまりまへんわ。

どうして小沙希さん姉さんて、あんな変な事件にばかりかかわってしまっんどすやる。

それにあんな素晴らしいソフトを作ったり笛も舞も・・・あんな凄いい人うちみたことあらしまへん」

「うちらもどす、花世ちゃん」

「うちなんか、もう・・・もう・・・鼻高々どすえ」

「そうや。うちらも小沙希ちゃんと家族なんやと思うと・・・もうたまりまへんわ」

そこに階下から

「あんたら、早う早う・・・」
と女将の声が聞こえてくる。

花世はちらつと時計を見て

「もう、お母ちゃんつたら・・・まだこんなに時間が早いのに・・・」

「仕方あらしまへん。さあ、みんな早う支度をしよし。遅い娘は置いていくえ」

花江の一声に

「キヤー」

とって娘達が大慌てで支度を急ぐ。

.....

京都から遠く離れた東京では真新しい間仕切りのドアを開けて

「おはよう！」

と理沙が入ってきた。

「あつ、理沙さん」

古くからいる早乙女事務所の玲子が挨拶をする。

部屋を見渡すと見知らぬ女の子達が誰だろつと様子を伺っている。

「玲子、まゆみさんは？」

「社長は今、城田さんと会議室で上の専務さん達と会議中です」

「時間かかりそう？」

「いいえ、そんなには」

「じゃあ、待っているわ。・・・ねえ、玲子。

知らない人がたくさんいるけど・・・紹介してくれない？」

「いいですね。・・・みんなちよつと聞いて！」

と大きな声で注意を促す。

「みんなに紹介しておくね。この人は早瀬理沙さんと言って薫さんの姪御さんで、

日野あきあこと早瀬沙希さんのお姉さんなの」

「早瀬理沙です。皆よろしくね」
と挨拶すると

「うわゝ、美人！」

という声が聞こえる。

「ありがとう！」

とってパチンとウインクをする。

「うわあゝ」

と大きな声をあげパチパチと拍手をする娘もいた。

そんな声が合図であったかのようにドアが開いてまゆみ達が入ってきた。

「理沙、珍しいわね」

「理沙ちゃんどうしたの？」

静香も入ってきて声をかける。

「いえね、ママは京都に詰めつきりだし、

家で1人テレビをみるのもなんだから里へ行ってこようかと思って」

「お仕事は？」

「東北へいった記者達が沙希達にまかれて帰ってきているのよ。

うすうす私と沙希の関係を感じきはじめてた者もいて逃げ出してきちゃった」

「大丈夫なの？」

「へっちゃらよ。今日さえ乗りきれれば明日からは何とかなるわ」

「理沙らしいわね。じゃあ、里に帰るんなら頼みがあるの」

「何？」

「まだまだ人手が足りないの。最低でも5人以上必要なの」

「そんなに連れてきて住むところはあるの？」

「ええ、大丈夫よ。澁先生が寮に住んでいた女の子達をねこそぎ

京都に連れて行ったから今は誰もいないわよ」

「じゃあいい子連れてきてあげる」

「頼むわね」

「OK！」

と行って理沙が出て行った。

「ママは帰って来ないのかしら」

まゆみが静香に聞くと

「井上のお祖母様が離さないわ」

「そうねえ、いっそうお祖母様をこちらにつつす……ってことは無理ねえ」

「そうよ。祇園の宝だし、人間国宝だもの」

二人して吐息をはく。

「こちらも沙希がいろんなもの開発するからてんでこ舞いだし……」

「文句をいわないの」

静香がたしなめるほどうれしい悲鳴を上げっぱなしだ。

「静香さん、来週にはNASAから人がくるんでしょう？」

「そうなの、どこから知ったのかしら。いきなり国際電話があつてまるで狐につままれたようにあれよあれよと来日が決まってしまったのよ」

「心配ならそのときはママの妹の松島奈美さんに同席してもらったらいいわ。」

あの人なら安心してまかせられるわ」

「不思議だしわからない人ですねえ。どんなお仕事をされているのかしら」

「私も知らないわ。あの人のことになつたらママ達姉妹の口が堅くて……」

それはそうと今日は本当に会社で皆でテレビを見るの？」

「ええ、そのためにあんな大きなテレビを買ったんだし、今から会社の女の子達と買出しよ」

「じゃあ、うちも女の子を手伝いに……」

「本当？助かるわ」

「玲子。3人ほど連れて手伝いに行つてくれる？」

「はい。じゃあ、亜紀と・・・」
といつて3人の女性を指名して部屋を出て行く。

・・・・・・・・・・・・・・・・

桜田門の新庁舎の鬼より恐いといわれる捜査第一課の部屋では
連続殺人事件も刑事達の苦勞の末、犯人を捕まえ調書などあらゆる
書類も全て書き終え、
検察庁へ犯人ともども送致し終わったので刑事部屋にもゆつたりと
した時間が流れていた。

捜査第七係の係長でもある飛鳥泉警部も部下達が作成した書類に目
を通すだけで一日が過ぎていく。

「係長！今日は早く帰られるんですよ」

お茶を出しながら婦人警官の有佐ケイが聞く。
書類から顔をあげて泉が

「ええ、今日は特別の日だからね」

「わたしも早く寮に帰ってテレビを見なくちゃ・・・・・・・・えつと・・・」

と何か言いくそうにしていたが

「どうしたの？」

という泉の声に

「係長のいとこの日野あきあさんってどんな人なのですか？」
と思いついて聞く。

泉は書類をパタンと閉じて

「そだね。一言では言い表せないほどの不思議な子よ。」

ああいうのが頭脳明晰っていうのかしら、あの子が一睨みすれば何

でも判ってしまうし、

コンピューターの天才だし……それに……」

「それに？」

「とても性格がいい可愛い子よ。……それがどうしたの？」

「いえ、一度お会いしたいなっと思ってまして」

とモジモジと言う。

「いいわよ、例の機械のことで打ち合わせにここにくると思うから紹介してあげる」

「うわあ」

とつい大きな声を出してしまつて、慌てて両手で口を押さえた。

だが、二人の会話はそばで猛者といわれる刑事が聞き耳を立てていて

有佐ケイの喜びの叫びとともに目を輝かせていたのはいうまでもない。

一方警察の大元締め警察庁の中、広域捜査の一係では

飛鳥京警部を長とする女性1名、男性2名の刑事達4名が打ち合わせをしていた。

「……ということで、この事件は犯人を逮捕寸前に自殺される最悪の結果となつてしまいました」

「畜生！あの時こちらの指示通りしたがっていてくれたら、

みすみす犯人を死なせはしなかったのに……」

「仕方がないさ、警察の縄張り意識は強固だからなあ」

「菅長さん、仕方がないことはないわ。あのコチコチの石頭の署長は
いずれギャフンといわせてやらなくちゃあ腹の虫がおさまらないわ
よ」

鼻っ柱の強い女刑事が言い放った。

「まあまあ、いずれこの挽回はするとしてこの何ヶ月ものみんなのがんばりに感謝します」

と京が頭を下げた。

「係長！そんなことなさらなくてください。自分達は申し訳ない気持ちで一杯なのですから」

デカ長の声に京はニッコリ笑う。

「ところで、今日はテレビ放映があるんですねえ」

という女刑事の声に

「なんだい、テレビは毎日やってるじゃないか」

「あれ！菅長さんは知らないんですか？

係長のいとこの日野あきあのテレビが放映されるのを」

「えっ・・・本当ですか？」

「日野あきあつて本当の陰陽師だといわれてますけど本当なのですか？」

「ええ、不思議な術を使うし、みんなも知ってのあの機械を作るし、

あんな子は世界中を探したっていないと思うわ。

いえ、決して身内だから言ってるのじゃないのよ。

とにかく事件に追いまくられて、

人間の嫌な面ばかり見ている私にとって天女のような可愛い少女なの」

「そんなに可愛い人なんですか？」

「そうねえ、さしずめあなたなら会ったとたんまいってしまっわよ」

「一度会いたいですわ」

目を輝かせて言う。

「いいわよ、そのうちあの機械の打ち合わせにくるから・・・」

下界の騒ぎをよそに、静かで美しいこの湖畔で別世界のようによくりと時間が流れていく。

すっかり撮影隊の準備が出来上がりあとは放送時間がくるのを待つだけだ。

緊張感は俳優達よりもスタッフにより強くあらわれ、何度も何度も機械の調整をおこなっていた。

沙希・・・いや、日野あきは小高い山に建つ寺の境内にある大きな岩の上に立っていた。

その後ろ姿に律子が近づいていこうとしたが和尚に止められた。

「やめておきなさい。あの子は今無我の境地にいる。いやはや見事な立ち禅ではないか。我々坊主でもあれほどの禅を組めるものは、

この日本になにほどもおりません」
律子の横に立った和尚が言った。

「でも和尚さま、もう時間がないんです」
律子は和尚を見て言った。

「そうか・・・では仕方あるまい」
と、いって数珠を握った右手をあきあに向かつてあげ
『カアツ』と気合をかけた。

その腹の底からの和尚の気合に律子は飛び上がって驚き、
「ハアハア」

と心臓を押さえて和尚を非難するように見たが、
和尚は

「おう・・・おう・・・」
と唸るような声をあげながら幾度も頷いている。

律子は和尚の視線の先・・・の、あきあを見ると
ニツコリと微笑んだあきあがこちらを向いて立っていた。

律子は気がつかなかったが

和尚のあの鋭い気合にも何の動揺も見せず自然体で
振り向いたあきあ笑顔に和尚も感心しきりだったのである。

あきあのゆったりとした時間はここまでだった。

冒頭のドラマ部のリハーサルや打ち合わせ、
そして本番へ向けてのメイクと時間が目まぐるしく過ぎていく。

ここで本日の配役を紹介しておこう。

日野あきあ 千賀 : 巡礼の母をいき倒れで亡くし村で一人生活する少女。

不思議な能力を秘めている。

小橋千賀子 : 祖母と旅行にやってきた女子大生で気象庁に就職が

(二役) 決まっている。父は考古学者でエジプトに

母は冒険家でヒマラヤに。

千賀子自身は地震学を学んでいる変わり者である。

この村で千賀子の能力が目覚める。

早乙女薫 樋口鳶湖 : 旅館『鳶』の女将

天城ひづる 樋口かな : 鳶湖の一人娘 無口な子ながら不思議と千賀子になつく。

大空圧絵 足立千恵 : 千賀子の祖母。旅行中に足をくじきようやく着いた

旅館『蔦』で寝込んでしまう。

幸田朱尾 峰巖和尚：山の荒れ寺の和尚、常に般若湯を横に置く。

？ 龍の精 …子龍。紅龍という。千賀との間に人と龍を超

えた

愛情が目覚める。

飛龍高志 幸太郎 …庄屋の息子。千賀に横恋慕し紅龍との逢瀬を脅迫、

千賀を無理やり我が物にする。

他、映画の共演陣の出演で脇を固める。

数少ない村人や山寺の和尚に見つめられながらこうしてドラマが始まった。

…時代は江戸初期、東北地方のとある山間部、大小の湖のある小さな村があった。

小さいながらも湖水により農作物にめぐまれた豊かな村であった。
……という冒頭部のナレーションが流れる。

この途方もないドラマの挿入部の時代劇は昨日録画していた。
挿入部といってもこの事件のきっかけとなった重要な出来事であるので

おろそかには出来ず90分の枠をとっている。

忙しく立ち働いているスタッフ達を横目に放送をみたりして
ゆったりと時間を過ごしている俳優達……。

だがあきあだけは監督や舞台監督、

アクシヨン監督やスタッフとこまごまとした打ち合わせがひっきり

りなしである。

スタッフ達は次から次へと並んであきあの指示を待っている。事故が起こらないような対策はいくらやっても無くなりはない。ましてや相手は何百年も地中に囚われ、愛する人を亡くし憎悪の塊となって生き続けているのである。

予想し難くいくら安全な対策をたてても100%とはいかない。でもそれを100%にちかづけるよう思いつく限り小さなことでもあきあはあるそかにはしない。

大変なのはあきあについている新人マネージャーの瑞穂である。あきあの発した指示をどんなことでもそばで書き記していく。あとで言った言わないと揉め事がないようにという順子の指示であった。

驚いたことにもう大学ノートを2冊目も半分以上使っていた。ようもこんなことまでといったささいな事まで指示している。それでもまだあきあは不安そうだ。

生放送の時間はこうして刻々とせまってきた。

・・・そして、録画放送が終わった。

天界僧正によって子竜が地中深く封印され、母龍も天海の放った封印の矢によって天から舞い落ち湖の中で眠りについた。

・・・という場面でナレーションが流れはじめた。

ナレーターは生まれて初めて早乙女薫が担当している。

「こうして龍と人との相容れない悲劇によって伝説が生まれた。

だが、伝説は伝説では終わらなかった。

天海僧正の予想を上回る子龍の憎悪が事件にかかわった村人達をこのまま許しはしなかった。

呪い、祟りという元に1人また1人とその一家をもるとも根絶やしにしていく。

そして・・・そして、1人残ったのは何の因果かこんな出来事のきっかけを作った、

今はお庄屋となり名を幸兵衛と改めた幸太郎であった。

だが幸太郎は嫁をもらい子を成し、

そして40歳を迎えたある日、朝冷たくなっているのを家族が発見した。

幸太郎の最期の表情は何かを恐れるがごとく醜く歪んでいた。

こうして庄屋の一家の跡取りは例外もなく悉く40歳を迎える年に命を落としていった。

時代は移り変わり世の中は驚くべき進化をとげる。

しかし、お庄屋は山村という姓を得るがその背景はかわらず、跡取りは40という歳を超えることはなかった。

そして、平成の御世の現在・・・」

こうして生放送が始まった。

山道を登ってくる二人の女性、年配の女性は足をひきずり

若い女性は両手に荷物を持って年配の女性に肩をかしながらゆっくりと歩を進めていく。

「千賀ちゃん、ごめんね」

「何を言ってるのよ。お祖母ちゃま」

「だって、私の不注意からこんなことになったのよ。」

あの場所から私を送り帰して1人で旅行しても良かったのに」

「いやよ」

「えっ？」

「そんなの嫌って言ったの。だって一人で旅行しても面白くないもの。」

それに私、お祖母ちゃまと一緒にいけるから旅行にきたのよ。

一人だったら家でくつろいでいるほうが余程ましよ」

「まあまあ、またそんなことを言っつて。千賀ちゃんあなたって本当に男みたいな性格だわね。何でもめんどくさがって・・・」

「だって嫌なものは嫌なもの」

「そんなのでは良い男の人を見つけてお嫁にいけないわよ」

「いかないわよ、そんなの。結婚なんて真つ平！」

私は一生独身でいいの。それに、男なんて大嫌い！」
と言い放った。

「あなたって、こうと決めたらテコでも動かないんだから・・・。
としかたないというように首を振った。

その時、風が出てきたのか『ザワザワ』と木立の音とともに

『千賀』

という声が千賀子の耳に届く。

「えっ」

という顔で祖母を見ると下を向きながら痛みを耐えながら必死に歩いている。

千賀子は歩きながら周囲を見渡しても声をかけるような人影は見当たらない。

「どうしたの？」

「えっ？ううん、何でもなし。あゝあ、いい空気」

と大きく深呼吸をする。

二人が予約していた旅館にたどりついたのは、それからしばらくしてからのことだった。

途中休み休み来たのだが段々と祖母の顔色が悪くなってきた。額に手を当てると少し熱があるようだ。

「こんにちわ」

「はい」

と出てきたのは着物をきたこの旅館の女将だった。

「遠くからようこそおいでくださりましてありがとうございます。」

さぞお疲れになったでしょう。・・・あら、どうなされたのですか？」

「祖母が途中で足をくじいてしまったのです」

ぐったりと玄関で座り込んでしまった祖母に代わって千賀子が答え
た。

女将は素早く祖母の脈をとり、額に手を当てて熱をはかる。

「少し熱がありますね。脈も速いようだし、早々に横になったほうがよろしいですね」

といつてから奥のほうに声をかける。

「まささ〜ん！・・・あっ、すぐに2階の桜の間のお部屋を1階の桔梗の間に変えてちょうだい。」

それとすぐにお布団の用意もね」

とてきばきと指示していく。

女将は千賀子に向き直り

「小橋様には景色の良い2階のお部屋を用意してありましたのですが、

お祖母様の様子では2階まで上がるのも出来ないと思えますわ。

かつてですが1階のお部屋にかえさせていただきました。
このほうが私共の目も届きやすいですから」
と千賀子が恐縮するほど気配りをしてくれる。

「ここの温泉の効用は打ち身とか捻挫ですの。

でも、今日はお熱も高いようですから温泉には入られませんように」
女将さんと仲居さんの手で布団に寝かせられ赤く腫れた患部にシツ
プを、

そして痛み止めと熱さましを吞まされた祖母は
熱と疲れからかまたは薬の効果からかすぐに軽い寝息をたて始めた。

こうして女将と千賀子は静かに次の間に移動する。

女将は千賀子にお茶を入れてくれながら、この村に伝わる伝説を教
えてくれた。

少女と龍の悲恋物語、何故か千賀子の心の琴線にふれるものがあっ
た。

そして、もう一つ……。

「あのう、女将さん。このあたりに千賀って方おられますか？」

「千賀?・・・いいえ、そんな名前の方はこの村にはいません。」

観光のお客様は今週に入って小橋様一組なのでから」

「えっ?私達だけ?」

「ええ、この地はそんなに観光名所があるわけではありませんし、
交通の便が悪い上にこんなひなびた温泉宿にそうお客様はいらっし
やいせんもの」

ではどうやって・・・と口に出しかけたがその言葉を慌てて飲み込
む千賀子。

でもさすがは女将そんな千賀子の心を汲み取って

「ほほほ……、ここでは食べ物自分達でつくってますの。
この地で作られる農作物や果物のおいしさは評判で売れ残ることは
ありませんのよ」

と笑っていたが話が横道に逸れたのに気づいて

「あのう、千賀というお名前の人が何か？」

「いえ、ここにくるまでの道筋で幾度も『千賀』、『千賀』
と何度も名前をよばれたのです。でも私、千賀子って名前ですけれ
ど」

今まで『千賀ちゃん』とか『お千賀』って呼ばれましたけど

『千賀』なんて呼ばれたことないんです。

だから、他の人のことかなあって……、

それに、不思議なんです。あんなに大きな声が聞こえていたのに祖
母は知らない振り、

……いえ祖母はすごく耳がいいんですよ」

とその時、入り口の襖がスーと開き一人の可愛い少女が立っていた。

「あら、可愛いお嬢ちゃん。どうしたの？」

ちょうど女将の後ろの出来事なので、先に気づいたのは千賀子だっ
た。

少女は少しはにかみ笑いを浮かべて千賀子を見たが、
すぐに女将にむかって

「母様、少しお外で遊んできてもいい？」

と声をかける。

「あつ、かな！駄目じゃないの。」

お客様の部屋に入ってきてはいけないといつもいつているでしょ。」

と言葉はきついがその声には優しさが含まれている。

「女将さんのお嬢さんですか？」

と女将に聞くと、

「ええ、．．すいません。いつもはこんな無作法をする子ではないんですが」

と不振げにわが子を見つめる。

千賀子はかなに笑顔をむけると

「ねえ、かなちゃん。お姉さん、この辺りを少しお散歩をしたいの。案内してくれない？」

というとき少し驚いた顔をしたがすぐに『コクン』と頷いた。

「じゃあ、少しお話をしてからね。こつちへいらつしやい」

というとき、嬉しそうに千賀子の隣に座りすぐに、その小さな手で千賀子の手をしっかりと握る。まるで大切なものを無くさないようにと．．．。

女将はそんな我子の様子に

「まあ、こんなこと初めて．．．。

この子は無口で人見知りが激しく、どんな人でも近づきもしないのに」

驚いたようになんと千賀子を見比べている。

「何だかこうしてみると本当の姉妹みたい」

千賀子の身体に安心したように寄りかかっている我子が何故かいとおいしい、微笑ましい。

「女将さん先ほどの話の続きなんですけど、

『千賀』という方がいないとしたら、私の幻聴なのかしら．．．。」
というとき、隣のかなが千賀子を見上げながら

「お姉ちゃん、千賀っていつの？」
と聞いてくる。

「ちょっと違うの。私の名前は『千賀子』というのよ」
「じゃあ、お姉ちゃんに聞こえたには紅龍様の声だわ」
「紅龍様？」

「ええ、山の和尚様がいつてらしたの。
伝説のお話は本当のことで、今も土の中で生きていらっしやるって」

「山の和尚様？」

女将が話しを引き取って言う。

「山の中ほどに龍雲寺という荒れ寺があります。
そのお寺を守っておられる峰巖というお坊様のことなんです」

「かなちゃん、ごめん。お散歩は止めにしてそのお寺に連れていって
てくれない？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、暗くならないうちにいそいで行こうか」
と立ち上がる。つられてかなも女将も立ち上がった。

「あのう・・・」

と改めて女将に向かうと

「わかってますよ。お祖母様のことはおまかせください」
とポンと自分の着物の胸をひとつ叩いた。

「すみません。じゃあかなちゃんをお借りします」
とおじぎをするといそいで部屋を出て行く。

女将は玄關を出ていく二人を見送った。
かなが本当に嬉しそうに千賀子の身体にまわりつき
そして飛び跳ねるように歩いて行く。

「ほんとう、不思議な娘さんだこと。」

「でも、こうしてみていると本当に仲の良い姉妹みたいだわ」と微笑ましさで自然と顔がほころんでくる。

「お姉さん、あの大きな木の後ろにみえるのが和尚様がいるところなの。」

「うん。……かなちゃん、嬉しそうね。和尚様が好きなの？」

「ええ、母さまの次に好きだったわ。」

「だった？……。」

「今は和尚様は三番目！」

「?……。」

「母様の次はお姉さんよ。」

千賀子は手をつないで歩くかなを見る。

さつき初めてあったばかりなのに本当の妹のように思える。

1人娘だった千賀子は昔、母に妹が欲しいとだだをこねて困ったと今も言われるほど寂しい想いをしてきたのだ。

だから、今この瞬間スキップしたくなるほど心がはずんでいる。

木々の間から二人に心地よい風が誘ってきて、本当に旅行にきて良かったと思う。

でも知らなかったのだ。これから千賀子の身にふりかかる常識外の出来事と

それによって普通の女の子には戻れなくなるのを……。

いきなりかなが走り出し、山門に入っていく。

「和尚様〜」

と大きな声が聞こえる。

千賀子も少し早足となって山門をくぐる。

境内から見るお寺はなるほど荒れてはいるが、

人の手が入り修理されている形跡があちらこちらに残っていた。

かなは本堂の縁に腰掛けて千賀子に向かって大きく手を振り呼んでいる。

「お姉さん〜、こっちよ〜」

千賀子が本堂への木の階段を上がると、すぐになが歩み寄って手をつないでくる。

「和尚様、私のお姉さんよ」

とまるで本当の姉のように紹介するのだ。

見てみると本堂の影の中に枯れた感じの和尚が大きな徳利を目の前において

湯のみでグビグビと酒を飲んでいた。

こんな昼間からと思わぬでもないが、

普通のお坊さんではないと思うのは千賀子を見つめるその眼光の鋭

さ・・・

でも不思議と恐さは感じられない。

靴を脱いで和尚のそばに座る。

いつのまにかその目は柔らかなものになっていた。

和尚は湯のみを注げ！というように千賀子の目の前に差し出す。千賀子は徳利をとりあげ、ゆっくりと注いでいく。

「うまいのう……」

和尚は千賀子に酌をされた酒を飲むとポツリとそう言った。

不思議そうな目で二人を交互にみつめるかな、

子供ながらも二人の間に流れる一種の緊張感がわかるのであろう。

「お主、いい目をしている。そして、身体から溢れるその力。金色に光ってまぶしいくらいじゃ」

「私の力？」

「そう、金色の力じゃ。菩薩様の瑞光とよく似ておる」

「私自身、何も感じませんが……」

「まだ覚醒していないのじゃろう。だがそれもそう長くはあるまい」

「ねえ、お姉さん。和尚様に早く千賀っていう人のことを聞いたら？」

とかながしびれをきらして言った。

「何！千賀だと！」

と和尚が声をあげる。

「どづいつことじゃ」

と千賀子を見る。

千賀子はさきほど聞いた『千賀』『千賀』という声のことを和尚に話した。

「ふむ……お主はこの地に伝わる伝説は知っておるかのう」

「はい、先ほど旅館の女将さん……いえかなちゃんのお母様に聞

いてある程度は……」

「そうか、では伝説の中の少女が『千賀』と言つ名前だったことは知っておるかのう」

「えっ？いいえ。その少女は『千賀』という名前なのですか。でも、それは伝説なのでしょう」

「いや、あの話は本当にあったことじゃ。

その証拠に生き残つた一族の長となるものは例外なく40歳になると死んでいくのじゃ。

この寺の裏には一族の墓もある」

「じゃあ、私が聞いたのは？」

「地に封印されている紅龍の声じゃ」

「どうして私に聞こえるのかしら」

「『千賀』という名前、お主も『千賀子』……」

どうも1字違いだが名前も同じじゃ。……ところでお主、どうしてこの地を旅の目的地に選んだ」

「えっ、どうしてって？……ただ静かな温泉に行きたいなと思って……」

偶然……ということでは？」

「いいや……千賀じゃ、千賀がお主を呼び寄せたのじゃ。

もしかして、お主は千賀の生まれ変わりかも知れぬ」

「私が？……千賀さんの生まれかわり？」

和尚の言葉で……一瞬に心が『空』となる。そこに何かの強烈な力が流れこんできた。

そしてその力が千賀子の身体を動かしていく。まるであやつり人形のように……。

和尚とかなが見つめるなか、千賀子は立ち上がるとスベルように移動する。

その眼は『空』を見つめ、その体からは余分な力が抜け落ちまるで無我の境地にいるようだ。

慌ててかながあとを追おうとしたが和尚が押しとどめた。

生まれ出てきた力は千賀子を湖の見える崖にある岩の上に導いた。岩に座り込んだ千賀子は、いつも持ち歩いている細長いポシエツトから

家に古くから伝わる横笛を取り出す。

本堂から見ている二人には千賀子の背中しか見え何をしているか判らなかったが和尚の目には座禅しているように見える。

そのうち、笛の音が聞こえてきた。

するとこの寺の空気が一瞬に変わったのである。

清々しい空気を風が本堂の中にも運んでくる。

自然と佇まいを正す二人、初めて聞く旋律だがなぜか懐かしさに心が震えてくる。

その細胞一つ一つに語りかけてくるような……。

木々のささやき、小鳥達もさえずりをやめて聞き入っているようだ。

……そして……笛の音がやんだ。

ハッと我に返る千賀子、目から溢れる涙が頬を伝わって落ちる。涙を拭こうともせず……いや自分が涙を流しているのさえ判っていない。

そんな様子をみて、かなが走り寄ってきた。
千賀子の右腕をその細い両の腕で抱きしめ、心配そうに千賀子の顔を見上げている。

途中で自分の状態に気づき

「いやだ・・・わたしたら・・・」

といてポシエットからハンカチを取り出し流れ落ちる涙をふき取る。

だがそんな千賀子の涙を小さいながらも

「きれい・・・」

とかながいった。

そんなかなの声にやっと千賀子らしい笑顔で答える。

「ありがとう」

・・・と。

再び、本堂に戻り二人が座るのを待つて

「見事なものだのう。・・・いや、お主の笛の音は・・・」
と和尚がいう。

「それにその笛も名笛じゃ」

「これは我家に伝わる『龍雅』という笛です」

「ほう・・・しかし、ようも若いお主がのう・・・」

「はい、いまでも祖母から幼い私とこの笛にまつわる不思議の話は聞かされております」

といったがその先は言おうともしないし聞こうともしなかった。

「・・・して先程のお主の涙はどうしたのじゃ」

「良くは覚えてはいません。でも気づいたときは私は私が吹く笛の音に乗ってあの湖の向こう、」

あの草原にある小さな祠まで飛んでいったのです。そして、祠の後ろにある洞窟に吸い込まれるように入っていくました。

洞穴の地下の真つ暗な闇は人を呪う空気が満ち溢れていました……でも」

「でも……？」

「はい、そんな空気も悲しさ苦しきのほんの一部でしかないと感じたのです」

「ふむ、あの子龍は今だに千賀のことをのう」
とぐい呑みを畳の上におき、腕を組んだ。

「和尚様。私がこの地に来たのはやはり偶然ではありませんでした」

千賀子の言葉に和尚は『うん、うん』と頷く。

「私を導いてくださったのは菩薩様……」

和尚は何も言わずに千賀子を見つめている。しかもその眼は慈愛に溢れていた。

「お主……、やるのか……」

頷く千賀子に

「止めても止められぬ……か」

とぼそつとため息のような一言。

「そうさな、これは菩薩様を選ばれたお主しかやれぬからのう」

「はい。これは私が生まれてきた役目のひとつなのです」

「そうか……だが、お主の力はまだ完全には覚醒しておらぬではないか」

「はい、今ははっきりと自分の力のことが判ります。でも、これ以上の力は欲しくありません」

ときっぱりいつてから湖にむかって座りなおして眼を閉じた。

その口からは『ぶつぶつ・・・』と微かな声でなにかを唱えだした。白い額に玉のような汗が浮かび上がってきたとき、どこから湧き出てきたのか真っ黒な雲が青空を一瞬にして覆い隠してしまった。

「きゃあ・・・」

と暗闇の中から叫び声が聞こえたのは大きな雷鳴とともに周囲が白い光を浴びた時だった。

その光の中、旅館の女将・・・かなの母、樋口蔦湖が本堂にかけ上がってきたのだ。

「母様！」

といつて立ち上がって母を迎えるかな。

タイミングが良かったのか、バケツをひっくりかえしたような

豪雨が轟音とともに地面を打ちつけ瞬時に池のようになったのはそんなかなを庇うように本堂の障子の後に座りこんだときだった。

千賀子はそんな周囲の様子を気づいているのか気づいていないのか身じろぎひとつせず一心に何かを唱えている。

和尚は千賀子を見つめながら闇の中に何やら気配を感じ視線を移した。

「おおう・・・」

和尚の口からそんな声が発せられたのは

『ギー・・・ガオウ・・・』

と腹の底に響く何か恐ろしげな声が空の彼方から聞こえてきた時だった。

女将は愛娘のかなと顔を見合わせながらも、
怖いもの見たさに障子から恐る恐る顔をだし、思わず息を呑む。
その眼に映ったのは……。

真つ暗な空に何やら蠢いているのだ。

そして、雷光に写しだされるのはこの世のものとは思えないもの・
・大きな一匹の龍だった。

光のせいなのか写真を反転したネガのような白黒の配色だったが、
時には雷光のせいでその身体の鱗が真つ赤に光輝いていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ひゃあ・・・あれ本物だわ」

空を飛び回る龍の姿をみて智子が叫ぶ。

あきあが作った異次元空間のような結界の中での騒ぎだ。

ちなみにこの空間をスタッフ達は『ステーション』と呼んでいた。

『ステーション』は結界によってつくられた外から見えない空間に
あり、

カメラマン1名と助手2名が乗り込んでいた。

だが、瑞穂と智子が乗り込んだ『ステーション』は『メインステー
ション』と呼ばれ

『中央』からの指示を聞き取れる唯一の『ステーション』であり
計12ある各『ステーション』に『インカム』にて瑞穂が指示を伝
えているのだ。

それと共に安全のチェックは怠らない。・・・撮影は順調に進んで
いる。

各々の『ステーション』からの映像は『中央』にいる小野監督が

モニターをみてスイッチングにて切り替えて東京のテレビ局に送信している。

だから小野監督は気の休まる暇もない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「お・・和尚さま！・・あれは？・・」
やっとの想いで女将が声を出す。

和尚も腹に力を入れて

「ふーむ・・あれはこの湖に眠っていた母龍の緋龍じゃ」

「では、やはりあのお話は本当だったのですか？」

「そうじゃ」

和尚の返事に思わず息を呑み、そして再び空を見上げる。

あれほど降っていた雨もすっかりあがり、暗かった周囲も段々と明るさを取り戻していく。

龍は静かに舞い降りてきた。

そして尻尾は湖につけ、身体はやまの傾斜に横たえている。

そう、龍は崖から顔を出しこの本堂を睨んでいたのだ。

余りの恐ろしさに女将は我が子を強く抱きしめ、『ギユ』と眼を閉じる。

その女将の耳に静かな口調の千賀子の声が聞こえてきた。

「緋龍様！あなたは紅龍様のこと、どこまでご存知なのですか？」

いきなりのそんな言葉に、響きわたる重々しい声で

『知らぬ！何故じゃ！何故、人の身で我が子にあのようなことをした』

何も知らぬ母龍は凄まじい怒りを発していた。

「ではお話ししよう」

と千賀子は龍の怒りを受け流して伝説に沿って……いや女将が知る伝説とはかなり異なっていたが、悲恋には変わりはない。

庄屋の息子に犯された千賀が湖に身を投げる話になると

『待て！人よ。我が子の想い人……千賀といったな、その名に間違いはないか』

「はい、千賀さんに間違いありません」

「人の娘よ、ではお主の名はなんと申す」

「私の名前ですか？……私は千賀子と申します」

「ほう……お主も千賀か……先を続けよ」

母龍は何か考えているようだったが、龍の表情など読み取れるものではない。

母龍は千賀子の話にはもう口をはさもうとはせず、じっと聞いている。

「………というわけで、

天海僧正が怒り暴れる紅龍様を結界を張って地の奥に封印したわけです」

『そのあとは話さずとも良い。』

天海僧正が紅龍を助けようとした私を封印して湖の底に眠らせた………ということか』

「はい……それ以来300年。

でも紅龍様の怒り、呪い、悲しみは収まるどころかその力はいつそう強くなっています。

千賀さんへの愛は哀しいほどにせつなく、人に対する呪いがよりいっそう強烈に

特に庄屋さんの血を継ぐものは40年しか命を長らえさせないほど、

呪い狂わせているのです。……
緋龍様、このままではいけない……このままでは二人、千賀さんの魂も紅龍様も救われません。
紅龍様をあのような地獄から救い出すため緋龍様のお力をお貸しく
ださい」

『千賀子よ、お前自身の力であの子を救ってくれ!』
「龍神様を救う!私にそんな大それた力があるのでしょうか?」
「お前にしか出来ない。この地球に億という人間がいるがあの子を
救えるのは

千賀の生まれ変わりである千賀子しかないのだ」

「やはり私が千賀さんの生まれ変わり?」

『そうだ。それに千賀子には菩薩様の瑞光と同じ金色の力が備わっ
ている。』

その力であの子を苦しみの中から救い、この地に平安を取り戻して
欲しい』

そして

『お前にこれを渡しておく』

というとなにか光るものが飛んできて千賀子の膝の上に落ちた。

その手の平の大きさの鏡のようなものを取り上げると

『それは私の鱗だが何かの役にたつ、持っていてほしい。それから
もう一つ』

というとその口の中から赤く光る小さな珠がフワフワと飛んできて
千賀子の目の前で留まっている。

「あっ、これは」

と行ってその珠に手を持っていくと、その手の平にふわっと乗った。

「緋龍様、これは人の魂ですね」

『よく判ったな。それは千賀の魂なのだ。私の湖に入水したとき千賀の魂は天に帰らず、私の身体の中に留まってしまった。私は千賀が我が子の想い人とは知らず今の今まで放っておいた』

千賀子は両手でその赤い珠を受け止め、

『フー』と息を吹きかけると、赤い珠は宙に浮き上がりそして、再度ゆっくりと舞い降りてくる。

その赤い珠の外側に人型が浮き上がってきたのだ。

最初はボンヤリと段々その輪郭がわかるようになってきた。

赤い珠が心臓の位置に足が畳の上30cmぐらいでその現象も止まった。

その千賀が一生懸命千賀子に何かを伝えようと話しかけていたが、声が伝わってこない。

千賀子は自分の人差し指の先を噛み、プツクリと血珠を出す。

それを口を含み霧状に千賀に吹きかけると、

最初微かな声だったが、段々と人の耳に聞こえる状態になった。

.....

「おい、あの千賀の声が拾えるか」

「ええ、大丈夫です。高感度のマイクですから」

.....

「お願いです。お願いです。紅龍様を！.....紅龍様を！お助け

ください！」

「千賀さん、あなた今の状態をご存知なのですか？」

「はい、私は母龍様の体内で300年、涙を流し続けてきました。後悔して！後悔して！……私、自分のことしか考えていなかった。」

紅龍様の信頼を踏みにじったのです。

紅龍様の悲しみ、苦しみがこんなに深いものは……馬鹿です！馬鹿です！

例えこの身が汚されても生きてさえいればこんなことにはならなかった。

お願いです。紅龍様を……紅龍様を……」

「千賀さん、私はあなたの生まれ変わり……」

「いえ、違います！千賀子様は私のような者の生まれ変わりではありません。」

あなた様はもつと得の高いお方の生まれ変わりなのです。私にはわかってるんです」

千賀子はちらつと緋龍の顔を見たが、何も答える様子はない。

「千賀さん、私はこれから紅龍様の封印を解くために地中にまいります。あなたも来られますか？」

千賀の悲しみに彩られているその顔が一瞬にして喜びの色にかわる。

だがすぐにそれも曇ってしまった。

「紅龍様は私の声が聞こえない……いいえ届かないんです。今の私では駄目なんです」

「千賀さん！あなたの紅龍さんに対する愛情を見せてください。貴女の魂が伝えられないのなら私が伝えます。」

貴女の方が弱いのなら私が力添えします。

弱い心では紅龍様は救えません。さあ、私の中に入って！」

千賀の姿が赤い珠に変わり、千賀子の身体に入ってくる。

身体が光輝き、やがてそれも納まった。

母龍である緋龍がその様子を満足げに見てやがてその姿が消えるように

薄くなりやがて完全に見えなくなった。

第一部 第十五話

「千賀子さん！あなたは……」

今までの不思議を見ていた女将が、身体力を抜いて座る千賀子に驚きの言葉を発した。

「女将さん」

と何の銜もない黒い瞳を女将に向ける。

その瞬間！女将は何も言えなくなった。

……いや何も言わなくても千賀子の心が3人に判るよう開け放たれたといつてもいい。

千賀子の心にあるのは、ただ……千賀と紅龍のために……それだけだった。

「千賀子さん！あなたは自分のこと……何も考えていないの？」

「私？……私はこのため……この日のために生を受けたんです。」

先ほどそれを知ってしまったんです。

私がこの地に来たのも必然だし、こんな力を授かったのも必然、そして私がこれからしようとしていることも必然なんです。

だから、私の身に何があっても……私の人生の必然……いえ、運命なんです」

女将はそういう千賀子に向かって

「でもご家族のこと……」
といいかけたが

「菩薩様に与えられたもう一つの命、

……このお寺の門をくぐるまでの記憶しかない私を置いていきま

す」

「意識が目覚めた時には、このことは黙っていてください・・・和尚様にもお願いします。かなちゃんも内緒よ・・・」
と言つて頭を下げる。

すると千賀子の身体が左右に揺れて二重三重とダブって見え出した。そしてスーッと左右に身体が離れた。薄くなり向こうが透けて見える身体、
そして序々に肉感的になった方の身体がドーウと横倒しに倒れてしまった。

「お姉ちゃん！」

かなが駆け寄つて身体を揺さぶる。

「大丈夫よ、かなちゃん！・・・その千賀子お姉ちゃんは眠っているだけだから」

と頭をあげて座りなおした千賀子かなを見つめて言った。

不思議そうに2人の千賀子を交互に見つめる・・・かな。

「女将さんや、奥にある布団を持ってきてくださらんか」

和尚に言われて奥に走り去る女将を見つめながら

「かなちゃん、その千賀子姉さんをよろしくね」

と立ち上がる。

こんな不思議な現象を目にして、何か大変なことがこれからおこると小さな心で感じ取ったのか

「待って！」

と叫んで立ち上がった千賀子の手を握ろうとした。

でもかなの手は千賀子の身体を通りぬけてしまうのだ。

「かなちゃん、わかったでしょ。今のお姉ちゃんは人ではないの。でもがんばって千賀さんと紅龍さんを幸せにしてくるから。ネ！・・・かなちゃん。皆の幸せをお祈りして！」
と湖のほうに向き直る。

「待て！」

という和尚に振向く千賀子。

「千賀子さんや。・・・止めても止まらぬかのう・・・」
頷く千賀子に

「では、これをお主に預けておこう。」

これは弘法太子が書いたと言われているありがたい経典じゃ
和尚が懐から出してきたその古ぼけた経典は勿論、千賀子には触れることは出来ない。

だが、千賀子の力は経典を光に変え身体の中に吸収したのである。
和尚の手の中のありがたい経典はただの古ぼけた紙に変わってしまった。

「では」

といて皆にお辞儀をすると夕闇せまる湖に向かって滑るように飛び出ていった。

かなが振り返ると母が布団に寝かせた千賀子に掛け布団をかけている。

「母様！千賀子姉さん大丈夫？」

と懸命な口調で聞くわが子に

「ええ、心配いらないわよ。よく眠っているわ」

その様子に和尚は

「さて、わしの読むお経では微々たる力添えしかならんが無いよりましじゃろっ」

とこの寺のご本尊となる大日如来像の前に座りお経を唱えはじめた。

かなはこの本堂の廊下の欄干に身を置き、眼の前に広がる湖を見つめ、

まるで天女様のように見えたもう一人の千賀子に思いをさせていた。

.....

「ようし、これからが正念場だぞ！機器類の点検の指示を頼む。

瑞穂くん！」

「わかりました！・・・監督！」

と言ってインカムのスイッチを切り替え

「こちら、メインステーション！・・・そちらの機器の状態はいかがですか。

報告してください。状態によっては『ステーション』の配置をかえますので至急願います」

「こちらステーション2・・・点検異常なし！」

.....

「こちらステーション12・・・点検異常なし」

「『中央』応答願います。こちらメインステーション！ 各ステーション共異常ありません！」

「ご苦労！あきあの姿は、こちらに送られてきているが、見逃しちやあ駄目だぞ」

「はい！判っています。各ステーションのカメラが全部映し出しているはずで。

でもこのステーションって凄いですね！

こうしてあきあのスピードに合わせて飛びまわれるんですから」

「こんなことに驚いていてはあきあと付き合っではいられんよ。それより、東京から連絡が入った。すごい反響らしい。

放送中にもかかわらず、視聴者から電話がありパンク状態でほかの部署から人手を回しても、收拾がつかないそうだ。……あとは重要な後半部だ、撮りそこなうような無様なまねはしたくない。

死んでも撮りつづける！……各ステーションにそうハツパをかけたおいてくれ」

「判りました。……あっ！……今、千賀子が母龍の緋龍と交信しています。

声は届いていますか？」

「ああ……うまく入ってきている。

でも何かこのドラマはテレビの向こうでじっくりと見ていたいな」

「皆そう思っていますよ。インカムに各ステーションからの声が聞こえていますよ、

このドラマの進行に合わせて興奮した声が聞こえてきます」

「おいおい、そんなことで大丈夫か、カメラマンはもっと冷静にな」

「おほほほ、監督こそ大丈夫ですか？ 興奮して倒れないように！
何しろお年寄りですから！」

「ござー！」

という声と共にインカムを切った。

瑞穂は横にいる智子に『ニッ』と笑いかけた。

「瑞穂も言うようになったじゃない」

「ええ、この現場にいれば、特にあきあの後に付いて回っていれば
自然とこうなりますよ」

「そうだなあ。日野あきあについていれば少々なことなんか驚かな
くなるよな」

「でもあきああの表情いいなあ。たまらないよ・・・実際！」
とカメラを覗きながらカメラマンがいう。

.....

千賀子の身体が移動していく。

夕暮れに感じる肌寒さはいまは感じられない。

『千賀子よ』

と緋龍が呼びかけてきた。

「はい！緋龍様・・・何でございましょう」

『何故置いてきた！・・・何故？・・・菩薩様にいただいた命を置い
てきたのだ。』

あれがなければ千賀子は・・・』

「いいのです、あれで・・・こんな力！・・・人はもってはいけ
ないのです。」

人は弱いものです。このまま・・・力を持ったまま平穩に暮らせる
ほど私は強くありません」

『そうか』

と言って緋龍は黙ってしまったが、千賀子がああ古い祠に近づいたとき

「待て！」

と緋龍が千賀子を止める。

『待て！・・・千賀子よ。・・・これを共に連れて行け！』

と言って湖から青白く光った大きな珠が浮かび上がってきた。

一旦ピタリと静止し、今度は千賀子に向かって進んでくる。

あれほど大きかった珠が千賀子に近づくとほど収縮していき

千賀子の広げた両手の平に乗る頃には、直径5cmぐらいの珠になっていた。

クリスタルな球の中に青白く燃え上がる命の炎。

「緋龍様！・・・これは！・・・緋龍様、貴女の命！」

「千賀子！・・・我が子紅龍の為に命を捨てようとするそなた。

母として二人に出来るこれがただ一つの道なのだ」

しばらく、湖をみつめていた千賀子。

想い人のために狂う我が子を想う母の悲しみ、

・・・湖の湖面にただ一つ広がる波紋は母の涙・・・か。

「わかりました。緋龍様の想うがままに」

という両の手の平に浮いていた珠がスーと千賀子の胸に吸い込まれていった。

赤い珠は千賀子の魂・・・青い珠は緋龍の命、こうして二人と共に祠の扉の前に立つ。

『ギー』と扉が開いた祠の中、人の眼には判らないだろうが今の千賀子にははっきりと見えた。

まるで鳴門の渦潮のように中の空気が渦巻いているのだ。
触れるだけで吸い込まれていくだろう。

千賀子は足元に転がる石を取り上げ、渦の中心に向かって投げた。
すると一瞬止まったかに見えた石が物凄い勢いで吸い込まれていったのだ。

千賀子は祠の前で指で宙に文字を描く。

そして最後に両手を使って『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』と唱える。

眼の前の渦に制動がかかりそのスピードが落ちてきて、
ゆっくりゆっくりと波紋が消えていき完全に渦が消え去った。

千賀子はこれが見納めのように1度周囲をゆっくり見回してから
思い切って祠の中に飛び込んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「『中央』！・・・・『中央』！・・・・今から地下に入ります」

「OK！・・・・気をつけてくれよ！・・・・」

「はい！・・・・エヘ~~~~~~~~！！・・・・何よ、ここは！」

「・・・・・・・・・・・・おい・・・・おい・・・・ここに写ってるのは本当か！」

「はい・・・・宇宙空間のように見えるんだったら・・・・間違いありません！」

「だが・・・・これは・・・・本物じゃあないだろう」

「はい！・・・・これは・・・・私の考えを言っつてよろしいか？」

「なんだい・・・考えつて！」

「これは直感的に心の中に浮かび上がってきたんですが、ここは想念の世界・・・想念の小宇宙・・・紅龍が呪いで作り出した・・・」

えっ？・・・どうして？・・・そう、わかったわ！」

「どうした！・・・何がわかったって？・・・」

「いえ、今あきあが話し掛けてきたんです。

あきあ自身、ここがこんなことになっているなんて予想していなかったたので

監督に各カメラアングルがこれでいいかどうか聞いてくれって」

「OK！わかった！・・・これから指示をする。1〜5番はそのまま・・・」

6番はそこから右15度・・・そうそう、そしてもつと引いて・・・OK！」

と小野監督の指示でできばきとアングル調整がされていく。

「よし、これでOKだ。あきあくん伝えてくれ」

この間30秒もかかっていない・・・ドラマは続行中である。

「OK！・・・伝えました。もう直ぐあきあ・・・いえ、千賀子の姿が現れます。

でも目の前に広がるこの空間凄いですねえ。

あの緋龍さんの命の珠も本物なら千賀さんの魂も本物・・・なんて！

「なんだって！・・・そうなのか。

では、フィクションはドラマの一部の人物設定だけかあ・・・」
とテレビモニターを感慨深かげに見つめる。

．．．．と、目の前の赤い大きな星の中心あたりに白く輝く点がある
らわれ

段々と大きくなり．．．．人の形をとっていく。

千賀子だ．．．．いよいよ、クライマックスの時間となるようだ。

．．．．
．．．．
．．．．

(ここは?)

と千賀子は目の前に広がる宇宙空間に息を呑む。

大きな赤い星を中心とした大小の星々がすぐそこに浮かんでいるの
だ。

少し動けば星の引力に引き込まれてしまいそんな錯覚に陥る。

『ここは紅龍様の創り出した世界です』

「千賀さん？」

『はい！』

「あなたはこの世界に来たことがあるの？」

『はい．．．でもいつもここまでです。ここから先には進めません』

「そつでしょうね。これは紅龍様が創り出したというより、

無限に広がる宇宙のように広い心．．．紅龍様の心の中が具象化さ
れたものです。

でもまだ紅龍様をご存知ない事．．．もっともっと成長される必要
があるのです」

(千賀子!．．．我が子紅龍はこんな大きな心の持ち主なのですか
?)

と緋龍の言葉が聞こえる。

「はい、紅龍様が成長された暁には大日如来様の元にいかれる方……
失礼ですが緋龍様より数段格が上でございます」
とキツイことをサラリと言ったが緋龍の返事はない。
ただこれは千賀子だけがわかったこと……緋龍はニツコリと笑っておられたのだ。

『千賀子様……では今……紅龍様は一体どこに？』

「紅龍様は……ほら……あそこ……あの黒い点があるでしょ」

『えっ……あれが紅龍様！』

「そうよ。あの米粒のようなあの小さな点が今の紅龍様！」

『だって……』

「千賀さん。今では判るでしょ。
人を呪ったり苦しめたりする心の狭さは具象化するとあんなものなの。

この広い宇宙とあんな小さな米粒のような姿……」

『私も自分で自分の命を捨てた身……私もあんなものなの……』

『そうね。でもそれを悔いた今は違いますよ』

(千賀子！これからどうする？)

「はい、紅龍様を説得するにしろ、戦うにしろ……」

あの心の中に入っていかねばどうすることも出来ません」といって印を結びセーマン・ドーマンを唱える。

拡大する紅龍の心……真つ暗な闇が広がる心の世界。

一歩中に入るとその臭気と嫌な空気が充満しているのだ。

これが人を呪刹をくりかえしてきた結果、出来た灰汁が広がったも

のだ。

草が多く繁り湿地帯のような地面に生えている木々も不気味な枝ぶりである。

空には星もなく、どんよりともやがひろがり前が見えにくい。

いやな臭気には心を重くする。そこで千賀子は身体の回りに円形のバリアをはり

清浄な空気をその中に引き込み千賀子は前に進んでいく。

足元でガサガサという音……

何本もの腕が地から伸びて千賀子の足を捕らえようとしているのだ。

目の前に次から次へと腕が伸び上半身をあらわし、

そして全身を表したのは生ける屍ゾンビのような地獄の住民……

紅龍に呪刺され、

天に上れず闇に引き込まれた闇の住民……千賀子を捕らえようと襲ってくる。

この世界で千賀子が術を使うのはかなりつらい。

バリアだけでも負担となっているのだ。

必死に走るが草に足をとられて思うように進まない。

このバリアだけではゾンビにはひとたまりもない。

……といきなりズズーっとな足を取られる。

いや取られるばかりでなく身体が沈んでいくのだ。

あっという間に飲み込まれてしまう。しかしバリアに包まれているので呼吸は楽だ。

前が見えない……ドロドロの沼で泥に手足がとられてまだ沈んでいく。

……

.....

「今、あきあが底なし沼に呑み込まれていきました」

「大丈夫なのか？」

「はい！事前にあきあからの連絡がありこのまま飲み込まれていく
そうです。」

この底に何かあると言ってきました。こちらも下にいきます」

「おいおい、何も映らないのじゃあ・・・」

「いえ、ちよとどビルの壁面で硝子で囲まれたエレベーターのよう
な感じです。」

あちらの空間とは異なるのでこのようになるそうです・・・じゃあ

.....

身体が吸い込まれるスピードが上がリ、

『スココン』と何か抜け落ちるように通り抜け、真下に落ちていった。

スクッと立ち上がったのは水辺であった。どこかで見ることがある
光景だった。

『ここは紅龍様の湖です』

「現代はここは埋められてしまっているのですね」

『そうです。お母様の緋龍様の湖しかありません』

「あつ！あれは・・・」

と前の水辺に座る人影が2つ・・・

近寄って見るとそれは千賀ともうひとりの少女だった。

『あつと紅龍様』

「えっ？この人が紅龍様？」

『ええ・・・これはどういうことでしょう』

二人が動く様子がない。固まったままだった。

動かない千賀の頬を触ると暖かい。

そして湖を見ても波紋が動いていない。

『これは・・・？』

千賀子にしてもわからない。

こうして立ち尽くしていると何か目がおかしくなる。

波紋がゆっくりとこちらに動いているように見えてきた。

『あつ！千賀子様！・・・私の手が段々と上に上がってきます』

「えっ・・・本当？」

と目を移す。

千賀に言われた通り

ゆっくりと・・・しかもスピードを上げて動いている。

はっとした千賀子！

「いけない！・・・このままだとこの地の時に呑み込まれてしまう」

と周囲を見回した。

周囲には何も無い。そして、自分達が落ちてきた空の穴が序々に閉じようとしているのだ。

慌てて術を唱え、飛翔する。穴が縮んでいく・・・。

ようやく飛び込んだ千賀子はそのまま急上昇した。

底なし沼から飛び出した千賀子が着地したのはさっき来たときとは反対側の地。

つまり底なし沼は通り抜けたということだ。

この向こうではゾンビ達が凄スピードで動きまわっている。

「いけない！・・・早くこの空間の時に戻らなければ・・・」

『千賀子様どういうことですか？』

「あの底なし沼の底の世界・・・あれは紅龍様の千賀さんとの思い出の世界です。」

だから時間がゆっくりゆっくりと流れているのです。

あの地に立った瞬間に私の身体はあの地の時の流れに呑み込まれていました。

そして、あの地の千賀さんを頬を触ることによって時に呑まれる速度が急激に速まったのですよ」

『ではこの地の時には・・・』

「ええ、このままでもゆっくりと時が戻りますが、いつ襲われるか油断はできません」

といって草や木に触れて早く時を戻そうとする。

ゾンビ達の動きが急激に遅くなってきた。

「もういいでしょう・・・進みます」

と前進を始めた。バリア内の清浄な空気のおかげで身体をつらさは少ない。

しかし、バリアを張っている術の負担が重くのしかかっているのだ。

ようやく湿地帯のような区域を抜けたときには息があがっていた。

何物かに襲われることもなく歩いてきたのだが、

肩に何か重い荷物を乗せているように身体が前に傾き、

それと共に足を前に運ぶのが一步一步辛くなってきた。

この湿地帯を抜ける頃には四つん這いで進むしか仕方なかった。

湿地帯を抜けたとたん肩に乗っていた何かがスーッと抜け落ち急に楽になった。

「あれって、何だったの？」

途中から声もかけてこなくなっていた千賀が答える。

『千賀子様、あれはこの地そのもの。』

私も押しつぶされ、どうにもできませんでした。

でも千賀子様だからこそ、この地をぬけられたと思います』

体力が戻った千賀子が立ち上がった。

「でも、ここは」

と見回すと立っているのが高い崖の上だとわかる。

はるか下に広がるのは雲海・・・そして向こうに微かにみえる山。あの山に紅龍様がいるのだ。

そして・・・この広大な景色の空は赤く染まっていた。

.....

「もう、あきあ・・・驚かせて！・・・まだ心臓がバクバクいつてるわ」

「智姉・・・私もよ。千賀子とあきあが重なってしまって本当に術が使えないっと思っと思って見てられなかった」

「あの子つたら、いろんな見せ場を計算しているのよ。」

陰陽師としての力はあるのよ。紅龍さん以上なのに

自分の力を1/4に封印してしまってるんだもの」

「あきあの力が凄すぎるのよ。」

でも紅龍さんを力で押さえつけても何もならないって言うてたわ。だから対等の力で戦うんだって」

「でも、これって紅龍様を助けるって企画よね」

「そう・・・でも今の紅龍様って陰の力に囚われてしまっているの
で

力と力との戦いをしなければならんだって。

そしてその最後の最後が究極の瞬間だって言ってたわ」

「そんなあ・・・それって・・・」

「そうなの。究極の瞬間って傷つき倒れる瞬間かもしれないって
ってた」

究極の瞬間・・・それが一刻一刻近づいている。

.....

『千賀子様！・・・ここからはどうやって？』

「この雲海の上を移動しましょう」

と言った瞬間、崖の上から飛びおりた。

ゆったりと鳥の羽が落ちるような落下は不思議に体力が回復して
くる。

雲海に立つ頃にはすっかり元気を取り戻していた。

足を動かさず『スー』と移動するその術は身体の負担にはならない。

千賀子は黒髪をなびかせて移動していく。その瞳きらきら光って美
しい。

雲海を半分までできたころ、突如『ゴ~~~~』と雲のあちらこちらで渦
が巻き始め、

その渦が段々大きくなっていく。

そして、あつという間だった。身体がきりもみ状態で下方に吸い込
まれて行く。

『ガツン』と下半身に衝撃が走って放り出される。

『うっん……』といながら頭をあげて周囲を見渡す千賀子。

ここは薄い緑色の世界だった。

上を見ると紫色の雲が広がっている何だか気分が悪くなるような配色だ。

この濃い緑の斜面に散らばっている亀の甲羅のようなものは？……

千賀子は立ち上がった。

そして、飛び上がった雲の上に出ようとすが

半分ぐらい飛びあがったとき又、身体がキリモミされひきずり込まれる。

術で抵抗しながら下方を見るとあの亀の甲羅のようなものの中央が開き、

赤く光ったそれから渦を出しているのが判る。

千賀子は抵抗するのを止め、自ら飛び降りた。

これって一体何なんだろう？

千賀子は体力を温存するためこの緩やかな斜面を上っていく。

この足元にあるわあるわ亀の甲羅が斜面に張り付いている。

他には白い骨が散らばっているのだ。

いきなり甲羅の下から細い触手が2本出てくる。

くねくねと動きながら千賀子に迫ってきた。

触手だけでなく甲羅自体の動いて千賀子にせまってくる。

その数何百……いや何千……数限りないそれがせまってくるのだ。

『これは亀甲虫という』

そう言ったのは千賀子を見守りつづけて緋龍様。

「亀甲虫？緋龍様それは一体……」

『龍の体内に住み着いているいわば人の身体でいえばウイルスのよ
うなものじゃ』

「ウイルスですか」

『そうじゃ。だが普通こんなに数が増えることは無い。せいぜい5
0か100か。』

亀甲虫は体内に増えると心も蝕む、

いや紅龍の場合心が陰に蝕まれたからこんなに数が増えたのだろう』

「では、この亀甲虫を退治すれば紅龍様のお心は……」

「本来の心に戻りやすくなるだろうな」

「では！」

というところ

『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』と九字をきる。

すると目の前に金色に輝く珠が浮かんでいた。

千賀子は珠を右手でつかんで天の方向に差し上げてこう叫んだ。

「善なる光よ！我の心と共に！！」

すると金色の珠から強い金の光が一筋出てきた。光はどこまで行く
のだろう

その光が珠を中心に回り始めた。

するとその光が扇型に広がり周囲全体を照らし出す。

千賀子の全身が金の光の中にいる。力が溢れてくるのがわかった。

やがて光が消え珠も消えると周囲の情景が一変していた。

勿論、亀甲虫は全て消え、どんよりとした周囲の緑色もスキッと
した透明色に変わり、

上空の紫色の雲も白い雲に変化していた。

千賀子は雲の上に出るため飛び上がった。

山と雲海は以前健在だったが、この情景も一変していた。千賀子がやってきたあの湿地帯があった地域が消滅し、小宇宙が直ぐ傍に見えていた。

紅龍の心の闇の一部が綺麗に抜われていたのだ。

外堀から埋めていく・・・そんな言葉がふつと浮かぶ千賀子。

昔の戦国武将の戦略だ。

「行きますよ。千賀さん・・・緋龍様！」

という千賀子の身体が山に向かって移動していく。

山が目の前に高くそびえるのがわかる距離に近づいた時

『バチッ』という音と共に電気に打たれたようなシヨックを受けはじき飛ばされてしまった。

一瞬気を失っていた千賀子。

『千賀子様！・・・千賀子様！・・・』

という千賀の呼びかけにようやく気が付いた千賀子。

まだ身体が痺れて思うように動かない。

千賀子の身体から青く光る珠が飛び出したかと思うと

千賀子の身体に沿って移動する。

緋龍が千賀子の身体の痺れを吸い取っているのだ。

青い珠が再び千賀子の体に消えたとき、やっと立ち上がった。

でも心理的シヨックはまだ残っている。

いきなりだったので呆然とするだけでなく膝がガクガクとしている。身体の痺れが残っているのだ。

そこで千賀子は大きく深呼吸をはじめた一回二回と・・・段々と落ち着いてくる。

「何よ！一体・・・」

とよく目を凝らして見ると透明のバリアが張ってあるのだ。
バリアは地上からこの天空の端まで覆っていて山を守っている。

『千賀子様！どうすれば良いのでしょうか』

「私、もの本で読んだことがあります。いくら堅い守りの城でも
1箇所どこか弱いところがある。

・・・いえ、1箇所弱いところをわざと作ると・・・」

『千賀子！そのとおりじゃ。我ら龍の身体も堅い鱗で守られている
が

一箇所弱いところがある。それが逆鱗じゃ』

緋龍の言葉を聞いて決心したのか

「地に降ります」

といって雲海に飛び込んだ。

真ッ逆さまに地に突っ込んでいく・・・

地に近づくとつれゆっくりと落下する。

地上10mぐらいで一時宙に止まり、身体を回転させ足をも地に向け
た。

そして、地に立った。地は先ほどの千賀子の力で一変したままであ
った。

バリアは地の底から天に上っていた。

千賀子はそのバリアに沿って移動を始めた。

この広大な地域・・・その長い距離を術で一瞬のうちに調査をする。

千賀子の超感覚はバリアの弱いところを一箇所見つけた。

それは、針の穴のような小さなものだった。

直接にバリアには触れられないので、術に千賀子の思いをのせる。

『バリアよ消えろ！』・・・と。

その小さな針の穴から『ピシピシ』とひび割れが生じ始めた。小さなひび割れがバリア全体に広がるのはそんなに時間がいらなかった。

バリア全体に広がったひび割れの一箇所『ピシッ・ン』とはじけ飛んだと思ったら、

『パリン』といって硝子板が内側から割られるようにその全体がはじけ飛んだ。

そして、割れたバリアは一瞬のうちに細かい粒子となって宙に消えた。

今まであったバリア内の山肌は何もない赤茶けた土で出来ていた。まるで噴火したあとの山のように草木も生きた証も何もなかった。表面の土質は手でさわると風化したようにポロポロと落ち、一歩踏み出すと片足が30cm近く土の中に入っていく。

「千賀さん！何か感じない？」

『ええ・・・感じます・・・これは紅龍様の悪しき心、人を呪って・呪って・・・』

「千賀さん！今は嘆くのはお止めなさい。他に・・・他には・・・？」

『いいえ・・・何も・・・いえ！聞こえます！・・・聞こえます！』

小さな声ですが・・・私を呼んでいます！・・・千賀！・・・千賀！・・・千賀！・・・って』

「千賀さん、呼びかけに返事をしてあげて！」

『紅龍様！・・・紅龍さまあゝ・・・』

「もつと！・・・もつと！強く！・・・もつともつと強く！・・・千賀さん！」

『紅龍さまあゝ．．．わ・た・し・の・こころゆづさまゝゝ．．．』

奇跡はおこる．．．信じていればきつと．．．信ずればこそ．．．

『千賀ゝゝ！．．．千賀！．．．千賀か？．．．』

『こ．．．紅龍様．．．そうです。私です。千賀です。．．．』

『おおゝ千賀！．．．いまどこにいる？．．．逢いたい！．．．逢いたい！．．．』

『ここです！．．．ここにいます！．．．山の麓！！』

と千賀が言った瞬間に山が唸りだした。．．．いや、大きな地震が起こったのだ。

千賀子は直ぐに地面から2mぐらい上に浮かびあがった。

山の麓から地割れが発生し、山の中腹が突如爆発し大きな穴があく。

山が．．．崩れだしたのだ。

大きな穴から『ギュワォーン』と叫び声が聞こえ、黒い大きな龍の顔が出てきた。

黒い龍が千賀子を睨みつけ、

『何だ！お前は！．．．人間ではないか！』

地に響くような低い声は千賀子の心にどす黒い波紋を起こした。

言い放つ口から胸が悪くような臭気が立ち込めてくる。

これが人を呪って200年生き続けてきた結果なのか。

『違う！．．．違う！．．．あれは私が愛し続けてきた紅龍様ではない！』

そう、千賀が言い切るくらいの変わりようだ。

『人間であるお前がよくここまで来れたな』
と尊大なものの言い方をする。

見ると龍の顔がいびつに歪み、目が真赤に染まっていた。

『何しにきた！・・・ここまで何しに来た・・・』

ここはお前のような人間の来るところではない。帰れ！』

「ふふふ・・・お前は気がつかないの？」

『何が可笑しい！・・・何が気が付かないのだ・・・虫けらめ！』

『お前は、その虫けらの人間がどうしてここまでこれたのか考えもしないのかえ』

こうなったら千賀子も『お前』扱いにしている。

だって目の前にいるのは紅龍ではないのだから・・・。

『や・・・やかましい・・・そうだ・・・いいことを考えた！』

わしは人間を呪って呪ってきたのだ。お前を人間以外のものに変えてやるう。そして、喰ってやる！』
と呪いの術をかけた。

千賀子の姿は一瞬にして醜いカエルの姿に変わってしまった。

しかし、あつというまにもとの姿に戻る。

『やや！・・・お前は何者だ！。俺様の呪いを破るなんて！』

「上には上がいるものと思い知りなさい」
と言って呪文を唱える。

するとあんな大きな黒い龍が一瞬のうちに一匹の八工に姿を変え、小さな丸い透明の珠の中に捕らえられてしまった。

「た・・・助けて・・・助けてくれエ〜」
「八工の分際でえらそうななことを言うんじゃないの。
あんたはもともと紅龍さんに寄生していた一匹の八工！
それが紅龍様の呪いのおかげで長生きをして、術を使えるようにな
っただけじゃないの」

「すみません・・・ごめんなさい・・・もうしませんから。姉御・
・殺さないで」
つい笑いが出てしまう。

「お前！・・・名前ぐらいあるんでしょ」
「へっ？おいら？・・・おいらにや名前なんてねえ」

「じゃあ、私がつけてあげましょう。龍なんてもつたいたい。

八工次郎・・・ではどうかえ？・・・気に入らなかつたら八エタマ・
・」

「姉御！・・・どうかあつしの名前で遊ばねえでくだせえ・・・八
工次郎でけっこうでやんす・・・」

「ところで、八工次郎！お前は江戸もんかえ？」

「えっ？おわかりでした？・・・おいらは生粋のお江戸育ち・・・江戸
っ子でやんす」

「くくくく・・・」

と笑う千賀の声が聞こえる。

「あつ！・・・あんたは？」

「八工次郎さん・・・私も元はといえばお江戸育ち・・・でも物心つ
いたときは

母に連れられて旅から旅・・・行き着いたところがこの地なの」

「へえ・・・でお前さまの名は？」

「私？・・・私は千賀っていうのよ」

「ええ〜、お前様が千賀さま・・・では紅龍様とは恋仲の間柄・
・」

『どうしてそれを？』

『へえ、あつしは天海僧正様がこの地を訪れるとき、その小物の男にくつついてきたんでやんす。

この地に着いてみれば大騒動・・・あつしは騒動に巻き込まれて気がついたときには

紅龍様の耳の中、そこを封印されて閉じこまれてしまったんでござんす』

千賀子はしばらくこの会話を聞くことにした。

『あつしは必死に耳の中から出ようとしたんでやんすが、駄目でした。

でもそれがよかったんでやんす。それでなかったらおいらとっくにあの世行き。

でもこの長い間、おいら紅龍様の呪いと千賀様を呼ぶ声の中で生きてきやんした』

とってから腕で鼻をすすする音。

何も見えなくても八工次郎の一挙一動が 実写のように頭に浮かんでくるから不思議だ。

『良かった・・・良かった・・・どうか紅龍様を救ってあげておくんない』

何だかとても人情家の八工のようである。

『でもね、八工次郎さん。私は自分の命を自ら縮めた身、

紅龍様をお救いしたあかつきには天に上ってお仕置きを受けるのですよ』

『そんなあ・・・ねえ、姉御！どうにかならねえんでござんしょうか』

「自殺は天の掟では特に罪が重い。わたしの力ではどうにもならぬ」

と千賀子がいうと急にキレだしたから面白い。

『やいやい・・・さつきからおとなしくしていたらつけあがりやが
って』

何だとう自殺したから力にならないだとう・・・

ええい、そんなこという奴は姉御でもなんでもない！杯をたたきか
えしてやる』

さすが江戸っ子気が短い。

『止める！下郎！』

『なんだとう・・・』

と振向くしぐさ

『ヒエ~~~~~』

と腰を抜かして逃げようとするが足腰が言つことを利かなくて、
腕だけで逃げようとしている。・・・その必死さ・・・
そんな光景が千賀子の頭に飛び込んでくる。

「プッ」

と思わず吹き出す千賀子。

『ひ~~~~~』

千賀はお腹を押さえて転げ回って笑っているようだ。

声に出ないぐらいお腹が痛くなって・・・。

「千賀さん、身体に悪いわよ。声に出して笑ったら？」
というと

『だって！だってえ~~~~ひひひ~~~~あはははは~~~~』
と大声で笑い出した。

.....

「あはははは~~~~~」
「いひひひひ~~~~~」
「ここはステーションの中！」

.....

千賀子にはいつも表情がない緋龍に笑いがかんているのがわかった。

「姉御！……助けてください！」

「あら、八次郎！姉御でもなんでもなかったのじゃあないの？」
その千賀子の言葉が可笑しいと又、千賀が笑い続ける。

年はといえはまだ10代、箸を落としても可笑しい年代だ。

「八次郎、そのお方は緋龍様といわれ紅龍様の母龍さまなのじゃ」

「八次郎！よしなに……」

緋龍様も人が悪い……わざと八次郎に丁寧な言葉を使う。

「ひえ~~~~~……ここ……こち……こち……こちら……」
「そ」

とといったただけであとは黙り込んでしまった。

「ガタガタガタガタ」という音が聞こえた。

八次郎の身体の震える音と歯が鳴る音だ。

急に八次郎のことが可哀相になった千賀子は

「ねえ、八次郎」

と優しく声をかける。

「あつ……はは……はい……あね……姉御……」

「落ち着きなさい、八次郎！……誰もあなたを取って喰おうと
いうのじゃないんですよ」

『あつ・・・は・・・はい・・・』

「でもね、八工次郎。この世に生を受けたもの全て死を向かえたら全て

天に帰って裁きを受けるのが宇宙の掟・・・それは判るでしょ」

『は・・・はい』

どうやら八工次郎、千賀子の優しい語りかけに少し落ち着いてきたようだ。

「人を呪い多くの人の命を縮めてきた紅龍様も、

自ら命を絶った千賀さんも宇宙の掟でいえば重罪にあたります。

でもね、八工次郎。互いの愛する心は不変なのよ。菩薩様もそうおっしゃっています」

『はい！』

「だから千賀さんはどんな罰をうけようと愛を貫くつもりなのです。わかりますね」

『はい』

といいながらポロポロ涙を流す八工次郎。

笑い転げていた千賀もかたちを改めてきちつと正座し千賀子の話を聞いている。

「八工次郎！あなたも江戸っ子でしょう。千賀さんと紅龍さんの愛を助けてあげなくちゃあ」

『判りやした。もうそれ以上言われなくてもいいです。』

あつしはこの命、お二人のために投げ出す覚悟でやんす」

「じゃあ、聞くわよ」

『へえ・・・』

「紅龍様は今どこにいるの？」

『紅龍様は天海僧正様に封印されあの山の地下で眠っておられるんです。』

でも肉体はそうでも精神は悲しいほど病んでおられるんす』

「千賀さん！あなたはもう一度紅龍様に呼びかけてください」

「わかりました。紅龍さまあ！・・・聞こえますかあ・・・紅龍さまあ・・・」

「おお！千賀！待つておつた、お前の声が届くのを・・・千賀・・・千賀・・・

見たい！・・・お前の姿をみたい！」

千賀子はその声を聞いて山の頂上があつた地点まで飛び上がり、そこでとどまつて下方を見る。

もう山としての形は保たれてはいない。

でも大きく掘れこんだ地底に湖が見えその中に赤い龍がとぐるを巻いて眠っていた。

「紅龍様！・・・私です。千賀です。・・・上を見てください！」

「おお・・・見える！見えるぞ！・・・いや・・・誰だ・・・お前は誰だ！」

お前は人間ではないか！・・・それに、お前は千賀ではない！」

「やはりね！・・・人を呪わば何とやら・・・紅龍さん！」

あなたには千賀さんが見えないのね。・・・心が病んだあなたには何も判らない」

「言わせておけば勝手なことを！・・・わしは人が憎い・・・憎い・・・憎い！

恋しい千賀を奪つた人間が憎い！・・・だからお前を殺す！」

「ふふふ・・・やはり駄目な紅龍さん・・・そんなことしか思えないのね。」

人はあなたの思っているより、もっともつと強い。

例え一時期憎しみを持ったとしても人は変わる。・・・人は変わ

るのよ。

だって人は愛することが出来るから・・・愛を持って戦えるから・・・」

「わからん・・・わからん・・・」

お前は普通に人間なのにどうして我が身を見て平然としていられるのだ。

それにその内から溢れる力・・・人間なのにどうしてそんな強い力を持てる。

人はそんな力を持てば歪みがでるはずなのに・・・

お前は平然と受け入れている。何故だ！・・・何故なのだ・・・」

「人は守るべきものがあれば強くなれる。どんなことでも受け入れられる。

わたしは守りたい！・・・愛するひとりの少女の真心を！・・・母が子を想う心を！

だから、あなたのその闇の心をぶち壊す！」
と、いつて呪文をとねえる。

呪文と共に千賀子の身体が内から黄金の光が溢れてきて、身体中が輝きだした。

眩しいほどの輝きの中、千賀子の身体から衣服がはがれ落ち、

黄金に輝く甲冑を身に着けた少女戦士に変身した。

手には黄金に輝く槍を・・・手には弓、腰には刀、そして矢を数本背負っている。

この武器は肉体を傷つけるものではない。精神攻撃に対するものだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

.....

「凄い！あきあのあの姿、本当の女性ヒロインの姿だわ」

「そうねえ、愛の戦士というのかな」

「でも変身しちゃうんだもの、驚いたわ」

「ねえ、監督！あの姿のヒロインで映画ができるんでは？」

「そうだなあ、考えてみよう」

.....

千賀子は手に持った槍を地中湖に眠る紅龍に投げた。狙いは龍のもつとも弱い逆鱗に。

槍は千賀子の狙い通り逆鱗に当たったというより、逆鱗に触れたのだ。

『うづ〜、おのれ！・・・おのれ！・・・』

精神は肉体につながっているので逆鱗にふれたのがわかったのである。怒りに我を忘れ狂いだした。しかし、肉体は封印されているため動きはしないが精神での攻撃が千賀子を狙いはじめた。

それは人の形をとった闇の住民達が千賀子を取り囲んだのである。

こうして宙で浮遊しての戦いが始まった。

千賀子には武道を習った覚えはない。

しかし、こうして戦ってみると相手の攻撃が全て読めるのだ。

攻撃をかわし、又受けて打つ。だが相手はそんなことで倒せない。

打っても打ってもすぐ立ち上がり向かってくるのだ。

千賀子は腰の利剣を抜いた。白く輝くそれは相手を切ると消し去る。

縦横無人に動きまわって全てを切り倒したあと地中湖に降りていく。

地中湖畔に降り立った。

どこからか硫黄の臭いがするのは気のせいかな。湖水は白く濁っている。

『お前はそんな姿をしているのか……どこか千賀に似ている……』

うつつ……頭が……頭が痛い……千賀……！……助けて

・くれ……』

『紅龍様……紅龍さまあ……』

千賀との結びつきが、紅龍の心を変えようとしている。

人を呪う心の闇を切り捨てようと紅龍自身苦しんでいたのだ。

千賀がこうして近くまで来たことによって紅龍の愛が目覚めた……

そう思っているのかも知れない。

千賀子は背中から黄金の矢を一本取り出すと弓につがえ

『ギューン』と引くと少し斜め上をめがけて矢をはなった。

矢は地中湖の真中に着水すると水深く進んで行く。

しばらくすると矢が着水した位置から湖面が泡立ちはじめた。

そしてゆっくりと円を描きながら現われたのが白い着物を着た少女と

黒い着物を着た少女だった。

正反対の位置に立って睨みあいながらゆっくりと円の周囲を回っている。

そして、ゆつくり・・・ゆつくり・・・動きがとまった。

着物の色は違えど、二人とも同じ少女。

『千賀子様！・・・あれが・・・あれが・・・紅龍様です！・・・でも、紅龍さま・・・がお二人・・・これはどういうことでしょう・・・』

「千賀さん、あのお二人。どうやらあなたと愛を誓った紅龍様と人を呪って闇に引き込まれた紅龍様の二つの心・・・千賀さんの呼びかけであなたの紅龍様が目覚めたのですよ」

『紅龍さま~~~~』

千賀の声で振り返った白い着物の少女、しかし、その時、黒い着物・・・いや、闇の紅龍が右手を上げその手の平から赤く燃える珠が紅龍様に向かって発射された。身体に当たってもんどりうつて倒れる紅龍様。

『あつ！紅龍様が・・・千賀子様・・・早く・・・早く・・・紅龍様をお助けください』

千賀子は素早く矢を射る。矢は千賀子の術に操られ見事右手の腕を射ぬいた。

『うつつ・・・おのれ~~~~おのれ~~~~』と腕の矢に手をかけると『ググー』と力をいれて引き抜いた。だがこの矢は鬼や邪を制する退魔の矢。

『ジュジュ』と矢を掴んだ手の平から白い煙があがる。矢を投げ捨てた闇の紅龍！こちらを向いて手の平を向けた。しかし、何も出てこない。

紅龍は恐ろしい顔をして口を開けた。

『ギヤオウ・・・』と声を上げると凄まじい炎が千賀子を襲った。

2回3回と地上を回転して逃げる千賀子……
しかし、炎は千賀子をめがけて追ってくる。

両手を前にだしてバリアを張る、炎の勢いはバリアの温度を急激に上げた。

このままではもたないとおもった千賀子は勢いをつけ湖畔を走り湖水に飛び込んだ。

炎は千賀子を追っているのだろう湖水の温度が上がってくる。

水中の透明度は最悪だ。ほんの30cmの前も見えない。

術で透明度をあげるとは可能だが、そうすれば闇の紅龍からも丸見えだ。

千賀子は人差し指から光を出す。光線は広がりあたったところだけ透明になった。

もう水温は風呂の適温40°ぐらいまで上がっている。

湖底を照らすと、とぐろを巻く赤い龍の頭のところに白い着物の紅龍様が沈んでいた。

抱き起こしてみると肩先の着物が破れ、白い肌に赤黒い火傷のあとがくつきりと残っていた。

千賀子は紅龍様を地上に引き上げた。

湖水の温度はもう100°。ちかくまで上がっていて水蒸気がたちこめ始めていた。

でも身体のバリアのおかげで熱さは感じない。

紅龍様を岩陰に寝かせると身体の中の千賀を呼び出した。

赤い珠が千賀の姿になると

「千賀さん、紅龍様を頼みます」

『あつ！千賀子様は？』

「私ですか……私あの闇の紅龍を倒します！」

と言って右手を上にあげると、あの黄金の槍が現われた。

最後の戦い……千賀子はそう思った。こうなれば力を全開で戦うまでだ。

千賀子は飛びあがるとこちらを睨みつける闇の紅龍にいった。

「あなたは闇にかえりなさい」

『うるさい！……よくもこの身体を傷つけてくれたな……許さない』

といって闇の紅龍が変化した。

黒い龍が現われ、その口から連続で炎の玉が千賀子に向かって吐き出される。

身を翻して避けるとその玉は岩壁に当たり爆発し、

大きな岩や石が湖畔に落ちて、もうさきほどの情景のおもかげはない。

千賀子も槍を投げつけ、龍の頭につきささると龍は怒りくるって

尻尾で千賀子を打ち倒そうとしている。

千賀子は飛びあがり利剣を抜きはなつて、

その襲ってくる尻尾に向かって利剣を上段から振り下ろすと、『ガッ』という音とともにスパッと尻尾が切り落とされた。

尻尾はトカゲの尻尾のように切り落とされてもクネクネと動きまわっている。

『ギヤア〜』凄い声をだして岩壁にぶち当たると岩や石と共に落下した。

でもその岩を跳ね飛ばして浮かびあがった。
でなにやら身体を動かしているのだ。

『ちくしょう！……畜生！』

「闇の龍よ！・・・失った体を再生しようとしても無駄よ。
この利剣に切られたところはもう再生はできないわ」

その言葉で龍は身体ごと千賀子にぶつかってくる。

間一髪飛び上がったそれを避けた千賀子。

龍は岩の上に落ち身体をくねらして苦しんでいる。

「もうこれ以上あなたに戦う気力は残っていないわ。あなたをこれから浄化します」

といって利剣を高く振り上げ、左手を鐔元に添えると左手がさやであるかのようにゆっくりとぬく。

すると刀身がそこから光輝きはじめた。刃先まで抜くとそのまま龍に向かう。

美しい刀身からの光線が龍に向かった。光線が球形にかわって龍を覆いつくし、

球形の中でキラキラ光る金色の粉が龍に張り付いたのだ。

ゆっくりゆっくりと龍の黒い色が抜けていく。

キラキラと光りながら龍の姿が透明になりやがて消えていった。

張り付いていた金色の粉も土にかわり、地の土と交わりあう。

光線の球形も消えた。

終わった・・・闇との戦いも・・・紅龍を元にもどすのも・・・
そして二人の愛の行く末も決まった。

千賀と紅龍様は千賀子が施した球形のバリアの中で宙に浮いていた。

「姉御！終わったのですかえ」

戦いの間おとなしくしていた八工次郎の久方の言葉だ。

「ええ」

といいながらバリアを指し示すとバリアの球形が湖畔に下りた。

千賀子もバリアのよこに降り立つとバリアを消した。

紅龍様も千賀の介抱によって意識を取り戻していた。

千賀の助けによって立ち上がった紅龍様は千賀子を見つめて

『そなたは？』

「私ですか？・・・私はそう・・・愛の戦士です」

といて惚けた。

『姉御！姉御は格好いいつすねえ』

八工次郎の言葉に少し笑みを浮かべて

「紅龍様！あなたはこれで自由です」

『しかし、わしは・・・おろかにも龍神としてこの手で守るべき人間を

・・・多くの人間の命を奪ってしまった・・・悔いても悔いても悔やみきれない！』

『紅龍様！・・・私も天の掟を破った身！二人でお裁きを受けましょ

う』

『千賀！・・・これからはわしと一緒にぞ』

『はい！紅龍様・・・例え何があっても、もうはなれはいたしませぬ』

「紅龍様！・・・あなたにお逢わせたい方がいらっしやいます」といって手を合わせて手の平を上にもむけると

千賀子の身体から青い珠だ出てきた。

『あつ！・・・それは母上の魂！』

『我子、紅龍よ。よくぞ目覚めてくれた。母は嬉しい』

『しかし、母上！私は・・・私は・・・』

『それ以上言わなくても良い。そなたの起こして罰は母も受けまし

よ』

『母上！・・・千賀は！・・・千賀は！・・・』
『判つておる。千賀も一緒じゃ。もう、離させはせぬ』

「紅龍様！あなたの封印を解きます。・・・いいですね」といふと『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』と九字をきる。そして呪文を唱える。

すると湖底から凄い光が飛び出してきた。
一瞬にして光に包まれた。・・・そして・・・

ここは龍雲寺の本堂、千賀子が行ってしまったてからの時間がいやに長く感じられる。

千賀子は本堂に敷いた布団の中で寝たつきりだ。
傍でつきつきりで手を握っているかなは、本堂の欄干に立つ母に向かって声をかける

「母様！お姉ちゃん・・・大丈夫よね」

「大丈夫よ。千賀子さんは」

とそんなとき闇の中、子湖ここのあつたあたり、今は草木も生えない荒地から

一筋の光が地中から天に向かって伸びたのである。

「和尚様！あれは何でしょうか？・・・」

「判らぬ！・・・じゃがもしかしたら・・・」

一筋だった光が二筋・・・三筋と数が増え、数分後には大きな光の束になって

周囲を照らしている。

だがそれも急激に天空から消えはじめ、
やがて光が収束したころ埋められていたはずの子湖に水を湛えている様子が窺える。

そしてそこから4つの光が本堂に向かってきた。

3つに光は境内に留まったが黄金色に輝く光は寝ている千賀子の上に止まり

ゆっくりと降下して千賀子の身体の中に吸い込まれていった。

パチツと目をあける千賀子、

「あつ！お姉ちゃん。お姉ちゃんが気がついた」

大声をあげて喜ぶかな。

「かなちゃん、ありがとうございます。見守っていてくれたのね」

かなの手をギュツと握ると身体を起こしてたちあがった。

この身体は生身だったので少しふら付いたが、かなと女将に助けられて本堂の欄干に進む。

境内の3つの光は寄り添っていたが、やがて人として千賀子達の前に立った。。

千賀はもうひとりの少女・・・紅龍様と寄り添っている。

『千賀子様、ありがとうございます。貴女様のおかげです』

と千賀。

『千賀子殿！この恩決して忘れませぬ』
と紅龍様。

「紅龍様、千賀さん。もうその手を決して放しては駄目ですよ」と千賀子が言うと、二人は決意を表情にあらわし、

『千賀子殿！わかっております。もう決してこの手は放しませぬ。では私達、これより天に上って裁きを受けてまいります』

といって再び珠になり、上空にあがると赤い龍の姿に戻った。

赤い龍の回りに千賀の赤い珠が飛び回り、やがて龍の体内に入ってしまった。

境内に残った美しい女性・・・勿論、緋龍が変化した仮の姿だ。

『千賀子様！これよりあの子達を天に送ってまいります。』

それから未来永劫、この地を守りぬきます。』

「あつ、緋龍様！・・・私のこの力をお返しいたします。

緋龍様でございませよ、私にこのような力を与えたのは。

こんな力を私いつまでも持つていては・・・」

『ほほ・・・何をおっしゃられる。その力はもともとあなたが持つていたもの。』

わたしは千賀子様の力を呼び起こすきっかけを与えたに過ぎませぬ。

そんな力は我々龍族にも持ち得ない天界のあるお方だけのもの。』

「緋龍様！その天界のお方とは？」

『いえ、私の口からはとても申せませぬ。それはあなた自身の力で
お調べください。』

それに貴女様にはこの先、いくつもの試練が待ち受けております。

その力はその試練を乗り越えるためのもの。』

「試練？・・・私はこれから今日のような出来事が待ち受けてい
るとおっしゃるのですか？」

『はい、でもそれ以上は申せませぬ。』

千賀子様！あなたは闇の力を光に変えられるお方。

そのような御心の持ち主が力を恐れてはいけません。

あなたの優しい御心はいくら力を受け継ごうとビクともするもので
はございません。』

「緋龍様！あなたは私を買い被っておられる」

『おほほほほ・・・、私、貴女様の前世・・・いえ、もつともつと古くから存じております。』

でもいつの時代でも貴女様は変わられませぬ。

いえ、多くの試練を乗り越えるほど大きくなられる・・・心配は無用でございます。

あつ、それから今までの貴女様に対する数々の無礼、お詫び申し上げます。

私はこの地より千賀子様のご無事をお祈りしております。・・・では』

といつてから珠にかえり湖のうえまでとんでいき龍の姿に戻った。

二匹の龍は真つ直ぐに天空を目指し、星の瞬きの間に消えていった。

こうして前代未聞のドラマが終わった。

深夜を過ぎての終了時間は明日の視聴率を集計してみなければ判らないが

番組途中のテレビ局での反応から凄いいことになりそうだ。

涙ぐんだ木村プロデューサーに迎えられて車に乗り込んだ女優陣一同、木村家の居間に落ち着いた。

呪いが解けたことで家族中が明るい。

この家は今日、女ばかりなので木村プロデューサーは一人、男達が泊まっている旅館に戻っていった。

深夜までの仕事の疲れで食事のあと皆、直ぐに寝てしまったが朝早く、全員すっきりくつきりと元気よく目覚めた。

みんな三々五々に、顔を洗ったり化粧をしたり身支度をしたりと帰る準備をしている。

もう1日か2日、この地でゆっくりとすればいいのだがどうしたわけか全員、今日帰るといふ。

理由は一つ、昨日のドラマの世間の反響をその身で感じたいのだ。

早く起きて手早く自分の準備を終えて今日の沙希の服装を準備していた杏奈、

杏奈の仕事は沙希が私人・・・公人関係なく沙希の服装を整え、メイクを施していく。

だから昨日のあきあのテレビでの服装も杏奈が監督達と打合わせで用意したものだ。

杏奈が沙希個人のファッション・コーディネートについたとき自分の友人達や母のミチルのコネを使っているんな衣服を集め沙希の普段の衣服としてピックアップした。

けれど沙希があれよあれよと女優の仕事もやるようになり、そして杏奈が見ているもドキドキするような不思議な力と薫から天才といわれる演技力で日野あきあの名前が日本中で知られた今、

私人の早瀬沙希が着る服装も変わっていかざるをえなかった。

元来無頓着な沙希は杏奈にとって楽な相手だが沙希の名前が有名になるにしたがってその沙希についている杏奈の名前も

ファッション業界に知れ渡り、注目されその重圧に胃がキリキリ痛むことがあった。

元はといえば軽いノリの若い女性だ。

けれど環境が変わったことで杏奈自身も変わらざるをえなかった。ガチガチに肩に力が入っていた杏奈の肩の力を抜いたのはやはり沙希だった。

「杏姉！どうしてそう肩に力をいれているの？最初の杏姉はそんなんじゃないかったわよ。」

もつと楽にいこうよ。杏姉が選ぶ服を着るのは私よ。いくら私だって嫌いな服は着ないわ。

誰がなんと言おうと杏姉の着せてくれる服って大好きなの」

なんだかホツとして体が軽くなる。

抱きついてキスをして元気をもらったのはいうまでもない。

あと杏奈に残っている問題と言えば沙希に付いているせいで自分の目で衣服を選べないことだ。

それを律子に相談すると

「そんなこと何でもないじゃないの。」

大体自分でも何もかもやるうってということが間違いなよ。

そんなことすれば自分の目が固定されてしまうかもよ。

杏奈にはたくさんさんの友達がいるじゃない。

その子達に沙希の服を選ばせてから杏奈の目になうものを沙希に着せればいいのよ。

それと小さな・・・これからというメーカーと提携して杏奈のデザインした服を作らせたら？・・・。

杏奈もこれから人を動かすってことを覚えなければね」

と杏奈に外部にプロジェクトを作ることとを忠告した。

今日、京都に帰る沙希と別れて東京で仲間達と会い、仲間達が持ってくる服をピックアップするのだ。

それと共に仲間達のめがねにかなったこれからというメーカーに集まってもらって仲間達とメーカーの選定をする重大な日だ。

沙希とは沙希の会社で明日待ち合わせる事になっている。
NASAから人が来て沙希が開発した通信機の打ち合わせがあるからだ。

「ねえ、沙希姉さん！今、テレビ各局が昨日の番組のことを取り上げているわ」

とひずるが部屋に飛び込んできた。

「各局がとりあげているの？」

「ええ、でもどの局も内容は同じなのよ。いろんな人を集めて話あつてるわ」

といったとき

「ふふふ・・・面白いわよ」

と薫が入ってきた。

あきあは杏奈に髪を整えてもらいながら朝のお茶を楽しみ、同部屋の瑞穂と智子はお化粧に余念が無い。

薫はテーブルであきあに向かい合つて座り

「いろんな評論家を集めて、こんなドラマが実際作れるかどうか・・・ですつて。」

でも古い人は駄目ねえ、固定観念に凝り固まつてしまつて・・・」

「あら、私も古い人間よ」

と大空圧絵もマネージャーの吉備洋子を連れて入ってきた。

マネージャーの吉備洋子は薫やまゆみと年代で、

昨日始めて逢つたあきあ達も気軽に話せる女性だった。

でも今は洋子があきあをみつめる視線には恐れと尊敬が入り混じり、じつとあきあを見つめている。

「ねえ、圧絵さん。今日どうするんですか？」

「勿論、あきあと同じ行動よ」

「私、一度京都のお婆ちゃまのところへ帰つてから、里に行くつも

りですけれど」

「いいわよ、私もその通りにする。洋子も一緒よ」

「えっ？私も？・・・いいんですか？」

「あたりまえじゃないの。あんたは私の家族だから」

「洋子さん！庄絵さんの言われる通りよ。みんなで一緒に行きましよう」

とあきあも口をそえる。

「いいなあ、私は今日テレビ局にいかねばならないの」と智子がいうと

「私だつて、きょう東京で打ち合わせよ」

と杏奈が沙希のヘヤーを手で整えながら

「沙希！終わったわよ」

「ありがとう、杏姉」

といつてから

「ねえ、智姉は静姉や理沙姉と一緒に里にいつてよ」

「うん、わかつたわ、そうする」

「ねえ、私はどうすればいいの？律子姉さん」

といつのまに入ってきたのか、柱にもたれていた律子にひづるが聞く。

「ひづるはオフよ。だから沙希と一緒に行動するの」

「やったあ！」

と飛び上がって喜ぶひづる・・・でも律子の一言がひづるをどん底におとした。

「・・・と喜ぶのはまだ早い。列車の中と京都で勉強と・・・前にだした宿題は？」

「あっ！」

といつてしよげかえるひづる。

『ぷっ』と噴出した瑞穂だったが、律子はそんな瑞穂をギロリと睨

み

「瑞穂！あんたも笑っている場合？」

「えっ？」

「あんた、この前出した宿題忘れたでしょ。今日はその罰としてひづると一緒に列車の中で勉強よ」

青い顔になる瑞穂に同類とばかりに喜ぶひづる。

「凄いわね。早乙女薫事務所のマネージャー達、みんなまゆみにそっくりになってきた」

「あら、薫さん。そんなこと言ってもいいの？」

と睨みつけたのは事務所のN.O.2の順子。

「ああ・・・やばい・・・やばい」

と薫は首を縮めてしまう。

その時

「あっ！」

と叫んだのがひづるだ。

「ねえ、あきあ姉さん。ドラマの最後に出てこなかったけれど、あの『八工次郎』って本物なんですよ」

「あっ！忘れてた。・・・八工次郎！」

「えっ？あれって作り物ではなかったんですか？」

「馬鹿ねえ、洋子。後半部の台本真っ白だったですよ」

「あれって、みなさんの台本もなんですか？」

私また、後半出てない人のは何も書いていないと思ってたの」

「そうよねえ、今テレビでやってる反応は誰しもなんだわ」

「知ってる人だけよ」

と薫がいう。

「ねえ、あきあ。あれって全部本当なんですよ。でも名前はみんな千賀子って呼んで」

あきあって全然呼ばれなかったわ。私不思議で仕方がないの」

「あれはね、実際は千賀さんも緋龍様も紅龍様も実際はあきあって呼んでいたの。」

でも術で千賀子って皆には聞こえるようにしていたのよ」

じりじりとまっっているのはひづる。また話が長くなりそうなので

「ねえ？八工次郎は？」

と思いつつ横から声をかける。

「じゃあ、紹介するね」

といつて伸ばした右手を広げると透明の球の中に一匹の八工。

「いや！気持ちが悪い・・・」

「どうお、八工次郎。ひづるちゃんに気持ちが悪いといわれたけれど」

『姉御！お願いでござんす。あつしを見放さないでくんなさい』

「ねえ、あきあ姉さん。これ何か言っているの？」

「ひづるちゃんに聞こえる？」

「いいえ、なんにも・・・でも何か話しているように思えるわ」

「じゃあ、お話できるようにしようかな」

といつて呪文をかける。

「姉御！姉御に見捨てられたらあつしはチリとなって消えてしまします。」

おねげえでやんす。おそばにおいてくださいえ」

「うわあ〜ほんとうにしゃべってる。それにおかしな言葉使い！」

「あきあ、それってほんとうに八工なの？」

と瑞穂が聞く。

「そうなの。天海僧正様がこの地を訪れるとき小物についてきた一匹のハエ、

それが紅龍様の耳の中に入って呪詛をうけ200年の長きに渡って生きてきたのよ。

いわばお化けかな？」

「姉御！化け物呼ばわりは悲しゅうござんす」

「どうする？ひづるちゃん。この江戸っ子のハ工次郎は・・・」

「とっても面白い！・・・でもこの姿・・・気持ちわる〜い！」

「ひづるちゃんが今つれている、ヤタさんや、胡蝶さんとは少し違うけど」

「といってひづるが持っている熊のぬいぐるみに目がいった。

昨日、この家のお母さんにもらったという。」

「ねえ、ハ工次郎。あなたひづるちゃんあの小さなぬいぐるみに姿を変えられる？」

「だめだったら私がやってあげるけれど」

「でも、姉御。あつしは姉御のそばを離れると生きてはいられやせん」

「そっかあ、駄目かあ・・・ごめんね、ひづるちゃん。

このハ工次郎は術者のそばでしか生きられないの。

ひづるちゃんのお友達にしてあげようと思ったのに。あら・・・ヤタさん、怒ってるね」

みるとキーホルダーの熊さんの足がぼんぼんとひづるの胸を打っている。

そして胸についていた蝶のブローチが宙にとびたつて少女に変化した。

「主殿、そんなきたない奴。主殿のおそばにおいたらいけませぬ」

といつてから再び蝶にかえり、ひづるの襟に張り付いた。

「ねえ、姉御！あつしはそんなに汚いんでござんしょうかと情けなさそうにいう。」

「そうねえ、その姿は決して綺麗とはいえないわねえ」

「じゃあ、あつしはどうしたら・・・」

「八工次郎はどうしたい？」

「へえ、あつしは姉御のそばにおいていただければそれだけで」

「じゃあ、ごうじましょう。私のこのブローチ琥珀で出来ているの。」

そしてこの琥珀の中、空洞になっているのよ。よかつたら、ここに入っている？」

「えっ！いいんですかい」

「いいわよ」

「では、さっそく」

といつて、琥珀の中にはいつていく。

「よかつたね、八工次郎！」
といつひづるに

「へえ、ありがとうござんす。・・・グスン・・・」

なんて、少しシユンとする八工次郎の哀愁のある声が聞こえた。

「どうしたの？洋子」

「信じられない！・・・目の前で見ているのに・・・それでも、夢みてるみたい」

「ふふふ、そうでしょうね」

「それに、こんなの見て平然としている庄絵さん達にも・・・」

「私達も最初は洋子と同じよ。あきあのそばにいとともう慣れっこになつてね」

「それでも庄絵さん。昨日のドラマにはさすがの私達も驚いたわねえ」
と薫。

「私、あの『ステーション』に乗ってみたかったわ」とひづる。

「私と洋子は旅館での出演が終わった後は『中央』というの？
小野監督の傍にいたから『ステーション』からの映像を全て見ていたわ。

どうしてあんなことが出来るの？あんな恐ろしい世界にいながら・・。

あの12あるってステーションをカメラ割を考えながら全部をあきあが動かしていたんでしょ」

「でも100%ではなかったわ。ある程度までは『ステーション』を動かすけれど

カメラワークはやはりプロのカメラマンの技よ。それより気が気でなかったのはアクセントよ」

「それでも動かしていたのは事実でしょ。

私とひづるとあと幸田さん、それから律子と順子それに少数のスタッフ達は

本堂の奥にあるテレビで見ていたんだけど、特にあの世界の最後の場面、

光に包まれたあの世界から龍雲時の本堂に場面が切り替わったときは、

凄くスムーズにいったでしょ。なにか録画を見ているようだったわ」

「あんなのなんでもないわ。あのステーションは最初の位置に戻る機能を

つけていたの。だから光に包まれた瞬間に元に戻るスイッチを入れただけよ。

もっともその時に瑞姉に元に戻るからって報告をしていたから」

「私の頭の中に次から次へとあきあからの声が聞こえるでしょ。

いつもせつぱつまった状態での指令だから気が休めなかったわよ。

ドラマが終わったときはもうふらふら・・・」

「でも瑞穂はけっこう楽しんでいたじゃないの」

「何言ってるの、智姉みたいに100%楽しんでなかったわよ」

「あら、私もきちんと仕事をしていたわよ」

と口喧嘩をするがこれはいつものことで皆ニヤニヤしているだけ。

「ところでさ、あきあ。あのステーションってどこへやってしまったの？」

薫がきいた。

「持っているわよ」

という平然としたあきあの返事に皆びっくり、

ニヤニヤ笑いながらバツクの中からナイロン袋を出してきた。

中には直径3cmの球が12個入っていた。

「えっ？これがそうなの？」

「そうよ。でもこれでも中はけっこう複雑なのよね」

「これってあきあが作ったの？」

「ええ」

「こんなの、いつ作ったのよ。あきあにはそんな時間がなかったはずよ。」

京都では撮影があったし、あんな恐ろしい事件が3つもあったのよ。不可能だわ」

と順子がいう。

「これ、里で作っておいたの」

「里で？」

「ええ、そうよ」

「だって、里でもそんな時間は・・・」

「あつたわよ。ソフトを作るのと同時進行でね」

「ああ〜、あんたと話していると頭がいたくなってくる」

と順子が嘆く。女優以外の世界でもマネージングしなくてはならぬのだから。

「順子姉さん、どうして？」

となんのくつたくもなく聞くのはひづる。

「だってこんなの日本の映画関係者や世界中の・・・特にハリウッドから絶対に注目されるわよ」

「心配いらぬわよ、順子。こんなの作っても動かせるのあきあだけでしょ」

頷くあきあにほっとする順子。

「でも、あきあをハリウッドに連れていくってこと考えられるわね」

「あつ、そうか。あきあを海外でデビューさせると女優以外にもこんなのマネージメントをする必要も出てくるのね。」

「こりゃ、とてもあきあのマネージャーは一人では対応できないわ」

「順子、もうすぐNASAからあきあ・・・いえ沙希ちゃんを訪ねてくるんですよ。」

もしかしたらNASAに出向くってことも考えられるわよ」

「駄目よ！そんな駄目！・・・今から日本中の騒ぎの中に帰って行くのよ。」

そんな上に海外ですって？冗談じゃないわよ」

怒る順子に律子も頷いた。

今の状態はいろんなことに手を出している時ではない。
里へかえってゆっくりと休養しなくては身体が続かないだろう・・・
と思う。

そんなとき、木村プロデューサーのお母さんが朝食の準備が出来た
から
と呼びに来たのを期に女性全員が居間の食卓に移った。

こうして、この地を立ち日本の喧騒の中に帰っていくあきあ・・・

第一部 第十六話

飛行機嫌いのため全員が列車で移動することになり、智子だけが監督達スタッフと一緒に先に東京に帰っていった。皆の見送りに京都にいる京子やママ達によりしくとって、ロケ車に乗り込んだのだ。

列車は途中で東北新幹線に乗り換え、東京で再び東海道新幹線に乗り換えるというルートを取った。列車に乗り込んでみるとセーラー服の軍団が溢れている。慌ててあきあを隠すように指定席に乗り込んだ。

「ねえ、杏姉！あれ持つてる？」

「あれって？・・・ああ、アレね」

とバッグからセーラー服を取り出した。

あきあが手を触れると今まで着ていた服と入れ替わってしまった。そして、めがねをかけ髪を後で束ね、その上顔を変えた。

「あきあ・・・いえ沙希ちゃん。その格好は久しぶりね」と隣の座席から薫がいう。

「ええ、みなさん。私、佐野沙希といいます。

これから京都までよろしくお願いします」

と挨拶すると、初めてセーラー服姿をみたひづるが目丸くして沙希の前に立った。

「沙希姉さん、とっても似合うわ。本当の高校生みたい」といって沙希の横に座った。

「この格好で、京都まで行くからよろしくね」

女ばかりでのこうした列車の旅、もつとリラックスしたいところだが
いくら指定席とはいえ女子高の生徒達が乗っているのだ、ましてや
こんな狭い空間。
あつという間に天才女優早乙女薫とこれも天才子役の天城ひづるが
同乗している、
ということが伝わりこの指定車両に女子生徒が溢れかえった。

はじめはおずおずと色紙代わりのノートを差し出していた彼女達、
ファンを大事にという早乙女事務所の基本理念があるので
女子生徒がサインを求めてきても女優陣は断りはしないので次から
次へと

遠慮なしにこの車両に入ってくる。

大空圧絵までもが見つかかりサインをねだられている。
でも最後にいづれの女子生徒も指定席を見回してがっかりした様子
を見せるのだ。

これは東北新幹線ののりかえても同じだった。

「ねえ、律姉！私、みんなに悪いことをしているのかしら・・・」
ずっと気にしているのもう我慢できずそう聞いた。

「沙希！あんたまでみんなに見つかったらどんな騒動になるのかわ
からないわ。」

でも、あんたのことだからとても気にしているのね
「
といて慰めるように言う。」

サインを終えたひづるが

「沙希姉さん、みんな沙希姉さんのこと気にしてたわよ。」

あの子は誰ですかって・・・一時日野あきあさんかと思ったんだけ
ど

顔が全然違うからがっかりしたんだって、でも女優さんたちに囲ま

れて

大事にされているあの子は何なんだろうって評判になっているわ

少し考え込んでいた沙希だが

「ねえ、ひづるちゃん。私と一緒に来てくれる？」

私、あの子達と少しでもお話がしたいの。いいでしょ。律姉!

「仕方が無いわね、いいわよ。その代わり正体をばらしたら駄目よ」

律子の言葉に薫達みんなが頷いた。

「うわあ、ひづるちゃんだ」

「あそびに来たわよ」

「ひづるちゃん、この人は？」

「沙希姉さんのこと？沙希姉さんは女優の卵なのよ」

これは打ち合わせ通りだ。

「へえ〜」

「佐野沙希といます。京都まで一緒だと聞いたんでお話したいな
って思って」

「うわあ〜、可愛い声・・・でもどこかできいた声だわ」

「あっ、そうだ・・・昨日のドラマだ!」

「本当だ!千賀子の声だわ」

といって手を叩いて喜ぶものがいたし、不審がって顔を覗き込む子
もいた。

「佐野さん」

「沙希って呼んで!」

「じゃあ沙希!あなたはどうしてひづるちゃん達と?」

「京都の撮影で知り合いになったの。」

それで聞いたらテレビドラマを撮りに東北へ行くっていうでしょ。

だから東北まで押しかけていったの。お手伝いさせてくださいって

「へえ〜、いいわね」

「じゃあ、沙希は京都人なんだ。・・・でも京都弁使ってないね」

「へえ、うちは京都までみなさんとぎょうさんお話したかったんです。

京都までの旅、みなさん。よろしゅうおたの申します」

「うわあ〜京都弁だあ。いいわあ〜何だかとても女らしい。舞妓さんみたい」

「でも、私は沙希に昨日のドラマの台詞言って欲しいわ」

と声が似ていると言った女子生徒にいわれ、思わずひびくと顔を見合わせてしまう。

「私でいいの？昨日の撮影のお手伝いしたから台詞は覚えているけど」

「うん、いい。だって日野あきはここにいないもの。」

代わりとっては沙希に悪いと思うけどね」

「じゃあ・・・あれ言って・・・あれ・・・」

「あれって？」

「それ・・・えっと戦士に変身する前の台詞よ」

「待って！目をつむるから」

と周囲にいたもの全員、しかも横で聞いていた先生らしき人まで目を閉じた。

沙希はひびくと顔を見合わせニッコリと微笑むと真剣な表情にかわり

「『人は守るべきものがあれば強くなれる。どんなことでも受け入れられる。』

わたしは守りたい！・・・愛するひとりの少女の真心を！・・・母

が子を想う心を！

だから、あなたのその闇の心をぶち壊す！』・・・これでいい？」

臨場感溢れるその台詞の言い回しに

「うわあ~~~~本物みたい！」

と歓声と拍手、何だろうと隣りの車両からも覗きにくる女生徒達、その数はドンドン増えて、何度も何度も台詞を繰り返し言わされる。

その上、ひづると千賀子との会話の台詞も言わされて、二人とも冷や汗しきりだ。

「あんた達！ もういいでしょ。そんなにくりかえすと佐野さんやひづるさんが疲れるわよ」

と先生がやめさせたので台詞はそれ以上言わなくてよくなったが集まった女子生徒達がドラマのことや女優、なかでも日野あきあのことをとても知りたかった。

「凄い女優さんよ。あの天才女優の早乙女薫さんがファン第1号になっっているもの」

ひづるがニヤニヤ笑いながら隣りの沙希を見て楽しそうにあきあのことを言うのだ。

「だから、私がファン第2号なの」

「日野あきあが不思議な術を使っつて本当なの？」

とメガネをかけ委員長と呼ばれる少女が聞いた。

「あなたはどっと思うの？」

「私はデマだと思う。昨日のドラマだって私最後まで見たわ。生放送だって書いてあったけれど絶対に嘘だと思っつ。」

だってあんなのできっこないじゃん。CGとかを合成しているんだわ、きつと」

沙希とひづるが顔を合わせてニコツと笑った。

これがテレビを見ていた生の感想なのだ。視聴者が持つ当然の反応だといえよう。

「ひづるちゃん、今の私の話ってどこがおかしい？」

と委員長が聞き返してくる。

「うん、昨日のドラマを見た人の当然の反応だなんて思ってた」

「今の委員長の話とは別の感想を持っている人はこの中での？」

と沙希が聞くと

「私、そんな見方でドラマを見てなかったわ。ただドラマの筋に没頭していただけ。」

だからドラマが終わったら目が真赤、家族もそうよ」

という意見にはほとんどの生徒が賛成していた。

「でもあんな術使えたらいいなあって私は思ってたわ。」

あの変身して戦士の格好になったでしょ。私あこがれちゃう」

という生徒にも賛成が多く、ひづるまでもがキャアツキャアといって手を取り合って騒いでいた。だから調子に乗って

「あきあさんの術のことって詳しく言えないけれど・・・これは内緒よ。絶対しゃべっちゃ駄目よ」

といって沙希が止める間もなくヤタさんを出してしまった。

『カアア』っと一声鳴いてひづるの肩にとまる。

「キャー」

とびっくりして逃げ出そうとする女子生徒達に

「大丈夫よ、ヤタさんは人にはあぶないことしないから・・・」

私達お友達なのよねえ・・・ヤタさん！」

とひづるに頬づりするヤタさん。

腰が引けていた女子生徒達がほっとするように腰を落ち着けたのはヤタさんがする可愛らしいしぐさだった。

「それは一体なに？」

「ヤタさんっていうの・・・えーと熊野・・・」

とひづるがまだ覚えきっていないのを、仕方ないなあと沙希が手助けする。

「熊野権現の熊野誓詞のヤタカラスよ」

「そうそう・・・それよ。ヤタカラスだからヤタさんなの」

「え〜私達、帰りに熊野権現に寄るのよ。だから少しお勉強もしたわ。」

へ〜その子がヤタカラスなの？」

とすぐに不可思議なものでも可愛いかったら受け入れてしまう現代娘。

「ひづるちゃん、それどうしたの？」

もう皆興味しんしんだ。

ひづるはさすがに天才子役、事件には直接触れなくて

日野あきあが出した式神として京都の清明神社から熊野権現の清流を汲みに言ったことを話す。

それ以上のことを聞きたがった女子生徒がいたが

「ごめんね、これ以上は話せないの。え〜と国家の機密事項だつて」

そんな難しい言葉で煙に巻く。

「清明神社も行くし、熊野権現も行くの。何だか楽しみになってきたわ」

「そうよねえ」

と頷く女子生徒達。

ひづるがキーホルダーの熊にヤタさんを戻してしまおうとがっかりする皆の目。

「えっ?・・・」

と目を真ん丸くして沙希とひづるを見つめる委員長。

「信じられない!これって本当?・・・じゃあ昨日のドラマってひづるのちよっとしたいたずらでこの心境の変化。」

「じゃあ」

と沙希がいう。

「今度映画が封切られるのを知ってる?」

「知ってる、知ってる」

「今、評判よ」

「何か、ゲームのストーリーに合わせて映画がつくられるって」

「そのゲームをつくったのが日野あきあだってことは?」

「えっ?知らなかった」

「知ってるわよ、それくらい」

と反応が二分する。

「映画、私も出ているから見に行ってね」

とちやつかり宣伝するひづる。

「行くわよ、絶対」

と女子生徒達がいっただとき車両のドアから順子が顔をだしてつい

「あきあ!・・・ひづる!・・・もうすぐ東京よ!」

と言ってしまったから大変な騒ぎになってしまった。

「えっ?・・・あきあって?」

「沙希!・・・あなたのことあきあって呼んだよね」

これは委員長だ。この子はとても感受性が強く頭がいいみたいだ。

見ると順子が右手で顔を隠してがっくりと肩を落としてしまっている。

大変な仕事が終わってほっとして気が緩んでしまったのが原因だ。

ひづるまでが

「あきあ姉さん、もう駄目ね」

というから騒ぎが大きくなった。

沙希は立ち上がって騒いでいる女子生徒にむかって

「騙していてごめんなさい」

と頭を下げたあやまった。

凄い女優といわれている日野あきあにこうして素直に頭を下げられては女子生徒達、

どう反応すればいいのか戸惑ってしまい、騒ぎが波を引くように納まってしまった。

皆の視線は、あきあに集中したままだ。

「でも顔が全然違うじゃない」

と言う声が聞こえてくる。

「あつ、ごめんね」

と『ファイ』と指先を口の前で吹くと、皆が知るあきあの顔に戻った。

もうびっくりなのが女子生徒達。

それはそうだろう一瞬のうちに顔が変わったのだから。

どうしてそんなことが出来るのか委員長はもう言葉も出ない様子。

「皆ごめんね。でも騒ぎになって怪我をする人が出てきたら大変だから、

・・・それにね昨日のドラマを見た生の声を聞きたかったの。

この償いは乗り換えた新幹線の中ですからね」

「ごめんね」

「ごめんね」

といいながら女子生徒を掻き分けて順子のほうに歩いていく。女子生徒達がこんなにおとなしいのは皆、固まっていたから……。

それはそうだろう常識では説明できない、摩訶不思議の世界を目の前で見ってしまったのだから。

その証拠にあきあ達が車両を出て行ってからクラスメートや別のクラスの子達とも顔を見合わせてから委員長がまず最初に

「キヤア〜」

と叫び声を出し、連続的に叫び声があがった。勿論、恐怖の叫びではない。

不思議な術を見た驚きと、あきあのその可愛らしさに叫んだのだ。

やっと騒ぎが納まったのは、乗り換える準備をするようにと教頭が入ってきたからだ。

荷物をまとめる女子生徒達、表情が輝いている。

「ねえ、乗り換えの新幹線の中で償いをするっていったわよね」

「言った！言った！」

「でも、ねえ皆！あきあさんってあんなに礼儀が正しいのよ。

私達もあまり騒がずにきちっとしようよ」

という委員長の言葉に皆頷いた。

担任の先生達はそんな子供達に驚きの目を向ける。

実は教頭以外の先生はこの車両にいて終始目撃していたのだ。

いつもきちっとしなさいと叱っても言うことを聞かない生徒達。

一人の女優の力でここまで変わってしまうものかと。

新幹線の乗り換えも先生の先導で見たこともない礼儀正しさで行動した。

こんなこと今までになかったことだ。

席に落ち着くと荷物を置き、3クラス全員がこの車両に移ってきた。

さつきいなかった子も皆の誘いでやってきていた。

時間が経つとみんなソワソワとし出す。

「本当に来てくれるのかしら」

と思いかけた時、

車両のドアが開き、ニッコリと笑うあきあが入ってきた。

もちろんひづるも一緒だ。

・・・あれ？あの早乙女薫も大空庄絵も付いてくるではないか。

空けておいた4人がけの座席、そこに落ち着いた4人。

「もう一度謝っておきます。ごめんなさい」

と立ち上がって、頭をさげるあきあ。

「あきあさん、もうそんなことなさないください」

と委員長が止める。

「昨日のドラマでお疲れだったでしょうに、私達のためにわざわざ
」

と挨拶する委員長、担任達が思わず顔を見合わせてしまうほどきち
つとした挨拶。

なんて、立派な挨拶なんだろう。自己中心でこんなこと言ったこと
もない彼女が。

あきあはにっこり笑って腰掛けた。その邪心のない笑顔に引き込ま
れてしまう。

集まっていた全員がもうファンというより親衛隊になった気分だ。

そこに順子と律子が色紙の束を持ってきた。

「はい、あきあ。頼んでいた色紙を事務所の子が持ってきてくれた
から」

渡された色紙、対面式の4人がけだったので前にはテーブルもなかったが

あきあは前にドンと置き、サインを書き始めた。

ん？・・・と、色紙が宙に浮いているのを皆、目を真ん丸くするのを薫が

「こんなことで驚いていてはあきあのそばにいられないのよ」と笑った。

「それじゃあ、早乙女薫さん」

「薫さんでいいわよ」

「薫さん・・・昨日のドラマは本当に、本当に録画ではなかったのですか？」

「そうよ。勿論、導入部の古い時代のものはテレビでも断ってあったように

録画だったけれど、現代のものは全て生だったわよ」

「ええ〜！じゃあ、あの龍や千賀さんって」

「勿論、本物よ。千賀さんは霊魂だったし、緋龍、紅龍という龍神様も本物よ。

でも、こんなこと他の人に言ったら駄目！判った？

生か録画か半信半疑っていうのが一番無難だからね」

「今度放映される映画はもっと迫力あるわよ」

と大空_三圧絵。

楽しく話しあっている間に、あきあといえはもうペンを置いてニコニコ笑っていた。

「はい、一枚づつとってね」

というとき色紙が皆の間をかってに飛んで配られていく。もう驚くばかりだ。

京都につくまでみんなで楽しくおしゃべりがはずんだ。

女子生徒達にとって楽しい修学旅行の序曲である列車の中、もっとも思い出になる時間となっていた。

「沙希お嬢様、おかえりやす。皆様、おかえりやす」と一行を迎えたのは志保始めとする高弟達。

高弟達に荷物を渡して玄関に入ると、早瀬一族のママ、操、澪と京子が並んで待っていた。

手早く帰宅の挨拶をすると、沙希はさっそく居間に向かった。居間には井上貞子がニコニコ笑いながら座っていた。

「お婆ちゃま、ただいま帰りました」と横に座って挨拶する。

「おうおう、よく帰ってきてくれはりました。小沙希ちゃんがないと寂しゅうて寂しゅうて」

「ほほほ・お母様はもう沙希ちゃんの帰ってくるのは、まだかまだかつて朝早くからそればかり」といってお茶を入れながら笑って話す。

「私ちよつと着替えてきます」といって立ち上がると志保もついて行く。

入れ替わりに入ってきたのは薫達、井上貞子に挨拶をするとさっそく薫と澪の会話が始まる。

「ねえ、澪。隣りだいぶ出来たみたいけど」

「まだまだよ。器が出来てもまだ入れるものが素人同然ではなんにもならないわ」

「今どうしているの？」

「近くの病院へ手分けして研修よ。そして学校にもいかしているわよ」

「何人連れてきたのよ」

「30人」

「そんなに？」

「だって地下の施設つてへたな人を入れられないじゃない。だから身元が確かな人以外は里の人間で固めるしかないの」

「今に里がガラガラになるよ」

「大丈夫だよ、一族の血を引くのは日本中にいるんだからそばで笑っていた真理が」

「澪ちゃん、奈美に頼みなさい。あの子だったら一族の血を引く看護師さんを見つけてくれるわ。」

里の女の子はじっくりと育てることね
とアドバイスをする

そばで聞いている貞子は一族の結束の強さに羨ましさをおぼえるが全て自分の前世の子供や孫達なのだ魂の結びつきはある。だから肉親と変わりはないのだから自分のことのように嬉しい。

「おまちどうさんどす」

と喋って襖があいて三つ指を突いて座っていたのは舞妓姿の沙希だった。

「おお、お、小沙希ちゃん。こっちへ早う」

と貞子がせかすように手招きをする。

「お婆ちゃま！うち、ちよっとだけ出掛けてきてもよろしゅうおすか？」

「あんた、帰ってきたばかりなのにそんなに急いでどこへいくんだ

すか？」

「へえ、昨日の千賀ちゃんのこと、菊奴さん姉さんによろ頼んでおこう思いました、」

菊野屋さんにお線香をあげに行つて来ます」

「やっぱり、小沙希ちゃんや。優しいおすなあ、そんなことやつたら早う行つてきいよし」

と送り出す。

家を出ると、やはりここも雑誌や新聞の記者に張られているようだ。

厚塗りした舞妓姿、正体をくらますのに良かったのだろう、後は付いて来ないようだ。

すれ違ふ舞妓や芸妓達に

「おきばりやす」

と挨拶すると共にウインクすると、皆驚いた顔をするがこの祇園の世界、

井上貞子の家に留まる小沙希ちゃんのこととは皆知っている。

というよりは小沙希の横笛、真理のお琴の弟子ばかりなのだ。

「小沙希ちゃんこそ、おきばりやす」

と挨拶をかえして何もないうに通り過ぎる。これが祇園なのだ。

「お母ちゃん、ただいま戻りました」

と声をかけて玄関戸をあける。

いわばここも小沙希の我が家なのだ。

『どどどど』と2階から走り降りてくる足音と

『ピシヤリ』と障子をあけて小走りの足音が聞こえる。

「まあ、小沙希ちゃん！お帰り・・・さあさ・・・早う上がって」

「小沙希さん姉さん、お帰りやす」

と菊野屋の菊野と舞妓の花世だ。

「あら！おかあちゃんも花世ちゃんもすごい鼻声やわあ」

「へへへ、うちもおかあちゃんも鬼も攪乱え」

「風邪？」

「そう、でもなんどすか、小沙希ちゃんの顔みたらすーっとお熱が下がったわ」

と菊野の言葉に

「ほんまやわ、うちもなんか元気がでてきたえ」

「もう、二人ともそんなわけあらしまへん。二人共ここにお座りなさい」

と喋って居間の座布団の上に座らす。

「もう、こんな熱が高くて、どないしますのや」

と怒りながらも二人の額に手を当てて呪文を唱えた。

「おかあちゃんも花世ちゃんも今日1日だけはお布団の中で辛抱どす。」

うち、お呪いかけましたさかい明日にはもうお床あげどすえ」

と喋って二人共無理やり布団の中に追いやった。

そして、菊奴の仏壇にお線香をあげて千賀のことをよろしく頼んだのである。

そして隔離ということの一つ部屋で布団を並べて寝かしつけられた菊野と花世に

「うちがつくったおかゆやから、おいしいかどうか判からしまへん。

どうせ二人共、朝からなんも食べてえしまへんのどっしやる？」

と二人の枕もとに土鍋にいれたおかゆと小皿二つを持ってあらわれた。

「へえ、お母ちゃん」

とって菊野用にいれた小皿のおかゆをスプーンですくって食べさせる。

「次は花世ちゃんえ」

と花世にも同じ事をする。

二人に何故か溢れる涙、

「あらあら、二人共どうしたのどすか？涙なんか流さはって」

「うちは嬉しいのどす。こんなこと実の娘の菊奴にもしてもらったことおへん」

「うちはちっちゃいときにうちのお母ちゃんにしてもらったの思い出ただけどす」

「どうせ、お母ちゃんはお母ちゃんのためにお百度をふんでたんで風邪をひいたんどっしやる？」

花世ちゃんは花世ちゃんですんなお母ちゃんが心配で遠くから様子を窺っていた！

違ってます？」

という小沙希に床の中で顔を見合す菊野と花世。

そんな様子に自分の推理の正しさを確認する小沙希。

とそのとき『ガラガラ』と玄関が開く音、

「あっ、来たわ」

とって立ち上がって部屋を出ていく。

次にあらわれた時、小沙希の後に澗の姿が。

「駄目じゃないですか、何か身体に異常があつたときは私を呼んでくれなければ」

という澗の言葉に

「へえ、・・・でも風邪ぐらいで澗先生を呼ぶなんて」

というのを

「女将さん！病気に対する素人判断はろくなことがないのよ。それ

に風邪は万病の素というでしょ」と注意をする。

しばらくすると『ガヤガヤ』とこの家の芸妓や舞妓達が帰ってきた。

「あつ！小沙希ちゃん……」

と皆を出迎えようと障子を開けたとたん、目ざとく見つけて声をかけたのが

芸妓の花江だった。

「ひゃく、小沙希ちゃんやわ」

「小沙希さん姉さん！」

と玄関口を跳び上がりドタドタと小走りに近づいてくるのを

小沙希が慌てて『シー』と人差し指を唇に当てると、みんな足を止めてしまう。

「今、澪姉さんがお母ちゃんと花世ちゃんの診察をしているんです」

「小沙希ちゃん！お母ちゃんと花世ちゃん、大丈夫なんですか？」

と心配そうに聞く花江達、……と障子が開いて

「もう大丈夫だよ。……だけどあんた達がついていながら

どうしてもっと早く医者に見せなかつたの！」

と強い口調で言うと

「へえ、すいまへん。……でもお母ちゃん、お医者はんが大嫌いなんです」

「だからといって……」

「お母ちゃん、お医者にかからへんのが自慢やって普段から言うてました。」

……そのお母ちゃんがお医者はんにかかりはったんは、澪先生だ

からどす」

「えっ？」

「小沙希ちゃんの縁に続く澗先生やから安心して診察してもらったんや思います」

と花江がいう。

芸妓や舞妓達に見つめられた澗・少し上気した表情を見せながら「わかったわ、……ありがとうって言うべきかしら？」
というが、急に表情を引き締めて

「さあさ、あんた達。外から帰ってきたらうがいを励行よ。

この薬を少しづつコップにとって水で薄めてからうがいをするの」といって薬を渡した。

皆、『キヤーキヤー』言いながら二階に上がっていくが

「小沙希ちゃん！……昨日のドラマ皆で見せてもらいました。

泣いたり笑ったり……でもあんな凄いドラマ見るの初めてどすえ。

今日どこ行っても物凄い評判どした。だからうちら鼻高々で聞いてたんどす。

うちらと小沙希ちゃんのこと誰も知りはらへんから

うちの前で皆さん遠慮はあらしまへん。変なこと言う人もいやはりましたけど

たいていのお人は凄いドラマやった言うてました」

という階段の前で花江が振り返って小沙希に言う。

「ねえ、小沙希さん姉さん！お願いどす。

昨日のお話を少し……少しだけ聞かせておくれやす」

と階段途中から顔を覗かせた舞妓の豆奴が小沙希を呼ぶ。

「ええ、少しの時間なら」

とみんなを追いかける小沙希。

「沙希ちゃん！・・・お婆様が首を長くしてまってるから長くは駄目よ」

という澗の言葉に振向いて『ニッコリ』笑って階段を上がっていった。

結局、小一時間ほどわくわくするような眼差しで小沙希の撮影話を聞いていた芸妓と舞妓達、

「うちらが小沙希さん姉さんからこんな話聞いた事知ったら

お母ちゃんと花世さん姉さんうらやましがるやるなあ」

という豆奴に

「駄目どす、それだけは言っては駄目どすえ」

という花江だったが2日後お床上げのさいに嬉しさのあまりついポロリとしゃべってしまった豆奴、

『あちゃあ』という表情で顔を見合わせた芸妓や舞妓達、

そして、睨みつける女将の菊野と花世は悔しがる悔しがる・・・

そして又聞きだが小沙希の話を順番にその話を繰り返させ、

芸妓や舞妓達を『へきへき』させた女将と花世。

そのころ小沙希はマネージャーの瑞穂と律子と共に東京に戻る新幹線の中であった。

「お婆様、寂しそうだったね」

と窓側に座る沙希の横の律子が言う。

「でも、すぐに里で会えるから」

と言う沙希はセーラー服姿で術で顔を変え、あの佐野沙希という架空の少女に変身していた。

やはりテレビの効果は恐ろしいもので、あのドラマの放送以来、

沢口靖子と間違われるよりも日野あきあとして追いかけてまわされ、ファンもそうだが、メディアの記者やレポーターは神出鬼没であらゆるところで見張られている。

たった一泊だったが京都の町にも多くの報道陣が出張っていて顔見知りの記者達に祇園で何度もすれ違ったがさすがに舞妓姿をしているのには気づかなかつたようである。

先ほど京都駅構内で律子と瑞穂の顔を知る記者に声をかけられた。

「あのう日野あきあさんは一緒にじゃないんですか？」

「いえ、今日は東京の事務所でマネージャー会議があるので私達だけです」

「あきあさんはどこにいられるんでしょうか？」

「小野監督が昨夜太秦入りされたので、きょうは一緒に映画の編集作業のお手伝いすると言って、

タクシーでここまで送ってきてもらって今別れた所なんですよ」といってうまくごまかしたのだ。

こうして3人やっと席に落ち着いたところだ。

「ねえ、沙希！私は今は『日野あきあ』じゃなくて『早瀬沙希』のマネージャーよねえ？」

と二人の向かい合う席に座る瑞穂がバックから何やら取り出しながら聞いてくる。

「そうよ、瑞穂！今日から里に帰るまでは沙希は『早瀬沙希』という

株式会社アクトの部長付き秘書としての初仕事だからがんばってね

！」

と言う律子に

「だったら律姉は？」

「私？・・・私はこれ以上仕事は増やせないからね」と苦笑いをする。

一応あきあのマネージャーであるが天城ひづるのマネージャー・・・そして、

ひづると瑞穂の家庭教師を兼ねているから目が回る忙しさだ。

今日、スケジュールを入れていなかったひづるがついて来るといつて

だだをこねていたが、『早瀬沙希』として忙しく動き回らなければいけないので

京都に置いてきたのである。

そして、たつぷりと宿題を与え、これが出来なければ隠れ里には連れていけないと

きつく注意をしてきた。

沙希は二人の話を聞きながら窓の外を眺めていたが、いつしか昨夜の事を思い出していた。

皆と晩御飯を終えて楽しい語らいの場を繰り広げていたが、

さすがに昨夜来の疲れからか、一人去り二人去りと静かになっていった。

そんな中、沙希は手荷物を持って月明かりの中、屋敷を出て行ったのである。

行く先はいつものように比叡山奥の院。

「誰だ！」

「天鏡さん、私です」

暗闇から出てきた大男、

「おお！これはあきあ殿！」

「天鏡さん、お上人様はもうお休みに？」

「いやいや、あきあ殿が来て下さったらすぐ起こすようにときつく
言われておるのじゃ」

「でも……」

「とんでもない、ここであきあ殿に帰られたら後でどんなお叱りを
受けるのか

考えてもぞっとしますわい」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「少し待っておられよ」

と奥の院に入っていく。

しばらくしてひょろりとした蓬栄上人が満面の笑みを浮かべて近づ
いてきた。

「これは、これは、あきあ殿。よく来てくださった」

と両手をぎゅっと握ってくださいさる。暖かい手だった。

「あきあ殿、わしもこの年になってテレビというものをみるとは思
わなんだ」

と蓬栄上人が言われる。

「でも、お上人様ここにはテレビは……」

「勿論、そんなものはありませんから、我ら一同比叡山の檀家に押
しかけたんですわい」

と天鏡が笑う。

「それにしてもあきあ殿！昨日のドラマには感服しもうした。

本当のことだと聞いておっただけにあきあ殿の術の凄まじさには一
同ただ啞然とするだけでしたぞ」

天鏡がその大きな眼をギョロリと動かして言った。

「これこれ、天鏡！そう大声を出さずとも良い。

夜目にもあきあ殿の顔が赤く染まっているのが判からんのか」

と蓬栄上人が注意をするのだが、

調子に乗ってさらに喋りだそうとするのに

「うふふふ」

とあきあがつい笑ってしまった。

「すいませぬ。かの地で天鏡さんのこと・・・

いえ、泣き虫小僧時代のことを充分に伺ってきましたので・・・

つい・・・うふふふ」

ところえきれず笑い出してしまった。

しかし、天鏡の反応はと見ると・・・口をあんぐりあけて驚いたまま凍っている。

あきあは笑いをおさめると

「これは、かの地にある龍雲寺の和尚様から渡された天鏡さんへのおみやげです。

何でも東北の天然水で作られた地酒・・・いえ、般若湯です」

と手荷物の中から一升瓶を出す。

「龍雲寺の住職？・・・はっ！もしや・・・」

「あきあ殿のドラマに出ていた龍雲寺の峰巖和尚というのは・・・」

とお上人様もあきあの顔を真剣にみつめて言うのだ。

「ええ、ドラマでは峰巖和尚を幸田朱尾さんがやっておられたのでお気づきにはならなかったと思いますが、

峰巖和尚はお上人様と厳しい修行をご一緒に耐えてこられたと聞きました」

「おお～～おお～～・・・これは何より嬉しい知らせじゃ。

あきあ殿が・・・そうあきあ殿が行方知れずになっていた峰蔵のことを知らせてくれた」
と喜ぶ蓬栄上人。

「お上人様にもおみやげが・・・」
というあきあの言葉に手を振って

「いやいや、あきあ殿。峰蔵の無事を知らせてくれたのが何よりのみやげじゃ」
という蓬栄上人。

「いえ、これは峰蔵和尚にも差し上げた同じもの」
不審げに小さな袋を受け取ったお上人が中身を見ると

「おお・・・これは・・・」
赤白く光る大きな鱗が出てきたのだ。

「あの緋龍様の鱗でございます。これは結界を守る要となるもの。いかに私でもこれがあるとそう簡単には結界は破れませぬ。

そして、悪心を持ったものがさわるとその身はたちどころに消滅してしまいます」

お上人が持つ龍の鱗がますます輝きを増し、周囲を昼間のようにつしだす。

天鏡を始めとする武者僧達そして、土御門の者達まで周囲を取り囲んだ。

「おお、おお、これは素晴らしい、この比叡山の守りとなるもの。あきあ殿！どのようにお参りすればよろしいのじゃ」

「和尚様、比叡山の要となるのはこの奥の院の庭、そこに石碑をたてます。その鱗はその石碑の中に」

というあきあに

「そんなことが出来るのはあきあ殿しかおらぬ」

「はい、私はそのため今日お伺いしたのですから」

お上人の言葉にそう返事をした。

あきあが示す比叡山の要の地点は奥の院本堂横の小さな花壇がある場所だった。

小さな花壇は別の場所に術で移し変える。

目の前で見えるあきあの術の凄まじさは僧達の声を奪っていった。

「ナーマクサーマンド・ボダナンバク・・・」

と真言を唱えると『ゴ〜』と地鳴りがして地中から何かがせり上がってくる。

やがて地鳴りが止んだとき、それは身の丈3mもある大きな岩が皆の目の前にそびえ立っていたのだ。

あきあの真言は続く。

僧達が見つづける大きな岩に『ピシッ』と一筋のヒビが入ると

そこから幾筋ものヒビが岩全体に広がっていく。

そして『バシッ』という音と共にひび割れた岩の表面が崩れ落ちた。

「おおお〜・・・」

声ならぬ声があがったのは驚異の秘術・・・の結果、岩の中から大日如来像があらわれたからだ。

僧の中から一人・・・二人と経を読む声が聞こえ、やがて全ての僧達の読経が比叡の山に流れる。

蓬栄上人が手に捧げ持つ龍の鱗が再び輝きを増して、赤白い光が黄金に輝く時

『フワリ』と上人の手から浮き上がり、大日如来像に向かって進みだした。
僧達の読経の声が大きくなる中、龍の鱗は像の前で一瞬停まったと思った瞬間、
『フツ』と大日如来像の中に消えていった。

すると岩で出来た大日如来像が如々に光始めその輝きが、
像の隅々まで行き渡ったとき、ゆっくりと光が像の中に染み込むように消えていく。

そして、満天の星の光がこの比叡の山に戻ったときやつとあきあの真言が終わった。

荘厳なる静けさの中、ゆっくりとあきあが名笛『緋龍丸』を取り出し口に当てて吹き始めた。

比叡の山を再び退魔の音色が包み込む。清々しい風と空気が大日如来像に命を与える。

像の頭上から一筋の赤い光が天空に上りその一点から幾筋もの光が分かれて

比叡の山を覆ったのである。強力な比叡の結界が完成されたのだ。

あまりにも凄まじい陰陽師あきあの術、

比較にならぬ力の違いに呆然とする土御門の術者達。

「お上人様、この像を破壊する強力な術者が現れない限り、比叡の結界は磐石です」

「あきあ殿のおかげじゃ」

「あきあ殿は凄すぎる。この比叡山に単身殴りこんだとき、
ようもわし達は無事だったものよ。今から思うとぞつとる
と天鏡がいうと

「天鏡さん！そのことはもう言いつこなし」

とちよつとすねるような言い方で注意をした。

でもその可愛らしさは強力な術者として相反するもので、僧の身でありながら『ぞくつ』とした者がいても不思議ではなかった。

沙希にとって久しぶりの会社だった。

本当はすぐに社長に挨拶に伺うのが筋だったが、さすがセーラー服では顔を合わせるわけにはいかず、又、二人のマナージャー・・・特に瑞穂が現地採用だったため、まだ事務所に挨拶をしていないことと、律子にしてもいろんな報告があるので

まずは早乙女薫事務所に顔を出すことになった。

「おはよう！」

とまず律子がドアを開けて事務所に入った。

「おはようございます。・・・あっ！律子さん」

と玲子が声をかける。

その玲子と話をしていた杏奈が立ち上がってセーラー服の沙希を見てニヤツと笑う。

けれど事務所の女性達、瑞穂とセーラー服姿の沙希に眼を見張るだけだ。

玲子の声が聞こえたのかパーティションで区切られた会議室のドアが開いて

まゆみ社長と城田メディア部長・・・そして、何と沙希の会社の社長、

株式会社オクトの佐野社長と静香専務が出てきたのである。

「律子、遅かったじゃない」

というまゆみ社長に

「ええ、京都からここまで何回も記者さん達に声をかけられるもの
ですから

手間取ってしまつて・・・」

「こちらにもマスコミからの集中攻撃で業務もままならないのよ。

テレビ放映以来それが激化してしまつてね」

「ええ、京都では凄まじかったです。あきあなんてマスコミから逃
れるため

四六時中舞妓姿でいましたもの」

まゆみ社長の視線は瑞穂と顔を変えて変装中の沙希にうつりニヤツ
と笑つて

「さあ、みんな紹介するからこちらに集まつて！」

というといつのまにこれだけの大世帯になつたのか20数名の女性
達がまゆみ社長の前に並んだ。

「まず、この子は京都であきあのマネージャーとなつた土御門瑞穂
さん。

京都で彼女の身におきた悲しい事件はみんなの知っている通りよ。
でもここまで元気になつたの。これからはみんな、公私ともよろし
くね」

という土御門瑞穂に一言挨拶するように促す。

「土御門瑞穂です。わたし、事件以来見るもの聞くもの全くの初め
てのことなので

いろいろ戸惑っています。周囲のみなさんの励ましでなんとか今
日までやってこれました。

これからも一生懸命がんばるつもりです。みなさんよろしく願ひ
します」

といつて1歩後に下がる。

「ついでにあんたも挨拶しちゃいなさい」

とまゆみ社長にいわれ1歩前に出たセーラー服の少女。

さきほどから城田と静香はニヤニヤ笑いつぱなしで、杏奈は沙希の横に立って知らないフリだ。

「わたし、これからもみなさんにお世話になりつぱなしになりますのでよろしくお願いします」
と簡単な挨拶で1歩下がった。

「ほら、もうみんなに正体を見せちゃいなさい」

といわれて印を結ぶと顔の前で指を走らすとそこにみんなが見知った顔が現われた。

「きゃあ！日野あきあだわ」

「あっ！・・・沙希お嬢様！」

里から来たもの、新たに採用されたもの、そして元からいたもの、全ての女性達の嬌声、歓声が部屋の中に響く。

両手で口を抑え目を真ん丸くあげたまま固まっている女性もいた。

しかし、一番驚いていたのが株式会社オクトの佐野社長だ。

あの記者会見の日、会社を出た早瀬沙希が今日の前にいる少女とついでい同じ人物とは思えなかった。

とにかく会社の知名度をあげ、利益を生む新しい開発を次々と専務の静香を通して

報告される身にもなるといい、今までとは違うその開発品は新しいプロジェクトを

組んでいかなければならず、今までのようにソフトの開発のみで会社を運営することが出来なくなってしまった。

あれよあれよと社長の日々の業務まで変化していったのだ。

まさか仕事の取引をすることは絶対思わなかった警察関係者との折衝、

セキユリティーの安全な開発品を製作することとなる会社を社長のあらゆる知人友人を通じてさがすこと。

または警察から紹介される会社を見学するという分刻みのスケジュールとなった。

本当に目の回るような忙しさとはこういうことなのか。

ヘッドハンティングして数名の社員も入れた。

そして本日、まさかと思うNASAの関係者が沙希の発明品のこと
で来社するのだ。

さすがにこの機能等の専門的なことは沙希にしかわからない。

あきあととして素晴らしい仕事をテレビで見てはいたのだが、その疲れを心配をする余裕も今はない。

こうして帰社を要請して今、目の前にいる沙希を見るとそのショットは大きい。

確かに妻の静香には聞いていた。でも100%信じていたわけではない。

テレビで見るあきあは若いと思う。でも女優である。

年なんてメイクでどうにもなると思っていたのだ。

しかし、目の前にいるこの少女、セーラー服を着ているので若くはみえるが

化粧一つもない輝くような肌はまさしく16歳の少女のものだった。

その真実を突きつけられた驚きは大きい。

「ふふふ・・・あなた、驚いたでしょう？」

佐野社長は言葉にも出来なく視線は沙希にあてたまま突っ立ったま

までである。

(えっ?・・・あれは何をしているんだ?・・・最近名前を覚えた
早乙女薫事務所の玲子という女性が沙希君に抱きついて・・・ああ
〜)

キスをしている。・・・あっ、腰砕けになつて椅子に座りこんだ
ぞ。

ええ〜?なんだこりゃ・・・勢い良く立ち上がって・・・
何と・・・元気溘刺じゃないか!)

女性達が次々と沙希に抱きつきキスして元気になつていく。
初めての子は驚きで・・・そしてここに入社できて良かったと
ガッツポーズをする女性達で二人の男性は圧倒されっぱなしであつ
た。

最後に佐野社長の横からスーッと専務の静香が沙希に歩いていく。
佐野社長が止めるひまも無いほどあつというまのことであつた。

元気になつた静香が社長の横に戻ってきたとき

「おまえ」

と非難めいて言う

「いいじゃない、女同士だもの。それに最近疲れ気味だったから」
とニッコリ笑つてから

「残念ね、沙希ちゃんは男嫌いだから男には効果がないの」
という。

杏奈の用意した薄いグリーンビジネススーツに着替え終わった沙
希が

もと自分がいた2階の部署に挨拶にいったときの女性達の歓迎ぶり
は

ここに改めて書き記す必要もないだろう。

ただ女性達の嬌声とその後ろから男性社員のアイドルを見つめるような

視線で部屋の中が熱くなったのは確かだ。

そして、静香専務が案内したのは部長となった沙希の新しい部屋、4階の部長室に始めて足を踏み入れた。

窓際にある大きな机の上には真新しいノートパソコンと開発部長と肩書きのある沙希の名刺が3ケース置いてあった。

「律子さんの机はこれ、土御門さんの机はその横よ」

という静香の言葉で律子と瑞穂は自分の机の後に荷物を置き、椅子に座ってみる。

律子にとっても瑞穂にとっても新しい経験なのでドキドキするほど嬉しい。

机の上には沙希と同じように名刺が置いてあった。

律子には『開発部第二秘書』瑞穂には『開発部第一秘書』と肩書きが記されてあった。

「えっ?・・・あの専務、これ間違いじゃ・・・」
と瑞穂が言いかけたのを

「いいえ、間違いじゃないの。ほら、電車の中で言ったでしょ。私、忙し過ぎるので沙希の秘書をまかすって。」

私は暇なときには第二秘書として沙希の仕事を手伝えるけど、ほとんどそんな暇が無いと思うの。
だから瑞穂、あなたが第一秘書として沙希をバックアップしてちょうだい。

でも、勉強することばかりよ。それにわたしのお勉強もあるし、これから瑞穂も大変だよ
と律子がいう。

「そういうことよ、土御門さん。それにここは会社だから公私の公
だということをお忘れないようにね」

という静香専務の注意にも

「はい」

と強い返事も忘れない。

あの京都での悪夢のような事件に遭遇したが、沙希と知り合って、
沙希によって解決されたあと瑞穂の運命はあれよあれよと変化しつ
づけ今日この場にいるのだ。

自分でも信じられないような幸運を沙希によって与えられたのだ。

その沙希はというと佐野社長やオクトの城田部長とニコヤカに話こ
んでいた。

「瑞穂ちゃん、あなたの机はうちの事務所にもあるからね。

でもそこに座ることはなかなか無いと思うけど」

と一緒に付いてきたまゆみ社長が椅子に座る瑞穂の肩に手を言う。

そのときドアをノックする音が聞こえ専務が返事をする
とドアが開いて社長秘書の大崎恵が顔をだした。

沙希の姿を認め一瞬驚いたように立ち止まったが

社長への急ぎの用件を思い出し佐野社長の傍まで近寄ってから

「社長！今NASAの方がおいでになりました」

「おお、そうか・・・で今は？」

「はい、岡島さんが応接室に案内しております」

「何人来られたのかね」

「はい、2名の方と通訳の方が・・・」

「そうか、じゃあ専務！」

と静香専務を促すと部屋を出て行くとしたが足を止めて沙希に振
向くと

「早瀬くん、専門的な話になったら電話するからそれまでここで待

っついてくれ」

と言ってから部屋を出て行った。

秘書の大崎が社長や専務の後についていこうとしたが、急いで沙希の元に戻ってきて

「まあ、沙希ちゃん。すっかり若返ってしまったって、可愛いわ。さあ、急いで私にも元気を頂戴！」

といってキスをすると腰砕けになりながらもふんばってから、にっこり笑って部屋を出て行った。

次に電話があることになる15分間というものまゆみ社長と城田部長は、

ソファで杏奈の昨日の報告を受けていた。

「友人達が持ってきた服は50点、そのうち10点を沙希個人用として

購入しました。そして、15点は公人・・・つまり映画・テレビの衣装用としての借り受けで、

着てしまえば購入することになります

が、手を通さなければ又、新しいものと交換することが出来ます。

他はこれというイメージが湧きませんでしたので返品しました」

「わかった。杏奈もやるわね。それでメーカーがどうのって言うていたけど」

「はい、10社のこれからというメーカーのオーナーに話を聞きました。

若い女性服に対するコンセプトとこれからのイメージ戦略など

いろいろ聞きましたがもう一つピンとくるメーカーがありませんでした」

「女性服といっても千差万別なのよね」

「ええ、それに私がデザインするっといっても映画やテレビでの役

柄もまだわかりませんからね。

最低条件とすればこちらの細々と指示に答えられるかどうか、だけですから……」

「杏奈くん、一度京子くんと話をしてみればいい」

「京子さん？鳴海京子さんですか？」

「ああ、そうだよ。彼女、元はといえばファッション誌の記者でけっこう有名な記者だったんだ。

それがどういいうわけか道を曲げてしまっただけのような作家になったんだよ」

「へへ、あの京子さんが……」

「ああ、いまでもファッション業界の顔であることは間違いないよ」

一方、律子と瑞穂は机で新しいノートパソコンで新しいソフトをつくる沙希を

驚異の眼差しで見ている。律子にしても里での第二段の作業の時はいなかった。

眼を閉じ物凄いスピードでキーボードを叩き続ける沙希、

電話が鳴る直前に手をとめ、受話器に手を伸ばすとベルが鳴ったのだ。

「はい、早瀬です。……わかりました。すぐまいります」

と、受話器を置く。

「じゃあ、行きましようか。土御門さん」

という沙希に

「はい、部長」

と瑞穂が返事をする。

サラリーマン社会では当たり前前の光景だがこんなこと初めての瑞穂

は嬉しくてたまらない。

「じゃあ、行ってらっしゃい。私はここで待っているからと律子は言ってから」

「瑞穂ちゃん、前から言っているようにマネージャーも秘書も同じだから」

何でも手帳に控えておくことは忘れないようにね」と二人を送り出す。

「律ちゃん！さすがね」

とまゆみ社長にいわれるが、心配でしかたがないのが本心である。こうしてソファで待つ4人に、じりじりと時間が過ぎていく。

5階の応接から会議室へ場所を移したNASAからきたアメリカ人2名、

この社のプレジデントから紹介される開発者をいまかいまかと待っていた。

ドアがノックされ入ってきた沙希と瑞穂を見たその反応は

『嘘だろう？』『何か騙されているのでは？』と二人顔を見合わせていたが

通訳の日本人の若い女性の反応は違った。

通訳としてはあるまじき行為だったが、勢い良く立ち上がって

「きゃあ、日野あきあさん！」

と顔を赤くしながらそう叫んだ。そしてつい沙希に近づいて握手を求めたのである。

そんな行為をする自分達の通訳に訳がわからないと、強く説明を求めた二人のアメリカ人。

あたふたしてしまった通訳の手助けをしたのが沙希だった。

その見事な英語で

「その通訳の人が悪いのでも何でもありません。最近私がこの仕事以外に女優の仕事をする事になり映画やテレビで少し顔を知られるようになったからです。だから通訳の女性を叱らないでください」

「おおっ〜」

とNASAのアメリカ人達、納得したようで

「そうか、私達が来日したその日、ホテルのレストランでもロビーでも同じテレビ番組をしていたが・・・そう、あなただ。あなたの顔はそのテレビで見た」

と沙希を驚きの眼でみてから握手を求めてきた。

「おおっ、ファンタスティックね」

と喜んでいる。

開発した装置の専門的な会話は沙希が英語を話せることで

意思の疎通は限りなくおこなえだし、

それ以外の会話は通訳の女性にまかせるといふ沙希の優しさをアメリカ人二人も判ってくれたようで楽しい会議となった。

「沙希！どうしてあなたはこんな追尾装置を作ったのですか？」
という会話にもなった。

これは京都での関係者しか知らないことだったので佐野社長も沙希の話の聞いてビックリ仰天だった。

「京都での映画の撮影のときに女性が連続して殺される事件がありました。」

私はあることでそのことを知り推理し犯人をつきとめました。

女性達の遺体が日本の神が守る山に埋められているのが判ったのですが

どうしてもその場所がわかりません。

例えば犯人を告発しても証拠がなく、すぐ社会に出てきてしまうのは判りきっていたのです。

それにその山は微弱な電波しか通さない地質でできているので犯人達の車につけるには普通の発信装置では駄目なのです。

だから新しく発信装置を作る必要性にせまられました。

それとそれまでに私の親類の刑事に頼まれて作ったモバイル型のパソコンに

強力な受信装置もつけていましたので、それを組み合わせれば

例え地球の裏までも追える強力さは持ち合わせているでしょう」

本当のことは言えないので脚色をした。

「そんな凄い経験から生まれた装置なのですかあ」

通訳しながらも女性は驚きを隠せない。

「お聞きしたいのは例えばその受信装置をロケットに乗せれば、どれくらいの距離を追尾できますか」

と聞くと

「少し待ってください」

と持ってきたノートパソコンを開けるとなにやら計算を始めた。

だがいくらパソコンを見慣れているアメリカ人にしても

沙希の神業のようなキー捌きは初めてのものの、

その上目を閉じているとしたらもう驚きを通り越している。

あっけにとられたような顔でその作業を見つめていた。

沙希は手を止めるとパソコンの画面をアメリカ人のほうへ向け

「この計算式は見覚えはあるはずですが、これでいきますと約1光年」

とこともなげにいう。

「1光年?!」

両手を横にあげ納得したのかしないのか。

「今の装置はゲーム機の部品を組み合わせて作っただけですから
発信装置としての目的で部品を揃えて作れば約10光年は追尾でき
るはずですよ」

「とことまなげにいう。」

「あれはゲーム機の部品でつくったのですか？」

「ええ、あの時何の部品もありませんでしたから」

「あのう、すみません。その計算式をプリントアウトしていただけ
ませんか」

「というアメリカ人、NASAのスコット・アルダがいう。」

と佐野社長が自ら受話器をとって大崎秘書に指示をした。

「ミス沙希！私そのモバイルパソコンもみたい」

というジョン・ロバート。

沙希が佐野社長を見ると

「ああ、デモ機として10台あることはあるが……」

「社長！どうということですか？」

「まだ、その受信装置とやらはついていないんだ」

「スキヤナは？」

「それはこの装置の要となるからついているよ」

「じゃあ、それを1台もって来てもらえませんか？」

「だって……」

「いえ、そのスキヤナが受信装置になるのですよ。あるプログラム
を組み込みさえすれば」

「わかった」

と今度は自ら部屋を飛んで出ていく。

沙希と社長の会話は通訳されているのでジョンもスコットも判って
いた。

「あのう、さきほどゲーム機の部品で発信装置を作られたとお聞き

しましたが

どれ位の日数で？」

「日数？」

「ええ、日数ですよ」

沙希が考え込んでしまったので二人のアメリカ人『あれえ？』という顔をする。

そこで専務の静香が助け船をだした。

「ふふふ、今沙希が考えてしまったのは日数という質問をしたからですよ」

「日数つとってはいけなかったのですか？」

「ええ、実際の製作期間をいえば自分の能力を持ち上げてしまうと考えて困っているのですよ」

「能力を持ち上げる？」

「私自身はその場にいなかったのですが、私の姉達は目撃していました。」

壊れたゲーム機から発信機を作ったのは約30分！」

「30分？・・・」

「ええ、たったの30分なのですよ」

呆然と聞くジヨンとスコット。

「信じられん・・・この機械をつくるのにたった30分とは・・・」

「」

「それが本当としたら、ミス沙希！あなたは天才だ、いや超天才だ」

というスコット。

目の前にある小さな発信機を見て、いとおしむようになっているのだ。

大原秘書が持ってきた小型のプリンターから打ち出された

計算式を見て考え込むジョンとスコット、
NASAで長年宇宙開発のためのロケット製作に関わってきた二人
だ。

計算式を検算するのは難しいことではない。

ただこんなややこしい計算をあんな短時間にしてのける

アメリカ人からみれば小学生のようなミス沙希のどこにそんな能力
が隠されているのだろうか、

しかしその可愛さにはジョンもスコットも参ってしまった。

そんなときに佐野社長が部屋に入ってきた。

「さあ、早瀬くん、これだ」

とモバイルを渡す。

モバイルのスイッチを入れた沙希、ウィンドウズのDOSプロント
にプログラムをうちこんでいく。

眼を閉じてのキー打ち驚異のスピードは変わらない。

その間に佐野社長、沙希のパソコンをさわってどんな計算をしたの
か
見ようとしたのだが、ゲームらしきものが入っているのに気が付い
た。

沙希がくるまでは何のデータも入っていないパソコンであったの
にもうゲームが入っているのだ。

「社長、それは先ほど社長から電話があるまでに早瀬部長が何やら
パソコンで作っていたものです」

という瑞穂秘書の言葉に眼をむく。

「だって君、あれは15分ぐらいだったんだぜ」

「はい、ちょうどそれぐらいの時間でした」

という瑞穂の言葉に、じっと沙希を見てからゲームのファイルを開
けてみる。

音楽は無いもののゲームの題名がその液晶画面に映し出される。

『知恵の輪』それは三次元の映像のゲームだった。

シューティングやロールプレイングのような華々しさはないが、なぜか夢中になってしまう。

いつのまにかジョンもスコットも社長の後ろから覗いている。

言葉がいらなからすぐにゲームを飲み込んだのだ。

「あ、う、終わりましたけど」

という沙希の言葉にも何やらゲームのほうに心が残っている。

「あとでコピーして差し上げますから」

という声でやっと仕事へと頭を切り替えていく。

その前に佐野社長から沙希に質問があつたのは言うまでも無い。

「このゲームは？早瀬君」

「ゲーム？あつ・・・はい、少し時間があつたので作ってみただけです」

「時間があつただけで、しかもたった15分の短い時間でこんな面白いゲームを作るのかね。」

一体君の頭の中はどうなっているのか不思議で仕方がない」

という佐野社長に対して余程不思議だと首を振りつつ

「このゲームがそんなに面白いですか？」

「ああ、もう少しいろんな知恵の輪を増やしたらゲームソフトとして販売できるよ」

「じゃあ、あとで増やします」

と簡単にいう沙希。

「でも、第二段第三段を出されるのでしたら会社の皆さんにおまかせしてもよろしいでしょうか」

「それでいいのかい？」

「ええ、まだ平安京のソフトがあと2弾開発しなければなりません

ので」

「良かった。又早瀬くんが忘れていたのかと思っていたよ」

と社長は笑う。沙希のいろんな仕事のことを知っていて言うのだから経営者としては有能ではある。

「これが受信機となつたのですか？」

「はい！」

といってスイッチを入れると、まずは自転する地球が現われ、発信機のスイッチを入れると地球上の一点が赤く点滅するのだ。

そしてズームしていくと日本、そして東京とズームが自動的にくりかえされ

そして今地図上この地を赤い点が示していた。

「今はまだ詳細な地図が入っていませんが国別、主要都市ぐらいなら

このままで判るようになっていきます」

「詳細な地図を入れるのには？」

「いやですねえ、NASAのあなた達なら地球上のどんな地域の詳細な地図なら

簡単にこのモバイルにデータ-をインストールできるでしょうに」
とニコリ笑うが

モバイルを手にとってキーを打ち始めた。

そしてある画面になると

「さあここからは私は入ることが出来ませんからおまかせします」
とモバイルを渡してしまう。

沙希の顔をじつと見てから

スコットがパスワードを入れ地球上の詳細な地図をモバイルにインストールをしていく。

「これで全て終わりました」
と、モバイルの画面を切り替えるスコット。
アメリカの機密事項にはなんの興味もない沙希、
知らないふりで瑞穂がメモをとる手元を見つめていた。

「そのモバイルと発信機は差し上げます。でもモバイルはわが社の
特許製品ですので

どこでも作られるものではないことをお知らせしておきます」
と佐野社長がいうとアメリカ人たち強く頷き

「判っています。一応ここで仮調印をしていきます。

そして私達の片方が地球を一周回るテストをしてきます。

そして、その結果がよければ本調印をします。

第一回の注文数は1ロット1千台で3ロットお願いします。

我々はいろんな人の声を聞きます。

そしてその声を反映してバージョンアップしてください。

その時は我々使っていたモバイルを全て破棄して新しいものに替
えます」

と、立ち上がって社長と握手をする。

そして沙希と握手しながらスコットは

「ミス沙希、一度我国に来て下さい。いえ、来るべきだ。

あなたの能力わが国でもトップレベルだし女優としても優れている
と思います。

実はわたしの義兄は監督のジョージ・ルークです。

彼は貴女のことを知ったら日本に飛んでくるとおもいます。

ホテルでテレビを録画しましたので、帰ってから彼にそれを見せる
つもりです」

「いえ、あまり私を買い被らないで下さい」

「いや、ミス沙希！あなたは天才だ。わたしはあなたとNASAで再会する日を待っています」
と今度はジョン。

こうして今日の第一の仕事は終了した。

ジョンとスコットは発信機と受信機となるモバイルと共にあのゲームの入った

CD-ROMを喜んで持って帰ったのはいうまでもない。

第一部 第十七話

「えっ？・・・１ロット１０００台で３ロットですか？」

と城田部長が驚きの声を出す。

モバイルといっても本体だけでも２０万円近くするし、しかも受信機兼用となる

スキャナ搭載され特殊なソフトがインストールされているのだ。

定価が２５万円では安いくらいだ。

「NASAでの総売上が７億５千万、しかも本体がバージョンアップすること

古くなった本体は破棄されるのですか・・・やはりアメリカは凄い！」

「でも、城田さん。アメリカはあくまでも余禄よ。問題は日本国内なのよ。

これから打ち合わせにいく警察がどれくらいの数字をいつてくるか・・・だわ」

「いえ、佐野専務。それ以外にもこれは非公式ですが日本の航空会社から

引き合いがきているんです。どこから情報を得たのか不明ですけど」

「ふー、まゆみ社長、城田部長。とにかくえらいことになったわね」

と静香専務が言ってから、先ほどから窓際の自分の机で『カチャカチャ』と

ノートパソコンのキーボードを無心に打ちつづける沙希を眺める。

まゆみも城田も同じ気持ちだったのか沙希に視線を送っている。なんとという少女なのであるうか。言葉も出ないとはこのことだ。

瑞穂は自分の机で生まれて初めて触る真新しいノートパソコンを隣の席の律子に教えてもらっている。

杏奈にしてもついこのあいだ静香にノートパソコンを渡されたばかりだし

興味はあったといっても初心者と同じだからこうしてパイプ椅子を持ってきて

これまた律子に教えてもらっていた。

沙希がキーを叩くのを止め

「さあ、できたわ」

と言ってCD-ROMをパソコン本体から出し、ケースに収めた。立ち上がった3人のいるソファに近づいて

「専務！はいこれ！」

「えっ？もう出来たの？」

「出来たって？」

とまゆみと城田が同時に聞く。

「NASAの人が来て電話で呼ばれるまでの15分間、

早瀬部長がパソコンでお仕事をされていたでしょう。あれゲームを作っていたんです。

それが今の打ち合わせの席上社長の眼に止まってしまい、面白いから完成させるように言われたのです。

・・・それがもう完成なのですか？早瀬部長。

律子さん。ゲームの製作ってこんなに短時間で出来るものなのですか？」

と瑞穂がいう。

「とんでもないわ。だってさっきの時間と今の時間を合わせても1時間も経っていないでしょ。そんな時間でゲームをつくるって不可能よ。」

半年以上、一年以上かけることはざらよ
とお化けをみるように沙希を見る。

「やだわ、そんな顔で見ないで！・・・だって暇だったから思いつくままよ」
と言ってから

「専務、ゲーム名を『ミラクル・チェーン』に変えました。

私はこの回限りです。あとはよろしくお願いします」

と言って専務にCD-ROMを渡したとき、瑞穂の机の上の電話が鳴った。

「はい、早瀬部長室です。はい・・・えっ？警視庁から？・・・はい、つないでください。・・・はいこちら株式会社オクトの早瀬沙希です。

・・・えっ、はい・・・もう少し、ゆっくりと・・・えっなんだ、泉姉！なにを慌てているの？・・・えっ、テレビをつけるって？」

と聞くと律子が素早く行動してテレビをつける。

テレビでは報道特集を組んで銀行強盗が人質をとって銀行にたてこもっている事件を放送していた。

偶然来合わせた警察関係者が犯人と格闘したがもう一人の犯人に後から銃撃され今フロアで倒れたままだと、

そしてそこは地の海だということを開放された一人の女子行員が報道陣に囲まれて話している。

「えっ！なんですって！」

と瑞穂が立ち上がり顔色がスーと青くなった。
聞いていた全員が瑞穂に走り寄る。

「貸して！」

と沙希が瑞穂から受話器をひったくるように取る上げる。

「泉姉！私・・・沙希！・・・ええ・・・どうして？・・・それじゃあ、私のためじゃない・・・」

と泉と話している。

「どうしたの？・・・瑞穂！しっかりしなさい！・・・」

とまゆみ社長が瑞穂を叱る！

「その警察関係者って・・・京姉なんだって・・・」
と魂が抜けたようにつぶやく。

沙希の電話が続いている。

「私、行くから・・・えっ、有佐ケイって婦人警官が？・・・わかったわ」

とといって受話器を置く。

その後姿からメラメラと怒りの炎が上がっているのを誰の眼にも見える。

しかし、こちらを向いた表情は笑顔だったが、かえって怒りが凄まじいことを意味していた。

そして

「私、行くわ。もうすぐ婦人警官が迎えにくるの」

「私も行くわよ」

と怒りで顔を真赤にした瑞穂と杏奈がいう。

「私もよ」

と律子。

「ちょっと待って！・・・沙希ちゃんはまだ止められないわね。・・・」

まゆみ姉さん！」

と静香が3人に言ってからまゆみを振り返る。

「沙希ちゃんが被って顔を隠せるものをあのテレビ局から借りられない？」

「わかった、電話する」

と言っただけで受話器を取り上げる。城田部長は前職を生かして携帯電話で事件の顛末を昔の記者仲間から聞きだしている。

「玉藻、葛葉、紅葉！・・・出てきなさい」

沙希の目の前に着物姿の3人が現われた。

「聞いていたと思う。すぐに行って京姉さんの様子を見守っていてほしい。」

もし、その命消えかかったら何としてもこの世に踏みとどませるのじゃ

「はっ」

「犯人にはその姿見せてはならぬ。判ったな！」

と怒りで平安時代に話していた言葉使いに戻っていた。

3人の式

神は姿を消した。

「駄目だ！開放されたのは病弱の女子行員一人だから、あの子の銀行内の様子がわからない」

と城田が携帯を切る。

その時、ドアが開き専務秘書の岡島直子が顔を見せる。

「早瀬部長！下に有佐ケイという婦人警官の方が」

「すぐ行くわ」

沙希が返事する。そして皆を見回して頷いた。

「沙希ちゃん！がんばって・・・京ちゃんを助けて！」

「沙希！今テレビ局の天下社長と連絡がとれたわ。」

現場がテレビ局の近くだからあのロケに参加させていた
若いスタッフに面を持たせるって・・・だから、がんばってって！」
まゆみの励ましに頷く。

会社の玄関を出ると赤いポルシェが停まっていた。
そして運転席から婦人警察官の制服を来た若い女性が出てくる。
赤いポルシェと婦人警官なにか違和感があるが、今はそんなことを
言っている場合ではない。

バラバラとあきあ番の記者達があつまってくる。
「あきあさん、どこへ行かれるんですか？」
と言ってくる記者達。

「ごめんなさい。今日は女優の日野あきあではなく早瀬沙希として
警視庁で仕事の打合せなの」
と言って車に乗り込んだ。

この車を追いかけてようと記者達が車に乗る間に
ポルシェはスピードを上げてマスコミ陣をまいてしまった。

「私、こんなことがなかったらあきあさん・・・
いえ沙希さんあなたに逢えたのはもつと嬉しかったのに・・・」
「大丈夫よ、私が京姉を絶対に救ってみせる！」
「えっ？あなたが・・・」
「そう・・・だから、これからあなたが目にすることは誰にも内緒
よ」

ケイはその言葉に驚いた目で助手席の沙希をみる。

沙希は九字を切った。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

ボワつと沙希の差し出した両手の上で明るい光の玉が出現した。

「八工次郎！聞こえますか？」

「姉御！よく聞こえてますぜ。いえ、何もいわなくてもけっこうでやんす。」

あつしの仕事は京という姉御の命を姉御の式神と共にこの世にとどめるお役目……

ということ……へえわかっております。

じゃあ、その銀行とやらへひとつ走りでいってきやす。

おっと、姉御。姉御の一番の芝居をこの目でしっかりとみておりやす。

では、ご免なすって！」

と言って消えた。

運転しながらも啞然とした表情で沙希をみる。

（八工次郎ってあのドラマに出ていたわ。……じゃあ、あれって本当の事？

この人って……この人って凄い！）

沙希は人差し指で空中に五芒星を描き呪文を唱えると沙希の衣装が変わった。

この衣装は以前蘆屋道満と対決した京に守護神般若童子と同じものだった。

またあの再現をするのか。

ポルシエは現場近くでロケ車から手をふる若いスタッフの横で停まった。

助手席の窓を開けると見覚えがあるスタッフから布で包んだものを渡された。

「あきあさん！またやるんですね。僕達あのドラマにかかわったス

タッフ全員が来ています。

無事に事件を解決してください」

「ありがとうございます」

というスタッフは急いでロケバスに戻った。

沙希がその布をあけるとあの時とは少し違うが同じく『般若の面』があった。

「あるじ殿！」

と車内に紅葉の音が響いたのはそんな時だった。

「京様の命の灯が消えかかっております。早くあるじ殿の癒しの術を！」

という言葉に

「わかった、すぐ行く」

といって面を被り車を出る。

ロケバスから沙希の姿を撮影するスタッフがいた。

女性アナウサーが何やら沙希を見ながら話している。

沙希は有佐ケイ巡查と瑞穂、律子、杏奈に

「心配しないで！京姉は無事に連れてかえるから」

といって飛び上がった。飛行術で銀行の屋上まで飛んでいく。

地上ではその姿に気がついたのか指を指しながら大騒ぎだ。

チラッとその様子を見てから沙希は呪文を唱えるとその姿は床を通り抜け、

五階下の銀行フロアに出た。

驚いたのは犯人と人質になっていた20数人の銀行員達だ。

両足が天井から現われ脚・・・腰とその姿があらわになっていく。

「あ・・・赤井の兄貴！・・・なんだあれ！」

とライフルを持った野球帽の男が指差して思わず兄貴分の名前を叫

んでしまう。

全身を表したその姿、恐ろしい般若面の人物は空中で留まった。銀行強盗に人質になって今この状況は恐ろしいが、宙に浮くその人物をみると啞然として固まってしまふ。

「なんだ！・・・お前は！」

赤井と呼ばれたサングラスをかけた中年の男が言い放つ。

宙に浮いたその人物は答える前にフロアの床で地の海の中で虫の息の婦人警官に

右手をあげその手の平から光を発した。

すると青白いその顔にみるみると血の気がさしてきた。

流れだした血液は身体に戻しようがないが出血はとめられる癒しの術だ。

その証拠に

「姉御！これで大丈夫ががす」

といてハ工次郎が琥珀のブローチの中に戻ってくる。

「安！いいから撃て！」

と言う声で犯人達が発砲する。

その銃声は表の警官隊まで聞こえ、『スワ』っ何事かと銀行の包囲網を狭めた。

そして建物の隙間から中の様子を窺っていた警官から報告がはいる。

「なに！宙に浮いている般若面の人物？・・・なにを馬鹿な！」
指揮官が吐き捨てた。

それを聞きとがめたのが自分の娘が人質になり、なおかつ撃たれて瀕死の状態だということ現場に来ていた飛鳥日和子警視正だ。

「待つて、それって本当のことかもしれない。

間警視、あなたは京都の土御門家の事件を覚えていない？」

「はっ、．．土御門家ってあの京の守護の般若童子って言う奴ですか？」

「私が見てきます」

とって銀行に近寄っていく。

「警視正、やめてください。危ないですから．．．」
とって止めたが止まるはずがない。

一番位の上の人が行くのだから自分も行かなければならないのだ。

結局隙間から二人して中の様子を見る事になった。

「何だ！あれは！」

指揮官、間警視の驚きの声。

だが、飛鳥警視正の口から

「沙希ちゃん．．．」

という言葉が洩れたのには気付いていない。

般若面の身体の回りにライフルの玉がとまっている状態は異常であった。

般若面が指を鳴らすと『パラパラ』と玉が床に落ちる。

「あははは．．．おほほほ．．．」

初めて般若面が声を．．．笑い声を発した。

「誰だ！．．．お．．．お前は．．．」

赤井の声が震えている。

「わたしか」

と女性の声、般若面は女性だった。しかもかなり若い。

「私は天に命じられ、この東の京の守護をまかされた『般若童子』
とでも呼んでもらおう」

「えっ般若童子？」

「君！知っているのか」

身体をロープで縛られている行員達のささやきがはじまった。

「ほら、あの京都で有名になった『般若童子』だわ」

「ああ、今京都で有名になっている……」

「うるせえ！」

と言って安がそばにいた女性行員の腕をつかんで立たせて銃を女性行員の喉元に

あてる。

「へへへ……これでどうだ」

といやらしい笑いを浮かべる。

「助けて！……」

と震える声で叫ぶ女性行員。

でも般若童子は慌てない。

安に指先を向けるとその手が自由を失って銃が床に落ちた。

両手は身体の横に張り付き動かない。身体が棒のようになっている。

そして、ゆっくりと身体が宙に浮きだした。

そして、床上1mのところまで身体が宙で横になったまま留まってしまった。

「兄貴……兄貴……助けてくれ！」

声だけは自由になるのか安の情けない声がフロアに響く。

「くそ！……これでどうだ」

銃撃では駄目だとわかったのか赤井はライフルを逆さに持って般若童子に打ちかかっていくが、

般若童子とでは腕の差が格段にあり過ぎる。

手に持つ細いムチが生き物のように赤井を翻弄し続け、
ついには赤井の銃を持つ腕がしなるムチで打たれ、『ピシ』という
音とともに、

「うっ」

と声を上げて銃は手から離れた。般若童子は銃をフロアの隅にむか
って蹴る。

赤井は懐から短刀を抜くと振り回し始めたが、

般若童子のムチが的確に赤井の身体を打ち据えていき、

赤井の動きがやけにスローモーになっていった。

その結果、短刀も床上に落としてしまい、

赤井は膝から床に倒れこみついには身体を横にしたまま動けなくな
ってしまった。

般若童子が赤井の身体を打っていたのは人の身体にあるツボ、
そこを打つことによつて運動神経を麻痺させたのだ。

筋肉を動かすだけでも酷い痛みが身体中に湧き上がるのは痛みの神
経も過敏にさせたからだ。

沙希は酷く怒っていた。それでも命まで奪おうとは思っていない。
ただど悪い事をした報いをその身体に叩き込んでやったのだ。

これ以降、何か悪いことを考えるだけで身体中に痛みがぶりかえす
ことになる。

京姉にやった報いは警察病院でうんと痛い思いをしたあと治るが
刑務所でゆつくりとこれからの人生を考えればよいのだ。

沙希は赤井を安と同じように宙に浮かせた。

そして、真言を唱えると銀行員達を縛っていたロープが『ハラリ』
と床に落ちた。

「さあ、行きなさい」

と人質の銀行員達を解放した。

「ありがとうございます。般若童子様」

その声をかけ、礼をして人質達は飛び出していく。

沙希は血の海から京を浮かせてから

「玉藻、葛葉、紅葉」

と声をかけると

「はい、あるじ殿」

「ここは終わったわ。もう戻りなさい」

「はっ」

というとき京の身体から3つの赤い玉が出てきて沙希の身体に戻っていく。

人質と入れ替わりに飛び込んできたのは飛鳥日和子警視正と間警視、

そして、泉と有佐ケイ巡查も続き警官達も飛び込んできた。

何も知らない警官達は中の様子をみて驚きで足を止めてしまう。

「沙希ちゃん」

と声をかける飛鳥警視正に『えっ』とびっくりした表情で二人を交互に見つめる間警視。

般若童子はその面に手をかけると素顔をあらわした。

ニッコリと笑うその顔は……えっ? ……あの天才女優の日野あきあだ。

「おおっ〜」

と声あげる警官達、飛鳥警視正はその集団に

「いいわね、この秘密をいつたら誰でも日本中を追い掛け回して逮捕して

刑務所の独房で一生くらすことになるからね」

といつてから

「紹介するわね。女優の日野あきあこと今度警視庁で採用になったあの機械の発明者早瀬沙希よ。」

そしてわたしの姪っ子なの」

「おおっ〜」

と再び声があがる。何だか沙希の存在が身近になった気がする警官達の思いだ。

「日和子叔母様、京姉はもう大丈夫よ。

私の式神達が命の炎を再びつけてくれましたから」

「玉藻さんと葛葉さんと紅葉さんね」

「ええ・・・それと八工次郎も・・・」

「ありがとう八工次郎さん」

というと

「およしになってくださいえ。照れてしまうじゃござんせんか」という声が響く。

みんな驚いて周囲を見渡すが誰もいない。

そういえば、あのドラマで『八工次郎』っていうのが出ていたなあ
と皆、沙希を見てしまう。

京を宙からゆっくりとタンカに乗せる沙希、救急隊員には

「だいぶ失血していますから、その点をお医者様に言ってください
ね」

という言葉も忘れない。隊員達と救急車へと急ぐ泉。どうやら付き添うようだ。

「沙希ちゃん、あなたのおかげで大事にならなくて済んだわ。あり
がとう」

という日和子に

「そんなあ、でも京姉に何かあったらと思うと気が気ではなかった
わ、日和子叔母様！」

と正直にいう。

そんな時

「あのう」

と私服の刑事が声をかけた。

「どうしたの？」

と飛鳥警視正が聞くと

「すいませんが、犯人達を宙から降ろしていただいけませんか」

「あつ、ごめんなさい」

というと再び九字を切った。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

すると犯人達の身体が1mの宙から床にドンと落ちた。

「ギヤア~~~~！痛~~~~い!!!」

赤井が大きな悲鳴をあげる。その尋常でない痛がり方に不審げな刑事達。

「ごめんなさい。その男、身体の痛みを司る神経を鋭敏にしてやったの。

如々にはもとに戻ると思うけれど嘘をついたり悪い事を考えても今の痛みがぶり返すようになっていきますわ。

だから取調べも正直に言わなければ今の痛みが襲ってくるはずですよ。

この人、これから一生嘘をついたり悪い事はできません。考えるだけでも駄目です。

今も痛みはすぐ治せますが、京姉への仕打ちを考えると治す気はありません」

ときっぱりいう。

「いやあ、本当ですか・・・これは助かります。

この男達の背後関係も、銃の入手ルートを調べなければなりません
が、

痛がったり叫んだりすると嘘つてことになりますね。これは楽な取調べになりそうですなあ」
と笑う刑事達。

「叔母様、今日の打ち合わせは延期します？」

「いいえ、沙希ちゃんのおかげで事件も解決したし京も無事だし少し時間が遅れるけれど警視庁の大会議室で警察庁との合同で打合せをやりましょう。」

そうだわ、間警視あなたも機器導入の委員だったわね。

どうする？誰かに任せる？」

「いいえ、とんでもない。誰かに任せる事なんてそんなもつたいないことできません。」

絶対に私も出席します」

と喋って胸をはる。

そんな間警視の受け答えが面白いのか、誰からともなく笑い声が。

こんな大事件が最後に笑いあえるなんて・・・この少女のおかげだった。

今ここに立ち会えたことが自分の一生の思い出になる・・・警官になって初めてのことがあった。凄く嬉しいことだった。

「大変！大変！・・・沙希さん。報道陣が記者会見を要求しています」

と救急車を見送りに行っていた有佐ケイ巡査が飛び込んできた。

「えっ？私に？」

「もちろん、沙希さんとはわかりませんが東の京の守護神『般若童子』さまに」

「あゝあ、これだからマスコミの人って嫌なのよね」といいながらもにっこり笑って

「いいわよ、でも何も言わないでおこう」と

といつて般若面を被りなおす。

なにか警官達、刑事達・・・はたまた間警視までも何故だかがわくわくしてくる。

今からは天才女優日野あきあの登場なのだ。

「有佐さん！」

「いえ、ケイと呼んでください」

「じゃあ、ケイさん。先に車で待っていてください。

そして私が飛び上がったら車を発車させてください」

というと

「沙希さんはどうするんですか？」

「大丈夫よ、途中で乗り込むから」

その言葉で一瞬沙希の顔を見つめたが、慌てて出て行った。

「待つてください」

出ようとする沙希に声をかけた女性がいた。

さっきからいつ声をかけようかタイミングを見計らっていたのは気配で判っていた。

「わたし、飛鳥京警部の下で働いています。犬飼洋子といいます。

今回は本当にありがとうございます」

というお礼をいうのは警察庁広域捜査班の女刑事だった。

沙希は面をはずし洋子の手をとって握手をすると 笑顔を残しつつ再び面をつけ銀行から出ていく。

警官達は誰彼もブラインドの隙間から表の様子をみようとしていた。

外に出た沙希に一瞬驚いたように静まり返った報道陣、けれども我先に飛び出してくる。

しかし、沙希は地上2mの宙に浮き上がった。

あつげにとられる報道陣。

「我は東の京を守護するようと天から命じられたもの」という沙希に

「あなたのお名前は？」

「もつすでにご存知の事と思うが・・・」

「いえ、あなたの口からお聞きしたいのです」

「わが名は般若童子」

「では先の京都での土御門家の事件を解決したのはあなたでしたか」

「いや我ではない。あれは我の双子の妹じゃ」

「すいませ〜ん。その面をはずして素顔をみせてください」

これはテレビのレポーターだ。

「何、私の素顔だと？・・・何を申す、これが私の素顔じゃ」

と面のおでこをポンポンとたたく。

「いやあ、その面の下を覗かしてほしいんですが」

「いやじゃ、もつたいない・・・」

その言葉に報道陣も銀行内の警官達も『プツ』と噴出してゲラゲラ笑い出した。

レポーター泣かせの受け答えとはこのような会話なのだ。

はて、こんな会話どこかで聞いた様だが・・・と考える記者がいた。

実はこの手法は早乙女薫の専売特許であったのだ。

「般若童子！あなたはどこに住んでおられるのですか？」

すると指を上に向けて

「天じゃ」

「天？そんなところにあなたの住まいが？」

「そうじゃ、私の住まいは宇宙そのもの。・・・ひろいぞ〜」

なんだかこの般若童子、笑いの壺をこころえているようだ。
一言一言にどことなくユーモアがある。

「我はもう帰らねばならぬ」

「もう少し・・・もう少し・・・お願いします」

「駄目じゃ、妹がゆうげの仕度をしておるでう。」

はよう帰らねば妹の頭から・・・角が出る・・・」

おあとがよろしいようで・・・と続くような落ちで会見が終わった。

般若童子は突然天空に向かって飛んいき、ふっと消えてしまった。
あつけにとられた報道陣、沙希の会見の落ちに腹を抱えて笑う警官達。

走っていた赤いポルシェの天井からいきなり沙希が宙から現われたのには酷く驚いたケイ、
しかしなんだか嬉しくて仕方がない。

「やったね、沙希」

と律子と瑞穂と杏奈に後部座席から声をかけられた。

三人は持っていたパソコンで今の報道を見ていたのだ。

車は警視庁についた。

有佐ケイ巡査の案内で警視庁内の大会議室に通された。

ガランとした室内では笑顔で迎える静香専務とまゆみ社長そして城田部長がいた。

「あつ、静姉にまゆみ姉さん。それに城田さんも・・・」

「沙希ちゃんよくやったわね」

「京姉ったら、私においしいケーキを食べさせたいって自分で買いに行った途中で

寄った銀行で災難にあったの」

と沙希がいう。

「でも良かった。誰も死ななくて・・・

銀行の人達もみんな怪我はなかったんでしょ？」

「ええ、それは大丈夫」

「しかし、相変わらず見事に事件を解決しましたね。

それにあの記者会見、近頃にはない大ヒットですよ。でも明日から取材攻勢が大変だなあ」

「でも私って判らなかつたでしょ」

「それはそうですが、日野あきあ・・・いえ早瀬沙希がいるところ『般若童子』が現われる。」

さきほどそういうレポーターもいましたよ」

「いやだなあ、それ」

「沙希ちゃん、今日この打ち合わせが終われば1日早いけど里に帰っちゃいましょう」

「そうねえ、瑞姉、律姉、杏姉。そうする？」

「ええ、温泉に入ってゆつくりとしましょう」

と律子。

「いいですなあ」

と羨ましそうな城田、でも里は男性が立ちいれられないことを知っているのだ。

「城田さん、その間に事務所のこと頼みますね」

「はい、わかりました」

その時、ドアが開いて制服の男性・・・テレビで時々見る長谷部警視總監が

女性秘書官を連れて入ってきた。

「おおう、あなたが日野あきあさんこと早瀬沙希さんですね」
と手を出して握手をしてくる。

「わたしも叔父様のお顔は存じていますわ。長谷部警視總監」

「これ！沙希ちゃん。叔父様だなんて」

と静香が注意をするが

「ははは・・・いいですとも、あなたに叔父様なんて呼ばれるなんてとても光栄です。」

そうそう、紹介しましょう。私の秘書官をもらっています、松島奈緒警視です」

紹介された松島警視・・・20代なのだろうかとても若いのに警視だなんて・・・

エリートなんだろうなあと瑞穂は少し気後れしてしまう。

でも眼鏡をかけたその表情冷たくてとっつきにくい。

それでも沙希は笑顔で奈緒警視の手を握って驚くべき言葉を言った。

「始めまして奈緒さん。あなたのお母様奈美叔母様にはお世話になっております」

奈緒警視は身体をビクッと震わし驚いた表情をしたが

それも一瞬だけで再び冷たい表情に戻ってしまった。

ゆっくりと沙希の手をはがし總監に目で挨拶をして歩き去った。

「なんなの！あれは」

律子はくやしげに瑞穂に言う。

「すまない、早瀬さん。彼女は仕事が出来るのだが表情が乏しくてねえ」

と總監が自分の秘書の行為を謝るのだ。

「いいえ、叔父様・・・そうだ、この1週間ほど奈緒警視に休暇を与えていただけませんか」

「休暇を・・・彼女は有休をほとんど取っていないので

1週間の休暇を与えるのはやぶさかではないが・・・」

どうして？という表情がうかがえる総監だ。

「実をいいますとあの方と私はいとこ同士なのです。

……いえ、そんな間柄でも今日始めてお逢いしましたの。

でも私、奈緒警視の心の闇を今、この手でしっかりと掴みました。

1週間後には明るい松島奈緒警視を総監のもとにお届けすることを約束します」

というしばらく沙希の顔を見つめていた総監が優しい声で

「いいでしょう。さっきの事件を見てみるとあなたは常人ではない。

そのあなたが言い切ったのだ。おまかせして間違いはありませんまい。

でも、どうします？彼女は休暇をとることは決して承知しないでしよう」

「非常手段に訴えます」

といて呪文を唱えると沙希の開いた両手の上に小さな白い錠剤が浮かんでいた

「おお〜」

と目の前で初めてみる沙希の術に驚く総監。

「これは市販の睡眠薬です。副作用はおきかけに少々頭痛がするだけですよ」

と云ってから

「ケイさん！」

と控えている有佐ケイに声をかけた。

呼ばれて前に出てくるケイ、

呪文をかけテーブルの上に今入れたばかりと思っほどいい香りの湯気が立つ

コーヒーがあらわれた。その中に白い錠剤を入れる沙希。

「これで一服盛ります」

とって

「うふふ・・・」

と笑った。

「あっそうだ」

とって次に出したのはチーズケーキ、

「これは奈緒警視が好物なの」

とついでに出したお盆の上に置く。

「ケイさん、お願い。これで奈緒警視に一服持ってきて！」

ケイは心配そうに総監の様子を伺う。

総監が頷いたので、

「私、やっちゃいますね・・・うふふ」

と嬉しそうに出て行った。

「ねえ、ケイさんって面白がってなかった？」

と律子が瑞穂に聞いている。

「ええ、なにか悪戯っ子みたい」

総監は名残惜しみながら

「じゃあ、これから国会に行かなければならないから・・・」

と出て行った。

「ねえ、まゆみさん。奈美叔母様に娘がいたなんて聞いていなかったけれど」

静香が聞くと

「私も始めて知ったわ。・・・ねえ沙希ちゃん。あの奈美さんの娘って本当なの？」

「ええ、間違いないわ。でもかなり屈折しているみたいよ。

でも楽しみ！これで里にかえる楽しみがひとつ増えたもの」

という沙希の喜びの声。

「ねえ、律姉。なんだか奈緒さんが可哀想。

相手が沙希じゃあどんなにがんばっても勝てっこないもの」という杏奈の言葉にそうだそうだとみんなが頷いている。

「みんな何納得しているのよ」

と沙希は携帯電話を耳にあてながら言う。

「あつ、もしもし、澪姉さん？沙希です。．．．ええ？テレビ見たの？

お婆ちやまが心配していたって？．．．ごめんなさい。

でも京姉があんなことになってたから我慢が出来なくて。．．．私の番記者が引き上げたって？．．．そうねえ、私がこっちに来ているのはもう広まっているから。

．．．そう今夜がチャンスよ．．．お婆ちやまと志保さん達高弟全員を．．．

それから里から来ている人も．．．里出身だという看護師さんも全員よ。

そう、目立たなくして里に行つてね。

引率はママにまかせていいわ。そうなの澪姉さんに頼みがあつて電話したの。

澪姉さんは一足先に東京に来てくれない？．．．ええ、澪姉さんしかできないことよ。

都立ひとぎ病院の内科の患者さんを一人、里に連れてきてほしいの。

ええ、言うわよ。内科305号室．．．ええ、4人部屋よ。

名前は有佐ひとえ．．．有るといふ字に佐渡の佐よ。ひとえはひらがなのままなの。

どうしてって？．．．この人も早瀬の一族なの。でも癌であと半年ももたないって。

ええ、娘さんには一緒に行って貰うから。転院させるつとでもいったら連れ出せる？

よかった。ええ・・・娘の名前はケイ・・・いえカタカナのケイなの。

じゃあ、よろしく・・・今？今は警視庁の大会議室の中・・・えっと・・・わたしとね。まゆみ姉さんと静姉、それに城田さん・・・

ええ、わかってるわよ。それから律姉に瑞姉と杏姉よ。じゃあ、よろしくね」

と喋って電話を切った。

目をまん丸とした皆がみつめる中、沙希は静かに椅子にすわった。

「今、聞いたとおりよ」

と喋って口をつぐむ。

そこへ有佐ケイが入ってきた。

沙希に敬礼して

「お役目無事に果たしました」

と報告する。

「奈緒さんの様子は？」

「最初持って行ったとき不思議な顔をされましたが、警視総監から喋っているともうあとは簡単。」

あつというまに眠ってしまわれました」

「今は？」

「ええ、ソファに横にして毛布をかけておきました。」

仕事が忙しいときは同じように仮眠をとられますので」

と報告するが皆が自分を見る目つきがさつきと違っているので

「ん？」

という顔で周囲を見渡す。

「ケイさん。お願いがあります。あとで小谷漣という人から私の携帯に電話があります。」

そうしたら東京駅まで迎えにいつてほしいのです。律姉もお願い！一緒に行って！」

「わかったわ」

と返事を聞いてから

「それから都立ひとぎ病院へ行って有佐ひとえという人を迎えにいつてほしいんです」

と聞いて

「ええっ！」

と驚きの声をあげる。

「心配いらないわ。小谷漣という人は私の叔母様であるし天才的なお医者様なの。」

これからよく聞いて答えてね。ケイさんは早瀬一族ってお母様に聞いたことは？」

うんと頷いてから

「少し・・・」

と声がか細くなっている。

「じゃあ、あなたにも早瀬の血が流れていることも？」

やはりコクンと頷く。

「では、よく聞くのよ。今日明日中に早瀬の女達は隠れ里というところ」

みんな集まらなければならぬの」

「早瀬の一族だからってどうして病院から・・・」

退院させてしまうのと悲痛な叫びがあがる。

そこで沙希はケイの手をとってにっこりと笑う。

「ケイさん、あなたはお母様に5年も10年も長生きしてほしいで

しよ。

早瀬の里には女性にしか効かない不思議な効能の温泉が湧き出ているの」

とそばで聞いている城田を意識して女性という言葉を強調する。

「だから、今日あなたも里にお母様と一緒に行くのよ」

律姉、お願い・・・と自分の携帯電話を渡し、

電話が鳴ったらずぐに東京駅にかけつけるよう伝言する。

「ケイさん、あなたも1周間の有休届けを出していらっしやい」

二人が出て行くと全員が一樣に『ふ〜』と深いため息をもらす。

きょうは本当、なんと言う日なのか……………。

会議が始まる前、飛鳥日和子が沙希のもとにやってきた。

「沙希ちゃん・・・ほら」

と指し示すところに京の姿がみえる。

「よかった。もう退院出来たのね」

「沙希！ありがとう」

と京とともに泉もやってきた。

「もう大丈夫なの？」

「うん、血が一杯流れすぎて少しふらふらするけれどもういいよ」という返事に一同、ほっと肩をなでおろす。

「でも、沙希が『般若童子』の姿で降りてきたとき私、天井の上から見てたのよ」

「だったら、あと少しの時間で魂と肉体のつながりが切れてしまっていたんだわ」

「そう、そのとき沙希の式神達が必死で押しとどめていてくれたの

よ」

そんな京が今ここに無事な姿でたっている。改めて沙希の凄さを実感する。

そして会議が始まった。本当にこれだけの人数が委員なのだろうか？

大学の教室みたいなこの会議場、もう満員で座る椅子のないものは立ったり階段のステップに腰をかいたりしているのだ。

今日の出来事と早瀬沙希・・・いや日野あきあが来るということで仕事を手早く

片付けて駆けつけてきたのに違いない。

沙希の開発したナビのCD-ROMは誰一人反対のいないまま採用となった。

というのはもうすでに一部のパトカーにはこのナビが積み入れ、テストも終了しているのだ。

問題はモバイルだった。本庁のスーパーコンピューターと連動したこれは

現場での指紋採取、照合と短時間でおこなわれるのだが現場の警察官に使いこなせるかが問題となっていた。

そして、スキャナーを使つての追尾装置もだ。

小型軽量といってもボタンのように小さな発信機とモバイルの受信機

これをどうすれば良いのだろうか、それに言われるほど受信機が高性能なのか？

みんながケンケンガクガクとざわめいているとき、

「はい！」

といって手をあげた女性がいた。

すくつと立ち上がったその女性、京の下で働いているという犬飼洋子刑事だった。

「私たち広域捜査では遠距離でも容疑者の行方をつかまなければなりません。」

だからどうしてもその居場所を確認するための対策をする必要があるのです。

だからこの追尾装置の性能をこの目でみたいと思います。

あ・・・あのう・・・あきあさん・・・いえ早瀬沙希さんのあの不思議な術で

いま、見せていただけませんか？

と最後は消えるような声で遠慮しつつ話した。

犬飼洋子刑事は京都での出来事を京から聞いているのだろう。

沙希は飛鳥の叔母を見て、

そして京と泉、静香とまゆみ、城田・・・そして瑞穂の顔を見る。

いづれも頷いている。

「じゃあ」

と言ってから

「むやみやたらに発信機を移動させても仕方ありません。」

この中で一番遠いところに在籍している方はどなたですか？

「はい、北海道警です」

「沖縄県警です」

と日本両極端から声が上がった。

「それともう一つ、私がロケでお世話になった京都府警の方は？」

手を上げたのは男女二人の警察官だった。

「では、この3つの県でテストをします。土御門さん、半紙を」

というと瑞穂が半紙を一枚つつ、その3つの警察署から出張で来た

警官に渡す。

「すみません、今から所属されている署に電話してください。そして電話に出た人の名前をその半紙に書いてください。」

今から式神を飛ばします。そして向こうについたらその名前を書いた

紙をファックスしてもらってください。わかりましたね」

というときさっそく室内にある警察電話にむかった。

ほかの署のものは固唾を呑んで見守っている。

電話を終えた警官達はペンを置いた。その紙を瑞穂が回収する。

3枚の紙を渡された沙希は

「今からすることは常識を外れています。だから他の人には言っただめです。」

例え言っても信用はされませんから」

と、いって一枚一枚に持ってきた受信機を紙に両面テープで貼り付ける。

呪文を唱えるとその紙が白い鳩に変わった。

「おおっ〜」

と目の前で見せられた術はさすがに警察官といえども驚きの声をあげる。

そして沙希は3台のモバイルを出し、スイッチを入れ受信画像に切り替えた。

それを1道1県1府の警察官の前に瑞穂が持つていく。

沙希は窓に近寄りガラス戸をあけようとしたが、2〜3人の婦人警官が

走りよってきて

「私達がしますから」

と言って窓を開けてくれた。

「さあ、あなた達のお役目よ。あなたは北海道へ・・・あなたは京都よ。」

そしてあなたは沖縄ね。さあいつてらっしやい」といとうと鳩が飛び出していき凄いスピードでそれぞれの方向へ散っていった。

警官達も窓に連なって鳩を目で追っていたが、あっというまに消えてしまった。

「あっ・・・す・・・すごい・・・もう、千葉だ！」

液晶をみると日本地図上に赤い点が移動しているのがわかる。

目的地まで着く間、沙希はモバイルの使い方を伝授する。

何故か頭に焼き付けられるように記憶されていく。

（俺こんなに頭がよかったのかなあ）と不審がる警官達。

（なんだ、こんなので良かったんだ）と納得する警官もいる。

「モバイルの使い方は以上です。どうですみなさん。頭に焼き付いているでしょ」

「えっ？じゃあ、これは早瀬さんの力ですか？

てつきり俺、頭が良くなったと思っただんですが・・・」

と若い警官が発言して笑いを誘っていた。

もう誰もこの少女を疑うものはいない。

昼間のあの般若童子といい、今の不思議な術といい

この新世紀に不思議な少女の出現はなぜか明るい未来を予測できるのだ。

「あっ、うち達の京都についたわ」

「じゃあ、電話をしてください」

京都府警の警官が電話のところにとんでいく。

「その時間わずか15分というところですか。凄い！」
間警視が隣りに座る飛鳥警視正に囁いた。

「間警視、だからといってあの子を事件に引っ張り込まないでね」と釘を打つ飛鳥警視正。

「わかっております」

といいながら、難しい事件のときはどうして事件に引きづり込まうかと思案していた。

「早瀬さん、あの鳩はうちの署長の手が触れたとたんに半紙に戻ったようです。」

あっ、今ファックスがきました」
と言ってファックス用紙を沙希のもとに持ってきた。

「どうですか？あなた達が書いた文字に間違いありませんか？」

「間違いありません」

ときっぱりという。

「モバイルのほうはどうですか？」

「はい、赤い点が我署の上で止まっています」

5分遅れで北海道、沖縄と次々モバイルの画面上赤い点が止まっていた。

京都府警と同じく手続きをふむ道警と県警、両方とも間違いなしと確認がとれた。

「これでよろしいでしょうか？犬飼さん」
すると犬飼洋子が立ち上がった

「わたし、元々早瀬さんを疑ってなんていません」
と強い口調でいう。

「京都でいるんな事件を解決され、昨日のあのドラマ・・・あれっ

て本当のことだったんですね。

そして今日は銀行強盗を捕まえ、般若童子として空を飛んで消えられた。

こんなこと出来るのは早瀬さん・・・世界中を捜してもあなただけです。

いえ、早瀬沙希さんというよりこういう不思議をされるときは私はどうしても日野あきあさんと呼ばせていただくほうがピッタリします。

・・・事件現場と今、2度もお会い出来て本当に感激です」と言って座った。頬が赤く染まっている。

こうして合同の会議は終わった。

CD-ROMとモバイル、そして発信機とどれ位の数量を発注するのか

日本国中の警察署からの注文数を集計するのは警察庁の役目となった。

注文数全てを発注すればよいのだが、なにせ高いものである。

警察庁が国家予算を計上している中から支払われるのだから注文できる数量も限られてくる。

だから数年がかりで数を揃えることになるだろう。

沙希達が会議室を出るともう有佐ケイ巡査と律子の姿はすでにない。

「ねえ、泉姉。少し手伝ってほしいの」

と早瀬の一族が固まっている中で沙希が言い出した。

「何なの？沙希！」

「一人連れ出してほしい人がいるの」

「誰？それ・・・」

「監視総監の秘書官である松島奈緒警視よ」

「えっええ〜」

「一服盛って眠らしてあるから」というと目をむいている。傍で聞いている日和子叔母も京も同じ状態だ。

「心配いらないわよ。長谷部の叔父様も了解していることだから」というと安心したようだが

「長谷部の叔父様？」

と警視総監をそんな呼び方をする沙希に驚いてしまう。

「ちょうどいいわ、あの人も連れて行きましょう」

「あの人？」

「ええ、京姉の部下の犬飼洋子さん。あの人も元をただせば早瀬の女よ

だいぶ血が薄くなっているけれど」

「えっ？ そうなの？」

と京が驚いて声を出す。だったら……と洋子を引っ張ってきた。

717

「洋子さん、あなた明日から1週間休暇届を出しなさい」

「えっ？ どういうことですか？」

「あなたの血のルーツに連れていきます。そこはあなたにとっても大切なところになります」

「わたしの大切なところ？」

「ええ、そこであなたは生まれ変われるのですよ」

「犬飼、私と一緒にいきましょう」

「そうねえ、沙希ちゃんの推奨なら大歓迎よ」

という飛鳥警視正に犬飼洋子が驚いたように

「警視正も行かれるんですか」

「そうよ、だって早瀬一族の隠れ里だもの」

「私、行きます。警部！ 私の休暇届受け取ってください」

と京に言う。

「いいわよ。一緒に行きましょう」

「じゃあ、洋子さんも手伝って！」

と言って沙希が京と泉と洋子をつれて警視總監の秘書官室に行った。

松島奈緒警視は毛布にくるまって良く寝ていた。

こうしてみるとあどけない少女のような表情だ。なんの屈託もありはしない。

「沙希、どうして運ぶの？」

「体をもって運んだら怪しまれるわよ」

「じゃあ」

と言って呪文をかけると沙希の式神の玉藻、葛葉、紅葉が現われた。

「玉藻、葛葉、紅葉、この人の体を怪しまれずに連れ出すように」

「ちよつと待って」

と京が止める。

「あんた達！私の命をたすけてくれてありがとう」

と飛鳥警視正に聞いたのだらう式神たちに礼を言う。

「なんのなんの、あれはあるじ殿の力のおかげじゃ。礼を言われるのならあるじ殿に」

と言ってから光の玉になると奈緒警視の体に消えていった。

一瞬呆然とする犬飼洋子刑事だが沙希を見ると何故か当たり前のように思ってしまうのだ。

奈緒の眼がパチッと開いた。そして身体を起こすと立ち上がった。

平安時代の式神達には靴を履く習慣はない。

だから、そのまま立ったままだ。沙希が靴を履かそうとすると「わたしが」

とって洋子が沙希にかわってローヒールを履かす。

こうして車のところにいくと静香達が待っていた。

「城田さんは？」

「事務所に帰ったわ」

とまゆみ社長。

「じゃあ、行きましようか」

と静香が言う。

車2台で分乗して出発したのは夕闇が迫っていた頃である。

月明かりの中、桜の花びらが舞い落ちている。

だがそれもすぐに蕾になり再び満開の桜となる。

ここは早瀬の隠れ里、年中、過ごしやすい春という不思議な空間。

こんな里にしたのは今、車から降りた沙希の力なのだ。

2台の車は本家の前に止まった。

出迎えたのは京都で別れたママや薫、ひづるもいる。京子もいる。

大空庄絵もいる。

沙希が知り合って早瀬一族に認められた女性達が全員いるのだ。

勿論、井上貞子の高弟達も全員顔を揃えていた。

みんな笑顔で沙希を迎えるのだ。

「まあ、沙希ちゃん。あなたって人は・・・行く先々で事件が待っているのね」

とママの第一声がそれだった。やはり心配していたのだ。

「お婆ちゃんまは？」

「居間で沙希ちゃんのくるのを待ってますよ」

「沙希ちゃん」

と声をかけたのは薫だ。

「私達、旅の準備で朝からバタバタしていたでしょ。

あんな事件が起こっていたなんて一人も知らなかったの。

でも京都の撮影所にいる小野監督から電話があつて

『あきあが凄いことをやっているから、すぐテレビをつける』と教えてくれたの」

「それからもう大変！沙希姉さんがテレビで空を飛んでビルに降りたところは

録画だつたけど何回も放送していたから、心配した菊野屋の人達もとんでくるし

みんな荷物をつめるのをやめてテレビに釘付けだったのよ。・・・痛い！」

最後のはひづるが薫の話の横からかつさらつたために薫に頬をつねられた悲鳴だ。

「沙希ちゃん！あなたが心配をかけたからその心痛を癒してもらおうと・・・」

ほら、お客様よ。といつても、もう身内と同じだけど」

とママが示すほうには・・・。

「お母ちゃん・・・花世ちゃん・・・花江さん姉さん・・・」

と沙希が驚きの声をあげる。菊野屋の女将と舞妓や芸妓すべて顔を揃えているのだ。

「小沙希ちゃん、心配したんえ」

と女将の涙声一つで沙希は言葉が出なくなった。

「小沙希さん姉さん！今回は大目にみます。京はんが巻き込まれはつたさかい。

でも次からは駄目どす」

と花世のきついお叱りもただ頷くだけだ。
みんなの自分を想ってくれる心がピンピンと身体中に伝わってくるからだ。

そんな様子をみていた犬飼洋子は上司の飛鳥京警部に

「いいとこですなえ、ここって。・・・でもどうして今頃桜が？」

「これは、沙希がやったことなのよ。ここって、冬はとても寒くて過ごし難いところだったの。」

でも前回沙希がこの里に来たとき、初めて術というものをつかったのが

見えなかった二人の老婆の目を直すことだったの。

そのときこの里の気候が一変してしまったのよ。」

桜は散つても直ぐ咲くし、気温もこの温度で一定なの。」

「あきあさんのやることって、すごく素敵です」

「そうねえ、・・・あつと洋子さん、ここでは上司も部下もないの。」

私が年上だから、沙希が言っている様に京姉と呼びなさい。

わたしは洋子って呼び捨てにするから」

「というと私、あきあさんのことどういえばいいのですか？」

「沙希のこと？沙希はまだ16だからあなたがお姉さんよ。洋子姉さんと呼ばせて

あなたは沙希って呼び捨てにすればいいのよ」

「えっ？まだ16歳なんですか」

「本当は25歳だけど平安時代にタイムスリップして安部晴明様のもつで

修行していたときにあやまって若返ってしまったのよ」

「平安時代で修行？」

「ふふふ・・・信じられない話だけど、あとで詳しく話してあげる」

「ねえ、澪姉さん。ケイさんは？」

「ああ、診療室でお母さんの横についているわ・・・これからどうするの？」

私の診察でもよくもって半年よ。いくら私でも直せないわよ。もう全身に癌組織は広がっているものと鎮痛な面持ちで話す。

「大丈夫よ。この里の温泉は特別なんだから」

「あの温泉の効能はそこいらの温泉より確かに良く効くけれど癌までは治せないわよ」

「ううん、あの温泉ではないの。私がお婆ちゃまや高弟の人たちのように」

お年寄りを呼んだのはもつと凄い温泉のことよ

「ちよつと待ってよ。そんな温泉のこと聞いたことないわよ」

「私この前いったでしょ。この里にはまだまだ秘密があるって」

「じゃあ・・・」

「そうなの・・・、澪姉さん。ひとえさんを動かせる？」

「動かせるけど、あまり振動を加えたら痛みで身体がつからいわよ」

「わかった。なんとかするわ。それともうひとり、車の中で寝ている人がいるの」

「えっ？」

と澪が首をふるのを無視してママの横にいる松島奈美のところへいき、手を引っ張ってつれてくる。

「奈美叔母様、お願いがあります。私がある人にすることを目を瞑っていてくれますか？」

「いやあねえ、沙希ちゃん。何のことを言っているの？」

「その人ってあることからかなり屈折してしまって、この人生を楽

しんでいないんです。

以前の私と同じなのでその人のことほっておけないんです。お願いです。許すといってください」

奈美はそんな沙希の様子に目を見張っていたが、あることに気づき

『はっ』と息を呑む。

沙希は黙って車のドアのノブに手をかけ一気に引き開けた。

するとそこには毛布にくるまれた一人の女性の姿があった。あどけない表情で眠っている。

「この人のこの顔が本当の自分なのですね。普段は仮面をかぶって表情をかくしています。

でも人って眠っている間本当の自分をさらけだします。

奈緒さんは学生時代ある恐ろしい経験をしてしまったのですよ。

奈美叔母様に決していえない性的暴力を……」

「ではあの男に……」
頷く沙希、

「普段は優しい義父の仮面で騙されて気づいたときは
がんじがらめで抜き差しならない状態になってしまっていたのです。

奈緒さんは優しくすぎたのですよ。愛している母に自分の苦しみは見
せられないと

我慢に我慢をかさねて自分を捻じ曲げてしまいました。

・・死ぬ勇気なんてくそくらえです。そんなの勇気とはいわない！
でも奈緒さんは勘違いされた。

勇気がないから……自分の肉体を殺せないから心を殺してしまっ
た。

・・心に闇を住まわせてしまったのです。

奈緒さんは今、なにも感じていないはずです。

楽しくもない。食事も美味しいと思っただけではない。

これからの人生空虚にただ生きるだけ……でもそんなの生きて
いるとは言わない。

自分が死の床にいるとき『ああくゝ生きてきて本当によかった』と
納得することが

生きているってことだと思つのです」

沙希は自分自身のことを重ね合わせて血を吐くように思いを語つた。

そのとき、『パチパチ』と沙希の後ろから拍手の音、しだいにそれ
が大きくなる。

振り返ると涙を拭きながらも拍手をする皆の姿が

「やだなあ、聞いていたの？」

「だって、そんな大きな声で話していたら嫌でも聞いちゃうじゃな
いの」

といて薫が鼻をぐずりながらいう。

寝ている女性のもとに真つ先にあゆみ寄つたのが、律子と順子。

どちらも同じように悲しくて苦しい経験の持ち主だ。

「沙希ちゃん、この子を地獄から助けてあげられるのは沙希ちゃん
だけよ。」

私達見守っているから、この子の笑い声を聞かせてね」

と言つママが

「奈美ちゃん、いいわね。何もかも沙希ちゃんにまかせるのよ」

奈美もすでに決心していたのだろう、直ぐに頷いた。

「沙希！奈緒さんを私達に運ばせて」

という順子と律子。

「いいわよ、律姉に順姉。奈緒さんを落としたりだめだよ」

「こら！沙希！……こいつー！」

と沙希の頭を叩く。

わざと笑いを誘うようなそぶりで見場をなごませる三人。

「沙希お嬢様はほんにお優しい!」

と前世で乳母の山野葉志保。

「さすが小沙希さん姉さん、ほれほれするえ。でもなんだか哀しい
どす」

と花世。

「やっぱり小沙希ちゃんはずの娘どすえ、優しいところうちこそっ
くり」

「何を言われるんどすか」

と自画自賛の菊野に舞妓と芸妓達は啞然とする。

「ねえ、律ちゃん先生!」

と自分も奈緒を運ぶのを手伝っているひづるが声をかける。

「なあに、ひづる」

「沙希姉さんて神様?」

「どうしてそんなことなの?」

「だって、沙希姉さんの身体と重なって優しい菩薩様の姿が見えた
もの」

「菩薩様?」

「うん」

「ひづるは菩薩様を知ってるの?」

「だって、映画で雪夜叉が天に召されるとき菩薩様が現れたでしょ」

「そっかあ・・・そうだった。じゃあ、ひづるが見たのは本当に菩
薩様なんだ」

「うん、でも今日だけではないのよ。」

あきあ姉さんでいるときも見ることが時々あるもの」

「じゃあ、やっぱり私が見間違いないんだあ」

「律子先生も?」

「そうよ、やっぱり沙希は天から使わされたのね」

こうして里は賑やかに1日が暮れていった。

明日は沙希による里の秘密の解明がおこなわれるのだ。

夢はなんだか凄く楽しかったのに目覚めは最悪だ。ひどい頭痛で吐きそうになる。

今は生理ではないし、その前兆でもない。だって1週間前に終わったところだから。

起きる気もないので横向きに体勢をかえようとしてギョツとした。裸身の女性が背を向けて寝ていたからだ。腰から下はシーツに包まれていたが

真っ白な肌がまるでマシユマロのように思えて何故か触れてみたくなる。

女性の裸を見て、こんなことを思うのは生まれて初めてだ。

触れてみたい……そういう欲求で手がゆっくりと肌に近付いていく。

いまにも触れん……としたときだ。

「うん」

といつて寝返りをうちこちらを向いたその顔は……思わず

「あっ！」

と声を上げてしまった。

自分にとって今一番逢いたくない女性、『早瀬沙希』その人だったからだ。

総監に紹介されたとき、その体から発する不思議な魅力に引き付けられてしまった。

その上、逢ったばかりというのに何故か隠していた秘密を見抜かれたのだ。

「始めまして奈緒さん。あなたのお母様奈美叔母様にはお世話になっております」

そう言われたときは思わず叫びそうになった。
この人には何も隠せない・・・その恐ろしさでその場から逃げ出したのだ。

どうして並んで寝ているのか、訳がわからなくて混乱してしまつ。
急に恐くなつて後に下がろうとする。

「奈緒さん！恐がらないで！」
という声が聞こえたのはそんな時だ。

沙希の表情は動かない。眠つたままなのに・・・この声は確かに沙希の声だ。

「奈緒さん！・・・私、あなたを助けたい！あなたの心の闇を閉ざしたいの」

突然！奈緒の身体がオコリにかかったようにブルブル震え出した。

「イヤ！・・・イヤ！・・・イヤ~~~~~」
よくぞこんな大声がというほど大きな声で叫びまくつた。

混乱の中、声が枯れるまで叫んでいたがついに

「は~~~~は~~~~」

と息がしにくくなって大きく深呼吸をつづけた。

そして体温が急激に下がり寒くてしかたがない。

下半身にあつた毛布を引きづり上げて、首までかぶりブルブル震えている。

どうしても身体の震えはとまらない。温めて欲しい！痛烈にそう思った。

「奈緒さん、その寒さはあなたの心の闇なの・・・」

「聞いた風なこと言わないで！！」

心の中の自我がまだ奈緒に仮面をかぶせている。

このままこの少女に弱みは見せたくなかった。

今日まで自分ひとりで生きてきたのだ。これからだって……でもなぜだか心に風が吹き荒ぶ。

「寒い! ……寒い! ……どうして? ……どうしてこうなるの? ……」

エリートとして男共をあごで使ってきた自分だ。

憎い男への復讐が現実になっているのに寂しさだけで喜びなんて一つもない。

「私を抱きしめて!」

という沙希の言葉に

「何を言うの?」

「早く! 私を抱きしめるのよ!」

そんな命令口調は自分の上司以外言われたことはない。

それを自分より年下のこんな少女にいわれるなんて……反発が湧き上がってくる。

「いやよ!」

そういつて起き上がるうとした。

しかし、どうしたわけか身体がいうことを利かない。

かえって沙希に近づこうとする欲求で頭の中が一杯になっていく。

沙希の身体にすりよっていく自分自身に、

「駄目よ!」

そう身体に言い聞かせるが、どうにもならない。

沙希の少し小ぶりだが柔らかな乳房、ピンクの乳首……が目に入って……

そして……ついに……

素裸の女性を抱くなんて生まれて初めての経験だが……なんなの? これは……

(温かい・・・そしてなんて柔らかい肌なの?・・・この気持ち良さって・・・ああ〜たまらない・・・) いつものまにか震えが止まっていた。

「奈緒さん。キスしていいわよ」

「だ・・駄目よ!女同士でそんな〜」

「あら、女同士ではないわよ」

と自分の股間に固いものが当たっているのに気づいた。

「えっ!」

と飛び上がりそうになる。

突然襲うあの男との・・・がフラッシュバックのように蘇ってくる。

「いやあ〜」

再び叫び声が。

「奈緒さん!落ち着いて!・・・自分の身体で感じるのよ・・・」

そついう沙希の言葉にどうにか嫌悪感が薄らぐ。

「奈緒さん、感じて・・・そう、私の心をその肌で・・・私の息遣いを・・・」

もっと感じるのよ・・・」

なにか遠い昔の記憶にあった心地良さが心に身体に湧きあがってくる。

「さあ〜」

と言われて誘い込まれるように奈緒が口付けする。

最初は軽く・・・しだいに激しく・・・

そして、ハッと気づいた。今まであった頭痛が嘘のように消え身体中に今まで感じた事がない元気が溢れているのだ。

奈緒は不思議そうに自分の唾液で濡れた沙希の唇をみる。

「頭痛がなくなり、元気が身体に溢れているでしょ」

「どうしてなの？」

奈緒の話し方もその心も少しづつ変わってきていた。無論、本人は気づいていない。

「原因は不明よ。でもうちの会社の人とも早瀬の女達とも毎日のようにキスをしてあげるの。」

沙希から元気がもらえるからと言われると嬉しくなっちゃっ。

勿論、女性だけよ。私は男は虫唾が走るくらい嫌いなもの

「だって……」

と奈緒が見つめるのは沙希の下半身。

「奈緒さん！あなたは以前の私、男だった頃の私とそっくりなの」

「男だった……ころ？」

「そうよ。私の首筋を見てちょうだい。薄っすらと傷跡が残っているでしょ」

沙希の首筋をみてる。なるほど良く見なければわからない傷後が残っている。

「これは私が幼い時に死のうと自分で包丁を刺した傷なの」

「ええ……」

「優しさは女々しい……つまり女だと言う風土で育ったの。」

男尊女卑の強烈な九州の片田舎で育った私は気の優しい男の子だった

「それがどうして？」

「その土地では優しさは弱さだ、女々しいといわれていたの。」

でも私は男らしいといわれていた男達の暴力的な猛々しさというものには

吐き気がするほど嫌だったし、とことん反発したわ。

そして5歳のとき、疲れきっていた私は包丁で自殺をはかったのよ。たった5歳よ。そして、そんな私を神様は罰を与えた……この声のことよ。

だから学生時代は地獄の日々だった。

その生活から救ってくれたのは『早瀬理沙』……理沙姉との出会いがすべてだったわ。

その時よ、この声が天からの授かりものだと思ったのは……。

だから、私は男が嫌い、触られても虫唾がはしるわ。

女性は大好き……だから、私も女性になりたい。

でも、私には使命があるの。早瀬の伝説の御子としてのね……。」

沙希の血を吐くような思いは、奈緒の頑なな心の闇を溶かしはじめた。

自分だけではなかったのだ。

「奈緒姉、あのね……。」

「姉と呼んでくれるの?。」

「だって年上でしょ。今の私からみれば。」

「今の私?。」

「ええ、本当は25歳なんだけど平安時代に安倍晴明様の元で修行をしたとき

あやまつて術を自分にかけてしまつて若返つてしまったの。だから今は16歳よ。」

「ああ、駄目!混乱する……。」

「すぐ慣れるわよ。私のそばにいれば……。」

「私を沙希ちゃんのそばに置いてくれる?。」

「律姉も順姉も男達からうけた心の傷は一生背負わなければならな

いけれど

私もそれを受け持って負担を軽くしてあげるの。だから一生ここに
いるわ。

奈緒姉もよ」「

沙希の一言でかたくなだった心がまるできれいさっぱりと洗われた
ように軽くなっていく。

そのはずむ心でギュッと沙希を抱きしめる。

「奈緒姉・・・いいわよ・・・」

「私に光をちょうだい」

睦みあう二人に愛の嵐が・・・

なお、後日談として

休暇明けの朝、警視庁に出勤する松島奈緒の姿はいつもは黒が多い
のに、

今日は鮮やかな薄いピンクのパンツスーツ。

鼻歌を歌いながら、その足どりは軽やかにステップを踏んでいいる。

警視庁の玄関、立ち番の警官二人に敬礼しながらにこやかに

「おはよう」

という姿は今までと余りにも違うので思わず警官同士顔を見合わせ
て

「今の誰？」

とその後ろ姿を目で追っていく。

受付の婦人警官達にも笑顔で挨拶してエレベーターの前に立った。

受付は大騒ぎだし、奈緒の回りに出勤してきた男女が皆、

首を捻りながら奈緒を見つめ『ヒソヒソ』と話をしているのだ。

エレベーターに乗り込むと、さっきから同僚達に肘で押し出されて

いた

女の子が決心したのか奈緒の前に立ち

「あのう……松島奈緒警視殿……ですよね」

「そうよ、どうかしたの？」

「いいえ、……こんなこと言つて失礼でしょうが、凄く素敵です！」

面食らつた奈緒だったが、その素直な言葉ににっこりと笑つて

「ありがとう」

というと

「うわ、警視殿が笑つてる！」

と女の子達の言葉にドキッとする。

こんな当たり前のことで騒がれるなんて、いかに自分が皆との間に壁をつくっていたのか良くわかる。

「あのう、警視殿」

「ちよつと待つて！……出勤途中だけど、まだ制服をきていないの。

今は公私の私よ。だから名前を呼んでちよつだい」

その言葉に喜ぶ女性達、そして面食らつている男性達。

エレベーターを降りても更衣室は同じなので女性達とは話しながら歩く。

「きつと今日は奈緒さんのことで大騒ぎになるわ」

「どうしてよ？おおげさなんじゃない？……」

「いいえ、奈緒さんは女性達に人気があるんです」

「私か？」

「ええ。今までは近寄れない冷たさだったからクール・ビューティなんて呼ばれていたんですよ。

でもこれからはもっと人気がです。だってこんなに親しみがもてるんですもの」

「あのう、どうして急にかわられたのですか？・・・少し失礼な言い方ですが」
女性達の視線が奈緒に集まる。

「そうねえ、どういったらいいかしら。日野あきあに術をかけられたからといったら信じる？」

「ええ〜〜〜」

「嘘〜〜」

更衣室の中に女の子達の声が響く。

「だってあきあと私はいとこ同士だもの」

「ええ〜〜〜」

「嘘〜〜」

今度は更に大きな声となった。

「本当なんですか!」

「そうよ」

「これって、凄いことですよ。あのスーパーヒロインといとこだなんて」

「どうして？・・・あの飛鳥京警部も飛鳥泉警部もいとこだし

そして飛鳥日和子警視正は私の叔母様よ」

みんな目を丸くして呆然としている。

「何？・・・知らなかったの？」

こっくりと頷く女性達。

「じゃあ、他の人には内緒よ」

といっても、すぐに広まってしまっただろう。

「日野あきあってどんな人ですか？」

「一言では言えないわ。可愛くって、頭が良くて、優しくって、天使

みたいな人

でも本当はとても怖い人。だって、あきあの前にでたら何も隠せないもの」

「ほんとうなんですか？」

「でも、あの人本当は男性と聞きましたけど」

「ええ〜」

「でも、それは公然の秘密だけれど、あまり他の人には話さないでね。特に男性には・・・」

「はい、男ってやつは偏見の塊ですからね」

「さあ、今からは公私の公よ」

「はい、警視殿」

といつて敬礼をする。

「でも、警視殿。今までと全然違う。かつこういい！」

女の子におでられて悪い気はしなかったが、さあこれからは仕事だと部屋に入る。

「本当に松島くんなのかね？」

と警視総監に驚きの声を上げさせてしまった奈緒、顔を赤くしながらうつむいた。

「さすが、早瀬沙希だ。ここまで一人の人間を変えてしまうなんて」

「総監！聞きましたよ。私に一服盛るのを許可されたでしょ」

「いや！・・・なに・・・その・・・」

と言葉に詰まっているのを見て、クスッと笑う。

「総監！いいんです。おかげで私、生きるって素晴らしい事だと判りましたから。」

ありがとうございます」

「いや・・・なに・・・」

と奈緒に礼をいわれてとまどう総監。

その後言った奈緒の言葉にびっくりしたのだ。

「総監！子供が出来ても私は絶対に警察は辞めませんわ。

私は日本初の女性警視總監を目指してますから」

里の朝は心地よい。人間国宝の井上貞子も京都とは違う朝を迎えたが

なぜかいつもより寝起きはスッキリとしていた。

「おはようございます」

と障子の向こうから真理の声がする。

「ああ、真理はん、おはようさんどす」

「お母様、寝覚めのお茶です」

といつて床の横に置き、まずは身体を起こした貞子に羽織を着せてから障子を開け放つ。

「おお、見事な桜どすなあ。こんな季節に満開の桜をみれるとは寿命が5年も10年も延びる思いどすえ」

「そうですね、お母様にはもっともつと長生きをしてもらわなければ」

といつて湯呑みを貞子の手に持たす。

「真理はん、弟子達は？」

「はい、みなさん朝早く起きられまして、里の中を散歩中です。

若い人をひきつれて、それはもう子供みたいに

・・・でも、もうすぐ戻られると思いますわ・・・あら」

真理の位置から廊下を歩いてくる沙希の姿を見て声をあげた。

後から奈緒がついてくる。

沙希は廊下に座って

「お婆ちやま、おはようございます。良く寝られました？」

「ああ、小沙希ちゃん。おはようさんどす。」

「ここは年を取ったうちにとって天国みたいなことすなあ。」

「すっかりくつろがせてもらって夢もみんで、すっかりおねぼづさんどす。」

と笑う。

「さあさ、そんなとこに座らんでこっちに入ってきてよし。」

沙希は奈緒に合図して一緒に立ち上がって貞子の横に座りなおす。

「お婆ちやま、紹介します。うちのいとこで松島奈美叔母様の娘さんで奈緒はんいます。」

警視庁で一番偉い警視總監の秘書官をやられているんどす。位も警視さんでえらいんどすえ。」

「松島奈緒ともうします。これからよろしくお願いします。」

簡単な挨拶だったが、貞子は

「おお〜おお〜奈緒はんいいはるんか、お母はんにそっくりどすなあ。」

お母はんにはえろつ世話になっておるんどすえ。」

「いえ、そんな・・・。」

「あんたはん、何かすつきりされてますなあ。なんの屈託もないまゐで赤ちゃんみたいなお顔どす。」

と貞子に言われて顔を赤くする。

「あのう・・・私も『お婆様』とよんでよろしいのでしょうか？」

「いいどすえ、先生とかいいはったら、うち怒りますエ。」

といつてからからから笑う。すっかりご機嫌だ。

「あらあら、今日はお顔の色がいいですねえ。」

と遷がはいってきた。後ろから看護師が続く。

朝の診察の時間なのだ。

出て行こうとする沙希を呼び止め、何やら耳打ちする漣。

わかったと頷いた沙希は貞子に

「ほんならお婆ちゃま、またあとで」

といって奈緒を連れて出ていく。

沙希が次に向かったのは地下にある診療の入院スペースだった。

ドアをノックしてから少しドアを開けると

「おはよう、少しいい？」

と声をかける。

出てきたケイが沙希の後ろに奈緒の姿をみて

「あっ！」

と声をあげる。

でも奈緒は何も言わなくてニッコリと笑うだけだ。

きつとケイの母の病状を思っていることだろう。

「どうお？お母様」

「ええ、今ぐっすりと寝ています。先ほど漣先生が診察されて痛み止めの量を控えます。

といわれたのですがどうしてでしょう」

「お母様のことは心配しないで！」

今日の午後にはケイさんを喜ばせてあげるわ」

「午後に・・・ですか？」

「そう、もう少しの我慢よ。さあ、あなたも一緒に朝食にいきましょう」

と1階のレストランにつれだす。

レストランの入り口で操が立っていた。

「おはよう沙希ちゃん。奈緒ちゃんにケイさんでしたわね」

と笑顔で挨拶をされ、挨拶を返すと

「沙希ちゃんとケイさんにお話があるの。奈緒ちゃんは先に座って

いてくださいな。

「一番奥に席をとってあるから」
と言って操は二人を連れて行った。

奈緒はしかたがないから、一人レストランに入って行く。

「一番奥の席はパーティションで区切られていたので奈緒から何も見え
ない・・・が、」

「1歩足を踏み入れて」

「あっ！」

と声をあげた。

母の奈美が座ってコーヒーを飲んでいたのである。

「一瞬足が止まったが、引き返さなかったのは」

やはり沙希との心と身体の交わりが奈緒を変えたのだろう。

「今なら素直に母のことを受け入れられる。だから・・・奈緒は母の
向かいに座った。」

操が沙希とケイをレストランに入れずに表に連れ出したのは

奈美と奈緒を二人つきりにしてやる為だった。

「沙希もそれと察していたので満開の桜の下で時間をつぶすことに
した。」

「綺麗だわ」

とケイがゆっくりと舞い落ちる桜の花びらを見て言った。

「ケイにとって昨日の出来事は激動の1日だった。」

「そして・・・今日もそんな予感が・・・というより沙希が確信させ
てくれたのだ。」

「おはよう」

「おはよう、沙希！」

と瑞穂とひづると律子と杏奈・・・そして夕べ遅くに里に帰ってき
た理沙が横にいる。

帰ってきたとたんに

「とうとう日野あきあが私の妹だとばれてしまったわ」

とレストランで休息を取っていた沙希やママ達に報告した理沙。

「それでどうしたの？」

「編集長に呼ばれて、愚痴られる愚痴られる・・・まだ頭がガンガンするわ」

「理沙姉、首になっちゃうの？」

と心配する沙希に

「何を言っているのよ。あなたの姉である私を絶対に首になんかできないわよ。」

雑誌社としては飼い殺しにしても私を手放しはしない。

だって現代のスーパーヒロイン、天才女優の日野あきあの姉でもあるものね」

と笑う。

「よかった」

「沙希姉さん！ここってとっても素敵ね」

ひびくが沙希の身体に飛びついていう。

「ふふふ・・・もつといいところがあるのよ」

「えっ？どこ？連れてって！」

「いいわよ・・・でもお昼からね。里の人全員といかなくてはならないから」

「お昼からね、わかった」

とうれしそうに今度は桜の周りを飛び回る。

「沙希姫～さ～ま～ま～・・・」

その声の方向を見ると

山の中腹にある高校への坂道を降りてくる一団が目に入った。よく見ると高校生達と着物姿の高弟達の集団だった。

高校生の何人かは坂道を走って降りてくる。元気な少女達だ。

高弟達は少女達に手をひかれながらゆっくりと歩いてくる。

孫に手をひかれたお婆さんや、娘と手をつないだお母さん
そんな集団に見える高弟といっても年齢層の幅は広い。

いつも舞妓たちには厳しい高弟たちも今日は笑顔で一杯だった。

「沙希姫様！」

と高弟達が呼ぶのを聞いていた高校生達も沙希のことを

「沙希姫様」

と呼ぶようになっていた。

「やだなあ」

という

「あなた様は沙希姫さまのお生まれ代わりですので沙希姫様とよばれて何の支障がございましょう」

と高弟達にきつく言われて、前世で沙希の姉であった静香や律子も『静香姫』『小律姫』と呼ばれて、

すでに本人達も受け入れてしまっているので沙希も従わざるをえない。

ただし、他の関係のない人に入る前では

決してその名で呼ばぬように言っているが……。

午後になり、里の人に導かれ頭から被せる白い浴衣に着替えさせられた

今日この黄金の湯に初めて足を踏み入れた井上貞子と高弟達、

早瀬の血を引く有佐ケイの母ひとえは沙希の術によって宙に浮かされ

里の少女達によって黄金の湯に導かれてきた。ケイはあとに続いている。

又、客として里に招待された菊野屋の女将や舞妓達と芸妓達も続き犬飼洋子は飛鳥京と、天城ひづるは早乙女薫と大空圧絵の間にはさまれている。

鳴海京子と大原智子、吉備洋子と土御門瑞穂も理沙に連れられて続いている。

こうして里のものも含め全ての人たちが黄金の湯を前に砂金の上にとっていた。

「凄い！」

誰ともなく声があがる。

足元の砂金といい、岩壁にキラキラ光る宝石の数々……声もでない始めて訪れた人達。

そこに、黄金色のシースルーの浴衣の沙希。

律子はピンク、静香はブルーと浴衣を着て一番後から現われたのだ。

そして、そのまま湯の中に入り、この間隆起した岩の横にたつ。

そこから里の住人を見渡す。沙希のよく知る人々、顔を始めて見る人々

半々という多数の女性達、沙希を始めてみる早瀬の女達は興味深げだ。

「ようこそ、皆様。よく里にいらっしやいました。

そして、久しぶりに里へ来られた方、お帰りなさい」

と本家の真理が挨拶をする。

「じゃあ、みなさん。お湯の中で禊をしてください。

そして、沙希ちゃんと静香ちゃんと律子ちゃんにお水をもらって呑んでください」

といって自ら湯の中に入っていく。

みんなもその後続く。湯にゆっくり浸ってから水をもらって呑む

「すみません。天におられるある方とはどなたでしょうか？」
と質問するのは沙希が顔もみたこともない女性だった。

「それは・・・」
という沙希のことばを

「それはきつと菩薩様です」
と答えたのはひづるだった。

「菩薩様？」

という声でざわめいたとき

「ひづるはよく存じてますね」

という声をかけたのはもう沙希であって沙希ではなかった。
目を閉じた沙希が神々しいまでの顔で皆を見下ろしていた。

これは沙希の術ではない。そう沙希を知っているものは思った。

それほど人間離れた笑顔だった。

「あっ」

といて沙希に向かって手を合わせて拝むのは年をとった女達だ。
若い女たちは呆然としていたがやがて年をとった女達に見習ったの
か

自然とそうなったのかいつのまにか手をあわせている。

「お母ちゃん、あの時とおんなじどす」

と花世がいえば

「へえ、そうどすなあ。あの時、阿修羅様になったあと菩薩様が小
沙希ちゃんに乗り移らはった。

あれって本当やったんやわあ」

という女将の声。

「早瀬の女達、争いを無くす様安倍晴明に呪術をかけられ幾世代、
苦しみこそあれ、女としての幸が薄かった女達。

争いごとが無くなるのはまだまだではあるが、一つの芽がでたことは皆も感じているとうりじゃ。だが決して無理をしてはならない。

時にまかせてゆるりとこの里を守っていくのじゃ。

そしてこの里の秘密はこの沙希のいうとおり、時に時をかけて解明すればよい」

沙希の身体に乗り移った菩薩様が続ける。

「有佐ひとえよ、そなたの苦しみいかばかりか察するにあまりある。

だが、その苦しみはもうすぐ癒える。そなたが天に召されるのはまだまだ先じゃ。

これからはこの里にて身体を休めながら心静かに暮らすと良い」

と言ってから沙希の身体が上昇する。如々に広げた両手が水平に伸びたとき、

沙希の身体がそのまま水平方向に移動して湯と反対側の壁に張り付きそのまゝ姿が

壁を通り抜けるように消えた。

「あっ！」

と叫ぶ女性達、しかし瞬時をおかず『ゴー』という轟音がして沙希が消えた壁の下部が両方に開く。

音が消えると空いた暗い洞窟が照明がついたかのように明るくなる。

そしてその中から沙希が出てきたのである。

そして、有佐ひとえが寝かされている砂金の砂地にくると

「ケイさん、私の術でお母様を連れて行ってもいいんだけど、どうする？ケイさんがおぶっていく？」

というとすぐに

「私がおぶつていきます」

有佐ひとえはさつきから両手を合わせて涙を流すばかりだったが
「お母様、少し痛いと思うけれど我慢できる？」

娘のケイさんがおぶつていくから

「とんでもございません、沙希姫様のお手をわずらわすことなどできませぬ。

娘におぶつてもらいますから。・・・でも、さきほどの菩薩様のいわれたこと

信じてもよろしいんでしょうか？」

「お母様！菩薩様のおっしゃること疑ったら罰があたるわよ。それにお母様の身体を治す事ができないと

わざわざここまで連れて来た意味がありません」
と笑う。

「ああ、ありがたいことです」

と笑って沙希までも拜むのだ。

「いやだ・・・お母様、私は神様ではありませんわ」

「いえ、私にとって沙希姫様は神様なのです」

という。仕方がないからそのまま立ち上がる。

「沙希ちゃん、後はまかせて」

と澗が近付いて言った。

「じゃあ、わたしお婆ちやまと行くから澗姉さん、頼みます」

と笑ってこの場を離れて井上貞子に近寄っていく。

「さあ、お婆ちやま」

と笑って貞子に向かって背を向けしゃがみこんだ。

「小沙希ちゃん、それは何のまねどすか？」

「うち、いつもお婆ちゃまに心配ばかりかけとるさかい、罪滅ぼしどす」

という

「そうかて小沙希ちゃん・・・あんた」

といて何か沙希の優しさにジーンとする貞子。

「いいから、いいから・・・私にお婆ちゃま孝行させてよ」

そう言われて『はっ』と気づくのは沙希の肉親の情の薄かったことだ。

実の母にも捨てられた沙希の前身・・・

「お師匠様、沙希姫さまの言われる通りに」

とそばから口を添える志保達高弟にも後を押され、ようやく沙希の背中に乗るのだ。

「小沙希ちゃん、重おすか？」

「いいえ、うちこうしてお婆ちゃまをおぶるのって夢どしたんどすえ」

という。

そして後ろを振向き、

「ケイさん！後ろについてきて」といってから階段を下りていく。

照明もないのに壁が光る。この不思議には誰も声がでない。

両側に手摺があり、ステップも広く階段の段差も低いので足腰の悪い人でも

楽に降りられるようになっていく。

少し時間がかかったが階段は終わり、

少し下へ向かうスロープが左に緩やかにカーブしている。

そしてその先には上の黄金の湯よりも広く、砂地も同じ砂金で出来

ていた。

湯の色は黄金色で湯のそばのところどころに黄色い美しい花が咲いている。

「お婆ちやま、このままゆっくりと湯の中にはいるんどすえ」

といて湯の中に足をつけていく。少しぬるめで入りやすい。

「お婆ちやま、どうぞす？」

と少し浸かってから沙希が貞子に聞いてみる。

「小沙希ちゃん、これは驚きどす。

うちの足、シクシク痛んでいた神経痛の痛みが取れたんどす。長年

あつたんどすえ」

と叫ぶようにいう。

そばでは有佐ひとえがケイにむかって

「ケイ！私の身体の痛みがすっかり取れているの！」

と驚いたようにいう。

「母さん！」

とびつくりした目で母の様子を見つめる娘。

「私、この里に戻ってきてからどことなく身体の調子がいいなあって感じていたの。

今はもう病気になる前の母さんの元気が戻ってきていると思うほど

よ」

「お母さん、戻ったらきちっと診察しましょうね」

と付き添っていた漣が、そういつてから驚きの目で沙希をみつめる。

こんな様子はあちこちでみられる。

特に高弟達は年齢のせいで身体のどこかが悪く、

医者に掛かっていた人がほとんどだったから・・・。

若い人でも病気ばかりでなくレストランの厨房で手を切って傷を造

った人、

女子高生は元気が良すぎて生傷が絶えてはいない。でもこの湯につかることでそんな傷が消えてしまっている。

沙希は湯からあがって

「皆さんにいつておきます。この湯は不老不死の湯ではありません。

現在からだに持っている病気や怪我を治すだけです。

でも軽い怪我や病気はいやしらず重い病気、長年かかっていた病気は一日では完全には回復できません。

最低でも3日はこの湯にゆっくりつかってください。

でもこの湯に浸かったからって病気にかからないと思っては駄目ですよ。

この湯はいわば癒しの湯です。

特に有佐ひとえさんのように重い病気に掛かっていた人は残りの人生をこの里で暮らし毎日この湯に入っていてくださいね」

「沙希さん！ありがとうございます」

というケイに

「何を言っているの。私のお姉さんのお母さんでしょ。だったら私のお母さんだもの」

「えっ、そう呼んでくれるの？」

「あたりまえよ、ケイ姉！」

「良かったじゃない。ケイ！いい妹が出来て」と泉。

「ええ、私一人っ子だったでしょ。妹が欲しかったの」

「まあ、とんでもない妹だけどね」

「泉姉！」

と膨れる沙希にみんなの笑い声が……。

「沙希！洋子が話があるんだって」

と京が犬飼洋子を連れてくる。

「沙希さん、ここに連れてきてもらって凄くうれしいんですがどうして連れてきていただけたのですか？」

「なんだ、そんなことで悩んでいたの？沙希にきいたけど洋子の身体にも早瀬の血がながれているんだって」

と京がいうと

「でもだいぶ薄くなってたけれどね」

と沙希が後をうける。

「わたしも早瀬の血が？」

「そうよ。洋子姉にも早瀬の血が確実に流れているのよ」

「洋子姉・・・あつともう一人洋子姉がいるんだったわ」

とそばにいた大空庄絵が声をかける。

「沙希ちゃん、そんな心配いらないわよ。この洋子は普段吉って呼ばれているの。」

だから吉と呼んだらいいわ」

と横にいる吉備洋子に言うが、その顔は驚きで少女のように口に両手を当てている。

「ほんとに？ほんとうに？姉と呼んでくれるのですか？

別にわたしは早瀬の一族でもないのに」

と嬉しそうに・・・そして心配そうにいう。

「そんな心配しなくてもいいわよ、吉姉。」

ここにいる女性全て早瀬の血を引いているわけじゃないのよ」

「よかった。私本当にここに来て良かったと思っっているの。」

私も一人ぼっちでしょ。なんかみんなが姉妹のようで」

「よかつたじゃない、吉！・・・一度にたくさん姉妹が来て」という庄絵に喜ぶ吉備洋子。

「ところで、沙希ちゃん。私、仕事がないときはここに帰って来るわ。

腰の痛みがすっかり消えちゃった。後で溇先生に診てもらおうけど」

「賛成ですわ、圧絵さん」

「ちよつと、沙希ちゃん。私もそんな呼び方で呼んでほしくないわ。

もうこんな年だから叔母さんでもいいけど・・・」

「じゃあ、圧絵叔母様！」

「うん、嬉しい」

と沙希に抱きつく圧絵。

「ところでさあ、沙希。私も京だし、有佐もケイでしょ」

「そうかあ・・・」

「あ・・・あのう私、学生時代は有佐ケイを縮めて『アケ』って呼ばれていました」

とケイが京に遠慮深げにいう。

「それで決まりね。アケちゃん」

という泉。

そこで、いきなり後ろからだれかに抱きつかれた沙希。

「ちよつと・・・瑞姉、くるしいわ」

「あつ、やっぱり判っちゃったんだ・・・沙希、私猛烈に嬉しいの」

「どっしたのよ」

と沙希。

「私、ずっと車椅子生活だったでしょ。それを沙希が助けてくれた。

目も見えるようになったし、身体も動けるようになったわ。

でもどこか違和感があったの。何か自分の身体ではないって・・・。

でも、お湯につかってそんな違和感が消えちゃったわ。
自分の思い通り身体が動くってもう最高よ」

みんなに聞くと女性の身体は神秘に満ちている。
だからいろんな病気があるのだ。

そんな病気がすべてなくなったと喜びの声が……。

みんな湯につかってゆっくりしている。

この湯は温度のせいで湯あたりすることも少ない。

しかし、若い人はそんな時間が我慢できないらしい。

一人去り二人去り……レストランの厨房の人も夕食の準備があるので全員引き上げた。

「小沙希ちゃん。うち、ここでもう少しのんびりしているから……」

という貞子に心配する沙希だが

「大丈夫どす、弟子達もいるから」

若い人は若い人で過ごす時間があるからと沙希をお湯から上げる。

「じゃあ、上がる時は呼んでくださいね」

といつてから 姉達と戻っていく。

こうして沙希は里の秘密を又一つ解明して里の女性達に福音をもたらした。

あの湯はこの里から出して効果が続くのかわからないが
京都のお婆ちやまの隣りの地下につくる温泉の湯としようと考えている。

これは医者である漣と相談する必要がある。

沙希に関してはもう直ぐ『妖・平安京 雪の章』のゲーム発売と同時に映画が上映されるのだ。

今でも騒がれているのにこれ以上騒がれるのは勘弁してほしいがどうしようもない。

ソフトを作ったりと何かを作るのは大好きだ・・・でも女優ももう辞められない。

あのカチンコが鳴る中の演技、身体が熱くなってもうどうしようもないのだ。

あの感覚を知るともう止められない。

これから先、どんな映画やテレビに出るのかはわからないが、楽しい。

沙希は外に出て飛び上がった。飛行術で結界内の様子を見るためにまずは結界の周囲を見て回る。沙希の身体から光る珠が3つ出てきて

沙希の身体をぐるぐる回りながら飛び回っている。

結界内は凄く広い、そして沙希の目からみて、この隠れ里にはまだまだ秘密が眠っている。

金や宝石だけではない。もっと別の宝や資源が眠っているのだ。

それほどこの地は恵まれている。よくぞ沙希が結界を張るまで無事だったものだ。

沙希は結界内の中心とされるところに浮かんでいた。

見下ろす真下には女子高がある。

思い思いに歩く里の女性達、アリのように小さなその姿・・・

沙希には彼女達を守り、そして次代の早瀬の子供達をつくる使命がある。

その兆候は本人はまだ気づいていないが、真理、操、薫、理沙、律

子にあらわれているのだ。

こうして沙希は広大な隠れ里を見守る。そして早瀬の女達の幸せも。

「沙希〜」

「沙希〜」

「沙希姉さん〜」

松島奈緒と有佐ケイ、犬飼洋子と吉備洋子、鳴海京子と大原智子。
そして土御門瑞穂と天城ひづるの声が聞こえる。

新しく早瀬の女となった彼女達、そろそろその元に行かねばなるまい。

沙希は本家の屋敷のあの桜の樹に向かって降りていく。

里での生活の1週間、十分な休養と癒しの湯に入り続けたことによつて

女性達は怪我の後遺症や持病がすっかり消えて、

特に年を取った女性達は10も20も若返ったように元気になつたし、

若い女性は若い女性なりに持っていた持病や特に仕事で厚化粧する舞妓や芸妓は

肌荒れ悩んでいたのにそれもすっかり良くなつていた。

「ありがとう、小沙希ちゃん。うち腰痛で舞いを舞う事が辛くなつとつたんどす。

このままでは正座することも出来へんようになる。

そやから大好きな芸妓を止めなあかんようになるって

この間からお母ちゃんに相談しとつたんどす」

でもいまではホラつと屈伸をする花江。

お母ちゃんと手を取り合つて喜んだといった。

そのお母ちゃんも娘のような女子高生達に囲まれて、

菊枝を殺されたという悪夢のような出来事も癒しの湯に入る事によつて、

心の中もリフレッシュされたと言っている。

癌というあと半年の命と宣告されていた有佐ひとえは、

最初こそ娘のケイや女医の溼に付き添われて癒しの湯に入っていたが今では一人で湯に通っている。

真理や操によつて料理好きということとで厨房に仕事を与えられたと

言って非常に喜んでいる。

溼によればもうすっかり病巣である癌組織は消え、

あとは長い間寝たきりであったため、リハビリが必要なだけだ。

ケイは沙希の姉となったが、母を救ってくれたという大恩を感じているので

他の姉達とは違う意識で沙希に接している。

そして、千堂ミチル・杏奈親子や勤める美容部員達はその強力なパ
ーマ液や毛染めで肌荒れがあり、

立ち仕事からくる腰の痛みや関節の痛みからも開放されて

沙希の姿をみると飛び掛ってその嬉しさをあらわしたのだ。

癒しの湯は溼によって分析された。

今までみたこともないウイルスが湯の中にたくさん含まれていると
いうのだ。

そのウイルスは実験の結果、人間の体組織に入り込み、

悪性となった組織を吸収してしまい、組織ばかりでなく、悪性ウイ
ルスも吸収するというのだ。

この湯のウイルスは1週間は身体に生き続けそして体組織に吸収さ
れてしまう。

溼はいろんな検査をやってみた。結界外でのウイルスの働きも正常
だったし

水道水の継ぎ足しもウイルスの働きには関係なかった。

全て検査し終わった結果、京都井上家の隣りの地下につくる診療施
設に

治療の一環として温泉を作り、この湯を運び入れる事に決めた。

こうして、1週間の休暇が終わる前日の夜、

沙希は変わらず高校のパソコン教室でソフトをつくっていた。

相変わらず仕事人間だ。その沙希を呼び出したのがまゆみ社長……。
レストランに入っていくと、まゆみ社長、順子、律子、吉こと吉備洋子、
瑞穂と杏奈という早乙女薫事務所の女性達と
薫、圧絵、ひづるの女優陣、そしてどういわけか静香が加わっていた。

「沙希……いえ、あきあ、そこに座って」と薫の横の椅子を示した。

「ごめんね、沙希ちゃん。仕事の邪魔をして」
うまく沙希とあきあを使い分けているまゆみがいう。

まずは沙希として本来のソフト開発をしていたのを中断させたわびを言った。

「いいえ、そんなこと……でも、どうしたのですか？みんな揃って……」

と聞く沙希に
「これで全員が揃ったから、早乙女薫事務所のこれからのスケジュールを伝えます。

まずは全員で貞子お婆様を送りがてら京都の撮影所へ向かうというスケジュールが
全面的に変更になりました」
女優達全員が『えっ？』という顔でまゆみ社長をみる。

「ごめんなさい。でも今日になって小野監督から電話が入って、小野監督の友人であるジョージ・ルーク監督が来日されたの。それというのも義理の弟さんにあたるスコット・アルダという人から

あのテレビの録画を見せられて、日野あきあという存在に俄然興味を持ったらしいの。

それからあきあの情報を集めてから、急ぎ昨日来日されたのよ。

以前から知人であった小野監督があきあを主演にして映画を製作したことも

情報として得ていたのね。だから来日してから小野監督に連絡したのよ」

「スコットさんって・・・あの人ね」

というあきあに

「そう、あのNASAの研究員の人よ」

という静香。

「ジョージ・ルーク監督は、来日した時アメリカのいろんな映画関係者も連れて来たの。

日本の巨匠が久々に撮る映画ということで来日した人もかなりいるらしいけれど。

小野監督も京都での編集作業も終わっていたので急ぎよ日にちを変更して

明日映画の試写会を開く事になったのよ。

ルーク監督があきあ達に会いたいということもあるけれど

芸能記者や映画の評論家達、そして選ばれた一般の人たちが見にくるので

舞台挨拶をしなければならなかったの」

と一気にまくしたてるように言った。

「試写会はどこですか？」

と薫が聞く。

「新宿ミラノ座よ」

「ミラノ座？・・・だって、そこは1288席もあるのよ」

「たった1日ぐらいで席は埋まるとは思えないけど」

「そうね。それにアメリカからの映画関係者に空席は見せられないし……」

「ふふふ、心配いらないわ。昨日急いでテレビで試写会のことを放送したらしいわ。」

その間約5分、あっという間に席が埋まってしまったそうよ

「凄い！」

と嬉しそうにはしゃぐひづる。

「でもなんだかドキドキするわ」

とあきあ。

「何言ってるのよ。銀行強盗相手に何も動じないあきあが何をいまさら」

と誰も相手にしない。

「そうだ、あきあ。あなた今東京が……いえ日本中どうなっているか知ってる？」

「えっ？」

「般若童子様のキャラクター人形が大流行だし、賞金も出てるわよ。」

『般若童子は誰なのか見つけた人に賞金200万円』って

「やだなあ、まるで賞金首だわ」

というあきあの言葉に皆『プツ』と噴出す。

「それと、もう一つ。あきあ主演の連続ドラマが決まったわ」

「連続ドラマ？」

「そうよ、テレビ局はVテレビよ。プロデューサーやスタッフも、初めての人たちばかりだけれど脚本はあの谷さん。」

だっていつもいつも同じ人達という訳にはいかないものね」

「私達は？」

「本当は武者修行のためにあきあだけのほうがいいんだけどあまり知らない人達ばかりだと、現場でトラブってしまうことを考えれば、女優陣だけでも何もかも知っているほうがいいと思ったの」

「やった〜」

と聞いていた薫やひづるそして圧絵までもが嬉しそうに手を叩く。

「どんなドラマなんですか？」

とあきあだけが心配そうに聞く。

「そうねえ、一言で言えば『セーラー服美少女戦士』かな？」

「セーラー服美少女戦士？」

と声を合わせて叫ぶ女優達。

「そう、主人公はある女子高に通う高校2年生、ほしせいな星聖奈ほしせいなというの。星家は代々女性が悪霊を退治する退魔師なの。

でも聖奈だけは鬼ツコだったのよ。

悪霊を退治する巫女としての能力がなかったけれど、でもあるきっかけによって力が目覚めたの。

その聖奈が学園生活の中でおこる不思議な事件を解決していくという設定なの。

普段は何の術も使えないけれどある呪文を唱える事によって変身するわけ。

変身後にあきあをそのまま使うといろんな支障が出るでしょ。

だから、変身後は天城ひづる。あなたが天聖ルナとなるのよ」

「ええ〜、やった〜、やった〜」

と椅子から飛び降りて走り回る。

「こらっ！ひづる！やかましい！」

と怒る律子。ひづるの教育係だから遠慮なく叱る。

「は〜い」

と謝るひづる。でも表情は満面の笑顔だ。

「それで、私は？」

「薫は学校の教師。聖奈の担任だけどその体質からか悪霊や怨霊の的になるの。」

だからいつも危機に陥るけれど天聖ルナに助けられるのよ。

でもいつもいつも天聖ルナが強いとは限らない。弱点があるのよ。

聖奈の時はなんでもないけれど天聖ルナに変身するとたちまち弱点となるわけ」

「その弱点って？」

「まだ、判らないわ。今、谷さんが頭をしぼっているところよ。」

・・・それでルナがあわやっというところで薫扮する江口京香の身体から

ある力が放射されるけれど本人は全く気づいていないってところかな」

「ふ〜ん、面白いじゃない。でもこのドラマ下手をするとお子様向け番組になってしまうわよ」

「そのためにあきあの力が必要なのよ。」

だって下手な特撮とかCGなんてその感たるものでしょ。

だから谷さんは本物が欲しいって言ってるのよ。

脚本は谷さんが書いているけど、小野監督もかなりアドバイスをしているわ」

「私は・・・私の役は？」

「圧絵さんは聖奈の祖母の役よ。聖奈の両親は飛行機事故で死亡し祖母の手で育てられているの。」

喫茶店『スター』・・・安直な名前だけど、それが星春江の自宅兼店となるの。」

ガラッパチで男まさりのお婆ちゃん。それが圧絵さんよ」

「へえ、中々面白そうね」

「あとは女子高でしょ。廃校となった学校の校舎を使つらしいけれど」

友達役や先生役・・・かなりの俳優やアイドルも出るみたいよ」

「なんだか楽しそうね」

と沙希。

「小野監督ったら、そんな俳優やアイドル達まで明日の試写会に呼んでいるのよ。」

あきあを知ってもらつたためだつて。勿論プロデューサーやスタッフ達もよ」

「何か、大変なことになりそうな予感・・・」

という順子に相槌をうつマネージャー達。

名残惜しそうにバスの窓から手を振る貞子他、京都に帰る女達。

無論、運転手は里の女性だ。

漣や看護師達も一緒に帰るのでにぎやかなバスの中、でもいづれも沙希達の見送りに涙を浮かべている。

バスを小さくなるまで見送つた沙希達、でも自分達もゆっくりは出来ない。

まゆみや順子の車に分乗して女優やマネージャーは新宿ミラノ座に向かう。

飛鳥叔母やママ達に見送られるが、今夜にはみんな東京に帰っている。

交通渋滞に巻き込まれ、ミラノ座についたのはギリギリ5分前。

慌てて劇場に入るとすでに車の中で着替えやメイクを終えていた女

優達を見て

ほっとする支配人や劇場関係者。

女性に案内され場内に入るあきあ達……でも目の前の光景には足を止めてしまう。

壁のようになっていている立ち見の客の後ろ姿に驚いたからである。

ドアが開くのを知って振向いた客の一部から

「あっ！日野あきあだ！」

「早乙女薫だよ」

という声でそれが波のように周囲に広がっていく。

早乙女事務所のマネージャー達が女優達をガードし、

立ち見客を掻き分けて、やっとスクリーンが見える位置まできた。

「お〜い！」

と前の方の席から一人の背の高い男性が立って手を振っている。

小野監督だった。

皆に注視される中、あきあ達は小野監督の横に用意された席に落ち着く。

「後で他の方は紹介するが、ジョージ・ルーク監督を先に紹介しておくよ」

とあきあ達に紹介の労をとる。あきあの初対面の挨拶を聞いて

「おう、ミスあきあ。あなたの英語は完璧だ。ハリウッドにきてもそのまま充分に働けるよ」

というルーク監督の厚い手があきあの手を固く握る。

「では、ただいまより『妖・平安京 雪の章』の上映を開始します。

なお上映後、出演されている俳優の方々の舞台挨拶がございます」

と司会者からの言葉が終わると後ろに控えていた女性が同じ事を

英語で伝える。かなりの人数が目につくアメリカからの客のためだ。

こうして映画が始まった。
遠い宇宙、無限大に広がる星々。
一気に突きつきるように宇宙空間の中を移動していく。
目の前の小さな星。しかし、その青く光るこの星の美しさは宇宙広しといえど皆無といえる。

静かに回るその星・・・地球。

その青い地球に落ちていくように大地に近付く。

そこは東洋の小さな島国、その中心。

碁盤の目のような都市、名づけて平安京。

今度は平安京を眼下にゆつくりと周囲を回り出す。

北の玄武・・・大きな甲羅の亀が首を伸ばし相手に噛み付くような姿。

闇の中の平安京に白く輝くその姿が現われ消える。

東では青龍がとぐるを巻き叫び、南では孔雀が羽を広げて威嚇する。

そして西では白い虎が吼えているのだ。

平安京を回り続け、それが丸く光る月になり、・・・・・・

そして、手入れがしていないある屋敷の廊下からその月を見上げる少女の姿と景色がかわった。

まるで庭から虫の音が聞こえてきそうな情景である。

少女は男のような狩衣姿でその懐から横笛を取り出し吹きだした。

この荒れ果てた庭に流れる笛の音に小さな蛍の光が踊っている。

後ろで一人の男が酒を飲みながら笛の音を聞いているのだ。

男の名は時の帝につかえる陰陽師安倍晴明、少女は弟子の安倍あきあ。

こうして物語がはじまった。
泰然自若としている安倍晴明にも朝廷内の貴族達の確執はどうにもならぬ。

他の陰陽師との術比べ、京にはびこる怨霊、鬼との戦い。
映画は進んでいく。あきあの陰の気から生まれた弟のあきあ、
姉にとってかわろうと卑劣な策略が渦巻く。

そしてあのロケでの戦いとなった。

「キヤア」

と叫ぶ観客達、その迫力には映画関係者も目を丸くしている。
一度ロケのフィルムを見ているあきあ達にしても
こうして編集され効果音と音楽で彩られたフィルムを見ると一層迫
力を増した映像に驚きを隠せない。

そして雪の章のクライマックスとなるあきあと雪夜叉との戦いは
最後に親子の哀しい別れと場面が変わる。

瑞光とともに天に上っていく母の姿に娘の叫びが重なり観客達の鳴
咽は館内に広がっていく。

上映が終わり一瞬静まりかえった館内が
ジョージ・ルーク監督が一人立ち上がり拍手をすることにより、
スタンディング・オベーションが始まってしまった。

観客達の盛大な拍手が館内を興奮の坩堝に押し上げていく。

「あきあ、立ってお辞儀をするのよ」

という薫のささやきに慌てて立ち上がるあきあ、
あきあにならって出演者全員が立ち上がり360。順番にお辞儀を
くりかえす。

「キヤア、素敵！」

という女性達に負けない男性の声援、そして

「ブラボー」

という外人の声も聞こえ、さすがのあきあも上気した頬が真っ赤に染まっている。

そして司会者に呼ばれ舞台上上がる出演者や映画関係者、

小野監督の次にマイクを向けられ、最初の一言をいうのにはさすがに緊張していたが

場内にいる律子や瑞穂達の笑顔に励まされ、スムーズに挨拶を終えた。

アメリカからの客にも見事な英語のスピーチで締めくくったのには芸能記者達も驚きは隠せなかった。

日野あきあにはやはり目が離せない。それが今日の記者達の印象である。

早乙女事務所のマネージャー達が注目していたのは、

これからあきあとともにドラマに出演する俳優達とスタッフ達だ。

何故かキツイ目であきあを睨みつけるアイドルや他の観客と同じく興奮する出演者や

スタッフ達、冷静だったのはプロデューサーと演出家だ。

でも冷静だというのは外見だけで、硬く握った両手が震えていたのを見て取った、

まゆみ社長はニンマリと笑うのだった。

試写会が終わわり、近くのホテルの宴会場で開いたパーティの中であきあは困り果てていた。

ジョージ・ルーク監督にハリウッドで昔から暖めていた作品に出てくれと懇願されていたのだ。

今のところスケジュールの空きはない。

女優業のほかにソフトの開発もあるのだ。アメリカに行って作品を

取る余裕はない。

そういうと、スケジュールがあくまで待っていると押し切られ、まゆみ社長と相談の結果、来年の夏ということでOKをした。それでもルーク監督は大喜びだ。

まゆみ社長があきあの連続テレビドラマの出演のことをいうと「オ〜」

とって自分のマネージャーと何事が相談していたが、その撮影はいつからかと聞いてくる。1週間後だということ

「OK、そのころには又、日本に來ます」とあきあにすっかり惚れ込んでしまったらしい。

「薫姉さん、困ったわ」

「いいじゃないの。身内からハリウッド女優が出るのよ。しっかり演技・・・」

というより映画作りのお手伝いしてらっしゃい」

という。どうせあきあが映画撮影にすべてからむのだと信じて疑わない。

「いいなあ、あきあ姉さん。わたしも一緒に行きたいわ。付き人でいいから連れて行って」

というひづるに

「そうねえ、今から見聞を広げるのもいいかも・・・でも律姉の許可を得てからよ」

うわ〜い、やったあ〜と走り回るひづる。

「あ〜あ、あきあもひづるに弱いんだから」という順子に

「だって、律姉も瑞姉もどうせ私についてくるでしょ。」

家庭教師の律姉がいなかったら、ひづるちゃんどうしようもないもの

と笑っている。

「おーい！あきくん」

と呼ぶ小野監督。

「ルークに説き伏せられたらしいね」

「ええ、でも来年のことですよ」

「ああ、でもそれが終わったらこちらで第二章が待っているからね」

「もう決まっただんですか？」

「今日の客の反応を見れば判るじゃないか。まあ楽しみに待っているからね。」

あっと、そうそう。おーい、景山！

と呼び寄せたのはテレビドラマの演出家だった。

「あきくん、こいつとは同じ釜の飯を食った仲間なんだ。」

今度の連ドラが決まったとき、俺に日野あきあとはどんな女優なんだと聞くから

その目でみれば良くわかるよ・・・と言ったよ。

君の秘密は直接目で見る必要があるからね」と笑う。

演出家・景山三郎は

「秘密？つてなんだ？」

「いいから、いいから、直ぐわかるって。なにしろ日野あきあが行くところ事件だからかなあ」

「事件？」

なんだそれとは一層不審な表情になる。

「監督！」

とあきあが睨むと

「あつ悪い悪い。事件があきくんを追い回すんだっけ」

「監督。同じことですよ」
あきあは仕方がないとあきらめているのに小野監督が追い込んで
いるのだ。

パーティーも終盤を向かえて一人帰り二人帰り、アメリカ人もルーク
監督だけになり

今度ドラマをやる共演者達も少なくなったところ、

「キヤア」

という叫び声が・・・あのあきあを睨みつけていたアイドルが窓の
外を指差し叫んでいるのだ。

道を隔てた隣のビルの屋上、女性らしき人影がフェンスをよじ登っ
ている。

自殺をしようというのか

「すぐに警察だ」

という声ではたばたと駆け出す足音、
しかし、あきあは素早く九字を切る。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

そんなあきあの姿を驚きの目で見るテレビの関係者。

「あきあくん、これ！」

といって小野監督に渡されたものは布に包まれたあるもの。
開けてみると般若面。

「あっ！」

という声であきあど般若面を見る、まだ何も知らないテレビのスタ
ッフ達、

「あきあくんの行くところ事件ありってね。準備していて正解だね」

「あきあちゃん、がんばって！」

「あきあ姉さん、あの人を助けてあげて」という姉や妹達にうなずくと

呪文をかけてドレスから般若童子の衣装にいれかえる。

「あっ！」

と再び叫び声が……。

横でルーク監督が呆然と見詰める中、面を被ると

「薫姉さん、小野監督。後をお願いします」

といって窓から飛び出していった。

「日野あきあが『般若童子』？」

呆然とする景山、そしてスタッフ達。ルーク監督は何が何やらわかりかねている。

「そうだよ。我々が京都で撮影しているときにおこった事件は全てあの日野あきあが

解決したんだよ」

「では、映画の特撮は？」

「全て本物さ」

「テレビも？」

「そうだよ」

ルーク監督に通訳が興奮しながらも説明しているので段々と飲み込めてくる。

あの若い女優は普通の女優ではないのか。先ほど見た映画の内容が頭の中に浮かびあがってきた。

ホテルでみんなが鈴なりのように窓から眺めている中、ようやく地上で気がついた人がいて大騒ぎになっている。

パトカーもきたし救急車も到着したが高層のビルなので手の施しようがない。

ビルの女性は何の躊躇もなしに飛び降りてしまった。

高層ビルとはいえ数十秒で地面に激突する・・・と思ったら女性の身体が急に

スピードを落としてついには4階あたりで宙に浮いている。

それを見上げて呆然とする野次馬や駆けつけた警官や救急隊員。

その時

「あつ、あれ・・・あれ・・・」

と空に向かって指差す野次馬。

そこには手を広げて足から降りてくる・・・あつ、あれは・・・

「般若童子だ！」

と再び大騒ぎになった。

ホテルの中ではスタッフが持っていたビデオカメラで撮影している。

初めて見るものにとって驚きで言葉がでない。

でも良く知るものにとってはもう慣れたものである。

「あきあ姉さん。こんどはどんな記者会見をするのかなあ」

とひづるなどは楽しみでわくわくしている。

般若童子は4階で浮く女性を抱きかかえたとゆっくりと地上に降りてくる。

その頃にはパトカーも10台以上に増え、報道陣も待ち構えている。

地上に降り立った般若童子に対して睨みつけるように怒鳴ったのは当の女性。

「どうして・・・どうして・・・助けたのよう。死んで楽になりたかったのに！」

「馬鹿者！」

と怒鳴る般若童子。

「無知たるもの、恐るべきかな。・・・お主は知らんらしいな。自ら死を選んだ者の行く末は無限地獄ということを」

「無限地獄？」

「そうだ、地獄で無限に続く苦しみと痛み。

首を切られ腹を裂かれても何度でも地獄で生き返るのじゃ。

それが無限に続くのが無限地獄じゃ。

楽になるために死を選ぶとは愚かな行為であり、無知なだけじゃ。

それでも死にたかったら、一人どこかで朽ちるがよい。他の人間に迷惑をかけるな」

突き放した言い方には、女性は言い返せずにブルブルと震えているだけだ。

般若童子が頷くと救急隊員と警官が女性を連れて行く。

「さ・・・いえ、般若童子殿。本日は本当にご苦労さまでした」というのはお馴染みになった間警視。

頷くだけで去ろうとした般若童子だが報道陣に取り囲まれてしまった。

(これこれ・・・)とわくわくする間警視。

どんな受け答えをするのかそばでじつと聞き耳をたてる。

「般若童子、今日は逃がしませんよ。きつちりと答えてください」

「何を答えよと申すのじゃ」

「あなたの正体、それにこんな都合よく現れたのはなぜなのか」

「我正体は神のみぞ知る・・・じゃ。それに我がここに来たのは散歩じゃ」

「散歩？」

『プツ』と噴出す間警視。

「そうじゃ、妹にまだ食事はできぬ、それに腹一杯に食べたかったら散歩をしるといわれてのう」

妹に腹を立てられたら我は食事ができぬ。

我はその方面はからつきしじゃから。だから散歩に出たのじゃ。

するとどうであるう、地上は何やら大騒ぎでのう。

我もそのう・・野次・・えっ？野次喜多・・違うのう・・野次牛？」

「それをいうなら野次馬でしょう」

「そうそう・・それじゃ。どうも我は寺子屋での書の点数は低うていかんかった」

と報道陣の質問をかわす。

こっそりと紛れ込んでいたのは小野監督にいわれて録音しているスタッフだ。

それを知ってか知らずか

「どうもいかん・・」

「えっ？どうしたんですか？」

「ほれこのとおり、腹が減りすぎて体が浮き上がってしまう」と身体が浮き上がっていく。

「あっ」

と捕まえる暇もなく3mも宙に浮いている。

「じゃあ、諸君、我は食事にかえるとしよう。さらばじゃ」

といって飛び上がってしまい、フッと消えるのはいつものことだ。

人の目を逃れてやっとホテルのパーティ会場にあきあが戻ったのはそれから10分後だった。

何やら楽しそうに皆が笑っている。

「どうしたの？」

「ああ、あきあ。お帰り」

というまゆみ社長も涙をためて笑っている。

「どうしたのよう」

と少しすねたようにいうと

「だって、あんたと記者連中の会話っていつも面白いんだもの」

「あっ！」

「わしがスタッフにたのんで録音してもらったのさ」

「そんなに面白い？」

と逆に周囲の皆に聞くあきあ。

頷くのはあのアイドルも一緒だ。

「やっぱり身内だなあ。この記者会見のやり方って薫君にそっくりだ。」

人を食ってその上ユーモアがある」

「至らない姉のがうつってしまったのでしよう」

というあきあの後頭部に『ボコツ』という拳骨での一発！

「痛あゝい！・・・薫姉さん、何をするの！」

「この石頭！見てよ。こんなに手が腫れちゃったわよ」

「はいはい、姉妹漫才はそこまで」

ニヤニヤするのは二人を良く知っている映画関係者。

初めて見るテレビ関係者はそんな二人をあっけに取られてみている。

それに早乙女薫に妹なんていたっけ？

「ああ、それはね。お姉さんって言わないと仕事中でも全力で笑わすって

言われているから・・・本当はあきあ姉さんにとって叔母さんなんだって」

と正直にいうひづる。

「こら！ひづる。何を正直に答えてるのよ」

と今度はひづるを追い回す。

その時、ドアがノックされ入ってきたのが飛鳥日和子警視正に飛鳥京警部、飛鳥泉警部、そして有佐ケイ巡查と犬飼洋子刑事もいる。そして松島奈緒警視も。

「これ、薫！何をしているの！」

と叱られシユンとなったが

「京！、泉！薫姉さん怖かったよう」

と喋って京と泉に

「誰が京じゃ」

「誰が泉じゃ」

と喋って頬を捻られているひづるを見て少し溜飲を下げた薫だった。

この闖入者を見て俄然おとなしくなった早乙女薫の様子に驚いているテレビ関係者。

小野監督が親しそうに挨拶をしてから、まゆみが皆に紹介をする。全員が警察関係者ということに驚くし、全員があきあの血縁ということに

改めてびっくりしたというのが本音だ。

「沙希ちゃん。又やったんだって？」

「あつ、間さんに聞いたのね」

「沙希ちゃん、警視総監がよろしくって」

「長谷部の叔父様が？」

「ええ、市民の命を救ってくれてありがとうって」

あきあは警視総監とも顔なじみなのか・・・つくづく凄い少女だと思ってしまう。

「それでね、沙希ちゃん」

と日和子が少し声をおとして

「あなたに会いたがっている人がいるの」

「わたしに？」

「さあ、入ってらっしゃい」

そう言われておずおずと入ってきたのはさっき助けた女性だった。

「あのう……」

と周囲を見渡す女性。

「この人何も話してくれないのよ。名前さえも……」

「でもやっとな般若童子には話すといってくれたの」

「般若童子様は？」

「この子がその正体よ」

「えっ？でもこの人は……」

「叔母様、いいわよ。わたしが話してみる。さあここに腰をかけて」

と椅子をすすめて女性が座ると自分も対面に椅子を用意して座る。

みんなもどうなるかと興味深かげに周りを囲むのだ。

あきあはその女性を一瞬みてから、

「司ゆりあさん。いい名前だわ」

という。

「えっ！」

と飛び上がる女性……ゆりあ。

「今は無職の22歳ね。彼氏はなし。うーん、お姉さんが亡くなつて3ヶ月……ですね。」

ゆりあさんは大好きだったお姉さんがどうして亡くなったのかを調べていたのね

と優しくいう。

「調査もうまくいかないし、そのため仕事をやめざるを得なかった。」

生活費も無くなり何もかも嫌になって死のうとした。そうでしょう」
驚きのあまり目を大きく開けて・・・ただコクンと頷くだけだ。

「どつだ、景山」

「凄い！凄すぎる・・・何故だろう彼女から目がはなせない」

小野監督と演出家・景山三郎の会話だ。

景山はもう夢中であきあのことを見逃すまいと必死で見詰めている。

ルーク監督もそうだ。通訳を介しながらも一心にあきあを見守る。

「ゆりあさん。あなたはそんな調査には向いてはいなかった。

とあきらめてはいかがですか？」

「いいえ」

といつてゆりあは思い切り首をふった。

「しかたないですねえ。ではお姉さんに直接聞きなさい」

「えっ？」

「あなたのお姉さんに聞けばいいんですよ」

「どのようにして？」

「ほらそこに・・・」

とゆりあの背後を指差す。

慌てて立ち上がったゆりあ、周囲を見渡すが何も見えない、

脅しだと思い座りなおしあきあを睨みつけた。

「見えないでしょう。そうだよ。・・・律姉！」

と呼ばれた律子。近くにある観葉植物の葉を一枚ちぎってあきあに渡す。

あきあはその葉にむかって呪文をかけてからゆりあに葉を渡し、目をこすってごらんなさいとジエスチャーで教えた。

ゆりあは葉で目をこすり周囲を見回してから

「あつ」

と声をあげた。

「お姉さん」

抱きつきに行こうとするが魂と肉体とでは触れ合えないのだ。

一人がひらひらと舞い落ちた葉を拾い目をこすってからそばにいる者に葉をわたす。

いきなりガタガタと震えだすもの。写真をとろうとして構えるもの、

いろんな人がいてもおかしくはない。

さすがに小野監督・映画関係者・平然としているのは京都での経験のおかげか。

ゆりあの姉はさびしそうに立っていた。何か話そうとするが声が聞こえない。

これも菊奴のときと同じだ。あきあの呪文で声が聞こえるようになった。

「ごめんね・・・ごめんね・・・ゆりあ。お姉さんをゆるしてね。

とうとう、あなたをひとりぼっちにしてしまったわ。

あんなに思いつめて自殺しようだなんて・・・とめられなかったお姉さんを許してね」

そういうとしょんぼりと肩を落としてしまふ。

「祥子さんだわよね」

あきあがそう言う

「はい、先ほどは妹を助けていただきありがとうございます」

「祥子さん、あなたがどうして死んだのか教えてくれる？」

祥子はあきあの顔をじっとみてから話だした。

「私って本当に駄目な人間なんです。酔っ払ったあげく車に引かれ

て死ぬなんて」

「えっ？嘘！」

とゆりあが驚いたように叫ぶ。

「どうしたの？ゆりあ」

「だって姉さん！おかしいわよ。姉さんが死んだ原因は交通事故なんじゃないもの」

「そんなことないわよ、私見たんだから。」

車道の上で血の海の中にうつ伏せで死んでいる自分を見ていたんだから……」

「私はその後のことを言っているの」

「えっ？」

「どうもおかしいわね、祥子さん。あなたの意識の底に眠る記憶を讀ませてくれる？」

「記憶を読む？……そんなこと出来るのですか？」

「ええ、じゃあいいわね」

とあきあは手をあげて

「オン・バザラ・アラタンノウ・オン・タラク・ソワカ」

と真言を唱える。

あきあはしばらくその形で目を閉じていた。……そして

「ふ〜」

と息を吐き出してから目をあける。

「わかったわ、ゆりあさん。祥子さんが交通事故死だと思っていた訳が。」

自分が死んだことを知ったショックから、祥子さんはあなたが今ほめている

その指輪に魂を封じてしまったの……いいえ、率直に言えば指輪に逃げ込んだのね。

その指輪から抜け出たのは今日、ゆりあさんがビルから飛び降りた

瞬間よ。

飛び降りたゆりあさんのショックの波動を受けて指輪から飛び出したというのが真相よ」「

「姉さん！」

「ごめんなさい！」

「ふふふ・・・笑っちゃいますよね。そういえば姉さんってドラマであつても

人が死ぬ場面は恐がって目を閉じていたっけ・・・自分の遺体だものね。

どこかに逃げ込むって今から思えばわかることよね」「

「ゆりあさん、そのお姉さんの気の弱さ、それが怨霊の餌食になってしまった原因なの」「

「えっ！怨霊？」

「ひづるちゃん。ヤタさんを貸してくれる？」

「ヤタさんを？」

何に使うのつとも聞かず

「ヤタさん・・・ヤタさん・・・出てきて！」

というつと

「カァー」

という泣き声で黒いカラスが突然あらわれた。

「なに？」

「なんなの？あれ！」

「カラスだよね」

若い女優達がザワザワと声をあげている。

彼女達の間にはさまれた飛龍高志が説明する。

なんでもよく知っている、ということでのいつのまにか

飛龍高志のまわりに移動してきて解説をねだっているのだ。

「あれはあきあがつくった式神だよ」

「式神？」

「そうだよ。京都の結界が危なくなったとき、あきあが出した式神なんだ。

京都から熊野古道まで10分あまりで清い水を汲んでこさせるために生み出したそうなんだ」

「でも、どうして天城ひづるが？」

「ひづるはね、何故だか式神に好かれるらしいんだ。

だからあきあがひづるにヤタカラス・つまりヤタさんを預けたんだよ。

ひづるは他に胡蝶という蝶の式神も身につけているんだ。胡蝶はあの安倍清明に譲られたそうだよ」

「凄い！・・・何だか判らないけど日野あきあと共演できるって

こんなことも目撃できるんだわ・・・凄い幸運！」

会った時つつけんどんな話し方で嫌な奴だなあと思っていたあのアイドル、

こんな短い間に可愛く変貌しているのだ。

やはり日野あきあは凄い！嫁さんが噂を聞き現場にきたがって仕方が無いのだ。

いつも駄目だと叱っているが、こんなのをみると許してやるうかと思っ飛龍高志だった。

「ヤタさん、お手伝いしてね」

というと、ちょこちょこあきあの元に歩いて行ってその腕に頭をこすりつけている。まるで猫のようだ。

その様子が可愛いと女優陣に騒がれている。

あとで彼女達がヤタさんをつけ上げらせねば良いと思う律子だった。

あきあはヤタさんに向かって真言を唱える

「オン・アブラウンケン」

と3度唱えた。

とヤタさんの目から飛び出した映像が、空間に映し出される。

全員が息を呑んで見守る。

それはどこかの風景だった。

何故か映し出される情景がコツコツという足音と共にゆれている。

「これは、祥子さんが殺される何分か前からの記憶です。

魂に刻みこまれた記憶はご本人が記憶が無いと言われても実は無くなってはいないのです。

でも・・・かなり酔っ払っているようですねえ」

その言葉に笑う全員、祥子は身を縮めていた。

実をいうとこの頃にはもう酔いのため全然記憶がなかったのだ。

「姉さんたら」

とゆりあも恥ずかしくて、姉の祥子を睨む。

どうやら、石段を上がっているようだ。

そして石段の上でその石段に倒れこむように腰をおとす。

すると如々に周囲の景色が白く濁ってきた。霧が出てきたのだ。

その時、後ろから

『カツカツ』という音がする。

振向きながら立ち上がって階段から中に入り祥子が見たものは

後方からの明るい光が霧をスクリーンにして影絵のようになったそれは・・・

足踏みし『カツカツ』という蹄の音をさせた馬の上には
折れた矢が2本その鎧につきさした姿の武者が乗っていたのだ。
そして、その顔は……無い!……馬に乗った首なしの
鎧武者だ!

「キヤア」

と悲鳴があがる。しかし、度胸のいいのも女優の条件、皆恐いもの
みたさに
顔でかくした両手の指の隙間からこの情景をみつめているのだ。

この祥子の記憶もかすみがかかってここでとぎれた。

「ここまででは祥子さんの記憶です。でもこれからは魂に刻まれた記
憶です。」

気の弱い方は見ないほうがいいでしょう」

とあきあが注意をするが、そういわれると見たくなくなるのが世の常。
みんなしっかりと目をあけているのだ。

「オン・アブラウンケン」

と再び真言を唱えるあきあ。

倒れている記憶だから馬からおりて見下ろす鎧武者。
すると首がないのに声が聞こえる。

「我は目覚めた。我の首の復活には力が足りぬ。」

女!おぬしは我の贅じゃ。その温かい血潮を浴びよつぞ」
といて首なし武者は片手で祥子の頭をつかみ吊り下げた。

「贅じゃ……贅じゃ……」

首がなくても、喜びの表情が伺えるその言葉!いきなり片手が踊り
祥子の胸に……

「ギャッ!」

とって画面が揺れると赤い血が鎧に浴びせ掛けられた。

祥子の口からと開けられた胸から、おびただしい血しぶきが鎧を真赤に染めていく。

そして、鎧武者の手に祥子の心臓が……ここで完全に画像が途切れた。

慌ててトイレに走るもの、胸をさするもの。

みんな一様にその異常な殺人に青い顔をしている。

平気だったのが警察関係の6名とあきあだけだ。

一番反応が激しかったのが当の本人、幽霊となっていた祥子だった。

逃げ出そうとしたために、あきあが祥子だけを結界で縛りつけた。

「これが、祥子さんの殺人劇の一部始終です。この場所はもう判る人がおられますよね」

「平将門の首塚」

と手をあげて言ったのは飛龍高志、彼もまた青い顔をしている。

「そうです。異常に気の弱い祥子さんは石段の中で失神したために殺されました。」

「本当は石段の外まで逃げれば助かったのです」

「それはどういうことですか？」

「あの石段を境にして結界が張られていました。」

その力はもう弱くなっていましたが、目覚めたばかりの将門にとっては

その弱い結界でも有効だったのでしょう」

「あのう、姉はその首塚の前の通りの車道で亡くなっていました」

「それは、祥子さんが生贄となったため一時的に結界を越えたので

しょうが

祥子さんは能力者ではありません。
だから力はそんなに強くはならず結界内に帰らざるをえなかった
のでしょうかね」

「能力者とは？」

「例えば幽霊を見るという霊能力者なんかもそうです。
そして恐山のいたこ等もそう言えるでしょうね」

「じゃあ、あきあさんも……」

「そうです。だから……」

はっと気づいたのは飛鳥警視正。

「沙希ちゃん！あなた自分を困にしようというのじゃ
みんなもビックリしてあきあをみなおす。」

「だって、どう考えても私しかいませんもの。日和子叔母様」

「それはそうだけど」

「将門の怨霊の力がどこまで戻っているのか」

「ふ〜、いくら警察でも相手が怨霊では無力なものね」

「ヤタさんありがとう。役にたったわ」

とひづるに返してから

「瑞穂さん、半紙を！」

瑞穂を呼び半紙を一枚受け取ったあきあ。

いつものように人形ひとかたに切り、

呪文をとなえると烏帽子姿の安倍晴明が現れた。

でもそれはただの式だけだから、もう一つの呪を唱える。
すると身体が動き

「いつも人使いがあらいのう、あきあ」

と式に晴明の魂が宿ったのだ。

見ている者は皆、慣れっこというか感覚が麻痺してしまい、もう驚きの声はあげない。

「そうだろう、そうだろう」

と小野監督も納得げだ。

「清明様、今の話を聞かれていたと思いますが」

「ああ、将門の怨霊か、しかし、懐かしい名前が出てきたものじやのう」

「清明様には、将門公の怨霊は？」

「一度だけじゃ。調伏しようとしたが、うまく逃げられたわ」

「このものに怨霊の贄になった記憶が」

「どうする？」

「人を一人殺めたは怨霊として力の復活の前触れ」

「そうなのう、しかし、将門の怨霊とは手強いぞ！」

「はい、でもやらねばなりません。人を殺めて得たその力、

もう怨霊にとって止められることはありません。きっと贄はこの者だけではないと思います」

と言ってから

「京姉、泉姉！あの近くで同じような被害が出ていないかどうか調べてください」

「判った」

と飛び出す二人・・・に付いて行くケイと洋子。

なんだか凄いことになってきた。景山はスタッフに耳打ちし 撮影機材などを手配りする。

やるわいとほくそえむ小野監督。

「清明様、すいませぬ。このものを天に連れて行ってください」

「あっ、姉さん」

というゆりあを押しとどめるジェスチャーで

「ゆりあちゃん、やっと成仏出来るの。姉さんこれでやっと天国にいけるのよ・・・」

その言葉で姉を押しとどめる言葉を飲み込んだゆりあ。

「姉さん、天国でゆりあちゃんの幸せを祈ってるから」

「ナウマク・サマンド・ボダナン・サンサク・ソワカ」

と阿弥陀如来の真言を唱えるあきあ。

晴明にかえられた祥子の姿が光輝き・・・金色の小さな粒子となつて

天に昇って行くのを皆自然と手を合わせて見送った。

ルーク監督もあの女性が安らかに天に召されていくのを知り祈っていた。

実際に魂の昇天を見たのは初めてで胸があつくなる光景であった。

そんなルーク監督に小野監督が

「ルーク、帰らなくてもいいの？」

「馬鹿な！こんな情景を体験せずに帰ってしまうのは馬鹿だけだ。

わしはもう少しでその馬鹿になってしまうところだった」

と帰りの挨拶をしているところでのこの事件に遭遇した自分の運の良さを

神に感謝するルーク監督。

「あきあと一緒にいたらこんなことばかりの連続だよ」

という小野監督の言葉に

「おう、エキサイティング！」

とってから羨ましそうな顔をする。

「よし、あきあくん。ここはもう時間だ。場所を変えよう」

という小野監督にドラマのプロデューサーが言う。

「うちのテレビ局に来ませんか。新しく建ったビルだし、大きな会

議室もありますから」

「よし、そうしようか。あきあくんもいいね」

「ええ、これからお世話になるテレビ局ですから」

ルーク監督も通訳を介して

「私も行ってよろしいか」

と・・・結局全員が向かうことになった。

テレビの共演者はあのアイドルを含めあきあの級友となる女子高生
役5人と

先生役の女性タレントが5人と男性が2名、その1名が飛龍高志で
ある。

そしてテレビドラマのスタッフと映画関係者が20名・・・

結構な人数が移動することになる。皆、車に分乗してテレビ局に向
かった。

あきあにかかわる人達はみんなこんな状態になり、あきあのそばを
離れないのだ。

飛鳥日和子警視正と松島奈緒警視もパトカーでむかっている。

テレビ局の大会議室に落ち着いた一同、

テレビ局の乾社長と主要な部門の責任者という上層部が揃っていた
手回しの良さには感心する。

せっかくだからと先に帰ってしまっていたテレビドラマに出演する
他のメンバーと

スタッフも呼び戻されていた。まるで連続ドラマの打ち合わせのよ
うな顔ぶれだ。

演出家の景山三郎とプロデューサーと紹介された山川が隣り合って座り会議を進行していく。

「今回、集まっていたいただいたのは大部分の人はご存知ですがまだ知らない方のために説明します。ただしこれは極秘事項となります。」

企業内の秘密であると共に日野あきあの個人の秘密となります」
そこで飛鳥日和子警視正がたちあがり、あきあのことは警視庁でも警察庁でも

部外秘となっている。これを破るものは誰であっても一生刑務所で飼育殺しにするときつい口調で言い放った。

その時、松島警視の携帯が鳴り

「えっ？京なの？ちよつと音が割れてはつきり聞こえないわよ」という声に

「申し訳ありません。このビルでの携帯の受信がうまくまだいいないので」
「という乾社長。」

「松島警視、大丈夫ですよ」

とあきあが言つてとりだしたのはモバイルだった。

スイッチを入れてその横から黒いアンテナのようなものを直角に立てると

「飛鳥京警部聞こえますか？聞こえたらモバイル横の黒いアンテナを直角に立てて

F3を押してください」

しばらくすると

「沙希！・・・なんなのよ、これ！・・・こんなの聞いてないわよ」

「この間、改造しただけよ」

「だってここ、携帯の電波がうまく入らないビル谷間なのよ。それがこんなにはつきりと聞こえるなんて・・・」

「いえ、これは電波じゃあなくてニュートリノを使っているから」「ニュートリノ？何？それ」

「まあいいわ、後で説明するから。それより、用事があったんでしょ」

「そう・・・そう、なのよ。あの彼女と同じ亡くなり方をした人がこの3ヶ月で5人よ。それで聞き込みをしているの」

「泉警部は？」

「ああ、泉も聞き込みよ」

「じゃあ、お願いします」

「わかってるって、もう少し時間を頂戴！」

社長や技術部門の長が目を光らせてあきあの手元にあるモバイルを見つめている。

それがわかっていからあきは

「このことは後で説明しますので」

と機先を制してしまう。

「話を続けます」

と景山が話したしたのは報道部門の部長が喉から手がでるほどの特ネタ、

『般若童子』が日野あきあだったことだ。何も知らないスタッフや共演者達の驚いた顔。知っているものはなんだか得意げに胸を張っている。

助けた女性は今、飛鳥警視正と松島警視の間に挟まれ下を向いて座っていると聞いて皆の視線がその女性に注がれる。

そして、この女性・・・司ゆりあと姉の祥子の幽霊との再会。
あきあが呼び出した師の安倍晴明・・・祥子を成仏させ、天に連れ
て行った話となると・・・
あの場になかった者にはあきれるほど陳腐な話となってしまう。
そして最後に祥子が殺されたのは・・・首塚の平将門の怨霊だっ
て？

もうなにおかいわんや・・・だ。

ただ席を立つてしまわないのは、あの場にいたという自分達が知る
部下や同僚の真剣な表情からだ。

そんな話で人を騙すほど愚かな人間達ではない。

だが信じられない話・・・なのだ。実際自分の目で見なければわか
らない。

そんな顔を見せるテレビ局の上層部。これは仕方がないことだ。

こんなことスツと信じるほがどうかしている。

景山の話は続いている。

あの東都テレビがやった龍を助けるドラマ、二番煎じはイヤだが今
回は内容が全然違う。

あの有名な怨霊・平将門を調伏するのだ。

セーラー戦士、天聖ルナとしてあきあには怨霊と戦ってもらおう。

これは芝居ではなく本当の術者としての戦いなのだ。

だから、スタッフ達も腹をくくって中継をしてもらわなくてはなら
ない。

勿論、女優達との芝居もいれる。司ゆりあをドラマ内のクラスメイ
トに当てはめて

その姉が怨霊の贄になったとするつもりだ。

急に天才子役天城ひづるが口をはさんだ。

「ねえ、あきあ姉さん、あきあ姉さんが怨霊と戦うとき私に変身す

るんでしょ。

だったら、今変身の服を着てきてもいい？」

これはあきあを信じられない人達にあきあの力を見せようとする
ひづるが子供なりに考えたことだ。その心を汲み取ったあきあは
「そうねえ、あのう。もう衣装は決まっていますのでしょいか？」

とスタッフに聞くと何を言っているこの少女は・・・と顔をまじま
じとみられたが

「ええ、一応は。でもまだ少し詰める必要がありますけど」

「それでいいわ。私に着せてちょうだい」

とひづるは衣装さんをひっぱって出ていく。

ひづるの変身はそんなに時間がかからなかった。

「まあ、可愛い」

薄いピンクの光沢のある生地はひづるの身体をピッタリ包む
短いスカートにスパッツ、ロングブーツに破魔の短剣が取り付けら
れ

背には長剣が背負われている。

「これが普通の姿から変身するパーツの独鈷です」

「わかりました。ひづるちゃんもう一度良く見せてくれる？」

「ええ」

この二人は一体何をしようというのか・・・不審げなスタッフ達

「じゃあ、いくわよ。『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』・・・
変身！・・・天聖ルナ！」

と両手で持つ独鈷を胸の前で構えて言うとあきあの身体が1mほど
浮かび上がる。

「おお〜」

という声でテレビスタッフが立ち上がった。

こんなのを特撮でと考えていたのが目の前で日野あきあが実際にや

っているのだ。

「本物だあ」

と感動するスタッフ・・・身を乗り出して見つめている。

あきあの身体から着ている服が離れて、

細い布に変わりあきあの裸体の周りを回っている。

そしてその布が光沢のピンクに変わり、あきあの身体に張り付きだすと

あきあの身体が変化していくのだ。体が縮まり顔も髪も変わっていく。

そして・・・

「天聖ルナ！」

といって両手をあげ上で交差させると胸の位置にそのまま下ろし両手をクロスさせたまま

「参上！」

という。独鈷が破魔の短剣に変わっている。

「凄い！本物だわ」

と共演するアイドル、岩佐メグが目を輝かして立っていた。

あきあに嫉妬していたが、あきあのケタ違いの能力と才能を自分と比較しようとした愚かさにはもう笑い出したくなる。

今では誰にも負けないあきあファン・・・いや『あきあフリーク』だ。

テレビ局の上層部も立ち上がって口をあめぐりあけている。

平気なのは小野監督と飛龍高志と映画関係者。

そして勿論、早瀬の女達だ。ひづる等は喜び手を叩いて飛び回っている。

ルーク監督も通訳の女性も固まったままだ。

景山も言葉にならない。身体が震えているのだ。

その景山の肩に『ポン』と手を置いたのは小野監督。

「どうだ、景山」

「情けないですよ、小野さん。大の男がこんなに震えている」

「わし達も最初はそうだったよ。でも段々と慣れていった。」

いや、あきあに慣らされていったと言うほうがいい。

みたまえ、映画関係者は平然としている。あのドラマでの東都テレビのスタッフにしてもそうだ」

「でもこんなのテレビ局の大勢のスタッフには伝えられませんか」

「そうだよ。ブンヤさんにもあきあ番の記者がいるがテレビ局のスタッフも同じことだよ。」

東都の大川社長はあきあの番組にはあきあ番として慣れたスタッフしか使わない。

この局でも同じことをして欲しいねえ」

という小野監督に乾社長が

「大川君の言っていることがようやく判ったよ。」

日野あきあの力を表に出してはいけないということが」

「そうです。あきあくんの術のことは丸秘なんです。」

だから我々は直接、術とわずに『例の』と言う言葉を使い、

あきあくんが術を使う場合は現場を結界でおおって誰も近づけなくしていました。

「結界？」

「はい、あきあくん。一度この部屋を結界で覆ってくれないか。」

そのこのドアをあけたままでね」

「判りました。……北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の

白虎、これ四神相応の陣なり」

といって地を手で突くと空間がゆれる。

「誰かそこを出て行って見たまえ」

というスタッフの一人が開いていたドアから出ようとするとはね返え返されたのだ。

そこを通りかかった局員が部屋を覗くが首を捻って歩き去る。

「じゃあ、あきあくん」

といわれて結界をとく。

さっそくあのスタッフが出口から出て何も無い。

するとさっきの局員が戻ってきた。

「あれえ、この部屋誰もいなかったのに」

という。

「小野監督！わかった。我々もそれに準じることにする。

景山くん！スタッフは固定だ。ここにいるスタッフともう少し必要なら

都合をつける。この局であきあくんを使う時は全てこのスタッフを使うんだ。

共演者だがなるべくゲストは使わない。この中のもので順番にドラマを作っていけばいい。

彼女がいる限り全て本物なのだからな」

「はい」

「景山、ゲストがいるなら映画で共演した俳優を使うといいよ。

かれらなら喜んで、いや仕事をキャンセルしてもゲストにくるから・・・なあ飛龍くん」

「やだなあ、監督。それって本当、胸に突き刺さる痛い言葉ですよ」

「ふふふ・・・あきあくんと現場を離れるのはいやだっ

入っていた仕事を全てキャンセルしたのは誰だっけなあ」

「仕方ないじゃないですか、あきあくと現場にいるともうわくわ

くドキドキですからね。

他の仕事だなんて……だから、マネージャーに調べさせてあきあくと同じ番組に……」

「やっぱり」

というまゆみ社長。

「ねえ、小野さん。この最初となる特別番組のメガホンをとってくれませんか？」

「わしが？」

「ええ、小野さんなら慣れているでしょ。私はサブに回りますから。いいですね。社長！」

「おお、そうしていただければ」という乾社長。

「わかった。では最初の1本だけな。ところでルーク、君はどうする。」

仕事でアメリカに帰るんじゃないのか」

「おう、そんな仕事くそくらえだ。わしも仲間に入れてくれ」

「凄い！凄い！世界で名だたる監督が……」

それにしてもこの二人の有名監督を夢中にさせるこの少女、その能力は言葉に言い尽くせない。

「じゃあ、ルークは現場の指揮をしてくれ。」

『ステーション』に乗ってな。まゆみ社長。瑞穂くんを又かしてくれるね」

「いいですわ、ねえ瑞穂」

頷く瑞穂。

「ステーションって？」

「ああ、カメラマンが乗り込む機械だよ。宙を飛んだり異空間に入

つたり、

自由自在ですよ。あのドラマでも使っていました。

あきあくんしか動かせないけれどね」

「ステーション？そんなものがあつたんですか？」

「ああ、みんなあきあくんが発明したものだから。カメラマンは1
2人。」

景山、人選を頼む」

「景山さん、元に戻っていいですか？」

「ああ」

と言う声で

「『前!』」

という言葉であつという間に元の姿に戻つたあきあ。

スタッフや共演者から盛り上がるこの番組、いったいどうなるのか。

「すみません！あきあさん。さっきの変身シーンを収録してもいい
ですか？」

「ええ！」

と言う返事に

「しめた!・・・部長、今開いているスタジオは？」

「Bだ・・・だが、他の奴等にわからんようにな」

「じゃあ、準備をしますから・・・おい！行こう」

とスタッフが5人飛び出して行く。

スタッフから出てくるこの熱気に脚本家の谷は

「よし、何パターンか撮ってくれ。岩佐メグくん、君はあきあくん
の変身を知るたった一人の親だ。」

その君の前で初めて変身するシーン・・・そして、他の女子生徒達
も目の前で変身されるが

後で記憶を消されるシーンもだよ。薫さん、ひづるくん君達も一緒にね」

急にドラマ制作に拍車がかかってしまう。

スタッフ達がみんなが集まって相談しているのを見て、いったいどうなるのか、

自分だけほっとかれたような心境になる司ゆりあ。

そんなゆりあの肩にまゆみ社長が手を置き

「ゆりあさん、あなた今無職だと言ってたわね」

「はい」

「あなたの特技は？」

「いえ・・・ただ、商社に勤めていましたからパソコンと英語、フランス語、中国語を少し・・・」

「凄いいじゃない。・・・私、こういうものだけどあなた、うちこない？」

名刺を渡してこういうのだ。

「えっ？早乙女薫事務所・・・の社長さんなのですか・・・」
目を輝かすゆりあ。・・・でも

「私のようなものでも・・・」

「何、言ってるの。しつかりしなさい」

と背中を『バン』と叩かれる。

「実をいうとね、人手が足りなくて困ってるの。

あのあきあが次々と発明してくれるから、もう四苦八苦よ。

ねえ、あきあ・・・さっきの装置のこと何も聞いてないわよ」
共演者に囲まれていたあきあは

「まだ、誰にも言っていないわよ。まゆみ社長」

「じゃあ、専務にも？」

頷くあきあにしかたがないなあというようにため息をつく。

「あんだ、あの発明がどんな凄い事かわかってるの？」

「凄い事？・・・だってパツと浮かんだだけだから」

「あゝあ、これだから・・・そのモバイルを見つめている乾社長に聞いてみなさい。」

自分がどんな発明をしたのか。ねえ日和子叔母様」

「そうですね、そんな装置がモバイルについているのだったら、注文する数量がもっと増えるわよ」

「その通りだ。今NASAの義弟に電話したら、もう一度来日するといっている。」

自分の目で確かめて3000台の注文を10000台以上に変更するかもしれないといっていたよ」

「ほらね、あの子の発明にはもう右往左往なの。手伝ってくれる？」

「私でよかつたら・・・」

「よし、決定！・・・瑞穂ちゃん、こつちへ来て瑞穂を紹介すると」

「今日からしばらく彼女についてほしいわ」
「はい」

モバイルは社長の手で分析するように技術部長となにやら相談した上、

役員を集めて何事か話し込んでいるのだ。事件のことは京の調査待ちとなっている。

「あきあくん、この装置について聞かせてくれないか」

「えっ？・・・はい」

と社長達役員の中にまねかれる。

そんな様子を見つめている共演者達。
なんだかわくわくしているのだ。

「ねえ、飛龍さん。映画の現場でもこんな状態だったんですか？」

「ああそうだよ。あきあの演技は天才早乙女薫が公言しているぐら
いの天才なんだけど、

あきあのあの不思議な術は現場を凄い状態にしてしまうんだ。

京都ではいろんな事件があつてね。それを手伝うのが又楽しいんだ。

事件屋・・・そう、僕らは彼女のことをそう呼んでいたんだよ。

今日も事件屋の本領発揮だねえ、さっそく大忙しだ。

この現場、もつといるんなことがあるよ。今から楽しみだねえ」
と笑っている。

「あきあ、どうしたの？」

携帯を手にとっているあきあにまゆみ社長が聞く。

「ええ、乾社長がうちの専務を呼んでくれって」

「あ、・・・静香専務ですか、私・・・沙希です。・・・ええ、ご
めん。又やつちゃった・・・」

とペロつと舌を出す。みんなそんなあきあを見つめている。

「うん、それでね。Vテレビの乾社長が至急来てほしいって。

・・・あつ・・・ごめん。・・・モバイルに新しい機能をつけ
ちゃったから。

えっ、そんなあ。お願いちょっと来て・・・城田さんも連れて。

・・・ええ、ごめんなさい。ええ・・・じゃあ、式を飛ばすか
ら・・・」

といって携帯を切る。

「新しい機能のこと黙ってたの、怒られちゃった」

といって両手のひらを胸の前に差し出して

「我式神、玉藻、葛葉、紅葉、出だよ」

というときあきあの身体から光る珠が3つつ飛び出してきて着物姿の女性が3人あきあの前に出現した。

「あるじ殿、まかり出ました」

「玉藻、葛葉、紅葉いそいで我姉静香、そして城田老を連れてきてほしい」

「はっ」

というとき再び光る珠になって窓を通り抜けて消えた。

「何？・・・なんなのあれ・・・」

「ああ、あれはあきあの式神さ」

「式神？」

「ああ、なんでもあきあの師である安倍晴明に譲られたそうだよ」

「ふ〜、何か頭の中が変！」

「そうだろうな、俺はもう慣れてるけど。今日1日で君達はいろんな体験をしたものな」

という飛龍高志の言葉に弱々しく頷く共演者達。

これからどうなっていくのやら・・・風雲急を告げる！

第二部 第二話

「きゃあ」

「うわあ」

そういう声と共にいきなり何も無い空間から女性と年配の男性が転がり落ちてきた。

女性はお尻を、男性は腰をさすりながら立ち上がる。

「あゝあ、恐かった。でも貴重な体験だったわ」

「わしはもうこれっきりにしてもらいたいね。早瀬くん」

とあきあに向かって言う。

「おゝう、城田！」

と小野監督が声をかけると、

「よお！」

と返事をする城田部長。

「静香専務！城田部長！ごめんなさい。・・・乾社長が大至急とおっしゃるので」

とあきあがあやまる。そして、乾社長や上層部のグループのところに連れて行き、

「私の本名の早瀬沙希として勤める株式会社オクトの専務です。

そしてこちらが早乙女薫事務所のメディア部門の城田部長です」

静香と城田は乾社長達と名刺交換をしてから沙希をみる。

「さあ、説明してちょうだい、早瀬部長。モバイルにどんな新機能をつけたのか」

「ごめんなさい。こんなに反響があるなんて思わなかったから・・・

少し思いついたのでこんな機能があってもいいかなって・・・」

「思いつきで改造を？・・・じゃあ、原理は？」

と矢継ぎばやの質問をする静香専務、何かドラマをみているようで他のスタッフや共演者達はただわくわくしながら見つめている。

「これは、ニュートリノを使つての通信機です。

宇宙からの恵としてこの地球に降り注ぐニュートリノ。

ニュートリノは何の障害も関係なく通りぬける性質をもっています。

地球という壁さえも・・・

だから、ニュートリノを使えば、10m先でも地球の裏でも全て同じように通信ができます」

「あっ！」

という静香の声、

「そうです。このモバイルに付いている受信送信機能もこのニュートリノを

使っています」

「じゃあ、NASAの人は？」

「ええ、ご存知です。だからこの装置に興味をもたれたのでしょ

う。静香専務。ルーク監督によってNASAがこの新しい通信機能のことを知って

もう一度緊急に来日するそうよ。良かったら発注数も大幅に増えるんですって」

とまゆみ社長が言う。

「増えるってどのくらい？」

「10000台以上」

「ああ〜、早瀬部長ったら、今まで以上に私達を忙しくするわけね」

「静香専務！」

「何でしょうか、飛鳥警視正」

「その新機能を知った以上、私達警察も発注数は大幅に増えるでしょうね。ただ・・・」

「ただ？」

「一般の人がこれを手にしたら悪い事をする人が必ず出てきます。だから一般には販売しないでもらいたいわ」

「わかりました。早瀬部長、この機械の海賊版がでるようなことは？」

「それは大丈夫です。この新機能をつける時1台1台に違う数字を書き込んだ

チップを埋め込んでいます。だからこのチップがなければ機能は働きません。

製作する数量と同じ数のチップ・・・つまりモバイルの各々の番号となります。

最初からこのチップの番号を控えておけば管理ができます。

それにチップはコピーできなくしてあります。もしコピーしようとするば・・・

いえこのモバイルから一瞬でもはずせば自壊するようプログラミングしてあります」

「凄い！・・・何を言っているのか全然理解できないけれど

日野あきあつてという人の頭脳は女優と同じ位・・・いえそれ以上に超天才なのね」

という声が若い女優陣から聞こえる。

「おい、お前はコンピューターの天才っていつていたよなあ。

俺、あきあのいつていること全然頭に入ってこないんだけど、お前判るか」

「ははは・・・馬鹿だなあ。俺は天才だよ。超天才の事が判るわけないじゃないか。」

俺が判るのはあの子の頭がインシュタイン以上ってことさ」

「すまん、あきあくん」

「あのう、乾社長。この子は女優以外るときはわが社の開発部長早瀬沙希なのです。」

何しているの！・・・部長！早く名刺を渡して」

と言われ慌てて瑞穂から名刺入れを受け取ると

「申し訳ありません。まだ慣れないもので」

と名刺交換をしていく。

「早瀬部長・・・か、いやあ、たいしたものだと感心される乾社長。」

「あのう、乾社長。先ほど言われかけたのは？」

「おう、そうだった。このモバイルの新機能に付随して画像も送れないかと思っただね」

「出来ます。でもこれにはまだカメラの機能ははいつていませんが・・・」

「いやあ、・・・あつ、君」

と部下になにやら受け取って、

「これ、CCDカメラなんだが」

と渡された沙希。少しいろいろ触っていた沙希。

顔をあげた視線はスタッフに向けられた。

「どなたか精密ドライバーとニツパ、

それとハンダとハンダゴテを持っていませんか？」

二人のスタッフが飛び出して行く。

「瑞穂さんノートとケーブルを」

沙希が揃えられた工具類でモバイルにCCDカメラをつけていく作業は

まるで手品をみているようだった。

あきあのすることはどんなことでもつい目が釘付けになってしまう。

「これでよし」

とモバイルの最後のネジを締め付けたときはわずか10分もかかっていなかった。

それからモバイルとノートパソコンをつないでノートパソコンを起動させた。

乾社長も言った先からあれよあれよと沙希がモバイルを改造をしていくのを

目を白黒しながら見守っている。

「……まさかここでそんなに……手早く改造するなんて！」

そして、例によってパソコンのキーボードを叩くスピードったら……

「ねえ、見て見て！……彼女目を閉じてキーをたたいているわ」
ざわめきが広がっている。

最後のEnterを押してからノートのスイッチを切った沙希……
乾社長にニツコリ笑う。

「え、……も、もう……出来たのか？……」
と呆然とする乾社長。

沙希はモバイルを立ち上げて黒いアンテナを立てた。

作業を見ていた全員が注視する中、

「飛鳥京警部！応答してください」
しばらくして

「なに？沙希。こちらの調査はもうすぐ終わるけど。
終わったらすぐにそちらに向かうわ」

「了解です。すみませんが一つだけ、やってほしいことがあります。

F3を押しながらA、T、Mとキーを押してくれませんか？」

「F3を押しながらね。わかった・・・Aと・・・Tと・・・M・・・」

「？？ええ〜何よ〜・・・いきなり沙希の顔が液晶に写っているわ。」

これってテレビ電話になるの？」

「ええ、今改造しただけだからこちらの画像しか送れないけれど。

どう？画像の動きは」

「びっくりよ。今のテレビ電話はコマ送りみたいな画像というのは知っているけど、

これって普通のテレビを見ているみたいにスムーズよ。画像も鮮明だし・・・」

「京！」

「あつ、お母さん・・・いえ、飛鳥警視正」

「資料とともにそのモバイルを早く持ってきてね」

「はい、わかりました」

といって通信を切る。

「早瀬部長、新機能をつけたのは1台だけなの？」

「いえ、泉警部のものとで2台ですわ」

「じゃあ、泉警部にも連絡して捜査がどこまで進んでいるか聞いてくださる？」

「ええ・・・」

言って再びモバイルの通信プログラムを起動させる。

乾社長と上層部の役職者達はあきあの行動をまるで夢をみているように思えて呆然としている。

「凄い！」

世紀の大発明に立ち会っているのだ。

先ほどからずっとカメラは回っている。別に放送するから撮影しているのではない。

・・・いや、放送するなんてもっての外だ。これは放送局の宝として保管しておく。

「何か俺、夢をみているようだ。凄いものを目の前でみているのだろっ？」

「そうだ！こんなこと滅多に・・・いや、死ぬまで見られることじゃないよ」

というスタッフに対して

「馬鹿だなあ」

と飛龍高志が笑う。

「あきあがいる限り、こんなこと当たり前なんだよ。」

もしOKが出るならば四六時中あきあに向かってカメラを回しておくんだね。

まあ、放送は出来ないけれど」

「えっ？泉警部、もう一度言ってください」

「だから、夜中にフラフラと首塚に入っていく女性をみかけたというのよ。」

しかも、首塚に足を入れたとたん黒い煙のようなものがその女性を

つつんで

消えてしまったというの。酔っ払いのいうことだからと信用して
なかったけれど

次の日の新聞を見て、確かにこの女性だったと証言したのよ。

酔っではいても見間違えるわけがない。と断言しているらしいわ

「それはいつのこと？」

「1週間前よ」

「えっ？」

「驚くでしょう。遺体から、やはり心臓が抜かれていたそうよ」

捜査は行き詰まっているわ。

こんな異常犯罪って今まで見たこともないでしょうから」

「泉警部。それで写真は？」

「ええ、害者の写真は全て手に入れたわ」

「それでは、急いでこちらに帰ってきてください」

と話を終えた。

少し考え込んでいたあきあ、フと顔をおこすと

「瑞穂さん、半紙を・・・」

と渡された半紙を『ひとかた』に切り、呪文をかけると現れる安倍

晴明の式、

そして魂を吹き込むのは先ほどと同じだ。

晴明は座るとひづるを呼び、組んだ足に座らせると頭をなでる。

ひづるが物怖じしなく晴明になつき、可愛がられているのが良くわ

かるがなぜだか不思議な光景だ。

「晴明様、聞かれていた通り、将門の怨霊はかなり力を取り戻した
ものと思われませう」

「ふむ、怨霊め・・・しかし、今なら将門といえどもあきあには
かなうまい」

「でも、何故今になって蘇ったのでしょうか」

「わからぬ、じゃが奴は生前、理想の武者だけの世界を作ろうとしていたのじゃ」

「じゃあ理想郷をつくる為に？」

とその時

「すいませくん、あきあさん！準備ができました」

とスタッフが呼びにきた。

あっ、そうだったと思いだしたあきあは飛鳥警視正や松島奈緒警視の顔をみる。

「あきあさん、行つてらっしゃい。警部達がここに戻るにはまだ時間があるわよ」

「あきあよ、式達を飛ばして首塚を見張るのじゃ。これ以上将門の力をつけさせてはならぬ」

「はい、我式神玉藻、葛葉、紅葉よ、聞いていた通りじゃ」
「はっ」

と姿をあらわした3人

「さっそく首塚で将門めを見張っております」
と消えた。

「ハ工次郎」

「へえ、姉御。判っておりやす。全部まで言われずとも・・・
さっそく、あの3人の姉あねさんの後を追っていきやす」
と消えた。

そして、もう一人

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン。

オン・ソンバ・ニソンバ・ウン・バザラ・ウン・パッタ。

オン・シュチリ・キャラロハ・ウンケン・ソワカ」

と真言を唱えるときあきの身体から赤く光る手の平大の鱗が現れ

それに重なって女性が現われた。

「どうしたのです、あきあさん」

「はい、平安の御世に怨霊となった平将門が蘇りました。

今、私の式神とあの八工次郎を首塚に遣わしましたが、式神とはいえ私の大事な友です。

緋龍様、お手をわずらわしますが、わが友人を見守ってください。お願いします」

「我が子、紅龍に対する恩はこんなものでは返せるとは思っておりませぬ・・・承知しました」といって消える。

「あきあよ、やはりお前には不動明王と菩薩様が宿っておるのう」

「いやですわ、いつもそのようにご冗談を」とあきあは否定するが

「やはり」

と納得するのは早瀬の女達だった。

それに今、アイドル岩佐メグや女優達にもあきあの姿に重なって不動明王と

菩薩の御姿が見えたのは目の錯覚なのか？

驚いて顔を見合わせた女優達。

「あなたも見えた？」

「じゃあ、あなたも？」

スタッフ達は八工次郎と緋龍、紅龍と言う名に衝撃を受けていた。

あきあを見ると全てが本物だと信じる事ができたのだが

ライバル局でのあの凄いテレビドラマでの名前が目の前でよばれたのは

判っていてもやはりショックがある。あの素晴らしい画像とカメラワーク、プロとしてメラメラとライバル心が湧きあがるのだ。

「さあ、みんな行きましょうか」

清明が帰ったあと女優達に声をかけるあきあ。

「薫さん、ひづるちゃん！」

あきあが撮影に出たあとは社長や上層部の役員は静香専務と城田部長とまゆみ社長は

別の会議室に移っていった。

早乙女事務所のマネージャー達はついていった瑞穂とゆりあを除いて

会議室の一角で明日、予想されるスケジュールを検討している。

大空庄絵がオプザーバーとして控えている。

そして飛鳥警視正と松島警視は、警視庁や警察庁に対して首塚周辺の警備の強化を

促している。

そして小野監督とジョージ・ルーク監督は景山三郎と山川プロデューサー、

脚本家の谷と特別番組の打ち合わせをしている。

そして小野監督はあの『ステーション』の説明もルーク監督にしているのだ。

Bスタジオに入ったあきあ達、首塚のことも気にかかるが今は待ちの状態だと辛抱をして気持ちを切り替えた。

女優陣は天聖ルナの衣装をすでに着ている天城ひづる以外は女子高生役と先生役なので衣装もすぐに揃えられた。

台本をもらっていないので、どんな性格の生徒なのかまだわからないが

名前はすでに決まっているのだ。

あきあは杏奈に手伝ってもらってセーラー服に着替えると、メイクも簡単に星聖奈という女子高生の役になりきっていた。

岩佐メグ・・・井上沙月に声をかける。

「ねえ、サツキー。早く食堂へいかないと昼弁食べそこねるわよ。早くつたらア」

というあきあ・・・いや聖奈にいわれ、とまどっていた岩佐メグもさすがは才能あるアイドルだ。

すぐに

「待つてよ、聖奈。そんなに早く行かなくてもメシはなくならないうつて」

「あゝあ。サツキーつたら、スカーフ曲がつてるよ」

といつて赤いスカーフをなおしてやる。

すると聖奈から香るラベンダー・・・何故かポツと頬を染める沙月。

すると沙月の頬を『キユ』とひねる聖奈。

「はい、サツキーのおたふく顔・・・キャハハハ」

といつて飛び下がって走り出て行く。

「こらあ、聖奈！・・・てめえ」

と後を追いかける沙月。

あつけにとられていた他の女優陣。今出て行ったのはあきあではなくて

星聖奈と岩佐メグではなく井上沙月なのだ。

凄い！と思ってしまうが、何故か楽しくなる。芝居とはとても思えない。

何かあの雰囲気の中に入っていきやすい。

「ああくん、待ってよ。聖奈！沙月！」

と一人が言つと皆が我先にと飛び出して行く。

あとに残った女性スタッフ達も、見慣れているはずの杏奈にしてもメイクの途中でその役柄が変わっていくのを見たのは初めてである。

呆然と見送っていたが、慌ててメイク道具を持ってスタジオに走っていく。

「これは・・・」

「このドラマって、きっと成功するわ」

あきあのあの自然に芝居に・・・いや、あれって芝居ではなかった。

あれは星聖奈そのものだ。スタッフ達、この先が楽しみになってきた。

何も無いスタジオの中、少し我に振り返りかけた女子高生達。

あきあが九字を切つて呪文を唱える。

すると何もないBスタジオの中に美味しい匂いと共に食堂があらわれた。

「ねえ、サツキ、席を取つといて！」

「といて食堂の叔母さん・・・ん？叔母さん？・・・のところに行って」

「ねえ、叔母ちゃん。いつものやつ、うん、2つね」

四角いお盆にのせて2人分の小さな皿のカレーとサラダを運んでくる。

「あつ、サツキー！お水を忘れてる」

「ごめん！今とって来るから」

と立ち上がって水を取りに行く。

「あれ？みんなどうしたの？早く食べないと午後の授業に遅れるよ」

「だって」

と周りで見ているクラスメイトに

「ああ、そうね。まゆみはうどんだったものね。」

今見てたら、うどん美味しそうだったよ。早く行って注文しちゃうなさいよ

「うん」

と行って

「おばちゃん、きつねうどんをちょうだい」と注文すると

「はいよ、熱いうちにお食べ」

と叔母さんがうどんを渡してくれる。

お盆に乗せて聖奈達の座る長いテーブルに自分も腰掛けると
まずは出汁を呑んでみる

「うわあ、本物だア・・・おいしい」

まゆみの言葉にクラスメイト達はとんで行く。

ドラマのスタッフ達はもう見つめるだけだ。とても芝居とは思えない。
い。

「どうしたの？」

「ええ、これどうなっているんでしょう」

薫に聞かれて言ったスタッフの言葉だ。

「あの子は天才なの」

「だって天才つていえば」

「うん、あの子こそ本当の天才よ。」

あの子が演じるとすべてが本物になるの。

もう少し見ていて御覧なさい。あの子の星聖奈という少女のくせが出てくるから。……

さあ、私も若い人には負けられないように行ってくるね」

と食堂に向かって歩き出した。

あきあが演技の天才ならこの早乙女薫も又天才なのだ。

「さあ、あんた達！もうすぐ午後の授業が始まるわよ」

「はい」

という元気な生徒達の声。

「うん、うん」

と頷いてから

「叔母ちゃん！私に美味しい紅茶を……ケーキもつけてね」

「はい」

という食堂のおばさんの声。

「あつ！先生ズルイ」

と聖奈が声をかける。

そうよそうよと生徒達のブーイング。

「だって、今からは大人の時間よ。」

あつ叔母さん！紅茶にたつぷりとブランデーを入れてね」

「ああ、いけないんだ。先生が授業の時間中にお酒を飲むなんて！」

という沙月。

「ふふふ、お子様はお黙んなさい。これが至福のひとつときなの。さあ、お子様はもう授業よ」

「あら、先生は？」

「私？・・・私は午後一の授業はなし」

「あっ、さては自習にしたなあ。この不良教師」

「こちら！」

と喋ってかき回していたスプーンを投げる真似をしたら

「きゃあ」

と喋って逃げ出した。

そしてクラスメイト達、立ち止まり振向いて

「やくい、不良教師！」

と喋って本校舎に駆け出していく。

今度は何も無かったBスタジオに校舎が現れた。

そこにかけてこむ女子生徒達。

「どうした！」

まるで夢を見ているようなスタッフ達に声をかけたのは小野監督達、様子を見にきたのだ。

「いえ、なにか夢を見ているようで・・・いえお芝居としてではないんですが」

「撮影は？」

「ええ、していると思います」

「小野監督！」

「ああ、薫くん」

「あきあったら、又やっていますわ」

「とうとう？」

「はい、星聖奈という高校生になってしまっています。

これ、リハーサルではありませんわ。もうりっぱな本番です。

他の子も聖奈という少女にひっぱられています」

「君！カメラは！・・・全てのカメラを動員しても今のあの子ども達をとっておきたまえ」

「はい」

スタッフは他のカメラマンを呼びに行った。

教室に一番最後に入ろうとした聖奈。

「あつ」

と言って足をとめる。

「どうしたの？聖奈」

「ううん、何でもないけど・・・ちよつと行ってくる」

と引き返していく。その不審な行動に後をつける沙月。

屋上に出た聖奈、祖父の遺言で肌身離さず持っていた独鈷、

スカートの中から取り出し、

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』・・・変身！・・・天聖ルナ！」

と両手で持つ独鈷を胸の前で構えて言うときあきあの身体が1mほど浮かび上がる。

あきあの身体から着ている服が離れて、

細い布に変わりあきあの裸体の周りを回っている。

そしてその布が光沢のピンクに変わり、あきあの身体に張り付きだすと

あきあの身体が変化していくのだ。体が縮まり顔も髪も変わっていく。

そして・・・

「天聖ルナ！」

といって両手をあげ上で交差させると胸の位置にそのまま下ろし両手をクロスさせたまま

「参上！」

と変身が終わったとき

「あっ」
という声で振向いた。

そこには呆然と立つ沙月の姿が。
慌てて屋上から飛ぼうとしたルナに

「待って！聖奈！」
足が動かなくなるルナ。

「聖奈！その姿は一体……」
「サツキ、こんなこと何れは判ってしまっと思ってたの。
でも悪霊退治をする最初の日になるなんてね」

「悪霊退治？」
「うん、家に流れる血のせいなんだって。でもこんな変身は私が初めてなんだ。」

母も祖母も巫女として悪霊を退治していたんだけど私だけそんな能力はなかった。
でも、幼い時祖父に渡された独鈷で変身ごっこで遊んでいた時、本当に変身してしまったの。
そしたら、凄い能力が出てしまって……コントロールができなくなったの。

それ以来、変身はしなかったけれど、祖母に育てられながら厳しい修行をさせられて
ようやく昨日に変身する許可をもらったのよ」

「でもその姿は？」
「ええ、これは力をコントロール出来るようになった結果なんだって」

「では、今は？」
「うん、悪霊の波動を感じたから。普段の私、力はないんだけど感じることだけできるんだよ」

とってから

「沙月、私あなたの記憶を消すわ」

「まさか・・・嫌よ！」

「嫌？」

「そうよ、記憶を消されるなんて絶対嫌！」

聖奈！もし記憶を消そうとしたら私、そこから飛び降りて死んじやうから。

私、そんな能力ないけど、聖奈の役にたちたい、私はあなたが好き！・・・だから・・・」

「わかった。じゃあ、これを渡しておくから」

と渡されたもの。

「あつ、これコンパクトじゃない」

「ええ、これはあなたとの通信機器よ、もっと他にも使い道はあるけどまた今度ね」

「わかったわ」

「じゃあ、行ってくる」

と行って走ると屋上のフェンスを飛び越えた。

慌ててフェンスから覗きこむと聖奈は地上ですくッと立ち、食堂の方向に走りだした。

沙月は屋上から飛ぶように階段を駆け下りていく・・・後を追いかけるつもりだ。

演出家も監督もましてや台本もないドラマが・・・いやこれがドラマといえるのか

女優達だけで芝居が進んでいく。

カメラマンが呼び集められ、いろんな角度から撮影をしている。

ルーク監督はこんな現場にたちあつたことはなかった。無論、小野監督も演出家景山三郎もだ。

「小野監督！景山さん！どうでした？」

と後ろから声をかけたのは天聖ルナのひづるだった。

「ひづるちゃん、どうでしたって？」

「いやだわ」

といつて

「『前！』」

というときなりあきあの姿に変わったのだ。

セーラー服姿のあきあがここにいる・・・ということは

「あの天聖ルナはひづるかい？」

「ええ」

「いつ変わったんだい？」

「屋上から飛び降りたときですよ」

「全然わからなかったよ」

「わかつたら大変だわ・・・うふふふ」

「あきあさん、はい」

と椅子を持ってきたのは司ゆりあ、マネージャー補助の最初の仕事だった。

「あきあ、この先はどうなるんだい？」

「薫さんの江口京香先生を悪霊が襲うの」

「あっ、皆！ごくらうさん」

「とっても面白かったわ」

「本当に学校に行ってたみたい」

これはほんとうの女子高生の女優だ。

でもまだ、マネージャーがつくほどの女優ではないので雑用も自分でしなくてはならない。

だから皆、自分でパイプ椅子を持ってきているのだ。

あきあが呪文を唱えると、目の前の角度が変わり本校舎を背後にして沙月が天聖ルナを追って行く。

「きゃあ」

という叫び声。

そこは体育館裏、その路地に聖奈の担任京香が黒い化猫に追い詰められていた。

体育館裏の備品倉庫で少し昼寝でもと思って扉を開けたとたんに妙なうなり声。

慌てて扉を閉めた京香だったが物凄い力で扉ごと吹き飛ばされてしまった。

「痛い！」

立ち上がるうとした京香だが、どうやら足をくじいているらしい。フと見ると破られた扉から黒い四脚の動物がのそりと現れた。

京香は叫び声を上げようとしたが、声にならない。

「ひ〜」

という呼吸音がするだけだ。

この動物、普通ではない。黒い猫みただけど、

その体格はライオンか虎のように大きい。真っ白な牙をみせる大きな口からは

唾液がしたりおち、そして、その目・・・緑色に光るその目・・・額にも金色の目が光っている。

その額の目を見てしまった京香、急に手足の自由が奪われてしまった。

化け猫が近づいてくるが身動きも叫びも出来ない。

化け猫の異様な臭気が鼻についた時、ようやくその恐怖から

「きゃあー！」

と叫び声が出たのである。

その時、

「待て！」

と凜々しくも可愛い声が聞こえてきた。
化け猫がゆっくり振り返る。

「お前は誰だ！」

というように

「ギャオウ！」

と首を振りながら叫ぶ化け猫。

「闇よりいでし悪霊よ、ここはお前達が来るところではない闇に帰れ
！」

「ギャオウ〜」

こしゃくななどでもいうように威圧する叫び声。

「ふふふ・・従わぬのなら従わせてみせよう。天聖ルナ！破邪の剣」

というと持っていた短剣を頭の上にかかげる。

そして左手の親指と人差し指の股で刀身をゆっくりとすべらせてい
く

と青白くひかる長剣と変わった。

天聖ルナと向かい合う化け猫、じりじりとタイミングをはかっている
ようだ。

が・・・次の瞬間、化け猫が天聖ルナに向かってジャンプする。

天聖ルナのジャンプも同じタイミングだった。

お互いがぶつかり合う瞬間、天聖ルナの長剣が弧を描く。

すくつと立った天聖ルナ・・だが、片足を切られながらも逃げ出した化け猫に

「逃すか！」

と持っていた長剣を化け猫めがけて投げたのである。

「ぎゃっ」

といつて化け猫から黒い霧が四散してあとには、短剣が地に突き刺さり

普通の黒猫が倒れていた。

天聖ルナは短剣を拾うとその猫に手をかける。

すると、黒猫はいきなり飛び起きて走り去った。

「よかった。生きていたのね」

と猫を気遣う京香の元には様子を見ていた沙月がかけよってきた。

「先生！大丈夫？」

と言っておこそうとしたが

「うっ」

と痛みのため腰をおとしてしまう。

そこに天聖ルナが歩みより、京香の脚に手をかざすのだ。

その手がざしが終わってから

「先生、立ってみてください」

と声をかける。

痛い足を地につけないよう庇いながら沙月の肩に手を回して立ち上がった京香。

恐る恐るだが痛みのある足を地面につけてみる。

「ん？・・・」

最初は軽く段々足を押さえつけるように最後は跳んでみた。

「痛く・・・痛くないわ・・・どうして？」

と天聖ルナの顔を覗き込む京香。

「詳しくは申せません。ただ・・・癒しの術だと思ってください」

「ふん、癒しの術ねえ・・・ところで、あんた何者？」

「私は天聖ルナ、悪霊・怨霊退治の術師です」

「悪霊・怨霊退治？」

「はい、では又」

と喋って跳び上がると体育館の屋根に着地して・・・消えた。

「先生、大丈夫ですか？」

「ええ、でも何だったのかしら。まるで夢をみていたみたい」

「おゝい、サツキー！京香先生！」

と駆けてくる聖奈。

「どうしたのよ、二人共。こんなところで」

という聖奈を横に立った沙月が聖奈の腕を『ギュッ』とひねる。

「痛い！」

「えっ？どうしたの？」

「いいえ、何でもありません」

といいながら聖奈と沙月は声無き言葉で言い合いを

(聖奈！しらばっくれてさ)

(しょうがないじゃないの)

(じゃあ、クレープ3つ！)

(うーん・・・クレープ2つでかんべんして！)

(しょうがない、じゃあ約束よ)

と二人で右手の人差し指を合わせあつて

(シャシャシャン、シャシャシャン、シャシャシャンシャ)

「ところで、あんた達どうしてこんなところにいるの？」

「えっ！」

「まさか、授業をサボったってことじゃあ・・・」

顔を見合わせてから

「キヤア〜」

と逃げ出した聖奈と沙月。

「こらあゝ、お前達！そんなことしていたら私の授業の単位をあげないわよう」

と走る二人に向かって叫んだが

「今日はありがとう、ほんとうに助かったわ」

と小さな声で二人に感謝する京香。

「うん」

と両手をおもいきり上げて背伸びしてから

「さてと、せつかくの自習時間がつぶれてしまったから

もう1時間自習にして保健室のベットで一眠りするか」

そういつて本校舎に向かう江口京香。

「OK、カット！」

小野監督の声がBスタジオに響いた。

スタッフ達の拍手が鳴りやまない。

それほど感動ものの女優達だけのドラマ。

誰の演技指導もないまま・・・二人の天才に引きずられて思わぬ力を発揮した若き女優の卵達。

皆晴れ晴れとした笑顔であきあや薫の周りに集まってくる。

「何だか、自分に感動だわ。あきあさんに乗せられたにしてもこんなこと出来るなんて」

「私、本当に沙月になりきっていた。台本もないのに・・・これが本当の演技なのね」

「あきあ姉さん、私このドラマ大好き！

あきあ姉さんと共演した映画もテレビドラマもそうだったけど今回もとっても楽しいわ」

「ひづる、私もよ。あきあと一緒だとんだか凄くしっくりして楽しい現場になるのよね」
と薫がにっこりと笑いながら言うのだ。

「あのう・・・」

と横にいた岩佐メグが口をはさんだ。

「わたし自身凄く驚いています。台本があってもこんなにスムーズな演技が出来ないのに、それがアドリブですよ。自分でも不思議なんです。次々と台詞が出てくるんです。これって、あきあさんのあの不思議な術のせいなんですか？」

「違うわよ。私こんなことで術なんか使わないわよ。

あれはあなたの実力よ。サッキー！」

「本当？ありがとう、聖奈！」

とお互いに役名を呼び合う。

「しかし、君達よくやったよ」

「ああ、おれの脚本なんていらんじゃないかい」と谷がすねる。

「特別番組のあと、少し手直ししてこれを第一話として放送してもいいな」

「ルールはどう思う？」

「台本なしでこれだけやる・・・君達日本の女優達の実力を見直したよ。」

というよりもこんな出来る女優アメリカにいるだろうか。

一度やってみたい。あきあくんをませてね」

とあきあに向かってウインクする。

その心は絶対にあきあを主演にして映画を撮ると決心をしていたのだ。

やはり、女優はスタジオがじっくりとする。

・・・というところで会議の続きはこのスタジオ内に長テーブルとパ
イプ椅子を

持ち込んでおこなう事になり、会議室にいた飛鳥警視正達も降りて
くることになった。

静香専務やまゆみ社長と城田部長が話し合っているテレビ局の上層
部との

打ち合わせはまだ続きそうなので、こちらはこちらで進めることに
した。

決めなければならぬことがたくさんあるのだ。

みんなが思い思いの席についたとき、ドアがあいて

「遅くなってすみません」

と捜査に出ていた飛鳥京と犬飼洋子、飛鳥泉と有佐ケイが戻ってき
た。

スタッフ達が用意していた椅子に腰掛けた4人に

「京！泉！あなた達の調べたことをここで報告しなさい。

・・・と、その前に二人のモバイルを沙希ちゃんに」

飛鳥警視正の言葉にスーツと立って双子の警部の元に行ったのは
マネージャー補助となった司ゆりあだ。

さすが商社で総合職についていたキャリア、その行動はスムーズだ
った。

早乙女薫事務所でNo.2といわれる順子はそんなゆりあを

（この子は使えるわ。マネージャーというより城田さんの下につけ
たほうが

いいかもしれない）と思った。

「すみません。CCDカメラを2台と先ほどの工具類を・・・」
というあきあの声にスタッフが2人立ち上がって部屋を出ていく。

「じゃあ、私から報告します」

と言ってバツクの中から警察手帳を出す飛鳥京警部。

「えーと、この3ヶ月の間に最初の被害者、・・・えーと、司祥子・
・さん・・・

のあと間隔をあけて同じ犯人と思われる犯行が4件、
合計5人の女性が犠牲となっています。

被害にあつた女性は16歳の高校生から26歳の女性まで、
いずれの女性も心臓をとられ、血も抜き取られていました」
言葉を引き継いで飛鳥京警部が

「私は所轄と新聞社に行つて事件の資料を揃えてきました。
写真はここでは見せられないものももつてきませんでした
被害者の顔写真だけをもつてきました」
とファイルをテーブルの上に乗せる。

「泉警部！その写真を見せてください」

というあきあに、泉の横に座っていた犬飼洋子がテーブルの上にあ
つた写真を

テーブルの向かい側に座るあきあに持つていく。

写真を渡されたあきあは

「洋子さん、そこで少し待っててね」

といつて写真を1枚1枚見ながらテーブルの上に置いていく。

そして、全て置き終わったとき、ススッと写真を並べ変えて

「この順番にこの人達は殺されたのですね」
といつ。

何をするのか？・・・とあきあのすることを見ていた洋子が目を真
ん丸くして

「どうして？・・・どうしてわかるの？」

と驚いていたのを見て京と泉が慌てて立ち上がって走り寄ってきた。

並べられた写真をみて洋子と同じ反応を見せる双子の警部達。

そんな様子を見て飛鳥警視正はさすがに落ち着いた態度で

「どうしてそんなことが判るのか教えてくださいね」

「最初の犠牲となったゆりあさんのお姉さん、祥子さんは能力者ではありませんでした。

でも偶然、・・・いえ、運が悪く怨霊の餌食となつてしまった結果、復活したばかりの怨霊に少しだけ力が復活しました。

でも能力者でない女性をいくら餌食にしてもこれ以上の力をつけることが

できません。だから、祥子さんより能力者のこの人が第二の犠牲者になつたのです。

こうして怨霊は次々と犠牲者の能力を超える能力者を獲物として選んだのです。

でも今の状態ではこの結界からは出る事ができません。

でも、結界内から獲物の女性を引き寄せるだけの力をつけてきたようです」

「あつそうか、では、あの目撃者の言葉は・・・」

「はい、真実です。結界内に引き入れた女性をおのれの欲望のために犠牲にした瞬間だとおもいます」

「沙希！そんな恐ろしい奴と戦おうというの？」

「ええ、だってあの怨霊と戦えるのは今の日本で、私だけですから」

「沙希ちゃん！こうなつたら公私の私として聞かぬ。私達が手伝えることがないの？」

「日和子叔母様、明日の夜深夜0時に決行しますから
できれば周囲10キロに住む住民は避難させてほしいのです」

「周囲10キロ?・・・そんなに?・・・」

「ええ、あの結界はすでに綻びだらけです。将門の怨霊の他の小さな雑鬼は

その綻びから出て既に悪いことをしていたはずですよ」

「そういえば」

と泉がいう。

「あの付近では軽犯罪が多発しているんです。

犯人を捕まえてみればなぜこんな人がというのが大部分だったし、
犯人も自分がしたことを憶えていないらしいんですよ」

「雑鬼は人の心に入り込み、人としての良心を眠らせてしまいます。

怨霊との戦いであの結界はすぐに消滅するに違いありません。

そうなれば雑鬼より恐ろしい悪霊達が住民達に被害を及ぼすに違い
ありません」

「だったら、沙希ちゃんがああ結界を修復するか張りなおすことは
?」

「いいえ、あの結界を張った呪文はわかりません。だから張りなお
せません。

結界を張りなおすということは今の結界を消滅してからでないとい
きませんし、そうなる?・・・」

「そうなの、消滅した瞬間に怨霊・悪霊が飛び出してしまい

沙希ちゃん1人では手のほどしようがない・・・ということね」

「はい、それに怨霊とは亜空間で戦う必要があります」

「亜空間?」

「はい、先日のテレビドラマでのあの空間です。でも、あの怨霊がこちらの誘いに乗ってくれるかどうか・・・」

「じゃあ、付近の住民の避難と・・・それから？」

「はい、出来ればあの付近のお寺全てで読経をおこなっていてほしいんです。」

悪霊・怨霊を鎮めるためです。どれほど効果があるかわかりませんが

「わかったわ、奈緒警視！」

「はい、今から総監に報告に行つて来ます」といつて立ち上がつて出ていく。

「明日の深夜0時からだと準備はどうする？あきあくんと小野監督。」

「瑞姉！あれを」といつと瑞穂があきあから預かっていた透明ケースをあきあに渡す。

その中からあきあが出したのは12個の球形。

その球形に呪文をかける。するとバラけて宙に飛び上がる球形の『ステーション』宙で大きくなる。

「おお〜」

と声をあげるテレビ関係者達。

これが『ステーション』なのか。

あきあに1台だけ地上におろしてもらつて中を調べるスタッフ達、ルーク監督や景山ももう夢中だ。

「あきあくん。カメラマンを乗せて試写といつか試乗してもいいか

い

「いいですね。でも一応は5人乗りとなっ
ていますので」
カメラをセットして乗り込むカメラマンと
ルーク監督、そして景山も同乗する。

宙に浮いてそれからいきなり消えてしま
った。

2階のモニター室とテーブルの上に乗
せたモニター1台。

皆が見守る中、『ステーション』は
テレビ局の屋上より10m上空に停止
していた。

モニターに写る夜景は素晴らしい。

皆そんな撮影風景のモニターを見て
いたとき、乾社長達上層部の役員達と

静香、まゆみ、城田がBスタジオには
いつてきた。

「これは・・・これは何なんだ・・・」

というBスタジオ内の宙に浮いている
球形体、驚くのも無理はない。

「これはあの東都テレビの放映の
ときに使った『ステーション』です
よ」

「これがそうなのか」

という乾社長に

「現に今カメラマンとルーク監督、
そして景山が乗り込んでテスト
をしています」

と指差す。

モニターは夜景が写っていたが急に
スピードをあげて高速道路上空
をそって進む

そして、ヘアピンのように180°
曲がるとテレビ塔があるこの
テレビ局の

上空に戻ってきた。空中に止まった『ステーション』はそのままゆっくりと

建物に向かって降りてきた。屋上の床を・・・そして15階もの階層を

通り抜け、このBスタジオの天井から姿を現し、床についた。

『ステーション』から降りてくる乗員達。

特にルーク監督は何も言わず真っ直ぐにあきあに向かってきて、前に立ち止まると固い握手をした。

本当はキスをしたかったが小野監督にあきあの男嫌いは言われてきたのでこれで辛抱しているのだ。

それほど感動的な乗り物だった。これでカメラアングルを考える楽しみは大きい。

小野監督と景山は『中央』に『メインステーション』にはカメラマント

ジョージ・ルーク監督、その通訳としてゆりあが、そして『中央』からの指示と

各『ステーション』への指令は前回で慣れている瑞穂が担当する。

他の出演者や関係者となっている早瀬の女達は『中央』となるこのテレビ局に詰める事になる。

『ステーション』は今、小さくなって再びあきあのケースに収まった。

そこに警視総監に報告に行った松島奈緒警視が帰ってきた。

あの間警視と見知らぬ男二人を連れている。

「飛鳥警視正。総監のお言葉です。東京都民の生命を守る事が第一です。」

そして危険回避は警察の仕事でもありません。飛鳥警視正のもとでよ

るしく

計らってほしいとのことですよ。

・・・こちらの人達はあの現場にある所轄署の署長と捜査課長ですよ」

飛鳥警視正に挨拶する二人の所轄のトップ達、

しかし、その表情はとても信じられないという心の中がありありと伺える。

「それと沙希さんに言われたお寺での読経ですが、なかなかこちら
の真意が伝わらなくて・・・」

と奈緒警視がいうと

「わかりました。やはり本山から言っただけで賈わなければだめですね
とあきあが言う。それからひびるに向かって

「ひびるちゃん。ヤタさんに御用があるんだけど」

「御用？」

「ええ、大至急なの」

「いいわよ。・・・ヤタさん出てきて！あきあ姉さんが御用なの
いきなり『カー』と鳴き黒いヤタガラスがあらわれる。

もうみんな慣れたものだが、いきなりこの場に連れてこられた所轄
の刑事達は驚きで固まっている。

叫びたかったがそんな無様な真似はできない。

「ヤタさん！お願いがあるの。今から比叡山奥の院の蓬栄上人様の
所へ行ってね」

と言ってからヤタさんに黒い首輪をつける。

「ひびるちゃん、表に行ってヤタさんを飛ばせてきてね」

ひびるがヤタさんを肩にとまらせて走っていくと、律子もひびるの
後から走っていく。

先ほどから声をかけるタイミングを図っていたスタッフが

「あきあさん。CCDカメラです」

と2台のカメラを渡す。

「工具もこちらに」

とテーブルに工具を置く。

そして、呪文を唱えると工具箱からドライバーが飛び出し モバイルのネジをはずしていく。

つまりあきあは術でモバイルを改造しようとするのだ。

驚いたみんなの目が自分に向けられているのに気づいたあきあ

「これは、すでに改造をしましたから同じ改造手順は私の中にあるので」

という。所轄署の刑事達もうポカンとするだけで声もでない。

「景山！このBスタジオは明日の深夜までに使う予定があるのか？」

という小野監督に

「いや・・・誰か、知っているか？」

「明日の予定は・・・いえ、ありません」

「じゃあ、悪いがあきあくん。もう一度ステーションを出してこないか」

「どうするんですか？」

「出来るときに準備をしておきたいんだ」

「いいですけど」

「皆！・・・特にカメラマン！これから与えられたステーションが自分の城になる。」

これからカメラをセットして本番中に故障などしないよう万全のチェックだ。

明日の深夜のあきあくんはそれこそ命がけなんだ。

そんなあきあくん以後で恥ずかしくない撮影をしなければならぬ。

わかったな。わかつたら、さつそく準備だ。……あきあくん頼む」

あきあが再び出した『ステーション』。全て地上に降ろす。

小野監督はその外側に書いてある番号にカメラマンを振り分ける。

無論、Vテレビ屈指のカメラマンは『メインステーション』を与えられた。

それぞれ与えられた『ステーション』にカメラを乗せていく。

その時、モバイルから

『カァー』と鮮明な声が聞こえた。ヤタさんの声だ。

「どうやら、ヤタさんが比叡山についたようです」

といて呪文を唱えるとヤタさんの見た比叡山の様子がBスタジオの壁に映し出される。

『やや、これは不審なカラス!』

という声はあきあがよく知る武者僧の天鏡だ。

「天鏡さん、天鏡さん。私です。日野あきあです」

『おお!・・・あきあ殿か。・・・このカラスは?』

「これは、わたしの式神です。天鏡さん、蓬栄上人様はおいででしょうか」

『お上人はおられます。少々お待ちを』

と画面から消える。

少し経つと痩せてはいるが白いころもの老僧があらわれた。

『あきあ殿かな?』

「はい、少し待ってください」

と呪文を唱えるとこちらで見える画像の中にスクリーンが現われあきあの姿がうつる。ヤタさんの口から出るあきあの画像だ。

「お上人様！大切なお願いがあります」

と用件をいう。簡潔にだがその内容にはお上人とはいえ驚きの声が洩れる。

『では、明日の深夜にあきあ殿があゝの平将門の怨霊を調伏されるのか』

「はい」

『とんでもない出来事じゃなあ。年が経てば結界も綻ぶか・・・あきあ殿が京都の結界を張りなおしていただかなければ、この京都も恐ろしいことになったのじゃな。』

あきあ殿、首塚の周りの寺が読経を拒否したとはとんでもない坊主共じゃ。

わかった。わしもそちらに行く。天鏡達荒い武者僧をつれてな。うおほほほ・・・』

「お上人様、私甘えてよろしいのでしょうか」

『何を言われる、あきあ殿。こちらこそあきあ殿に世話になっておる。』

それに平将門は恐ろしい怨霊じゃ、少しでもあきあ殿にお力になれば・・・』

「わかりました。ではお願いいたします」

『おお、そうじゃ。あきあ殿。このことを東北のかの地にいる峰巖に伝えてはくれないじゃろうか』

「峰巖和尚様に？」

『そうじゃ。あの男、いまでこそ山寺で自堕落な生活をしているそ
うじゃが、』

比叡山で一緒に修行をしていたころあの男は素晴らしい修行僧じゃ
った。

あの男がいればあきあ殿も安心して怨霊の調伏に専念できるはずじ
ゃ』

「わかりました。では、式神のヤタガラスをこのまま東北の地に向かわせます。」

ではお上人様、明日お待ちしております」

『カー』とヤタさんが鳴いて画像が切れた。

「沙希ちゃん。明日警察が東京駅にお迎えにいきますよ」

「叔母様！よろしく願います」

と飛鳥日和子警視正に頭をさげる。

この様子を見ている観客となっている者達、なんだか身体があわだつてくる。

スタッフ達はカメラマンの調整を手伝い、

早乙女薫事務所のマネージャー達は軽い食事や飲み物の準備と動き回っている。

女優の卵達も例外ではない。

ただ、静かに目を閉じて心を落ち着かせる様子のあきあを見守る。

警察関係者、中でも飛鳥警視正は飛んでいって抱きしめて思い留まらせたいのだが、

今の自分の立場では動きがとれない。松島奈緒もそうだ。

恋人でもあり早瀬の家長でもある沙希をやめさせたいが、怨霊の調伏などやれるのは沙希しかいないのだ。

「飛鳥警視正！いえ、お母さん。私もあの『ステーション』に乗り込みます」

「私も」

「わたしだつて」

「だつたら私も」

と京、泉、ケイ、洋子、そして奈緒までが必死な目で飛鳥警視正を

見つめる。

「どうして？あなた達が乗っても沙希ちゃんの役にはたたないわよ」

「わかってる。でも少しでも近くで沙希のこと見守りたいの
これが必死に訴える女達の心のうちだ。」

「わかりました。・・・小野監督！」
と後ろを振り返って呼ぶと

「なんででしょうか？」
とステーションのそばで1台1台チェックをしていた小野監督が答える。

「この子達がその『ステーション』に乗り込みたいそうですが、
よろしいでしょうか？」

と聞くと一瞬だが女達の顔を見ていたがやりと笑って
「いいですよ。そのかわり1人づつ別れて乗り込んでください」という。

「そうだ！各人があのモバイルを持って乗り込んでいただいたら助かるんですが」

「静香ちゃん、モバイルは？」

「手持ちは今はありません。会社に電話して持ってこさせます」といって電話をかけた。

「あっ、岡島さん。悪いけどあのモバイルを10台持ってVテレビのBスタジオに
持ってきてくれないかしら。ええ帰る準備をしてきてくれたらいいわ」

「静香ちゃん、3台でいいのに」

「だって、2台はあるからあと10台でしょ」

「しょうがないわね。静香ちゃんも乗り込む気？」

「だって、あと6人必要なはずよ。律子、順子、杏奈、吉の洋子に私・・・」

あと一人だけど智子や京子にいえばふつとんでくるわ」

「あら、私は？」

という薫に

「女優陣は駄目よ。世間に知られた人達に何かあつたら大事でしょ」

プッと膨れる薫とひづるだがこれは静香の言う通りである。

このざわめきの中、椅子の上で1人座禅を組む日野あきあ・・・
何と見事な姿であろう。

するといきなりドアから黒いヤタガラスを肩に乗せた僧侶が1人現われたのである。

ヤタガラス・・・ヤタさんはすぐにその肩から椅子に座り、

あきあを見つめる天城ひづるの肩に飛び移る。

あきあの背後に回った僧侶、

「ふゝむ、見事な・・・」

と小声で言った。

その声が聞こえたのかどうか『パチ』と目を開いたあきあ、背後の僧侶に

「どうしてですか？峰庵和尚様！」

「さすがじゃ、千賀子殿には一片の隙もないわ」

峰庵和尚はあきあをなじみであるドラマの役名で呼ぶ。

「どうしてここにまで？」

と聞くあきあ。

峰庵和尚はスタッフに用意された椅子に座ってあきあと向き合う。

「先ほどのことじゃ、本堂で経をあげたあと境内に降りたときじゃ。

天空より真赤な龍が降りてきてのう」

「えっ？じゃあ、紅龍様が？」

「そうじゃ、紅龍殿が千賀と一緒にわしを迎えにきたのじゃ。

今、千賀子殿が怨霊の調伏という大変なことをしようとしている。

天界の方々は直接、力を貸すわけにはいかぬから、

わしに東京に行って千賀子殿に手を貸すようにといいことじゃった」

「それでは、紅龍様は？」

「母龍の緋龍殿も陰ながら見守っておると聞く。紅龍殿は母の元に行つたのじゃ」

「わかりました。峰巖和尚様、本当に来て頂いてありがとうございます」

「そのヤタガラスは途中で会つてのう、ちょうど良かった。でない
と行き違いじゃった。わははは」と笑う。

「和尚様、明日蓬栄上人様も来られます」

「おお、それも聞いておる。蓬栄と会うのもひさしぶりじゃ」

「沙希ちゃん、今京都府警から連絡がきたわ」

と携帯電話を切りながら沙希に言う。

「比叡山のお上人様達、総勢20名。今比叡山を出発されたそうよ。

お上人様のためにといいは失礼だけど、漣に一行についてくるよ
う電話をしておいたからね」

「うわあ、お婆ちゃまに知られてしまうわ」

「大丈夫よ、比叡山の僧侶一行に帯同するだけとしか伝えないよう

に

言っているからお母様に心配かけることはないわ」

「よかった」

とあきあはため息をついた。

「どうやら、千賀子殿は明日の怨霊との戦い秘策が浮かんだようじやな」

「はい、私決心しました。調伏するのに邪魔なああの結界を破ってから怨霊と戦います。」

和尚様達には平将門について出てくる悪霊・雑鬼共を調伏してほしいんですけれど」

「よかるう、わし達の経は将門のような強大な怨霊に対抗できると思わぬ。」

今の世、千賀子殿だけがたよりじゃ。したが雑鬼や悪霊などはわしらで調伏してやる。」

だから安心して怨霊と戦うがよい」

「怨霊は亜空間に引きずり込みます。私1人なら亜空間に自由に入りできますが

怨霊もろともとなると和尚様達の読経が必要なのです」

「千賀子殿、経は坊主の専売特許じゃ。心配せずとも良い」

「心配など……」

「ははは……やはり、千賀子殿は変わっておらぬ。優しくて強い。」

不動明王様と菩薩様が宿っておられるからのう」

こうして、峰巖和尚にこわれるまま、横笛を取り出すあきあ、

その清廉な音色はテレビや映画で聞いたとはいえ、実際のその場で聞くのとは大違いである。

テレビスタジオには雑多な人の気を好む雑鬼達があつまる。
しかし、この退魔の笛で一蹴されてしまった。
スタジオ内、いやテレビ局の建物内に清涼な風が流れる。
気分が悪かったものも一度に治ってしまうのだ。
横笛の音色はまだ続く。

聞き入る人たちの心に明日への戦いを不安を消しながら……

第二部 第三話

Bスタジオの中はあきあの横笛の影響から爽やかな空気が流れていた。

早乙女薫事務所のマネージャーや若い女優達が用意した軽食と熱いコーヒーが立ち働いていた皆に人心地をつける。

あきあは峰巖和尚と用意されたソファに座り込んでみんなの作業を見ていた。

手伝おうとしたが邪魔にされ、怒られてこうして座っているのだ。

「あきあさん！あなたは少しでも身体を休めておくべきです」

「そうですよ。あまりうるうるされては邪魔です。」

このソファに座っておとなしくしててください」

と若い女優達やマネージャーにいわれこうして手持ち無沙汰でいるのだ。

「千賀子殿、いい若者ばかりではないか。テレビに出ている者はちやらちやらしたものばかりだと思っていたが、これは認識を改める必要があるようじゃな」

「和尚様、みんな若いけれど目的に向かって一生懸命に努力していますわ。」

わたし、これから彼女達とドラマを一緒にしますけれど本当に楽しみなんです」

「あつ！いたわ。ここよ！」

と大きな声がして入ってきた5人の女性。

「あら、くろろさん」

と女性達に近付いていく静香専務。

「専務！大崎さんにも手伝ってもらいました。これでいいんですね」

と秘書の岡島直子と社長秘書の大崎恵に渡された紙袋を4つ。瑞穂と律子が慌てて受け取りに走る。

「専務！社長が心配していますから至急、お電話を」という大崎恵の伝言に

「わかったわ、すぐ電話します。……ところであなた達はどうしてここに？」

二人の秘書の後ろに立っているのは理沙と鳴海京子と大原智子の3人だ。

「お昼過ぎまでゆっくりして、京子と智子と一緒に里から帰ってきたの。」

3人で早乙女事務所に顔を出したとたんにあの『般若童子』騒ぎ……！

あちゃあ、沙希がまたやってる…….と試してみたら

岡島さんと大崎さんがどこかへでかける様子でしょ。だから声をかけたのよ。

そうしたら静香専務にモバイルを持ってくるよう電話があったというじゃない。

これは…….と試みて来たの。やはり、正解だったようね

「この『ステーション』どうするんですか？」と智子が聞く。

「しょうがないわね」

と静香がスタジオの片隅につれていき、いままでの経過を説明する。

「ええ……」

「じゃあ・・・」

「・・・というわけなの、・・・私社長に電話してくるからね。・・・岡島さん、大崎さん一緒に出ましようか」

「あのう・・・私達もう少しここにいてもいいですか？」

「別にいいけど・・・」

しかたがないわね・・・というジェスチャーをしてから
急いで電話をかけたスタジオを出ていく。

5人は広いとはいえ、このBスタジオに球体の『ステーション』が
ところ構わず

並べられ、その一台一台にスタッフや早瀬の女達がつきつきりにな
って

チエックしている様子に異様な緊張感を覚えていた。

あきあのそばにいる峰巖和尚に気づいた大原智子。

智子は5人の中で峰巖和尚を知る唯一の女性だ。

「和尚様！・・・どうしてここへ？」

「わかか？・・・わしはあの紅龍と千賀につれてこられたのじゃ」

「えっ？紅龍様と千賀さんに？・・・」

驚く智子に

「智姉、明日になったら比叡山のお上人様と天鏡さん達も来られる
のよ」

とあきあがいう言葉にサツと顔色を変える智子。

だってそうだろう、比叡山で一番位が高い蓬栄上人があきあのため
に

比叡山の結界の中からこの東京にかけつけるのだ。

あきあの相手となる平将門がいかにも恐ろしい怨霊なのが思い知ら
されたのだ。

あきあの前のテーブルの上では先ほど渡されたモバイル10台が並べられ、

工具達が忙しく飛び回って改造を始めていた。

早瀬沙希の不思議な術を目の当たりにして、目を白黒している岡島直子と大崎恵。

その二人を置いて

「では、和尚様。後ほど・・・」

と智子が挨拶して京子と理沙を『ステーション』に急いで引っ張っていった。

智子は何事かを京子と理沙に耳打ちしてから早瀬の女がいない2台の

『ステーション』に京子と理沙を乗り込ませた。

そして、智子自身は杏奈のいる『ステーション』にむかい、杏奈になに何事が言っている。

口を尖らせて文句を言っているようだが、見ていると智子には敵わないように

頬を膨らませ両手を腰に当てて抗議をしていたが

智子にいいようにあしらわれた結果、2度3度と地団太を踏んでから日和子のほうに戻ってきた。

電話から戻った静香がこの様子を見て

「あら？」

と声をあげる。

「ふふふ・・・静香ちゃん。あなたの乗り込む予定の『ステーション』は

理沙ちゃんにとられてしまったようよ、それに杏奈ちゃんも智ちゃんにね・・・」

「仕方ありませんわ、お母様」

と静香らしくこう答えた。

静香は前世での母であった日の子叔母を最近「こう呼ぶようになった」
いた。

けれど杏奈は若いから頬を膨らませながら

「本当！智姉はずるいんだから・・・」

とまだ怒っている。

「杏姉！」

と横から沙希が声をかけた。

「智姉の言う通りだと思っわよ。杏姉の仕事は時間ギリギリまで残
っているわ。」

だって今日着る戦闘服であるセーラー服もメイクだって杏姉がいな
くちゃ誰もしてくれないもの」

そう沙希に言われてしまうと、何もいえなくなってしまっ杏奈。

「判ったわ、これ私の我儘だった。智姉もそれがわかっていたから、
私のところに来たのね」

「さすが杏姉、わかってくれたのね」

「沙希！私ここで見ているから絶対に勝って！」

「うん、皆のためにも負けるわけにはいかない。絶対に勝って帰っ
てくるわ」

「和尚様・・・ここは？」

「ここには、わしの弟子がおっの」

と永龍寺の山門にたたずむ二人。

早朝、沙希は峰巖和尚に誘われてこの山深い寺にやってきた。勿論、沙希の陰陽師としての力がなければこんな遠いところまで一瞬にして来られるわけではない。

今日はとても大事な一日なのだ。そんな日に峰巖和尚が沙希をここに連れてきた

理由とは……いつたい?……。

山門に一步足を踏み入れた沙希は

「ん?……」

と不審な表情を浮かべて周りを見渡した。

「どうされた?千賀子殿」

「和尚様、この地の気が澱よどんでいます」

「ほう……さすがじゃ。一瞬にしてこの地の気を読み取るとは」
そう言った峰巖和尚に沙希はにっこりと笑う。

「和尚様。この気の澱みは隠れ蓑……そうですね」

峰巖和尚は愕然とその場で立ち止まってしまふ。

「千賀子殿!……どうしてそこまで……」

和尚の厳しい目が沙希につきさささるが、平然と受け流す沙希。

「この地の自然の息吹が私にそう教えてくれました」

「これはいかぬ。自然まで千賀子殿に味方されては何も隠せぬわい。
おゝい!……宗円!」

峰巖和尚が大きな声をあげる。

本堂より一人の僧が出てきて小走りに近づいてきた。

峰巖和尚の弟子と聞いていたのでどんな僧かと思っていたが三十前

後のまだ若い僧侶であつた。

「これは、これは峰巖様。久方ぶりにございます」

「宗円！お主も元気そうぞ何よりじゃ」

二人の師弟の挨拶はしごく簡単なものだった。

いつも突然現われては知らぬ間に去つていく師に慣れた弟子であつた。

「峰巖様、こんなに早朝のおいで・・・はて？なんぞありましたか」

「おう・・・その前に紹介しておこう。世俗にうといお主は存知てはおらぬだろう。

今もつとも有名な女優の日野あきあ殿だ。わしは千賀子殿と呼んでいるがな。

千賀子殿、これがわしの弟子であつた宗円と申す」

「女優？・・・日野あきあ様？・・・はて？」

師である峰巖和尚から女優を紹介されようとは思議な面持ちの宗円であつた。

「宗円！千賀子殿はなあ・・・」

といつて『ククク・・・』と笑う。

げげんな顔で師をみつめる宗円。

「比叡山の結界を破り、奥の院に殴りこみをかけてあの天鏡等とやりあつたのじゃ」

「えっ？比叡山の結界を破つたですと！・・・そしてあの荒っぽい武者僧達と？」

宗円は驚いて峰巖和尚の横に立つ沙希をみつめる。

「和尚様、そのことはもう言いつこなしですわ

頬を真っ赤に染めた沙希が峰巖和尚にうらめしげに見上げる。

「あははは・・・朝早くから千賀子殿を困らせてはいかぬな。・・・宗円！」

その千賀子殿に来てもらったのは、お主が念願だったこの寺の境界を正すこと」

「えっ？でもそれは・・・」

沙希を見つめる不審な表情はあたりまえといえばあたりまえだ。

いくら師の言葉とはいえ、こんな少女に長年問題となっていた結果の乱れを直せようとは思えない。

「千賀子殿は寺に一步入っただけでこの気の澱みが隠れ蓑と気づかれておるのじゃ」

「ええ〜〜！」

峰巖和尚は沙希を振り向いて

「千賀子殿、この寺の気の澱みはどこぞから・・・」
という峰巖和尚の言葉を押し留めて沙希は宗円に言う。

「宗円様にひとつお伺いいたします。この寺のご本尊は？」

「本尊？・・・本尊の不動明王像は本堂に安置されておりますが」

「では、そのご本尊はこの寺が建立されたおりのものなのでしょうか？」

「いや、この寺に伝わっておる古い書物にはなんでも江戸の初期に盗まれたらしいのです。だから今のご本尊は二代目となります」

「やはり！」

「やはり？」

「はい、この寺の本堂に安置されたものは盗難にあってもよい飾り物。」

江戸初期に盗まれたといわれる不動明王像もそうでしょう。

そしてこの寺の気の澱みは真のご本尊を守るための目くらましです」

「真のご本尊？」

「はい、この寺の境内の一箇所だけ清廉な気があります。……いえ、結界ではありません。ご本尊からかもし出される気なのでしょう」

二人の僧は沙希の言葉を聞くだけでもう何もいわない。

「寺全体の結界はわざと方角を反対にして張られてあります。だからこの気の澱みでしょう。まずはこの寺の結界を破ります」といって九字を切る。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

そして唱えるのは真言。

「ナウマク・サマングボダナン・アビラウンケン」

二人の僧の目に天に向けて上げた沙希の右手の平から赤い光線が出るのが見えた。

赤い光線は100m程あがったかと思うと

『メラメラ』

とまるでドームの天井が焼け落ちるように透明のバリアが燃え落ちていく。

それまで澱んでいた気が霧散し、山の清廉な空気が流れこんできた。

「おおっ……」

思わず宗円の口から声が上がった。

沙希は半眼になりあげていた右手を寺の境内の在る一点に向けた。

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

そう真言を唱えると今度は手の平から金色の光が出て

古ぼけた石仏に当たった。石仏は金色に輝きその様子が変化する。等身大の不動明王の立像が石仏に変わり現れたのだ。

「これは……」
宗円はもう目の前で起こったことが信じられなかったが
信じないわけにはいかない。

沙希と二人の僧は出現した不動明王立像のもとに進んだ……が、
突然！

不動明王の目から光が出て沙希の体を包み込んだ。

突然のことで驚く沙希！……でも温かく心地よいその黄金の光の
中で

沙希は心の中の全てを開放したのだ。沙希の身体の中にいる3人の
式神達も

あの八工次郎も光の中で沙希の身体の周りをぐるぐると飛び跳ねて
いる。

そして、沙希自身が不動明王に変化する。

見守る二人の僧は思わずその気高さに膝まづき両手を合わせて経を
唱えはじめた。

右手に利剣、左手に羂索を持ったその姿が薄れはじめ、やがてその
身体から

金色に輝く沙希の姿がくつきりとあらわれたのはそう時間もたつて
いない。

沙希の大きな目がパッチリと開いたとき、その口から真言が流れた。

「ナウマク・サマンド・バザラ・ダンカン」

すると沙希の身体のまわりを回っていた式神達が姿を現したのだ。

玉藻、葛葉、紅葉の姿は着物姿ではなく赤、白、青の甲冑をつけた
凛々しい女戦士の姿で、

あの八工次郎は筋骨たくましい白虎となって姿を現した。
『ガオウ〜!』と一声鳴いてのっそりと沙希に近付くと
その足元にゆっくりと座り込む。そして、沙希に手を出すものあれば食い殺す・・・
というように鋭い目で周囲を見渡す。

3人の女戦士達は沙希を中心に正三角形の位置で膝まづき、沙希を仰ぎ見ている。

二人の僧の読経が終わった。

二人の僧の目に映るこの光景は不動明王の姿こそ普段の沙希の姿に戻っただけで

その荘厳さはなんら変わりはなく感動さえ憶えていたのだ。

「和尚様、どうぞお立ちください」

と沙希に声をかけられてもどうも身体が動かない。

でも沙希に手をとられてやっと立ち上がることが出来た二人の僧。

「和尚様?・・・あなたはこのことを・・・」

「いや、予想はしていたのだが・・・ここまでとは思っていなかった」

「では・・・」

「そうじゃ。昨夜、紅龍殿と千賀さんに頼まれたのう」

「紅龍様と千賀さんに?」

峰巖和尚はひとつ頷いて、

「今宵の怨霊の調伏までに千賀子殿をこの寺に連れてきて結界を正すようにとな」

和尚は沙希の顔を見ながら言っただ。

「わかりました。・・・それで、これは?」

と現実には右手に持つ両刃の剣と左手に持つ縄を指し示して尋ねた。

「宗円。これはおまえが答えるのじゃ」

「はい。．．．でも、なぜか恐れ多くて．．．．」

と震える声でいうのを沙希はニツコリ笑って

「宗円様。私は私なのですよ。それ以外の何者でもありません。

ねえ．．．お願いします」

その言葉で宗円はこの女優日野あきあに強烈に引き付けられてしまった。

「そ．．．その右手にお持ちの御剣は迷いや邪悪な心を断ち切る利剣でございます。

そして．．．そしてその左手にお持ちなのはけんさく罫索けんさくといいまして、悪い心をしばり善心をおこさせるものなのでございます。

いづれも不動明王．．．とは仮の御姿、大日如来様がお持ちのものでございます」

「大日如来様？」

「はい、いつも身近にいらして迷いを絶ち、苦難から救い、楽しみを与えて下さる

それは尊い仏様でございます」

という宗円の言葉に引きついて

「千賀子殿、迷いを断ち苦難から救い楽しみを与えるという大日如来の御姿は

今の千賀子殿そのものではござらぬか」

「私が．．．？」

「そうじゃ、千賀子殿の類まれな才能で世の人々を導いているし、『般若童子』として人々の苦難から救い、女優日野あきあとして人々に

楽しみを与えておられる。その上、千賀子殿には本当に不動明王と

菩薩様がついておられるのじゃ」

「そんなあ、でも不思議な事に今宵の平将門の怨霊との戦い・
今の今まで怨霊を調伏しようと思っただけでしたが、なぜかできるな
ら天に導いてやりたいと思います」

「お・おうう・その御心こそ御仏様の御心・やりなされ
！」

拙僧は微力ながら拙僧が出来る事、経を読むことで千賀子殿を少し
でもお助けできれば・・・」

「峰殿様・今のお言葉はどういうことでしょうか？」
と聞く宗円に

「そうじゃ、宗円。お主にも今宵の怨霊との戦い手伝ってもらわね
ばなるない」

沙希は隠されていた寺の本尊を現在の胎内に移した。

こんなこと出来るのは沙希だけだったから誰もこの本尊の胎内に
真の本尊が隠されているとはおもいませんが

何故だか自然と手を合わせてお参りするようになっていた。

現実に結界も張りなおしたあと、この山寺に登ってきた村人達は
その清浄な空気に触れ、疲れが取れ本尊の前では座り込んで手を合
わせて

長い間自分達で経を読んでいた。今日までおざなりに参っていた村
人達だ。

この寺、今に全国からお参りにくる人達で溢れかえるだろう。

沙希は式神達と八工次郎・・・八工次郎改め白虎丸とは本人の弁・
・・・を

元の姿に戻し、両刃の利剣と繙索けんさく共々体内に隠した。

そして峰巖和尚と宗円和尚の手をとって一瞬のうちに姿を消したのだ。

「あきあ！どこへ行っていたのよ」

「えっと、少し和尚様と散歩よ」

「散歩？・・・こんな日に散歩だなんて・・・あきれた！」

「律ちゃん。散歩けっこうじゃない。それでこそ沙希ちゃんだわ。

常に平常心を忘れていない。素晴らしいことだわ」

「だけど日和子叔母様！散歩に行くのなら行くって前もっていつてもらわなくちゃ

・・・心配で心配で・・・」

「そうね。沙希ちゃんの悪いところは事後報告をするってことね」

「じ・・・ごめんなさい」

頭を下げるととたんに律子の機嫌が良くなった。回りにいる姉達も同じだ。

そんな女達の様子を驚きの目で見つめている宗円和尚、

師の峰巖和尚に何事かささやかかれて、頷くと用意された椅子に師とともに腰掛けた。

ここはVテレビのBスタジオ。

昨夜よりこのテレビ局の隣りのホテルに泊り込んでいた共演者やマネージャー達、

テレビ局の仮眠室にはスタッフ達が。・・・誰一人帰ろうとはしなかった。

ジョージ・ルーク監督までも自分が泊まっている一流ホテルに帰ら

ずに
隣りのビジネスホテルで小野監督とツインの部屋で泊まっていたの
だ。

そして、朝早くから皆このBスタジオに集まってきた。

スタッフ達も何度も今宵の本番に向けての機器の調整に余念がない。
また共演者達はこの特別番組用に急ぎつくられた出来上がったばかりの

台本に目を通していた。午後から『美少女戦士天聖ルナスペシャル
編』の
録画撮り本番があるからだ。

本当は後日に撮影すれば良いのだが、それでは今宵の怨霊との戦い
が
絵空事になってしまう恐れがあると強く小野監督がのぞんだため
ある。

ルーク監督もそれを指示した。女優がいくら芝居がうまくても
戦いが終わった後で戦いの前の芝居をするとどこか迫力が違うし不
自然なのだ。

女優や男優達はBスタジオの片隅で台本を憶えるのに必死だった。
早乙女事務所のマネージャー達はまだペーパーの共演者の女優達を
事務所に所属するしないは関係なく自然と世話をしている。

「ようし、それでいいだろう。あともういちど『ステーション』の
チェックは

今宵の本番前におこなう。みんな、いいな！」

「はい！」

と勢い良い返事がBスタジオの中をとびかった。

「それではみんな『ステーション』からはなれる。あきあくん！しばらくしたらここで撮影にはいるので『ステーション』をどこかに移動してくれないか」「わかりました。では隣の次元においておきます」と印を結ぶとBスタジオいっぱいにあった『ステーション』が一瞬のうちに消えてしまった。

「おおー」

いくらあきあの術に慣れてきたとはいえ思わず声をあげてしまう。

「ようし、みんなその場にすわれ！」

と小野監督が声をかけてから

「あきあくん、君ばかりに注文してすまないが、みんな夕べからのことで疲れがたまっているようなんだ。ひとつ君の笛を聞かせてくれないか」

「いいですわ」

といつて『緋籠丸』をとりだすとおもむろに唇にあてがうあきあ。

素晴らしい音色が流れ出した。

でも今日の音色はいつもと違っていた。

一本の横笛だけなのに高い音色、低い音色が鮮やかに混ざり合っていて……いや素晴らしいハーモニーを奏でていく。

聞いているもの達の身体にたまっていった疲労や心理的な不安感が氷解していくのだ。

もちろん昨日の笛で雑霊達は消え去っていたのだが

土着していた霊や人の不満などで出来ていた生霊までもがこの音色で完全に消え去った。

「何と・・・何という笛の音・・・」

宗円がつぶやいた声を峰巖和尚が聞き及んで

「ほんに・・・いくら徳の高い高僧でもこの音色には毛ほども値打ちがあるまい」

峰巖和尚にはわかつていた。先ほどの寺での出来事によってあきあの持つ力が爆発的に上がったのだ。

あきあの唇から笛がはなれた。

聞きほれていた皆がふつと我にかえり『ほっ』とため息をついたがその瞬間に全員が驚いたように見つめあい、元気よく立ち上がったのだ。

「不思議だ！さっきまでの疲れはどこへいってしまったんだい？」

「俺の胃痛も吹き飛んでしまったよ」

口々にスタッフ達が叫ぶ中、

「え〜！」

と声をあげた一人の女優。

「どうして？・・・どうして台詞がこんなにスツと私の中に入っちゃうの？」

「うそ！・・・あつ、本当だ」

と女優陣達も騒ぎだし、男優も女優の言うとおりだとわかるとみんなあきあに視線を集めた。

「私は何も術を使ってないわよ」

「だって、物覚えが悪い私がこんなに速く、こんなに長い台詞を台本を読んだだけで

覚えられるわけないんですもの」

この女優はあきあのクラスメート役だが、今回姉が怨霊に犠牲になったため

学校を休んで姉の死を調べるといふ・・・
つまり司ゆりあをモデルにして設定を変更した女子高生役なのだ。

と、その時、

「あきあ！私も聞きたいことがあるの」

と薫がテーブルの台本をパタンと閉じて言う。

「私はあきあの笛を幾度も聞いているわ。あなたって本当に素晴らしい吹き手よ。」

でも今の笛は違った。鳥肌がたつほど凄過ぎるの。だってほら・・・

「

と横に立つまゆみ社長の鼻先に自分の腕をもっていく。

薫のそんな行動にびっくりしたまゆみ社長であったが、

奇妙な顔をして薫の腕を嗅ぐ。そして、薫の背中を嗅ぎだした。

「薫に・・・薫に乙女の頃のラベンダーの体臭が戻ってる！・・・
うっ！」

まゆみの横っ腹に薫の肘のカウンターが入り悲鳴をあげる。

「まゆみ！余計なことは言わなくていいの」

Bスタジオに緊張の中で一瞬の笑いが起こる。

その間に早瀬の女達が薫を囲み

「本当だ・・・」

「あきあの体臭と同じ・・・」

と口々に話す。

今度は立ち上がった薫があきあの前まで進み、

「ねえ、あきあ！・・・体の不調が治ったり記憶力が増したり

無くなったはずの体臭が戻ったりって普通ではないわ・・・こんな
こと」

薫はあきあの両肩に手をおいて

「ねえ・・・何があったの？・・・朝の散歩で・・・」
何もかも見抜かれているようだ。
でもあきあの口は開こうとはしない。だが、一瞬チラッとあきあの視線が峰巖和尚に走る。

ここであつんの呼吸というのか

「どうも拙僧の出番のようじゃな」

と峰巖和尚が立ち上がった。

「千賀子殿の口が重いのは察するに、

ご自分のなされた事をお話されるのを潔しとされてはいないのじゃ」

そうじゃなとあきあを見るとコクンと頷く。

「今朝のことを説明する前に・・・」

といったとき・・・Bスタジオのドアが開いて松島奈緒警視に導かれて僧侶達が入ってきた。

「おお～～、峰巖！」

と大きな声をあげたのは19名の武者僧に守られる蓬栄上人。

「蓬栄！よう来たのう。お前がああ比叡山の奥の院から出てくるとは・・・」

「ふおっふおっほほ・・・なんのなんの・・・」

「ちようどいい。蓬栄・・・お前達も聞いていてくれ」

というとマネージャー達が用意してきた椅子に蓬栄上人達が腰を降ろすのを待って

横にいる宗円をたたせた。

「ここにいるのはわしの弟子で宗円といって、今はあの山の中腹にある永龍寺の住職をしておる」

「おおっ～～」

と声をあげたのは比叡山の武者僧達。

「峰巖様！・・・永龍寺といえば奇怪な噂のたえない・・・あの寺ではありませぬか」

と声をかけたのはいつも蓬栄上人の横にいる天鏡だった。

「ほう・・・天鏡の耳に届いておるとは・・・これは、これは・・・」

「ほ・峰巖様！・・・それはあまりも・・・」

と言ったとたん周囲の武者僧達から思わず『プツ』と笑いが噴出す。

「こらっ！・・・お前達！」

と顔を真っ赤にして怒鳴る天鏡。

「も・申し訳ありません。・・・でも久方ぶりの峰巖様と天鏡殿の面白問答・・・」

ついこらえきれませんでした」

と一人の武者僧の言葉に

「うっ！」

といて目を白黒している天鏡。ついに蓬栄上人までもが『プツ』と噴出してしまわれた。

どうもこの二人の問答は昔から比叡山では有名であつたらしい。

「すまぬすまぬ、天鏡。おぬしの顔をみたらつい昔に戻ってしまつたわい」

と峰巖和尚はあやまつてから話を戻し、今朝からの寺での出来事を語った。

沙希の身体が不動明王に変化したくだりになると

ザワザワと皆の『やっぱり・・・』とか『・・・だと思つた』という声が聞こえる。

「・・・というわけで千賀子殿には御仏から下しおかれた神器

を使つて

今宵、平将門と戦われるのじゃ」

こんな現実離れた話は本当なら誰も信じないのだが、
相手が日野あきあだと何の違和感も無く信じられる。

「あきあ殿！」

と声をかけたのは蓬栄上人だ。

「すまぬが冥土の土産に御仏の神器を拝ませてくださらぬか」

断る理由もない。沙希は両手を前で広げると

『ボツ』と小さな光が灯り、やがてそれが沙希の両手を包む大きな
光になり

その光自身が形をかえ右手には利剣、

左手には繙索が現実のものとして現れたのである。

目の前に現れた現実の御仏の神器・・・

『おおう！』と比叡山の僧侶達は声なき声をあげ感動であきあを伏
し拝んでいる。

「これでいいでしょうか？」

僧侶達の行動がまるで自分が仏になったように思われ、面映くなり
慌てて声をあげた沙希はすぐに神器を体内に消してしまった。

あきあのせい？ですっかり台詞を自分のものにしてしまった俳優達
は

軽い食事のあとドラマ撮りの準備にとりかかった。

広いBスタジオ、片隅に比叡山からの僧侶達、警察関係者、テレビ

局の上層部が見守る中、
小野監督の大きな声で録画撮りが始まった。
何も無いBスタジオ空間に突如現われた舞台となる校舎、
その中で今夜おこなわれる怨霊との壮絶な闘いが予想される
ドラマのプロローグがこうして進行していく。

たった一人の身内の姉が何者かに殺されたことよってガラリと性格が一変し、
学校へも登校しなくなった少女を心配したクラスメイト達が
少女の行方を探すことからこのドラマが始まる。

クラスメイトの必死の捜索にもかかわらず彼女・・・佐野麻美の行方はようとして知れなかった。
2週間が過ぎ、3週間が過ぎ・・・そしてある日のこと、
暗くどんよりとしたクラスの空気に我慢を重ねていた担任の江口京香が
キレて怒鳴りつけようとした瞬間だった。

「キャ〜」

と突然の大きな悲鳴に思わず怒鳴り声を飲み込んでしまった京香が震える生徒の指差す方向を見ると、向かいの校舎の屋上のフェンスを乗り越え
両手を広げて今にも飛び降りそうなセーラー服の女生徒の姿が目に入ったのだ。

思わず窓のガラス戸をあけて声をかけようとしたのだが、
その行為が最悪の事態を迎えるかも知れないというつつさの判断で慌てて教室を飛び出して行く。
勿論生徒達も後に続いた。

ただ1人、聖奈だけが皆と逆の方向に駆け出していくのだ。
その姿を見送っていた沙月、祈るように一瞥をおくり、
（頼んだわ！聖奈）と密かに声をかけてから皆のあとに続いた。

コの字型に建つこの校舎が何故こんなに広い！・・・と走りながら
悪態が口につく京香、
ぼやいても仕方がないが学生時代に鍛えたこの脚が思うように動かない。

1人・・・又1人と生徒に抜かされながら息が上がって思わずよろ
けてしまう。
だが、横を走る生徒達に助けられささえられながら階段を昇って
いった。

『ボタン！！』という大きな扉の音でフェンス越しに振向いた佐野
麻美、

「来ないで！！」

という麻美の必死の叫びに思わず足を止めた京香やクラスメイト達。

「佐野さん！・・・駄目！そんなことしちゃあ・・・」

「いいの・・・もういいの。わたし・・・生きていたって何の
楽しみももう無いもの・・・」

「どうして？・・・どうしてそんなこと言うの？・・・わたし
達クラスメイトがいるじゃないの。」

わたし達じゃあ駄目なの？！」

クラスメイトで一番仲の良かった菅野優が悲鳴に近い言葉で叫ぶ！。

「優ちゃん……ごめん……わたし、もう疲れたの……
死んでおねえちゃんのところに行くの……」
生気のない声で言う麻美。

そんな声に思わず皆の視線が麻美に集中した瞬間、
バランスを崩した麻美が横倒しになりながら皆の前から消えていっ
たのだ。

「キヤ〜〜〜」

「いやあ〜〜〜」

叫び声が屋上に響く。

一瞬に気を取り直した京香が立ち上がったとき
落ちたはずの佐野麻美が見覚えのある少女……天聖ルナに横抱え
にされて浮かび上がってきたのだ。

「あっ……あなたは……」

という京香の声にニツコリと微笑む少女。

ゆっくりとクラスメイトの前に降り立ったルナは麻美を静かに足元
に横たえた。

死ぬ……とは言っても屋上から落ちる瞬間の心の衝撃は凄いもの
がある。

今、麻美はその衝撃で気を失っていた。

「佐野さん！……しっかりして！」

京香は麻美の肩に手をかけて2度3度体を揺さぶった。

うつすらと目を開けた麻美、まだ今おかれている状態がわからない
のかボンヤリとしていたが、

クラスメイトが心配そうに覗き込む顔に気づき、

ハッとして慌てて体を起こそうとしたが、貧血をおこして再び倒れ

こんだ。

その体を受け止めたのが担任である京香で、座り込んだ自分の膝にゆっくりと麻美の頭を乗せてから、持っていた出席簿で麻美をあおぎ始めた。

「先生！私がします」

と、京香の手から出席簿をとりあげたのは菅野優で、心配そうだが助かってホッとしたのか涙ぐみながらあおいでいた。

「あら、あの子は？」

と、周囲を見回す京香、

ハツとして探し始めたクラスメイト達、しかし、その姿はいつのまにか消えていた。

でもそのかわり、いつのまにか皆と同じように探すふりをしている聖奈の姿があった。

ただ1人気がついて横に並んだのが沙月だ。

「聖奈、ありがとう」

「なによ、サツキーらしくないその言い方」

そんな乱暴な言葉使いをするのは照れている証拠、中学からの付き合っているので親友の心の内は自然と読み取れる。

「ねえ、サツキー」

と、言い出したのは、保健室へ麻美を連れていく途中だ。

クラスの者に教室に戻っていなさい・・・と命令した京香先生は

「井上さんと菅野さん。一緒に来てくれる？」

「はい」

と、歩いて歩きだした京香は麻美の腕を持ってそっと歩きだした。

麻美のもう一方には親友の菅野優が同じように腕を持っていた。沙月はその後を歩いていく。

10歩ほど歩いただろうか、ふと立ち止まった京香先生が見送っていた皆を振り返り

「ルナ……いえ、星さん。あなたも来てくれる？」

その言葉にハッと表情を固くした聖奈だったが、一瞬にいつもの表情に戻って

「はい！」

と行って小走りで追いつく。

「ねえ、サツキー」

「なあに、聖奈」

「京香先生、わたしのこと知ってる！」

「えっ？」

「ルナが私ってこと知ってる……と思うの」

「どうして？……」

「さあ？」

「さあつて……聖奈！困るんでしょ、正体がばれちゃあ。

わたしの記憶を消そうとしたぐらいだものね」

「サツキーと先生だけならいいことにしたわ」

「どうして？」

「先生は他の人に話すような人じゃあないし、サツキーは親友だもん」

「さてと……」

と保健室に佐野麻美を寝かしつけた京香はあとを保健室の先生と親友である菅野優にまかせて

「少し先生はこの二人にお話があるから……何かあったら隣りの

進路指導室にいるからね」
と行って二人を促し部屋を出て行く。

「さてと……」

と聖奈と沙月の向かいに座った京香がきりだした。

「訳を聞かせてくれるわね、星さん……いえ天聖ルナ！」
やはり先生は知っていたのだ。覚悟を決めていたとはいえ衝撃が走った。

スーッと顔色が変わるのを認めた京香は

「星さん、あなたって正直ね。表情ですぐわかる」

「えっ？」

と行って顔をすぐなげる聖奈、やはり17歳の乙女は歳をくった女性には太刀打ちはできない。

「どうして……どうして判ったのですか？」

「判るわよ、そんなこと。平々凡々と歳を重ねてきたんじゃないから……」

「聖奈、先生には話しておいたほうがいいんじゃない？」

「ええ」

と頷いてから京香先生の顔を真っ直ぐ見つめて

「お話します。でも、このことは……」

「あたりまえじゃない。こんなこと他の人に話すわけじゃないじゃない。先生を信用してほしいわね」

「信用しないなんて……わかりました」

と居住まいを正して話し出した。

横で聞いている沙月にはこのあいだ聞いたことばかりなので先生と聖奈を見ているだけであった。

「……というわけです」

「へえ、退魔師の家系か……あるのね、そんな家系が……
わかったわ、

では先生の秘密もあなた達に教えてあげなければ不公平ね」

「先生の秘密？……」

聖奈と沙月が顔を見合す。

「先生はね、どういいうわけか幼い頃から物の本質を見分けることができるの」

「物の本質？」

「そうよ。例えばねえ……甘い言葉で近付いてくる人の後ろに醜い本心を表した顔が見えるの」

「じゃあ……」

「そう……天聖ルナの後ろに必死に悪を倒そうとする星さんの姿が見えたし

先生を襲った悪霊の後ろにはその身を乗っ取られた何も知らない可愛い黒猫の姿が見えたの」

呆然とする二人に

「さあ、これでおしまい。先生と星さんの秘密もこの3人だけの秘密……いいわね」

保健室に戻るとベッドの上で身を起こした麻美が菅野優に抱きついて、

今までの心の苦しみを吐き出すように泣きつづけていた。

そばで立っていた保健の滝川美奈先生が近寄ってきて

「泣かせるだけ泣かせておいたほうがいいわ。」

ああして何もかも吐き出すほうが回復が早いのよ」

といった先生役は若手というより中堅の女優系川早苗でテレビより

舞台上で活躍している女優だ。

糸川早苗はテレビより舞台を選んでいたが
どうしても日野あきあと共演したくて自分の志をまげてもオーディ
ションに合格した。

昨日より目の前でのあきあの不思議な術に一喜一憂している1人だ。

そこにドストドスと足音が聞こえてドアが開けられた。

顔を覗かせたのはちょうど校門前にある交番に詰める警官、江川巡
査だ。

もう何年も詰めているので皆、顔見知りになっている。

勿論演じるのは飛龍高志だ。どうも毎回狂言回しの役柄のようで、
飛龍高志にとってはじめての役柄なので役の幅が広がると喜んでい
る。

現場に来たがっていた歌手の嫁も電話で呼び出して赤ちゃんを抱き
ながら

今このBスタジオで目を真ん丸くしながら撮影を見学している。

「何かあったのですか？」

「あっ、江川さん」

と京香が慌てて廊下に出て江川巡查に保健室の中を見せないように
した。

聖奈も沙月も心得て室内でドアを開けられないように体で押さえて
いる。

「な・・・なんでもないですよ」

「ですが、あの泣き声は？」

「ええ、ちよつとした行き違いから喧嘩をしていた二人が今何もか
も吐き出して仲直りしたのよ」

「でも、あんなに泣いて……」

「乙女だからなのね。思春期の乙女はこういう時期が誰でもあるの」

「えっ？誰にでもですかあ」

「そうよ、何なら江川さんのお母様に聞いて御覧なさい」

「母にですか？……ふむ、じゃあ今晚にでも聞いてみます」

失礼しましたと敬礼して江川巡査は去って行った。

飛龍高志の出番はこれだけだった。

Bスタジオの隅にいる妻子の元にもどった飛龍高志は

「あなた、ごくろうさま」

という愛妻のねぎらいの言葉もそこに隣りの席に腰を落とすと

「さあ、これから落ち着いて撮影を見られるよ。君もじっくりと見ておくんだよ」

「ええ、わたしこんな撮影初めてよ。

何度もドラマに出演したけれど凄い……の言葉につきるわ。

高志さん、この大道具もあの日野あきあさんの陰陽師の術なの？」

「大道具なんていつては失礼だよ。れっきとした本物なんだから」

「へえ……本当？……」

「あっと、それはそうと愛子の世話はどうするの？」

「高志さんに言っただけで、母と近くのホテルに部屋をとっているの。」

そしてもうすぐ母が愛子を引き取りにくるわ」

「じゃあ君は？」

「勿論、最後まで撮影につきあうわよ」

「ようし、そうとわかったら腰を落ち着けて見学だ」

といったがちょうど撮影は休憩に入ってしまった。

あきあがBスタジオの見学席まで歩いてくる。

その目は飛龍高志の妻で歌手の九条麗香が抱いている生まれて6ヶ月の愛子に向けられていた。

その優しい笑顔は九条麗香をも魅了してしまい、赤子の愛子にもわかるのか『キヤツ、キヤツ』と声をあげてあきあを迎えた。

「九条麗香さん、いらっしやい。この子が愛子ちゃんですね。はじめまして、愛子ちゃん。わたしがあきあといいます。よろしくね」

と赤ちゃん相手というより1人に人間として挨拶をする。

そして人差し指を出すと驚いたことに今まで一度もしたことがないのに

紅葉のような手がその人差し指をぎゅつと握り

『キヤツ、キヤツ』と笑いながら上下に腕を振ったのだ。

『え〜』と顔を見合す飛龍高志と九条麗香夫妻。

表情に乏しく愛想も悪いと思っていた我が子が素晴らしい笑顔を他人とはいえあきあに向けたのだ。嬉しくないはずはない。

九条麗香は涙さえ浮かべて我が子とあきあを眺めている。

「えっ?・・・あっそうか・・・そうね・・・じゃあ、お父さんとお母さんに伝えとくね」

と言っから指を愛子に握らさせたまま、飛龍高志と九条麗香を見る。

「お父さん、お母さん。愛子ちゃんからの伝言です。

まずはお父さん。もっと愛子ちゃんとお話してあげてください。

愛子ちゃんはもっとお父さんのいろんなお話が聞きたいそうです。

そしてお母さん。愛子ちゃんはお母さんのお歌が聞きたいそうです。

子守り歌だけでなく、もつといろんな歌を・・・」

といってから再び愛子に視線を向けて

「愛子ちゃん、これでいい？」

というと『キヤツ、キヤツ』といいながら又、あきあの指を握った腕を

上下に2度3度強く振るのだ。あきあと会話をしているのだと信じざるを得ない。

呆然とする両親・・・その二人にニコツと笑ってから『バイバイ』と愛子に

手を振ると愛子もちつちな手で『バイバイ』をするのだ。

これはもう何をかいわんや・・・だ。

「あの人・・・天使だわ・・・」

クリスチャンの麗香が遠ざかるあきあにむかって言った言葉だ。

そして、抱いていた愛子をぎゅっと抱きしめ

「ごめんね、そんなにお母さんのお歌を聞きたかったの？ 判ったわ、もつともつと歌ってあげる」

・・・と麗香の両親に小さな温かい手が・・・見ると

愛子がニコニコ笑いながら両の手に麗香の頬を触っているのだ。

たまらなくなつて又、ぎゅっと抱きしめる。

そんな様子を真剣に見詰める飛龍高志、両の瞳に熱いものが溢れているのを自身気づいていない。

そこに流れてきた笛の音、こちらを向いて笛を吹くあきあの姿が視線に入る。

いつも聞いているものにとって、おやつと思うほど曲調が違うがこれもまた心に染みる。

でも初めてあきあの横笛を聞く九条麗香は夫には聞いていたが

これほどのものとは思っても寄らなかつた。

横笛と歌手の違いはあつても音楽のことならだれにも負けないと自負している麗香だが、

ここに自分を震えさすほどの天才がいたのだ。

そしてわかつた、この調べはわが娘愛子のために吹いてくれている。

優しさに溢れ、愛に溢れている……この調べ……歌いたい！歌いたい！猛烈に歌いたい！

歌手として自然に立ち上がった。我が子を抱きながらあきあのほうに進んでいく。

麗香の目にはあきあしか見えていない。横笛を吹くあきあの目が、いらっしゃいと呼んでいるのだ。

「ラ〜ララ〜……」

この調べには歌詞がない。だから麗香の口で奏でるのは母の我が子への愛情だつた。

「早くカメラを回せ！あの二人を映せ！」

小野監督の激が飛ぶ。

あきあの吹く調べは愛子のための即興の曲、そして母が我が子への歌は慈しみの言葉。

驚いたことに赤ん坊の愛子があきあの笛の調べに母の歌に小さな体を

左右に揺らせて調子をとっている。

比叡山の僧侶達も、警察関係者も、早瀬の女達も、若い女優達もスツッフも

呆然とこの様子を見ている。涙を流しているものさえいる。

「愛の音^ね」

幾度もこの言葉が麗香の口から生まれ出る。

やっと笛の調べがやみ、麗香自身呆然とスタジオの中央に立ち尽くしていた。

いつのまにか周囲の照明が全て落ちあきあと、

その横に立つ愛子を抱く麗香にスポットライトが当たっていた。

そして今、スポットライトが消え全ての照明が再点灯する。

拍手をしながら真つ先に立ち上がったのはアメリカ人のジョージ・ルーク監督だ。

「ブラボー！」

そう声をかけながら二人のほうに歩いていく。

彼は日本語はわからない。でも横笛の旋律と歌声は彼の心にせつせつと訴え幼い頃の、

もう今はいない母の面影を追っていたのだ。

周囲のいるもの全てが自分の幼い頃を思い出していた。だから手を叩きながら二人を中心に自然と輪ができた。

「小野さ〜ん、この曲世界で大ヒット間違いないね」

「う〜ん、エンディングの曲とするか。景山、お前はどっ思う？」
と声をかけられた景山だが彼は横に立つ山川プロデューサーに視線を向け

「俺は音楽の専門的なことはわからない。山川、音楽プロデューサーを兼ねるお前ならどうする？」

山川はその質問には答えず輪の中心にいた二人を引っ張ってきて

「あきあくん、素晴らしいよ。君は本当に横笛の名手だよ。」

それに今の曲、即興で吹いたんだと思うんだが……」

「はい」

というあきあの返事に

「おおっ〜」

という周囲からあがるざわめき。

「今の曲、もう一度吹いてくれといえはできるかね？」

という質問に

「はい、ここに納めてありますから」

と自分の胸を押さえた。

「ふ〜む、さすがだね」

といつてから今度は愛子を抱く九条麗香に視線をあてる。

いつのまにかその横には麗香の肩に手を回す飛龍高志の姿があった

「麗香くん！君はどうかね。今の歌詞を覚えているかね？」

「いいえ、先生」

山川は麗香の大ヒット曲をいくつも手がけた敏腕音楽プロデューサーだったのだ。

「景山！今の場面の撮影は？」

「ああ、ばっちりさ」

その答えに今度は小野監督のほうを振り返って

「小野さん！もしエンディングにこの曲を使うなら今の撮影分をそのまま使いましょう。」

今の新鮮な輝きはもう戻ってこないから」

その言葉にジョージ・ルーク監督はゆりあの通訳で

「おおっ、それ私も賛成ね。あきあさんも麗香さんも次にレコーディングしたら

もっと素晴らしいものが出来るでしょうけど今聞いた新鮮な輝きは失われています」

「よし！判った。両氏のいわれるとおりでしょう。いいですね、社長！」

そばで聞いている社長や首脳に声をかける。

「うん、それがいい。・・・だが、こうなるとオープニングテーマも作ってほしい」

その社長の声に、皆の視線があきあと麗香に移った。

「私はいいですけど・・・麗香さんは？」

「あきあさん！私以外の者に歌わせるつもりですか！」
言葉はきついが笑いながらいうので周囲も笑い出した。

「山川プロデューサー、今夜のが終わってからでもいいですよ」

「そりゃそうさ、今夜は君の大仕事だよ。余計な負担はかけたくないさ」

「ありがとうございます。・・・山川さん。でもテーマはもう決まってるんですよ」

というあきあに

「えっ？」

と声を出す。

あきあは愛子の笑顔の頬をちよつとつついて

「オープニングテーマは”笑顔”です」

とニッコリ笑って撮影再会の準備をするスタッフの中に入っていた。

今夜の怨霊調伏までの時間が刻々と近づいていく。中断した撮影もいま再会した。

休憩中の素晴らしい出来事の余韻にひたっている暇はもうない。

みんな懸命に自分の仕事に没頭した。

そして・・・・・・・・・・

「OK！」

という小野監督の声がこのBスタジオに鳴り響いた。

Bスタジオに作られた校舎や結界があきあによって消され、しばらくほっとした空気が流れる。

愛子を迎えにきた母に手渡した麗香はドキドキする胸を押さえきれなかった。

夫には聞いていた凄い撮影風景、でも実際自分自身が目にしたこと

で
何倍もの昂揚感が膨れ上がっているのだ。

己を強烈に引き付ける日野あきあ、彼女の多方面の天才ぶりを思うと太刀打ちなんか

できっこない。でもそばでもっと見つめていたい。

麗香は思い切って夫にいった。

「ねえ、あなた」

「なんだい？」

「せっかく二人で作った個人事務所だけど

私、日野あきあさんと同じ事務所に入りたい」

「えっ？どうしてだい？」

「理由なんてない・・・でも、どうしようもなく自分を押さえきれないの」

じっと妻をみつめる飛龍高志。

やがてフツと顔をほころばせる。

「実は、僕も同じ事を思っていたんだ。事務所も思っていた以上大変だし

日野あきあと同じ仕事がしたくて随分無理をしたもんなあ」

「二人の心がきまつてるんだもの」

「でも事務所の女の子達が……」

「ああ、そうよねえ」

と頭をかかえたとき

「その女の子達、うちが引き取りましようか」

という声が背後から聞こえた。

振り返ると飛龍高志は良く知っているが麗香には見知らぬ女性がお盆に紙コップに入ったジュースを乗せて立っていた。

「まずはどうぞ」

とジュースを渡された麗香と高志、

「あとはお願いな」

と後ろに控える女性、実は瑞穂にお盆を渡しその中から自分の分をとって麗香の横に座った。

「九条麗香さん、あなたの御主人の飛龍高志さんはわたしの事ご存知ですが」

と喋って持っていた名刺を渡す。

「えっ？あなたが早乙女薫事務所の社長さん？」

「ええ、浅香まゆみといいます。ジュースを配っていてお話が聞かえてしまったの。」

なんだか盗み聞きしたみたいでごめんなさい」

「いいえ、そんなこと……」

「率直に話しますわね。お二人とも本当にその気ならマネージメントお引き受けいたしますわ。」

事務所の社員の方も女性ならぜひうちにきてほしいのですよ。

うちは小さなタレント事務所ですが別部門は人手が足りなくて実を言うと困っているところなんです」

「別部門？」

「ええ……彼女なんです」

と指差す方にはあきあが僧侶達となにやら打合せをしている。

「日野あきあさんが？」

訳が判らないとまゆみを見直す。

「これも御主人はよくご存知ですわね」

「はい」

「ねえ、何なの？高志さん」

「彼女は日野あきあという芸名のほか早瀬沙希という名でソフト開発で有名だと教えたね」

「ええ……えっ？そのソフトの開発で？」

「そう……でも今はそれだけじゃないんだ。通信部門で画期的な発明をして

アメリカのNASAや警察からの注文が殺到しているんだ」

「今はそれだけではないの。

どこで聞いたのかしら世界中の航空会社からの引き合いが来ててんてこまいなの。

彼女が本名で勤める会社と同じビルにうちの事務所もあるんだけど彼女の会社も大変だけど

メディアの折衝や営業をまかされているうちはもっと大変なの。だから人手はいくらあっても足りないのよ」

「凄い！」

「全く！……あの子の頭の中はどうなっているんでしょうね」

「浅香社長！ぜひおたくの事務所に入れてください。いいわね、高志さん」

「本当？そんなに直ぐに決めてもいいの？」

「はい！」

「じゃあ」

と行ってまゆみはマネージャー達を集めて二人に紹介する。

そして事務所の女優達も呼んだ。

「麗香さん。これからよろしくお願いします」

と丁寧な言葉であきあに挨拶され

本人も大スターであるのに、麗香はまるで大スターを目の前にした乙女のように

おずおずと出された手を握った。

だがあきあがハツと顔色を変えたのをまゆみ社長は見逃さなかった。

「あきあちよつと……」

とあきあをBスタジオの隅に連れていく。

「ええ〜」

「そんなあ〜……」

と声をあげるのはまゆみ社長。

事務所の女優やマネージャー達は何事かと遠巻きに心配そうに眺めているだけだ。

そのうちまゆみが比叡山の僧侶達の後ろに控えていた溇を呼んできた。

「でもこんな事信じないでしょ」

「いいわ、いい考えがある」

という言葉が聞こえてくる。

そのうち薫が我慢しきれなくなつて

「あんた達どうしたのよ」

と3人の中に入っていった。

3人が4人になつただけで話合いは続いているのだ。

皆の輪も次第に縮まっていく。

「じゃあ、聞いてくる」

と漣がBスタジオを出て行った。その後は沈黙の時間。じりじりと時間が過ぎていく。

・・・とドアが開いて漣が戻ってきた。

「いつでもどうぞだって」

「じゃあ」

と行ってまゆみ社長はまず聞いていなかったマネージャーや女優達を呼び集め何事か話だした。

その内容に顔色が段々と変わってくるのだ。

遠くからもこの様子を眺めているスタッフや僧侶達。

「じゃあ、いいわね。・・・洋子ちゃんと瑞穂ちゃん。ついていらつしゃい」

と行って飛龍夫妻のもとに歩み寄る。

「飛龍高志さん、九条麗香さん。」

今晚のあきあの大仕事にはまだまだ時間があります。

その間に近くの病院で健康診断をうけてほしいのです」

「健康診断？」

何をいつているのかと顔を見合わせ戸惑う二人。

「はい、タレントや歌手は機械でも消耗品でもありません。

人間なんです。人間はその時々病気や怪我をします。

うちの事務所は健康に働いてもらうことがモットーなんです。

ですからこの開いた時間にきっちり健康診断を受けて貰って

明日からの仕事に力をだしてほしいのですよ」

と言ってから後ろに控える吉備洋子と土御門瑞穂を横に並べて

「この二人も最近入ったばかりなので一緒に健康診断を受けて貰います。」

いずれはどちらかがマネージメントしますから、よく話し合ってください」

と結んでから

「澗先生！」

と澗を呼ぶ。

「こちらは小谷澗といって今日は京都から比叡山の僧侶の方たちに付き添ってきたお医者様なんです。そして早乙女薫の妹でもあるんです」

へえという顔の二人。

「この澗先生が全て手配してくれました。一緒に行ってください」といって澗が4人を引き連れてBスタジオを出て行った。

その後ろ姿を見送りながら

「これで良かったのよね」

「ええ、あとできちつと自分の体の状態を知ってもらわなくちゃ」

「でもあの温泉に入れてあげれば・・・」
というひびるに

「どう言って連れて行くのよ。まだ京都の地下の施設はは完成していないし」

早瀬の里には今は連れていけないし・・・」

「薫姉さん、大丈夫よ」

「大丈夫っていったって・・・」

と心配げな薫の肩に手をかけて

「私には見えるわ。麗香さんの明るい未来が」

「本当？」

「ええ、だから大丈夫！」

「薫！沙希ちゃんが太鼓判押すんだもの、大丈夫よ」と庄絵がいう。

みんな、あきあの言葉にホッと肩の力を抜いた。

その時、壁際で長いテーブルを並べた警察の詰め所から飛鳥日名子
警視正があきあを呼んだ。

「沙希ちゃん、大変だと思うけど今晚の手配の状況を見て欲しいの
と大きな地図上に赤ペンで細かく書いたものをテーブル上に広げて
いる。」

「5 kmの地点で周囲8箇所のお寺や小中高のグラウンドに祭壇をつ
くつたわ。」

そして10 kmの地点に警察官や機動隊を待機させたけれど・・・

「はい、これでいいです。ただ・・・」
「ただ？」

警察官の中で体調の優れない方や精神的に弱い方はもつと後方かさ
もなければ休ませてください」

「えっ？」

「大丈夫だとは思いますが、お坊さん達の調伏の網をくぐって抜け
出る

ずるがしこい悪霊がいらないとは限りません。

今わたしが言った方々は悪霊に精神を乗っ取られやすいので」

「判ったわ。各部署の責任者に伝えておくわ」

「もし、そういう方が乗っ取られたならこれを体のどこかに貼り付
けてください」

と切った半紙に梵字を書いた護符の束を渡す。

そして

「小野監督！」

と声をあげて監督を呼ぶ。

とんできた小野監督に

「これ、大丈夫だと思いますけれど、用心に越したことはありません

ん。

あとでこれを『ステーション』の内側に貼り付けておいてください」とこれも手書きで作った半紙の護符を渡した。

これで準備は整った。あとは病院に向かった夫妻の悲痛な叫びに耳を傾けなければなるまい。

『ボタン！』とドアが開いて真っ青な顔をした飛龍高志と九条麗香が

入ってきたのは出て行ってから4時間が過ぎ、今晚の大仕事にあと4時間とせまったときだった。

心配そうな吉こと洋子と瑞穂が付き添い、深刻な顔をした澁が後ろに控えている。

『ガクッ』と椅子に倒れこむように座る二人、

その様子を不信そうに見つめるスタッフ達。

そこに『コツコツ』と足音をならしてあきあが歩み寄って来た。

そして二人の前のパイプ椅子を逆において向かい合う形で座ったのだ。

他のものに聞かれられないように早瀬の女達がそつと周囲を囲む。

「まずは言っておきます。この結果はすでに承知していました」
生気のない顔が睨むようにあきあをみる。

「でも、その時言っても信じなかったでしょ」

戸惑いの視線があきあの顔から固く握った夫との手に移った。

「ごめんなさいね。麗香さん、飛龍さん。」

でも知って欲しかったの、健康がいかに大事かを……」

今度は二人はうつむいたまま動こうとはしない。

「大丈夫よ、麗香さん。」

わたし達、早瀬一族からあなたに健康な体をプレゼントしてあげる」

『えっ？』という顔をあきあに向ける二人。

「今の言葉だけじゃあ駄目ね。」

飛龍さん！本当は男であるあなたには話したくないの。

でも誰にも話さないということを経験に早瀬一族の・・・女の悲しい歴史を話すわ。

早瀬一族を知ってもらわなくてはさっきの言葉が嘘になっちゃう」というあきあの話にあきあを見つめる目に段々と光が灯っていく。

早瀬一族の歴史はあの安倍晴明が男の争い事に絶望して帝の三女、沙希姫に女しか生まれぬ秘術をほどこしたことから歴史が始まった。

全国にちらばる早瀬の女達・・・、

そして平成の御世、男であった沙希が今は姉となった”早瀬理沙”との出会いが

女として生まれ変わるきっかけとなったのである。

そしてそれが早瀬一族の激動の始まりだった。

沙希を中心に集まる女達、出会いが出会いを呼び、あきあの運命を大きくかえていく。

そして・・・

「ついこの間、早瀬の隠れ里で癒しの湯を見つけたの。」

男の人には残念だけど女性にしか効かない温泉だから」といつてから

「アケ姉！・・・悪いけれどお母さんの事話してやってもいい？」

「ええ、いいけどわたしが直接話したほうがいいんじゃない？」

「じゃあ、お願いするわ」
と、いつて話の接ぎ穂を有佐ケイに渡した。

「わたしの母は……」
と話し始めた有佐ケイは今の幸せを思つてか、時折言葉をつまらせて

飛鳥日名子警視正と上司であり、姉となつた飛鳥泉警部に励まされて
母の末期癌からの回復の経過を涙ながらに話終えた。

呆然と早瀬の女達に視線を這わせながら

「でもわたし、早瀬の血を引いていないし……」
「大丈夫！」

ねつとばかりに順子にウインクするあきあ。

「そうよ、わたしも早瀬の血を引いていないわ。

わたしはレイプされて偶然に、死に場所を求めて早瀬の隠れ里に彷徨い入つて救われたの。

今ではりっぱに早瀬の女よ」

「わたしも」

「わたしも」

と声をあげる、土御門瑞穂、吉備洋子、鳴海京子、大原智子、天城ひづる達。

「麗香！後のことは心配しないでこの人達の言う通りにしようよ。
僕のことには大丈夫だから。それにこんなにもいい事務所にはいなかったんだから。」

残念だけど早瀬一族には男の僕には入る資格はないけど、君は遠慮しないで早瀬の女になるといい」

「あつ、来たわ」

と手をあげて今入ってきた二人の女性に合図する。

ここにこ笑いながら歩いてくる一人の女性は誰もが知る検事総長の
牧美香子ともう一人

「あつ、お母さん」

と声をあげたのが松島奈緒警視だ。

「やっとわたしの出番ね」

美香子が笑いながらあきあに抱きつく。

「叔母様、ごめんなさい。ママは京都のお婆ちゃまのところに行つ
たままだし、

里まで行つてくれる人がいなかったの」

「いいわよ、あやまらなくても。ちょうどあの温泉に

もう一度入りにいこうかと思っていたところだから。

・・・あなたが九条麗香さんね。ではさっそくだけど行きましょ
う
か」

凄いキャリアの牧美香子にドギマギする麗香。

まさかこんな人まで早瀬一族だとは思ひもしなかった。

「あつ！叔母様。少し寄り道してこの近くに麗香さんの赤ちゃんと
お母様がホテルに泊まっておられるんです。その人達も一緒に願
いします」

『えっ？』とあきあの顔を見る麗香。

「麗香さん。愛子ちゃんは少し喘息ぎみだし、遠目だったけど
あなたのお母様は膝と腰を悪くしてらっしゃる。そうですね」

というあきあの言葉にただただ行き届いた手配に感謝するばかりだ。

妻を見送った飛龍高志が戻ってきてあきあに頭を下げて感謝したの
はいうまでもない。

さあ、怨霊に相對峙するのはもうすぐだ！

第二部 第四話

刻々と時が刻まれていく。

Bスタジオでただ1人座禅を組んでいるのは早瀬沙希こと日野あきあ、後ろに立つのは峰巖和尚。

無心になっているあきあには雑念等ひとかけらもないので峰巖和尚はただ立ってこの見事な禅の姿を見つめているだけだ。弟子の宗円も師の後ろでそれをながめている。

Bスタジオにいたスタッフ達も『ステーション』に乗り込んだ者、上にいる小野監督に付いている者と分かれていて一人の姿もない。飛鳥警視正達はすでに10km地点の前線基地に赴いているし、蓬栄上人達も5km地点の8箇所にて読経の準備を終えている。

共演者達は小野監督の後ろでモニターを見るためにもう姿はない。あとこのBスタジオにいるのはすぐ横で沙希を見ている杏奈と遠くからあきあを見守っているまゆみ社長と静香専務だけだ。

そこにマイクで小野監督からの指示が出た。

「あきあくん！君に指示された時刻がきた」

という放送で目をパチツとあげたあきあ。

首を前に向けると『ピシッ』と峰巖和尚からの気合をつける。

立ち上がって峰巖和尚に向き直り両手を合わせると

「和尚様、ありがとうございます」

と頭をさげた。

「なんのなんの、こんなに素晴らしい禅につき合わせていただき拙僧こそ礼をいいたい。のう宗円や」

「はい、わたしこそこのような高僧も及ばない禅を見させていただきお礼を申しあげます」

「さあ、あきあ」

と声をかけたのはまゆみ社長で、杏奈が差し出す真赤な陣しんじん八を受け取ってあきあの額の上で『パチン』と締め付けた。

そして、次には杏奈が差し出す真赤な手甲てうかうを右手にはめる。

金属でカバーされたこれらは昔ドラマで使われていた小道具。でも女優の怪我を防止するため、より頑丈に作られているのだ。

「沙希ちゃん、がんばって」

と静香から渡されたのは被衣かっぎ。

昔、牛若丸が五条大橋で弁慶と戦ったとき笛を吹きながらこの被衣をかぶってあらわれたのだ。

この衣装は小野監督からの指示で、さきほどセーラー服にこの小道具をつけた時、

共演者達から

「格好いい！」

「素敵！」

と嬌声があがった。

なるほどキリリとしてふるいつきたくなる美丈夫ぶりだ

中堅女優の糸川早苗などぼか〜んと見とれて周囲に笑われるほどだった。

「じゃあ、まゆみ姉さん。静香姉さん。杏奈姉さん。行ってくるね」

と言って峰巖和尚と宗円和尚の手を取るとフツと消えた。

三人共しばらく誰もいなくなった空間を見つめていたが

「行きましょう」

というまゆみ社長の声で三人の脚は上へあがる階段に向かった。

2度目とはいえ、あきあが言わく異次元の近道は宗円には不気味なものだった。

いわばゼリーののような中をくぐり抜けるのは、ぞつとしない。

いきなり抜け出たのは機動隊の真中であった。

驚く警官達、何もない空間からいきなり二人の僧侶とセーラー服の少女が

現われたのだからいくら豪の者でも驚く。あやつく警棒をふりあげた者もいたほどだ。

そんな中をあきあは平気で進み、そのあとにつづく二人の僧侶。

「あつ早瀬さん」

と声をかけたのはなじみになった間警視だ。

「間さん、叔母……いえ、飛鳥警視正は？」

「あのバスの中です。あの車が本部となっていますので」

「ありがとうございます」

といてバスまで進んでドアをあけた。

「あつ、沙希ちゃん」

と車の中から声が聞こえ、飛鳥警視正が降りてきた。

そのあとから見知らぬ婦人警官が3人続く。

「沙希ちゃん、がんばってね。怨霊相手はわたし達は無力だけど応援しているから絶対に負けちゃ駄目よ」

「はい」

といてニツコリ笑うあきあ。

後ろの3人の婦人警官は両手を組んで足踏みしている。

あきあにあって余程嬉しいのだ。

「沙希ちゃん、この子達松島奈緒警視のファンらしいの。
奈緒警視は『ステーション』に乗り込んでいるでしょ。
だからどうしてもいつてついで来たのよ」

「奈緒姉の?・・・ありがとう」
といて1人1人に握手をしていく。

「明日の帰りの電車いつもの車両に乗っては駄目よ。葉月礼亜さん」

「いつもあなたの後をつけているのは2軒隣の大学生だわ。森田
亜季さん」

「昨日買った牛乳を飲んじゃ絶対駄目!判った?篠田由紀子さん」

3人とも呆然として突っ立ったままだ。

「叔母様、わたしの今言った事あの人達に絶対守らせてね。
特に森田亜季さんには警護をつけてあげて・・・でない大変なこと
になる」

「わかったわ。後はまかせて」

あきあはニツコリ笑うと峰巖和尚と宗円和尚の手を握ると
スーと宙に浮きそのまま速度をあげて飛んでいく。

「おおっ」

警官達から声があがる。

警官の中には今夜の取り締まりに不平を持つものが少なくなかった。

「なに!怨霊だつて!ふざけるな!!」
と怒り出すもの

「へん!怨霊なんていると思うか。おかしな上司がいるもんだ」
だが、今のあきあの飛行を見てそんな声が消えていく。

ありべかざる現象なのだ。警官の中にはあきあが銀行強盗を捕まえた般若童子であるのを知っているものも数多くいたのも確かである。

そして、5 km 地点道路のど真ん中にごま祈祷の祭壇が用意されている前に

あきあと二人の僧侶が降り立った。

ここには蓬栄上人以外、近くの寺から狩りだされた僧侶が大勢いたが

空からセーラー服の少女と僧侶が二人空から降り立ったものだから驚きで腰を抜かす者が続出した。

この様子を見て蓬栄上人と峰巖和尚は顔を見合わせて宙を見上げたが

ついには坊主共の腰抜けぶりに峰巖和尚が

「カァー!!!」

と気合をいれた。

「情けない！それでも比叡山で修行したのか！もう一度修行をやりなせせ！」

「ああ、この姿。世俗に安穩としていたせいなのか」

と蓬栄和尚が嘆くこと嘆くこと。

だが、あきあはニツコリ笑って

「蓬栄上人様！峰巖和尚様、今は怒りはなしですよ。悪霊・怨霊に付けこまれてしまいます」

「おう、そうだったわい。どうも千賀子殿にはいつも教えられますわい」

「ほんに・・・ほんに・・・」

蓬栄上人も峰巖和尚も普段の柔らかな表情に戻ったが

「お主達、いづれ比叡の本山から再修行の知らせが行くと覚えてお

け。

じゃが、今夜はお主達が昔必死に培ってきた修行の成果をださなければ

悪霊・怨霊に付けこまれると知れ」

必死な目で見上げる僧侶達の目に

「一心不乱に読経することじゃ」

さすが同じ修行した仲だ。峰巖和尚のムチ、蓬栄上人のアメと役割分担が行き届いている。

「宗円！」

「はい！」

「お主がこの者達をまとめあげよ」

「わかりました！」

宗円はだらしなく座り込んでいる僧を立たせ、読経できるようきちんと役割を手早く振っている。

さすがいわく付きの寺を守ってきた僧侶だ。ここにいるその他大勢の僧とは出来が違った。

「じゃあ、お上人様、和尚様。もう時間ですから行きます」

「おおう、あきあ殿……」

「千賀子殿……」

頑張れとはいえない。

強大な怨霊平将門に相対すこの小さな美少女に秘められた仏の力を知る二人だったが、いかにも可憐すぎる。

だが言葉をグツと飲み込んでただ無言で見送る。

飛翔するあきあを見送る僧達の目の恐れは常識にドツプリと浸かった証拠、

ワナワナ震えながら上人に問う坊主の言葉は

「お……お上人様、あの……お方は……」

「お主達には見えぬのか・・・あのお方の内におわす菩薩様の御姿が・・・」

「ひえ〜〜ば・菩薩さま〜」

「あの方に秘める仏の力・・・それを使って今からあの復活した怨霊・平将門を

調伏しにいかれたのじゃ。たったお1人で」

「た・・・平将門の怨霊・・・」

「そうじゃ、じゃがどれだけ坊主達が集まってもあの方にはかなう者はいない」

「なにせ、京の結界を張りなおし、比叡山の結界を破ってたったお一人で比叡山に

乗り込み武者僧とやりあつたお方じゃ」

「あの荒っぽい武者僧と？」

「そうじゃ、そして自ら破つた比叡山の結界をより強固に張りなおしてくださいました」

「結界をはりなおす？」

自分達にはありえない力・・・やはり恐れが湧き上がる。

僧達を難なくまとめ上げた宗円、祭壇に並ぶ蓬栄上人と峰巖和尚。

そして・・・あきあからの合図を待つだけだ。

やがて

（蓬栄上人様、峰巖和尚様、宗円和尚様。今です）

と言う声が僧侶の頭の中に響いたとたん、3人の声で一片の狂いもなく読経が始まった。

あと7箇所の場合でも武者僧によって声を合わせていた。

少し時間を戻す。

上人達から分かれ、一人飛んできたあきあ。

平将門の首塚から200mほど手前でありたった。

被衣を被り名器『緋龍丸』を取り出すと

自ら『ステーション』の位置を確認しテレビ局にいる小野監督に話しかける。

(監督！0時きっかりに始めます)

「おお！あきあくんか」

この部屋にいる全員にあきあの声が聞こえているのだ。

「用意できたのか」

(はい、万全です。ではキューを出してください)

「わかった。あと30秒・・・15秒・・・5秒・

4・3・2・1・ハイ」

横笛を口に当てると同時に歩き出した。

退魔の笛の音が夜のしじまに流れ渡る。

小さな雑鬼たちが吹っ飛ばすように消滅していく。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ここはメインステーションの中

インカムをセットした瑞穂がカメラマンの横に座り小野監督の指示を『各ステーション』に流すのだ。

それとは別にジョージ・ルーク監督の横に座るゆりあはモバイルを目の前におき

ルーク監督の細かい指示を『各ステーション』にいる早瀬の女達に流す重大な役目を

背負っている。だからゆりあのモバイルにだけ11個の切り替えス

イッチが付いている。

そしてもうひとつこの『メインステーション』だけ各ステーションが映すモニターがついている。

これはジョージ・ルーク監督の要望によるものだ。

「あつ、これは・・・」

「おう、ファンタスティック！」

カメラマンとモニターをみていたルーク監督が同時に声を出した。

今、大きな月が余計に大きくなり、その月明かりの中を

日野あきあ・・・いや、星聖奈の姿が影絵のように写っているのだ。

「音はとれているのか？」

急ぎゆりあが訳した言葉を小野監督に伝える。

「音は良くとれています」

「OK！」

いくら練習したかと言ってもテレビ局の中だ。

現場ではかなり違う。細々とした指示がルーク監督からとぶ。

ゆりあも最初はスイッチを間違ったり遅かったりしていたがすぐ慣れた。

現場でのアングルは全面的にルーク監督にまかされているから

小さなことでも指示を飛ばしていたがさすがはプロのカメラマンだ。

監督の言いたいアングルをすぐつかみ、言われる前に修正していく。

ここでも日本のカメラマンの優秀さを証明していた。

瑞穂は英語は全くわからなかったが、こうして身近に聞いているとなんとなく言っている事が判るのが不思議だ。

「ようし、出だしはOK！」
ニンマリと笑うルーク監督。

.....

笛の音が止まった。
首塚に向かって立つ。
そして

「平将門！」

精一杯声を張り上げてその名を呼ぶ。

「怨霊となっても己の野望のために罪無き女性を次々と殺めた所業、
断じて許さぬ。」

よってこのわたしが天に代わって成敗いたす。出てこりやれ！」

903

すると結界の中、白いモヤが一瞬に覆い尽くし、
『コツコツ・・・』と馬の蹄の音が聞こえてくる。
馬上にい丈夫だが首の無い平将門の体から
「クツクツクツ・・・女の分際で何を申す」

「あつはははは・・・男の分際で偉そうに・・・」
と聖奈が見下したようにいうと
将門は腹立たしげにムチを『ピュー』と振り下ろした。
そして、改めてじつと聖奈を眺めているようだ。

.....

「こちら、メインステーション。現在の状態を報告してください」

前回で慣れているとはいえその素早いスイッチングの切り替えは感心するばかり。

ルーク監督もその様子を見てすぐにまかせきつっている。

「こちらステーション2・・・現在異常なし！」

・
・
・
・
・
・

「こちらステーション12・・・現在異常なし！」

そんな報告が次々はいってくる。

そして中央となるテレビ局の小野監督に報告するのだ

「こちらメインステーションから報告します。各ステーション異常ありません」

報告を終えた瑞穂は目の前で繰り広げられる一触即発の状態を手を握って見つめる。

「頑張つて！沙希！」

と思わず口に出してしまう言葉。そんな瑞穂を横目で見て元はといえば自分が原因でこんな大騒ぎになったのだ。

唇を噛み締め目の前のあきあを見つめる。

あきあを見たのはあのドラマが初めてだった。

それまでは噂を聞くだけで耳を通り過ぎていった人。

ドラマを見て・・・その時は心ここにあらずという状態でただ見ているだけだったが

大した特撮だと思った。・・・それが・・・それが・・・本物だったなんて。

ゆりあは『般若童子』に助けられ死ねなかった。姉を殺され、その口惜しさに自分で犯人を見つけようと必死になった。

のんべでドジな姉であったが苦勞して自分を大学まで出してくれ姉が大好きな

ゆりあであった。だからせっかく入った一流商社も休みがちになりついには解雇されてしまったのだ。

世間を甘く考えていた自分に腹も立つが、その時は自分は正義をしているのだから姉の事件を解決したら復職できるだろうと勝手な思い込みをしていた。

それは、会社が自分の能力を買っていてくれ、自分が進んでいたプランニングも

順調に進んでいたため、自分がいなければ成功しない。

だから、復職さえしたら続けることができる。

しかし、それは完全な錯覚であり世間知らずのお嬢ちゃんではなかった。

仕事は後輩に受け継がれ、大成功を納めていた。莫大な収益をあげさつそうと会社の中を闊歩している。

ついこのあいだ私物を会社にとりに言ったとき、

あれほど可愛がっていたその後輩と廊下で会った時

挨拶もせずジロリと足元から顔まで視線を移してフンと鼻で笑って通りすぎていったのである。

口惜しくて涙がでた。自分は敗残者で後輩は成功者なのだ。社会はこんな仕組みなのか。

でも会社をおっぱわれたは勿論自分の我儘な行動からだ。

他人にどうのこうのいうことが出来ない。

ここで死神に取り付かれたのだろう。

お金も底をつき、この二三日は満足な食事もとれなかった。

それもあのビルの屋上に足を運ばせた原因となった。自暴自棄になったのである。

不思議と恐くなかった。何も考えずに飛び降りた。

でも地上にぶつかり死ぬはずが4階近くで宙に浮いたとき急に恐くなった。

上空からあの人が飛んで降りてきてその腕に抱えられたとき体が震えだし、とまらなくなっていた。

外聞もなく大声で泣きたかったが

地上に降り立ったときいきなり、助けてくれた『般若童子』に怒鳴りつけられたのだ。

『無限地獄』？そんなこと聞いたことがない。

憤然として立ち上がるうとしたが、腰が抜けて動けない。

ようやく助けおこされ、連れていかれたのは警視庁だ。

間警視と呼ばれたおじさんがゆりあの事情聴取を取り調べ室というより

広くて明るい応接室でやってくれた。

でも何も話さなかった。間警視は怒鳴りつけることはしなかったがゆりあの態度に段々表情が険しくなってきた。

ゆりあ自身どうしてなのか・・・わからない。

素直に口に出せば楽になってせいせいするのに・・・名前すら言っていないのだ。

そのうち、あきれはてたように出て行ってしまった。

このままゆりあ自身どうなってしまうんだろう。

目の前がボウっとしてなにも考えられなくなってしまった。

お腹も『キューキュー』となりだす。

「あゝあ、お腹がすいたなあ……」
ぼそつと口に出た言葉……

それをちょうどお茶を持って入ってきた自分の母親の歳ぐらいの婦
警さんに聞かれてしまった。

「あら、お腹がすいていたの。あの間警視をてこずらせる原因はお
腹が減っていることかな」

「いえ、別にそれが原因ではないんです」

「わかつているわ。でも人はね、お腹が好くと不機嫌になるし、
口もききたくなくなるの。いいわ、待ってなさい」

といって部屋を出て行ってしまった。

そして、次に入ってきたときは大きなお重と小皿をお盆を持った若
い婦警を連れてきた。

「さあさ、有佐さん。広げてちょうだい。あつと、泉警部達に召集
をかけた？」

「はい、飛鳥警視正。警視正が間警視に報告しておられる時に電話
しておきました」

警視正？余り警察のことは知らないゆりあにも警視正がさきほどの
間警視より階級が上なのはわかる。

そんな偉い人がなぜ？……わけがわからない。

「松島警視にも？」

「はい、警視総監に許可を得てからすぐ来られるそうです」

（警視総監？一番偉い人じゃない。その近くにいる人がくる？偉い
ことになったわ）

次々と部屋に入ってきた女性達、

警察というガチガチの階級で縛られた世界……でも、ここにいる

婦警たちはみんな優しい笑顔の可愛い人ばかりだ。どうして？とか名前は？とかいつさい聞かない。あの警視正と同じ制服組が3人と私服の女性刑事が3人・・・そのうち2人の双子が警部だという。でもそれぞれ階級に関係なくみんなワイワイと楽しそうに食事をしている。

「でも、操姉さんがこれだけの量のお昼ごはんを用意しておいてくれて助かったわ」

「本当に・・・これだけたくさん食べられるのかしらと思っていたけど・・・ほら・・・」

もうお重の中は空に近い。ガツガツと一心不乱に食べ続け、今も箸を動かし続けている自分に気が付いて恥ずかしくなり箸をおいた。

「あつ、ごめんごめん。悪気があっていったんじゃないの。」

さあ、もっと食べてわたし達もうお腹がいっぱいだし、残ったら捨てちゃうから

もつたいないでしょ」

でも、それでは・・・とってたべられるものではない。

箸を小皿に乗せてテーブルに置いてしまった。

「京、又あなた余計な事を言って・・・」

「ごめんなさい。あまりに見事な食べっぷりだったんで・・・つい・・・」

からかったと言いたかったんだろうが。

「でも、あなた。余程お腹がすいていたのね。だから、死神にとりつかれたのよ」

「えっ、じゃあこの人が？」

「そうよ、沙希ちゃん・・・いいえ『般若童子』に助けられたのよ」

「あの子に？」

「そうよ、でも困った事に何も話してくれないの。名前さえも……」

「名前だけでも教えてくれりゃあねえ」

と皆の視線が集まってくるのでつい視線がさがってしまふ。

そのとき

「ねえ、お母さん」

「これっ！公私の公よ。庁内でははじめをつけてちょうだい」

「あっ失礼しました。飛鳥警視正殿」

といつてから

「京都のお婆ちゃんに報告しないでいいんですか？」

「そうだったわ。テレビでこれだけ大々的に放映しているから、もう知っているかもしれないけれど」

と言って立ち上がって隅にある電話をとる。

「あのう……」

とあと片付けをくださった若い婦警達にためらいながら声をかけたゆりあ。

「なあに？……」

皆の注視の中

「あのう、……『般若童子』ってどういう人なんですか？」

と思い切つて聞いてみると、

さきほど今電話をかけている警視正に叱られていた私服の婦警……娘なのだろう、

が新ためて座りなおして

「どうして？」

「えっ？……それは……」

と言葉がつまつたが思い切つて

「わたしあんなに怒鳴られた事、生まれて初めてなんです」

「えっ？『般若童子』に怒鳴られたの？・・・へえ、珍しいわねえ。あの子が怒鳴るなんて・・・」

「えっ？あの子って？」

「いえ、何でもないわ。こっちの事よ。・・・ねえ」

と周りの婦警に笑いかけてごまかしている。

不信げに見つめるゆりあの視線を受け止めた婦警は

「わかったわよ、知っているわよ。『般若童子』が誰かが・・・でも言うわけにはいかないの。一応国家機密になっているから」

国家機密？驚くような言葉だ。わたしって国家機密にふれている？ぞっとしたが、一度死んだ身だし失うものも何も無い。

住むところも既に無い。ただ、こうして生き延びた以上、自分の人としての誇りだけが唯一の財産だ。

「会わせてください！」

自分を死の淵から救ってくれた『般若童子』に会いたい、強烈な想いが込み上げてくる。

「『般若童子』になら何もかもお話します」
つい声が大きくなった。

「いいでしょう。会わせてあげます」

電話を終えた警視正がそう言いながら戻ってきた。

「警視正！」

「お母さん！」

「叔母様！」

「いいのよ。京都のお母様に相談したら、

きっとその人は『般若童子』に会いたがるはずだから、その時は会わせてあげなさいって。

きつとあの子はその人を今の地獄から救ってあげるでしょうからですって。

さすが人間国宝ね。何もかも読まれておられるわ」

「心配してなかったの？」

「そりゃ心配してるわよ。でも里でのあの子を知っているでしょ。

仏様を身の内に秘めたあの力を・・・お母様も仕方がないと諦めているのよ」

「全くあの子だったら、皆をこんなに心配させて・・・」

「でも、あなたはそんなことを言えないわよ。

あの銀行の事件ではあなたはあの子のおかげで完全に死んでいたのを助けられたのですからね」

「そうよ、京は沙希を叱る資格はないよ」

「チエツ」

「あゝあ、今朝まで一緒にいたのに・・・早く顔を見なくなつたわ」

「おゝお、奈緒さんも言うようになったわね。おっと、今は公私の私で言ったのだからね」

「ねえ、早く行きましょよ」

と制服姿の婦警が皆をせかすように言った。

「結局、アケちゃんが一番逢いたがっているようね」

皆の話を聞いてゆりあがわかったのは『般若童子』がこの人達の近しい人だということだ。

そしてパトカーとあの制服の婦警、有佐ケイという婦警の車に分乗して

あるホテルに連れていかれた。

「ここよ」

とドアを開けた瞬間、部屋の中であの天才と言われる早乙女薫がこれも天才子役といわれている天城ひづるを追い掛け回しているシーンだった。

驚いたことにゆりあを連れて来た警視正が

「これ、薫！何をしているの！」

と怒鳴ったことだ。一度にしゅんとしてしまった天才女優早乙女薫。

一体この警視正さんはどういう人なのか？

その時はまさか姉妹だとは夢にも思わなかった。

一方追い掛け回されていた天城ひづるが

「京！、泉！薫姉さん怖かったよう」

と双子の私服婦警にとびついたのにも驚いた。

結局、

「誰が京じゃ」

「誰が泉じゃ」

と頬を捻られこれもまたおとなしくなった。

この部屋にいた。有名な小野監督と親しいことにも驚かされたし
今一番有名な女優日野あきあが横にいる婦警達と血縁関係にあると
聞いて目を白黒させた。

そして

「沙希ちゃん。又やったんだって？」

「あっ、間さんに聞いたのね」

「そうよ。それと沙希ちゃんに、警視総監がよろしくって」

「長谷部の叔父様が？」

「ええ、市民の命を救ってくれてありがとうって。それでね・・・」

と日名子が少し声をおとして

「あなたに会いたがっている人がいるの」

「わたしに？」

「そうよ。さあ、こっちにいらっしやい」

と言つ声でゆりあは他の婦警に押されるようにそばに寄って行った。

「あのう、『般若童子』は？」

「この子がその正体よ」

「えっ？でもこの人は……」

「叔母様、いいわよ。わたしが話してみる。さあここに腰をかけて」

対面に座った日野あきあの目は恐いほど澄んでいた。

でも、冷静にいられたのはそこまでだった。

顔を見ただけで自分の名前を、そして現在の自分のおかれている状態までも

あきあに言い当てられてしまった。体と心に衝撃が走った。

恐怖で手足が震え心も震えた。逃げ出したかったが体が全く動かない。

蛇に睨まれたカエルと同じで身がすくんでしまっていたのだ。

でも、そのうちあきあの優しさに気が付いた。

その笑顔で自分をあたたかく包みこんでいてくれるのだ。

自分に負い目があり急には素直にはなれないが、そんな小さなこと吹き飛んでしまった。

あれよあれよと思わぬ方向に話が進んでいくのであっけにとられて何も言う事が出来ない。

日野あきあを中心に……いや日野あきあだけが皆の期待を込めた視線の中

動き回っているのだ。そしてあきあに声をかけられ、命令されるのを大勢が待っている。

それはそうだろう、あんなこと出来るのは世界中であきあだけだ。

ゆりあもあきあの不思議な術のおかげで姉の霊と逢うことができたし、

一生懸命に長い月日をかけて調べてわからなかったことがほんの十分で・・・そうほんの十分で解明してしまった。

全て姉ののんべと極端な恐がりのせいで思いもよらぬ歴史上有名な平将門に

殺害されたのだとわかったのだ。

ガクつと体の力が抜けてしまった。怨霊のせいではどうしようもない。

そう思った。でもあきあは違った。あの恐ろしい怨霊を退治しようというのだ。

とにかくあきあの不思議な術は本物だった。

あきあの体から不動明王と菩薩が見えたときには

もうゆりあの信じていた常識・・・いや信じさせられていた常識なるものは

瓦解した。信じていたものがなくなるといふことは不安なことだ。

だが、ゆりあは一度死んで生まれ変わった身だ。

もう何も恐いものはない。そんなゆりあに幸運がもたらされた。

まゆみ社長に誘われて、いきなり早乙女黨事務所に入社できたこと。

そして、早瀬一族という女性だけの集団、・・・あきあも、あの婦警達も、

マネージャー達も、あのまゆみ社長までもが早瀬の女だと知った。

飛龍高志と九条麗香という今だれもがうらやむカップルに襲った悲劇、

それを誰よりも先に知ったのがあきあ・・・全てあきあによって麗

香に救いの手が差し伸べられた。

夫妻を取り囲む女達、それを遠くから眺めていたがポンと肩を叩かれ振り返った。

そこにはどこからか戻ってきた婦警の松島奈緒が立っていた。

「ゆりあ、あなたも来なさい」

「えっ？わたしも？いいんですか？」

「いいわよ。あなたも私達一族のことよく聞いておきなさい。あなたも今日から早瀬の女なのだから」

言っている意味はよく判らなかったが、疎外感が急に消えていった。自然と足が軽やかに奈美について行く。

そこで知った早瀬一族の歴史、平安の世から続く女としての哀しみ、

そして癒しの湯？・・・よくは判らない言葉が出てくる。

こそつとゆりあの耳に

「早瀬の隠れ里にある秘宝の温泉のことなの」

そしてそこであの若い制服の婦警の有佐ケイのお母さんのことを聞いた。

末期の癌で後半年の命だった？・・・えつと・・・それが、たった三日、

温泉につかっただけで病巣が全て消えた・・・ですって？凄い！

もうこの頃にはあきあについてのは全て信じられるようになっていた。

九条麗香も早瀬の女になった。

「ゆりあ、あなたも近いうちに里に行くことになるからね」

男子禁制の早瀬の里、いったいどういふところなんだろうか。

なんだかこの先の人生、楽しくなってきた。

「……と急に肩をポンと叩かれ、ハツと気が付いた。

ジョージ・ルーク監督が心配そうに顔を覗いていたのだ。

「ゆりあ、どうしました？」

「あつ、いえなんでもありません」

そんな返事をしたゆりあだが、でもルーク監督はとっくにゆりあの心の中はお見通し済みで

「ゆりあ、あなたのこれからの人生には今までと違って素晴らしいものが控えています。

でもそれを考えるのは明日からにしてください。今は目の前のあきあだけを見ていてください」

「あつ！……いやだ！」

思わずポツと赤くなつた頬を両手で押さえる。

どれだけ自分がボウツとしていたのかが、今のルーク監督の言葉でよく判つたからだ。

追い討ちをかけるようにスイッチングしながら

「そうですね、さつきから見ているとくやしがつたり、泣き出しそうになつたり

そう思っていたら急にニコニコしたり、まるで百面相……」

言葉は少しきつかったが笑いながら瑞穂がいうので腹がたたない。

そつえばはまだ詳しくは知らないが、この瑞穂という人も京都で最初に『般若童子』に助けられた人と聞いた。

「さあ、星聖奈が変身するわよ」

と瑞穂が声をかけると、急に『メインステーション』内に緊張が走つた。

……

.....

被衣を振り捨て独鈷を取り出した聖奈、それを見た将門が

「女！そんなもので何をしようというのじゃ」

とあざ笑うのを無視して

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』・・・変身！・・・天聖ルナ！」

と両手で持つ独鈷を胸の前で構えて言うときあきあの身体が1mほど浮かび上がる。

あきあの身体からセーラー服が離れて、細い布に変わりあきあの裸体の周りを回っている。

そしてその布が光沢のピンクに変わり、あきあの身体に張り付きだすと

あきあの身体が変化していくのだ。体が縮まり顔も髪も変わっていく。

そして・・・

「天聖ルナ！」

といつて両手をあげ上で交差させると胸の位置にそのまま下ろし両手をクロスさせたまま

「参上！」

と言って地上に降り立った。

「なに？！女！その力はなんじゃ・・・おおっ、その力じゃ、その力じゃ」

将門から喜びが溢れる。

「その力さえあれば長年思いつづけていた我らもののふの国が築ける。」

女！貴様の命もらいうけるぞ！」

「あはははは」

「何がおかしい！」

「もののふの国だって？・・・そんなものお前のただのたわごとじゃ」

「なにを！」

「元来、ものふとは万民のためその命惜しげもなく捧げる男のことじゃ、

お前のように、か弱い女を己の野望のために命を奪う怨霊ごときが使う言葉ではない」

「この・・・小娘が・・・言わせておけば・・・くそっ、この結界さえなければ・・・」

『ギリギリ』と歯を噛み締める音がきこえる。

「その結界がなければどうする？」

「この手でお前の心の臓をえぐりとって、その血をすすり・・・その肉を餓鬼どもにくれてやるっ」

「ほう、面白い！ではその結界を解いてやるっ」

「なに？！」

「ふふふふ・・・私は怨霊ごときにはやられない。だから、結界を解いて闘いの場を与えてやるのだ」

「といって聖奈は宙に五芒星を描き、九字を切った。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』・・・ええい！」

地を打つとそこから光が走り、首塚を覆っていた結界がメラメラと焼け落ちるように消え去った。

「・・・と塚の中から、怨霊・悪霊の類が喜びの雄たけびをあげながら

空へと飛び上がってくる。

いい獲物だとばかりにルナに襲い掛かってくるものがあつたが、

ルナが破邪の剣を一振りした瞬間、あっというまに消え去り、光の玉となって天に上っていった。

これは手ごわいとばかりに怨霊・悪霊共は向きをかえ四散していく。それを見ていたルナ・・・僧侶達の読経が怨霊・悪霊を調伏することを願い剣を納め両手を合わせて

「蓬栄上人様、峰巖和尚様、宋円和尚様、天鏡さん、そして武者僧さん達、

あとはおまかせいたします。何卒よろしくお願いします」

と小声で僧侶達の健闘を祈った。

こんな将門の怨霊を無視したルナの行動・・・だが、一瞬たりとも油断はしていなかった。

『コツコツ』と響く蹄の音、・・・ぬぐつと黒い影法師が聖奈の影を消し去った時、

ルナは前方へ2度3度と回転して最後に半回ひねって着地した。

大きな馬にこれもがっしりとした体格の平将門、月明かりの中に長い槍を持ってこちらを睨みつけている。

目が真赤に光っているのだ。

・・・そう、ルナが結界を破ったことにより、怨霊・平将門の首が

蘇ったのだ。

「おや？、人らしくなつたじゃない」

「黙れ女！世迷言もそれまでじゃ。わしにこの首が戻ったからには・・・

天下無双と呼ばれた平将門に戻ったからには、

例え力が戻らずともお前のような女には負けはせぬ！」

「どうだか？」

「なにを？・・・もう一度言ってみろ！」

「おや？・・・あんた！首が戻ったといったが、その首はただのく人形の頭だったのじゃあないのかえ」

と人を喰ったようなその返事に『ステーション』に乗っている多くの人も

テレビ局のモニターで見ている人もヒヤツとしたのは確かだが、こんなアドリブをいうあきあの映画人としての素質に舌を巻いていた。

あのジョージ・ルーク監督も眼を大きく開け、ただ眼の前のあきあを見つづけていた。そして

「かなわない」

と小さな声で囁いたのをゆりあは聞き逃さなかった。

「小娘！・・・言わせておけば・・・ふぬ！」

と構えていた槍を繰り出してきた。

さすがに平将門、怨霊とはいえその切っ先の鋭さは

見ている者を縮みこませたが、ルナは予期していたのかふわっと飛び去り、

驚いた事に将門の背後に降り立った。

将門は見えぬ背後の敵に強烈な肘打ちを見舞ったが、

すでにルナの姿は後ろに回転しながら5mほど後ろに立っており、その顔には笑顔が浮かんでいるのだ。

将門は正直、舌を巻いていた。

豪放磊落で天下無双といわれたこの平将門をこうして愚弄しつつ、恐がりもしないし緊張もしていない。ただ、自然体で対峙しているのだ。

こんな小娘みたことがなかった。目覚めるまでの長い年月・・・こんな女が

生きる世の中になったのか・・・と、目の中に入る小娘の後

るから

忍び寄る数個の影、・・・将門は見た。刀身の煌きと槍の切っ先が

天聖ルナの体を刺し貫いたと思つた瞬間、ルナは宙高く浮いていた。

そして、持っていた剣を頭上高くに両手で持ち上げ、

左手の親指と人差し指で刀身の鍔元を掴み、右手でゆっくりと鞘から抜いていく。

青白く光った刀身を振り上げると、

「破邪！雷光剣！・・・天へ帰れ！・・・」

声が大きく響くと振り下ろされた刀身からか、雲ひとつ無い天空からか

激しい雷光が地に・・・いや、襲つた将門の配下達の身を貫いた。

「殿~~~~！」

「おかしら~~~~！」

哀しげな声が聞こえたのが一瞬、小さな光の玉となり天上へと昇っていく。

.....

「す・・・凄い！・・・」

『ステーション』やテレビ局で見ているもの全てから声があがる。

特撮映画では良く見るシーン、しかしこうして本物の怨霊と戦うあきあ、

そして『破邪・雷光剣！』なんて台本に出てきもしない剣の技、

天を裂き地を裂き、怨霊を切り裂いた凄まじい大技・・・、
だが良く見ていると怨霊の魂が光となって昇天していく。

今は異形の者となったが生きていた頃は人だったのだ。

いろんなしがらみで地に縛られていた魂が天に帰っていく。当たり前といえば当たり前だが何と哀しい情景なのだろう。そして何と美しい情景なのか。日野あきあ・・・全くなんて女性なんだろう。

警察官というより愛する沙希を見守るということで乗り込んだ『ステーション』。

以前のドラマに立ち会っていた瑞穂や智子に話を聞いてはいたが目の前でこうした人ではないものとの闘いを見ていると

修羅場を潜り抜けてきたと思っていた京も泉も洋子もとんでもない錯覚だと思い知らされる。

こんな闘い見たこと無い。現在、柔道や剣道の有段者と自慢しても一体何になるのか

相手は真剣なのだ。その鋭い切っ先、よくも自然体であんな鋭い相手の攻撃に対応できるものだ。

ましてや相手は怨霊とはいえ武将として名を馳せている平将門、簡単に倒せる相手ではない。

そんな将門を翻弄しながらも軽々とかわし、気負いもない。計り知れない沙希の能力を思うと身体が熱くなってきた。

歯の根も合わぬほど『ブルブル』と振るえるのは女刑事達だけではない。

キャリアとして現場にいったことが無い松島奈緒警視も、内勤である

有佐ケイ巡查もそして、姉でありながら目の前で戦う妹沙希を見つめる理沙だって同じだ。

思わず眼を閉じてしまうシーンが幾度もあった。

臆病なのではない。これが”死”の淵での闘いを見つめる当然の反応なのだ。

これは10kmの地点でモニターの大画面を見つめる飛鳥日和子警視正だつて

テレビ局のモニターを前にした早瀬の女達だつて……。いや、その他大勢の警察官だつて、共演者だつて、スタッフ達もが同じなのだ……。

いや、だからこそ沙希の陰陽師としての術の凄まじさと繰り広げる体術の見事さには開いた口が塞がらない。

一方、『メイנסテーション』内では一番冷静なのが、前回同じ仕事をした瑞穂だけで、

テレビ業界では超一流と言われるカメラマンはさすがプロだ。

カメラアングルはバッチリだし、その画像の美しさは小野監督もルーク監督も

賛辞を惜しまない。だが、その足は小刻みに震えているのを瑞穂は見逃さなかった。

ゆりあも体が固まってしまったように目の前で繰り広げられる剣技を見つめていたが、

いつのまにかゆりあの肩においたジョージ・ルーク監督の手が

『ギユツ』とゆりあの肩を掴みあげた為、

「痛い！」

と小さな悲鳴をあげてしまった。

その声にルーク監督はゆりあの顔と自分の手を見つめながら

「アイム・ソーリー……」

と答えたが、はっと我に返ったのか猛然とゆりあを通じて各『ステーション』に指令を出し始めた。

こんな一生にあるかないかの可憐な少女の闘いに立ち会えた幸運を神に感謝しながら

へたなアングルで後世に残されたらたまるか、モニターをチエツ

クしながら
各『ステーション』の位置を修正していく。

.....

「小娘！・・・よくもワシの家来達を・・・」

「あら、いけなかった？だって彼らを本来の姿に戻して行くはずだった場所へ

戻してあげただけなのに・・・ああ〜」

と急に地団駄を踏んで

「あなたに叱られる筋合いはないわ」

と将門に破邪の剣をつきつけながら、そんな言葉で応酬する。

まるでただの喧嘩をしているような態度なのだ。

馬鹿にされていると思った怨霊・将門憤然と再び槍をくりだした。

切っ先が貫いたと思う瞬間、ルナの姿がそこにはない。40〜50cm

横に移動

しているのだ。しかも円の動きなので柔らかくまるで日本舞踊を舞っているように

眼にうつってしまふのだ。そして

「おのれ！こしゃくな・・・ええい！」

と鋭い気合でルナの身体を狙った瞬間、ルナは舞い上がった。

そして、驚いたことにストンと降り立ったのは将門の豪壮な槍

・・・あの細い槍の上だったのだ。

まるで『牛若丸』の八双飛び・・・相手は弁慶ではないが。

将門はこんな相手は初めてだった。天下無双と豪語していた我が身、

冷や汗が鎧の下で滴り落ちているのが判る。
小娘と軽んじていたのが悔やまれた。人は外見ではない。今までで
最高の強敵なのだ。

槍をどう振ろうとも槍から根が生えたようにルナは動かない。

そして、重さをも感じない、・・・槍だけの重さしか感じないのだ。

将門自身、身の前の小娘が恐ろしい化け物のように思えてきて慌て
て槍を放り投げた。

『ガオ~~~~ウ~~~~』

突然、将門が天に向かって吼えた！

冷たい冷気が周囲を覆う。

.....

「寒い！」

突然、氷点下という寒さが『ステーション』内にも襲ってきた。

カメラマンや早瀬の女達、そしてスタッフは夏の服装だけなので

『ガタガタ』震えるだけでどうしようも出来ない。

「駄目だ！・・・このままではカメラ機材が壊れてしまう・・・」

悲痛な叫びが『ステーション』内に響いた。

するといきなり・・・というか微かだが『ウーン』と音が流れてき
て温かい空気が流れてきた。

皆、えっ？言う顔をする。

こんなエアコンが設置されているなんて聞いていない。

『メインステーション』では悴んだ手に『フ〜フ〜』と息をかけな

がら

スイッチングをしていた瑞穂がいきなり

「えっ？あきあなの？……うん、わかったわ。

みんなにそう言えばいいのね。……あのう、沙希！がんばってね。

死んだらあかんえ、みんなのためにも……うちのためにも」

瑞穂自身、京都でのいやな思いを忘れるために

自身禁じていた京都弁が思わず口についてしまった。

あきあとの交信が切れる。3人の目が自分に集まっているのには気付いているが

落ち着いてスイッチを入れ、全『ステーション』に今聞いたあきあからの言葉を伝える。

「みんな！落ち着いて聞いてください。今、あきあから交信がありました。

この『ステーション』には過ごしやすくする空調がついています」

「おおー！」

という驚きの声がインカムに入ってくる。

「だから安心して撮影しててください。

……あつとそれから、すぐにも異次元に闘いの場を移すのでその覚悟をしておいてください」

と言ってスイッチを切る。

「ミス、瑞穂！」

とルーク監督が厳しい顔で瑞穂に問い掛ける。

「本当にあきあから交信があったのですか？」

「はい！」

「間違いはないのですね」

「ええ、前回のドラマを撮っていたときも同じでした。あきあは常に我々を見ていてくれます。」

だからみんな撮影に集中出来てあんな凄いドラマが生まれたのです」

「彼女は神なのでしょうか？・・・あんな凄い闘いをしながらこの『ステーション』を動かし、かつアクシデントを見逃さないなんて・・・」

「神に近いでしょう。あきあには仏教でいう神・・・仏を宿していますから。」

でも・・・」

「でも？」

「彼女はそう言われるのは嫌がるでしょうね。常に人でありたいと願っている彼女ですから・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ルナは平然とこの凄まじい冷気の中で立っていた。

生身の身体にはこれでどうだ！・・・と侮りの笑みを浮かべていた将門だったが

それもルナには通じないと判ると体中から苛立ちの真赤な気が『モワモワ』と

湧き出してきたのが見える。これは破壊の気だ。

このままでは将門はこの周辺を徹底的に破壊つくすだろう。

・・・平和に暮らす人達の暮らしを壊してしまう。

今だ！・・・ルナは九字を切った。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』・・・ええい！」
光の渦が将門を通り抜ける。

「小娘、何をする気じゃ」

ルナの光が将門の闇の気と相反しあい小さな渦を作った。

その光の渦はゆっくりと回りながら光の壁となった。背後のことだから、まだ将門は気づいていない。

ルナは刀身が青白く光る破邪の剣を左手で垂直に持ち、右手の平を水平にして

刀身の峰を軽く当てて呪を唱えると刀身の先から光の玉が飛び出した。

光の玉は将門の頭上を飛び越えると、出来た円形の光の壁の中心に飛び込み、

その中心から光の壁が奥へ奥へと渦を巻きながら広がっていく。

チューブ状の光のトンネルがどこまでも伸びていくのだ。

「な……なんだ？これは？……あ~~~~」

怨霊・平将門は気づくのが遅かった為、馬もろともトンネルの中に吸い込まれていく。

トンネルの光の壁に映しだされる奇妙に歪んだ将門の姿、何か言っているようだが聞こえない。

「前！」

天聖ルナの変身を解いた聖奈はゆっくりと振向く。

月の光を受けたセーラー服の戦士は神々しく……そして、美しくかった。

やがて、眼を閉じ退魔の横笛を吹くこの美しき戦士がゆっくりと眼を開けたとき、

雑霊・悪鬼・悪霊が綺麗さっぱりと払われて清浄な空気が変わっていた。

そして、別れをするかのように周囲を見渡してから、月を背に光のトンネルに向かって歩を進めて行く。

横笛の調べは波が引くように消えていった。

横笛が放れたその口元にニッコリと笑みが浮かんだとき、聖奈は1歩踏み出した。

目の前のトンネルの輝き……いろんな色に変化していく。

.....

「報告します。今、あきあと共に異空間に向かって移動中。

各『ステーション』も異常なし。音声のほうはいかがでしょうか？」

「こちら本部！……音声も各モニターの映像も言う事なし。

すぐぶる快調に撮影されている。この調子でがんばってもらいたい。

瑞穂くん！……これからが正念場だ。ふんどしを引き締めてる！

つて皆に伝えてほしい」

「嫌だわ！……小野監督！そんなこといえません！……

それに女性カメラマンもいるんですよ。そんなのセクハラだわ」

「あっ！……そうか。いやあ……ごめん、ごめん……

薫くんも、圧絵さんも……そう、睨むなよ」

その言葉で本部の様子がよく判る。

ふと横を見ると、カメラマンもルーク監督もニヤニヤ笑っている。

（ゆりあさんったら、あんな言葉、通訳したのかしら……）

少し、非難の目を向けると

ゆりあはとまどった様子で『違う！違う！』と胸の前で手を振っている。

「僕が教えてやったんだよ」

とカメラマンが笑いながら言う。

「こつ見えても世界中を飛び回っているんでね。・・・でも、異次元空間なんて・・・」

と飛んでいるあきあの姿をファインダーで覗きながら

嬉々とした様子で撮影している。やはり超一流と言われるプロの力メラマンだ。

（全く男つたら・・・こんな恐ろしいところで、どうして子供みたいに喜ぶのよ）

もう1人、眼を輝かせて喜ぶルーク監督に戸惑っているゆりあに向かつて

しょうがない男どもよねえ・・・と同意を求める瑞穂だった。

永遠とも思われた光のトンネルから飛び出た瞬間！

・・・皆は一瞬にして目の前の世界に心を奪われてしまった。

さすがのルーク監督も言葉で言い表せない有様だ。

夢を見ているのか？・・・この色彩豊かな非現実な宇宙空間が・・・

全く・・・こんな世界に自分達を連れて来られるなんて・・・

ルーク監督自身、長い間映像の世界で創りあげてきたものが・・・

なんと滑稽なものであったのか？

・・・今、それらの映像の世界が脆くも音をたてて崩れ落ちていくのがわかった。

そして、今・・・現実の世界となった空間に1人浮かぶセーラー服の美少女戦士、

星聖奈の額の真赤な陣八に埋め込まれた金属の星印がキラキラと光ったとき

足下から闇が襲い掛かってきた。

闇は見る間に異次元空間を覆い尽くし、無となった。

だが………

「光ありて闇があり、有がありて無がある。それがこの世の掟なり。ここに一つの光あり」

と小さな光が段々と周囲を照らしていく。

その姿は……一本のトーチを掲げたセーラー服の戦士・星聖奈だった。

光は闇を消していき、聖奈自身が黄金の光を発したとき、

闇の中から、ゾロゾロと悪鬼・餓鬼・幽鬼どもを引き連れた平将門が現われたのである。

モニターの前で固唾を飲んでみている者、『ステーション』の中で見守る者、

全員が光の中からの声を……聞いた！

『天聖ルナ！……二段変身！』

(二段変身?)

何も聞いていなかった全員が首をかしげ見守るその前で

聖奈のセーラー服が全身を覆っていた光の粒子と合体し、聖奈の身体の回りをまわっているのだ。

その美しい裸身を光の衣服が次々と形をかえて覆っていく。

そして、最後の光が額にパチツと音をさせ虹色に輝く宝玉を埋め込んだ

陣八が納まったとき変身が終わった。

『黄金の戦士』そういつでも良い。

背に利剣、腰に繻索けんさくをぶら下げ、黄金の甲冑に身をおおった

眩しいような美少女戦士ルナ。

そしてその両横と前には赤、白、青の甲冑をつけた凜々しい女戦士の姿の

玉藻、葛葉、紅葉の姿が膝を折って控えており、

ルナが手を置くのは筋骨たくましい白虎の白虎丸だった。

さあ、来いとばかりに『ガオウ〜!』と一声鳴いてルナに寄り添う。

.....

「おおぅ……これは……」

予想外の展開に声も出ないルーク監督達。

『おお〜い!どうなっているんだ!二段変身だなんて聞いてねえぞ!』

という小野監督の声に

「えっ?駄目なんですか?」

『馬鹿な!だれもそんなこといつているんじゃないやねえ』

と言葉使いもゾンザイになっている。余程興奮しているのか……。

『ジョージに伝えてくれ!ぜったいに撮り逃がすんじゃないやねえぞ……
つてな』

ゆりあを通してルーク監督に伝えると、ギラギラした目で瑞穂を睨みつけるように

「おお〜……ガツテム」

というと矢継ぎ早に各『ステーション』に細かい指示を与えていく。

いつそう早くなつたルーク監督の指示にゆりあも通訳とスイッチングして

各『ステーション』に流すスピードについていくのが大変だ。

.....

「紅葉！・・・弓と矢を・・・」

と目の前に控える紅葉に指示するルナ。

「はっ、主殿！」

と下からルナを見つめる眼がギラギラと輝いているのだ。

この3人の式神達、やはり前身は鬼、こういう戦いが大好きなのだ。

「玉藻、葛葉、紅葉、お前達には充分に働いてもらわねばなるまい。

・・・そうそう白虎丸・・・お前にもだ」

3人と1頭は嬉しそうにルナを見つめる。

「わたしがこの矢を放ったときが合図だ。

ただし、将門には手出しは無用。わたしが天に送りとどける」

主の心中は充分に察する3人と1頭。

矢をつがえ弓をじりじりと引き絞る天聖ルナ。

狙いは身体が化け物のように大きいあの黒鬼、

ハツとばかりに矢を放つ。

矢は狙いを外さず鬼の急所といわれる黒鬼の一本角を破壊した。

黒鬼は悲鳴も上げず絶命し、倒れた背に押しつぶされた悪鬼は数知れず、

そして、混乱する中に飛び込んでけちらすのは3人と1頭。戦いは終わった。殆どが光の玉となって天に上っていく。

こそこそ逃げ出したものがあるがそれも最後には天に上っていく運命だ。

「玉藻、葛葉、紅葉、それに白虎丸戻りなさい」

と声をかけると光となってルナの身体の中にとびこんでくる。

今の戦いの間無視されていた形の将門の怨霊。

『ギリギリ』と歯をくいしばって耐えていた。

「お……おの〜れ〜……」

赤く光った目が……太い眉が……きつくへの字に噛み締めたその口が

平将門の大なる怒りを表している。

思ってもいなかった小娘の膨大な能力の前にかすむ己の矮小な力……許せはしなかった。

敗れ去ったとはいえ、武士の頂点に君臨してきた己の才知と能力。それがあんな小娘の前で全て塵と化したのだ。

もう己の存在価値はない。そう思うと自然と高慢ではなもちなかった

将門の闇の”壁”が崩れ落ち将門の能力が飛躍的にあがっていく。

目の前の将門の心の中が手にとるように判るルナにとって、

今……将門は油断が出来ない存在となった。

でもこの将門を天に返す……そんなルナの最終目的はゆるぎもしない。

そして、将門の心に訴えるルナのさいごの手札は今の将門にはとても有効になるはずだ。

手綱をとっていた将門の右手が水平に上がり手の平がルナに向けられる。

『ボン！ - - -』と青い炎の玉がルナに発射されたとき、すでにルナは横に移動していた。

通りすぎた炎の玉は背後の惑星の地表に当たり『ボン』という小さな音を残した。

.....

この様子を眺めている瑞穂達の眼からみても今の平将門が変化したのが見て取れた。

身体が非常に大きくなって写っているのだ。

「がんばって！・・・あきあ！」
思わずそう叫ぶ。

目の前のあきあは将門の砲撃を将門を中心に円を描いて逃れているのだ。

.....

そして、ルナの移動が終わったとき

「忍法！影分身！」

.....
なんと、将門を取り囲むように何十人かの天聖ルナから

そんな叫び声が聞こえた。

.....

「忍法？・・・おお・・・忍者ね。あきあは忍者もできるのか！」
そんなルーク監督の言葉に無論忍者のことは何も知らないが
「忍者は陰陽道の末から生まれたのです」と瑞穂が言い添える。

「陰陽道？・・・おお、あきあの使う秘術ね。
そうか・・・だから忍法も使えるのか・・・あっ！あきあが剣をぬいた！」
ルーク監督の叫びに身の前の光景に眼をこらす。

・・・・・・・・・・・・・・・・

背後の利剣を抜き、水月に構える。そして、いきなり下段に構えを変えると

ゆっくりと円を描きはじめた。昔の時代劇の剣客がおこなっていた秘剣だが
違ったのは頭上高くから斜めに切り下げたことだ。

分身したルナが全員こうして切り下げ
「秘剣・円月天空斬！」
と声をあげたとき、全員の利剣から黄金の閃光が走る。

いきなりだった。・・・いきなり、立ち上がった馬が将門を振り落としたのだ。

主人をかばった馬の身体は霧散し、小さな玉となって天空へと昇り始めたが
どうしたことが倒れている将門の身体を心配するように回りを飛び回っている。

「野分！・・・野分け〜〜〜！」
『野分』というのは馬の名前なのだろう。

その様子を見ていたルナが分身を解き

「白虎丸！」

と声をかけると、主であるルナの心をくんでいたのだろう、ルナの身体から飛び出した白虎丸の光の玉が真っ先に野分の玉の元にいく。

ぶつかり合い、反発しあつてはいたがやがて白虎丸に引き付けられてルナのもとにやっってきた。

「野分さん、あなたが御主人の将門公を思う心は良くわかりました」
ルナの言葉がわかるのか野分が点滅をくりかえす。
いつまでも・・・いつまでも・・・まるで哀願するように。

「わかっていきます。あなたを悲しませるようなことはしません。だってあなたはあの方を天に正しく導くお役目があるんですもの。さあ、わたしの身体の中で少しお休みなさい」
野分の魂は最初は遠慮するようにゆっくりと・・・そして、白虎丸に
せつつかれるようにルナの身体の中に消えていった。

利剣を背に戻したルナはゆっくり将門と対峙した。

「将門さん！・・・もうおやめになりませんか？」

こんなことをしてもあなたには心の安らぎはありませんよ」

「うるさい！・・・」

といて立ち上がると天にむかつて

「我は平将門なり、時の朝廷に逆臣の汚名を着せられ一族郎党討た

れた恨み

忘れはしない。我、長年の眠りの中でも恨みは膨らむばかり……

・
我の声を聞け！……我に続く者、ここに集え！」
将門の最後の賭けなのだ。

これが失敗すれば無限地獄に落とされる……なにもかも覚悟の上なのだろう。

「可哀相に……」

そんなルナの声に

「なに！……」

と言つてキツと睨みつけるがルナの表情にある憂いに気がつき戸惑いがあらわれた。

「あなたは知らないのですね。あなたと共に討たれた方々はもうすでに

転生をくりかえされていますよ」

「嘘だ！……討たれた恨み忘れるはずはない！」

「はい！当初はそうだったでしょう。」

恨みと先行きを考え大変苦しまれたに違いありません。

……でも……恨みからは何も生まれません」

そういうルナから頬をつたう大粒の涙が……。

それを見た将門の身体からふつと力が抜けた。

こんな娘なのか、我一族のために涙を流してくれるその優しさはなんだ？

戸惑いで怨霊となつて初めて人間らしい表情になつたのだ。

（今だ！……）ルナは手の平を顔の前に持つてくるとフツと息を吹きかけた。

するとルナの手の平から小さな赤い玉がふわふわと飛び出てきて将門の近くで留まると

「将門様〜〜！」

「おおっ、その声はもしや？」

「わたくしでございます」

ボウと赤い玉が人の形をとっていく。

「殿様！良子でございます」

「良子！・・・良子か！・・・」

将門は走りよってガシツと妻の身体を抱いた。

「ああ、お逢いしようございました。

わたくし・・・わたくしは長い間、転生もせずあなた様をお待ちしておりました」

「悪かった！・・・悪かったのう。

愛しい良子よ。寂しい想いをさせた。許してくれい」

「殿様！もうこんなことは・・・お止しになつてくださいませ。

あなた様のこんな御姿はみとうはございませぬ」

「じゃがな・・・」

「いいえ、殿様！・・・人の世はもう我等の生きていた頃とは違つております。

殿様がどうしようとも動かせるものではございませぬ」
とピシッといいかえす。

将門は抱いていた妻を少し放すとその顔をじつと見つめる。

そして、溢れる涙をそつと指でぬぐうと再びガシツと抱きしめて

「これからはずつと一緒だ。もう放しはしない」

「では？・・・」

「ふむ、これから一緒に天に昇るつ。そして我はどんな罰もいといはしない。

だから待っていてくれぬか」

「いいえ！」

という良子の言葉に

「えっ？」

と驚く将門だったが

「わたくしは殿の妻でございます、だから罰を受けるのはわたくしも一緒！」

「じゃが・・・」

「いいえ、もう一時も離れるのは嫌でございます。

わたくし、この手はもう離しはいたしませぬ」

将門はもうなにも言わない。言う言葉が見つからないのだ。

ただ妻を堅く抱きしめるだけだ。

やがてルナのほうに振り向いた二人、将門は見事な公達に姿を変え妻の良子と手を取りあっている。

「将門様、よう決心なされました」

「娘・・・いや、ルナ殿、今までの我の所業・・・このとおりじや。許してください」

と頭をさげる。妻の良子も連れて頭をさげた。

「いいえ、将門様！頭をおあげください。

人は死しても弱うございます。あのときの将門様も弱うございました。

でも、今のあなた様は強うございます。もうわたしがかなう相手ではございませぬ」

ルナは将門をものふとして相手をしているのだ。

その心がわかるから将門もおだやかに話をつづける。

「ルナ殿、ルナ殿と見込んでお願いがござる」

「何でしょうか？」

「ルナ殿のお力で我と妻とを天に導いてくださらぬか」

その言葉にニッコリと笑ったルナは身体から光る玉を出した。

その玉は将門と妻の良子の周りを飛び回りだした。

何故か喜びで溢れているような……。

「こ……これは？」

「もういいでしょ。姿を現しなさい」

ルナの声に姿を現したのは羽根が生えた真っ白な馬……天馬だった。

天馬は喜び一杯で将門の顔をなめまわし、そして良子の手にも鼻面を

こすりつけているのだ。

「野分？……お前は野分けなのか？」

天馬と変身した野分に漸く気づいた将門は喜びのあまりその馬面に顔を

幾度もこすりつけているのだ。

そして、ハッと気づく。

「こ……こんなことが出来るルナ殿とは……？」

とルナの姿をじっとみつめるのだ。

そして、ルナの姿の中に何を見出したのか……。

あっとばかりに膝まづき頭を下げる。

妻の良子は何もかも判っているので落ち着いて膝まづき頭をさげた。

「平将門！人の心を取り戻し嬉しく思います。わが娘、良子。よかったですね」

「はい、ありがとうございます」

「将門！」

「はっ！」

「今までの悪業、不屈き至極、その罰は軽くはありません」

「ははあ〜」

「したが将門、あなたにはお役目がまっております。だから、早う天に昇ってきなさい」

将門と良子の手をとったルナが、二人を立たせると

「もうあのお方は戻られましたよ」

「あっ・・・は・・・はい・・・」

そうは言われてもルナに宿っておられるお方を思うと自然身体が堅くなってしまう。

「さあ、早くおいきなさい。あのお方がお待ちですよ」

将門と良子を背に乗せた天馬となった野分が名残惜しむように後を振り返りつつ天に昇っていく。

長い間見送っていたルナが

「前！」

とセーラー服姿の星聖奈にもどり

「うっん」

と両手を挙げて伸びをする。

「さあ、帰りましょう」

とスタスタと光のトンネルにむかう。

だがこの異次元空間の片隅に残っていた闇の中で

「甘い！・・・甘いぞ！将門！・・・ふふふふ

そんな甘い器で怨霊とは・・・久方ぶりのこの世、何故か面白い。
なる匂いがするわい。

ふふふふほほほ・・・またひと暴れしようぞ・・・おっと・・・

と闇がスツと消えてしまった。

闇が消えたのは聖奈が足を止めたため、聖奈・・・いや、あきあ
は気づいていた。

どす黒く狡賢い闇の存在が目覚めたことを・・・。

「また、ややこしいのが目覚めたものね。・・・でも・・・」
という二ツコリ笑って再び足を進めた。

第二部 第五話

首塚より少し離れた場所に光のトンネルより飛び出たあきあ。
光のトンネルを消し去り、首塚に再び結界を張ってから宙を飛ぶ。
その傍に12個の球体『ステーション』が飛んでいく。

「少し待ってて」

と瑞穂に伝言してから5km地点の蓬栄上人や峰巖和尚、
宗円和尚が読経をしている地点に降り立った。

「おお、あきあ殿」

「千賀子殿……」

何も言わなくても結果は読取れる。

「無事に天上にお昇りなされました」

「では！」

「はい、やはり将門殿はもののでございました」

「おうおう、それは重畳それは重畳！」

蓬栄上人が満面の笑みを浮かべていたが、ふとあきあの顔に曇りが
あるのを知り

「はて、あきあ殿なんぞ心配事が？」

「はい、戦いの間に少しやっかいな者が目覚めてしまったのです」

「やっかいな者？」

「はい！」と喋って皆の顔を見渡してから

「怨霊・藤原元方！」

「なに！……元方ですと……」

その名前を聞いて顔を曇らせるのは蓬栄上人と峰巖和尚。

まだ若い宗円和尚にはピンとこないらしい。

「これはちとやっかい・・・」

「そうです。将門殿と違って相手は救いよつゝの無い怨霊です」

「じゃが、あきあ殿。日本は広い。あきあ殿1人ではちと・・・」

と言葉を濁す。言いたいことはわかるのだ。

「お上人様、元方の狙いはこの日本のただ一点です
はっ！と顔を上げた蓬栄上人。

「まさか・・・」

「そうです。元方の狙いは京都。平安京のあつた京都を焼き野原に
すること」

「こうしてはおれぬ。早く京に帰りつかねば」

「わしも行こう！」
と峰巖和尚。

「わたしも行きます」

と宗円和尚も手を上げる。

「宗円、お前は自分の寺の事が心配ではないのか？」

「いえ、今日これからすぐに立ち返りまして弟子達に後を頼んです
ぐかけつけます。」

京都は本山の比叡山があります。そしてわたしの実家の寺もあるの
です」

「そうか、わかった。好きにすればよい」

「待ってください」

と言ってから

「白虎丸！」

と呼びかける。

あきあの身体から出てきた光の玉が白虎に変わるとそばに控えていた

地元の坊主達は

「ひ〜」

と悲鳴をあげて及び腰になっている。

「宗円様、白虎丸に送らせませす。どうぞ背中に乗ってください」といつてから

「白虎丸！宗円様を永龍寺にお送りしてきてね」

さすがの宗円もおっかなびっくりだったが覚悟を決めて

背中に乗り、太い首に両手を回した。

白虎丸は行つてきますとばかりに

『ガオウ〜』

と一声吼えてから宙高く飛んでいった。

それを見送るのももどかしげに、蓬栄上人が

「あきあ殿！すまぬ。天鏡をここに呼んでくださらぬか」

「わかりました。玉藻、葛葉、紅葉！」

と声をかけると地面に膝まづいた着物姿の式神達が

「はっ！主殿」

と現われた。眼を白黒さす坊主達。

「すまぬが、又お前達に行つてもらわねばならぬ」

「主殿！我等に気を使うこと無用に願います」

と言つて式神達は消えた。

あきあは式神達のいた場所をじつと見つめて

「蓬栄上人様、峰巖和尚様、こんな時になんですが

わたしは本当に人に恵まれているんですね。

だから、人を不幸におとしめるような怨霊は許してはおけない」

きつと宙を見上げたあきあの顔はその怒りがすさまじいほど美しいか
った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

撮影が一段落してこの次元に戻ってきてホツとしたつかの間、
下に降りたあきあと僧侶達の間で何やら騒がしくなっているのを見
てカメラをあきあ達に向けた。

「小野監督！何やら可笑しいことになっています」
という瑞穂の報告に

「判っている、何かに役立つと思って『ステーション』の一台に撮
影をさせていたんだ。

「すまんが音を拾えるか」
という指示で11台の『ステーション』が再び撮影を開始した。

「小野監督！・・・怨霊・藤原元方って何ですか？」
「聞いた覚えがあるが、詳しくは知らん。こちらで調べさす」

撮影の形態が整っていないので切れ切れと聞こえてくる話に
全員が耳をそばだてているのだ。

「えっ？京都を焼け野原に？・・・」

「瑞穂くん、そう言っているのだな」

「はい！」

「これはとんでもないことになった。こちらの調べでは怨霊・藤原
元方は

将門どころではないとんでもない怨霊だ。帝の女御や後継ぎを呪い
殺したり

落雷や地震で平安京を破壊しているんだ。

京都を焼け野原に・・・というのは奴ならやるだろう。全くとんでもない奴が復活したものだ。・・・あつ、少し待て」と言って連絡が切れた。でもそれもすぐに連絡が来た。

「今、そこから5km地点の警察本部にいる飛鳥警視正から連絡が来た。

各地点にいる比叡山からきた僧侶を警察車両で迎えにでたそうだ」

「判りました。そのことあきあに連絡をとり伝えます」

といってインカムのスイッチを切ると、静かに眼を閉じる。

そんな様子を横から眺めているゆりあとルーク監督。

カメラマンは必死に撮影している。この状態ではアングルも何もないからだ。

(あきあ・・・あきあ・・・聞こえますか？・・・)

(あつ、瑞姉、何?)

(今、小野監督から連絡が来て日和子叔母様からの連絡を伝えてきたの)

(叔母様から?)

(ええ、今警察車両が比叡山から来たお坊さん達を迎えに出たそうよ)

「えっ? わかった・・・助かったわ」

ほっとした声で答える。

(あきあ・・・)

(なに?)

(お願いがあるんだけど、『ステーション』の配置を変えてくれな
い?)

少し間があったが

(わかったわ)

という答えで『ステーション』が動きだした。もちろん障害があるので隣りの次元からの撮影だ。

ゆりあの通訳で現在の状態がつかめているルーク監督は細かい指示を各『ステーション』に出している。

しかし、ルーク監督はあきあがしている配置に舌を巻いていた。監督としてここにカメラがあれば・・・という位置にきちっと配置しているからだ。

(あきあは、女優としてだけでなく監督としても優れている)

「あつ、白虎丸が・・・」

宗円和尚を乗せて宙に飛び上がるのが見えた。

そして、武神の玉藻、葛葉、紅葉の3人が現われ消えたのも見えた。

.....

『ど〜ん』と音がした。天鏡が宙よりお尻から落ちてきたのだ。

「イテテテ・・・」

大声で痛みを訴えたが周囲を見渡して慌てて口をつぐんだ。

「天鏡！立ちなさい」

「はい！」

「今からすぐに本山に帰ろう」

「えっ？今からですか」

「そうじゃ、一刻も猶予はないのじゃ」

驚いた目で3人を見ていたがそのいづれの表情にも苦渋の表情があら

「な……なにがあつたのですか？」

「怨霊・藤原元方の復活じゃ！」

「ひえ〜、あ……あの元方が……」

その時

『ふおおおお……面白いのう……われは人が苦しむのが一番うれしい。』

せつかく目覚めたのじゃ、楽しませてもらおうかのう。

そして、我を死に追いやつた朝廷のあつた京の都を紅蓮の炎で焼き尽くしてくれん。

炎に巻かれた人の悲鳴……楽しみじゃ』

夜空一杯の元方の幻影に思わず飛び上がつて、利剣をとりだしたあきあに

『おっと、仏の利剣か。今はそんなもの受けるわけにはいかぬ。さつそく消えるとしよう。』

そうじゃ、京の都を焼き尽くすのは3日後の今の時刻にしようぞ
と、消えてしまった。

宙から降りてきたあきあにむかつて

「千賀子殿、京都を焼け野原にするという予告は3日後じゃがあの元方のことじゃ、

それまで何も手出しをせずにおくものか。こうしておられん。すぐに比叡山に……」

「わかりました」

と、膝まづいて指示を待つ玉藻、葛葉、紅葉にむかつて
「聞いたとおりじゃ、このお三方を京にお連れなさい。

だが、いくらお前達でも比叡山の結界に触れることはできん。

麓までお送りしてきなさい」

.....

「大変だわ。京都を焼き野原だなんて大体何人の人々が住んでいると思うのよ」

と憤りで顔を真赤にした瑞穂が叫ぶ

「瑞穂くん、260万人を超えているんだ」

「260万人も？」

「そうだ！これは大変な事なんだ。今の元方の虚像はこちらからも見えた。」

大部分の人達は映画の宣伝かなにかと思うだろうがそうでない人もいる。

今ごろは京都に連絡している人もかなりいる。

京都に電話をかけてみたがパンク状態でどうにもならん」

「じゃあ、パニックが？」

「そうなってもおかしいことじゃない。でも今はそこまでは行っていないと思う。」

「でも・・・」

「でも？」

「よほどうまく危機管理をしないとどうしようもなくなるだろうな」

「薫さん達は？」

「全員で今電話をかけに行ってるよ。携帯がかからないのでまだ有線の電話のほうが良いと言ってね」

「わかりました。あっ、今蓬栄和尚様達を紅葉さんたちが送っていったようです」

下を見ると残ったあきあと右往左往する坊さん達がいるだけだ。

「今、動き出しました。元の次元に戻りましたからそちらに着くのはもうすぐです」

「おう、早く帰ってきてくれ。」

乾社長が大下社長と迅速に連絡を取り合ったおかげで

民放各社と国営放送の首脳と信頼がおけるスタッフ達が続々と集まっているんだ。

これは民放1局や2局でどうのこうのという問題では無いんだから

小野監督のせつぱづまった声がこの問題の大きさがよくわかる。

Bスタジオにゆっくりと降りてきた12個の『ステーション』、そして、遅れて着地したセーラー服の美少女に

「おおっ」

と声をあげるのがこの『ステーション』の存在さえ知らなかった他の民放と国営の首脳とスタッフ達。

『ステーション』に駆け寄って中から機材を運び出すのを手伝う者、

もの珍しげに遠巻きに見ている者、各自それぞれだが

早瀬の女達や知った民放2局のスタッフや小野監督が呼び寄せた映画のスタッフが

あきあを取り囲んでいる。

「あきあさん、わたし一生この日のことは忘れないわ」

という女性カメラマンが握手を求められたりしたが、この先のことを思うと喜んではいられない。

その時、人を掻き分けて飛鳥警視正と間警視がやってきた。

それに3人のあの婦警も付いてきている。

「沙希ちゃん、ごくろつさん。よくやったわね」

「日和子叔母様！・・・でも」

「わかつています」

といつてから

「比叡山のお坊様達は警察車両で比叡山まで送らせました」

「叔母様、ありがとうございます」

そこに電話連絡に行っていた松島奈緒警視が慌てて飛び込んできた。

「警視正！大変です」

「どうしたの？松島警視」

「総監が・・・総監が来られるそうです」

「えっ？警視総監が？」

その声で揺れるざわめき。

・・・と、

「皆さん！今からちようど今撮影してきたフィルムを見せます。

これは敵に塩を送る！と言つ意味ではありません。

そこにいる日野あきあを知ってもらつ為です。

なお、その『ステーション』は彼女が発明したものです」

「おおっ」という声上がる。

「あきあくん、もう機材は全て運び出したようだ。『ステーション』は仕舞つてくれないか」

という小野監督の言葉に

「はい」

といつて九字を切る。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

そして

「オン・アブラウンケン」

と3度真言を唱えると

『ステーション』が小さな玉に姿をかえ、用意したケースに飛び込んでくる。

何も知らない首脳やスタッフ達は声も出ない。

知っている者達は優越感かニヤニヤ笑っているだけだ。

そこにパイプ椅子を持った共演者、マネージャー、スタッフがはいってきた。

「すみません。椅子の数には限りがあります。

スタッフの方々は申し訳ありませんがその場にお座りください」

その言葉に粛々と従うスタッフ達……

というよりもあきあの術に度肝をぬかれたのが本当だろう。

小野監督が言葉を続ける。

「このフィルムを見ても信じられぬ方は大半だと思います。

でも将門の首塚の周囲5kmの地点の僧侶達の読経の場所8箇所、

10kmの地点では警察の機動隊が堰を作り、

そして10kmの中の住民や犬猫一匹逃がさず避難させていたことは事実です」

なぜそんなことになったかは飛鳥警視正が立ち上がって話しました。

「でも、このことは皆さんの胸に秘めておいてください。

もし話したらその時から警察に追われる身だと思っていてください。

日野あきあの能力のこともしかりです」

「じゃあ、映します。景山！ジョージ！」

といって3人で上にあがって行く。

その時初めて世界的に有名なジョージ・ルーク監督の存在に気がついた者もいた。

暗闇の中、写し出される内容はそれは信じられぬものだった。

眉唾・・・そう眉唾物・・・そうとしか思えなかった。

そして一旦終わったフィルムが夜空の自分達も見たかの人物がうつされたのだ。

まさか、このスタッフ達が？そう思ってもそんなことが出来る技術は今はない。

じゃあ、日野あきあが？・・・彼女だったら今見た不思議な術で可能だろう。

ただ、そんなことやって何の得がある。自問自答で頭が張り裂けそうになるスタッフ達。

照明がついてもシーンとして物音一つしない。

「皆さんに一つ話しておこう」

と後ろから声が聞こえた。

驚いて振向くと、時々テレビで見る長谷部警視總監が立ち上がって話しているのだ。

「日野あきあさんの能力は今では国家の機密となっているのです。

だから部外者に話してもらっては困る。先ほど飛鳥警視正が話したとおりです。

日野あきあさんの能力、それはとんでもない人知を超えた能力です。

そんな能力者だから国や警察が守るのか？それは否です。

彼女の人を愛する優しさと微笑みを絶やさない人格と・・・そして正義感。

これらがあるからこそその能力。私はそう信じます。

彼女はこれまでにいろんな事件を解決しました。

京都の結界を張りなおすため一命を落としかけました。レイプ犯も捕まえました。土御門家の恐ろしい犯人もやつつけました。

東京では銀行強盗を捕まえなおかつ拳銃密輸団達を捕まえる元を作りました」

「えっ？ではあの般若童子は？」

そんな声が回りから聞こえる。

「そうです。京都での般若童子も東京での般若童子も全て彼女なんです。

こうして知った以上、話して貰っては困る。話したら今後の人生は暗い牢獄の中

だと思っいてください。私から話すのは以上です」

こうして総監はあきあと何事か話をしてから帰っていった。

「さて・・・」

つと話を切り出したのは最初のテレビドラマを撮った大下社長だ。

「首脳の方が信頼するスタッフの人達を集めたのは今回の件もあるが、

いずれ他の局で日野あきあを使うこともあるだろう。

だから早めに知ってもらいたかったためでもあるんだ」

大下社長が切々と訴える。隣りでは乾社長が眼を閉じ、じつと聞いている。

同じマスコミでもとんでもない悪がいる、そんな奴等からあきあを守り

才能をもっともつと伸ばしてもらおうというのだ。

だから、スタッフも決められた者しか使わない。ゲストも信頼できる者でカバーする。

そしてあきあの術は『例の』という符丁を使うことも教えた。

もちろんスタジオの中は結界を張って貰うことも忘れない。

次に立ち上がったのが乾社長だ。

「今回の怨霊・藤原元方のこと、調べれば調べるほどんでもない奴なのだ。」

私は京都を焼き野原から救いたい、だがこれをやれるのは警察でも僧侶でもない。

日野あきあ、ただ1人なのだ。我々がやれるのは彼女のサポートしかない。

そして、今まで常識という枠に縛られてきたが不条理つまり常識外のこと

あるんだとフィルムに撮影して後世に残す事が今を生きる我々の役目だと思うのです。

そしてこれは民放1社2社でやれる仕事ではない。
全てのマスメディアを使ってやらなければならない」

力説したがまだ信じられない者もいる。

「すいません。そうは言われても僕自身まだ納得できません」
手首に包帯を巻いたどこかの局のスタッフがいう。

あきあは天下社長と乾社長、そして日名子警視正の目を順々に見て立ち上がった。

そしてあきあを真中に囲むように皆が座りなおす。

「ちょうど、元方のこと聞こうと思っていました」

と瑞穂が用意した半紙を人形に切って呪をかける。

すると知っているものにはお馴染みだがりっぱな公達が現われたのだ。

知らないスタッフや首脳達の驚きは声も出せていない。

「安倍晴明様です」

と紹介すると

「ひえ〜」

という声があがる。

晴明は肩を回しながら座り込み

「ひづる・・・ひづる・・・」

と天城ひづるを呼ぶのもいつも通りだ。

喜んで飛んできたひづるが晴明の膝の上に座るのを待つて

「晴明様、元方のこと・・・」

「ふ〜む、聞いておったわ。しかし、何故今ごろ彼奴目が・・・」

「晴明様、元方の怨霊とは？」

「わしは一度だけじゃ、ほとんどが陰陽寮の術者達と争っておったわ。あきあ、お前はどんなのじゃ」

「いえ私がいた頃はもう元方の怨霊は出ませんでした」

「おおう、そうじゃった。あきあがわしの元に来たのは元方を封印した後じゃ」

「封印？封印なされたのですか？」

「そうじゃ、京の都で封印すると、ちとやっかいなのでなあ

東のほうの寺の境内の大きな岩の下に封印してやったわ」

「東の寺？・・・晴明様・・・もしかしてそれは首塚の近くの寺では？」

「おおう、そうであった。確か・・・香琳寺・・・そう香琳寺という名前じゃ」

「京姉！泉姉！」

立ち上がったのは京と泉はもとより洋子と婦警の制服姿の有佐ケイの4人だ。

「何か封印されたあとがあるはずです。それを見つけて持ち帰って

ください」

「木箱じゃ・・・これぐらいの木箱に封印しておいた」
安倍晴明の説明に

「わかりました」

と頷く4人。

「あつ！モバイルは？」

「持ってるよ」

「片時もはなさないわよ」

という声を残してBスタジオを飛び出していく。

あつけにとられている他のテレビ局のスタッフ達

「おい、モバイルってあのモバイルのことか」

知り合いのこのテレビ局のスタッフに聞く。

「そうさ、でも凄い機能がついている特別製さ。日野あきあが発明したものだよ」

「どんな？」

「すぐにわかるさ」

とニヤニヤ笑うだけだ。

こんな光景を見守る各局の首脳達、なんともいえない表情となっていた。

こんな信じられないことが現実起こっているのだ。

大下社長も乾社長も日野あきあのことを早く知っておいて良かった
と思っっている。

他局の首脳達、パニック寸前の顔色だ

大下社長が立ち上がって聞く。

「安倍晴明様にお聞きします」

「なんじゃ」

「はい、私達は怨霊・藤原元方という名前と伝えられた資料だけで想像を膨らませて不安と恐れを抱いています。実際は元方という男どういった怨霊なのでしょうか」

清明は座つたまま大下社長の方を向き

「大下殿と言われたな」

「はい」

「さすがじゃな。まずは敵を知らなければ右往左往するだけじゃ。

……元方という男、策略家じゃ」

「策略家？」

「そうじゃ、悪く言えばずるい男じゃ。生きていたときからそうじゃった。」

まずは人身を惑わす」

「人身を惑わすといえますと」

今度は乾社長から声がかかる。

「人の弱い心につけこんで、不安、猜疑心をおこさせ、そっと囁くのじゃ。」

あ奴はお前を嫌っている、とか殺そうとしているとかじゃ。

弱い心の者はそうなると元方の思う壺であり、傀儡となる。それと奴は影を使う」

「影といえますと」

今度も乾社長。

「死した者を生き返らせるのじゃ。死した愛しい者達を生き返らせその者を使うと人は正しいものが見えなくなる。ただし影は影じゃ、陽の光を浴びると土にかえる」

「では夜気をつける必要があるのですね」

清明は頷き

「そうじゃ。だが奴にも弱点がある」

みんなハツとして清明を見つめる。」

「奴も男じゃ、女シヨウに弱い」

「女シヨウ？・・・あっ、女性のことですね」

「それも小さな女シヨウじゃ。ちょうどひづるぐらいの・・・」
「ひづるちゃんぐらいの？・・・どうしてですか？」

「猫可愛がり可愛がっていた娘を自分の不注意で死なせているせいじゃ

それからじゃ、奴が変わったのは。

それまでは学問ばかりする気の小さな男だったのにのう」

「ですが晴明様、今の元方は救いようがありません。

罪も無い幼子や女性達を呪い殺した罪は例え無限地獄に落としても正義を成したといえるのでしょうか？」

「そうじゃ、あきあの言う通りじゃ。だがなあ、それであってもお主は

きつと天に導くとおもうぞ。断言しても良い」

「そんなことはありません。きつと調伏してみせます」

「あははは・・・そうかそうか」

とそれ以降は笑うばかりだ。

その時、松島奈緒警視が膝の上に置いていたモバイルが

『ピーピー』と鳴り出した。

もう手順は慣れたもので液晶画面にさつき出て行った京の顔が写っている。

「あっ、松島警視！そのモバイルを沙希に」

「判ったわ」

と行って立ち上がってあきあに渡す。

何も知らない首脳やスタッフ達、何かと腰を上げて見ている。

モバイルを受け取ったあきあ

「京姉、どんな様子？」

「酷いものよ。寺の住職の御乱行で寺の権利を取られたあげく昨日からこの通りよ」

とモバイルを境内のほうにむける。

「あつ、待つて！」

と言つてから

「ひづるちゃん、又ヤタさんを貸してくれる？」

「うん、いいわ」

と言つてから

「ヤタさん、ヤタさん。沙希姉さんの御用があるの。出てきてくれる？」

と言つたとたん

「カー」

と鳴いてバタバタとあきあの肩に飛び乗った。

「な・・・何なんだあれは・・・」

もうここまでできたら知らないふりは出来ない

とあきあを知るスタッフ達が説明できるようバラバラに別れて座っているのだ。

「式神だつて？」

目を大きくあけて驚きを通り越しているようだ。

でも技術畑のスタッフや首脳の目が注がれているのが

モバイルだった。大下社長もまだ知らないことだったので乾社長の説明を受けている。

「すみません、照明を落としてください」

暗くなるとあきあの真言によりヤタさんの目から今モバイルの写っている風景が

大きく壁に映し出されているのだ。

「世の中、便利になったものじゃ」

といいながらひびくと手をつなぐ晴明だ。

画面が大きな岩がころがっている手前の大きな穴を映す。

突然の

「おお！それじゃ、それじゃ」

という晴明の声が聞こえているのか京の

「どれでしょうか」

と言う声からズームで穴の底に寄っていく

「その真中に小さな木片が見えるであろう」

「あつ、わかりました」

といって手が伸びていく。

「京姉！」

というあきあの声

「なに？」

「出来れば素手では触って欲しくないの。あとで箱に残っている痕跡を読みたいから」

「わかったわ」

と言う声で画面を切る。

照明がつくと皆の目はモバイルにくぎづけになっているのだ。

あきあの持っているモバイルだけではない。

理沙や律子達マネージャーが持っているにも目がいつている。

「あきあくん、こんどの事我々が出来るとは先ほど乾社長が言われてように

後世にこういうことがありえるんだとフィルムを残す事なんだ。

君の邪魔はしない。だからどうか指示してくれないか」

という小野監督に

「はい、少し待ってくれませんか？」

と云ってから肩に乗るヤタさんに

「ヤタさん、ごめんだけれど又比叡山に行ってくれる？」

「カー」

と鳴いて承諾するヤタさん。

「待て！」

という清明。

「胡蝶を連れていけ。今は元方の目が光っておる。胡蝶の聖結界は元方といえど見えはせぬ」

という声でひづるの胸から蝶がふわりと飛び立った。

そしてその蝶がスーッと可愛い女の子に変身した。

「やっと、私の出番なんですネ」

と云ってから

「あきあ、そのヤタ公を守ってあげるから、約束して」

「えっ？なにを？」

「今度はあの3人の叔母さんより私の出番を多くして！」

「おほほほ、相変わらずね、胡蝶さんは。

あらあら、叔母さん呼ばわりされた玉藻、葛葉、紅葉がすごくお冠よ。

・・・約束するわ。京ではあなたの力がとても必要となるとおも
うから。

でも今度は私と約束してくれる？

・・・あまり無茶をしない、3人の叔母さんとも仲良くすること。
いいわね」

少しプツと膨れたが素直に頷き、

「ひづる！おとなしくしているんだぞ
と言ってから」

「やい、ヤタ公！何をぐずぐずしてる。早く行かなければ日が明け
ちまっせ」

といって蝶に姿をかえるとヤタさんの頭の上にとまる。

「ひづるちゃん、お願い。ヤタさんを飛ばしてきてくれる？」

ひづるは晴明の膝から抜け出すと、肩にヤタさんを乗せ駆け出した。

律子も順子も付いていく。

「あきあ！相変わらず式神達と仲がよいのう」

「あの子達は平安の時から友達ですもの」

「おう・・・そうだった・・・さて、わしも帰るとするか。」

天から元方の動向をさぐってみようかの
といて消えてしまった。ふわりふわりと半紙で作った人型が舞い
落ちる。

周囲で完全に観客となっていたスタッフや首脳達『ホウー』とため
息がでる。

まるでひとつのドラマを見ていたような。

「沙希ちゃん」

と声をかけたのは静香専務。

「ヤタさんが比叡山につく間、少しお話をかえてみない？」

「えっ？どうして？」

「どうやら皆さん、このモバイルにご執心なようよ」

「モバイルを？」

「ええ、どうせもつと必要になると思ったから、昨日入荷した20
0台分を」

全てこちらに持ってくるよう手配しているの。それとCCDカメラもね。

沙希ちゃんなら200台位の改造はあつというまでしょ」

「わかりました。じゃあ、モバイルが届く間に多くの工具類を用意してください」

というところのテレビ局のスタッフ達が我先にとびだしていく。

そのうち、香琳寺に行っていた京達が帰ってくる。

静香専務が手配したモバイル200台が次々と運ばれてくる。Bスタジオの中は騒がしくなってきた。

「ようし、皆さん。座ってください。

もう明け方近くなっています。疲れがピークでしょう。あきあくん、頼む！」

何のことかわからないものが多かったが目を輝かした者も多い。

あきあは心得て名笛『緋龍丸』を取り出した。

ゆったりとした調べが流れる。人息で息苦しかったBスタジオにスーッと気持ちの良い空気が流れ、

皆についてきた雑霊が吹き飛ばされていく。

そして、眠気、疲れが嘘のように取り払われ、脳細胞も活発に生き返る。

「ええ〜〜?」

「嘘!?!」

勢い良く立ち上がるスタッフ達。

「ふ〜む、見事な」

これは東西テレビの沖社長。

経営者というより華道、茶道に通じ、日本舞踊にも憧憬が深い。

その社長が目を見張るほどの横笛の吹き手、日野あきあという女優

に強い関心を持った瞬間だ。

それまでは不思議な術を見せられたが目くらましましたと思ってずっと目を閉じていた。

初めて日野あきあをじっと見つめる。

そして、知った。

その強い目の光、明るい笑顔・・・只者ではなかった。もう目が離せなくなった。

隣りに座っていた大下社長がそんな沖社長を横目に見てニヤリと笑う。

「沖さん、日野あきあという女優、見れば見るほど目が離せなくなるんですよ」

「大下さん、確かあなたのところが最初でしたね。日野あきあという女優を使ったのが」

「いや、最初は映画でした。でもうちの社員を映画に出向させていたおかげで彼女を知ったのです。」

とにかく不思議な女性です。我々の常識では測れない」

「彼女の不思議な術は本物ですか？」

「そうですね。信じられないと言っても彼女を知ってしまえば信じるほかない。」

あきあは平安時代に行って安倍晴明の元で10年間修行をしたそうです。

そして術の失敗で若返ってしまった。今の年齢は16歳だそうです」

「16歳？」

「はい、そして舞いも帝に献上したそうですから相当なものです。」

もともと今、彼女の京都の家はあの人間国宝の井上貞子さんのところだそうですので

京舞も教わっているようですよ」「

俄然注目する沖社長。

そして、Bスタジオの壁際に並べられた長テーブルの上に新しいモバイルが

1台、1台並べられている。

あきあの真言によって工具達が見る見るモバイルを改造していく。それを目を白黒させて見つめるスタッフや首脳達、勿論沖社長もしかりだ。

雑用するのはこのテレビ局のスタッフ達と共演者の女優達だ。

女優達はとっくにかえっても良かったのだが誰1人帰る者がいない。

もっとも帰るつもりなど毛頭なかった。こんな経験一生に一度あるかないかだ。

中堅女優の系川早苗しかりだ。勿論、飛龍高志もスタッフの中に座って

あきあについての今までの経験を話している。

「沙希、これ・・・」

京から渡された元方を封印していた木箱、

上に張られた梵字の封印の書が引きちぎられたように破られている。

木箱に残された元方の記憶・・・それを読取ろうというのだ。

真言を唱えるあきあ、それを見つめる周囲の目。

木箱から白いモヤのようなものがモクモクと立ち上り

ザンバラ髪の青白い顔をした中年の男が宙を睨みながら

「くくくく・・・お・・・おのれ！晴明！」

この恨みいかに果たそうか。代々たたって根絶やしにしてくれん。帝も帝じゃ我娘を寵愛していたくせに、あんな小娘を女御としてむかえるなんて・・・ええい、口惜しや。ふふふふふ・・泣け！叫べ！紅蓮の炎に巻かれて焼け死ね！御所を焼きつくし、焼土としてくれん」
そういつてフウッと消えた。

「元方という男、目的のため地獄の妖者をその身に引き入れたようですね」

「すみません。妖者というのは？」

「西洋でいう悪魔です。元方が引き入れたのは墮天使ルシファと同じ大魔王！」

その言葉にビクツと身体を震わす者もいる。

「そして、狙いは昔帝が住まわっていた御所と晴明神社」

「決まったね。あきあくん」

「でも油断は禁物です」

「大変です！飛鳥警視正」

「どうしたの？有佐巡査」

「はい、今京都で小学生の女の子が就寝中に次々姿を消しているそうです。」

ただ1人だけ警邏中の警察官がパジャマ姿の女の子が裸足で歩いているのを

不審に思って声をかけたことで助かりました。

本人は何も覚えていないそうです」

「京都で？元方の怨霊と関係ありそうね」

「いえ、叔母様。これは元方の仕業です。もう間違いはありません。」

先ほどの晴明様のお言葉・・・弱いのは若い女の子。自分が死なせた子供と

イメージを重ね合わせているのです。

元方は夢に入り込み暗示をかけ、自分の元に呼び寄せる。平安時代からの変わらぬ手段です」

「そんな方法だと警察は手も足もでないわ。

ただ夜間に歩く少女を保護するほかしか・・・」

「叔母様！京都の夜間の警戒をお願いします。

出来れば京都周辺の警察にも協力をお願いします。それも大々的にです。

それと一度暗示にかかった子は暗示を解かないかぎり幾度も元方の元に出かけるでしょう。

殺しはしないでしようが、女の子達は人質として両親の手枷足枷になりえるんです」

「えっ？では？」

「はい！元方の協力者となることも考えられます」

「大変だわ！急いで対策をしなければ・・・」

「叔母様は急いで警視庁に帰って対策本部を作ってください。へたをすると・・・」

「へたをすると？・・・」

「この日本、無くなるかもしれません」

みんな飛び上がる。

「これはおおげさではありません。元方という男そういう容赦のない怨霊なのです。

狙いを御所と晴明神社とあげたのも決して晴明様への復讐ばかりではなく、

晴明神社を焼くことで京都の結界を破れば朱雀門が開いてしまいま

す。

そうすれば地獄の亡者が出てきます。

小野監督！京都はこんな状態です。いえもつとひどくなるかもしれません。

これでもまだあなたはあなたの仕事を続けますか？」

「あきあくん舐めてもらっちゃ困るよ。俺達はいつも命がけで映画をつくっているんだ。

こんな状態だからこそ撮影をする義務がある。・・・おい、ジョージ、お前はどつする？」

「わしか、わしは今日一度アメリカに帰り、そして急いでチームを連れて戻ってくる。

だから『ステーション』を2台空けておいてくれ」

「こうなつたら『ステーション』が12台は少ないな」という小野監督の声に

「瑞姉！」

と瑞穂を呼ぶあきあ。

心得たもので預かっていた新しいBOXを持ってきた。

蓋を開けると真赤な玉が12個。

「これは改良品です。全てに通信機とモニターがつけられています」

「あきあくん！・・・これは・・・いつのまに？・・・だって君にはそんな時間はなかつたはずだ」

「いえ、これは里に帰ったときに作っておきました」

「そうだったのか。後でチェックさせてくれないか」

「いいですわ」

ここにいる全員が日野あきあが存在がいかに大切なのか思い知る。

普通の人では手も足もでない怨霊に対抗できるただ1人の人類、も

う不信感はない。

ただこの少女の戦いを邪魔をせず撮影していただくだけだ。

「そろそろ、比叡山を呼ばなければ胡蝶さんが怒りますわ」

「といって真言を唱えると壁に大きなスクリーンが薄暮の光景を映しだす。」

「天鏡さん！」

「というと天鏡の姿があらわれた。」

「おお、あきあ殿！武者僧達も今たどり着いたところだ」

「それはよかった」

「飛鳥警視正殿は？お礼をいいたいのだが」

「日和子叔母様は警視庁に戻りました。京都で起こっている事件のことで」

「はて？なんぞ・・・」

「すみませぬ、蓬栄上人様と峰巖和尚様、それと武者僧と土御門の皆様を」

呼んでいただけませぬか」

ただならぬあきあの言葉に慌てて画面から消えた天鏡。

しばらくしてゾロゾロと蓬栄上人を先頭に画面にあらわれた。

「蓬栄上人様、峰巖和尚様、そして武者僧の方々。」

今日は本当にご苦労様でした」

「なんのなんの・・・してあきあ殿、京都の事件とは？」

そこで少女が突然消える事件を話した。

清明の言葉と自分の推理を話す。顔を曇らせる僧侶達。

「そこで皆様にお願ひがあります」

「あきあ殿、何でもござろう」

「皆様に暗示を破るお札を作って欲しいのです」

「暗示を破る？」

「はい、阿弥陀如来の真言をしたためたお札です。

聖結界の比叡山でかかれたお札には如来様が宿ります。

たくさん作って欲しいのですが、そもいきまますまい。出来るだけ作って下さい」

と云ってから撮影のことも話す。始めは顔を曇らせていた上人も小野監督の心を伝えたことで協力するという言葉も得た。

「蓬栄上人様、比叡山は聖結界で守られています。元方は手が出せません。

だから警察、テレビ局の前線基地を比叡山のどこかに作らせてください」

「おつおつそういうことならば、山の中腹に京の町が見渡せる広い空き地を使いなされ」

「ありがとうございます・・・それとこれは私の思い過ごしであればよろしいのですが」

「何でござろう」

「確かに比叡山の結界は元方には手出しできません。でも普通の人には関係ないのです。

だから手枷足枷を嵌められた少女達の親が元方にたぶらかされて・・・」

「この比叡山を襲うといいなさるのか・・・無いとはいえんのう。

いやいいことを聞き申した。この比叡山の警護を嚴重にと今から伝えます」

すっかり明るくなりスタッフが買ってきた新聞に目を通すあきあ。
1面も3面も元方の記事が大きく載り、厳戒態勢のような首塚のこ
とは隅に追いやられていた。

新聞記事としてはこれで良かったのかもしれない。

ほとんど寝ていないあきあの気分をかえようと

テレビ局の浴室で昨日の汗を流させた杏奈・・・

といっても一緒にお風呂に入ってたつぷりとあきあからのキスで元
気をもらってきた杏奈・・・

というのが真相だ。

今こうしてあきあのメイクをしてヘアを整えている杏奈から
鼻歌が聞こえるのは無理もないところだ。

ちようどヘアを手櫛で最後の調整をしているときに

「沙希! どうお?」

と理沙達早瀬の女が集まってきた。

その中にゆりあの顔を見つけた。

ゆりあは早朝にルーク監督が帰国したことで役目から離れてホツと
していた。

「ゆり姉! ごめんね」

その沙希の言葉に『えっ?』という顔をする。

「ゆり姉の仇だった将門さんにああいう形で天に送った事、不満だ
つたんじゃない?」

ゆりあは胸の前で手を振って

「そんなこと・・・。それより『ゆり姉』と呼んでくれるの?

嬉しい!」

涙で頬を濡らしたゆりあ、横から理沙がハンケチを渡し

「あらあら、今バッチリとメイクしてきたばかりじゃない。これじ

「や、もう一度やりなおしよ」
とつつけんどんだが温かい心が含まれている。

「だって、私モヤモヤして不安でしかたがなかったの」

「だから、言ったでしょ。あなたは早瀬の女になったんだって」

「もう遠慮しないでもいいのね？」

「ゆりあ！その言葉！・・・さては猫かぶっていたな」と律子の声。

ようやく1人浮き上がっていたゆりあだが皆に溶け込んだ今、とにかく嬉しい。

こうした時に声をあげるひづるはいつも

「ねえ、沙希姉さん。私も京都へ行ってもいいでしょ。」

家に帰ってもお父さんとお母さんはロケに行っていないし、貞子お婆ちゃんまのところでおとなしくしているから

「律師！ひづるちゃんのスケジュールは？」

「あきあと一緒よ。ひづるはこのドラマ1本に絞っているの」

「わかった。じゃあ・・・」

といって真言を唱えながら自分の手の平に梵字を逆さに書く。すると青白く光る字が浮き出てきた。

「ひづるちゃん、少しじつとしていてね」

といって下がっていた前髪を横でクリップで留めて額を出す。

そしてひづるの額に平行に左手を向けると真言を唱える。

するとあきあの手平から梵字が浮き出てきてひづるの額に描かれたのだ。

しばらくするとスーッと消えてしまった。

「さあ、これでひびくるちゃんはもう暗示にかからないし、聖結界に守られているから、この世のものでない者達からも危害は受けないわ」
と言って立ち上がった。

「さあ、お姉さま達」

といて周囲を見渡す。するとあの3人の婦警がこちらを見ているのが目に付いた。

「奈緒姉さん、あの3人の婦警さんも呼んでくれない？」

「沙希！あの子達に何かあるの？日和子叔母様から決して帰してはならない。」

目を光らせていなさいなんて命令されているのよ」

「ええ、葉月礼亜さんは帰宅途中の電車が脱線して3ヶ月の重症。森田亜季さんは2軒隣りのストーカーに致命的な傷を受けるの。そして篠田由紀子さんは買い置き牛乳を飲んで食中毒、これはメーカーの不良製品を出荷してしまったためなの」

「沙希！それは大変なことじゃない」

驚いたような目で奈緒が沙希を見つめる。

「特にストーカーの大学生、亜季さんが帰ってこないことで見境もなく若い女性を狙うかもしれない」

「じゃあ・・・」

と泉が携帯を取り出すと

「泉！ちよつと待って！この事件私達に扱わせて！」

と待ったをかける京。・・・じつと京を見つめる泉。

「わかった！・・・でも、何かあったらうちの班が出動するからね」

京と洋子は警察庁に連絡をとるためBスタジオを出て行く。

「あなた達！こつちへいらっしやい！」

3人を呼ぶ松島警視。

喜んで近寄ってくる3人の婦警、彼女達もやはりこの輪に入りたかったのだ。

「葉月礼亜巡査、森田亜季巡査、篠田由紀子巡査、

あなた達は今日これから我々と共に京都に出張して貰います。下着とかは京都で揃えてください。

家に帰ることは許しません」

という松島警視の命令に戸惑ったが結局

「はい！」

と言つて敬礼をする。

そして先ほどから視線に入る日野あきあのおだやかな笑顔、そのあきあが

「亜季さん」

と森田巡査を呼ぶ。

「さあ」

と森田巡査の肩を押す松島警視。

あきあの前に進み、興奮で頬が熱くなってくる。

「瑞穂！」

と声をかけるだけでさつと半紙が出てくる。

あきあのこと全て飲み込めるようになった瑞穂だ。

人型に切つた半紙に呪をかけるあきあ。

すると全く同じ森田巡査がその横に現われた。

驚きで下がるうとする本物の亜季。

「動かないで！」

というあきあの声でビクツとして身体が固まってしまった。

「これでいいわ」

とあきあの声で緊張感がとれる。

「亜季さん！亜季さんの武神と少し握手をしてくれない？」

あきあの言葉に驚きを隠せず、それでもおずおずと手をだす。

そして、あきあがその上から両手を重ねた。

亜季にとってあこがれの人だ。柔らかく温かい感触は一生忘れないだろう。

「もう、手を放してもいいわ」

といつてから、影武者の亜季に向かって

「あなたの名前と年齢、職業を教えてください」

「はい、森田亜季、21歳。警視庁交通課勤務です」

「最近、あなたの身が変わったことがありますか？」

「最近、見知らぬ男から電話がかかってくるのです」

といつてから身震いする。

本物の森田巡査はふらふらと同僚に寄りかかってしまった。

「そのストーカーに心当たりはありますか？」

「いいえ、でも家の中の様子や今穿いている下着を良く知っているのです。」

もう気持ち悪くて……」

「では森田亜季巡査に命令します。今日、警察庁広域班の刑事さん達とストーカー……」

いえ亜季さんに危害を加えるために亜季さんの部屋に進入するので
すから家宅侵入、

そして銃刀所持という凶悪犯に切り替わります。

その凶悪犯を捕まえるために協力してください」

「わかりました。森田亜季は凶悪犯を捕まえる為、警察庁広域班と協力します」

そこに入ってきた京と洋子。

「もうすぐ、うちのデカさんたちが来るわ・・・あっ！」

二人いる亜季に驚く京と洋子だが、すぐにあきあの出した式神だと気づき

「沙希! どうして?」

「本物さんは私達とこれから京都へ行くのよ。」

事件のあった時、どちらも近くにしていると自然の摂理で本物さんのほうにも

同じ危害が及ぶこともあるから」

「じゃあ・・・」

「ええ、危害をつけるのは、もうどうしようもないことなの。」

いくら京姉や洋子姉ががんばってもね。だから身代わりに式神をたてたわ。

葉月礼亜さんは電車に乗らなかつたら大怪我もしないし、

篠田由紀子さんは牛乳を飲まなかつたら食中毒にもならない。

でも森田亜季さんは違っの、犯人は亜季さん自身を狙っているのよ。

だから身代わりとなる式神をたてて事件を解決しなければならぬわ

「わかった。じゃあ、こっちの森田巡查を連れて行けばいいのね」

「あっ・・・あのう、日野あきあさん。では夕べ言われたことは・・・」

葉月礼亜が大きく目を開けて問い掛けてきた。

「ええ、電車の脱線事故を止めることはできません。」

でも、その電車に乗せなくすることはできます。

篠田由紀子さんが買い置き牛乳はメーカーが不良品でこの牛乳を飲まなくすることは出来ません。

でも、こういうことは信じてもらわなくてはとうしようもないことです。

だから無理やりでもこの東京から離れるように仕向けました。騙したよつで、ごめんなさい。

でもあなた達の力が必要なのは確かなの。

夕べからの京都の事件では小さな女の子が狙われています。

その女の子と話ができるのは婦警さんが適任でしょう」

そう言っただきあはニツと笑う。

「さあ、お姉さま方・・・輪になってちょうだい。

礼亜さん、亜季さん、由紀子さん・・・あなた達もよ」

と輪にさせてから手を差し出させてから、手の甲を上に向けるように言う。

先ほど、ひづるが額に写された梵字が皆の手の甲に青白く光っている。

あきあの真言によるものだ。

それがひづると同じく皮膚に溶けていった。

「さあ、これでいいわ。聖結界と元方の暗示を多く呪を身体に書き込んだから

お姉さん達が女の子の近くに寄ったら暗示を多くすることが出来るわ」

その時スタッフが男性二人を案内してきた。気が付いたあきあの視線で振向いた京。

「あつ、長さん達早かったわねえ」

と笑顔で迎える。

「課長の呼び出しだから飛んできました。なあ、安さん」

「ええ」

と笑うもう一人の刑事。

「あのう、課長。紹介していただけませんか」

という菅長に

「いいわよ」

といったが真つ先にあきあが近寄ってきた。

「菅野部長刑事さんですね。姉がお世話になってます」

といって手を出し握手する

「いえいえ、こちらこそ。課長にはお世話になりっぱなしで・・・」

と頓珍漢な挨拶・・・かなりあがっているようだ。

ニヤニヤ笑う外野席の様子があきあには手に取るように感じる。

「こちらは安田部長刑事さんですね」

「あっ・・・はい」

といて背広の横で手を拭いてからあきあの手を握った。その様子が可笑しいと洋子が後ろを向いて噴出している。

「まあ、お姉さん達、失礼ですよ」

あきあが澄ましていうので余計におかしくなる。

椅子を持ってくるから、とマネージャー達がとんでいった。

もう、可笑しくて可笑しくて、我慢ができないから・・・。

「もう・・・せっかく、お嬢様って役をしていたのに」

「無理よ、あきあには。女優としては出来るかもしれないけれど実際は無鉄砲娘だものね」

と薫。

「もう、薫姉ったら・・・」
と振向いて薫に向かつて右腕を曲げて中指を立てる。
「こら！あきあ！そんなことしたら・・・もう、
ひづるの教育によくないでしょ」
と圧絵の叱咤の声が聞こえて、首をすくめるあきあ。

菅野と安田の両部長刑事はほんの数分前と今とでは随分印象が違うので
顔を見合わせて戸惑っている。

パイプ椅子が円形に並べられ皆が座った時

「京姉、私から話してもいい？」

「いいわよ、これは沙希でしか判らないことですよ」

「じゃあ」

と喋ってパイプ椅子に座りなおしたが

「おっと、その前に」

と左手で額を押え、右手の一人差し指を口の前で左右に動かす。

「フイーフイー」

すると向かいに座っていた安田刑事の膝の上に小さな花束と小さな
お守りが現われた

「エー？」

驚く安田部長刑事。

「それは安田さんの長女のおあずみちゃんへのプレゼントよ。
今日が4歳のお誕生日ですよ。そのお札はあずみちゃんの身を守っ
てくれます。

肌身はなさず持たせてくださいね。・・・それから菅野さん、
あなたの奥様が無くしたといわれている指輪は

洗面台のクレンジングクリームの中に入っています。奥様に連絡し
てごらんなさい」

という菅野が携帯で連絡をとるのをじっと見つめる。

「ああ、お前か……お前、最近指輪をなくしたと言っていたよな見つかつたか……まだか、おふくろさんの形見？ そんな大事なものをもた……」

いや、いい……あつ、ちよつと待て！

今日、ある人がな。お前の指輪は洗面台に置いてあるクレンジングクリームの中に

入っていると知っているんだ。ああ、見てきてくれ……

……なに？あつたつて！……わかつた。

ああ、詳しいことは家に帰ってから話す。じゃあな」と言つて携帯を切る。

半信半疑だつたあきあの言つた事がこうズバズバ当たると無気味になる。

「そんな目をしないでください。

わたしはいたつて普通の女の子なんですから……ね！お姉さん達

！」

「へ〜」

という姉達の声。

「もう……」

と言つて拗ねてみせるあきあ。

そんな姿に弱いのは男のサガ。デレツとしてしまらないこと、しまらないこと。

ようやく緊張が溶けたようだ。それを見たあきあは瑞穂に合図を送る。

実は刑事達が入ってきたときすぐに亜季の式神にスタッフジャンパ

―を着せて
スタジオ内に並べられている改良型の『ステーション』に隠したの
だ。

緊張が溶ければ回りが良く見える。

男達の目には自分達の課長と同じ顔をした捜査一課の飛鳥泉警部や
婦警の有佐巡査がいる。

交通課の婦警・森田、篠田、葉月巡査はある意味有名だから知って
いる。

「……でも、あれは？……制服姿で警視の紋章……」

チラッと見たことがある警視総監付き秘書……確か……名前は……

・そうだ松島警視……」

立ち上がるうとした二人を押えたのは二人を挟むように座った京と
洋子だ。

「いいのよ。座ってらっしゃい」

「でも……」

相手は雲の上の存在なのだ。

「いいのって言ってるでしょ。上司の言う事が聞けないの？」

と言われれば動くこともできない。

でも良くみれば天才女優の早乙女薫や大空圧絵それに子役の天城ひ
づるもいるじゃないか。

どういう集まりなのか？訳が判らなくなってくる。

呆然としている二人の刑事。

そして、フと気づくと近寄ってくる二人の女性、

1人は先ほど向こうに行った女性だ。でももう1人は？

対面に座る日野あきあの横にいる3人の真中の婦警と同じ顔をして
いるのだ。

(うちの課長と捜査一課の課長が双子というのは警察官なら誰もが知っている。

でも彼女が双子なんて聞いていない……)
その女性は真中の婦警の後ろに立った。

「さて、今までの経過をお二人に話してくれない？京姉」

「いいわよ」

と話し出した内容はとても信じられぬものだ。

何も知らなかったら、馬鹿な！と吐き捨てていただろう。

式神だつて？何をかいわんやだ。

しかし、先ほど見せられた能力とあの銀行での『般若童子』のことを思う出すと彼女なら……
と納得してしまう二人だ。

「さて、今から話すことを信用するかしないかはあなた方次第です」
とってから

「今夜の0：12分に天井裏から犯人がそこに立つ森田さんの部屋に侵入します。

寝ている森田さんにスタンガンをあて気絶させた上、

持っていたサバイバルナイフで……両足の腱を切り裂き、

じわじわと苦しませて失血死させるつもりです。

犯人は……犯人はわかっています。2軒隣りに住む荻野一郎という大学生、

いえ彼がそういつているだけで本当の大学生ではありません。

彼が何故こんな犯罪を犯すのか……彼はサイコパスなのです。

殺人を楽しんでいます。ここで止めないとどれだけの女性が犠牲になるのか。

すでに2人の女性を殺しています……。1人は看護婦だった母親、

もう1人はキャビンアテンダントの妹です。……そして今度狙う婦警さん。

お気づきですわね、彼は制服マニアでもあるのです。森田さんが狙われたのも、どこかで違反車の摘発をしているところを見かけたのでしょうか。

では何故森田さんなのでしょう。あとで、森田さんと母親と妹の写真とを見比べると判ります。

驚くほど面影が酷似しているのを……」

「では、今夜、奴が動き出すまでに徹底的に調査をして先の殺人の証拠を見つければ……」

「はい、あと2日ほど猶予があればあなた達には可能でしょう。

しかし、それも彼にかかればそんな証拠など何の価値もありません。

彼の頭脳は天才的です。しかも法律にはずば抜けて強い。今の最高裁の判事でもかありませんまい」

「沙希！奴はそんなに頭がいいの？」

うんと頷くあきあ。

「たとえば、刑事さんが取り調べをしても10分もたたないうちに取り調べを放棄するでしょう。

立ち直れなくなって刑事という職業を辞めてしまう人もでてくるはずです」

刑事達は顔を見合わせている。あきあがこう断言するなら確実だ。

「だから、現場を押えることが必要なんです。

それでこちらが1歩リードです。それであっても彼を刑務所に送れるとは限らない。

だから、注意するのは普通の取り調べをしないことです。

警視庁・警察庁で対等に取り調べができるのは日和子おば様と長谷

部警視総監ぐらいです。

それでも一進一退ですから彼を送致できるとは限りません」

「沙希！そんな奴なら取り調べ出来ないんじゃない」

「いいえ、ただ1人彼を徹底的に叩きのめすことが出来る人がいます」

「えっ？そんな人がいるの？」

「やだなあ、奈緒姉。近くにいないじゃない。」

ほら、九条麗香さんを里に連れて行ってくれた人が」

「あっ！牧美香子叔母様」

「そう美香子叔母様なら彼の頭脳をぐちゃぐちゃに・・・立ち直れなくできます。」

異例ですけど、最初から美香子叔母様に取り調べをしてもらったほうがいいですね。」

でなければ確実に何人かの刑事生命が絶たれます」

なんだか恐ろしい奴だ。

「可哀相な男です。彼の性格がまっすぐならどれだけ世の中に役立つか・・・残念でたまりません」

「何だか、沙希が一番奴の取り調べに合っている気がするけど」

「いいえ、わたしは駄目です。わたしは彼の闇を取り去ってしまうでしょう。」

そうすれば彼は破綻します。生きた屍になってしまっんです。罪の重さに耐え兼ねて・・・」

（そうか、・・・沙希なら出来るだろう。人の心の闇を取除けるのは沙希だけだ。

そして、沙希は自分のしたことに苦しんでもがき続ける）

「わかった。これからは私達にまかせてくれる？」

うん・・・と頷く沙希に

「これから警察庁にいつてくる。そして、美香子叔母様に連絡をとってみる」

「あつ、京姉！モバイルを菅野さんと安田さんに渡してあげて」

長テーブルの上の改造が終わったモバイルを2台、菅野と安田に渡す洋子。

そして、式神の森田亜季を連れた京が振り返っていう。

「沙希、事件の後始末をついたら皆で京都へ飛んでいくから・・・がんばって」

京都のことを思うと心が曇る。あれからも少女の失踪が増え続け、その数12人！

第二部 第六話

昼過ぎの新幹線の指定席の車両にあきあはひづると並んで座っていた。

この車両全てが早瀬の女となっているのは里から料理人を半数と都内のレストランのシェフを半数連れて操が乗り込んでいるのだ。

薫もいるし庄絵もいる。奈緒もあの3人の婦警も制服制帽で座っている。

顔が見えないのは今夜の事件解決のため東京に残った京と洋子……

そして、後方支援のため泉と有佐ケイも残った。

もっとも泉とケイは明日京都にやってくる。

あとは、まゆみ社長と静香専務も東京に残っている。

京都に来るところではない忙しさ……というのが真相だ。

理沙と鳴海京子と大原智子はマスコミの代表というかたちであきあの通路を隔てた席に座っているし、マネージャー達は女優連を囲むように座っている。

他は松島奈美がみつけてきた早瀬の血をひく看護師達が10数人乗っている。

実をいうと前後の車両には各テレビ局のスタッフや技術者が乗り込んでおり

あきあを守る形をとっているのだ。

カメラ機材や機器類は各テレビ局からすでに出発しているし

各テレビ局のキー局の選ばれたスタッフ達も京都……の比叡山に

向かっている。

つまり、日本の主要テレビ局が京都の比叡山に集結しているのだ。こんな状態に新聞社や週刊誌が気づかないはずはない。ゆうべの元方の夜空いっぱいのパフォーマンスがあつて新聞紙上を賑やかせている今朝なのだから。

だから、この3輜以外の車両には記者連中が大勢乗っている、と京子と智子が知らせてきた。

別にあきあを目的に狙っているわけではないだろう……でも怪しんではいる。

あきあ番の記者も混ざっているから。

あきあは例によってセーラー服の佐野沙希という女子高生に顔を変えている。

そのあきあに

「ねえ沙希！あの家の地下が途中設計変更して3階から7階まで広げたということ聞いた？」

という薫の話にえっ？という顔をする順子や律子……井上貞子の家を知っている

女達の反応は驚きで一杯だ。

「えっ？……ごめん、黙ってて」

「じゃあ、沙希の仕業なの？」

「うん、あの温泉が見つかることによって、京都で働く女性のための

ひとつの理想郷になってほしかったの。病院施設と宿泊施設そして温泉昔の湯治場みたいでしょ。

ママに設計変更を頼んだときには、まだ少し自信がなかったけど今でじゃ良かったと思ってるわ」

「へっ……じゃあ途中で設計変更したんじゃ、まだ完成とはいえないのじゃあないの？大丈夫なの？これだけ大勢で押しかけて」

「へへへ……少し私も手伝ったから、もう完成しているのよ。里の温泉のお湯も今日入っているらしいから、着いたらさっそく入りましょーよ」

「ワッ、又あのお湯に入れるの？ヤッター」

とひびくが喜ぶ声に女達はにこやかに笑うが、

初めての看護師達や3人の婦警には何のことかわからない。

タクシーを連ねて、あきあにとつては京都の実家に戻ってきた。出迎えるのはママの真理と高弟達だ。

「お帰り沙希ちゃん」

「沙希姫様！いろいろご苦労様でした」
と苦労をねぎらう高弟の志保。

「ママ！志保さん……そして、みなさん。お出迎えありがとうございます
です」

「沙希姫様にはお元気なご様子、本当に嬉しいですよ」
高弟達も喜びで一杯だ。

「ママ、お婆ちやまは？」

「舞妓さんたちのお稽古でお稽古場にいますよ」

「じゃあ……」

と言って玄関に入ろうとして足を止めた。

「ママ？今朝電話したことは？」

「ふふふ、もうちゃんと届いてますよ」

沙希はニッコリして

「じゃあ、着替えてからお婆ちゃまにご挨拶します。杏姉！頼むわ」

と言って杏奈と共に玄関に入った。あわてて志保や何人かの高弟達があとを追っていく。

「相変わらずね、沙希ちゃんは」

と苦笑いする真理に

「真理姉さん、みんなをお稽古場に入れてもいいの？」

と薫が聞く。

「いいわよ。でも舞妓さん達のお稽古中だから静かにね」

高弟達に導かれて家に入る早瀬の女達、総勢50数名がゾロゾロと井上家に入って行く。

道行く人達が何事かと覗き込むのを真理がにつこり笑っておじぎをする。

この通行人の中に何人あきあ達を追いかけてきた新聞記者がいるのだろう。

そう思うと『ご苦労様』と挨拶したい真理であった。

稽古中の井上貞子は厳しい人だ。

「静絵！何度いったらわかるんどす。扇は道具ではないんどすえ」

「ほら、もつと腰をおとして！」

そんな稽古場にお辞儀をしてから薫達が音をたてぬように入って静かに座る。

皆もあとに続き、薫にならって同じように座る。

50数人が見学者になっているのを見て舞妓さん達も緊張がピークになって

いつもの踊りが出来ないようだ。

「今日は終わりどす！。こんな踊りを見せられるお客はんお気の毒になあ」

そして、ふくとため息をつく。

そのとき、お稽古場の襖のむこうから

「こんばんわ、遅れてすんまへん。お稽古お願いどす」と可愛い声がきこえる。

はっとした貞子

「おお、その声は」

と腰を上げたが、みんなの目を気にしたのかすぐに腰を降ろした。そして

「よろしおす。入って用意をしなければ」

その声でスーッと襖があき、お辞儀をした舞妓が1人。ゆつくりと顔をあげる。

とたんに舞妓達からざわざわと声があがるが

「これ！・・・静かに！・・・あんたはん達、よう見とくんどすえ」

シーンとする舞妓達、

「ほなら、小沙希ちゃん。前の続きどす」

「へえ、よろしゅうお願いします」

といって舞台の上で扇を目の前に置いてお辞儀をする。

小沙希の舞いは素人目にみても先ほどの舞妓たちとは全然違った。舞いを舞う小沙希の後ろに景色が見えるのだ。

「この続きはこうなんです」

と高弟に踊らす貞子。それをじっとみている小沙希。

「小沙希ちゃん。今のところを」

「へえ」

と喋って舞う姿。一度も踊った事が無いなんて思えない。

初手から間違わず、それどころか舞いのツボを押えているのだ。

「まあまあ、あんたと言う人は」

とため息混じりの驚きを与えているのだ。

「あのう、お師匠様。こことここが少し舞いにくいんです」

「ほうほう・・・小沙希ちゃんならどうするえ？」

「えっ？うちなら・・・ここはこう、ここはこうしますとほんに踊りやすいんです」

「ほなら、小沙希ちゃん。小沙希ちゃんという通りにして最初から舞ってみなはれ」

小沙希の舞をじっと見つめる師匠と弟子達、思いは同じだった。

昔から舞いにくい所作だった。ではどうすればいいのか？

・・・そこまで考えつかなかったのだ。

今、真剣に見つめる。

舞は終わった。なるほどそう舞えば良かったのか、改めて目が覚める思いがする。

「小沙希ちゃん、こっちへ来なされ」

と自分の近くに呼び寄せた。

小沙希の座るのをまっつ

「小沙希ちゃん、ほんにあんたはんは舞の天才です。うちなんか足元にもおよびまへん」

「とんでもありません。これはお婆ちゃまのお教えがええからきつ

ちり舞えるんどす」

「ほれみなはれ」

という師匠の声に

「へ〜」

頭を下げるしかない舞妓達。

「さあ、真理はん、小沙希ちゃん。久しぶりに聞かせておくれやす」

「はい」

と言って琴を取りに立つ真理。

小沙希は両手の平を上に向けると

ボウと『緋龍丸』が現われた。

聞いた事がある小沙希の秘術を目の前で見た舞妓達、

「キヤツ」

という叫び声こそ上げないが、手を口にあて目を大きくあげて少し腰を浮かせて背をそらせ、

逆の手を畳において身を支える。そんな図がみられた。

今日始めてあった女優日野あきあ・・・今、小沙希ちゃんと呼ばれている舞妓と

同人物とは判ったが、こんな不思議な術を使うとは・・・

いや、テレビのドラマで見たではないか・・・じゃあ、あれは本物？ ざわめく看護師達。

小沙希は立ち上がって縁に出る。そしてガラス戸を開けると風が頬をなで 気持ちが悪く落ち着く。

今はこれからの戦いのことは頭がない。ママの真理が琴爪をはめて小沙希をみている。

今は無心だ。山・海・川、自然の息吹が小沙希をつきつごかす。

真理は驚いていた。薫に聞いてはいた。沙希ちゃんの笛を聞いて昔の体臭が戻ったとか、

以前の沙希ちゃんの笛は本当に名人級だった。

でも、これは一体なに？まるで天上の音楽を聴いているようだ。

一本の笛なのに高低のハーモニー・・・

隣りの祖母の貞子が目を白黒させている。驚くことなんてない人なのに。

(いけない！無心で沙希ちゃんについていかなくては・・・)でもその心配は無用だ。真理もやはり天才だった。

最初こそぎこちなかったが段々と小沙希の笛に押し上げられ高みに上げられていく。

天上で仏に囲まれて演奏している真理がいる。

いや、琴をひいているのは弁天様だ。そして、笛を吹いているのは菩薩様だった。

調べは消えるように終わった。さすがに真理は肩で息をしている。

「真理はん、小沙希ちゃんこの通りどす」

と喋って座布団から降りて頭を下げる。

「お母様！やめてください。そんなこと」

「そうよ。お婆ちゃんまが孫に頭を下げるなんていけないわ」

「いやいや、今はそうすることが、わたの精一杯のお礼どす」

と言ってから両側に座り込んだ真理と小沙希の手を握り、

「今のは天上の調べ・・・そうどすなあ。わたには見えました。

琴をひく真理はんの弁天様、そして笛を吹くのは小沙希ちゃんの菩

薩様。そうでっしやる」

「わたしも自分が琴を弾きながら天上で弁天様になっておりました」といってから小沙希を見て

「沙希ちゃん！やはりあなたには菩薩様が……」

「いややわ、わたしは早瀬沙希という真正銘の人間よ。仏様ではないわ」

だが、ここにいる全員が見ていたのだ。天上に導かれた自分達の目の前に
今、師匠と真理が言ったことと同じことを。

でもそんなことどうでもいい、あんな天上の調べを聞かせてもらえるなんて。

3人の婦警も訳もわからずここまで連れてこられたが、いくら現代っ子だって真実のことはわかる。

日野あきあという女の子が自分達を導いてくれているのだ。

そして、自分達も早瀬の女だと言ってくれた。

それがどんなことなのか判らないが、ここにいる人達

……いや、あこがれる松島警視と同等に扱われている嬉しさ。

後ろでざわざわと騒がしかった看護師達も、もう物音一つ聞こえない。

見つめるのは舞妓姿の小沙希……いや天才女優日野あきあ、ただ1人。

そう、こうして間近でドラマをみているのだ。

「ママ！お部屋は？」

「ええ、皆さんのお部屋は用意してありますよ。」

それと、先ほど日和子さんから連絡があつて京都府警に奈緒さん達の制服を

3着つつ用意させたから挨拶がてら取りに行つて欲しいと連絡があつたのよ」

「奈緒姉！それと森田さん、篠田さん、葉月さん……」
と4人を呼ぶ。

「奈緒姉、聞いたでしょ」

「ええ、じゃあ今から……」

「いいえ、お部屋に落ち着いて温泉にじっくりと浸かってからでいいわ」

「じゃあ、そうさせてもらつ」

「富士子さん！」

と呼ぶと襖が開いて着物姿の女性が入ってくる。

「奈緒さん、この富士子さんがあなた達のお部屋のお部屋係りになるの。なんでも言いつけて貰つてもいいけれどあまり我儘を言つちや駄目よ。」

自分達の出来ることは自分達でやってね。ここはこれからあなた達の京都の家になるのだから」

富士子に案内され、奈緒と自分達の家と言われて戸惑いながら後に続く3人。

「次ぎは看護師さん達ね」

と今度は自らの足を運んで彼女達の傍にに座つた。

「あなた達が松島奈美に探しだされた早瀬の血を引く看護師さん達

ですね。

遠いところをどうもごくりさま。

責任者である小谷澗先生は今、早瀬の里に戻っていますが先ほど連絡があつて明日には戻るそうですよ。

それまでは地下7階にある温泉にでも入つてゆっくりしていなさいね。

そうそう、地下1階と地下2階があなた達の職場となる病院施設なの。

地下3階が病院の寮となつていて、もうすでに里からのわかい人達が入寮していますけれども、

まだ看護師学校に通う未経験の人達がほとんどなのですよ。だから、いろいろと教えてあげてくださいね。

それと、ここは人間国宝である京舞の井上貞子先生のお住まいですから

あなた達が出入りする的是そのお隣りの家となります。患者さんの出入りもお隣りとなります。

1階はレストランと休憩所、2階はシェフや料理人さん達のお部屋になつています」

と言つてから

「千佳さん、琴乃さん」

と声をかけると襖があき、二人の看護師が入つてきて真理の隣りに座る。

「紹介します。こちらが浅香琴乃さん、そしてこちらが瀬川千佳さん。

二人とも歳は若いですが小谷澗先生に教え込まれてきました。

じゃあ、二人で案内してあげて」

「はい！」

「はい！わかりました」

といって手荷物を持った看護師達が二人のあとに続く。

「あの！」

と声をかけて

「あなたが宅配便で送ってきたお荷物はそれぞれのお部屋においてありますから

あとで荷ほどきなさいね」

「ありがとうございます」

彼女達が去ったあと、貞子の傍に戻ってきた真理に

「ご苦労さんどすなあ、真理はん」

「いえいえ、お母様。この2〜3日バタバタとしていて煩くありませんでしたか？」

「ほほほほ・・なんのなんの、なんか新しい空気が入ってきたはって新鮮でした」

「さあ、あんた達！さつさとお部屋に荷物を置いて、温泉につかっ
てきたら？」

「うん、そうする」

と素直に立ち上がった薫につられて皆立ち上がる。
そしてゾロゾロと部屋に向かった。

後に残った高弟達、皆ほつと肩から力がぬけていく。

「ねえお婆ちやま。少し出かけてきていい？」

「ああ、菊野屋はんに菊枝ちゃんのお参りどすか？」

「へえ」

と行ってから、面白そうに今まで様子を見ていた舞妓達のなかの豆
奴に声をかける。

「豆奴ちゃん！うちも一緒どすえ」

「うわっ」

飛び上がった豆奴を羨ましげに見る舞妓達。

「さあ、皆も一緒え。うちも置屋のお母ちゃん達のとこまで付いて行きます」

という言葉に飛び上がる舞妓達。

その言葉に『ん？』と不審そうに顔をむける貞子や高弟達、真理も
しかりだ。

小沙希が出て行ったあと真理は薫達を呼び出し、徹底的に追及した
のはいうまでもない。

最初はのらりくらりとすつとぼけていた薫、圧絵、ひづる、

そしてマネージャーや理沙達、でも真理と貞子の涙には弱かった。

昨夜沙希がなにをしたのかを聞いて、びっくり

「ひく……平将門と戦った？……」

予想だにしない事だった。

そして、今

「この京の都を焼け野原に？……ええ、藤原元方の怨霊？

小さなおなごはん達がつれられているんどすか……そんな
なひどいことを……」

「よろしおす。どんなつてをたどつても、そんな非道な仕打ちをう
けはった

親御はんのこと調べなはれ」

と号令をだす貞子。自分が生きてきた大好きなこの京都に卑劣なま
ねをする怨霊の存在……

我慢ができないのだ。

一方ぺちやくちやと話しながら舞妓達と歩く小沙希、でも油断はし

ていない。

舞妓達にも小沙希ちゃんの不審な行動には首をかしげざるを得ない。

だつて送つていった置屋のお母ちゃんをわざわざ呼び出し

なにやら短冊の束を渡し、額にその紙を貼るようなしぐさをしている。

始めは体よく断っていたお母ちゃんだが、小沙希ちゃんの話の聞くにつれて

見る見る血の気が引き真つ青になって今度は逆に小沙希ちゃんに懇願している。

そんな事を置屋ごとに繰り返す小沙希ちゃん。全く訳がわからない。

結局、豆奴1人になったのは15:00近くになっていた。

「ごめんえ、豆奴ちゃんにもつきあわせてしても・・・かえって遅うなつてしもたねえ」

「ええんよ、小沙希さ姉さん。でも、どうしたん？」

「ううん、なんでもない・・・といいたいけど、

・・・やっぱし、お母ちゃんの前で話すえ。急ごう、豆奴ちゃん
「！」

ちらつと横目で見る小沙希さん姉さん。

豆奴にとって凄い人であり自慢の小沙希さん姉さんが

こんな真剣な表情で足早に急ぐなんて・・・。

いつも凄い事件をニッコリ笑いながら解決してきたのに。

そうおもつと胸がドキドキしてきた。物凄いことが起きる予感がして・・・。

「ただいま」

という声に

「これ豆奴！こんな遅うまでどこをほつつき……」
と2階から降りてくる菊野。豆奴の横にいる舞妓をみて

「まあ……小沙希ちゃん……」

「えっ？小沙希ちゃんが？」

と言う声でドツドツド……と階段を降りてきた花江達芸妓と花世達舞妓。

「お母ちゃん！ごめん。うちが豆奴ちゃんを引きづりまわして遅うなっしてしもつて」

「まあ、小沙希ちゃんが一緒なら、心配することおへんかった。さあ、早うおあがり」

「お母ちゃん、うちお話があるんどす」

と菊野の顔を見てから、

「そして、みんなにも……」

小沙希のただならぬ様子にみんながドキとした顔で居間に座る。

「小沙希ちゃん！どうしたんえ？」

小沙希の様子にオロオロする菊野。

「お母ちゃん！落ち着いて！」

と菊野の横に座りなおし、その手をぎゅっと握って座った自分の膝の上におく。

先ほどから小沙希がどこかへ行ってしまっような心細さがこうして手を握ってくれたことでほっと落ち着いた。

でもこれで、自分が小沙希をどれほど思っているか、どれほど頼りにしているのか

……もう実の娘以上だった。

「うち、これから話すこと長くなるけど……」
と言つと

「そんなん、かましまへん
と花世がきつぱり言う。」

小沙希が大好きな花世は今は仕事のことなんか頭にはない。他の芸
妓や舞妓達も同じだ。

「里から帰って……」
と話し出した小沙希。

あの般若童子のことは皆承知している。

「又、小沙希さん姉さん、やってはる。うち、きつうに叱ったのに
……」

「ダメダメ！あんなことあると小沙希ちゃんには見逃すこと出来し
まへん」

新聞を読みながら話す花江と花世、そして二人を取り囲む芸妓と舞
妓たち。

そんな図が昨日あったのだ。

だが、今その続きとなる話を聞かされ顔色が真っ青となるのは当然
だろう。

小沙希ちゃんが以前と同じようにドラマ仕立てとはいえ、あの平将
門の怨霊と戦うなんて……
全くなんて子なんだろう。そしてこんなこと出来るのは世界中でこ
うして

温かく手を握ってくれている小沙希ちゃんだけなのだ

でも今まで小沙希の口から聞かされた話は序曲でしかなかった。

この京の都にもたらせるであろう恐怖は菊野達を震えあがらせた。

「こ……小沙希ちゃん……藤原の元方と……いえば……」
さすがに京都人である。平安期とはいえ元方がこの都にもたらした
災いは知っている。

その元方が復活してこの地を焼き野原にするなんて……

「その日は明後日の午前2時……」

そう具体的な日時を聞かされ、いてもたってもいられなくなる。

「お母ちゃん！うちやりませう。ええどすな、花世ちゃん……」

「うち、小沙希さん姉さんが危ない事すんのいやどす。」

「……でも……今回は別どす。小沙希さん姉さん、徹底的にやってもかましまへん」

そして、小沙希をキツと見つめて

「うちらは、小沙希さん姉さんみたいなことできまへん。

でもうちにやれることあるはずどす」

「花世ちゃん！ええこというわ。そうや、うちに出来る事あるはずどす」

「花世ちゃん、花江さん姉さん。さすがうちのお姉ちゃんや妹たちどす」

”姉”と聞いて驚く……というより飛び上がって喜ぶ芸妓や舞妓。

「お姉ちゃん……言うてくれるんどすか？」

「あたりまえどす、お姉ちゃん達はうちの肉親どす。

うち、本当にそう思ってるんどす」

そう、早瀬の里に行ったとき、小沙希ちゃんの姉である理沙はんに聞いた事がある。

小沙希ちゃんの肉親の情の薄い育ちを……そう思つとなんかせつものなる。

そんな時、一番年下の豆奴が突拍子もなく

「ほんなら、うちはどうなるんどすか？」

と聞く

「アホやなあ、この子なにを言うかとおもつたら……」

姉さん達の笑い声に

「豆奴ちゃん、あんたはうちの妹どす」

パツと顔を輝かして喜ぶ豆奴。

それを見て、からかった姉さん達はシユンとしてしまう。

「ええ」と

つと花世がこの場の雰囲気を変えるように

「うち、なんの話をしていただすやろ・・・」

そうどす、そうどす。小沙希さん姉さん！うちらに出来る事、あるんどすか？」

その花世の言葉に得たりとばかりに

「へえ、うち・・・お母ちゃんとお姉ちゃん達にやって欲しい事あるんどす。

ちようど豆奴ちゃんがお稽古にきてはったんで、他の舞妓ちゃんを送りながら

置屋のお母ちゃん達にも頼んできたんどす」

菊野は悲しくなった。どうして最初に言ってくれないのか。

そんな菊野の心は小沙希にはお見通しであつた。

「お母ちゃん、そんな顔したらあきまへんえ。一番偉い人には最後に報告するんどす」

その小沙希の言葉でとたんに元気になる菊野。

花世達に『パチッ』とウインクしてから

昨夜からこの京都でおこっている少女消失事件を話す。

警察がパニックを恐れて報道を止めているのか、

記事にする時間がなかったのかどこからも報告されていないので

菊野も花江達にも寝耳に水の大事件であつた。

「そ・・・そんな・・・そんなこと・・・あつたんどすか」

思つてもぞつとするのだ。

でも皆、女だ、可愛い我が子が突然いなくなる。想像出来てしまうのだ。

ふつふつと怒りが増してくる。

「小沙希ちゃん。うち達、どうすればいいんどす？」

母親となる年齢に一番近い花江が怒りで顔が真赤になっている。

小沙希は横に置いていた風呂敷包みを前に持ってきて皆の前で広げる。

覗き込む皆の目に映るのは、短冊に不思議な文字が書かれた束だった。

その一枚をとった小沙希が

「豆奴ちゃん、ちよつとうちの前に座ってくれはる？」

「へえ」

と言つて素直に立ち上がつて小沙希の前に座りなおした。

「豆奴ちゃん、少し目を閉じてくれはる？」

頷くと直ぐ目を閉じる。

その豆奴の顔の前に短冊をかざす小沙希。すると不思議なことがおこつた。

短冊の文字が浮き上がり、そして豆奴の額に移っていくのだ。

短冊をおろして見る豆奴の額には梵字が青白く光っていた。

けれどその文字が薄くなり皮膚の中に消えていく。

こんな不思議な現象を見届けた皆からは声もでない。

「豆奴ちゃん、もういいどすえ」

目を開けると立ち上がつて元のところへ戻つていく。

「これで豆奴ちゃんには聖結界が張られたんどす。

聖結界は人にあらざる者をはねとばしてしまふんどす。

元方が出してくる悪鬼・餓鬼・幽者・悪霊の攻撃を受付ないんどす。その上、元方の暗示はかからへんし、うちがこんなことする本当のことは、例えば今の豆奴ちゃんか暗示のかかった小さな女子はんの傍に寄りたら暗示がとけるんどす」

そして、持っていた短冊を豆奴に渡し

「豆奴ちゃんは、もううちと同じことできるんどすえ。

豆奴ちゃん！花世ちゃんの顔の前に短冊をかざして！ 花世ちゃんは目を閉じて！」

と指示すると

短冊から文字が花世の額に移っていく。そして文字が花世の額に消えていった。

「ひやあ・・・うち、なんや小沙希さん姉さんになった気がするわあ」

とって舞妓の花鶴に同じ事をくりかえす。

花世もつられてか花江に術をほどこす。（これも術の一種なり）

そして、あつというまに菊野屋全員が聖結界の持ち主となっていた。少々騒々しかったが、皆これからのことを思ってたか、すぐにさっと座りなおす。

「これでうち、少しは安心しました。

うち、これからこの祇園界隈に結界をほどこすつもりどす。でも心配は・・・」

「小沙希ちゃん。心配ってなんどす？」

「今施した聖結界、さっき言った人でないものには効果はあるんどすが人には効かないんどす」

「人には効かないんどすか？」

言っている意味が伝わらない。

「花江さん姉さん！花江さん姉さんがもし、あの元方に自分の子が人質にとられてしまつて、

例えばこの菊野屋を襲え！さもなければ人質の子供を殺す！・・・と言われたら、

花江姉ちゃんはどうしますか？」

と小沙希に言われて皆は真っ青になった。

「こ・・・小沙希ちゃんは・・・そ・・・そこまで心配しとるんどすか？」

「へえ、うちは卑劣なあ元方のこと、いくら自分の子供をちつちやい時に

自分のせいで死なせてしまはつたと言われても、こんなに大勢人質はとらしまへん。

京都は260万人住んであります。その半分が子供はんとして、またその半分が

女子はんどす。簡単な計算どすけど65万人が人質になるんどす。いくらうちらが頑張つても65万人の人質になるのを止める事できへんのと

違いますか」

みんなから声が出ない。数が多すぎるのだ。

「うちが先に言った人質の親御さん130万人・・・

これ計算上でいっただけどす。

けんど1万人でも元方のいうこと聞かはつたらこの京の都は焼け野原どす。もう止められへん。

いくらうちでも人質となつた親御はんと戦う事できまへん」といった。

でも・・・でも・・・どうすれば・・・

「元方の言った時刻にまだ時間があるんですが……
ねえ、皆！人つてこんなことでつぶされるような生き物と違います
やろ」

「そうそう、小沙希さん姉さん！うちらこんな事で負けへんのどす」

「小沙希ちゃん！こうなつたら人海戦術どす。

そう思つてこんなたくさんのお守りつくつたんどすやろ」

小沙希はニツコリ笑う

「さすがうちのお姉ちゃんや。うちの考えている事わかるんどすな
あ」

「こんな妹持つて良かったのか……」
とことんお騒がせやの小沙希を見つめる。

「えらい言われ方やなあ。
……ところでお母ちゃん、ここにお母ちゃんがいるの……うち
心配で心配で……、
直ぐにでもお婆ちゃまのところに移ってほしいんどす」

「お師匠はんのところへ？」

「へえ、もう地下の施設も完成しているんどす。

それにあの温泉も今日、里から送られてきたんどす」

「えっ？あの温泉、この祇園でもう入れるんどすか？」

「へえ、どんどん入つてもかましません。他の置屋のお母ちゃんに
もいつとききました。

舞妓ちゃんの中には豆奴ちゃんみたいに元方に人質にとられても
おかしいことおへん子もたくさんいます。

そやから一つのところでまとまつていてほしいんどす。

あのお家全体に、聖結界を2重に張っているんで元方には見えては
おへん。

だから安心して寝泊りしていいんどす」

それから、早かった。そんなにたくさん着る物を持っていく必要はなく

みんな手荷物一つで井上貞子の家に向かった。

井上家のお稽古場には他の置屋の女将や芸妓舞妓達がワイワイガヤガヤと集まっていた。

「お婆ちやま！ただいま戻りました」

と挨拶をする小沙希。

「おお、戻ってきはった」

といって自分の横を示す貞子。

高弟達も異様な雰囲気・・・でもさすがに自然なかたちで控えていた。

「小沙希ちゃん、あのお話聞きました。

うち、この京の都に災いをもたらす怨霊はゆるしてはおへん。

でもそんなことができるのは小沙希ちゃん一人・・・あなたが頼みの綱なんどす。

小沙希ちゃん！この京の都を守っておくれ」

そういうとしっかり小沙希の手を握る。

「お婆ちやま、安心して！」

ニッコリ笑うと立ち上がる。

「あつ！小沙希ちゃん！」

「お婆ちやま！うち比叡山に行つてきます。

蓬栄上人様達に女の子達に渡すお守りを作って貰っているんどす。

それを取りにいつてきます。それと警察やテレビの基地を見てきます」

と行って着替えに自分の部屋に戻る。

心得て杏奈が瑞穂と律子・・・それにゆりあがすつと立ち上がって後続く。

目の端には菊野屋のお母ちゃん達が他の置屋の人達に結界を施す姿があった。

次に現われたときは小沙希はセーラー服になっていた。先夜の美少女戦士の姿だ。

一度祖母の横に座る。

「じゃあ、お婆ちゃま。行ってきます」

ときつちり頭を下げて挨拶をする。

顔をあげた小沙希見事な笑顔だ。何の屈託もない。

「ママ！お母ちゃん達にお部屋準備を・・・」

という祖母のお茶を入れ替えていた真理が

「もう準備してますよ。余計な事考えなくてもいいから。沙希ちゃん、がんばって」

「沙希姉さん」

と声をかけたひづるの胸からひらひらと蝶が舞い上がり、そして少女の姿になった胡蝶が

「あきあ、行くのか」

「うん、偵察と人質が何処にいるのか探してみる」

「なら、私もいく」

と行って蝶に姿を変えセーラーの胸ポケットに張り付く。

菊野屋以外の女将・芸妓・舞妓達はもう声もでない。

「みなはん、いいですか。今見たこと、これから見ることに決して人に言っではいけまへん

死ぬまでどす。いいどすな！」

と人間国宝の井上貞子にこういわれては口に出すことは出来ない。

もし違反したらこの祇園にはいられなくなる。

「沙希！」

と言って杏奈が沙希の額に陣八を『パチッ』と止める。

そして、ゆりあから渡された手甲を瑞穂と律子が左の指に通し肘まである手甲の

留め金を『パチ・・・パチ・・・』と止めていく。

全て準備を終えた沙希は庭に回されたスニーカーに足を通した。

そして庭の中央に歩み出た沙希は振り返ってにっこり笑うと

「行つてきます」

という一言だけを残して飛び上がった。

吃驚仰天の舞妓や芸妓・・・言葉も出ない。

中には感のいい子もいて

「まさか・・・小沙希ちゃんが・・・般若童子？」

と声を上げた。

「シー」

と皆にわかるように唇に一文字に人差し指を一文字に持っていく

菊野屋の女将や芸妓・舞妓達。

ここでようやくそうだったのかと愁眉を開く他の置屋の女将達。

毎日毎日お百度を踏む菊野屋の女将。死んだ娘のためとは思えない

し・・・、

とにかくチュンチュンと外野が煩かったのだ。

そして今、娘の事件を解決したのが、小沙希ちゃんであり

その身を心配してお百度だったと判つたのだ。

・・・、。。。なんだか羨ましくなる。

ここは比叡山奥の院の本堂の庭先、ストンと降り立った沙希が
「天鏡さん！」

と大きな声を上げると

「おお、沙希殿！さあさ、おあがりなさい」

天鏡に導かれて本堂への階段を上がる沙希。

廊下のところでスニーカーを脱ぎ本堂の座敷にあがった。

蓬栄上人を始め峰巖和尚・・・驚いたことにもうすでに宗円和尚の
姿がみえる。

「さあさ、沙希殿。こちらへ」

と進められて蓬栄上人の前に座った。

上人は筆をおいて少し肩を動かす。肩が凝っているようだ。

いそいで立ち上がった沙希は蓬栄上人の後ろに回って膝立ちをして
蓬栄上人の肩を揉み始めた。

「沙希殿！沙希殿にそんなことをさせたら・・・」

罰が当たるとい言葉を押さえ込んで

「いいえ、こんなことわたしがいえば失礼に当たると思うのですが
お上人様がわたしのお爺ちゃまに思えてしまって・・・

わたしには幼い頃の恐ろしい祖父の印象しか残っていません。

だからいつかこうしてお爺ちゃまの肩を揉むのが夢となっていました
た」

「優しいのう・・・沙希殿は・・・そうか、聞いておるぞ。

沙希殿の肉親の情に薄かったのを・・・」

「いいえ、わたしには今たくさん姉と母と・・・そして井上のお
婆ちゃまが

います。あつ・・・こんな事を言って失礼だったのでしょうね」
上人がうつむいてしまったで慌てて言い添える。

「いやいや、そうではないぞ、沙希殿。わしを祖父と呼んでくれるのか

いや・・・嬉しい限りじゃ」

「えっ？いいんですか？お上人様」

「ああ、それぞれ、もうそんな堅苦しく呼んでもらわなくても良い」

「いいんですか？お爺ちゃまと呼んで！・・・嬉しい！」

「羨ましいのう、蓬栄よ」

「そんなことなくてよ、峰蔵のお爺ちゃま」

と言われてパツと顔を輝かす。

本堂に温かい空気が流れていく。沙希が来て空気が変わったのは確かだ。

「ぐすん！・・・」

と鼻をすするのは天鏡だ。

この男こういふ話題にはめっぼう弱いのだ。つまり感激屋なのだ。

「全く・・・沙希殿は・・・沙希殿は・・・」

「あら、天鏡のお兄ちゃん。どうしたの？」

”お兄ちゃん”と呼ばれ、慌てて振向いた天鏡。

余程驚いたのか普段でも達磨大師のような大きな目がそれ以上に大きくなっているのだ。だがその口元がぶるぶる震えているのが見て取れる。

この天鏡と言う男、赤子のときにこの比叡山に捨てられていたのだ。

拾ったのは若き峰蔵だった。時の奥の院の上人に直談判して

許しが降りるまでいつまでも上人の前に座りつづけた。

とうとう上人は折れた。それも誰の手も借りずに育てるといふ条件つきだった。

峰庵は育てあげた。赤子を背負って修行をする峰庵をせせら笑っていた修行僧も

その姿勢に最後には真剣に見守るといふ姿勢にかわった。

ただ一人、上人の目を盗んで赤子の世話をしていたのが今の蓬栄上人であつた。

峰庵も蓬栄の力がなければ育てることを中止したかもしれない。

だが二人を影からそつと見守りつづけた上人のこと。誰も知る者はいない。

「お兄ちゃん？・・・お兄ちゃん・・・と呼んでくださるのか」

「当たり前じゃない。このお山にはお爺ちゃまもいるし、お兄ちゃんもいるの。」

それも天鏡のお兄ちゃんにたくさんの武者僧のお兄ちゃん、そして宗円のお兄ちゃんもいるわ」

宗円も武者僧も兄と呼ばれ喜びに溢れている。

「さあ、蓬栄お爺ちゃまは終わりね」

「おうおう、楽になつたわい。沙希や」

自然と孫のように思え呼び捨てにする自分を発見する。

嬉々と隣りで峰庵の肩を揉み始めた沙希を横目で眺める蓬栄上人。

（優しいのう、・・・優しくすぎる。この世のものとは思えぬ優しさだわい。

この子に菩薩様が降りてくるんはわかりますわい。のう菩薩様。

こんな優しい子なのに修羅の道ばかり、守ってください、菩薩様。

守ってください、こんなしわがれ爺の命が必要ならいつでもさしあげますわい」

と祈らずには得なかつた。

あらためて蓬栄上人の前に座りなおした沙希、

その前には僧侶達が作り上げたお守りが大事に風呂敷に入れられてある。

「ありがとう、お爺ちゃま、お兄ちゃん達。これで何人も女の子が元方につれていかれなくて済むわ」

「沙希や、わし達も読経とこうしてお守りづくりを出来るだけつづけるだけじゃ。」

「じゃが、命だけはいとつてくれよ」

「わかってます。わたしは負けはしません」

「といって頭を下げる。」

「お爺ちゃま、一つお願いがあります」

「何かのう」

「土御門の術者の人達の手を借り受けたいのです」

「土御門の術者？」

「はい」

「して、どういう？」

「はい、清明神社の警護！」

「はっとして峰巖と顔を見合わせる。」

「わしとした事が……」

「気がついたのである。」

「天鏡！土御門の者達をいそいでここに！」

「はっ！」

「といって慌てて本堂を出て行った。」

「2〜3人の武者僧が続いて出て行く。」

蓬栄上人と峰巖和尚に苦渋の色がにじみ出る。

それをみていた宗円もはっと顔色を変える。さすがに宗円、気がつ

いたのだ

どたどたと足音がして天鏡達が入ってきた。後ろに土御門の術者2
5人が付いてきている。

そこに沙希の姿を見てハツとして頭を下げる。

そこにいるのが、か弱い女の子には見えるがそうでないのは
今までの彼女の術者として強大な力を目の前で見ているのだ。

信じられないが彼女は平安時代で安倍晴明の元で修行したと聞い
ている。

その彼女が口を開いた。

「皆さんには怨霊・藤原元方の復活はもうすでにご存知だとおも
います。

その元方はもうすでにいろんな手をこの京の都に打って来ていま

次に狙うはこの京の結界の要となる晴明神社の破壊です」

という言葉にあつと声を上げる。そうなのだ。それが一番恐い。

結界が無くなれば朱雀門が開く、地獄の悪鬼のたくいがそれこそ数
知れず出てくるのだ。

「わたしはこの間、京都の結界を張りなおしたとき、

何かの安全にと思って晴明神社そのものにも結界を張っておきまし
た。

つまり二重の結界です」

「二重の結界？」

「はい晴明神社の結界を破らないともう一つの京都全体の結界を破
れない。

だから怨霊・悪鬼のたくいには強固なので心配はありません」

「それでは何故？」

といいかけてハツと気づく土御門の術者。

「そうなのです。いくら強固な結界でも普通の人には結界そのものが空気と同じ・・・
つまり、無いのと同じなのです。
今、京の町でこんな事件がおこっています」
と少女が次々と行方不明になっている事件を話す。

「相手は卑劣だが強大な力を持つ怨霊です。寝ている少女に暗示をかけて

自分の元に呼び寄せるなんて簡単なことです。

例えば1万人の子供が人質になるとすると親は倍の2万人です」
あきあの言う事がもう一つぴんと来ないらしくポカンと見ている術者達。

「自分の子供が人質となって手枷足枷を嵌められた親が
『晴明神社を焼き討ちにしろ』と元方に囁かれたとしたら？」

「あっ」

と声をあげる術者と僧侶達。

そこまでも考えもなかった。

考えられたのは蓬栄上人と峰巖和尚・・・それに和尚達の表情を呼んで気づいた宗円ぐらいだ。

「これは・・・」
と喋って立ち上がる。

もう一つ沙希は言い添える。

「峰で打ってください」

つまり気絶をさせるっという意味だ。

「相手は卑劣な罠にはまった一般市民なのですから。」

わたしは、下の前線基地の様子を見てから、京都府警に行って打ち合わせてきます。

それから晴明神社に向かうので少し遅れるかも知れませんが、
とってから聖結界の文字を与えた。
これで術者としての力が上がるはずだ。

術者達が急ぎ出て行ったあと

「お爺ちゃま！お兄ちゃん達！見守っていてください。では行って
きます」

と宙に舞い上がった。

比叡山の中腹にある前線基地、なるほど広い。

今は薄暮の状態なので誰かが沙希を見つけたらしく指をさして何やら叫んでいる。

走って集まってくる人達、その中にゆっくりと舞い降りる沙希

顔見知りと全然知らない顔のスタッフ達、ローカルやこの京都のテレビ局なのか。

知らない人は信じられない者を見たという表情をありありと浮かべている。

そんな人ごみを掻き分けて小野監督が飛び出してきた。

後ろに映画の時のスタッフの手に預けておいた『ステーション』と改良型の『ステーション』が入った箱を持っている。

「あきあくん！ちょうど良かった。ステーションをだしてくれないか？」

「はい」

と喋って九字をきるあきあ

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

そして唱える真言

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

蓋を開けた箱の中から新旧24個の『ステーション』が大きくなつて宙に飛び出た。

そして、ゆつくりと地上に降りてくる。

「ようし、決められたテレビ局のカメラマン！テレビカメラの準備をしろ！」

そういうと我先に与えられた『ステーション』に走る各テレビ局のスタッフ達。

でも、まだ小野監督とあきあを囲むスタッフは何かを期待して大勢いる。

「小野監督！」

「何かね、あきあくん」

「監督にお願いがあります」

それ！来た！とばかりに耳をかたむける。

実は上の方から命令されているのだ。あきあの行動、言った事を逐一メモして報告せよ……と。

そんな事、つゆ知らず

「実は『ステーション』を一台、清明神社の見張りにつけて欲しいんです」

「どうして？」

「実は……」

と自分の推理を話し出した。推理というより確信だろう。

「自分の子供を守るために、清明神社を襲って焼き討ち？……そうか……」

と考え込む小野監督、だがその顔には痛ましげな表情が浮かぶ。

「いいだろう。じゃあ、どのテレビ局に・・・」
と言いかけた時

「はい！」

と手を上げたスタッフの1人

「ぜひうちにやらせてください。・・・いや！やらねばならないんです」

「君は何処のテレビ局？」

「はい、京都テレビです」

「ほう、地元かね」

「はい！晴明神社はわが京都の要なんです。」

その要を見張ることは京都テレビの義務でもあるんです」

「わかった！じゃあ君達に交代用を含んで2台『ステーション』を預ける。」

すぐにカメラ機器のセットをしたまえ。乗員はカメラマンを入れて5名だ。

あつ、そうそうモバイルを1台持っていけ」

「モバイル？モバイルなら俺、もっています」

「いやいや、そんなのとは比べものにならない。送受信を兼ねた最新式のモバイルだよ。」

このあきあくんが開発したものなんだ」

驚きで目を真ん丸くするスタッフと外野席。

でも実物を手にした驚きはそんなものではすまなかった。

こんなモバイル聞いた事も見たこともなかった。

「ふふふ・・・そうだろう」

と説明役を買って出たVテレビのスタッフ自慢たらたらだ。
現実目の前であきあによつて改造されるのを見ていたのだ。

「これを彼女が作った？もし本当なら彼女は天才だ」

「もし本当ならだつて？冗談じゃない誰が嘘をつくもんか。うちの社長だつてほかの偉いさんも他50名の俺達スタッフもいたんだ。」

そつだ、飛龍高志も他の共演者もいたよ」

その言葉が本当なのだと、すぐに証明する事になる。

「あきあくん、すまないが君んところの専務がモバイルとCCDカメラを

100台送ってくれたんだ。すまないが改造をしてくれないか」

「静姉が？わかりました。長テーブルを並べてその上に・・・そして工具を・・・」

Vテレビのスタッフがあつという間にセットする。

あきあが真言を唱え、呪をかけると工具箱から工具類が飛び出してきて

モバイルの改造を始めた。もうあつけにとられて見ているだけだ。

100台の改造ぐらい15分もかからなかった。

そして、あきあがDOSプロントに打ち込む速さと言ったら・・・

例によって眼を閉じてキーを叩く速さはもう人間業ではなかった。

これも30分足らずで終わった。

テストは扱いになれたスタッフが他のテレビ局のスタッフに教えるという形で

おこなわれた。もう皆夢中だ。

『ステーション』にはカメラマンとモバイルを手にしてうれしそうなスタッフと

その助手が乗り込んだ。

明日の8:00に交代なので食料品もたっぷりと乗せている。

交代の『ステーション』の要員もカメラのセットは終わっている。

「じゃあ監督！こちらへの連絡は瑞姉に頼みます」

「わかった。気を付けて」

と挨拶され、ニッコリ笑うと飛び上がった。

『ステーション』はすでに消えている。

何も知らないスタッフ達、ただ呆然と空を見上げているだけだ。人間が何もしなして空を飛ぶ？彼らの常識が『ガラガラ』と崩れていく。

「あつ、消えた！」

「消えたんじゃない、隣りの次元に移したんだ。

そこから撮影にはいるんだよ」

と急ぎ組み立てられたプレハブのモニタールームに入っていく。

小野監督の言う事すら彼らには通訳がいるようだ。

だから昨夜の撮影のために『ステーション』に乗り込んでいたカメラマンや

スタッフ達が自分達の体験をグループをつくって説明していく。

『ステーション』を晴明神社のもっとも適切なアングルを撮れる場所に固定してそこを離れた。

心はせくのだが、それを留めるもう一人の自分がある。

そして、あせりは禁物と言っている。明日、禅を組もう・・・自分を取り戻す為に。

京都府警の前に降り立った沙希。目を白黒させている立ち番の警官二人。

それはそうだろういきなり宙から少女が舞い降りてきたのだ。

「誰だ！・・・き・・・君は・・・！」

と警棒を取り出そうとする。

通行人も遠巻きに取り巻いている。確かに見た。この少女が空を飛んできて

ここに降り立ったのは・・・あれは・・・確か女優の日野あきあ！

とんでもない能力を持つ女優と日頃から噂のある女優だ。

これって・・・これって・・・本物だあ！

生唾を呑み込んでこの先のことを・・・ドキドキしながら見ている。

日野あきあは平然として立っていたが、腰が引けた警官が警棒取り出そうとした時

「こらあ！・・・お前達！何をしている！お前達はこの女性を見たことがないのか！」

と怒鳴られ・・・あれえと思っただら急に腰から力が抜けて後ずさりする。

危ない！後ろはもう階段なのだ。見物人からも『きゃあ』と悲鳴があがる。

するとどうだろう、頭が下に足が上という状態の警官がふわりと浮き上がったのだ。

そしてゆっくりと玄関の床に降り立った。

へなへなと崩れ落ちる警官。自分の身にいったい何があったのか・・・訳がわからない。同僚の警官達がかけつけ助けおこす。

しかし、そうしながらも目は少女にそそがれる。

ずっとこの奥から見ていたのだ。

セーラー服の少女が宙から舞い降りてくるのを

そして優雅な立ち振る舞いで警官と応答している。

でも何を血迷ったか警官達がこの少女を捕まえようとする。

でも自分が立ち番をしていたらどうなのか？

はつきりとは判らないが、常識外のことをいきなり見せられたらきつと同じ事をしていたに違いない。

しかし、この少女・・・今最も有名な女優日野あきあがこんなにてだれだとは

・・・そしてハッと気づく、あのドラマすべて本物だったのでは？

今、警官・・・海野が階段から落ちて大怪我するかもしれない瀬戸際、

不思議な力で助けて上げてくれた。同僚として感謝するだけだ。

呆然と言葉も出なかった先ほど大声を上げた男・・・捜査一課長の大高信二が自分を取り戻し、慌てて背広の内ポケットから名刺を出し、あきあに渡す

「捜査一課長さんですか。わたし生憎名刺を持ち合わせないので失礼します。」

女優の日野あきあと申します」

といつて頭を下げる。

ドギマギするのは課長のほうだ。

あきあは座り込んでいる警官に向かって

「海野さん！今度の柔道大会の決勝戦、豪快な一本背負いで優勝おめでとう」

と訳も判らない事を言ってから、大高課長に

「課長さん、松島警視はどうしていますか？」

「あつ、はい！会議室で署長達とお話されています」

「わかりました、じゃあ行きましようか」

とニッコリ笑う。

その笑顔に引き込まれそうになる。

「あのう・・・」

と声をかけられ振向くと3人婦警が緊張しながらも

「私達ファンなんです。握手していただけませんか？」

「君達！」

と声を荒げる捜査一課長だったが、

「いえ、いいんです」

とニツコリ笑って手を出す。

「交通課の西沢恵子さんですね。始めまして・・・」

突然、身体が固まってしまふ。どうして自分の名前を知っているんだろつ。

「交通課の緋鳥礼子さんですね」

「交通課の佐藤秀美さんですね」

と今始めてあつたばかりなのに次々と名前を言われて周囲の警官達、

啞然としているのだ。

「西沢恵子さん、あなたお財布をその先のコンビニに忘れていましたよ。」

店長の横田明美さんが預かっていますから取りに行ってください」

と言われて皆ぞつとする。階段を上がっていくあきあを見送って皆、西沢恵子の周りに集まってきた。

「西沢！本当なのか！」

「ええ、今さつき気づいたんです。だから、礼子と秀美に手伝ってもらって

探そうと思ってここに来たたん、日野あきあさんに出会ったんです」

「不思議だ！俺はお前達をよく知っている。こんな手の混んだ事で俺達を騙そうというやつじゃあない」

「私、今東京から来ている警視総監付きの秘書の警視さんに付いてきている。婦警の3人の人、

私達と同じ交通課なので仲良くなったんです」

「交通課の？どうしてそんな婦警がここに？」

「なんでもあのあきあさんに予知されて東京にいては危ないので京都につれて来られたそうです」

「どんな予知だ」

「1人の方は帰りがけにいつも自分の乗る地下鉄の車輛が脱線して大怪我をするっていわれているそうです」

「そんな馬鹿な！」

といったとき、不思議が実証された。

「おお、い、今東京の地下鉄で大変な脱線事故だ」

その声で顔を見合わせた刑事や警官達、慌てて奥の休憩室にかけつける。

テレビで放映されている事故の様子、なるほど凄まじい様子だ。

特に1輛だけ乗っていた乗客の半数以上が死亡しているらしい。

呆然と見つめる刑事達、

「おい！婦警は3人といったな。あとはどんな予知だ」

「はい、その婦警さんが買っていた牛乳が不良品で食中毒になるって」

西沢恵子もボンヤリと話している。

とにかく内容が強烈すぎる。

そして、又実証がされた。

『ええ、今厚生省で記者会見が始まりました。』

牛乳を飲んだ人が次々と病院に運ばれています。

東京、大阪で限定して販売されたこの牛乳は誤って廃棄する牛乳の入ったタンクに移送された製品となる牛乳をそのまま販売されたものとわかりました。

患者が増え続けています。厚生省は……」

これであきあの予知が2つも成立されたのだ。

「西沢！最後の予知は何だ！」

「えっ、それは……」

「私がサイコパス……つまり殺人狂に殺される……ということですよ」

刑事達の後ろから声がかかる。

そこには見知らぬ婦警が3人、両端の婦警が真中の婦警を支えている。

「臍を切られて失血死、あの方がそうおっしゃいました。

そして、私の身代わりをつくられ、今警察庁の広域捜査官が網を張っているんです」

「君の身代わりをつくる？それはどういうことなんだ」

「どういうことと言われても……」

「信じられないでしょう。式神というんだそうです。

半紙を切つて亜季とそっくりな人間を作られたのです」

「半紙で人間をつくつたあ……アハハハ……君達夢でも見たのかね」

「そうでしょう、誰だって、そう思うんです」

「実際今から見られるかもしれませんよ」

もう1人の婦警がいう。

「みなさん、上の会議室に集まってください。受付の方を残して全員です。」

「……署長さんがお呼びです」

刑事達は顔を見合わせてから、我先に『ドドドド』と階段を走って上がっていく。

会議室に署長と誰がいるのか知っているのだ。

後に残った婦警6人、歩き始めたが再び脱線事故のニュースの音が聞こえ振り返った葉月礼亜が

「本当は私あのペシャンコになった車輛の中にいたのね……」

そんな声に返事をするには出来ない。部外者である私達には……。

「私だって」

という篠田由紀子。

「きつと七転八倒して苦しみながら病院に運ばれていたんだわ」

そう、この人だけが返事が出来る権利があるのだ。そして……。

まるで、お通夜のように静かに階段をあがっていく6人。

広い会議室にはもう立錐の余地も無いぐらい一杯となっていた。

6人は仕方なく前の扉より入り、東京からの3人の婦警は松島警視の隣りに座る。

京都府警の3人はその後ろに立った。

それを見て京都府警の署長は立ち上がり

「ここに君達に集まってもらったのは……」

と話だしたとたん

「ちよつと待って下さい」

「牛尾くん！なんだ！」

「署長の横におられるのは女優の日野あきあさんと承知しています。」

今、下で東京の婦警の方が日野あきあさんに予知された危険を回避するため

この京都に來られたと聞きました。確かに今、ニュースで脱線事故と

牛乳の食中毒が大きくやっています。そして、そのう……

「牛尾憲太郎さん、あなたの言いたいことはわかっています。

京都府警・捜査一課の刑事としてその森田亜季さんのこれからおこるであろう

事件のことが気にかかる。そうですね」

「えっ？はい」

どうして自分の名前を知っているんだろう。気を吞まれてしまう・

「いいでしょう。あなたは……いやここにおられる大高捜査一課長の下、

大八木弥彦部長刑事、畑野俊吾部長刑事、下田篤部長刑事、山野啓太巡查長、

川合涼子巡查長の鬼といわれる7人の刑事の一番若手ですが東京の警視庁何するものぞという気概をもっておられる」

顔が可愛いだけに口からでる内容が凄まじい。どうして知っているのか。

こうして見る日野あきあの瞳には何か引き込まれてしまうものがある。

「いいでしょう……松島警視！」

「沙希！」

「いいえ、松島警視。ここにいる京都府警の皆さんが私を信じてくれなければ

少女達を誘拐するという卑劣な元方との戦いを勝ち取る事決してかないません」

「わかったわ。でも、あなたがそういうとは思ってた」

「やだなあ、奈緒姉は・・・じゃあモバイルを出してくれる？」

「はい！」

と渡されたモバイルをセットすると

「ピ・・・ピ・・・」

と音がして京の映像が現われた。

「あつ、沙希！どうしたの？」

あきあが訳をいうと

「判ったわ、その刑事・・・名前は？」

「牛尾刑事よ」

「その牛尾刑事と変わってくれる？」

「牛尾さん！警察庁広域捜査課の飛鳥京警部があなたに代わってくれって」

急いで前に出てくる牛尾。

あきあからモバイルを受け取った牛尾。

どうあつかってよいか迷うが

「そのまま、お話ください」

「あつ、はい」

「おい、牛尾！ここに一緒に座れ」

大八木部長刑事が椅子を半分空けて誘う。

自分も見たいのだ。

液晶の向こうから少々きつい顔の美人が声をかける。

「君が牛尾くんね。私、警察庁広域捜査課課長の飛鳥京よ。君は何を聞きたいの？」

「はい、失礼ですが警察関係者でない人の予知をどうして信じるのでしょうか？」

「そうね。誰でも思うわね。沙希・・・いいえあきあには実績があるの、

あなたも知っているでしょう半月程前の東京であった銀行強盗」

「はい、警察官が撃たれ、般若童子が解決したという」

「そうよ、撃たれたのは私。助けてくれたのはそこにいるあきあなの」

「えっ？じゃあ般若童子は日野あきあ・・・さん」

「そうよ、これは警察庁でも警視庁でも全員が知っている事なの。

でも国家機密になっているから他の人にはなしたらダメよ」

「というと？」

「そうよ。少し前の京都でのレイプ犯の事件、土御門家の事件、いずれも解決したの

日野あきあなの」

「そんなあ・・・」

「あきあには計り知れない能力を持っているし、

このモバイルだって開発したのもあきあ」

「ふ・・・」

「ため息もでるわね。でもあきあときあっているところな」と当たり前になるの。

もういい？」

「すみません、あと一つだけ。狙われているという婦警さんは

こちらにいますのですが、どのようにして・・・」

「あらいるわよ。こちらにも」

と言って引っ込んだらもう一人顔を見せる。

「えっ？」

と声を上げて目の前に座る婦警と液晶の顔に交互に視線を移動する。

全く同じ顔なのだ

「君！」

と目の前の森田巡査に声をかけて

「そのホワイトボードに君の名前と所属と出来れば住所を書いてくれないか」

といつてからモバイルに向かつて

「すみません少しまってください」

スラスラと書き終えて椅子に座る亜季。

そして牛尾は液晶にむかつて

「君の名前と所属と住所をいつてくれないか」

液晶から聞こえてくる声はまるでホワイトボードを読んでいるかのように

一字一句間違いないものだ。

モバイルの通信を終えてもとの位置に戻る牛尾、頭をひねっている。

「では、牛尾刑事の疑問にお答えしたいと思います。松島警視！
というと松島警視は足元のアタツシユケースを机の上に置いて
半紙をあきあに渡す。半紙の携帯は早瀬の女にとって必需品となっ
ているのだ。

会場の皆は固唾を飲んであきあの一挙一動を見ている。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

と九字を切り、そして唱える真言

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

手の平に乗せた人型に切った半紙をフツと吹くすると舞い上がった
半紙が

いきなり人になった。それも婦警の制服を着た女性だ。会場の誰もがその顔を見て口をアングリあけている。一番驚いているのは西沢恵子だ。

口を手の平で交互に押えて肘を横に張ってそして目は大きく開いていた。

そうなのだ、そこに立つのは自分自身、目を閉じてはいるが確かに西沢恵子本人なのだ。では私は誰？ そういいたいくなる。

「私が術で出したのは西沢恵子さんの式神です。

でもこのままではただの人形にすぎません。

すいません、本物の西沢恵子さん！こちらにきてください」

その声にふらふら立ち上がった恵子、横の礼子、秀美に後押しされて

式神の自分に近づく。

「その手を握ってあげてください」

恐る恐る手を出す恵子。思い切って握った手はヒンヤリしていたがでも段々と人らしい体温にあがっていく。

「恵子さん、もういいわ」

その声に手を放そうとするが何か放れ難い。心が残る。

そんな恵子を見つめる森田亜季の目があるあなたもそうなの？

と物言わぬ言葉で訴えかけていた。

恵子が椅子に座った時、立っている恵子の式神の目がパチッと開いた。

「あなたのお名前と所属を言ってください」
あきあが聞く。

「はい」

と言った声は恵子そのものだった。

「私の名前は西沢恵子、京都府警交通課勤務です」

「西沢恵子さん。私が先ほどあなたがお財布を忘れていた
でしょ。」

場所は覚えていますか？」

「え……ええ……確かこの先のコンビニに忘れていたか」

「その店長の名前も言ったはずですよ。その名前も覚えて
いますか？」

「はい、横田明美さんです」

「じゃあ、今から行ってきなさい」

「はい」

と行ってから

「礼子と秀美に付いて行って貰ってもいいですか？」

「ダメです。礼子さんと秀美さんには用事があります」

「うーん、残念だね！じゃあ一人で行って来ます」

と前の扉から出て行く。

「どなたか付いていってくださる方おられませんか？」

「よし、俺が行く」

「俺も」

と3人の刑事達が飛び出して行く。

「では、恵子さんと刑事さん達が帰ってくるまで

お伺いしたい事があります。よろしいでしょうか、大崎署長」

「はい！どうぞ」

「では今朝方より小さな女の子が寝ている間に行方不明になっ
ている事件が

あったと聞いていますが」

「あつ、そのことですか。あれは事件になっていないのです。あとで親御さん達が訴えを取り下げにこられましてね、どうやら娘さん達が友達を誘って夜中に遊んでいたらしいんです」

「なるほど、そういう手を打ってきましたか」

「はあ？」

「いえ……松島警視！あれを」

アタッシュケースから1本のビデオテープを出して

「どなたかビデオデッキにセットしていただけませんか？」

「はい」

といて立ち上がったのは婦警の緋鳥礼子。

窓際に置いてあるテレビキャビネットの中にあるビデオデッキにビデオテープを差し込んだ。

「緋鳥礼子さん。先ほど出て行った刑事さん達がもう帰ってきます。

それまで少し待っていてくださいますか？」

「はい」

手に持ったリモコンを下ろしてそこに立つ。

会場の刑事・警官達はこの場の主導権を握る……

外見はセーラー服の女子高生としか見えない女優・日野あきあを不思議な面持ちで見つめていた。

何だか段々とこの人なら……この少女なら……と、信頼感が芽生えてきているのだ。

カリスマ性というのはこういう人のことなのか。

前のドアが開いて3人の刑事と3人に囲まれた西沢恵子婦警が入ってきた。

牛尾刑事が

「西沢くん、この財布かい？」

と座っている西沢恵子に渡す。

「はい、そうです」

と受け取った。

立っている西沢恵子はそれをじっと見ているだけだ。

「牛尾さん！」

「はっ」

「どうでした？」

「全てあなたのおっしゃる通りでした。コンビニの店長の名前も・

」

「いえ、わたしの聞いているのは西沢恵子さんのことです。

・・・牛尾さんはその為に付いていかれたのでしょうか？」

ギクツとした牛尾だったが

「は・・・はい、その通りです」

「それで、どうでした？」

そこで一度、一緒についていった同僚の顔をみてから

「いえ、普段の西沢くんと何も変わりませんでした。・・・いえそう

感じました。

私の目が節穴でなかったならば・・・」

「そんなことはありません。牛尾さんは優秀な刑事さんですよ」

と言われて面映くなり首の後ろを搔く牛尾。

「西沢恵子さん！」

「はい」

と二人が返事をする。

「恵子さん！西沢恵子さんの後ろに立つてください」

西沢恵子の後ろに立つ西沢恵子。

なんとも不思議な凶だ。

いきなり

『ファイファイ』とあきあが息を鳴らすと

スツと式神の西沢恵子が消えてしまった。

振り返った恵子が

「あっ！」

と悲鳴をあげると

「恵子さん！」

とあきあが声をかけた。

そしてその顔に浮かんだ笑顔……なんともいいようがない……

この会議場の全員が引き込まれてしまっても不思議が無い。

それほど皆の心に与える安心感は大きい。

「恵子さんのその心、無碍にはしないわ。式神はあなたのそのリングに封じました。

あなたの身に危険が及んだ時、あなたを救ってくれます。

だから、そのリング絶対にはずさないで！」

恵子はそのリングを見つめる。

良かった。消えてはいなかった。なんだかホッとする。

「さて」

と話題を変えるあきあ。

「今からお見せしますビデオは夕べ私達がドラマの撮影をしていたときに

とったものです。まずはお見せします」

といって礼子に合図する。

大型テレビに映る映像……空中から撮った僧侶達と話すあきあの姿……

だがターンして夜空に映像が変わる。
ざんばら髪の方が空に大写しに映っているのだ。

『ふおふおふお・・・面白いのう・・・われは人が苦しむのが一番うれしい。』

せつかく目覚めたのじゃ、楽しませてもらおうかのう。

そして、我を死に追いやった朝廷のあつた京の都を紅蓮の炎で焼き尽くしてくれん。

炎に巻かれた人の悲鳴・・・楽しみじゃ』

夜空一杯の幻影に思わず飛び上がって、利剣をとりだしたあきあの姿。

『おっと、仏の利剣か。今はそんなもの受けるわけにはいかぬ。』

さつそく消えるでしょう。そうじゃ、京の都を焼き尽くすのは3日後の今の時刻にしようぞ』

そこでビデオが終わった。

「このテープは撮影隊の撮ったテープをダビングしたものです。なんの編集もしていないし、CGでもない。又星空にあんな映像を映す技術ありません。」

この像は東京23区全域で目撃されたことは、

各紙新聞の1面に出ているので皆さんもご存知だと思います」

「では・・・今朝の新聞の内容は？」

「ええ・・・本物です」

「誰なんです。京都を焼け野原にするなんて、言っている男は・・・」

「怨霊・藤原元方！」

「藤原元方ですと！」

署長が立ち上がる。

「署長！知っているんですか」

「ああ、平安時代、時の朝廷に仇名した強力な怨霊だ。帝の後継ぎや女御様を呪い殺したといわれている。」

そして恐ろしいのはその力で地震をおこし、雷や嵐でこの京都に壊滅的な災害をもたらしているんだ」

「でも、それは……」

「伝説だといいたいのだろう、でも全くのでたらめだとは言えないんだ」

「本当だとすれば大変じゃないですか」

「だから……だから、私達がきました」

エツという顔……でも良く考えると不思議な力を持つこの少女しかいないのだ。

自分達どう考えても怨霊を相手になんか出来はしない。

「日野あきあが……」

と話し出した松島警視

「あきあが参加した夕べの撮影はドラマといましたが、

ドラマはドラマですがドラマ仕立てのノンフィクションでありました。

その危険な撮影に私達が心配のあまり無理を言って撮影に参加したのです。

その撮影があきあによって無事おわたの帰りにあの現象にあったというのが真相です」

「すみません！その危険な撮影ってなんですか？もし良かったら教えてください」

ドラマ仕立てのノンフィクションって何だ？皆、顔を見合わせている。

「怨霊・・・」

「えっ？」

「怨霊・平将門との戦いです」

怨霊・平将門、東京にある首塚で有名な武将だ。

「首塚で最近、5人の女性が次々と心臓を抜かれて殺されるという猟奇事件がありました。」

それが平将門自身、復活のための生贄にしたのだとあきあが見破ったのです。

ちょうど決まっていたドラマの中で平将門を退治しようとしたのが昨夜の撮影です。

ドラマは近々放映されます。普通のドラマとしてね」

「では！」

と声をあげる大高捜査一課長。

「先ほど言われた親が訴えを取り下げに来た少女の行方不明事件は？」

「ええ、怨霊・藤原元方によるもの。親が訴えを取り下げにきたのだから」

少女が本当に帰っているのかは確認はしていないでしょう」

大高捜査一課長は会場の部下の顔を見る。

いづれも首を横に振っている。

「ちくしょう！」

「いいえ、大高さんたちのせいではありません。」

これは人でないものの卑劣な罠・・・・・・・・・・あつ、少し待ってください」

と横のドアを見る。すると計っていたかのようなタイミングでドアがノックされた。

入ってきたのは受付の婦警で

「玉井しのぶさんがご両親と一緒に挨拶にこられました」という。

「入ってもらってください」

直ぐに声をかけたのは、あきあだった。

「えっ？」

と目をむく婦警が視線を向けたのは大高捜査一課長だ。

大高捜査一課長はその真意を測りかねてあきあの顔を見ていたが仕方なく頷く。

それを見た婦警がドアの向こうに一度引っ込んでから、少女の後ろから肩を押すように入ってくる。

髪が長く可愛い少女であったが覇気のない表情をしている。

両親はこんな所に呼ばれて緊張のあまり表情が硬くなっているのは当然だろう。

「葉月礼亜さん、しのぶちゃんをここに」

「はい」

といって礼亜が立ち上がって婦警にかわり、しのぶの後ろにまわる。

『なんだ？この人は？』

という顔をする受付の婦警。礼亜はかまわずしのぶの肩をさわったとき

『バチン！』という音がして青白い閃光が飛んだ。

『ギヤア！』物凄い悲鳴があがって、少女が宙を飛ぶ。

警官や刑事達が気がついたとき、少女は宙で少し腰を折って両手を前に

ブランとたらししていた。長い髪の毛が顔を隠している。ありえない光景であった。

「しのぶ……しのぶ」

母親の我が子と呼ぶ声が会議室内に響く。

そのうち少女が肩を揺らし始めた。

『ク・ククク……クククク……』
笑っているのだ。

しかもその声は少女の声ではない。

しわがれた老人の声だ。

『お前達か……お前達がわしの邪魔をしているのか』

……と上げた顔……長い髪が左右に分かれて現われた顔はもはや少女の顔ではなかった。

どす黒く血管が浮き上がり眼光が真赤に染まっているのだ。

「キヤア……」

母親は我が子の恐ろしい顔を見て失神してしまった。

父親はあまりのことに壁にへばりついている。

母親に駆け寄ったのは6人の婦警。

助けおこすと壁際にひっぱたいていく。

腰を抜かした受付の婦警はそのままだったが、

放っておけないので西沢巡查達3人が引っ張っていく。

日頃のことがあったので乱暴に……引っ張ったことはいない。

『ワシの邪魔をする奴はこうしてくれん』

大きく口を開けて真赤な炎を吐き出した。

炎は真っ直ぐに会議室の後方に飛んだ。

婦警をかばった1人の刑事の肩に当たった炎はそのワンクッションで

後方の壁の上方に当たり穴を開け可燃物に燃えあがった。

炎は大きくなるが身動きが出来ない。

「牛尾さん！」

婦警が声を上げる。婦警をかばったのは牛尾だった。

炎の当たった個所の背広は焼け焦げ、えぐれた肩から出血が激しい。

「うっっ」

脂汗を流しながら苦しむ牛尾だが刑事達はどうすることも出来ない。

「皆危ない！」

そんな声が前から飛んだ。

『第二段だ！』

誰もが首をすくめて攻撃をかわそうとする。

しかし、何の攻撃もこなかった。

そして・・・見た。日野あきあが宙で左手で炎を受け止め、

右手で燃えている壁に向かって金色の光線を出しているのを・・・

見上げると燃えていた壁の炎はすっかり消されていた。

金色の光線は薄い緑色に変わり、苦しむ牛尾の肩の負傷部分を照らす。

するとどうだろう皆の目の前で抉られた肉がみるみる塞がり、出血もとまった。

脂汗もひき顔色も普段の牛尾に戻った。

身体をおこす牛尾・・・でもふらつくのか再び倒れようとするのを受け止めた婦警。

「癒しの術です。でも出血した血液は戻りません。ふらつくのは出血のせいです。金川明子さん、牛尾さんの手当てを頼みます」

そんな中、冷静ではられない刑事が銃を撃った。

だが、玉は宙で止まっている。あきあが止めたのだ。

「だめです。この子、今精神を元方にのっとられているだけです。肉体は普通の少女なのです。ここはわたしに任せてください」といって宙で少女？と対峙する。

「小娘・・・そうだ、お前は将門と戦っていた小娘だな。

何者なのだ、お前は！・・・ひとにあらざる力を持ちおって」

「我名は安倍あきあ」

「”安倍”だと！」

「師は平安期に元方・・・お前を封印した安倍晴明様」

「なに！・・・安倍晴明の弟子とな・・・ふあふあふあ・・・

これは面白い！安倍晴明は我仇敵、師のかわりにお前の命を貰い受けん」

といって連続に炎の攻撃をおこなったが、あきあは全て自らの身体で受け止める。

平気な顔をしているが、少しずつ苦痛の色を滲ませてきている。

それはそうだろう。屋外ならかわす事もできるし、攻めることも出来る。

部屋にこれだけ大勢の人を留めてしまったのは、

相手が少女ということで油断があったからだ。これが慢心なのだ。

今、自分にできることはただ一つ、この身体で攻撃を受け止め、他の人達に危害を与えない事、それだけだ。

一方

「お・・・おのれ・・・」

憤怒の形相を浮かべる元方。自分の攻めを正攻法でこれだけ受け止める相手。

段々と自信がなくなってくる。そして、相手のことが恐くなってきた。

そこは卑劣でずるい元方、少女の身体を盾にして逃げようとする。

「逃がすか！」

とあきあは攻勢に出た。

『緋龍丸』を取り出すと口に当てた。

静かに流れ出した笛の調べは全く素養のない刑事達の胸にも染み渡り

日頃から溜まりに溜まった灰汁のようなものがきれいに洗い流されていく。

心が洗われるというのはこういうことなのだろう。

苦悶の表情を浮かべる元方が・・・つかの間・・・苦しげな少女の顔に変わる。

交互にあらわれる表情の変化は乗っ取っていた元方の力が弱まったせいである。

それと共に宙に浮いていた少女の身体が如々に降りてきた。

「今よ、奈緒姉！短冊をこの子の額に！」

笛を吹くあきあの声がどこからか聞こえてきた。

「判った！」

とアタツシユケースからあきあから渡されていた短冊を額の前に翳す。

刑事達は見た。短冊の文字が青白く光ながら浮かび上がり、

少女の額へと移って行くのを。

「ぎゃあ〜！」

元方の断末の声。落ちる少女の身体は松島警視が受け止めた。

額の文字が薄くなり消えていった時、黒いモヤが少女の耳から出てきて宙に漂う。

あきあが笛から口を放し、真言を唱えるとモヤがボウッと燃え上がった。

『ストン』と宙から降りたあきあ、ふらつと体勢が崩れるのを

「危ない！あきあさん！」

と西沢恵子と森田亜季が跳んできてあきあを受け止める。

「少し、疲れちゃった。ごめんなさい、椅子に座らせてくれる？」

「あきあ！無茶苦茶だよ。身体で相手の攻撃を全て受け止めるなんて」

少女を介抱しながら松島警視が言う。

「でも、良かった。誰も傷つかなくて・・・牛尾さん、大丈夫？」

「はい！僕はもう平気です。でも、驚きました・・・というより驚異です」

自分の肩の部分の焼け焦げを払いながら、なんの傷もない肩を見る。

「この子は」

とみんなに判るように説明するあきあ。

「聖結界の呪まじを与えました。これでもう人にあらざる者。

決してこの子に触れることさえ出来ません。

又、寝ている間に暗示にかかることもありません。

実はこのようなことを祇園の舞妓さんや芸妓さん達が率先して少女達のために始めています。

残念ながらこれ出来るのは
女性だけ・・・しかも、聖結界の呪しゅを与えた女性しか出来ません」

「でも僕らにできることは？・・・勿論、あんな化け物の相手は出来ませんが」

「あります。実はそれを頼みにここにきたのです」

皆は先ほどの騒ぎ・・・忘れたかのように座りなおした。
もう誰も疑う者はいない。

ここであきは自分の考えを話した。そして、

「自分の娘が人質となって手枷足枷をはめられた時
あなたなら元方の言う事拒否出来るでしょうか？」
と締めくくった。

皆・・・警官や刑事達、苦渋の色を滲ませている。

卑劣な奴！そう思っ唇を噛み締めた。

「京都府警の全力をそそいでほしいのは晴明神社の警備です。
京都の結界の要となっていているところです。

以前わたしがこの京都の結界を張りなおしたとき

第一層として京都全体の結界、そしてその上から晴明神社の結界を
張りました。

人であらざる者、決して結界に触れる事かないません。

ですが元方の狙いはこの京都の結界を破って朱雀門を開く事」

「朱雀門が開いたらどうなるのですか？」

「地獄の門が開きます。怨霊・悪鬼・亡者が出てきて人は滅びるでしょう。」

そして、人は人でなくなり、
人が人でなくなる。つまり地球の人類が滅びるのだ。

「先ほど結界には怨霊達は触れる事ができないと聞きましたが、ではどうして晴明神社の結界を？」
と若い警官が首をかしげながら聞いてくる。

「馬鹿！さつきから何を聞いているんだ！」
と大八木部長刑事が若い警官を怒鳴りつけた。

「結界を破るのは人なのだ！．．．だから我々の出番なんだ。
あんな化け物、我々には手出しが出来ない。
全くの無力なんだ。あんなの相手に出来るのはそこにおられる
日野あきあさんだけだ。だから我々は人を相手にするんだ．．．た
だ」

「そうです、大八木さん。あなたの胸につつかえるもの。
相手は犯罪者ではない。少なくとも現在では．．．．相手もやりた
くてやるんじゃないんです。
ただ、可愛い我が子のため．．．．。
でも皆さん、心を鬼にしてください。人の手によって人が滅びるな
んて
馬鹿なこと止めさせてください」
と結ぶ。

「今、晴明神社には比叡山より土御門家の術者達がつめています。
でも、相手が人では無力です。出来れば早く警備のほうお願いしま
す」

「ようし、婦警以外全員で晴明神社の警備にあたってくれ」

署長が号令をかける。

「報告は比叡山中腹にある前線本部にな」

「前線本部？なんですかそれは」

「比叡山は結界で囲まれています。」

中腹にある広い空き地には現在各社テレビ局が集まっています。

又警視庁、警察庁より精鋭部隊が前線本部をつくっています」

と松島警視が報告する。

「そして、機動隊ももうすぐ到着します」

「機動隊？」

「勿論、人相手です。つまり結界に囲まれたお山を守るためなので
す」

そんなことになっているのか、地元についてわからなかった。

地元について見えてこない。でも地元の者にしか判らないこともある。

まずは地理だ。どこをどう行けば近道かなんて熟知している。

ただ単に清明神社を取り囲むだけではダメだ。

男達は大高捜査一課長を中心に作戦を練っている。

「日野さん」

と横にいる京都府警の大崎署長があきあに声をかける。

「どうにかして怪我をさせずに取り静める方法はないのでしょうか」

署長はさっきからずっと考えていたのだ。

「警察にはそういうのは？」

「ありません。催涙弾なんてのはありますが、使いたくないんです」

「そうですか……そう……これでいけるかどうか……」

と固まって相談している男達から離れて、手持ちぶたさな婦警達に声をかけた。

「婦警さん達！・・・ちよつと」

と呼ぶと顔を見合わせながら嬉しそうに寄って来る。

「あなた方にやってほしいことがあります。でもその前に

墨・硯・筆・・・そして、水がほしいんですけれど水道水ではない・・・」

と言いよどんでいると

「あのう、浄水器の水ではだめですか」

「浄水器の？・・・ええ、ちよつどいい。それらを準備していただけませんか？」

「はい！」

と行って婦警達が出て行く。

西沢恵子達3人は玉井しのぶの両親を世話しているので、留まっていたが

「西沢恵子さん！ご両親をこちらに」

と呼ぶあきあ。

恐る恐る婦警達に連れられて、あきあの前に行く。

「松島警視！しのぶちゃんをご両親に・・・」

松島警視に連れられてきたしのぶが母親や父親の胸に飛び込んだ。

泣きはしない・・・大した少女だ。

「お父さん！お母さん！・・・しのぶちゃんは精神を乗っ取られても必死に戦っていました。

しのぶちゃんの強さがなければ、あんなに早く元方が出て行きはしませんでしたよ。

それに、聖結界に守られているしのぶちゃんはもう大丈夫です。

しのぶちゃん！これからは、しのぶちゃんのお友達が暗示にかかっ
ていても

しのぶちゃんが近寄ることによって、暗示がとけて元に戻るの」
と喋ってから、奈緒に一枚短冊を出させた。

「しのぶちゃん！さっきお姉ちゃんがやったこと心の中で見ていた
わね」

うんと頷くしのぶに

「これを渡しておくから、お姉ちゃんと同じ事をして

あんなお化けに負けない友達を増やしてあげて・・・」

「お姉ちゃん、しのぶにもできるの？」

「出来るわよ。・・・そうねえ、今しのぶちゃんのママにしてみ
てくれる？」

「ママに？」

「ええ、ママがあんなお化けに襲われたら嫌でしょ」

しのぶはママの顔の前に短冊を向ける。

すると青白い光が目飛び込んできた。慌てて眼を閉じる母親。

そばでは、母親の額に梵字が消えていくのを不思議な面持ちで見
ていた。

「お母さん、目を開けてもいいですよ」

目を開けると、この有名な女優の惹きこまれるような笑顔に胸が高
鳴ってしまふ。

「これであなたもしのぶちゃんと同じ事ができます。

元方という卑劣な怨霊に幸せを奪われないようお仲間を増やして
ってください。

もう帰られてもけっこうです。・・・しのぶちゃん！がんばってね」

「お姉ちゃんもね」

といってバイバイをする。両親も深々と頭をさげてから

「本当にありがとうございます。私達、自分の場所がんばります」

といって部屋を出て行く。

受付の婦警にはもう侮りは無い。尊敬と恐れ・・・

でもあきあの笑顔にほっと息を吐き、玉井の家族を送りに部屋を出て行った

残っている婦警達にもう少し待って・・・といってから

「すみません。大高捜査一課長、大八木部長刑事、牛尾巡査長のお三方、

少しお願いがあります」

と呼ぶ。奈緒が見ているとあきあが椅子から立てないほど疲れているようだ。

机越しに3人と小さな声で話すあきあ。

3人の顔が段々と難しい表情に変わる。

そしてあきあは椅子の背もたれに身体を預けて目を閉じた。

「じゃあ、課長。わしが話します」

といって大八木部長刑事が

「ようし、みんな聞いてくれ！」

何事かと振向く刑事。腰をかがめていた刑事達も立ち上がる。

「我々は仲間だ！」

何を言うのかと目を見張る警官や刑事達。

「わしは大好きなこの京都を救いたい！皆もそうだと思う。」

だから大事な警備に疑心暗鬼は持ち込みたくない。

・・・正直に言ってくれ！・・・この中で人質になりそうな女の子を持つのは！」

みんな、はっ息を呑んだ。

そうなのだ。我々の中にも女の子がいる家庭がある。

「こんなこと下に行つて調べれば直ぐわかることだ。手をあげてくれ！」

大八木デカ長の声に手があがる。

「10名か・・・この中でお嬢さんがすでに行方不明になっている者は」

皆手を下ろし、残つたのは

「小野と山下か・・・お前達には残念だがこの警備の仕事を下りてもらう」

「大八木さん！」

「デカ長！」

「お前達が悪いんじゃない！・・・お前達が悪いんじゃない・・・鬼の目に涙・・・その目に涙が溢れている。」

「大八木さん！ひどいんじゃないんですか」

「お前達！小野と山下の手を悪事に染めさせたいのか！」

その声にも言えなくなる刑事達。

「大八木さん！一刻も早く残りの8名の刑事さんのところへ」

あきあの声に

「おお！そうです。牛尾、これはお前が指揮を取れ。」

東京からきたお嬢さん3名を車に分乗させてあとの8名の家に行くんだ。

お嬢さん達！頼みます」

「判りました」

と立ち上がる、葉月礼亜、森田亜季、篠田由紀子の3人の婦警。

松島警視より渡された短冊を大事に持って、8名の刑事と牛尾達警護の刑事6名と

一緒に出て行った。

「小野さん、山下さん。人はやむおえなくして悪事に手を染める事があります。

愛しい我が子の為、あなた達はそれを犯そうとしています。

結局、あとで苦しむのはあなた達なのですよ。……

いえ、あなた達はそれでいいのかもしれない。

でも、あとでそれを知ったお嬢さんのこと考えたことありますか？
深く傷を受けるのはお嬢さんなのですよ。

自分のために両親が悪事を働いたと一生十字架を背負わせるつもりですか？」

激しく人の心を突き動かすような嘆きの言葉があきあの口からほとばし出る。

「お嬢さんの事、もっと考えてあげてください」

そのあきあの言葉に膝まづき、肩を落として両手を床につく両刑事。

心の底から突き上げるような嘆きの声を吐き出す。

痛ましげに見つめる刑事達。

「小野さん、山下さん！あなた達のお嬢さんは必ず助けます。

だから……だから……あなた達はそれまで眠っていてください」

あきあの手から紫の淡い光が出て、二人の刑事を包み込む。

ぐったりとする刑事。……横になって眠る刑事達の身体は光に包まれて

床から1mほど浮き上がる。

いつのまにか両手に持つ小さな観音像、その象の中に吸い込まれるように

刑事の身体が消えた。

「大崎署長、この像を元方との戦いが終わるまで

比叡山の奥の院、蓬栄上人様に訳を言ってお預かって頂いてくださいませんか？」

「比叡山の蓬栄上人ですね。でも、小野くんと山下くんは？」

「よくお眠りです。お二人を目覚めさせる時は必ず、お嬢さんの目の前で！」

「日野あきあさん！よろしくお願いします」

全員が頭を下げる、これで何の心配もなく警備につける。

観音像を署長に渡したあきあの目の前に、先ほど注文した水や硯が置かれた。

何をやるのだろうか？

あきあは硯に水を注ぎ、何かをぶつぶつ唱えながら墨をすりはじめた。

しばらくして墨を置くと

松島警視より渡された半紙に何やら文字を書き始めた。

達筆すぎて読めないというよりは、梵字なので読むことが出来ない。

筆をおいたあきあ、今度は真言を唱える。

すると半紙がトランプ大に大きさを変えた。

「すいません、これをコピーしてくれませんか。

何枚かをコピーしてA4の紙に貼り付けてからそれをまたコピーしてください。

でも何枚かはすぐにここに持ってきてくれませんか」
婦警達が出て行く。

しばらくして戻ってきた婦警がコピーされた2枚のコピーされた紙と鋏を机の上に置く。

素早く切り取った紙を松島警視に渡すと松島警視は立ち上がって座っている3人の刑事達の後頭部にその紙を差し込んだ。

へなへなと机に崩れおちる刑事。
一体何があつたのか。

「すみません、その人達の後頭部に差し込んだ紙を抜取ってください」

あきあの声に急いで抜取られた紙。

そのとたん身体を起こす3人の刑事。

「成功しましたね。コピーしたものでいけるかどうか判りませんが」

「一体何があつたのですか」

大高捜査一課長が聞く。

「半睡の術」といいます。この紙を後頭部から背中に入れる事によつて

身体を自由を奪います。本人の意識は眠っているのかどうかわからない状態なので

半睡という名前がついたのです。……どうです？」

「はい、なんだかボウッとしてしまつて……」

「どうです、これ使えませんか？」

「いいえ、これだつたら……」

と大崎署長、大高捜査一課長、大八木部長刑事の3人が声をあげる。

「みんな！手分けしてコピーだ。ある程度用意できたら、第一班が出勤する」

「第二班と第三班は第一班の不足分を用意できたら出勤！」

「受付など居残り組はコピーを最優先にな」

みんなバタバタと行動を開始した。

それを見届けたあきあ、我慢に我慢を重ねていたがもう限界だった。

身体の痛み能耐え兼ねて意識が遠ざかっていった。

「あきあ〜！」

奈緒の声が遠くに聞こえる。

第二部 第七話

(あきあき……あき……あ……あ……)

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

「うっくん……」
と微かな声があげる。

「あ……あのう……あのう、もし……」
「うっくん」

と今度は聞こえるような大きな声だ。

「あっ！お母ちゃん！……この人生きてはる……生きてはるえ
！」

その大きな声に

「えっ？ほんとですか」

と谷川で水を汲んでいた中年の女性……母親なのだろうか。

女性の声でパチツと目を開いたこの少女、

……でもボウッと二人を見上げているだけだ。

「さあさ、おぶうどすえ」

と小さな湯のみにたっぷり入った水、少女はゴクゴクつと喉を鳴ら
して美味しそうに飲み干した。

「おぶう、まだ飲まれます？」

「いえ、ありがとござんどす。うち、もうけっござんどす」

「あら、この子京言葉使ってはる」

「あんた、京のお方？」

興味深く見つめる二人に

「いえ、うち………わかりまへん………わかりまへん………

なぐんも覚えておへん」

二人は不思議そうな表情で顔を見合わせていた。

「お名前は？どうぞすえ？」

少女は難しい顔になり必死に考えているようだったが

「駄目どす！………なぐんも思い出されまへん。

うち、………誰どすやろ？………」

二人は痛ましそうに見つめていたが、ふと若い女性が

「ねえ、お母ちゃん。この子、舞妓ちゃんになったら評判ものどす」

と額にある真赤な陣八を取り、後ろで括っていた紐を外すとハラリと肩より少し下に毛先が落ちる。きれいな黒髪であった。

「幾松ちゃん、そんなことして、この子」

「いえ、いいんどす。うち、なんか………髪触られるの嫌いやおへん」

幾松は自分の手荷物から鬢付け油を取り出し手早く舞妓の髪型に結っていく。

祇園に多数いる芸妓・舞妓の中でもこんな髪結いができるのはこの幾松ぐらいだ。

いつも感心する置屋の女将の菊野。

「さあ、これで終わりどす」

と簪をさすと

「お母ちゃん！ほら・・・」

と菊野に顔をむける。

じっと見つめる菊野、

「いやあ・・・きれいやわあ。こんな子祇園にもいやらへん」

「いやあ、お母ちゃん酷い！それ、いつもうちにいうてはる言葉やおへんか」

女将は慌てて

「違う工、芸妓では幾松ちゃんが一番どす。けんどこの子が舞妓になつたらうち、左団扇どすえ」

そんな女将の様子を見て幾松は

「いやな、お母ちゃん・・・けんど、あんたおかしなべべ着ていますなあ。

うち、一度堺へ行つたとき異人さんが着ているのみたことがあるんどすけんど」

「えっ？・・・可笑しいどすか？」

「ええ、おなごは着物を着るのが普通どす。着たことがないんどすか？」

「いいえ、うち舞妓ちゃんしていると・・・き・・・」
と言いかけてハツとして

「うち、なに言いました？」

「舞妓ちゃんしているときつて、・・・でも変どす、祇園であんたみたいな舞妓ちゃんいやはらへん。

こうみえてもうちのお母ちゃんの”菊野屋”祇園でも一番の置屋どす。

おかしなこと、言わんといて！」

とぷんと膨れる。嘘をつかれたと思ったのだ。

「まあまあ、幾松ちゃん。そんなことで怒らんとす。

この子の透き通るようなおめめ見ると、嘘なんかつきはる人じゃあらへんわ。

何か、おかしな夢みてはるんと違う?・・・」

「もしかしたら、あんた神隠しにあつたんやないやるか」

「そうや・・・お母ちゃんの言うとおりや。だから舞妓ちゃんいたり

おかしなべべきたり」

「おかしな子に引つかかかってしもうたなあ」とため息をつく二人。

「あつ!お母ちゃん!・・・半次はんが戻ってきはつたわ」

「半次はん?」

「へえ、うちの置屋に出入りしてる男衆はんどす」

「男衆はん?」

「へえ、着物の着付けをしたり帯びを結んだりするんどす。

男衆はんが結んだ帯、めつたなことで崩れたりしまへん」

半次は籠に若い医者を乗せて連れて来た。

「女将さん、ちようど籠屋の前がお医者さんで若い先生ですが

蘭学のお医者さんだとか、ちようど居合わせたので来てもらいました」

「まあまあ、そつですか。・・・先生!この子神隠しにあつたんじゃないやるか。

ちようどこの下の川原で倒れていたんどすけど、

自分の事なぐんもおぼえていないのんどす」

「まあまあ、神隠しはともかくとして、調べてみましょう」とこの若い医者が少女の目を見ろうとしたら

「いや！・・・うち、男はんは大嫌いなんどす！」
と手を叩いて飛びのく。

「ごめんごめん。君のその反応、本当に男嫌いなんだね。
悪かったよ。でもわたしは医者なんだ。少し眼を閉じていてくれな
いかな」

若い医者が診察をしている間、身を硬くして我慢している少女。
幾松にとって不思議であり、こっけいでもあった。

医者が少女を診察している間、皆は川原のほうを見ていた。
時々『いやあ』と叫び声をあげる少女。

「終わりました」

振向くと少女がスカートの中のホックを止め身づくろいをしていた。

若い医者・・・大竹宗次郎は女将と幾松に

「あの少女の症状は、いわゆる記憶喪失というものです」

「記憶喪失？」

「はい、自分の名前も在所も今までやってきたことさえ忘れてしま
う病気なのです。

でも普通は頭を打ったり大きな衝撃でおこりますが、あの子は誰か
の強い意志で

記憶を心の隅に閉じ込めてしまったように思います。非常にまれな
症状です」

「これから、どうなるんどす？」

「明日にも記憶が戻るかもしれませんが、一ヶ月後かも・・・もしか
して一年後かも

この病気は待つ方法がないんです」

「かわいそうに！」

「女将さん、あの子をどうするおつもりですか？」

「どうしたら、いいどすやるか」

「出来れば、うちでお預かりしたいのですが」

「どうしてどすか？」

幾松が聞く。

「あの子、珍しい体をしているんです。全て女の身体なんです
一部だけ男なんです」

「一部が男？」

その言葉の意味がわかったのは少したってからだ。

顔を赤くしていく女将と幾松・・・花町で働くからといって
女としてすれっからしではないし、女のプライドもある。

男が嫌い！という少女だが、何故だか放ってはおけない。

「あの子はうちで預かります。体が珍しいからといってこのまま放
つておくなんて出来まへん。」

それにそんなことしたら花街で生きる女の名折れどす」

「でも・・・」

という医者だが少女を見る眼・・・その喰らいつくような眼からそ
の魂胆が、見え見えなのである。、
業腹だが少し診たて料を上乘せして早々に追っ払ってしまった。

「幾松さん姉さん」

と少女に名前を呼ばれた幾松、

その笑顔と可愛い声に（この子、本当に男はん？）とつい疑問に思
つてしまう。

「なんどすか？」

「その横笛、吹いてもよろしおすか？」

「横笛を？・・・吹けるんどすか？」

少女は笑うだけで返事はない。

でも手荷物から見えている横笛を取り出し渡した。

少女は川原の土手に腰をおろして横笛に唇を当てると静かな旋律が流れた。した。

幾松は琴も三味線も弾ける。だが横笛は京の町でこの人ありと知れた名人であった。

その名人の幾松の心を一瞬のうちに捕らえるこの音色……これは一体何？……、少女の吹く音色が川面に流れていく……魂を奪われるということはこのことをいうのか？

菊野にしても半次にしても素人ではない。

今、少女が吹いている横笛がどれほどのものかはよく判った。

幾松は思う。あの笛が名笛と呼ばれるものならば……もつと……

そう……もつともつと素晴らしいものが聞けるはず……そして、思い出した。……幾松と相思相愛である長州の桂小五郎。

その友人である土佐の坂本竜馬が持つ鳴かすの横笛『翔龍丸』。もしこの少女が吹いたとしたら？……

ああ……笛の調べが消えていく……女将の手が幾松の腕をきつく掴んでいるのに気づいた。

「お母ちゃん！痛い！」

「あつ！ごめんえ、でも幾松ちゃん……あの子……」

「ええ！……あの子は凄い！あんな横笛の吹き手、うち……会ったことおへん。」

うちなんかもつ、足元にもおよびまへん」

少女が立ち上がった。振り返った少女からこぼれるその笑顔、おやっと思うほど引き付けられてしまう。

「幾松さん姉さん、ありがとうございます。おかげで記憶が戻りました」

「えっ、ほんとですか？」

「へえ、うちは祇園では小沙希います」

「小沙希ちゃんいいましたなあ、うちは祇園に生きる女です。

だから小沙希いう名の舞妓ちゃんなんていないの知っているんだすえ」

「へえ、だからうちがいたのは今の時代の祇園やおへん」

「今の時代と違う？」

「へえ、うちの時代とんでもない化け物が復活しましてなあ。

うち、そいつと戦うためのものあるものをこの時代に探しにきたんだす」

「化け物？」

「へえ、その化け物、うちの時代の京の都を焼け野原にする……
いうとるんだす」

「京の都を焼け野原に！」

「誰です？そんなとんでもないことをしようとする化け物とは？」
菊野が聞く。

「怨霊・藤原元方」

「なんですつて?!……藤原元方なんだすか」

「お母ちゃん！知つとるんえ？」

「へえ、有名な怨霊です。平安時代一度この怨霊に京の都が壊され
ているんだす」

「小沙希ちゃん！あんたそんな怨霊と戦えるんだすか？」

小沙希は頷いた。

「お仲間はたくさんいるんだすか？」

「はい!……でも直接戦かうんは、うち一人だけだす」

「そんなあ……」

「怨霊との戦いは普通の人では無理だす」

「じゃあ、小沙希ちゃんは普通の人ではない、いわはるんだすか？」

小沙希は笑うだけだ。

「小沙希ちゃん！あんたつて娘は・・・恐くないんどすか？」

「恐くないといったら嘘になります。」

けんどうちはうちに来る精一杯のことをするだけどす。

京都に人のため・・・皆の笑顔を守るため・・・」

「けんど、どうして小沙希ちゃんが？」

「へえ、うちにはもう一つ名前があるんどす」

「もう一つ名前が？」

「へえ、うちに厳しい修行をして鍛えてくださったお方、

うちに名前をつけてくださいました。陰陽師”安倍あきあ”・・・」

「陰陽師”安倍あきあ”？・・・では・・・？」

「はい、我師の名は”安倍晴明様”」

「あの清明神社の・・・？」

「へえ」

「でも、そんな大事な事どうしてあつたばかりのうちらに？」

「うちにはわかるんどす。」

こんなこと言ったら気持ち悪ならへんか心配どすが　うちには人の心が見えます。

だから信じられるんどす。

それにお母ちゃんと幾松姉ちゃんはうちとは切れぬ縁があるんどすえ」

「お母ちゃん！小沙希ちゃんをどこにもやらんといて！」

「わかつてます。不思議な縁で出会ったばかりだけど、

小沙希ちゃんがうちらとは縁で結ばれてるいわはるんなら、余計ほ

つとけまへん」

「ひゃあ、やっぱりうちのお母ちゃんや」

と飛びついてはねまわる。

「これこれ、幾松ちゃん。痛いどす。

そうや、その不思議なおべべ脱いで着物に着替えなくては・・・」

「これどすか？・・・これうちの時代の女の子の学校・・・いえ寺子屋の

制服どす。でも、これはうちにとって戦闘服なんどす」

「でもそんなおべべでは目だって・・・」

「へえ、わかつています」

「すんまへん、半次はん。この子に着物を着せるさかいおべべを出しておくれやす」

「うちも手伝います」

とって幾松も小沙希の服に手をかける。

セーラー服を脱げば、現代の下着である。

あきあが現代で舞妓の姿に変身していた時も下着をつけなかったから戸惑いはない。

でも現代の下着をみるのが始めての幾松。

いちいち説明を求めて、小沙希の説明の中、その機能性には感心しきりだ。

男衆の半次に帯をきちっと結ばれて出立の用意ができた。

「ここどす」

と連れていかれたのはまぎれもなく菊野屋であった。

「ただいまー！」

「あつ？・・・お母ちゃんや・・・お母ちゃん帰ってきたえ」と騒ぐ舞妓が1人。

2階よりバタバタと大きな音をさせて数人の女の子が降りてきた。

「これ！花世！・・・いつも言っているでしょ！」

と怒鳴る菊野お母ちゃんに

「えっ？あの子も花世ちゃんなんですか？・・・ふふふふ」

「どうしたんえ？」

「いえ、名前が一緒なら、することも一緒なのかと」

「へえ・・・小沙希ちゃんの所にも花世が？」

こつくりと頷きながら

「いつもお母ちゃん、花世ちゃんを叱ってばかり。

でも最近、花世ちゃんがうちを叱るようになったんどうすえ」

この時代の花世、時代が違えどもどこか面影が似ている。

その花世も自分の名前が出てくるものだから、

目を白黒させながら見知らぬ女の子をじっと見つめているのだ。

「うちのお母ちゃん、いつもうちが危ないことばかりするもんどすから、

毎日お百度ふんで、それ知ってる花世ちゃんが、うちを叱るんどす」

幾松は小沙希の両肩に手を置いて、

「小沙希ちゃんのところの『菊野屋』もいいところなんどうすなあ」
そしてニッコリ笑って

「小沙希ちゃん！うちあなたのこと気に入りました。

だから、あなたが好きだけここにいたらいいんえ」

「お母ちゃん！幾松さん姉さん。お世話になります。

いつまでいられるかわからへんのどすが、うちもお座敷にださせて

くれます?」

「えっ?小沙希ちゃん。それでいいの?確かにうち人手が足りません。」

でも・・・お客はんに働かすなんて・・・」

「お母ちゃん、いいんどす。うち、会いとうお人がいます。」

そのお人お座敷に来んとは限りまへんから、お座敷に出ていたほうが・・・」

「わかりました。でもそのままではお座敷でることはかないまへん。踊りのお師匠の許可がいるんどす」

「へえわかりました」

そばで聞いていた舞妓達

「お母ちゃん!うちら今からお師匠はんのところへお稽古に行くんどす」

「そつどすか、今日はうちんとこの当番どすか」

何やら考えていたようだが

「小沙希ちゃん!うちあんだの踊りみたことおへん。」

だからあんだを推挙できまへん。だけんどお座敷出たいんなら、あんだの実力で勝ち取りなはれ」

そついうと手早く用意された桶の水で足を洗い、荷物を置きに部屋にむかった。

「さあ、小沙希ちゃん。あがつて」

「へえ」

といった時、戸がガラリと開き

「ごめんよ」

と5人の男達が入ってきた。いずれも目つきが鋭く尻端折りした人相が悪い男達だ。

「おや？なんどすか？清水一家のええ顔のお兄さん達。雁首揃えはつて……」

「幾松か、女将はどこだ！帰っているだろう」
そついうと土足で上がろうとしている。

「あらあら……これはこれは、清水一家のお兄さん達、何の用どすか」

「やいやい！親分が決めたしよば代を無視しおつて、払わないつもりか！」

「勝手な事をおいいでないよ！いたいけなお年寄りから店をとりあげ何が清水一家だい」

驚いた事に女将が京言葉でなく、べらんめい口調で啖呵を切っているのだ。

「野郎！やつちまえ」

という兄貴分らしい男の襟首をつかんだのが、小沙希だった。

『パシッ！……パシッ』

と頬を殴ると背負つて投げる。土間に頭を打ち付けた兄貴は目を白黒して気絶する。

これはかなわないと思つて4人がかりで小沙希に襲い掛かるでもあつという間に土間にのびたのは男達だ。

「小沙希ちゃんつて……凄い！」

もうため息が出てしまう。

舞妓や芸妓達は陰からこつそりと覗いていたが、眼を白黒させてあつけにとられているだけだ。

「お母ちゃん！筆と懐紙を……」

振向く女将に心得た舞妓の1人が部屋から筆を懐紙を持ってきた。花世だ。

スラスラと書き上げるとどこかへの手紙、女将や幾松からみても見事な筆使いだ。

そして、皆が驚きのあまり身体が固まってしまうことが目の前で起こった。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

「玉藻、葛葉、紅葉……そして、白虎丸。出でよ！」

小沙希の身体から4つの小さな玉が出てきて、いきなり着物姿の女房と

恐ろしげな大きな白虎が現われた。

その姿をみて皆腰を抜かしてしまった。

「白虎丸はあの男を……」

というところの気絶している兄貴分の襟首をその大きな牙で噛むとズルズル引きずってくる。

「玉藻、葛葉、紅葉はひとりづつ担いで、比叡山奥の院のお上人様のもとに

この手紙と男達を運んでくりやれ。今の比叡山の結界ならお前達にとって毛ほどの障害にならぬ」

「はっ！主殿！」

「おっと、それからこの男達の今までの悪事の数々許してはおけぬ。

これからの男達の一生、比叡山の結界の中でしか生きてはいけぬ。

もし、1歩でも結界の外に出たら身体が動けぬ。

そう呪まじをかけておいた。お上人様に伝えておいてくりやれ」

「判り申した。であの男は？」

「あの男、ちと用がある」

にやっと笑う玉藻達。主の心がわかるのだ。

男達をつかみ、すっと消える式神達。

振り返ってニコツと笑う小沙希に、ホッと生き返ったような心地の女将達、

「小沙希ちゃん！今のは？」

「あの子達、うちの式神どす」

「式神？」

「へえ」

「聞いたことおます。でも小沙希ちゃん。安倍晴明様のお弟子というの、ほんまやったんやね」

「でも、うちのこと恐がらないでくれやす」

「恐がるなんてそんなこと・・・」

「うち・・・やっつてもた。こんなところ、花世ちゃんに知られたらどんなに叱られるか」

としょんぼりする小沙希。

あんな凄い事ができるのに1人の舞妓に叱られるとってしよんぼりする小沙希に親しみが湧く女達。

「でも・・・でも・・・うち、おなごにあんな非道なまねをしようとした男を

許せなかった・・・我慢できんかったんどす」

そんな小沙希に誰ももう何もいえない。

「お母ちゃん！踊りのお師匠さんのところへ行くのちよっと待っててください」

といつて気絶をしている男の襟首を掴むとズルズル引きずって出ていく。

もう誰も動けない・・・が

「お母ちゃん。うち様子を見てきます」
と行って花世が下駄も履かずに飛び出していった。

誰も何も言わない・・・いや何も言えないのだ。あんな不思議は見たことがない。

疲れがどつと襲ってきた。いつの間にかみんな女将の部屋に集まって座っている。

一番若い豆花が入れたお茶を一気に飲み干してしまった。
皆お茶を一口呑んで喉がカラカラに渴いていたのに気がついたのだ。

「大変！大変！・・・」

と花世が騒々しくかえってきたのは、それから半時たったときか座っているみんなを掻き分けて菊野の前に座る。

そばにあつた湯呑みを取る。

「あつ、それ！うちの！・・・」

という芸妓の声も聞こえていないのか『はあはあ・・・』という激しい息遣いが

冷えてしまったお茶が呑む事で少しは落ち着いたようだ。

「あの、小沙希さん姉さん・・・」

という花世の話に皆、花世の顔に穴があいてしまつようじつと見つめて聞き耳をたてている。

「小沙希さん姉さんがあの三下をひきずって行くのを町内の人や他の置屋の芸妓さんや舞妓ちゃんが遠巻きに見ているんどす。

あの舞妓ちゃんは？とうちに聞いてくる置屋の女将さんがいたもんで

うち・・・へえ、今度うちに入った舞妓ちゃんどす・・・と答えて

おきました。

小沙希さん姉さん、あの清水一家にあの三下を放り込んで今までの悪行許しまへん。

なんて大きな声をかけとるんどす。

その声で出てきた手下が十数人……でも小沙希さん姉さん物凄う強うおした。

まるで講談で聞いた巴御前のようで、あっというまにみんなやつつけて……

そしたら小沙希ちゃん中に入っていくんどす。

ドタバタと大きな音がしてすぐに静かになってしまいました。

そのうちお役人はんが大勢こられて……でも皆首を捻って出てきたんどす。

中には誰もおへんいうて「

その時、

「ただいま、帰りました」

という声が聞こえた。皆顔を見合わせ……そして走り出ていく。

そこには何事もなかったような小沙希が立っていたのだ。

「まあ、小沙希ちゃん！早ようおあがりやす」

と菊野が小沙希の手を引っ張るよう上げる。

すぐに座敷に通した菊野。皆も小沙希の後ろにずらっと座った。

「小沙希ちゃん、あんた……」

「へえ、すんまへん。勝手な真似をして……でも清水一家はもうあらしまへん」

「じゃあ、あの親分とかは？」

「比叡山に預けてきました。もう二度と比叡山からは出てこられまへん」

「どうして、小沙希ちゃんは……」

「うち、どうしても、おなごを泣かす男に我慢が出来へんのどす。だから、つい……」

「だからつい……なんどすか」

と急に大きな声を出した花世が、小沙希につめよる。

そんなこと一度もなかった花世に驚く菊野達。

「つい、どうしたんどすか？……あんな奴でも男どす。

へたしたら、どんな目にあわせられるか、確かに小沙希さん姉さん強うおす。

でも、もっと強い用心棒がいたらどうするんどすか」
みんな黙って聞いている。口を挟む事ができない。

「うちら、小沙希さん姉さんにあってちよつとしかたってまへん。でも、物凄う心配したんどす」

「すいまへん……」

小沙希が頭を下げた。

「うちなんかより、お母ちゃんに謝りなはれ」

「お母ちゃん、心配かけてすいまへんどす」

「幾松さん姉さん、ごめんなさい」

と一人一人に頭を下げたあやまつていく小沙希。

菊野はこうして叱る花世に驚いたが、素直に謝る小沙希にはもっと驚く。

小沙希は物凄く強いに違いない。今、この国をぎゅうじっている男達誰よりも……

でも、ただの舞妓1人の小言にこうして謝る小沙希、こんな女の子見たことも逢ったこともない。

最後に花世に謝る小沙希。

「小沙希さん姉さん！小沙希さん姉さんはきつと何かに突っかかっていってから

考えるんどっしやる？」

「へえ」

「それが駄目なんです」

「もし目の前で何かがあつたら？」

「小沙希さん姉さん！逃げるんも勇気どす」

この時代の花世にも同じことで叱られた小沙希。

でも心の中では自分を受け入れて貰えた感謝で一杯なのだ。

「さあさ、花世ちゃん。叱るのはその辺にしなはれ。舞のお稽古の時間どす」

「きゃあ、大変どす」

とバタバタ2階に駆け上がる花世達。

「さあ、小沙希ちゃん。お稽古いく用意をしなはれ」

「小沙希ちゃん！行こう！」

といって幾松に連れられて2階に上がる。

こうして着替えさせられお化粧をした小沙希。みんながポカンと見ているのだ。

確かにお化粧していない小沙希、きれいだなとは思っていた。

だがこうしてお化粧すると・・・もうこの世のものといえぬ美しさである。

「うちこんなきれいな舞妓ちゃん見たことおへん」

「うち、もう言葉もでまへん」

「まあ・・・小沙希ちゃん・・・」

降りてきた小沙希に菊野も言葉が続かない。

「さあみんな行くえ」

と下駄を履く幾松。

表でみんなで『きゃっきゃっ』と話をして待つていると
感じる感じる痛いほどの視線を感じる。

周囲を見渡すと道行く人の他に町内の人が見ているのだ。

手を合わせて拜んでいる人もいるくらいだから

あの清水一家にどれほど泣かされてきた人が多かったのか。

「ほら、小沙希ちゃん」

という

「へえ判っているのどすけれど何か恥ずかしおす」

といいながら頬を『ポー』と赤くして周囲に頭を下げるしぐさは

幾松からみてもホレボレしてしまう女ぶりである。

戸締りをして出てきた菊野に

「お母ちゃん、ちよつと待って」

と言ってから戸にむかって何やら『ぶつぶつ』と言っているのを

「どうしたんえ、小沙希ちゃん」

「いえ、ちよつとした泥棒除けどす。さあいきましょ」

とニッコリ笑う。あとでこの祇園に暗躍していた盗賊が

菊野屋に忍び込んでとんでもない事になるうとは……。

ここも見知った一軒家『京舞・井上流』と書かれたその看板、
確かに人間国宝の井上貞子の家である。

ここでもうして脈々と血が受け継がれて来たことを思うと胸が熱く
なる小沙希。

そつとその看板に手を添えるとニッコリ笑ってから皆のあとに続く。

あの広いお稽古場でまだ50を過ぎただろうか、
厳しい顔で菊野屋の舞妓や芸妓に京舞を教えている人が井上貞子の
祖母にあたる

人なのだろう。その横にちよこんと座ってじっと踊りを見ている幼
き少女が

貞子の母になる。

舞妓達のお稽古が終わり幾松の舞が終わる頃、高弟達の鋭い目が小
沙希にふりそそぐ。

お稽古場に入ってきた時から目に付いていた。

全く隙がなく、長い間座りつつづけても微動だにしないその姿勢には
誰もが注目していた。

師匠も、その幼い娘も……。

「その舞妓ちゃん！あとはあんただけです」

「へえ、よろしゅうお願いします」

といつてすつと立ち上がり舞台にむかう。足に痺れはないのだろう
か

みんなの注目を浴びる中、その自然な姿におやつと思つのは仕方な
い。

だってそうだろう。大勢の中で何かを見せるなんて大変なことなの
だ。

「舞妓ちゃん！初めて見る顔どすなあ」

「小沙希います。はじめておめもじいたします。

どうぞよろしゅうお願いします」

「小沙希ちゃん、どんな舞を舞うんどすか？」

小沙希は頭をあげ、師匠を見るとニツコリ笑う。
そして、ある舞いの名を言った。

目をむく師匠にざわめく高弟達。

そんな様子を見守る菊野屋の女将と幾松達、気が気ではない。

あのお師匠の様子では又、小沙希がとんでもないことを言ったに違いない。

「お母ちゃん」

「幾松ちゃん」

と日頃花町で男などなんともしない二人がオロオロしているのだ。

それほど小沙希という舞妓の存在が二人にはかけがえのない存在になつていた。

「あんた達、用意をしなさい」

師匠の声に高弟達が三味線や琴を持って舞台にあがる。

これはなんかとんでもないことになっている。

菊野と幾松もう声が出ないほど心臓の高鳴りは頂点を極めようとしているのだ。

高弟達の三味線と琴から調べが流れ、高弟達の謡がはじまった。
すると流れるように小沙希が舞う。

これは？・・・菊野も・・・幾松も眼が離せなくなった。

幾年舞いを習ったことか。日頃の修行も怠りない。それだけの努力もしている。

でもそんなもの、この舞の前ではただ霞むだけだ。

小沙希という舞妓はもう手の届かない高みにいる舞姫なのだ。

ただ事でないのは芸妓やまだ素人同様の舞妓にもわかる。

そして、今までなにも動じなかつた師匠の横にいる幼き少女・・・

そう、井上貞子の母親にあたる舞の天才といわれる祥子が母のそばにすりよりその腕を小さな手で握り締めて食い入るように小沙希の舞を見つめていた。

師匠の和子にしても我が子の握る手の痛みも感じず、その鋭い眼差しは踊り手の正体を見極めようとしているのだ。ゆっくりゆっくり桜の花びらが舞い落ちるように小沙希が腰をおとし

扇を前に置いて頭を下げる。・・・舞がおわった。

どうでした？というように師匠のほうをニッコリ笑ってみる小沙希。

師匠の口が開いた。

「小沙希ちゃん、言われましたな。」

舞についてはあなたには何もいうことはござんせん」

そう・・・師匠は小沙希の舞を認めたのだ。

菊野と幾松は喜びで一杯だ。

「小沙希ちゃん！あなたこの舞、どこで習いはった」

「へえ」

といった小沙希の口から驚く名が出る。

「うちが習ったのは京舞の家元で人間国宝の井上貞子先生でうちのお婆ちゃまでもあるんどす」

「京舞の家元・・・？・・・井上貞子？」

京舞の家元はここなのだ。井上貞子なんて知らない。

そして・・・小沙希の口からもっと驚くべき事が語られた。

「うちのお婆ちゃま、井上貞子は、お師匠様の・・・。」

お師匠様の隣りにおられる井上祥子様がもう少し将来、お産みになるお嬢様なのです」

小沙希のいうことが良く飲み込めなかった。……でも……はっ！と気づく。

……でもそんなはずは……そんなことあるはずはない。この小沙希という舞妓ちゃん何を言っているのか……？

「この舞はお師匠様がお考えになって、祥子様が完成されたと聞きました。

うちがお婆ちゃまに初めて会った時に言われたこと……。

『うちは舞に一生を捧げました。だから人の判断は舞の中でしか出来ません。

舞の中で自分を表しなさい』その言葉、お師匠様が祥子様にお教えされたのですね。

貞子お婆ちゃまはお母様である祥子様に教えていただいたと聞きました」

「お母様。うちこの人のいうてはることに嘘は無いです。

そとですか、うちの赤ちゃん、貞子いわはるんどすか」

と言ってにこっと笑う祥子。

「うちはこの時代の人間ではあらしまへん。今から約140年あとの世界から来ました。

あるやつかいな化け物が復活して、

うちの時代のこの京の都を焼け野原にするいうて自分に力をつけるために

小っちゃな女の子を次々と攫っているんどす」

「その化け物とはなんどすか？」

高弟から声がかかる。
時代が違うとはいえ、この京の都が焼け野原にするという化け物が許せないのだ。

「怨霊・藤原元方！」

「元方？・・・あの藤原元方なんどすか？」

「へえ」

「でも、どうして小沙希ちゃんか？」

「こんな可愛い舞妓ちゃんの小沙希がそんな怨霊のためになぜ？・・・
訳が判らない。」

「うちが・・・うちしかいないんどす。元方と戦えるのは」

「小沙希ちゃんが？・・・どうして？」

余計に訳がわからない。

「うちには、もう一つ名前があるんどす」

「もう一つの名前？」

「へえ、うちは時を越えて平安時代に修行のためいったんどす。

どうしてそうなったのか？・・・それは天から与えられた使命というほかはあらしまへん」

小沙希ちゃんが平安時代に？・・・花世は舞妓達と顔を見合わせ
ている。

「そこでうちはいろんな修行をしました。本来の体術や呪術・・・
その他に

舞や横笛といった修行もしてきました。

そのおかげでうちは師に名前を与えられました」

「その名前とは？」

「陰陽師”安倍あきあ”」

「陰陽師？……」

「安倍？……」

「そつどす、我師の名は安倍晴明」

「そのおひと、有名な陰陽師どすなあ」

「へえ、今でも安倍晴明様を超える陰陽師はいやしまへん」

「そこで舞を覚えたのどすか」

「へえ、でも京舞はお婆ちやまに教えていただきました。平安時代の舞は全然違おてました」

「見たい！……小沙希ちゃん！」

「へえ」

「うち達にその舞を見せておくれなはれ」

そつどう師匠にニコツと笑つて立ち上がる小沙希。後ろで控えていた高弟達は急いで舞台から降りる。

指先に呪まじを唱えて気を切ると

いきなり烏帽子をかぶつた白い衣と赤い袴の白拍子の姿に変わった。

「おおつー！」

と声をあげる皆、今始めて不思議な秘術を見たのだ。

「これは当時の帝、五代天皇様に私が献上した『紫の舞』でござい
ます。

白拍子の舞姫、白河の厚保姫様が創作され、私に贈つてくださった
舞で

我師、安倍晴明様が最もお好きな舞でもございました」

といつと、いつのまに持ったのか鮮やかな紫の舞い扇が小沙希の身
体の一部となつて舞う。

この舞はあくまで優雅に清水に流れるがごとく、足元はゆるやかな波のごとく、腰は安定され上下に微動だにしない。手の動き、足の動き、身体の動きは京舞にも応用されているが、それはそれは見事なものだった。

調べは小沙希の口元からは聞いたことのない謡が旋律にのり狂いのない澄んだ声がこの稽古場に流れていく。平安京の帝の前で舞うこの少女の姿がこの情景にかさなってそして消える。

あつというまに終わってしまった。ずっと見ていたい……。

この感動は舞を愛する全ての人の心を打つ。

小沙希に対する不信感はもう全て消えていた。舞によって信頼感が出来たのだ。

これほど見事な舞は正直これまで生きてきて見たことがなかった。平安京で修行したという話、信じることができた。

「小沙希ちゃん、ありがとう。この舞を見られて本当に良かった。先ほど小沙希ちゃんが見せたうちが創作している舞に小沙希ちゃんの今の舞から所作が少し入っているのがわかりました。うちの娘が完成させたいわれたんですが、孫と小沙希ちゃんが完成したんです。なあ、祥子」

「へえ、うちもお母はんと同じ考えです。それにしても上には上がおられるもんですなあ。うちも精進します」

「それと小沙希ちゃんは横笛も修行されたとか」

「へえ、お師匠様」

「これはうちの我儘です。出来ればそれも聞かせてほしい」

「へえ、よろしおす」という。

「笛は？」

「へえ、うちの体内にあるんどす」

とって両手を前に出すと、ポーっと明るくなりその中に1管の横笛が。

もう驚きはない。小沙希の秘術はもう皆に受け入れられたのだ。

「この笛は平安時代に大江山のシテン殿からゆずられた『緋龍丸』どす」

「大江山のシテンといえば鬼の朱天童子では……」

「いえ、シテン殿は唐天竺より遠いところからこられた異人様。

その風貌から鬼に間違えられ追われていたんどす。

シテン殿はその風貌とは異なりとても優しいお方。

うちが海へ逃がす時にこの笛を譲られたんどす。

それがある陰陽師と戦ったときに、この笛どこへやらに無くしてしましました。

でも不思議どす。うちのお婆ちやまに井上家に代々伝わってきたと聞きました。

うちがこの時代に来たから今は笛は消えているはずどす。

でもうちがここからいなくなったら又、笛は姿を現します」

という言葉に高弟が1人部屋を出て行く。

小沙希は横笛を口にあてる。

その音色を聞いたとたん菊野と幾松は一度聞いた笛とは雲泥の差があることに気づく。

これが駄笛と名笛の差なのか・・・体の震えが止まらなくなる。

そして見た。小沙希の体が二重写しになり菩薩様が小沙希とともに笛を吹く姿を……。

自然に両手を合わせるのは全員同じだ。

笛を調べに行った高弟は帰ってきたとたん笛の調べとこの不思議な光景に

足がガタガタ震え出し、腰が抜けるように座り込んだ。

なんとという笛の音か。小沙希の吹く笛からは高い音色が・・・

まぼろしなのか菩薩様が吹く笛から低い音色が、調和するハーモニ

ィ

これは天上の音色なのだ。二度とは聞けない。そう直感する。

だから、心を大きく開けて聞いた。

波が消えるように笛の音が止んだ。

いきなり座っていた座布団から滑りおりる師匠、皆もあとにつづく。

そして頭を下げた

「ありがとさんどす、小沙希ちゃん。もう凄いものを聞かせてもらいました。

うちにとって今の笛の音色は、これからの生きていく糧どす。

これから、もつともつと精進します。・・・そして、うちの孫よろしゅう頼みます」

小沙希はただにっこり笑うだけであった。

これで目的は達したのだ。深々と頭を下げてから立ち上がった。

舞台を下りると同時に舞妓の姿に戻る小沙希、でもそんなこと誰も
が

もう平気になっていた。小沙希ならなんでもないことだ。

その日、帰ってすぐにお座敷に出るつもりだったが

置屋の戸を開けて中に入ったとたん男が1人倒れているのがみえた。

「ひえ〜。なんやこのお人……」

正体はすぐわかった。

持っていた風呂敷包みがほどけて中身がそこいらに散乱していたからだ。

「あっ、これ『巴屋』の吉弥の自慢の簪……」
次々、見知った芸妓や舞妓達の簪や櫛が出てきたのだ。

そこにやってきた半次。その様子を見て慌てて入ってきた。

「あっ、半次はん！ちようどええところへ」

「どうしたんや、女将はん」

「泥棒どす・直ぐお役人はんを！」

「わかりました！」

と飛び出していく。

「でも、どうして？……」

と菊野と顔を見合す幾松。

そこではつと気づいたのは小沙希のこと

（「いえ、ちよつとした泥棒除けどす」）

皆で出かける時、確かそう言っただけで何やらしていた。

「小沙希ちゃん！ちよつと」

皆から少し離れて立っていた小沙希を呼ぶ。

「小沙希ちゃん……これあんたがやったんだすな」

小沙希は頷く。

「うち何や知らんけんど胸騒ぎがしたんどす。そやから、泥棒よけのお呪いしました」

「お呪い？」

「へえ、この家に悪い心で入ってきたら、こらしめてほしいと付喪神つくもがみはんにお願ひしたんどす。

そやさかい、その簪や櫛に宿る付喪神はんがこらしめてくれはったんどす。

でも……」

「でも？」

「この簪や櫛のほんとの持ち主も、大事にせな。付喪神はんかなりお怒りになっているんどすえ」

幾松、小沙希の顔をじっと見ていたがふっとこの持ち主の顔を思い出して

「ぷっ」

と噴出した。

「いややわあ、幾松さん姉さん。うちの顔をじっと見て笑ったりして……」

「あっ！ごめんごめん。別にうち、小沙希ちゃんの顔をみて笑ったんと違うんどす。

この簪や櫛の持ち主の顔を思い出して……うっ……ぷっ……」
と又噴出す。

「この簪と櫛、ほとんどが吉弥さん姉さんのどす」

「吉弥さん姉さん？」

「へえ、幾松さん姉さんにきつつ当たる芸妓はんどす。幾松さん姉さんを目の敵にしているんどす。

でも最近、なんやふらふらと生気があらへんし、

目の下に真っ黒い隈をつくりはって……じゃあ

「きつとそうどす。その吉弥さん姉さん、あまり物を大事にしやら

へん思います。
付喪神はん、人の命まで奪う事あらしまへん。けんどきつい仕返しをされるんどす」

「それどんな仕返しどす？」

「へえ、悪夢どす。毎日毎日きつい悪夢を見させるんどすえ」

ぷつと吹き出す芸妓と舞妓達、あの吉弥さん姉さんが・・・悪夢を見てはる・・・。

本人には気の毒だけどありえない組み合わせに可笑しくて・・・可笑しくて・・・

「ごめん！」

と入ってきたのが目の鋭い役人と御用聞きだ。

さすがは置屋の女将、さつと表情を変え役人のもとに。

「これはこれは、篠原様。まさか篠原様がお見えになられますとは」

「おお、女将久しぶりだな。・・・この男か！」

「へえ、うちらがお師匠様のとこでのお稽古が済んで帰ってきましたら

こうして倒れていたんどす」

「何？倒れていた？・・・政吉！」

「へい」

といて御用聞きが倒れている男の身体をていねいに調べていく。

「旦那！何の外傷もないようですがす」

「襲われたわけでもないか・・・」

「あっ！・・・この男！」

「どうした！政吉！」

「へい」
といいながら懐よりとりだす一枚の紙・・・広げるとどうやら人相書きのようだ。

政吉は立ち上がり広げた人相書きを篠原に見せる。

「筋ものか・・・なにに？ 関西一円を荒らし回る盗人、音羽の安吉？」

・・・大物ではないか。そんな大物がどうしてこんなところで？
・・・政吉！・・・やれ！」

と政吉はいきなり気を失っている安吉に馬乗りになり、その両頬を思い切りぶつとばした。

その行為が気を取り戻させ、薄っすらと目を開ける音羽の安吉。

しばらくは自分の身に何が起こったのかは判らないようであったがはつと気づいて猛然と暴れて馬乗りになっていた政吉を跳ね飛ばしてしまった。

ガバツと身を起こした安吉懐からドスを取りだし、その先にいる幾松に向かった。

身動きできない幾松、間にすつと入ったのが小沙希だった。

小沙希は持っていた舞扇を目の前に出した。

その自然な動作に安吉は足を止めた・・・いや止めざるを得なかった。

回りのものには見えないが、あんな扇の小さな先がいまでは何尺もの大きな壁になり

前が全く見えない。いやそれどころか安吉にむかってせまってくる。

「ふむ、見事な！」

と舌を巻いたのが、役人の篠原源太郎だった。

去年まで江戸の千葉周作道場で内弟子として剣術の修業をしていた源太郎、

一度だけ師匠の千葉周作に今のような刀法で手も足も出なくてその重圧に不様に失神してしまった記憶がある。

こんなところで同じ刀法が見られるとは思わなかった。

どうするのか？興味深い。周囲のものは固まったままで手出しはしない。

だからゆっくりと見物できる。そんな不遜な考えの源太郎。

小沙希はスツと舞い扇を下ろした。何をするのか？

逆の手の平を安吉に向けるとその手の平から青白い光が浮かび上がった。

「えいつ」

気合とともにその光が安吉の懐に飛び込み、その体を折ったまま後ろの木戸もろとも表の道にぶっ飛ばしたのだ。

驚く野次馬達。

「政吉！ひつとらえろ！」

「へい！」

と飛び起き、表に張り番させていた子分と共に音羽の安吉をお縄にしたのだ。

「政吉！安吉を番屋の牢に放り込んでおけ！」

「へい！・・・で、旦那は？」

「おれは、ここでもう少し話を聞いてから番屋に行く」

「わかりやした。奉行所の与力の旦那にはそう伝えておきやす」

「女将！いいかえ」

「へえ篠原様、こちらにどうぞ」

と土間から上にあがる。

「おっと、皆の話も聞きたいんだ」

「幾松ちゃん、皆も着替えておいで。

半次はん、すまないけど、今夜のお座敷そんなわけでお断りしてきてくれはる？」

お詫びは明日幾重にもするからって」

「へい、わかりやした」

と飛び出ていく半次。

「女将！すまねえな。なにしろぶっそうな世の中だから。

新撰組って輩もひでえが、勤皇の志士ってだけで尾羽打ち枯らした田舎もんが

天朝様のこの京の町を荒らしやがって！情けねえ世の中になったもんだ」

とぶちぶちいいながら女将の後について座敷に入る。

芸妓や舞妓達も急いで2階にあがり、化粧を落として着替えると、たしなみ程度の化粧をする。

お座敷に皆集まると、菊野がお盆に茶瓶と湯のみを持って現われた。

「すんまへん、うちにはお茶けしかおいてのうて」

「ふふふ・・・いいさ。大勢の娘達の中で1人酒なんざ飲む気は、さらさらねえよ」

源太郎は菊野のいれてくれたお茶を二口ほどで飲み干し、あくらかいた前に置く。

源太郎は娘達の顔を順繰りに眺める。

しかし、どうしても1人の娘で視線が止まってしまふ

まだ1年間のお役所勤めだけとはいえ、毎日毎日同じ道を歩いているのだ。

どこにどんな人間がいるのかこの体が覚えこんでいる。

「その娘！初めて見る顔だな」

「はい、篠原源太郎様」

「名はなんと申す」

「小沙希と申します」

言葉使いが変わっていた。

「おぬし、江戸もんか？」

「はい・・・でも・・・」

と答え、何かを言いかけたがそのまま口を閉じる。

「小沙希はいつからここにおる」

「はい、本日からです」

「何？今日から？」

「はい」

ニツコリ笑ってから

「源太郎様に少しお伺いしたいことがございます」

「なに？小沙希がか？・・・聞きたいのはわしのほうなのだが・・・まあ良い、何かな？」

「源太郎様の北辰一刀流は千葉周作先生に師事されたものなのでし
ようか？」

それとも千葉定吉先生に師事されたものでしょうか？」

「何！小沙希・・・どうしてそれを？」

「わけはあとで申します」

「そうか・・・わしの師は周作先生ただ一人！」

「そうですか」

とがっかりしていたが、気をとりなおして

「定吉先生のところへは一度も？」

「いや、同じ相手ばかりではつまらんからのう」

その言葉に

「ではお尋ねします。定吉先生のところに土佐藩土坂本竜馬というお方は？」

「おお、坂本さんか・・・知っておる。知っておるぞ」

「では、何か笛にまつわることを聞かれたことは？」

「笛？・・・」

おかしな事を聞くとばかりに小沙希の顔を見つめていた源太郎の目がフツと動いた。

「何か聞いておられるんですね」

「ああ・・・あの日は定吉先生も若先生もお嬢さんも出かけられて居られなかった。

ただ1人、夕日があたる縁に寝ていられるのが坂本さんだった。

『篠原くん、ここに座れや』その時いつも明るい坂本さんの別の面をみたんだ。

やけに・・・そうやけに寂しそうだった。

だからなのか懐から笛を出して吹こうとするのだが音がでない。

わざとそうしているのか・・・寂しさをまぎらわしているのか。

でも違つたんだ。その笛は『翔龍丸』といって坂本家に代々伝わっていたが

誰が吹いても音が出ないらしい。有名な吹き手が吹いても音がでない。

坂本家では手放そうとしたらしいが、竜馬さんが絶対音を出すからといって

江戸に修行の旅に出る時にもつてきたものなんだ。

『でも、全く音が出ないんだよ。篠原くん。人斬りはうまくなつても

この笛から音が出せない。情けないよ』

この言葉をいう坂本さんのこと、今も忘れられない」

「やはりそういった人なんですね。……ありがとうございますました」

「では約束だ。小沙希、お前のこと聞かせてくれ」
「なんなりと」

「先ほどの刀法は何だ！」

「あっ、そうですね。北辰一刀流にもありますよね。でも柳生新陰流にもあります。」

上泉伊勢守様が工夫されたといわれていますが、

実は平安期にあるお方が創造された体術の一つなのです
剣術の話は嫌いではないのでつい体がのりだしてしまふ。

「してそのお方とは？」

「安倍晴明様」

「安倍晴明？あの晴明神社の……土御門家の祖といわれる……」

今は土御門といっても陰陽の術を使えるものはいない。眉唾ものだ
と言う話だが……」

「はい、陰陽師として安倍晴明様に古今東西匹敵される方はおられません。」

晴明様が偉大なだけにそう見えるのは仕方がないことです。
でも延々と引き継がれてきたお家、馬鹿にしたものではございませ
ん」

「ほう、それだけ陰陽師に詳しいのは……いや、これは順を追
って

話を聞いたほうがよさそうだ。では、あの安吉を吹き飛ばしたあの
術は？」

「あれは術という大げさなものではありません。訓練さえすれば誰でも出来るものです。」

「気功といいます。例えば……ほら」

と胸の前で手の平同士を上下に拳ぐらいの間隔を空けて待つ。すると小さな光る玉がぼんやりと現われた。

「これが”気”です」

皆も真似をする。じっとみていると

「さすがはお侍様、剣術の修行が”気”を生み出す精神の持ち方と合っているようですね」

ほんの小さな光の玉だったが源太郎の手の平の中央部に現われた。

「ふ〜」

と息を吐いたのは芸妓や舞妓達

「全然駄目です」

「小沙希ちゃん。なんですか、手の平が温かいんです」

「お姉ちゃん、それでいいんですえ」

「小沙希、これが気か」

「はい。剣術でも丹田に気をおいて……という言葉があります。

気は大事なものです。訓練すれば先ほどのように人を吹き飛ばす事ができます。」

でもこの気功が最も力を発揮するのは、人の気を利用して倒すことです」

「人の気を利用する？」

「はい、そうすれば相手の体に触れずとも倒したり、投げ飛ばしたり出来ます」

「見たい！見たいぞ！小沙希」

「はい！……明日なら。いいでしょ、お母ちゃん、お姉ちゃん」

「うちもいくえ」

「うちも」

と芸妓や舞妓達。

顔を見せ合う源太郎と小沙希。

「ふ〜」

と吐息を吐く源太郎。この1年の番所勤めで花街の女の強情なのは良くわかつている。

一度言い出したら聞きもしない。

「わかった。見物ぐらいさせてやる。でもその衣装で来るのは止めて貰いたい。」

もつとおとなしめにな

「はい」

という声。まったく……馬鹿にされているのか。

娘達を相手にしていたら時間がいくらあっても足りはしない。

「小沙希！わしがこちらに来ていたのは昼間の清水一家の件だ。

あんなこと出来るのはこの祇園でいやこの京の都で小沙希しかないと思うのだがどうか？

小沙希と知り合う前なら途方に暮れていただろうが」

「はい、わたしがやりました」

「で、あの男達はどうしたのだ？」

「比叡山の奥の院に居られるお上人様に手紙をかきました

男達の悪心を叩きのめすよう武者僧の方々に預けてきました」

「なに！……あの鬼より恐いと言われている荒っぽいので有名な武者僧の中にか？」

「……ふふふふ……わはははは……」

笑いだした源太郎。

「比叡山とは……お番屋の牢の中より、遠島の刑より厳しいぞ……だが逃げ出したらどうする」

「いえ、逃げられません。男達は比叡山の結界の中でしか行動できないのです」

「比叡山の結界？……それはどういうことだ」

「はい、我術にて1歩でも結界の外に出れば体が固まってしまって動けなくなるようにしました」

「我術？……小沙希！お前は何者だ！」

「はい。我名は陰陽師”安倍あきあ”」

「……懐から出した懐紙を器用に人型に切り

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

と九字を切り、そして唱える真言

「ナウマク・サマンダ・バザラ・ダンカン」

ふっ吹くとたちまち現われた公達。

「あきあよ。こんなところにいたのか」

「はい、すいませぬ」

「藤原元方の怨霊をどうするつもりじゃ」

「はい、晴明様」

小沙希の言葉に驚く。この方があの安倍晴明か。本物なのかどうなのか？

「この時代の坂本竜馬という方が持つておられる『翔龍丸』あの笛のみが元方を封じられるのです」

「お前の時代では手に入れないのか？」

「いえ、坂本様はこれより4年後の慶応3年の11月15日にこの京都の近江屋で

同じ土佐藩の中岡慎太郎と暗殺されてしまいます。

そのとき坂本様は何の武器も身の回りにおいていらっしやらなかった。

あつたのは……」

「そうか『翔龍丸』で相対したのか」

「はい、その時『翔龍丸』は暗殺者の手によってスッパリと……」

「

「小沙希ちゃん！坂本様が暗殺……されるの……どすか？」

頷く小沙希に

「坂本様にその日のことお知らせして暗殺を回避すれば……」

小沙希が下を向きながら首を振る。

「歴史は……歴史は変えることが出来ないのです。」

坂本竜馬という方は私の時代ではこの維新を生きた偉大な人物として

歴史に記されています。坂本竜馬様を主人公にした物語がいくつも出版されてもいます。

歴史は……そう、一つの例で言えばこの『緋龍丸』……」
と手の平に忽然と現われた横笛。

「先ほど井上の師匠のところに秘蔵されているはずでしたがなかったのはご存知でしょ。」

同じ物が2つと存在しえないのです。

私がこの時代を去ったら再び『緋龍丸』は現われるはずです。

私自身、今の時代の異端児です。だから私がこの時代からいなくなつたら

自然淘汰され私の記憶は皆さんから消されるでしょう。

わたしがここに来たために歪められた歴史はうまく調整されます。

例えば、清水一家です。今は私が比叡山に送りましたが、

お役人に悪事を咎められ処刑されるかもしれないし、改心して一家を潰してしまうかもしれません。いずれにしても、清水一家はこの祇園からなくなる運命だったので「す」

「時の流れは厳しいものじゃ。あきあがこの時代にいられるのもあと3日じゃ。それ以上いるとあきあはこの時代からはじきとばされてしまう。元の時代にも戻れぬ」

「そうになると小沙希・・・いやあきあ殿はどうなるのですか？」
「時の放浪者となる。時と時の間にさまよい歩き、死す事も出来ず、

幾千年、幾万年さまよい続けるのじゃ」

「そんなの嫌！」

花世が叫ぶと若い舞妓達はそろって泣き始めた。

「みんな静かに！」

幾松が大声をあげ、そして必死の形相で小沙希につめよる。

「坂本様に、坂本様にお教えしても？・・・」

「歴史は変わりません。例えお教えしてもその日にはきつと近江屋にいられるでしょう」

「そんな！」

「幾松さん姉さん！あなたもあなたの旦那様と共に歴史に名を残されるのですよ」

「えっ？では？」

「そうです。幾松さん姉さんが想い描く方と添い遂げられます。でもこれからの時代凄いい勢いで変わっていきます。

その時代の流れにそのお方と幾松さん姉さんは翻弄されながらも生

きていかれます。

名前を木戸孝允と変えられ、幾松さん姉さんは松子と名乗られるようになります」

「あきあ殿、教えてくれぬか」

「はい」

「お主はどの時代からきたのじゃ」

「私は、年号を平成という今から約140年先からきました」

「して、藤原元方の怨霊とは？」

「平安時代に暴れ回った怨霊です。人を呪い殺し、平安京を雷や地震などで

破壊した恐ろしい怨霊です。でも清明様が封じられて1千年の眠りにつかせましたが

人の世は変わっていきます。怨霊の存在を信じず、不思議の力は拒否されています。

結局、怨霊・藤原元方の封印を解いたのは人の手によってでした」

「その怨霊、復活してどうしようというのだ」

「はい、清明神社を焼き払い京の结界を取除くことによって朱雀門を開こうとしています」

「何？朱雀門を？・・・あれが開いてしまったら」

「はい、地獄の悪鬼・亡者達がこの京都を・・・いや日本の本國を地獄に変えてしましましょう」

「しかし、结界は怨霊や亡者達には・・・」

「はい、结界に触れる事叶わず、ですが卑劣な怨霊めが・・・」

と幼い少女達を攫い、その生命力を吸い取り、なおかつ少女達の両親・・・つまり

人の手で清明神社を焼き払い结界をとく所存・・・と話した。

「おのれ・・・元方！」

「源太郎様にはわたしの話を・・・」

「そんなことは！あきあ殿！お主のその眼を見ればわかることだ。この話が真実かどうかはな」

「ありがとうございます」

舞妓や芸妓達には難しかったのか、皆船をこいでいる。

「これ！あんた達！」

菊野は叱り付けたが小沙希が押し留める。

「この子達には何の関係のないことです。だから眠らせました」

「あきあ殿、これからどうする」

「はい、一刻も早く坂本様にお逢いしとつございますが、

あのお方は勤皇の志士としてお手配されておられる身。そうでしょう。源太郎様」

「あつははははは・・・知っておられたか」

とぼんの窪をさわる源太郎。

「坂本様は変装したりして、敵の目をあざむくなんてことをする方でしょうか」

「坂本さんが変装？・・・うつぶ・・・」
と噴出す源太郎。

「うつぶふ・・・すまんすまん。あれほど不器用な人はいまい。

それにそんなことをすること自体、毛嫌いする人だ。

自然のままに・・・そう自然のままに生きておられる。

だからこの京に入る時も自然に逆らわず堂々とこられるはずだ」

「源太郎様。私、少々この京の都を少し騒がしてもよろしいでしょうか」

「都を騒がす？」

「はい、血は一滴たりとも流しませぬ。坂本様が興味を持って坂本様自身がわたしに近付いてこられるよう少し変わった趣向で・

」

「して、どのような・・・」

「はい、ではお耳を拝借・・・」

と4人は顔を近づけ小沙希の話を聞く。

「うつぶ・・・」

「うつぶ・・・いひひひ」

と体を捻じ曲げて笑いだした。菊野と幾松。

「とんでもないこと考える奴じゃ」

と晴明と源太郎。顔を見合わせあきれかえる。

「お侍様は難しゅうございます。あまり恥辱を与えたとお腹をめされます」

「いやいや、あきあ殿。その心配はない。昔はどうだったか知らないが

近頃の武士は切腹などはしない。いや切腹の法も知らぬ。

昔、葉隠れという思想はあったが今はそんなものは廃れてしまった。

今の武士は外見だけだ。特に幕府の侍はな」

吐きすてるようにいう。

(この侍、先を見る目はあるようじゃ)

晴明が好む人柄だ。

「では・・・」

「おう・・・やれ。相手は町の人達を苦しめる浪人達や人切り集団の新撰組だ。

遠慮なくやったらいい。だが、剣術の腕かなりの者もいると聞いて

おるぞ」

「天然理心流・・・近藤勇様、土方歳三様、沖田総司様。

新撰組のお方達いづれも相当な腕前です。中でも沖田総司様、お若いですが

天賦の才能をお持ちのお方」

「沖田総司？・・・確か新撰組一番隊の・・・そんなに凄いのか？」

「はい、でも・・・胸を病んでおられます」

「胸を？」

痛ましそうな顔の源太郎。前途明るい青年が新撰組という人斬り集団の

掟に囚われ、そして胸を病んで死を待つのみ。同じ剣術使いを目指していた

源太郎にとってその無念さはわかるのだ。

「でも」

と自分自身を切り替えて明るい笑顔をつくって

「私はやります」

「そうだ。やれ！」

源太郎も小沙希の心がわかったのだろう明るく言う。

「だがその格好ではできまい」

「はい」

と言つて、呪を唱えた。

すると覆面を被り黒衣着流しの姿にかわった。

「何だ！その格好は？・・・」

「はい、わたしの時代にこういう姿をした主人公の物語があります。

新撰組を相手に戦う勤皇の志士”鞍馬天狗”といいます」

「鞍馬天狗か・・・気に入った。これは面白い事になりそうだ」

「お刀はお番屋に届けておきます」

「おうそうしてくれ。だが、下帯だけはかなわん。どこかに捨てておいてくれ」

「いえ、名前を書いて橋の欄干に・・・」

「くくくく・・・あきあ殿にはかなわん。よくぞそういう悪戯が次から次と・・・くくくく」

菊野も幾松ももう何度お腹を押さえて笑っているのか。

「じゃが、あきあよ。こういうことでその坂本竜馬という男、現われるであろうか」

「わかりませぬ。でも私が坂本竜馬というお人を調べれば調べるほど

今までの侍という枠を外れています。源太郎様はどうお思いですか？」

「判らぬ。坂本さんという人は全く判らぬ。

このわしの物差しでは計れぬ桁ちがいの人物だ。だが、あきあ殿の作戦は面白い。

坂本さんが最も好む悪戯だと思う。坂本さんはきつとひっかるでしょうな」

「なるほど、聞けば聞くほど興味がわく。

あきあよ、久しぶりにおぬしの目を通して坂本竜馬という男をじっくり見てみたい」

「おほほほ・・・晴明様もお好きな・・・では」

という赤い小さな玉になってあきあの体に消えていった。

壬生の屯所から出てきたのは沖田総司を隊長とした一番隊15名、

今から見回りに出る。
見回るのは祇園を中心とする花街である。一流の料亭だけでなく
安い費用で飲み食い出来る料理屋もある。
そんな場所に入入りする、不逞の輩つまり勤皇の志士達を捕らえ又
は切り捨てる。

「沖田さん、今日の見回りはどこをまわりますか？」

「そうだなあ、今日は少し目の保養でもしますか」

「いいんですか？」

「たまにはね」

と男としては色白の顔がにっこり笑う。他の隊員はこの一番隊をよ
くうらやんでいる。

確かに隊長の沖田は年が若いだけに話しやすいし、隊員の気持ち
を汲んだ行動もしてくれる。

だが沖田のもう一面の人斬りはいくら味方でも背筋が寒くなる。
人をよくあんな風に切れものだ。

名刀”菊一文字”に血を吸わせ続ける沖田総司、・・・優しくて
恐い。

白く続く土堀、ここを越えたら花街の明るい町並みがある。

自然と足が早くなるのは当然だろう。

「待て！」

手を横に出して隊員達を止めた。

そして、先にある闇をじつと見つめる。

沖田は素早く隊員達を指揮して闇を取り囲んでいった。

隊員の持つ提灯の灯りで木に縛られている4人の男が見えた。

急いで近寄る沖田達、どうやら気絶しているだけのようだ。

「沖田さん！こんなものが」

と隊員から白い紙を受け取る。何やら字が書いてあるようだ。隊員が提灯で照らすその文は

『この者達市中を騒がす鬼面組なり。人心を惑わし、なおかつ婦女子をかどわかし、金品を脅し取ったその罪、万死に値す。

気を失いし男達、経絡をつき疼痛を倍増させん。

数々の悪事全て白状し誠ならば痛み消え、誠為らばその痛み1里先まで悲鳴聞こえん。

我使命、京の都騒がす者こらしめんと鞍馬山から下りしものなり。

鞍馬天狗

』

「君、この先の番屋にこのこと知らせてきてくれないか。

こ奴等、どうやらうちの管轄じゃないんでね」

「はっ」

と駆けていく隊員。

「ふむ。鞍馬天狗・・・か」

「どんな奴なんでしょうか」

沖田は紙を折って懐に仕舞いながら

「すいませんが、屯所に戻ってこの事土方さんに知らせてきてください」

隊員は別の隊員に提灯を渡してから走っていく。

入れ替わりに隊員が御用提灯を持った役人達を伴なって戻ってきた。

「こ・・・これは・・・」

「役人殿、これは我らのやったことではござらぬ」

「貴公は？」

「これは失礼。わたしは新撰組一番隊隊長沖田総司」

「おおう、あなたが……」

「わたしをご存知か」

「はははは……新撰組の沖田殿を知らずば京都人ではござらぬ」

といいながらあっけんからんとしているこの男……篠原源太郎だ。

「わたしはお番屋同心、篠原源太郎と申す。よしなに」

と挨拶する源太郎に（この男只者では無い。こんな男が奉行所にいるとは）

自分と同等かそれとも……と腕を計っていた沖田。

でも源太郎はそんなこと知ってか知らずかあっけんからんとして配下に命令することもせず懐手で見ているだけだ。

「旦那！こいつら目が覚めませんや、どうしやす」

「政吉！仕方がねえから戸板を持ってきて番屋へ運んでおけ」

「へい」

と政吉は手下てがのものに言いつける。

「失礼ですが篠原さんは江戸ですか？」

「いやあ。生まれはこつちですが、育ちは江戸でした。

生まれながら剣術が好きでねえ。小さい時から千葉先生のところで修行してました。

でもこんな世の中ですよ。食えないから父のついで同心株を買って北で同心をしてみましたよ」

「どうして京に？」

「叔父がね、こつちの奉行所で与力をしているんですが

父と母を流行病で一度に無くしたのを不憫だったのか、いい年をした男を

まるでガキのように首根っこを捕まえて京に連れて行くから……
ってね。
だがそんなことをされちゃあ、こっばずかしくって江戸の町を歩け
ませんや。
仕方がねえから、あすこにいる配下の政吉をつれて京に上ってきた
んですよ」

「篠原さんはこっちのほうは今？」
と刀を構える型をとる。

「やつとうのほうですか？……先が見えてしまったんでね。
剣はやはり生まれながらの才能がいるようですね。
わたしのよような凡夫がいくら努力をしてもこの先は知れていますよ」

と笑う。

なんだか沖田にとって京に来て初めて話しやすい人物にあった気がする。
する。

「篠原さん。実は……」
と鞍馬天狗の書状をみせる。

「なにになに……ふむむ……鞍馬天狗ですと……ふざけた名前
をつけやがる」

「私が気になるのは……経絡から先です。

果たしてこんなこと出来るのでしょうか？」

「ふむ……こやつらを起こして体で聞いてみるしか方法はないで
しょう」

「わたしも立ち会ってよろしいでしょうか？」

源太郎は沖田の顔をじつとみてからニヤリと笑う

「いやはや、あんたも物好きなお人だ」

「君達、聞いたとおりだ。これから番屋に行ってくる。
すまないが屯所に戻って二番隊に見回りを変わってもらってくれな
いか。」

君達にはこの借り、次回倍にして返すから
と隊員達を屯所に帰した沖田総司、同心篠原源太郎と番屋に向かっ
た。

第二部 第八話

「旦那！こいつら下帯つけてませんぜ」

「なに！それじゃあこいつら……まさか、女にいたずらを……」

「いえ、そんな様子は無いようで」

沖田は自分の口出すことではないので番屋のあがりかまちに腰掛けてじつと様子をみている。

男達どんなことをされたのか水をぶっ掛けられても気がつかない。

そんなとき

「だんなあゝ……だんなあゝ……」

と番屋に飛び込んできたのは政吉の一の子分丑松。手になにやら白い布切れを巻きつけている。

「どうした、丑！」

「へい、あたりをぐるつと見回って帰る途中、

橋の欄干にこれが巻きつけられていたんでやす。

見てみやすと何やら”鬼面組”と書かれていますんで慌ててひっぱずしてきやした」

と丑松の腕に巻きつけられた白い布、

源太郎はニヤツと笑って

「丑！そりゃあ……こ奴等の下帯だぜ」

「し……下帯？……」

言われた意味がすぐにはわからず旦那の源太郎を見ていたが自分の腕に巻かれた布切れに……

「ひ……ひえゝ……し……したおび……だあ……」

慌てて腕から下帯をひっぺがし気絶している男達の上に投げつけた。

そして何をおもったか丑松、自分の腕に鼻を近づけ匂いをかく。

「く……くせえ……!」

飛び上がる丑松に親分の政吉が叱るように

「馬鹿野郎!早く腕を洗って来い!」

その言葉にすつ飛んでいく。

その姿を見送る3人、なんだかホツとする雰囲気……閑話休……。

「おつ、旦那!……こいつら目を覚ましたようですぜ」

いかにも悪党づらの男4人……だが覚醒したとたん、

『ギヤア〜』

とはね起きた。捕縄でひつ繰られた男達である

「おいおい!……俺達やあ、まだおめエ達に何にもしてねえんだぜ」

その声が聞こえていないのか、泣きそうな顔で地団駄を踏んでいる。

「ちっ!だらしねえやつらだ」

と肩を押えて座らせようとしたとたん

『ギエー!』

と白目を向いて後ろ向きにゆっくりと倒れていく。

「おつと……」

と体を支えた政吉。

「旦那!……こいつ泡をふいて気絶してやすぜ」

「なに?……あれだけのことでか」

「篠原さん……これは……」

「ふむ、・・・おい、政吉！・・・そいつの着物脱がしてみる！」
「へえ」

と云って気絶している男の上半身をおこして着物を脱がす。

「あつ！旦那！・・・これは」

政吉の驚きの顔に源太郎は近寄る。

「む！」

と声を上げた源太郎、

「沖田さん、これは何のあとだろうか」

と沖田を呼んだ。

近付いた沖田の目に体中に小さな赤い点があつきりと浮かんでいるのだ。

これだけ時が経つのに消えもしていない。

「これは？・・・」

「別に傷がついたあとでもない」

と十手で赤い点を調べて

「細い木の先かなんかだろうか」

「篠原さん、これはもしかしたら馬のムチではないでしょうか」

「ふむ、馬のムチで突くか・・・」

だが沖田さん鬼面組といえ、やっとうも並以上にやると聞いているんですよ。

この4人達相手に刀もぬかず、ムチだけで相手できるでしょうか

「そうですね、これは余程の手誰・・・鞍馬天狗とは一体・・・」
考えこむ沖田を見つめる源太郎に

「旦那！この赤い点、いつてえ何なんでやすか？」

その声にはつと気づく沖田総司。

「篠原さん！あの書状の言葉・・・」

「おお、そうだった。確か経絡とか書いていたな」と先ほど沖田に渡された書状なるもの懐からとりだし読み返してみ

る。「なにになに……」この者達市中を騒がす鬼面組なり。人心を惑わし、

なおかつ婦女子をかどわかし、金品を脅し取ったその罪、万死に値す。

気を失いし男達、経絡をつき疼痛を倍增させん。

数々の悪事全て白状し誠ならば痛み消え、

誠為らずばその痛み1里先まで悲鳴聞こえん。

我使命、京の都騒がす者こらしめんと鞍馬山から下りしものなり。

鞍馬天狗

『

か……沖田さん！この経絡ってなんだ？」

「さあ、でも経絡を突き痛みを倍增させるって……、

これ医者用語ではないでしょうか」

「そうか、医者か……おい政吉！近くにいる医者を呼んで来い」

「へい」

と飛び出していく政吉を見送り

「なあ沖田さん！このあとの文なんだが、

正直に白状すれば痛みは消えるが、嘘をついたならば気が狂うほどの

痛みが走る……なんて解釈したらどうだろう」

「ええ私も先ほどから考えていましたが、そう考えるべきでしょうね。

でも、果たしてそんなことが出来るのでしょうか？」

「わしもかなり剣の修行をしてきたつもりだが、千葉周作先生にもそんな剣法知っておられたかどうか……」

「わたしも江戸でいろんな道場に入っていましたよ
そんな剣は聞いた事ありませんでしたよ」

「よし、試してみよう」

と、いって痛みのためか蒼白になってブルブル震えている男達に向か
って

「おい！・・・おめえ達の親玉は今どこにいる！」

「し・・・しらねえ・・・おれ達は知らねえ」

と言ったとたん

『ギ・・・ギヤア~~~~！』

と一寸ほど飛び上がり、膝をガツクリと折り曲げて

後ろ手に縛られているものだからそのまま顔が土間にぶつかり、
尻があがったままの姿勢で気絶している。

下帯がないまま着物がまくれているので、全くの生まれのままの姿・
・

だが大の大人のしかもいい年をした男・・・見るに耐えない。

源太郎は男の尻をけり、『ドーン』と横たえてしまった。

その時、

「旦那！旦那あ~~~~」

と飛び込んできた政吉、

作務衣姿の若い男をひっぱてきている。

「旦那、こちらは相良先生と申しやす。

まだお若えがてえした腕のお医者様で・・・へい・・・」

「お手前が相良さんか、いやあ評判はよく聞いていますよ」

「いやあ」

と照れくさそうに下をむく。

「拙者は・・・」

といいかけた時、

「篠原源太郎さんですね」

「ええ！」

「よく、政吉親分からお噂は聞いております」

「先生！親分はよしてくだせえ」

と作務衣のそでをひっぱる。

その様子がおかしいと笑いあう相良と源太郎。

「篠原さん、こちらは？」

と源太郎の後ろに控えていた沖田をげげんな目でみる相良。

それはそうだろう見れば新撰組と一目でわかるが、この番屋と新撰組が結びつかない。

「わたしは新撰組の沖田総司です。先生のことは隊員達から聞いております」

「こちらこそ。沖田さんのお噂は緒方さん達からよく聞いておりますよ」

「いやだなあ、また碌でもない噂でしょう」

と明るく笑うこの青年、おやつと思うほどすれてはいない。

剣鬼といわれるのがこんな青年だったなんて。全く人の噂ほどあてにはならない。

「ところで何かわたしに用なのでしょうか？」

「ああ、先生。ちよつとこれを見てほしいんですが」

と気絶をしている男に被せてあった着物を十手でまくってみせる。

「あつ！・・・これは・・・」

と屈みこんで体を念入りに調べ始めた。

男達3人が見つめる中、やっと立ち上がった相良新之助。

「こんなこと・・・誰が?・・・」

「相良さん、これを読んでそこで見ていてくれ」と言つて鞍馬天狗のあの書状を渡してから

首を斜め上にあげつま先立つて体の内から湧きあがってくる痛みを何とか我慢しているが2人の男に

「おい!おめえら!どうしてこの2人が伸びてしまったか判るか?」

首を振る2人に

「おめえ達はな、鞍馬天狗という奴に不思議な術をかけられたのさ。

嘘をいうと・・・この男達のように耐えようもねえ痛みで気絶をする。

もしかすると心の臓も止まっちゃうかもしれない。つまりだ嘘は絶対つけねえ・・・ということだ。

どうだ!試してみねえか」

男達は勢いよく首をふる。

「はははは・・・違う違う。正直に答えてみることを・・・だ。

どうだ・・・おれのいうことに正直に答えてみるか」

男達は視線を源太郎に向けて小刻みに何度頷いている。

「沖田さん、相良先生!あんだ達が証人だ。

座敷にでも座つてじっくり聞いていてくれないか」

二人は黙つて座敷にあがった。

その様子を横目に

「まずは、おめえ」

と背の高いほうの男に十手をむける。

「生国は?」

「ひ・・・常陸のく・・・国・・・」

「武家の出か？」

「い・い・い・え、お・おらは・おらの家は・村の庄屋・
・おらは

次男坊・で、へ・へい」

「ふくん、庄屋の次男坊か。どうせ、村の娘達にいたずらしたり、
喧嘩ざたがやまねえんで、村を追い出された口だろう」

「へい・よくわかりで」

「昔からの常套なんだよ。おめえ達のような悪党のほとんどが
農家や商家の次男坊以下のろくでもなしさ。

さむれえは幼ねえときから腹を切ることを教えられるんだ。

だから余程のことがねえ限り刀は抜かねえ、あぶねえところには近
づかねえ。

何故かと言うと、死ぬときの大事さ、命をかけるのはどういつとき
かを知っているからだ。

マア、100人が100人ともなんてことは言わねえがサ
と云ってから

「おい！おめえ名はなんという？・・・」

「き・きど・鬼堂一郎太」

と言ったとたん

『ギエ〜！』と悲鳴を上げた。

「馬鹿野郎！・・・そんなふざけた名前を聞いたんじゃねえ。

ほらみる、せつかく痛みが少し引いて体の硬さが取れていたのによ
う。

元の木阿弥じゃねえか。・・・よく聞いているよ。

これからのおめえ達は死ぬまで嘘はつけねえ、悪さもできねえんだ。

たった一つの嘘でその痛さ・・・よく覚えておくんだな」

と言って

「政吉！奉行所からは？」

「へい！丑を走らせやしたんで、おっつけもう……」

「おやぶくん……おやぶくん……」

「あの野郎！あんなでつけえ声で……」

「ははは……いいじゃねえか。丑の奴、一生懸命なんだ。少々、融通は利けねえけどさ」

息を切らしながら駆け込んできた丑松。

「あつ旦那。ただ今小山様が……」

「何！郁太郎がきたのか」

「篠原さん！」

と入ってきた同心姿の若者、江島郁太郎。源太郎が京都に帰ってきてから

何かと世話になった江島兵衛が体を悪くし、

せがれ郁太郎に跡をゆずったので新米の郁太郎の面倒を見ている源太郎。

「郁太郎！お前1人か？」

「いえ、後から後藤さんと安岡さんが捕り手を連れて」

「そうかそうか……郁太郎、俺は今日は奉行所には帰らねえから」

と言ってから今までの経過を話す。

「えっ？……そんなこと……そんなことができますか？」

「ああ、できるんだなあ。それが」

とまだ話をしていないもう1人の背の低い男に声をかける。

「おい！そっちの男！」

「へ……へい……」

さっきの背の高い男が踵を落とした普通の姿勢をしているのにこの男、まだ爪先立って顎をあげて蒼白な顔をしているのだ。

「おめえ、一度嘘を言ってみねえか」

男は激しく首を横に振った。

「だ……だんな！もう勘弁してください。こうなったら何でも正直に

お話いたしやす。こいつらみたいな目にあつのは、まっぴらでやんす」

「生国は？」

「へい、江戸で……」

「なんだ、江戸っ子かえ。江戸のどこだ」

「浅草なんで」

「どうして流れてきたんだ？」

「へい、お決まりのお家騒動で……あつしは浅草でも大きな海苔屋の跡取でやした。

ところがおやじが急死した後、継母が店の実権を握ってあつしを追い出そうとしたんで、

継母を半殺しの目に合わせて江戸を売ってきやした」

「名はなんと申す」

「平吉で」

「平吉！その継母も悪いがお前も悪いや。そんな継母だと店で働く奴等の心は離れているさ。

なぜ、おめえはじつと我慢していなかったんだ。

だから、おめえが一番悪い。気の毒は店で働くやつらさ。

その後の店のことはおめえは知るまい。だが予想はつくだろうさ」
「へい……」

落ち込む平吉。だがその体から踏ん張っていた力が抜けていた。

「篠原さん！」

「この男の言っている話は本当のことだ」

「はい」

「わかるのか」

「なんとなくです。この男の言葉が内から体の硬さを溶かしていく。そんな感じを受け取りました」

「ほう、そこまで判るようになったか・・・成長したな、おい！」

「いえ、まだまだです。これから篠原さんのご指導願うばかりで・・・

あつ・・・どうやら、どうやら後藤さん達がきたようですね」

「おい、俺は消えるぜ」

「えっ？」

「安岡さんに、今日はどこにいた等、ごちゃごちゃ言われちゃたまんねえからな。

あとは郁太郎と政吉にまかす。

こいつらの親玉の居場所を聞き出してとっつかまえる」

源太郎は立ち上がって、郁太郎と政吉の返事を聞くまでもなく

「ご両所、すまねえ。場所を変えてくれねえか。ちと、うるさがたがくるんでね」

と隣りの仮牢がある部屋へ素早く二人を案内する。

この部屋から裏の路地に出られるのだ。

「いいですか？小沙希ちゃん。あんまり無茶は駄目どすえ。

あんた見てるともうはらはらしどおしなんどす！」

小沙希を見守る置屋の人達、時代は変われど心配する気持ちは変わらない。

「お母ちゃん、ごめん。時間がないんでうち、あせってた。でも、鈴音ちゃんにあんな畏をかけるなんて許せなかった・・・」
小沙希のきらきらと光る目、きりつとひきしまったその表情、怒りを浮かべるその姿はホウつとため息が出るほど美しい。
祇園が出来て以来、容姿も芸もそして強さも一番の舞妓ちゃんといつても過言ではない。
・・・そして、もうひとつ・・・これほど皆をはらはらと心配させることも・・・。

『ガラガラ』と木戸が開いて
「お母ちゃん!・・・」
と飛び込んできたのは花世だ。

昨日、男に騙され連れ出された鈴音のことを思んばかつて菊野が一番仲のいい花世に少し離れた置屋の様子を見に行かせたのだ。

座敷で菊野と幾松、そして小沙希が座っている間に割り込んだ花世、何か紙を持っている。

「またあ、あんたは・・・いつまでうちに小言ばかり言わせるんですか。」

もういいかげんにせな・・・
と叱るが、そんなこと耳の右から左へすり抜けている花世。

「お母ちゃん!そんなことよりこれ見て!」

と3人の目の前にポンと置いたのが手に持っていた紙だ。

「なんや・・・かわら版やおへんか」

「お母ちゃん!・・・よう読んでみて!」

「なにになに・・・鞍馬天狗とは何者?・・・ええ、鞍馬天狗?」

と小沙希の顔を見る菊野と幾松。

昨日、鈴音を助けたことを聞いていただけで鞍馬天狗のことは何も聞いていなかったのだ。

再びかわら版に目を通す菊野と幾松。

「ええ〜？鞍馬天狗に倒された子分達が白状して、奉行所の役人が鬼面組の隠れ家を急襲・・・」

そこには何と頭領である鬼堂行雲斎と部下の四天王、そして手下達十八名が気絶していたんどすって」

啞然とした顔で小沙希を見つめる菊野と幾松。

顔を赤くして俯く小沙希。こんな様子の3人、感の鋭い花世が気づかぬはずはない。

はっとして小沙希を見つめた花世がいきなり

「小沙希さん姉さん！・・・この鞍馬天狗って、小沙希さん姉さんどすな。」

・・・又、危ないことやっただんどすか！」

「ごめんえ、花世ちゃん。・・・でもうちにはもう時間がないんどす」

「時間がない？それどういうことどすか？」

「花世！小沙希ちゃんはな、この時代には3日間しかおられへんや」

「3日間しか？・・・そんなの聞いてない。・・・うち、いやや！・・・」

と泣きそうな花世。

「ごめん、でも花世ちゃん。うち、帰ったらうちの時代の花世ちゃん、

大事にするからそれでかんべんえ」

「それは・・・どういう・・・」

ととまどう花世。

「お母ちゃん、花世ちゃん。それに幾松さん姉さん。因縁ってあるんどすなあ。」

昨日、うちの時代の『菊野屋』のお母ちゃんは

お母ちゃんの孫か曾孫이었습니다けど、花世ちゃんも同じです。

うちの時代の花世ちゃんは花世ちゃんの曾孫か玄孫なんです。

顔つきも声もそっくり。・・・それに性格も・・・ふふふ。

うち、お母ちゃんには心配かけどおしやし、花世ちゃんに怒られてばかり」

そんな因縁を話されて何だか嬉しい。

すると幾松が

「小沙希ちゃん、うちはどうなんどすか？」

と聞く。

「幾松さん姉さんは、早瀬一族って知ってはいりますか？」

「えっ？小沙希ちゃん。どうしてそれを？」

「やはり、幾松さん姉さんは早瀬の血を引くんどすなあ」

「ええ、でもそれはずーっと前からうちの家系の秘密だったんどすえ」

「幾松さん姉さん。早瀬の血を引くおなごは全国に広がっているんどす。」

平安期に帝の娘である早瀬の沙希姫様、

その方が安倍晴明様に戦いのない世を作るために呪術をかけられ、おなごしか産めぬ身体にされたんどす。

それから脈々と続くこの一族、世の中の争いを無くす様

この国中、我早瀬一族は広まっているんどす」

「我早瀬一族って？・・・まさか小沙希ちゃんは？」

「へえ、うち早瀬の沙希姫様の生まれ変わりなんどす」

「小沙希ちゃんが御始祖様の生まれ変わり？」

呆然と見つめる幾松。

「でも、うちはうちどす」

とニツと笑う小沙希。でも顔を曇らしている花世には

「花世ちゃん、かんにんえ。」

うちどうしても明日中に土佐の坂本竜馬様に逢わなければならないの。

だからこの祇園には悪いけど少し騒がせてもらっているんどす」

「小沙希さん姉さん、鈴音ちゃんには？」

「あの時、暗がりだったし覆面をしていたからうちのこととは判らないと思う。」

けど、こんな身体どすから。いくら声色を使っても男か女かぐらいは

察したんじゃないか、とうちは思うんどす。けど鈴音ちゃんは・
・

「そんなこと一言も言わらんかった。うちとは友達やのに・
・

」

「そやから鈴音ちゃんは凄く信用できる娘どす・
・花世ちゃん、大事にせなあかんえ」

そんな時、木戸が『ガラガラ』と開いて

「ごめん！」

という声がした。

小沙希達が振り返ると同時に

「まあまあ、これは篠原様。こんな朝早うにご苦労さんどす」
と言いながら立ち上がって、迎えにでる菊野。

「さあさ、あがっておくれやす」

「いやあ、そうもいかぬ。小沙希殿、昨夜の約束じゃ。

さっそく同道してもらって、気功というものを見せてもらいたい」と
と菊野の後ろから姿を見せた小沙希にいう。

「わかりました。でもどこで？」

「奉行所内の道場というわけにもいかぬ。

だから近くに道場を開いている知人に頼んだのさ。

そやつもえらく興味をもってな、うずうずして待っているんだ」

「ふふふ・・・、男の方っていうのは・・・まるで子供みたいどす
なあ。ではいきましょか」

と土間に降りかけた小沙希に

「おいおい、小沙希殿。その格好で行くのか？」

「いけませぬか？」

と自分の格好を見直す。今は舞妓姿ではなくいかにも町娘という普
段着姿なのだ。

「いかにもその格好ではなあ・・・」

と渋る源太郎に何やら考えこんでいた小沙希が

「では・・・これでは？」

と呪を唱えるとその姿は・・・前髪も凜々しい若侍に変わった。

「おお・・・」

と驚く源太郎、昨夜小沙希の秘術を見ていたのだが、こうして再び
目の前で

見せ付けられるとつい声が出てしまう。

「まあ・・・素敵どす！小沙希ちゃんの男姿・・・」

と幾松の声にドドドドと階段から降りてくる女達の足音。

「うちらにも見せておくれやす」

と小沙希の回りに集まった芸妓や舞妓達、

「素敵！……」

「小沙希ちゃん、よう似合てはる」

まるで黒目にハートマークが入ったように小沙希の姿を見つめているのだ。

「拙者は小沙希という名ではござらぬ。江戸から修行の旅にまいった早瀬沙希太郎と

申すもの。よしなに……」

といったその姿はまるでひいきの歌舞伎役者のよう。

思わず手を叩いてしまう女達。小沙希も照れてしまって

「源太郎殿、では急ぎまいりましょうか」

と土間に下りてしまう。

「待つて！うちも行きます」

と幾松が声をかけ、土間に下りる。

「うちらも」

と女達も下駄に足を通した。

「困ったなあ……」

といかにも女達に手を焼く源太郎。

「何も篠原様が困る事おへん。うちらが勝手に付いて行くだけのことやさかい」

「道場には入れないからな」

「へえ、そんなこと判っています。うちら表の覗き窓から見物させて貰います」

通りに出た源太郎、隣りを歩く小沙希の姿につい足を止めて魅入ってしまう

通行人には仕方がないが、後ろを『きゃっきゃっ』と付いて来る女

達には参ってしまった。

これは奉行所の同心の姿ではない、こんなこと口煩い上司の耳に入れば

どんな小言、お叱りが待っているのか・・・思うとぞっとするが元来は物にこだわらない性格、小沙希と話ながら歩く中にすっかり忘れてしまった。

「ここだ」

と門をくぐる源太郎、女達は心得たものでスツと道場の覗き窓の方に行ってしまう。

「ごめん！」

と玄関から声をかける源太郎、すると奥から稽古着を着た若者が出てきて

「あつ、篠原さん。先生がお待ちです。どうぞお上がりください」と道場のほうに案内する。

小さな道場ながら小気味のいい稽古の音が聞こえてきた。

「失礼します」

「おお、篠原さん。待っていた」

気軽に道場内に入って行く源太郎。

しかし、小沙希・・・いや沙希太郎はその場で膝をつき頭を下げてから

立ち上がって道場に入って行った。

それが礼だからだ。舞のお稽古場でもそうする。剣道場でも同じだ。

「ふむ、・・・」

口には出さないが感心したように沙希太郎に注目する当道場の主、結城弦四郎。

今は男姿だが舞妓だと聞いている。

それがどうだ、立ち居振舞いの際のなさ……一流の剣士と云つてもいい。

俄然興味が湧く。源太郎から聞いた気功というものの、話半分に聞いていたがこれは真剣にならざるを得ない。

横にいる娘の和葉、源太郎から話を聞いていた時和葉もいて

「そんな、らちもない……」

と笑いとばしていたものだが、さすがは当道場の師範代だ。

沙希太郎の実力を読取つたらしいが、わが娘ながらまだ甘い。

横目でその表情を見ていたが、自分と同じかそれとも一段下かと読んだらしいが

それは違うぞ！父が立ち会つて勝てるかどうか……いや勝てまい。

千葉道場で修業をした篠原殿でも勝てないだろう。

この若さで何と言う強さ……天分……そう天分といつても差し支えない。

「それまで！」

という道場主の声に元気に竹刀を振っていた弟子達が全員壁際に座る。

「今日、ここにおられるお二人が来たのは……いやここにおられるお若い方」

と弦四郎が言った時、沙希太郎が立ち上がった

「早瀬沙希太郎と申します。よろしく」

と言つて名をなめる。いかにも男の名前を名乗ってはいるが一目で女性と判るのがなんだかおかしい。

「みんなもよく知っている篠原殿よりお聞きした早瀬殿の秘術、

気功とかいうものを知りたいと欲し、わざわざ来て貰ったのじゃ」

「まあ、みんな！そんなしゃっちこばらずにゆるりと見ていたらいい

「い」と秘術と聞いて固くなっていた体はその言葉で一度に力が抜けていく弟子達。

師範代の和葉も興味があるのだが、こんな若造何者ぞという気概が見え見えで

別に争うわけでもないのに・・・と可笑しくなってくる沙希太郎。

源太郎に目で合図をされた沙希太郎。立ち上がり道場中央に立つ。

「まずは言っておきます。この気功はお隣りの大陸中国のものであり

先ほど先生が秘術と言われましたがこれは秘術ではありません。

気功の気とは人それぞれが体内に持つ気のことであり、誰もが使えるのです。例えば、ホラ」

と身体の前で両手の平を上下に間隔をあけると、その中央に青白い玉がポウッと浮かび出た。

「おう！」

という声があがる。

「これは、人の気が光の玉として具象化したものです。

でもこんな小さな気の塊でも使い方を誤ると・・・」

と指先の乗せて弾くと『バン！』と分厚い道場の板壁に小さな穴を空けてしまった。

「こ・・・これは・・・」

分厚い板に真ん丸く開いた穴、いかにその威力が凄いものなのかもう言葉が出てこない。

「これは・・・これは気功を間違っつて使ったものです。

もし皆さんが例え気の玉を出せたとしてもこんなこと出来ませんか

ら
と注意をする。

「今日、みなさんに知ってもらいたかったのは無刀で相手を倒す方法です。

勿論、柔術もありますが気功では相手の気を利用して倒しますので相手の身体には一切触れません。

では一度やってみましょうか。誰かお相手をお願いします」

よし、っと立ち上がったのは身体が相撲取りのように大きな佐田彦一、

しかも、師範代の和葉も梃子摺る強さだし、性格も荒く皆から嫌われている。

その彦一が最初に立つのを見て

「お父様！」

と声をあげたのは和葉だ。

でも

「待ちなさい」

と和葉を押し留めたのは篠原源太郎。

「これは面白い！」

「でも……」

「和葉さん、心配しなさんな。沙希太郎が負けることはないよ。俺が見たいのはあんなでかい体をどのように始末するかなんだ」

「あの人、そんなに強いんですか？」

「ほう、和葉殿はあの沙希太郎の見栄えに惑わされているのか？」

そんな言葉に少し膨れる和葉。

「そんなことで膨れるようでは剣の修行をこれ以上する必要はないぜ。和葉殿」

黙ってしまったというより、口惜しさから声もでない。

「言っておくがああ、沙希太郎、俺や弦四郎が束になってかかっても相手にはならないくらい強い。」

ひよっとしたら俺の師匠の千葉周作先生よりもな」

「えっ？そんなに？・・・父上！本当ですか？」

「ああ、本当だ。わしの目にはあの小さな体が最初から大きな岩に見えていた。」

だが今では途方もなく高い岩壁に見える。隙があるようで全ての動きに隙がない。

篠原殿のいわれることに間違いはない。

わしは今日の出会い、今まで生きてきた甲斐があった。本当に嬉しい。篠原殿、感謝する」

「よせやい、・・・さあ、勝負がはじまったようだぜ。」

お互いじっくりと見定めようじゃないか」

彦一は沙希太郎を捕まえようとドタドタと道場の中を走り回っていた。

沙希太郎はヒョイヒョイと紙一重の差でかわしている。

真赤な顔で汗をかき肩で息をしている彦一と汗ひとつかかなく呼吸ひとつ

乱れない沙希太郎、その実力の差は厳然とある。

そのことが判らない彦一は

「ええい！ちよこまかと・・・」

「ふふふ、あなたの気の流れ案外軽いものですな。ではいきますよ」

と言う声に突っ込む彦一。

誰かの

「ああ……」

という声。

『ドーン』と軽々と宙を飛んで板壁にぶつかった彦一、そのまま『ズーン』と床に落ちて動かない。気絶したようだ。

「あっ、ごめんなさい。佐田さんの気があまりに硬すぎたので反発が強かったようです」

と倒れている佐田の後ろエリを掴むと30貫（112.5kg）もある体を

片手でひよいと持ち上げると体を板壁にもたれさせて座らせた。

啞然と見守る道場の内外の人達、いつのまにか覗き窓の外には菊野屋の女達以外の野次馬も増えているようだ。

「父上！わたし見ました。沙希太郎様の手は佐田さんの体に触れていません。」

ただ佐田さんの額のところを狙って指で弾いただけです。……
「凄い！」

「和葉よ。よく見た。わしにもそう見えた」

「弦四郎よ、気功というものあれだけ人の体を吹き飛ばせるものか。恐ろしいものよ」

そんな言葉が聞こえたのかどうか

「今のは気功の奥義です。でもこれからおこなうのは皆さんが修練をつめばできるものばかりです。

よく見ていてください」

それからの沙希太郎が若い弟子達におこなう稽古はこれまた目を見張るものばかり。

沙希太郎の手の動きに弟子達はコロコロ転げ回るばかり、手を退けば体が突っ込み、押せば体が面白いように後ろに転がっていく。まるであやつり人形のようなだ。野次馬達も佐田のことがなかったら何を芝居しているとあざ笑っただろうが、あの強烈な出来事があっただけに沙希太郎が不気味に見えた。

「よし、それまで！」

と弦四郎の声がかかり、そのまま座った沙希太郎。あれほど激しい動きだったのに汗もかいていないし、呼吸も乱れていない。

それにひきかえ弟子たちは滝のように汗を流し、激しい呼吸で息も絶え絶えだ。

「つらいですか？」

そう聞く沙希太郎に首を振ったりして言葉が出ないもののやはり今まで

剣の修行をしてきた者達だ。板壁に体をもたれかせながらも懸命に座ろうとする。

「では、わたし言う通りにしてください。

まずは座禅を組んで……そう、両手の平を上下に向かい合わせで……

どちらの手が上になってもかまいません。

そして、丸いものを持ってるように手の平を丸めます。

それから、自分の気を両手の中に入れるようにします。

そのままじっくりと目を閉じて構えていてください。

決して体に力をいれてはいけません」

時間がゆっくりと過ぎていく。

「手の中が温かくなつた方、目を開けてください。青白い玉が具象化しています。」

具象化していても見えない方はもう少しです」

さすがに修行をしていた者達全てが目を開けている。

半数以上が気を具象化していた。

「自分の気が見えた方、相手の気が見えるようになるまでもう少しです。」

体の気の流れは千差万別です。どこか体の悪い方はその部分の気が弱くなっています。

だから中国では医術に気功が使われているのです。

相手の弱くなつたところに手を当て気を流します・・・これが医術でいう手当てです。

全てがこれで治るわけではありませんが、でも中国4000年から生まれたものです。

馬鹿には出来ません」

と言ってから両手を前に出すと、その手の平に現われる横笛。

その不思議な術に驚きの声・・・でも沙希太郎は何も言わずすーっと口にあてる。

何と言う・・・何と言う・・・笛の調べなのか

この音色に誘われて窓から流れ込む清廉な風は、心の屈託を消し去り尚且つ肉体の疲労をも消し去っていく。

そして雑霊をも消し去って行くので道場に溜まった澱のようなものが

きれいさっぱりなくなつたので、やけに道場内が明るく見える。

和葉は幼いころから父の姿をみて育つたので剣の道に進んだのは当然といえば当然であった。

師範代という地位を父に与えられた時も当たり前前のことで喜びもなかった。

父の跡をついで道場主になる。これが和葉自身、自ら選んだ道であった。

だが、今それがガタガタと崩れていく。

早瀬沙希太郎と名乗る娘、和葉よりもはるかに年が若い、なのに何と言う強さ、俄然興味が湧き……いや、興味がは湧くだけならいい

何なのかこの気持ちは？……いてもたってもいられない。

生まれて初めてだった。まるで心の中が嵐の海のように……大波が打ち寄せひていく。

これが恋なのか？だが相手は同じ女性なのだ。

でも、この気持ちは止めようがない。ああ……どうしたら……？

でもそんな和葉の心の内をひと目で見抜いた女がいた。

覗き窓の外から見物を決め込んでいた幾松だ。

小沙希の強さは判っていた。だから何かないかと道場内を見渡して眼に止まったのが

当道場の娘であり師範代でもある和葉だった。

遠くから見たことがある祇園でも有名な剣術小町、男を軽々と打ち負かす女丈夫と知られているのだ。だから注目していた。和葉よりはるかに強い小沙希の存在が

和葉にどんな変化をもたらすのか……と。

最初は幾松の思い通りに和葉は肩を怒らせ、小沙希何するものぞという

気概を見せていた。だが事は複雑になっていく。

変わっていったのは小沙希が相手にふれもせずあの佐田という巨漢をぶん投げてからだ。

さすがの幾松も『あつ』と思わず声をあげそうになったのが和葉の心に芽生えた恋の種、それが瞬時に花をさかせてしまった。恋の手管も知らぬおぼこに訪れた赤い嵐……幾松にはその心の内が手に取るように読取れた。

さすがは花街で揉まれて生きてきた名物芸妓、すいも甘いも噛み締めめて

恋の手練を教えずにはいられようか。……そう女長兵衛を決め込む幾松。

幾松にとって小沙希は強敵だが和葉は赤子の手を捻るようなもの。それに小沙希は強敵といつても情には弱い。そう見抜いている幾松。この勝負、先は見えているのだ。

ふと、こちらを向いた和葉に眼で合図を送る。

『はっ』として顔色が赤くなったり、青くなったり……でも立ち上がって道場を出る和葉。

不信そうな父の弦四郎が眼で和葉を追っていたが、素知らぬ顔で覗き窓を離れた幾松、足を道場裏に運んだ。

井戸に手を置き座り込んだ和葉の後ろからそつと近づく幾松、さすがは女ながらの剣士だ。幾松の近づく足音に、硬くなった身体がビクツと

反応する。でもよく見ると可哀相なくらい小刻みに震えているのだ。

幾松は後ろから和葉を抱えるように立たせると、

「大丈夫どすか？」

と下から覗き込むように見ると歯が『カチカチ』と小刻みに鳴っている。

(これはいけまへん！失神寸前どっせ)

こんなところで倒れたら大騒ぎになるのは必定、

「ねえ、お嬢様。あなたのお部屋で女同士でお話しまへん？」

和葉から言葉が出ないが、かろうじて小さく頷いているのが判る。

「さあ、ゆっくり歩いて！」

少しきつく言うと身体がガクガクゆれながらも1歩づつ歩き始めた。

こんな時は相手の心理状態に入り込んだら駄目なのだ。

少しきつく突き放すようにすれば身体も動く。

幸い誰にも見咎められずに和葉の部屋に入ることができた。

幾松が手を放すと崩れるように倒れこむ和葉。

恋の道にかけては地獄をみてきた幾松にとってはこのお嬢さんまるでねんねだが

この恋の先に待っている運命を思つと命をかけて手伝つてやらなければ

幾松という祇園芸妓として女がすたるといふものだ。

命がけの恋……

たとえ達成出来たとしても一夜限りの契りしか結べないのだ。
胸が張り裂けそうな恋の行く末だ。

相手は幾松からみてもこの世で最高の相手だ。こんな相手過去にも
現在も

たとえ未来でもたった一人しかいないだろう。

だからだ……だから、今宵一夜にかけてみる。

「さあ、あなた達！おきばりやす」

という菊野に送られてお座敷に向かう芸妓や舞妓達。

自然と幾松と並んで歩く小沙希。

昼間の道場のことを思うとガラリと変わった小沙希の舞妓姿、ホレホレとする艶やかさだ。

置屋の誰もが認める舞妓としての小沙希の実力。

少し屈託のある幾松だが目を奪われずにはいられない。

「あつ！真田屋の千代松！」

と芸妓の1人が声をあげた。

小路から出てきて小沙希達に並びかける芸妓と舞妓達。

どちらもつくとそっぽを向く芸妓や舞妓達。

祇園でも有名なライバル置屋で芸妓や舞妓達も何かとはりあっているのだ。

でも1人1人になれば仲が良い。そんな様子が小沙希には手を取るように判る。

だから『クスっ』とつい笑ってしまった。

それを見咎めたのが真田屋の芸妓

「ちよつと、あんた。何が可笑しいんですか」

「いいえ、ただ・・・」

その声で

「小沙希ちゃん、どうしたんえ」

と小沙希に問い掛ける幾松。

「なんやのこの子」

と幾松の横についた千代松。

「へえ、昨日から菊野屋にお世話になっている小沙希います。どうぞよろしゅう」

「なんや、昨日入った子がもうお座敷ですか？菊野屋はんも血迷ったもの

・・・ほほほほ」

と笑う千代松に合わせて笑い出す真田屋の芸妓と舞妓。

そんな彼女達に菊野屋のみんな、何も知らなくて笑っている様子に袂で顔を隠して肩を震わせている。

泣いている？・・・いや、『クククク・・・』と笑っているのだ。

そんな様子に一度に笑いが覚めたのか

「何がおかしいんです!」

と千代松の声が尖っていた。

「なあんも知らんあんた達が、おかしゆうて・・・なあ、みんな」

「へえ・・・」

「ちよつと、幾松姉ちゃん。何もそこまで・・・」

「小沙希ちゃん!みんなに心配かけどおしのおんたには、止める資格あらしまへん。」

ちよつと黙っていなはれ!」

と幾松の厳しい声に、首をすくめて

「へえ・・・」

とかしこまつてしまった小沙希。

そんな様子が可笑しいとこれまた笑いがとまらない。

菊野屋の芸妓や舞妓達の様子が少し薄つきみ悪くなったのだろう、

黙ってしまったのには、これまた可笑的い。

そんな時

「あつ!花世ちゃん!鈴音ちゃんえ」

といつて先の小路から出てきてトボトボと歩く鈴音の姿を認めてすつと輪から抜け出した小沙希。

肝心の小沙希の姿がなくなつたので、

自然と並んで歩く形になつた菊野屋と真田屋の芸妓や舞妓達。

前を歩く3人の舞妓の後を追う。

「なあ、幾松。あの小沙希という舞妓どんな子なんや。うち正直にいうけどあんきれいな舞妓今までみたことおへん」

「そうどすやる。でもそれだけやおへん。舞を舞つても井上のお師匠はんが直すとこあらへんかった。なあみんな」

「へえ、あの恐い高弟はん達もあんな舞みたことおへん。まるで天上の舞を見てみたいや、いわはってました」

「えっ？あの厳しいお師匠様達が？」

「へえ、うちらはもう、身動き一つ、息も出来んかった」

「そんな子なんどすか？」

啞然とする千代松。

「それだけやおへん。横笛が・・・」

「横笛いうたら、幾松。名人のあんたが・・・」

「ううん・・・うちなんか足元にも及びまへん」

「えっ？」

「あの子の笛聞いたら、清い風が身体の中を通り抜けて、こん中に」

とポンと胸を叩く。

「こん中に溜まっている嫌なもんが消えてしまっんどす」

「そんなあ・・・そんな子なの？」

と後ろを歩く菊野屋の芸妓、舞妓達をふりかえると皆が頷いている。

「あつ！・・・あれは何どすか？」

前の3人の舞妓の足が止まり、大勢の男女が叫び声を上げてこちらのほうへ走ってくるのが見えた。

自然と舞妓の姿が走ってきた人々の向こうに消えた。
慌てて小走りにかけてだし、立ち止まっている舞妓の横に並んだ芸妓
や舞妓達。

「小沙希ちゃん！どうしたんえ」

でも返事がない。ただジツと目の前で繰り広げられている様子を見
ているだけだ。

いい着物を着た中年の女性が、紺色の着物に赤い襷の若い女性をか
ばって

ふるい木戸に背中を押し付けている。

そんな二人を囲むように刀をぬいた侍が5人、顔が赤い、かなり酔
っているようだ。

「お侍様！この子が何をしたというんどすか？」

「この女がな、わしらをあなどったのだ。ゆるせん！」

「そんなあ、うちは昼間からたくさんの御酒をめしあがって、
ふらふらされとるさかい、もうおつもりされたらいかがどすか・・・
言うただけどす」

「それが、侍をあなどっていると申すのだ。

女の分際で侍にむかって愚弄したこと許しがたい。叩っ切ってやる
！」

「あつ！あれは玉屋の女将さんどす」

「玉屋？」

「へえ、うちらがこれから行く料理屋はんどす」

その声に素早く小石を拾った小沙希、振りかぶった刀を持つ手めが
けて投げつけた。

そして、持っていた風呂敷包みを花世に預けながら

「花世ちゃん、かんにんえ。怒らんといてね」といって侍達にむかつて歩き出した。

「あつ、小沙希さん姉さん！」と叫ぶ花世。

「幾松！なんで止めへんのどすか」

「止めて止まる娘だったら苦労しまへん」

「苦労しまへんって・・・よく落ち着いていますなあ」

「舞妓ちゃん！危ないどすから早うお逃げなはれ！」

自分に差し迫った危険があるのにかかわらず、そんな声をあげる玉屋の女将、

さすがは花街に生きてきた女だ。

「お母ちゃん！心配いりまへん。こんな野良犬、うちが追っ払ってあげます」

と平気な顔で言い放った。あきれる女将。

「何だと！・・・女。拙者達を野良犬だと申すのか！」

「へえ、まともな人間ならこんな真昼間から、しかも大勢の目の前で、そんなぶっそうなもん、

抜いたりしまへん」

「貴様！・・・言わせておけば・・・ぶった切ってやる」

「おほほほ・・・、人間そうやすやすと切れるもんやおへんえ」

「おのれ・・・」

「貴様！何者だ！」

「何者だつて？みてわかりまへんか？お目目悪いんと違いますか。うちは舞妓どす」

ニコニコそう笑っているのだ。

「くそっ！いわせておけば」
と小沙希を取り囲む侍達。

「さあ、お母ちゃん。早う逃げて！」

その声に躊躇する女将だが小沙希の笑顔に仲居を庇いながら駆け出した。

女将を呼ぶ菊野屋と真田屋の芸妓、舞妓達の方に。

「さあ、ゆつくりとお相手しまひよか」

と余裕の小沙希に

「お・おのれゝ・ゝ・ゝ」

と怒りで完全に己を失っている。

小沙希に向かつて刀がきらめいた。思わず目を閉じる見物人。

でも次に目を開けたときは刀を持つ手を押えている侍達と舞い扇を構える舞妓の姿があった。

その美しさが際立っているだけに思わず拍手をしてしまう見物人達。

そのとき

「小沙希！」

と声がかかってなにやら空を飛んで小沙希のもとに。

小沙希がつかむとそれは馬の鞭だった。

目の端に捕らえた篠原源太郎の姿。

つい『クス』と笑ってしまう。この鞭は源太郎の悪戯なのだ。

そしてあの鞍馬天狗が誰なのかをその目でしっかり確かめるための証拠ともなる。

『ピューピュー』と音をたててしなる鞭、その侮り難い技に

『ギョッ』と思わず後ずさる。そして小沙希の隙のなさに慌てる侍

達、

でもここまできては引き返せないし、意地もある。

「では、まいります」

という小沙希の声・・・そして見た。小沙希の舞を。

なんとというしなやかさ、なんとという美しさ。宙に舞い・・・地に舞う。

幻を見ているようだった。

「あつ・・・小沙希ちゃんが・・・もしかしたら鞍馬・・・」

と言いかける鈴音に

「しいー」

と口を閉じる事を強いる花世。

はっとして花世の顔を見る鈴音。

そして全てを呑みこんでしまう。もう一生口に出すことはないだろう。

鞭を水平に構えて小沙希の舞が終わった。そこに立つのは小沙希だけすべては地に伏していた。

「源太郎様！そこにおられるのはわかってるんですけど」

という小沙希の声にぼんの窪を押えながらニヤニヤ笑って小路の陰から出てきた。

「はい！これを」

と鞭を返すと

「幾松さん姉さん！」

と幾松達を呼ぶ小沙希、先ほどの女丈夫とは思えぬあどけなさ。何だか調子の狂う源太郎だ。

「小沙希ちゃん！あんたって娘はもう・・・」

幾松の怒りとも哀しみとも喜びとも……全てが含まれた声に
「ごめんなさい！」

と、いつて首をすくめて謝るその姿、もう何も言えなくなる。

「小沙希ちゃんいわはるんどすか。あんたはうちの命の恩人どす」

と抱きつかんばかりの女将。花世が小沙希の荷物を渡そうとすると
「これ、小沙希ちゃんのどすか。これうちが持ちます」
と若い仲居。

おまけに小沙希の両隣にはぴったりと花世と鈴音がひっついて離れない。

困ったような顔をする小沙希が

「源太郎様、うちらもうお座敷に行ってもよろしおすか？」

源太郎も心得て

「ああ、だが話を聞きたいから座敷が終わる頃、菊野屋を尋ねても
いいか？」

「へえ、じゃああの男前はんと、どうぞご一緒に」

「何！」

ニツコリ笑う小沙希に

「あつはははは……駄目だ駄目だ！相良さん。すっかりばれてい
るぜ」

と声をあげると小路から作務衣姿の医者、相良新次郎が出てきた。

「まあ、若先生！」

と黄色い声をかけられている。

相良新次郎も花街の女達に人気があるようだ。

だが、小沙希は気づかなかつた。少し離れた小路の陰から一部始終
を見ていた

袴に革靴というホコリにまみれた大男がいたことを。

こうして皆に囲まれながら玉屋についた小沙希。

店先には目をギラギラさせて刃物を握った板前が出ていたが女将が先頭に芸妓と舞妓達を連れて戻ってきたのを目にして、ほっと息をついた。

「まああなた達、心配してくれて、ありがとうさんどす。でも、うちらこの舞妓ちゃんに助けられたんどすえ」

「えっ？こんな舞妓はんが？」

驚く板前達に

「小沙希ちゃん、言うんどす。うち小沙希ちゃんほど強いお人見たことおへんえ」

「お母ちゃん、もう止めといておくれやす。うち、もう恥ずかしゅうて……」

「ほほほ……小沙希ちゃんにも苦手があつたんどすなあ」と笑ってから

「板さん、嵯峨美屋はんは？」

「へえ、おまちどす。でもお侍とのこと知りはって心配されてます」

「じゃあ先にご挨拶を……」

と芸妓や舞妓達を伴なって二階の大広間にむかう。

襖がスーと開いて頭を下げている玉屋の女将、

「今日は遠くから足を運んでいただきまして、ありがとうさんどす」

「おお……女将！無事だったか」

「へえ、ご心配おかけしましたが、どうにかこうにか」

「それは重畳……それは重畳……」

と合図をすると仲居達がお膳を持って入ってくる。
部屋には嵯峨美屋と江戸からの客6人が座っていた。

次々、お酌をして回る女将、最後にお酌をした嵯峨美屋に

「芸妓や舞妓達は？」

「へえ、呼んでいます。今日は菊野屋はんと真田屋はんの芸事合戦
どす」

「ほう、それは面白い趣向や」

『パチパチ』と手を叩く女将の合図で、舞台の襖がすーっと開く。

最初は真田屋の芸妓達の京舞から始まる。

千代松を真中に舞う京舞はさすがに手馴れたものだ。

舞妓達の舞はまだぎこちない。それが新鮮といえばそうなのだが・
・

真田屋の芸妓や舞妓は舞台を下りてそれぞれ客の横に座った。

お酌をしながら・・・されながら、菊野屋の出番を待つ。

菊野屋も芸妓3人の舞、幾松を真中の京舞、真田屋とは甲乙つけが
たい舞であった。

しかし、それからが夢の中・・・一体何があつたのか・・・呆然
とする客、真田屋の芸妓と舞妓達、

そして女将やちようど御酒を持ってきた仲居達。

菊野屋の芸妓達が鳴り物をしていたのはわかつている。

だが、小沙希、花世、豆花、千鶴、鈴音の5人の舞、

一体どうしてしまったのか、小沙希を別にして

花世、豆花、千鶴、鈴音の舞の実力は判っていた。

でもその4人までが舞いの神に取り付かれたのか、手のとどかぬ高
みで舞っていたのだ。

これは・・・聞いていた小沙希の実力・・・
たった一人の舞妓が素人同然の舞妓4人の舞を名人の域に引き上げ
たというのか。

その証拠に舞い終わった舞妓4人が胸を押えながら座り込んで、
まるで小沙希を崇めたてるように見ているのだ。
信じられぬ思い、・・・で千代松は声をあげた。

「小沙希ちゃん、ごめんやけど、あなたの・・・あなた1人の舞を
見とうおす。

出きれば鳴り物もない、素の舞を・・・これは、舞の修行をする
うちの我儘かもしれまへん。

でもどうしてもあなたの舞が見てみたい。欲？・・・そううちの
舞に対する欲どす」

「いいえ、千代松だけと違います。うちも見てみたい。

お侍5人相手にあんな強かった小沙希ちゃんどすが、
あの勝負のとき小沙希ちゃんはまるで舞いを舞っているようどした。

舞を見てみたい。一度は舞を目指したうちの欲どす」
と今度は女将。

「小沙希ちゃん！うちもそうえ。

昨日、井上のお師匠のところまで小沙希ちゃんの舞見せてもらいまし
た。

でも、もっと見ていたい。これもうちの欲どす。

きつとお師匠様や祥子様、高弟の皆さんも同じどす。

一日中、あなたの舞を見ていたい。この目に焼き付けておきたいん
どす。・・・なあ、みんな」

と幾松に続いて花世が

「うち達、小沙希さん姉さんと舞ってみてよう判ったんどす。

うちらは素人で小沙希さん姉さんは本当の名人や・・・て。

だって、うち等4人の舞をたつた一人であんなとこに引き上げるなんて

ただごとやおへん。小沙希さん姉さんはきつと舞いの神様なんです」

「ちよつと、ちよつと。……わてにも言わせておくれ。

芸妓同士の舞は甲乙つけが勝負でした。悪いが真田屋の舞妓達の舞は論外、

でも菊野屋の舞妓のはもう別物だす。わては舞など習ったこともないし

細々したことはわからん。でもわてには自慢することがある。

見るちゆうことにかけては専門家なんだす。

ここにいる江戸からみえられた方々も同じだす」

「そうじゃ」

「言われるとおりじゃ」

「小沙希、言われましたなあ、あなたは、わてから見てもただものやおへん。

そんなあなたに今日逢えたのはわての幸運だす。

ぜひわて等にもあなたの舞をみせておくれやす」

「わかりました。京舞ではないんですけど、それでもよろしおすか」

皆が頷くのを見て

「では。少しだけときを……」

といて舞台裏に姿を消した。

舞台上にいたもの全て舞台から降り、後ろの廊下は仲居や他の客達で鈴なりになっていた。

「女将！後ろの人達、中に入ってもらいなはれ」

「いいんですか？」

「構わん」

ということでのこの部屋ぎっしりと仲居や客で埋まってしまった。

こんな時の客は『ワイワイ、がやがや』と煩いものだが

『シーン』と静まり返っている。今か今かと息を呑んで待っているのだ。

その期待はすぐに実現された。客達の思う時刻より早い幕開き、

・・・そして、その演出にみんな『あっ』と驚かされ、思わず息を呑む。

まさか？・・・舞台上に座り込んだ小汚い格好の・・・今では見かけぬ琵琶法師。

その琵琶が鳴らされ、よい声の謡がはじまった。

その内容はある日公家の御曹司が桜の木の下でうたた寝をしたことがきっかけとなる。

その美男ぶりに惚れた桜の精が乙女となって姿をあらわし、

その御曹司に恋を告白するが、女達に追い掛け回され食傷気味の御曹司。

適度な受け答えであしらわれたことから、桜の精の恋のアタックが始まるのだ。

最後は悲恋に終わるが、これは絢爛豪華な平安絵巻であった。

いつの間にか琵琶法師の姿が凜々しい公達の姿に変わり男舞が始まっていた。

どこでどうなっているのか、舞台上では一人で舞いながらも

琵琶は鳴り続け、謡も終わらない。いつのまにかその背景には・・・

公達姿の舞の中に女達があらずって恋に血道あげる姿や嬌声が聞こえるのだ。

やがて舞台上には1本の満開の桜の木が・・・

その太い幹の後ろに回った公達が次に姿を現したときは

美しい桜の精に変わっている。勿論、舞うのは乙女の女舞、

恋しい公達を想って切々と舞い上げるその姿にはおもわず涙が・・・

風が誘う桜の花びらの落花舞・・・舞台上に・・・そして見物の
中に・・・

「桜の花びら?・・・」

千代松が手の平においた一片の桜の花びら・・・それも淡雪のよ
うに

スーッと消えていく。夢か幻か・・・

桜の精の切々たる想いが舞となって公達にとどけられるが・・・

やがてそれも人とは相容れぬ・・・つくも世のしきたりなりき・・・

桜の精の想いを受け入れた御曹司も激しい恋に病み疲れ、死の床に
ついてしまう。

・・・そして、桜の花が最後となる夜。

渾身の力で桜の木の元へ・・・愛しい人の亡骸をその身体で覆う
桜の精。

残ったのは枯れた桜の木と御曹司の亡骸に覆い尽くす一面の桜の花
びら・・・

こうして舞は終わった。

舞台にいるのは座って頭を下げる舞妓姿の小沙希ひとり・・・。

誰かが『ホウ』とため息をついたのが合図となって、客全員が立ち

上がった

万来の拍手と歓声をあげている。

道行く人が驚いたように足をとめて店を覗き込む姿がひっきりなしだ。

「きゃあ・・・小沙希ちゃん！」

舞台を下りた小沙希を迎えたのは『菊野屋』と『真田屋』の芸妓や舞妓達。

そして、その中心にるのがここ玉屋の女将。

「小沙希ちゃん！・・・うちは・・・もう・・・もう・・・」

「あら女将さん、牛さんどすか？」

そんな軽口言った事もない菊野屋の花世、大好きになった小沙希がもうこの京で大評判になるだろう1人舞いに心がはずんでいる。

そんな騒ぎの中、

「なあ、幾松。うちこんな舞妓ちゃんにあつたの初めてや」

「あたりまえどす。小沙希ちゃんみたいな舞妓ちゃん、古今東西1人もおへん」

「これであんたとこの菊野屋はん、第安泰やなあ」

「うっん・・・そんなことおへん」

「えっ？そんなことおへんって？」

千代松をじつと見つめる幾松。

「千代松！・・・うち置屋は違うけど、あんたのこと親友や思ってる」

「何をいまさら・・・」

「だから、あんたに手伝ってほしいことあるんや言つとるんよ」

「手伝つてほしい？」

「へえ・・・実は今宵小沙希ちゃんにどうしても添い遂げさせてあげたいお人がいるんどす」

「添い遂げさせてあげる?」

「へえ……さもないと……」

「さもないと?」

「きつと、死んでしまわれはる」

「死ぬ?……そんな男……」

「いいえ、男はんやあらしまへん」

「えっ?ではおなごはんどすか?……」

と千代松何ともいえない顔になる。こうして花街に生きてきて男と女の恋愛ざたなら日常茶飯事だが、

これが女と女になると何だか気が進まないし、汚らしい。

そんな表情が見えたのか

「千代松!あんた何か勘違いしてまへんか?」

「勘違い?」

「へえ、小沙希ちゃん。大の男嫌いなんどす」

「だからって……」

「アホ!……そこが勘違いなんどす。小沙希ちゃんが男はんに抱かれてみなはれ、

それこそ衆道どす。念者になるんどす。……ひえ〜いやや・

言うてるうちの口がくさりそう」

とさも嫌な顔をするが、千代松には何のことかわからない。

なぜ小沙希が男に抱かれたら衆道になるのか?

男と女の道……それが自然だと思っただが……

「小沙希ちゃんの身体って女のうちがみてもホレボレするほど綺麗なんどす。

お乳も形いいし、柳腰でおいどは小さいけんど抜けるような白い肌

が
柔らこうてうちの手に吸い付いてくるんどす。……けんど……」

「けんど?・・・」

千代松はもう興味しんしんだ。

「小沙希ちゃん、一箇所だけ男はんなんどす」

ついに言ってしまったその言葉の効果は絶大だった。

呆然と立ちすくむ千代松・・・幾松の言った言葉はまだ良く飲み込めていない。

「一箇所だけって・・・一箇所だけ?・・・え〜!」
急に顔が真赤になってそのほてりで思わず頬を両手でおさえた。

「一箇所だけって・・・あの?・・・」
と上目使いに聞く千代松。

「そう・・・ここまで言ったさかい、小沙希ちゃんとお嬢はんの逢瀬手伝ってくれはるやろ?」

「お嬢はん?」

「そう、結城道場の鬼娘・・・」

「えっ?あの、男なんか鼻もひっかけない鬼娘が?」

「でも、あのお嬢はんいきなり恋を知ってしまったさかい
身体と心がいうこと気かないんどす。ぶるぶる震えてちつとも治らなくて

でもうちが小沙希ちゃんのことなんとかしますさかい少しの間だけ辛抱しておくれやす・・・

いうてやっと落ちついたんどす」

「でも幾松!どこでどうあの二人を逢わせるか決めとるんどすか?」

「いいや・・・それが・・・」

と声が小さくなってしまふ幾松。

「なんや、まだなんも決まっとらへんのどすか」

「へえ、相手があのお娘と小沙希ちゃんどっしやる、へたな真似で
きへんのどす。」

いくら小沙希ちゃんに情で訴えるいうたかて、やはりものには順序
があります。

いきなり二人をお部屋であわせたかて、そんな恋と違う。

それにこの一夜が・・・この一夜だけが二人が肌を合わせられる最
後の機会やさかい

・・・一生心が残る一夜にしてあげたいんどす。

そして、この夜のことを思い出にこれからをしっかり生きていつて
ほしいんどす」

「なんや・・・それ！今夜だけが最後の夜やなんて。」

逢える日なんてこれからもいくらでもあるやないんどすか」

「それが・・・千代松！うちがこれから言う事、あんたが信じる信
じないんは

勝手やさかい教えるんは教えたるけど・・・」

と小沙希がこの時代の人間ではなく先の時代からやってきた人間で
先の時代に復活した怨霊と対決するため土佐の坂本竜馬が持つとい
う横笛を探しにきたのだ。

この時代にいられるのは3日間だけ・・・その3日目か明日なのだ。

だから逢瀬は今夜一夜・・・

「そんなあ・・・」

とそのとき

「その話！うち、のったえ」

という声が二人のいる布団部屋の外からした。

すーっと襖が開いて入ってきたのはこの料理屋の女将お園だった。

「うち、悪いけど外で話を全てきかせてもらいました」

「でも、女将さん。どうして？」

「へえ、うち小沙希ちゃんのあるな舞台見たん生まれてはじめてだつしやる。

もう興奮して身体が熱うて熱うて・・・そやさかい表の風にあたるうと

廊下に出たとき、あんたらがここに入るんみたさかい、なんやる思たんどす。

悪いけどみんな聞かせて貰いました。

失礼や思てたけどもう途中で聞くの止められへんかった。

あんたらの話、小沙希ちゃんの舞を見たんと同じ位の衝撃やった。

なあ、お願いどす。うちにも手伝わせて・・・。

うち、小沙希ちゃんに助けてもらたし、あんな凄い舞台もみせてもらいました。

聞けば小沙希ちゃんて男でもあり女でもあるんやさかい。

もう常人やおへん。そんな小沙希ちゃんに恋をした結城先生のお嬢はんは

うちが昔からよう知つとるお方やさかい、うち役に立つ思います」

「なあ、幾松！そうしよう。女将さんには日頃からお世話になつとるし

身内同然どす。だから相談に乗って貰ったほうが好都合どす」

「そつやなあ、女将さんに中に入れてもらったほうが小沙希ちゃんにも

言い訳たつし・・・そうしようか、なあ千代松」

「まかせておきなはれ。・・・それでな、幾松ちゃん。お嬢はんの様子、いかがでしたんや？」

「へえ、お嬢はん、女として・・・恋も何も知りはらへん。女の幸せについてなんか考えもしいへんかったみたい」

「和葉さん、小さい時から男みたいに育ちはったんよ」

「でも、今日小沙希ちゃんに逢いはった。強い小沙希ちゃんを見いはった。

誰よりも強い思つてはった父親よりも小沙希ちゃんのほうが強かった。

女は強い相手に惹かれるもの。だからお嬢さん、小沙希ちゃんに惹かれはった。

それも並大抵の惹かれようとは違う。身体全体が瘡のように震えあがった、

全身全霊をかけての恋なんや。だから破れれば死ぬ覚悟してはる」

「そんなに？」

「へえ、道場の井戸端で座り込みはって立たれへんかった。

うち、和葉さんの腕持って助けおこしたんやけど、ぶるぶる震えて

倒れそうにならはって、それはもう大変どした。

お布団にお寝かせしたんやけど、お顔の色が真っ青で掛け布団着しても

うちの手握ったまま震えてはる。お話もできないんどす。

うち、小沙希ちゃんのこと知つとるさかい軽はずみなこと話せまへん。

けど、同じ女どすからこれはもう一肌脱がずにはおられんようになつた。

だから別れるとき、絶対今夜お二人にしてあげるさかい我慢してい

ておくれやす。

絶対に軽はずみな事せんといて、いうてお座敷に出てきたんどす」

「女将さん、これは早う手をうたな、何をするかわからへんえ」

「そつやなあ、和葉さんおぼこなだけに早まった事するかもしれん、

・・・いつそこの事、うち迎えに行つてきます。

・・・あつ、逢瀬のお部屋はうちが用意するさかい、

あんたらは小沙希ちゃんのこと頼みますえ」

幾松と千代松は小沙希にどう話を持っていこうかと相談したが、結局はへたな小細工するよりも真正面からぶつかつた方が良いという事になった。

だから、仲居に頼んで小沙希をこの部屋まで連れてきてもらい、こうして二人の芸妓が切々と和葉の心のうちを訴え続けた。

そしていつしか自分が和葉の肉親であるかのように涙があふれ、言葉も途切れてしまう。

じつとうつむいて二人の話を聞いていた小沙希、ふと上げた瞳に光るものが・・・

そして少し微笑みを浮かべて

「幾松さん姉さん・・・千代松さん姉さん・・・ほんとに・・・ほんとに・・・

ありがとう。うちら二人のためにこれだけ一生懸命ならはって・・・」

「ちよつと、小沙希ちゃん！・・・今、うちら二人のために・・・いいましたなあ」

「へえ、本当はうちなんかのこと忘れてしまったほうがいいんじゃないぞ、」

和葉さんのような一途に思いつめる人は駄目です。

きつとうちのこと片時も忘れること出来まへんやろ。

そやからうちも、和葉さんのこと一生背負っていいこと思ってます」

小沙希の心意気を感じ取った二人、顔を見合わせ頷きあうと

「小沙希ちゃん！まかしとき！・・・うちら二人・・・

いいや、こうなったらこの祇園に生きる女達が和葉さんのこと守りますえ」

「そうそう、それに小沙希ちゃん。向こうに帰ってもうちのことに絶対に忘れてはあかんえ」

小沙希はそんなこと絶対はない！と顔を強く振ったが、

何も言葉が出てこない。お姉さん芸者が小沙希を見つめながら言う、その言葉一つ一つに温かい真心がこもっており、言葉に出して感謝を言う必要もなかった。

小沙希はただ・・・三つ指ついて頭を下げるだけで心が通いあった。

いつの時代も女達の想いは同じなのだ。

求め合い、助け合い、そして哀しいほどまでの純な心が伝わってくる。

目を閉じれば次々と浮かんでくる大勢の女達の顔・・・。

負けられない！・・・絶対に勝つ！・・・今宵、夫婦になる和葉の為に

そして帰ったら待つ多くの姉達のためにも・・・何が何でも勝たねばならない。

そして、そんな小沙希の想いが通じたのか嬉しい知らせがもたらされた。

「失礼さんどす」

と言って入ってきた女将のお園、心配そうな顔で二人の芸妓の顔を見る。

でも目を真赤にしてはいるがその明るいに表情にほっと肩から力がぬける。

「女将さん！」

と小沙希はお園の顔をみつめ、

「この通りどす」

と頭を下げる。

「嫌や、小沙希ちゃん。そんなことせんといて！……
うちら長い間花街で生きてきとるんどす。おなごの心ようわかります。」

だから、何も言わへん。そのかわり今夜は和葉はんをしっかりと抱いてあげて！」

小沙希はただ頷くだけでよかった。

「そうそう、幾松ちゃん。あんたにお座敷がかかってますえ」

「うちに？」

「へえ！」

「うち、なんや今日、お座敷にでとうない気分どす」

「いかんえ、芸妓がお座敷断るようなこと言ったら」

「へえ、じゃあさっさと行ってさっさと済ませて来るさかい」

といって部屋を出て行く幾松。

「お座敷といえば、うちらのお座敷は？」

「大変！」

と立ち上がるうとする千代松に

「おほほほ・・・心配いらしまへん。嵯峨美屋はんはもう大満足して帰られました。

これは小沙希ちゃんのおかげです」

「うち・・・そんな・・・」

「いいえ、一生に一度みられるかどうかの舞台やった、

そう一緒にこられてた江戸のお人達も言つとられたんです。

なんでも大奥に出入りされとるお方達で、將軍様もこんな舞台見られへんやろ、

いうて豪快に笑つとられました」

「じゃあ、あの子達は？」

「見物されとつたお客はん仰山いてはりまっしやろ。

同じ舞台を見た芸妓や舞妓達や・・・言わはってみんなひっぱりだこどす」

「へえ」

「それに舞台見られへんかつたお客はん達も噂を聞きつけて

芸妓や舞妓達をお座敷に呼んでその話を聞こうとするさかい、もう

もうあの子達悲鳴あげとります。

でもあの子達にもええ勉強どす。そやさかいうち、見ても見ぬふり・・・」

といつてケラケラ笑う。

そこにバタバタと走ってくる足音、止まったらとおもったら

『ガラッ』と扉が勢い良く開けられた。

「何え！一流の芸妓のあんたがそんな真似をして・・・どうしたんですか？幾松！」

と料亭の女将として本当に怒っている。

「あっ」

といて座り込んで頭を下げる。

「すんまへん・・・うち、我を忘れてしまつて・・・」

「どうしたんですか？幾松とあるうものが・・・」

千代松があきれたように聞く。いつも冷静でこんな慌てるような芸妓ではない。

「すんまへんどした。うち、お座敷に行つたら思わぬ人がいらつして・・・」

「桂はん・・・長州の桂小五郎はんどすやる」

「えっ？女将さんはどうして？」

「そんなこと百も承知であんたをお座敷にやつたんです。

仲居から聞いて確かめもせずあんたをお座敷なんかやるもんどすか。

あんたは祇園の宝の1人どす」

幾松は行き届いた料亭の女将に、ただただ頭を下げるだけ・・・。

「で、どうしたんですか？そんな幾松さん姉さんが・・・」

という小沙希の顔をじつと見つめて

「小沙希ちゃん・・・あなたにや・・・」

「えっ？・・・うち・・・どすか？・・・」

何のことやさつぱり判らない。

「幾松ちゃん！はつきりいいなはれ」

とお園が問い詰める。

幾松は座り直すと、ゆっくりと呼吸を一つしてから、

「うち、どんなお座敷でも今日はかんべん・・・思いながら、お部屋の外からご挨拶したんどす・・・そしたら」

と言ってから急にポツと顔が赤くなる。

「あゝあ、あほらし・・・暑い暑い・・・」

と袖で自分をあおぎながら

「それで・・・」

と話を促す。

「うち、桂はんがこの京に来てるなんて知らなかったから・・・」

「あなたはお部屋に飛び込んで桂はんに抱きついたんだすな。

それから・・・」

とからかい半分、羨ましさ半分の千代松きつい合いの手をいれながらも

千代松の言葉、まんざら当たっていなくもないらしい。

幾松は顔を真赤にしている。

「これ！千代松ちゃん。そんなにからかうもんじゃない・・・」

と叱るお園にぺろっと舌を出す千代松。

「あのう・・・桂はん、お1人じゃあなかつたんどす。

窓の外をみながら手酌で御酒をめしあがってるお武家様がもうお1人・・・」

「じゃあ幾松は見も知らずのお武家様の前で桂はんと抱き合いはつたんどすか」

とあきれたように言う千代松。

「へえ、すいまへん・・・」

「何もうちらにあやまってもらっても」

とからかい半分なのか・・・若い人はうらやましい・・・と面白げにいうお園。

「小沙希ちゃん！そのお武家様。どなたや思います？」

「えっ?・・・もしかしたら・・・?」

「そうなんです。小沙希ちゃんが探し求めていた土佐の坂本竜馬は
んなんです」

小沙希はいきなり立ち上がり飛び出そうとするのを

「待ちなはれ!」

と止めたお園。

「芸妓や舞妓が料亭で勝手にお座敷出ること、許しまへん」

と真顔になってきつく言う。

だが次の瞬間につこり笑って

「でも、その女将が許可すれば別です」

「わあ」

といってお園に抱きつきチュと頬に口付けする小沙希。

「ちよっと待って・・・小沙希ちゃん、あんた誰にでもそんなこと
するんですか?」

「これ、うちの時代では親しいお人にするご挨拶です。それにうち
・・・女好きですよって」

としれつと言う。

「マア・・・」

とあきれのお園。

「じゃあ、幾松さん姉さん。いきまひよか」

と立ち上がった。

「待ちなはれ!」

と又待ったをかけたお園に不審げに振り返る小沙希達。

「千代松ちゃん、あんたもいきなはれ。今日のこの二人、まかせて
おくと

何をしでかすかわかりまへん」

「でも……」
と躊躇する千代松。

「ああ、お花代ですか。そんなら心配あらしまへん。
あんたの分はうちが払います」

千代松にはお園が言いたいのか、それがまだわからない。

「そのかわり、お座敷であつたこと聞いた事を逐一うちに報告すること。」

それが条件どす。あんたと同じでうちも小沙希ちゃんの後見人どす。

だから後見人として大事な小沙希ちゃんのこと、放っておけまへん。

それにうちだけ知らぬ存ぜぬでは我慢できまへん」

その言葉がお園の本音なのだ。小沙希のこと全て知っておきたい。

自分だけ仲間はずれにされるようで我慢が出来なかつたのだ。

千代松はいい、幾松の親友だから……芸妓仲間だからあとで根掘り葉掘り聞き出すことができる。

だが、お園は違つのだ。昔、芸妓だつたとはいえ今は立場がちがう。

何より年が違つ。心やすげに聞きにはいけない。

だから、千代松を使った。こうしておけばお園も仲間なのだ。

「さあさ、そうと決まったら、あんた達なにをぐずぐずしているんどす。

早うお座敷に行つてらっしゃい」

といいながらも、三度小沙希を呼び止める。

「小沙希ちゃん。和葉はんのことうちが守つとくから、しっかり・
……」

しっかり、お役目を務めてきなさいと最後の言葉は心で囁いた。

でも小沙希にはしっかりと伝わったようだ。

「へえ、がんばります。．．．お母ちゃん！和葉さんのこと．．．．
．．．．」
頼みます．．．．とこれも心で囁いたのだ。

3人を見送ってから、ふと気づく。

確か．．．あの子、お母ちゃんと言った。言い違えたのか？．．．．

いいえ、そうではない。こちらを見ながらお母ちゃんと言ったのはよく覚えている。

では？．．．．いくら店で威勢良く働いていても、

後家で子供もない寂しい私を誰からか聞いて思いやってくれたのか？

．．．．いや、それとも違う。ただ．．．あの子は．．．．あの子は．．．

うちのことを本当の母親だと思ってくれているのに違いない。

だから、和葉はんのこと一言もうちに聞かなかった。

そう考えると飛び上がるほど嬉しい。

部屋を出てからも小沙希のことを考えていたので、仲居の1人に声をかけられたとき

一瞬びくつとしたが、落ち着いて笑顔をむける。

「あらっ．．．どうされたんですか？」

「えっ？」

「あっ．．．いえ、女将さんのそんな明るい笑顔、久しぶりに見たもんどすから」

「えっ？」

「あのう．．．」

といいにくそうにしていたが、お園が覗き込むようにみていたので

思い切つて

「3年前のあの頃、亡くなった旦那さんと仲良くなさっていたころの

女将さんの”笑顔”どす」

「あら、本当？」

と自分に昔々の笑顔が戻った事を言われ、まるで乙女のように頬を
押えながら

歩み去る女将、あきれたように見送っていた仲居だが

なんだか自分も嬉しくなって、さっそく朋輩達に知らせようと小走りに走り去る。

「いいですか、小沙希ちゃん。落ち着いてお話するんどすえ」

「そつどす、いつでも相手はお武家様、失礼のないように……」

幾松と千代松にそういわれて

「うふふ」

とつい笑つてしまふ。

「なにが可笑いんどすか？」

「お姉ちゃん達、まるでうちがねんねみたいにいわはるから」

「そつどす、小沙希ちゃんあんたは強うてかしこおすけど、

ある1面ではなぐんも知らんねんねと同じどす。

そやからうちら心配のしどつしで、もうハラハラドキドキ……」

そう言われると何もいえなくなる小沙希。

「さあ、このお部屋どす」

と行って廊下に座る3人。

「お待ちどうさんどす」

と声をかけてから襖をあける幾松、中の光景を見てつい

「あらっ！」

と声をあげてしまふ。

その幾松の声で思わず顔をあげ、その目に入ってきたのは……

男4人が車座に座って酒を酌み交わしている図であった。

その中の1人がニヤツと笑って

「よお」

と声をかけてくる。

「まあ、源太郎さま！」

「おっと、そんなに睨むなよ。どこにでも顔をだす仕方のない奴つて

顔に書いてあるぜ。……まあ、入んなよ。

そこが開けっ放しじゃ寒くて仕方がねえや」

といわれ立ち上がった部屋に入って襖を閉める。

でも源太郎に言われっぱなしで業腹だったので

「まあ、源太郎様はどこにでも現れるし、人の顔に書いてある字を読まれるし

凄い人どすなあ。どこの偉いお人どすか？」

と言ってしまい、

「これ、小沙希！」

と幾松に叱られ、千代松には睨まれてしまった。

「あははは、参ったなあ小沙希には。坂本さん、小沙希ってごうい
う奴ですよ」

「まあ、人のこと奴だなんて……」

と売り言葉に買い言葉で口に出してしまつて、

「これ！小沙希！やめなはれ」

と今度は千代松に叱られ、首をすくめる小沙希。

その様子が可笑しいと男4人が声をあげて大笑いだ。

仕方なくその笑いが収まるのを待つてから

「今宵、お座敷に呼んでいただきまして、ありがとうございます。

うちら3人お座敷をあい勤めますのでよろしゅうお頼も申します」といつてから

「まずはみなさんにお酌どす」

といつてから順番にお酌をしてまわる。

それが終わると自然と組み合わせが決まつた。

桂小五郎と幾松は勿論、

源太郎と相良新太郎の間に座つた千代松は仕方がないところ、なにしろ小沙希が坂本竜馬を見つめる目が真剣なのだ。

医者相良新太郎以外の男達各々が剣客といつても差し支えは無い。

だから、全く隙がない小沙希に注視が集まるのは仕方がないところだ。

小沙希のことを全て知っている源太郎は真剣に二人を見詰めていた。

いや、本当のところ面白がつていたというのが本音なのだ。

小沙希は2度3度とお酌をする。

竜馬は酒を飲みながらも少しも酒を飲んでいない気がしなかつた。

まるで水を飲んでいようだ。だから少しの酔いもこない。

なぜならば、この小沙希という舞妓に神経が集中しているためだ。

身体はどこにあつたのか坂本竜馬の剣客としての魂が呼び覚まされたのだ。

何しろ昔、横にいる桂小五郎と試合をしたとき、1本目に片手上段で勝った後、

よし、負けてやろうと思ったと言うのだ。

事実、続けて5本全く違う形で負けつづけたという。

それを見ていた師の千葉定吉が

「竜さんのやつ……」

とフツと笑ったきり何もいわなかったという。

坂本竜馬……維新の志士として有名ではあるが、

竜馬が生きていた時代がもっと前ならば剣客としてもっと高く名を残しただろう。

その竜馬、小沙希のあまりの隙のなさに自身が仕掛けた。

鋭い気を発したのだ。

座ったまま後方に飛んだ小沙希、そのままの姿で頭を下げ

「坂本様」

と呼んだ。

「なんだ」

と答えた瞬間、竜馬は負けたと思った。何故なら気が充満している時は

対等のようなだったが（対等というのはわしの都合のいい解釈かもしれない）。

小沙希という女、わしよりもっと実力が上なのだから、言葉を発した瞬間、口から気が抜けた。つまり対等ではなくなったのだ。

横でみていた源太郎にとって兄弟子同様の坂本竜馬と小沙希の戦い、

心が躍るおもいで見ていた。気配で桂小五郎も同じ思いで見ていたのだろう。酌をする小沙希、杯に酒をうけとる坂本竜馬、目には穏やかだが、源太郎と桂小五郎には真剣を構える両者が見えていた。

真剣の刃と刃が火花を散らせる。

「えい！」

と気合を発した小沙希、・・・だが驚いたことに気を発したのではなかった。

無音の術だ。無音の術とは口から気を発せずに喉の奥で気合を発するのだ。

だから気は身体から抜けてはいない。

だが

「おう」

と口から気合を発した坂本竜馬、この時点で竜馬の負けは決した。二人の幻は消えた。

「見事な！」

と言ったのは桂小五郎だ。横にはびつたりと幾松が座っている。

「小沙希とやら、今のは無音の術だな？」

「はい」

「徳川の初期のことならいざしらず、今の世に無音の術を心得ているお主は一体何者だ！」

「桂小五郎様、今のお言葉に対するお答えはこれから坂本竜馬様にお願いする

私の言葉からおくみくださいませ」

と言ってから坂本竜馬に向き直ると深々と頭を下げる。

「坂本竜馬様をお願いいたします」

「何なのだ」

「竜馬様の懐にお持ちの『翔龍丸』をぜひともお譲りくださいませ」

「何！この笛を！？」

と懐から取り出す1本の横笛。

「はい！・・・その『翔龍丸』をぜひ私に」

「この笛はわが坂本家の宝、末代のためにも・・・」
といいかけて

「いえ！」

と言葉を被せる小沙希。

「これから、私の言う事、信じるもよし、信じないもよし。

でも話だけは聞いてくださいませ」

と言つてから、居ずまいを直し

「今より3年のち、京都近江屋にて竜馬様は暗殺者に襲われ、

その『翔龍丸』は暗殺者の手によってスッパリと2分されておりま
す」

「何故？何故？そんな先の世のことまで知っている」

と桂小五郎がいいかけたが

「待て！」

と桂小五郎を静止

「わしはどうなった？」

「はい、あなた様は『翔龍丸』を手にして暗殺者に立ち向かわれた

と申せば・・・」

じつと小沙希を見つめる竜馬・・・ポツリという。

「そうか・・・死んだか・・・」

人事のように言う竜馬。

「はい、近江屋で襲われたのは竜馬様と中岡慎太郎様のお二人」

「何？慎君もか？」

「はい、竜馬様は即死、中岡慎太郎様は3日後に死去されました」

「暗殺者は誰かな？」

「未だに判っておりませぬ。新撰組が見廻組か、はたまた徳川幕府に大政奉還という

案をつきつけたあなた様に対する薩摩と長州の過激派の手によるものか

これは竜馬様と中岡慎太郎様以外知ることとはできませぬ」

今は誰も何も言わない。言えないのだ。

命運というものを突きつけられた坂本竜馬の心を思んばかつて……

「小沙希！……お主この世のものではないな」

「はい、私は今から140年後の平成という年号の時代から竜馬様がお持ちの

その『翔龍丸』を求めてやってまいりました」

「なぜだ……何故この笛なのだ」

「平成の世に恐ろしい者が復活したためでございます」

「恐ろしい者？」

「はい、平安期に人心を惑わし、人を呪い殺し、はたまた自然災害を引き起こした

怨霊・藤原元方です。その後、我師安倍晴明様に封印されたのですが、

時代が進めば人は不可思議なことは信じませぬ、怨霊が復活したのも人の手によってでした」

「怨霊か……それはわしらでも手が出ぬ」

「待て！小沙希。お主、我師安倍晴明様といったな。お前、平安時代にも行つたのか」

「はい、平成に生まれた私がどうして平安時代に行けたのか・・・それは平安時代より脈々と伝わる女だけの一族・・・早瀬一族の不思議の力によつて時代を遡つていったのです。

そこで10年、安倍晴明様の元で厳しい修行をしてきました。でも、戻ってみれば時の不思議で一刻ばかり。

それに私の身体は術の失敗で25歳という年から16歳に若返っていました」

そんなこと聞いていなかったので芸妓達、目を白黒している。

「では、師の安倍晴明様にお逢いください」と懐紙を人型に切り

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

と九字を切る、そして唱える真言

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

ふっ吹くとたちまち現われた公達。

その場に座る安倍晴明。

「それは何じゃ、あきあよ」

「はい、ささでございます」

「なに？酒か・・・一杯もらおうか」

晴明はお猪口ではなく、小さな小皿を取り上げた。

それに並々とつぐ小沙希。

喉をならして飲む晴明。

「はあ・・・美味じゃのう」

「はい、平安の御世より酒の味もいろんな工夫がされ、味も変わっ

てきました」

「そうそう、あきあに飲ませてもらったあの葡萄の・・・なんとい
ったかのう」

「ワインでございます」

「そうそう・・・あれもうまかった」

・・・と、自分に注がれる視線に気づく清明。

小沙希は清明にみんなを紹介する。紹介が終わると源太郎から

「小沙希殿！お主、あきあと言われるのか？」

「はい、陰陽師・安倍あきあ　それが清明様よりちようだいしまし
た

わたしの名、でございます」

「だからなのか？」

「はい？」

「だから、お主が怨霊と戦うのか」

「はい、平成の世も陰陽を操れるのは私1人。けれども相手は悪名
高い怨霊・・・」

と小沙希は幼い女の子を人質にとってその気を喰い、なおかつ子の
両親をも

自分の思い通りに操ろうとしている・・・とその手段を話すと

「うぬ・・・」

と憤怒の顔になる。

「そんなの酷い！」

初めて聞く千代松だが昨夜聞いた幾松も源太郎もその卑劣さに吐き
気を

催すほどだ。

「あきあ殿！」

と陰陽師の名で呼ばれた小沙希、竜馬の方を向くと目の前に横笛『
翔龍丸』が

差し出された。

「えっ？」

と思うほど簡単に手に入る『翔龍丸』。小沙希が竜馬の顔をじっと見ると

「3年先に壊れてしまっただろう、この『翔龍丸』は……だからもつたいないから」

もつたいないから……と渡されて啞然としたが、つい

「クスッ」

と笑ってしまう。

「だが、この『翔龍丸』は誰が吹いても鳴らないんだよ」と竜馬は一言付け足すが

「心配いりません」

小沙希は左手を前に出すとその手の平がボウッと光り、もう一对の横笛が現われた。

「これは『緋龍丸』といいます。

この『緋龍丸』を大江山のシテン殿から譲り受けたとき聞いた事があります。

『緋龍丸』にはもう一对『翔龍丸』という兄弟笛があり、

今は行方知れずだが、2本揃うとどんな強大な怨霊とて封印する事ができる。

ただ、『金龍』『銀龍』の2匹の龍を身に宿す事になり、

その気、2匹より弱ければ食い殺され、強ければ生涯の鎧と化す」

「いや！」

「やめて！」

と叫ぶ幾松と千代松。

「幾松姉ちゃん、千代松姉ちゃん。心配いりまへん。うちにはこれ

があります」

と両手を前に出すと、その手の平より30cm上に浮かぶ赤いお
きな鱗、

「これは緋龍様という龍の鱗です。これさえあれば心配いりません」

と喋ってまずは『緋龍丸』から手にとった。

目を閉じ吹く小沙希の姿、絵師がみれば誰もが描きたいと思うだろ
う。

そして幾松以外、初めて聞く小沙希の吹く横笛の調べはもう呆然と
して聞く事以外、得なかった。

それほど、この世のものが吹いているとは思えないのだ。

名人？・・・そんな言葉ではもう言い表せない。

『緋龍丸』の調べは静かに終わる。

そして、次は『翔龍丸』を取り上げた。

果たして鳴るのか・・・鳴らない・・・小沙希の顔に苦悶の
色が広がる。

そのうち小沙希の身体が光だした。

二つの小さな光の玉が小沙希の身体をつきつきりながら

ぐるぐると追いかかけあいをしている。やがて小さな玉が龍の形をと
りだした。

これが『金龍』と『銀龍』なのだろう。

(小沙希ちゃん！・・・がんばって！)

見ているもの全員、言葉を発する事・・・いや、身体を動かすこと
すら出来ない。

ただ、見守るだけだ。

光る小沙希の額に汗が滲みでる。

二匹の龍が小沙希の中に突っ込む毎に苦悶する小沙希、
どれ位の時がたったのだろう、構えた小沙希の口元からかすかな調
べが流れ出した。

光輝く二匹の龍がその光を失い、金と銀との小さな龍という本来の
色を取り戻すと

小沙希の身体の中に消えていった。

『翔龍丸』は女笛であった。『緋龍丸』より高い調べが流れる。

そして不思議が起こった。

窓の外の闇の中、たくさんの小さな光が天に上っていく。

魂魄この世に留めた霊達が解脱して天に帰るのだ。

これは『翔龍丸』の力によるものであった。

調べは消え、小沙希は『翔龍丸』を口から離れた。

がっくりと肩を落として右手を畳につける。

小刻みに身体が震えているようだ。

それはそうだろう、二匹の龍が身体に納まったのだから。

「すいませぬ、だらしない格好で」

「いや、凄いものを見せてもらったし、聞かせてもらった」

「もう二度とないだろうな」

男達が口々に言う中、幾松と千代松は涼しい風にあたらせるため
窓をの縁に小沙希を座らせた。

「晴明様にお尋ね申す」

「なんじゃ、竜馬殿」

「平安期には鬼や怨霊がそこら中に出て人を襲ったりしていたと
書物で呼んだことがあるが、それは本当のことをござろうか」

「そこら中とは大げさだが、人は夜中は出歩かなんだ。」

鬼や怨霊は本当のことじゃ」

「だが今の世、その姿見いとらんが」

「それは平安期の陰陽寮のおかげじゃと思っ
ていてほしい」

「陰陽寮？」

「そうじゃ、そこに勤めておった者達の命をかけた鬼や怨霊達との戦いにより

消し去ったり封印したおかげなのじゃ」

「封印？」

「そうじゃ、今の世もその封印の力が及んでいるため鬼などは出てこない。

じゃが世の中は変わる。あきあの生きている世がそうじゃ。

墓がこわされ、人が住む家となり、山がくずされこれまた人が住む。

封印された小さな祠など壊されれば何の役に立つ？……

だから怨霊が復活してしまうのだ。もう古の人々から伝えられてきた

話も残っておらん、今は自動車とかいう人を乗せて走る車が通る道のため

山や川という大自然が壊されていく。何十階と高い屋敷が建てられるのは広い屋敷跡じゃ。

わしらが封じた幽鬼や邪鬼などはもうすでに人の間に入り込んでおる。

悪い事をした人間には必ずといっていいほど鬼の姿が重なって見える。

そんな恐ろしい世になっておる。

わしのいた平安期と同じじゃ。じゃが新しい時代の人間が鬼や怨霊の姿が見えず、

信じなくなっているだけ始末が悪い」

「わしらが目指す新しい世がそんなふうに変わっていくのか」

「竜馬様達、志士の皆様が志を同じに新しい世を作り上げました。素晴らしいことです。確かに徳川は300年も続けば屋台骨が腐って揺らぎます。」

維新以降、明治、大正、昭和の初期までは良かった。

人々の間に侍が持つ気骨が残っていました。

でも太平洋戦争という日本、ドイツ、イタリアの3国連合軍に対して

アメリカ、フランス、ロシアなどの連合軍は強かった。

日本はこてんぱに負かされました。

広島、長崎に原子爆弾という恐ろしい兵器が落とされ、

一瞬のうちに何十万人という命が失われました。

……が恐ろしいのはそれからです。

原子爆弾には副作用があつたのです。爆弾が落とされた直後、黒い雨が降った。

それに濡れた人々は髪が抜け落ち、皮膚はただれ、

そして白血病という未だ治らない病に冒されました。放射能が原因

です。

放射能は身体の中に入れば出て行かない。蓄積されてしまうのです。

そして、この地球に対する放射能の影響はこの地表からは半永久的に残ります」

みんな黙り込んでいます。幾松と千代松は手を取り合つて聞いているが

身体の震えは止まらない。小沙希の慟哭といえる告白……いく末の日本の現状に怯えているのだ

「放射能は母から子、そして孫へそれが何世代も遺伝します。」

……これからは相楽先生」

という小沙希にはつと顔をあげた医者相良新太郎。

「相良先生に關係する医学の話です。昭和の初期に発見されたツベルクリンで胸の病の結核が完治するようになりました。天然痘も一掃されました。」

でも白血病は完治する人もいればそうでない人もいる。

戦争が終わって50年、その時代に私は生きています。

でも未だに毎年、何百人、何千人と原子爆弾の影響の為、死んでいく人々がいます。

医学は進歩するが、治らない病もある。

それに、結核や天然痘、コレラという病は一掃されましたが次から次へ、新しい病気が襲ってきます。

性交渉でうつるHIV・・・エイズという病気は発病したら死を待つだけです。

他いろんな病気で医者は頭を悩ませています。

癌や脳卒中、心筋梗塞は今だに人の死亡原因の大要素です。

これも封印が解かれて行つたのが原因なのでしょう。

昭和40～50年は昭和元禄といわれ景気の良さに日本中が沸き立ちました。

昭和64年昭和天皇が崩御され、年号も平成と変わります。

平成は景気を回復させようと必死でがんばっていましたが、なかなかうまくはいっていません。

平成も10年を過ぎると人の心が荒んでいきました。

誘拐、殺人、暴行と若者の犯罪が増えつづけています。

心の荒みが邪鬼を呼び、そして邪鬼に力を得てただ平凡な暮らしをしている

人々の家庭を破壊している。私はそう見えています」と締めくくる。

「小沙希・・・いや、あきあ殿」

「はい、何でしょうか？竜馬様」

「貴公はその平成で何をしているのじゃ。怨霊や鬼の退治を職業にしているのか？」

「いえ、わたしは本名『早瀬沙希』では最先端の技術の開発をしています。」

でも、もう一つの名前『日野あきあ』では女優を職業としています」

「女優？」

「はい！今でいえば・・・そう役者です」

「役者？・・・貴公がか」

腑に落ちん・・・そういつている顔の竜馬。

「おほほほ、竜馬殿、貴公が思っている役者とあきあがいう役者と
は

全然違っておる。・・・あきあよ、見せてやらぬか」

「えっ？」

「あきあが芝居の中で本当の戦いをした平将門との録画というものを」

「でも・・・」

「あははは、良いではないか。最後にあの元方も映っているのである
ろっが」

「もう、清明様は・・・」

とねめつけたが、清明は素知らぬ顔で千代松から酌をうけている。

「見たい！見たいぞ！あきあ殿」

「そうじゃ、わしも見たい」

男4人からの口々に声をあげられ、そして

「うちもや」

「うちも見たい！」

「では仕方ありません」

と九字をきろうとするが

「待って！」

と声をあげる幾松。

「うち、女将さんと和葉さんと呼んでくる」

「えっ？、どうして？」

と聞く千代松。

「何や知らんけど、そうしたほうがええってうちの心の中が叫んでいるんどす。

じゃあ、行ってくるえ」

といって座敷を飛び出して行く。

「和葉殿がどうして？」

ここにいるのだと聞く源太郎に、話していかどうか迷ったがどうせ判ること

「へえ、今宵一夜の夫婦の契りを小沙希ちゃんと和葉さんが結ぶんどす」

と千代松が話す。

「何？女と女が夫婦の契りを？」
と目を白黒さす男達。

「おほほほ・・・」

「何が可らしい！千代松！」

「篠原様。小沙希ちゃんは女でもあり、男でもある不思議な身体の持ち主。」

小沙希ちゃんはりっぱに和葉さんにややを産ませることができるとす

「なに？赤子を？」

もう驚きを通り越している。こんな少女が男？
相良新太郎は猛烈に医者として小沙希の身体を見たいと思った。

「失礼します」

と襖ごしに声がかかったのはそんな時だ。
襖が開けられ仲居が手について挨拶をする。

「うちの女将はんからの伝言どす。
その部屋では狭すぎます。どうかご足労ではございますが大広間
に

おいでくださいませ。小沙希ちゃんのことなら大広間でも
広すぎるということはありませんまい・・・ということどす」

「あははは・・・、あきあも見込まれたもののだのう。

さて、行くか」

と行って立ち上がる。

仲居はこのりっぱな公達に目を見張っている。

こんなにりっぱなお武家様を案内した覚えはないのだが・・・と首を
捻っているのだ。

大広間に入ると驚いたのは小沙希。

和葉の隣りに父の結城弦四郎の姿と女将の横に置屋の菊野の姿があ
ったからだ。

「お・・・お父上」

と座り込んで頭を下げる小沙希。何も言えない。

「もう良い。何もかも女将に聞いた。一夜限りとはいえそなたはわ
しの婿じゃ。

したがよう見ると娘がもうひとり出来たようじゃのう」

「まあ、嫌なお父上！」

という小沙希の所作についでキリとってしまう弦四郎。

小沙希の横には恥ずかしげに和葉がぴたりと寄り添う。

「よかつたのう、あきあよ」

と扇子をあおぎながらいう晴明。

「婿殿。こちらは？」

そのりっぱな公達姿にめを見張る弦四郎が聞く。

「はい、我師である安倍晴明様です」

「ええ〜」

と驚く弦四郎、女将のお園、そして和葉も無論だ。

「あははは、弦四郎！驚いたか」

と源太郎。

「あきあ殿、この男には拙者が説明をする。それよりあきあ殿は早く支度を」

「はい」

と言った時、菊野屋と真田屋の舞妓や芸妓達が入ってくる。

花世の手には白い毛氈もうせんがもたれていた。

「花世ちゃん、毛氈はそこに置いて」

と舞台上に置くよう指示をする。

「でも」

という花世、毛氈は壁にかけると幾松に伝えておいたから自分たちがするものと思っていたのだ。

小沙希はその毛氈にむかつて呪まじを唱えると

毛氈はふわりと浮き上がり、たたんであつたものが広がって舞台後ろの壁に

吸い付くように張り付いた。

啞然とする舞妓や芸妓、

「これで用意が出来ました」

というと各々に座っていたのが舞台前に移動する。

坂本竜馬も桂小五郎もその中にいる。いつのまにか仲居や客達も大勢大広間に

入ってきていたのだ。

小沙希は真言を唱えた。

「ナウマク・サマングボダナン・アビラウンケン、オン・コロコロ・センドリ・

マトウギ・ソワカ、ナウマク・サマング・ボダナン・バク」

というと何やら小さな形の人形が現われた。

「えい！」

という気合で宙に浮く。そんな小沙希の不思議の術に呆然とする客達。

「女将さん！灯りを消してください」

「でも、そうしたら・・・」

何も見えなくなるといいかけて口をつぐむ。

小沙希の言うことに偽りはない、・・・女将は仲居に言いつけて行灯の灯りを

吹き消させた。真つ暗な闇になる大広間。

だが次の瞬間、壁におおきな像が現われたのだ。

「天聖・・・？」

とカタカナが読めない人達ばかりなので

「天聖るなと読みます。ルナというのが名前です」

このシーン・・・いや場面は第一幕です。

学校の・・・いや、いまでいう寺子屋の場面です。

姉が殺され、その犯人を自分の手で見つけようとした少女が

どうしても出来なく、疲れ果て自らの命を絶とうとする一幕です」

「いやあ、小沙希ちゃんがいる」

「星聖奈だって」

「えっ？壁にうつる小沙希ちゃんが話をするんですか」

と最初はとまどいでガヤガヤいつていたが次第に静まり返っていく。

画面の中の物語に引き込まれていった証拠だ。

寺子屋の場面が終わった。

「ふ〜」

と息を吐く見物人、身体が硬くなっていったのか、首を回すひとが大勢いる。

「これからはお芝居ではありません。お芝居仕立てにはなっていないが

怨霊もなにもかも全て本物……いえ本気なのです」

という言葉に

「うお〜」

と声をあげる。

「だって、平将門といえばこの京まで鳴り響いている恐ろしい怨霊とすえ」

と口々に恐怖を語る。

第二幕がはじまった。

大きな月の中から横笛を吹きながら現われる星聖奈

……いやここにいる小沙希なのだ。赤い陣八に手甲をはめ不思議な衣装

でもそれが良く似合って、凄く凜々しい。

そして見事な笛の音、……さきほど聞こえていたのはやはり小沙

希ちゃんが吹いていたのか。

笛が止んで聖奈が向かい合う首塚、江戸にいた桂小五郎、坂本竜馬、篠原源太郎、相良新太郎、そして結城弦四郎。その他大勢首塚を見知っている。本気といったのがよく判る。これは本物だ。

聖奈が呼び出し、白いモヤの中から馬に乗ってあらわれた首なしの鎧武者

女達は

「きゃ〜」

と叫び声をあげる。男もぐつと丹田に力を入れなければ見苦しいところを見せるところであった。

平気な顔で怨霊に対して悪態をつく聖奈、恐くはないのか……。

そして聖奈の変身がはじまった。

「この変身後の姿は力の暴走を止めるため修行した結果このような姿になる

という設定です」

『天聖ルナ！参上』

という変わった聖奈の姿、

「まあ、可愛い」

と概して女達に好評だった。

男達が『あっ』と思ったのが天聖ルナが操る『破邪・雷光剣』と牛若丸のように軽々と跳ぶ『八双跳び』であった。

やはり小沙希は一流の剣客なのだ。

物語は進み、異世界での天聖ルナの二段変身で出てきた玉藻、葛葉、

紅葉、

それに白虎丸。

「彼等はわたしの式神です。そして友でもありません」

「その式神は今どこに？」

これは竜馬の質問だ。

「はい、今も私の身のうちにいます」

「あきあ殿！あの剣は？」

これには少し言い渋ったが

「不動明王様から下しおかれた利剣とけんさく縋索なのです」

「何！不動明王様から？・・・あと拝ませてくれぬか」

「あつ・・・は・・・はい」

これにはどうも積極的にはなれない小沙希だ。

物語はすすみ、天馬に乗った将門が妻の良子と天に上るシーンは女達の涙をさそった。

これで終わりかとおもったが

「これからあの怨霊がうつります」

という声でビクッと身体が反応する。

夜空いっばいにうつる不気味な男の顔

「これが怨霊・藤原元方です」

『ふおおふおお・・・面白いのう・・・われは人が苦しむのが一番うれしい。』

せつかく目覚めたのじゃ、楽しませてもらおうかのう。

そして、我を死に追いやった朝廷のあった京の都を紅蓮の炎で焼き尽くしてくれん。

炎に巻かれた人の悲鳴・・・楽しみじゃ』

夜空一杯の元方の幻影に思わず飛び上がって、利剣をとりだしたあきあに

『おっと、仏の利剣か。今はそんなもの受けるわけにはいかぬ。さっそく消えるでしょう。そうじゃ、京の都を焼き尽くすのは3日後の今の時刻に

しようぞ』

『ひく』という怯えた女達の声……。

そして、闇になった。

『フイツ』という音で行灯が一斉に灯る。小沙希がやったのだ。

そして、一段落した後、関係のない見物人が急いで大広間から出て行く。

残ったのは関係者ばかり。

でもなかなか声をあげるものはいない。……だが

「これが今の私の全てです。女優という仕事をわかっていただけたと信じます」

「しかし、あなたは凄いいお人だ」

と弦四郎。

「私は剣しか知らぬ。だから小沙希……いや婿殿の凄さがよく判る。」

あんな剣法は尋常ではできぬ」

「いえ、あれは清明様のおかげです。私に修行をしていただいたから」

「あははは、あきあよ誰もが修行でお前のように出来るわけではない。」

素質、天分、そして努力がなければそこまで到達しまい。

もうお前はわしを遥かに凌駕しているのじゃ。もっと自身を持つが良い」

「でも清明様、私はまだ迷っております。あの元方を調伏すべきかどうか」

「優しいのう、あきあは。．．．いや優しすぎるから迷うのじゃ」
「でも、晴明様は言われておったじゃありませんか。
元方は自分のせいで我娘を死なせてしまった。それから性格がかわったと．．．」

「じゃが、元方は将門と違って救いようがない。
御仏もあきらめておる。あきあよ、その優しさ律しなければ身の破滅ぞ」

「はいわかつております．．．が」
「というあきあを横目でみて

「ふ」
とため息をつく晴明、あきあに判っているかどうか．．．仕方のない奴じゃ。

一方、新妻のように小沙希の横に張り付く和葉、
一夜だけの妻と女将のお園から聞いてはいた。

でも見た、聞いた．．．自分とは遙かにかげ離れた天上近くにいる
お方、
自分とはとうてい相入れない．．．泣きの涙で消えようか
．．．とぐつと哀しみをこらえている。

そんな和葉に声をかける晴明。

「和葉よ、何を迷い悲しんでおる。迷いは禁もつぞ。

そなたはこのあきあとは相いれぬと思っっているのであるう」

「あつ．．．はい」

「それは違つぞ」

「でも．．．」

「それでは言つてやろうか、そなたは平安期にこのあきあ．．．いや早瀬の沙希姫の

姉、律子姫であつた。そしてあきあの生きる時代の佐野律子という女性、

それはそなたが転生した姿じゃ。佐野律子は早瀬一族の長、早瀬沙希という女性と

夫婦になる」

「早瀬沙希？」

「ふふふ、あきあのことじゃ、小沙希のことじゃ」

「じゃあ」

「そうじゃ、いずれにしてもそなたはあきあと夫婦になる運命と天より定めつけられている女性じゃ。

ついでに言っておいてやろう。結城和葉としてそなたはあきあの子を産む。

男子と女子の双子じゃ、男と女の定まる道は違えども結城家は安泰じゃ。

そして、あきあの時代、女子の子孫はあきあのそばに仕えることになる。

男子はあきあに敵対するかもしれん。じゃがあきあの優しさがあれば

それも氷解していくじやろう」

聞いている弦四郎、喜びに打ち震える。凄い人物とはいえ一夜限りの夫婦の契り、

娘の和葉に子が出来ようとは思ひもしなかった。

現実はこの目に見てみなければ判らないが、教えてくれたのはあの安倍晴明なのだ

おまけに男女の双子ときている。畜生腹といわれたのは今や昔の事。

喜ばしい、本当に喜ばしい限りだ。と一人悦にいつている弦四郎を放っておいて、

次は女将のお園に向き直る晴明。

「お園といつたな」

「はい、晴明さま」

「お前、あきあに母御と呼ばれて嬉しかったであろう」
「そういわれて、再びあの喜びをおもいだしたのか、つい顔が綻んでしまってお園。」

「はい、とても嬉しゅうございました」

「それはそうじゃ、お前は平安時代早瀬の沙希姫を産んだ本当の母御じゃったから」

「えっ？なんと仰せられました？うちが小沙希ちゃんの本当の母？」

「そうじゃ」

「ほ・・・本当でございますか？」

「嘘を申してどうなる」

「前世とはいえ小沙希ちゃんはずが産んだ娘・・・」

「呆然とするが、こうなればいいと言う想像をはるかに越えていたお園。」

「ということはこの和葉さんの前世もうちの娘・・・」
「もう何も言えなくなる。」

「お母様！お母様はうちの時代に飛鳥日和子といううちの叔母様に転生するんですえ」

「えっ？うちが転生？」

「はい、日和子叔母様は警察・・・いえ今でいう奉行所の偉いお役目」

「えっ？うちがお役人？」

「はい、うちの時代は女の地位が少し向上しました。
いろんなお役目に女性が男にとってかわっています。でもまだまだです」

小沙希から聞くこと驚く事ばかりだ。

「小沙希殿！」

「はい！竜馬様」

少し離れた場所で男4人、舞妓や芸妓達に酌をされながら必死に耳を傾けていた。

そのうち竜馬が辛抱出来なくなって声をかけたのだ。

「なんでしょうか」

「済まぬ、その舞妓姿で江戸の言葉は似合わぬ、言葉を改めてはもらえぬか」

「おほほほ、じゃあ、……竜馬様、なんどす？」

竜馬は何かほつとして

「小沙希殿には遠くのこの日本のことを聞かせてもらったが、済まぬが、近くの時代のことを聞きたい」

「はい、維新前後のことどすな。今が慶応元年やさかい、慶応4年が明治元年と

なるんどす。つまり……」

と明治元年の1月初日からの出来事を年表を見るが如く話し出した。

「明治元年1月1日 徳川慶喜、諸藩に討薩の出兵を、大目付には討薩の表を持って
上京するよう命じる。」

1月2日 幕府諸藩連合軍15000、大坂を出発し京都へ向かう。

1月2日 薩摩藩船平運丸を幕府軍開陽丸・蟠龍丸が砲撃。

1月3日 幕府諸藩連合軍、伏見に到着し、伏見奉行所を本営とする。

城南宮を拠点とした薩長軍と対峙。夕刻幕府軍別働隊と薩長軍が鳥羽で衝突。

戊辰戦争が始まる。

1月4日 嘉彰親王が薩長軍本営に入り、事実上の官軍となる。鳥羽・伏見激戦。

1月6日 徳川軍大坂へ退却。

1月6日 徳川慶喜、夜半に大坂城を脱出。

1月7日 徳川慶喜、江戸へ向けて密かに出港。新政府、徳川慶喜追討令を出す。

1月9日 明治天皇即位。

1月9日 官軍、大坂城を占領。

1月10日 新政府、徳川慶喜以下の官位を奪い、幕府領を直轄領と決定する。

・・・これが昔でいえば天下分け目の決戦なんです」

「小沙希ちゃん！・・・この京の土地が戦場になるんですか？」

「へえ、鳥羽・伏見の戦いは幕軍も官軍もぎょうさんの血が流れま

す。新撰組も離散します。・・・たくさんの命がなくなるんです」

小沙希の顔が哀しみでゆがむ。

「上野山を占拠した旧幕臣の彰義隊の方々と大村益次郎様率いる新政府軍。

もつと悲惨なのは会津若松の白虎隊どす。元服前の年端もいかない少年達が

全員討ち死に・・・」

その報告にはもう皆言葉がない。

「新しい時代を迎えるためには少々の犠牲は仕方ない・・・

男はんはいつもそう言っつて戦場に向かわれます。でも残された女達の哀しみ・・・

それを思つと晴明様が沙希姫様に施された女しか産めない一族、

早瀬一族の女達が早く日本の政治や経済の中枢に入らねばとおもっんどす。

男はんにまかせておいたらいつまでも血で血を争う戦争がなくなりまへん」

「しかし・・・」

と声をあげる桂小五郎だが

「いままでの日本の歴史、飛鳥の時代から続く歴史は戦争の歴史です。」

その中に埋もれた女の哀しみは歴史には出てきまへん」

その通りなのだ。それが判るから桂小五郎も何も言えなくなる。

「うちの時代も世界中どこかで戦争して血が流れておるんどす。

でも犠牲になるのはいつも女や子供なんや・・・もういやどす。

だからうち、戦うんどす。怨霊は人を操り、心の醜さを好みます。

そして人に不幸を与えます。もしかしたら怨霊や邪鬼の類が

人に戦争をさせているかも知れないんどす」

「あきあ殿！・・・もういい。あなたの純真な心がよくわかった。

だからあんな笛が吹けるんだろう」

「あんなこと聞いたわしが馬鹿だった。許してほしい。」

済まぬがもう一度『翔龍丸』の音色を聞かせてほしいのだが」

「わしもだ、なんだか無性に聞きたくなった」

「はい」

といい立ち上がった小沙希。手を出すとその手の平に1本の横笛が

口に当てると流れ出す調べはこれからおこるであろう戦いの犠牲者の

鎮霊歌であった。その調べは山を越え谷を越えて自然の中に溶け込んでいく。

見事な笛の手だった。初めて聞く弦四郎も和葉も心が揺さぶられ続ける。

そして、和葉は知った。自分が惚れた人がこんなに素晴らしい人であつた喜びは
一夜限りという些細な事を消し去り、産まれ出る我が子に父の素晴らしさを
どう伝えようかいまからワクワクするのだ。

「さあさ、今から婚礼です。男はんは邪魔ですから隣りの部屋でまっついていってください」

とお園が男達を追い立てる。仕方なく立ち上がる男6人。

「お酒をつけますよって、おとなしゅうまっっているんですえ。覗いたら駄目です」

お園の指示でお膳が片付けられ、新しいお膳が運ばれてくる。

「小沙希ちゃん、どうするえ。その格好で婚礼するんですか？」
菊野がおろおろしながら聞く。

小沙希のために何とかしてあげたいが、なにしろ急なことで置屋を飛び出してきただけに何の用意もしていない。

「大丈夫です、うち隣りのお部屋で着替えてきます」といってスタスタ襖をあけ、そしてしめる。

「幾松ちゃん、着替えるたって何も無いんですえ」

「お母ちゃん！心配無用です」という先から隣りの部屋からりっぱな公達姿の小沙希が出てくる。

「まあ……」

と言ったつきり口をあけたまま動かない。

「お母ちゃん……お母ちゃん……」

幾松に身体を揺すられて我にかえる菊野。

「い……幾松ちゃん……あれ……あれ」

と小沙希を指差す菊野。小沙希の舞台を見ていなかったから仕方がない。

小沙希は座ったまま動かない・・・いや動けない和葉のそばにより
「和葉さん」

と手を出す。下ばかり向いていたので気づかなかった小沙希の公達
姿は和葉の心が波立つほど、
それはそれは立派だった。

「幾松さん姉さん！」

和葉の手を握った小沙希が幾松を呼ぶ。

「小沙希ちゃん！どこへ？」

心配そうに呼ぶ菊野に

「なんだったら、皆さんも来ます？」

という小沙希のあとをゾロゾロとついていく。

隣の部屋には見知らぬ3人の姿が・・・といつてもどこかで見覚
えがあるような。

髪をおろした女が顔をあげ

「主殿・・・でどちらが？」

「お前達も見ていただろうに・・・それほど私の口から聞きたいか
？」

「はい、聞きとうございます」

「では、わたしの妻の和葉じゃ」

というと頬を赤らめる。

「おうおう、主殿の顔が赤くなられた」
と3人で喜びあう。

「玉藻、葛葉、紅葉！もうからかうな！それより早く」
というところの式神達、いそいそと和葉に着替えをさせていくのだ。

「幾松さん姉さん、おすべらかしって出来るんですか？」

「うち、一度やったことあるえ・・・でも」と3人の式神達に視線をよせる。

「平安時代にはそういう髪型はなかったのになるほどと・・・部屋を出ると集まっていた仲居に髪結いの道具を取りにやらせた。」

「和葉さん。うちにはこんなことしか出来ん。妻となるあなたにもっと思い出となるものを作ってあげたいが」というと首を振る和葉。

「いえ、私にはもうこれで充分です。これからのあなたとの時間を思うともう胸がいつぱいで・・・。」
という和葉の言葉に皆、胸を波立ててしまう。

小沙希は袖を通し終えた和葉の手をギュッと握る、それだけでもう何もいえない。

十二単で幾松の仕上げたおすべらかしの髪型、そして千代松がやったお化粧、
日頃化粧ツ気がなかったののでどうなるかと心配だったがそれは見事な女っぷりだ。

和葉と小沙希が舞台・・・いやひな壇の上に座る。

「ひゃあ〜本物のお雛様やわあ」

どんな美辞麗句より花世の言葉がピッタリだった。

仲居に案内される男達、一瞬に立ち止まってしまいその背中にぶつかる始末。

もう言葉がなかった。その中でも父である結城弦四郎はもう舞い上がってしまった。

なにをいわれても

「ふ」

とため息ばかり、もうみんなあきれて放っておく事にした。

そのうち手酌で酒を飲み出し、そして泣きじゃくる。

和葉からみてだらしない父親だが、

横の小沙希がぽつんと言った言葉が胸に残る。

「ああ、いい父だ」

こうして婚礼の儀式は終わった。三々五々に帰る客達、

すっかり酔いつぶれた弦四郎は源太郎の背に乗っていた。

送りに出た夫婦にもういい・いい・と手を振り帰って行く。

こうして二人の時間が訪れた。

湯に入り汗を流す二人。

こっちへと誘う小沙希だがなかなか来ない和葉に上半身を湯から出す小沙希。

「あらっ」

といい和葉はゆっくり洗い場から湯に浸かり向かい合う。

「本当にあるのですね」

「えっ？」

「お乳……」

とそっとなれる。

「ふふふ」

と笑い背中から抱きしめ和葉の大きな乳房に触れる。

「うちもこれくらい大きかったらな。と思ったことあるんです」

「でも、肩がこるわよ」

「やっぱり……じゃあこれくらいがいいのかな」

「ねえ、小沙希さん」

「嫌！沙希と呼んで」

「沙希？」

「ええ、早瀬沙希・・・うちの本名」

「じゃあ、沙希！」

「なあに、和姉」

「和姉？」

「うち、早瀬の女達をそう呼んでいるの。」

身体の関係がある人もまだそうでない人も」

「そんなにたくさん？」

「ええ、それがうちの使命だから。早瀬の女達に子供を産ませ

もつと繁栄させていくのがうちの役目・・・どう、辛い？」

「うっん」

と首を振る和葉。

「それは仕方がないと思う。・・・ねえ、沙希」

「なあに？」

「うちが転生した人どう呼んでいるの？」

「律姉よ」

「同じなのね。そう誰も分け隔てなくするの？・・・沙希も大変ね」

「うん、でもうち、女好きだから・・・」

「こいつ」

そんな会話で打ち解けるふたり。

一方、閨では初めてで緊張していた和葉をベテランの沙希がリードして破瓜が終わる。

男が抜けてもまだ入っているような感覚が何故か嬉しい。

休憩しての2度3度の交わりは硬かった和葉の身体を女としての柔らかく味を植え付けていった。

和葉が女の喜びで打ち震えたのはもう夜も明けるところだった。

先に目覚めたのは和葉だった。目の前に夫がいる。

いや、夫というよりも妹といったほうがいいかもしれない。

舞妓の化粧を落としても、顔は女。とびっきりの美人だ。

女の私より綺麗な旦那様、なんだかとっても不思議だ。

その上、この人は普通の人間ではない。仏がついている。

昨夜交わっていてよく判った。仏が二人の交わりを温かく見守っていたのだ。

和葉の気配で目覚めた沙希は

「おはよう」

と一言、またその声が可愛い。今日の別れは辛いけど今の時を

一生の思い出にするため懸命に沙希の顔、その息遣いを観察する。

「どうしたの？」

「ううん」

という和葉に笑いかける。

感の鋭い人だから私の気持ちはもう掴んでいるのかもしれない。

「さあ、もう起きましょう」

「もう？」

「だって和姉、道場で待っている人がいるのよ」

「道場で？」

「ええ」

「誰が？」

「新撰組の沖田総司様」

「新撰組？」

「この間の夜、新撰組に悪戯をしようとしたの。」

でもその前に舞妓の鈴音ちゃんを罠にかけようとする悪い人達がい

て

仕方なくその人達をやっつけてしまったの」

「じゃあ、あの瓦版に出ていた鞍馬天狗というのは」

「ごめん、うちのこと」

「もう、沙希は危ないことばかりして」

と叱る。

でも

「クククク」

と笑う沙希。

「どうして笑うのよ」

「だって、皆私に対していうことは同じなの。」

又、沙希は危ないことをして！逃げる事も勇気です」

「その通りだよ。沙希」

「うん、判ってる。でも身体が先に動いてしまうの。ではっと気づ

けば後の祭り。性分なのね」

「あきれた」

「ねえ、和姉。こんな私嫌？」

「知らない！」

「和姉・・・和姉ったら」

「もう・・・なによ」

「口づけしよう」

とぱっと覆い被さり唇を奪う。

「うっう」

と唸るがそのうち沙希の口付けのつまさについて手を沙希の身体に回し

抱きついてしまう。それは長い時間だった。

「ぶ〜」

とやっと唇がはなれるとつい深く呼吸をしまつ和葉。

「沙希つてずるい」

「ウフフ」

と笑いながら和葉に抱きつく沙希。

「もう、沙希の甘えた」

「ねえ、和姉」

「ん？」

「これ、嵌めていてくれない」

と出したのは指輪だった。石はダイヤモンド。

でもこの時代での価値が判らない。

「何よ、これ」

「指輪」

「指輪？」

「うん、ここにいるのはダイヤモンドという宝石よ」

「宝石？」

「そう」

「高価なの？」

「うん、今の価値でいえば1万両ぐらい」

「1万両！……冗談でしょ」

「そう、冗談」

「もう沙希は！」

「でも今の時代で価値が判らないというだけ。

私の時代でいえばこの指輪ひとつの奪い合いで何百人と殺し合いするかもしれない」

「やだよ。そんな恐ろしいもの」

「だからこの指輪に術をかけておくわ」

「術？」

「ええ、これはうちと和姉だけの秘密。術でガラス玉に見えるようにしておくわ」

とって呪をかけると輝きが変わった。

「さあ、これで誰もが本物だとわからないわ」

とって和葉の左手薬指に指輪を嵌める。

「和姉、これを和姉の長女に引き継いでね」

「長女に？」

「ええ、和姉に生まれる双子の女の子は又男女の双子を産むの。

そういうふうには結城家は続いていくわ。ええ家を継ぐのはいずれも女の子よ」

「男は家を出るのね」

「そう、そしてその指輪は女の子に受け継がれていくわ。

そしてわたしのいる時代になったらその指輪を持って私を訪ねてきてほしいの。」

早瀬一族の女として」

「わたしはその頃再び沙希の妻として転生しているのね」

「そうよ、佐野律子。わたしの愛するマネージャーとして。でも、ごめんね」

「なにが？」

「今の和姉に女の喜びを教えてしまって、夫婦は今日限りだということに」

「いいのよ、もう女は忘れる。そして今日から母になる。

いえその準備に入るの。だから剣も捨てる。母としてりっぱに子供を育てましたと沙希に誇れるようになる」

「和姉！がんばって！」

「ええ」

と和葉は女から母へと決意を沙希に誓う。

和葉と小沙希は結城道場の門をくぐった。

小沙希は早瀬沙希太郎として、和葉はその妻として。

先触れを出しておいたので父の弦四郎と門人達が迎えにでていた。彼等が目を見張ったのは、一夜にして鬼娘から女に変貌した和葉の姿だ。

硬質だったその身体と態度がすっかり柔らかか味を帯び女になっていた。

「父上、ただいま戻りました」と挨拶する沙希太郎。

「で、首尾は？」

「はい、おかげさまで」

「それは重畳・・・」

それで婚姻の夜の報告が終わった。

「父上、沖田様は？」

「先ほどから道場でお待ちだ」

「では、さっそく」

と玄関に入る。

「父上、食事は？」

「もう終わった」

「そうですね、では私があとをかたずけます」

「和葉、お前道場へは？」

「わたしはもう剣を持つつもりはありません」

「えっ？」

「これより、女として母となる修行をいたします」

「おおう、そうか」

剣を止めると聞いて少し寂しそうだったが、母の修行と聞くと孫のことを思い、喜びが込み上げてくる。

道場から

「先生！」

と呼びにこられ慌てて道場へ向かう父の姿を見送り、台所へ向かう和葉。

ばあやにこれから教えを乞おうというのだ。

沙希太郎が道場に足を踏み入れたとき、あつと危うく声を出すとこるだった。

片方には坂本竜馬、桂小五郎、相良新太郎が座っており、

その対面には今日始めて見るが本でよく知る新撰組の近藤勇、土方歳三、沖田総司が座っている。

そして苦笑いを浮かべながら師範代席に座るのは篠原源太郎……どうせ源太郎が仕組んだものだろう。

仕組んだ方がいいが、仕組みそこねてこんな状態になってしまい、困り果てているというのが真相か。少し苛めてやりたくなる沙希太郎。

何も知らぬ門人達こそいい迷惑だ。緊張のあまり顔色がみんな悪い。

沙希太郎は源太郎には目を合わせず、素知らぬ顔で挨拶をした。

「坂本竜馬様、桂小五郎様、昨夜は私の婚礼にわざわざきていただき

本当にありがとうございます。

竜馬様には夕べのお約束の品、あとでお見せいたします」

と、いつて反対側に向き直り

「新撰組の近藤勇様、土方歳三様、沖田総司様とお見受けします。お初にお目にかかります。早瀬沙希太郎と申す未熟ものです。

先日は沖田様には私の悪戯でご迷惑をおかけしました。

改めてお詫びを申しあげます」

と挨拶する。新撰組の席から沖田総司が沙希太郎に気軽に声をかける。

「沙希太郎さんとおっしゃいましたね。実をいうと私はあなたを2度ほど

見かけているのですよ」

「えっ？」

「一度目はやくざものの店先で10数人の男達を叩き伏せたとき。そして二度目は昨日、玉屋の女将を襲った浪人達を鞭でこれまた全員を叩き伏せられた。

私が見た二度とも沙希太郎さん。あなたは舞妓姿だった」

驚いたのは門弟達と近藤と土方だ。目を見張る中

「立ち会っていただけますね」

「はい、よろしいでしょう。でも沖田さん。少しだけお待ちいただけますか？」

「待てと言われるのは？」

「はい、私は昨夜この道場の娘である和葉殿と婚礼をあげました。ですから私はまだこの道場に役立つことを一つもしていません。

今から門弟の方々に稽古をつけるつもりです。

それが終わるまで待つてくれませんか」

「門人の方々に稽古を？・・・いいでしょう。」

あなたがどんな稽古をつけられるか、私も興味がある」

そう言つて沖田は座りなおした。

師の席に座る義理の父に

「父上、よろしいでしょうか」

「うむ」

と頷く弦四郎。

懐から出した白い鉢巻をきりりと絞めた沙希太郎、
竹刀を持つと

「谷川さん、来なさい」

「はっ」

どうして自分の名前を知っているのかわからないが全力でぶつかって行く。

でも確かに竹刀をあわせたはずなのに音がしない。

息があがっていく。苦しさのあまり突っかかっていったが、まるで風に巻かれたように竹刀が天井に当たって落ちた。

自分は少しは強くなったはずだ。だが全然刃が立たなかった。

呆然と座り込む谷川弥一に

「谷川さん、あなたは腕の力に比べ腹筋の力が凄く弱い。だから腰が定まらない。

切っ先がゆれるのもそのせいです。谷川さんは今日から腹筋を毎日1000回、

数を軽々こなせるようになったら、2000・・・3000と目標値をあげていってください。最終は10000回です。

10000回を毎日出来るようになったらあなたは強くなる。

・・・はい、次！横田さん」

とこうして門弟達に稽古をつけていく。

そして次々と門弟達の弱いところを指摘し、強化するよう教えていくのだ。

こんな剣術の師範は今まで皆無だった。

「おい！あいつ化け物だ」

そっけつなのは土方歳三だ。

「はい、わたしは見ていて背筋が寒くなっています。

いくら実力差があるからといって、これだけの激しい稽古をしているのに汗一つかいていない。

それに一度も沙希太郎殿の竹刀から鏗鳴りがしないのです」

一方、相良新太郎が

「坂本さん、桂さん。わたしは幼いころから剣術は苦手な修行など
しませんでした。」

だから聞くのですが、剣術の稽古ってこんなに静かでこんなに美しい
のですか？

「なんだか舞を見ているようです」

「そんなことはない、剣の修行は無骨なものだ。わたしもこんな稽
古と教え方を初めてみる」

と桂小五郎がいう。

「桂さん、千葉周作先生が音無しの剣法を破ったとき、

その気合で道場の床を踏み抜いたと聞く。だが、沙希太郎の剣を鳴
らそうとしても

いくら千葉先生でも無理だ。まるで柳に風で受け流されてしまう。

豪の剣では破れない。わしが剣客ならば出会えた喜びに身の内が震
えたであろうな」

「坂本さん！今からでも遅くはない・・・どうだ？」

「いや、もう遅い。わしのなまくらな腕ではあの門弟達と同じめに
あうだけだ。」

あいつ、古くから伝え聞く剣豪の中で一番強いのではないか」

もう一人心躍る人物が・・・。

「おい、弦四郎さんよ。そんなにニヤニヤして喜ぶな！」

横から源太郎が叱る。弦四郎は横目でジロリと源太郎を睨むが
しかしその口は今にも綻びそうだ。

「しかし、えらいやつを娘と夫婦にさせたもんだなあ。

こんなやつ二度と出るめえ。弦四郎！おめえの娘の和葉さんはてえ
した眼力だぜ。」

おめえより1枚も2枚も上を行くぜ」

「なに、偶然だ」

というのが実際は心の中が（でかした！）と喜びで小躍りするほどはずんでいる。

「しかし、今日で帰ってしまったんだなあ」

「ふむ、残念だが仕方があるまい」

「弦四郎！おめえ、あいつの血を引く孫に期待しているな」

「そうだ。あの安倍晴明様が言われたことに違いはあるまい」

「うらやましい奴だ・・・弦四郎！そんな顔をするな！」

もうあきれて、慥然とする源太郎だ。

「以上です。わたしの言ったことを忘れず必ず身体の強化をしてください」

「はい！・・・ご教授！ありがとうございました」

という門弟の挨拶に頭を下げた沙希太郎。

だが門弟達、誰も立とうとはしない。

このあとに控える新撰組の天才剣士といわれる沖田総司との立会いがあるのだ。

みんなもうワクワクしている。

「お待ちせしました。沖田さん」

「少し休む・・・必要はなさそうですね」

「はい」

とにつこり笑う沙希太郎。

「では、竹刀で・・・」

「いえ、沖田さん。お願いがあります。あなたは腰の名刀”菊一文”で

私と立ち会っていただけませんか？」

「真剣で・・・ですか？」

沖田はまじまじと沙希太郎の顔を見てから、そして近藤と土方の方に振り返る。

近藤と土方はむすつとして答えない。
沖田が聞く。

「お互い真剣勝負ということですか？」

「いいえ、私はこれを使います」

と立ち上がって持つてきたのが、先の細い鞭だった。

「あなたはわたしを侮っているのですか？」

沖田は沙希太郎を睨み付けたが、沙希太郎は動じない。

どうやら考えを改めるつもりはないらしい。

「こうなればわたしはあなたを切る！」

そう言つて刀掛けから刀をとつて腰にさした。

そして菊一文字をスラリと抜く。

「あなたの新妻を嘆き悲しませても知りませんよ」

といつて口を歪めて笑つた。

剣を取つたら人が変わる。こうなれば近藤や土方といえど、もう沖田を止めることは出来ない。

源太郎も弦四郎もどうして沙希太郎が沖田に真剣の立会いを望んだのか訳がわからなかった。

だがもう止められるものではない。

二人の緊迫した気が道場を包んだ。みんな蒼白になつて見つめてい

る。先に沙希太郎が動いた。沖田の胸を狙つて突いて出たのだ。

しかし、沖田は待つていた。その鞭を狙つて切り下げた。

だが鞭は弓のようにしなり、沖田の顔面にすれすれを通る。

「あつ」

と声を発して後ろに跳びのいた。そんな激しいやりとりが続くが、沖田には沙希太郎の動きが全く読めてはいなかった

動きどころかあの鞭がくせものだ。まるで生き物のように動くので予想がつかない。
懐に跳びこもうとするのだが身動きが取れなくなった。

隙だらけのように見えて隙が全くなかった。

たかが鞭と思っていたが、こうなれば刀にはない恐ろしさがある。立ち会う前にわかっていたが、立ち会ってみるとそれ以上の実力。『かなわない』と思ったら最後、相手が大きく見えて手足が動かなくなる。

自分は勤皇の志士に恐れられる新撰組の沖田総司である。

このままでは終わらせられない。かなわぬまでも一太刀をあげせてやらねば・・・
と気力が湧きあがってくる。

でもこの勝負、時間が長くなればなるほど沖田に不利になる。

重い刀を持つ沖田と軽い鞭の沙希太郎。

ましてや夕べも喀血したばかりの沖田。しだいに身体が重くなってきた。

顔色も紙のような白さだ。

そのとき『来る！』と感じたのは剣士としての長年の経験からである。

目の前の沙希太郎が二重に振れてみえ、そしてフツと消えたのである。

「沖田！上だ！」

近藤が声をあげた。

ハツと見上げると天井に足をついて屈みこむ沙希太郎、その反動で速度を早めて

襲ってくるのか？・・・だが沙希太郎は身体を捻った。

そして又見えなくなった。と思ったら沖田の身体に鋭い痛みが何箇所

所も感じられる。

沙希太郎の姿は全く見えない。だが風を切る音がする。

沖田は痛みを堪えながら刀を振る。だが何の手ごたえもない。

痛みは後から後から襲ってくる。もう刀を振り上げも出来なければ立ってもいられなくなった。

刀を杖代わりに崩れるように座り込む沖田。だが一瞬、沖田の天才が目覚めた。

どこにそんな体力が残っていたのか。1mほど飛び上がり、まず切り下ろして

斜めに切り上げてから、水平に払った。

その3つの動作を飛び上がった瞬間に一瞬のうちにおこなつた沖田総司やはり剣の天才だった。

床に降り立つと満足げに笑い、そしてドツと倒れこんだ。

「沖田！沖田・・・しっかりしろ！」

近藤と土方が沖田にかけより抱き起こした。

すると上のほうから『ポツリ・・・ポツリ・・・』

と血のしたたりが・・・、見上げるとフワリと飛び降りてくる沙希太郎。

一体何処にいたのだろうか、先ほどは姿が見えなかったのだが。

その沙希太郎の姿、左の肩口が切り裂かれ、ブランと垂れた左手の甲から

血が滴り落ちていた。

その沙希太郎に走り寄つて来たのが新妻の和葉だ。

心配で物陰から見ていたのだろう。

持っていた白い布で沙希太郎の傷口をしっかりと押えた。

「和姉、心配いらないわ。傷はすぐに治るから」

と押えていた布を外してみると、なるほど出血は既に止まっております。その長い刀傷もあれよあれよと言う間に消えていった。

これには医者としての立場から沙希太郎の傷を治療しようとするそばに寄ってきた

相良新太郎、和葉に先を越されてしまったが傷が消えていく様をつぶさに見て

医者としてありえないことに肝を潰してしまった。

「これはあの『翔龍丸』と『緋龍丸』にいた金龍・銀龍の仕業なのですよ」

なるほど『生涯の鎧』とはこういうことだったのかと感じ入った

坂本竜馬、桂小五郎そして篠原源太郎。

だがそんなこと知らない他の者達は啞然とするのだ。

「和姉、冷たいお水を持ってきてくれる？」

といいながら沖田の横に座る。沖田はまだ気がつかない。

「近藤様、土方様・沖田様のこの消耗のぐあいを良く見ていてくださいね」

自分でやっておきながら何をいいやがる。とムっとする近藤勇と土方歳三。

沙希太郎は沖田に向かって手をかざす。

すると何やら空気が変わった。蒸し暑かった道場の中に爽やかな風が流れてきた。

沖田の様子も苦しそうだったのが次第に落ち着き、顔色も蒼白だったのが

赤味をおびてきたのである。

もう大丈夫だった。医者として何の役にも立たなかったが、沙希太郎がいる以上それも仕方がないと自覚していた。

沙希太郎の医学の知識は自分など及ばない別次元のものだったから

である。

沖田の目が開いた。じっと手をかざす沙希太郎をみて微笑む沖田。

「早瀬さん」

と少し声がかれていたが和葉が持つてきた水を飲んで落ち着いたのか

「あなたがわたしにやっていただいた事、感じていましたよ。

あなたは自分の命を削ってまでわたしに光を与えてくれたのですね」

「沖田さん。あなたは自分の命を粗末に扱い過ぎます」

と怒ったような口調で話す沙希太郎。

「だが私には心配してくれるような人は・・・」

と言いかけた時、すつと沙希太郎が指し示す方を見ると

武者窓から覗く大勢の女達、その中で心配そうに沖田を見つめる1

人の女性・・・。

「あっ！」

「いるでしょう、沖田さんを心配している人が・・・。

和姉、あの方々を道場に連れてあげてください」

和葉はにっこり笑うとすぐ道場を出て行った。

「沙希太郎さん」

と今度は心安げに名前を呼ぶ沖田。

「あなたはわざと私を怒らせたでしょう」

えっ？という顔の近藤と土方そして弦四郎。

「ああ言わなければ沖田さんは治療をさせてくれなかったでしょう」

「治療？」

「ええ、今のは立会いでもなんでもなかったのですよ。

私はあなたの体の治療をしていたのです」

「それどういうことですか？」

「はい！」

といつてから外から入ってきた女達が周りを取り囲んで座るのを待ってから、

「近藤様と土方様にお聞きします」

『ん？』という顔のご両所、

「なんででしょうか？」

と土方が聞く。どうも近藤の口が重たいのは諸説あったが本当らしい。

「昨夜、沖田さんが大量に喀血したのはご存知だったのでしようか？」

『あつ』という声をあげたのは1人や2人ではない沖田自身も思わず声をあげた。

「どうして……どうして知っているのですか？」

沖田自身で上げた声で本当のことだとわかった。

近藤と土方の顔からさーっと血の気がひいた。

とくに近藤は沖田の幼い頃から知っているし自分の弟のようにおもっていた。

いや、もう肉親と同じなのだ。

ワナワナと唇が震えだす。

「お……沖田！……本当なのか？」

「いやだなあ……そんな顔しないでください。……でも安心しました。」

今の近藤さんも土方さんも江戸の田舎にいたときと同じだ。

最近のお二人にはそばに寄るのも嫌だったんです。血の臭いしかなない。

だから1人で死のうと思いました。人を切りまくってその上で切られて死のうが本望だと思っていました。

でも今は土の匂いがします。みんなで走り回ったあの頃の……懐

かしいなあ……」

何だか沖田の目が光っているようだ。

ふと気がついた沖田が

「沙希太郎さん、あなたは今の立会いではない、治療だといいましたね。」

訳を聞かせてください」

「はい」

といつてから沙希太郎は道場の中を見渡した。門弟達の座る後ろにひっそりと

座る女達、菊野屋の女将と芸妓と舞妓達、仲良くなった真田屋の芸妓や舞妓達、

そして玉屋の女将のお園までもが顔を見せている。みんな場所をおもんばかりで地味な町娘の装いだ。

……そして、もう1人……

「鈴音ちゃん！こっちへいらっしやい」

「ハイ」

と小さな声で返事をし、うつむきながら近寄ってくる。

恋しい人のために必死なのだ。

沖田は沖田で黙って鈴音の顔をじっと見ていた。

「もう、いいでしょう。身体をおこしてください」

近藤と土方の横からさっと沖田の身体に手をかけておこすのは鈴音だ。

近藤と土方は仕方なく見ているが苦笑いしている。

本心はといえば、飛び上がるほど嬉しいのだ。

女に関して朴念仁だと思っていた沖田。女を知らずに若い命を散らすのかと

いてもたってもいられなかっただけに、もうとんでもなく嬉しいのだ。

「鈴音ちゃん、沖田さんの上をはだけて見せて」

鈴音の手が一瞬とまったが、沖田の上を脱がす。

「あっ」

という声、肌に多くの赤い点が……

だが近藤と土方の目につるのは江戸では細いながらも隆々とした身体を

していた沖田が……なんだこの痩せ衰えた身体は……
思わず唇を噛み締めた。嗚咽が洩れそうになったからだ。

こんな身体では……もう沖田を修羅の道に連れてはいけない。

「沙希太郎さん！これは何ですか？」

「これは経絡を突いたものです」

「経絡？……やはりあなたでしたか。あの鞍馬天狗は」

「あっ」

と声をあげた門弟達、今や京の町では鬼面組を倒したと評判の鞍馬天狗が若先生だなんて……。

「ごめんなさい。わたしの悪戯で京を混乱させて」

「もういいんだよ、沙希太郎。もう終わった事だ」

と源太郎も言い添える。

「沖田さん、あの時は悪い奴を退治する経絡を突きましたが、
今日はあなたの身体を救う経絡を突きました。」

鈴音ちゃんに聞けば沖田さんは極端な医者嫌いというじゃないですか。

だからわたしは策を練って立会いに見せかけてこうして治療したんですよ。

さもないと、あなたは今夜二度目の大発作で命運が尽きたところで
す」

「えっ？」

と声をあげたのは近藤。

「それじゃあ、沖田は今夜……」

「はい、そうです。近藤さんと土方さんは明日の朝、

なかなか起きてこない沖田さんを起こしに部屋にいった

血反吐を吐いて冷たくなっている沖田さんを発見していたでしょう

ね」

「むむ……」

と声が出なくなる。

「近藤さん、土方さん。沖田さんをあなた達のそばから離して療養させてあげてください。はつきりいえば私の治療だって沖田さんの命を少し延ばしただけです。

悪くなることはあっても絶対に良くはならない。

あとは鈴音ちゃんのお愛情ある看護でどれだけ生きるかということです。

それに、もう剣は握れないでしょう。

勿論、激しい動きはできません」

近藤は土方と顔を見合わせていたが、近藤が鈴音にむかって

「鈴音とやら、沖田のことよろしく頼む。こいつには青年らしい青春がなかった。

ぜひ、それを味あわせてやってほしい」

と頭をさげる。土方も頭を下げた。

「近藤さん！土方さん！」

沖田が悲鳴をあげる。近藤の袴にくらいつくように捕まえる沖田。

「沖田！もういいんだ……もういいんだよ……」

ぼんぼんと子供をあやすように軽く叩き続ける近藤。

「沖田！」

と土方が話し出した。

「坂本と桂がここにおいて話すことではないかも知れん。でも俺達の正直な気持ちを話す。」

「……徳川の世はもう終わりだ。終わりなんだよ、沖田。」

それでいて何故だ！坂本の目がそういつているが、なぜだか俺にもわからん。

意地……そう、意地だけで俺達は生きてきたんだ。意地だけで新撰組をつくり

意地だけで多くの勤皇の志士を切ってきた。だが俺がそれが悪いとは思わんのだ

だが世の中はかわりつつある。ここにいる坂本達がなにをやっているのか知らんし知りたくもない。

ただ俺達はこれからも切り続けるだけだ」

そう言葉を結んだ。

「沖田！おまえはもういい。おまえは新撰組の一番隊隊長として充分な働きをしてきたんだ。

これからは身体を休めて病気を治せ。そんな身体では剣も持てないし、俺たちの足を引つ張る」

「近藤さん、土方さん、身体を治したらもう一度新撰組に帰ってもよろしいですね」

「ああ、必ず帰って来い。みんな待っているからな」

そう元気づけるが沖田のやせ細った身体でどこをどう治せというのだ。

俺たちもむごいことをいう。もう助からぬ……そう覚悟した。

「早瀬殿、沖田をよろしく頼む」

そう近藤が頭を下げる。

「はい……といつてもわたしの出来るのはここまでです。」

鈴音ちゃん、沖田さんの身体に私のつけた赤い印のところを毎日指圧をしてあげるのでよ。そこは人の身体にあるツボといつて、

そこを押すことにより少しは病気を抑えることが出来ます。相良先生、鈴音ちゃんと沖田さんのことよろしく頼みます」

「沙希太郎さん！・・・あなたは？」

沙希太郎は沖田になつこり笑いかけ

「もうわたしに残された時間はあとわずかです。時が私のいるべきところへ帰れ！

そういつてます」

と言つと

「沙希！これに着替えを」

と風呂敷包みをもつてきた和葉。幾松達も周りを囲む。

もうこうなつては男の出番はない。門弟達と近藤や土方、坂本や桂でさえ

道場の隅に追いやられた格好だ。

風呂敷をあけるとこの時代に着てきた沙希のセーラー服が入っていた。

「沙希、どうする？向こうで着替える？」

「和姉、大丈夫よ」

と口の中で呪を唱えると、いきなり着物が入れ替わつた。

セーラー服に身を包んだ沙希、結つた髪が解け黒髪は背中に落ちる。

沙希のことを知らない近藤達と門弟達はその不思議な術に唖然としている。

風呂敷の中に残っていた陣八を取り上げた和葉、沙希の額に『パチッ』と止める。

手甲は玉屋のお園が沙希の左手に止める。

用意が出来た沙希に抱きつく和葉。

「沙希！頑張つて・・・怨霊になんか負けちゃ駄目よ。私はここからしか応援できない。」

でも、子供のことは安心して！必ずあなたが生きている時代に・・・

あなたのそばでああなたのお手伝いができる子供を・・・いえ、孫、ひ孫と

代々あなたのことを・・・あなたがどんな人だったか言い聞かせていくわ」

「頑張つて！和姉。あなたならできる。私、指輪を持って私を訪ねてくる

あなたの子孫を楽しみにまっているわ」

「小沙希ちゃん、負けたらあかんえ。うちあなたに聞かされて

藤原元方のこと調べました。悪い奴なんどすなあ、怨霊になつても人を呪い殺したり、地震をおこしたり・・・

小沙希ちゃん！そんな奴こてんばにやつつけてやりなはれ。うちがついとるさかい」

と妙な励ましをする菊野。

菊野屋と真田屋の芸妓や舞妓に口々は励まされた。別れを口にする者はいない。

幾松と千代松からはそれぞれ大事にしていた簪と清水さんのお守りをもらった。

朝早くから二人して清水さんへお参りに行ってきたという。

「小沙希ちゃんの時代にも清水はんはあるゆうたかて、時代時代によつて

その住職はんによつてお守りの効き目に差があるつて千代松がいうんどす」

「そやかて料理屋でも花板が変わつたら味が違うのと同じどす」

千代松が強行に言う。
「どうやらそれで喧嘩になったようだ。」

「幾松姉ちゃん、千代松姉ちゃん。うちが原因の喧嘩ならすぐに止めて！」

いつも仲のいいお姉ちゃん達の姿をこの目に焼き付けておきたいの
「
そういわれてそっぱを向いていた二人、手を取り合って小沙希に微笑む、
でもどうしても泣き笑いの顔になってしまふ。」

沙希は道場の中央で正面に座る父の結城弦四郎に向かって座る。
和葉もその横に並んだ。

「父上・・・さらばとは申しません。行って来ます」といってあたまを下げる。

弦四郎にとっても娘の和葉にとっても
その言葉はもう言い表すことが出来ないほど嬉しいが、やりきれないほど哀しい。

行って来るといっても二度とは帰って来れない身の上だ。

和葉は気丈にも耐えている。それを思うと言り返す言葉が何も浮かんでこない。

ただ
「うむ」

と言葉にならない声が口についただけだった。

沙希にはなにもかもがわかっていた。だからわざと座ったまま身体を回転させて

坂本竜馬のほうを向いた。

「坂本竜馬様、夕べあなたに見せるとお約束した品をここでお見せします」

「おお〜」
という声をあげて門弟わかきわけて来て、沙希の目の前に座る。

沙希が手を前に差し出すと、急にその手の平から黄金色の光が出てきて

手の平より1尺ほど上にフワリと宙に両刃の大刀と綱があらわれた。

門弟達も『ガバツ』と立ち上がる。近藤も土方も、この道場にいた全員が立ち上がったしまった。

いや沖田は横になって少しずつ沙希のことを鈴音と相良から聞いていたが
さすがに二人によって体を起こして茫然と見ていた。

「これが不動明王様より下しおかれた利剣と綱索けんさくです」
竜馬は黄金に光るその大刀を握ろうとしたが竜馬に触ることさえ出来ない。

「早瀬殿・・・これは？」

「はい」

とにつこりと笑うと利剣を手にとる。

そして、開け放たれた中庭にある大きな岩に向かって、こんな離れた場所から

「とおう！」

と突きを入れた。するとどうだろう。

あんな大きな岩が『グラグラ』と揺れて、突きが入ったと思われる真中から

すーっと上下真っ直ぐな線が入り二分されたのだ。

「す・・・凄い！」

「いや・・・驚異だ！」

門弟達が交わす言葉。
竜馬も桂も・・・いや、近藤や土方でさえも呆然と突っ立っているだけだ。

「早瀬さん！」

と身体を起こした沖田が沙希に向かって言った。

「あなたを見ていると・・・」

「はあ？」

と聞きなおす沙希。

「あなたを見ていると、まるで神を見ているようだ」

「いえ、沖田さん。私には自分でも信じられないような力がありますが、

私は人でありたい。常にそうであるよう思いつづけています」といってから

「父上！・・・せんないことをしました。形の良い岩であったのに・・・」

「いや、これはこれで形が良い。なにせ婿殿が形として残してくれたものだからな。

今に評判になるうて」と笑っている。

沙希は和葉の手をとり見つめた。和葉も見ている。

今生の別れなのだ。もうこの身体に触れ合うことはない。すると、まだそんなはずはないのに

『トクトク』と小さな鼓動が2つ沙希に聞こえてきた。不思議そうに自分のお腹を見つめる沙希に

「沙希！どうしたの？」

はっと顔を上げた沙希のその顔には輝くような笑顔あった。

「和姉！聞こえたわ！・・・そんなはずはないのに聞こえるの。微かだけど小さな鼓動が2つよ」

和葉は跳び上がった。その嬉しさにこぼれんばかりの笑顔を見せて・

周囲にいる者も喜びあっている。

「和姉、だめだよ。そんなに激しく動いちゃあ」

「沙希！何言ってるのよ、今からそんな・・・」
と笑われてしまう。

「良かった。これで笑顔で行ってくれるわ。和姉」

「そうね。私も元気な赤ちゃんをうむわ。」

そうだわ。赤ちゃんにはあなたの字を一つづつつけるわ。うん、そう決めた

孫もその下の曾孫も・・・」

とだって笑う。

「じゃあ、わたしも子供達に何かを残してあげなくちゃ・・・そうだわ。」

そんなことないと思うけど、この家に結界を張っていくわ」

「結界！？」

「ええ」

といつてから

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

と九字を切り、

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これ四神相應の陣という」

そして、高々と宙に五芒星を描きその手で地を刺し貫いた。

「ええい」

すると一瞬空間が歪み、それが広がった。

そして、清廉な気がこの屋敷を包み込んだ。

見えないものでも感じることは出来た。

この女とも男とも見分けがつかないこの人物・・・凄い人だったんだ。
と門弟達は囁きあつた。

「母様・・・」

と沙希が呼ぶのは玉屋の女将お園。

「母様、和姉のこと頼みます」

「小沙希ちゃん。わかつておりますえ。今は血のつながりはないと
はいえ、

前世では親子。産まれて来るのはうちの孫同然どす。

きつちりあんたの生きる時代まで血のつながりを続けていきます。
だから小沙希ちゃんも藤原元方なんて怨霊、あんたの力で調伏して
しまつてね」

「ええ絶対にこの京をわたしのいる時代の京を焼け野原になんて
させません。きつと打ち勝つてみせます」

「沙希太郎さん！話は全て聞いた。あなたは凄い人だ。

それでこの菊一文字をあなたに預ける。ぜひ持つていてほしい」

「菊一文字を？」

「そうです。この刀にわたしは幾多の人達の血を吸わせてきました。

でもわたしがこの刀を持つまでは鬼切りといわれた名刀でした。

その昔から鬼を切つて刃こぼれひとつしなかつたと聞いています」

「その名刀を私に？」

「そうです。それにわたしはもうその刀が持てない

・・・そんな気がします」

「判りました。では預かります。沖田さん！・・・」

わたしとともに戦いましょう。この刀はあなた自身です。
あなたと共に戦っていきましょう」

そういつて刀のさげ緒を伸ばし菊一文字を背にする。

そしてみんなの視線を背に中庭に下りる。用意しておいてくれたス
ニーカーに

足をいれたのだ。

みんな中庭に玄関から回ってきた。

道場では沖田が鈴音と相良新太郎に支えられて沙希を見ている。

「小沙希ちゃん！あなたの時代へ行くつてどこか行くの？」

「はい！ちょうど比叡山のはるか上空に刻の穴くぎのあながあります。

それを通って行ってきます」

というとすーと浮き上がる。

「あつ」

皆声を上げた。ありうべからず光景なのだが一瞬驚いただけ

皆は小沙希なら・・・沙希太郎なら当然とおもつから不思議なのだ。

「では、皆さん。こんなところから失礼しますが、本当にお世話に
なります。

わたしはこれから戦場に行きますが必ず勝ちます。

どうか皆様見守っていてください」

そうなのだ。小沙希の時代ではみんなすでに亡くなっている。

見守っていてほしい。和姉・・・母様・・・皆・・・

下界で小さくなっていく皆・・・京の町・・・に別れをつげた。

第二部 第九話

(小沙希ちゃん……こさ……き……)

……
……
……
……
……
……
……
……
……

「沙希ちゃん……」

「沙希! ……」

「あつ! ……これは! ……」

という声と共にパチッと目を開ける沙希。

視野には何人もの姉達の顔が沙希の顔を覗いてた。

「お婆ちやま、沙希姉さんが目を覚ましたわ」

とひづるが叫んでいる。

「えっ? 小沙希ちゃんが?」

とその歳でどこにそんな若さが残っているのか、
走りで隣りの稽古場から高弟をつれて大広間に入ってきた。

「小沙希ちゃん、よう目を覚まされましたなあ」

と大広間で寝ていた小沙希の枕元に座り、ホツとしたようにつぶやいた。

「下の病室に寝かせようと思ったんだけどまだ遷が帰っていないからお母様が心配だから目の届くところに寝かせておきたいっていうも

のだから」

と真理が祖母の横に座っている。

「本当・・・心配したんだから・・・」

杏奈が涙声でいった。

「杏奈ちゃんはずっと枕もとについていたのよ」

「京都府警の婦警さん達も心配されて全員残っているの。今、交代で下の温泉入って貰っているわ」

と今度は薫。

「日和子叔母様もこちらへ着いた早々、沙希が倒れたって聞いたから」

急いで比叡山の仮設本部からとんで帰ってきたのよ。

忙しくてお風呂にも入っていないくて、今京都府警の婦警達と一緒に温泉に入っているわ」

と今度は奈緒。・・・と続けて

「森田さん！悪いけど下に行って飛鳥警視正に沙希が目覚めた事伝えに行ってきた」

くれない？」

という

「判りました」

と嬉しそうに襖を開けて出て行った。

しばらくするとこの大広間は入りきれないほどの女性で溢れた。

入れなかった人は廊下に座っている。

地下の病院の看護婦達や宿泊施設、娯楽施設や温泉等療養施設とそこで働く早瀬の血を引く女たちや、早瀬一族に認められて働く女達が一堂に会している。

祇園の舞妓や芸妓も全て揃っているし、また、直接早瀬一族の長となる早瀬沙希に、

今世間で一番有名な天才女優日野あきあに会ったことのない女性達も大勢いた。

そして、自分達の頂点となる沙希を直接感じるためにこうしてここにいるのだ。

「お婆ちやま」

と大広間に直接響き渡る良く通る声、鈴の音のような声とはよくいったものだ。

声の可愛らしさにゾクリと身を震わすものもある。

そして・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「沙希！あなたが目を覚ます少し前、不思議なことがあったのよ。

ねえ、杏奈」

と律子が言う。

「ええ、私達ここにずっといたので・・・はじめは目の錯覚かと思っただけど」

と隣りの吉備洋子に視線を移す。

「ええ、沙希の姿が2度3度ぶれたのよ」

と吉こと吉備洋子。

「でも、錯覚じゃなかった。少し前の沙希にはなかったわ。その背中の中の日本刀」

と順子が言う。

「何なのよ、沙希。この広間の隅で婦警の皆と仮眠していたけれど皆の叫び声でとんできたら、あなたの様子がかわっていたわ。まずはその髪の毛つけ油・・・・・・・・」

奈緒の言葉に添えて

「そうですね、私達この部屋の布団にあきあさんを寝かせた時、

確かに私はあきあさんの今つけている陣八をはずして床の間におい

たんです。ねえ」

と婦警の葉月礼亜が返事を求めたのは京都府警の緋鳥礼子だ。

「わたしはその手甲・・・というのですか、それを外しました」

と沙希がつけている手甲を見てそう言い添える。

「誰か！床の間を見て！」

飛鳥日和子が声をかける。

「何も、おいてありません」

という声に沙希を見つめた日和子、

「沙希ちゃん。話してくれるわね」

「はい！」

と言つて起き上がった沙希は背中の中の日本刀をはずして自分の左横に置いてから

正座をしながら

そして、皆の顔を順番に見つめてから視線を祖母の井上貞子に移す。

にっこりと笑った沙希は、

「お婆ちやま、小沙希ただいま戻りました」

と驚くべき挨拶をして頭をさげる。

「戻りましたって、小沙希ちゃん・・・あなた・・・」

と驚く貞子に

「はい、無事に戻ってまいりました」

と再び言う。

「わかったわ、沙希ちゃん。あなたまた、どこかの過去に行っていたのね。」

以前、平安時代に行っていたように・・・」

という飛鳥警視正の言葉に驚く婦警達・・・それと沙希のことを知

らないここで働く女性達・・・

一瞬のざわめきも直ぐに静まる。皆その話の続きを聞きたいからだ。

「はい！・・・その前に・・・奈緒姉、これを私が使う事になるまで預かっていてほしいの」

と日本刀を松島奈緒警視にわたす。

「沙希！・・・いったいこの日本刀は何なの？」

「鬼切りといって過去に幾多の鬼を切ってきた名刀です。

でもある人の手に渡り”菊一文字”と名前をかえ、今度は多くの人の血を吸ってきたのです」

「沙希！ある人って？」

「新撰組一番隊長・沖田総司様」

「えっ？・・・あの有名な・・・」

「はい！」

「じゃあ、沙希ちゃんは江戸末期、幕末の世界に行ってきたのね」と日和子がいう。

「そうです、ある品物を手にいれるため・・・」

「じゃあ、この刀がそうなのね」

「いいえ！」

「えっ？違うの？」

皆、身乗り出すように聞いている。

幕末と聞いて何かを思い出した貞子は特に熱心に聞き耳をたてていた。

「私が手に入れたかったのはこれです」

と右手を差し出すと宙に現われた一本の横笛

「これは『翔龍丸』といいます。これは・・・」

と左手を出すと現われる『緋龍丸』

「この『緋龍丸』とはいわば平安の名工によってつくられた兄弟笛」

と話を切る。ママの真理がさしだしたお茶をおいしそうに飲んでから

「その『翔龍丸』はどこをどう巡ったのかは定かではありませんが土佐の坂本家に鳴かずの笛として家宝にされてきました。

でも、竜馬という次男坊が絶対に鳴らすと行って剣の修行のために持ち出したのです」

「その人も有名な坂本竜馬じゃない。あんた有名な人に2人もあつて」

と律子がいうが

「いいえもつと会つて来たわ。まずは私がお世話になつた置屋の菊野屋の・・・」

と聞いて驚いて立ち上がる菊野。

「ええそうよ。お母ちゃんのご先祖さまにお世話になってきたの。そこでもいるんな人に会つたわ。

花世ちゃんのご先祖のこれまた同じ名前の花世ちゃん」

「ええ〜」

と声を上げて立ち上がった花世、両手で口を囲んでいる。

「そうどす、花世ちゃん。幕末の花世ちゃんってまったく同じなんどすえ。

又危ないことをして・・・っていっぱい叱られてきました」と京都弁に戻して笑う。

「そして幾松さん姉さん・・・」

「幾松というと祇園の名妓といわれた・・・あの桂はんの・・・」

「へえ、おばあちゃま。桂小五郎はんの奥様になられた幾松さん姉さんどす」

といつてから

「そして真田屋の・・・」

「真田屋は大正のときに廃業されたんどす」

「幾松さん姉さんのライバルで親友とした千代松さん姉さん・・・
千代松さん姉さんは花江さん姉さん！・・・」

と菊野屋の花江を呼ぶ。

「えっ？」

と立ち上がる花江。

「千代松さん姉さんが転生したのが花江さん姉さんなんどすえ」

「ええ〜」

と愕く花江、だってそうだろう。今でも語り継がれる幕末の名妓と
うたわれ、

幾松と争っていた真田屋の名妓千代松。

ふたりにはいろんなエピソードがこの祇園で知られているのだ、

その千代松が転生したのが自分だといわれて愕かすにはいられない。

「そして料亭玉屋の女将さんのお園母様」

「おお〜玉屋といえば昭和の初期まで続いた名亭・・・そうどす、
勝枝はん！ あんたは・・・」

と平安期に日和子の乳母だったと晴明に教えられた玉井勝枝。

「へえ、うちの母の実家どした」

「ひえ〜、これは驚きどす。縁はどこまでも続くんどすえ」

「それはどついうことどす？小沙希ちゃん！」

「へえ」

といつてから、横の日和子の顔を見てふつと笑う沙希。

「どつしたの？沙希ちゃん」

「だって、玉屋の女将のお園母様が転生されたのが日和子叔母様だ
もの」

「ええ〜」

いつも冷静な日和子もさすがに声をあげて愕いた。それよりもつと愕いたのが玉井勝枝だ。

平安期に乳母をしていたというだけでもありがたいのに、転生前とはいえ自分の実家なのだ。もうありがたくて声も出ない。

「それから・・・」

と沙希の話が続く

「長州の桂小五郎様でしょ。」

最後の日には道場で新撰組隊長の近藤勇様と副長の土方歳三様にもお会いしてきました。

他には相良新太郎というお医者様と・・・フッフ・・・奉行所の同心で篠原源太郎様というおかしな人もいましたよ」

「その相良はんいうのは今この祇園では一番大きな個人病院どす」

「その病院ですよ。私達が研修にいつているのは」といっのは里から来た若い看護婦の候補生だ。

「へへ、あの相良新太郎はんの子孫の病院にどすか」

となんとなく頼りなげだった新太郎の姿を思い浮かべる。

「その篠原なにがしはんちゅうお人は知りまへんなあ・・・」

「お婆ちゃん、おかしなものねえ。私が幕末で会ってきた人ってほとんどの人が今、何らかのつながりのある人ばかり」

「あきあさん！その人って京都奉行所の同心っていわれましたよね」
と京都府警の佐藤秀美が言い出した。

「ええ、そうよ。京都生まれなのに江戸で修行していたから、べらんめえの江戸口調でね、面白い人だけど本当はとっても恐い人よ」

「もしかしたら、その人って江戸のお玉ヶ池の千葉周作って強い先

生の

ところで修行したって言うてませんでした？」

「どうして、そこまで知っているの？」

「じゃあ、やっぱり……」

「えっ？……」

「私どこかで聞いた名前だとももっていたのよ。……そうか、牛尾さんかあ」

と西沢恵子が納得したように言う。

「牛尾さんがどうしたの？」

朴訥だがなぜか気になる牛尾刑事が頭に浮かぶ。

「その篠原さんって、牛尾さんのおかあさんの実家なんです」

「よく……いえ、毎日のように自慢を聞かされるんです。だから、名前も自然と覚えちゃいました」

と緋鳥礼子が笑う。

「剣の修行をしてから江戸の北町奉行所で同心をしていたくせに今度は京都の奉行所に鞍替えした変な人だって」

「でも京都府警を創設して初代署長になったのは、うちの曾祖父だって自慢しました」

「そう……牛尾さんの……源太郎様って江戸っ子気質でさっぱりしていてそれで悪戯好きなの」

と思いつくようにいう。

「それで沙希！さっき言った道場って何？さっき道場って言うて少し口籠もった

ようだけど」

「さすがは奈緒姉、よく観察してるわ」

「ごまかさないで！・・・ねえ、沙希、道場で何をしたの？・・・
・・・まさか！」

「ごめん！・・・奈緒姉が思っている通り・・・」

「じゃあ、沙希はあの沖田総司と試合をしたってどういうの？」

大広間に

『え〜〜〜』

と叫び声が・・・。

「そう、やむをえなかつたの」

と沖田の延命を目的として立会いをしたことを話す。

しかも沖田はその菊一文字という真剣で、沙希は鞭という変則な形での立会い。

皆はドキドキして聞いている。

結局、立会いは沙希が沖田を倒したと聞きホツとしたが

一方、天才剣士・・・剣の鬼と言われている沖田総司を破った沙希は

一体何なのだと特にそういう訓練を欠かさない婦警達は改めて沙希を見つめる。

最後に天才の剣を肩先に受けたと聞き、あわてて沙希の身体をさする祖母に

「大丈夫よ、お婆ちやま。うちにはこの子達がついとるんどす」

と曲げた腕を少し横に広げると沙希の身体が光だした。

目が眩むほど眩しさがすーっと消えたあと、何か沙希の身体の回りをうねりながら

とびまわっているものがある。大広間の遠くでは良く見えないが近くにいる天城ひづるが頓狂な声で

「あつ！龍だ！・・・龍だ！・・・可愛い・・・」

という大きく叫んだので何がいるのか判ったのだ。

「小沙希ちゃん！・・・その龍は？・・・」

「へえ」

と語ったのが鳴かずの笛といわれた『翔龍丸』に音を与えるとき
の苦しみだ。

油断をすると『翔龍丸』『緋龍丸』に潜む龍に身体の中から喰われ
命を落とすと

聞いたとき、横笛という音曲の道具にもそんな恐ろしいものがある
のかと

貞子は青くなつたが、今度は音を出すことによって命を守る鎧にな
ると聞きホツとする。

でも、もうドキドキの連続なので一言言っておこうと

「小沙希ちゃん！あなたには仏様が守っておられる。

だから最近心配しないようにしてたんどす。

でも今度はいくらでも。沖田はんと勝負したり、この笛のことと
か・・・もう我慢できまへん」

と完全に祖母を怒らせてしまったようだ。もうニコリともしない。

そして

「幕末に行つて皆はんの目が離れたことで自由にしてたんではおへ
んか？

・・・さあ、正直にいいなはれ。皆さんに聞いてもらいましょ
と強い口調でいう。

「自由にしていたなんて・・・それはお婆ちやまの誤解どす・・・
実は・・・」

と話したのが世話になつた置屋の菊野と幾松そして花世にこの現代
と同じように

叱られ監視されていたことだ。途中から真田屋の千代松までが加わ
つたおかげで

自由にはならなかつたと答える

「おほほほ・・・そうどすか。
いつの時代のお人でも小沙希ちゃんの傍におると同じ心配させられるんどす。

だから小沙希ちゃんを叱りながら絶対に自由にしとかれへんのどす。

・・・で、何をしたんどすか？」

何もかもお見通しのようだ。

「あのお・・・京に入る坂本竜馬様の目を引こうと少し京の町を騒がせました。

おかげで坂本様にお会いできたんどす」

と胸をはったが、祖母にはそんなもの通じない。

「小沙希ちゃん！もう怒らへんから言うてみなはれ」

「はい」

と語ったのが京を騒がせた食い詰め浪人の『鬼面組』を『鞍馬天狗』と

名乗ってぶつつぶしたこと。でも本当は新撰組を襲おうとしたが

舞妓の鈴音を騙した男が鬼面組に引き渡そうとした現場に行き合わせた事から

怒り心頭して鬼面組をぶった押したというのだ。

そして、酒に酔った浪人が玉屋の女将と仲居を追いかけ、狼藉しようとしたのを

沙希が倒した事を話した。しかも大勢の見物の中、舞妓ちゃんの姿で・・・。

「沙希ちゃんに幕末でも助けてもらっていたのね」と日和子。

「でも傷ひとつつけてまへん。鞭でツボをつけて身体を動かなくさせたんどす」

そして真実を言わなければ気絶するほどの痛みが襲うというと

「沙希ちゃん！それは東京での銀行強盗を捕まえたあの方法なの？」

「はい」

「あのあと、あの強盗はね。刑事達の取り調べに最初こそ痛み泣きながら

否認していたけれど、最後にはスラスラと白状したのよ。

刑事達が皆感謝していたわよ。こんな楽な取り調べはなかったって。。。

おかげで拳銃密売組織も一網打尽よ」

「私、相手がいくら悪党だって殺したり身体に傷をつけたりするのって

嫌なんです。だから私にはあんな方法しか取れません……」

「小沙希ちゃんは優しいから……」

という祖母の顔は一変して沙希を慈しむような笑顔で見ている。

「沙希ちゃん、それでいいのよ。あなたが取る方法が一番なのよ」と日和子もあたたかく沙希を見守る。

「ねえ、沙希！向こうへ行っていたのは何日間なの？」

「3日間よ」

「こちらでは3時間だけよ」

「でも里では数分間が平安時代で10年間だったもの」

「ああ、そうだったわねえ」

「小沙希ちゃん！小沙希ちゃんは幕末でうちにきましたえ？」

と祖母が聞く。

はっとして沙希と師匠を見つめる高弟達。はっとするのは沙希だっ
て同じだ。

「どうしてわかったんですか？」

と聞く沙希に、

「やっぱり！」

と納得する祖母。

「うち、置屋のお母ちゃんに坂本様を探すためにお座敷に出るいうたら

そのままでは出られへん。京舞のお師匠様に許可を得る必要がある言うて

この家に連れられてきたんです。ここでお婆ちやまのお婆ちやまとお母様である祥子様、そして高弟の方々と会ったんです」

「うちお母ちゃんが亡くなる前に一度だけ聞いたことがあるんです。

『うち小さい時から舞を懸命に修行しました。

でもあの時以来、うちはおのお人を目標にするようになったんです。

あのお方は仏をうちに秘めた素晴らしいお方、結局うちはおのお方のようにはなられへんかった。

でも、貞子あなたは違う。あなたはあの方に最も近い人やだから今から精進しとくんや、

あの方があなたの前に現われた時、あなたは舞の高みにおける必要がある。

・・・うちは見たかった。あの方が玉屋で見せた舞の舞台、本当に見たかった。

その場にいた舞妓ちゃんや芸妓はんに何度も何度も舞台の様子を聞きました。

もう見たくて見たくて居ても立ってられんようになったんや。

あなたは幸せもんやで、その舞台見ようおもたらいつでも見られるんやから・・・』

という母の言葉・・・これ小沙希ちゃんのことどすな。それから
『貞子』ええ名前どっしやる。これあの方が教えてくれた名前なん
や』
そつも聞いたんどす」

高弟達は驚いたように沙希をみつめる。

師匠の母の祥子師匠は京舞『井上流』の天才と言われた方だ。

その祥子師匠からあの方と呼ばれ目標とされた沙希姫様・・・何か感動を覚える。

「小沙希ちゃん、そのお座敷って何どす？そこで開かれた舞の舞台
つて？」

「へえ、うちの初めてのお座敷どした。嵯峨美屋はんいうお人に呼
ばれたんどす」

「嵯峨美屋はんといえば今も続く薬師問屋はんえ」

「そのお座敷で始つたんが『菊野屋』と『真田屋』の芸事合戦なん
どす」

「芸事合戦？」

「へえ、みんな舞を舞って競いあうんどす」

と『真田屋』から始つた芸事合戦の様子を語る。

芸妓の舞と舞妓の舞・・・それぞれの舞は客によって温かい拍手が
送られる。

沙希が小沙希として最後に舞つた『菊野屋』の舞妓達の舞、
あまり自分のことを話すのは嫌だったが、ここは正直にあつたこと
を話さなければならぬ。

舞つたあと直ぐに言われた千代松の

「小沙希ちゃん、ごめんやけど、あんたの・・・あんた1人の舞を
見とつおす。」

出きれば鳴り物もない、素の舞を……これは、舞の修行をするうちの我儘かもしれまへん。

でもどうしてもあんたの舞が見てみたい。

欲……そううちの舞に対する欲です」

「ほう、千代松はんにそんなこといわれたんどすか」

「はい」

「他には？」

「はい」

と

「千代松だけと違います。うちも見てみたい。

お侍5人相手にあんな強かった小沙希ちゃんどすが、あの勝負のとき

小沙希ちゃんはまるで舞いを舞っているようどした。

舞を見てみたい。一度は舞を目指したうちの欲です」

と今度は玉屋の女将のお園。

そして

「小沙希ちゃん！うちもそうえ。昨日、井上のお師匠のところでも、小沙希ちゃんの舞見せてもらいました。

でも、もつと見ていたい。これもうちの欲です。

きつとお師匠様や祥子様、高弟の皆さんも同じどす。

一日中、あんたの舞を見ていたい。

この目に焼き付けておきたいんどす。……なあ、みんな」

と幾松に続いて花世が

「うち達、小沙希さん姉さんと舞ってみてよく判ったんどす。

うちらは素人で小沙希さん姉さんは本当の名人や……て。

だって、うち等4人の舞をたつた一人であんなとこに引き上げるなんて

ただごとやおへん。小沙希さん姉さんはきつと舞いの神様なんどす」

それから客である嵯峨美屋の

「ちよつと、ちよつと。……わてにも言わせておくれ。

芸妓同士の舞は甲乙つけがい勝負でした。悪いが真田屋の舞妓達の舞は論外、

でも菊野屋の舞妓のはもう別物だす。わては舞など習ったこともないし

細々したことはわからん。でもわてには自慢することがある。

見るちゆうことにかけては専門家なんだす。

ここにいる江戸からみえられた方々も同じだす」

「そうじゃ」

「言われるとおりじゃ」

「小沙希、言われましたなあ、あんたは、わてから見てただものやおへん。

そんなあんたに今日逢えたのはわての幸運だす。

ぜひわて等にもあんたの舞をみせておくれやす」

といった言葉を声が小さくなりながら恥ずかしそうに言う小沙希。

。「ほう、嵯峨美屋はん祇園にかなり通われておったんどすなあ……。

で小沙希ちゃんも舞いはった……そうどすな。うちも見たい、見とおます」

そう言うつと

「お師匠様！時間が……」

「いいや、時間なんて関係ないんどす。あんたらも見とうないんか？」

師匠にそういわれて、戒めようとしていた高弟達であったが

ぐつと言葉を飲み込んでしまった。見たい！……見たい！……
本当は誰よりも見たいのだ。師匠の言葉でタガが外れたように自分

達の沙希姫を見つめる高弟達。

困ったように日和子を見る沙希、
だが、日和子は転生前の自分が言った言葉を噛み締めていた。
だから、つい頷いてしまったのだ。

本当は警察官としてはゆっくり温泉に入らせてから比叡山の前線本部で

これからの方針を決めなくてはならないのに・・・
だから隣りで驚いたような奈緒の表情に仕方なく

「ごめん！」

とちいさな声で謝った。でもその言葉に反応したのは沙希だった。

「叔母様！大丈夫よ。舞台はそんなに時間がかからないし、
あと皆に聞いて欲しい事があるの。それから行けば間に合うし、
さつき式に比叡山と晴明神社を見晴らせに行かせましたから」
と聞くとホッとする。さすがである。何もかも素早い反応・・・安心をする。

すると今度は違う心配が出てきた。

（聞いて欲しい事って何なんだろう）そんな事を心配する自分に苦笑いだ。

お稽古場は大広間より少し狭い、だから大広間に入りきれなかった人間が

お稽古場に入りきれるはずはなかった。

だから地下からパイプ椅子を持ってきて中庭に並べた。

みんなの目が自分に集まる。急にカアッと身体が熱くなる。

いつもそうだ。舞い始めは心臓が爆発しそうになる。

「ちょっと待って！」

と祖母が声をあげた。

「小沙希ちゃんが1人で舞う前に、4〜5人の舞妓ちゃんと舞ってほしいんです」

と舞妓の名前を呼び始めた。

「初枝！・・・貞奴！・・・小夏！・・・小菊！・・・豆奴！」

呼ばれた舞妓は驚いたように立ち上がる。

この舞妓達、実は貞子から見れば今のところお手上げ状態の実力なのだ。

置屋もバラバラで話もしたくない舞妓達だ。

仕方なくゾロゾロと舞台上に上がる舞妓達、小沙希も彼女達と同じように

髪を結び浴衣姿なのだが、なぜか小沙希だけに視線がいつてしまう。

少し動いただけで、もう釘付けになってしまう。同じ舞妓でこれだけ違うのか。

貞子の希望の舞の音曲が流れ出した。

舞い始ると・・・凄い！小沙希の舞は全く次元が違う・・・

そして他の舞妓はというと・・・えっ？・・・これがあの舞妓ちゃん達？

小沙希は舞の高みをぐんぐんあげる、そして他の舞妓達もそれについて舞の質が変わっていく。

高いところでの舞、彼女達が属している置屋の女将や芸妓、他の舞妓達もあっけにとられているのだ。

そんなはずはない舞の実力、女将達がこうなってほしいという状態の遥か上で舞っているのだ。

舞が終わった。崩れ落ちるように座り込む舞妓達、自分達が何をしたかちゃんと判っているのだ。

きちつと座って挨拶してから

「小沙希ちゃん、ありがとうさんどす。うち達舞ってこんな凄いものかって初めて知りました。

これから精進しますよって、時間があつたら一緒に舞っておくれやす」

と小沙希にむかって頭を下げる。

「そんなあ・頭をあげておくれやす。時間があつたら又一緒に舞ましよ。

うち約束しましたえ」

「やったあ」
と飛び上がる現代っ子の舞妓ちゃん。

「知りまへんどした。うち、小沙希ちゃん1人だけにお稽古つけておりましたさかい。・・・

他の子と一緒に舞わせたらみんな凄い舞を舞うようになるんだすなあ。

それを身体に覚えさせたら、うちはもう左団扇どすえ」
と笑う。

その間に舞妓ちゃん5人は舞台を下りた。でももつと小沙希にちかづいていたいと思っただのか舞台袖で立って見ているのだ。

小沙希の1人舞いが始った。いきなり釘付けになっってしまう。

まさか?・・・舞台上に座り込んだ小汚い格好の・・・今では見かけぬ琵琶法師に変身した小沙希。

その琵琶が鳴らされ、よい声の謡がはじまった。

その内容はある日公家の御曹司が桜の木の下でうたた寝をしたことが

きっかけとなる。その美男ぶりに惚れた桜の精が乙女となって姿をあらわし

その御曹司に恋を告白するが、女達に追い掛け回され食傷気味の御曹司。

適度な受け答えであしらわれたことから、桜の精の恋のアタックが始まるのだ。

最後は悲恋に終わるが、これは絢爛豪華な平安絵巻であった。

いつの間にか琵琶法師の姿が凜々しい公達の姿に変わり男舞が始まっていた。

どこでどうなっているのか、舞台上では1人で舞いながらも

琵琶は鳴り続け、謡も終わらない。いつのまにかその背景には・・・

公達姿の舞の中に女達があらそって恋に血道あげる姿や嬌声が聞こえるのだ。

やがて舞台上には何もなければなのに1本の満開の桜の木が・・・

その太い幹の後ろに回った公達が次に姿を現したときは

美しい桜の精に変わっている。勿論、舞うのは乙女の女舞、

恋しい公達を想って切々と舞い上げるその姿にはおもわず涙が・・・

風が誘う桜の花びらの落花舞・・・舞台上に・・・そして見物の中に・・・

「桜の花びら?・・・」

転生前の千代松がそうしたように『菊野屋』の芸妓花江が差し出し

た手の平、
その上に一片の桜の花びら……それも淡雪のようにスーっと消えていく。
夢か幻か……

桜の精の切々たる想いが舞となって公達にとどけられるが……
やがてそれも人とは相容れぬ……つくも世のしきたりなりき……

桜の精の想いを受け入れた御曹司も激しい恋に病み疲れ、
死の床についてしまう。
……そして、桜の花が最後となる夜。

渾身の力で桜の木の元へ……愛しい人の亡骸をその身体で覆う
桜の精。
残ったのは枯れた桜の木と御曹司の亡骸に覆い尽くす一面の桜の花
びら……
こうして舞は終わった。

「凄い……」
そんな言葉しか出ない。

置屋の女将や芸妓・舞妓達はよく歌舞伎を見に行く。鼻唄の役者もいる。

でも今見た舞台はそれ以上だ。何も舞台道具もないのに
確かに見えた桜の木や背景、それに華やかな女達。

もう見とれるだけだ。こういうことに関係のない看護婦や婦警達も
呆然と見ている。

「沙希って本当の役者なんだわ」
と天才女優がうらやましげにため息をつく。

この狭い稽古場が大きな舞台見えたのは沙希だからだ。
しかも、日野あきあという女優ではなく、ただの舞妓の小沙希としてだ。

「お婆ちやま・・・」

「小沙希ちゃん！いいものを・・・凄いものをみせて貰いました。でも、小沙希ちゃん。この舞、まだまだ続きあるようどすなあ」

「へえ、これは桜の精どすから春の巻どす。

四季の長さにあわせて舞が作られてあるんどす。時間として約2時間どす」

「それ、1人で舞うんどすか」

「へえ」

「でもこんな舞少しも伝わっておらんのが不思議どす」

「この舞は御所の舞姫、那賀杜姫様なかつひめがうちのために創ってくれました舞なんどす。

うちもこれを舞ったのが御所で帝の前と幕末だけでした。そやから3度目なんどす」

「3度目でこの舞どすか？・・・」

「へえ」

「あんたって子はもう・・・うちのお母ちゃんが小沙希ちゃんの舞が見れなかつたと

口惜しがる気持ちわかります。一度でもあんたの舞をみたらもう

2度3度見たい欲求が高まってくるんどす。

なあ、小沙希ちゃん・・・お願いがあるんやけど」

「へえ、なんどすか？」

「この舞をフィルムに残してくれまへんか？」

「フィルムに？」

「あんたの知り合いのあの小野監督に頼んでもええ。費用はうちが出すさかい」

「お婆ちゃんが？」

「沙希ちゃん！やったらいい・・・いいえ、そうすべきだと思うわ」と早乙女薫がいう。

「私もそう思うよ、沙希ちゃん。舞に何の関係もなく興味のなかった私でさえ

沙希ちゃんの舞なら何度も見ていたいものと庄絵がいう。

「沙希姉さん、わたしもそうわ。沙希姉さんの舞をビデオ持っていたら

何度も見たいわ。映画やドラマそれにアニメなんかよりもずっと迫力があるし面白いもの」

「面白い？」

「うん、だって沙希姉さんが役になりきっている人がいろいろ見えるし

それがどんな場所なのかよく判るんですもの」

「順子！あんたの出番よ」

「ええ、わかつたわ。小野監督に伝えます。

・・・お婆あ様、費用のことは心配いりません。うちで出します」
「でも・・・」

「いいえ、これは沙希のことなんです。場所は南座・・・
借りるのは1日でもいいわね。沙希！お客はどうする？」

「出来ればたくさん居たほうが・・・いえ、舞台装置はなくていいわ。

音はそうねえ、九条麗香さんに謡を手伝ってもらいましょう」

「麗香さん？」

「ええ」

なぜか判らないが沙希のいうことだ。全てメモしてマネージャー達

に

目配せして立ち上がるうとした順子に

「順姉！そして皆さん少し待って下さい」

と舞台上から声をかける沙希。

皆が座りなおすのを待つて

「私、まだ大事な事を皆さんに報告していません。私……結婚
しました」

「えっ？結婚……え……まさか……」

驚きの声がかしこから上がる。

「小沙希ちゃん！……結婚つて……あんた……」

律子さんはどうするの？……と声にださないが咎めるような目
で沙希を見る貞子。

「勿論、幕末で……です。たった一夜だけの夫婦でしたが
その前の日に……」

と祇園近くにある剣術の道場主の結城弦四郎と師範代の娘である和
葉、

そこに前日盗人を捕まえた気功というものを教えに行ったときのこ
と。

早瀬沙希太郎という若い剣士に姿を変え篠原源太郎の仲立ちで

気功を教えていた時のこと、沙希は気がつかなかったが娘の和葉が
沙希太郎に

惹かれていくのを何もかも見ていた幾松。

彼女が玉屋のお園と千代松を仲間に婚禮の場を準備し、

それぞれの想いを打ち明け、一夜だけの夫婦のために婚禮を上げて
くれたことを打ち明けた。

たった一夜の契り……多くの人の好意でできた夫婦の関係は多くの

感謝を産んだのだ。

「彼女はその一夜で女を捨てました。……そして母になったのです。」

私には聞こえませんでした。とつても不思議なことでしたが、

二つの鼓動が和姉のお腹から聞こえてきました」

「和姉？……沙希！あなたは和葉さんをそう呼んだの？」

「はい」

「そう……」

と寂しそうな律子。

「私が幕末で会った人、今の世でなんらかの縁があるって先ほどいいましたよねえ」

「ええ、私が玉屋さんの女将であるお園さんの転生したってこともね」

「はい！日和子叔母様」

とにっこり笑う。

「えっ？まさか？」

「そうなんです。和姉が転生したのは……律姉！あなたなのよ」

「えっ？私が？」

「そうよ」

「わたしが和葉という人で沙希と結婚した？……そして子供を産んだ……の？」

見つめる律子に沙希がうなずく。

「小沙希ちゃん、確か祇園の近くの結城道場いましたなあ」

「はい、昔は 町といったところどす」

「誰か……」

と言いかけたがさっきの玉井勝枝と山野葉志保が手をあげる。それと多くの置屋からも手があがった。

玉井勝枝が

「結城家はうちの実家とつながりがあるんです。なぜかうちでは結城家を見守っていくよう遺言されるんです」

「それは和姉とうちの子供を見守っていくよう玉屋のお園母様が遺言されたんです」

山野葉志保は

「うちは結城家の隣りなんです。結城家の双子の片方のお嬢さん、うちがお乳あげたことあるんですえ。いえ、今のお母さんが赤ちゃんのときです。」

あっ……」

と今気づいたかのように

「では今の結城家は沙希姫さまのお血筋。うちは前世で沙希姫さまに……」

そして又今、沙希姫さまの御子孫にお乳をあげたことになるんですか」

と飛び上がった。

「うち達もどす。なあ皆さん」

と声を上げる置屋『菊野屋』の女将菊野。沙希のことになると夢中なのだ。

今聞けば、この祇園の花街で代々言い伝えられ守ってきた

結城家の四季のお祭り詣出は、

沙希の血を引く子孫を見守るためと知れば1度も欠かさずやってきてよかったと思う女将達。

「志保さん！」

「はい！今、双子言いましたね」

「はい、不思議なことに結城家は双子しか産まれないんです。しかも男と女の珍しい一卵性で、それにどうしたわけか当主は女の子が継いで

男の子は家を出るんです」

というと

「うちと和姉に出来た子も双子でした」

「じゃあ……」

「へえ、うちの血を継いだら双子が出来るかもしれまへん」

「あっ！……沙希姫様」

「どうしたんですか？」

「今日の新聞にお嬢様の希佐ちゃん出ているんです」

「えっ？勝枝はん！早うその新聞を持ってきなはれ」

と流行る気持ちで祖母がそういうと急いで出て行く勝枝。

小沙希の血を引き、この祇園の女達が守ってきた家族となればいわば貞子の血筋、

人事ではなくなる。

「結城の家のお嬢さん。希佐さん言われるんですか？」

「へえ、それが？……」

「おかあさんの名前は？」

「希美子さんいわれるんです」

「和姉は、うちとの約束を守ってくれたんですなあ……」

「えっ？」

「自分の子供に……うちの沙希の一字をつけるいうて約束したんです。」

それとうち、いつ曾孫、玄孫がうちを訪ねてきても直ぐわかるよう、

和姉にうちとの証として……律姉！私が里で採れたダイヤを指輪にしたでしょ」

「あつ、私の高校時代の親友のジュリーデザイナーに細工してもらった指輪……」

「ええ、あれを和姉に渡しておいたの。」

代々伝えそして、私の時代がきたらその指輪を持って尋ねてきてほしいって……」

「でもあれって凄いいダイヤモンドでしょ。何かあったら大変じゃない？」

「だから術でガラス細工にしか見えないようにしておいたの。勿論、和姉の目の前でね」

「そうなの……わたしに転生前の記憶が残っていたらなあ」

「それは仕方がないことだわ」

こんな会話を誰一人聞き逃すまいと一生懸命聞いている。

だってそうだろう、こんな不思議で心躍る話はそう聞けるものではない。

なにしろ肝心な主役が今世間の注目の的あの日野あきあなのだ。

「さ……沙希姫様……これでございます。希佐さんが載っている新聞は」

と勝枝に渡された新聞を見る沙希、そして声に出して読む。

「京都府主催の剣道大会の学生の部において、並み居る強豪達を次々倒し

優勝を攫ったのが私立祇園学園1年の結城希佐さん。

小柄でほっそりとした美少女、彼女のしなやかな動きは、溢れるばかりの才能がなせる技、

今後の期待の星である」

その時

「あつ！」

と声を出したのは京都府警の西沢恵子。

「私も一般の部に出場して優勝したので学生の部の優勝の彼女と力メラに収まりました」

「もう！恵子ったら・・・どうして早く言わないのよ」

「ごめん！ボケツとしていたの」

「ふふふ・・・緋鳥さん、そんなに怒ったら恵子さん可哀相よ。

さつきから心ここにあらずってね。心配なんですよ・・・」

「えっ？」

「う・し・お・さん・・・」

カアアと顔が見る見る真赤になって両手で顔を隠して

「知らない！・・・あきあさんのいじわる！」

と喋ってしゃがみこんでしまふ。

「あゝあ、これが20を過ぎた女の反応かしら」

と同僚の佐藤秀美の言葉が笑いを誘っていく。その上に沙希のこんな言葉が・・・

「若いつていいわね」

その言葉にすかさず

「沙希の馬鹿！あんた一体何歳のつもり？・・・あんた、まだ16でしょ」

と順子の言葉が飛ぶ。

「いけない！・・・うち、幕末へ行ったりうちの子供や子孫のことがずっと頭にあつたもんだから、自分の歳わからんようになってしまった」

と言ったものだから、みんなげらげら笑い出した。

そのとき又、運命の齒車が絡み合って沙希に身の上に、新しい光が差し込んできた。

客が来た様子なので応対に行った高弟の一人が走って戻ってきた。
「何事どす、あんたがそんなに慌てて・・・皆さんの前どすえ」と叱るが

「今、結城希美子さんがお嬢さんを連れられて志保さんを訪ねて参られました」

みんなの視線が山野葉志保にそそがれる。

慌てて立ち上がる志保、舞台上から沙希が声をかける。

「志保さん！ぜひともあがってもらってください。そしてここに・・・」

というと頷いた志保が落ち着くように深呼吸をして部屋を出て行った。

「沙希ちゃん！私達席をはずしましょうか？」

沙希はそんな心遣いに感謝をしながらも

「日和子叔母様ありがとう、でもそんな心遣いは無用にしてください。」

私のことは全て・・・少なくともここにいる皆さんには知っていてほしいんです」

とにっこり笑う。

「私達もいいんですか？今日会ったばかりなのに・・・」
と婦警達が聞いた。沙希は何もいわずただ頷いた。

「どうぞ、こちらです」

と志保の声が聞こえてきた。

誰もがはっと息を呑む。

一方結城希美子も希佐も大勢の女性達の視線を浴びて驚いて立ち止まった。

よく見ると知った顔がかなりいる。

「そんなところで立ち止まらずにどうぞ入ってください」
たった一人舞台にいる舞妓さんが声をかける。

日本髪に浴衣姿という簡単な衣装、それもまだ若い、娘の希佐と同じぐらいか。

なんだか視線がその舞妓さんから離れない。

濃い舞妓化粧なので素顔がはっきりわからないがその美しさには言葉もない。

よく見るとどこかで見た顔なんだが。

最近希美子の身体の調子が思わしくないのを知った、お隣りの志保の強い勧めでの訪問だった。

なんとなく来て見たのはいいけれどこんな場での訪問に身の置き所がない。

でも舞台からの優しく温かい視線には何だか心が騒ぐのだ。

志保の案内で開けられた席に座った希美子、周囲に頭を軽くさげて挨拶をする。

そして、自分の直ぐ隣りを見たとき啞然と・・・いやそんな驚きではない。

この家はその人の家だとわかって来た。

チラツとお姿を拝められたらいい・・・そんな軽い気持ちだった。

でも・・・その・・・人間国宝の井上貞子先生が肩が触れるぐらい隣りにいるのだ。

それに路傍の石ぐらいの他人なのにこの温かい笑顔は何なんだろう。

だが希佐はそんな母の戸惑いは全く知るよしもなかった。

希佐は舞台の上の舞妓さんに懸命に視線を注ぐ。あのドラマ以来関心を持つようになった。

新聞や週刊誌まで切り抜きストックしている。映画の前売り券も買った。

どうせCGや特撮とは思っけど、そう言い切れないものをあの女優さんは持っている。

本物の天才なんだと思う。あの舞妓さん、その女優、日野あきあにそっくりなのだ。

そんな懸命な瞳を沙希は受け入れ、そして見つめかえし微笑んだ。

「どうしたんです？ そんなにうちを見つめて……」

「あっ！ ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんです。

でもあなたがある女優さんにそっくりだから……」

「そっくり？ 誰なんですか？」

沙希のソラットボケた返事に『プッ』と噴出すが、何故かみんな涙を湛えているのだ。

「私の大好きな女優さんなんです」

「誰なんですか……お願い！……教えて！」

と胸の前で手をあわす沙希。

「日野あきあさんです」

「日野あきあ？」

「あら、知らないんですか、今一番有名な女優さんなんです」

「ごめん！……うちなあ、今舞の修行に一生懸命なんで世間の事にしている余裕がないんです」

「あっ！ ごめんなさい。……そうですね、舞妓さんも修行するんですよね」

「でも希佐さん。これあんなことでっしゃる。優勝なんて凄い！」

と希佐の載っている新聞の記事を指差して言う。

「いいえ！私なんかまだまだです……それに私には目標にして
いる人がいるんです」

「誰ですか？宮本武蔵はんどですか？」
希佐は首を振る。

「じゃあ、柳生十兵衛はんどですか？」

「ううん、私が目標にするのはそんな有名な人ではないんです。実
はわたしのご先祖様です」

「ご先祖様？」

「ええ、そんなに昔ではないんです。幕末のころの人なんです」

『はっ』とした沙希、思わず皆も息を呑む。

「そ……その人……希佐さんが目標にするような強い人なんどすか」

「そうなんです。世に隠れた名人はいるっていいですよね。」

その人、旅に出る前にうちの道場である新撰組で有名な沖田総司と
試合をして勝っているんですよ」

「沖田総司はんに勝っているらんどすか……それで、その旅ってい
うのは？」

「ええ、沖田総司に勝つには勝ったんですが、

最後にスツと肩先を切られたのが我慢できなかったんじゃないんで
すか……」

ホントは訳はわかりませんが試合をしたその日に武者修行の旅に出
てしまったんです」

「でもそんな話よくご存知なんどすね」

「ええ、うちには幕末のいろんな人からの手紙が残されていますか
ら。」

みんなその人に関する手紙なので私想像しちゃったんです」

「読んでみたい！……」

「えっ？」

「いえ、なんでもないんです。それでその人のお名は？」

「早瀬沙希太郎っていうんです。世の中では知られてませんけれど私のご先祖様は凄く強い方だと信じています」

そう誇らしげに言う希佐。

もう言うべき言葉はなかった。名乗りたい！……でも言える事柄ではない。

希美子のほうから言ってくれば別である。

でも、もう何代も様変わりしているのだ。信じろと言っても無理な話だ。

二人の会話を聞いている女性達

「読んでみたい！」

確かに沙希はそう言った。沙希の心の中の底の底が伝わってくるようだ。

そして……それは……希美子も聞いてしまった。

「読んでみたい！」

とその切実な想いがはるか昔から時代を超えて希美子の心に伝わってくる。

そんなこと決してあり得るものではなかった。でもその瞳が語っているのだ。

希美子自身、娘の希佐に全てを伝えていた訳はなかった。手紙も全てを見せてはいなかった。

だから希佐は母親がしている事が奇異に見えて仕方がない。

気が触れたのかとその目を見る。でも目は生きていた。

いや、その懸命の表情には近寄りがたいものがあった。

希美子は舞台に向かって左手の甲を向けた。肌身はなさず身につけている代々伝わってきた指輪を見せているのだ。

舞台の舞妓はというと立ち上がって印を結ぶ。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」
と九字を切り

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

と真言を唱えると指先から紫の淡い光線が出て指輪を包み込むと指輪のガラス玉が膨張しだして、そして最大になったとき

『パリン』とガラスの板が粉々に割れた。

その中からまばゆい光を発するダイヤモンドが現われたのだ。

舞妓がおこなった不思議な術、そして闇の中からいきなり飛び込んできて

舞妓の周りを飛びつづける4つの光・・・+沙希の式神だ。

静かだった見物の女達の動きが活発になる。

何事があったのだろう。希佐は女達の動きを追った。

だからその時初めて制服の婦警さんがたくさん混じっているのを知ったし、

大勢の女達の中に有名人がいるのを見つけたのだ。

早乙女薫、大空庄絵、天城ひづる・・・いづれも日野あきあと共演する女優達だ。

「じゃあ、あの人は・・・」

日野あきあといいかけて・・・

「沙希！・・・これを」

と若い女性が持ってきたのはセーラー服。

「えっ？・・・沙希？」

「そうよ、日野あきあの本名は早瀬沙希」

「早瀬・・・沙希・・・はっ！・・・早瀬沙希太郎？でもあの人は女じゃない」

「そう、沙希は女よ・・・でも男でもあるの」
「えっ？」

「詳しいことは落ち着いたら教えてあげる。でも今は沙希に目の前の戦いだけに集中させたいの」

「戦い？・・・」

「そうよ。人でない者との戦い、沙希でしかできない怨霊との戦い」

口で唱えた呪によって、いきなりセーラー服に着替えた沙希、化粧もないスツピンだ。

こんな沙希を見るとさすがにその血を引く希美子と希佐、よく似ている。

杏奈が急いで薄化粧を施す。

座った沙希の額に陣八をつける杏奈、手甲は吉こと吉備洋子がつける。

呪によって姿を現した式神達、

「主殿！元方めが鬼を一匹連れて朱雀門に現れました」

「何！鬼とな・・・」

「はい！その名は鬼女紅葉。わたしと同じ名ですが奴は妖術を使う恐ろしい鬼です」

「鬼女紅葉とな、名前を聞いたことはあるが詳しくは知らぬ紅葉教えてはくれぬか」

「はい、そもそも・・・」

と語りだした鬼女紅葉とは・・・

平安の中期の奥州会津の地に、子が出来ぬ夫婦がいた。

どうしても欲しかった夫婦は仏に祈っても授からぬことから教えるものがいたので

魔に祈ったのである。

その靈験によって出来たのが『呉葉』、長じて『紅葉』となる女の子であった。

紅葉はその美しさと才覚で両親と共に上京する。

縁あって源経基つねもとの寵愛を受け子をもうけるが、

紅葉の欲は限りがない。

経基の正妻に妖術を使って、病おこさせたことが知ることなり、その罪により北信濃の水無瀬の里（現在の鬼無里）に流された。

だが紅葉のような欲の権化が片田舎でおとなしくしているはずがない。

都に向かいたいという気持ち次第に強まり、次第に盗賊団を作り上げる。

略奪を繰り返す紅葉、その悪事は、都に聞こえ、

朝廷の命により「平維茂これもち」が紅葉を討伐するため戸隠村に向かった。

途中、維茂は上田の別所北向き観音を訪れ、その力を授かることになる。

北信濃のこの地は非常に地形が険しく、紅葉を探すのに難渋したが、

維茂は『弓矢八幡』と願いを込めて一本の矢を放った。

その矢が飛んだ方向に、維茂一行は向かい、

やがて、荒倉山麓へとたどり着いた維茂は、ここで酒宴をする一群と出会う。

それが妖術によって維茂一行のことを知った紅葉の罠であったのだ。

何も知らぬ維茂はその酒宴に加わったのだ。

やがて維茂は、呑まされた毒酒により深い眠りに陥ってしまった。だが、これを案じた八幡菩薩の力により、

一差しの刀・・・降魔の剣を得て目を覚ました。

御仏による力を得た維茂は、様々な難所を突破し、

「龍虎が原」で鬼の姿を表した紅葉と最後の決戦に臨み、ついに紅葉を討伐した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これが鬼女紅葉でございます」

「あいわかった。・・・それにしても元方め、いろんな策を弄してくれるわ」

と言ってから希佐に視線を当て

「希佐ちゃん、ごめんね。ゆっくりとお話をしていたかったけれど時間がなくなってしまったの。

あとはここにいる律姉に聞いてね。

律姉はあなた達の先祖でもある結城和葉の転生した姿でもあるのよ」

ええ〜とも言えない。もう茫然自失とはこのことだ。

「奈緒姉！菊一文字を」

菊一文字？確かその刀は沖田総司の・・・と希佐が思ってみていると婦警が1本の刀を下げて舞台にあがる。

そして渡された刀を両手で捧げ持ち

「沖田様！どうか私に力を」

と祈ってから背中に括りつける。

そして貞子を見て

「お婆ちやま、行つて来ます」と頭をさげる。

「小沙希ちゃん、気いつけてななんか涙声だ。」

「日和子叔母様、お先に行っています。」

それから奈緒姉と婦警のお姉さん達はこの屋敷と祇園界隈の固めをお願いします」

「沙希ちゃん！私もすぐに比叡山の本部に向かいますよ」

「私達はこの屋敷周辺・・・祇園を重点的に見回ればいいのね」奈緒の言葉に頷く沙希。

「他のお姉様方には、お婆ちやま達をよろしく。早瀬一族の人達もあとはお願いします」

まるですべるように縁に出る沙希、スニーカーを穿くと皆に笑顔を残し飛び上がった。

呆然と見送る希美子、希佐親子。

「本当だったのね」

「えっ？」

「私達のご先祖である早瀬沙希太郎様がこの平成に生きるお方だと・・・」

「そんなあ・・・」

「いいえ、ほんまどす」

と横から口を添える井上貞子。

「小沙希ちゃんはなあ、この世でただ一人仏様の力を宿すお方やさかいいるんな時代にいけるんどす。平安時代の10年間の修行・・・天分もおありどしたんやけどそれは努力されたと思います。」

だから陰陽の術も剣術も・・・そして舞も横笛も全て人を超えているんどす。」

でも肝心なのはあの性格どす。どんなに力を持っていても人には人一倍優しく

その笑顔で幸せをくばっているんどす。

そんな小沙希ちゃんの血が希美子さんにも希佐ちゃんにも流れているんどすえ」

なんだか嬉しくなってしまう希佐。

「希佐ちゃん、ごめんね。」

まだあなたには沙希太郎様と和葉様のお二人のことを全て話せていないの」

といつて着物の袂からなにやら袱紗に包んだものを希佐に渡す。

「母さん・・・これは？」

「幾松さん、千代松さん、玉屋のお園さん、菊野さん、花世さん。」

そして、篠原源太郎様、相良新太郎様、沖田総司様、土方歳三様、近藤勇様、

桂小五郎様、坂本竜馬様。肝心なのは結城弦四郎様と和葉様の手紙類よ」

「凄い！・・・ここで見てもいいわね」

と袱紗を開けて手紙を一通づつ開封するが、途中でお手上げに。

「駄目！私には読めない」

と放棄してしまう。どれどれと手紙を手にとった貞子も

「なるほど達筆どすなあ、これでは読めんは当たり前どす。」

希美子さん、あんたはこれを読めるように努力さっしやったんじゃあおへんか？」

「はい、小さい時からもう読みたくて・・・母にそんなに読みたいんなら

読めるように努力せよと言われまして・・・」

「そうじゃろう・・・そうじゃろうて・・・おお、そうじゃった、志保さんや

小沙希ちゃんから来た・・・ほれ、読めない手紙」

「は・・・はい、あれならその文机の中に・・・勝枝さん！」

「あっ・・・はい！」

といって机の引出しの中から手紙を出して師匠に渡す。

「これじゃ、これじゃ。小沙希ちゃんったら時々こんな悪戯をするんどすえ。」

読めない・・・いうたら、もうすぐこれを読める人がくるからその人に読んでもらいなさいっていうんどすえ」

とからから笑う。その手紙を渡された希美子は

「えっ！」

と思わず声をあげてしまった。

「どうしたんどすか？」

「いえ、私はいまだかつてこのような美しい書体見たことありません」

「ええ?・・・そうどすか」

小沙希をこのように誉められて相好をくずしっぱなしの貞子。

「ご先祖の沙希太郎様はこのような字をお書きになるのですか・・・」

「待ちなはれ!・・・希美子はん！」

井上貞子の思わぬ強い口調に、はっ!と背筋を伸ばして緊張する希美子と希佐。

「希美子はんと希佐ちゃんにとってみれば小沙希ちゃんは早瀬沙希太郎ちゆう名のご先祖どす。」

確かにそういってご先祖を敬う心は本当に大切どす。

でもなあ、希美子はん。今、小沙希ちゃんは16歳どす。希佐ちゃんと同じ歳どす。

その小沙希ちゃんにご先祖様いわはつても事情を知っているうちらにも奇異に聞こえます。

どうぞすやる希美子はん。

今生きていて自然なのは希美子はんが小沙希ちゃんよりも年上いうことどす。

年上のものにとって年下を呼ぶ呼び方ちゆうもんがあるんとちがいますか？」

「年下を呼ぶ呼び方？」

「そうどす。うちはあの子の才能や性格そして前世からのしがらみを考えて

小沙希ちゃん・・・いうて心からの親しみを込めてそう呼んどります」

そんな井上貞子の言葉にはっとして・・・そして何だか大事なものを胸に抱くように

両手をそっと胸に置いた。

「あの方を親しみと尊敬をこめて、年下として呼ぶ呼び方・・・」

「

そんな希美子の様子をニコニコ優しく見守る貞子。

比叡山に向かって飛び上がった沙希、

その比叡山の結界の直ぐ傍でももわぬ光景を目のあたりにする。

比叡山の前線基地のある広場からいくつものサーチライトが夜空に向かつて

照らされその中に、二機の大型ヘリコプターが夜空に浮かぶ恐ろしげな鬼に襲われていたのだ。

幸いなことにヘリコプターの操縦士達の腕が確かだったことと鬼が現代の兵器に慣れていなくて戸惑っていたので今まで助かっていたのだろう。

その証拠にヘリコプターから撃たれている機銃が鬼にあたっても何の効果も与えていないのだ。

「ガツデム！……」

兵士の戸惑いの声が聞こえる。このヘリ、機体に描かれているアメリカ国旗で

アメリカの軍用ヘリと知れたが、そのアメリカの軍用ヘリがどうしてこんな所に？……

だがそんなことより怒り心頭に来ていた鬼女紅葉のその口より真赤な業火が吐き出されようとしているのを見て

沙希は軍用ヘリ二機に対して結界の術を放ったのだ。

危ないところであった。軍用ヘリに張られた結界に弾き飛ばされた炎の弾が夜空たかくに飛んでいく。

「あきあ！」

軍用ヘリからサーチライトに照らされた少女の姿を見つけたのか
そう声がかかった。ジョージ・ルーク監督だ。

急ぎ帰国した監督が自分のスタッフを伴ってどういう方法でなのか

アメリカ軍の軍用機を使った急ぎ来日したのだ。

「監督！ここは引き受けました。急いで比叡山の結界内に入ってあのサーチライトが点灯している広い空き地に着陸させるよう言うてください」

と沙希が英語で怒鳴ると、

「判った！」

とすぐ返答があり、その声が操縦士にも届いたのかスーっと二機の

軍用ヘリが

比叡山の結界内に入り広い空き地に無事着陸していくのをみてから
鬼女紅葉を振り返った沙希、紅葉にかけていた緊迫の術を解く。

「紅葉！私が相手だ」

「お前は何者だ！」

「陰陽師・安倍あきあ」

「何！・・・陰陽師だと・・・これは生意気な。人の分際で我等に
立てをつく者よ。」

我妖術で闇にひきずりこんでやる」

そして、天に伸ばした右手が異界から長い槍を引き出してきたのだ。

その槍を目の前で8の字にグルグル回しはじめたのだ。

だが、背中の菊一文字を抜き放った沙希、上段に構えるとその刃え
た本身が

月の光を吸収しはじめ、本身から青白い炎が立つ。

「こ・・・小娘・・・その刀は・・・」

「菊一文字・・・鬼切りともいう」

「何！・・・鬼切りとな・・・こしゃくなものを・・・」

それを渡してもらおうか・・・粉々にくだいてやる！・・・」

「そうはいくかな」

とそのとき小野監督に京都についてからずっとアシストしていた瑞
穂から

『ステーション』の準備が全て終わったと心の通信が入った。

アメリカチームも全て乗り込んだらしい。

沙希は心の中でステーションを動かすもう一人の自分に力の1部を
与える。

これはまだ誰も知らないがいつもやっていることなのだ。

『ステーション』はすべて異空間に置き、この戦いの回りに・・・と要となる比叡山、

そして見張りを1台置いてある清明神社、そして何台かはこの京都中を

巡回させた。これはマスコミ上層部と小野監督そしてルーク監督との

綿密な打ち合わせによってすでに決められていた。

.....

ここは『メインステーション』乗り込んだのは将門の時と同じメンバーだ。

カメラマンは勿論、瑞穂、ゆりあはこの京都に来て以来、二人共小野監督のアシストをしていたのだ。

そしてルーク監督はあくまでもこの『メインステーション』にこだわり、

新旧ステーション1台づつに乗り込んだアメリカチームにこの『メインステーション』

から指示を出すのだ。

無論日本各局が乗り込んだ『ステーション』にも指示を出すのはいうまでもない。

そして、もう1人・・・乗り込む際には他のメンバーに紹介しておいたが

ルーク監督の姪で世界的にも有名な女流写真家でもあり、

ワシントンポスト紙の名物記者でもあるケイト・マイヤーが瑞穂のそばに立っているのだ。

ケイトは若い時、交換留学生として6年間日本に滞在していたので

日本語は会話が困らない程度には出来る。

「ジョージ！・・・あの子がジョージが言っていた人なのね」

「そうだよ、女優日野あきあ・・・わしの次回作の主演に決めているんだ」

「そして・・・こんなこと・・・これ現実よね。」

人が宙に浮いて・・・そしてあんな怪物と戦おうとしている。

その上、これ！・・・これって何よ」

「ここまでではケイトには説明してなかったけれど、『ステーション』というんだ」

「『ステーション』？つまり駅？」

「駅というよりも、宇宙ステーションの意味に近いだろうな。」

今、我々がいるのは隣の次元なんだ。次元が異なる位置から撮影しているから

どんな位置からも撮影できる」

「でもどんな動力を使っているの？」

「動力？・・・動力なんてこの『ステーション』にはついていないよ」

「判らない！・・・じゃあ、動力なしにどうして飛んでいるの？」

「彼女が動かしているんだよ」

と指さすのは今、背中の剣を抜いて構えるあきあの姿。

「えっ？あんな戦いをしようとしている彼女が一方でこれを動かしているの？」

「そうだよ。しかもこれ1台ではない。24台のステーションを一度に

異なる配置をして動かしているんだ」

「信じられない！・・・じゃあ、もしかしてこれをつくったのも・

・・・」

「そう、日野あきあ自身だ」

「もう……一体どうなっているのよ……」

「こんなことで驚いちゃいけない。まだまだ凄い力と能力を秘めているんだ」

「彼女って神？……」

「そう……神の力を秘めている少女さ……」

「ねえ、あんた達！……こんなこと信じられる？」

ケイトは日本語で言う。

「私、ビルの11階から飛び降りて死のうとしました。

でも死ねなかつた。沙希が助けてくれたんです」

「沙希？……」

「ええ、本名は早瀬沙希……コンピューターの天才でもあります。

このモバイルは沙希が開発しました。

今NASAや航空会社からも引き合いが殺到しています」とゆりあがモバイルを持ち上げていう。

「NASAが？」

「スコットだよ。あいつはもう沙希の能力に夢中なんだ」

「あの、何事も冷静なスコットが？」

「もともと、わしがあきあに注目したのはスコットが録画してきた一本のビデオテープなんだ」

「じゃあ、スコットが原因？」

「そうだよ、……あっ！戦いが始まる」

……

真赤な炎が、その裂けた口や手から沙希に向かって飛んでくる。

だが沙希は剣で炎を切り、沙希が避けた炎は比叡山の結界に当たっ

て消える。

沙希の動きは舞だ。その動きについていけぬ紅葉は

「ええい、ちょこまかと・・・これでは、どうじゃ」

と紅葉は妖術を唱えると紅葉の分身が沙希を取り囲む。

そして、赤い火の玉が沙希に集中砲火を浴びせようとするが

沙希も空たかく飛び上がり剣を構える

「破邪！雷光剣！」

と剣を振り下ろすと、天から青白い雷光が紅葉の分身達に襲い掛かり

あっというまに消し去ってしまった。

本物の紅葉はこの輪の中にはいない。後方に齒軋りして怒りで体から炎が立ち上っている。

「お・・・おのれ・・・」

「今度はこちらから行くのか・・・忍法・影分身！」

パツとあらわれ紅葉を取り囲む沙希達・・・

.....

「何よ・・・あれ！・・・あの子もあんなことが出来るの？」

「ケイト！むしろ逆よ」

「逆？・・・」

「ええ、陰陽師という今から約1000年前にいた安倍晴明と言う方の

偉大な力を引き継ぐ人は皆無だったの。でも沙希は不思議な力で

その1000年前にタイムスリップしてその時代の10年間を修行していたの。

そして沙希は晴明様の偉大な力を受け継いだわ。

いえ、今では晴明様以上の力を持っているのよ」

「以上って？」

「だって晴明様が私達にそういつて笑ってらっしゃるもの」

「1000年前に死んだ人が？・・・そんな馬鹿な！」

「いいえ、私達はみんな逢っているわ。ねえ、ゆりあ」

「ええ、・・・とても洒脱な叔父様よ」

「わしだって会ってるよ、ケイト」

「ジョージまで・・・」

「ああ、会って見ればわかるが凄い力を感じさせてくれるんだ」

「ジョージ、又戦いが始まるわ」

「おっと、ゆりあ。NO.3をもう少し右に・・・」

急いで、モバイルのスイッチを切り替えてNO.3と呼ばれる『ステーション』の

カメラワークを右に変えるよう指示を出す。

ケイトはそんな慌しいこの『メインステーション』内を見てから外の戦いに目を移す。

ケイトが以前、交換留学生の時の学校の制服と全く同じセーラー服の少女が

恐ろしい怪物との戦いがケイトの目の前でおこなわれているのだ。

先ほどから数100枚のフィルムを取りつづけている愛用のライカ
の

シャッター音が悲鳴をあげているように聞こえる。

いきなり怪物に襲われた軍用ヘリ、窓から見ていて生きた心地もし
なかつた。

そこに飛んできた・・・そう、スーパーガールのように飛ん
きたのだ

あの少女は・・・。

そして、不思議なフォースをへりを覆ってから下の空き地に着陸す

るように

見事な英語で指示してきた。

軍用ヘリに乗る乗員の軍人達はそれぞれ湾岸戦争にも従軍したこともある兵ばかりなのに、

皆あんな怪物に襲われて呆然としていたのだ。

機銃を撃つても平然としている怪物には手出しも出来なかった。

着陸してヘリから飛び出した軍人達は呆然と上空の出来事を見守っているだけだ。

そのうちワシントンの國務省からヘリに乗っていた陸軍大佐に命令が入電された。

入電といってもアメリカに帰国した時の一番に迎えに来ていたスコットに

渡しておいたモバイルからもう一台持っていたジョージに連絡がはいったものだ。

命令は日本側の許可を受けてこの不思議な戦いを全て記録し観察づけること。

日本側の邪魔をすることなく……いやむしろその日本側の動きさえ全て記録し持ち帰ること……

という不思議な命令だった。

命令を受け取った大佐は即座に部下に命令してテントの設営や指揮系統の

確認をしてから警察庁が設営した臨時本部に向いた。

警察本部の最高責任者が今京都の町に出向いて留守だということなので

間という警視が日本の警察の最高責任者である警視総監に連絡してくれた。

警視総監の言葉は

「あくまでも比叡山の最高責任者は飛鳥警視正だ。彼女の考えをもとに
そこの本部をつくったのだ。間くんは飛鳥警視正の副だ。
だから警視正がとるだろうという行動をしてくれたまえ。これ以上
警察庁の許可をとる必要はない」

「ということですか。ですが私も指揮官の命令を聞く身です。
全て私の考えを通すわけにはいきません。
私の権限はただひとつあの建物だけ自由に出入りする許可を与えま
す」

「すみません。２つだけ質問はよろしいでしょうか？」

「なんででしょうか？」

「あの空き地にころがっている丸いものはなんですか？」

「あれに関しては私は素人です。あなたがこれから会うこの建物の
責任者に聞いてください」

「わかりました。ではもう一つあなたは指揮官のことを彼女とおっ
しゃいましたね」

「ええ、飛鳥日和子警視正とおっしゃいます。そして……」
と、空を指差し

「あちらで、鬼と戦っている早瀬沙希さんの叔母様でもあらせられ
ます」

「えっ？……あの少女の？……」

「ええ、でも詳しくは聞かないでください。」

「あちらはいわばアマゾネスなので私達男は立ち入ることはできませ
ん」

「わかりました。では私もアマゾネスの1人を連れていくことにし
ましょう」

「といって設営をしている1人の兵を呼んだ。」

「ミランダ！」

走ってきて敬礼をしてから

「大佐！御用は？」

「ああ、これからこの建物に入る。君もついてきたまえ」

「はっ！」

ここまでの様子は全てケイトが目にしていたことだ。

このあとは、ケイトが『メインステーション』に乗り込む叔父のジ
ョージ・ルークの

あとから強引に乗り込んだことから大佐達の後のことは何も知らない。

ついでだからここに書き記しておこう。

ブレハブの建物のドアを開けて入った3人、間警視はもう何度も足を運んだので

判っていたが、二人のアメリカの軍人は思わず足を止めてしまった。

壁中にモニターが配置され、その下ではいろんな種類の機器が置かれている。

そうここはテレビスタジオなのだ。スタジオはこの屋外でありここはそれを指示して録画編集するモニター室なのだ。

そして、その機器のメインから立ち上がって振向いたその人はサム・キャメオン大佐とミランダ・クリステイ軍曹も知っている日本の巨匠……

いや世界で名だたる小野栄次郎監督だった。

緊張する二人だが、間警視の紹介で快諾する小野監督。

「まあ、そんなに緊張しないでどうぞお座りください。

彼女の戦いが始ったらそうゆっくりはできないが……」

「さっそくですが、あの丸いものは何ですか？」

「ああ、あれですか。あれは『ステーション』といってカメラマンを乗せて

撮影する機械なんですよ」

「撮影する？」

「はい、隣の次元から撮影するので、障害物なんか通り過ぎます。

だから、なんら撮影に影響はありません」

「となりの次元？・・・そんな馬鹿な！・・・」

「ふふふ・・・それが正常な反応ですな。

・・・でもこれは彼女がおこした奇跡とでもいってべきでしょうか」

「では・・・」

「ええ、我々はもうすでに2度『ステーション』を使って撮影しています」

「それは本当のことですか？」

「こんなこと嘘をいっても仕方がありません」

「では動力は？・・・」

「動力なんてありません。全て彼女の力なのです」

とモニターに写っている沙希を指さして言う小野監督。

「彼女・・・あの宙に浮いている少女が？」

「はい、これは彼女が作ったもので全て彼女の術・・・

いや彼女自身のフォースで動かすのです」

「大佐！私自身あの『ステーション』とやらに乗り込んでみます。

許可をお願いします。異次元とかフォースで動くとか・・・信じられません」

「よし、わかった。・・・だが連絡はどうする」

「それは・・・」

「大丈夫ですよ。これをお貸しします」

「このモバイルは・・・」

「これも彼女が開発したものです。今あなた方のお国のNASAや

世界中の航空会社が

このモバイルを手に入れようとやっきになってらっしゃる」

といって操作するとパツと液晶に顔が写った。くつきりと映るその様子は本当にスムーズだ。

「これはNO・24と書かれているあなた達アメリカの撮影チームが乗り込んだ

『ステーション』です。もう1人乗り込めるか聞いて御覧なさい」と渡されたモバイル・・・戸惑っていると

「そのまま話してみなさい」

「私はミランダ・クリステイ軍曹です」

「やあ、軍曹」

「わたしもそこに乗り込んでよろしいでしょうか」

「ああ、もう1人ぐらいいいだろう。そのかわり自分用の食べ物を持ってきてくれ、

・・・あつ、なんかきなくさくなってきた。急いでくれ」

「すぐ行きます」

モバイルを小野監督に渡すと、ミランダに見えるように仕舞い方を教える。

黒いアンテナを倒し、F1、F12と押して蓋を閉めた。

そして小野監督は大佐に渡すモバイルを開け、大事に貼り付けてあった紙を剥がすと

「乗り込んだらモバイルを起動させ、このIDとパスワードを打ち込むと

この大佐に渡すモバイルと通信ができる。こちらこそちらのIDとパスワードは

記憶させてあるからすぐにつながるよ」

「はい、わかりました」

と行ってから大佐に敬礼するとモバイルを大事に小脇にかかえて出て行った。

一方、ここは『メインステーション』の中、物珍しげに眺めていたケイトだったがそこにいるカメラマンの他、二人の女性に目を見張った。とくに1人の女性はこのステーションに取り付けられている機器の操作に人間わざとは思えない速さでキーを切り替えて何事か確認していく。

「ゆりあ！No.12とNo.24はアメリカチームだから異常の確認はあなたにまかすわ」

「わかった！」
「わかって『ステーション』の確認をするゆりあ、勿論どちらも異常はない。」

「小野監督！『ステーション』全て異常なし」

「わかった！……こちらも全て準備はOKだ。じゃあ、あきあに報告を」

「はい」

と行って一度大きく背伸びした瑞穂。

「少しの間だけ静かにしてくださいね」

と行ってから両手を胸に交差させて少し下を向いた。

すると、いきなりスーっと『ステーション』が上昇して、いきなり次元を移った。

中にいる者にはわからないが下から見ていた者には驚異の目撃だった。

アメリカ兵で戦場を体験したものでも腰を抜かすほどの出来事だ。

警察庁の本部でもテレビ局からのモニターが配備されており、幹部達もこの驚異にはもう何もいえなかった。

「ねえ、ジョージ。あれは一体なんだったの？」

「ああ、瑞穂のあれかい？」

「ええ……」

「あれは、瑞穂があきあの心に呼びかけたんだよ。

準備が全て出来たから『ステーション』を動かしてほしいって」

「えっ？……じゃあ彼女もテレパス？」

「いいえ、わたしは何の力も持っていないわ。

ただ、沙希と心で会話するのに慣れていただけよ。

だって、私つい最近まで目も見えなかったし、体も動けなく車椅子の生活だったの。

それを沙希が助けてくれた。わたしの体、悪い奴の呪いでそうなっていたの」

「呪い？……ねえ、それを聞かせて……」

「いいわ、でも今は駄目よ。今は私もゆりあも沙希が無事でありますように」

と心の中で祈っているからね」

「ええ、わかったわ」

実はケイトの不思議の体験の発端はたったひとつの小さな出来事から始ったのだ。

それはただ単にジョージ・ルークの奥さんのマリア・ルークが好きだった

スコーンの美味しい店がこの日に限って並んでいる人がいなかったから。

ケイトは並んで買うほどの食通ではない。

けれどチャンスは2度はない。急いで店に入り、注文したあとにドツと

客が押し寄せてきたのには驚いてしまう。

店を出ると警官がケイトの車の2台後ろまで違反切符を切りに来いていたので

慌てて車をスタートさせた。今日はなんとという日だろう。

ジョージの家についたら、マリア叔母がメイド達とドタバタとなにやらやっている。

「どうしたの？マリア」

「ああ、ケイト。いえねジョージったらさっき電話してきて、帰ってきたら又、

すぐに日本に出かけるっですって。なにやら日本で大変なことが起きるから

それを撮影しに自分のチームを連れにかえってきたって」

「日本で大変なことって？」

「いいえそこまでは詳しく聞かないわ。例え聞いてもあの人のことだから

何も言わなかったでしょうね。

とにかくあの人がいたら日本の何とかという女優に夢中なの。

あのビデオを見てから急いで日本に行っちゃっし……」

「ビデオってどれ？」

「ああ、そのテレビの上よ」

「これかあ……マリア！あなたの好きなスクリーンを買ってきたのねえ、お茶しない？」

「まあ……ありがとう。そうね、準備はもう少しだから……あなた達あとは頼むね。」

荷物が出来たら。休憩しなさい」

「マリア、たくさん買ってきたから、これを彼女達に……」

と渡されたスクーンの箱を嬉しそうに受け取った彼女達、きちっとケイトに礼をして残りの作業にとりかかった。

ビデオは昔の日本の物語から始っていた。

日本語が出来ないマリアに説明しながらビデオを見るケイト。

どの女優がジョージのお目当ての女優なのか……昔の物語が終わり、現在の日本に移った。

老女をかばいながら歩いてくる女性……

「この女優さん、さっきドラゴンとの恋を裂かれて湖に身を投げた女優さんね」

「マリア、良く見てるわね」

「なんだかこの女優さんにはかり目がいつてしまうのよ。」

こんなことあのオードリーヘップバーンを見て以来だわ」

実際マリアの目は確かだ。この女優は……男優は……とマリアが名指した俳優は

全てスターの階段を上り詰めていったのだ。

「でも、この女優さん。今まで私が見たり逢ったりした女優さんとは違い過ぎるわ。

物凄い才能と力を感じるの。この人、今に世界を制するわ」

すると見事な笛の音が聞こえてきた。

「ねえ、マリア。これ日本の楽器だけど凄い演奏家がいるものね。

私の心の中にも染み込んでくるわ」

「いいえ、ケイト。これは吹き替えではないわ。

きっとこの女優さんが本当に吹いているわ。賭けてもいいわよ」

「そんなあ」

「この女優さん。きっと何をされても一流……いえ超がつく一流な人よ。」

こんな人が東洋の日本に誕生していたとはね」

場面は凄い展開へと進んでいく。龍の心を取り戻すため異次元に入っていく主人公。

「凄いCGね」

「ええ、でも不思議ね。いつもだったらこんな見たらどのように作るのか」

想像はつくけど、これは全然想像できないわ」

マリアとケイトは顔を見合わせ

「まさかね……」

と笑いあう。まさか本物だなんて……

「でもこれで判ったわ。ジョージの狙いはこの女優よ。」

この女優でジョージが映画を撮ったら……なんだか震えるほど興奮しちゃうわね」

こうして見終わって興奮も冷め遣らぬときジョージ・ルークが帰ってきた。

それはまるで嵐のようなものだった。

ケイトはその嵐に乗っかって空軍基地まで来てしまった。

「ケイトいいのかい、このまま日本に行って……」

「ええ、かまわないわ。身の回りのものだって何も用意していないけれど、

アフリカのジャングルに行くわけではないでしょ。日本でカードを使えば何でも買えるわ」

ケイトが持っているものといえば、ハンドバックとカメラが3台はいつているキャリアバックだけだ。

ここで撮影チーム20名と合流したジョージは大型の軍用機に乗り込んだ。

ケイトにしてもチームの皆にしてもこれは初めての経験だった。

「一分一秒でも早く日本に着きたいんだ。だから普通の航空会社は使えないから

交渉して軍の航空機に乗せて貰うことになった」

と説明するジョージ。

「それと・・・トム！これを日本に着く間にみんなに見てもらってくれ」

とビデオテープを1本渡す。

「これは日本にいる間に君達も知っているあの小野監督と協力して撮ってきたものだ」

「おおっ！」

という声上がる。日本の巨匠小野栄次郎監督のファンはこのチームにも多い。

その小野監督とわがジョージ・ルーク監督が協力しあって何かを撮ってきたのだ。

ワクワクと興奮してしかたがない。

「言っておくが、これは全て本物だ。CGなんて使っていないし、特撮なんてもつての他だ。これは日本で開発されたカメラ機材を持ち込んで

撮影する乗り物で、全部で12台のカメラで撮影しているんだ。

諸君は日本に行ったら、その乗り物に乗り込んで撮影をしてもらう。

2台に別れて4名ずつ計8名だ。他の者は予備要員だ」

なんだか判らないが『ゴックン』と生唾を呑みこむ音が

そこいらから聞こえるのだ。

それからだ、日本に着く間にビデオは流された。

1度見終わっても2度3度とあの戦闘シーンから巻戻されて見るチームとケイト、

最後フェードアウトしてから皆、目を閉じ声をあげるものがない。

そっと手を上げたもの・・・ケイトだ。

「ジョージ！これすべて本物だっていったわね。・・・でもそんな

こと・・・」

「そう思われても仕方はない。わし自身も何度も目を疑った。だがこれは全て本物なのだ。この特殊な撮影の乗り物12台で撮影した。」

カメラマンあわせて50名近くがこの異空間に行つて撮影した。そして、わしもその中の1人だ！」

「そんなあ・・・」

「ああ、だがこれから京都にいけば全て納得する」

「じゃあ、あのジョージの家にあつたビデオは？」

「ケイトはあれを見たのか」

「ええ、マリアは凄い女優だとかいつていたけど・・・」

「そうわしもあのビデオの女優を見て日本に飛んでいった。」

あの才能は今の女優達全てを集めてもまだ抜きん出ているんだ。だけど実際あつたシヨックはもつと大きかつた。

そしてあんな力を見せ付けられたらもう彼女なしでは映画はとれない」

「そんなあ・・・そんな女優なんですか」

「そうだよ。君なら一発で惚れこんでしまうだろう。」

でも残念だつたな。彼女は強烈な男嫌いだし、君よりも強い。

彼女の強さはこの地球上一番だろうな」

「強いつて彼女はあんな細くて小さいんですよ」

「ああ、彼女はマッチョな強さではない。だがその身体に宿るフォースは神に近い」

その言葉が真実と思えたのは厚木基地で軍用ヘリ2機に乗り換え、京都の比叡山というところに着く寸前だつた。

ヘリの目前に着物を着た大きな女が現われたのだ。

「何だ！これは」

大きな女がへりを掴もうとする。だがさすが従軍経験豊富な操縦士、その寸前ににうまく逃げるのだ。

そのうち騒ぎを聞きつけたのか山の中腹から何本のサーチライトがこの怪物に浴びせ掛けられた。その眩しさにひるむ怪物。

だがついに怪物の口から炎が吹き出されようとした瞬間、

へりが何かに包まれ怪物からの炎がはじきとばされた。

へりの中は大騒ぎだ。

「あつ！あれは？」

ケイトの声に窓を見る兵士と撮影隊。

「あつ、あきあだ」

ジョージの叫びにその顔を見る皆、

「ようし、これで助かったぞ」

「監督！ここは引き受けました。急いで比叡山の結界内に入ってあのサーチライトが点灯している広い空き地に着陸させてください」

という見事な英語の声が聞こえて

「判った！」

とジョージ返事をするまでもなく、へり2機は広い空き地に着陸した。慌てて飛び出す兵士達。

ジョージは

「みんな先ほどチームを組んだとおりだ。NO・12とNO・24の乗組員は

急いで機材を持って乗り込んでくれ」

と指差すと慌てて走り出すチーム。

「残りは交代要員だテントを張って休憩してもかまわん。

又、あの建物はモニター室になっている。中には小野監督が作業をしているんだ。

邪魔しなければ中で作業を見守ってくれてもかまわん。

わしは『メインステーション』に乗り込む」

「『メインステーション』？」

「ああ、あの少し大きいNO・1だ」

と円形の乗り物が点在している方向を示す。

こうしてバタバタした時間が過ぎていき、『ステーション』は次元を異なつた位置で

その機能を発揮し撮影を開始しているのだ。

アメリカチームの乗り込んだNO・12もNO・24も撮影にやつきになり、

最初は言葉もでなかつたミランダも少し落ち着き大佐との通信も休みなく繰り返している。

.....

「おのれもそんな術を使えるのか・・・お前は何者じゃ！」

「我は、安倍晴明様直弟子なり」

「安倍晴明だと？・・・これは面白い。術比べじゃ」

といって印を結ぶ鬼女紅葉。

宙からくねくねとたくさんの蛇が分身した沙希の足元にあらわれた。

ところが沙希が呪を唱えるとちいさなネズミ達が蛇に襲い掛かり次々と消え去ってしまう。

「おのれ！これではどうじゃ」

と猫を出す紅葉。ネズミは先を争って逃げ出した。

「白虎丸！」

と呼ぶ沙希。体から白い小さな玉が現われいきなり大きな白虎の姿を現す。

その姿と

『ウオ〜!』

という唸り声にすぐむ猫達、次々と消えてしまう。

「紅葉! お前の妖術とはその程度か……」

「何を! ……」

「では、こちらからいくぞ」

と刀を上段に振り上げ、

「飛翔! 鳳凰剣!」

刀の青白い炎がいきなり真赤な炎と化し、沙希が刀を振り下ろすとその炎……鳳凰(火の鳥)の姿となって紅葉におそいかかる。

『キエ〜』確かにそう鳴いたのだ。

「ギヤアー」

そう叫んだ紅葉、右腕を押えている。

『キエ〜』と又ひと鳴きした火の鳥は沙希のもとに帰って来て

そのくちばしでつまんでいた紅葉の右腕を沙希の足元に落として刀に消えた。

「お……おのれえ〜」

ついにその本性を現し、鬼の姿になった紅葉はギラギラした目で沙希を

睨みつけている。

「今から、この腕を封印する」

「や……やめろ!」

もうすでに沙希の力にはかなわないと悟っている紅葉は封印をさせてなるかと

無茶苦茶な攻撃を仕掛けてきた。

全てを受けて弾き飛ばしていたがただ一つ、どういいうわけか沙希をすり抜けて

真下に飛んでいく。そしてその下には沙希の目には小さな女の子が歩いているのが見えたのだ。

「危ない！」

前後の身境なく飛び下りる沙希、その優しさがアダとなった。つまり敵に背中を見せたのだ。

間に合わぬとおもってその女の子に結界の術を放った瞬間、

沙希の体を串刺しにされたような激痛が走り、

．．．．．そして、力が抜けていった。もう体の自由が一切効かない

もうすぐ地面に激突というのにもう術も使えないのだ。

．．．．．

「花世さん姉さん！．．．どうしたんえ？」

「うち、確かめたいこと出来たんどす」

「けんどいくら小沙希さん姉さんに聖結界を与えられたいうてもこんな日の夜、危ないやおへんか」

「ちよつとだけ．．．ちよつとだけどす．．．」

「仕方おへんなあ．．．ちよつとだけどすえ」

と二人が並んで歩く．．．すると

「二人で家を抜け出してどこへ行くんどすか？」

「あつ！花江さん姉さん！．．．どうして？」

「あんた達がこつそりと出て行くの見たんどす。こんな恐い日にどこへ行くんどすか」

と怒っている。

「へえ、花世さん姉さんが．．．」

花江の怒りが恐いからすぐに真相を明かしてしまう豆奴。

「やっぱり花世ちゃんどすか」
花江の怒りの目は花世に向く。

「ごめんえ、花江さん姉さん。うちどうしても今、確かめなあかんことがあるんどす」

「今って・・・どうしても今でなければあかへんのどすか？」

「へえ、小沙希さん姉さんの行き先の判っている今夜がチャンスなんどす」

「えっ？小沙希ちゃん？」

思わぬ名前が出てきて驚いている花江。

でも気を取り直して

「訳を・・・訳を話してちょうだい・・・」

という花江に

「へえ・・・うちと豆奴ちゃんが前に出会った女の子がいるんどす。その子、紫苑ちゃんいいいます。」

初めてあったとき紫苑ちゃんは八坂はんの前で座っていたんどす。

フワツとした落下傘スカートの中であぐらをかいている・・・

そんな格好で変な子やなあ・・・それがうちの第一印象どした。

うちらそのまま通り過ぎようとしたんどすが、あるもんが目にとま
って

足がとまったんどす」

「あるものって何どすか？」

「へえ、布袋にくるまれたお三味どす」

「お三味？」

「うち、姿形でものを言うんは嫌いどす。

けんどあまりにお三味と紫苑ちゃんの雰囲気の違いすぎたんどす。

そやから、うちら紫苑ちゃんの元に戻って何か聞かせてって頼んだ
んどす」

「紫苑ちゃんのお三味もお唄もうちらが聞いても素晴らしかったわあ」

「どんなお唄どす？」

「へえ・・・確か『三千世界の鴉を殺し、主と朝寝がしてみたい』
こんな唄どす」

「それ幕末の高杉晋作はんが作った有名なお唄どすえ」
「えっ？そんな有名なんどすか？」

「あたりまえやおへんか・・・それからどうしたんえ？」

「へえ・・・紫苑ちゃんにお仕事はって聞きました」

「そしたら？」

「もう一つの袋から琵琶を取り出したんどす。そして、うちは謡詠
みや言うてはりました」

「謡詠み？・・・聞いたことおへんなあ。それにその紫苑ちゃん
いう子京都弁どすか？」

「へえ、きれいな京都弁やさかい京都生まれや思います」

「そんなことおへんえ、小沙希ちゃんみたいなお人おるさかい」

「あっ！そうどした・・・」

「それで、謡詠みつてどんなんどした？」

「へえ、紫苑ちゃんゆうとりました。謡詠みできる時とできん時が
あるって・・・」

でもちよつどそのときどしたなあ、豆奴ちゃん」

「へえ、旅行にきてはった女のひとに、あんたの謡詠みするからつ
て琵琶を弾き始めたんどす」

「それは凄い内容どした。男はんには騙されて会社のお金を使い込ん

だいうことにされたり、
住んでいる近所で変な噂流されて引越しせなあかんかったり
女の人座り込んで泣いていたさかいホンマのことや思います。
女の人この京都は最後の旅行でどこか死ぬところ探すとこやって
紫苑ちゃんが謡詠みしとりました。けどそれだけやおへんかった・
・・」

「えっ？どういうことどす？」

「女の人の友達がおかしいおもて調べはった結果、
男が騙していたいう事を突き止めはって警察に逮捕させたんどす」

「それが、その紫苑ちゃんの謡詠み？」

「へえ、紫苑ちゃんこういうとりました。

相手の心にある想いがうちに謡詠みさせるんやって・・・。

そのときも泣いている女の人の携帯がならはって

あの女の人の友達から男が逮捕されたいう連絡どした」

「つまり、紫苑ちゃんの謡詠みどおりになったんどすなあ」

「へえ」

「それで今日家を抜け出したのは、紫苑ちゃんに”怨霊・藤原元方”の

謡詠みさせようって魂胆じゃあ・・・」

「いえいえ、違うんどす・・・さつき、小沙希ちゃんの凄い舞、

花江さん姉さんも興奮しとられましたなあ」

「あたりまえどす、あんな舞見るのも聞くのも始めてどす」

「あのときの小沙希さん姉さんの琵琶の演奏とお唄・・・」

「それも含めてどす。もう琵琶もお唄も聞き惚れて・・・えっ？」

「そうなんです、あの小沙希さん姉さんを見てうち思わず息を飲みました。」

そっくりなんです。紫苑ちゃんと小沙希さん姉さんが……」

「あっ？……そうどす、そうどす。うちもそう思います」

「なんや、いまごろ気いついたんかいな、のんきやなあ豆奴ちゃん
は」

とあきれる花世。

「けんど、花世ちゃんがいうように紫苑ちゃんと小沙希ちゃんが同
一人物だったら

どうなるんどす？なんでそんなことせなあかんのんどすか？」

「わかりまへん。けんどうち、よう考えてみたら紫苑ちゃんの姿み
るんは

小沙希さん姉さんが京都にいますときだけなんですえ」

「でも、花世ちゃん。小沙希ちゃんは今戦いにいつとるはわかつと
るんどす。

そんなとき紫苑ちゃんに逢ったら別人いうことになりますえ」

「花江さん姉さん、それでもうち疑います。」

あんなにそっくりな琵琶とお唄……どちらも平凡なお腕なら疑い
はしまへん。

けんどあんな見事なお腕のお方が二人もいるはずはない、思います」

こうして三人は黙ってこの祇園を歩き出した。

いずれも……花世さえも今言った言葉が頭の中を渦巻く。

「あっ！」

と豆奴が大きな声をあげたのが清水さんの近くにきたときだ。

「聞こえる……」

その声に耳を澄ませる花江と花世……。

確かにこの夜空に琵琶の音とテノールの良い声が聞こえてくる。

「紫苑ちゃんやわ……」

と花世が叫んだ。

「これが紫苑ちゃん？……確かに小沙希ちゃんの琵琶と声に
よう似とるえ……
でも……こんなこと……」

呆然とする花江。

いきなり声の聞こえる方へ花世が走り出した。

裾の乱れも気にせず走る花世の耳に下駄の音が後からついてくる。

紫苑の姿は清水さんより南に、そして西に下りた川端通りの近くに
あった。

琵琶を弾いて謡う紫苑の周りには不思議なことに

パジャマ姿の少女達が膝を抱えて眠っていたのである。

「紫苑ちゃん！これどうしたんどす」

「あっ！花世ちゃん！……どうもこうもないんえ。」

うちが琵琶を奏でていたら、ちっちゃな女の子達がこうして集まっ
てきては

座りこんで眠りだすんどす。見物していた人も気味悪がって帰って
しまっし、

琵琶も止められないんどす。止めたら、ホラ……」

と琵琶が止んだとたん少女達が立ち上がって歩き出そうとするのだ。
慌てて琵琶を奏でる紫苑。

「花世ちゃん！豆奴ちゃん！この子達、元方の暗示にかかっとなるん

どす。

早う女の子達に触って暗示を解かなくちゃ
とって女の子に触っていく。

暗示を解かれた少女達はそのまま横に倒れてしまふ。

「豆奴ちゃん！あんた携帯は？・・・」

「へえ、もってますけど・・・」

「じゃあ、早う連絡して・・・奈緒はんに早うきてくれて
「へえ」

花世は懐に持っていたあの短冊で一人一人女の子の額に”聖結界”
を与えていく。

「花世ちゃん！うち、何か手伝えることは？」

「紫苑ちゃん！あんたはこのまま琵琶を弾いておくれやす。

この子達、暗示をかけられて連れ去られるところやったんや。
けんど紫苑ちゃんの琵琶がそれを阻止しはった。

このまま琵琶が鳴りつづけければ暗示された子ここに来て連れ去られ
ることないかもしれんえ」

「わかった。うちこのまま弾きつづける」

といてっていつそうに琵琶を引き始めた。

なるほど暗がりから暗示をかけられた少女達が次から次へと現れて
は座り込んだ。

連絡が終った豆奴も懐から短冊を出して女の子に”聖結界”与えて
いる。

「あんた達！」

と声をかけられたのはそれから直ぐだった。

息を弾ましているので走ってきたのか・・・松島奈緒警視を先頭
に6人の婦警が続いていた。

「皆！短冊で”聖結界”を与えるのよ」

「はい！」

と返事の前に携帯を取り出しどこかに連絡を取り出した。

「杏奈！・・・うん、そうよ・・・ちよつと聞きたいんだけどあんたがリースしたあの大きなワゴン車、もう荷物を乗せているの？

・・・そうよかった。悪いけどそこに京都府警の婦警さんがいるでしょ。

・・・そうよ、だから車を貸して欲しいの・・・こっちは暗示にかけられた女の子が大勢いるの。

うん、一応家に連れて帰りたいのよ、このまま自宅に帰せないし、本人達も寝てしまっているから・・・そう、真理ママにだって悪いけど居間に出来るだけたくさん布団を引いておいてつて言うてくれる？

・・・じゃあ、待ってる」

奈緒は携帯を仕舞いながら花江に言った。

「それでいったいどういうことなの？」

「へえ、うち二人がこっそり家を出て行くのに気づいて後をつけたんどす。

途中で聞いたのがこの子らは紫苑ちゃん・・・そこで琵琶を弾いている子どす。

を探してに出てきたんどす。なんで探していたかは小沙希ちゃんの舞台やって

花世ちゃんがいうんどす。小沙希ちゃんが舞台上で弾きはった琵琶とお唄が以前聞いた紫苑ちゃんと瓜二つやいうて・・・

小沙希ちゃんの行き先がわかっていて今日がチャンスでもし紫苑ちゃんがいたら小沙希ちゃんとは別人え・・・

うちが花世ちゃんにいうたんどすが・・・」

一生懸命女の子達を介抱する花世に目をやる二人。

「それでも花世ちゃんはいうんどす。例え紫苑ちゃんがいたとしてもうちは疑いますって……」

「どうして？」

「へえ、お2人共お腕が平凡であれば疑いません。」

「けど、うちらから見てもただごとやおへんお腕……そんな二人といえますか？……」

「こういふんどす」

「じゃあ、花世ちゃんはその子が小沙希ちゃんだというの？」

「へえ、……だって小沙希ちゃんはある不思議な術をつかうんどすえって」

確かに紫苑の奏でる琵琶と謡は素人の奈緒が聞いても素晴らしいとしかいえない。

「わかったわ。ここは御婆様の判断を仰ぎましょう」

「えっ？おつしよさんの？……」

「そうよ、その方が確実でしょ」

「へえ」

ワゴン車は杏奈が運転してきた。となりにには京都府警の金沢明子巡查が乗っている。

後に座席が少ないこともありたくさん女の子を乗せることができた。

そして、婦警を一人乗せる。同じことを5往復。

すでに暗示にかかった女の子達が現れなくなったことで紫苑も琵琶の演奏をやめていた。

「あなたにも一緒に来て欲しいの」

と奈緒に言われて頷く紫苑。

最後に全員が乗って帰っていく奈緒達。

井上家の玄関が大広間に一番近いから奈緒は一人の女の子をかかえて玄関を入っていく。

迎えるのは残っている婦警達と高弟達だ。

「奈緒様、これで？」

「はい、あと9人で終わりです」

「じゃあ」

と玄関から下りる婦警達。

奈緒は車に戻って花江達に声をかける。

「花江さん、紫苑さんを連れてきてくれる？」

頷く三人の舞妓と芸妓。

大広間には沢山の布団が引かれ、ママや希美子や高弟達が世話をしているが

ママに目で問い掛けると首を振る。まだ誰も目を覚まさないのだ。

「西沢さん、金沢さん。あなた達ここにおいて目を覚ました子から名前と住所と電話番号を聞いてから自宅のほうに連絡してくれる？」

「わかりました」

隣の稽古場には井上貞子は勿論、高弟達、舞妓や芸妓、置屋の女将達と婦警たちが奈緒を待っていた。

花世と豆奴に挟まれた紫苑……その派手な格好に皆の注視が集まっている。

「御婆様、少しよろしいでしょうか」

と奈緒が貞子の前の席に座った。

「何え、奈緒はん」

「実は……」

と花世と豆奴がこの間出会った紫苑のことを話だした。

そして先ほど暗示を受けた少女達をその琵琶の音色で足止めしてしまつた不思議と

小沙希と同一人物？という花世の疑問を話す。

貞子の鋭い目は奈緒の話の途中から紫苑にあてられていた。

「……というわけです」

「わかりました。あとはうちにまかせて……」

という貞子。

「あなた、紫苑いわれるんどすか？」

「へえ」

「何紫苑いわれるんどすか？」

「うち、気が付いたら紫苑いつてました。あとは覚えてないんどす」

「なに！記憶がないんどすか？」

「へえ、どこで産まれたか？自分の家は？……何も覚えてまへん……ただ……」

「ただ？」

「気が付いたら、うち琵琶と三味線をもって謡詠みをやりました」

「謡詠み？聞いたことおへんなあ」

「へえ、うちだけや思います。」

琵琶を弾いているとその人の想いがうちに伝わってくるんどす。

その想いをうちの口から吐き出すことによって

その人の苦しみや哀しみも心の底から吐き出してあげるのが謡詠みどす」

「その謡詠み、ここでやってもらえまへんやるか」

「へえ、けんどこには謡詠み出来るようなお方がおられまへん。

皆さん、幸せな金色の光の中におられるんどす。

そこでは謡詠みできまへん。謡詠みは死の淵に居られる方のみできるんどす。

けんど、この金色の光、凄うおす。うちの謡詠みなんか比べもんにならしまへん。

こんな金色の光を持つお方ってどんな人やる」

「そんな、凄うおすか？」

「へえ」

「そんなものを見る事が出来るあんたはん、やはりただもんやおへん」

「うち、ただの女どすえ」

「おほほほ・・・そのただの人の紫苑はん、

うちのためにその舞台の上でなにかやってくれへんやるか」

「へえ」

と言って立ち上がろうとするが

「ちよつと待って」

と止めたのがさつきから興味深く紫苑を見ていた杏奈だ。

紫苑の後に立つと

「この帽子は似合わないわ」

と黒いつばひろの帽子を脱がせてしまい、

ブラシでさっさとヘアを整えていく。

前髪で隠していたその素顔は少女と聞いていい幼さがあった。

「さあ、これでいいわ」

「ありがとうございます」

そういつて立ち上がった紫苑は二つの袋をもって舞台上がって行く。

「紫苑はん！それお三味どすやる。まずそれでなにかやっておくれやす」

「へえ、なにしまひよ」

といいながら袋から三味線を出して糸巻きを絞りながら弦の音色を合わせていく。

そんな所作はこんな若い人が……というほど慣れていた。

「紫苑ちゃん！『三千世界』をやっておくれやす」

という花江の声に

「へえ……じゃあ」

と三味線の音色がこの稽古場に流れ出した。

『 三千世界の鴉を殺し、主と朝寝がしてみたい 』

とても短い唄だが、その節回しといい声といい只者ではない。そう印象を受けたのはここにいる全員ではなかったか……

「紫苑はん！琵琶はやはり『平家物語』どすなあ」

井上貞子の声に

「へえ」

と座り込んで袋から琵琶を取り出した紫苑。

きちっと調弦してから琵琶の響きが部屋の中を流れ出した。

『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ』

平家物語のほんの一部だったが琵琶といいテノールの声といい花世が疑うのは最もな話だった。

もしかして？猜疑心が部屋の中に流れ出す。

「なるほど、花世ちゃんが疑うの最もですなあ。

琵琶といい声といいよう似てはる。小沙希ちゃんが天才なら

紫苑はん！あんたも天才です。お三味も琵琶もようもそこまで弾けるものどす。

そしてそのお声・・・節回しも天性のものをもってはる。

けんど花世ちゃん、紫苑はん小沙希ちゃんは別人どす」

「えっ？お師匠はん。それはどこで？」

「そうやなあ、若うて経験の浅いあんたらには判り難いやろなあ。見極めが付けにくいのは確かですけど・・・」

といて舞台上の紫苑を見つめて

「皆も勉強やおもてよう聞いとくんどすなあ。あんた達もどすえ」

と高弟たちにも言ってから

「何が違うかという・・・それは時代え」

「時代？・・・」

舞妓も芸妓も・・・置屋の女将達も・・・そして、高弟達も

いやいや、ここにいる全くの素人である婦警たちや早瀬の女たちでさえ意外な言葉に啞然としている。

姿は変われどあきあと同じ声を出し、同じように琵琶を弾くこの紫苑という子に俄然興味を持ってしまった薫。

「お母様！時代ってどういうことですか？」「思わず声を上げてしまっていた。

「薫はん、ここに全く同じ琵琶と謡いの二本のテープがあったらどこでどう聞き分けはりますか？・・・普通に聞いたら全く一緒なんどすえ」

「私には楽器の演奏はわかりませんから、言葉から聞き分けようと思います。」

小さなイントネーション、発音の仕方・・・そういうことから聞き分けようと思います」

「そつどすなあ、言葉使いでいえばこちらより薫はんの方が専門家どす。」

けどどちららは音曲に関しては専門家どす。

そのうちらが聞き分けようとするのは琵琶の演奏の仕方どす。

判りまへんか？・・・お三味の弾き方でも江戸からこつち

いくら伝統芸能やゆつても少しづつ変化しとるの、ここにいる花街のものは承知してはるはず」

「あつ！」

声があがった・・・そうだった。伝統芸能といえど時代が変われば変化する。

必然演奏の仕方もしづつ代わり、教え方もかわってくる。

漢字の書き方さえも子供に教える書き方を大人にいえば

混乱するぐらいかわってきた。昔との変化はそんなところまできているのだ。

「それで時代の違いなんですね」

「そうです。小沙希ちゃんの演奏や謡い方は平安時代に習ったものどす。

いくらうちが前世では小沙希ちゃんの婆やいうても

今のうちに平安時代のことおぼえているはずはござんせん。

比較の元はその紫苑はんどす。

紫苑はんは完全に現代で教わって弾いている・・・そう思うのはうちが幼いころに習った琵琶の引き方を踏襲しとるからどす」

「わかりました。小沙希ちゃんの琵琶の弾き方は全然違った。

平安時代と現代・・・だから時代の違いなんですね」

「そうです」

と言ってから舞台上の紫苑を見て

「けんど、うちの前にこうした天才が現れたこと嬉しい限りどす。

紫苑はん、あんたお家は？」

紫苑は首を振って

「あらしまへん、そやから小さな木賃宿に泊まりあるいているんどす」

「いけまへん！おなごがそんなとこに泊まっていたら・・・。

こここの地下にはいくらでもお部屋あるんどす。

そこをあんたのお部屋にしたらええ。

そのかわり時々舞妓ちゃんや芸妓はんはんに琵琶や三味線を教えてくれたらええ」

「ほんまどすか？いやあうれい・・・けんど、こんな幸せもうた

ら謡詠み続けられるか心配です」

「その時はそのときえ」

貞子言葉が終ると

「いやあ、嬉しおす。これでうちの夢実現できます」

「これ！花世ちゃん。大きな声で……」

「なんや、花世ちゃん。あんたの夢って」

貞子が笑いながら聞く。

「へえ、紫苑ちゃんの演奏で小沙希さん姉さんが舞いを舞うことどす」

「おうおう、そやったそやった。それが見れるんどすなあ」

「うち、紫苑ちゃんに約束したんどす。

いつかきつと小沙希さん姉さんと競演してほしいって。

紫苑ちゃんは約束してくれたんどす。

けどいつ実現するかは風任せっていわれてそれ以上は強ういわれへんかった」

「花世ちゃん、うちここにいるさかいいつでもどござ……」

「いやあ……うれしいわ」

「それと、御婆様。この紫苑さんの琵琶の演奏に暗示がかかった少女達が

集まってきたり座り込んだのは何故でしょう」

「うちにはそこまでわからしまへん。

けどそんな力その琵琶にあるんとは違うおもいますえ。

琵琶を通じて紫苑はんの力が元方の暗示を封じた……そう思うん

どす。

さつき紫苑はんが言うつつたやおへんか。

謡詠みは琵琶を通じて紫苑はんの心に人の想いが伝わってくるって」

「じゃあ・・・」

「小沙希ちゃんみたいないな凄い力やおへんけど、紫苑はんにも力が宿っている思いますえ」

「じゃあ。次は私の番」

と行ってたちあがった杏奈。

「紫苑さん！その服は？」

「へえ、うちが気が付いたときに着ていた服どす」

「どうやらその服しかないようね」

「へえ、けんど1回着たら洗いますえ。」

そやから2日続けて表に出られへんかったんどす」

「じゃあ、お化粧品は？」

「ポーチの中にいろいろお化粧品が入っていました。

メイク道具も一式あったんどすがほとんどが基礎化粧品どした」

「基礎化粧品を持ち歩くってこと普通しないけど・・・」

「へえ、訳がわかりまへん」

「奈緒姉、紫苑さんの身元を調べる必要があるようね。この人きつと良家のお嬢さんだった。

だって、その落下傘のペチコートって一般の女性は着ないわよ。

それにさつきヘアーを触ったとき少しの傷みもなかったわ。きちつと手入れをしている証拠よ。

記憶がないといっても教えられた字を読むとか肌の手入れをするとか

そんな日常的なものは忘れてはいないわ」

「わかった、急いで調べてみる」

「それと先ほど御婆様がいわれた琵琶を習っていた先生がいるはずでしょ」

「ええ、その辺は手抜きはないわ。」

「けど始めるのは今日の元方との戦いが終わってからね」

「ええ……」

い 沙希の身に大変なことがおこっているのは、ここにいる誰も知らない

第二部 第十話

沙希を追いかけようように家を出てきた飛鳥警視正を乗せたパトカーが比叡山の上り口に近づいた時、突然明るい光が車を包み運転していた京都府警の緋鳥礼子の視力を奪った。

助手席の篠田由紀子、後部座席の飛鳥日和子警視正と葉月礼亜は両手で目を庇う。

緋鳥礼子がかけた急ブレーキでようやく停まった車内。思わぬ静止の時間が過ぎていくのだ。

「……………そして、ゆっくりと目を開けた4人には先ほどの眩しさはもうない。」

『ガチャツ……………』後部ドアがあく。

「あつ……………警視正……………私に先に……………」

と偶然同時に声をかけた篠田、葉月両巡査……………だが、

「あつ！沙希ちゃん！……………」

と警視正の声を聞いた三人の巡査、もう何も考えずにドアを開けて表に飛び出していた。

沙希はあきあの名と共に三人にとってはもう大事な大事な人なのだ。

実をいうと東京と京都の6人の婦人警官のうち牛尾刑事の名を心に秘めている

西沢恵子以外の5人はもう早瀬の女として生きていく決心をつけていた。

ここで警視正が名を呼ぶということは沙希になにかあったに違いない、

自然に表に飛び出した三人と飛鳥警視正が見たものは地上1mの地点で光に包まれて横になって浮いている沙希の姿だ。

「沙希さん！……」

「あきあさん！……」

「沙希ちゃん！……」

と大きく名前を呼んで駆けつける4人、だが光の中、沙希は眼を閉じたまま微動だにしない。

実はこの4人比叡山の御山のそばで繰り広げられる鬼女との戦いは車の中から見えていて知っていた。

だから心がせき早く比叡の御山に……と急いでいたのだ。

それが戦いの真下になった一瞬、……目を離れた隙のことだ。

光の中、まるで蠟人形のような真っ白な肌の沙希、

死んだと言っのじゃなく、人工的につくられた人形のように変わってしまった沙希……

「いや〜！……」

と取り乱して泣き叫ぶ緋鳥礼子と葉月礼亜……そして篠田由紀子。

その3人の頬に1発づつビンタを張る飛鳥日和子警視正……

3人もよくは覚えていないが確かこう言っていた。

「しつかりしなさい、貴女達それでも警察官ですか……」

沙希ちゃんは死ぬわけないし、死んだわけでもありません……」

その4人の元に・・・いや横たわる沙希のもとに天空より一筋の光が下りてきた。

その光の中・・・真つ白な着物と袴を佩いた1人の武士・・・横たわる沙希の頬に手を置いてそして眉を少ししかめたのだ。

「あの・・・」

と声をかけようとした日和子に

「おお・・・そなたはお園殿・・・」

「いえ、私は・・・」

「そうであつたな、お園殿が転生されて今は飛鳥日和子殿・・・

今はこのあきあ殿の伯母上だとか・・・」

「もしま・・・あなた様は・・・坂本竜馬様・・・」

「そのとおりじゃ、わしは生前そのような名で生を受けておつたが今では天においてこのあきあ殿の守護を命じられておる。

だが、いかんせん今回は急な出来事であつた」

と指して前方を指し示す・・・そこに、光る半円のその中に女の子の姿が・・・

慌てて駆け寄る3人の婦警・・・

緋鳥礼子が光の中に手を差し入れると光がふつと消えた。

少女を抱きかかえ、沙希のもとに戻る3人の婦警。

「あきあ殿の優しさ・・・それがこんなことになってしまった・・・

その少女が奴の暗示でふらふらとここを歩いていた時

それた紅葉の炎の玉がこの少女に襲い掛かったのじゃ。

それを命を科して救ったあきあ殿・・・そのかわりこのような姿になられてしまった。

紅葉の妖術の杭を身体の中に打ち込まれれば力もなにも吸い取られ

てしまう。

このままでは明け方までには命までもじや……
しかし、ここではなにも出来ん……どこか……
といいかけたのを

「竜馬様！……この御山の中腹われらの仲間が大勢いる広い空き
地が……」

「おお……判った……」

「我らはこの少女を連れてすぐ追いかけます……」
言葉もそこに沙希の光とともに飛び上がる坂本竜馬。

「緋鳥さん！……私達も急ぎましょう」

「はい！」

「緋鳥さん、女の子は私が……」
といって女の子を受け取って助手席に乗り込む篠田由紀子。

パトカーは急発進をする……

パトカーが広い空き地についてみると大勢が囲んでいるその中……
パトカーから走り出た4人がスタッフや警官達を掻き分けて円の中
に入っていく。

スタッフ達が用意したらしい長テーブルにクッションをひいたその
上……

竜馬が沙希を横たえようとしていた。

「お園……いや、日和子殿……」

「お園でかまいません……で私になにか？」

「この術、あやつを倒しても消えはせぬ。わたしの力を持ってもい
かんともしがたいのだ……」

「そんな……」

「わしは・・・わしは・・・あきあはこんなことで死んだりはいしな

い・・・必ず復活する・・・そう信じているよ」

と声をかけたのは横にいる小野監督だ。

「だって、まだ『ステーション』が機能しているし、

今の様子をきちつとしたカメラアングルをとれるように配列しているんだ・・・」

「えっ?・・・」

といって小野監督をみて・・・そして竜馬に視線を戻す日和子。

「その証拠に2台のステーションが緊急停止した様子からのこと、
全て撮影しているんだ」

「えっ?・・・では・・・」

「そのとおりだと思うよ・・・肉体はこのとおりだが精神がまだ生きていて・・・」

どうしてそんな事できるのかわからないが・・・」

3人の婦警の顔がパツと輝いたが、飛鳥警視正はまだ慎重だ。

その視線は竜馬に移る。何やら考え込んでいる竜馬だが、その表情はさつきより明るくなっている。

だが開いた竜馬の口からは緊急を要する言葉がでる。

「それが本当ならまだ見込みがある。だがそれはわしでは出来ぬ。
格の高い僧侶の仕事となる」

『それは、もういいです。竜馬様・・・』

と声が聞こえてきたのはその時だ。

はっとして見る横たわった沙希の身体・・・かすかに開いた口元から

白いモヤのようなものが立ち上がり段々と人の形をとっていく。

それは・・・見える能力を持つ人だけが見える現象ではなく誰もが
”見る”ことになった。

人の形はそこに横たわる沙希の形をとった。

でもそれはホノグラムやフィルムの映像のようなものでなく

向こうが透けて見える映像であつた。それだけ力が弱まっているのか・・・。

『私の身体に埋め込まれた妖術による杭はどんな力をも奪っていくもの・・・だからこんな形にならざるをえません。

私は最後の力を使って奥の院のお上人様達を呼びました。

もうすぐここに来られるはずですよ。

お上人様にはどうすればいいのかお伝えしてあります。

あっ・・・もう力が・・・』

といって映像がもつと薄くなる。

『あつ、小野監督！『ステーション』はもう1人の私が動かしているから心配いりません・・・』

「そんなこと心配してないよ。だから君も早く元に戻るよう・・・」

・・・つて、最後まで言えなかつた。・・・というのは

横たわっている沙希の肉体が身体を起こしたからだ。

動いては止まり・・・動いては止まる。まるで人形のような動きだが

それは本当に最後の力を振り絞っているに違いない。

ここにいる全てのものが沙希のこの行為を涙を浮かべて見ている。

マスコミ関係者も警察関係者も職業には関係ない。

・・・みんな人として沙希を見ていた。

その身体は禅を組んでいく・・・そして、目を閉じているが前方を見据えるように顔を上げた。

最後にその身体が長テールから浮き上がり

京都の町が見あわたせる前方の小さな岩の上に降り立つ。

そして、そのまま静止・・・といったほうがいいのか・・・。

「ふむ、あきあ殿は禅である杭を抜こうというのか、あきあ殿らしいといえばそうなのだが・・・」

「竜馬様！・・・それはどういことですか？・・・」

「普通、他人にかけられた術を解こうとするのはつらいもの。

その方法はいくつもあるが全て時がかかるのじゃ。

この禅というのはわしも考えぬでもなかったが・・・禅は簡単なようじゃが、

その簡単な方法で術をとくのはあまりにも厳しくつらいのじゃ。

肉体にも精神にも負担がかかるこの方法・・・成功すれば刻が短くてすむ」

「時が・・・時間が短い？・・・それはどれほど？・・・」

「1刻ほどじゃ・・・今の時間というものでいえば2時間ほどか・・・」

「2時間も術を解くためにつらい行をつむのですか？」

「そうじゃ、だから昔から行者や陰陽師達もこの方法とつたものは皆無じゃ。

いや、とつたものでまだ生還したものはいないといったほうがよからう。

だから、辛いものと言えぬ。誰も経験して報告したものはいないから」

「では経験した人達はすべて・・・」
「今まで数人だったが、皆消えてしまった。仏がそういつておられる」

「沙希ちゃん・・・」

「仏・・・とくに菩薩様がいさめられたそうじゃがあきあ殿は聞かれなかった。

若い女子のため・・・その両親のため・・・そうあきあ殿が言っておられたそうな、

あきあ殿らしいといえばそうじゃが・・・つらいのう・・・守護してきたわし等何も出来ぬ。ただ見守るだけじゃ。

菩薩様が出来ただけのことをしてほしい・・・そう言っておられるが・・・」

その時、結界が光った。

どうやら結界に炎で攻撃しているもの・・・

「あやつめ、どうやらわしの術を破って自由になったとみえる」

紅葉は竜馬の術によって光の中に閉じ込められていたのだ。

竜馬が飛び上がるうとしたとき、天よりもう一筋の光が・・・

その光は沙希が残り宙に浮いていた『菊一文字』の本身と鞘のところで止まる。

その光の中から手が出て自身の柄を握る。そして、1歩進んで鞘をとるとその腰に差した。

白面の青年武士・・・竜馬と同じく白い着物と袴姿だ。

違うのは月代をきちつとそり挙げきりりとした二枚目だ。

この様子はすぐさま『ステーション』によって比叡山のモニターに映しだされた。

あわててモニタールームにかけこんだ小野監督。

沙希のことが心配だが僧侶がなくてはどうにもならぬ。

あのままそばにいたい仕事がある。ジレンマが小野監督を襲うが考えてみるとこのほうがあきあが喜びそうな気がするのだ。

モニターはきちつと写っていた。声も録音されている。

「紅葉さん！このまま地獄にかえりませんか？

そうすれば見逃してやっても良いのですが・・・」

「何を言う、この若造めが・・・お前こそわしが無に帰してやる！」

恐ろしげな鬼女がそう吼えた。

「仕方ありませんね・・・」

青年武士は刀を下段に構えた。

殺気はなく涼風の中にたっているような自然な構えであった。

「沖田め、死してもまだ剣の修行を怠ってないのか、

よほどあきあ殿に負けたのが口惜しかったと見えるのう・・・ふふふ・・・」

そんな声が竜馬から洩れた。

横にいた飛鳥日和子警視正・・・思わず竜馬の顔を見つめて

「えっ？・・・あのお方が沖田総司様・・・」

竜馬は天空の戦いを目にいれながら

「そうじゃ、新撰組一番隊長沖田総司・・・

彼は死して多くの志士達の命を奪った罪を償ってから天に召されたのじゃ。

そして今はわしと同じあきあ殿の守護をしておる。

守護とはいってもあきあ殿の守護はとてわしひとりではまかないきれん。

生きた人間でこんなに多くの天人の手を煩わすのは初めて……と

菩薩様は笑っておられた。

わしがあきあ殿の守護をまかされる前は古の……平安期の天人達
が

守護されておつたが、わしがこの任につくと全てのお方が解任されたのじゃ」

「どうしてですか？」

平安期の人間と聞いて訳を聞かすにはいらなかった日和子。

他の婦警3人はその横で熱心に聞いている。

「転生じゃ……転生されるためにその準備にかかっておられる」

「転生？……」

「そうじゃ、……これはおぬしにとつても、その横におられる女性達にも

関係あることじゃ」

と聞いて考え込んでいた日和子……はつとして顔をあげる。

竜馬は日和子と横にいる婦警達にニヤツと笑いかけてから

「そうじゃ、お園殿の考えているとおり……赤子じゃ……」

天人のお2人はお主とあきあ殿の間の赤子として生を受けるのじゃ」

「えっ？私もですか？」

「早瀬の血を引く者……血を引かずとも早瀬に認められたものは例外が1人もいない。……とはいっても歳を取った者は例外じゃがな」

といってカラカラと笑う。

「もう、あきらめていた私に赤ちゃんが……」

「警視正・・・とっても可愛い」

そう言ったのは篠田婦警。

「篠田さん、あなたにもでしょ」

「えっ・・・私にも？」

と人差し指を自分の顔に向けて固まっていたがそのうち泣き出した。

「嬉しい・・・私に赤ちゃんが・・・しかもあのあきあさんとの間に・・・」

二人の婦警が篠田を慰めているうち自分達も泣き出ししていた。

目覚めた女の子がそんな3人をキョトンとして見つめているのも知らずに・・・

そんな3人を放っておき、さらに竜馬に話し掛ける日和子。

「では沙希ちゃんの守護は竜馬様と沖田様・・・」

「いや、二人だけではとてもとも・・・」

それほどあきあ殿は生を受けた人間で二人とない存在・・・そう思ってもらいたい。

だから、あきあ殿にかかわったもの全て・・・じゃが、これでもまだ足りぬ」

「沙希ちゃんが関わった者といえば・・・あとは菊枝さん」

竜馬はうなずく。

「そして・・・千賀さん・・・」

「そうじゃ、そして緋龍、紅龍の龍神殿達もな」

「あとは平将門様と良子様ご夫婦・・・あとは出てきません」

「将門殿はわし等の上司じゃ。他には転生してしまったお園殿と和葉殿を退けて

篠原源太郎殿と相良進太郎殿もいるのじゃ。

他はお園殿が知らぬ女性がただ一名・・・」

「えっ？それは？・・・」

「これは、あきあ殿に知らさぬほうが良い。
お主達の胸奥におさめておいてほしい」

頷く4人だがなんだかとても不安だ……。

「母上じゃ」

「えっ?……」

「あきあ殿の実の母上じゃ」

「では……では……沙希ちゃんのお母様はすでに鬼籍に……」

呆然とする4人……

「数年前に事故に合われたそうな……」

「あきあさん……可哀相……」

そういう緋鳥礼子だが

「これっ……」

といさめる竜馬。

「そんなことあきあ殿のそばでいうのじゃないぞ……
母上は今こう言っておられる。」

『私というよりあなた達……早瀬の女性達のことじゃ。』

その女性達のそばにいるほうがあの子にとって幸せな事』
と言って
おられる「

「ではお母様には私達のこと……」

「よくご存知じゃ。そして喜んでおられる。」

ふふふ……どこの親でも同じじゃのう。

お主達……とくにお園殿には以前は母子だったとはいえ今は違
うのだ。

だから早くお主の子が見たいと言っておられる「

真赤になった頬を押える姿は少女のよう・・・だが婦警達のひやしを思うと

わざときつとした表情をつくって天空の戦いに目を向けた。

本当はそんなことひとつも思っていないかった婦警達・・・

ただ日和子の可愛さを目の当たりにして目を白黒していただけだ。

天空の戦いはまだ終わってはいなかった。

だが、それももうすぐ終わる・・・そう竜馬には見えた。

沖田の冴えた剣の技は紅葉の炎を全て、その剣で切り捨てていた。

逆に紅葉はその攻撃全て狙いどおりだったのが焦りなのか疲れなのか

いまでは半分も身体に当たらない

達者だった口のほづも、ただゼイゼイいっただけで無言となっている。

これではどちらが優勢なのかすぐに判ってしまう。

ただおかしなのは苦しい戦いなのにチラチラと頻繁に後方を見る視線だ。

ははあ・・・と紅葉がなにを待っているのか察する沖田総司・・・

そこで仕掛けた沖田の口撃・・・言葉で相手を攻撃しようというのだから

沖田も成長したものだ。

「紅葉さん、来ませんよ・・・」

「うつ・・・」といって口を噛み締める。何が？とは言えない。

話せばわずかに残っている気がされる。これ以上の攻撃は出来なくなるのだる。

それがわかっていているから、沖田の口撃は鋭い。

「あなたは捨石なんですよ。・・・元方は来ませんよ。・・・」

「うるさい！・・・」

それからの攻撃はがむしゃらと言っても良い。

だから1発も当たらなくなった。

炎のつぶて・・・それだけ小さなものになってしまったが

その中を静かに歩む沖田総司、ときたま身体にくる礫は

手に持つ菊一文字が切って捨てる。

そして、斜めに振り上げた青白く光る菊一文字・・・

「このまま切り下げれば紅葉さんは・・・消えてしまわれる。

いかがします」

言葉は丁寧だがその表情は仮面をかぶったようになんの表情も浮かんでいない。

紅葉は身体極まったのかドーっと後ろに倒れてしまった。

「ええい・・・殺せ！・・・」

「では、切り下げましょう・・・」

「ま・・・まってくれ・・・待つてほしい・・・」

「どうしたのですか？」

「すまない・・・私を地獄に戻してほしいのじゃ・・・」

「ほう・・・今になって命乞いですか・・・」

「違う！・・・私はあんな男の口車にのせられた自分に腹がたつたのじゃ。

このまま消えてしまえばその腹立ちが消えてしまつ。・・・

私は再び地獄に戻って修行のしなおしをする。

どんな辛さも痛みも今の腹立ちを思えば乗り越えられる・・・そう思うのじゃ」

「今の言葉気に入りました。．．．今、菩薩様が処分は私に任せ
てくれました。」

いいでしょう。．．．あなたを地獄に戻しましょう。

ですが一つだけ約束してくれませんか」

「何でしょうか？」

「あなたが全ての．．．心からの贖罪を終えれば天に上って
私達の仕事を手伝ってくれると．．．」

「えっ?．．．こんな私でもいいのですか？」

「当たり前じゃないですか、それに．．．」

「それに?．．．」

「いかにも手が足りません。あきあ殿は人とはいえ守護をするのは
大変なことなのです」

「そんなに?」

「はい、そんなあきあ殿、あの元方など歯が立つわけがありません
よ。」

それにあなたが放ったあの妖術．．．」

「あつ、さつそく私が．．．」

「いえ、止めてください。今、菩薩様もあきあ殿のこと見守ってい
たほうがよい。」

そうおっしゃっています。あきあ殿が今の状態を乗り越えれば又、
一段と高いところへ上られる」

そしてはあゝと息を吐く総司。

「これで又、我々が大変なことになるでしょうね」

「沖田様．．．はやく私を地獄に戻してください」

「あつははは．．．どうやらあなたもあきあ殿に魅せられたようだ。」

いいでしょう．．．では」

といって刀を下げて片手で何か呪文を唱えると紅葉の姿が一瞬に消

えてしまった。

そのあとをじつと見ていた沖田総司……でも何かを吹っ切るように少し首を振って
結界内に飛んできた。

あきあのそばに舞い降りた沖田総司だが大勢の見守るその中、ちらつとあきあを見てから竜馬のところに歩いてくる。

そこで立ち止まって腰の菊一文字を鞘ごと抜くと

「お園殿……これを……」

「沖田様、これはあなたの……」

といいかけたが

「いやいや、今の私にとっては無用の長物です。

あなたの里にでも飾っておいてください」

といつてから竜馬の横に立つ。

「あのう、これを」

ともつて来たパイプ椅子。

「すまぬ。じゃがな、今のわれ等には生前にこの手で触ったもの以外は、

人の手によって作られたものは触れられぬのじゃ」

「坂本さん、ちょうどいい。あきあ殿の横のあの小岩……」

そういつて座る二人の天人……

今はもうスタッフ達も警官達もそして米兵達もこの天人二人を受け入れていた。米兵達は日本人達にこの二人は相対していた百数十年前に死した偉人だと聞いたのだ。

「これは、どうしたのじゃ……」

そんな声が聞こえたのは天空の戦いが終わってそんなに時間は経っていないかった。

振り返ってみれば、ジリジリしながら待っていた奥の院のお上人、蓬栄上人達だ。

東京で見知った峰巖、宗円両僧侶と武者僧達の姿もある。

「これは蓬栄上人様」

「おうこれは飛鳥殿・・・、これはどうしたのじゃな・・・」

日和子はこれまでであったことを包み隠さず話す。

そして傍に立つてきた天人二人を紹介するのだ。

「こちらは坂本竜馬様・・・そしてこちらは沖田総司様・・・

お二人とも沙希ちゃんを守護をされているお方・・・」

「おうおう・・・」

と上人が拜むのは仕方がないだろう。

「しかし、妖術を解く方法、聞いた事はある。

そして禅で妖術を解く方法はあるがいまだ誰も成功したものはいないはず・・・」

と峰巖和尚。

「和尚殿そのとおりです。菩薩様もそういつておられました」

「じゃが、その菩薩様がどうしてこの千賀に敵しい方法を？」

もうすっかり娘と思っている峰巖和尚、言葉が少しきつくなるのは仕方が無い。

「この方法はあきあ殿自ら選んだのです。菩薩様も見守ると一言だけ・・・」

「峰巖こうはしておられぬ、お主と宗円は沙希の禅を頼む。

天鏡と武者僧達は般若心経じゃ。わしは奥の院に伝わる秘伝の経じ

や。

お前達急いで祭壇を・・・」

武者僧達に混じってスタッフ達も手伝うのであれよあれよと沙希の座する横に

祭壇が作られた。

正式な衣に着替えた僧侶達、蓬栄上人が祭壇の前に座るや経が始った。

日本人にとっても目新しい信仰の行事なのだからアメリカ人にとってはもっと不思議な空間となる。

日本の幽玄として映るのか・・・もう夢中になって撮影しているのだ。

これから2時間見守るしか出来ない者にとつて、じりじりとしか過ぎていかない刻の不思議さ。

ピクとも動かぬ人形のようなあきあ・・・そのうしろに立つ峰巖和尚・・・

ただ立っているようだが心を澄まして、まだせぬあきあの心の声を聞こうと自分自身を空にしている。こんなまねはその辺の坊主には到底真似は出来ぬこと。

そして、あきあの声が聞こえれば・・・それからあきあの苦痛との戦いとなる。

この方法で・・・声が聞こえてからしばらくして全ての人が消えてしまった。

それほど、精神に・・・肉体に大きな負担がかかるのだ。

遅すぎる時間の流れ・・・でも時は変わらずに過ぎて行く・・・見守る人々が苦痛となったとき、今まで動かなかった沙希の身体が

傾き

後ろの和尚から警策きさくをつける姿勢になった。
何の表情も見せず自然に……そう自然に沙希の肩を打つ。

見ていた者達、思わず身を乗り出した。

天人二人の横にパイプ椅子に座って刻を待つ日和子……

「ふむ……これからじゃ辛いのは……」

「そう……消えてしまukaiなかはこれからの時を待たなければ……」

二人共さずが武士だ。目を半眼にして同じように禅を組んでいる。

しかし、それから日和子にとって苦痛の刻となった。

今まで人形だった肉体に生気が戻ったのはいい。

だが、その肉体に襲う苦痛は沙希の表情を見れば確かだ。

表情を無にして何も悟られまいとする沙希。

急にその身体が薄くなり向こうが透けて見え、

今までの努力が徒労に終わろうとしたことが何度もあった。

そのたびに竜馬も総司も

「うむ……」

と声ならぬ声をあげる。

沙希の苦痛な表情……けれどそんなときには右肩をあけて

警策を求めるのだ。もう今では蒼白な顔をして右肩を打つ峰巖和尚

と宗円和尚……

彼等にとっても命を掛けたこんな凄い禅は初めてだ。

お互いに交代したあとはガツクリとひかれたゴザに

腰をおとってしまうぐらい壮絶な座禅……。

沙希は声をあげない……ただ、タラリと口元から一筋の真っ赤な血が流れ出す。

そんな沙希の顔に少しずつ平静な表情があらわれたのは2時間まであと15分と迫った時だ。

「これで大丈夫だと言いたいが、ここまで進めたものは皆無なのだ。

だからこれからなにがおこるか、わしらにもわからぬ」

そう言った竜馬の言葉に付け足して

「最後の最後まで気を抜かぬよう・・・」

そういう沖田総司。その言葉が当たったと思われたのがあと5分と迫った時だ。

急に沙希の身体が心臓あたりから光だしたのだ。

そして身体全体が黄金色に変わったとき嵌めていた真赤な陣八が真っ二つに割れて

岩の上に落ちる。

そして・・・

「ああ〜沙希さんの額が・・・」

と声を出した緋鳥礼子・・・

額からあらわれた第三の目が青く光ったかと思うと両眼も開いたのだ。

その第三の目・・・アジナー・チャクラ天眼通ともいう・・・はすぐに閉じてしまい、

普段の沙希のおだやかな表情に戻っていた。

「竜馬様・・・総司様・・・あれは？」

「判らぬ・・・判らぬがあきあ殿はひとつの壁を乗り越えられて通力を得られた。

そう思つてもよろしかろう。最も困難な方法ではじめて生還されたお方なのだから」

「かなわぬ・・・いくら修行しても沙希殿は私の前をどんどん行ってしまわれる」

総司はそう嘆息した。

最後に峰巖和尚に1発、宗円和尚に1発と警策をうけるともう何事もなかったようにスツと立ち上がった。その表情は何の屈託もなくおだやかであった。

青息吐息で横倒しになってしまった蓬栄上人や天鏡・・・そして、武者僧達・・・いかに必死に経をよんでいたのか判る。これも青い顔でへたり込んでしまった峰巖和尚と宗円和尚。

いくら座禅と坊主はつきもので毎日のおこなっているとはいえ命がかかる初めての禅・・・後ろで見守っていた峰巖和尚も宗円和尚も

身体中に不自然な力が入っていたのだからもう座ることすら困難になっっている。

そんな僧侶達に沙希は不思議な仕草をする。

口の前で親指と人差し指で円を描きそこに『ふ〜』と息をかける。

するとそこからシャボン玉のように次から次へとピンクの小さな花びらが

舞い上がったのだ。

花びらは風に乗って僧侶達の上に舞い落ちる。

衣に落ちた花びらは一瞬ピンクの色を濃くすると一瞬に消えてしま

う。するとどうだろう、今まで真っ青な顔色で『ハアハア』とまるで虫

の息だった

僧侶達の顔色がとたんに良くなり呼吸も平静に戻ったのだ。

蓬栄上人や峰巖僧侶、宗円僧侶も例外ではない。

皆驚いたように回りを見渡し、そしてニツコリと微笑む沙希を呆けたように見ている。

あっという間に元気を取り戻させたのが 鬼女の妖術で命をかけて必死に戦っていた沙希なのだ。

沙希はもう一度ニツコリと微笑むと踵を返してこちらに向かってきた

「竜馬様・・・総司様・・・お助けいただきありがとうございますと。」

そして、お久しぶりです。・・・といっても私にとってはほんの半日前の出来事」

「さすがはあきあ殿じゃ、あれだけのことがあってもけるりとしておられる」

「いいえ、冷や汗ものでしたわ」

「沙希殿、冷や汗ですんだら重畳ですよ」

「いいえ、総司様。やはりあれは私の慢心が招いた結果です。

菩薩様もそう見抜いておられるはず・・・」

「やはり沙希殿、何もかもわかっておられます。

しかしそれにしても、あなたはただではやられない。

この高い壁を越えられて通力を得られたようだ」

「はい・・・でもこの力私には過ぎたものです。

今までの陰陽術でさえ、重荷になっていましたのに」

「何を言われる、沙希殿。世界中も億といわれる人がいようとこの力を使える現世の人間はあなた1人なのです。」

そして最もふさわしいのもあなただ。

それにこれからも厳しい使命が待ち受けているのも確かです。力に溺れてはいけないが、力を受け入れてそれを最小にして使うのもあなたの技量なのですよ」

「総司様はそれを私にせよとおっしゃられます?」

「はい!」

「竜馬様も?」

「そんなのあたりまえじゃきに・・・守護者としてあきあ殿にはがんばってくれとしかいえんのう」

「竜馬様も、総司様もズルイ!」

「あはははは・・・」

どうして出来るのかわからないが天人の二人沙希だけには触れられるようで

二人して沙希の肩を叩くのだ。

二人の天人の沙希に対する暖かい心はそばで見ている日和子達にも伝わってくる。

けれどこれだけ心配をかけたのだ。沙希には言っておかねばならない。

「沙希ちゃん!」

「はい!・・・」

「あなたは自分の慢心・・・わかっているのですね」

「はい、もう肝に命じて・・・」

「けれどこの場にいるたくさんの人、そしてこの模様を『ステーション』の

中から見ていた人にどれだけ心配をかけたか・・・」

「はい、判っています」

と行ってニツコリ笑った。
はっとする日和子。どうも今までの沙希とは感じが違つのだ。なんだか堂々としている。

「どうやらよいことありそうね」

「はい、この事件。誰一人傷をつけずに解決出来そうです」

「じゃあ……」

「はい！……人質の女の子達の居場所をつきとめたんです」

「さすがね……あんなことがあつてもただではおきないなんて」

「いやだわ叔母様……」

と笑う沙希。

そこからが迅速だった。相手は藤原元方……約束などないに等しい。

元方の言った刻限はあと二十数時間あるのだが、そんなもの待っていると寝首をかかれるのが落ちとなる。

沙希の依頼により今走り回っているのはマスコミ関係者や警察関係者……

そして、その間にも『ステーション』が晴明神社を見張る2台をのけて次々と降りてくる。

坂本竜馬と沖田総司は沙希の依頼によつて天に戻った。

今、沙希は気持ち良さそうにする蓬栄上人の後ろで肩を揉んでいるのだ。

嬉しそうに次を待つ峰巖和尚……こうしてゆったりしているのはさつき聞かされた沙希の作戦には奇想天外だが、これならば……と納得できる作戦だった。

まだ聞かされているのは少人数だがその時いた竜馬も総司も

カラカラと笑い・・・でもいかにも感心したように

「よくもこんな作戦を考えるものじゃ」

「さすがは沙希殿、これではいかにも小馬鹿にされたようで力を出し切れないでしょうね」

沙希があみ出した荒唐無稽な作戦は女性でなければ出来ない。

だから、今祖母の家にいる森田婦警と京都府警の8人の婦警を呼び寄せたのだ。

満足そうな蓬栄上人にかわって峰巖和尚の肩を揉む沙希。

その回りに準備を整えた者達があつまってきた。

『ステーション』に一度乗った者は交代で乗る乗員達に偉そうに教えている光景が

あちらこちらでみられる。

ジョージ・ルーク監督の元に集まったアメリカのスタッフ達。

肩を揉むセーラー服の美少女、日野あきあに視線を送るのは誰も同じだ。

「彼女が僕達を助けてくれたんですね。なんだか凄い少女ですね」

「監督が来年、彼女を使って映画を撮るときは絶対に僕を使ってくださいね。」

「こんなチャンス逃したくはないから・・・」

「どうやら君達も彼女に魅せられたようだね」

「勿論！」

まるでコーラスのような返事が聞こえてくる。

ケイト・マイヤーは叔父達とは離れて、瑞穂とゆりあの間にはさまれて沙希の傍まで歩いていく。

その姿を見て微笑みながらケイトに抱きつきキスをする沙希、

ケイトは驚いた・・・日本人がこんなに自然に抱きついて頬にキス

をするなんて

今までであった日本人とは全然違っていた。

「ケイト・マイヤー・・・駄目よ。」

私なんかモデルになっても誰も見る人はいないわよ」

といつてから頬にもう一度キスをしてからちよつど連なつて上がつて来た

パトカーを迎えに行つたのを呆然と見送る。

「ねえ・・・どうして?・・・どうして彼女は私を知っているの? それに思っていたことをズバリ言われてしまったのよ」

「だから、言つたじゃない。沙希には何も隠せないつて・・・本当に怖い子よ・・・」

でも本当に可愛くて優しい子・・・」

そついうゆりあの顔を見てから再び沙希の後ろ姿に視線を移すケイト。

「まあ、奈緒姉・・・希佐ちゃん・・・」

沙希が跳び上がつて迎えた二人・・・以外にも森田亜季婦警、

京都府警の佐藤秀美婦警、西沢恵子婦警等、計8名、総勢10名が

沙希の回りに集まる。

「沙希!・・・おばあさまがね、あなたも行つて来なさいつて。」

モバイルでのあなたは落ち着いていてとてもおだやかだったから事件も大詰めだわなつて・・・」

「わたしには沙希さんの強さを良く見てきなさいつて言われました。」

それから、私も行くつてごねられていた薫さんにひづるさんが

『薫姉さんが高校生になるなんて京都が焼け野原になるより難しいつていわれ、』

家中追い掛け回されて真理さんに酷く叱られていました」「
という全員が目撃していたことなのでうふふふとつい笑ってしま
う。

「しようがない薫姉さんだこと」

とついため息がついてしまう沙希。

でもその視線が森田婦警にいくと

「そうだわ、森田さん。東京でのストーカーの事件どうなりました
？」

「おかげさまで沙希さんが予知された通りに事件が解決できました。

犯人も飛鳥警部達が捕まえられ、

それと取り調べも異例なことですが沙希さんがおっしゃれた通りに
牧検事総長が最初から取り調べに当たられていているそうです。

あっ、それからすでに皆さん東京を発っておられ、さきほど連絡が
あったときは米原からでした」

「じゃあ京姉達、もうすぐ来るのね」

パトカーの運転席から降りたのは京都府警の刑事達だ。

婦警達を送りがてらこの臨時の本部の様子を見にきたという。

清明神社のことを聞いた沙希に

京都以外からの応援が続々とかけつけているので

家族が襲い掛かることは少ないのだという。

でも、娘のために捕まるのを承知で襲ってくる家族がいるので油断
はしていないらしい。

どうやらあのコピーは役にたっているようだ。

「眠ってしまった家族達は呼び寄せておいた救急車で京都市内の病院に

手分けして搬送しました」

と誰も傷つけずに清明神社の守りを固められてホッとする牛尾刑事。

「じゃあ、牛尾さん達は？」

「はい、婦警達を送ってきただけなのですぐに戻ります」

「わかりました。でもこれからの作戦、あなた達も関係のあることですから

もう少しここにいて聞いてほしいんです」

そういう沙希の顔をじっと見てから

「わかりました。そういうことでしたら作戦会議を拝聴させていただきます」

牛尾刑事の顔を見れば婦警達に自分の先祖の話聞いたのだろう。

何か話をしたい様だったが

「牛尾さん、ここにいればあなたにとって不思議なことがおこるわ

と言っただけでその場を離れてしまった。

でも沙希が居るところは、皆が集まってくるので直ぐ判ってしまう。

そんなグループを横目にミランダ軍曹はキヤメオン大佐に報告をしていた。

「とにかく乗り心地も素晴らしいものでした。

『ステーション』が人間によって動かされているなんて今でも信じられませんが、

異次元になんて・・・思っても見ないことでした」

「わしも彼女を観察し続けているんだ。

全く人間とは思えない能力の持ち主なのだが、

それよりも彼女が過去の人間と親しいというのは驚異だ」

「この先どうなるのでしょうか？」

「わからん。だがこのまま彼女を観察していくべきだろうな」

「わかりました」

と敬礼して沙希の周囲の女達に混ざって行く。

煌々と照らされていた照明が消されるとまだ少し薄暗いが
太陽の光が山の木々の間から木漏れ日が洩れてきて新しい1日が始
った。

「みんな、集まってください」

とこの広い空き地に散らばっているマスコミ関係者や警察関係者を
声をかけて集めていく京都府警の婦警達。米兵達も関係なく集めら
れた。

こういう場合『ワイワイガヤガヤ・・・』と、煩いものだが話し声
は最小限でその声もすぐ消える。

ただ、僧侶達に囲まれて座る少女・・・ただ一人に焦点が集まって
いる。

まったくもって不可思議な存在だ。

この少女のどこにあんな凄い力があるのか。

マスコミ関係者・・・特に現場の人間と帯同してきている社長や部
長達が

今後の番組編成を考えると彼女抜きには考えられない。

彼女を獲得した局が、視聴率のトップを取れるのはあきらかだった。

アメリカのスタッフ達と座るジョージ・ルーク監督もテレビと映画の違いはあれども同じような考えだ。

彼女を撮ることはアカデミー賞の道につながる。そう確信している。

最初、彼女を知ったのはいとこが録画したテレビドラマのビデオだった。

そこにうつる彼女はナチュラルでも新鮮だった。CGは良く出ている。

アニメが世界的な日本ではこれぐらいは当たり前だと思っていた。

そしてこの映画をとったのが日本の巨匠小野監督と聞き、急ぎ来日したジョージ・ルーク監督。

そこでスタッフにテレビに出ていた日野あきあという女優を使って映画を撮ったと聞き急いで京都にいる小野監督に電話をした。

実を言うとあの試写会の前日、小野監督の自宅で完成されたラッシュを見ていたのだ。

それはテレビで見ていたよりも新鮮な驚きでいっぱいだった。

正直魅了された。でも癪だったのでいいCGのスタッフを使っているね。

と言い捨てておいた。それが……まさか……

実物のあきあに逢ったときは……歳外もなくどきどきしてしまっ

た。

それほど魅力的な女性……それが日野あきあだった。

それに彼女の英語といったら……

まだ誰も知らないことだが、あきあは西部も東部も英語のなまりを使い分けられる。

ときどきなまりで話すことがあるくらいだ。

そして、あのホテルのこと・・・それがあきあの力を知る原点となった。

英語を話すあきあがいることに安心し通訳を帰そうとしたとき

あのアイドルの悲鳴が聞こえた。皆慌てて窓に身を乗り出したり、走り回ったりする中、不思議な呪文を唱えるあきあの衣装が一瞬に変わったとき

彼女の友人？達が口々に何かを言い、小野監督が渡した何やら恐ろしいげなマスクを

彼女が被った時既に彼女はこの8階のレストランの窓から身を乗り出していた。

そして目の前であっというまに空たかく飛んでいってしまったのだ。

彼女のことを詳しく教えてほしいと小野監督に頼んだ時が笑って答えなかったのは、

こういうことだったのか。

それからの彼女の行動とにかく凄かった。

ジョージ自身ここにいることは不思議だし、人生最大の幸運と感じるのだ。

ここに到着してからもいrownなことがありすぎて、本にでも書かなければ語りつくせない。

ジョージが作った映画史上最大の傑作といわれる作品も絵空事であり

今、スタッフ達がフィルムに納めているこのノンフィクションに比べるこ

作り物と本当のことの差が出るのは仕方ないだろう。

ジョージの隣りに集まったスタッフ達はとうだったのか・・・本当は嫌で嫌でたまらなかった。

飛行機の中で見せられたテレビドラマも良く出来ているなあと思っただが心から見ては居なかったので夢中にはなれない。

かえって、おやじ・・・ぼけたかと思っただくらいだ

それがどうだ、ここに来てみて驚いたの何のって・・・あの女優の力が本物だったなんて。

こんなの夢だ・・・と思うような化け物が現われ襲われたのが発端だった。

それを助けてくれたのが女優日野あきあ・・・

どちらも常識でなんか考えられないパワーの持ち主。

あきあは自由に空を飛び、化け物の噴く火を切り捨てる剣技の持ち主でもあった。

時間が経てば経つほど魅せられていき、

この女優を使って来年には映画を撮ると聞けば、

おやじ！やったあ・・・と今からワクワクする現金なスタッフ達。

一方ケイトはというと、瑞穂やゆりあとすっかり仲良くなり、その上であきあのそばにもっと近づこうと努力していたのだ。

ケイトは叔父やスタッフとは別の意味であきあに魅せられてしまった。

ケイトが29というこの年齢まで仕事と遊びだけで恋人を作らなかつたのは

結婚して縛られるのが嫌だっただけではない。

この人だ・・・と思う男性が現われなかっただけだ。

だが、今気づいたこの不思議な感情は・・・

まさか？・・・まさか！・・・自分が！・・・たしかにアメリカはその本場みたいなものだ。

でも自分にはそんなの別世界であり、いつかは好きになった男性と出会い、

普通の結婚・・・そして可愛い赤ちゃんを・・・と夢見ていたことが・・・。

早瀬の女達・・・特に先ほどからずっと一緒にいた瑞穂とゆりあ・・・、

女の情と哀をこの時代まで引き継いできたのが早瀬一族の特徴であり、

早瀬の血を引いていない女でも一族に向かい入れられた女は、朱に交われば・・・

というのか女の哀しみを知るのは早い。

だから

「ケイト！・・・あなたも沙希に惹かれてしまったのね」

とケイトの心の中をズバリ当てるゆりあに『ビクッ』と身体を震わす事になる。

仕事などある面では男にもズバズバ言えるケイトではあるが、恋という心のひだには臆病な乙女のような反応なのだ。

でもゆりあの顔を見ると決して冷やかしたりしている表情ではない。

同じ女として穏やかにケイトの手を握るゆりあ・・・

そして、反対からは瑞穂の少し小さいが温かい手。

「私・・・沙希が好き・・・大好き・・・

だから、沙希の子供を産むの・・・そう決心してる」

「私も・・・ゆりあ・・・ケイト。沙希とは決して結婚できないけれど

良い妻の一人になって子供を産むの。

沙希と一緒にいると虹に包まれるから・・・だから死ぬまで一緒・・・そう決めているわ。

といってもこんな気持ち早瀬の女なら皆持つているからね」

「結婚だなんて・・・それに赤ちゃんて？・・・」
わけが判らない？というケイト。

「そうでしょうとも・・・あなたにはまだまだ知らない事だらけだわね。」

どうする？瑞穂」

「そうねえ、あなたもまだママには逢っていないわね、ゆりあ」

「ええ、こつちにきてここに直接来たから、まだ京都にお家には行っていないわ」

急に心配そうになるゆりあ。

「ママはもう全てを知っているの。さっき電話したとき

『ゆりあちゃん、早くこつちに来て温泉に入ってゆっくりできればいいのに』って言っていたから」

「本当？」

「こんな嘘言つてどうするの？」

「嬉しい・・・私でさえこうして向かえてくれる・・・いいわ・・・ケイト教えてあげる」

「ゆりあ・・・私でさえってそんなこと・・・」

「いいのよ、瑞穂！今までの私って情けないほど自分を持っていないかったし

他人の目ばかり気にしていたお馬鹿な女の子って自覚しているもの。

でもね、瑞穂・・・ケイト・・・。私、沙希に助けられて変わったわ。

自分でもそう思うもの。強くなったし、目的も出来た。確かにさっき、沙希がやられてしまったとき取り乱したわ。

自分でも驚くほど取り乱してしまった。瑞穂に頬を叩かれなかったら

あの『ステーション』から飛び出してしまったかもしれない。

沙希と知り合ってまだ数日なのにね。だから・・・そんな私だから、悟ったのよ。

命をかけて・・・命をかけて沙希を愛しているんだって。

確かに沙希には律姉という婚約者がいるけど、

早瀬一族って特殊な集団のなかでは、望めば長となる沙希の子供を作ることが出来るわ。

だから私は作るの沙希の子供を・・・

まだ行ったことがないけれど、穏やかな早瀬の隠れ里で子供を育てたい」

「早瀬の隠れ里かあ・・・早く帰りたいなあ・・・」

「あれ？瑞穂は京都の生まれではないのですか？」

というケイト。

「うん、そうだけどいろんな事があって大嫌いになってね・・・でも沙希に逢ってからだよ、

この京都を少し見直すことができたのは・・・。

でもね、私にとってまだ一度しか行っていないけど

早瀬の隠れ里はもう私の故郷になってしまったといってもいいわ。隠れ里ってそんなところなの」

「私も隠れ里へ行ってみたい・・・でもその前に」

「どうして女の子の沙希が赤ちゃんをつてことでしょ」

「えっ？」

「わかるわよ、そんなこと。それしかないでしょケイトの疑問って」

「えっ？・・・ええ・・・もしかしたら・・・」

「その通りよ、ケイトの考えている通り。沙希は男なの・・・半分はね」

「半分？」

「そう・・・そうね、私が里で奈緒姉から聞いた話がいいわね。

奈緒姉は早く沙希に抱かれなさいと私に言ったの。

私はそれを私を羨ましくするための話だと思っていたわ。

だってその頃は早瀬一族の事そんなに深くは考えていなかったからね。

でも奈緒姉は本気で言っていたの。その時教えてくれた沙希の身体ってね・・・

マシユマロのような白く柔らかい肌・・・手に吸いて放れないの。

それにその柔らかかなバストは・・・バストというよりお乳といったほうがいいえて妙よ。

・・・思わず口に含んでしまいそうになるの。

実際私は心が拒んだけれど身体のほうが負けてしまっていた。

夢中で乳首を吸っていたの。そして、私は捨てたはずの女に戻っていた。

昔レイプされながら感じてしまっていた汚い女にね・・・

でも女に戻って不思議だったのは私は女が嫌いでないということうつん、そういう意味ではないわ。

私の中で汚いって思い込んでいた私のなかの女のことよ。

ああ、私って本当に女なんだって悟った時、私は救われていた。

だから、心が軽く浮き立ったまま沙希のこと大好きだって直接本人に言ってしまうていたの。

沙希は微笑んで私をギュッと抱きしめてくれた。

その微笑の中、私は沙希に抱かれていたわ。

そして、終わった瞬間・・・出来たって感じたの。

何がつて？・・・勿論、赤ちゃんがよ。

女つて本能で知ることが出来るつてママが言っていたけど本当だったと奈緒の言葉を伝える瑞穂。

「それつて・・・」

「嘘は言わないわ、ケイト。直接奈緒姉に聞いたからね。

奈緒姉つて日本の警察の偉い警視総監つきの秘書官をしているエリートキャリアの警視殿よ」

「そんな偉い人が？」

「早瀬一族をなめたらいけないわ。まだまだ偉い人つてたくさんいるんだからね」

「わかつたわ」

「わかればいいのよ。・・・それでね、最後に奈緒姉がね」

「ええ」

「沙希の身体つて99%が女だけど、1%の男つてその辺の男より凄まじいつて・・・」

「凄まじい？」

「ええ、あの奈緒姉の意識が遠くなつて何が何だか判らなくなつたんだつて」

「何か、聞いているだけでも凄いわね」

「そういうことよ・・・」

そんな話を聞かされたケイトだが、この先どうするかはもうすでに決まっている。

この会議に集まった警察官達にもそれぞれの思いがあつた。

ここにいる大部分が東京から来た。京都を焼け野原にしてはならない。

もしそれをさせてしまったら次は東京だ。・・・日本に未来はなく

なる。

でも本当の想いは別にあつた。いくら警察官でも人でないものと戦えない。

戦えるのはただ1人だけなのだ・・・人類でただ1人・・・それも天才と呼ばれる女優であり、コンピューターの天才でもある1人の少女。

その彼女が戦いやすいよう後方支援するだけのためにこうして東京からかけつけたのだ。

あの銀行強盗の事件の現場で彼女の力を見せ付けられた警察官。平将門の事件のとき警戒する彼等の前に2人の僧を連れて表れ、準備が終わるとまた2人を連れて夜空に飛び立った少女。常識というものが音をたてて崩れさつた瞬間だ。

・
呆然としている彼等の前に飛鳥警視正が用意したテレビモニター・・・そこにうつっているのは・・・・・・食入るように見つづけたのは言うまでも無い。

だが決して誰もが出来ることではなかった。

脚の震えが止まらない。

どうしてあんなことが出来るんだ・・・そう叫びたかった。だがその戦いがプロローグでしかなかったなんて・・・。

薄気味悪い夜空一杯の男の顔・・・気分悪いが忘れられない・・・。

飛鳥警視正が京都へいく有志をつのつた。
志願した警察官達・・・集まってみればほとんどが昨日から見知つた顔だった。

ただニヤツと笑っただけ・・・それだけで良かった。

アメリカ兵はというところに来て信じられないことばかり目にした。だから、ただ1人『ステーション』に乗っていたミランダ軍曹に皆、話を聞きたかった。

なにせあんな化け物に殺されそうになるわ、空を飛んできたスーパーウーマンに命を助けられるわ、ともう夢でもみれぬことばかりだったのだから。

でも彼等の最大の関心事はスーパーウーマンと天空から降りてきた二人の侍だった。

彼等はクリスチャンだ。

子供の時から聖書に親しみ、日曜日に教会にいつて神父の説教を聞いてミサを歌う。

神は本当にいると教えられてきた彼等の人生でも教えられてそのまま信じる者はいない。

だが、二人の侍を目の前にして・・・自分の日頃の行動が頭に浮かんできた。

正直、顔を上げて言える行動はとっていない。

兵士としての規律の中、1歩外に出れば飲んで騒いで女と寝る・・・そんな生活だ。

人間的といえればそれまでだが、いつも見られていたと思うと身の置き所がない。

スーパーウーマンはハヤセサキ、それが本名でヒノアキアがスクリーンネームと教えられた。

彼女は女優、それも世界的に有名な小野監督に映画をとられ、来年にはジョージ・ルークの映画の主演に決まっていると聞く。わくわくする話だ。彼女はもう東洋の1人の女優ではない。

本物のパワーを持つスーパーウーマンで、ハリウッドでデビューが

決まっているシンデレラなのだ。

彼女がもし私の靴にキスをといたら兵士達は争ってその足元にひれ伏し

その靴にキスをするだろう。私を守ってといわれれば命を賭して守るだろう。

ただしだ・・・相手が人間ならばだ。

だが・・・そう・・・彼女は大の男嫌い、そう聞いたからこうして遠くから見ているだけ。

そのかわりミランダ達女性隊員6名はもう夢中だ。

キヤメオン大佐も苦笑いするだけで兵士達に混じって座っている。

日野あきあのこととはもう女性にまかすしかない・・・そう悟っているのだ。

改めて沙希は先ほどの失態で皆に心配をかけたことをを詫びてからまずは警視庁の松島奈緒警視が警察官による人質の両親達の安全かつスムーズな確保の仕方を話す。

この比叡山の各所に人員をおき、両親達の急襲から御山を守らねばならないからだ。

そこで清明神社を守ってきた京都府警の警察官達の話が役にたった。

実際、刑事達の話は現場を踏んできただけに迫力が違う。

そして、懐から出したコピーしたものには目を見張った。

襲ってくる人達を苦もなく眠らせてしまう沙希がつくった半睡の術。

相手を怪我なく確保してしまうこの紙、アメリカの軍人達には驚異に映る。

相手を怪我さしたり殺したりするような恐ろしい武器ではない。

この紙切れ1枚でそれらの武器を凌いでしまうのだ。

警察官も拳銃という武器も使わないこの方法には同じ職業として大きな関心があった。

米兵達にはゆりあが、ルーク監督やスタッフ達にはケイトが通訳しているから

作戦会議はスムーズに進んでいく。

輪になって座るみんなの前の長テーブルの上。

時折、警察官やマスコミのスタッフ達が車で戻ってきては

このテーブルの上に置いていく紙袋、そして持ってきた者達は皆の輪の中に入って座る。

どうやら言いつけられたものを揃えられてホッとしているようだ。

でもどうしてこんなもの揃えなければいけないのか、訳は聞かされていない。

「では、これから肝心の作戦を発表します。

私自身これを聞かされたとき耳を疑いました。

はたしてこんなこと可能なのかどうか……でも冷静に考えて見ますと

相手は幼い女の子の人質をとってその親達に自分の目的を達成させようという卑劣な怨霊です。

私達の常識では測れない悪辣さです。

だからこの方法が考える限り一番いい方法じゃないかと考えるにいたりました。

ではその奇想天外な作戦を考え出した早瀬沙希さんにその内容を発表していただきましょう」

といって松島警視からバトンを渡され、眠らせた両親達をどうすればいいのか

この比叡山のどういったところに何人の機動隊を配置するのか。

そして、マスコミの代表として小野監督とルーク監督、カメラマン大佐とで

打合せした『ステーション』に乗り込み撮影するマスコミ関係者と各2名づつ乗り込む機動隊とアメリカ兵士。

いろんな留意点を話し、

今日の大詰めの時を皆に思い知らしめた警察庁飛鳥日和子警視正、僧侶達に囲まれて座る沙希を呼び出し、自分は沙希の斜め後ろに立った。

沙希は長テーブルを前にして立つ。

「作戦決行は午後12時30分です。あと2時間です。

この時間が長いか短いかは皆様の気持ちの持ちようです。

では作戦を発表します。……おっと、その前に……」

と言って京都府警の婦警達を前に呼び出した。

沙希の前に並ぶ総勢25名、何も聞いていない京都府警の署長は目を白黒している。

婦警達は沙希に命じられて長テーブルの上の紙袋から取り出したもの……

左右二つの山が出来ている。片方は紺……片方はグレー……のセーラー服だった。

沙希は話だした。

先ほどの命をかけた座禅により妖術を破ったことで通力を得、

天眼通……つまり第三の眼の千里眼で人質の居場所を知ったことを聞くと

思わず『オー』と叫んでしまう周囲の者達。

「元方には約束という2文字はございませぬ。

明日朝2：00というのは眠くらまし、勝負はお昼12：00を過ぎてからでございます」

といつてから作戦を話し出した。

皆、その内容を聞くに連れ口をあんぐりと開け出す。

そして作戦の話が終わると、その内容について質疑応答の時間をとる。

少しでも疑問があれば作戦中に支障をきたす恐れがあるからだ。

そんなこと・・・そんなこと・・・出来るのか？

矢継ぎ早に質問が飛ぶが沙希はすべて簡潔に答えていく。

「50人あまりで・・・そんな人数でできるのですか？」

「はい、最終的には元方と私の戦いです。場所もこの次元では不便すぎます。

だったら、あの異次元の世界・・・ここでは彼等の力が飛躍的に伸びる場所！」

「そしたら余計に・・・」

といいかけるマスコミのスタッフの女の子・・・彼女はこの作戦を危惧するどころか

自分も参加したい・・・そんな思いは見え見えなのだが、彼女の的に言えば

心配の種を一つ一つ潰していつているようだ。

「心配はいりません。実を言うと私もなんです」

「はっ？」

という顔をする彼女。

「私もあの世界では自由に力を解放できるんですよ」

「力を解放できるって・・・」

でも今までいろんなことで凄い力を出してきたんじゃないですか……」

「はい、でもこの世界では自分で力をセーブしなければ
停電、地震など人工的なものや自然にも凄い影響を与えてしまうんです。

だから力は半分以上出ないようにこの力が私に宿ったとき自らをセーブしたんです。

皆息を呑んで聞いている。

あんな力が半分だった？・・・そんなに凄いことなのか・・・この少女の力って。

「でも私一人で力をコントロールするそんなゲートを作ったって将来的に考えれば

かくいう早瀬沙希自身が不安材料になりえます。もしかして精神が壊れて

力をコントロールしていたタガが外れるかもしれない。

いえ、どこかの国に捕まって薬を盛られて兵器にされるかもしれない……」

そんなことまで……そんなことまで考えていたのかこの少女は。皆その口から出てくる言葉に驚愕の想いだ。
自らを律し続けるこの少女は……一体……。

「そこで私は考えました。自分で自分が不安だったら私以外の人を使えばいい」

みんな一斉に沙希の顔を眺める。……何を言い出すのだろう。

「皆さんは先ほど驚愕されながらも逢っておられた、天上から来られた二人のお客人……」

どちらも維新の偉人と言われる坂本竜馬様と沖田総司様……」
あとからきた京都府警の刑事達の驚きの顔……。
でもそれは男性だけで婦警達は先ほど明治維新のこと沙希からきいたばかりだし
沙希が言えばどんな不思議なことも受け入れてしまいう下地はすでに
出来ているのだ。
だからけろりとした表情で聞いている。

「お二人を私の守護に命じた宇宙の大いなる意思を持つお方にお頼み申し上げます。
世界中の女性の一人一人に私の力をセーブできる力をお与えください。……と」
女性達もこの話は初めてだったのでお互い顔を見合わせて驚きを隠しきれない。

「私の半減された力……こうしてこの世に女性がいるかぎり力の暴走はありませんし、コントロールが出来るのです。……でも」
と話が続けられる。

「今度の事件で通力が開眼してしまった今、自分の力を改めてみて驚きました。こんな……もの凄いものかと……。
これだけでも例えばこの銀河の半分を跡形もなく消し去る事ができるでしょう。

まったく現世の人間が持つものではありません。
だから、私はお二人に天に帰ってある依頼をしたついでにわたしの力をまだまだ制限してほしいと頼んでいただきました。
そうですねえ、今の1/8ぐらいでしょうか。それでも、いま振舞っている力と変わりません」

『ふう』とため息があちこちから聞こえる。

「でも、力の制限はこの現世だけなのです。次元が変わればその制限がなくなります。だから、先ほど大丈夫といったんですよ」

沙希は根拠のないことは人に話さない。确实だと判断したことだけだ。

こんな沙希が考え抱した奇想天外な作戦、誰が反対できようか。

「最初に言っておきます。このセーラー服を着て作戦に参加できるのは女性だけです。

やることは私の合図で元方の張った結界を破り、人質の女の子を助けるだけです。

元方は先ほど言ったように私が異次元に引きずり込んで向こうで戦います。

そしてその戦いは『ステーション』からの撮影でモニターしていますから

ここで見守っていただきたいのです。私も1人の女の子ですからね」

そこで口を閉じた沙希が変わって松島警視が前に出てきて

「女性の方！志願される方は集まってください！」
と大きな声をかける。

まずは並んでいた婦警達がバラバラと二つのセーラー服のもとに集まると

合ったサイズを探している。

負けずにマスクミの女性記者やスタッフがかけよってくる。

そして……

「ハアイ！」

と声をかけるアメリカ兵士のミランダ軍曹、

「私達も志願できるのですか？」

何か眼をキラキラさせて質問をする。

戸惑った奈緒が沙希を振り返ると

ニツコリ微笑んだ沙希が

「オフコース！」

といったとたん立ち上がって走り出す6人の女子のアメリカ兵。

アメリカ兵の男達から

「ビュービュー」

「ピーピー」

と口笛などを鳴らして自分達の仲間を激励するのは、さすが陽気なアメリカ兵といえる。

「今からあのトレーナーハウスで着替えてください」

「サイズが決まったものしかないので、もし入らない人がいたら言
ってくださいね。」

わたしが身体のほうを服に合わせますから」

という沙希に女達の中には

「学生時代はこのサイズだったんです。この時代の身体に戻すって
可能なんですか？」

「ええいいですよ。身体だけではおかしいでしょうから
全てを以前のあなたに戻してあげる」

喜んだのはいふこともない。

「あっ！瑞姉、ゆり姉は駄目よ！」

「えっ？だって……」

「だってもないわ。瑞姉とゆり姉がいなければ『ステーション』飛ばせないわよ」

と沙希に言われてとぼとぼ小野監督のほうに帰る二人。

心配そうだった小野監督とルーク監督に向かい入れられた二人、両監督に髪の毛をクシャクシャにされ、ようやく笑顔になった。

こうしてセーラー服に着替えた女性達、沙希に若返りの術をほどこされて

仲間達に冷やかされる女性スタッフ

「鍛えすぎてこの制服に合わなかったから」

と女性らしい身体に変えられたミランダ達兵士は恥ずかしそうにこう答えた。

「仮に・・・」

と声をあげた奈緒。

「こちらの紺のセーラー服が私立梁山高校、

引率するのは先生兼コーチということで飛鳥日和子警視正。

こちらのグレーのセーラー服は私立鷹の羽学園、

女性ばかりだと変だということで鬼コーチに京都府警の牛尾刑事、

あなたにお願いします」

飛び上がったのは警察官の輪の中にいた牛尾刑事。

何も聞かされていなかったので驚き慌てる。

でもこのことが長い間東京の警察庁、警視庁まで語り継がれるとは思わなかった。

あとで仲間達に冷やかされて真赤になるが今はそれどころではない。女の中に男が自分ひとりだ。

おまけに憎からず思っている西沢恵子が相手高の制服を着ている。・
・全く困ってしまった。

あとでこれが牛尾と恵子を結びつけるために沙希が考えた事と聞かされて全く身の置き所がなかった。

「牛尾さん、あなたの役はしごく簡単よ。引率していたクラブの生徒が喧嘩をして

止めようとするあなたが、相手高の生徒が打ったボールを頭にうけ失神するの。

ね・・・至極簡単でしょ。

でも役柄として少し可哀相だからいいこと考えてあげたわ」
うふふと笑う松島警視が悪魔にみえる。

強行班としての捜査は得意だが知的な捜査となると苦手な牛尾、これまでそういうことは影になって恵子が牛尾を助けてきた。

でもそんなこと男の沽券にかかわるといって感謝はしているが恵子にわかるようには礼をしてはいない。

そんなこと沙希にとってすぐにわかってしまうことだ。

隠そうとするのがちゃんちゃらおかしい。だから少し男としてこらしめておきたい。

「西沢さん、思い切って打ってあげてね。そうすれば少しはあなたのお手伝い感謝するかもよ」

といって奈緒はセーラー服の背中をみせてしまう。西沢恵子も苦笑いだ。

でも恵子はきつと思いつきり打ってくるだろう。

この間のこと物凄く怒っているからな。

恵子は高校時代インターハイに出て準優勝したと聞いた。

そんなボールを頭に受けたらどうなるのか？ 考えていたら『ブルッ』と震えが来た。

あつ！そんなこと通訳しなくていいって・・・
畜生！ヤンキーの軍人め、俺を見て笑ってやがる。

そのとき牛尾が助かったのは天から光が幾筋も降りてきたからだ。
そうでなかったら今は穴を掘っている最中だ。

「竜馬様！・・・」

「あきあ殿、済まぬ。探していたら遅うなつてしもた」

「いえいえ・・・で、いかがでした？」

「いかに天上とはいえ、なにせ昔の事だからのう。

転生もせず今にも消えんとしていたので探すのに苦労したキに」

「それはすいませぬ」

「いや、なにもあきあ殿があやまることではない」

「あははは、それより坂本さん。沙希殿に早く・・・」

「おおう、そうじゃった」

と無骨そうな大きな手を広げると微かに水色をした小さな光の珠が見える。

だが本当に今にも消えようとしているのだ。

その小さな珠を受け取った沙希、その手の上でふくつと息を吹く。
珠に再び命を吹き込んでいるのだ。

見る見る輝きが変わり、生き生きとしたのは誰の目にも明らかだ。

「これでいいわ」

といって体の中に仕舞い込んだ沙希。ニツコリ笑って総司を見る。
天上人でさえどきつとする何の屈託も無い笑顔。

「沙希殿、あなたにはこの事件をどのように収めるかわかっておられる？」

「はい、でもそれはここで言うわけにはいきませぬ。でもこの子を見つけてもらったおかげで何の憂いもなく解決してみせます」

「それは楽しみじゃ」

竜馬が笑う。

「それより総司様、わたしのあの件は？」

「あのことは報告してまいりましたが、さすがに菩薩様も苦い顔をされましたよ。」

困った者じやとため息いきり・・・」

「すいませぬ・・・でも・・・」

「いや、沙希殿が申される事もつともです。」

沙希殿の力・・・1人の人間が持つようなものではない。でも菩薩様が申されておりました。

あなたの力って天上の方も掴みきれないそうです」

「えっ？では・・・」

「そうです、あの力って天上から下しおかれたのではありません。」

あくまでも沙希殿に備わった素質のなされる技、

今回の通力も天上の方どなたもご存知ありませんでした」

「それでは・・・」

「はい、力の制限は今の世がいわれるあくまでも二次的なものです。」

あなたが力を得ることは阻止できません」

「ふっやっかいですねえ」

沙希の表情が少し曇る。

「あきあ殿、あきらめたほうが案外なんとかなるものじゃ。自然体でいかれい」

沙希は自嘲するように笑ったが、竜馬のいうように自然が良いのはいうこともない。

「沙希殿の力の制限は菩薩様が許可されましたので今回は世界中の女性達に

沙希殿の力を制限する遺伝子というのですか？それをすでに与えたそうです」

「すいませぬ、いろいろ御迷惑をかけまして……」

「いやいや、天上の方々も困惑さみでした。こんなこと私が天上にあがって

はじめてですよ。それだからというわけではありませんが菩薩様は天上を離れられなくなりました。

かわつては阿弥陀如来様がその任にあたり、貴女が得られた通力を見守ることになりました」

天上を巻き込んでの早瀬沙希の力の行方……

じつと見聞きする周囲の者達には不思議な世界と簡単に片付けられなくなっている。

この世界でも早瀬沙希……日野あきあの動向は

これから見守っていかなくてはならない最重要項目だ。

マスコミの首脳陣、社長や部長達は自分の所の会社がより以上の伸びを求めるのは

無論だが、これからは利益以外、マスコミ各社でプロジェクトを作り、

日野あきあを守っていかなくてはならない必要性を感じることになった。

これは大川社長や乾社長が求めているものだ。

この場……今、皆が息を潜めて見守っている。まるで映画の世界のような不思議……。

周囲に集まっている者達だけでも異様だ……。
まずは十数人のきれいな衣をまとったこの比叡の御山の僧侶達。
人数の半分を占める警察官、それより少し少なめのいろんなスタツ
フジャンパーを
まとったマスコミ関係者。
それにアメリカ人の映画関係者、そしてアーミー服のアメリカ兵。
その中には二人を除いて1人も女性はいない。

異様な一団はこれにつきる、56人のセーラー服の集団……
その色の違いで二つの山に分かれているが、
いづれも紺色の少し大きめのスポーツバックを足元に
カバーをしたラケットを脇に抱えているのだ。

そして、今白い衣装をまとった数人の武士がこの場に加わった。

「お父上！……お久しぶりです」
そう挨拶をする沙希。

「おお……おお……」
と言葉にならない結城弦四郎。本当にいい父だ。

「妻の和葉の生まれ変わりの律子はこの場にはいませんが……」
とって1人の女の子を呼ぶ。

「希佐ちゃん！……」
ピチピチした若鮎のような結城希佐、眼を真ん丸くしてじっとこの
天人を見つめた。

「父上、この子が結城希佐と申します」

「結城？……」

「はい、ご想像とおり私と和葉の子孫です」

「おお・・・」

とって希佐の肩をがっしりとつかむ。

希佐もこの天人が自分の先祖となる沙希の父とわかったのであろう。
眼が熱くうるんでいる。

「希佐ちゃんは剣を修行しているんですよ」
その言葉に喜びは倍増する。
この様子を見ている竜馬と総司は・・・いづれもニヤニヤと笑っている。

結城弦四郎の涙もろさはよく知っているのだ。

「希佐といわれるのか」

「はい、ご先祖様」

「希佐殿・・・そのご先祖様といわれるのはチト・・・」
その言葉で呑み込みの早い希佐。

「では弦四郎お爺様・・・」

「おおっ、それでよい」

「では、弦四郎お爺様も私のこと希佐って呼び捨てにしなくては嫌
ですよ」

「わかった、わかった・・・では希佐は今もあの屋敷に？」

「はい」

「では道場も盛況かな？」

「いいえ、お爺様。今の世、剣で身を立てるなんてできません。
ですから剣を知って修行をするのはほんの一握りです」

「ふくむ、そんなに変わってしまっただか」

「でも私はあの道場が大好きです。だから毎日道場を磨いています」

「希佐1人だけ」

「はい、そうすると不思議と心が落ち着きます。

ときどき友人と剣をあわせますが、それはそれで楽しいんですが・

私は今、居合を勉強しているのです。一人でいろんな工夫しながら剣をとるのが好きです」

さすがは弦四郎の血を引く希佐だ。

「よし、これからはわしが希佐の稽古をみてやろう。いいでしょうな、竜馬殿」

「さあ・・・いいか悪いかは・・・だが、わしは暇人ではない。

1人1人の動向など見張っている訳にはいかぬからのう」

あんに認めている竜馬に、喜びの弦四郎。

「わたしも時々伺つてもよろしいでしょうか？」

「えっ？沖田様が・・・私には沖田様に相手をしてもらえるような才能は・・・」

「そんなこといいですよ。だが希佐殿は沙希殿の血をひくお方だ。まだ知らぬ未知の才能をもっていると思いますよ。

それに私は、剣と聞くと我慢できないたちなんです」

と笑う沖田総司。

これを聞く京都府警の刑事達、なんだかみんな結城道場に弟子入りしそうな表情だ。

沖田総司に剣をまじ合わせるなんて夢のようなことなのだから。

「ふふふ、沖田様。そんなことをいうと京都の刑事さん達・・・

いえ、お役人様たちが結城道場に弟子入りしそうな顔色ですよ」

と沙希がいったものだからたまたまらず沖田のもとにとんできた刑事達。

「あ……あの……沖田さんですね」

「そうですよ……」

「われわれ警察官は柔道と剣道が必ず必要なのです。出来たら我々に剣をお教えください」と勢い良くいう刑事達。

「いいですよ。でも私は現世にはそんなに長くはいられぬ身。それにどこにでもというわけにはいきませんが、

結城道場ならときどき行ってもよろしいでしょう。そうですよねえ、弦四郎殿」

「ふむ、さようじゃ」

これもうれしそうな弦四郎。

「はっ！ありがとうございます」

と頭を下げる刑事達。それを羨ましそうに見る東京の警察官。

ニヤニヤ笑っているのは竜馬だけではなかった。

「そんなところで笑っているなんて相変わらずの源太郎様。それに新次郎様も。」

と声をかける沙希。

「相変わらずとは沙希殿のほうだぜ」

と白い着物は竜馬達と同じだが同心羽織は源太郎だけだ。

「いいえ、それはあなたのほうです。そのお着物したら……」

「これは仕方がない。わしにはこれが一番似合っているだろうから……」

「ふふふ、でもやはりあなたも心配だったのですね」

「えっ？」

「牛尾さん！・・・いらつしゃい」

とセーラー服の中で呆然とこちらを見ている牛尾に声をかける。何か期待があつたのか急に顔を輝かして沙希の前に立つ牛尾。

「源太郎様、ご紹介しますわ。」

今の京都のお役人様で牛尾憲太郎と申すお方です。

そしてあなたの血をひくご子孫ですよ」

「えっ？本当ですか」

と直立不動になる牛尾。

いつも笑顔の篠原源太郎だが、その時は真剣な目つきになり

「そなたがわしの子孫なのか」

「はい、篠原というのは私の母の実家なのです。」

そして母にはあなたのことを随分と聞かされてきました。

私が京都府警の刑事になったのも京都府警の初代署長になられたあなたのことを聞かされたからです」

「わしの血がこうして受け継がれている・・・なんだか不思議な気分だ」

「わたしもです。ご先祖のあなたにこうして口を聞けるなんて・・・」

まだまだ話がつづく二人をおいて沙希は新次郎とこの場を少し離れる。

「新次郎様」

「なんでしようか、沙希様」

「新次郎様がこの京都にお創りになった礎はりっぱな形を残しているそうですよ」

「えっ？」

「あなたのお創りになった治療院がいまではどっしりと根を下ろして大きな病院に
なっていますわ」

「本当ですか？」

「はい、今では個人の病院としてはこの京都一ですし、評判もとてもいいんです」

「ではこの騒ぎが終わったら一度様子を見にいつてきます」

「そうなさってくださいまし」

「沙希ちゃん！・・・もうそろそろ時間よ」

日和子の言葉にとたんに顔つきが少女戦士とかわる沙希。

竜馬のもとに戻った沙希、

「竜馬様達はどうなされます？」

「このまま天上に帰ってこの様子を見るのも良いが、
ここであきあ殿を待っていたいのう」

「竜馬様はあまり抹香くさいお坊様を好まれませぬゆえ・・・
そうだわ、小野監督！」

と興味深そうにこちらを見ている小野監督を呼んだ。

「小野監督、こちらは・・・」

「聞いているよ」

背の高い小野監督より少し背の低いだけの竜馬・・・を見て

「坂本竜馬さんですね。始めまして、小野栄次郎です」
と挨拶する。

「竜馬様、こちらは以前私の映画というものを見られて判っておられますね。」

あの映画をとられた小野監督です」

「監督？・・・」

「私のお仕事での一番偉い方ですわ」

「おおそうか」

と小野監督を見る竜馬。

小野監督もこの歴史上の人物で超有名な坂本竜馬を目の前にして小躍りしたいほど嬉しくて表情が輝いている。

「監督、私たちが戻ってくるまで竜馬様を預かっていただけませんか？」

「いいのかい？」

「ええ、坂本竜馬というお方は……至極新しいもの好きですもの」

竜馬は懐手でニヤニヤ笑ってこの二人をみていた。

小野監督が竜馬を連れてモニター室に消えるのを見送っていた沙希に

「沙希殿、わたしはあれに乗ってみたい」

と沖田総司が言ったのは『ステーション』だった。

「でもあれは……」

といいかけたのを

「沙希殿、こう見えても私も新しいもの好きですから」

どうやら沙希と小野監督の話聞いていたらしい。

仕方が無いから『メインステーション』の乗り込む瑞穂やゆりあ、それにルーク監督に逢わした沙希。

初めて外人を目の前にした総司、すこしたじろいたようだがゆりあを翻訳にして話すほどにどちらも分野こそ違い一流の人間なのだ。

笑顔で話し出している。安心した沙希は手持ち無沙汰な父の結城弦

四郎と

相良新次郎のもとに……。

「父上と新次郎殿はあまり騒がしくないほうがよろしいでしょうか」
「ら」

と蓬栄上人や峰巖和尚の僧侶達に引き合わせる。

そして、少し離れて見ていると親しいとまではいかないが、どうやら会話は成り立っているらしい。

これで一安心と『私立梁山高校』と書かれたバスに乗り込み
「遅れてどうもすいませんでした」
とすでに乗り込んでいる女性達に謝った。

「さあ、沙希ちゃん早く座って」
と日和子に言われて希佐の横に腰をおろす沙希。

「希佐ちゃん、ごめんね。吃驚したでしょ」
「いいえ、さすがに驚きましたけど、でも……みんな嬉しい驚きばかりです」

若さではちきれんばかりの笑顔、これが希佐の特徴のようだ。

「でも……」

と周囲を見渡す希佐、心配そうだがちよっぴり面白そうでもある。
というのは高校のテニス部同士の喧嘩、ここに集まっているのは沙希以外は素人ばかりである。

喧嘩のきっかけとなる争いやどなりあいには普通では言葉に出てはこない。

だから、先ほど小野監督やテレビ局のスタッフ達に簡単な台本を作ってもらった。

今、それを覚えようとしてみんな必死なのだ。

ミランダ達アメリカ兵やケイトにしても
ルーク監督に聞いてもらって指導をうけていたぐらいだ。

喧嘩になって元方を引きずり出し人質を取り戻すまではいいが
それ以降、・・・問題の沙希の戦いのことは先ほどの話でもう大
心していたが

それ以降が大変なのだ。直接自分が任にあたるのだから・・・。
この事件できる限り秘密にする必要があるが京都は観光の町である。

昼間歩いているのは住民より観光客のほうが多いのは周知の通りで
ある。

その観光客、日本人も多いが外人も多い。今の日本暗い事件が多
すぎるのだ。

これ以上の評判をおとしたくはない。

いや、怨霊のことを知られるくらいなら昔からあつた高校同士の喧
嘩のほうがいい

・・・ということの人質となっていた少女達をこのバスに隠し
自分たちは不貞腐れたり、泣き出したり、
まだ相手高の部員とつかみあいをしようとして警官に引き離され
りするような
激しい芝居を一般人に見せなければならぬのだ。

さて、ここに書いておかなければならないのは平安京で作られた朱
雀門のことだ。

以前より京の結界が破られれば朱雀門が開くと書いた。

だが京の朱雀門は現存しない。奈良の平城宮の朱雀門は現存するの
に……だ。

石碑だけの朱雀門跡……しかし、沙希の持つ力が
その何も無い空間に依然と存在する不気味な朱雀門を見えさせてい
る。

そして朱雀門からは今、死人の匂いが漂い出していた。

これは元方が門のある同じ場所に……異質な次元の穴に少女達を
閉じ込め

生気をむさぼり吸っているのと、おこぼれとして小さな隙間からそ
の生気を

門の中の地獄の住人達に与えていたのだ。

二条城近くのこの場所、ここが朱雀門跡だとは余り知られていない。

希佐は26名というテニス部員の後方にいた。

沙希はその2名ほどの前方にいて隣りの部員と仲良く話をしてい
るという図だ。

チラッと時計を見るとちょうど決められた時間となった。

「あっ！あなたは……」

という大きな声が聞こえたのはそんな時だ。

「さっきの人ね。あの試合のときのライン上の1球だけど確かに入
っていたわ。

あなたもわかっているんでしょ」

「入ってなんかいなかったわよ……あんたの目おかしんじゃないわ
い……」

「何を言うのよ。私の目2・0よ。そんな私に言う言葉じゃないわ」

言い争っているのは日頃仲の良い篠田と葉月の東京の両婦警だ。

始めはなんだか棒読みのようでおかしかったが、段々と気がはいつてきたのか声が甲高くなる。

やはり女性である、夢中になってしまつてそんな世界に入り込んだようだ。

もう芝居ではなかった。

片や私立梁山高校のテニス部員、片や鷹の羽学園のテニス部員、その純粹さから先ほどの試合のおかしな判定にキレてしまったのだ。

「ガツテム！」

そんな声が聞こえた。だがそこはテニス部員だ、殴り合いとはならない。

だがこつちのほうが悪い。

いきなり猛スピードのテニスボールが相手高校に向かった。

ボールは止めようとしていた相手高の鬼コーチの後頭部に当たり昏倒したのである。鬼コーチは当たった場所を押えて身体を丸くして失神していた。

「何をするのよ」

そんな声をあげて部員達はラケットカバーをとり、

スポーツバックからボールを取るとサーブを打つように構えた。

「あなた達！止めなさい！……止めて！……」

必死な顔の女性コーチを

「先生は離れていてください！」

そういつたのは部長役の松島奈緒だ。さすがに風格がある。

「あなた達……」

そういうとパラパラと取り巻きのテニス部員が3人コーチを捕まえる。

そして、隅の方に押し込めた。京都府警の仲良し3人組だ。

一触即発の危機・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「凄い！・・・どうなるかと思っていたけど、手に汗を握るってこのことね」

そう言ったのは瑞穂、もうこの『メインステーション』にはなくてはならぬ乗り込み員だ。

「そうね、第一高校生になるって出来るのかしらって思っていたけど

みんな本当の高校のテニス部員に見えるから不思議ね。

奈緒姉ってピッタリのはまり役だわ。

まるで『エースを・・・』のお蝶夫人みたい」

「言িয়েて妙だわ。これからどうなるのかしら・・・なんだかワクワクしてしまう」

「おいおい、君たち、仕事のほうも頼むよ」

そういうルーク監督だって面白がっているようだ。

素人の一団だが見事になりきっているのがとても新鮮でよかった。特にキャプテンの奈緒がいい・・・。

横にいる沖田総司もニヤニヤ笑いながらみている。

.....

しばらく睨みあっている両校・・・一般客は恐がってよってこない。

いきなり相手高にボールを打ち込んだのは私立鷹の羽学園のミラン
ダ達

アメリカ兵・・・それがきつかけとなった。

梁山高校もアメリカ兵3人が応酬する。

こういつた戦い命をかけるわけなので面白がっているのだ。

たくさんのボールが行き交う中、梁山高校の1人の部員が向きを変
えた。

大きく振りかぶったラケットを思いつきりボールにぶつける。

ボールは物凄いスピードで空中に飛んだ。

そのまま消えていくと思ったボールが空中に止まった。

勢い良く回転するボールは空中にめり込み黒い墨のような色が広
がる。

「みんなあそこよ・・・あの一箇所に思いつきりボールを打っ
てエ・・・」

そう叫ぶ女の子・・・沙希だ。

沙希の声に呼応した・・・ガラリと雰囲気を変えた女性達、

両校のセーラー服が入り乱れて思いつきり空中に浮かぶボールに向
かってボールが飛び始めた。

ボールは普通のボールではない。沙希が術で真言を書いた結界破り
のボールだ。

なかなかうまく飛ばなかったボール、ラケットを振ったことも無い
女性達がたくさんいるのだ。

それも見よう見真似で打ったボールが空中で止まる。
そんなボールが集まり空間がどす黒さがひろがったときだ。

「誰じゃ！・・・何をするのじゃ・・・」
空中に男の顔が現れる。元方だ。

「うるさい！四の五の言うな！」
奈緒は怒っていた。本当は恐いのだろうが今は怒りの方が先だ。

奈緒は知っているのだ。沙希の苦しみを・・・
人でない力を持つ苦しみ・・・人々に不安を与えないため微笑を絶やさない苦しみ、
天衣無縫に振舞っているが計算して計算して計算尽くした結果の行動・・・

私の可愛い旦那様にこんな悲しみを与えるお前を許さない！

気を込めて打ったボール、男の片目に当たる。

「ギャ〜・・・お・・・おのれ・・・」
片目を押えて睨みつける元方・・・でもそんな恐怖はもう女達にはない。

ただ、憎かった・・・元方が少女達にやった憎さが彼女達を突き動かした。

もう彼女達を止めるものはなにもない。

「ひえ〜」

といって元方が逃げるように消えた。

そのあとボールが空中に留まる数が増えたときだ。

『ピーン・・・メリメリ・・・』

と音がして幾筋も斜めにヒビが入る空間・・・
それが最高潮に達した時

『パリン』と音がしてまるでガラスが割れるように空間が破裂したのだ。

粉々になった破片は地上に落ちる前に消えてしまう。

宇宙空間のようだった中が普通の空間に変わり、

立っていた大きな木が気を失ったように枯れていく。

その木の途中、人質になっていた50人も少女が木に取り込まれて眠っていた。

「皆！急いで！」

彼女達を助けて！・・・という言葉もいらぬくらい素早く動くセーラー服軍団。

木をひっぱがすように女の子を木から引きづりだし、抱きかかえるスタッフの女の子。

日和子と牛尾刑事が呼んだバスが横付けされた。

女の子達を運び込む女性達。こうなると一番素早く行動できるのがアメリカ兵だ。

木の上に眠っている女の子を抱いて下にいる婦警やスタッフ達に渡す。

そんなことが繰り返され全ての女の子が2台のバスに収容された。

「沙希さん！・・・これを」

やっと落ち着いた沙希の下にかけつける奈緒や希佐と中沢、佐藤、緋鳥の3婦警。

渡された新しい陣人を沙希につける希佐。

奈緒は沙希の背に菊一文字をつけ、持っていたスポーツバックから手甲を取り出して沙希につけるのは緋鳥礼子。

沙希の少女戦士の姿は美しい、誰でもぼうつとしてしまう。

「おのれ〜」

という声上空から聞こえたのはそんな時だ。

地上では打ち合わせ通り現場に駆けつけるパトカーのサイレンの音。

これから地上では喧嘩の生徒達の芝居が始るが沙希は元方との本当の戦いになる。

見送る女性達に頷いただけで跳び上がった沙希。

『ステーション』を2台だけこの場を撮らせるよう配置してから全てを引き連れて異次元に入る沙希。

清明神社を見晴らせていた『ステーション』も連れて来た。

初めての者も見知った者も見惚れる異次元の宇宙空間。

だが光を浴びる沙希こそは何にも勝る神々しさ・・・

一瞬に宇宙空間より沙希のほうに視線が移ってしまうのだ。

沙希は身体から式達を出した。

沙希の回りに膝まずつく3人の式と沙希の身体にくっつくような白虎丸。

でも今度はセーラー服からヒラヒラと蝶がとびたち、少女の姿を現した。

「やっと私の番ね、あきあ」

「ええ・・・元方はこの空間のどこかに身を潜めている。

私にはそう感じられるの」

「あきあって昔から感じがいいからね」

「ええい、胡蝶め！うだうだ言わずに早く奴を探せ！」
喧嘩仲間の玉藻がいらいらするようにそう言い放つ。
胡蝶が主の事を呼び捨てにするのが我慢できないのだ。

胡蝶は玉藻に顔を近づけて、さもさも憎々そうに

「わかつているわよ・・・お・・・ば・・・さん！」

「この！・・・」

と腕を振り上げたとたん蝶に戻った胡蝶はひらひらとこの空間に飛び出した。

そしてその跡が妖精の飛んだ軌跡のように小さな光の粉が舞い落ち消える。

「玉藻さん、あなたと胡蝶さんってほんと仲がいいわねえ」

「な・・・なにを言われる主殿・・・あ・・・あんなこましゃくれた女・・・どうして私が・・・」

「ふふふ・・・ダメよ、隠したって。

ホラ、いつかあったでしょ。あの子が遊びすぎて帰ってこなかったのを。」

私始めてのことだからとても心配していたわ。でもこっそりと晴明様に耳打ちされたの」

葛葉も紅葉も黙って聞いている。表情がちらっと動いたのは当時のことを思い出したのだろう。

「『あきあよ、おまえは心配しなくともよい。ただ玉藻だけを見ていれば』」

それからよ、私はあなたをじっと見ていたわ。それこそ1秒も眼をはなさずに。

だからわかったの。玉藻さんは胡蝶ちゃんを物凄く心配している。それこそ絶えず表に気を配っていた。それは姉が妹に持つ心配りと

同じだった。

だからけるっとして帰ってきた胡蝶ちゃんをあんなに怒鳴ったり、頬を叩いたことも清明様も私も黙って見ているだけでよかったわ」

「主殿……」

「玉藻さん、心配ないわよ。あるとき胡蝶ちゃんが私に言ったもの。

『玉藻ってあんなのだから……自分を出すの本当にへたっぴいだから、

とつても印象が悪いと思うの。でもあんな玉藻でも私のおねえちゃんよ。

だからあきあには守っていて欲しい』って……うらやましいわね」

「主殿！……そんなこと聞かされたら……これから……」

「どんな顔をして胡蝶ちゃんと顔を合わせるのかっていうんでしょ。

そんなの今まで通りでいいのよ。喧嘩してればいい……あなた達が私のそばにさえいれば……」

「主殿！……」

「主殿！」

紅葉は感極まつて言葉が出ない。

「私は玉藻さんが好き！……葛葉さんが好き！……紅葉さんが好き！……

勿論、白虎丸！あなたも好きよ。……そして、胡蝶さんも……

だから……だから……元方にはあなた達には手出しをさせない。

あなた達もよ、ここで私を見ているだけでいいわ」

「主殿！」

と驚いたように沙希を見上げる3人と1匹。

「私は・・・私は・・・全力を開放しても元方を押さえ込んでやる・・・」

決して逃がしはしない・・・」

眼がキラキラと光り、その表情には厳しい決意が浮かんでいた。

.....

「ぐすん・・・」

とハンカチで眼を押えるゆりあ。

「優しいよね、沙希って・・・」

ポツンという瑞穂に頷くゆりあ。

この異次元でなんという美しい映像であるのか・・・ルーク監督は驚嘆していた。

決して台本があるわけでもない。

だが戦いの前の映像として考えると、動の前の静・・・

美しいエピソード、そしてヒロインの厳しい決意。

見事な映像の世界ではないか。これが本物とは・・・。

「わたしは・・・」

と沖田が言い出した。

「わたしは、今の沙希殿の前に出て相対するなんて勇氣ありませんね」

「えっ？今の沙希って・・・」

「そうよ、ゆりあ」

と瑞穂がいう。

「沙希・・・凄く怒ってる。顔にはあまり出していないけれど。私にはわかる。・・・きつと人質になっていた女の子達を見たせいね。」

あんな木に埋め込まれ、顔色が真っ青になるまで生気を吸われ眠ったままの彼女達、その光景が今の沙希をつくったのよ」といってからゆりあの顔をみると

「沖田様がいったように今の沙希恐いわよ。きつと圧倒的な力の差で元方を封じ込めてしまうと思うわ」

「瑞穂殿はよくわかっておられる。沙希殿を押えるものがあるとすれば、それは沙希殿自身しかありませんね。」

わたしが見るに過去にはいろんな剣豪がおりましたが沙希殿が一番強い・・・そう思います。

剣聖といわれる方も安倍清明様の亜流、その安倍清明様の元で厳しい修行をされ

今では清明様以上といわれるその力・・・もうとても相手になんかできませんよ。

・・・あつ！何か動きがあるようですよ「・・・」

・・・

ひらひらと戻ってきた胡蝶、沙希の目の前で人の姿になると

「あきあ、あなたが動く必要はないみたいよ。」

むこうから仕掛けてくるわ「

「わかったわ。じゃあ、皆私の中に・・・」

「でも、・・・」

「いいの、私の中で見ていて頂戴。」

元方にはもう何もさせない。あの男に中途半端な力があるのが間違いないの。

その力はもう元方には不要のもの。だから私が消し去る。もう二度と悪いことはさせない。・・・だから・・・」

「今日のおきあつて怖いけど、でも凄く強い！・・・わかったわ」といってセーラー服に蝶のエンブレムとしてポケットに貼りつく。

「さあ、あなた達も・・・」

沙希から何も言わせぬ強い決意がみえるので

「はっ！・・・」

といって光の珠にかえり、式神達は身体の中に消えていった。

この美しい異次元の宇宙空間に立つ沙希。その異次元の様子が今、変わろうとしていた。

周囲の色がフィルターをかけたように全てが紫を帯びた。

そして、グレーとかわり徐々に闇が進出してきた。

これが元方の術だとはわかっている。

でも沙希は動かない・・・眼を閉じてじっとしている。

いや、そうではない。左手の伸ばした人差し指と中指を右手で握り、

同じく人差し指と中指を伸ばす・・・そう、つまり・・・

昔の漫画本の忍術使い、或いは講談の地雷也が術を使うときのポ-

ズと同じだ。

印を結び・・・真言を唱え、心気を澄ませる・・・

忍び寄る殺気はすぐそこまで来ていた。

どうやら闇が沙希を包み込むのを待っているようだ。

だが、いつまでたっても沙希の周りの闇は濃くはならない。

逆に薄くなっているようにさえ思える。

いや、実際薄くなっている・・・よく眼をこらしてみると沙希の周りにある光が闇を侵食していく。

「オン サンザンサク ソワ。オン アミリタテイセイ カラウン。

オン アロリキヤ ソワカ」

阿弥陀三尊の真言を唱えた。

いきなり闇が晴れる。

忍び寄ろうとする元方の姿、驚き眼を真ん丸くするが直ぐに睨みつけた。

手には長剣を握っている元方。

沙希は背中の菊一文字の柄を握るとゆっくりと鞘からぬいた。

目の前でその本身を右手の親指と人差し指ではさみこみ、

鞘から抜くのと同じ形になるのだが、違うのは自身の鈍い輝きがなくなり

青白い光の剣に姿を変えたのだ。

沙希は一気に飛び上がって回転しながら元方のそばに着地する。

その沙希に向かって長剣を振り下ろす元方・・・軽々と受け止める沙希。

元々は文官の元方、今の一振りですら沙希とは差がある自分の腕を知ったのか

前を見ながらも素早い動きでジグザグと、見事に方角をかえながら後ろに下がっていく。

この世界から身を隠そうとするこの動き、さすがといえはさすがだが

が
自分と沙希との実力差を見謝ったのが運の尽きだ。

沙希が鉄壁に張ったこの結界を破れる筈もない。
逃げるに逃げられない元方。見ると段々と大きく映る沙希の姿。

進退窮まっつて出した己の術、地獄の業火に焼かれし鬼共の一団が沙希の前に現われたのだ。

ニヤリと不敵に笑い宙に飛び上がり、そこで鬼共を見下ろす沙希。斜めから光の菊一文字を振り下ろした。

『秘剣 光輪斬！』

その言葉と共に一掃された鬼共・・・一瞬のうちに消え失せた。

元方の術など跳ね返す冴える沙希の剣技・・・

かなわぬと知り小さな生き物に姿を変え逃げようとした。

だが沙希の左手から振り下ろされた縄が生きるものの如く、
するすると伸びていき、目に見えぬ虫に姿を変えていようと
この縄から逃げ切れる等とは思わぬことだ。

あっというまに見つかり、縄に触られた瞬間に術が破れ姿をあらわした元方。

きりきりと縄が身体に巻きつきそれだけで動けぬようになった。

縛られたこともあるがこの縄に触れたとたんに力が消えうせ、
逃げるという意味もなくなってしまう。

ただガクリとうなだれ、腰に力はなく立つことなどかなわぬ。

それはそうだ。この縄とは大日如来が姿を変えた不動明王の持ち物の
罽索けんさくだった。

悪い心を縛り付けるこの縄、元方にとっては最悪の武器であり、沙希は最悪の相手であった。

こうして平安の御世からの呪いの種子は消し去られた。

性質の悪い怨霊は力を消され、普通の魂となる。

この魂、今までの悪行の罰を清算するには相当の年月が必要であり

またそれ相応の善根をつまねば消え去るしか道はない。

傍に立つ沙希を恨めしく見上げる元方・・・それはもう普通の老人の姿でしかなかった。

ただその顔に刻まれたたくさんの皺が悪しきときの恨みの名残であった。

こうなっても今までの自分の行いを悔やんでいるとは思えなかった。

ただ口惜しいだけの心の襞では、この男の行く末は決まっている。

「藤原元方！・・・お主の人道にも劣る所業、許せぬ！」

だが・・・たった一つだけお主に残されたものがあるのじゃ
元方の横に立つ沙希が言う。

「残されたもの？・・・」

元方の口がポカンと開く。

「お主はパンドラの函を存しているか？・・・」

「パンドラの函？」

「そうじゃ、・・・決して人が触れてはならぬパンドラの函・・・」

だが、人は開けてしもた。・・・出てきたのはねたみ、そねみ、欲など

人が持ちつる悪心の数々・・・人らしいといえばそうなのじゃが・・・

そして・・・そして、一番最後にでてきたのが・・・今のお主と同じじゃ」

そういつて沙希は斜め上の空間に視線を送った。

「パンドラの函も・・・お主も最後に残ったのは・・・」

この最後の言葉・・・元方、いやそれ以上に各『ステーション』の乗員、

比叡山に残り大型モニターを見ていた人達・・・
沙希の次の言葉を息を呑んで待っていた。

「希望じゃ・・・・・・・・・・」

「希望？・・・・・・・・」

それは思いもよらぬ言葉だ。最高最悪の怨霊、藤原元方という言葉ではなかった。

「そう・・・希望。・・・この言葉、元方に最も相応しくない言葉じゃのう」

「だがな、元方・・・。これは事実なのじゃ。これをよく見ていなさい・・・・・・・・」

と喋って差し出した手の平に浮きあがる小さな赤い珠。その珠に光が増していく。

珠の表面に無数にはいるヒビ・・・・・・・・。

そこから光が四方八方に飛び出す。まるで栗のイガのように・・・。

そして・・・そして・・・その赤い珠が吹き飛んだ。

そこから赤いモヤが立ち上り、その表面に青白い電光が『バリバリ』と走っていく。

元方はあつけにとられていたが・・・だが段々と驚愕の表情に変わっていく。

目の玉が飛び出すような大きく見広げられた眼は信じられないもの

を見ていた。

その証拠にはあの元方の身体が『ガタガタ』と震えだしたのだ。

「ああ〜」

と悲鳴のような叫び声をあげ、顔を背けようとするが、どうしても視線を外す事ができない。

卑劣極まりない怨霊の姿とはどうしても思えぬ、この姿は一体……。

赤いモヤが段々晴れてきて……若い女子と中年の女性が現われた。

「父上！」

そう呼ぶ少女は、元方の不注意で死なせてしまった娘のかほる姫。つきそっているのは、自分の不注意を転化して切り殺した乳母のうずめ、

「旦那様、お恨みもうしませんぞ。

こんなに長くかほる姫を放って置かれたのはなぜじゃ。

姫様のお嘆き……転生もせず消えようとしたのは旦那様のせいじゃ」

「す……すまない……」

同じ霊だというのにこの怯えようは、元方が小心者だということが良くわかる。

「旦那様は姫様のことも、女の本質ということも何一つわかっておられぬ。」

男の身勝手の塊のようなお方じゃ」

「すまぬ・・・すまぬ・・・わしは何ひとつ弁解などできない情けない男じゃ。

どうされようと、もう文句は言わぬ」

と言ったあとは妙にすっきりとした表情になる。

変わった・・・変わっていく。今までの邪悪さなどもつひとかけらも残っていない。

「元方さん・・・」

と沙希の話し方も変わった。

「元方さんもどうやら人としての心を取り戻したようですね。

かほる姫！あなたは長い間、お父上の悪行の数々を見ておられて絶望されたのね。

お父上をお諫めしたいが、もうお父上の心にはあなたがいなかった。

・・・いや、思い出そうともされなかった。

絶望されたあなたは黙って乳母のうずめ様と共に消え去ろうとなされました」

「沙希姫様！父が私を冬の寒空の中を締め出されて死なせてしまったのは欲の始まりでした。

権政欲は留まることが出来ません。

あげくは御自分がおこなった裏切りで権力を失い、失意の中で・・・

人を恨みながら死んでいかれました。

父が怨霊として帝を呪っているとき、私は幾度も接触をはかろうとしましたが

徒勞におわりました。一度逢った時に『何だ、お前は』と歯牙にもかけない言葉と

冷たい表情にはもう失意しかありません。

ただ心は空のまま消えるのを待っていたんです」

「す……すまぬ……すまない……」

身体が自由にならぬまま身体を折ってしまう元方。

「私はただ……元の小心者ですが優しい父に戻って欲しかった……」

といてポツリとそういつたが

「沙希姫様……私は知りました。沙希姫様の身体に入りあなたの優しい御心を……そして、まっすぐな強い御心も……これから待ち受ける厳しい道なんかきつと歯牙にもかけないでしょう。」

沙希姫様に比べ、私の情けないこと。

父を諭すことも、導くことも叱咤することも……何もしませんでした。

したのはただ嘆き悲しむだけ……。

一番悪かったのは……一番悪かったのは私だったのかもしれない」

「かほる姫。それでいいですよ。」

たった一つでも人の真理さえ判れば、あとはその道をまっすぐ歩くだけです」

かほる姫は黙って頷くと、元方の肩に手を置くと

「父上……私と一緒に行きましょう。」

天に上って罰を受けるのです。私も同罪なのですから」

「わかりました。元方殿はかほる姫におまかせします。」

藤原元方という怨霊は許すことが出来ませんが、

藤原元方というあなたの父上が天で罪を償うというのなら私は何も

申しません。

ただ一つだけ、夢の中で人質だった女の子にあやまってくださいね」

「判りました」

「では、天に導きましょう」

天に向かって

「野分」

と叫ぶ沙希。

すると『シャンシャン……』という鈴の音が聞こえてはるか上方からなにかがやってくる。

目を凝らして良く見ると真っ白な天馬が2頭かけ降りてくるのだ。

いきなり沙希の胸元に鼻面をこすりつける野分、本当に沙希のことが好きなのだ。

「うふふふ……元気だった？野分！」

沙希の言葉がわかるのか2度3度と首を振る野分。

「あら、あの子は野分の恋人？」

その言葉に肯定とも否定ともつかなく大きく首を振って後ずさりする野分、

不思議だが恐れや敬いという感情が野分から流れってくるのだ。

その天馬は自分のことを言われているとわかったのだろう

ゆっくりと近づいてきて野分と同じように鼻面を沙希にこすりつけてくる。

「あなた、お名前は？」

と聞くが何の言葉も流れてこない、ただ沙希を見つめる優しさだけが溢れているこの天馬。

一瞬、遠い過去の懐かしい匂いが沙希の鼻先をくすぐった。

「不思議ね、あなたからはとても懐かしい記憶がよみがえる様な気がするわ」

と喋って鼻面をなでる沙希、厚い心の壁に遮断された天馬の心。それ以上のことは沙希はしなかった。

「そうね、初めてあつたばかりだもんね。

名前が無いのなら私がつけてあげる。．．．あらし．．．そう、嵐がいいわ。

今の私の立場と同じだもんね」

と意味不明なことを言ってから

「野分、お仕事よ。あなたたち二頭でこの二人を天に連れて行って頂戴！」

やがて天高く舞い上がった二頭の天馬と悪しき怨霊であった元方．．．その娘と乳母を見送る沙希。

でもその心の奥の感情は誰にも気づかせはしない．．．ただ．．．

「やっと終わったのう、あきあ」

「あつ、清明様。なんだかホツとしてこのままどこかに旅をしたい気分です」

「あははは．．．じゃがそんなゆったりした時は、お前のことじゃ当分は持てまい。

少しの時でもじっとしてはしていないあきあじゃからのう」

「清明様！良く聞いていればひどい言われ方ですわ」

「あははは・・・許せ、これもこたびのこと何事も無く無事に終わ
ったからじゃ」

「でも、晴明様・・・あの子達のことを考えると・・・」
「そうじゃな、だが時が解決する・・・そう信じるのじゃ。

なにもかもあきあ自身が背負い込もうとするな。

心が硬くなると砕けてしまう。あせらずゆっくりと・・・じゃ
そういうと清明は光になって天に帰っていった。

「あせらず・・・ゆつたり・・・か」

そういうと思いつき両腕を上には伸ばして伸びをし・・・

「う～～ん」

といつてから今度は思いつき力を抜く。

そして両手で顔をパチパチとたたくと

「あゝあ、なんだかスッキリしたわ。・・・さあ、帰ろう・・・」

次々と降りてくる『ステーション』。

異次元での戦いを撮り終えたテレビや映画クルー達、

一仕事終えた満足感と充足感で足取りも軽やかだ。

残っていたスタッフ達が私たちがしますからと機材を運び出すと
広場中央に用意されていた椅子にどっかりと腰掛ける

『ステーション』の乗員達。

一番最後には次元の扉を閉じた沙希が舞い降りてきた。

その沙希を取り囲むように迎えたのは役目を終え

今か今かと待ちつづけたセーラー服の女性達だ。

皆ワイワイと沙希に抱きついたり握手をしたりとお祭りのような騒ぎだ。

「さあさ・・・みんな！ もうその辺にしておかないと沙希ちゃん疲れちゃうわ」

そんな日和子の言葉に急におとなしくなった女性たち。

婦警はもちろんアメリカ軍の女性兵士もマスコミの女性記者も

テレビ局の女性スタッフも皆セーラー服ながら輪の中心にいる沙希を見つめる。

勿論、早瀬の女達しかりだ。

（私・・・この人と共に戦ってこの京都を守ったんだわ）

目の前の沙希の笑顔が急にかすんだ。涙が一杯になり泣き出した女性を

周囲の女性がかばいながらもその女性達もまた泣き出したのだ。

「あらあら・・・みんなどうしたの？」

そんな日和子の言葉に

「日和子叔母様！しかたないわ。皆・・・18歳の花もはじらう女子高生だもん」

という沙希の言葉について笑ってしまう女性達。

これで蘇った若さも今までの年齢に戻ってしまうかと思うと少し残念な気がする。

輪の外ではうらやましそうな顔の瑞穂とゆりあ、

編集作業を一時ストップした小野監督、そしてジョージ・ルーク監督、

坂本竜馬や沖田総司などの天界の人々が見守っている。

三々五々にトレーラーハウスに着替えにはいる女性達。

セーラー服を脱げば元の姿に戻ると沙希に聞かされた女性達は、どこで買ってきたのか使い捨てカメラを片手に自分たちの姿を撮り出した。

もうそこにはマスコミも婦警もアメリカ兵士もない・・・みんな女子高のテニス部なのだ、

こうして固まっては写真に収まる彼女たち。

その中で沙希はひっぱりだことなっていた。

同じファインダーの中に収まっているスーパーヒロイン、彼女たちの一生の宝になるのに違いない。

こうして時は過ぎていく。

蓬栄上人たちは奥の院へ、天界の人たちは天へ帰った。

マスコミ陣や警察はあとのかたづけをしてから各々の場所へ戻る。

チリひとつない撤退をするのだ。

アメリカ軍の二台のヘリは基地に戻るため上空に消えていった。

なごりおしそうに沙希の手を握ってから強く抱きしめていたミラン達、

この激動の一日は彼女達に何を残したのだろうか。

沙希はパトカーの後部座席に乗り込んだとたん奈緒にもたれかかるようにして

眠り込んでしまった。

「あらあら、すぐ着くというのに」

そういう奈緒の言葉に

「仕方ないわよ。大変な活躍してきたのだから」

という日和子の言葉にもう一度沙希を見つめる奈緒。

あどけない顔をして眠る沙希・・・その手には大事そうに一本のビデオテープが。

ん？・・・ビデオテープ？・・・

第二部 第十一話

目の回る忙しさというのはこういうことをいうのだろうか。

あの事件以来、東京と京都の往復を毎日のように繰り返しているあきあ。

東京へはドラマの収録、京都へはあの事件での後片付けや、京都府警や厚生省からの依頼により、人質となっていた少女達の心のケアを

医師達や心理学の専門家達と相談しながら重点的におこなっている。

だが多感な少女達のこともあり、遅々と進まないというのが本当だ。

これだけは術で簡単に出来ることではない。

夜中に飛び起きて朝までまんじりもしないで起きていると聞いて胸が痛む。

マスコミ各社はそんなあきあを毎日のように追いかけて回している。

上からの意向もありあきあの邪魔になるようなことはしていないが、

神出鬼没のあきあのことだから毎日がかくれんぼか、はたまた鬼ごっこか

いい年をした記者達が振り回されているのだ・・・でもなんと毎日が張り合いがあることか。

国や警察とマスコミでの協定をつくったことであきあの力のことは絶対に表にださないようにしている。

そんなことを書かなくてもあきあは話題にことかかない。

話を続ける前に一度、時を巻き戻してあの事件後の一日を覗いてみることにしよう。

「沙希！・・・沙希！・・・着いたわよ」

そんな声に目を覚ます沙希、別にこのまま家の中まで運んでも良かったのだが

沙希から家に着いたら起こしてくれるようくれぐれも・・・と頼まれていたので仕方なく奈緒が起こしたのだ。

「うーん・・・」

と伸びをしてから奈緒が降りるのを待つてパトカーを降りる沙希。

とたんに『カシャ・・・カシャ・・・』

とカメラのシャッターのおりる音とともにフラッシュの光で明るくなった。

あきあ番の記者やカメラマン達だ。

事件が終わったことでマスコミで結んでいた協定が解消したので比叡山での同僚達が連絡したのだらう。

みんなあきあのコメントをとろうと必死なのだ。

あきあは光の渦の中で

「みなさん、ごくろうさんどす」

と腰をかがめる。

「あきあさん！なにか一言コメントを・・・」

「へえ・・・でも、今お山で会見をしてきたばかりやから頭の中は空っぽどす。」

それにうち・・・今はほつとしてな〜んも考えられないんどす」

「あきあさん！そういわずに・・・そうだ今後の予定でも・・・」

「へえ・・・それやったらうち、お婆ちゃまに心配ばかりぎょうさん

かけてますから

これからはドラマの収録が始まるまでは舞三昧どす」「
と行ってニツコリ笑って待ち構えている高弟達の中にはいっていく。

遠巻きにもご近所の人たちや観光客が見守る中、

一番最後になったパトカーを駐車場に留め置いた緋鳥礼子婦警と共に玄関に入るママの真理、

腰を屈めてお辞儀をしてからドアをしめる。

その礼儀正しさは今ではすっかり恒例になった風景だ。

「お婆ちゃま！・・・ただいま戻りました」

そう廊下で座って挨拶をする小沙希。

「おう・・・おう・・・小沙希ちゃん大変やったなあ・・・さあさ、
早うここにお座り・・・」

と自分の真向かいの座布団を示す貞子。

よほど嬉しいのか腰を浮かせてしまっている。

滑るように部屋に入り座布団の上に座る沙希。続いて婦警達が沙希を取り囲む。

貞子の後ろには高弟達、横にはママの真里が・・・

そしてその横には希美子と希佐の親子がもう定位置となって座っている。

いづれももう貞子にはなくてはならない人ばかりだ。

こう書くところの大広間はまだまだ余裕があるように思えるのだがそれはとんでもないことだった。

実をいうと沙希達が帰ってくるずっと前から女性達で溢れ返っていたのだ。

沙希が元方を倒したことは律子や薫達が持つモバイルに刻々と奈緒

達から

報告が入っており、その報告に一喜一憂していた彼女達、事件が終わったことにホッとして一種の虚脱状態になっていたが沙希達が帰ってくる時間近くになるとソワソワと落ち着かなくなつて

部屋を出たり入ったりしていたのだ。

だがこうして沙希の無事な顔を見ると

まだ一言も言葉をかわしたこともない女性達にとつてもとにかく嬉しい。

なんなんだろうこの気持ちは……。

「お婆ちやま」

女達のざわめきがようやくに納まる頃、沙希はこつ切り出した。

「何どすえ？」

と沙希を見つめる貞子に

「うち、久しぶりにお休みをとつた……という感覚がしてます。

そやさかい温泉に入ってゆっくりしたい……というのが本音なんです。

そやけどうち、小野監督はんが別れしな

『これ、女性の強さが出ていて怖いような場面がいくつもあるけれど
ある意味とても面白いんだ。心の底から笑うことが出来るよ』

そういつて1本のビデオテープを渡されたんどす」

といつてからチラッと婦警の中に挟まれている松島奈緒の顔を見て
いたずらっぽく笑う

でもさすがはエリート警視さんだ。

一瞬にして沙希の笑いの意味を知り、このテープの中身を悟つたから勢いよく立ち上がると

「こらっ！・・・沙希！・・・てめえ・・・」
そう叫んだのだ。

「あれえ・・・お婆ちゃま。奈緒姉ちゃんがあんな汚い言葉使つてはる。

凄いエリートはんやのにいけまへんなあ。

だったらうち、奈緒姉ちゃんを花世ちゃんに叱ってもらいます。よろしおすなあ」

突然に名前が出てきた菊野屋の花世、

「ええ〜」

といってこれまた立ち上がると驚いた目で口を押さえる。

「ごめんえ、花世ちゃん。急に名前をだしたりして・・・

けんどうち、みんなに一杯一杯心配かけていつもいつも花世ちゃんに叱られています。

おまけに幕末でも花世ちゃんのご先祖の花世ちゃんにも一杯叱られてきました。

そやから・・・うち・・・これからは心配かけるようなことしまへん。

花世ちゃん・・・そやから・・・悪いことをしたうちのお姉ちゃん達を

どンドン叱っておくれよし。うちのお姉ちゃんいうことは花世ちゃんにとつても

お姉ちゃんやから遠慮せんでもええんえ」

沙希の言葉が段々大きくなり、とても早くなつたのはその場の騒ぎにあわせたものだった

「沙希！・・・」

「沙希ちゃん！」

「あきあさん！・・・」

そう立ち上がった婦警達と比叡のお山にいたマネージャー達、

そして希佐までもが立ち上がっているのだ。

だがそれを見ていた周囲の者はというと最初はあっけにとられていたのだが

沙希の言葉に含まれているものを知り・・そして、あのビデオが何なのか判ったものだから、
そこら中から『クスクス』と笑い声上がりはじめた。

キリツとした婦人警官姿の松島奈緒・・・

そんな女達を睨み付けるように周囲を見回してからドカッと座り込んでしまう。

よく見るとなんだか目が濡れているようだ。

立っていた他の女達も奈緒が座ったことで一人二人三人と座ってしまふ。

皆が座ったところで奈緒が思い切って声をあげた。

「どうして・・・どうして沙希はそんな意地悪をいうの？ 私、

あなたになにかした？」

そこで貞子が声をかけた。

「小沙希ちゃん！・・・もうそのへんでよろしゅうおますやろ。

これ以上お芝居したら奈緒はん追い込んでしまっえ」

「そうだよ、沙希ちゃん。あなたがお芝居すると本当になっってしまうのよ。

女優という仕事をしている私達でさえときどき驚かされる沙希ちゃんに

素人の奈緒ちゃん達がかんうはずがないじゃない」
と薫が言い添える。

今がお芝居？・・・そう判るとなんだか得した気がするから不思議だ。

あの天才女優日野あきあが目の前で見せた才能の片鱗・・・。

「沙希ちゃ！その通りよ。

その証拠にわざと奈緒ちゃんに横を向いて膨れっ面を見せているけれど

反対側はまるで悪戯っ子みたいに面白がって笑っているじゃないの」

そう口添えした圧絵の言葉にようやくクルッと奈緒達のほうに振り向いた沙希、
えくぼをつくった輝くような笑顔が一瞬に皆を魅了してしまう。

スーッと引きこまれてしまう沙希の笑顔・・・でも今奈緒には屈託がある

お芝居とはいえなぜ沙希があんなことを言ったのか・・・悔しさからつい

「沙希！・・・」

といて膨れてしまった。

「ごめんえ、奈緒姉ちゃん。そのかわりあとでええこと教えてあげます」

「いいこと？・・・それは？・・・」

「奈緒姉ちゃん！うちそれをスツといてしまうほど甘い女ではありまへんえ」

「えっ？・・・」

「うちの本心をいうと本当は怒っているんです。腹がたって悔しくて・・・」

「でも、そんなこと・・・」

言われるほど何もなかった人質解放の事後処理。

「どうして・・・」

「えっ？」

「どうしてあんな面白いことに、うちを混ぜてくれはらへんかったんどすか？」

「だって、あなた・・・」

「へえ、うち無茶なこといつていると承知しています。

そやけど、あんなことがあることを知ったたら、もっと別の考えがあつたんどす」

「おほほほ・・・そこがプロと素人の違いなのね」

と言い出したのが薫だ。みんな薫を見ている。

「ねえ、奈緒ちゃん。あなたあのときの事皆覚えている？」

「覚えているですって？・・・いいえとんでもないことです。もう夢中であまり覚えていません」

「他の人は？」

「私・・・夢中で何も覚えていません」

「私も・・・」

「私も・・・」

他の婦警達もそういう。

「じゃあ、希佐ちゃんは？」

「わたし？・・・わたしですか？」

わたしは皆さんみたいなのをしていなくて後ろのほうでの傍観者だけでしたから

よく覚えています。・・・でも沙希さんが思われているほど面白いことなにもなかったですよ」

「さすがね。さすがに沙希ちゃんの血を引くだけあるわね。でもやはり希佐ちゃんも傍観者といっても中にいたからわからなかったみたいね」

頭を捻る希佐・・・そんな希佐を微笑ましく見ている母の希美子・・・でも常にその視線の中には沙希の姿があり・・・知れば知るほど驚異のご先祖だ。

この人の血が自分に流れているとは全く信じられない思いがする。体を悪くしたことで井上先生の所にきて沙希に逢った。運命なのだろう。

そしてこの地下7階にある早瀬の隠れ里で沙希が見つけたという癒しの温泉、そこにじつくりと入ったことで午前中に病院へ診察に行ってきた。

地下の病院の先生がまだ帰っていないということ

地下の看護師の卵たちが行っているという大きな個人病院の相良病院・・・

ここは希美子の掛かりつけの病院でもあった・・・へ行ってきた。これはぜひにという井上先生の強い希望で・・・いいというのに志保や何人かの高弟達がついてきたのだ。

高弟達は相良病院の養子の院長というより

直接血を引く奥さんの副院長に看護師の卵達のことを含めてよろしく頼むという。

希美子の診断の結果は奥さんの副院長が担当した。

同じ部屋にいるのは希美子だけではなかった。

いいというのに高弟達、それに看護師の卵の早瀬の若い女性達が立ち会った。

恥ずかしがった希美子だが副院長は何も言わない。

きつと看護師達が希美子との関係を副院長に言ったに違いない。というの、希美子がいいからというのを若い看護師達が

「とんでもないことです。希美子様！あなたは沙希姫様のお血を引くお方です。」

我らも沙希姫様のお血を引くとはいえそれは平安期からのこと、それに引き換え、あなた様は幕末からのおんお血筋、その血が一番濃いお方です」

まるで時代錯誤の言葉使いが、それが現代っ子である彼女達の本心なのだ。

だから今一番心配なことはいち早く知っておきたい。それが看護師達と高弟達の正直な気持ちだった。

「信じられない・・・全く信じられないことよ」

「どうしてですか？」

「どうして？・・・あなたはよく落ち着いていられるわね」

「え？・・・」

「いいわ、いつてあげる。この前の診断の結果を見る限り

あなたは短くて3ヶ月長くて半年というスキルス性胃癌だったの。スキルス性であったため早期発見ができなかったのね」

「えっ？・・・胃癌？・・・」

「そう・・・それがどうしたっていうの？・・・たった2日よ・・・ たった2日で

きれいに病巣が消えてしまっているわ。どういうわけ？・・・」

希美子は志保が言った不思議な温泉のこと信じていたわけじゃなかった。

でも沙希が里で見つけた下りをこと細かく聞き、

仏が宿るご先祖様・・・だから半信半疑ながらも温泉につかってみただのだ。

なにか調子がいいなと思いながら診察に来たのも確かだ。

「お医者様って現実的っていうか不思議・非現実なことって信じないんですよ」

そう副院長に聞いたのは希美子が持つ疑いはもうない。

だからこそあの不思議な温泉のことを話していいかどうかを探っていたのだ。

だから不思議のことを聞いてみた。

「結城さん！それは医者に対する偏見というものよ。

医者ほど不思議にあうことが多い職業はないでしょうね。

夜、夜中には亡くなった方に廊下でお世話になりましたって挨拶されることは

しばしばだわよ。夜中に歩き回る死人ってとっても怖いじゃない。

でも本当にお世話をした人に挨拶されるって胸が熱くなるのよ。

霊を怖がるって生きているときにきちんと接していなかった証拠だわ」

「先生！先生ってそういうお方ですか」

「そうよ、嘘偽りなく正直な女医さんだわよ。

ただ馬鹿正直過ぎるから、患者さんになにもかも見破られてしまうの。

この間も患者さんに『本当に先生って正直ですね。先生の顔に僕の病状出ます』『』

て言われたばかりなの」

「先生ってうちの澪先生に似ていらっしやる」

と高弟の志保がいうのを

「うちの澪？……まさか小谷澪じゃあ……」

「えっ？先生は澪先生をご存知なんですか？」

「知っているのもなにも・私の後輩だわよ。
私が天才って認めるたった一人の医者なの・・・じゃあ、あなた
達は・・・」

「はい、学校を卒業したら遷先生のところで働きます」

「へえ・・・で、どこに病院が建つの？」

困った顔の高弟達と看護師達、でもここで希美子が口を利く。

「先生！・・・詳しいことはもう少しだけあとにしていただけ
ますか。」

本当をいえば私もまだ五里夢中といったところですので」

「うん、いいわよ・・・でも私って待つて待つてことがとてもへた
なの。」

だから少しだけでもヒントをちょうだい」

そういう相良明子女医にいわれて

「わかりました。実をいうと京舞の人間国宝の井上貞子先生のこ
ろに

伺ったのはタベのことなんです。今から思うとそこにおられる方に
呼び寄せられたのだと思います」

「そこにおられる方って・・・誰？」

困った顔の希美子だが志保が助け船を出した。

「相良先生！希美子様が深く関わりがあるというお方は先生にも深
く関わりがあるんですえ」

「えっ？私に？・・・」

「へえ・・・今連絡をとったら事件が全て終わったので午後には皆
さんお帰りになられるそうです。」

先生もいかがですか？・・・それに遷先生もお帰りになられる予定
なんです」

「えっ・・・私も呼んでくれるの？・・・行く行く。
人間国宝の井上貞子って人にも興味あるし、久しぶりに漣に逢いた
いし・・・」

ということまで奇跡をおこす温泉や地下に出来る病院は女性だけを治
療すると聞いて俄然興味が湧き、
ここにやって来た女医の相良明子。
人間国宝の井上貞子は普通のお婆ちゃんのように見えたが、さすが
にその体から凄い迫力を感じる。

それにどうだろうこの大きな居間に集まった女性達は・・・。
白衣というよりオフホワイトの制服を着た多くの看護師達が入れ替
わり、この部屋に入ってくる。

そして和服の芸妓や舞妓達・・・
それと明子にも判る有名な女優・・・早乙女薫、大空圧絵、天城ひ
づる・・・と

世話をする女性達・・・女性ばかりのなんだか異様な空間なのだ。
でも一人の男性がいないってとても楽でいいな・・・なんだかウキ
ウキしちゃう。

そして・・・皆が帰ってきた。

明子を知る超有名な人の日野あきあにはびっくりだ。

他には制服姿の婦警達、ほんと異様な光景だ。

そのうち始まったセーラー服のあきあと婦人警官との口喧嘩・・・
目の前で繰り広げられるなんだか判らなかつたこの喧嘩がお芝居だ
つたなんて・・・

何も知らない明子が手に汗を握つたのも仕方がなかつた。

冷静に見ていればセーラー服の日野あきあを中心に女達がいる、

あきあを中心に一喜一憂しているのだ。

そこに『ドスドス』と男のような足音で顔を見せたのが漣だった。
「おかえり」

というあきあにほっとする漣。その心のうちが読み取れる。

・・・遠慮しながら手をあげかけた明子だったがその前に

「漣姉！お客様どす。相良病院の副院長で奥様の相良明子先生どすえ」

と言って明子を見るとニコツと笑う。

その笑顔に引き込まれドキッとしてしまう。

そしてもっと不思議なことを聞いて『ドキッ』の二重奏だ。

「ほんに明子はなんて新次郎様にそっくり」

えっ？・・・ともう一度耳を傾ける明子。

よく聞いていると

「あの方が新次郎様のご子孫なのね。あきあさんがいわれるように本当にそっくり・・・」

と婦警達からもひそひそと声が漏れているのだ。

その時明子の横にどかっと座った漣。

明子は堪らなくなってすぐに自分の疑問を漣に言う。

「ああ、沙希が明子先輩のことを知っているのは沙希が陰陽師だからよ。」

としか今は言えないわ。黙って座ればピタリとあたるってね。

心配しなくてもいいわよ。あの子のそばにいれば何もかも判ることだから

明子が首を振るぐらい判らない答えだ。

「もう一つの事は、私には判らないわ・・・よし、聞いてきてあげる。」

と行って気軽に立ち上がって皆のほうへいく。
そのうちバタバタと移動するもの立ち上がるもの・・・
よく聞いているとさっきのビデオテープを映すことになったらしい。

戻ってきた澁が座りながらポツリとこういう

「会ったんだって・・・」

「えっ?・・・」

「だから、会ったんだって。・・・その、新次郎って人に会ったんだって・・・」

「そんな馬鹿な!・・・」

「いいえ、本当みたい。一人や二人が会ったわけでもなく

比叡山にいたマスコミ関係者や警察庁、警視庁の警察官。それとアメリカ兵士達・・・

その数500名以上・・・だって」

思いもよらぬ内容に言葉も出ない。

「聞いてきただけでも身震いするほど凄まじいものだったわよ、先輩!」

「ねえ、それって・・・」

と言ったところへ

「何話しているのよ、澁」

とやってきたのは薫達女優陣と希佐と希美子の親子だ

「何って、今聞いてきたことを教えているのよ」

「あんたが聞きかじったことより実際その場にいた私たちのほうが詳しいわよ」

「何?・・・それ・・・」

「とにかく凄い内容だからさ。だから先に教えなさいよ」

「何をよ」

「麗香さんの様子をよ」

「麗香さん？・・・元気だよ」

「その話、私も聞きたいわ」

と声の方向をみるとまだ制服姿の飛鳥日和警視正が立っている。

「あつ、姉さん」

と声をあげる薫と漣。

「ごめんね、希美子さん。隣に座らせてね」

と希美子、希佐親子の隣に座る日和子。

「姉さん、今ごろどうして？」

「比叡山の後片付けを終えて警察庁、警視庁の精鋭部隊を見送ったところよ。」

お母様にも会いたかったしあの温泉に入りたくてね。

ところで漣さんはこの希美子さんと希佐さんはじめてよね」

「ええ・・・誰かかって思ったりして・・・」

「ふふふ・・・あなたらしいわね。じゃあ紹介しとくね。沙希ちゃんのを引く子孫よ」

「えっ？・・・なに・・・言っていることがよくわからないわ」

「やっぱり、漣は鈍感ね」

「なにを言うの。薫姉さんのように世の中の常識はずれではないわよ」

「やめなさい、あなたたちは顔を合わせれば喧嘩ばかり・・・」

「うふふふ・・・」

と笑うのはひづるや周りに立つ智子や京子やマネージャー達。

啞然としているのは明子だ。漣があ的那天女優の早乙女薫の妹だなんて・・・。

「ねえ、それより希美子さんと希佐さんて・・・」
「そうなの、澪姉さん。沙希が例のごとくタイムスリップして幕末に

坂本竜馬様の持つ『翔龍丸』という横笛を手に入れにいったの。

そこで知り合った結城和葉と言う女性と一夜限りの夫婦の契り・・・

その末裔が希美子さんであり希佐さんなの」

「えっ？・・・沙希ちゃんが結婚したの・・・」

「そう・・・一夜限りといえ結婚した相手、結城和葉が転生したのが私、佐野律子よ」

「えっ？律ちゃんが・・・？」

うんと頷く律子。

「うーん・・・なんだか聞くだけでも鳥肌ものね」

「さあ・・・九条麗香さんの話を聞かせて」

「うん、さすがにあの温泉の効力って凄いものよ。

子宮に出来ていた卵大の癌の病巣が一度の入浴でうづらの卵大に・・・

2回目の入浴後にはもう見当たらなかった」

「えっ？・・・それじゃあ」

と声をあげたのは明子。

「結城希美子さんと同じだわ」

「えっ？母が？・・・」

「希美子さんが・・・」

驚く女性陣に明子の報告がつづく。

「スキルス性の胃癌・・・持って半年、短くて3ヶ月・・・それが一昨日の診断よ。」

でも今日・・・驚いたわ。胃癌の後なんて何も無いの。すっかり消え

てしまっていた。

これって医者にとつて驚異としかいいようがないの」

「だから癒しの湯なんですよ」

という声が聞こえた。

見るとニツコリ笑いながら近づく沙希はいつものように舞妓姿にかわっている。

そばに居るのは奈緒達京都府警、警視庁の婦警達。

すっかりくつろいだ私服姿、自分たちの部屋があるって安心できる空間なのだ。

舞台に座る沙希、律子が用意した座布団につれしそう。

「あの温泉は決して不老不死なんかじゃありません。癌が治ったからって死なないわけじゃない。

人には寿命というものがあります。

それは決して逃れられない人としての運命……

でも病気に苦しむよりは眠るように死ねたらいいに決まっています。

癒しとはそういうことなのです。癌で苦しむのなら癒して眠るように死にたい。

それが人としての願望なのです」

「沙希ちゃん。女性しか効かないというのは？」

「それは古より男たちの戦に多くの女の涙と血が支払われていた代償かも知れません。

だからこそ争いは止めなければならぬ。

これからの……いえ古よりの早瀬一族のただひとつの目的……夢なのです。

そして夢は夢で終わらせない。夢は望めば実現するのです」

「凄い！・・・あの人凄い！・・・ねえ、澁。私時々ここにきてもいい？」

「いいわよ、わたしもここにいつもべったりといるわけにはいかないの。」

だから先輩にも代診をお願いするわ」

「わかったわ」

「でも、ただひとつ。ここは男は厳禁だからね」

「勿論よ」

「さあ、日和子叔母様。もうすぐビデオ鑑賞会よ。」

その前に温泉で汗を流してきたら・・・」

「そうね、じゃあ澁ちゃんも・・・そして相良先生あなたもいかがですか」

「ええ・・・でも着替えが・・・」

「そんなの心配いりませんよ。ねえ真理姉さん」

「そうですね、何も心配せずに入ってきてください」

とニッコリされるとつい重たい腰も浮かしてしまふ。

地下7階にあるこの広大な温泉、

洞窟の岩風呂のようだが自然の様相がよく出ておりとても感じがいい。

温泉が好きで日本国中で向いていた明子だが

こんな近場でこんないい温泉があるなんて随分遠回りをしてきたものだ。

湯温も熱くなくとても入りやすい。

それにここは全裸でなくシースルーの上着を着て入浴するのでとても雰囲気がい。

それに癒しの湯と呼ばれるだけあって体の不調も吹き飛んでしまっ

ていた。

どうもくせになりそうで・・・毎日通ってくるかもしれない。

そんなに時間がなかったが溇に案内された病院設備、内科、外科、産婦人科まであり

超近代的とっていいほど明子には羨ましすぎるほどの設備が揃っている。

溇に聞いてはいたがこの祇園の地下の病院施設がこんな設備になるうとは・・・。

働く花街の女達にとってなんともありがたいことだろう。

ここでの代診おおいに気が進む話だ。

もとの大広間に戻ってくると、もうすでに立錐の余地もないぐらい女達が集まっていた。

婦警達も看護師達も着替え終わってゆったりとくつろいでいる明子にしてもそうだ。温泉でいつのまにか用意されていた浴衣に着替え、

いまこうして溇の隣に座って茶碗を手に持ってほっと一息をつく。忘れていた・・・いつのまにか忘れ果てていた・・・つい忙しさにまぎれて

こんな素晴らしく落ち着く空間があったことを・・・

「あつ、恵子さん。どうでした？」

そんな日野あきあの声に明子はうっとりとして閉じていた目を開けるとこの部屋の廊下に立つ女性があきあに

「はい、来てもらいました」

と障子のかげにいた中年の女性の手を引き

「さあどうぞ」

と部屋の中に案内をする。

女性もこんな有名な人の屋敷で大勢の女性たちの目の前に立たされて驚いたのだろう、
なかなか足が進まないようだ。

でもようやくあきあのそばの・・・ということは明子の横にすぐ座った二人、

「ねえ、恵子さん。私・・・本当にここにきて良かったの？」

「ええ、さきほど言ったようにお母様にとって今日という日はとても大事な日になられるのですよ」

「いったい何かしら・・・私にとって大事な日といわれても・・・いいえ・・・とても思いつかないわ」

「ふふふ・・・お母様楽しみにしててくださいね」

「ねえ、先輩！あの二人が話していたように素晴らしいことは先輩にもいえることなのよ」

「えっ？私にも？・・・何？それって・・・」

「いいからいいから・・・楽しみはゆっくりとね」

という澁の笑いがとても気になる。

「お婆ちやま、よろしおすか？」

「ええ・・・ええ・・・小沙希ちゃん、あなたのしたこと見せてもらえるんやね」

「へえ・・・」

と立ち上がったあきあ。

「みなさん！さきほどうちが示したビデオを見るということで集まってもらったんですけど、
事件が解決したことでほっとして気が緩んだ結果が先程のお芝居でした。

そやけどお芝居の口喧嘩思ってたんはうちだけやった。

うちが仕掛けた奈緒姉達はほんに真剣で、あのままいったら追い込まれたのはうちどした。

あとで老婆ちゃまにうんと叱られたし

置屋のおかあちゃん達にも日和子叔母様にも律姉や瑞姉にも……そして花世ちゃんにも……

みなさん……ごめんなさい。……」
と頭を下げる。

先ほどのなにも知らない中年の女性は別にして

その場にいた女性達全部が納得する潔い謝り方だった。

「小沙希ちゃん、もうええんよ。あんな凄い事件を解決したあとやから

いくら小沙希ちゃんでも普通の精神状態とは違っってはった。うち、そう思います。

そやからいうて小沙希ちゃんの値打ちが一つも下がるもんやおへん。

かえってあんな凄いことしはる小沙希ちゃんも普通の女の子やった。

そう思うとうち、今までよりもっと大好きになったんどすえ」

そういつて花江が座ると

「小沙希さん姉さん……何もくよくよすることおへん。

小沙希さん姉さんはうちに叱られることもう慣れてました？

うち本当はそんなにいつも叱っとならマンネリにならはるそう思ってますけど

小沙希さん姉さんの顔見るとつい小言が口に出てしまっんどす。そやからうちにはわかりませう。

今日の小沙希さん姉さんはいつもの小沙希さん姉さんどした。

いつも伏目がちで大きな声を出すとびくつとされはる。

うちみたいなものにも真剣に聞かれます・・・まちがいおへん」

「花江さん姉さん、花世ちゃん・・・ありがとうございます」

「小沙希ちゃん、謝るんはもう終わりにしまひよ。それより早う始めておくれやす。」

うちの心もうどきどきいうてます。こんなこともう何十年ぶりです
「しゃる」

と催促する。

「判りました、お婆ちゃん」

といつてから

「さきほどのビデオみるんは後回しどす。」

さきにお婆ちゃんまが楽しみにしてはる、あるものを見せたいおもいます。

それは昨日までのうちには・・・
いくら陰陽の術を使つても今までのうちにはとても出来へんかった
ことどす。

けんど今日、うちの慢心から死の淵に立たされ・・・ようように山
のお上人様たちのお助けによつて生還できたんどす。

そしてその結果うちに新しい力・・・通力を得ることになつたんど
す」

「通力？・・・それは一体？・・・」

「いいえ、今は聞かんでほしいんどす」

ときつぱりと断つてから

「今からお見せするんは、その通力によつてお見せできる過去の出来事どす」

「えっ？・・・」

という顔を皆見せていたが、中には洞察力が優れた女性もいるらし

く

『ざわ．．．ざわ．．．』というざわめきが広がっていく。

「そつどす．．．皆さんが今思っている通りなんです。

うちが京都府警で倒れてここで気が付く間のこと．．．奈緒姉．．．その間どれくらいどした？．．．」

「えっ？．．．3時間だったわ。ねえ．．．みんな」

と婦警達に声をかける。頷く婦警達．．．。

「うちには．．．3日間どした。3日間をそのままにはお見せできません。

だから印象的なことをテレビドラマのように流しますよって」といって床の間に向かって手をあわせる。

「ねえ、あの子何をいつてるの？」

とわけがわからない明子。

「先輩．．．これから起こることを先輩はしっかり見てほしいの。

私たちはもうどつぷりと沙希の力を見せ付けられてきたわ。

慣れっこといったらいいけど驚きはもう少ないの」

澁のいうことも理解できない。

でも明子の目はあきあに釘付けになっている。

あの中年の婦人もあきあに視線を添えたきり外そうとはしない。

あきあの口から九字がきられる。そして、真言が唱えられた。

「ナウマク・サマндаボダナン・アビラウンケン、オン・コロコロ・センダリ・

マトウギ・ソワカ、ナウマク・サマнда・ボダナン・バク」

すると巨大なスクリーンが空中にあらわれ、同時に照明がスーっとおとされた。

「もし……もし……」
という声にぼやっとする女性の顔が映される。

どうやらこの場面は沙希の目を通してしているらしい。
ゆっくりと鮮明になる女性の顔……日本髪のうりざね顔の美人だ。

「この人が幾松さん姉さんどす」
あきあの声に『ほ』というため息。

……
……
……

「あつ！お母ちゃん！……この人生きてはる……生きてはるえ
！」

幾松の大きな声に

「えっ？ほんまどすか」

と中年の女性大写しになった。

……
……
……

「菊野屋のお母ちゃん……ご先祖の菊野お母ちゃんどす」

『ええ』とばかりに棒立ちになり口を押さえる菊野……

芸妓の花江がやっと座らせるとその花江の手を握って涙をこらえよ
うともしない。

……
……
……

場面は進み、幾松の笛を吹く小沙希・・・
だんだんと場面が小沙希の目から抜け出していく。
一人称が三人称になっていく感じた。

「幾松さん姉さん、ありがとう。おかげで記憶が戻りました」

「えっ、ほんとですか？」

「へえ、うちは祇園では小沙希います」

「小沙希ちゃんいましたなあ、うちは祇園に生きる女です。
だから小沙希いう名の舞妓ちゃんなんていないの知っているんです
え」

「へえ、だからうちがいたのは今の時代の祇園とちがうんです」

「今の時代と違う？」

「へえ、うちの時代とんでもない化け物が復活しましたなあ。」

うち、そいつと戦うためのものあるものをこの時代に探しにきたんです」

「化け物？」

「へえ、その化け物、うちの時代の京の都を焼け野原にする・・・
いうとるんです」

「京の都を焼け野原に！」

「誰です？そんなとんでもないことをしようとする化け物とは？」
菊野が聞く。

「怨霊・藤原元方」

「なんですって？！・・・藤原元方なんですか」

「お母ちゃん！知つとるんえ？」

「へえ、有名な怨霊です。平安時代一度この怨霊に京の都が壊され
ているんです」

「小沙希ちゃん！あんたそんな怨霊と戦えるんですか？」
小沙希は頷いた。

「お仲間はたくさんいるんですか？」

「はい！・・・でも直接戦かうんは、うち一人だけどす」

「そんなあ・・・」

「怨霊との戦いは普通の人では無理どす」

「じゃあ、小沙希ちゃんは普通の人ではない、いわはるんどすか？」

小沙希は笑うだけだ。

「小沙希ちゃん！あんたつて娘は・・・恐くないんどすか？」

「恐くないといったら嘘になります。

けんどうちはうちに出来る精一杯のことをするだけどす。

京都のため・・・人のため・・・そして、皆の笑顔を守るため・・・」

「けんど、どうして小沙希ちゃんが？」

「へえ、うちにはもう一つ名前があるんどす」

「もう一つ名前が？」

「へえ、うちに厳しい修行をして鍛えてくださったお方、

うちに名前をつけてくださいました。陰陽師”安倍あきあ”・・・」

「陰陽師”安倍あきあ”？・・・では・・・？」

「はい、我師の名は”安倍晴明様”」

「あの清明神社の・・・？」

「へえ」

「でも、そんな大事な事どうしてあつたばかりのうちに？」

「うちにはわかるんどす。こんなこと言ったら気持ち悪ならへんか心配どす」

うちには人の心が見えます。だから信じられるんどす。

それにお母ちゃんと幾松姉ちゃんはうちとは切れぬ縁があるんどす」

「お母ちゃん！小沙希ちゃんをどこにもやらんといて！」
「わかってます。不思議な縁で出会ったばかりだけど、小沙希ちゃんがかうちらとは
縁で結ばれてるいわはるんなら、余計ほっとけまへん」
「ひゃあ、やっぱりうちのお母ちゃんや」
と飛びついてはねまわる。

.....

ここで画面がかわるがこれってあのテレビドラマと同じくらいひきこまれていく。

.....

「ここぞす」

と連れていかれたのはまぎれもなく菊野屋であった。

「ただいま！」

「あっ？・・・お母ちゃんや・・・お母ちゃん帰ってきたえ」と騒ぐ舞妓が1人。

2階よりバタバタと大きな音をさせて数人の女の子が降りてきた。

「これ！花世！・・・いつも言っているでしょ！」

と怒鳴る菊野お母ちゃんに

「えっ？あの子も花世ちゃんなんどすか？・・・フッフ・・・」

「どうしたんえ？」

「いえ、名前が一緒なら、することも一緒なのかと」

「へえ・・・小沙希ちゃんの所にも花世が？」

こつくりと頷きながら

「いつもお母ちゃん、花世ちゃんを叱ってばかり。

でも最近、花世ちゃんがうちを叱るようになったんだすえ」

この時代の花世、時代が違えどもどこか面影が似ている。

その花世も自分の名前が出てくるものだから、目を白黒させながら見知らぬ女の子をじっと見つめているのだ。

「うちのお母ちゃん、いつもうちが危ないことばかりするもんだから、

毎日お百度ふんで、それ知ってる花世ちゃんが、うちを叱るんだす」

幾松は小沙希の両肩に手を置いて、

「小沙希ちゃんのところの『菊野屋』もいいところなんだすなあ
そしてニツコリ笑って

「小沙希ちゃん！うちあなたのこと気に入りました。
だから、あなたが好きなだけここにいたらいいんえ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

花世はおもわず立ち上がった。

自分にそっくりな名前も同じ花世・・・この人がご先祖様なのだ。

「花世ちゃん、あなたのご先祖の花世ちゃん。途中からは幕末の花世ちゃんと

今の花世ちゃんと区別がつかんようになってました」

菊野と花江に肩をだかれ、静かに座る花世・・・
とうとう菊野の肩に泣き崩れてしまった。でも声をださない忍び泣
きだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「お母ちゃん！幾松さん姉さん。お世話になります。
いつまでいられるかわからへんのですが、うちもお座敷にださせて
くれますか？」

「えっ？小沙希ちゃん。それでいいの？確かにうち人手が足りまへ
ん。」

でも・・・お客はんに働かすなんて・・・
「お母ちゃん、いいんです。うち、会いとうお人がいます。」

そのお人お座敷に来んとは限りまへんから、お座敷に出ていたほう
が・・・」

「わかりました。でもそのままではお座敷ですることはかないまへん。
踊りのお師匠の許可がいるんです」

「へえわかりました」

そばで聞いていた舞妓達

「お母ちゃん！うちら今からお師匠はんのところへお稽古にいくん
です」

「そつどすか、今日はうちんとこの当番どすか」
何やら考えていたようだが

「小沙希ちゃん！うちあんたの踊りみたことおへん。」

だからあんたを推挙できまへん。だけんどお座敷出たいんなら
あんたの実力で勝ち取りなはれ」

そついうと手早く用意された桶の水で足を洗い、荷物を置きに部屋にむかった。

「さあ、小沙希ちゃん。あがつて」

「へえ」

といった時、戸がガラリと開き

「ごめんよ」

と5人の男達が入ってきた。いずれも目つきが鋭く尻端折りした人相が悪い男達だ。

「おや？なんどすか？清水一家のええ顔のお兄さん達。雁首揃えはつて……」

「幾松か、女将はどこだ！帰っているだろう」
そついうと土足で上がろうとしている。

「あらあら……これはこれは、清水一家のお兄さん達、何の用どすか」

「やいやい！親分が決めたしよば代を無視しおつて、払わないつもりか！」

「勝手な事をお言いでないよ！いたいけなお年よりから店をとりあげ

何が清水一家だい」

驚いた事に女将が京言葉でなく、べらんめい口調で啖呵を切っているのだ。

「野郎！やつちまえ」

という兄貴分らしい男の襟首をつかんだのが、小沙希だった。

『パシッ！……パシッ』

と頬を殴ると背負つて投げる。土間に頭を打ち付けた兄貴は目を白黒して

気絶する。これはかなわないと思って4人がかりで小沙希に襲い掛かる

でもあつという間に土間にのびたのは男達だ。

.....

「沙希ちゃんの強さって見慣れているけど、いつ見てもあざやかなえ」

「それでも慣れるってこと知らない人もいることを覚えておいてね」

「ごめんなさい」

ともう一度頭を下げる沙希。

.....

「小沙希ちゃんって・・・凄い！」
もうため息が出てしまう。

舞妓や芸妓達は陰からこっそりと覗いていたが、
眼を白黒させてあっけにとられているだけだ。

「お母ちゃん！筆と懐紙を・・・」

振向く女将に心得た舞妓の1人が部屋から筆を懐紙を持ってきた。
花世だ。

スラスラと書き上げるとこかへの手紙、女将や幾松からみても見事な筆使いだ。

そして、皆が驚きのあまり身体が固まってしまうことが目の前でおこった。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

「玉藻、葛葉、紅葉・・・そして、白虎丸。出でよ！」

小沙希の身体から4つの小さな玉が出てきて、いきなり十二単姿の女房と

恐ろしげな大きな白虎が現われた。その姿をみて皆腰を抜かしてしまった。

「白虎丸はあの男を・・・」

というところの気絶している兄貴分の襟首をその大きな牙で噛むとズルズル引きずってくる。

「玉藻、葛葉、紅葉はひとりづつ担いで、比叡山奥の院のお上人様のもとに

この手紙と男達を運んでくりやれ。今の比叡山の結界ならお前達にとつて

毛ほどの障害にならぬ」

「はっ！主殿！」

「おっと、それからこの男達の今までの悪事の数々許してはおけぬ。

これからの男達の一生、比叡山の結界の中でしか生きてはいけぬ。

もし、1歩でも結界の外に出たら身体が動けぬ。

そう呪しゅをかけておいた。お上人様に伝えておいてくりやれ」

「判り申した。あの男は？」

「あの男、ちと用がある」

にやっと笑う玉藻達。主の心がわかるのだ。

男達をつかみ、すつと消える式神達。

振り返ってニコツと笑う小沙希に、ホッと生き返ったような心地の女将達、

「小沙希ちゃん！今のは？」

「あの子達、うちの式神どす」

「式神？」

「へえ」

「聞いたことおます。でも小沙希ちゃん。安倍晴明様のお弟子とい
うのほんまやったんやね」

「でも、うちのこと恐がらないでおくれやす」

「恐がるなんてそんなこと・・・」

「うち・・・又やっつてもた。こんなところ、花世ちゃんに知られ
たら

どんなに怒られるか」

としょんぼりする小沙希。

.....

再び立ち上がっていた花世の目に少し照れたような小沙希がみえる。

（やっぱり小沙希さん姉さんてうちが大好きになった人え、どんな
ときでも

うちを思っていてくれる）

胸が熱くなってしかたがない。

.....

あんな凄い事ができるのに1人の舞妓に叱られるとって
しょんぼりする小沙希に親しみが湧く女達。

「でも・・・でも・・・うち、おなごにあんな非道なまねをしよう

とした男を

許せなかった・・・我慢できんかったんどす
そんな小沙希に誰ももう何もいえない。

「お母ちゃん！踊りのお師匠さんのところへ行くのちょっと待って
てください」

といて気絶をしている男の襟首を掴むとズルズル引きずって出て
いく。

もう誰も動けない。・・・が

「お母ちゃん。うち様子を見てきます」

といて花世が下駄も履かずに飛び出していった。

誰も何も言わない・・・いや何も言えないのだ。あんな不思議は見
たことがない。

疲れがどつと襲ってきた。いつの間にかみんな女将の部屋に集まっ
て座っている。

一番若い豆花が入れたお茶を一気に飲み干してしまった。

皆お茶を一口呑んで喉がカラカラに渴いていたのに気がついたのだ。

「大変！大変！・・・」

と花世が騒々しくかえってきたのは、それから半時もたったときか
座っているみんなを掻き分けて菊野の前に座る。

そばにあった湯呑みを取る。

「あつ、それ！うちの！・・・」

という芸妓の声も聞こえていないのか『はあはあ・・・』という激
しい息遣いが

冷えてしまったお茶が呑む事で少しは落ち着いたようだ。

「あの、小沙希さん姉さん……」
という花世の話に皆、花世の顔に穴があいてしまつようじつと見つめて聞き耳をたてている。

「小沙希さん姉さんがあの三下をひきずつて行くのを町内の人や他の置屋の芸妓さんや舞妓ちゃんが遠巻きに見ているんです。あの舞妓ちゃんはどうちに聞いてくる置屋の女将さんがいたもので

うち……へえ、今度うちに入った舞妓ちゃんです……と答えておきました。

小沙希さん姉さん、あの清水一家にあの三下を放り込んで今までの悪行許しまへん。

なんて大きな声をかけとるんです。
その声で出てきた手下が十数人、……でも小沙希さん姉さん物凄う強うおした。

まるで講談で聞いた巴御前のようで、
あつというまにみんなやつつけて……そしたら小沙希さん姉さん、家の中に入っていくんです。

ドタバタと大きな音がしてすぐに静かになってしまいました。
そのうちお役人はんが大勢こられて……でも皆首を捻って出てきたんです。

中には誰もおへんいうて」

その時、

「ただいま、帰りました」

という声が聞こえた。皆顔を見合わせ……そして走り出ていく。

そこには何事もなかったような小沙希が立っていたのだ。

「まあ、小沙希ちゃん！早ようおあがりやす」と菊野が小沙希の手を引つ張るよう上げる。すぐに座敷に通した菊野。皆も小沙希の後ろにずらっと座った。

「小沙希ちゃん、あんた……」

「へえ、すんまへん。勝手な真似をして……でも清水一家はもうあらしまへん」

「じゃあ、あの親分とかは？」

「比叡山に預けてきました。もう二度と比叡山からは出てこられまへん」

「どうして、小沙希ちゃんは……」

「うち、どうしても、おなごを泣かす男に我慢が出来へんのどす。

だから、つい……」

「だからつい……なんどすか」

と急に大きな声を出した花世が、小沙希につめよる。

そんなこと一度もなかった花世に驚く菊野達。

「つい、どうしたんどすか？……あんな奴でも男どす。

へたしたら、どんな目にあわせられるか、確かに小沙希さん姉さんは強うおす。

でも、もっと強い用心棒がいたらどうするんどすか」

みんな黙って聞いている。口を挟む事ができない。

「うちら、小沙希さん姉さんに会ってちよっとしかたってまへん。

けど、物凄う心配したんどす」

「すいまへん……」

小沙希が頭を下げた。

「うちなんかより、お母ちゃんに謝りなはれ」

「お母ちゃん、心配かけてすいまへんどす」

「幾松さん姉さん、ごめんなさい」

と一人一人に頭を下げてあやまつていく小沙希。

菊野はこうして叱る花世に驚いたが、素直に謝る小沙希にはもつと驚く。

小沙希は物凄く強いに違いない。今、この国をぎゅうじっている男達誰よりも・・・

でも、ただの舞妓1人の小言にこうして謝る小沙希、こんな女の子見たことも逢ったこともない。

最後に花世に謝る小沙希。

「小沙希さん姉さん、小沙希さん姉さんはきつと何かに突っかかっていってから

考えるんでっしゃろ？」

「へえ」

「それが駄目なんです」

「もし目の前で何かがあつたら？」

「小沙希さん姉さん！逃げるんも勇氣どす」

この時代の花世にも同じことで叱られた小沙希。

でも心の中では自分を受け入れて貰えた感謝で一杯なのだ。

「さあさ、花世ちゃん。叱るのはその辺にしなはれ。

舞のお稽古の時間どす」

「きゃあ、大変どす」

とバタバタ2階に駆け上がる花世達。

「さあ、小沙希ちゃん。お稽古いく用意をしなはれ」

「小沙希ちゃん！行こう！」

といって幾松に連れられて2階に上がる。

.....

「あれ、やっぱり花世ちゃんのご先祖え。
小沙希ちゃんの叱り方てほんまにそっくり・・・」
と感心しきりの花江。

高弟たちの間にも微笑ましい花世のご先祖の行動。今の花世と区別
がつかない。

.....

こうして着替えさせられお化粧をした小沙希。
みんながポカンと見ているのだ。

確かにお化粧していない小沙希、きれいだなとは思っていた。
だがこうしてお化粧すると・・・もうこの世のものといえぬ美しさ
である。

「うちこんなきれいな舞妓ちゃん見たことおへん」
「うち、もう言葉もでまへん」

「まあ・・・小沙希ちゃん・・・」
降りてきた小沙希に菊野も言葉が続かない。

「さあみんな行くえ」
と下駄を履く幾松。

表でみんなで『きゃっきゃっ』と話をして待っていると
感じる感じる痛いほどの視線を感じる。

周囲を見渡すと道行く人の他に町内の人が見ているのだ。
手を合わせて拝んでいる人もいるくらいだから

あの清水一家にどれほど泣かされてきた人が多かったのか。

「ほら、小沙希ちゃん」

という

「へえ判っているのどすけれど何か恥ずかしおす」

といいながら頬を『ポー』と赤くして周囲に頭を下げるしぐさは
幾松からみてもホレボレしてしまう女ぶりである。

戸締りをして出てきた菊野に

「お母ちゃん、ちよつと待って」

と言ってから戸にむかって何やら『ぶつぶつ』と言っているのを

「どうしたんえ、小沙希ちゃん」

「いえ、ちよつとした泥棒除けどす。さあいきましょ」

とニツコリ笑う小沙希。

.....

「お婆ちやま、これからお婆ちやまのところの場面なんどす」

「おお、そつどすか、でも小沙希ちゃん、

あんたはどこへいっても変わらしまへん。うち感心しますえ」

「いやだ、お婆ちやま。その言葉うちには無鉄砲娘が……い
うて

聞こえるんどすえ」

「おほほほ、さすが小沙希ちゃん、うちの心よう読んどられますな
あ」

「もう……お婆ちやまつたら……」

.....

.....

ここも見知った一軒家『京舞・井上流』と書かれたその看板、確かに人間国宝の井上貞子の家である。

ここでこうして脈々と血が受け継がれて来たことを思うと胸が熱くなる小沙希。

そつとその看板に手を添えるとニッコリ笑ってから皆のあとに続く。

あの広いお稽古場でまだ50を過ぎただろうか、

厳しい顔で菊野屋の舞妓や芸妓に京舞を教えている人が井上貞子の祖母にあたる

人なのだろう。その横にちょこんと座ってじつと踊りを見ている幼き少女が

貞子の母になる。

.....

貞子と高弟達は思わず身を乗り出してこの場面をみつめた。

江戸から続くこの家屋敷、寸分狂いも無く目の前にあり、母の面影がその幼い姿から見出せた。

高弟達も代々続く井上家のご奉公.....

あの後ろに控えるのは我が先祖.....と胸を熱くして見ていたのだ。

.....

舞妓達のお稽古が終わり幾松の舞が終わる頃、高弟達の鋭い目が小

沙希にふりそそぐ。

お稽古場に入ってきた時から目に付いていた。

全く隙がなく、長い間座りつづけても微動だにしないその姿勢には誰も注目していた。師匠も、その幼い娘も……。

「その舞妓ちゃん！あとはあんただけです」

「へえ、よろしゅうお願いします」

と行ってすつと立ち上がり舞台にむかう。足に痺れはないのだろうか

みんなの注目を浴びる中、その自然な姿におやつと思つのは仕方ない。

だってそうだろう。大勢の中で何かを見せるなんて大変なことなのだ。

「舞妓ちゃん！初めて見る顔どすなあ」

「小沙希いいいます。はじめておめもじいたします。

どうぞよろしゅうお願いします」

「小沙希ちゃん、どんな舞を舞うんどすか？」

小沙希は頭をあげ、師匠を見るとニッコリ笑う。

そして、ある舞いの名を言った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「驚いたやろうなあ、お母ちゃんもお婆ちゃんも」

「へえ……みなさんが……沙希姫様を見つめるあのきつい目が、

舞を見た後で変わるんどすなあ」

「ほれ、うちに初めて来た小沙希ちゃんが舞を舞ったのを見たとき

の
うちら以上や、思いますえ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

目をむく師匠にざわめく高弟達。

そんな様子を見守る菊野屋の女将と幾松達、気が気ではない。

あのお師匠の様子では又、小沙希がとんでもないことを言ったに違いない。

「お母ちゃん」

「幾松ちゃん」

と日頃花町で男などなんともしわらない二人がオロオロしているのだ。

それほど小沙希という舞妓の存在が二人にはかけがえのない存在になっっていた。

「あんた達、用意をしなさい」

師匠の声に高弟達が三味線や琴を持って舞台にあがる。

これはなんかとんでもないことになっている。

菊野と幾松もう声が出ないほど心臓の高鳴りは頂点を極めようとしているのだ。

高弟達の三味線と琴から調べが流れ、高弟達の謡がはじまった。すると流れるように小沙希が舞う。

これは？・・・・・・菊野も・・・・・・幾松も眼が離せなくなった。

幾年舞いを習ったことか。日頃の修行も怠りない。それだけの努力もしている。

でもそんなもの、この舞の前ではただ霞むだけだ。

小沙希という舞妓はもう手の届かない高みにいる舞姫なのだ。

ただ事でないのは芸妓やまだ素人同様の舞妓にもわかる。
そして、今までなにも動じなかった師匠の横にいる幼き少女・・・
そう、井上貞子の母親にあたる舞の天才といわれる祥子が
母のそばにすりよりその腕を小さな手で握り締めて食い入るように
小沙希の舞を見つめていた。
師匠の和子にしても我が子の握る手の痛みも感じず、
その鋭い眼差しは踊り手の正体を見極めようとしているのだ。
ゆっくりゆっくり桜の花びらが舞い落ちるように小沙希が腰をおと
し
扇を前に置いて頭を下げる。・・・舞がおわった。

どうでした？というように師匠のほづをニッコリ笑ってみる小沙希。

師匠の口が開いた。

「小沙希ちゃん、言われましたな。」

舞についてはあなたには何もいうことはござんせん」

そう・・・師匠は小沙希の舞を認めたのだ。菊野と幾松は喜びで一杯だ。

「小沙希ちゃん！あなたこの舞、どこで習いはった」

「へえ」

といった小沙希の口から驚く名が出る。

「うちが習ったのは京舞の家元で人間国宝の井上貞子先生でうちのお婆ちゃんまでもあるんどす」

「京舞の家元・・・？・・・井上貞子？」

京舞の家元はここなのだ。井上貞子なんて知らない。

そして・・・小沙希の口からもつと驚くべき事が語られた。

「うちのお婆ちやま、井上貞子は、お師匠様の……。
お師匠様の隣りにおられる井上祥子様も少し将来、
お産みになるお嬢様なのです」

.....

「小沙希ちゃん、あんたこの時にあんたのこと話ましたんどすか？」

「へえ、ここで黙っていること出来まへんし、舞のまえでは嘘つけ
まへん」

そついう小沙希に

「あんたつて子はほんに舞の申し子どすなあ。

うちに来ることといえはもう小沙希ちゃんの後姿を見つめるだけ
どす」

と喋つたため息とも付かぬ吐息を吐いた。

.....

「この舞はお師匠様がお考えになつて、祥子様が完成されたと聞き
ました。

うちがお婆ちやまに初めて会つた時に言われたこと……。

『うちは舞に一生を捧げました。だから人の判断は舞の中でしか出
来ません。

舞の中で自分を表しなさい』その言葉、お師匠様が祥子様にお教え
されたのですね。

貞子お婆ちやまはお母様である祥子様に教えていただいたとそう聞
いております」

「お母様。うちこの人のいうてはることに嘘は無いです。そとどすか、うちの赤ちゃん、貞子いわはるんどすか」と言つてにこつと笑う祥子。

「うちはこの時代の人間ではあらしまへん。今から約140年あとの世界から来ました。あるやつかいな化け物が復活して、うちの時代のこの京の都を焼け野原にするいうて自分に力をつけるために

小つちやな女の子を次々と攫っているんどす」

「その化け物とはなんどすか？」
高弟から声がかかる。

時代が違うとはいえ、この京の都が焼け野原にするという化け物が許せないのだ。

「怨霊・藤原元方！」

「元方？・・・あの藤原元方なんどすか？」

「へえ」

「でも、どうして小沙希ちゃんが？」

こんな可愛い舞妓ちゃんの小沙希がそんな怨霊のためになぜ？
訳が判らない。

「うちが・・・うちしかいないんどす。元方と戦えるのは」

「小沙希ちゃんが？・・・どうして？」

余計に訳がわからない。

「うちには、もう一つ名前があるんどす」

「もう一つの名前？」

「へえ、うちは時を越えて平安時代に修行のためいったんどす。

どうしてそうなったのか？・・・それは天から与えられた使命というほかは

あらしまへん」

小沙希ちゃんが平安時代に？・・・花世は舞妓達と顔を見合わせている。

「そこでうちはいろんな修行をしました。本来の体術や呪術・・・その他に

舞や横笛といった修行もしてきました。そのおかげでうちは師に名前を与えられました」

「その名前とは？」

「陰陽師”安倍あきあ”」

「陰陽師？・・・」

「安倍？・・・」

「そうです、我師の名は安倍晴明」

「そのおひと、有名な陰陽師どすなあ」

「へえ、今でも安倍晴明様を超える陰陽師はいやしまへん」

「そこで舞を覚えたのどすか」

「へえ、でも京舞はお婆ちやまに教えていただきました。

平安時代の舞は全然違おてました」

「見たい！・・・小沙希ちゃん！」

「へえ」

「うち達はその舞を見せておくれなはれ」

そういう師匠にニコツと笑って立ち上がる小沙希。

後ろで控えていた高弟達は急いで舞台から降りる。

指先に呪まじを唱えて気を切ると

いきなり烏帽子をかぶった白い衣と赤い袴の白拍子の姿に変わった。

「おおっ！」

と声をあげる皆、今始めて不思議な秘術を見たのだ。

「これは当時の帝、五代天皇様に私が献上した『紫の舞』でございます。

白拍子の舞姫、白河の厚保姫様が創作され、私に贈ってくださいました舞で

我師、安倍晴明様が最もお好きな舞でもございました」

というと、いつのまに持ったのか鮮やかな紫の舞い扇が

小沙希の身体の一部となって舞う。

この舞はあくまで優雅に清水に流れるがごとく、

足元はゆるやかな波のごとく、腰は安定され上下に微動だにしない。

手の動き、足の動き、身体の動きは京舞にも応用されているが、それはそれは見事なものだった。

調べは小沙希の口元からは聞いたことのない謡が旋律にのり

狂いのない澄んだ声がこの稽古場に流れていく。

平安京の帝の前で舞うこの少女の姿がこの情景にかさなってそして消える。

あっというまに終わってしまった。ずっと見ていたい……。

この感動は舞を愛する全ての人の心を打つ。

小沙希に対する不信心はもう全て消えていた。舞によって信頼感が出来たのだ。

これほど見事な舞は正直これまで生きてきて見たことがなかった。

平安京で修行したという話、信じる事ができた。

「小沙希ちゃん、ありがとう。この舞を見られて本当に良かった。先ほど小沙希ちゃんが見せたうちが創作している舞に

小沙希ちゃんの今の舞から所作が少し入っているのがわかりました。うちの娘が完成させたいわれたんですが、孫と小沙希ちゃんが完成したんです。なあ、祥子」

「へえ、うちもお母はんと同じ考えです。それにしても上には上がおられるもんですなあ。うちも精進します」

「それと小沙希ちゃんは横笛も修行されたとか」

「へえ、お師匠様」

「これはうちの我儘です。出来ればそれも聞かせてほしい」

.....

「小沙希ちゃんは初めてうちに来たときと同じこととしてはる。断るってこと知りはらへん。そやけど、うちのお母ちゃんとお婆ちゃん嬉しかったやろなあ」

「いいえ、お師匠様。嬉しかったんはうちらのご先祖も同じです。沙希姫様のこと知りはらへんけんできつと幸せやったおもいます」

.....

「笛は？」

「へえ、うちの体内にあるんです」

といって両手を前に出すと、ポーッと明るくなりその中に1管の横

笛が。

もう驚きはない。小沙希の秘術はもう皆に受け入れられたのだ。

「この笛は平安時代に大江山のシテン殿からゆずられた『緋龍丸』
どす」

「大江山のシテンといえば鬼の朱天童子では・・・」

「いえ、シテン殿は唐天竺より遠いところからこられた異人様。

その風貌から鬼に間違えられ追われていたんどす。

シテン殿はその風貌とは異なりとても優しいお方。

うちが海へ逃がす時にこの笛を譲られたんどす。

それがある陰陽師と戦ったときに、この笛どこへやらに無くしてしましました。

でも不思議どす。うちのお婆ちゃまに井上家に代々伝わってきたと聞きました。

うちがこの時代に来たから今は笛は消えているはずどす。

でもうちがここからいなくなったら又、笛は姿を現します」

という言葉に高弟が1人部屋を出て行く。

小沙希は横笛を口にあてる。

その音色を聞いたとたん菊野と幾松は一度聞いた笛とは雲泥の差があることに気づく。

これが駄笛と名笛の差なのか・・・体の震えが止まらなくなる。

そして見た。小沙希の体が二重写しになり菩薩様が小沙希とともに笛を吹く御姿を・・・。

自然に両手を合わせるのは全員同じだ。

笛を調べに行った高弟は帰ってきたとたん笛の調べとこの不思議な光景に

足がガタガタ震え出し、腰が抜けるように座り込んだ。

なんとという笛の音か。小沙希の吹く笛からは高い音色が・・・

まぼろしなのか菩薩様が吹く笛から低い音色が、調和するハーモニ
これは天上の音色なのだ。二度とは聞けない。そう直感する。
だから、心を大きく開けて聞いた。

波が消えるように笛の音が止んだ。

いきなり座っていた座布団から滑りおりる師匠、皆もあとにつづく。

そして頭を下げた

「ありがとうございます、小沙希ちゃん。もう凄いものを聞かせてもら
いました。」

うちにとって今の笛の音色は、これからの生きていく糧です。

これから、もっともっと精進します。・・・そして、うちの孫よろ
しゅう頼みます」

.....

「小沙希ちゃん！・・・ありがとうございます」

「えっ？なによ、お婆ちゃん」

「うちのお母ちゃんもおばあちゃんも・・・」

「へえ・・・うちの先祖もおなじです」

画面を食い入るようにみつめて

「あんなに幸せそうな顔をしてはる」

沙希はくすぐったそうな顔をしたがもう何もいわない。
言わなくても心の中知ってもらえるから・・・

沙希は振り向いて

「牛尾さんのお母さん、次はあなたに関係があるんです。よう見て

いておくれやす」

そんな言葉をかけられびくつとしたが
いままでのことからこの天才女優と言われる女性が
普通の女性でないことがよくわかる。だからなんだか期待が大きくなる

.....

その日、帰ってすぐにお座敷に出るつもりだったが
置屋の戸を開けて中に入ったとたん男が1人倒れているのがみえた。

「ひえ〜。なんやこのお人・・・」

正体はすぐわかった。

持っていた風呂敷包みがほどけて中身がそこいらに散乱していたからだ。

「あつ、これ『巴屋』の吉弥の自慢の簪・・・」
次々、見知った芸妓や舞妓達の簪や櫛が出てきたのだ。

そこにやってきた半次。その様子を見て慌てて入ってきた。

「あつ、半次はん！ちようどええところへ」

「どうしたんや、女将はん」

「泥棒どす・・・直ぐお役人はんを！」

「わかりました！」

と飛び出していく。

「でも、どうして？・・・」

と菊野と顔を見合す幾松。

そこではつと気づいたのは小沙希のこと

(「いえ、ちよつとした泥棒除けどす」)

皆で出かける時、確かそう言っって何やらしていた。

「小沙希ちゃん！ちよつと」

皆から少し離れて立っていた小沙希を呼ぶ。

「小沙希ちゃん・・・これあんたがやつたんどすな」

小沙希は頷く。

「うち何や知らんけんど胸騒ぎがしたんどす。そやから、泥棒よけのお呪いしました」

「お呪い？」

「へえ、この家に悪い心で入ってきたら、こらしめてほしいと付喪神つくもがみはんにお願ひしたんどす。

そやさかい、その簷や櫛に宿る付喪神はんがこらしめてくれはったんどす。でも・・・」

「でも？」

「この簷や櫛のほんとの持ち主も、大事にせな。

付喪神はんかなりお怒りになっているんどすえ」

幾松、小沙希の顔をじつと見ていたがふつとこの持ち主の顔を思い出して

「ぶっ」

と噴出した。

「いややわあ、幾松さん姉さん。うちの顔をじつと見て笑ったりして・・・」

「あつ！ごめんごめん。

別にうち、小沙希ちゃんの顔を見て笑ったんと違うんどす。

この簷や櫛の持ち主の顔を思い出して・・・うっ・・・ぶっ・・・」

と又噴出す。

「この簪と櫛、ほとんどが吉弥さん姉さんのどす」

「吉弥さん姉さん？」

「へえ、幾松さん姉さんにきつう当たる芸妓はんどす。

幾松さん姉さんを目の敵にしているんどす。

でも最近、なんやふらふらと生気があらへんし、

目の下に真っ黒い隈をつくりはって……じゃあ

「きつとそうだす。その吉弥さん姉さん、あまり物を大事にしやらへん思います。」

付喪神はん、人の命まで奪う事あらしまへん。けんどきつい仕返しをされるんどす」

「それどんな仕返しどす？」

「へえ、悪夢どす。毎日毎日きつい悪夢を見させるんどすえ」

ぷつと吹き出す芸妓と舞妓達、あの吉弥さん姉さんが……悪夢を見てはる……。

本人には気の毒だけどありえない組み合わせに可笑しくて……可笑しくて……

……

おかしそつに笑う舞妓や芸妓達、

自分たちの日常的な会話なのだからこの幕末の女達に共感を覚えるのだ。

「千代香さん姉さんを気いつけな、付喪神つくもがみはんにきついお灸すえら

れますえ」

とさっそく仲間うちで小沙希の言葉がとりいれられているのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ごめん！」

と入ってきたのが目の鋭い役人と御用聞きだ。

さすがは置屋の女将、さつと表情を変え役人のもとに。

「これはこれは、篠原様。まさか篠原様がお見えになられますとは」

「おお、女将久しぶりだな。・・・この男か！」

「へえ、うちらがお師匠様のところのお稽古が済んで帰ってきましたたら、こうして倒れていたんです」

「何？倒れていた？・・・政吉！」

「へい」

とって御用聞きが倒れている男の身体をていねいに調べていく。

「旦那！何の外傷もないようですが」

「襲われたわけでもないか・・・」

「あつ！・・・この男！」

「どうした！」

「へい」

といいながら懐よりとりだす一枚の紙・・・広げるとどうやら人相書きのようだ。

政吉は立ち上がり広げた人相書きを篠原に見せる。

「筋ものか・・・なになに？関西一円を荒らし回る盗人、音羽の安吉？」

・・・大物ではないか。そんな大物がどうしてこんなところで？
・・・政吉！・・・やれ！」
と政吉はいきなり気を失っている安吉に馬乗りになり、その両頬を
思い切りぶつとばした。

その行為が気を取り戻させ、薄っすらと目を開ける音羽の安吉。
しばらくは自分の身に何が起こったのかは判らないようであったが
はっと気づいて猛然と暴れて馬乗りになっていた政吉を跳ね飛ばし
てしまった。

ガバツと身を起こした安吉懐からドスを取りだし、その先にいる幾
松に向かった。

身動きできない幾松、間にすつと入ったのが小沙希だった。

小沙希は持つていた舞扇を目の前に出した。

その自然な動作に安吉は足を止めた。いや止めざるを得なかった。
回りのものには見えないが、あんな扇の小さな先がいまでは何尺も
の大きな壁になり
前が全く見えない。いやそれどころか安吉にむかってせまってくる。

「ふむ、見事な！」

と舌を巻いたのが、役人の篠原源太郎だった。

去年まで江戸の千葉周作道場で内弟子として剣術の修業をしていた
源太郎、

一度だけ師匠の千葉周作に今のような刀法で手も足も出なくて
その重圧に不様に失神してしまった記憶がある。

こんなところで同じ刀法が見られるとは思わなかった。

どうするのか？興味深い。周囲のものは固まったままで手出しはし

ない。

だからゆっくりと見物できる。そんな不遜な考えの源太郎。

小沙希はスツと舞い扇を下ろした。何をするのか？

逆の手の平を安吉に向けるとその手の平から青白い光が浮かび上がった。

「えいつ」

気合とともにその光が安吉の懐に飛び込み、その体を折ったまま後ろの木戸もろとも表の道にぶつ飛ばしたのだ。

驚く野次馬達。

「政吉！ひつとらえろ！」

「へい！」

と飛び起き、表に張り番させていた子分と共に音羽の安吉をお縄にしたのだ。

「政吉！安吉を番屋の牢に放り込んでおけ！」

「へい！・・・で、旦那は？」

「おれは、ここでもう少し話を聞いてから番屋に行く」

「わかりやした。奉行所の与力の旦那にはそう伝えておきやす」

「女将！いいかえ」

「へえ篠原様、こちらにどうぞ」と土間から上にあがる。

「おっと、皆の話も聞きたいんだ」

「幾松ちゃん、皆も着替えておいで。」

半次はん、すまないけれど、今夜のお座敷そんなわけでお断りしてきてくれる？

お詫びは明日幾重にもするからって」

「へい、わかりやした」

と飛び出ていく半次。

「女将！すまねえな。なにしろぶっそうな世の中だから。」

新撰組つて輩もひでえが、勤皇の志士つてだけで尾羽打ち枯らした田舎もんが

天朝様のこの京の町を荒らしやがって！情けねえ世の中になったもんだ」

とぶちぶちいいながら女将の後について座敷に入る。

芸妓や舞妓達も急いで2階にあがり、化粧を落として着替えるとたしなみ程度の化粧をする。

お座敷に皆集まると、菊野がお盆に茶瓶と湯のみを持って現われた。

「すんまへん、うちにはお茶けしかおいてのうて」

「ふふふ．．．いいさ。大勢の娘達の中で1人酒なんざ飲む気はさらさらねえよ」

源太郎は菊野のいれてくれたお茶を二口ほどで飲み干し、あぐらをかいた前に置く。

．．．
．．．
．．．

「お母様、．．．この方どなたかわかります？」

「篠原．．．源太郎．．．わたしのご先祖です。．．．でも．．．」

「お母様．．．疑ってはだめです。実をいうと今日比叡のお山で

牛尾さん．．．あなたの息子さんはこの源太郎様に会っておいでです。

びっくりされたるう思います」

.....

「その娘！初めて見る顔だな」

「はい、篠原源太郎様」

「名はなんと申す」

「小沙希と申します」

言葉使いが変わっていた。

「おぬし、江戸もんか？」

「はい・・・でも・・・」

と答え、何かを言いかけたがそのまま口を閉じる。

「小沙希はいつからここにおる」

「はい、本日からです」

「何？今日から？」

「はい」

ニツコリ笑ってから

「源太郎様に少しお伺いしたいことがございます」

「なに？小沙希がか？・・・聞きたいのはわしのほうなのだが・・・

・まあ良い、何かな？」

「源太郎様の北辰一刀流は千葉周作先生に師事されたものなのでし
ようか？」

それとも千葉定吉先生に師事されたものでしょうか？」

「何！小沙希・・・どうしてそれを？」

「わけはあとで申します」

「そうか・・・わしの師は周作先生ただ1人！」

「そうですか」

とがっかりしていたが、気をとりなおして

「定吉先生のところへは一度も？」

「いや、同じ相手ばかりではつまらんからもうその言葉に」

「ではお尋ねします。定吉先生のところは土佐藩土坂本竜馬というお方は？」

「おお、坂本さんか・・・知っておる。知っておるぞ」

「では、何か笛にまつわることを聞かれたことは？」

「笛？・・・」

おかしな事を聞くとばかりに小沙希の顔を見つめていた源太郎の目がフツと動いた。

「何か聞いておられるんですね」

「ああ・・・あの日は定吉先生も若先生もお嬢さんも出かけられて居られなかった。

ただ1人、夕日があたる縁に寝ていられるのが坂本さんだった。

『篠原くん、ここに座れや』その時いつも明るい坂本さんの別の面をみたんだ。

やけに・・・そうやけに寂しそうだった。

だからなのか懐から笛を出して吹こうとするのだが音がでない。

わざとそうしているのか・・・寂しさをまぎらわしているのか。

でも違ったんだ。その笛は『翔龍丸』といって坂本家に代々伝わっていたが

誰が吹いても音が出ないらしい。有名な吹き手が吹いても音がでない。

坂本家では手放そうとしたらしいが、竜馬さんが絶対音を出すからといって

江戸に修行の旅に出る時にもつてきたものなんだ。

『でも、全く音が出ないんだよ。篠原くん。』

人斬りはうまくなって、この笛から音が出せない・・・情けない

『よ』

この言葉をいう坂本さんのこと、今も忘れられない」

「やはりそういった人なんですね。……ありがとうございます
した」

「では約束だ。小沙希、お前のこと聞かせてくれ」
「なんなりと」

「先ほどの刀法は何だ！」

「あつ、そうですね。北辰一刀流にもありますよね。でも柳生新陰
流にもあります。」

上泉伊勢守様が工夫されたといわれていますが、実は平安期にある
お方が

創造された体術の一つなのです」

剣術の話は嫌いではないのでつい体がのりだしてしまつ。

「してそのお方とは？」

「安倍清明様」

「安倍清明？あの清明神社のか……土御門家の祖といわれる……
？」

今は土御門といっても陰陽の術を使えるものはいない。眉唾ものだ
と言つ話だが……」

「はい、陰陽師として安倍清明様に古今東西匹敵される方はおられ
ません。」

清明様が偉大なだけにそう見えるのは仕方がないことです。

でも延々と引き継がれてきたお家、馬鹿にしたものではございませ
ん」

「ほう、それだけ陰陽師に詳しいのは……
いや、これは順を追って話を聞いたほうがよさそうだ。では、あの

安吉を吹き飛ばしたあの術は？」

「あれは術という大げさなものではありません。訓練さえすれば誰でも出来るものです。」

「気功といいます。例えば・・・ほら」

と胸の前で手の平同士を上下に拳ぐらいの間隔を空けて待つ。すると小さな光る玉がぼんやりと現われた。

「これが”気”です」

皆も真似をする。じつとみていると

「さすがはお侍様、剣術の修行が”気”を生み出す精神の持ち方と合っているようですね」

ほんの小さな光の玉だったが源太郎の手の平の中央部に現われた。

「ふ〜」

と息を吐いたのは芸妓や舞妓達

「全然駄目です」

「小沙希ちゃん。なんですか、手の平が温かいんです」

「お姉ちゃん、それでいいんですえ」

「小沙希、これが気か」

「はい。剣術でも丹田に気をおいて・・・という言葉があります。」

気は大事なものです。訓練すれば先ほどのように人を吹き飛ばす事ができます。

でもこの気功が最も力を発揮するのは、人の気を利用して倒すことです」

「人の気を利用する？」

「はい、そうすれば相手の体に触れずとも倒したり、投げ飛ばしたり出来ます」

「見たい！見たいぞ！小沙希」

「はい！……明日なら。いいでしょ、お母ちゃん、お姉ちゃん」

「うちもいくえ」

「うちも」

と芸妓や舞妓達。

顔を見せ合う源太郎と小沙希。

「ふ」

と吐息を吐く源太郎。この1年の番所勤めで花街の女の強情なのは良くわかつている。

一度言い出したら聞きもしない。

「わかった。見物ぐらいさせてやる。でもその衣装で来るのは止めて貰いたい。」

もつとおとなしめにな

「はい」

という声。まったく……馬鹿にされているのか。

娘達を相手にしていたら時間がいくらあっても足りはしない。

「小沙希！わしがこちらに来ていたのは昼間の清水一家の件だ。

あんなこと出来るのはこの祇園でいやこの京の都で小沙希しかいないと思うのだがどうか？

小沙希と知り合う前なら途方に暮れていただろうか」

「はい、わたしがやりました」

「で、あの男達はどうしたのだ？」

「比叡山の奥の院に居られるお上人様に手紙をかきました

男達の悪心を叩きのめすよう武者僧の方々に預けてきました」

「なに！……あの鬼より恐いと言われている荒っぼいので有名な

武者僧の中にか？

「……ふふふふ……わはははは……」
笑いだした源太郎。

「比叡山とは……お番屋の牢の中より、遠島の刑より厳しいぞ……」

だが逃げ出したらどうする」

「いえ、逃げられません。男達は比叡山の結界の中でしか行動できないのです」

「比叡山の結界？……それはどういうことだ」

「はい、我術にて1歩でも結界の外に出れば体が固まってしまつて動けなくなるようにしました」

「我術？……小沙希！お前は何者だ！」

「はい。我名は陰陽師”安倍あきあ”」

といつて懐から出した懐紙を器用に人型に切り
「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」
と九字を切り、そして唱える真言

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

ふっ吹くとたちまち現われた公達。

「あきあよ。こんなところにいたのか」

「はい、すいませぬ」

「藤原元方の怨霊をどうするつもりじゃ」

「はい、晴明様」

小沙希の言葉に驚く。この方があの安倍晴明か。本物なのかどうなのか？

「この時代の坂本竜馬という方が持つておられる『翔龍丸』あの笛のみが元方を封じられるのです」

「お前の時代では手に入れられないのか？」

「いえ、坂本様はこれより4年後の慶応3年の11月15日にこの京都の近江屋で

同じ土佐藩の中岡慎太郎様と暗殺されてしまいます。

そのとき坂本様は何の武器も身の回りにおいていらっしやらなかった。あつたのは……」

「そうか『翔龍丸』で相対したのか」

「はい、その時『翔龍丸』は暗殺者の手によってスッパリと……」

「小沙希ちゃん！坂本様が暗殺……されるの……どすか？」
頷く小沙希に

「坂本様にその日のことお知らせして暗殺を回避すれば……」
小沙希が下を向きながら首を振る。

「歴史は……歴史は変えることが出来ないのです。

坂本竜馬という方は私の時代ではこの維新を生きた偉大な人物として

歴史に記されています。坂本竜馬様を主人公にした物語がいくつも出版されてもいます。

歴史は……そう、一つの例で言えばこの『緋龍丸』……」
と手の平に忽然と現われた横笛。

「先ほど井上の師匠のところに秘蔵されているはずでしたが

なかったのはご存知でしょ。同じ物が2つと存在しえないのです。

私がこの時代を去ったら再び『緋龍丸』は現われるはずです。

私自身、今の時代の異端児です。だから私がこの時代からいなくなつたら

自然淘汰され私の記憶は皆さんから消されるでしょう。

わたしがここに来たために歪められた歴史はうまく調整されます。

例えば、清水一家です。今は私が比叡山に送りましたが、

お役人に悪事を咎められ処刑されるかもしれないし、改心して一家を潰してしまうかもしれません。いずれにしても、清水一家はこの祇園からなくなる運命だったので「す」

「時の流れは厳しいものじゃ。あきあがこの時代にいられるのもあと3日じゃ。それ以上いるとあきあはこの時代からはじきとばされてしまう。」

元の時代にも戻れぬ「

「そうになると小沙希……いやあきあ殿はどうなるのですか？」
「時の放浪者となる。時と時の間にさまよい歩き、死す事も出来ず、

幾千年、幾万年さまよい続けるのじゃ」

「そんなの嫌！」

花世が叫ぶと若い舞妓達はそろって泣き始めた。

「みんな静かに！」

幾松が大声をあげ、そして必死の形相で小沙希につめよる。

「坂本様に、坂本様にお教えしても？……」

「歴史は変わりません。例えお教えしてもその日にはきつと近江屋にいられるでしょう」

「そんな！」

「幾松さん姉さん！あなたもあなたの旦那様と共に歴史に名を残されるのですよ」

「えっ？では？」

「そうです。幾松さん姉さんが想い描く方と添い遂げられます。でもこれからの時代凄いい勢いで変わっていきます。」

その時代の流れにそのお方と幾松さん姉さんは翻弄されながらも生

きていかれます。

名前を木戸孝允と変えられ、幾松さん姉さんは松子と名乗るようになります」

「あきあ殿、教えてくれぬか」

「はい」

「お主はどの時代からきたのじゃ」

「私は、年号を平成という今から約140年先からきました」

「して、藤原元方の怨霊とは？」

「平安時代に暴れ回った怨霊です。人を呪い殺し、平安京を雷や地震などで

破壊した恐ろしい怨霊です。でも清明様が封じられて1千年の眠りにつかせましたが

人の世は変わっていきます。怨霊の存在を信じず、不思議の力は拒否されています。」

結局、怨霊・藤原元方の封印を解いたのは人の手によってでした」

「その怨霊、復活してどうしようというのだ」

「はい、清明神社を焼き払い京の结界を取除くことによって朱雀門を開こうとしています」

「何？朱雀門を？・・・あれが開いてしまったら」

「はい、地獄の悪鬼・亡者達がこの京都を・・・いや日本の本國を地獄に変えてしましましょう」

「しかし、结界は怨霊や亡者達には・・・」

「はい、结界に触れる事叶わず、ですが卑劣な怨霊めが・・・」

と幼い少女達を攫い、その生命力を吸い取り、なおかつ少女達の両親・・・つまり

人の手で清明神社を焼き払い结界をとく所存・・・と話した。

「おのれ・・・元方！」

「源太郎様にはわたしの話を・・・」

「そんなことは！あきあ殿！お主のその眼を見ればわかることだ。この話が真実かどうかはな」

「ありがとうございます」

舞妓や芸妓達には難しかったのか、皆船をこいでいる。

「これ！あんた達！」

菊野は叱り付けたが小沙希が押し留める。

「この子達には何の関係のないことです。だから眠らせました」

「あきあ殿、これからどうする」

「はい、一刻も早く坂本様にお逢いしとつございますが、

あのお方は勤皇の志士としてお手配されておられる身。そうでしょう。源太郎様」

「あつははははは・・・知っておられたか」

とぼんの窪をさわる源太郎。

「坂本様は変装したりして、敵の目をあざむくなんてことをする方でしょうか」

「坂本さんが変装？・・・うつぶ・・・」
と噴出す源太郎。

「うつぶふ・・・すまんすまん。あれほど不器用な人はいまい。

それにそんなことをすること自体、毛嫌いする人だ。

自然のままに・・・そう自然のままに生きておられる。

だからこの京に入る時も自然に逆らわず堂々とこられるはずだ」

「源太郎様。私、少々この京の都を少し騒がしてもよろしいでしょうか」

「都を騒がす？」

「はい、血は一滴たりとも流しませぬ。坂本様が興味を持って坂本様自身がわたしに近付いてこられるよう少し変わった趣向で・

」

「して、どのような・・・」

「はい、ではお耳を拝借・・・」

と4人は顔を近づけ小沙希の話を聞く。

「うつぶ・・・」

「うつぶ・・・いひひひ」

と体を捻じ曲げて笑いだした。菊野と幾松。

「とんでもないこと考える奴じゃ」

と晴明と源太郎。顔を見合わせあきれかえる。

「お侍様は難しゅうございます。あまり恥辱を与えたとお腹をめされます」

「いやいや、あきあ殿。その心配はない。昔はどうだったか知らないが

近頃の武士は切腹などはしない。いや切腹の法も知らぬ。

昔、葉隠れという思想はあったが今はそんなものは廃れてしまった。

今の武士は外見だけだ。特に幕府の侍はな」

吐きすてるようにいう。

(この侍、先を見る目はあるようじゃ)

晴明が好む人柄だ。

「では・・・」

「おう・・・やれ。相手は町の人達を苦しめる浪人達や人切り集団の新撰組だ。

遠慮なくやったらいい。だが、剣術の腕かなりの者もいると聞いて

おるぞ」

「天然理心流・・・近藤勇様、土方歳三様、沖田総司様。
新撰組のお方達いづれも相当な腕前です。中でも沖田総司様、お若いですが
天賦の才能をお持ちのお方」

「沖田総司？・・・確か新撰組一番隊の・・・そんなに凄いのか？」

「はい、でも・・・胸を病んでおられます」
「胸を？」

痛ましそうな顔の源太郎。前途明るい青年が新撰組という人斬り集団の

掟に囚われ、そして胸を病んで死を待つのみ。同じ剣術使いを目指していた

源太郎にとってその無念さはわかるのだ。

「でも」

と自分自身を切り替えて明るい笑顔をつくって

「私はやります」

「そうだ。やれ！」

源太郎も小沙希の心がわかったのだろう明るく言う。

「だがその格好ではできまい」

「はい」

と言って、呪を唱えた。

すると覆面を被り黒衣着流しの姿にかわった。

「何だ！その格好は？・・・」

「はい、わたしの時代にこういう姿をした主人公の物語があります。」

新撰組を相手に戦う勤皇の志士”鞍馬天狗”といます」

「鞍馬天狗か・・・気に入った。これは面白い事になりそうだ」

「お刀はお番屋に届けておきます」

「おうそうしてくれ。だが、下帯だけはかなわん。どこかに捨てておいてくれ」

「いえ、名前を書いて橋の欄干に・・・」

「くくくく・・・あきあ殿にはかなわん。」

よくぞそつという悪戯が次から次と・・・くくくく」

菊野も幾松ももう何度お腹を押さえて笑っているのか。

「じゃが、あきあよ。こういうことでその坂本竜馬という男、現われるであろうか」

「わかりませぬ。でも私が坂本竜馬というお人を調べれば調べるほど

今までの侍という枠を外れています。源太郎様はどうお思いですか？」

「判らぬ。坂本さんという人は全く判らぬ。」

このわしの物差しでは計れぬ桁ちがいの人物だ。だが、あきあ殿の作戦は面白い。

坂本さんが最も好む悪戯だと思う。坂本さんはきつとひっかるでしょうな」

「なるほど、聞けば聞くほど興味がわく。」

あきあよ、久しぶりにおぬしの目を通して坂本竜馬という男をじっくり見てみたい」

「おほほほ・・・晴明様もお好きな・・・では」

という赤い小さな玉になってあきあの体に消えていった。

.....

.....

「ここまで一挙にお見せしました。ここで一日が終わりです。ちよつと休憩にしまひよか・・・じゃあ、いまから10分後に再開です」

「ねえ、沙希」

と奈緒がとんできた

さっき言いかけた私にいいことって何なの？

それが頭にあるから何も集中できない」

「仕方がない奈緒姉どすなあ・・・でも、やっぱり言うんはこれが終わったあとどす」

「やっぱり駄目かあ」

「へえ、駄目どす。これは奈緒姉だけのことと違うんどすから」

「えっ？私だけはないの？」

そういつて沙希の顔をじつとみつめる。何を考えているのか・・・

やがてはつとして沙希の顔を見る奈緒。ニツコリと笑う沙希・・・どうしてなのか、奈緒の身体がガタガタと震えだし、立っていられなくなった。

慌てて奈緒の身体を抱きしめて、祖母の後ろにいる志保を呼ぶ

慌てて飛んでくる、志保。勝江もあとに続いている。

「どうなすつたのどすか、奈緒様」

「奈緒姉ちゃん、いろんなことがあったから少し体調をくずしたみたいどす。」

高弟のみなさんのそばに座らせて少し様子を見ていておくれやす」

二人して廊下側につれていこうとしたが

「あっ、志保さんちよっと」

と呼び止める沙希。

志保は何事か勝江に頼むと急いで戻ってくる。

「志保さん、ちよっとお婆ちやまのところで・・・」

と希美子となにやら楽しそうに話していたその祖母の前に座る二人。

「お婆ちやま、ママは？」

「へえ、うち下の温泉で忘れ物したさかい取にいつてもらったんです」

その真理の席に座る希美子、どうやら真理が貞子から目を離すときには希美子が見ている・・・

と二人の暗黙の了解が出来ているようだ。

「ところで、小沙希ちゃんも志保さんもどうしたんですか？」

「へえ、奈緒姉ちゃんが体調を崩しはって」

「そりゃいけまへん・・・でも小沙希ちゃん、

澁先生が帰っておられるえ・・・それに相良病院の女先生もいられるし・・・えっ?・・・」

「そつどす、お婆ちやまの思われる通りどす」

「沙希姫様・・・それはどういふことごすか？」

と聞く志保に

「へえ、うちが奈緒姉ちゃんに言う前にうちの心を悟りはった。そやから・・・」

と祖母と志保と希美子に詳しくうちあける。

「ええ〜・・・小・・・小沙希・・・ちゃん。そ・・・それ、ほんまどすか・・・」

あれほど落ち着いていた貞子の慌てぶり。

志保も胸元に手を置いて動揺をかくせない。希美子もしかりだ。

こんな日がくる・・・そうは思っていたし想像もしていた。

・・・でも現実になったら・・・想像以上の胸の高まり、

「小沙希ちゃん・・・大丈夫どすか・・・」

かえって心配そうになる貞子。

こうなればいいなあと思っていたことが現実になればかえって心配になる。

「昨日までのうちにはわかりまへんどした。

でも今のうちには・・・わかるようになったんどすから間違いおへん」

「こりゃ、えらいこつちゃ・・・うち、これが終わったらまた温泉に入りに行くえ。

・・・そして、もっともつと寿命をのばさな・・・」

「おほほほ・・・そつどす。おばあちゃま、この先にはもっともつと楽しみがいつぱいありますえ」

「小沙希ちゃん！・・・お願いがあるんどす・・・」

「おばあちゃま、わかっています。・・・この京舞の将来・・・どすやろ」

「へえ、ほんまは小沙希ちゃんがやってくれたら一番いいんえ。

けんどあんたはうちが見てもいろんなことに才能がありすぎるんどす。

京舞に一生・・・なんて小沙希ちゃんには出来ん相談やおもいます」

「お婆ちやま、心配おへん。うちから見ても舞や音曲の天才や思う子がいます」

「えっ、舞の天才?・・・」

「うちなんかとてももかなうもんやおへん」

「ええ〜、小沙希ちゃんがかなわない子が・・・」

「へえ、そやから京舞は大安泰どす。」

お婆ちやまがこれからやらなあかんことは、

真理ママをこの京都に縛り付けてどこにもやらんことどす。もちろん早瀬の里にもどすえ」

「どうして真理はんを・・・」

といつてからハツと小沙希の顔を見る。頷く小沙希になにもかみ込んだ三人。

ああ・・・そやつたんや・・・

「希美子さんはこれからいそがしくなるえ。」

この家のことみなあかんし、地下の施設の総取締りどす。

これからは祇園の舞妓ちゃんや芸妓はんが毎日のように温泉に入りにきます。

花街の女は身体や精神を酷使しているんどす

そやからここの保養施設をかかせんようなります。

他の花街からも女性達が押し寄せてくるはずどす。

とてもとても真理ママ一人ではできんようになります」と言ってから

「相良病院の相良明子はんがここのこと知りはった。

きつと女性の患者さんここに回してきはる。

今は看護師さんたち多いように思えるけど

入院施設に患者さんが多なったら、看護師さんの手が3倍以上必要

になるんどす。

それに病院施設いつまでも地下においとけまへん。患者さんには自然の光や空気が必要なんどす。

だからいうてここから離れることできまへんし……歩いて5分……せいぜいその範囲で病院の候補地探す必要あるんどす。

そんなこと真理ママと一緒にやらなあかん。……できますか？希美子さん」

「できます。……といえたら……そんな自分に自身があつたら……」

「希美子はん！最初から出来る！……いう人いたらそんな人信用できまへん。

そんな人、詐欺師や。けんど最初からしり込みしとつたら何もできまへん。

たとえそれが出来んかって努力さえしていれば何もいいまへん」

「お婆ちやまのいうとおりどす。頭で考えてばかりいちゃあかんえ。

まずは行動してみ……ねえ、お婆ちやま」

「おほほほ……小沙希ちゃんがいつもしていることうちには『そつどす』とはいえまへん。

けんど小沙希ちゃんの1/100分でもやってみればいいんどす」

ぷつと膨れる小沙希……。

「なんやうち、ひどいいわれかた」

といつてから時計に目がいく。

「あつ……もう時間どす。それじゃあ、志保さん。」

奈緒姉ちゃんですえあの様子どす。うちの発表聞いたらどんなことになるか・・・

とにかく他のお弟子さんたちにやっていただけよう・・・」

「わかつてます。・・・でも沙希姫様・・・おめでとございます」

「いやだ、志保さん」

と照れたような声を残して立ち上がる。

こうして続きが始まった。みんなわくわくして身を乗り出しているが

終わつた後は大変な騒ぎが待っているのもしらず・・・

「これからのシーン、希美子さん、希佐ちゃんをよく知っている所が出てくるんどす

よく見ておいておくれやす」

・・・・・・・・・・・・・・・・

気軽に道場内に入って行く源太郎。

しかし、小沙希・・・いや沙希太郎はその場で膝をつき頭を下げてから

立ち上がって道場に入って行った。

それが礼だからだ。舞のお稽古場でもそうする。剣道場でも同じだ。

「ふむ、・・・」

口には出さないが感心したように沙希太郎に注目する当道場の主、結城弦四郎。

今は男姿だが舞妓だと聞いている。

それがどうだ、立ち居振舞いの際のなさ……一流の剣士と云つてもいい。
俄然興味が湧く。源太郎から聞いた気功というのも、まあ話半分に聞いていたが
これは真剣にならざるを得ない。

横にいる娘の和葉、源太郎から話を聞いていた時和葉もいて
「そんな、らちもない……」
と笑いとばしていたものだが、さすがは当道場の師範代だ。

沙希太郎の実力を読取つたらしいが、わが娘ながらまだ甘い。
横目でその表情を見ていたが、自分と同じかそれとも一段下かと読んだらしいが

それは違うぞ！父が立ち会つて勝てるかどうか……いや勝てまい。
千葉道場で修業をした篠原殿でも勝てないだろう。

この若さで何と言う強さ……天分……そう天分といつても差し支えない。

「それまで！」
という道場主の声に元気に竹刀を振っていた弟子達が全員壁際に座る。

「今日、ここにおられるお二人が来たのは……いやここにおられるお若い方」

と弦四郎が言った時、沙希太郎が立ち上がった

「早瀬沙希太郎と申します。よろしく」

と言つて名をなめる。いかにも男の名前を名乗ってはいるが
一目で女性と判るのがなんだかおかしい。

「みんなもよく知っている篠原殿よりお聞きした早瀬殿の秘術、
気功とかいうものを知りたいと欲し、わざわざ来て貰つたのじゃ」

「まあ、みんな！そんなしゃつちこばらずにゆるりと見ていたらいい」
と秘術と聞いて固くなっていた体はその言葉で一度に力が抜けていく弟子達。

師範代の和葉も興味があるのだが、こんな若造何者ぞという気概が見え見えで

別に争うわけでもないのに・・・と可笑しくなってくる沙希太郎。

源太郎に目で合図をされた沙希太郎。立ち上がり道場中央に立つ。

「まずは言っておきます。この気功はお隣りの大陸中国のものであり

先ほど先生が秘術と言われましたがこれは秘術ではありません。

気功の気とは人それぞれが体内に持つ気のことであり、誰もが使えるのです。例えば、ホラ」

と身体の前で両手の平を上下に間隔をあけると、その中央に青白い玉がポウッと浮かび出た。

「おう！」

という声があがる。

「これは、人の気が光の玉として具象化したものです。

でもこんな小さな気の塊でも使い方を誤ると・・・」

と指先の乗せて弾くと『バン！』と分厚い道場の板壁に小さな穴を空けてしまった。

「こ・・・これは・・・」

分厚い板に真ん丸く開いた穴、いかにその威力が凄いものなのかも言葉が出てこない。

「これは・・・これは気功を間違っって使ったものです。」

もし皆さんが例え気の玉を出せたとしてもこんなこと出来ませんか
ら
と注意をする。

「今日、みなさんに知ってもらいたかったのは無刀で相手を倒す方法です。

勿論、柔術もありますが気功では相手の気を利用して倒しますので相手の身体には一切触れません。では一度やってみましょうか。誰かお相手をお願いします」

よし、っと立ち上がったのは身体が相撲取りのように大きな佐田彦一、

しかも、師範代の和葉も梶子摺る強さだし、性格も荒く皆から嫌われている。

その彦一が最初に立つのを見て

「お父様！」

と声をあげたのは和葉だ。

でも

「待ちなさい」

と和葉を押し留めたのは篠原源太郎。

「これは面白い！」

「でも……」

「和葉さん、心配しなさんな。沙希太郎が負けることはないよ。俺が見たいのはあんなでかい体をどのように始末するかなんだ」

「あの人、そんなに強いんですか？」

「ほう、和葉殿はあの沙希太郎の見栄えに惑わされているのか？」

そんな言葉に少し膨れる和葉。

「そんなことで膨れるようでは剣の修行をこれ以上する必要はない

ぜ。和葉殿」

黙ってしまったというより、口惜しさから声もでない。

「言っておくがああ、沙希太郎、俺や弦四郎が束になつてかかっても相手にはならないぐらい強い。ひよつとしたら俺の師匠の千葉周作先生よりもな」

「えっ？そんなに？・・・父上！本当ですか？」

「ああ、本当だ。わしの目にはあの小さな体が最初から大きな岩に見えていた。だが今では途方もなく高い岩壁に見える。隙があるようで全ての動きに隙がない。

篠原殿のいわれることに間違いはない。

わしは今日の出会い、今まで生きてきた甲斐があつた。本当に嬉しい。篠原殿、感謝する」

「よせやい、・・・さあ、勝負がはじまつたようだぜ。お互いじっくりと見定めようじゃないか」

彦一は沙希太郎を捕まえようとドタドタと道場の中を走り回っていた。

沙希太郎はヒョイヒョイと紙一重の差でかわしている。

真赤な顔で汗をかき肩で息をしている彦一と汗ひとつかかなく呼吸ひとつ

乱れない沙希太郎、その実力の差は厳然とある。

そのことが判らない彦一は

「ええい！ちよこまかと・・・」

「ふふふ、あなたの気の流れ案外軽いものですな。ではいきますよ」

と言う声に突つ込む彦一。

誰かの

「ああ……」

という声。

『ドーン』と軽々と宙を飛んで板壁にぶつかった彦一、そのまま『ズーン』と床に落ちて動かない。気絶したようだ。

「あつ、ごめんなさい。佐田さんの気があまりに硬すぎたので反発が強かったようです」

と倒れている佐田の後ろエリを掴むと30貫（112.5kg）もある体を

片手でひょいと持ち上げると体を板壁にもたれさせて座らせた。

啞然と見守る道場の内外の人達、いつのまにか覗き窓の外には菊野屋の女達以外の野次馬も増えているようだ。

「父上！わたし見ました。沙希太郎様の手は佐田さんの体に触れていません。」

ただ佐田さんの額のところを狙って指で弾いただけです。……
「凄い！」

「和葉よ。よく見た。わしにもそう見えた」

「弦四郎よ、気功というものあれだけ人の体を吹き飛ばせるものか。恐ろしいものよ」

そんな言葉が聞こえたのかどうか

「今のは気功の奥義です。でもこれからおこなうのは皆さんが修練をつめば

できるものばかりです。よく見ていてください」

それからの沙希太郎が若い弟子達におこなう稽古はこれまた目を見張るものばかり。

沙希太郎の手の動きに弟子達はコロコロ転げ回る。

手を退けば体が突っ込み、押せば体が面白いように後ろに転がっていく。

まるであやつり人形のような。野次馬達も佐田のことがなかったら何を芝居しているとあざ笑っただろうが、あの強烈な出来事があっただけに

沙希太郎が不気味に見えた。

「よし、それまで！」

と弦四郎の声がかかり、そのまま座った沙希太郎。

あれほど激しい動きだったのに汗もかいていないし、呼吸も乱れていない。

それにひきかえ弟子たちは滝のように汗を流し、激しい呼吸で息も絶え絶えだ。

「つらいですか？」

そう聞く沙希太郎に首を振ったりして言葉が出ないもののやはり今まで

剣の修行をしてきた者達だ。板壁に体をもたれかせながらも懸命に座ろうとする。

「では、わたし言う通りにしてください。

まずは座禅を組んで・・・そう、両手の平を上下に向かい合わせで・・・

どちらの手が上になってもかまいません。

そして、丸いものを持ってるように手の平を丸めます。

それから、自分の気を両手の中に入れるようにします。

そのままじっくりと目を閉じて構えていてください。

決して体に力をいれてはいけません」

時間がゆっくりと過ぎていく。

「手の中が温かくなった方、目を開けてください。青白い玉が具象化しています。」

具象化していても見えない方はもう少しです」

さすがに修行をしていた者達全てが目を開けている。

半数以上が気を具象化していた。

「自分の気が見えた方、相手の気が見えるようになるまでもう少しです。」

体の気の流れは千差万別です。どこか体の悪い方はその部分の気が弱くなっています。だから中国では医術に気功が使われているのです。

相手の弱くなったところに手を当て気を流します。

これが医術でいう手当てです。全てがこれで治るわけではありませんが、

でも中国4000年から生まれたものです。馬鹿には出来ません」
と言ってから両手を前に出すと、その手の平に現われる横笛。

その不思議な術に驚きの声・・・でも沙希太郎は何も言わずすーっと口にあてる。

何と言う・・・何と言う・・・笛の調べなのか

この音色に誘われて窓から流れ込む清廉な風は、心の屈託を消し去り

尚且つ肉体の疲労をも消し去っていく。

そして雑霊をも消し去って行くので道場に溜まった澱のようなものが

きれいさっぱりなくなったので、やけに道場内が明るく見える。

.....

「希美子さんはここがどこかわかりますえ」

「あっはい。……う……うちです。いまのところはうちにある道場です。」

「えっ？じゃあ今は……ほんとうに……」

「うちの義理の父と妻の和葉どす。……律姉！前世のあなたどすえ……」

「今が私？……なんだか不思議……見ているとこみ上げてき
ちやう……」

隣の順子がしつかりしなさいというように律子の身体をささえてい
る。

「希佐ちゃん！父の玄四郎には今日あつたわね」

「はい、声をかけていただきました」

「希佐！……どうして？……」

「お母さん、比叡山に今日天界より5人の方が沙希さんに会いに降
りて来られたからよ」

「ええ……」

「大勢の方が目撃しているし、お話もしたわ」

「希佐ちゃんは父と何を話したの？」

「いえ……別に特別なことは……ただ、剣のことが多かつた
です。」

剣がすきで今居合を勉強しているっていったら玄四郎お爺様は……

「玄四郎お爺様？」

「ええ、そう呼べっておっしゃって……だから私のこと希佐って
呼び捨てに

してくださいって言うっておきました」

「もう、希佐ちゃんは……」
ものおじしない我娘に呆れ顔だ。

希佐はニツコリ笑って

「玄四郎お爺様が道場にこられて時々手ほどきしてくれるって……」

「道場に来られるっていわれたの？」

「ええ、坂本竜馬様にそう許可を得られてました」

「坂本竜馬様？」

「ええ、天界の5人お方の中では一番えらい方みたいでした。

……そうそう、近くにおられた方が私も行ってよろしいでしょうかって……」

「近くにおられた方って……」

「私は剣のことを聞くと夢中になってしまっから……て、私なんかあなたにはとてもかなうはずはありません……というとその方笑っておられました。

でも最後にはあなたは沙希殿の血を引くお方です。

まだまだ隠れた才能があるはずですよなんて言われちゃいました。

ねえ沙希さん。私……いくら沙希さんの血を引くからって

沖田様のいわれるような才能があるのでしょうか」

「沖田様？……まさか……」

「ええ、新撰組一番隊長だった沖田総司様よ……」

こんな常識はずれの会話みんな笑ってしまうだろうに明子や牛尾刑事の母。

牛尾良子……旧姓篠原良子にはもうなんの疑問もなくなっていた。

「だから、この話をそばで聞いていた京都府警の男の刑事さんたちが

沖田様に剣を教えてくださいと申し出されました。でも沖田様はすでに肉体を持たぬ身だからどこにでもというわけはいかぬ。

だが結城道場ならば時々といわれ・・・きつと刑事さんたち、道場に入門されるわ。

東京の警察官の方たち羨ましそうにされていたもの

こんな話・・・もうみんな夢中になって聞いている。

「ねえ、沙希さん。沖田様は昔、剣が強かった剣豪といわれる人たちの中でも

一番強いのは沙希殿です。っていわれてました」

「おほほほ、それは沖田様の買被りですよ」

という沙希に、希佐は怒ったように

「そんなことありません。これも沖田様の言われたことですが、どんな剣豪の方でも安倍晴明様の亜流、

その安倍晴明様の元で修行された沙希さんが強いのはあたりまえです、

その証拠に沖田様は沙希さんを目標にまだ天界において修行をかかされないのです」

「あははは・・・それは違うぞ！希佐・・・」

そういう声がきこえて小さな光の玉がいくつも庭から入ってきた。

第二部 第十二話

光の玉の中の一つが消え、忽然と姿を表す安倍晴明。

「あつ、晴明様、……ここにどうぞ」

と座布団を差し出す日和子。何の動揺もないのはさすがだ。

そして、森田亜紀に何事か耳打ちすると心得たように部屋を後にする。

心得た瑞穂と高弟の一人があとを追った。

日和子は今は口出し一つせず様子を見ている。

ただ少し体調が悪い真理を気遣って真理の横に座っているだけだ。

その日和子が差し出す座布団に座り、一瞬チラッと日和子を見て笑う晴明に

顔をカア〜と赤くする日和子。

どうしても昼間に竜馬に言われた赤ちゃんのことが頭に有り、動揺してしまふ。

「あなたが安倍晴明様……」

「そうじゃ希佐、そして希美子よ。わしは幕末でのことがあって以来

結城の家をつぶさに見てきた。そして今日・重畳じゃのう」

「あのう……晴明様……」

「なんじゃ希佐よ」

「先ほど違うといわれたこと……」

「おおう、そうじゃった。

違うと言ったのはあきあがわしの元で修行したから強くなった・

ということじゃ。

沙希の強さはその身のうちに持つ非凡な才能ゆえに得たもの。舞も横笛もしかりじゃ。それに才能ばかりか日頃の努力は凄まじいもの。

師のわしでもぞつとしたものじゃ。いくらわしでもあきあのあの真似は出来ん」

「そんなに・・・」

「そうじゃ。寝食を忘れるということとはああいうことじゃ。鬼気せまるあきあの修行。

そのとき、わしの式じゃった玉藻・葛葉・紅葉もあきあの姿ようみんかった。

怖いいうてな・・・胡蝶なんかあきあの目の前では飛ぶことも身動き一つできんかった」

「でもどうしてなんですか」

「いつもあきあがいつているであろう、術の失敗、それがあきあを変えた。

あきあの兄弟子に重則という男がいた。ちょうどあきあの1年先輩じゃった。

その重則がある日結婚が決まったの祝宴のその日、夜盗に襲われて全員惨殺されてしまったのじゃ。

じゃが重則は陰陽術を学んだ身、死ぬ間際術を己にかけて妖者と契約し人ではなくなってしまった。

復讐に狂ったのじゃ。だが人を呪つての妖者との契約、妖者は見境いなどせぬ。

罪無き人までも殺していく重則の妖し、

男というだけで言葉も聞かぬあきあがただひとり言葉を交したのが重則ただひとりじゃった。

だから重則に対峙したあきあ、じゃがまだまだ甘い。

あと1歩まで追い詰めたのに日頃の重則を思い出し、術を途中で止めてしまった。

術というものは最後までかけなければ・・・途中で止めてしまったら、自分に帰ってくるのが必定、

あきあはそこまで自分を見失っていたのじゃ。

そして日頃可愛がっていた・・・いや自分の分身と誤っていたましろという式が

あきあをかばって消えてしまった。いや死んでしまったのじゃな。それからじゃあきあが変わったのは「

みんな沙希を見つめるが、目を閉じている沙希からは何も読み取れない。

だが

「ましろちゃんの・・・今でも・・・あの可愛い声が蘇ってきます。

』あきあ様~~~~・・・あきあ様~~~~』・・・て「

「会いたいか・・・」

「へえ、あいたおす。うちにとって大きな心の痛みどす」

「そうか・・・」

といつて手のひらを差し出す安倍晴明。

その手のひらから一匹の紋白蝶が舞い上がった。

紋白蝶はなんだか喜んだように沙希の周りを飛び回る。

「まさか・・・」

沙希が大きな目をさらに大きくして固まっている。

「そのまさかじゃ。」

菩薩様があきあの力の均衡のために天界を離れらくなり、変わりに阿弥陀如来様がその任にあたられる。

そう沖田殿から聞いたじやろう」

「はい・・・でもなんだか申し訳なくて・・・」

「あははは、そんなことはいい・・・、じゃがいくら知っていらっしやるとはいえ

如来様にはあきあはまだ未知数なのじゃ。だからおまえのこと調べられた。

事細かにな。そしてましろのことを知り、

如来様は天界にいるはずのましろを探せとわしに命じられた。・・・じゃが何しろ天界は広い。

だから今回の元方のこと見るわけにはいかんかった」
今度は苦笑いだ。

「その成果は見ての通りじゃ」

「一体ましろさんはどこに?」

「天界の木の枝に・・・主もいぬ古い蜘蛛の糸に絡まり身動きとれず消えていこうとしていたのじゃ」

「ごめん・・・ごめんえ。ましろちゃん。

うちはあの時あなたのこと必死に探しつづけました。でも出来んかった」

そのときもう一匹・・・ひづるから飛び立った胡蝶が・・・あきあのそばで少女の姿をあらわす。

「ちがうよ、ましろ。・・・あのとき気が狂ったようになったあきあをとめたのはうちよ。

見れなかった・・・あんなあきあ見たくなかった。

だからうち・・・ましろ・・・を見捨てたんだ。あきあに見捨てさせた」

「おねえちゃん・・・何もいわなくていい・・・」
そんな声がして真っ白なたけの短い着物で真っ赤な帯の少女が現れた。

「うち、なにもかも知ってます」
という少女。

ざわめく女性達に

「ましろちゃんは胡蝶ちゃんの妹なんです」

といつてから、一瞬の驚きのあと再びましろをみつめる沙希。

「うち、あきあ様の術のかえりで光の中にいたんです。
恐怖でなにもできんかったうちを助けてくれたんが重則様」

「えっ？重則様が・・・」
驚きの沙希。

「あのとき・・・あきあ様が術のかえりを承知で術をとめなさった。
そのあきあ様のお心・・・重則さまに伝わったのです。
そよから地獄へ落ちていく途中、うちを光の玉にいれられ天国に投げられたのです」

「ああ、重則様はうちの心知っておられた」
といつて胸を抱く沙希。

「どついうことじゃ、あきあ。わしは何も聞いておらぬ」

「はい、うちはそれまで寝食を共にした重則様を術で消してしまう
なんてできなかった。

だから何もかも承知で術を止めました。

こんな悲しみ・・・こんな苦しみ・・・もう嫌！そうおもったん

どす。

でも術のかえりは若返ることではなかった。だから何も話すまい
そう自分に誓ったんどす」

「だから何も言わなかったのか・・・この強情っぱりめが」
言葉はきついが苦笑いしながらなので皆ほつと胸をなでおとす。

「ましるちゃん、ありがとう・・・これでうち、救われました」

「とんでもないことです。ご主人様」

「主人とまだ呼んでくれるのですか」

「わたしのご主人はあきあ様ただおひとりです。昔も・・・今も・・・」

「ましる！世の中変わったわ。あんたあきあの中にいて勉強する」とね。

えっ・・・なにが可笑しいの？あきあ」

「いいえ、胡蝶ちゃんが勉強って言葉つかったもんだから、玉藻さんがこけた様よ」

突然沙希の身体から出てきた3つの玉、姿を表した3人の式。

「あらあら・・・わたしの言ったことでこけたそうね。玉藻お・ば・さん」

「このうつけものめが」

と手を振り上げた玉藻にひらひらと蝶の姿になり、ひづるの胸のポケットに張り付く。

「あははは・・・あいもかわらぬのう、玉藻と胡蝶は」
といてから

「良かったのう・・・」

としみじみ葛葉に向かって言う。それで葛葉とましるの関係がみん

なにわかった。

「葛葉母様・・・」

といつてすがりついていくましろ。

「葛葉さん良かった・・・本当に良かったぞすなあ・・・」

「あ・・・主殿・・・わたしは・・・わたしは・・・」

「いわなくていい・・・葛葉さん。うちには判っていましたえ。あの明るかった葛葉さんが屈託のある無口な式に変貌したのはましろちゃんのことがあつてから・・・」

「ただどうかはあなたに無茶なことは絶対にやらせない・・・そう思つてました。」

「だから紅葉さんにあなたから目を離してはいけまへん。」

「もし無茶をするようだったらとめてくれ・・・そういつておきました」

「あ・・・主殿~~~~」

絞るような叫びで目の前に手を置いて頭をさげる。

「葛葉さん・・・これだけは絶対に忘れたらあかんのぞすえ。」

仲間を見張らなければならぬ紅葉さんのつらさ。

その心中あまりある・・・誰にもいえぬつらさは

紅葉さんのあの底抜けの明るさと澁刺とした若さをも奪ってしまったんぞす」

「あ・・・主殿・・・それ以上は・・・」

「いつてくれるなど手をつけて見上げる紅葉・・・涙ながらのその瞳の奥は明るく澄んでいたのだ。」

「あなた達、積もる話もありましょう。さあ、帰つてきなさい」

言葉使いを変えてそういつた沙希に皆、光の玉になって沙希の身体に消えていつた。

「あいも変わらず式達にすかれるのう・・・おおうそうじやった。ひづる、おまえもじゃ。胡蝶を大事にせいよ」

「清明伯父様！わたし胡蝶ちゃんとは大の仲良しなの。でも胡蝶ちゃん・・・私が危ないとき命をかけて守るって言うてくれるけど」

私そんなことしてほしくない。私の為に命をかけるなんて・・・いつも沙希姉さんがいつているけど命って物凄く大事なものだからもっと大切にしてほしいの・・・」
その言葉で胡蝶はひらひら舞い上がってひづるの頭にとまって動くししない。

むせび泣いている・・・そう沙希には見えだし清明は

「おおう・・・そうか・・・そうか・・・」

とひづるの頭をなでただけで何も言わない。

ただ

（優しいのう・・・この女達。

女の悲しみの中でこの時代まで生き抜いてきた女達じゃ。だから強い・・・この先、楽しみじゃて）

と心の中で言っていたのは誰も知らない。

「さあ、清明様。これを・・・」

といて森田亜紀達が持ってきた膳を日和子が清明の前に差し出す。

「おお・・・これは・・・」

「地酒です。実は里出身の女性が東北で修行していましたが

杜氏としての人間関係が嫌になってこのほど里に帰ってきましたの。

それを姉の操がぶらぶらしているのはいけないといって

里の湧き水を使って作らせたのがこれです。お口にあいますかどうか……」

とって杯になみなみつくと晴明は一口で飲み干す。

「うっ……」

とってから杯をしげしげと見つめているのだ。

「お口にあいませんでしたか？…少し辛口と聞き及んでましたが……」

「いやいや……そうでない。これほど鮮烈でうまい酒を飲んだ覚えがない」

あの晴明が驚いた声をだして杯を日和子の前に差し出す。

「おほほほ……そうでしたか。よかった……」

晴明に酒をつぎながらいう。

「これ東京の操のレストラント、この地下の保養所におこうかと操とっていましたが、

これで自信を持って置くことが出来ます。

何しろ一人で作っていますし、そんな良い設備といえませんが量的にはちよつどいいかと」

「日和子叔母様」

「何？沙希ちゃん？」

「早う皆さんの分を用意しないと拗ねることになりますえ」

「えっ？……」

「さあさ、皆さん。そんなところで見ていないで早う姿をあらわさなお酒の準備出来まへんえ」

沙希の言葉で天井に張り付いていた幾つもの光の玉がすーと下りてくる。

そして白い着物姿の侍が姿をあらわした。
何も知らない人はただただ驚きで固まっているが
比叡山で知っている婦警達と希佐は嬉しさで歓声をあげるのだ。

「遅れましたけど、天界の人たちを紹介する前にこちら側の二人
を紹介しますえ」
といてゆりあとケイトを立たせた。

独特の雰囲気・・・二人はもう啞然とただただ座っていただけだ。
あの温泉にも入った。消えてしまった古瑕のこともう何もいえなく
なる。

地下の保養施設・・・病院施設には啞然とするだけだ。
特にアメリカの病院施設に自信を持っていたケイトだったがこの地
下病院の前には
そんなものなんの値打ちもなくなってしまった。

「司ゆりあこと・・・ゆり姉はあの将門さんを知る最初の原因をつ
くった人どす」

「司ゆりあです。もう大変なご迷惑をかけて申し訳ありませんでし
た。」

天涯孤独なわたしを温かく一族にいれてくださったみなさまに感謝
します」

「ケイト・マイヤーことケイト姉さんは
あのジョージ・ルーク監督の姪御さんでありワシントン・ポストで
コラムを担当されています。」

そして世界的に有名な女流写真家さんでもあるんどす」

「私・・・沙希が好きです。大好きです。」

・・・でもここにきてまだ数時間しか経っていないけど皆さんの
ことも大好きになりました」

素直なケイトの言葉にみんな拍手喝采だ。

「小沙希ちゃんが連れてくる人ってほんにええ子ばかりどすなあ。

あの外人さん、皆受け入れてくれてよかったわあ。うち、あの子大好きどす」

「あっ！小沙希ちゃん！」

と立ち上がったのは花世だ。

「うち、小沙希さん姉さんに紹介したい人あるんどす」

そんな花世に驚いた小沙希が

「えっ？紹介したい人？」

「へえ、さあ紫苑ちゃん立って」

と立ち上がって沙希を興味深く見つめる紫苑。

杏奈の手によって見違えるように外見が変わっていた。

ほっそりとしたスタイルを白いブラウスと薄いブルーのスカートに身を包んだ紫苑、

髪の毛も杏奈の手によって短くカットされなんだかすっきりと生まれ変わったようだ。

「この子、紫苑ちゃんっていうの」

「紫苑？」

とじつと紫苑を見つめる沙希。

「ちょっと待って」

と言って舞台から下りるとわざわざ紫苑のもとに足を運ぶ沙希、それをジット見つめる女達と天人達。

「紫苑さん、あんたから不思議な力と懐かしさを感じるんどす。うんあんたとは以前……」

「あきあ！おまえとはあまり近すぎたから思い出さないんだろ。それ、そのおなごはお前の舞を作った御所の舞姫、那賀杜姫ながとひめだよ」

「えっ？・・・ああ・・・そうどす、そうどす・・・」

紫苑さんの前世は那賀杜姫様・・・お婆ちやまこの人どす。

今度フィルムに残そうとしている舞を創られたのはこのお方どす」

「えっ？紫苑はんが舞姫？・・・」

「へえ、けんど紫苑さんがどうしてここへ？」

「小沙希ちゃん！紫苑ちゃんが奏でる琵琶が暗示にかかった女の子達を救ったんどす。

それに紫苑ちゃん記憶がないんどすえ」

「琵琶で子供達を救った？・・・そして記憶が無い・・・判りました、花世ちゃん。

心配せんと後はうちにまかせておくれやす」

「えっ、いいんどすか？」

「へえ、けんど今日直ぐとはいかへんえ、いろいろ調べなあかんから。」

紫苑さん・・・いいえ、紫苑ちゃん。お婆ちやまの前に座つといてくれる？」

「へえ・・・」

小沙希は紫苑を貞子の前に座らせてから舞台にあがった。

沙希が声をあげる。

「置屋のおかあちゃん達、今から舞妓ちゃんや芸妓のお姉はん達のお仕事どす。

仕事といつても舞や鳴り物と違います。

ただ、今お酒の準備している婦警さんや高弟のみなさんは素人どす。

お酒の準備とここにいられるお方のお酌を頼みますえ。

お花代はきちつとうちが平等に払いますよって……」
と聞くとサツと立ち上がる、さすがは花街の女だ。

そのあとを追うように

「圧塗りのお化粧やりっぱなおべべいりまへん。そのままでもよろし
おす」

と聞くとほっと安堵の色が浮かぶ。

やはり今の姿では仕事としての臨戦体制が出来ないのであろう。
だからあらためて沙希にそついわれるとほっとするのだ。

「では紹介します。まずこちらは坂本竜馬様」

「よしなに……」

という短い挨拶だけだ。

こんな大勢の女性に囲まれて面映いのだ。

「こちらは沖田総司様……」

沖田は照れたように、ただ黙って頭をさげるだけだ。

「次は……」

とってからニツと笑う。

「篠原良子さん」

と呼ぶ沙希。

「はい」

と行って立ち上がった。

もう心積もりはしていた。寄り添うように西沢恵子も立つ。

「源太郎様……あの方があなたのご子孫どすえ。昼間あった牛尾
刑事はんのお母様どす」

「おお、そうなのか」

と相も変らぬ同心羽織。十手で肩を叩きながら近づいていく。

「相良明子さん」

急に呼ばれて慌てる明子。

こちらは何の心積もりもなく・・・油断していたと言っている。

こちらを見ながら立ち上がる明子。

「あの方は相良明子さん・・・あなたのご子孫です。」

そしてこちらが相良新次郎様。あなたのご先祖どすえ・・・明子さん」

小刻みに足を震わす明子・・・全く・・・全く・・・信じられない。

そんな様子の明子に苦笑いしながら近づいていく新次郎。

そして・・・

「希佐ちゃんはもうお会いしたわね。じゃあ希美子さん」

といわれると希佐に手を引かれながら立ち上がって二人。

「律姉！」

と呼ばれると中腰になっていたのを飛び上がるように立ち上がった律子。

小走りで歩いてくるも初めて着た着物の裾に足をとられて転びそうになる。

なんとかその人の前に立った律子・・・なぜか涙を流しているのだ。

「希佐ちゃん！・・・お母さんに紹介してあげて・・・」

「はい、お母さん。こちらがご先祖の結城玄四郎お爺様です。」

玄四郎お爺様・・・私の母の希美子です。そしてあなたの子孫です」

あどけないがりっぱな紹介に涙を流す希美子。

手に持つ真っ白なハンカチがとても印象的だ

「おっおう・・・」

と声をあげる玄四郎。何もいえぬ・・・。

「父上、我妻和葉の生まれ変わりの律子です……律姉、父上よ」と律子にハンカチを渡す沙希。

「和葉……」

と言ったつきり言葉がでない玄四郎。

「父上……私には和葉のときの記憶がありません。でもなんだかとても懐かしい……そしてとても嬉しいの」

そんなこんなの出会いの中、

「早くしないと時刻が遅くなってしまいますえ」という沙希が話を進めようとする。

「あきあよ、まだ飲み足りんのう」

「わかってます、晴明様。今花街の女達がいろんなものをもってくる所です。」

もう少し待ってください」

賑やかになった居間の中、果たしてこのまま続けていいのだろうか……。

それでも楽しみに待っていた人もいる。拍手が鳴った。

……

和葉は幼いころから父の姿をみて育ったので剣の道に進んだのは当然といえば当然であった。師範代という地位を父に与えられた時も

当たり前前のことで喜びもなかった。

父の跡をついで道場主になる。これが和葉自身、自ら選んだ道であ

った。

だが、今それがガタガタと崩れていく。

早瀬沙希太郎と名乗る娘、和葉よりもはるかに年が若い、
なのに何と言う強さ、俄然興味が湧き・・・いや、興味が湧くだけ
ならいい

何なのかこの気持ちは？・・・いてもたってもいられない。
生まれて初めてだった。まるで心の中が嵐の海のように・・・大波が打
ち寄せひていく。

これが恋なのか？だが相手は同じ女性なのだ。
でも、この気持ちは止めようがない。ああ、どうしたら・・・？

でもそんな和葉の心の内をひと目で見抜いた女がいた。

覗き窓の外から見物を決め込んでいた幾松だ。
小沙希の強さは判っていた。だから何かないかと道場内を見渡して
眼に止まったのが

当道場の娘であり師範代でもある和葉だった。

遠くから見たことがある祇園でも有名な剣術小町、男を軽々と打ち
負かす女丈夫と

知られているのだ。だから注目していた。和葉よりはるかに強い小
沙希の存在が
和葉にどんな変化をもたらすのか・・・と。

最初は幾松の思い通りに和葉は肩を怒らせ、小沙希何するものぞと
いう

気概を見せていた。だが事は複雑になっていく。
変わっていったのは小沙希が相手にふれもせずあの佐田という巨漢
を

ぶん投げてからだ。さすがの幾松も『あっ』と思わず声をあげそう
になったのが

和葉の心に芽生えた恋の種、それが瞬時に花をさかせてしまった。恋の掌管も知らぬおぼこに訪れた赤い嵐……。幾松にはその心の内が手に取るように読取れた。

さすがは花街で揉まれて生きてきた名物芸妓、すいも甘いも噛み締め

めて恋の手練を教えずにはいられようか。……。そう女長兵衛を決め込む幾松。

幾松にとって小沙希は強敵だが和葉は赤子の手を捻るようなもの。それに小沙希は強敵といつても情には弱い。

そう見抜いている幾松。この勝負、先は見えているのだ。

ふと、こちらを向いた和葉に眼で合図を送る。

『はっ』として顔色が赤くなったり、青くなったり……。でも立ち上がって道場を出る和葉。

不信そうな父の弦四郎が眼で和葉を追っていたが、素知らぬ顔で覗き窓を離れた幾松、足を道場裏に運んだ。

井戸に手を置き座り込んだ和葉の後ろからそつと近づく幾松、さすがは女ながらの剣士だ。幾松の近づく足音に、硬くなった身体がビクツと

反応する。でもよく見ると可哀相なくらい小刻みに震えているのだ。

幾松は後ろから和葉を抱えるように立たせると、

「大丈夫ですか？」

と下から覗き込むように見ると歯が『カチカチ』と小刻みに鳴っている。

(これはいけまへん！失神寸前どっせ)

こんなところで倒れたら大騒ぎになるのは必定、

「ねえ、お嬢様。あなたのお部屋で女同士でお話しまへん？」
和葉から言葉が出ないが、かるうじて小さく頷いているのが判る。

「さあ、ゆっくり歩いて！」

少しきつく言うと身体がガクガクゆれながらも1歩づつ歩き始めた。

こんな時は相手の心理状態に入り込んだら駄目なのだ。

少しきつく突き放すようにすれば身体も動く。

幸い誰にも見咎められずに和葉の部屋に入ることができた。

幾松が手を放すと崩れるように倒れこむ和葉。

恋の道にかけては地獄をみてきた幾松にとってはこのお嬢さんまるでねんねだが

この恋の先に待っている運命を思うと命をかけて手伝ってやらなければ

幾松という祇園芸妓として女がすたるというものだ。

命がけの恋・・・たとえ達成出来たとしても一夜限りの契りしか結べないのだ。

胸が張り裂けそうな恋の行く末だ。

相手は幾松からみてもこの世で最高の相手だ。こんな相手過去にも
現在も

たとえ未来でもたった一人しかいないだろう。

だからだ・・・だから、今宵一夜にかけてみる。

.....

「あれが和葉が恋を知った瞬間なのね」

「ええ・・・でもこれってうちが知らなかった画どす
といつてからはつと気づく。」

「まさか・・・晴明様・・・」

「あははは、わしが最初に注目したのは和葉が律子の前世だったことじゃ。」

そしてその硬質な性格、男より実力が勝っていた和葉があきあをみて・・・

あきあの強さを見てどう変わるか・・・男勝りのあの硬質な性格が破綻するのは案外早かった。

わし以上に和葉の心の中を注目していた幾松がいたことがそれからの展開を楽にしてくれたのは確かじゃ」

「もう、晴明様は・・・」

和姉ったら・・・あんなに震えて・・・でも律姉と和姉って時代こそ違い全く同じどすえ」

「えっ？沙希・・・どこが・・・どこが同じなの？」

「だって、和姉は男勝りの女剣士、片や律姉は高校時代、常にトップなのに裏番・総番で暴れていはった

鶴姫のお律という通り名のスケバンどす・・・」

「こら！沙希・・・なにばらしているのよ」

と暗に認めて墓穴をほる律子。

聞いていた女性達から『やっぱり・・・』とか『目が少し怖いつて思った』などの声が聞こえてくる。

「ヤダ・・・」

と両頬を両手で押さえる可愛いしぐさ・・・
「律姉！・・・何言ってるんですか。もう・・・そんな可愛いしぐさ遅いどす」

笑いが起こる中

「律子さんってスケバンだったんですか」

と目を輝かしている希佐。

「若気の至り・・・よ」

横で聞いている玄四郎は何のことが判らなく目を白黒していた。

そこにちょうどタイミングよく舞妓や芸妓達がお膳を持って現れた。

「さあさ・・・みなはん。お待ちとうさんどす」

と先頭であらわれたのは菊野屋の花江だ。

だがこれを見た源太郎、どこその面影をみたのか

「おお・・・千代松！」

と声をかける。

その声を聞いた花江はその源太郎の前にお膳をおいた。

続いていくつかの舞妓たちが持つお膳も回りにいる女性たちの前におき、おすそ分けた。

「源太郎様・・・うちは小沙希ちゃんにあんたは幕末の名妓、

千代松はんの生まれ変わりやいわれてます。

小沙希ちゃんを疑うことはおへんけど、

うちみたいなもん本当にあんな大看板の生まれ変わりでおすか？」

といいながらも源太郎の杯に酒をつぐ。

源太郎・・・まずは杯をかたむけ

「うっ」

と声をあげる。同じ声があちこちから漏れてきた。

「なるほどなあ・・・晴明殿にいわれるとおり。

過去いろんな酒を飲んできたがこんなふうまい酒はじめてだよ」
とその洒脱な口ぶりで

「その通りだよ。沙希殿が言われる通り貴公は千代松が転生した姿だ。」

今のわれらには時代を同じくしたものの前世の姿が見えるのさ」

「うち、今までいくら小沙希ちゃんに言われても半信半疑どした。

けどあんな大看板がうちやて、これからもっともっと精進しますよって見守っていてください」

「いいよ」

「えっ？」

「今のわれ等は沙希殿の守護をするもの・・・それと共に早瀬の女達をも見守るお役目もあるんだ。」

幕末からそう思っていたが沙希殿はもう無茶苦茶だよ。

いかにも手が足りないわれ等が右往左往しているんだ」

「小沙希ちゃんにはうち達も心配しとるんどす。

小沙希ちゃんみたいに素晴らしいひと世界に二人とおへん。

でもこんなに、はらはらさせて心配させる人もおへんのや。

この花世ちゃんなんか小沙希ちゃんをガミガミしかるんどすけど
神妙に頭をさげてるのはその場限りどす。

『またやってしもうた・・・ごめんえ』

そういうのの繰り返しどす。・・・なあ、花世ちゃん」

「へえ、うち逃げるんも勇氣どすいうて注意しとるんどすけど、小沙希さん姉さんつて身体が先に動いてしまっんどす。特に女性に対して無碍なことやられたら怒りで我を忘れてしまっんどす」

「ほう、お主が、花世の子孫か・・・なるほどよく似ている」

「まあ、源太郎様、話をすげかえないでくれやす」

「ははは・・・気の強いところもそっくりだ・・・」

「皆さん、再開しますえ」

沙希の声が響く。

今日は・・・なんだか・・・はずむような1日だ。

.....

「さあ、あんた達！おきばりやす」

という菊野に送られてお座敷に向かう芸妓や舞妓達。

自然と幾松と並んで歩く小沙希。

昼間の道場のことを思うとガラリと変わった小沙希の舞妓姿、ホレホレとする艶やかさだ。

置屋の誰もが認める舞妓としての小沙希の実力。

少し屈託のある幾松だが目を奪われずにはいられない。

「あつ！真田屋の千代松！」

と芸妓の1人が声をあげた。

小路から出てきて小沙希達に並びかける芸妓と舞妓達。

どちらもつゝんとそっぽを向く芸妓や舞妓達。

祇園でも有名なライバル置屋で芸妓や舞妓達も何かとはりあっているのだ。

でも1人1人になれば仲が良い。そんな様子が小沙希には手を取るように判る。

だから『クスっ』とつい笑ってしまった。

それを見咎めたのが真田屋の芸妓

「ちよつと、あんた。何が可笑しいんどすか」

「いいえ、ただ・・・」

その声で

「小沙希ちゃん、どうしたんえ」

と小沙希に問い掛ける幾松。

「なんやのこの子」

と幾松の横についた千代松。

「へえ、昨日から菊野屋にお世話になっている小沙希います。どうぞよろしゅう」

「なんや、昨日入った子がもうお座敷どすか？菊野屋はんも血迷ったもの・・・ほほほ」

と笑う千代松に合わせて笑い出す真田屋の芸妓と舞妓。

そんな彼女達に菊野屋のみんな、何も知らなくて笑っている様子を袂で顔を隠して肩を震わせている。

泣いている？・・・いや、『クククク・・・』と笑っているのだ。

そんな様子に一度に笑いが覚めたのか

「何がおかしいんどす！」

と千代松の声が尖っていた。

「なあんも知らんあんた達が、おかしゅうて・・・なあ、みんな」

「へえ・・・」

「ちよつと、幾松さん姉さん。何もそこまで・・・」

「小沙希ちゃん！みんなに心配かけどおしのおんたには、止める資格あらしまへん。」

ちよつと黙っていなはれ！」

と幾松の厳しい声に、首をすくめて

「へえ・・・」

とかしこまってしまった小沙希。

そんな様子が可笑しいとこれまた笑いがとまらない。

菊野屋の芸妓や舞妓達の様子が少し薄つきみ悪くなったのだろう、黙ってしまったのには、これまた可笑的い。

そんな時

「あつ！花世ちゃん！鈴音ちゃんえ」

といつて先の小路から出てきてトボトボと歩く鈴音の姿を認めてすつと輪から抜け出した小沙希。

肝心の小沙希の姿がなくなったので、

自然と並んで歩く形になった菊野屋と真田屋の芸妓や舞妓達。

前を歩く3人の舞妓の後を追う。

「なあ、幾松。あの小沙希という舞妓どんな子なんや。

うち正直にいうけどあんなきれいな舞妓今までみたことおへん」

「そつどすやる・・・でもそれだけやおへん。」

舞を舞つても井上のお師匠はんが直すところあらへんかった。なあ皆
！」

「へえ、あの恐い高弟はん達もあんな舞みたことおへん。

まるで天上の舞を見てるみたいや、いわはってました」

「えっ？あの厳しいお師匠様達が？」

「へえ、こちらはもう、身動き一つ、息も出来んかった」

「そんな子なんどすか？」
啞然とする千代松。

「それだけやおへん。・・横笛が・・」

「横笛いうたら、幾松。名人のあんたが・・」

「ううん・・・うちなんか足元にも及びまへん」

「えっ？」

「あの子の笛聞いたら、清い風が身体の中を通り抜けて、こん中に」とポンと胸を叩く。

「こん中に溜まっている嫌なもんが消えてしまつんどす」

「そんなあ・・・そんな子なの？」

と後ろを歩く菊野屋の芸妓、舞妓達をふりかえるとみんなが頷いている。

「あっ！・・・あれは何どすか？」

前の3人の舞妓の足が止まり、大勢の男女が叫び声を上げてこちらのほうへ

走ってくるのが見えた。自然と舞妓の姿が走ってきた人々の向こうに消えた。

慌てて小走りにかげだし、立ち止まっている舞妓の横に並んだ芸妓や舞妓達。

「小沙希ちゃん！どうしたんえ」

でも返事がない。ただジツと目の前で繰り広げられている様子を見ているだけだ。

いい着物を着た中年の女性が、紺色の着物に赤い襷の若い女性をかばって

ふるい木戸に背中を押し付けている。

そんな二人を囲むように刀をぬいた侍が五人、顔が赤い、かなり酔っているようだ。

「お侍様！この子が何をしたというんですか？」

「このおんながな、わしらをあなたどつたのだ。ゆるせん！」

「そんなあ、うちは昼間からたくさんの御酒をめしあがって、ふらふらされとるさかい、もうおつもりされたらいかかですか・・・
言うただけです」

「それが、侍をあなたどつてしていると申すのだ。

おんなの分際で侍にむかって愚弄したこと許しがたい。叩つ切つてやる！」

「あつ！あれは玉屋の女将さんです」

「玉屋？」

「へえ、うちらがこれから行く料理屋はんです」

その声に素早く小石を拾った小沙希、振りかぶった刀を持つ手めがけて投げつけた。

そして、持っていた風呂敷包みを花世に預けながら

「花世ちゃん、かんにんえ。怒らんといてね」

といって侍達にむかって歩き出した。

「あつ、小沙希さん姉さん！」

と叫ぶ花世。

「幾松！なんで止めへんのですか」

「止めて止まる娘だったら苦労しまへん」

「苦労しまへんって・・・よう落ち着いていますなあ」

「舞妓ちゃん！危ないですから早うお逃げなはれ！」

自分に差し迫った危険があるのかかわらず、そんな声をあげる玉屋の女将、

さすがは花街に生きてきた女だ。

「お母ちゃん！心配いりまへん。こんな野良犬、うちが追っ払ってあげます」

と平気な顔で言い放った。あきれれる女将。

「何だと！……女。拙者達を野良犬だと申すのか！」

「へえ、まともな人間ならこんな真昼間から、

しかも大勢の目の前でそんなぶっそうなもん、抜いたりしまへん」

「貴様！……言わせておけば……ぶった切ってやる」

「おほほほ……、人間そうやすやすと切れるもんやおへんえ」

「おのれ……」

「貴様！何者だ！」

「何者だつて？みてわかりまへんか？お目目悪いんと違いますか。

うちは舞妓どす」

ニコニコそう笑っているのだ。

「くそっ！いわせておけば」

と小沙希を取り囲む侍達。

「さあ、お母ちゃん。早く逃げて！」

その声に躊躇する女将だが小沙希の笑顔に仲居を庇いながら駆け出した。

女将を呼ぶ菊野屋と真田屋の芸妓、舞妓達の方に。

「さあ、ゆつくりとお相手しましょうか」

と余裕の小沙希に

「お……おのれ……」

と怒りで完全に己を失っている。

小沙希に向かって刀がきらめいた。思わず目を閉じる見物人。でも次に目を開けたときは刀を持つ手を押えている侍達と舞い扇を構える舞妓の姿があった。

その美しさが際立っているだけに、思わず拍手をしてしまう見物人達。

そのとき

「小沙希！」

と声がかかってなにやら空を飛んで小沙希のもとに……小沙希がつかむとそれは馬の鞭だった。

目の端に捕らえた篠原源太郎の姿。

つい『クス』と笑ってしまふ。この鞭は源太郎の悪戯なのだ。

そしてあの鞍馬天狗が誰なのかをその目でしっかり確かめるための証拠ともなる。

『ピューピュー』と音をたててしなる鞭、その侮り難い技に

『ギョッ』と思わず後ずさる。そして小沙希の隙のなさに慌てる侍達、

でもここまできては引き返せないし、意地もある。

「では、まいります」

という小沙希の声……そして見た。小沙希の舞を。

なんとというしなやかさ、なんとという美しさ。宙に舞い……地に舞う。

幻を見ているようだった。

「あつ……小沙希ちゃんが……もしかしたら鞍馬……」

と言いかける鈴音に

「しいー」

と口を閉じる事を強いる花世。

はっとして花世の顔を見る鈴音。

そして全てを呑みこんでしまふ。もう一生口に出すことはないだろう。

鞭を水平に構えて小沙希の舞が終わった。そこに立つのは小沙希だけすべては地に伏していた。

「源太郎様！そこにおられるのはわかつているんどす」

という小沙希の声にほんの窪を押えながらニヤニヤ笑って小路の陰から出てきた。

「はい！これを」

と鞭を返すと

「お姉ちゃん！」

と幾松達を呼ぶ小沙希、先ほどの女丈夫とは思えぬあどけなさ。

何だか調子の狂う源太郎だ。

「小沙希ちゃん！あんたつて娘はもう……」

幾松の怒りとも哀しみとも喜びとも……全てが含まれた声に

「ごめんなさい！」

といつて首をすくめて謝るその姿、もう何も言えなくなる。

「小沙希ちゃんいわはるんどすか。あんたはうちのらの命の恩人どす」

と抱きつかんばかりの女将。花世が小沙希の荷物を渡そうとすると

「これ、小沙希ちゃんのどすか。これうちが持ちます」

と若い仲居。

おまけに小沙希の両隣にはぴったりと花世と鈴音がひっついて離れない。

困ったような顔をする小沙希が

「源太郎様、うちらもつお座敷に行ってもよろしおすか？」

源太郎も心得て

「ああ、だが話を聞きたいから座敷が終わる頃、菊野屋を尋ねてもいいか？」

「へえ、じゃああの男前はんと、どうぞ一緒に」

「何！」

ニツコリ笑う小沙希に

「あつはははは・・・駄目だ駄目だ！相良さん。すっかりばれてい
るぜ」

と声をあげると小路から作務衣姿の医者、相良新次郎が出てきた。

「まあ、若先生！」

と黄色い声をかけられている。

相良新次郎も花街の女達に人気があるようだ。

だが、小沙希は気づかなかつた。少し離れた小路の陰から一部始終
を見ていた

袴に革靴というホコリにまみれた大男がいたことを。

.....

転生前の自分を初めてみた日和子、なるほど顔や姿は違うけど雰囲気
がどこことなく似ている。

暗がりだったら間違えてしまうだろう。

亭主を無くしその寂しさが原動力になって、大きな料理屋を女手ひ
とつで経営させた。

侍に対してもへつらわず、これだけの人を動かす女傑だったのだ。

菊野屋の花江も見た。

源太郎にお酌をしながらもあの名妓幾松とひけをとらぬ芸妓姿をその目に焼き付けたのだ。

前世とはいえ片やこの祇園を背負っていた大看板の一人、でも今の花江は普通の芸妓でしかない。舞もそこそこ、謡もそこそこ・・・どこが違うんだろう

「源太郎様。うちはこの祇園の芸妓として何も飛びぬけているものござせん。」

でも千代松さん姉さんはこの祇園の大看板。前世とはいえうちと才能が違うんどすやるか」

「花江は子供のころどんな生活だったんだ？」

「へえ、普通どす」

「普通？」

「裕福ではなかったとすけど、父母との3人暮らしで不自由もありまへんどした」

「じゃあどうして芸妓になったんだい？」

「へえ、うち舞妓の姿にあこがれてこの祇園にきたんどす。そして舞妓から芸妓になりました」

「ほう~~~~えらい違いだな」

「違う?・・・どうちがうんどすか？」

「まずは生まれだな。千代松は12姉妹の次女として貧しい農家にうまれたんだ。」

貧乏の定番として長女が口減らしと残る兄弟たちのために吉原に身売りをした。

次女である千代松も次は自分の番だ・・・そう覚悟したんだなあ。けれど頭がよかった千代松はただ身をうるだけの吉原はいやだった

んだ」

花江も花世達菊野屋の舞妓・芸妓達・・・そして、源太郎の子孫である篠原良子や

京都府警の西沢恵子達の女性が千代松の話を生唾を飲みながらも一心に聞いていた。

「ちょうど江戸から京都に帰る途中の医者に偶然に聞いた京都祇園の舞妓の話に飛びついたんだ。

だが世の中そんなに甘くない。置屋に入った千代松。

その女らしさが一つもないいなかった。先輩に笑われ、いじめられる対象になったんだよ」

・ 呆然と聞く花江。伝説として聞く千代松の祇園にきた当初の姿・・・

余りにも想像と違いすぎるのに言葉がでなかったのだ。

「この当時の事、幾松から聞いたんだ。幾松は千代松とは逆に才能に溢れた花のある舞妓だった。

千代松はその幾松を知ることにより少しでも幾松に近づこうと努力に努力を重ねたんだ。

幾松は言っていたよ。

『うちはなんでも一度見たりしたことはそこそこ形をつくることが出来ました。

けんど千代松は何度も何度も繰り返す、お稽古しなければ駄目でした。

でも千代松は一度身の内にいれてしまつたら、誰もかなうもんはおへん。

うちなんかとても相手にならへんかった。深い情感をこめて舞う京舞・・・絶品どした』

つまりだよ花江さんよ。千代松は才能は何一つなかったけど努力だけで大看板を背負ったんだ。

でもどうしてそうなったかは判るな。生まれ育ちの飢餓感からだ。それを考えると花江は恵まれている。恵まれているから努力しようとしな。

待て待て・・・わかってる。努力はしているっていいんだろ。

でも、千代松から言わせるとそんなもの努力とは言わない。

一度血反吐を吐くぐらい舞を舞いつづけると良い。千代松はそうしてきたんだ。

足腰立たぬぐらい舞って見る。それでも仕事は休むな這ってでも行け。

そしてもう一つ、客の前では笑っている。努力のあとは見せるな。

これが千代松なんだ。

どうだい・・・真似できるかい？

・・・これができたらお主はこの祇園で千代松に劣らぬ大看板を背負うことになる。

おっともう一つ。小沙希の真似だけはするな。

あいつはいわば化け物なんだ。真似しようとしても真似なんか未来永劫できない」

「あら、酷い言われ方・・・」
と声が聞こえた。

「あつ、沙希殿！」
と背後に立つ沙希を見上げてはつの悪そうな顔をする。

「小沙希ちゃん、どうしたんえ」
と話をそらす花江の助け舟、

「いえ、お母ちゃん達は？・・・」

「へえ、あのままお台所でお酒とお料理のお手伝いどす」

「それじゃあ、仕方おへんなあ」

と戻りかけたが、ピタつととまって

「花江さん姉さん・・・」

「へえ・・・」

「京舞の『桜華流水』・・・これが千代松姉ちゃんの得意な舞どした。
た。」

うち一度見たそのほればれするような舞姿に胸を熱つしたもんどす

「桜華流水・・・」

それは京舞の中でもベスト3に入る困難な舞で、女の情感をもつとも必要とする舞いでもあった。

「見せましょか・・・」

「えっ？・・・小沙希ちゃんが見せてくれるんどすか」

「へえ、ただ千代松姉ちゃんの真似だけです。」

うちには千代松姉ちゃんの情感なんて未来永劫無理どすから
と最後に源太郎に対してあてつけをいつてから

舞台へ・・・えっ？舞台？・・・たしかお稽古場は隣のはず。

『ワイワイ・ガヤガヤ』と声をあげる女性達だが

さすが天界の男たちは落ち着いていた。

舞台上上がった小沙希に貞子が

「小沙希ちゃん・・・これは一体・・・」

「へえ、すいまへん。うちここで舞をひとさし舞いたいのでここに
皆さんを移動してしまいました」

「こりゃ、えらいこつちゃ。花世ちゃん、いそいでお母ちゃん達を

このお稽古場に」

「へえ」

と花江に言われて小走りに走り去る花世。

「舞を？・・・どうして急に？・・・」

「へえ」

といつてからその質問には答えずに

「これはうちの舞ではござんせん。

今日、この祇園に大看板を背負う芸妓はんが生まれるやも知れませ
ん。そやから舞いたいんどす」

「小沙希ちゃんの舞ではないんどすか？」

「へえ、京舞の『桜華流水』・・・」

「何どすか？・・・『桜華流水』を？・・・」

「へえ、うちは今から幕末の千代松さん姉さんどす
といつてふつと姿を変える。

なるほどこの艶姿はさきほど見た千代松だ。

『トトトト・・・』

とお稽古場に入ってきた置屋のお母ちゃん達。
座り込んだそばの女性に聞けば

「あれが・・・真田屋の千代松・・・」

とつい声をあげてしまう。

高弟が用意した『桜華流水』のCD・・・

お稽古場に曲が流れ出すと

幕末の名妓の千代松が舞いだした。

それは見事であった。流水に舞う一片の桜の花びら・・・
おんなの心を花びらにかたどって舞うのだ。

けれど貞子にとってなんともいえぬ舞であった。
舞が終わって貞子をみてニッコリ笑う小沙希・・・もとの姿だ。

「お婆ちやま、この舞いかがでした？・・・」

「小沙希ちゃん・・・それは・・・」

「お婆ちやま、この舞はうちには無理です。舞としての型はうまく
いったかも知れまへん。」

けんど心が一つも入れられまへんどした。花江姉ちゃん・・・ここ
から出発です。

この舞にほればれするような女の情感をいれないといけまへんえ。

うちがもしこの舞を本当に舞えるようになったら・・・

女好きのうちにとって・・・女たらしになるやもしれまへん
とって笑いをとる

「さあ、後少しです」

とって再開を促す。

.....

「今日は遠くから足を運んでいただきまして、ありがとうございます」

「おお・・・女将！無事だったか」

「へえ、ご心配おかけしましたが、どうにかこうにか」

「それは重畳・・・それは重畳・・・」

と合図をすると仲居達がお膳を持って入ってくる。

部屋には嵯峨美屋と江戸からの客6人が座っていた。

次々、お酌をして回る女将、最後にお酌をした嵯峨美屋に

「芸妓や舞妓達は？」

「へえ、呼んでいます。今日は菊野屋はんと真田屋はんの芸事合戦どす」

「ほう、それは面白い趣向や」

『パチパチ』と手を叩く女将の合図で、舞台の襖がすーっと開く。最初は真田屋の芸妓達の京舞から始まる。

千代松を真中に舞う京舞はさすがに手馴れたものだ。

舞妓達の舞はまだぎこちない。それが新鮮といえばそうなのだが・
・

真田屋の芸妓や舞妓は舞台を下りてそれぞれ客の横に座った。

お酌をしながら・・・されながら、菊野屋の出番を待つ。

菊野屋も芸妓3人の舞、幾松を真中の京舞、真田屋とは甲乙つけがたい舞であった。

しかし、それからが夢の中・・・。一体何があったのか・・・。呆然とする客、

真田屋の芸妓と舞妓達、そして女将やちょうど御酒を持ってきた仲間達。

菊野屋の芸妓達が鳴り物をしていたのはわかっている。

だが、小沙希、花世、豆花、千鶴、鈴音の5人の舞、

一体どうしてしまったのか、小沙希を別にして花世、豆花、千鶴、鈴音の舞の実力は判っていた。

でもその4人までが舞いの神に取り付かれたのか、手のとどかぬ高みで舞っていたのだ。

これは・・・聞いていた小沙希の実力・・・

たった一人の舞妓が素人同然の舞妓4人の舞を名人の域に引き上げ

たというのか。

その証拠に舞い終わった舞妓4人が胸を押えながら座り込んで、まるで小沙希を崇めたてるように見ているのだ。信じられぬ思い、
・・・で千代松は声をあげた。

「小沙希ちゃん、ごめんやけど、あなたの・・・あなた1人の舞を見ようおす。

出きれば鳴り物もない、素の舞を・・・これは、舞の修行をするうちの我儘かも

しれまへん。でもどうしてもあなたの舞が見てみたい。

欲・・・そううちの舞に対する欲です」

「いいえ、千代松だけと違います。うちも見てみたい。

お侍5人相手にあんな強かった小沙希ちゃんですが、

あの勝負のとき小沙希ちゃんはまるで舞いを舞っているようでした。

舞を見てみたい。一度は舞を目指したうちの欲です」

と今度は女将。

「小沙希ちゃん！うちもそうえ。昨日、井上のお師匠のところまで小沙希ちゃんの舞見せてもらいました。

でも、もつと見ていたい。これもうちの欲です。

きつとお師匠様や祥子様、高弟の皆さんも同じです。

一日中、あなたの舞を見ていたい。

この目に焼き付けておきたいんです。・・・なあ、みんな」

と幾松に続いて花世が

「うち達、小沙希さん姉さんと舞ってみてよく判ったんです。

こちらは素人で小沙希さん姉さんは本当の名人や・・・て。

だって、うち等4人の舞をたった一人であんなとこに引き上げるなんてただごとやおへん。

小沙希さん姉さんはきつと舞いの神様なんです」

「ちよつと、ちよつと。……わてにも言わせておくれ。」

芸妓同士の舞は甲乙つけがい勝負でした。悪いが真田屋の舞妓達の舞は論外、

でも菊野屋の舞妓のはもう別物だす。わては舞など習ったこともないし

細々したことはわからん。でもわてには自慢することがある。

見るちゆうつことにかけては専門家なんだす。ここにいる江戸からみえられた方々も同じだす」

「そうじゃ」

「言われるとおりじゃ」

「小沙希、言われましたなあ、あんたは、わてから見てただものやおへん。」

そんなあんたに今日逢えたのはわての幸運だす。ぜひわて等にもあんたの舞をみせておくれやす」

「わかりました。京舞ではないんですけど、それでもよろしおすか」
皆が頷くのを見て

「では。少しだけときを……」
といつて舞台裏に姿を消した。

舞台上にいたもの全て舞台から降り、後ろの廊下は仲居や他の客達で鈴なりに
なっていた。

「女将！後ろの人達、中に入ってもらいなはれ」

「いいんですか？」

「構わん」

ということでのこの部屋ぎっしりと仲居や客で埋まってしまった。

こんな時の客は『ワイワイ、がやがや』と煩いものだが
『シーン』と静まり返っている。今か今かと息を吞んで待っている
のだ。

.....

「小沙希ちゃん、これが伝説の舞の舞台どすな」

「お婆ちゃん……伝説だなんて」

「いいえ、いままでのこと聞くと見るとでは大違いどす。

こんなわくわくする時間……もう、たまりまへん」

.....

まさか？……舞台上に座り込んだ小汚い格好の……今では見
かけぬ琵琶法師。

その琵琶が鳴らされ、よい声の謡がはじまった。

その内容はある日公家の御曹司が桜の木の下でうたた寝をしたこと
が

きっかけとなる。その美男ぶりに惚れた桜の精が乙女となって姿を
あらわし

その御曹司に恋を告白するが、女達に追い掛け回され食傷気味の御
曹司。

適度な受け答えであしらわれたことから、桜の精の恋のアタックが
始まるのだ。

最後は悲恋に終わるが、これは絢爛豪華な平安絵巻であった。

いつの間にか琵琶法師の姿が凜々しい公達の姿に変わり男舞が始ま
っていた。

どこでどうなっているのか、舞台上では1人で舞いながらも琵琶は鳴り続け、謡も終わらない。いつのまにかその背景には……公達姿の舞の中に女達があらそって恋に血道あげる姿や嬌声が聞こえるのだ。

やがて舞台上には1本の満開の桜の木が……その太い幹の後ろに回った公達が次に姿を現したときは美しい桜の精に変わっている。

勿論、舞うのは乙女の女舞、恋しい公達を想って切々と舞い上げるその姿にはおもわず涙が……

風が誘う桜の花びらの落花舞……舞台上に……そして見物の中に……

「桜の花びら?……」

千代松が手の平においた一片の桜の花びら……それも淡雪のよう

うにスーッと消えていく。夢か幻か……

桜の精の切々たる想いが舞となって公達にとどけられるが……

やがてそれも人とは相容れぬ……つくも世のしきたりなりき……

桜の精の想いを受け入れた御曹司も激しい恋に病み疲れ、死の床についてしまう。

……そして、桜の花が最後となる夜。

渾身の力で桜の木の元へ……愛しい人の亡骸をその身体で覆う桜の精。

残ったのは枯れた桜の木と御曹司の亡骸に覆い尽くす一面の桜の花
びら・・・

こうして舞は終わった。

舞台にいるのは座って頭を下げる舞妓姿の小沙希ひとり・・・。

誰かが『ホウ』とため息をついたのが合図となって、客全員が立ち
上がった

万来の拍手と歓声をあげている。

道行く人が驚いたように足をとめて店を覗き込む姿がひっきりなし
だ。

・・・
・・・
・・・

「ほう」

と息をはく一同・・・。今ならわかる先ほどの千代松を模した舞
と今の舞の違い。

心が入れない舞と見事に心が入る舞の違い・・・雲泥の差だ。

一生懸命に見ていたのは紫苑だ。話に聞いていた小沙希の琵琶と謡
い、
なるほど井上先生が言われる通り平安時代の匂いがたっぷり入って
いた。

平安時代の修行のあとが伺えるのだ。かなわない・・・そう思う。
けれどももっと修行して追いつきたいとも思うのだ。

でも、何なの・・・あの舞は。平安時代の自分が創ったという舞。
なるほど小沙希に舞わせるということが納得できるのだ。

もし、自分に前世の記憶があったら今の舞、

どんな想いで見ていただろうか。そんなことを思ってしまう。

.....

「なあ、幾松。うちこんな舞妓ちゃんにあつたの初めてや」

「あたりまえどす。小沙希ちゃんみたいな舞妓ちゃん、古今東西人もおへん」

「これであんたとこの菊野屋はん、第安泰やなあ」

「ううん・・・そんなことおへん」

「えっ？そんなことおへんって？」

千代松をじつと見つめる幾松。

「千代松！・・・うち置屋は違うけど、あんたのこと親友や思つてる」

「何をいまさら・・・」

「だから、あんたに手伝つてほしいことあるんや言つとるんよ」「手伝つてほしい？」

「へえ・・・実は今宵小沙希ちゃんにどうしても

添い遂げさせてあげたいお人がいるんどす」

「添い遂げさせてあげる？」

「へえ・・・さもないと・・・」

「さもないと？」

「きつと、死んでしまわれはる」

「死ぬ？・・・そんな男・・・」

「いいえ、男はんやあらしまへん」

「えっ？ではおなごはんどすか？・・・」

と千代松何ともいえない顔になる。こうして花街に生きてきて男と女の色恋ざたなら日常茶飯事だが、

これが女と女になると何だか気が進まないし、汚らしい。
そんな表情が見えたのか

「千代松！あんた何か勘違いしてまへんか？」

「勘違い？」

「へえ、小沙希ちゃん。大の男嫌いなんです」

「だからって……」

「アホ！……そこが勘違いなんです。小沙希ちゃんが男はんに抱かれてみなはれ、

それこそ衆道どす。念者になるんどす。……ひえ〜いやや・
言うてるうちの口がくさりそう」

とさも嫌な顔をするが、千代松には何のことかわからない。

なぜ小沙希が男に抱かれたら衆道になるのか？

男と女の道……それが自然だと思っただが……

「小沙希ちゃんの身体って女のうちがみてもホレボレするほど綺麗
なんです。

お乳も形いいし、柳腰でおいどは小さいけど抜けるような白い肌
が

柔らこうてうちの手に吸い付いてくるんどす。……けんど……」

「けんど？……」

千代松はもう興味しんしんだ。

「小沙希ちゃん、一箇所だけ男はんなんどす」

ついに言ってしまったその言葉の効果は絶大だった。

呆然と立ちすくむ千代松……幾松の言った言葉はまだ良く飲み込
めていない。

「一箇所だけって……一箇所だけ？……え〜！」

急に顔が真赤になってそのほてりで思わず頬を両手でおさえた。

「一箇所だけって……あの？……」
と上目使いに聞く千代松。

「そう……ここまで言ったさかい、小沙希ちゃんとお嬢はんの逢瀬

手伝ってくれはるやろ？」

「お嬢はん？」

「そう、結城道場の鬼娘……」

「えっ？あの、男なんか鼻もひっかけない鬼娘が？」

「でも、あのお嬢はんいきなり恋を知ってしまったさかい
身体と心がいうこと気かないんどす。ぶるぶる震えてちつとも治ら
なくて

でもうちが小沙希ちゃんのことなんとかしますさかい少しの間だけ
辛抱しておくれやす……いうてやっと落ちついたんどす」

「でも幾松！どこでどうあの二人を逢わせるか決めとるんどすか？」

「いいや……それが……」

と声が小さくなってしまふ幾松。

「なんや、まだなんも決まつとらへんのどすか」

「へえ、相手があのお嬢と小沙希ちゃんどっしやる、へたな真似で
きへんのどす。

いくら小沙希ちゃんに情で訴えるいうたかて、やはりものには順序
があります。

いきなり二人をお部屋であわせたかて、そんな恋と違う。

それにこの一夜が……この一夜だけが二人が肌を合わせられる最

後の機会やさかい

・・・一生心が残る一夜にしてあげたいんどす。

そして、この夜の事を思い出にこれからをしつかり生きていってほしいんどす」

「なんや・・・それ！今夜だけが最後の夜やなんて。

逢える日なんてこれからもいくらでもあるやないんどすか」

「それが・・・千代松！うちがこれから言う事、あんたが信じる信じないんは

勝手やさかい教えるんは教えたるけど・・・」

と小沙希がこの時代の人間ではなく先の時代からやってきた人間で先の時代に復活した怨霊と対決するため土佐の坂本竜馬が持つという横笛を探しにきたのだ。

この時代にいられるのは3日間だけ・・・その3日目か明日なのだ。だから逢瀬は今夜一夜・・・

「そんなあ・・・」

とそのとき

「その話！うち、のつたえ」

という声が二人のいる布団部屋の外からした。

すーっと襖が開いて入ってきたのはこの料理屋の女将お園だった。

「うち、悪いけど外で話を全てきかせてもらいました」

「でも、女将さん。どうして？」

「へえ、うち小沙希ちゃんあんな舞台見たん生まれてはじめてだつしやる。

もう興奮して身体が熱うて熱うて・・・そやさかい表の風にあたるうと

廊下に出たとき、あんたらがここに入るんみたさかい、なんやる思
たんどす。

悪いけんどもみんな聞かせて貰いました。失礼や思てたけんどもう途
中で聞くの止められへんかった。

あんたらの話、小沙希ちゃんの舞を見たんと同じ位の衝撃やった。
なあ、お願いどす。うちにも手伝わせて……。

うち、小沙希ちゃんに助けてもろたし、あんな凄い舞台もみせても
らいました。

聞けば小沙希ちゃんて男でもあり女でもあるんやさかい。

もう常人やおへん。そんな小沙希ちゃんに恋をした結城先生のお嬢
はんは

うちが昔からよう知つとるお方やさかい、うち役に立つ思います」

「なあ、幾松！そうしよう。女将さんには日頃からお世話になつと
るし

身内同然どす。だから相談に乗って貰ったほうが好都合どす」

「そつやなあ、女将さんに中に入れてもらったほうが小沙希ちゃん
にも言い訳たつし

……そうしようか、なあ千代松」

「まかせておきなはれ。……それでな、幾松ちゃん。

お嬢はんの様子、いかがどしたんや？」

「へえ、お嬢はん、女として……恋も何も知りはらへん。

女の幸せについてなんか考えもしいへんかったみたい」

「和葉さん、小さい時から男みたいに育ちはつたんよ」

「でも、今日小沙希ちゃんに逢いはつた。強い小沙希ちゃんを見い
はつた。

誰よりも強い思つてはつた父親よりも小沙希ちゃんのほうが強かつた。

女は強い相手に惹かれるもの。だからお嬢さん、小沙希ちゃんに惹かれはつた。

それも並大抵の惹かれようとは違つ。身体全体が瘡のように震えあがつた、

全身全霊をかけての恋なんや。だから破れれば死ぬ覚悟してはる」

「そんなに？」

「へえ、道場の井戸端で座り込みはつて立たれへんかつた。

うち、和葉さんの腕持つて助けおこしたんやけど、ぶるぶる震えて

倒れそうにならはつて、それはもう大変どした。

お布団にお寝かせしたんやけど、お顔の色が真っ青で掛け布団着しても

うちの手握つたまま震えてはる。お話もできないんどす。

うち、小沙希ちゃんのこと知つとるさかい軽はずみなこと話せまへん。

けど、同じ女どすからこれはもう一肌脱がずにはおられんようになつた。

だから別れるとき、絶対今夜お二人にしてあげるさかい我慢していいておくれやす。

絶対に軽はずみな事せんといて、いうてお座敷に出てきたんどす」

「女将さん、これは早う手をつたな、何をするかわからへんえ」

「そつやなあ、和葉さんおぼこなだけに早まつた事するかもしれん、

・・・いつそつこの事、うち迎えに行つてきます。

・・・あつ、逢瀬のお部屋はうちが用意するさかい、

あんたらは小沙希ちゃんのこと頼みますえ」

.....

「この画も、うち知りまへん」

「どうだ、あきあ。和葉の気持ち。そして幾松、千代松、お園の行動」

「へえ、うちと和姉。皆の大きな愛情に包まれて幸せを得たことがよう判ります。」

心の奥底の熱いものはもう押さえようがありません」

目の前の律子が泣いている。希美子や希佐までがうるうるしているのだ。

.....

幾松と千代松は小沙希にどう話を持っていこうかと相談したが、結局はへたな小細工するよりも真正面からぶつかった方が良いということになった。

だから、仲居に頼んで小沙希をこの部屋まで連れてきてもらい、こうして二人の芸妓が切々と和葉の心のうちを訴え続けた。

そしていつしか自分が和葉の肉親であるかのように涙があふれ、言葉も途切れてしまう。

じつとうつむいて二人の話を聞いていた小沙希、ふと上げた瞳に光るものが・・・

そして少し微笑みを浮かべて

「幾松さん姉さん・・・千代松さん姉さん・・・ほんとに・・・ほんとに・・・

ありがとう。こちら二人のためにこれだけ一生懸命ならはって・・・

「・

「ちょっと、小沙希ちゃん！・・・今、こちら二人のために・・・いますたなあ」

「へえ、本当はうちなんかのこと忘れてしまったほうがいいんじゃない、

和葉さんのような一途に思いつめる人は駄目です。

きつとうちのこと片時も忘れること出来まへんやろ。

そやからうちも、和葉さんのこと一生背負っていいこう思ってます」

小沙希の心意気を感じ取った二人、顔を見合わせ頷きあうと

「小沙希ちゃん！まかしとき！・・・こちら二人・・・

いいや、こうなったらこの祇園に生きる女達が和葉さんのこと守りますえ」

「そうそう、それに小沙希ちゃん。向こうに帰ってもうちのこと絶対に忘れてはあかんえ」

小沙希はそんなこと絶対はない！と顔を強く振ったが、

何も言葉が出てこない。お姉さん芸者が小沙希を見つめながら言う、

その言葉一つ一つに温かい真心がこもっており、

言葉に出して感謝を言う必要もなかった。

小沙希はただ・・・三つ指ついて頭を下げるだけで心が通いあった。

いつの時代も女達の想いは同じなのだ。

求め合い、助け合い、そして哀しいほどまでの純な心が伝わってくる。

目を閉じれば次々と浮かんでくる大勢の女達の顔・・・。

負けられない！……絶対に勝つ！……今宵、夫婦になる和葉の為に
そして帰ったら待つ多くの姉達のためにも……何が何でも勝たねばならない。
そして、そんな小沙希の思いが通じたのか嬉しい知らせがもたらされた。

「失礼さんどす」

と言って入ってきた女将のお園、心配そうな顔で二人の芸妓の顔を見る。

でも目を真赤にしてはいるがその明るいに表情にほっと肩から力がぬける。

「女将さん！」

と小沙希はお園の顔をみつめ、

「この通りどす」と頭を下げる。

「嫌や、小沙希ちゃん。そんなことせんといて！……うちら長い間花街で生きてきとるんどす。おなごの心ようわかります。」

だから、何も言わへん。そのかわり今夜は和葉はんをしっかりと抱いてあげて！」

小沙希はただ頷くだけでよかった。

「そうそう、幾松ちゃん。あんたにお座敷がかかってますえ」

「うちに？」

「へえ！」

「うち、なんや今日、お座敷にでとうない気分どす」

「いかんえ、芸妓がお座敷断るようなこと言ったら」
「へえ、じゃあさつさと行ってさつさと済ませて来るさかい」
「といって部屋を出て行く幾松。」

「お座敷といえ、うちらのお座敷は？」
「大變！」

と立ち上がるうとする千代松に
「おほほほ・・・心配いらしまへん。嵯峨美屋はんはもう大満足して帰られました。」

これは小沙希ちゃんのおかげどす」

「うち・・・そんな・・・」

「いいえ、一生に一度みられるかどうかの舞台やった、
そう一緒にこられてた江戸のお人達も言つとられたんどす。」

なんでも大奥に出入りされとるお方達で、將軍様もこんな舞台見られへんやろ、
いうて豪快に笑つとられました」

「じゃあ、あの子達は？」

「見物されとつたお客はん仰山いてはりましたやろ。」

同じ舞台を見た芸妓や舞妓達や・・・言わはつてみんなひっぱりだこどす」

「へえ」

「それに舞台見られへんかったお客はん達も噂を聞きつけて
芸妓や舞妓達をお座敷に呼んでその話を聞こうとするさかい、もう
もうあの子達悲鳴あげとります。」

でもあの子達にもええ勉強どす。そやさかいうち、見ても見ぬふり・・・」

「といってケラケラ笑う。」

そこにバタバタと走ってくる足音、止まったらとおもったら

『ガラツ』と扉が勢い良く開けられた。

「何え！一流の芸妓のあんたがそんな真似をして・・・どうしたんどすか？幾松！」

と料亭の女将として本当に怒っている。

「あつ」

といつて座り込んで頭を下げる。

「すんまへん・・・うち、我を忘れてしまつて・・・」

「どうしたんどすか？幾松とあるうものが・・・」

千代松があきれたように聞く。いつも冷静でこんな慌てるような芸妓ではない。

「すんまへんどした。うち、お座敷に行つたら思わぬ人がいらつして・・・」

「桂はん・・・長州の桂小五郎はんどすやる」

「えつ？女将さんはどうして？」

「そんなこと百も承知であんたをお座敷にやつたんどす。

仲居から聞いて確かめませずあんたをお座敷なんかやるもんどすか。あんたは祇園の宝の1人どす」

幾松は行き届いた料亭の女将に、ただただ頭を下げるだけ・・・。

「で、どうしたんどすか？そんな幾松さん姉さんが・・・」

という小沙希の顔をじつと見つめて

「小沙希ちゃん・・・あんたにや・・・」

「えつ？・・・うち・・・どすか？・・・」

何のことやさつぱり判らない。

「幾松ちゃん！はつきりいいなはれ」

とお園が問い詰める。

幾松は座り直すと、ゆっくりと呼吸を一つしてから、

「うち、どんなお座敷でも今日はかんべん・・・思いながら、お部屋の外からご挨拶したんどす・・・そしたら」と言ってから急にポツと顔が赤くなる。

「あゝあ、あほらし・・・暑い暑い・・・」
と袖で自分をおおぎながら

「それで・・・」
と話を促す。

「うち、桂はんがこの京に来てるなんて知らんかったから・・・」
「あんたはお部屋に飛び込んで桂はんに抱きついたんどすな。それから・・・」
「とからかい半分、羨ましさ半分の千代松きつい合いの手をいれながらも」

千代松の言葉、まんざら当たっていなくもないらしい。幾松は顔を真赤にしている。

「これ！千代松ちゃん。そんなにからかうもんじゃない・・・」
と叱るお園にぺろつと舌を出す千代松。

「あのう・・・桂はん、お1人じゃあなかつたんどす。
窓の外をみながら手酌で御酒をめしあがってるお武家様がもうお1人・・・」

「じゃあ幾松は見も知らずのお武家様の前で桂はんと抱き合いはったんどすか」
とあきれたように言う千代松。

「へえ、すいまへん・・・」
「何もうちらにあやまってもらっても」
とからかい半分なのか・・・若い人はうらやましい・・・と面白げ

にいうお園。

「小沙希ちゃん！そのお武家様。どなたや思います？」

「えっ？……もしかしたら……？」

「そうなんです。小沙希ちゃんが探し求めていた土佐の坂本竜馬は
んなんです」

小沙希はいきなり立ち上がり飛び出そうとするのを

「待ちなはれ！」

と止めたお園。

「芸妓や舞妓が料亭で勝手にお座敷出ること、許しまへん」

と真顔になってきつく言う。

だが次の瞬間につこり笑って

「でも、その女将が許可すれば別です」

「わあ〜」

とってお園に抱きつきチュと頬に口付けする小沙希。

「ちよつと待って……小沙希ちゃん、あんた誰にでもそんなこと
するんですか？」

「これ、うちの時代では親しいお人にするご挨拶です。それにうち
……女好きですよって」

としれつと言う。

「マア……」

とあきれお園。

「ほな、幾松さん姉さん。いきまひよか
と立ち上がった。

「待ちなはれ！」

と又待ったをかけたお園に不審げに振り返る小沙希達。

「千代松ちゃん、あんたもいきなはれ。

今日のこの二人、まかせておくと何をしでかすかわかりまへん」

「でも……」

と躊躇する千代松。

「ああ、お花代ですか。そんな心配あらしまへん。

あんたの分はうちが払います」

千代松にはお園が言いたいのか、それがまだわからない。

「そのかわり、お座敷であつたこと聞いた事を逐一うちに報告すること。」

それが条件どす。あんたと同じでうちも小沙希ちゃんの後見人どす。

だから後見人として大事な小沙希ちゃんのこと、放っておけまへん。

それにうちだけ知らぬ存ぜぬでは我慢できまへん」

その言葉がお園の本音なのだ。小沙希のこと全て知っておきたい。

自分だけ仲間はずれにされるようで我慢が出来なかつたのだ。

千代松はいい、幾松の親友だから……芸妓仲間だからあとで根掘り葉掘り

聞き出すことができる。

だが、お園は違つのだ。昔、芸妓だつたとはいえ今は立場がちがう。

何より年が違う。心やすげに聞きにはいけない。

だから、千代松を使った。こうしておけばお園も仲間なのだ。

「さあさ、そうと決まったら、あんた達なにをぐずぐずしているんどす。

早うお座敷に行つてらっしゃい」

といいながらも、三度小沙希を呼び止める。

「小沙希ちゃん。和葉はんのことうちが守つとくから、しっかり……」
「……」
「しっかり、お役目を務めてきなさいと最後の言葉は心で囁いた。でも小沙希にはしっかりと伝わったようだ。」

「へえ、がんばります。……お母ちゃん！和葉さんのこと……」
「……」
頼みます……これも心で囁いたのだ。

3人を見送つてから、ふと気づく。

確か……あの子、お母ちゃんと言った。言い違えたのか？……
いいえ、そうではない。こちらを見ながらお母ちゃんと言ったのはよく覚えている。

では？……いくら店で威勢良く働いていても、
後家で子供もない寂しい私を誰からか聞いて思いやってくれたのか？

……いや、それとも違う。ただ……あの子は……あの
子は……
うちのことを本当の母親だと思ってくれているのに違いない。

だから、和葉はんのこと一言もうちに聞かなかった。
そう考えると飛び上がるほど嬉しい。

部屋を出てからも小沙希のことを考えていたので、仲居の1人に声をかけられたとき

一瞬びくつとしたが、落ち着いて笑顔をむける。

「あらっ……どうされたんですか？」

「えっ？」

「あっ……いえ、女将さんのそんな明るい笑顔、久しぶりに見た

もんどすから」

「えっ？」

「あのう……」

といいにくそうにしていたが、お園が覗き込むようにみていたので
思い切って

「3年前のあの頃、亡くなった旦那さんと仲良くなさっていたころ
の

女将さんの”笑顔”どす」

「あら、本当？」

と自分に昔々の笑顔が戻った事を言われ、まるで乙女のように頬を
押えながら

歩み去る女将、あきれたように見送っていた仲居だが

なんだか自分も嬉しくなって、さっそく朋輩達に知らせようと小走
りに走り去る。

.....

「沙希ちゃんに『お母ちゃん』といわれていたのね」

「へえ、うちの平安時代の母親だとすぐにわかったんどす。

混乱させてはいけない思っとなんどすが、深く温かい愛情に包ま
れてつい口に出してしもたんどす。

でも、お母ちゃんすごく幸せそう……」

「いいじゃないの、お母さん。実際沙希は私たちの妹だし……」

「そうよ、心配ばかりかける妹だけどね」

そんな言葉も沙希には温かく聞こえてくるのだ。

「泉姉……京姉……」

.....

「いいですか、小沙希ちゃん。落ち着いてお話するんどすえ」

「そうどす、いっても相手はお武家様、失礼のないように.....」

幾松と千代松にそういわれて

「うふふ」

とつい笑ってしまふ。

「なにが可笑しいんどすか？」

「お姉ちゃん達、まるでうちがねんねみたいにいわはるから」

「そうどす、小沙希ちゃんあんたは強うてかしこいけど、

ある一面ではなぐんも知らんねんねと同じどす。

そやからうちら心配のしどうしで、もうハラハラドキドキ.....」

そう言われると何もいえなくなる小沙希。

「さあ、このお部屋どす」

といつて廊下に座る3人。

「お待ちどうさんどす」

と声をかけてから襖をあける幾松、中の光景を見てつい

「あらっ！」

と声をあげてしまふ。

その幾松の声で思わず顔をあげ、その目に入ってきたのは.....

男4人が車座に座って酒を酌み交わしている図であった。

その中の1人がニヤツと笑って

「よお」

と声をかけてくる。

「まあ、源太郎さま！」

「おっと、そんなに睨むなよ。どこにでも顔をだす仕方のない奴って

顔に書いてあるぜ。・・・まあ、入んなよ。そこが開けっ放しじゃ寒くて仕方がねえや」

といわれ立ち上がって部屋に入って襖を閉める。

でも源太郎に言われっぱなしで業腹だったので

「まあ、源太郎様はどこにでも現れるし、人の顔に書いてある字を読まれるし

凄い人どすなあ。どこの偉いお人どすか？」

と言ってしまい、

「これ、小沙希！」

と幾松に叱られ、千代松には睨まれてしまった。

「あははは、参ったなあ小沙希には。坂本さん、小沙希ってこついう奴ですよ」

「まあ、人のこと奴だなんて・・・」

と売り言葉に買い言葉で口に出してしまつて、

「これ！小沙希！やめなはれ」

と今度は千代松に叱られ、首をすくめる小沙希。

その様子が可笑しいと男4人が声をあげて大笑いだ。仕方なくその笑いが収まるのを待ってから

「今宵、お座敷に呼んでいただきまして、ありがとござんどす。

うちら3人お座敷をあい勤めますのでよろしゅうお頼も申します」といつてから

「まずはみなさんにお酌どす」

といつてから順番にお酌をしまわす。

それが終わると自然と組み合わせが決まった。

桂小五郎と幾松は勿論、

源太郎と相良新太郎の間に座った千代松は仕方がないところ、

なにしろ小沙希が坂本竜馬を見つめる目が真剣なのだ。

医者相良新太郎以外の男達各々が剣客といつても差し支えは無い。

だから、全く隙がない小沙希に注視が集まるのは仕方がないところだ。

小沙希のことを全て知っている源太郎は真剣に二人を見詰めていた。

いや、本当のところ面白がっていたというのが本音なのだ。

小沙希は2度3度とお酌をする。

竜馬は酒を飲みながらも少しも酒を飲んでいる気がしなかった。

まるで水を飲んでるようだ。だから少しの酔いもこない。

なぜならば、この小沙希という舞妓に神経が集中しているためだ。

身体のどこにあつたのか坂本竜馬の剣客としての魂が呼び覚まされたのだ。

何しろ昔、横にいる桂小五郎と試合をしたとき、1本目に片手上段で勝つた後、

よし、負けてやろうと思つたと言つたのだ。

事実、続けて5本全く違う形で負けつづけたという。

それを見ていた師の千葉定吉が

「竜さんのやつ……」

とフツと笑つたとき何もいわなかつたという。

坂本竜馬……維新の志士として有名ではあるが、

竜馬が生きていた時代がもつと前ならば剣客としてもつと高く名を残しただろう。

その竜馬、小沙希のあまりの隙のなさに自身が仕掛けた。鋭い気を発したのだ。

座ったまま後方に飛んだ小沙希、そのままの姿で頭を下げ

「坂本様」

と呼んだ。

「なんだ」

と答えた瞬間、竜馬は負けたと思った。何故なら気が充満している時は

対等のようなだったが（対等というのはわしの都合のいい解釈かもしれない）。

小沙希という女、わしよりもつと実力が上なのだから、言葉を発した瞬間、口から気が抜けた。つまり対等ではなくなったのだ。

横でみていた源太郎にとって兄弟子同様の坂本竜馬と小沙希の戦い、心が躍るおもいで見ていた。気配で桂小五郎も同じ思いで見ていたのだろう。

酌をする小沙希、杯に酒をうけとる坂本竜馬、目には穏やかだが、源太郎と桂小五郎には真剣を構える両者が見えていた。

真剣の刃と刃が火花を散らせる。

「えい！」

と気合を発した小沙希、……だが驚いたことに気を発したのではなかった。

無音の術だ。無音の術とは口から気を発せずに喉の奥で気合を発す

るのだ。

だから気は身体から抜けてはいない。

だが

「おう」

と口から気合を発した坂本竜馬、この時点で竜馬の負けは決した。二人の幻は消えた。

「見事な！」

と言ったのは桂小五郎だ。横にはびつたりと幾松が座っている。

「小沙希とやら、今のは無音の術だな？」

「はい」

「徳川の初期のことならいざしらず、今の世に無音の術を心得ているお主は一体何者だ！」

「桂小五郎様、今のお言葉に対するお答えはこれから坂本竜馬様にお願いする

私の言葉からおくみくださいませ」

と言ってから坂本竜馬に向き直ると深々と頭を下げる。

「坂本竜馬様をお願いいたします」

「何なのだ」

「竜馬様の懐にお持ちの『翔龍丸』をぜひともお譲りくださいませ」

「何！この笛を！？」

と懐から取り出す1本の横笛。

「はい！・・・その『翔龍丸』をぜひ私に」

「この笛はわが坂本家の宝、末代のためにも・・・」
といいかけて

「いえ！」

と言葉を被せる小沙希。

「これから、私の言う事、信じるもよし、信じないもよし。でも話だけは聞いてくださいませ」

と言つてから、居ずまいを正し

「今より3年のち、京都近江屋にて竜馬様は暗殺者に襲われ、その『翔龍丸』は暗殺者の手によってスツパリと2分されております」

「何故？何故？そんな先の世のことまで知っている」

と桂小五郎がいかけたが

「待て！」

と桂小五郎を静止

「わしはどうなった？」

「はい、あなた様は『翔龍丸』を手にして暗殺者に立ち向かわれたと申せば……」

じつと小沙希を見つめる竜馬……ポツリという。

「そうか……死んだか……」

人事のように言う竜馬。

「はい、近江屋で襲われたのは竜馬様と中岡慎太郎様のお二人」

「何？慎君もか？」

「はい、竜馬様は即死、中岡慎太郎様は3日後に死去されました」

「暗殺者は誰かな？」

「未だに判っておりませぬ。新撰組か見廻組か、はたまた徳川幕府に大政奉還という

案をつきつけたあなた様に対する薩摩と長州の過激派の手によるものか

これは竜馬様と中岡慎太郎様以外知ることはできません」

今は誰も何も言わない。言えないのだ。

命運というものを突きつけられた坂本竜馬の心を思んばかって……。

「小沙希！……お主この世のものではないな」

「はい、私は今から140年後の平成という年号の時代から竜馬様がお持ちの

その『翔龍丸』を求めてやってまいりました」

「なぜだ……何故この笛なのだ」

「平成の世に恐ろしい者が復活したためでございます」

「恐ろしい者？」

「はい、平安期に人心を惑わし、人を呪い殺し、はたまた自然災害を引き起こした

怨霊・藤原元方です。その後、我師安倍晴明様に封印されたのですが、

時代が進めば人は不可思議なことは信じませぬ、怨霊が復活したのも人の手によってでした」

「怨霊か……それはわしらでも手が出ぬ」

「待て！小沙希。お主、我師安倍晴明様といったな。

お前、平安時代にも行ったのか」

「はい、平成に生まれた私がどうして平安時代に行けたのか……それは平安時代より脈々と伝わる女だけの一族……早瀬一族の不思議の力によって時代を遡っていったのです。

そこで10年、安倍晴明様の元で厳しい修行をしてきました。でも、戻ってみれば時の不思議で一刻ばかり。

それに私の身体は術の失敗で25歳という年から16歳に若返っていました」

そんなこと聞いていなかったので芸妓達、目を白黒している。

「では、師の安倍清明様にお逢いください」と懐紙を人型に切り

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

と九字を切る、そして唱える真言

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

ふっ吹くとたちまち現われた公達。

その場に座る安倍清明。

「それは何じゃ、あきあよ」

「はい、ささでございます」

「なに？酒か・・・一杯もらおうか」

清明はお猪口ではなく、小さな小皿を取り上げた。

それに並々とつぐ小沙希。

喉をならして飲む清明。

「はあ・・・美味じゃのう」

「はい、平安の御世より酒の味もいろんな工夫がされ、味も変わってきました」

「そうそう、あきあに飲ませてもらったあの葡萄の・・・なんといいたかのう」

「ワインでございます」

「そうそう・・・あれもうまかった」

・・・と、自分に注がれる視線に気づく清明。

小沙希は清明にみんなを紹介する。紹介が終わると竜馬から

「小沙希殿！お主、あきあと言われるのか？」

「はい、陰陽師・安倍あきあ、それが清明様よりちようだいしまし

た私の名でございます」

「だからなのか？」

「はい？」

「だから、お主が怨霊と戦うのか」

「はい、平成の世も陰陽を操れるのは私1人。けれども相手は悪名高い怨霊……」

と小沙希は幼い女の子を人質にとってその気を喰い、なおかつ子の両親をも

自分の思い通りに操ろうとしている……とその手段を話すと

「うぬ……」

と憤怒の顔になる。

「そんなの酷い！」

初めて聞く千代松だが昨夜聞いた幾松も源太郎もその卑劣さに吐き気を催すほどだ。

「あきあ殿！」

と陰陽師の名で呼ばれた小沙希、竜馬の方を向くと目の前に横笛『

翔龍丸』が

差し出された。

「えっ？」

と思うほど簡単に手に入る『翔龍丸』。小沙希が竜馬の顔をじつと見ると

「3年先に壊れてしまっただろう、この『翔龍丸』は……だからもつたいないから」

もつたいないから……と渡されて啞然としたが、つい

「クスッ」

と笑ってしまう。

「だが、この『翔龍丸』は誰が吹いても鳴らないんだよ」と竜馬は一言付け足すが

「心配いりません」

小沙希は左手を前に出すとその手の平がボウッと光り、もう一對の横笛が現われた。

「これは『緋龍丸』といいます。

この『緋龍丸』を大江山のシテン殿から譲り受けたとき聞いた事があります。

『緋龍丸』にはもう一對『翔龍丸』という兄弟笛があり、今は行方知れずだが、2本揃うとどんな強大な怨霊とて封印する事ができる。

ただ、『金龍』『銀龍』の2匹の龍を身に宿す事になり、その気、2匹より弱ければ食い殺され、強ければ生涯の鎧と化す」

「いや！」

「やめて！」

と叫ぶ幾松と千代松。

「幾松さん姉さん、千代松さん姉さん。心配いりまへん。うちにはこれがあります」

と両手を前に出すと、その手の平より30cm上に浮かぶ赤いおおきな鱗、

「これは緋龍様という龍の鱗です。これさえあれば心配いりません」

と喋ってまずは『緋龍丸』から手にとった。

目を閉じ吹く小沙希の姿、絵師がみれば誰もが描きたいと思うだろう。

そして幾松以外、初めて聞く小沙希の吹く横笛の調べはもう呆然として聞く事以外得なかった。

それほど、この世のものが吹いているとは思えないのだ。

名人？・・・そんな言葉ではもう言い表せない。『緋龍丸』の調べは静かに終わる。

そして、次は『翔龍丸』を取り上げた。果たして鳴るのか・・・鳴らない。・・・小沙希の顔に苦悶の色が広がる。

そのうち小沙希の身体が光だした。

二つの小さな光の玉が小沙希の身体をつきつきりながらぐるぐると追いかけあいをしている。やがて小さな玉が龍の形を取りだした。

これが『金龍』と『銀龍』なのだろう。

(小沙希ちゃん！・・・がんばって！)

見ているもの全員、言葉を発する事・・・いや、身体を動かすことすら出来ない。

ただ、見守るだけだ。光る小沙希の額に汗が滲みでる。

二匹の龍が小沙希の中に突っ込む毎に苦悶する小沙希、どれ位の時がたったのだろう、構えた小沙希の口元からかすかな調べが流れ出した。

光輝く二匹の龍がその光を失い、金と銀との小さな龍という本来の色を取り戻すと

小沙希の身体の中に消えていった。

『翔龍丸』は女笛であった。『緋龍丸』より高い調べが流れる。

そして不思議が起こった。

窓の外の闇の中、たくさんの小さな光が天に上っていく。これは魂魄この世に留めた霊達が解脱して天に帰るのだ。これは『翔龍丸』の力によるものであった。

調べは消え、小沙希は『翔龍丸』を口から離した。

がつくりと肩を落として右手を畳につける。

小刻みに身体が震えているようだ。それはそうだろう、二匹の龍が身体に納まったのだから。

「すいませぬ、だらしない格好で」

「いや、凄いものを見せてもらったし、聞かせてもらった」

「もう二度とないだろうな」

男達が口々に言う中、幾松と千代松は涼しい風にあたらせるため、窓の縁に小沙希を座らせた。

「晴明様にお尋ね申す」

「なんじゃ、竜馬殿」

「平安期には鬼や怨霊がそこら中に出て人を襲ったりしていたと書物で呼んだことがあるが、それは本当のことでごさろうか」

「そこら中とは大げさだが、人は夜中は出歩かなんだ。鬼や怨霊は本当のことじゃ」

「だが今の世、その姿見いとらんが」

「それは平安期の陰陽寮のおかげじゃと思っただけじゃ」

「陰陽寮？」

「そうじゃ、そこに勤めておった者達の命をかけた鬼や怨霊達との戦いにより

消し去ったり封印したおかげなのじゃ」

「封印？」

「そうじゃ、今の世もその封印の力が及んでいるため鬼などは出てこない。

じゃが世の中は変わる。あきあの生きている世がそうじゃ。

墓がこわされ、人が住む家となり、山がくずされこれまた人が住む。

封印された小さな祠など壊されれば何の役に立つ？……だから怨霊が復活してしまうのだ。もう古の人々から伝えられてきた

話も残っておらん、今は自動車とかいう人を乗せて走る車が通る道のため

山や川という大自然が壊されていく。何十階と高い屋敷が建てられるのは

広い屋敷跡じゃ。わしらが封じた幽鬼や邪鬼などはもうすでに人の間に入り込んでおる。悪い事をした人間には必ずといっていいほど

鬼の姿が重なって見える。そんな恐ろしい世になっておる。

わしのいた平安期と同じじゃ。じゃが新しい時代の人間が鬼や怨霊の姿が見えず、信じなくなっているだけ始末が悪い」

「わしらが目指す新しい世がそんなふうに変わっていくのか」

「竜馬様達、志士の皆様が志を同じに新しい世を作り上げました。

素晴らしいことです。確かに徳川は300年も続けば屋台骨が腐って揺らぎます。

維新以降、明治、大正、昭和の初期までは良かった。

人々の間に侍が持つ気骨が残っていました。

でも太平洋戦争という日本、ドイツ、イタリアの3国連合軍に対して

アメリカ、フランス、ロシアなどの連合軍は強かった。

日本はこてんぱに負かされました。

広島、長崎に原子爆弾という恐ろしい兵器が落とされ、

一瞬のうちに何十万人という命が失われました。

……が恐ろしいのはそれからです。

原子爆弾には副作用があつたのです。爆弾が落とされた直後、黒い雨が降った。

それに濡れた人々は髪が抜け落ち、皮膚はただれ、そして白血病という未だ治らない病に冒されました。放射能が原因です。

放射能は身体の中に入れば出て行かない。蓄積されてしまうのです。そして、この地球に対する放射能の影響はこの地表からは半永久的に残ります」

みんな黙り込んでいる。幾松と千代松は手を取り合つて聞いているが
身体の震えは止まらない。小沙希の慟哭といえる告白・・・いく末の日本の現状に怯えているのだ

「放射能は母から子、そして孫へそれが何世代も遺伝します。・・・これからは相楽先生」という小沙希にはつと顔をあげた医者の相良新太郎。

「相良先生に關係する医学の話です。昭和の初期に発見されたツベルクリンで
胸の病の結核が完治するようになりました。天然痘も一掃されました。

でも白血病は完治する人もいればそうでない人もいる。戦争が終わつて50年、その時代に私は生きています。でも未だに毎年、何百人、何千人と原子爆弾の影響の為、死んでいく人々がいます。

医学は進歩するが、治らない病もある。

それに、結核や天然痘、コレラという病は一掃されましたが次から次へ、新しい病気が襲ってきます。

性交渉でうつるHIV・・・エイズという病気は発病したら死を待

っだけです。

他いろんな病気で医者は頭を悩ませています。

癌や脳卒中、心筋梗塞は今だに人の死亡原因の大要素です。

これも封印が解かれて行つたのが原因なのでしょうが。

昭和40〜50年は昭和元禄といわれ景気の良さに日本中が沸き立ちました。

昭和64年昭和天皇が崩御され、年号も平成と変わります。

平成は景気を回復させようと必死でがんばっていましたがなかなかうまくはいっていません。

平成も10年を過ぎると人の心が荒んでいきました。

誘拐、殺人、暴行と若者の犯罪が増えつづけています。

心の荒みが邪鬼を呼び、そして邪鬼に力を得てただ平凡な暮らしをしている

人々の家庭を破壊している。私はそう見えています」と締めくくる。

「小沙希・・・いや、あきあ殿」

「はい、何でしょうか？竜馬様」

「貴公はその平成で何をしているのじゃ。怨霊や鬼の退治を職業にしているのか？」

「いえ、わたしは本名『早瀬沙希』では最先端の技術の開発をしています。

でも、もう一つの名前『日野あきあ』では女優を職業としています」

「女優？」

「はい！今でいえば・・・そう役者です」

「役者？・・・貴公がか」

腑に落ちん・・・そういつている顔の竜馬。

「おほほほ、竜馬殿、貴公が思っている役者とあきあがいう役者と全然違っておる。

「・・・あきあよ、見せてやらぬか」

「えっ?」

「あきあが芝居の中で本当の戦いをした平将門との録画というものを」

「でも・・・」

「あははは、良いではないか。最後にあの元方も映っているのであるが」

「もう、清明様は・・・」

とねめつけたが、清明は素知らぬ顔で千代松から酌をつけている。

「見たい！見たいぞ！あきあ殿」

「そうじゃ、わしも見たい」

男4人からの口々に声をあげられ、そして

「うちもや」

「うちも見たい！」

「では仕方ありません」

と九字をきろうとするが

「待つて！」

と声をあげる幾松。

「うち、女将さんと和葉さんと呼んでくる」

「えっ?、どうして?」

と聞く千代松。

「何や知らんけど、そうしたほうがええってうちの心の中が叫んでいるんどうす。

「じゃあ、行ってくるえ」

といって座敷を飛び出して行く。

「和葉殿がどうして？」

ここに居るのだと聞く源太郎に、話していいかどうか迷ったがどうせ判ること

「へえ、今宵一夜の夫婦の契りを小沙希ちゃんと和葉さんが結ぶんどす」

と千代松が話す。

「何？女と女が夫婦の契りを？」

と目を白黒さす男達。

「おほほほ・・・」

「何が可らしい！千代松！」

「篠原様。小沙希ちゃんは女でもあり、男でもある不思議な身体の持ち主。」

小沙希ちゃんはりっぱに和葉さんにややを産ませることができるとす

「なに？赤子を？」

もう驚きを通り越している。

.....

紫苑はもう呆然と小沙希の横笛を聞いていた。それは余りにも人間離れした才能だった。

単に天才と言う言葉では小沙希のことを語れなくなった。全くどういう人？と叫んでしまいたい。

「こんなお座敷・・・凄いい！」

「小沙希ちゃんも凄いいけど、坂本様も・・・」

「昔のお座敷ってこんな様子だったんどすか」

口々に声をあげる舞妓と芸妓達

「いやあ、どうみてもわしの完敗さ、なあ沖田！」

「そうですね、私も初めて見たんですが、あの無音の術は凄い！
誰にでも出来るように思いますが過去の剣豪達の中で

あの本当の形の無音の術をできたのは何人いたでしょうんね」

「そんなに凄いんですか、その無音の術・いわれるのは」

「そつだよ、おれの師匠の千葉周作先生もなんども修練をつんできたが

ある程度まではできたが、沙希殿のように完全には出来ておらぬ」

「あははは・沖田殿も篠原殿もあの術、わしが教えたものではないぞ」

「なんと・・・ではどうして・・・」

「あきあ！・・言ってみなさい」

「はい・・・でも・・・」

「沙希殿、お願いします。教えていただきたい」

沖田にせまられるともう話さずにはいられない。

実は・・・と話し出したのは、あの蘆屋道満との戦いだった。

「あのころのうちは道満とは力の差はありまへんどした。

道満と術は互角、体術も・・としたら先に動いた方が倒される。

動けば隙ができる・・睨み合ったままもう動けまへん。

最初は相手がどういふ動きをするのかそればかり気にしました。

けんど途中からうち自然と自分の心の臓の鼓動を聞いていることに
気づいたんどす。

すると不思議、鼓動の音が段々段々と遅うなって・・・はやってい

た気持ちも落ち着いていました。

こんなことありえへんと思うんですけど2分に一度・・・3分に一度・・・と

鼓動と共に呼吸も信じられんほど遅うなっていました。

そうなつても何の苦しみもないんです。かえって心気が澄んでいて道満の心の臓の鼓動・・・息使い・・・そして汗がしたたり落ちる音までが

うちの耳に響くほど大きく聞こえるんです。

どうして急にしかも命のやりとりの瀬戸際で私の力が向上したのか今もって不思議です」

「沙希殿は戦いの中からそんな凄い技を会得していたのですか。さきほどの無音の術もその技の一部にしかない。

道満とやら沙希殿の眠っていたそんな恐ろしいものを目覚めさせたのですな」

「いやな、沖田様。うち化け物ですか」

「そうだなあ、可愛い化け物・・・でしょうかね」

「あはははは・・・あきあよ。あきあの能力、あの努力があったからこそじゃ。

道満との戦いの時にその能力が目覚めたのは偶然かもしれん。

けれどお前の正しい事を愛するが故の能力だと忘れるな」

「はい・・・肝に銘じて・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

新妻のように小沙希の横に張り付く和葉、

一夜だけの妻と女将のお園から聞いてはいた。

でも見た、聞いた・・・自分とは遙かにかげ離れた天上近くにいる
お方、
自分とはとうてい相入れない・・・、泣きの涙で消えようか
・・・とぐつと哀しみをこらえている。

そんな和葉に声をかける清明。

「和葉よ、何を迷い悲しんでおる。迷いは禁もつぞ。

そなたはこのあきあとは相いれぬと思っっているのであろう」

「あつ・・・はい」

「それは違つぞ」

「でも・・・」

「それでは言つてやろうか、そなたは平安期にこのあきあ・・・いや早瀬の沙希姫の

姉、小律姫であつた。そしてあきあの生きる時代の佐野律子という女性、

それはそなたが転生した姿じゃ。佐野律子は早瀬一族の長、早瀬沙希という女性と夫婦になる。」

「早瀬沙希？」

「ふふふ、あきあのことじゃ、小沙希のことじゃ」

「じゃあ」

「そうじゃ、いずれにしてもそなたはあきあと夫婦になる運命と天より定めつけられている女性じゃ。」

ついでに言つておいてやろう。結城和葉としてそなたはあきあの子を産む。

男子と女子の双子じゃ、男と女の定まる道は違えども結城家は安泰じゃ。

そして、あきあの時代、女子の子孫はあきあのそばに仕えることになる。

男子はあきあに敵対するかもしれん。じゃがあきあの優しさがあれば

それも氷解していくじやろう」

聞いている弦四郎、喜びに打ち震える。凄い人物とはいえ一夜限りの夫婦の契り、娘の和葉に子が出来ようとは思いましなかった。

現実はこの目に見てみなければ判らないが、教えてくれたのはあの安倍晴明なのだ

おまけに男女の双子ときている。畜生腹といわれたのは今や昔の事。

喜ばしい、本当に喜ばしい限りだ。と一人悦にいつている弦四郎を放っておいて、

次は女将のお園に向き直る晴明。

「お園といつたな」

「はい、晴明さま」

「お前、あきあに母御と呼ばれて嬉しかったであろう」

そういわれて、再びあの喜びをおもいだしたのか、つい顔が綻んでしまってお園。

「はい、とても嬉しゅうございました」

「それはそうじゃ、お前は平安時代早瀬の沙希姫を産んだ本当の母御じゃったから」

「えっ？なんと仰せられました？うちが小沙希ちゃんの本当の母？」

「そうじゃ」

「ほ……本当にございますか？」

「嘘を申してどうなる」

「前世とはいえ小沙希ちゃんはずちが産んだ娘……」

呆然とするが、こうなればいいと言う想像をはるかに越えていたお園。

「……ということはこの和葉さんの前世もうちの娘……」

もう何も言えなくなる。

「お母様！お母様はうちの時代に飛鳥日和子といううちの叔母様に転生するんですえ」

「えっ？うちが転生？」

「はい、日名子叔母様は警察・・・いえ今でいう奉行所の偉いお役目」

「えっ？うちがお役人？」

「はい、うちの時代は女の地位が少し向上しました。

いろんなお役目に女性が男にとってかわっています。でもまだまだです」

小沙希から聞くこと驚く事ばかりだ。

「小沙希殿！」

「はい！竜馬様」

少し離れた場所で男4人、舞妓や芸妓達に酌をされながら必死に耳を傾けていた。

そのうち竜馬が辛抱出来なくなって声をかけたのだ。

「なんでしょうか」

「済まぬ、その舞妓姿で江戸の言葉は似合わぬ、言葉を改めてはもらえぬか」

「おほほほ、じゃあ、・・・竜馬様、なんです？」

竜馬は何かほつとして

「小沙希殿には遠くのこの日本のことを聞かせてもらったが、済まぬが、近くの時代のことを聞きたい」

「はい、維新前後のことですな。今が慶応元年やさかい、慶応4年が明治元年と

なるんです。つまり・・・」

と明治元年の1月初日からの出来事を年表を見るが如く話し出した。

「明治元年1月1日 徳川慶喜、諸藩に討薩の出兵を、大目付には討薩の表を持って上京するよう命じる。」

1月2日 幕府諸藩連合軍15000、大坂を出発し京都へ向かう。

1月2日 薩摩藩船平運丸を幕府軍開陽丸・蟠龍丸が砲撃。

1月3日 幕府諸藩連合軍、伏見に到着し、伏見奉行所を本営とする。

城南宮を拠点とした薩長軍と対峙。夕刻幕府軍別働隊と薩長軍が鳥羽で衝突。

戊辰戦争が始まる。

1月4日 嘉彰親王が薩長軍本営に入り、事実上の官軍となる。鳥羽・伏見激戦。

1月6日 徳川軍大坂へ退却。

1月6日 徳川慶喜、夜半に大坂城を脱出。

1月7日 徳川慶喜、江戸へ向けて密かに出港。新政府、徳川慶喜追討令を出す。

1月9日 明治天皇即位。

1月9日 官軍、大坂城を占領。

1月10日 新政府、徳川慶喜以下の官位を奪い、幕府領を直轄領と決定する。

・・・これが昔でいえば天下分け目の決戦なんです」

「小沙希ちゃん！・・・この京の土地が戦場になるんですか？」

「へえ、鳥羽・伏見の戦いは幕軍も官軍もぎょうさんの血が流れます。」

新撰組も離散します。・・・たくさんの命がなくなるんです」
小沙希の顔が哀しみてゆがむ。

「上野山を占拠した旧幕臣の彰義隊の方々と大村益次郎様率いる新

政府軍。

もつと悲惨なのは会津若松の白虎隊どす。元服前の年端もいかない少年達が

全員討ち死に……」

その報告にはもう皆言葉がない。

「新しい時代を迎えるためには少々の犠牲は仕方がない……

男はんはいつもそう言って戦場に向かわれます。でも残された女達の哀しみ……

それを思うと晴明様が沙希姫様に施された女しか産めない一族、

早瀬一族の女達が早く日本の政治や経済の中枢に入らねばとおもっんどす。

男はんにかかせておいたらいつまでも血で血を争う戦争がなくなりまへん」

「しかし……」

と声をあげる桂小五郎だが

「いままでの日本の歴史、飛鳥の時代から続く歴史は戦争の歴史どす。

その中に埋もれた女の哀しみは歴史には出てきまへん」

その通りなのだ。それが判るから桂小五郎も何も言えなくなる。

「うちの時代も世界中どこかしこで戦争して血が流れておるんどす。

でも犠牲になるのはいつも女や子供なんや……もういやどす。

だからうち、戦うんどす。怨霊は人を操り、心の醜さを好みます。

そして人に不幸を与えます。もしかしたら怨霊や邪鬼の類が人に戦争をさせているかも知れないんどす」

「あきあ殿！……もういい。あなたの純真な心がよくわかった。だからあんな笛が吹けるんだらう」

「あんなこと聞いたわしが馬鹿だった。許してほしい。」

済まぬがもう一度『翔龍丸』の音色を聞かせてほしいのだが」

「わしもだ、なんだか無性に聞きたくなつた」

「はい」

といい立ち上がった小沙希。手を出すとその手の平に1本の横笛が・

口に当てると流れ出す調べはこれからおこるであろう戦いの犠牲者の

鎮霊歌であつた。その調べは山を越え谷を越えて自然の中に溶け込んでいく。

見事な笛の手だった。初めて聞く弦四郎も和葉も心が揺さぶられ続ける。

そして、和葉は知つた。自分が惚れた人がこんなに素晴らしい人であつた喜びは

一夜限りという些細な事を消し去り、産まれ出る我が子に父の素晴らしさを

どう伝えようかいまからワクワクするのだ。

「さあさ、今から婚礼どす。男はんは邪魔どすから

隣の部屋でまっついていてください」

とお園が男達を追い立てる。仕方なく立ち上がる男6人。

「お酒をつけますよって、おとなしゅうまっっているんどすえ。覗いたら駄目どす」

お園の指示でお膳が片付けられ、新しいお膳が運ばれてくる。

「小沙希ちゃん、どうするえ。その格好で婚礼するんどすか？」

菊野がおろおろしながら聞く。

小沙希のために何とかしてあげたいが、なにしろ急なことで置屋を飛び出してきただけに何の用意もしていない。

「大丈夫どす、うち隣りのお部屋で着替えてきます」

とってスタスタ襖をあげ、そしてしめる。

「幾松ちゃん、着替えるたって何も無いんどすえ」

「お母ちゃん！心配無用どす」

という先から隣りの部屋からりっぱな公達姿の小沙希が出てくる。

「まあ……」

と言ったつきり口をあけたまま動かない。

「お母ちゃん……お母ちゃん……」

幾松に身体を揺すられて我にかえる菊野。

「い……幾松ちゃん……あれ……あれ」

と小沙希を指差す菊野。小沙希の舞台を見ていなかったから仕方がない。

小沙希は座ったまま動かない……いや動けない和葉のそばにより
「和葉さん」

と手を出す。下ばかり向いていたので気づかなかった小沙希の着替
えた

公達姿は和葉の心が波立つほど、それはそれは立派だった。

「幾松さん姉さん！」

と和葉の手を握った小沙希が幾松を呼ぶ。

「小沙希ちゃん！どこへ？」

心配そうに呼ぶ菊野に

「なんだったら、皆さんも来ます？」

という小沙希のあとをゾロゾロとついていく。

隣りの部屋には見知らぬ3人の姿が……といつてもどこかで見覚えがあるような。

髪をおろした女が顔をあげ

「主殿……でどちらが？」

「お前達も見ていただろうに・・・それほど私の口から聞きたいか？」

「はい、聞きとつてございます」

「では、わたしの妻の和葉じゃ」

「というと頬を赤らめる。」

「おおおう、主殿の顔が赤くなられた」

と3人で喜びあう。

「玉藻、葛葉、紅葉！もうからかうな！それより早く」

というところの式神達、いそいそと和葉に着替えをさせていくのだ。

「幾松さん姉さん、おすべらかしって出来るんどすか？」

「うち、一度やったことあるえ・・・でも」

と3人の式神達に視線をよせる。

「平安時代にはそういう髪型はなかったの」

なるほど・・・部屋を出ると集まっていた仲居に髪結いの道具を取りにやらせた。

「和葉さん。うちにはこんなことしか出来ん。」

妻となるあなたにもっと思い出となるものを作ってあげたいが」というと首を振る和葉。

「いえ、私にはもうこれで充分です。これからのあなたとの時間を思うともう胸がいつぱいで・・・」

という和葉の言葉にみんな胸を波立ててしまう。

小沙希は袖を通し終えた和葉の手をギュッと握る、それだけでもう何もいえない。

十二単で幾松の仕上げたおすべらかしの髪型、そして千代松がやったお化粧、

日頃化粧ツ気がなかったものでどうなるかと心配だったがそれは見事な女っぷりだ。

和葉と小沙希舞台・・・いやひな壇の上に座る。

「ひゃあゝ本物のお雛様やわあ」

どんな美辞麗句より花世の言葉がピッタリだった。

仲居に案内される男達、一瞬に立ち止まってしまいその背中にぶつかる始末。

もう言葉がなかった。その中でも父である結城弦四郎はもう舞い上がってしまった。

なにをいわれても

「ふゝ」

とため息ばかり、もうみんなあきれて放っておく事にした。

そのうち手酌で酒を飲み出し、そして泣きじゃくる。

和葉からみてだらしない父親だが、

横の小沙希がぽつんと言った言葉が胸に残る。

「ああゝ、いい父だ」

こうして婚礼の儀式は終わった。三々五々に帰る客達、すっかり酔いつぶれた弦四郎は源太郎の背に乗っていた。

送りに出た夫婦にもういい・・・いい・・・と手を振り帰って行く。

.....

「みなさんのご存知のことが多かったので少しはしよりました。

律姉・・・どうでした？うちの結婚式・・・」

「素敵・・・素敵だったわ・・・」

「小沙希ちゃんの殿御ぶり・・・いいわあ」
舞妓や芸妓達から声があがる。

やはり女にとって婚礼というのは特別なおもいがあるのか、うっとりとしていた。

.....

和葉と小沙希は結城道場の門をくぐった。

小沙希は早瀬沙希太郎として、和葉はその妻として。

先触れを出しておいたので父の弦四郎と門人達が迎えにでていた。

彼等が目を見張ったのは、一夜にして鬼娘から女に変貌した和葉の姿だ。

硬質だったその身体と態度がすっかり柔らかか味を帯び女になっていた。

「父上、ただいま戻りました」
と挨拶する沙希太郎。

「で、首尾は？」

「はい、おかげさまで」

「それは重畳・・・」

それで婚姻の夜の報告が終わった。

「父上、沖田様は？」

「先ほどから道場でお待ちだ」

「では、さっそく」

と玄関に入る。

「父上、食事は？」

「もう終わった」

「そうですか、では私があとをかたずけます」

「和葉、お前道場へは？」

「わたしはもう剣を持つつもりはありません」

「えっ？」

「これより、女として母となる修行をいたします」

「おおう、そうか」

剣を止めると聞いて少し寂しそうだったが、母の修行と聞くと孫のことを思い、喜びが込み上げてくる。

道場から

「先生！」

と呼びにこられ慌てて道場へ向かう父の姿を見送り、台所へ向かう和葉。

ばあやにこれから教えを乞おうというのだ。

沙希太郎が道場に足を踏み入れたとき、あつと危うく声を出すとこるだった。

片方には坂本竜馬、桂小五郎、相良新太郎が座っており、

その対面には今日始めて見るが本でよく知る新撰組の近藤勇、土方歳三、沖田総司が

座っている。なんだか一触即発という雰囲気だ。

そして苦笑いを浮かべながら師範代席に座るのは篠原源太郎・・・どうせ源太郎が仕組んだものだろう。

仕組んだ方がいいが、仕組みそこねてこんな状態になってしまい、困り果てているというのが真相か。少し苛めてやりたくなる沙希太郎。

何も知らぬ門人達こそいい迷惑だ。緊張のあまり顔色がみんな悪い。

沙希太郎は源太郎には目を合わせず、素知らぬ顔で挨拶をした。

「坂本竜馬様、桂小五郎様、昨夜は私の婚礼にわざわざきていただき本当にありがとうございます。」

竜馬様には夕べのお約束の品、あとでお見せいたします。」

と、いつて反対側に向き直り

「新撰組の近藤勇様、土方歳三様、沖田総司様とお見受けします。

お初にお目にかかります。早瀬沙希太郎と申す未熟ものです。

先日は沖田様には私の悪戯で迷惑をおかけしました。改めてお詫びを申しあげます。」

と挨拶する。新撰組の席から沖田総司が沙希太郎に気軽に声をかける。

「沙希太郎さんとおっしゃいましたね。実をいうと私はあなたを2度ほど見かけているのですよ。」

「えっ?」

「一度目はやくざものの店先で10数人の男達を叩き伏せたとき。

そして二度目は昨日、玉屋の女将を襲った浪人達を鞭でこれまた全員を叩き伏せられた。」

私が見た二度とも沙希太郎さん。あなたは舞妓姿だった。」

驚いたのは門弟達と近藤と土方だ。目を見張る中

「立ち会っていただけますね。」

「はい、よろしいでしょう。でも沖田さん。少しだけお待ちいただけますか?」

「待てと言われるのは?」

「はい、私は昨夜この道場の娘である和葉殿と婚礼をあげました。

ですから私はまだこの道場に役立つことを一つもしていません。

今から門弟の方々に稽古をつけるつもりです。

それが終わるまで待つてくれませんか。」

「門人の方々に稽古を？・・・いいでしょう。
私もあなたがどんな稽古をつけられるか、私も興味がある」
そう言って沖田は座りなおした。

師の席に座る義理の父に

「父上、よろしいでしょうか」

「うむ」

と頷く弦四郎。

懐から出した白い鉢巻をきりりと絞めた沙希太郎、

竹刀を持つと

「谷川さん、来なさい」

「はっ」

どうして自分の名前を知っているのかわからないが全力でぶつかっていく。

でも確かに竹刀をあわせたはずなのに音がしない。

息があがっていく。苦しさのあまり突っかかっていったが、まるで風に巻かれたように竹刀が天井に当たって落ちた。

自分は少しは強くなったはずだ。だが全然刃が立たなかった。

呆然と座り込む谷川弥一に

「谷川さん、あなたは腕の力に比べ腹筋の力が凄く弱い。だから腰が定まらない。

切っ先がゆれるのもそのせいです。谷川さんは今日から腹筋を毎日1000回、

数を軽々こなせるようになったら、2000・・・3000と目標値をあげていってください。最終は10000回です。

10000回を毎日出来るようになったらあなたは強くなる。

・・・はい、次！横田さん」

とこうして門弟達に稽古をつけていく。

そして次々と門弟達の弱いところを指摘し、強化するよう教えていくのだ。

こんな剣術の師範は今まで皆無だった。

「おい！あいつ化け物だ」

そういうのは土方歳三だ。

「はい、わたしは見ていて背筋が寒くなっています。

いくら実力差があるからといっても、これだけの激しい稽古をしているのに

汗一つかいていない。それに一度も沙希太郎殿の竹刀から鏝鳴りがしないのです」

一方、相良新太郎が

「坂本さん、桂さん。わたしは幼いころから剣術は苦手で修行などしませんでした。

だから聞くのですが、剣術の稽古ってこんなに静かでこんなに美しいのですか？

なんだか舞を見ているようです」

「そんなことはない、剣の修行は無骨なものだ。わたしもこんな稽古と教え方を初めてみる」

と桂小五郎がいう。

「桂さん、千葉周作先生が音無しの剣法を破ったとき、その気合で道場の床を踏み抜いたと聞く。

だが、沙希太郎の剣を鳴らそうとしてもいくら千葉先生でも無理だ。まるで柳に風で受け流されてしまう。

豪の剣では破れない。わしが剣客ならば出会えた喜びに身の内が震えたであろうな」

「坂本さん！今からでも遅くはない・・・どうだ？」

「いや、もう遅い。わしのなまくらな腕ではあの門弟達と同じめにあうだけだ。

あいつ、古くから伝え聞く剣豪の中で一番つよいのではないか」

もう一人心躍る人物が・・・。

「おい、弦四郎さんよ。そんなにニヤニヤして喜ぶな！」

横から源太郎が叱る。弦四郎は横目でジロリと源太郎を睨むが、しかしその口は今にも綻びそうだ。

「しかし、えらいやつを娘と夫婦にさせたもんだなあ。

こんなやつ二度と出るめえ。弦四郎！おめえの娘の和葉さんはてえした眼力だぜ。

おめえより1枚も2枚も上を行くぜ」

「なに、偶然だ」

というが実際は心の中が（でかした！）と喜びで小躍りするほどはずんでいる。

「しかし、今日で帰ってしまっただなあ」

「ふむ、残念だが仕方があるまい」

「弦四郎！おめえ、あいつの血を引く孫に期待しているな」

「そうだ。あの安倍晴明様が言われたことに違いはあるまい」

「うらやましい奴だ・・・弦四郎！そんな顔をするな！」

もうあきれて、無然とする源太郎だ。

「以上です。わたしの言ったことを忘れず必ず身体の強化をしてください」

「はい！・・・ご教授！ありがとうございました」

という門弟の挨拶に頭を下げた沙希太郎。

だが門弟達、誰も立とうとはしない。

このあとに控える新撰組の天才剣士といわれる沖田総司との立会いがあるのだ。

みんなもうワクワクしている。

「お待たせしました。沖田さん」

「少し休む……必要はなさそうですね」

「はい」

とにっこり笑う沙希太郎。

「では、竹刀で……」

「いえ、沖田さん。お願いがあります。あなたは腰の名刀”菊一文”で

私と立ち会っていただけませんか？」

「真剣で……ですか？」

沖田はまじまじと沙希太郎の顔を見てから、そして近藤と土方の方に振り返る。

近藤と土方はむすつとして答えない。

沖田が聞く。

「お互い真剣勝負ということですか？」

「いいえ、私はこれを使います」

と立ち上がって持ってきたのが、先の細い鞭だった。

「あなたはわたしを侮っているのですか？」

沖田は沙希太郎を睨み付けたが、沙希太郎は動じない。

「どうやら考えを改めるつもりはないらしい。」

「こうなればわたしはあなたを切る！」

そう言っつて刀掛けから刀をとって腰にさした。

そして菊一文をスラリと抜く。

「あなたの新妻を嘆き悲しませても知りませんよ」

と口を歪めて笑った。

剣を取つたら人が変わる。こうなれば近藤や土方といえど、もう沖田を止めることは出来ない。

源太郎も弦四郎もどうして沙希太郎が沖田に真剣の立会いを望んだ

のか

わけがわからなかった。だがもう止められるものではない。二人の緊迫した気が道場を包んだ。みんな蒼白になって見つめていく。

先に沙希太郎が動いた。沖田の胸を狙って突いて出たのだ。しかし、沖田は待っていた。その鞭を狙って切り下げた。だが鞭は弓のようにしなり、沖田の顔面にすれすれを通る。

「あっ」

と声を発して後ろに跳びのいた。そんな激しいやりとりが続くが、沖田には沙希太郎の動きが全く読めてはいなかった

動きどころかあの鞭がくせものだ。まるで生き物のように動くので予想がつかない。

懐に跳びこもうとするのだが身動きが取れなくなった。

隙だらけのように見えて隙が全くなかった。

たかが鞭と思っていたが、こうなれば刀にはない恐ろしさがある。立ち会う前にわかっていたが、立ち会ってみるとそれ以上の実力。

『かなわない』と思っただら最後、相手が大きく見えて手足が動かなくなる。

自分は勤皇の志士に恐れられる新撰組の沖田総司である。

このままでは終わらせられない。かなわぬまでも一太刀をあげせてやらねば・・・

と気力が湧きあがってくる。

でもこの勝負、時間が長くなればなるほど沖田に不利になる。

重い刀を持つ沖田と軽い鞭の沙希太郎。

ましてや夕べも嗜血したばかりの沖田。しだいに身体が重くなってきた。

顔色も紙のような白さだ。

そのとき『来る！』と感じたのは剣士としての長年の経験からである。

目の前の沙希太郎が二重に振れてみえ、そしてフツと消えたのである。

「沖田！上だ！」

近藤が声をあげた。

ハツと見上げると天井に足をついて屈みこむ沙希太郎、その反動で速度を早めて

襲ってくるのか？・・・だが沙希太郎は身体を捻った。

そして又見えなくなった。と思ったら沖田の身体に鋭い痛みが何箇所も感じられる。

沙希太郎の姿は全く見えない。だが風を切る音がする。

沖田は痛みを堪えながら刀を振る。だが何の手ごたえもない。

痛みは後から後から襲ってくる。もう刀を振り上げも出来なければ立ってもいられなくなった。

刀を杖代わりに崩れるように座り込む沖田。だが一瞬、沖田の天才が目覚めた。

どこにそんな体力が残っていたのか。1mほど飛び上がり、まず切り下ろして

斜めに切り上げてから、水平に払った。

その3つの動作を飛び上がった瞬間に一瞬のうちにおこなった沖田
総司、

やはり剣の天才だった。

床に降り立つと満足げに笑い、そしてドツと倒れこんだ。

「沖田！沖田・・・しっかりしろ！」

近藤と土方が沖田にかけより抱き起こした。

すると上のほうから『ポツリ・ポツリ・ポツリ……』

と血のしたたりが……、見上げるとフワリと飛び降りてくる沙希太郎。

一体何処にいたのだろうか、先ほどは姿が見えなかったのだが。

その沙希太郎の姿、左の肩口が切り裂かれ、ブランと垂れた左手の甲から血が滴り落ちていた。

その沙希太郎に走り寄って来たのが新妻の和葉だ。

心配で物陰から見ているだろう。

持っていた白い布で沙希太郎の傷口をしっかり押えた。

「和姉、心配いらぬわ。傷はすぐに治るから」

と押えていた布を外してみると、なるほど出血は既に止まっておりその長い刀傷もあれよあれよと言う間に消えていった。

これには医者としての立場から沙希太郎の傷を治療しようとそばに寄ってきた

相良新太郎、和葉に先を越されてしまったが傷が消えていく様をつぶさに見て

医者としてありえないことに肝を潰してしまった。

「これはあの『翔龍丸』と『緋龍丸』にいた金龍・銀龍の仕業なのですよ」

なるほど『生涯の鎧』とはこういうことだったのかと感じ入った

坂本竜馬、桂小五郎そして篠原源太郎。

だがそんなこと知らない他の者達は啞然とするのだ。

「和姉、冷たいお水を持ってきてくれる？」

といいながら沖田の横に座る。沖田はまだ気がつかない。

「近藤様、土方様・沖田様のこの消耗のぐあいを良く見ていてくださいね」

自分でやっておきながら何をいいやがる。とムっとする近藤勇と土

方歳三。

沙希太郎は沖田に向かって手をかざす。

すると何やら空気が変わった。蒸し暑かった道場の中に爽やかな風が流れてきた。

沖田の様子も苦しそうだったのが次第に落ち着き、顔色も蒼白だったのが

赤味をおびてきたのである。

もう大丈夫だった。医者として何の役にも立たなかったが、

沙希太郎がいる以上それも仕方がないと自覚していた。

沙希太郎の医学の知識は自分など及ばない別次元のものだったからである。

沖田の目が開いた。じつとてをかざす沙希太郎をみて微笑む沖田。

「早瀬さん」

と少し声がかれていたが和葉が持ってきた水を飲んで落ち着いたのか

「あなたがわたしにやっていた事、感じていましたよ。

あなたは自分の命を削ってまでわたしに光を与えてくれたのですね」

「沖田さん。あなたは自分の命を粗末に扱い過ぎます」

と怒ったような口調で話す沙希太郎。

「だが私には心配してくれるような人は・・・」

と言いかけた時、ずっと沙希太郎が指し示す方を見ると

武者窓から覗く大勢の女達、その中で心配そうに沖田を見つめる一人の女性・・・。

「あっ！」

「いるでしょう、沖田さんを心配している人が・・・和姉、あの方々を道場に連れてあげてください」

和葉はにっこり笑うとすぐ道場を出て行った。

「沙希太郎さん」

と今度は心安げに名前を呼ぶ沖田。

「あなたはわざと私を怒らせたでしょう」

えっ？という顔の近藤と土方そして弦四郎。

「ああ言わなければ沖田さんは治療をさせてくれなかったでしょう」

「治療？」

「ええ、今は立会いでもなんでもなかったのですよ。

私はあなたの体の治療をしていたのです」

「それどういことですか？」

「はい！」

といつてから外から入ってきた女達が周りを取り囲んで座るのを待つてから、

「近藤様と土方様にお聞きします」

『ん？』という顔のご両所、

「なんででしょうか？」

と土方が聞く。どうも近藤の口が重たいのは諸説あったが本当らしい。

「昨夜、沖田さんが大量に喀血したのはご存知だったのでしょうか？」

『あつ』という声をあげたのは1人や2人ではない沖田自身も思わず声をあげた。

「どうして……どうして知っていますのですか」

沖田自身で上げた声で本当のことだとわかった。

近藤と土方の顔からさーっと血の気がひいた。

とくに近藤は沖田の幼い頃から知っているし自分の弟のようにおもっていた。

いや、もう肉親と同じなのだ。

ワナワナと唇が震えだす。

「お・・沖田！・・・本当なのか？」

「いやだなあ・・・そんな顔しないでください。・・・でも安心しました。」

今の近藤さんも土方さんも江戸の田舎にいたときと同じだ。

最近のお二人にはそばに寄るのも嫌だったんです。血の臭いしかなない。

だから一人で死のうと思いました。人を切りまくってその上で切られて死のうが本望だと思っていました。

でも今は土の匂いがします。みんなで走り回ったあの頃の・・・懐かしいなあ・・・」

何だか沖田の目が光っているようだ。

ふと気がついた沖田が

「沙希太郎さん、あなたは今の立会いではない、治療だといいましたね。」

訳を聞かせてください」

「はい」

といつてから沙希太郎は道場の中を見渡した。門弟達の座る後ろにひっそりと

座る女達、菊野屋の女将と芸妓と舞妓達、仲良くなった真田屋の芸妓や舞妓達、

そして玉屋の女将のお園までもが顔を見せている。みんな場所をおもんばかりで地味な町娘の装いだ。

・・・そして、もう1人・・・

「鈴音ちゃん！こつちへいらっしやい」

「ハイ」

と小さな声で返事をし、うつむきながら近寄ってくる。

恋しい人のために必死なのだ。

沖田は沖田で黙って鈴音の顔をじっと見ていた。

「もう、いいでしょう。身体をおこしてください」

近藤と土方の横からさっと沖田の身体に手をかけておこすのは鈴音だ。

近藤と土方は仕方なく見ているが苦笑いしている。

本心はいえば、飛び上がるほど嬉しいのだ。

女に関して朴念仁だと思っていた沖田。女を知らずに若い命を散らすのかと

いてもたってもいられなかっただけに、もうとんでもなく嬉しいのだ。

「鈴音ちゃん、沖田さんの上をはだけて見せて」

鈴音の手が一瞬とまったが、沖田の上を脱がす。

「あっ」

という声、肌に多くの赤い点が……

だが近藤と土方の目にうつるのは江戸では細いながらも隆々とした身体をしていた沖田が……

なんだこの痩せ衰えた身体は……思わず唇を噛み締めた。嗚咽が洩れそうになったからだ。

こんな身体では……もう沖田を修羅の道に連れてはいけない。

「沙希太郎さん！これは何ですか？」

「これは経絡を突いたものです」

「経絡？……やはりあなたでしたか。あの鞍馬天狗は」

「あっ」

と声をあげた門弟達、今や京の町では鬼面組を倒したと評判の鞍馬天狗が若先生だなんて……

「ごめんなさい。わたしの悪戯で京を混乱させて」

「もういいんだよ、沙希太郎。もう終わった事だ」
と源太郎も言い添える。

「沖田さん、あの時は悪い奴を退治する経絡を突きましたが、今日はあなたの身体を救う経絡を突きました。」

鈴音ちゃんに聞けば沖田さんは極端な医者嫌いというじゃないですか。

だからわたしは策を練って立会いに見せかけてこうして治療したんですよ。

さもないと、あなたは今夜二度目の大発作で命運が尽きたところで」

「えっ？」

と声をあげたのは近藤。

「それじゃあ、沖田は今夜……」

「はい、そうです。近藤さんと土方さんは明日の朝、なかなか起きてこない沖田さんを起こしに部屋にいった

血反吐を吐いて冷たくなっている沖田さんを発見していたでしょうね」

「むむ……」

と声が出なくなる。

「近藤さん、土方さん。沖田さんをあなた達のそばから離して療養させてあげてください。はっきりいえば私の治療だって沖田さんの命を少し延ばしただけです。」

悪くなることはあっても絶対に良くはならない。

あとは鈴音ちゃんの愛情ある看護でどれだけ生きるかということろです。

それに、もう剣は握れないでしょう。勿論、激しい動きはできません」

近藤は土方と顔を見合わせていたが、近藤が鈴音にむかって

「鈴音とやら、沖田のことよろしく頼む。こいつには青年らしい青春がなかった。」

ぜひ、それを味あわせてやってほしい」

と頭をさげる。土方も頭を下げた。

「近藤さん！土方さん！」

沖田が悲鳴をあげる。近藤の袴にくらいつくように捕まえる沖田。

「沖田！もういいんだ・・・もういいんだよ・・・」

ぼんぼんと子供をあやすように軽く叩き続ける近藤。

「沖田！」

と土方が話し出した。

「坂本と桂がここについて話すことではないかも知れん。でも俺達の正直な気持ちを話す。」

・・・徳川の世はもう終わりだ。終わりなんだよ、沖田。

それでいて何故だ！坂本の目がそういつているが、なぜだか俺にもわからん。

意地・・・そう、意地だけで俺達は生きてきたんだ。意地だけで新撰組をつくり

意地だけで多くの勤皇の志士を切ってきた。だが俺がそれが悪いとは思わんのだ

だが世の中はかわりつつある。ここにいる坂本達がなにをやっているのか

知らん。知りたくもない。ただ俺達はこれからも切り続けるだけだ」

そう言葉を結んだ。

「沖田！おまえはもういい。おまえは新撰組の一番隊隊長として充分な働きをしてきたんだ。」

これからは身体を休めて病気を治せ。

そんな身体では剣も持てないし、俺たちの足を引つ張る」

「近藤さん、土方さん、身体を治したらもう一度新撰組に帰ってもよろしいですね」

「ああ、必ず帰って来い。みんな待っているからな」

そう元気づけるが沖田のやせ細った身体でどこをどう治せというのだ。

俺たちもむごいことをいう。もう助からぬ・・・そう覚悟した。

「早瀬殿、沖田をよろしく頼む」

そう近藤が頭を下げる。

「はい・・・といつてもわたしの出来るのはここまでです。

鈴音ちゃん、沖田さんの身体に私のつけた赤い印のところを毎日指圧をしてあげるのですよ。そこは人の身体にあるツボといって、

そこを押すことにより少しは病気を抑えることが出来ます。

相良先生、鈴音ちゃんと沖田さんのことよろしく頼みます」

「沙希太郎さん！・・・あなたは？」

沙希太郎は沖田になっこり笑いかけ

「もうわたしに残された時間はあとわずか少し、時が私のいるべきところへ帰れ！

そういつてます」

と言つと

「沙希！これに着替えを」

と風呂敷包みをもつてきた和葉。幾松達も周りを囲む。

もうこうなつては男の出番はない。門弟達と近藤や土方、坂本や桂でさえ

道場の隅に追いやられた格好だ。

風呂敷をあけるとこの時代に着てきた沙希のセーラー服が入っていた。

「沙希、どうする？向こうで着替える？」

「和姉、大丈夫よ」

と口の中で呪を唱えると、いきなり着物が入れ替わった。

セーラー服に身を包んだ沙希、結った髪が解け黒髪は背中に落ちる。

沙希のことを知らない近藤達と門弟達はその不思議な術に啞然としている。

風呂敷の中に残っていた陣八を取り上げた和葉、沙希の額に『パチッ』と止める。

手甲は玉屋のお園が沙希の左手に止める。

用意が出来た沙希に抱きつく和葉。

「沙希！頑張つて・・・怨霊になんか負けちゃ駄目よ。私はここからしか応援できない。

でも、子供のことは安心して！必ずあなたが生きている時代に・・・

あなたのそばでああなたのお手伝いができる子供を・・・いえ、孫、ひ孫と

代々あなたのことを・・・あなたがどんな人だったか言い聞かせていくわ」

「頑張つて！和姉。あなたならできる。私、指輪を持って私を訪ねてくる

あなたの子孫を楽しみにまっているわ」

「小沙希ちゃん、負けたらあかんえ。うちあなたに聞かされて

藤原元方のこと調べました。悪い奴なんどすなあ、怨霊になっても人を呪い殺したり、地震をおこしたり・・・

小沙希ちゃん！そんな奴こてんばにやつつけてやりなはね。うちが

ついとるさかい」

と妙な励ましをする菊野。

菊野屋と真田屋の芸妓や舞妓に口々は励まされた。別れを口にする者はいない。

幾松と千代松からはそれぞれ大事にしていた簪と清水さんのお守りをもらった。

朝早くから二人して清水さんへお参りに行ってきたという。

「小沙希ちゃんの時代にも清水はんはあるゆうたかて、時代時代によつて

その住職はんによつてお守りの効き目に差があるつて千代松がいうんどす」

「そやかて料理屋でも花板が変わつたら味が違つると同じどす」

千代松が強行に言う。

「どうやらそれで喧嘩になつたようだ。」

「幾松姉ちゃん、千代松姉ちゃん。うちが原因の喧嘩ならすぐに止めて！」

いつも仲のいいお姉ちゃん達の姿をこの目に焼き付けておきたいの

そついわれてそつぽを向いていた二人、手を取り合つて小沙希に微笑む、

でもどうしても泣き笑いの顔になつてしまつ。

沙希は道場の中央で正面に座る父の結城弦四郎に向かって座る。和葉もその横に並んだ。

「父上・・・さらばとは申しません。行つて来ます」といつてあたまを下げる。

弦四郎にとつても娘の和葉にとつても

その言葉はもう言い表すことが出来ないほど嬉しいが、やりきれないほど哀しい。

行って来るといつても二度とは帰って来れない身の上だ。

和葉は気丈にも耐えている。それを思うと言い返す言葉が何も浮かんでこない。

ただ

「うむ」

と言葉にならない声が口についただけだった。

沙希にはなにもかもがわかっていた。

だからわざと座ったまま身体を回転させて坂本竜馬のほうを向いた。

「坂本竜馬様、タベあなたに見せるとお約束した品をここでお見せします」

「おお」

という声をあげて門弟わかきわけて来て、沙希の目の前に座る。

沙希が手を前に差し出すと、急にその手の平から黄金色の光が出てきて

手の平より1尺ほど上にフワリと宙に両刃の大刀と綱があらわれた。

門弟達も『ガバツ』と立ち上がる。近藤も土方も、この道場にいた全員が立ち上がってしまった。

いや沖田は横になって少しずつ沙希のことを鈴音と相良から聞いていたが

さすがに二人によって体を起こして茫然と見ていた。

「これが不動明王様より下しおかれた利剣と綱索けんさくです」

竜馬は黄金に光るその大刀を握ろうとしたが竜馬に触ることさえ出来ない。

「早瀬殿・・・これは？」

「はい」

とにつこりと笑うと利剣を手にとる。

そして、開け放たれた中庭にある大きな岩に向かって、こんな離れた場所から

「とおう！」

と突きを入れる。するとどうだろう。

あんな大きな岩が『グラグラ』と揺れて、突きが入ったと思われる真中から

すーっと上下真っ直ぐな線が入り二分されたのだ。

「す・・・凄い！」

「いや・・・驚異だ！」

門弟達が交わす言葉。

竜馬も桂も・・・いや、近藤や土方でさえも呆然と突っ立っているだけだ。

「早瀬さん！」

と身体を起こした沖田が沙希に向かって言った。

「あなたを見ていると・・・」

「はあ？」

と聞きなおす沙希。

「あなたを見ていると、まるで神を見ているようだ」

「いえ、沖田さん。私には自分でも信じられないような力がありますが、

私は人でありたい。常にそうであるよう思いつづけています」といつてから

「父上！・・・せんないことをしました。形の良い岩であったのに・

「いや、これはこれで形が良い。なにせ婿殿が形として残してくれたものだからな。
今に評判になるうて」
と笑っている。

沙希は和葉の手をとり見つめた。和葉も見ている。
今生の別れなのだ。もうこの身体に触れ合うことはない。
すると、まだそんなはずはないのに

『トクトク』と小さな鼓動が2つ沙希に聞こえてきた。
不思議そうに自分のお腹を見つめる沙希に

「沙希！どうしたの？」
はつと顔を上げた沙希のその顔には輝くような笑顔あった。

「和姉！聞こえたわ！・・・そんなはずはないのに聞こえるの。
微かだけど小さな鼓動が2つよ」

和葉は跳び上がった。その嬉しさにこぼれんばかりの笑顔を見せて
・
・

周囲にいる者も喜びあっている。

「和姉、だめだよ。そんなに激しく動いちゃあ」

「沙希！何言ってるのよ、今からそんな・・・」
と笑われてしまう。

「良かった。これで笑顔で行ってこれるわ。和姉」

「そうね。私も元気な赤ちゃんをうむわ。

そうだね。赤ちゃんにはあなたの字を一つづつつけるわ。うん、そ
う決めた

孫もその下の曾孫も・・・」
といて笑う。

「じゃあ、わたしも子供達に何かを残してあげなくちゃ・・・そう

だわ。

そんなことないと思うけど、この家に結界を張っていくわ」

「結界!?!」

「ええ」

といつてから

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」

と九字を切り、

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、これ四神相應の陣と
いう」

そして、高々と宙に五芒星を描きその手で地を刺し貫いた。

「ええ〜い」

すると一瞬空間が歪み、それが広がった。

そして、清廉な気がこの屋敷を包み込んだ。見えないものでも感じ
ることは出来た。

この女とも男とも見分けがつかないこの人物・・凄いい人だったんだ。
と門弟達は囁きあった。

「母様・・」

と沙希が呼ぶのは玉屋の女将お園。

「母様、和姉のこと頼みます」

「小沙希ちゃん。わかっておりますえ。今は血のつながりはないと
はいえ、

前世では親子。産まれて来るのはうちの孫同然どす。

きっちりあなたの生きる時代まで血のつながりを続けていきます。
だから小沙希ちゃんも藤原元方なんて怨霊、あなたの力で調伏して
しまつてね」

「ええ絶対にこの京をわたしのいる時代の京を焼け野原になんて
させません。きっと打ち勝ってみせます」

「沙希太郎さん！話は全て聞いた。あなたは凄い人だ。

それでこの菊一文字をあなたに預ける。ぜひ持っていてほしい」

「菊一文字を？」

「そうです。この刀にわたしは幾多の人達の血を吸わせてきました。

でもわたしがこの刀を持つまでは鬼切りといわれた名刀でした。

その昔から鬼を切つて刃こぼれひとつしなかつたと聞いています」

「その名刀を私に？」

「そうです。それにわたしはもうその刀が持てない

・・・そんな気がします」

「判りました。では預かります。沖田さん！・・・

わたしとともに戦いましょう。この刀はあなた自身です。

あなたと共に戦つていきましょう」

そういつて刀のさげ緒を伸ばし菊一文字を背にする。

そしてみんなの視線を背に中庭に下りる。用意しておいてくれたス

ニーカーに

足をいれたのだ。

みんな中庭に玄関から回ってきた。

道場では沖田が鈴音と相良新太郎に支えられて沙希を見ている。

「小沙希ちゃん！あなたの時代へ行くつてどこか行くの？」

「はい！ちょうど比叡山のはるか上空に刻ときの穴あながあります。

それを通つて行ってきます」

というつとすーと浮き上がる。

「あつ」

皆声を上げた。ありつべからず光景なのだが一瞬驚いただけで

皆は小沙希なら・・・沙希太郎なら当然とおもつから不思議なのだ。

「では、皆さん。こんなところから失礼しますが、本当にお世話になります。

わたしはこれから戦場に行きますが必ず勝ちます。

どうか皆様見守っていてください」

そうなのだ。小沙希の時代ではみんなすでに亡くなっている。

見守っていてほしい。和姉・・・母様・・・皆・・・

下界で小さくなっていく皆・・・京の町・・・に別れをつげた。

.....

「凄い・・・凄かった・・・沙希さんと沖田様の立会い・・・

沙希さんは立会いとは違うとおっしゃられているけれど、

やはり見ているものにとっては立会いとしか見えなかったわ」

希佐はそう声をあげた。

「希佐殿！その通りですよ。沙希殿は治療といわれているが

わたしにとっては立派な立会いだった。・・・そして完敗だった」

沖田がぼツリと吐く。

「沖田様！・・・天井に立ち止まったり、壁に立って反動つけたり
の

戦い方って沙希さんにしか出来ないとおもっているのですが」

「希佐殿、その通りです。これは当事者であった私には初めて目にするもの。

沙希殿にこんな戦いをされれば勝てぬのは当たり前、なんかぞつと
します」

「沖田！そばで見ていたわしにもこんな全く判らなかつた。というより動きその物が見えていなかった。」

だから沖田が倒れる前に見せた二振りの剣、凄いと思った」

「いやあ、坂本さん。あれはわたしが子供の頃より培かつてきた剣の最後のあがき……ですよ。」

それにしても沙希殿。凄い人だ」

……こうして映画は終わった。

「さて、ここに天界より6名のお方の立会いのもとにある発表をします。」

うちに関係ある話ですが、早瀬一族としても関係があるんです」

とって貞子に目配せする。貞子はそれをつけて、すぐそばにいた志保に声をかけた。

希美子も希佐も緊張している。

何事かと言う顔をするのがほとんどであったが、奈緒がはつと顔色を変えた。

「皆様もよくご存知のようにうち幕末の京で一夜限りとはいえ

うち結城和葉と夫婦になりました。その結果がここにいる結城希美子と希佐の子孫です。」

そして……来年になるんですけど……ママ……真理ママ……

と呼ばれて驚いて立ち上がる真理。

「そして理沙姉……操叔母様……そして律姉……」

立ち上がった三人、もうおろおろしている。

名前を呼ばれた者には高弟達が一人一人横についた。

「それから・・・薫姉さん」

羨ましそうに見ていた薫、でもいざ自分の名前を呼ばれてみるともうどうしていいかわからない。薫ぐらい場慣れした人でも混乱に陥ってしまったているのだ。

「あら、そんな笑い方ってないと思うわ、澪姉さん」

「だって・・・」

「だって？・・・そんな面白い？だったら皆に笑ってもらいましょうか。」

「さあ・・・立って・・・」

「えっ？」

うるたえる澪。沙希の言うことが判つたらしいがさすが医者といいたいがもう立たれないほど震えが来ている。明子があわてて澪をささえた。

「皆さん、自由に座ってもよろしおすえ」

といつても体が自由に動かないというのが実情だ。だから、なかなか座れない。

「次はまゆみ姉さん・・・」

「えっ・・・」

という声をあげたきりもう、立たれもしない。

高弟の一人がもうまゆみ社長のもとで介抱を始めた。

「そして順姉・・・」

といったときにはもうすでに高弟の一人がそばに控えていた。

「そして、最後に奈緒姉・・・」

その声を聞いたとたん奈緒はわかつてはいたがあまりの喜びに軽い失神状態におちいつてしまった。

奈緒を介抱するのは希美子だ。高弟を制して奈緒を抱きかかえる希美子。

希佐はこの騒ぎの中で高弟や舞妓達と冷たいおしぼりと飲み物を用意しに動いた。

騒ぎが収まったのはそれから30分もした時だ。

だがそれはうわべだけであった。居間の様相も一変している。

それぞれに固まって集まっていた看護師、婦警達がばらばらになり9名の妊娠が判った早瀬の女と高弟を中心に自然と輪が出来ていた。

侍達のお酌をしていた芸妓達は自分達はそのまま侍から離れず、そのかわり各々の置屋の舞妓達を動かして情報を集めさせていた。

「小沙希ちゃん・・・良かった・・・本当に良かったなあ。

うち小沙希ちゃんの血をひくのは希美子はんと希佐ちゃんです十分って思っていたんえ。

それが・・・こんなにぎょうさんの子が来年には生まれるんだすなあ」

「へえ、お婆ちやま。使命とはいえ、

なんや・・・うち女たらしになったみたいどす」とさすが恥ずかしそうにいう沙希。

「そんなんいうのやめなはれ。それが小沙希ちゃんの使命だっしやる。」

昔の公方様が五十何人かの子供産ませはったんでっしやる。」

「でも、お婆ちやま。うちの場合そんな数すぐに追いついてしまいます」

「えっ？・・・では・・・」

「へえ、来年生まれるんは9名じゃなくて18名なんです。」

つまり双子・・・全員、男と女の双子なんです」

とってから舞台上から女性たちに話す。

「医者でもないうちがどうしてこんなことが判るんかと思議や思います。」

これが先ほどいった通力のおかげなんです。

でもうち、この通力みたいなもん幕末からかえってくる時に一度経験しているんです。

和姉のお腹から二つの鼓動が聞こえたことを考えるとそれは通力によるものどした。

でもそのときはうちにはそんな力ありまへんどした不思議どすけど」

と話を終え

「真理ママと8名のお姉ちゃん達、妊娠2ヶ月を超える人とそうでない人がいるんです。」

うちにはそれぞれの身体から2人の鼓動が聞こえます。

けんど今が一番大事な時で真理ママが体調を悪くしていること考えると

地下で・・・地下できちつと検査してください。

澪姉が当事者ということを見ると 相良明子先生・・・」

「えっ？・・・わたし？」

「へえ、この任に当たれるのは明子先生しか考えられまへん。」

みんなの検査と後々のフォロー・・・お願い出来ますか？」

「私でよければ・・・」

「ありがとうございます。これでうちホツとして東京でお仕事できます」

「沙希ちゃん！私も仕事するよ。絶対に役を降りないんだから」

「薫姉さん・・・薫姉さんはきつとそういう思っていました。」

お仕事することうちは何にもいいまへん。

けんど薫姉さんの担当医は東京へ行っても明子先生どす。

先生が1週間に1度検査します、いうたら絶対にここに戻ってきて検査出来ます？」

「ええ、そんなこと・・・でもどうして東京で見てもらったら駄目なの？」

「へえ、一卵性双生児で性別が違ふことは99%ありえないんどす。

もしそんな妊婦さんが産婦人科にいったら学会で発表されてしまうんどす」

「え？そうなの？」

「うちは騒がれることが嫌で、代々のかかりつけのお医者さまに口止めして取り上げてもらいました」

と希美子。

「そんな妊婦さんが何人も東京のお医者様に例え医者が変わっても噂になつてしまうのは必定どす。」

そつどすえ？明子先生」

「ええ、いわれる通りですわ。一卵性双生児で男女なんてありえないのが 定説ですもの」

「看護師さんには産婦人科にいた方もいられますなあ。どう思います？」

「私いまだ一度もそんな妊婦さんにあつたことありません」

「私もそうです。へたな先生に診てもらつとこの早瀬一族のこと一般に知られてしまうと思います」

「判つたわ、沙希ちゃん……ということは皆男女の一卵性双生児なのね」

「そうです、うちと和姉との間に生まれたのは……父上！」

「うむ……男女の双子だった。その一卵性とかいうのは判らないが……」

「新次郎様は？……ご存知でしたか？」

「いや、わたしの時代まだそんなことは知られていません。それは一体？……」

「新次郎様、それは後でわたしが……
という明子医師。」

「澪姉ちゃん！……澪姉ちゃんも同じですよえ」

「だって、わたしは……」

「あきまへん、確かに澪姉ちゃんは内科・外科・呼吸器科などほとんどが天才的なお医者さまですよ。」

「けんど産婦人科に関しては素人ですよなあ」

「う……」

「といって声がでない。」

「澪姉ちゃんはお医者様ですよから」

「日本のあちこちに飛び回ることあるやもしれません。」

「けんどそのときは毎日、明子先生に電話して体調を報告することですよ」

「毎日報告……って」

「駄目どす。普通でも遠出は身体に負担がかかるもんどす。ましては妊婦・・・しかも今が一番危ない時なんどす。・・・明子先生？どれぐらいたったら少しの無理が効くんどすか」

「そうねえ。これは個人によつて変わるんだけど普通は3ヶ月になつたら落ち着いたつていわれるの。」

それと心配するつて凄く母体に悪影響を及ぼすのよ

「うつ・・・」

と口を押さえる沙希。

それを見て笑いが漏れるのだ。

してやつたりと隣の澁と握手する明子。

どうやら澁に皆に心配を掛けどうしの沙希のこと聞かされたらしい。

「ウツホン・・・」

と咳払いをする沙希。皆の目が沙希に注がれながら、その笑い声が小波のようにお稽古場に広がって行く。

「わかった・・・判りました。」

この1年決してご心配をかけるような真似をいたしません。

女優業とパソコンソフトの開発のみに全力を注ぎます」

と口を閉じて舞台上に座り込んで、言葉を変えてそう言つてから頭を下げた。

「パチパチパチパチ・・・」

と拍手がおこり

「小沙希ちゃん、ようお言いなすつた。その言葉待っていたえ。」

うち、この年やさかい、いつあの世に行つても、ええおもてました。

けんど小沙希ちゃんと出会い、早瀬の女達と出会い、早瀬の里を知り、あの不思議な温泉にも入らせてもろうたんどす。そして今日、来年生まれる曾孫達を知り……一番嬉しいのは今の小沙希ちゃんの言葉どす。

来年まで……無事に……何事もなく……心配もかけずに……え。小沙希……」

そう最後にわざと呼び捨てにして座る貞子。

心配して立っていた高弟達もホッとして座った。

「ありがとう……ありがとうお婆ちゃま。

うち……ほんに……ほんに……皆さんに心配かけていたんやねえ。

花世ちゃん……ごめんえ。菊野お母ちゃん……すんまへん」といってから

「うち来週のドラマが始まるまで、ここで舞三昧どす。

そしてドラマが始まって毎週この京に帰ってこなくてはいけないんどす」

「あきあ！そんなこと聞いてないわよ」

「へえ、先ほど連絡あつたんどす。人質になっていた女の子達を診たお医者様、

困難な治療になるいうてはるそうどす。

そこでうちにも手伝ってくれいうて厚生省からのお話どす」

「厚生省？……厚生省つて……」

高弟に介抱を受けながらのまゆみ達……りっぱな仕事人間だ。

「うちもびっくりしたんどす。けんどお話聞いて納得しました。警

察庁長官が手を回したんどす」

「えっ！警察庁長官が？……」

「警察庁長官？……警察庁長官って？」

そう花江に訊く源太郎。

「そつどすなあ……昔のお奉行様ですやるか」

「奉行だったら……」

「おほほほ、源太郎様が言われるのはお江戸だけでつしやる。

警察庁長官いうお奉行は日本国中のお役人の一番偉いお役人なんです。

ちなみに日和子叔母様が一番お偉いお方のいわば家老役どすえ」

目を真ん丸くする源太郎。

「大学の精神科の先生とお医者様とで女の子達を完全に治療してほしうって

言われているんどす。可哀想な女の子達を考えるとうち二つ返事でお受けしました」

「そのお仕事と……あとはお婆ちゃまが待つておられるうちの舞の撮影どす。

まだうち小野監督には言っていまへん。

明日から小野監督とルーク監督が京都の撮影所で編集作業に入っているんどす。

お話はまゆみ社長と順姉におまかせします」

とって舞台を降りようとしたが、もう一度戻ってきて

「これ、肝心な話どす。もしかしたら一番困難になるかも……

紫苑ちゃんのことどすが、これうちだけではどもならんのどす。

警察の力借りてまずは紫苑ちゃんの身元を調べることどす。

うちの力でも紫苑ちゃんの実像が深い霧に奥に隠されて見えまへん。

どうして紫苑ちゃんの記憶が無くなったか・・・これ、事件の匂いがするんどす。

うち、約束したんでこの家から動きまへん。

けんど人を動かして調べてもよろしゅおすやる、お婆ちゃま」

「そんなこと出来るんどすか？」

「へえ、やってみます。いわば、うち安楽椅子探偵どす」

「安楽椅子探偵？」

「安楽椅子探偵はここを動かへんのどす。

ここにいる皆を動かして情報を得てそれを推理して事件を解決するのがうちの仕事どす」

「でも、沙希ちゃん。これ警察にまかせたら？」

「いいえ、今のところ警察を動かすような物証はおへん。

そんな状態で警察を動かすんは嫌どす。うちの我儘を警察にこり押しをするなんて・・・」

「そうね」

とって日和子は苦笑いをする。

「けんど、いくらなんでもメインで動く人に素人の人使うことできまへん。」

そやから日和子叔母様・・・」

「ふふふ・・・わかつたわ、沙希ちゃんの考えが」

「へえ、交通課の仲良し三人組を少しの間貸してくれるよう伯母様から署長さんに声をかけてほしいんどす」

「えっ?・・・私達が」

と飛び上がるように立った西沢恵子と緋鳥礼子と佐藤秀美の3人。

「あなた達、やれる？」

そう日和子がいうと

「はい、まかせてください。私、刑事になるのが夢なんです」
そういう礼子に頷く二人。

「けんどお三人さんに言つときますけんど、独走するんはやめておくれやす」

この事件一筋縄ではいきまへん。

一応三人が京都府警の代表として行動するんどすが他の婦警さん達の力も必要なんどすえ」

「判りました」

と他の婦警達も立ち上がる。

「じゃあ、伯母様。頼みます」

といって舞台をおりて紫苑の隣に座った。

そして……

「あっ、それからこのビデオはうち泣きの涙で一人で見せてもらいます」

といつてから看護師達と明子医師に9人の検査を促した。

第二部 第十三話

沙希が目を覚ましたとき、
横で寝ていたケイトが沙希をジッと見ているのに気づいた。

「やだあ！・・・ケイト！・・・私の寝顔を覗くなんて」

「ふふふ・・・いいじゃないの。それに、その反応の仕方って本当に可愛い女の子ね」

「だって私、女だもん」

「そうね、沙希は大した女よ。本当に大好きな私の旦那様！」

そう言つて抱き合う二人・・・・・・・・

「あつ！いけない！・・・」

と飛び起きたのはしばらくしてからだ。

「どうしたの？沙希！」

と掛け布団で胸をかくして身体をおこしたケイトがいう。

「だって今日からよ、わたしが安楽椅子探偵になるのは・・・」

「あつ、そうだった。私も急いで用意をしなくっちゃ」

「あら、ゆっくりとしてればいいのに・・・」

「そうはいかないわよ。それでも私はマスコミの人間よ。

こんな面白い取材ネタが直ぐ傍にあるのにじっとしてなんかいられないわよ。

それに日米取材合戦があるんだから・・・」

「えっ？だったら・・・」

「そうよ、相手は智子と京子よ。2対1だけど勝って見せるわ」
そういつて素早く着替えると自分の部屋に戻る為に出て行った。

「やれやれ……」

と喋ったため息をつく。電話を取って内戦をまわす。

「あっ！杏姉……用意ができたわ」

と喋って電話を置くと1分もしないうちにドアがノックされた。

「どうぞ」

入ってきたのは杏奈だ。ジロリと開いている寝室を見てからドレッサーに座る沙希に近寄った。

杏奈はヘアのセットをしながらポツリという。

「ケイトがいたのね」

「どうしてわかるの？」

「香りよ」

「杏姉はどうするの？」

「わたしはいい。まだまだ沙希についていきたいから。」

来年のアメリカでの撮影がおわったら考える……そのかわり……

「そのかわり？」

「キスして……」

と身体を沙希に預けて両手を沙希の首に回してキスをする。

完全な受身の沙希だったが『ガクッ』と力が抜けた杏奈の身体を受け止めた。

すっかり元気になった杏奈……身体もそうだがモヤモヤしていた心のほうも

すっきりしたのか、鼻歌を歌いながらメイクを手早く終えた。

「さあ、いいわ。……今日からでしょ」

「ええ」

「あの子を助けてあげて」

「わかってる！」
と言って二人して部屋を出て行った。

レストランで軽い朝食をとってから大広間にいくとすでに大勢の女達が集まっていた。

集まっていた。

「遅くなってすみません。お婆ちゃま、おはようございます」

「おはようさんどす。小沙希ちゃん、今日からどすなあ」

「へえ、おばあちゃま。うち、今日から二足のわらじどすえ」

「二足のわらじ？」

「舞妓の小沙希と安楽椅子探偵のあきあどす」

「まあまあ。小沙希ちゃんも忙しいことどす」

とからかい口調だが本心はといえば小沙希が傍にいたことでもう嬉しくてたまらないのだ。

「あなた達！今の時間からじゃ遅刻じゃあないの？」

と制服姿の婦警達に声をかける。

「いいえ、私たちもう出勤してきたのですよ」

「えっ？」

「警視正と一緒に府警まで行かれて署長に私たちのこと話して頂いたのです」

「それで？」

「あきあさんが指名された西沢、緋鳥、佐藤の3巡査は常駐ということですが」

我々も全員とはいきませんが交代で事にあたることになりました」

「今日は初日ということで今後の捜査方針を聞いてくるようになると言われて」

全員ここに集まったのです」

「判りました。ではこれからの捜査方針を……といったところで特別な捜査方針なんかありません」

「えっ？」

という声があがる。

「いくら私に力があるって、白紙の状態では何もできないわよ」

「あつはあ……」

「でも何もなかったら、行き当たりばったりに歩き回ることは無駄でしょう」

「そうですね」

「白紙の状態といっても全くゼロってことはないのよ」

「沙希ちゃん、それは杏奈の？」

「ええ、そう。杏姉が紫苑ちゃんの髪を触ったときに感じたことよ。」

杏姉はプロよ。そのプロが感じたってことは100%の割合で信じられることです。

落下傘のペチコート、髪の手入れ……それだけで

良家の令嬢とは言えないかもしれないけれど

まずは2年前にこの京都で良家と言われる家で事件があったかどうか

良家といってもお金持ちばかりでなく没落した名家……

この京都にはそんな家が無数にあるとおもいます。

まずはその方針で捜査をしてみるんです。

何も出てこなかったらその捜査方針がまちがっていたということですよ。

そしてより確実なのは琵琶と三味線のこと、楽器自体、名器とはいえないものかなりの品物です。

だからまずはその楽器の出所を探ること。

そして、紫苑ちゃんの琵琶と三味線の先生……自分で覚えたって

ことは考えられません。
それでっしやる、お婆ちゃん」

「小沙希ちゃんの言う通りどす。
紫苑さんの琵琶もお三味も基本はしっかりしとります。
よほどきっちりしたお師匠はんにつかれていた思いますえ」

「お婆ちゃん、ありがとう。」

というわけだから、まずは手分けして調査をしてもらいます。
レギュラーの3人は名家と2年前にどんな事件があつたかを調べて
ください。

お手伝いをしていただく皆さんは2人交代で琵琶と三味線の楽器の
調査と

紫苑ちゃんに2つの楽器を教えた師匠を探すことです」

「わかったわ、今の沙希ちゃんの指示で捜査を開始してちょうだい。

お手伝い班の組合わせはあなた達にまかせます。

出来れば対になる名前とタイムスケジュールを作つてこちらにもコ
ピーをください。

そして捜査が1日交代になるか2日交代になるかは、あなた達で決
めてください。

ただし。1週間は長すぎます」

飛鳥警視正の言葉に婦警達が笑いが洩れる。

「瑞穂ちゃん、静香ちゃんがないからあなたに聞くけどモバイル
はあるかしら」

「はい、日和子伯母様。今回の戦いでの予備品として沙希が改造し
たモバイルは100台以上です。」

マスコミや警察、そして米軍が使っていたものは買取という形で

そのまま皆さんがお持ちになったので残ったのはそれだけです」

「じゃあ、悪いけどモバイルをこの人達に1台ずつ渡してくれないかしら」

その言葉に飛び上がった喜ぶ婦警達。

「いいんですか？」

そう聞く婦警もいる。

日和子は頷いて

「これは警察庁が買い取って特別任務のあなた達への支給品です。

特別任務の名前は・・・年齢差がありすぎて私反対したんだけどね。

京都府警の署長がどうしてもって・・・その名前は『京都少女探偵

団』

ひゃ〜と大きな声をあげる婦警達

言った日和子も恥ずかしくなって瑞穂に声をかける。

「瑞穂ちゃん、静香ちゃんに数を教えてから請求書を警察庁に渡す

ように言ってくれませんか？」

「わかりました。ゆりあ手伝って」

と婦警の数を数えてから二人が出て行った。

「紫苑ちゃん、悪いけど紫苑ちゃんの持っている琵琶とお三味を婦警さんに預けてくれる？」

「へえ、ええですけど・・・それがなくなったらうち・・・」

「大丈夫よ、私から紫苑ちゃんに琵琶をプレゼントするから」

「えっ？いいんですか？」

頷きながら宙から取り出した1台の琵琶。

婦警に自分の楽器を渡し終わったのですぐに受け取ってしげしげと見つめる。

「凄い！・・・」

といつて抱き上げ撫で回す紫苑・・・付いていた撥で琵琶を奏で始めた。

『祇園精舎の・・・』と平家物語の1節を謡って止めたが

「沙希さん、こんな凄い琵琶もらってもいいんですか？」

これってうちの心の奥底まで鳴り響いてくる・・・、限定されていた謡詠みが

何のてらいも無くこれで出来る。・・・でも沙希さんは・・・」

「ううん、いいの。私にはこれがあるし・・・」

とこれまた宙から取り出した琵琶で紫苑と同じ平家物語の1節を謡うのだ。

本当にそっくりな二人・・・。

「その琵琶も、この琵琶も同じ平安の名工がつくつたの。

私のが『白虎』紫苑ちゃんのが『朱雀』というのよ

「でも、なんかどうしようものう、凄く愛しいんです。

うち楽器が愛しいなんて初めてや」

「そりゃそうよ。平安の名工というのは天才といわれた人だったわ。

その人は紫苑ちゃんの前世の那賀杜姫様ながとひめのお兄上よ。

お兄上は武家暮らしが嫌になって細工師になった変わり者よ」

「えっ・・・前世のお兄さん・・・」

つぶやく紫苑をじっとみつめてから、

「お婆ちやま、平安時代には三味線はありまへんどした。

そやから出入りの三味線職人さんに三味線の注文したいんです」

「紫苑はんのどすか？」

「へえ・・・けんご二丁どす」

「えっ？二丁・・・それやったら・・・」

「へえ、うち見様見真似で爪弾くことぐらいはできます。」

「けんど、このさいどす。うち紫苑ちゃんにお三味の弟子入りどす」といってからニヤツと笑う。

「こりゃえらいこつちゃ、小沙希ちゃんが三味線まで習得するって・・・」

と高弟達に何事か依頼する貞子。

「じゃあ、沙希ちゃん。わたしも奈緒ちゃんも東京に帰るから」

「はい、判りました、日和子伯母様。奈緒姉！1週間に1度の検診日を忘れちゃ駄目よ」

「判っているわよ。でも真理ママの家が広くてよかったわ。」

今東京にいる理沙や律子に今度は私でしょ。それにあの子達も引越してくるのよ」

「あの子達って？」

「礼亜と亜紀と由紀子よ」

「えっ？あの人たちも？・・・じゃあ随分にぎやかになるね」

「これで沙希と杏奈が帰ってきたらどうなるんでしょうね」

「あっ！それ酷い。まるで私が騒動の元って聞こえるわ」

「あら、違うの？」

ぷつと膨れる沙希。

そんな沙希に笑い出す女達・・・。

今回の事件捜査でどこまでおとなしくしているやら・・・。

「ねえ、恵子。あなた牛尾さんとどこまでいっているの？」

「どこまでって、お互いのうちに行き来してるわよ」

助手席の恵子と後部座席の秀美の会話に運転している礼子が

「違うわよ、恵子。秀美はそんなこと聞いているんじゃないの。」

牛尾さんからプロポーズを受けたかどうかを聞いているんじゃないの」

「それが……」

と恵子がふつと寂しそうな表情をみせる。

「まだ、何にも言われていないの？」

「自分はまだ刑事として一人前ではない。目標にする人の足元にも及ばないだからって……」

「目標にする人って？」

「……あきあさん……」

「もうう、あの馬鹿！目標が高すぎるわよ」

「ああくん、あまり酷いこといわないでよ」

「いうわよ。牛尾さんがあきあさんのあの頭脳についていけると思う？」

礼子がハンドルを握りながらさういう。首を振る二人。

「大体頭を使う捜査は恵子が助言して、何とか刑事としての形をつくってあげているのに。」

あつかまし過ぎるわ。

恵子もあのととき思い切りテニスボールをぶつけていれば良かったのよ。」

そつすればもつと素直な頭になったかもしれないのに」

「酷い！」

と小さな声で言いながら背もたれに身体を預ける恵子。

本当にそつすれば良かった……とつい思ってしまう。

府立の図書館に入館した3人、
ストックしてあった2年前の新聞を借り出してきて
机の上で3面に記載されている事件を調べ上げていくがこれだとい
う記事がない。

「初日から探している事件にぶつかるとははずはないよね
と少し愚痴が出る秀美。」

「これも駄目！」

と新聞の束を脇にどける恵子。
眼鏡をかけて新聞に顔をつけるように記事を探す礼子。

時間をかけて探し続けたが収穫はなしだ。

椅子の背もたれに寄りかかって大きく伸びをしてから肩をたたく秀
美。

「気が付いたら、もうこんな時間よ」

「お昼食べなかつたわね」

礼子と恵子の話に

「少し早いけど帰ろうか」

秀美が声をかけた。

立ち上がって新聞の束を片付ける3人。

「私ね、恵子には悪いけど本当に今の地下の家に引っ越して幸せよ」

新聞の束を持つ礼子が言う。

「私だって……」

恵子も今は地下に部屋を持ってそこから出勤しているのだ。

「駄目だよ、恵子。あんたは早く地下から出て行って牛尾さんと暮
らさなきゃあ。」

このままじゃ、きつと牛尾さんと離れてしまうよ」

「どうしてよ」

「あんだ、自分で気が付いていないんだ」
新聞を片付け終わって3人揃って府立図書館を出る。

「気が付いていないってどういふことよ」

「恵子があきあさんを見つめる目・・・まあ、私達も同じ目をしてるけど」

恵子には牛尾さんがいるのよ。このままでは抜き差しできなくなるよ」

「私と秀美は竜馬様にあきあさんの赤ちゃんを授かるって言われてるから」

今のままあきあさんのそばにただでいいのよ」

「実は夜に牛尾さんと会う約束しているのと恵子の告白に」

「駄目じゃない、早く言ってくれなくちゃ」

「さあ早く帰って食事をして・・・そしてあの温泉に入って身体をきれいにして、」

牛尾さんに抱かれてきなさい」

そんな秀美の強烈な言葉に、

「抱かれて来いって・・・そんなの・・・」

「ええい、四の五の言わないの。恵子は牛尾さんをホテルに連れこんでキスをすればいいの。」

それで何もしなければ男の風上にもおけないわ。もう見込みがないからあきらめることね」

「そんなあ・・・」

といいながらつい唇を噛んでしまう恵子。
恋に臆病な自分自身が齒がゆい。

歯がゆいのはそばにいる二人のほうが強いのかもしれない。

3人の中で一番刑事としての能力が高い恵子。

そんな恵子だから同じ地下に引越してきた婦警達の心配も大きいのだ。

こうして事件の初捜査の日、恵子と牛尾の恋の糸も絡まって

沙希の安楽椅子探偵・・・一体どうなっていくのやら。

沙希は約束通り家から出ることはなかった。

安楽椅子探偵は今日が三日目ということもあり、沙希自身期待はまない。

ただ紫苑を自分のそばに終日縛り付けていたのは、紫苑のことを知るためで、

いくら前世が那賀杜姫ながとひめでよく知っていたとしても、現世の紫苑という女の子は未知の人だ。

おまけに本人の記憶がないため、沙希の力を使っても紫苑という実像は霧の中にある

余りにも判らないことが多い。だから用心しているのだ。

沙希の心が判るのか、高弟達や早瀬の姉達も沙希と紫苑に目を離さない。

昼間は舞妓さんや芸妓さんのお稽古があり、祖母は小沙希も紫苑も手元において離さない。

小沙希は皆と一緒に舞い、紫苑は高弟に渡された三味線で舞の演奏をする。

「どうしたんどすやる、紫苑ちゃんのお三味凄く舞いやすいんどす」

そういつた花世の言葉から、小沙希は初めて紫苑の三味線で舞ってみる。

なるほど紫苑の三味線は、はんなりとした空気をかもしだし、それでいてメリハリがあつて花世のいつた舞いやすいというのは嘘ではなかった。

舞いなさいという三味線の音色ではなく自然と心に感応する三味線の音色なのだ。
だから身体がその音色に反応していく。

「やっぱり紫苑ちゃんには那賀杜姫の舞の心がDNAに書き込まれています。」

そやから、紫苑ちゃんのお三味が舞やすいのはあたりまえなんです」

小沙希の言葉に何度も何度も頷く貞子。

こうして天才が目の前に二人いる。それが何とも嬉しいのだ。

でもその天才二人が驚いて見つめるのは菊野屋の芸妓花江だ。
舞妓や他の芸妓がおろおろしてしまうほど舞に没頭している。
まるで鬼だ。教えているのは志保。貞子はそんな二人を見て見ぬふりをしてる。

花江が変わつたのは、篠原源太郎に聞いた千代松の生い立ちからだ。

才能も無く努力で祇園の大看板を背負うことになった伝説の名妓。
その生まれ変りといわれる自分の情けない現状……。
けれどこのような舞の修行の仕方は、なんの素養も無い舞妓のとき
には有効だけど、

芸妓となり『菊野屋の花江』と名を知られている花江にとってこん

なやり方は、
かえってマイナスとなるだけだ。

何か切っ掛けがあれば・・・沙希は考えこむ。

右手親指で頬を支える、その行為は紫苑以外ここにいる女性なら誰でも知っている沙希のくせ。

いわば嵐の前の静けさなのだ。きっと何かを思いつく・・・ドキドキして沙希を見つめる女性達。

沙希は頬から手を下ろし、一度キツと花江を見てから振向く。

「お婆ちやま、うち今度の舞の会での舞いを少しお稽古しときたいのがあるんやけど、
やってもよろしおすか？」

祖母は笑顔で

「小沙希ちゃんの舞、この間見せてもらった一幕しか知らんけんどわてらも見てていいんどすか？」

「へえ、別に内緒にしとるわけ違います。この舞、鼓を打ちながら舞うんで難しおす。

けんどタイミングさえ間違わんかったらなんも知らん素人さんにも舞の心伝わるんどすけど、

タイミング違ごてもたらもうあきまへん。

なあんも知らんかったら、一生懸命すればそれでええんどすけど一応うちも修行してきた身どす。

きつい練習しても得られるもんもうあらしまへん。後は技術をどう使うかだけどす。

そやからうちはタイミングを違わんようにするしかおへん」

そう祖母に言うが、その言葉は花江に向かって言った言葉であり祖母もそれがわかってるからニッコリと笑うだけだ。

そんな沙希の言葉は花江にも通じたのか

『タイミング？・・・技術？・・・』

とブツブツ言いながら沙希の舞を見るために志保と座り込む。勿論、志保にも沙希の心が伝わっているので、もう沙希に対して頭を下げるだけだ。

舞台上上がった沙希が真言を唱えると

真っ白な小袖の着物に、能面をつけ鼓を持つ女に姿を変える。

昨日から沙希のこの不思議な術を目の当たりにした紫苑、

まだまだ慣れる事が出来なくドキドキと心臓が高鳴る音を静めるように、

胸の上から両手をそっと置き、ただこれから始まるうとする小沙希の舞を

見逃すまいと居住まいを正した。

自然体で立つ沙希・・・いや、鬼女樹沙羅。

そのまま鼓を構えて打ち出す。『ポンポン・・ポン・・ポ・ポ・ポ

ン』

鼓の軽やかだが重厚な音色が稽古場に響く。

初めて聞く沙希の鼓、これまた鼓の才も並ではない。

鼓を打ちながら舞う難しさ、貞子や高弟達にもそれが判り過ぎるくらい判るだけに

小沙希の鼓の非凡な才にはもうあきれかえるしかない。

舞の主人公鬼女樹沙羅の寂寥感は鼓の効果で倍加されていた。

ただ鼓と舞が少しでもタイミングがずれたら舞が滅茶苦茶になるという小沙希の言葉が、

自然と納得出来るのだ。

今思えば目茶な練習は舞妓に与えられた修行の場でしかない。

芸妓となつた今では身につけている技術を礎に、
余分なものをかえつて削げ落とす事をしなくてはならないのだ。
これからの花江には京舞の真髄を追求することになる。

志保もお師匠もそれがわかつているから何も言わずに花江のしたい
ようにさせていた・・・

愛弟子の京舞への真剣さにはもう声をかける必要もない。
ただジツとそばについて見守つてやるだけでいい・・・。

花江は舞台の上に立つ小沙希を惚れ惚れと見つめなおす。

今になって判る源太郎のあの言葉・・・『小沙希の真似だけはす
るな!』

なるほど舞には素人の源太郎だが一流の武芸者でもある彼には小沙
希の非凡さ・・・

いやその天才ぶりがわかつたのだろう。

小沙希はただ一人だけ・・・後にも先にも生まれる事はない。

小沙希の血を引く希美子や希佐も小沙希にはなれないのだ。

「小沙希ちゃん、あんたつて子は・・・」

舞いが終つた後、貞子の驚嘆の声と共にいつもは黙つて驚いている
はずの

高弟の玉井勝枝が思わず

「沙希姫様！最後にその能面が真つ二つに割れるのは
どういうわけですか？」

と声をかけた。それほど思いもよらぬことだったのだ。

「ええ」

といつて舞台に座る沙希。

「この主人公は鬼女・樹沙羅といます。

樹はいつきと書いて沙羅は沙羅双樹のさらどす。

樹沙羅の住むのは人里離れた山奥。能面を被るのは己の醜さを隠す為、
いいえ、それは樹沙羅自身が思い込んでいるだけで、それはそれは楚々とした凄惨な美人なんです。
でもそんな人が自分を醜いと思いこむんは鬼の本能を押さえられへんからなんです。

朝起きると目の前にあるんは真つ白な人の骨、
喰らい尽くす自分の姿がフラッシュバックのように思い浮かんでくるんです。

樹沙羅は例え様も無いショックとさいなまれる罪の意識……。
けれど鬼は自分では死ぬことできまへん。
身体に傷をつけてもその場で治ってしまうんです。

首を切り落とせば死ぬると思うんですけど、自分でそこまで出来るはずはありまへん。

自分の死に時、死に場所をいつも求めつづける樹沙羅、
そして、自分を殺してくれる人の訪れを待ちつづける樹沙羅。

そこで先ほど言われた能面が何故割れたかです。
能面で己の鬼の本性を隠そうとする樹沙羅、
でもこの館を訪れようとする旅人の気配に樹沙羅の内から飛び出そうとする鬼女、
その葛藤がこの舞の主題なんです。
そして能面が割れたのは鬼の本能に自分を押さえきれなかった樹沙羅の心が、壊れた瞬間なんです」

「沙希姫様！能面が割れるんは何の仕掛けもないんですか？」

「へえ、この三幕は能面が割れるんが見せ場です。」

それが出来んかったらこの三幕の舞は失敗どす。

いくら舞をうまく舞ったとしても能面が割れなければ樹沙羅を表現できまへん。

そやから鬼女・樹沙羅を舞うんは人の心と鬼の心の葛藤を

自分自身で実際にやらなあかんのどす・・・本当の鬼にならへんかったら・・・、

己が鬼になる一瞬を表すことが出来へんかったら面は割れまへん。

普通の舞では出きんことをやらなければならんがこの舞どす。

けんど鬼になつたとしても人から鬼に変化するタイミングがズレれば

面は決して割れることあらしまへん」

「小沙希ちゃん。よう判りました。この舞の難しさが・・・

いいえ、この舞を舞えるのは小沙希ちゃんしかいやはらへん。

けんどさつきから聞いていたら鬼女・樹沙羅に対する小沙希ちゃんの想いの

いうもんがビンビン響いてくるんどす。

小沙希ちゃん！・・・この鬼女・樹沙羅って一体何者なんどす」

小沙希はその祖母の言葉にやっぱり聞かれた・・・

と一度身体を震わせてから手元を見つめ、そして祖母にほうに振向いた。

一度座布団を下りてから祖母の方にキチツト指向してから座布団を直し、

膝行して座布団の上へ上がってから祖母に向かって深々とお辞儀をした。

日頃の行動からは窺い知れない沙希のお作法、

初めて見る女達にとってギョツとする一瞬だった。

(やればできるんだ)

沙希の行動力に反比例していた無作法と言えぬも活発なふるまいが、何もかも知った上での行動だと知ったことで何故だかほつとする。

「お婆ちやま・・・さすがはお婆ちやまどす。よう樹沙羅のこと見抜かれましたなあ」

「えっ！じゃあ・・・」

「平安時代に実際に旅人を殺めていた鬼女・・・それも昔は人だった鬼女」

「小沙希ちゃんは逢ったんどすな」

沙希は祖母を見ながら頷いたが

その瞳が深い湖のように哀しみをたたえているのを女達は見逃さなかった。

小沙希は安倍あきあとして言葉も京言葉から標準語に直して話し始めた。

「はい、お婆ちやま達が思われている通りです。

私は清明様に命令されて鬼女・樹沙羅を退治に行っただんです。

でもその山奥の一軒家に行くと、私の勇んだ心なんて木っ端微塵に吹き飛んでしまいました。

樹沙羅はほっそりとした体つきのもそれはそれは凄い美人でした。

憂いを含んだ目を見ているとこれは評判だった人を殺して食い漁るだけの

悪辣な鬼ではないと悟っただんです。

いいえ、悟ったというそんな平凡な心のうちではありませんでした。

私は強烈に・・・逢ったばかりなのに樹沙羅に強烈に惹かれてい

「つたんです」

こうして沙希の告白が始まった。

女達は居ずまいを正して、話の中に引き込まれていく。

紫苑も自分とは似ているが、実際はそうでないことを強烈に意識していた。

花世達に聞く小沙希、高弟達に聞く沙希姫様、奈緒達に聞いた日野あきあ、

そして杏奈に聞いた早瀬沙希……そして、今……。

名前こそ違うが同じ人物……が各々と話を聞きたびに

同じ性格なんだろうに違う印象を受けるのは何故なのか？……その秘密を垣間見た思いた。

とにかく強烈に惹かれていく自分を押さえられはしない。

「けれど私にもわかったんです。逢ったばかりなのに樹沙羅も私に對して同じ感情を持っているって。

樹沙羅は私がわらじを脱いでいるとき水を湛えた小さな桶を持ってきて

私の足を綺麗に洗い始めました。

時々私を見上げる目、それはもうぞつとするほど色つばい目でした。

足を洗い終わって座敷にあがっても、私の手を離そうとしません。

襖を開けた奥の部屋にはたくさんのお料理が用意されていました。

『あら、どなたか他にお客さんあるんですか？』

『いいえ、あなたの為です。』

私あなたが来てくれるのを長い間今か今かと首を長くして待っていたんですよ』

『私を？』

『はい。それは長く苦しい刻でした。気が遠くなるほどの長い年月

でした。

けれどそのあなたが目の前にいる。ぞくぞくとする身体の身の内からの震えが……

次から次へと沸きあがってきているのです。どれほど待ちわびたか……。

ほら、これを御覧なさい』

青白い肌の内から小さな小波のように細かくうち震える様子がまるで湯煙のように立ち上ってくるのがあきあにも知ることが出来た。

『私を死に導いてくれるあなたが……こんなにも待ち続けたあなた……』

こんな方だったなんて、仏はなんと意地悪なお方……』
そう言つて睨む樹沙羅の目の媚に私はドキツとしてしまいました。

私……樹沙羅からはもう目が離せませんでした。いくら視線を外そうとしても駄目なんです。

私が食事をしている間、普通の食事を取れない樹沙羅は

お酒ばかり飲んでいましたが樹沙羅も全然酔えないようでした。

食事の間、お互い一言も話しません。

けれど見詰め合う視線が絡まり二人の間にあつた垣根が一つ、又一つと

取り払われていくのがわかるんです。

私が食事を終つて箸をおいた瞬間、樹沙羅が飛び掛つてきました。

お互い固く身体を抱き締めあつて口をむさぼり吸う……

他の人がみたら目を逸らすような荒々しい野獣のような行為でした。

長年の禁欲生活の反動で樹沙羅自身も止められないようでした。

激しく……いとおしく……このまま時が止めればいい……

私はそう思いながら愛欲の渦に吞まれていったんです。

鬼と人の交わり・・・それは決して許されるものではありません。

でもこの時の私にとって樹沙羅は大事な大事な人でした。

睦み合う二人のお互いの肌の触れ合いが、一つ一つの心のヒダに刻み込まれる一瞬のきらめき・・・

全裸の二人にかけられた樹沙羅の着物のぬくもり・・・
気づくと私は樹沙羅と手をつないで仰向きに寝ていました。

幸せな時が流れて行きます。

・・・けれど、いきなり樹沙羅が私に馬乗りになろうとしたんです。

私には樹沙羅の行為が一瞬に判りました。それは哀しいほどの私への愛情故でした。

だから、私叫んだんです。

『駄目！！・・・今は駄目！！・・・後にして・・・眠い・・・私眠いの・・・だから・・・』

だから、私をギュツと抱き締めていて・・・』

実際、私物凄く眠かったです。

人でないものとの交わりは物凄いエネルギーが必要です。

実際、鬼と交わったものは眠るように息絶えるのが普通です。

私はそこから意識がなくなりました。・・・実際よく寝ていたと思います。

私、樹沙羅に守られて本当に安心して子供のようによく寝ました。

久しぶりでした、こんなによく寝たの。

京にいたらこんなことないですよ、いつもどこかにある緊張感・・・。

けれど、樹沙羅の元にいたらまるで赤子のようになっていました。

私が目を覚ましたとき、いつのまにか布団にくるまれていたんです。

日の光が開け放たれた障子から布団まで差し込んでいます。

その時、樹沙羅が入ってきて寝ている私の枕もとに座りました。

口付けをする樹沙羅・・・私が樹沙羅の首に手を回して抱きつこうとして

その手を外してニッコリと笑いながら首を横に振るんです

樹沙羅は私の手をとって起こし、着替えさせます。

私はただじっと立っているだけで全て樹沙羅がやってくれるんです。

樹沙羅は私をみてもニッコリと笑うだけで一言も話しません。

もう、私に対して言葉は二度と話さないと決めていたようです。

言葉を交せば心が残ります。樹沙羅はもう、私の手によって死ぬことしか考えていません。

心残らず静かに眠りたい・・・それは私にもよく判ります。

けれど、残された私は救われません。一体どうすれば・・・

私の心の中は千路に乱れてどうしようもありませんでした。

そんなこと嫌！私は心の中で叫び続けていたんです。

けれど樹沙羅を見ているうち、その穏やかな表情やその態度から

私の心は平静を取り戻していきました。

樹沙羅にとって生きるが地獄・・・死することが唯一、

人として平安を得る道・・・。そう悟ったんです。

哀しい・・・凄く悲しい・・・心の中を風が通り過ぎていきます。

けれど私も覚悟決めました。

樹沙羅が私に舞を見せたい、それについては少し準備があるので

鼓が鳴ったら隣の部屋に来て欲しいと目の前でスラスラ書いた紙。私は目を閉じて待ちました。

初めての出会い・・・たった一夜の逢瀬・・・そんなこと頭にかすめました。私は何も考えずにいようと心を空にしました。

心に雑念があつたら樹沙羅に失礼です。死して救われようとする樹沙羅・・・私は目を閉じて時を待ちます。

その時、隣の部屋より『ポン』と鼓の音が聞こえたんです。静かに立って隣の部屋に入ります。

けれど、死する樹沙羅に恥ずかしくないようきちつと作法を守りました。

赤い着物を着て能面で顔を隠した樹沙羅・・・手に持つ鼓が少し震えています。

それも死の恐怖ではなく、私への愛情と死することの喜びでしょうか。

私は用意された席に座ろうとしましたが、席の横に長い袋があつたのを『あっ』と思わず声をあげるところでした。

この剣は晴明様に渡された退魔の剣『黄金丸』（こがねまる）、包む袋も鬼封じの呪がかけられたもの、あまけに袋の紐があげられ剣の柄が見えています。

私は『はっ』として樹沙羅に振り返りました。

この袋の上から触れても鬼の皮膚は焼け爛れるんです。それも決して治癒できないもの。

よく見れば樹沙羅の胸や手が真赤に焼け爛れています。

きつと胸に抱くようにして持つてきたんでしよう。
袋を開けたのは鬼に戻ったらそれで死を与えてくれという判じ物。

ここで樹沙羅に近づけば苦しむのは樹沙羅。

私は心を押さえつけながら座りました。

赤く見えていたのは純白の着物に身体から染み出していた樹沙羅の血……。

さっきの一つの鼓の音で……鼓に血の後、指から滴り落ちる血……

もう嗚咽が出そうでした。ありません。

樹沙羅の舞が始まりました。血を畳に落としながらの生涯最後の舞……

私は忘れまいとして必死に見つづけていました。鼓は真赤に染まり、能面や白い肌も真赤でした。

樹沙羅の身体から変な気配がしたのはそのときでした。

私は袋から剣をだし、いつのまにか鞘から抜いていました。

能面が真つ二つに割れ恐ろしい鬼女の顔が現れたのはそのときです。

夢中になって剣を樹沙羅に突いた私……けれど距離が遠すぎました。

でも……停止した剣に向かってそのまま身体を預けてきたのは樹沙羅の方です。

残っていた人の心が剣に向かわせた……私は今でもそう思っています。

光に包まれた樹沙羅が私に手をさしだしました。ニッコリ笑っているんです。

光の中から樹沙羅が何か言っているのがわかります。

声は聞こえませんでした。が、心の中でこう聞き取ることが出来ました。

『ありがとう、愛しい人』って」

もう、皆呆然と聞いていた。膝の上で白いハンカチを持つ手が震えている。

「沙希ちゃん……それからどうなったの？あなたのことだから……」

と聞くのは薫だ。

「ええ、樹沙羅の温かい光に私も包まれたことまで覚えていません。けれど後の私は半分狂っていたのでしょ。うね。気が付いたら晴明様の屋敷の前でした」

「そうね、そうかも知れない……沙希ちゃんは優しすぎるから……」

樹沙羅さんも死んで幸せになったのね」

「ありがとう、薫姉さん。樹沙羅のことそうい風言ってくれて」

「じゃあ、沙希さんは今のことをうちの前世の那賀杜姫ながとひめに話して舞にしたんどすか？」

「ええそうよ、けれど那賀杜姫ながとひめに会ったのは結局、病気が治ってからだったから一月もたってからかしら」

「病気？」

「ええ、晴明様の屋敷に帰ったその夜から私は高熱を出して寝込んでしまったんです。だからその間のことはよく覚えていません」

「あきあは、その夜から不思議なことに胸や手が真赤に腫れ上がってしまったの」
とひづるの胸からひらひらと飛び上がった蝶が女の子となって現れて言う。

「じゃあ、胡蝶ちゃんが沙希の看病を？」
と聞くのは律子。

「いいえ、私は晴明様のお使いで飛び回っていましたが」
「では、誰が？」

「ましろ！・・・ましろ、出ておいでよ」
と胡蝶が叫ぶと沙希の身体から真っ白なモンシロチョウがひらひら飛び出てきた。

少女の姿にかわるましろ。

「ましろちゃん、私病気が回復した後、直ぐに大きな事件が次々と起こったから
寝ている間のこと聞きそびれていたの。看病してくれたのましろちゃんだったの？」

ましろは頷きながら

「玉藻さん、葛葉さん、紅葉さんもです」
と喋ってから怒ったように

「あきあ様！人と鬼とは相受け入れません。
あの病気も鬼の瘴気に当てられたに違いありません。
あきあ様の優しさは尊いものです。」

けれどその為に命を落とすこともありえます。
そうなる私達はどうなってしまうとお思いですか？」
ましろは当時のことを思い出したのか涙ながらに訴える。

「ましろちゃん、ごめんなさい。胡蝶ちゃん、ごめんなさい。

玉藻さん、葛葉さん、紅葉さんもごめんなさい。

私、あなた達のことを忘れて恋におぼれていたの。

私に愛を捧げてくれた樹沙羅にも申し訳なかった。

だつて私病気がなおつてからも腑抜け状態で何も出来なかった・・・

。今考えてもあんなに愛されたのにそんな資格がない人間になり果て

ていた。

そんな私を見て樹沙羅もがっかりしたでしょうね」

「そんなことありません。あきあ様はどんなになろうとあきあ様で

す。

あのお優しくして強いあきあ様に間違いありません。

あの時、晴明様はおっしゃっていました。

『心配するな。あきあはどんな相手であろうとその心の奥にある

優しさや哀しさというものを知ったのだ。

慟哭の中にある想いは必ずその者を大きく変えることができるのじ

や。

お前達も見ておけ、これからの安倍あきあの変貌を・・・』

とおっしゃっていました。

その後のことは私はあの重則様に命を助けられ天に投げ入れられて

眠っていたので知りませんでした、

晴明様に助けられてあきあ様に再び相おめもじして知ったあなた様

は、

晴明様の言われる通りあのとときのあきあ様ではありません、

それは哀しいほど優しく、術者としての力もこの世が出来てから

の

誰よりもお強く、それを良しとしないお心はとても悲しい・・・

そのかわり女性に対する悪辣さへの怒る心はいっそう強く、

女性に対する想いはより大きくなっていました・・・それが今の

あきあ様です……」

「ありがとう、ましろちゃん。

そんな想いで私を見ていてくれたんだ。

私ももつと勉強しなくちゃ……ね

何にしても頂点ってないはずだもの。私も再び大きくならなくちゃ」

「ひゃ……小沙希さん姉さんが今より大きくなっちゃったら、
うちらどうなるの？」

花世がとんきような声をあげる。

「花世ちゃん！うちらも一緒に大きくなるっていう意味よ」

「花世！あんたら舞妓は幾松さん姉さんを目指しなさい。

うちはうちの前世である千代松さん姉さんの大看板を目指すつもり
どす。

うちはうちのやり方で……

あんたら舞妓はもつと必死にあがくほどの修行を積まなあかんえ」

花江は変わった。今の小沙希の話の中から何かをつかんだに違いない。

貞子は凄く大きな悲しみの中から小さな希望がポツンポツンと
生まれ出る様子が見えた。泣き笑いの中からのドキドキする想いに
なんだか年も若くなったような気がする。

「お師匠様、お客様どす」

「どなたどすか？」

「へえ、三味線の三好屋はんの御主人と職人の宗太郎はんどす」

「ああ、上がってもらって・・・、小沙希ちゃんあなたのいわれた
三味線屋はんがこられたえ」

「へえ、紫苑ちゃん！一緒にいて」
と舞台を下りながら紫苑に声をかける。

入ってきた三好屋の主人と職人、そこに大勢いる舞妓や芸妓はとも
かく

看護師や有名な女優達がいるのを目をパチクリとして見つめる。

「おほほほ・・・ここにいるおなごは皆、うちの縁につづくものは
かりなんどすえ」

「それはそれは、にぎやかどすなあ」

「まあ、あんたのことやからここの世話さん思つんどすけど・・・」
と牽制する貞子。

「それはあたりまえどす。そうでなかったらこの京でお商売できま
へん」

「そうそう、老舗の三好屋はんやから安心え・・・」
今日あんたはんに来てもらったんはこの子達にお三味を作ってほし
いからなんどす」

三好屋は目をパチクリとして目に前の今迄見たことの無い舞妓を見
つめる。

その美しさには圧倒される思いだ。花街でお商売していてまだ見た
ことの無い舞妓だった。

「失礼どすけど、こちらは？」
と貞子につい聞いてしまう。

「うちの孫の小沙希え」

「小沙希？……えっ？……」

今花街で小沙希の名は一人歩きをしている。

人間国宝の井上貞子が認める唯一の舞妓……

けれど花街にいるものにとってそんな馬鹿なとつい否定してしまうのだ。

誰も見たことの無い舞妓の話……本当だったのか……

「小沙希います、どうぞよろしゅう」

そういわれてドギマギしてしまう。いい年といわれても仕方がない。

「こっちはうちの姉の紫苑います」

といって紫苑を紹介する。

姉といわれて吃驚する紫苑……けれど嬉しそうに

「うち、紫苑います」

と挨拶するのだ。

「それは、それは……」

という三好屋、さすがに老舗の主人気持ちの立て直しは見事だったが

相手は小沙希だ。何もかも見抜かれている。

「宗太郎！」

「へい……」

と持ってきた風呂敷を開けると三味線が5丁入っていた。

「ちょうど、この宗太郎が作ってきた三味線どす」

と押し出された5丁の三味線……しかし一瞬見ただけで

「駄目どすなあ、このお三味は……」

と小沙希に言下に言われたのだ。

「で……でも……この宗太郎……平成の名人と言われる宗太郎

「が作ったんでっせ……」

なにを素人に……とありありと不遜さが見える。

「確かにうちは三味線に関しては素人どす。」

「けんどうちの姉の紫苑は天才え……どうどす？姉ちゃん」

「あきまへん、一目でわかります。全て駄作どす」

「み……見ただけでわかるんどすか？」

腹をたてて言う三好屋、チラッと見ただけでわかるかと怒りで一杯だ。たとえ井上先生の孫とはいえ許せない！

「へえ、見ただけでわかるんどす」

「そ……その……その根拠は……」

「杏姉！あれを……」

一人の女性が袋に入った楽器を両手で持ってきて小沙希と紫苑に渡す。

「これが、うちの持つ琵琶どす」

と小沙希に渡された琵琶を不遜な態度で受け取ったが、じつくりと見ていた三好屋の手が震え出した。

「こ……これは……」

主人の様子を見て慌てて膝行して琵琶を見る宗太郎。主人から奪い取り琵琶を舐めるように見ている。

「その琵琶は平安時代の名工が作った琵琶どす。銘は『白虎』……」

紫苑姉ちゃんが持つのは『朱雀』どす」

「す・・・すんまへん・・・それも・・・」
と紫苑に言う。自分が作った三味線をぞんざいに横にのけた。
その風呂敷の上に宝のように『白虎』を置き、
紫苑から受け取った『朱雀』をこれまた舐めるように見つづける。

三好屋の主人はもう小さくなったままだ。

「わかりました。このような名器がこの平成まで残っているのは奇跡です。」

けんどのこの名器を普段から見ているあなた様の目から見るとわてが作ったこの三味線を一目で駄作と看破するんはあたりまえです。

願わくは、この琵琶の音色を聞かせてほしいんです」

小沙希はニッコリと笑い、紫苑に振向くと紫苑も頷いているので「いいですよ」

と宗太郎に返された琵琶を受け取る。

二人が奏するのはやはり『平家物語』・・・
けれど二人の天才の演奏・・・一遍の乱れも無い。いつ練習をしたのだろう。

その琵琶の音色といい、その謡の声といい、身震いしてしまう。

「あ・・・ありがとうございます・・・」
宗太郎が頭を下げるが、主人も同じように頭を下げるのを見て貞子
が

「どつどす、三好屋はん」

三次屋は右手を何度も何度も左右に振って

「とてもとても、わてらがお相手できるようなお方ではあらしまへん。

このようなお方がしかもお二人、目の前でお会いできて幸せもんどす

「そつどすやる、うちなんか毎日が楽しゅうてなあ」

貞子は小沙希と紫苑を褒められてもうニコニコ顔だ。

「あら、三好屋さん。あんたはんがお持ちのそのお三味・・・」
と小沙希が聞くと

「へえ、これもこの宗太郎が作ったもの、お目にかけるようなものやおまへん」

「いいえ、その袋から不思議な力が感じられるんどす。見せておくれやす」

不思議なことを言う舞妓やと思いながら、立派な袋に入れられた三味線を渡す。

袋をあけて小沙希と紫苑が頭を寄せて眺めている。

紫苑が袋から出して糸巻きを絞って調弦を始めた。

小沙希は術は見せられないので背中に手を回して『緋龍丸』を出して膝に置く。

そして

「ママ！」

と真理を呼んだ。

心得た高弟が琴を用意する。何が始まるのか、目を白黒する二人の男。

『チラッ』と小沙希を横目で見る紫苑、

それが合図で小沙希の横笛から素晴らしい音色が流れ出した。

そぞそ・・・と血の気が引く二人の男。全身から鳥肌がたっている。

何なんだこの舞妓・・・琵琶だけではなかったのか・・・だが、事は二人の男を震えあがらせる。

笛の音色に被さるるように流れる三味線とお琴の音色つたら・・・

目の前に三人の天才がいるのだ。もう身体が固まって何もいえなくなる。

三人の演奏が終った。

恐れ多いというように頭を下げつつける男二人。

「小沙希ちゃん。うちこのお三味気に入りましたえ」

「そつどすなあ、うちも心に響く音色つてこのお三味を作ったお方つて名人やおもいます。」

ねえ、三好屋さん」

「はい?・・・」

さつきとはえらい違う内容に首をかしげる主人。

「教えましょか・・・今、紫苑ちゃんの持つお三味を作ったときの宗太郎さんは本当に名人どした。」

けれど、その5本のお三味を作った今の宗太郎さんは駄目どす」

「えっ?」

「そつなんどす。心の持ち様なんどす。」

今の宗太郎さんお三味を作るような状態やおへん。」

宗太郎さん!いいかげんにそのお心の屈託つちらに話しておくれやす。」

うちらで解決出来な、どこへいっても解決出来まへんえ」

宗太郎は頭を下げたまま両手をブルブルと震えているのだ。

「そうなんか！宗太郎！・・・まさか、お前・・・カコちゃんが・・・」

思い切ったように顔を上げる宗太郎・・・
着ていた作務衣の裏につくられた大きなポケットから白い手ぬぐいを出し顔を拭う。

「わての・・・わての子供がいなくなっただんどす」

「待て！・・・宗太郎！あんさんここで話してもいいんどすか」

「へえ、わての駄作を手に取らんでも一目で見抜いたお方達どす。普通のお方やあらしまへん。それに何の手がかりも得られへん今、もう藁にも縋りたいんどす」

「宗太郎さん、この事、警察には？」

「へえ、届けました。近くの交番どすか」

「ちよつと待つて・・・瑞姉！モバイルを」

その声に急いでモバイルを持ってくる瑞穂。

モバイルの操作で呼び出すのは京都府警の署長だ。

「あつ、署長さん、日野あきあです。」

婦警さん達への事件への介入の許可ありがとうございます」

「なんのなんの、このたびの怨霊・藤原元方との戦い、

それまでの土御門家の事件やレイプ殺人犯の事件を解決されたあなたです。

これぐらいのことたやすいことす・・・それで、何かありましたか？」

「はい、少しお待ちください」

宗太郎を見ると驚きの目で小沙希を見ている。主人にしたってそう
だ。

「子供さんの名前は？」

「あっ……はい……上原カコ……いいいます」
すつと出てくるメモ用紙にペンで『上原カコ』と書く小沙希。

「事件のこと提出した交番と提出した日は？」

「へ……へい……三条にある交番で……10日前に……」

「署長さん、お聞きになりました？」

「少し待ってください……」

「いえ、何かわかりましたらモバイルに連絡を……」
と、いってモバイルを切る。

飛び出るような目で見ている男二人、舞妓の思わぬ正体を知った驚きは大きい。

今、この日本中で大評判の天才女優なのだ。

小沙希は祖母に振向くと

「お婆ちゃま、うち紫苑ちゃんのこと、力を使わずに事件を解決しようと思っていたんですが、

そうもいかんようになりました」

「それはどういう意味え」

「へえ、紫苑ちゃん的事件とカコちゃん事件、根っこは同じどす」

「根っこが同じ？……それじゃあ……」

「へえ、緊急に解決しなければカコちゃんの命があぶない！」

と、いって祖母に頷く。

貞子は男二人をきつとした目で見つめ

「三好屋はん、宗太郎はん。今から見聞きすること誰にも洩らす」と厳禁どす。

見ざる言わざる聞かざる……いいどすな」

こう貞子にいわれる証破ればこの京都で商売はできないし、生きて

もいけない。

「へへへ、わかました」と平身平頭する。

再び小沙希はモバイルを起動させる。

「金沢さん！」

「あっ、あきあさん。どうしたんですか？」

「今どこ？」

「三条の交差点です」

「悪いけどこれから言う住所に行って人を一人ここに連れてきてほしいの。」

上原宗太郎という人の奥さんの恵美さんよ

「わかりました・・・で住所は？」

「ごめんなさい、ご主人に教えて貰うから他の車の邪魔にならないよう

パトカーを止めていてくれる？・・・宗太郎さん

「へ・・・へい・・・どうして家内を？ 家内はこのことで身体を悪くして臥せっていますんで・・・」

「だから・・・だから連れてきて貰うんどす。」

この家の地下の女性専用の最新の病院施設に入れなければ恵美さんは元氣にならしまへんえ

と言いながらモバイルを宗太郎に渡す。

「そのまんま、話せばいいんどす」

戸惑う宗太郎だが何とか住所を言ってモバイルを返す。

そのときだ『ピーピー』とモバイルが鳴った。

京都府警の署長からの連絡だった。

「あきあさん。確かに失踪届が出ています。

2歳の子供に失踪届はおかしいんです……だからこちらも内密に捜査をしています」

「捜査を？……誰が担当されているのですか？」

「はい、畑長こと畑野俊吾部長刑事と川合涼子巡査長です」

「それじゃあ、すぐに……」

「もう、とりましたよ。畑長は今日はこちらで取調べがあるので川合刑事がそちらにむかっています」

「そうですか……御配慮感謝します」

男二人はこの成り行きを呆然と見つめている。

ただ三味線を見せに来ただけでこんな展開になるなんて……。

「ただいま！……あら、どうしたの？」

帰ってきた恵子、礼子、秀美の3婦警、

「うん、先にお婆ちゃまに……」

「はい」

といて座敷に入って座ると

「御婆様、ただ今戻りました」

と頭をさげる。

「おお、無事でなによりです」

ニッコリ笑う。こうして女達が無事に帰ってきて挨拶される嬉しさはなによりだ。

驚いたのは男達だ。制服姿の婦警達が『ただいま』と挨拶する異様さ……

「おほほ……驚いてはりますな、三好屋はん。

うちんところ賑やかになっただんどすえ。ここにいるんは皆うちの娘

や孫どす」

貞子が言うのを

「娘?・・・孫?・・・」

と首を振るしかない男二人。

「お姉ちゃん達もそこで聞いてくれる?」

「うん、いいわよ」

と3人共、小沙希の後ろに控えた。

「まずは紫苑姉ちゃん」

「姉ちゃんて言ってくれるの?」

「あたりまえどす。紫苑姉ちゃんの前世の那賀杜姫様は
うちながとひめに舞を作って頂いた恩人どす。

さつき舞った鬼女・樹沙羅の舞もうちが無理言うて第三幕に入れて
もろたんどす。

樹沙羅の舞は実際に樹沙羅がうちに見せてくれた舞そのものどした。

那賀杜姫様はうちの言うことそのまま聞いて舞の中に入れてくれた
んどす。

そやから那賀杜姫様はうちのお姉ちゃんみたいな人だったんどす。

生まれ变りの紫苑姉ちゃんをお姉ちゃんって呼んでもなんの支障も
あらしまへん」

「優しいなあ・・・優し過ぎますえ・・・」

「ほんに沙希姫様は優しいお方・・・」

貞子と高弟がいつものを恥ずかしそくに聞く小沙希。

「ただいま!」

大勢の声が玄関から聞こえる。そして多くの足音・・・皆廊下に

正座すると

「ただ今、帰りました」と挨拶する。

「ようよう、無事にお帰りなされた。さあさあそんなところに座らず、座敷におはいり」

その声に

「はい」

と元気に答えて

座敷に上がり、先の三人に声をかけながらその後座った。

残った一人、ここに来るのが初めての

「初めてお目にかかります。京都府警の川合涼子です」

と貞子に挨拶をしてからあきあに向き直り

「署長からの話で私の担当している事件にかかわりのお話がある・・・と聞きましたが」

「へえ、これからの成り行き見ていてほしいんです」

「わかりました」

と立ち上がって座敷にあがった。三人の婦警の示すその横にすわる。

「皆さん、おかえりやす。これからお話すること事件に関係のあるお話です。

よう聞いて事件の核心をつかんでほしいんです」

さっそくバックから警察手帳を出す川合刑事・・・婦警の行動も同じだ。

警察手帳をあけてメモを取る準備は終わっていた。

「まずは紫苑姉ちゃんからどうぞ。紫苑姉ちゃんとカコちゃん、他人

やおへんえ」

いきなりの沙希の言葉にこの部屋にいる女達も男二人も吃驚だ。

「えっ、沙希！それどういう意味なの？」

「へえうちの言葉通りです。緋鳥礼子さん、佐藤秀美さん。

あんた達二人元方の事件でうちが通力を得るところを見ておられて
おりましたなあ」

「はい確かに・・・」

「飛鳥警視正と立ち会っていました」

「うちは、通力を普段は封印しているんです。もし開放していたら、
うち気が狂ってしまいます。

たくさんの人たちの心の声が聞こえ、あらゆるところが見えるん
です。

そやから封印しとかな生活できまへん」

「えっ！そんなに・・・」

という声があちこちから聞こえる

「まったく力を持つって大変なことです。

うち、紫苑姉ちゃんの記憶喪失のこと、ただごとやあらへん思
うた
んは

1年間も記憶なくしてこの祇園界隈に謡詠みとして流しているの
誰からの搜索の報告もあらへんことと誰からの接触もあらへんこ
と
です。

お姉ちゃんの言葉使いからいうてこの京都生まれは間違いおへん。
そんなお姉ちゃんを誰も知りはらへん。これおかしいんと違いま
す
か？

1年間も流していれば同じ京都です、
心安い人一人や二人出会ってもおかしゅうないんと違いますか・・・
・それで聞きます。

紫苑姉ちゃん、この1年間に命が危ないことおへんかった？」

始めは首を捻っていた。でもはっとして顔をあげる。

「どうやら思い当たることあるんどすなあ」

「うち、自分のこと、なあんも判からへん時どした」

交差点で一回誰かに押されて車道へ飛び出してしまったことがあったんどす。

けんど『危ない！』ゆうて男の人に腕引っ張られて、気が付いたら歩道に座ってました。

それともう一度、ビルの下で座っていたら上から看板が落ちてきたやけど

それも男の人に助けられたんどす。

けんどどっちも気がついたら男の人おらんようになってました」

「どうやら紫苑姉ちゃん、狙われていたんどすえ。

けんどお姉ちゃんを守る人達もいたんどす。

きつとその二派の者達、闇の中で戦っていたんや思います」

「戦っていた？・・・」

「へえ、誰も知らないところで戦いがあったということどす。

そして、両方に被害が出たからしばらく牽制しあっていたと思うんどす。

そのうち紫苑姉ちゃんの状態がわかった・・・記憶喪失・・・これは両派共好都合どした。

紫苑姉ちゃんを狙っている方にとってしばらくは秘密を話される心配はなくなつた。

守るほうにしても紫苑姉ちゃんは狙われることが少なくなる。

いずれにしても姉ちゃんには敵味方の見張りが張り付いているんどす」

「えっ?・・・うちに・・・」

「それって、あきあさん・・・」

と川合刑事が立ち上がるうとするが手でそのままという振りをしてから

「油断も隙もあらしまへん。・・・玉藻、葛葉、紅葉、ましろ、白虎丸」

と声をかけると身体の中から5つの光が飛び出して庭から上へと上がっていく。

初めて見るあきあの式に驚く川合刑事と男二人・・・あとの女性達は慣れているので微動だにしない。

「心配しはらんでもよろしい。川合さん。あの子達に勝てる人ってこの世にいてまへん」

屋根上でバタバタ走り回っている音がここまで聞こえる。

女達を座敷奥に固めおいて婦警の一部を守るように配置し、廊下を隔てた座敷うちで様子をみる婦警達。

黒い影が一つ屋根から飛び降りてきた。でも足を痛めたか立ち上がれない。

そこを玉藻、葛葉、紅葉が黒づくめの覆面の人間を後手で押さえつけた。

「川合さん、手錠を・・・」

「わかりました」

とバックから手錠を取り出すと庭に飛び出し手錠をかける。

空からもう一つ白いものが降りてきたと思ったら、それはましろと白虎丸だった。

白虎丸は口に黒い衣装の人間を啜えてゆっくりと下りてきた。

おっかなびっくりの川合刑事。

「だいじょうぶです、今のうちに手錠を」
「はい」

小沙希は縁に座っていた。

「玉藻さん、葛葉さん、紅葉さん、この者の巣窟は判りましたな」
「はっ！主殿・・・では」

言葉がいらぬ主従だ。いきなり光の玉になって薄暮の空に消えていった。

『ガオウ』と唸って小沙希に近づくと白虎丸。

「白虎丸もましろちゃんもごころうさん」
といいながら白虎丸の首筋を撫でる小沙希。

「あと一働きしてきてね」
頷くましろに

「待って！」

と声がかかって座敷の奥から蝶が一匹ひらひらと飛んで来た。
ましろの横で少女の姿に変わる。

「あきあ！私も行く！」

「胡蝶さんが行くほどのことはないと思うけど」

「だって、ひづると遊んではかりも楽しいんだけど
たまには一働きしたいもの」

「ふふふ・・・あなたもこういうこと好きよねえ」
じゃあ、ましろちゃんはカコちゃんのことお願いね」

「はい、あきあ様！おまかせを・・・」
と二人と1頭も光の玉となって空に消えていった。

空を見上げて消えていった式達のあとを見ていた皆の視線が小沙希

に移る。

微かに頷くあきあに婦警達の半分は玄関に急いだ。靴を履いて庭に回る。

川合刑事に靴を渡す婦警。

座敷に残った婦警の一人に声をかける小沙希。

「恵子さん。署長に連絡しておくれやす。待機してはる刑事さんたちに出動要請を・・・」

そして、十数人の悪党達をお引渡しするんで、出来れば護送車の配車を頼んでくれはる？」

「わかりました」

とモバイルに手をかける恵子。

「瑞姉！」

と座敷奥に控える瑞穂に声をかけた小沙希。

「ご苦労さんどすけど、もう金沢さんが病人を連れてくるんどす。看護師さんと出来ればストレッチャーを・・・」

「わかったわ」

と立ち上がる瑞穂。

「わたしも行く！」

とひづるもびよんと立ち上がって地下に走る。

ニッコリと笑った小沙希。座ったままであらゆる手配りをして動くうとしない。

自分は約束通り動かずにこの事件を解決しようというのか・・・

「ねえ、沙希！」

と声をかけたのは紫苑だ。さっきから話が中断していたこともあり、

中途半端な状態で混乱しているのだ。

「さっきの話のことですけど」

「えっ？・・・ああ、カコちゃんのことですな。」

カコちゃんは紫苑姉ちゃんの母親違いの年の離れた妹です」

「えっ？妹？・・・」

「そうです、うちに判るのは第三者の意思のことです。」

その人の想いがカコちゃんを守っているんです」

「守ってる？・・・カコは守られとるんですか？」

「そうです。宗太郎さんの良く知る人によって今も守られています」

「あっ！・・・じゃあ・・・じゃあ、どうして！・・・」

「宗太郎さん夫婦に教えるわけにはいかんかった。」

宗太郎さん夫婦にはこの男達の目が常に光っていたんです。

そやからその方は夫婦の苦しみ悲しみが手に取るように判っていた
んですけど

知らせるわけにはいかんかった。カコちゃんを守るためです。

例え奥さんが苦しみに倒れても歯を食い縛って耐えたんです。

さあ、金沢さんが帰って来たようですよ・・・」

その声に先ほどから控えていた看護師達がさっと立ち上がって小走り
りに玄関にむかう。

「ただいま！・・・あっ！・・・お願いします」

そんな金沢婦警の声が聞こえる。看護師達に病人を渡したのだろう。

直ぐに目の前の廊下を急ぎ足でストレッチャーを押して看護師達が急ぎ足で地下に向かう。

「あっ！」

と妻の行くほうに立ち上がろうとする宗太郎。

「宗太郎さん！落ち着きなはれ、心配はいりまへん。」

恵美さんは直ぐに元気になって戻ってきかります。それにここから奥は男子禁制どすえ」と笑う。

その笑顔に皆はこの急な展開の中で入っていた力がスーっとぬけるのだ。

遠くから何台ものパトカーのサイレンの音が近づいてきた。

「さて、大八木さん達が来たようどすし、そろそろあの子達も戻ってきます……」

と云ってから

「礼子さん、使い立てして悪いんどすけど、来られた皆さんお庭に通して欲しいんどす」

「わかりました」

と玄関向かう緋鳥礼子。

『キキー』と隣の病院の駐車場に何台かの車の停車音が聞こえたのは、しばらくしてからだ。

緋鳥礼子の指志によって誘導されたのだろう。

それからバタバタと走る音がして庭に入ってきた。

制服組の警官達と私服の刑事達だ、無論牛尾の姿もあった。

「あきあさん！この二人・・・だけですか？」

手錠をかけられている二人を指して言う大八木部長刑事、

「もうすぐ・・・あっ！戻ってきたようですよ」

と小沙希が空を見上げる。

その視線を追うように見上げる警官達・・・

その視線の中に入ってきたのは不思議な光景だった。

着物の女三人が三角形に佇んだその中に薄っすらと光る円があるのだ。

それが真上に来てそのまま下りてきた。

京都府警の警官達、日野あきあの力というものを知らなければ大騒ぎになる光景だ。

地上の降りてきた女達三人の中の円はスッと消え、

男8人と女3人がグルグル捲きに縛られていた。

「主殿、ただ今戻りました」

「ご苦労さん、怪我はなかったですか？」

「何のこれしきの人数、物の数ではありませんでしたわ。

ただ、チヨコマカと逃げるので思わず力を使ってしまった」

「しかたがないです・・・あら、どうしたんえ？玉藻さん・・・」

しきりに空を見上げる玉藻に声をかける。

「いえ・・・何・・・」

「ふふふ、心配なのね・・・胡蝶ちゃん・・・」

「と・・・とんでもない、あんなこまっしやくれた女・・・」

「おほほほ・・・いいんです。ほら、言っている傍から帰って来ましたえ」

「えっ！・・・」

といって振り返ってから、慌てたように光の玉になって小沙希の身体の中に

消えていく。呆然となった警官達・・・そして捕らえられた男と女達。

「ふふふ・・・ごうじょっぱりな玉藻さん」といつて笑ってから

「さあ、あなた達もお戻りなさい」

「あのう、主殿。ましろは？」

「あなたも心配性どすえ、・・・ましろちゃんはお使いに行ってもらっているんで大丈夫どす」

それを聞いて安心したのかほっとため息をついて葛葉も小沙希の身体に帰って行く。

紅葉は最後に小沙希と『ニヤッ』と笑い合って小沙希の身体に消えた。

捕らえられた男女達ともこれを見て、自分達の計画をぶっ潰された恨みを吐こうとしたが、これでは何もできない。

ブルブル震えるのが精一杯だ。

「わあ〜」

と声が上がったのは警官達からだ。

大きな白い虎が空から降りてきたのだ。吃驚して声を上げるのも仕方がない。

ここって一体・・・化け物屋敷か？・・・と声をあげてしまっところだった。

「ごくろろつさんどす。白虎丸」

と小沙希が声をかけると啞えていた大きな袋の口を離すと

小沙希に寄って来て、首筋を撫でられゴロゴロと喉を鳴らす。まるで猫だ。

「さあ、戻りなさい」

と声をかけるとこれも光の玉となって小沙希の身体に消える。

あっけにとられるってこのことだろう。

文字通りにこの光景を見ている皆・・・そして、最後に残るのは・・・

さきほど『白虎丸』と呼ばれる大きな虎が地上に降りたとき

その背中からひらりと飛び降りた少女・・・が一人だけになった。

少女は虎が消えるのを待ってから、手を虎が啜えて持ってきた大きな袋の上に

かざしてから空中で掴み取るような形をすると袋が消えてこれまた括られた男7人、女1人が出てきた。

これで19人の男女がこの庭に警官達に囲まれているのだ。

「あきあ！」

「じくろつさんどす。胡蝶ちゃん何ともなかった？」

「平気よこんなの。それにあいつががんばったし」

と白虎丸の働きを伝えてから

「捕まえる前に見ていたらあいつら大事に仕舞いこむ書付があったから持ってきたわ」

と懐からたくさん書類類を出して小沙希に渡す。

「ありがとう、胡蝶ちゃん。ゆっくりしてね」

「うん」

といって蝶に戻り座敷の中に入っていつてひづるの胸のエンブレムとなった。

警官達にもう驚きはない。よくみれば自分達の仲間の婦警達には少しも驚きはないのだ。
そんな彼女達に無様な真似は見せられない。

小沙希は胡蝶の持ってきた書付を読んでいた。その目がキラリと光ったのは誰も気づかない。

「大八木さん」

と呼ぶ小沙希、読んでいた書付を大八木に渡すと次の書付に目を通しだした。

大八木は読んでいくうちに書面を持つ手がふるふる震えだした。

「あ・・あきあさん・・これは・・」

「ええ、犯罪の契約書どす」

「こんなものが有る以上・・」

「ええ、今迄かなりの暗殺をおこなっていた思いますえ」

「沙希！これどういことなんどす？片方の人たち私の命を助けてくれたから

味方じゃないんどすか？」

「紫苑姉ちゃん。命を助けられたからって味方思っんは早とちりどっせ。

こん人達、その時点で姉ちゃんが生きている方が得をするから命を助けたんどす」

「えっ？それって？」

「そうどす、いわば一つ穴の貉いことどすか」

「そんなあ・・」

呆然と庭を見る紫苑。

「大八木さん」

と自分の横の縁を指して残った書付を渡した。
大八木はその縁に座って書付を読み出した。
1課の刑事達がその周りを取り囲む。

「瑞姉！日和子伯母様に連絡を……」

「わかった」

と素早く連絡をとったモバイルを小沙希に渡す。

「沙希ちゃん、どうしたの？」

「日和子伯母様すいません」

「あら、私に謝らなければならぬように行動をおこしちゃったの？」

「うううん、私はここから一つも動いていないんだけど、

安楽椅子探偵の事件がとんでもない事件に発展しちゃったの」

と三味線を購入するために三好屋に来てもらったことから
紫苑のことと絡んで通力を発動させて暗殺集団を自分の式神に捕ら
えさせた事、

その結果、胡蝶が持ち帰った書付がとんでもないものだと言った。

「じゃあ、その書付を今、大八木さんが読んでいるのね」

「ええ、そうなの」

「悪いけど、大八木さんに代わってくれる？」

「はい……大八木さん！日和子伯母様……」

いいえ、飛鳥警視正が変わってくれて……」

モバイルを渡された大八木部長刑事

「あっ！これは警視正」

と行って立ち上がった。

「また、あきあが手数をかけましたね」

「いえいえ、とんでもないことです。今回は連絡を受けて飛んで来ただけです」

「それで書付の内容は？」

「はい！これは大変なものです。京都府警ばかりでなく東京の・・・
いいえ、

日本中の警察に関係してくるものです」

「それは一体？・・・」

「殺人の契約書です」

「えっ？殺人の？・・・」

「はい、どうしてこんな危ないものを取り交わしたか又、残していたのが全く理解できません」

「一つだけ教えてくれない？」

「はい、ついこの間あるメーカーの課長が自殺して検察庁の調べが出来なくなつた

国会議員との贈収賄事件。その課長の殺人の契約書がありました」

「まあ・・・」

「あとは自殺となつた事件や事故で死んだと思われる事件で我々が知っているものもいくつかありますが、知らないものもたくさんあります」

「それはどこで？」

「はい、これを見ますと北海道から沖縄まで20件ほどです。契約金も5000万円から1億円までさまざまです」

「お願い！それを警察庁にFAXしてくれない？」

「わかりました。うちの川合刑事とかわります」

川合刑事はモバイルを受け取ってFAX番号を聞いてから

金沢巡査に連れられて書付を持って玄関へ走った。

「それじゃあ、大八木さん。この者達に少し質問してよろしおすか？」

と言ってからまずは玉藻達が捕まえてきた集団の一人を指差す。

「質問？・・・どうぞどうぞ」

と行って警察手帳を出してメモしようとする。他の警官や刑事達も同じだ。

「暗殺集団”レッドアイ”の首領・穴山大介・・・

そして、ブラックスターの首領・笥十郎」

と今度は白虎丸が捕まえてきた方を指差す。

「牛尾さん。笥十郎の顔の皮を一枚めくっておくれやす？」

それを聞いて憤怒の声をあげる笥十郎。

牛尾にしても何のことが判らないがあきあの言葉に反応した笥十郎に対する不信感が大きい。

近寄り懐中電灯で照らして、よく見て見ると首の所とか耳の所とか何かおかしい。

思い切ってそこを指でこすってみると皮がべろんとむけた。

「何だあ！こりゆあ・・・」

と皮をひんむくとそこからは・・・

「ええ〜」

という驚きの声。

「おほほほ・・・あなたの素顔、おもしろおすえ・・・笥十郎。

どういうわけか敵である穴山大介と瓜二つ・・・

それは仕方ないんえ双子だから・・・そうどずな穴山小介」

予想したとはいえ驚きは両方の配下のほうが大きかった。

「穴山大介と穴山小介は若いときに犯した犯罪・・・暴力団の資金を奪い追手から逃れるためにアメリカに密入国したんだぞ。」

そして傭兵として雇われて徹底的に殺しのテクニクを教わり、各国の戦場を飛び回っていた・・・ということぞす。それにこの二人が入っていたんだすからろくな傭兵部隊やおへん。要人殺しは勿論、金品の略奪、女性をレイプのあげく殺すことは日常茶飯事ぞした。

けんどそんなこと天がほつとくわけありまへん。雇われた国の部隊から急襲をうけて傭兵部隊はこの二人を除いて壊滅したんだす。

この二人はどこで覚えたか変装のテクニクを使い逃げ延びたということなんだす」

「き・・・貴様！どうして？・・・」

「知ったのか言うことぞすやる。それはあとで教えてあげます。まだまだあるあんたらの悪辣さ・・・二人にはもつと配下がいたはずぞす。」

けんどあんた等は反勢力をつくり、配下達を争そわせた。

なぜなら、部下に分配金を渡すのが我慢できなかったからぞす」

「ええ〜〜」

「本当か！」

膝立ちして自分の首領を睨みつける。

「あんた達は時々入れ替わっていた。

その上配下にも変装して首領に対する不平不満を聞いていたんだす。」

不平を持つものは消去どす。配下は使い捨て……それしか思っ
てまへん」

「くそ！」

「畜生！」

掴みかかるうとするものもいる。

でも、括られている上、警官達に静止されればどうしようもない。

「あんた達二人の悪埒さ、吐き気がするえ。」

けんどうち、どんな場合でも人の命は大事なもの思っているんどす。

そやからこれからあんた達全員、嘘いわれへんようにしよう思っ
てます」

何を言っつてやがる。フンっとそっぱを向く暗殺団。

その時、配下の一人が

「あっ！」

と大声を上げた。

立ち上がった舞妓の両の瞳は閉じられていたが

その額にランランと輝く一つの瞳。

「ば……化け物！……」

「失礼なこと言わんといっておくれやす。うち化けもんと違いますえ。」

これは天眼通いしまして、ついこの間うちが得た通力どす。

人のこと何でも判っつてしまふ力なんどす。

けんどうち、こんな力使っつんはあんた達みたいな悪党だけどす。さ

あ、これからは正直になるんえ」

と言っつてその目から金色の光が出て悪党達を照らすのだ。

その後はぐつたりと横倒しになった。

「心配おへん。直ぐ気が付きます。」

あとの取り調べこの人達、嘘を言おう思っても本当のことしか言えまへん」

「嘘を言えない？これは助かります。」

事件は大変な事件ばかりですが案外早く解決するかもしれませぬ」

「へえ、うちはここまでです。あとはよろしゅうに」

「判りました。たしかに悪党達を受け取りました」

「これ、彼らのアジトです」

とメモ用紙を大八木部長刑事にわたす。

「確かに・・・」

と言ってメモ用紙を受け取ってから警官達に声をかけると悪党達を引っ立てていく。

大八木刑事に何事か囁いていた川合刑事だけが残り、

「私が担当しているカコちゃんの行方不明がまだなんです」と小沙希に問い掛ける。

「心配いりまへん、それも直に解決します。さあ上がってお待ちや
す」

「どうぞです？三好屋はん。うちの小沙希ちゃん」

「へっ・・・へえ・・・寿命が延びたか縮んだか判りまへん。」

けんどなにかお芝居を見ていたようどした」

「そつどすやろ、そやからうち今から小沙希ちゃんの舞の会が楽しみで楽しみで」

「舞の会？それはなんどす？」

「今度、南座で小沙希ちゃんの舞をあの小野監督はんと・・・それアメリカの・・・そうそうジョージ・ルーク監督はなが撮影されるんでその予行演習いうんか・・・舞の会を開くんどす」

訳が判らないという顔をする三好屋の主人、

師匠の言葉足らずの説明を高弟の一人が補足すると

「わてらも・・・わてらも見れるんどすか？・・・」

「ああ・・・来たらええ。ただどすけど凄いもんが見られるんどす。それこそ寿命が何年も延びる思いますえ」

「お婆ちやま。もう、止めといておくれやす。

そんなこと言われたら、うち恥ずかしゅうて・・・」

そんなことを言う小沙希は本当に可愛い舞妓でしかなかった。

先ほどの凄い力を発揮した舞妓とは全くの別人だった。

「宗太郎さん！奥さんえ」

と言う小沙希を見上げてからその視線の方を振向くと開けた障子の影から小走りに走ってくる恵美。滑るように座り込んで宗太郎に抱きついた。

「あなた・・・」

「恵美！だいじょうなんか！」

「へえ、お医者はんはんに診てもらて、温泉に入ったらすぐに元気になつたんどす」

「温泉？・・・」

「へえ、けんどここのは女性しか効かへんのどす」

「まあまあ、お二人共、・・・あっ！カコちゃんが来ましたえ」

「えっ？」

と夫婦顔を見合わせてからガバツと立ち上がった二人、
小沙希のいる縁側まで飛んできてその視線の方向を見る。

真丸い月を背景に3つの人影が影絵のように下りてきた。
真中の小さい子が両端の女の子と女性の手をしっかりと握っているのだ。

庭に下りてきた3人、小さな女の子はキョロキョロと周囲を見ている。

「あつ！カコちゃん……」

と縁から飛び降りた恵理が膝をついてカコをしっかりと抱いた。

「母ちゃん！痛いよう」

「あつ！ごめんね……」

と慌ててカコから腕を外し、身体をさすり続ける。

「カコ！」

と恵理の後ろから声をかける宗太郎。

「あつ！父ちゃん」

と宗太郎に飛びつくカコ。

「カコ……カコ……無事だったのかあ……」

父と母の喜びに対してカコが嬉しそうに言ったのは

「あのねえ、カコねえ。お姉ちゃんと叔母さんとお空を飛んだんよ」

というカコに言葉が出ず『うんうん』と頷く両親。

「さあ、カコちゃん。下でお医者さんが待っているんえ。

それが終ったらお母ちゃんと温泉入ってきよし」

「うち、お医者さん嫌や！」

「どうしてどす？」

「痛い怖いから……」

「ああ、注射？注射なんかせえへんよ」

「本当？」

「本当・・・うち、約束するえ。カコちゃん、悪い奴らに追われたでしょ」

「そやから検査するだけどす」

「それじゃあ、行く」

「といって母の恵美に連れられて心配そうに待つ看護師達の方に歩いていく。」

その姿が障子の向こうに消えるのを待って、小沙希のほうに振り返った宗太郎が

「本当なんですか、カコが悪い奴らに追いかけられたって」

「本当どす」

「じゃあ、あいつ等が・・・」

「へえ、・・・そんなカコちゃんを助けて匿ったんがここに居られる庵主様で蓮昌れんしょう様どす」

そついう小沙希を驚いた顔で見つめる白い頭巾に紫の袈裟姿の蓮昌尼。

「あなた様は・・・あなた様は一体どういってお方どす？」

「うちはただの舞妓どす」

「言ってるから」

「それでましろちゃん、どうどした？」

「はい、あきあ様。あきあ様の申される通り、屋敷裏の古井戸に・・・」

「そつどすか・・・わかりました。」

「ましろちゃん、ごくろうさんどした。ゆっくりお休みなさい」

「はい」

「といってふうつと光の玉になって小沙希の身体に消えた。」

こんなこと見慣れている人には何とも無い光景だが、いきなり連れてこられたものには驚きしかない。

しかし、周りの女達はもうニコニコするだけでホッとして小沙希を見ているのだ。

そんな時だ。舞台上に仏の姿・・・阿弥陀如来だ。

驚いた蓮昌尼は平伏するが、後のものはただじっと見ているだけだ。

「阿弥陀如来様、菩薩様のご返事はどうぞでした？」

「又、沙希は無茶を言うといつて、頭を抱えておられた」

「小沙希ちゃん！菩薩様を困らせたんどすか？」

「困らせるつもりはなかったんですけど・・・うちの通力余りにも強すぎるんどす。

半分でも弱して貰おう思て阿弥陀様をお願いしたんどす」

「力を強くしようと努力する人間は過去にも大勢いたが、

沙希のように力を弱くしようとする者はいなかった。沙希はこれで何回目じゃ」

「うーん」

と指を折る小沙希。

「確か4回目どす」

「世界中の女に沙希の力を制御するものを分け与えるのはこれ以上は無理だ」

「そつどすか・・・」

「しかし、毎日のよう皆で沙希の事を相談するのは本当に大変じゃ・・・」

「えっ？皆さんて？」

「菩薩様が集められた。わしや大日如来。竜神の緋龍や紅龍もいる」

「えっ？・・・紅龍様はもう許されて天界にのぼられたんですか？」

「それは沙希のせいだ」

「え？・・・うちの？・・・」

「この間、坂本竜馬が沙希の守護をするに手が足りないと言っていたな。」

それはここにいる皆も聞かれた通りだ」

と周囲の女たちを見渡す。

黙って頷く女達・・・それを驚いた目で見るのが男二人と尼さんだ。

仏の声をこうして聞く不思議。こんな奇想天外な事あるうはずはない。

「沙希が何かをするたびに守護する皆が、右往左往している」

「うち、今はおとなしゅうとりますけど・・・」

「ふゝむ・・・沙希は何かえらく勘違いしているようだのう」

「えっ？・・・けんどうち、今日は一步も表に出まへんどした。ここにいる皆が証明してくれませえ」

「やはり沙希は勘違いしておる」

「えっ？違うんですか？」

「そうじゃ。沙希を守護するいうことは何も沙希だけの身体を守るだけではない。」

沙希の言った事、やった事全てに波及するんじゃ」

「じゃあ・・・」

「そうじゃ・・・女達を殺した事件のときはどうだ？」

「お婆ちやま達や高弟の叔母ちやま達・・・菊野屋のお母ちゃんや舞妓や芸妓のお姉ちゃん、日和子叔母様や早瀬のお姉ちゃん達、それに映画関係者・・・」

「多いのう・・・土御門の事件・・・あの時はどうじゃ。」

沙希が『般若童子』として復活した蘆屋道満を倒したときじゃ

「えっ？」

という顔の何も知らぬ者達、あの『般若童子』が目の前にいる・・・。

「あの時はさっき言った人達に比叡山の蓬栄お爺ちゃま、天鏡兄さん、

武者僧の兄さん達、そして土御門の叔父様達・・・」

蓮昌尼にとっては会いたくても会えぬ雲の上の存在ばかりだ。

「増えたのう。それから怨霊・平将門との戦い・・・

そしてこの間の怨霊・藤原元方との戦い・・・

ももっともって人数が増えるのではないか」

「へえ、500人以上と1000人以上・・・」

「凄い数じゃ。それをあれだけの天人で守護する。沙希はどう思う？」

『うん』と額に手を当てて座り込む小沙希。

「うち凄い迷惑かけとっただんどすなあ」

「でもものう、あれを解決出来るのは沙希だけなのじゃ。

沙希がいなければ、この京都焼け野原になっておろう。

それだけではない、朱雀門が開いていたら、

この日本中・・・いや地球の現世の人間は全滅していたのじゃ」

「そうどす、そうどす。小沙希ちゃん。あんたがいなかったら皆ううして

ここにおられへんかったんどす」

「そうよ、沙希ちゃん。あなたを守護する人って大変だと思うけど、沙希ちゃんがいなかったらと思うとぞつとぞつとするよ。」

薫がそういうと沙希は皆に方に座りなおして

「でもうち、もっと慎重に行動します。そやからこれからも見守っておくれやす。」

と深々と頭を下げている。

阿弥陀如来がにやつと笑ってから

「菩薩様からの願いがある。」

「阿弥陀様！、菩薩様の願いというのは？」

「沙希の笛が聞きたいと頼まれてきた」と言われてから消えていく。

沙希が両手を前に出すと現れたのは「翔龍丸」

笛の音が流れ出したとたんに出てきた人が魅せられていく。

心地良い涼風が皆の頬を撫で、その音色が心にも肉体にも生命の息吹を与える。

庭からは土着していた古い魂が昇天する。

目を閉じて笛を吹く小沙希の身体に重なって見えるのはやはり菩薩様だ。

蓮昌尼は数珠を両手で摩りながら御参りをしだした。

僧侶としてありえない光景ではあるがもうありがたくて夢中でお参りしているのだ。

笛の音が消えていく……

身体の中に爽やかな風が吹き込んで心の中の灰汁が消え去り、

皆の顔にあった疲れがきれいに払われていた。

目の前で繰り広げられるいろんな展開に正直ぐったりとしていたのだ

「あのう、このお方はどういうお方でございましょう」

直接話し掛けるのが恐れ多いと貞子達の方に向き直って聞く蓮昌尼。

「うちの孫で小沙希います」

「小沙希様？・・・あのう、失礼ですがあなた様は？」

「井上貞子です」

「では、あなたが京舞の人間国宝である井上貞子先生ですか？・・・

じゃあ、ここは・・・」

「へえ、うちの家です」

もうなにおかをいわんや・・・だ。

「本名、早瀬沙希。世界的に有名なビジネスソフト”ワープスロウ”
”や

今回映画化されたゲームソフト『妖・平安京 雪の章』の開発者で
す

これは律子の声だ。

小沙希は吹き終わった横笛を持ったまま膝の上においた自然な姿で
座っている。

「芸名、日野あきあ。天才女優として今、テレビや映画で活躍中
す

と早乙女薫。

「最後に陰陽師、安倍あきあ。これは安倍晴明様につけてもらった
名前です」

大空圧絵も続けてそう言った。

「あのう、うちのことはそこでストップです。」

先にこの事件のこと解決しとかな、ほれ川合刑事がじりじりしてます」

「えっ？じりじりだなんて・・・そんなあ・・・」

小沙希は慌てて胸の前で手を振る河合刑事にニコニコと笑顔を向け終わると

「紫苑姉ちゃん・・・先ほどカコちゃんは母親違いの年の離れた妹や・・・とうち言いましたなあ」

「へえ、けどうちなあんも覚えてへんのどす」

小沙希は軽く頷くと

「姉ちゃんのこと言う前に、ここにおられる蓮昌尼様のこと教えておきます。」

お婆ちやまや高弟の叔母ちやま達なら、

十数年前に突然現れた日本舞踊界の不世出の天才舞姫こと常盤桜蓮のことを知つとられるはずどす」

「おう・・・おう・・・これは懐かしい名前を聞くもんどす・・・けんどのあのお人は交通事故かなんかで亡くなった・・・えっ？では・・・」

「はい、わたしがその常盤桜蓮のなれの果てです」

という蓮昌尼ではあるが貞子や高弟達が蓮昌尼を見る目がガラリと変わった。

例え今がどうであろうとも一度は同じ道を歩んできた仲間である。

そして皆の愛して止まない沙希姫に今又、一人心強い出会いが生まれたのだ。

「蓮昌尼様はね、紫苑姉ちゃん。」

ああ言つて御自分を卑下しとられるんどすけど、

たったお一人で紫苑姉ちゃんとカコちゃんをこれまで悪党達から守りつづけたんは大変なことなんどすえ」

「えっ？……では……」
「そうです。蓮昌尼様はカコちゃんとはもかく紫苑姉ちゃんとは何の血のつながりもおへん。
けんど紫苑姉ちゃんを守って守って……守り通したんどす。カコちゃんのお母様……
蓮昌尼様の妹の高子様のため一言の願いの為に」

「『姉さん……』と高子は死の床で私の手を握ってこう言ったのです。」

『もし紫苑とカコの身に危険が及ぶことがあつたらカコを見捨ててもいいから

紫苑をきつと守ってね……紫苑は私が雪乃様から託された綾小路家の大事な跡取娘。

もし紫苑の身に何かがあれば天で会うことになる雪乃様に顔向けが出来ません。

……絶対ですよ。絶対に守って！』

そう言つて息を引き取つたんです」

そう言いながら手にもつたお数珠の珠を無意識の内に回していく。

「私には妹の言葉が信じられませんでした。

自分の産んだ子の命を捨ててまでもお世話になつたとはいえ先妻の産んだ子です。

その子を助けるとはどういうことなのでしょうか？……事故で両親を亡くし、

舞えなくなつた自分をも呪いつくしてひん曲がっていた根性の私でしたが、

さすがに死の床で私に託した高子の言葉が……

何ものにも変えられぬ想いというものがずっしりと私にのしかかつて来たのです。

今までの自分では駄目です。自分を変える必要に迫られたました。だから伝を頼って山頂近くにある年老いた庵主様がおられる庵に飛び込んだのです。

そこでの修行は今思えばようも耐えられたものと思うほど凄まじいものでした。

けれど半月経つても1ヶ月経つても高子の言葉を理解する事が出来ません。

そして、ある冬の夜、シンシンと冷え切ってはいましたが輝く星に誘われて、

山頂の岩の上で禅をしていたとき、私は見たのです。

まるでスローモーションのように星が動き、

東から上ってくる光に星が包まれたときその存在が消滅し、

光輝く大きな太陽が徐々に上ってくる。それはもう言葉には言い表せぬ光景でした。

自然の摂理には違いはありませんが、こうして目の前で劇的に見せられると

気づいた時には纏っていた衣も何もかも脱ぎ捨て、素裸の自分が光の中で立っていたのです。

『くよくよ悩まず先へ進め!』

そんな声が心のうちから溢れ出ています。そして、私は高子の言葉の真の意味をついに悟ったのです。

カコを見捨てるとは綾小路という小さな殻に閉じ込めずに大海の中で

自由に生きさせてという高子の我が子に対する愛情でした。

紫苑を守ってというのは綾小路家の跡取という運命を背負ってしまつた紫苑、

このままでは本当に四面楚歌になるのは判り切っていました。次々と送り込まれる悪党達の中でこの先、生きていくこと自体困難です」

「あのおう、蓮昌尼様。・・・以前のうちいうたらどんな子でした？」

話が深刻だけにホツとする束の間の紫苑の質問だ。

蓮昌尼も肩に入っていた力をぬき、少し笑顔を見せると

「気位の高いお嬢様・・・・・・・・かしら・・・・」
と言う。

小沙希といえはいつものように目を閉じて静かに蓮昌尼の言葉を聞いていたが

『ニツ』と笑ったのは紫苑の次の言葉を聞いたときだ。

「よかった。そんな高ピーのお嬢様の記憶が消えてしまっていて・・・」

紫苑の言葉に誰もがほつとする。

「私が・・・・」

と蓮昌尼の言葉が続くと全員が固唾を飲んで見つめる。

「岩の上から振り向くと、厳しいばかりのお人と思っていた庵主様が

私が脱ぎ捨てた衣を持って心配そうに私を見上げていたのです。

その時悟ったのです。きつと私の1ヶ月の厳しい修行の陰から

1日も欠かさずこうして見守り続けて頂いたのに違いないって・・・

・だから私は決心したのです。

悪党達からの隠れ蓑のための尼僧というのは止めようということです。

『そんなこといいのですよ……』庵主様にはそう諭していただきましたが
私は決心を変えませんでした。……そして髪を切りおろしたので
す。

京都の庵は庵主様に紹介していただいたものです。

綾小路家も悪党達の根城もカコちゃんをかくまってもらっていた病院も本当に近い格好の庵でした。

こんな近くにカコちゃんを匿っているなんて悪党達も思いはしないでしょう。

私が京都の庵に来てからすぐ、綾小路家を伺っておりますところ、

あの鷹揚というか凡庸というかこの現代にあんなお殿様が居られるなんて

信じられないほどの綾小路家の当主がどこにもおられないのです。

人の善悪なんて区別もつかないお方……そんな当主の姿が見えないということとは……

ことは急がなくてはいけない！私は直ぐに病院にかけつけました。

カコがどこの病院で産まれたかは誰も知らないはずです。

亡くなった妹の高子のことも綾小路家の誰にも話していません。

ところが病院の中にはカコの姿がないのです。

絶対の信用のおけるお方……

病院の副院長のことをそう思うようになったのは、このカコのこと
があつたからです。

副院長は病院での高子の臨終に立ち会ったお方……、

その副院長は私が高子の言葉で苦悶しているときに高子の臨終の言

葉の意味をすでに悟られていて、カコをそこに居られる雲井宗太郎様・恵美様ご夫婦に里子に出された後でした。

ほっとしたのも束の間、今度は紫苑のことが心配でたまりません。紫苑は悪党達の中にいるのです。

当主もすでに悪党の手にかかっているのに違いありません。紫苑の乳母も暇を出されてすでにいなくなっていました。

今だ！・・・悪党達の目を逃れて高子と会うために使っていた、秘密の出入り口の扉に飛び込んだのは勇気というより無謀だったのかも知れません。

いくら油断していると言っても相手は何人もの人を手にかけているのです。

後で歯の根が合わぬぐらい震えてどうしようもなかったといえはお笑いでしょうか・・・」

一斉に首を横に振ったのは制服を着た婦人警官達だ。

「それって、凄くわかります。私達の仲間の何人かは経験済みです。けれどそんな危ないことこれから絶対にお止めください」と声を出したのは京都府警の河合刑事だ。

しっかりと頷く蓮昌尼。二度とはそこまでしないし、そんな機会は今もうあるまい

「けれど、どうしてそこまでして紫苑を手につけなかったのかは今でもわかりません」

そういう蓮昌尼の次に皆が視線を移したのは小沙希にだった。

けれど目を閉じジツと話に聞き入っている小沙希からは何も汲み取れない。

けれど小沙希ならその訳を知っているのに違いない。
小沙希が自分から話すのを待つ……そうあきらめて再び蓮昌尼に
視線を移す。

「私は紫苑が最も嫌いだった高子の姉です。

そんな私にでも縋るような目つきで抱きついてきた紫苑……
普段の紫苑からは想像もつかない心細さが滲み出てた可憐な女の子
・
・

それは凄く怖かったのでしょうか。たまらなく寂しかったのでしょうか。

私は抱きながらも可愛くて可愛くて仕方なくなりました。

でも1分1秒もそんなことをしてはられません。

叱るように奮い立たせると手早く持ち出す荷物を用意させました。

再びあの秘密の出入り口から中庭に飛び出した私たち……
庭を囲むような木立の中を潜り抜けると急な崖の下に
細い裏道が綾小路家の屋敷の周りをくねくねと巡っています。

細心の注意をはらっていたつもりなのですが、やはり慌てていたの
でしょうね、

木の根に足をとられて二人して急な崖を滑り落ちてしまったのです。

でも私にはあのお山での修行で培った体力がありました。

なんとか崖に出ている木の根に手をかけて体勢を立て直しましたが、
紫苑は私に手を伸ばして何かを叫びながら崖を落ちていったのです。

『お姉さん……』私にはそう聞こえました。その声は今も耳に残
っています。

ここにいる紫苑は私が産んだ我が子のような存在です。でも我俣いっばいに育ったあの紫苑の最後の夜の可愛らしさはよりいっそう私に肉親の愛のようなものを与えてくれるのです」

「肉親の愛……」

そうつぶやく小沙希、一体何を考えているのだろう。

いっそうに肉親の情の薄い小沙希を痛ましげに見つめる女性達……

・

「崖下の道で死んだように横たわっている紫苑を揺り動かしても目覚める気配はありません。

慌てて散らばっていた衣服をカバンに詰め込み、

茂みの中に隠した私は紫苑を背負って急いで大通りに出てタクシーを拾ったのです。

ちやうど洋装でウィッグを被っていたので目立ちはしなかったでしょうが、

用心に越したことはありません。何度も何度もタクシーを乗り換え、

遠回りをして病院に運び込んだのは明け方近くだったのでしょうか。

何だか自分が小説の主人公で悪党からヒロインを助け出すシーンが思い浮かばれて、

タクシーの中ではドキドキしっぱなしだったのを強烈に覚えています」

紫苑には自分のことなのに何だか他人のことを言われているようである実感がない。

「これが今の紫苑を生み出す元になった2年前の事故だったんです」

「えっ、うち2年間も記憶がないんですか？」
紫苑の叫びの声に答えたのは小沙希だった。

「紫苑姉ちゃん！・・・その2年間のうちの半年間は
姉ちゃんは病院のベッドの中で眠り続けていたんです」

「ということは、うち植物状態だったんですか？」
頷く小沙希が次に言った言葉が追い討ちをかける。

「半年経ったある日、蓮昌尼様はベッドの中の紫苑姉ちゃんの変化
を知ったんです」

「ある日私はベッドの中の紫苑の瞼が微かに動いているのに気づい
たのです。」

「すぐ意識が戻る！と悟ったときの喜び・・・それは仏様に感謝し
ていました。」

「けれど、はっと気づいたのは・・・病院内で意識が戻ると評判にな
ってしまいうことでした。」

「評判になれば悪い奴らに見つかるのも時間の問題でしょう。」

「私は急いで紫苑を隠す必要にせまられたんです。」

「病院から患者を運び出すなんて私一人に出来るはずはございません。」

「だから病院の副院長に手伝ってもらって私の庵に運んでもらいまし
た」

「と言った蓮昌尼に沙希は笑いかけると、思わぬ方向に声をかけた。」

「さてその続きは、その病院の副院長から聞かせてもらいませう
か。」

「居間との襖の後ろに座っておられる副院長さん！・・・入ってらっ
しゃい・・・」

「えっ？・・・っとその襖の前に座っている女達が立ち上がって襖を

開けると、

正座する相良明子とその隣に横座りになって、

明子に首筋を撫でられていい気持ちになっていいる白虎丸の姿があった。

「あつ！・・・明子先生！」

驚きの声をあげる蓮昌尼に、仕方ないなあと言う顔をする明子。

けれど他の女達からは（やっぱり・・・）という声しかあがらない。

そうこんなことが出来る副院長と言えば相良明子しか考えられまい。

「沙希ちゃんの使い魔君に引つ張られてここに連れてこられたのよ」と皆に言ってから

「蓮子ちゃんごめんね。けれど私はあなたのこと爪の先も言っちゃあいないわよ。

けれどこの沙希ちゃんの前では何も隠せないの」と言ってから、

「さあ、なんでも聞いて頂戴！けれど蓮子ちゃんに許可がいることは話せないわよ・・・」

あつ！そうか。それでも駄目ね！」

諦め顔の明子に

「大丈夫です。うちがきちんと許可を得ますさかい・・・」
という小沙希にほっと力をぬく明子。

「沙希ちゃん！ちょっといいかしら・・・」
と声をかけたのはまだ目立っては居ないお腹なのだが、乳母となる高弟二人に挟まれて座る溲だった。

「いいわよ澪姉・・・でもあんまり明子先生に失礼なこといたら駄目よ！」

小沙希の言葉に澪ならばと予想する女達・・・
けれど言葉使いはともかくその内容には驚きの声をあげる。

「明子先輩！・・・明子先輩の医学に対する知識には驚嘆するけど高子さんの臨終の言葉の意味を理解する頭なんてあつたかしら・・・」

「澪！・・・本当に失礼よねえ。・・・でも澪だからそんな言葉をかけられても腹が立たない・・・本当に得な性格しているわ」

「明子先輩・・・それってどういうことよ・・・」

「その通りの意味よ。あんたの言葉をそのままそっちに返すわよ。澪に高子さんの言葉を理解出来たって事、今でも不思議で仕方ないのよ」

「えっ？・・・」

「やだわ、澪。そこまでボケてしまったの？ 2年前に私が相談したことを・・・」

「あっ！・・・確かに電話してきたのよね・・・あの時そばに居たのは・・・
身体の検査をしていた沙希ちゃん・・・」

皆が呆然と小沙希に視線を這わす。

「・・・そう・・・そうだったわ。」

沙希ちゃんに電話のことを聞かれて薫にも継る思いで相談したのを・

・
・
あの時確か『これは凄く深い意味を持っている言葉だわ。
とにかく明日まで考えさせて』といわれて次の日に

沙希ちゃんから教えられた意味を先輩に伝えたんだったわ……」

「じゃあ……沙希ちゃんが……」

小沙希は閉じていた目を開けて皆のほうを見てにっこり笑う。

その笑顔で皆の入っていた体の力がスーッと抜けていくのが感じられた。

ましてや蓮昌尼には今まで接したことが無い笑顔なのだ。

「その縋られた藁がお話します」

プーと噴出す皆……声をあげそうな溼に

「冗談よ溼姉……」

と言ってから

「あの時は今日のようなこと……紫苑姉ちゃんのこととは勿論
何も知りまへん。」

早瀬の姉ちゃん達も承知されていたと思うんですが、うちの力もまだ完全に覚醒してへん時どす。

けんどそんな時でもなんや変！……そう思たんどす。

うちは皆も知つとるように男尊女卑の激しい土地の産まれで

一族郎党から毛嫌いされ幼い時に包丁で自ら喉を突いて死のうとしました。

そして大きくなってからもここまで育てのだからもういいだろうと
実の母に捨てられ、

肉親の愛など記憶の底にもないんどす。

けんど高子さんの臨終の言葉はおかしい……

そんなうちでもそう思って1日中考えたんどす。
考えて考えて・・・考えあぐねたんは、やっぱり肉親への愛情どし
た。

我が子に対する母の愛ってやっぱりそんなもんどしたんや・・・
愛を知らぬ子がたどり着くのはそんなところどす。うちはそう納得
しようとしませんでした。

けんど我が子より先妻の子を守れってのはもっとおかしい・・・

おかしい・・・おかしい・・・明け方までうちの考えは堂々巡りど
した。

そしてふつと思いだしたんが、幼い頃にか弱い女の子をいじめてい
る男の子達に飛び掛っていき、

身体の大きな村長の子を怪我させた時の事どす。

出てきた大人達に竹や箒で袋叩きにあつてた時、

走ってきた母さんが身体をうちの上に投げかけたんどす。

うちの変わりに打たれながらきつく抱きしめてくれた事を思い出し
たんどす。

これがうちが母親を母さんと呼べるただ一度だけの思い出なんどす」

紫苑も蓮昌尼も呆然と聞いていた。

いや、小沙希の肉親の情に薄いことを知っている貞子も高弟達も女
達も

初めて身の上を聞く男二人さえも言葉も出ない。

「だから判つたんどす」

と皆の視線をも平静に受け止めて答える。

「やだ・・・沙希ちゃん・・・」
そんな声にも微笑を返すだけだ。

（こんな身近に仏様が居られる・・・）
自分が今まで信じてきたことは違ってしまっただが、
それより以上に喜びが大きいのはどうしてなのか・・・
蓮昌尼はさらに強く小沙希の姿を追い求めていく。

紫苑は紫苑で改めて小沙希に姉と呼ばれる喜びを噛み締めていた。

「高子様の願いは我が子と義理とはいえ我が娘の幸せどした。
でも高子様はより以上に大きくて暖かいお方です。
死をかけて願うもう一つの大きな愛とは・・・」

父母が死す大きな交通事故に巻き込まれた不世出の天才舞踊家、
舞いが舞えなくなって人生を呪い続けている大好きだった姉を舞が
舞えなくてもいい・・・

元の姉、常盤桜蓮・・・いいえ、常盤蓮子に戻って貰いたいと死の
淵に立った高子様が願うのは、
当然のことではないのですか・・・」

「あっ！・・・」
悲鳴のような声をあげた蓮昌尼、片手を前について震えている。

小沙希の視線を受けた貞子はそばに控える志保と希美子の二人に頷
くと二人は蓮昌尼の傍にいき、
手を取って立ち上がらせるとそのまま貞子の横、二人の間に座らせ
た。

蓮昌尼にとって考えもしなかった高子の自分に対する愛・・・
どうしようもなく泣けて泣けて仕方がなかった。

「時はかかったんどすけど、蓮昌尼様は高子様が願うより以上の人物になられはった。

ましてや仏門にはいられるなど高子様の思いもよらぬこととした。うちはカコちゃんを綾小路家から絶対に切り離したかった。

高子様の考えもそうどした。話を聞けば聞くほど名家とはいえそんな時代遅れの腐った家になどしがみつくと値打ちもない……そう思っただんどす。

例え貧乏でも明るく強い絆の夫婦に里子に出されたほうがカコちゃんにとつてよっぽど幸せなんどす」

そこへ地下から走ってきたのだから、

カコがこのお稽古場に走りこんできて、宗太郎の胸に飛び込んだ。それはほのぼのとさせる嬉しい光景であった。

後から入ってきた恵美が小走りで駆け寄り夫の横に座る。

入り口近くに座った看護師達に頷きだけの返事をもらうと小沙希はにっこりと笑いながらカコに話し掛けた。

「ねえ、カコちゃん。下の病院怖くなかったでしょ」

「うん、とつてもよかった。……でもカコちよつとびっくりしちやった」

「あら、どうして?」

「あんなところに大きなお風呂があるんだもの」

「カコちゃん、お風呂に入らなかつたの?」

「うん、入ったよ。……でも母ちゃんに叱られちゃった」

「どうして?」

「だってプールみたいだったから、いっぱい泳いじやったの」

「へえ……カコちゃん泳げるんだ……」

「うん、だってスイミングに行っているんだもん……」
「と言ってから急に声が小さくなって」

「でも、もうカコ……スイミングに行けない……」

「どうして行けないの？」

「だって、悪い人がカコを捕まえにくるから……」
ここだった。カコが持つ怖い記憶を未来に残さないために沙希が注意をしながらここまで話を持ってきたのだ。

「ねえ、カコちゃん。お姉さんのことよう聞いてくれる？」

「うん、なあに？」

「カコちゃんの周りにいるたくさんさんの制服をきたお姉さん達のことわかるわね」

「うん、女のお巡りさん」

「どうして女のお巡りさんがこんなにいっぱいいるのわかる？」

「ううん……どうして？」

「それはね、カコちゃんを捕まえようとした悪者達からカコちゃんを守るための……」

「ほんとうに？」

と皆に視線を向けるカコ……ようもこんなに素直に育ったものだ。

これも宗太郎・恵美夫婦の愛情の賜物なのだ。

同じ京都人として……同じ音曲にたずさわるもとして貞子達の喜びは大きい……。

「それにね、ここにいる河合涼子というお姉ちゃんだけど涼子お姉ちゃんもお巡りさんなの」

「涼子お姉ちゃん？」

「そうよ、よろしくね……カコちゃん……」

河合刑事がにっこりと笑って挨拶をする。いつも同僚達には見せたことがない明るい笑顔だ。

「カコちゃん。．．．涼子お姉ちゃんはね、カコちゃんのお父さんと
と

お母さんに頼まれて一生懸命カコちゃんを探していたのよ」

「だってカコ．．．．」

と蓮昌尼を見るカコ。

「そうよね、あの女のお坊様と悪者達から隠れていたのよね．．．
それでね、カコちゃん。うちカコちゃんに喜んで欲しい事があるの」

？．．．．というつぶらな瞳で見つめられると

小沙希でさえ思いつきり抱きしめたくなるカコの素直さ．．．

「カコちゃんがここに来る前にお巡りさん達が悪者を皆捕まえてし
まったの」

「えっ？．．．ほんと？．．．」

カコの大きな瞳がさらに大きくなる。

（だってそれは．．．．）と言いかけてはっと思いつまる涼子。

そうなのだ、カコにとって誰が捕まえようと関係がない。

ただ、父や母と暮らせればそれでいい．．．．小沙希もそれを言
いたかったのだ。

「じゃあ．．．カコは．．．」

「ええ、今夜から父さんと母さんと一緒よ．．．」

「うわーい．．．．やったあ．．．」

喜びいっぱいだ。

それを見る蓮昌尼にとって嬉しさの反面、一抹の寂しさも拭いきれ
ない。

「じゃあ、カコちゃん。もう隠し事はなしよ。お姉ちゃんに何もかも話してくれるわね・・・」

「いたい小沙希は何をいおうとしているのか？・・・小沙希に見つめられたカコははっとして下を向いてしまっ

「カコちゃん！・・・お姉ちゃんの方を見て！・・・おずおずと見上げるカコ。」

「どうしてあんなことをしていたの？」

「前に一回そんなことがあったの」

「それで？・・・」

「母ちゃんいっぱい泣いてカコを抱いてくれたの。父ちゃんは電話で大きな声で怒っていたわ。」

カコとつても怖かった・・・」

はっとしてカコを抱きしめる恵美。そして宗太郎。

「カコちゃん！・・・そのときだけ？・・・」

首を振るカコ

「何回も・・・」

という声にどつと泣き崩れる夫婦二人。

「カコちゃんにはそんな時がわかるんだ」

頷くカコが

「ここに熱いもんがあがってくるの」

「そうしたら？・・・」

「ケロちゃんにお水いっぱい入れてトイレに入るの」

「ケロちゃん？・・・」

「この子が大好きなケロちゃん水筒のことなんです」

と涙ながらに答える恵美。

「トイレに入ってどうするの？」

「ちよつとづつお水を飲むの．．．そうしたら元気になるのよ」

「そう．．．でも怖くはなかった？」

「うん、怖かった。だからちつちやな声で父ちゃん．．．母ちゃん．．．助けて．．．」

助けてって何度も何度も叫んでいたの」

もう駄目だった、我慢の限界はとうに過ぎてしまっていた。

白いハンカチがお稽古場に舞い続ける中、

「澪姉！．．．」

と声をかける小沙希。

『はっ』と顔をあげる澪に沙希の物言わぬ顔が問い掛けていた。

「そ．．．それは典型的な小児喘息ね。そんなあの．．．．．」

．．．あの温泉に入れば直ぐに治るわよ．．．．．と言いかけて沙希の視線の先に蓮昌尼がいるのに気づいた。

『はっ』と沙希の心を悟る澪．．．．．

そこで『ゴホン』と一つ咳払いをして言い直す澪。

「そうねえ．．．2年かかるか3年かかるか養生しだいね。」

この病院に毎日通院して温泉療法を続けることを医者として命令します」

「そして、明子先生．．．．．」

何を言い出すのかと目を見張る明子。

「その蓮昌尼様．．．．．いえ常盤桜蓮さんの交通事故の後遺症は？」

「そうねえ、骨の固まってしまった部分もあるけどあの温泉に．．．

・・・」

と言ったところで漣と同じく沙希の視線の先を知り、もの言わぬ沙希の心を知ることになる。

そして、これまた『ゴホン』と一つ咳払いをして言い直す明子。

「そうねえ・・・骨も固まってしまっているから養生しだいね。

この病院に毎日通院して温泉療法を続けることを医者として命令します」

ここまでくれば沙希がなにを願っているか全員が知ることになった。

薫は思う。ようもあの漣が沙希の心を汲み取ったものだ・・・ひづるは期待する。

これで又、二人の面白い言い合いの元が出来たと・・・

「これで決まりましたね」

と云ってから

「宗太郎様、カコちゃんの身体と共に恵美様も元来お丈夫ではないようです。

明日からの通院、よろしいですね」

命令口調でいうが、宗太郎は素直に頭をさげ

「これから、よろしゅうお願いします」

と云う。

「蓮昌尼様、毎日の朝夕のお勤めご苦労さんですが通院のほうよろしゅうおすね」

「はい、こちらこそご迷惑でしょうがよろしくお願いします」

「さあ、これで2つの問題が解決済みです。河合さんどうされます？」

「いえいえ、ここで見放さないでください。最後までお付き合いさせていただきます」
そういうと頭を下げる。

「じゃあ、最後は紫苑姉ちゃんの番です」

「いよいよ、うちですか。なんか怖おす」

「その前に……ましろちゃん」

と沙希の身体から飛び出して少女の姿にかわるましろ。

「わかりましたね」

「はい、あきあ様」

「じゃあ、頼みます」

その声に光となって飛び出していく。

二人の間に何の話が交わされたのかよくわからない皆。

「胡蝶ちゃん！」

その声にひびくのエンブレムから姿をあらわした胡蝶。

「あきあ、わかったよ。おい！虎公！一緒にいくか」

その声に明子の横からのっそりと立ち上がった白虎丸。

光になった胡蝶と共に白虎丸も光になって夜の空に消えていった。

「あとは帰ってきてからの楽しみです」

と言ってから紫苑の方に振り向いた。

「紫苑姉ちゃんは2年前からの半年間、病院で植物状態だったんはさつき言ったとおりです」
と言ってから

「明子先生に手伝って貰って庵に移ってからすぐに目を覚ました紫苑姉ちゃん。」

でもそれは記憶喪失というより全く新しい人格の別人に生まれ変わってたんです。

「そうだな、明子先生」

「ええ、・・・でもあんな不思議な症状って私初めて」

「それはどういうことですか？」

「完全な記憶障害と言っても日常的なもの・・・文字や会話などを覚えているものなのです。

けれど彼女の場合の記憶は完全に白紙だった。

つまり全く産まれたばかりの赤ちゃんと同じだったんです。

でもそれがリハビリを要する肉体のためには良かった。

四肢を動かすことから始め、

ハイハイと赤ちゃんが成長する過程と全く同じように心と身体が成長していくんです。

ただその成長が異常に早いことは判らぬことではないでしょうね」

「心が肉体と追いついたと思われる3ヶ月目でした」

と今度は蓮昌尼が話を続ける。

「紫苑が興味を抱いたのが私が床の間に大事にかけていた琵琶でした。

私が舞にプラスになることは何でも吸収しよう・・・

そんな子供時代で、琵琶もお三味も師匠から名前を頂戴したこともありました。

けれど、それがこんなことに役立つとは思っていませんでした。

そして驚くべきことに教え始めた最初の日からこれは容易ならざることだと肝に銘じざるをえません。

一を知って十を知るといふ驚異の吸収力なのです。

私よりはるか上の逸材でした。基本をきっちり教えた上で一週間で私は教えるべきことがなくなってしまったのに気づいたのです。

片手間で教えた三味線もあつというまに身につけてしまいました。何と言っことでしょうか。私を知る以前の紫苑とはもう全然違っていました。

音曲の天才・・・私はそう信じます」

「違います・・・違うんです。蓮昌尼様・・・

うち天才なんかやあらしまへん。ただちよつと小器用なだけどす。

ほんまの天才はここにいる沙希どすえ。

さつき一緒に琵琶を弾きました。それはもう震えがくるんです。蓮昌尼様も聞いたらわかると思います」

「それこそ違う思いますえ、紫苑ちゃん。

あんたはうちらから見ても天才や思います。

そつでないとお三味であんなに舞いやすく弾けることあらしまへん。

舞の心知つてなあんなこと出来まへん。

小沙希ちゃんに舞を作つたという紫苑ちゃんの前世の那賀杜姫ながとひめ様の、記憶が紫苑ちゃんのDNAに書き込まれているうちはそつおもいます」

と花江が立ち上がつて一気にそつ話すと、

「それに・・・」

と話を続ける。

「うち、この間源太郎様にいろいろ聞きました。

源太郎様と言つても知らない人いると思ひますが

源太郎様は京都府警の牛尾刑事さんのご先祖様なのです。

その源太郎様にうちの前世で祇園の大看板を背負っていた千代松の

ことを聞きました。

どうしてこんなに違うのかって聞くと、

千代松は兄弟の多い農家の産まれで身売り同然でこの花街にきたのだ。

幸せな産まれ育ちのお前とは修行に対する取り組みも考えも違う。

素質のないのは二人とも同じだが・・・と笑っておられました。

素質がない分修行で・・・と千代松に負けないようお稽古にとりくんだんですが、

それも今日の小沙希ちゃんの舞を見てそれも見当違いと気づきました。

それにしても小沙希ちゃんは凄い！鬼女と人との心の葛藤で能面を割ってしまうなんて・・・

源太郎様が小沙希ちゃんの真似だけはするな！って口をすっぱくして言われたこと本当に肝に銘じます」

「花江ちゃん！・・・あなたは変わったなあ。

幕末の祇園の名妓千代松の大看板を今にあなたが背負うのを楽しみにしてますえ。

それと紫苑ちゃん！あなたはやはり天才です。天才は他の人のことがわからへんのが普通です。

けんどあなたは小沙希ちゃんのことを気づきはった。

確かに小沙希ちゃんはうちらとは比べ物にならへんほど別格なんです。

けんど小沙希ちゃんは1代限りです。小沙希ちゃんと同じ人なんか出てきようもあらしまへん。

そやから小沙希ちゃんは後に続くものを育てること出来まへんのや

けどあなたは違うえ、紫苑ちゃん。あなたは天才といっても人です。

あんなのような天才ではないけれど、あなたは次に続くものを育て

ることができるんぞす」

「お婆ちゃま、なんかうちえらい言われかたぞすなあ。なんか化け物みたいぞす」

「そうえ、小沙希ちゃん。

あんたはいつもいつもうちらの意表をつくんぞす。

とうてい出来へんことを簡単にやってくれます。

それがうちらにとつては見るだけで真似なんかできへんことぞす。

花江ちゃんが言ったように小沙希ちゃんを真似すればそのお人は絶対に壊れてしまいます。

けんどなあ、小沙希ちゃん。うちらでもあんたの真似できることがあるんぞす。

それはあんたの優しさぞす。これは誰が真似してもええ……小沙希ちゃん、あんたはうちの自慢の孫ぞす。そして大好きで可愛い化け物え、なあ皆……」

「もう、お婆ちゃまったら……そんなこと言われるとうちのお鼻、天狗さんになりますえ……」

「沙希姫様のような天狗はんならどんどんなっておくれやす」

高弟達の声に

「皆してうちを甘やかそうおもて……うち、そんな手にのりまへんえ」

ぷいと横を向いてしまう小沙希。そんな様子になんか胸がドキッとしてしまう女性達。

「ねえ、お姉ちゃん！」

「なあに、カコちゃん」

「お姉ちゃんはまほうつかい？……」

「えっ？魔法？・・・」

「だって、カコ。お姉ちゃんがてれびでいっぱいいまほづをつかうところ見たもん」

「てれびで？・・・あっ！・・・でもカコちゃんは2歳でしょ。あのてれびおぼえてるの？」

「沙希！何をいつてるのよ。あのドラマってリクエストが多くて一体何度録画上映されていると思ってるの？」

「それに評判が良すぎてあの映画と同時にDVDとビデオ化されたのをよもや・・・」

「ごめん！それどころではなかったから知らなかったわ」

「あゝあ・・・」

「といって頭を押さえる律子。」

「ふふふ・・・いいじゃないの律ちゃん。沙希ちゃんらしくて」

「そうよ、そうよ。これが沙希ちゃんなのだからね」

「ねえ、沙希姉さん。私のところにDVDとビデオがあるから今度貸してあげようか」

「といたずらっぽく笑うのがひづるだ。」

「うちのところにもありますえ」

と貞子。皆も手をあげるものだから、もっていないのは無論

三好屋と宗太郎と蓮昌尼、紫苑、河合涼子・・・そして沙希と
いうのがわかった。

皆がそれぞれ貸し借りを頼んだあと紫苑の話に戻るのだ。

第二部 第十四話

「紫苑の姿が庵から突然消えてしまったのが、それからすぐでした」と再び蓮昌尼の紫苑の話が始まった。

「慌てて探し回った結果、紫苑が琵琶を使って謡詠みと称して祇園の界隈で流していると判りました。

私が見かけたのは清水さんに上がる階段の手前でした。旅行者で囲まれた紫苑。すぐに近づこうとしましたが、やはり悪い者達に見張られています。

でも我慢できずに何気ない風を装って近づいて様子をみました。

不思議でした。あんなことどこで覚えたのでしょうか。

見張る悪者達も首をかしげています。

よくは似ていても全然違う様子に直ぐには手を出せない・・・そう判断して少し安心しました。

けれど今度はそんな私をおかしいと思ったのか、いつのまにか後をつけられていたのです。

逃げろう！・・・そうは思いましたが、こんな風体です。

尼僧庵を調べられれば直ぐにわかってしまう・・・

そう思つて自然のままにすることにしました。

今夜から見張りがつく・・・もしかしたら盗聴されるかもしれない。

気持ちが悪き立ちますが、どうしていいのか判らない。まんじりと夜明けを待ちました。

こっそりと覗くと見張りが3人に増えています。

気持ちにはやるが身体が動かないんです。何気なく部屋の中を見つめていたときです。はっとして心臓がドキンッと波打ちました。

そうでした。1ヶ月前に紫苑の日常生活に役立つと携帯式のテレビを買ったのでした。

ある日、それを見ていた紫苑にせがまれてカード式の携帯電話を買っていたのを忘れていたのです。

もしや・・・紫苑のバックを見ました。・・・入っていたのです。

どこにもかける事のない電話・・・

でも紫苑の役に立つならと買っておいたのがこんな時に役立つなんて・・・

まだ少しだけしか使われていませんでしたが、

取り扱い説明書には赤いペンで覚えてたの丸文字を使ってビッシリと書き込みがしてあります。きっと電話メーカーに電話したのでしょう。

今の紫苑はとても研究熱心で判らないことは、

私や・・・私が判らなかつたらメーカーに聞くなどして納得いくまで勉強するんです。

機械音痴の私にとってそれがとても役立ちました。

はやる気持ちで電話に出るのを待つ・・・それはとても長く感じられました。

電話の向こうで明子先生はそんな動転している私を叱り付けられました。

明子先生には私は仏の道に入った尼僧としてではなく常盤蓮子という

先生の患者として対応されたのです。

「蓮子さん！あなたが交通事故の後遺症のため通院されているのは
檀家さん達もご存知でしょう」

「はい」

「それじゃあ、いつも通り通院してらっしゃい」

「通院してもいいんですね。ご迷惑をかけることには……」

「何をいつてるの、そんな心配しないでいつも通りよ……いつも
通り……」

「わかりました。いつも通りですね」

「そう、キヨロキヨロしたら駄目よ」

私の身体からスーッと力が抜けていくのを覚えています。

「実際は……」

と話を受け継いだ明子。

「これはえらい事になる。私のほうが慌てていたかもしれませんが。
実をいうと蓮子さんを病院に近づけないほうが良かったのかもと気
づいたのです。」

電話をかけ直そうとしても番号がわかりません。

どうしてかといえは、不妊治療のため宗太郎・恵美のご夫婦が
何度もうちの病院に通っていたからです。

そのご夫婦に赤ちゃんが出来た。少し調べればおかしいと判ること
です。

だから、私はその頃にここで出会ったばかりの沙希ちゃんに連絡し
たんです」

皆が『えっ？』という顔になった。誰も知らされてはいなかったの
だ。

「沙希ちゃん！」

という声と共にブーイングが飛んだ。

「ごめんなさい・・・これは秘密裏に運ばねばならないことだったので・・・」

といったときに

「あっ！」

とカコのとんきょうな声があがったのだ。

「どうしたの？カコちゃん・・・」

「たいへん！・・・『ポンポコたぬ吉』が始まっちゃう・・・」

「『ポンポコたぬ吉』？」

「沙希姉さん、今ちっちゃい子達に大人気のアニメなの」

「アニメ？・・・そうなの？・・・じゃあ、ひづるちゃん。

ひづるちゃんの部屋でカコちゃんと一緒にテレビを見てきてくれる？」

「うん、いいよ・・・でも・・・」

「大丈夫よ、胡蝶ちゃんが帰ってきたら知らせてあげるから・・・」

「

わかったわ、カコちゃん！『ポンポコたぬ吉』を見に行こう」

と言って二人して走ってお稽古場を出ていった。

それを見ていた薫・・・いまやひづるは薫の天敵となっているのだ。

「ふん、あいつ子供らしいところもあるんだ」

それを聞いた沙希が

「あら、薫姉さんも胎教のために一緒に見たいのならあの二人と一緒に行くてもいいわよ」

真っ赤になってぷくと膨れる薫・・・

その薫の肩に顔を埋めながらげらげら笑う澪。

喧嘩を誘うこのわざとらしさに顔を真っ赤にして怒ったのが順子だ。

「はい！」

といつてまるで亀の甲羅に頭を埋めるような二人……もう大笑いだ。何も知らぬ蓮昌尼さえも笑わずにはいらなかった。

笑いが静まって沙希が再び話し出した。

「うちが東京でのドラマ撮影とこの京都で国から依頼された元方に浚われていた女の子達の治療で行き来していたときに明子先生から連絡をうけたんです。

それからうち、明子先生の車でカコちゃんの様子を見に行きました。

案の定どした。悪い奴らにも知恵の回る者がいるんですなあ、カコちゃんを抱いて悪い奴らから逃げ回る蓮昌尼様を見かけたんです。

急いで明子先生に蓮昌尼様達の保護を頼んでから

『般若童子』に姿をかえて悪い奴らを皆たたき伏せてやりました。

空から見ても明子先生の車を尾行している様子はないのでそのまま帰ってきたしだいどす。

えっ？……蓮昌尼様達の隠れ家どすか？

それは蓬栄のお爺ちゃまに頼んで比叡山の檀家を世話していただきました。

勿論、武者僧のお兄ちゃま達の護衛つきどす。

他の人達の介人を悟られなくなかったので

蓮昌尼様にも知られないようにお兄ちゃま達に重々頼んでおきました」

その言葉に驚く蓮昌尼……比叡山の奥の院のお上人様と

その強力無双で知られる武者僧達を家族同様に話すこの人はいったい・・・

「これで2人は安心できます。

それに紫苑姉ちゃんはその事件の時から、もうすでにここに来ています。

姉ちゃんの身も心配することおへん。

後は悪人の出方を待つだけでした。あとは皆さんが目にした通りです」

「小沙希ちゃん！・・・簡単に言うてはりますけど

これあんたやから出来たんえ」

「そうそう、沙希ちゃん。あんたが何もしないでジットしておこうとしても

事件のほうから飛び込んでくるのね。これではお婆様も身体は持たないわよ」

「そう言われてもうち、どうしようもおへん」

「そうねえ、これが沙希ちゃんの使命というならあきらめるほかないか」

と薫。

「それでもやつぱり、危ないことは避けないとね。沙希ちゃん」と真理ママの忠告。

「ただいま！」

とそのとき大きな声が玄関からした、（助かった！）と内心で喜ぶ沙希。

「あら、どうしたんですか？」

廊下の障子から顔を覗かせたのは希佐だ。集まっていたみんなの様子に驚いている。

「おお、沙希太郎もいたのか」と続いて声が聞こえた。

入ってきた武士の姿には三好屋も宗太郎・恵美夫婦、そして蓮昌尼も瞳目する。

中でも話を聞いていたが初めて会った河合涼子は飛び上がるほど驚いていた。

そんな様子をクスリと笑う婦警達。

「これは父上」

と座布団から降りて頭を下げる沙希。

「そのまま・・・そのまま・・・」

という弦四郎に座布団を持って小走りに近寄ってきた律子。無論高弟が二人、心配そうに後ろに従っている。

「父上様・・・これを・・・」

と律子が差し出す座布団のかわりにスツと腰から大小を抜き律子に差し出すと袂で包み込むようにしっかりと受け取るのだ。全くの自然な行為なので、大小を渡してからハツと気づく弦四郎。

「これは、和葉・・・いや、律子であったな」

「どちらでもよろしゅうございますわ、父上」

といつてこのお稽古場の舞台横に最近作られた刀掛けに大小を掛ける律子。

「父上・・・今日は？・・・」

沙希と向かい合って座る弦四郎。

「うむ・・・門弟たちが来るはずだったのじゃが・・・」

「門弟達？・・・大八木さん達ですか？・・・」

「ああそうだが」

「大八木さん達ならさつきまでここにおられましたか……」

「何！……沙希太郎……又なにかやったのじゃな……」

「あつ……はい……少し悪人共を……」

「又やったのか……しようが無い奴じゃ」

「すいませぬ……父上にまでご迷惑をかけて……」

「いや……そうなると思集まってくるやもしれぬ」

「皆さん……沖田様や竜馬様たちがここにですか？」

「ああ、そうじゃ。何しろ人手が足りぬということで新たな顔が増えたからのう。」

竜馬殿が沙希太郎に顔つなぎをしていたほうがよからうと機会を伺つておつたのじゃ」

それを聞いた貞子が菊野屋の花世を呼んだ。

何事かを話していたようだが

「いいどすな、うちが貸切や言うのどすえ。」

以前のように置屋の女将全員どす。わかりましたな……」

「へえ……」

と言つて飛び出す花世と豆奴。電話で事が足りるだろうに、どうやら走つていったようだ。

「そうそう、沙希太郎。今日は希佐に1本取られたぞ」

「えっ？父上がですか？……」

「ああ……あの太刀筋、どうにもわしには見えなかった。」

鋭い切っ先が来ると思つた瞬間、肩を打たれていたのじゃ」

沙希の鋭い目が希佐に注がれる。

「いえ、わたしが沖田様と剣を交えていたときに覚えた型を使ったまでのことです」

そういつた希佐の言葉に被せるように

「弦四郎殿、どうです驚いたでしょう」

と言って庭から入ってきた光の中から沖田総司が出てきた。

何も知らない者たちは必死で回りの者から話を聞いている。

「沖田殿、希佐にあの剣を教えたのは貴公か？」

「とんでもないことですよ」

と律子の差し出した座布団の上に座り込んだ沖田総司、

自らの左の着物を捲り上げ、真っ赤に腫上がった左肩を見せる。

「希佐殿と稽古をしている最中にこの有様です。あつというまの出来事でしたよ。」

どこがどうなつて打たれたのか判らない。恐ろしい剣でした。

いわば私が最初の被害者というところですか・・・

さすがに沙希殿の血を引く人だとつくづくそう思いました」

「ねえ、希佐ちゃん」

と今では希美子の横に座っている希佐に向かって声をかける。

「明日にでも一手やろうか」

「えっ？本当ですか・・・うわ～やったあ～・・・」

希佐の喜びつたら・・・

「これは面白い！・・・沙希太郎、どこでやるつもりじゃ」

「はい、道場では？・・・」

「駄目じゃ！道場ではせまい！・・・せますぎる」

「ではどこでせよと・・・」

「ふ～む・・・これはちと難問じゃのう。」

その昔、徳川家の御前試合は江戸城のお庭でやったそうじゃが・・・

「

「父上！・・・私と希佐ちゃんの立合いですよ。大げさ過ぎます」

「あの〜・・・」

と声をあげたのは恵子だ。

「うちの署の道場はどうでしょう？」

「でも警官の人達の道場でしょ」

「いいえ、そればかりではないんですよ。」

小学校から大学までの学生たちや一般の方達も習いにきているんです。

「そうだ・・・明日はそんな人たちの練習日なんです」

「う〜ん・・・邪魔にならない？・・・」

「とんでもない！あきあさんが来られるなら大勢の人達が集まってくるわ」

と言つ恵子の言葉にそんなことをされては・・・と思つた沙希だが希佐の胸を膨らますような期待のこもつた目を見ると断れなくなつてしまった。

「それは好都合じゃ」

という声と共に庭より二筋の光が入ってきた。

「これは晴明様・・・それに竜馬様も・・・」

頭を下げる沙希に

「あきあと希佐の試合の前にあきあと立ち合ってもらいたい者が現れたのじゃ。のう、竜馬殿・・・」

「そうなのですよ、沙希殿。あなたが希佐殿との立会いを所望したことその男の我慢が切れた」

「我慢が切れた？・・・意味がよくわかりませぬ・・・」

「沙希殿・・・ことは天界でのことですよ」

と次に入ってきたのは篠原源太郎と相良新次郎だ。

あわてて明子と恵子が立ち上がって、律子から座布団を受け取ると

各々が源太郎と新次郎に渡すのだった。

それを不思議そうに見る蓮昌尼・・・

それを横にいる希美子から新次郎が明子のご先祖だと聞くと慌てて顔をあげて見ているのだ。

沙希を中心に車座に座った武士達・・・

その時、稽古場の廊下をすべるように小走りに通り過ぎる置屋の女将や芸妓と舞妓、

舞台の向かいの出入り口より入ってきた芸妓や舞妓はその場に控え、

女将達は台所のほうに走り去った。酒と肴の用意をするためだ。

もう以前にやったことなので慣れている。

菊野屋の芸妓と舞妓も入り口近くにすでに居を移している。

「天界と申されますと?・・・」

「ここには兵法者がいないので率直にいいますとね、

兵法者は頭が固い・・・非常に固いのです。

おのれのやってきた修行が最大のものだと思っている。

だから転生してせつかくやってきた修行が消えてしまつのを潔しとはしない。

だから仏の進める転生など歯牙に掛けないのです。

だからと言って沙希殿の守護を・・・というと

今度は自分のためにやってきた修行を人のためになどに使わぬ。

・・・こうですからね。

仏もあきらめて消えるのを待っているのですが、

この男が消えないのです・・・生への執着心が普通の人より異常に強いのです」

「生への執着心といったって・・・」

「それさえも認めないんですからね・・・あきれはたたものです・・・

「

「源太郎殿もひどいことをいう。

わしもそなたも1度は目指した道ではなかったのかな・・・」

「目指しただけでなかったわけではない・・・よかったですねえ、坂本さん。お互いに・・・」

口の悪い源太郎に竜馬も苦笑いだ。

「でも、それがどうして私と希佐ちゃんの立合いに?・・・」

「兵法者が仏と約束したのですよ。」

沙希殿に勝つたら転生か守護かを自ら選ぶからもし負けたら仏が選べ・・・こうなんですからね」

「だってそれじゃあ・・・」

「そうでしょ・・・概して兵法者の頭ってそんなもんです」

源太郎に言わせれば兵法者等、けちよんけちよんだ。

「でも、どうしてそこに私が出てくるんです?・・・」

「ああ、それは沖田さんが悪いのです・・・」

そこで酸っぱい顔をした沖田が沙希にあやまる。

「すいませぬ。私が日頃から古今東西、昔からなみいる兵法者の中で一番強いのは沙希殿だ。

あの人になかう者などいない。と公言していましたから、

それがその男の勘にさわった・・・というわけです」

「あら、私も兵法者の一人なんですな」

と悪戯っぽくそういいかえす沙希、自分の知らぬところで試合が決められていったお返しだ。

「と・・・とんでもない・・・沙希殿とあ奴を同列になんてできません

か・・・

でも沙希殿には申し訳がありませんが、本当のことを言えばこの男との試合にはもうワクワクしどうしなんです」

「もう、人事だとおもったら・・・」

「沙希よ、その試合わしも見に行つて良いかのう」

と今度はましろを案内に蓬栄上人がそう言いながら庭から現れた。後ろに続くは峰巖僧侶と宋円僧侶・・・そして天鏡だ。

「峰巖も宋円もちょうど修行僧をつれて本山に来ておつてのう・・・」

「あら、峰巖のお爺ちゃまも宋円のお兄ちゃまも・・・ ちょうど良いタイミングでした」

「ああ、本山からのお達しでな・・・、
今までのんべんだらりと住職をしておつたのだから少しは働けと言われて、

洩垂ればかりを集めて本山への修行の責任者というわけじゃ。

どうせこの蓬栄が本山に話を通したせいじゃろつて・・・」

と悪態をつく。蓬栄上人はただ笑うだけであつたが

「何をおおせです。峰巖様、少しでも遅れようものなら急げ！急げ！と」

修行僧たちを叱り付けて一刻も早く比叡山に着きたかつたのはどういふわけでしょうか」

と宋円僧侶に切り返されて、『うっ』と口をつくむは峰巖和尚。

それを見て傍若無人に笑う天鏡だが、さっそく峰巖和尚の餌食だ。

ジロリと睨まれ、『うぐっ』と口を押さえる天鏡、目が白黒となつて苦しそうだが

「天鏡！・・・おまえがそんなに笑う・・・そんなに可笑しいかえ」

といわれて

「めっ・・・めっそうもございませぬ・・・」

慌てて謝る姿にどこか可笑しさが感じられて、プツと吹き出してしまふ。

「仕方がない者達だのう・・・おぬし達二人が顔を合わせればそのように毎度同じ争いを・・・それ・・・皆が笑っておろう」
そういう蓬栄上人にも笑いが浮かんでいる。

「まあまあ・・・お爺ちゃま達とお兄ちゃま達・・・まずはお座りになって・・・」
と勧められて武士達の横に座る僧侶達。

そこに飛び込むように庭先から入ってきた胡蝶と白虎丸・・・とその上に乗る尼僧が一人・・・

「おお・・・妙真様・・・これはどうしたことですか？」

蓮昌尼が飛び上がるように立ち上がった

この年老いた尼僧を慈しむように白虎丸から抱き下ろすのだ。

「この者達に蓮昌が待っていると言われてなあ、それで参ったのじや。

とにかく不思議な者達じゃて・・・」

「しかし、どうして?・・・」

と蓮昌尼は改めて沙希を見るのだ。

その沙希は、まずは式神達に声をかける。

「胡蝶ちゃん、悪いけどひづるちゃんたちが下にいるの。呼んできてくれない?・・・」

「うん、わかった・・・」

と蝶になって地下に向かう胡蝶。

「白虎丸もご苦労でした。さあ、戻って休みなさい」と沙希に声をかけられて飛ぶように光になると沙希の体に消えていく。

「ましるちゃんもごくろうどした」

「あきあ様、私も何かお手伝いを……」

「いえいえ、あなたも今日はほんに大活躍でした。さあさ、うちの体に戻ってお休みなさい」

そういわれるとにっこり笑って

「はい」

と返事をするとう光になって沙希の体に消えていく。

それを呆然と見つめる二人の尼。

その尼に声をかけたのが蓬栄上人であった。

「おお、妙真ではないか……」

「あっ……これはこれは、蓬栄上人様」

と立ち上がってそばに行こうとするが

「よいよい、ここはむくつけき男達が大勢いるのでな、その場で話を聞こう」

そう言われて蓮昌尼の横で座り込んで頭を下げる妙真尼。

無論、蓮昌尼には相手が比叡山の位の高いお上人と判ったので妙真と共に頭を下げる。

「ここにいるは私の弟子で蓮昌というものです。」

蓮昌は私の庵に『妹の臨終の言葉がわからぬ。その言葉が判るよう修行させてほしい』と飛び込んできた変わり者です」

「ほほう……蓮昌とやら、その臨終の言葉の謎、解けたのかな？」

「はい、我が子の命を見捨ておいても先妻の子を助けよという言葉は」

「ほう、どうして解けたのかな？」

「天の星の流れと日が昇る情景が私に与えたものです・・・」

「自然の生業から解けたと申すのか・・・」

「はい、けれどももうひとつあった意味深い私への肉親の愛は判りませんでした」

「肉親の愛？・・・」

「はい、妹がその命の淵に私への想いをかけた言葉・・・」

その奥深い言葉の意味には最後まで気づかなかったのです。

人生を呪い続けた馬鹿な私を立ち直らせるに至った言葉なのに・・・

「その意味が今では判ったともうすのか？」

「はい、けれどそれは全てそこにおられる沙希様に教えてもらったものです。」

でもその一つ一つの言葉に含まれる妹の愛が私の胸に突き刺さり
どうにも自分の情けなさにたまらなくなっております」

「ほう・・・沙希が肉親の愛とな・・・」

と峰巖和尚が沙希を眺める。

「いやなお爺ちゃま・・・」

といつてから

「あら、野分も嵐も来ていましたか。あなた達も私の話を聞いてくれるの？」

というと庭で『ヒヒーン』と嘶いてヒズメで土を掘りあげる野分。
わかったという合図だ。もう一頭の牝馬の嵐はじっと見ている。

「私の肉親の情が薄いのは皆様もご存知のとおりです。

男尊女卑の強い土地で生まれた私にとってそこはまるで地獄でした。

女の子はゴミ扱い、その女の子を助けようものなら

男たちの暴力が雨のように降り注ぐのは日常のことなのです。

優しさが罪になる・・・先ほど言いましたが

ある日女の子を助けた私に待っていたのは大人たちの制裁でした。

その私に、あの母・・・まるで鉄仮面をかぶったような母が

私の上に覆い被さり男たちの暴力から私を守ったのです。

そんな思い出が何故？・・・私から封印されていたのでしょうか。

・・・今思い出せば次の言葉が母の口から出た瞬間でした。

「やっかいをかけるんじゃないよ、このおとこおんが・・・」

私の体のことはこの土地では口にするのがタブーとなっていました。

ここでは巫女だけに時々生まれると言う男女二つの性を持つ子供。

けれど長生きするのが皆無というのに私のような者が存在したので

す。

そのタブーを破って母が吐き捨てるように言った言葉・・・

その日からしばらく母は私の前に現れません。

罰があたったんだ・・・子供心にそう思いました。

実際は私をかばった傷で高熱をだして床にしていたのです。

そんなことがあって子供心に疲れてしまったことは確かです。

そんなある日です。台所から包丁を持ち出して自分の喉に突き立て

たのは・・・。

結局死にきれませんでした。

そして気が付いたときには母と共に夜汽車に揺られて東京に着いたんです。

どうして東京までできたのか母には聞くことが出来ません。

最後の最後まで鉄仮面をかぶり続けてきた母ですから……ねえ、
そうでしたね。母さん……」
しみじみとした声で話し掛ける沙希。

皆は『えっ?』という顔をして沙希の視線の先を追い求めた。

『母』という他人行儀な呼び方から『母さん』という愛情のこもつた呼び方をする沙希に

夫婦となった律子を始め、子供を妊娠した早瀬の女達……ドキッ
として身を乗り出したのだ。

庭先の嵐の体が光り出し、その光が部屋の中の沙希の目の前にとま
る。

その光の中から白い着物を着た女性が現れたのだ。

「やはり判っていたのですね……」

と昔の名前を呼ぼうとして

「そうでした、あなたは今は早瀬沙希という女性でしたね」

「母さんなら、どちらでもいいわよ」

「そうはいかないわ。あなたはここにいらっしやる女性全員に沙希
として愛されているもの。」

それに昔の名前で呼べばいやな思い出が蘇ってくるでしょ」

「そうね……昨日までの私だったらね……」

「えっ?……」

「でも、今日の事件で私自身の肉親の愛を思い出せて下さった蓮昌
尼様がここにいらっしやるし、

断りもなしにこう言っただけは悪いと思うけど、

蓮昌尼様を導いてくださった妙真尼のばば様もいらっしやるのよ」
その言葉にはっとして顔をあげて沙希を見つめる妙真尼。

「勿論、ここにいるのは私の優しい家族ばかりなの」

「わかってますよ、沙希。あなたは家族という暖かい光に包まれて本当に幸せなのね。」

だから私は安心していけるの」

「えっ？・・・行くってどこに？・・・」

「沙希！・・・」

「あっ！菩薩様！・・・」

「沙希の母の久乃はこれより一段と高い位について修行をすることになった。」

これまでのように常に沙希のそばにおることは出来ぬ」

「菩薩様・・・それは・・・」

「さよう、沙希の母だからではない。これまで久乃がほどこしてきた善根が位をあげたのじゃ。」

久乃・・・そろそろよいであろう・・・」

「あっ、お母様・・・」

とつい声をあげたのは律子だった。

振り向いた久乃の優しい笑顔・・・つい手をついて体を乗り出してしまふ。。

「律子さん・・・真理さん・・・操さん・・・薫さん・・・遷さん・・・」

理沙さん・・・まゆみさん・・・順子さん・・・奈緒さん・・・」
そう言っているいちいち顔を見ながら呼びかける久乃・・・

ご存知だったのだ・・・そう思うと、その感動に身が竦むほどだ。

「皆達の沙希に対する愛情、母として感謝する以外何の言葉もございません。」

このとおりでございます」

と全員に対して腰を折る久乃。

「あっ！・・・お母様、そんなこと・・・」

と誰もがその言葉に声をあげてしまつほどの母の愛……。

「我が手で孫たちを抱くことはかないませぬが。元気な子を……と願つております」

と言つてから今度は貞子や高弟達を見て

「お婆様……沙希のことお頼み申し上げます」
と腰を折る。

「あつ！……ひ……久乃はん……」

と呼びかける貞子に久乃はただただ首を振るだけで

貞子の口を閉ざしてその優しい笑顔と共に光の中に消えていった。
光は庭に出て中空に留まる。

「沙希よ、もう一人挨拶させておこつ」

と菩薩様が言つと新たな光が庭より座敷に入ってきた。

光の中からまだ若い女性が現れると

「た……高子！……」

そつ蓮昌尼から悲鳴のような叫びが漏れる。

「これ！蓮昌！……取り乱すではない！……」

そつ妙真尼の激しい叱責にハツとした蓮昌尼が

「も……申し訳ありません……」

と謝るがその目は高子に釘付けだ。

「妙真よ……蓮昌よ……高子も久乃と同様に高い位にあがるのじゃ」

「ハハア……」

と頭を下げる二人の尼僧。

したが妙真は蓮昌の心を察したのか

「菩薩様にお聞きしとつことがございます」

と顔を上げてお顔を拝顔するのだ。

「なんじゃな、妙真……」

「ははあ……これなる蓮昌の妹高子が天に召されてから3年。それほどの善根を？……」

「ははは……妙真よ、位が高くなるのは何も善根のみではない」

「で……では……」

「そうじゃ、もともと高子は位が高かった天人……それが使命を受けて現世にうまれたのじゃ。

そしてその命を真つ当して天に戻ったきた……沙希……沙希なら判っておろう」

「はい、高子さん……いいえ、高子様は蓮子さんの妹として、蓮子さんを導くお役目を背負ってお生まれになった。

そして、もう一つ高子様のお血をひく女の子をこの世に残すお役目も使命の一つであった」

「その通りじゃ。だが高子の使命はそれだけではない。高子自身の修行でもあった。

自分の愛したものを残していく万感の苦しみ悲しみはその当人であれば判らぬ。

ましてや自分の血を分けて生まれたばかりの我が子。

1度も抱いてやれぬ悔しさはいかばかりか……女達にはその心判ってやれよう」

そう言われてから

「高子よ、そろそろじゃ。別れを存分にな……」

そういつて菩薩様は口を閉じる。

光はスーっと二人の尼僧に近づいた。

「蓮子姉さん……よくぞそこまで……沙希姫様が先ほど申され

ておられましたか、私の言葉をよくそこまで・・・修行の末とはいえ仏門にまで入られるとは

高子、思っても見ないことでした。さすが私の姉様です」その言葉にも蓮昌尼の慟哭はやまない。

「妙真様、姉の修行とはいえ数々のお世話ありがとうございました。

これからも姉の行く末見守ってくださいまし・・・」
と言って腰を折る。

「いえいえ、修行のためとはいえ蓮昌には随分酷いことを言ったりやったりしたものです」

「いえ、妙真様。それは全て私のため・・・」

わたしはあの時、私の衣服を持つ妙真様のあのお姿は・・・御仏のお姿と今でも思っております」

「妙真様！・・・姉の修行と共にあなたの尊い修行も聞き取られませんでした。

あなたが修行の先に追い求められていたお方の姿、もうお気づきでございましょう」

「あつ！・・・はい。もしやと思いましたが・・・
そこにおられる沙希様・・・」

「妙真様はあの厳しい庵から居をこの近くに移され、沙希姫様のお近くで姉共々心穏やかにお暮らしになられますよう天から見守っております」

『ははあ・・・』と頭を下げる二人の尼僧。

「沙希姫様、お二人のことよろしくお願いいたします」

「何をいつているんです！高子様。私は仏様ではありません、人で

すわ」

と抗議する沙希に

「おほほほほ……あなた様は尊いお力をも潔しとなされないと聞いております。

その通りでございますね」

と云ってから再び

「おほほほ……」

と笑った。しかし、次には真剣な顔となり女の子の前に屈むと柔らかな笑顔となった。

「お嬢ちゃん、お名前はなんというの？」

「……カコ……」

何かが伝わるのかカコは高子の顔をじっと見つめて離さない。

「そうカコちゃんていうの……カコちゃんのお父さんて

三味線をつくる名人と聞いたけどカコちゃんもそうなるの？」

首を振るカコに

「あら、三味線をつくらないの？」

頷くカコに

「どうして？」

と聞くと

「だって難しいもの」

と答えるカコ。

「難しいからやらないの？」

少しがっかりした高子の声……

それに首を振るカコ。

「だって、母ちゃん熱を出して寝てばっかりいるけど、ずっとは
ん作ってくれるのよ。」

それに父ちゃんよく怪我をするの……

だからカコ、看護婦さんになって母ちゃんの病気も父ちゃんの病気も治してあげるの」

「そうなの、カコちゃん偉いわね」

「だから、カコね。毎日母ちゃん連れてここに来るの」

「叔母さんね、お父さんもお母さんも大事にするカコちゃんにご褒美あげる。」

それに叔母ちゃんね、遠いところに行ってしまうから

カコちゃんの看護婦さんになるお祝いも一緒にね」

と懐から出したもの・・・両手の上に乗るのは櫛と髪留めだ。

「沙希姫様・・・」

と沙希に願うはこのままではカコが触れられないからだ。

沙希に渡された櫛と髪留めに真言を唱えてからカコの両手に乗せた。

「母ちゃんがやってあげる」

と櫛でカコの髪をとかしてからうしろで髪留めをとめる。

涙ながら育ての母の行為を見つめる産みの母、

触れられぬ我が子に想いを残しながらも振り返り我が子を背にした。

「よいのだな・・・」

菩薩様の言葉に頷く高子・・・

光が高子を覆い隠すと光の玉となって庭の中空に留まっていた久乃と並ぶ。

そして天高くへと飛び上がっていった。

永の別れは女達に万感の想いを与え、我が子の誕生を願う母達は我が子の幸せを願うのみだ。

「さて、沙希殿」

とその場の雰囲気をかえるように源太郎の声が響いた。

「先ほど言われた試合相手のことだが・・・」

「どうしても私にその方と試合をさせたいのですね・・・」

「あたりまえですよ。近頃こんな面白いものはないでしょうし、沙希殿が試合に出ることで我ら皆の骨休みにもなる」

こう言われるとクスリクスリとどうしても笑ってしまう女達。

「もう・・・皆も・・・」

と再び膨れようとするが思うようにはいかなかった。

「菩薩様にお聞きします」

と声をかける沙希。

「どうやら菩薩様もまだこの場において面白がっているようなのだ。」

「なんじゃな、沙希・・・」

「菩薩様達仏様方もこの私にこの試合をしるとおおせになられるのですか？」

「そうじゃ、沙希。天界の秩序を乱す者を放っておけはせぬ・・・」

「でも、どうして私が？・・・」

「それは沙希が沙希だからじゃ・・・」

「えっ？私が私だから？・・・」

「わからぬか？」

「ええ、わかりませぬ」

「そうか・・・わしもじゃ・・・」

「もう菩薩様・・・禅問答をしているのじゃありませんか？」

「これ、小沙希ちゃん。あんた、菩薩様に対してあまりにも失礼ど

すえ」

と小沙希の言葉使いにはらはらしていた貞子が声をあげる。

「よいよい、貞子よ。自由に沙希と話をする……こんなに面白いものとは思わなかった。

どおりで阿弥陀達が沙希の様子を見ながらニヤニヤ笑っていると思っ
っていたぞ」

そんな言葉に沙希は思い切っここ質問した。

「菩薩様にはこの勝負私にどうせよとおっしゃるのですか？」

「勝て！……」

「えっ？……」

「勝つのじゃ」

「これは菩薩様のお言葉とは思えませぬ」

「ほう」

「勝負は時の運でございます」

「勝負は時の運とな？……」

「はい！」

「清明！」

「はっ！」

「沙希が、ああいいおったぞ」

「今度は私に問われるのですか？」

「そうじゃ」

「確かに沙希の言った言葉間違いではございませぬ」

「ほう……」

「勝負はそのときの身体の状態、心の持ちようでかわるもの」

「やはりな」

「ただ……」

「ただ？」

「我ら陰陽師は戦いに敗れば死があるのみ……
だからこの安倍あきあに負けるような体術を教えた覚えはございませぬ」

沙希は仏と師によってまんまと乗せられたと悟ったが「こうなればやるだけだ。」

「わかりました。この勝負やりましょう。そして勝ちます」

「おお……おお……いいおった、沙希が言いおったぞ」

菩薩様が喜びの声をあげる。そして……

「沙希よ……」

「はい」

「阿修羅がな……」

「えっ？阿修羅様……一時私についていらった……」

「そうじゃ、今の沙希の言葉にわしの横で飛び上がった喜びおる。」

阿修羅もあ奴には手を焼かされ続けておったからよけいじゃ」

「阿修羅様達にお手を煩わせていたお方……というのは？……」

「源太郎よ、おぬしに頼む。わしはあの者の様子を見に行っておこう」
「う」

と行って消えた。

「菩薩様も沙希殿の怒りが恐ろしゅうて逃げたのでしょっね」
と笑う源太郎。

「沙希殿、前もって言うておきます。拙者に対して怒らないでくださいね」

「篠原さん！怒られる人をもっと増やしておきましょう」

「おお・・・そうでした。では沖田さん頼みます」

なんかおかしいな雰囲気は漂うが決心をした沙希には迷いはない。

「沙希殿、新しい顔ぶれです」

という庭から二つの光が入ってくる。

その中からは・・・

「あつ、近藤勇様、土方歳三様・・・」

そんな沙希の声に皆の視線が集まる。

「沖田くん、遅いぞ」

といって皆のそばの座布団に座る近藤だが

「おれはここでいい」

と廊下側の壁に斜めに置いた大刀にもたれるようにあぐらを組んだ土方。

「あははは、土方さんはあんなお人ですから、まあいいでしょう」

そんな沖田の声に

「近藤様も土方様もいつ天に？・・・」

「最近だ」

と答える土方・・・

「だから、俺たちはあいつのことは何も知らないからな」

と自分達の預かり知らぬことを言うておく土方。そんなに沙希の怒りが怖いのだろうか。

「次は拙者の番だな」

と竜馬がいうと庭からこれも二つの光・・・

「あつ、桂小五郎様」

「沙希殿、私は試合の相手のことを知らぬという野暮は言わぬ」

と言って竜馬の横に座る。そして・・・

「ひゃあ・・・幾松さん姉さん！・・・」

と飛び上がる沙希。・・・幾松も

「小沙希ちゃん！・・・久しぶりえ・・・」

と抱き合って飛び上がっているのだ。

こんな女の騒ぎに慄然とする男共・・・

「きゃあゝ・・・あのお人が幕末の祇園の大看板幾松さん姉さんや
て・・・」

と大きな声をあげる芸妓や舞妓達。

「幾松さん姉さん・・・ここに座ってじっくり話ししょう」

「小沙希ちゃん！あきまへんえ。」

あなたにはここにいやはる男はん達がまだまだお話があるし、
天界からまだ話を聞いてはる仏はんや小沙希ちゃんの相手となる剣
術家のお人がいるんどす。

小沙希ちゃんとの積もる話はそれからどす」

「幾松さん姉さん、しろうがおへん。きつとどすえ・・・お話す
の」

「へえ、約束します。・・・ところで小沙希ちゃん。あのお人が井
上のお師匠様どすか？」

「へえ、うちがお姉ちゃんに言っていた貞子お婆ちゃまどす」

「じゃあ、うちお師匠様にご挨拶してから あそこの芸妓や舞妓ち
やんとこに行つときます。」

千代松もおるようどすから・・・」

「へえ、わかりました。そんじゃあそのときに・・・」
と言ったが沙希は幾松が貞子に挨拶するのを見ているのだ。

「井上のお師匠様どすか、うちがお師匠様のおばあ様にお世話にな
った

幾松どす。小沙希ちゃんがお世話になっていることあの時に

いっぱいいっぱい聞かせて貰いました。ほんにありがとうはんどす。

小沙希ちゃんにはうちもホンにお世話になったんどす」

「おうおう、あんたが幾松はんどすか、うちもお母ちゃんにいろいろと聞かせて貰いましたえ。」

こたびは小沙希ちゃんの守護とのことほんにご苦労はんどす。

小沙希ちゃんのこと幾松はんもご存知や思うんどすけど目を離れたら何をするんやわかりまへんえ」

「へえ、その点は重々心得ております。うちの時代でももうもう大変でした。」

気が休まる暇もないとはああいうことだとここにいる男は人たちもようよう知つとることどす」

「もう・・・お婆ちゃまも幾松さん姉さんも何を話しとるんどすか」

「あらあら、小沙希ちゃんが怒ってますえ」と言つて笑つてから

「じゃあ、お師匠様。ご挨拶はこれで。うちは芸妓はんや舞妓ちゃんのところに行ってます」

「へえへえ、当節の芸妓はんや舞妓ちゃん達はあかんたればかりどす。」

幾松ちゃん、昔の祇園の女を勉強させてやっておくれやす」

「ひゃあ、お師匠様うちらにあんなこと言われてはる」と花世の大きな声だ。

「花世ちゃん！あんたなあ、言われとうなかつたらもつと勉強することどす」

と花江に注意をされている。

「へえ、あの子が花世ちゃんですか。ほんにうちの花世ちゃんとそっくり……」

と言いながら立ち上がり、もう一度貞子に腰を折ってから、芸妓と舞妓の方に歩いていく。

なるほどこの祇園で大看板を張った惚れ惚れとする女ぶりだ。

「いろいろと邪魔が入ったが……」
と女達に少し皮肉るように言う源太郎。

「それでは兵法者の名をいうことにしますか……よろしいですか、沙希殿」

「はい」

その声に幾松を向かえて騒いでいた芸妓や舞妓の聲がピタッと止んだ。

「武蔵……宮本武蔵です」

「武蔵様ですか……あの二天一流の……
でもあの方の晩年は禅や絵画に没頭しておられ心静かに眠られたと聞いていましたが……」

「沙希殿！……私を見てどう思われます？」

「えっ？……どうと言われましても……源太郎様は源太郎様です」

「そ……そういうことではなく……姿形です……」
「姿？……形？……あっ！……」

「わかりましたか？……」

「皆様、私が会ったあのまま……そういえば晴明様も私が修行を受けていたあの時代の……」

「迂闊者め！あきあよ・・・わしが年を取らずに天寿を全うしたかと思っていたのか・・・」

「考えればそうでした。皆様も年をおとりになっていたはず・・・でも、皆様は私が会ったその時のお姿のまま・・・」

「そうなんです。現世の人には別れたそのときの姿のままです。います。」

けれど現世に会ったことのない者は若い姿に戻れるのです」

「では武蔵様は・・・」

「荒々しい修行を積む時代の若い姿に戻ってしまったんですよ」

「自分の死は・・・」

「受け入れてはいるんですが、未だに修行修行です」

「なんだか可哀相・・・」

「沙希殿ならそういわれると思っていましたよ」

「武蔵様の今までの相手は・・・」

「それなら天にも上れず、地獄にも行けず、彷徨い歩い続ける者達がいいます。」

その中には兵法者や剣客と呼ばれる者が多いのです。

死して得た若さというものが魂を狂わせるのでしょうか。

武蔵はそういうものを相手にしてきて、魂を消しさっていたのです。

でも今の世、死せる魂で剣客などという人種は皆無です。

だから武蔵が探し回ったあげく目にしたのが幕末の結城道場での沙希殿と沖田くんの試合でした」

「えっ？・・・見ていたのですか？・・・あれを・・・」

「沙希殿・・・私も後で聞いたのですが、あの立合いを見ていた人多いんです。」

・・・武蔵はあなたに目をつけた。そして、菩薩様に言った。
あの者に勝つたらあの者の力をくれ。・・・だが、菩薩様は断つた
んです。

しかし、武蔵は執拗でした・・・そして菩薩様にこう言い放ったん
です。

わしが勝つたらあの者のあの力を貰い受ける。

あの力は仏といえど関わりのない力、

わしが貰い受けても依存はあるまい・・・そう不敵に笑ったそうで
す。・・・」

「あの力とは？・・・はっ！・・・」

「そうです、沙希殿が今度のことので得られた『通力』です。

沙希殿！・・・絶対勝ってください。・・・

武蔵のような男が通力を得てしまつたら天界にも・・・ひいては
この現世にも影響を及ぼすことは必定・・・

もしかして、剣のことしか頭がない分、あの元方よりも悪質な男か
もしれません」

先々の影響を考えずに行える不敵さがありますから」

「そんなあ・・・」

と悲鳴のような声が飛ぶ・・・。

「沖田殿！・・・仏は沙希に又もこのような厳しい戦いをせよとい
われるのか」

これほど激しい口調の蓬栄上人は初めて見た女達。

仏への怒りか・・・それとも武蔵への憎しみか・・・

孫”沙希”に対する肉親の情愛が激流のように我が身を襲う。

「お上人・・・それ以上のことは口になさるな・・・」

晴明が目を閉じて言い放った。厳しい視線の集まる中

「仏も苦しいのじゃ・・・そしてあきあの顔を見ておくのが辛うて

ああして消えられてしまった。

ここはあきあの手にゆだねるほかはない。選択の道が閉ざされてしまっておるのでなあ……」

清明の言葉に添えて

「御坊……御坊のお心、われ等とて同じなのだ」と苦しき胸のうちをあかす竜馬……

その時にふつと表情が変わる蓬栄上人。

「これは、わしとしたことが……孫のことを思うと、ただの爺に戻ってしまいましたのう……」

と謝るが気が付くとお上人の両の手を左右から握る峰庵和尚と宋円和尚の手が

強張って震えているのだ。その横の天鏡に至っては両膝に握った両手をおいて

これも震えながら、閉じた両瞼から涙がしたたり落ちている。

「私が……私が奴を打ち倒そうとしたのですが、駄目でした。

奴の剣技そのものが鬼といってもいい。

隙をつこうとしてもその隙が一瞬に消えうせ奴の反撃が襲ってくる・

でも……それでも私はあなたがこの武蔵よりも強い！　そう今では確信しているのですよ」

「でもどうして沖田様はそう思われるのですか？」

「私はあなたの剣を知っている。この身をもって体験しているのです。」

確かに武蔵は強い……鬼といってもよいその剣技には私は悔しいけれど太刀打はできませんでした。

けれど怖いと思ったことは一度もありません。

少し工夫をすれば勝てるかもしれない……そう思ったりもしまし

た。

けれど沙希殿・・・あなたは違う。あなたと相對した瞬間、体が震えてしまい動けなくなった。

正直怖いと思っただのはあなただけです。

あなたの剣は見えない。次にどう来るのかも判らない。これでは勝負になりません。

あなたはあの時、馬の鞭を使われたけれどあれが真剣だとしたら・・・
正直あの夜震えがきて眠れませんでした」

「わしも、見た。

宙を舞い天井に留まって沖田の刀身を避けて逆方向に回り込む、そんな戦い見たことなどない」

「おれもそう思うぜ。あの日の帰り近藤さんにも言ったが、それまで聞いたことがなかった早瀬沙希太郎というとんでもない化け物を

相手にしなくてよかったとつくづく思っていたんだぜ。

沖田との立合いを見ていただけ俺はビッショリと冷や汗をかいていたんだからな。

・・・あんな経験は二度とない」

「沙希殿、わしも沖田さんとの立合いは見ていたんだからな。

わしはそれ以外でも、沙希殿が戦う殆どを見ているんだ。

泥棒相手に放った『気孔』・・・それを結城道場の門弟達に教えていた沙希殿の姿、

・・・酔っ払った浪人達を鞭で倒したり、

見てはいなかったが京を騒がせていた浪人集団を退治した『鞍馬天狗』は沙希殿だ。

圧巻は座敷内で竜馬さん相手にはなった『無音の術』だった。

その術が実戦で会得したというから沙希殿にかなう者なんているは

「ずはない」

「そんな人相手に私は立ち合っただんですからね。馬鹿を見たのは私ですよ」

「沖田さん、それはあなたが悪い。医者嫌いのあなたがね」と源太郎が一矢を報いる。

「おほほほ……篠原殿。わしはまだまだ見ているぞ」

「晴明様！……もうお止めください」

「何を言うか、あきあよ。こんな面白き事止められはせぬ」と言ってから

「あれは、将門殿との戦いの場であつた。雑兵達に襲われたあきあが

中空へ飛び上がりそこで放つた剣が『破邪！雷光剣！』であつた。雲一つ無い空から雷が雑兵を貫き一瞬にして消し去り天に戻したのじゃ」

「破邪！雷光剣？……そんな秘剣があるのですか？」

「見ていたわしも驚いたわ……」

「じゃあ……」

「そうじゃ、わしが教えたのではない。あきあが研鑽を重ねてあみだしたのじゃ」

「それじゃあ、武蔵といえどもかなうわけないじゃないですか」

「私はこの試合に全力を尽くします。そうでなければ勝っても負けても武蔵殿に失礼でしょう」

「ほほう、あきあが言いおったぞ」

「沙希さんらしいですね」

「いいでしょう、それで良いと思いますよ」

「それから・・・晴明様・・・」
と沙希の剣のことを教えてもらおうと沖田があとを促す

「これは剣ではないが、源義経殿が弁慶を相手に使った八双飛びもある」

「沙希殿の身軽さがあれば当然でしょうな」

「そして、忍法影分身・・・」

「影分身?・・・」

「そうじゃ、あきあが何十人かに分かれたのじゃ」

「沙希殿は忍法も使えるのですか?」

「忍者の源はこの陰陽師にある」

「なるほどそういうことですか・・・」

武士たちは夢中で聞いている。

沙希にとっては面映いが師の命であるので仕方なく黙っているのだ。

「秘剣・円月天空斬!というのもあった」

「それはどういふものですか?」

「剣が円月を描き、その美しいほどの刀身からの光が相手を惑わすのじゃ」

「惑わす?」

「一種の催眠状態じゃな」

「それじゃあ、武蔵め勝てるわけないじゃないですか」

「沖田殿、あなたの持っていた菊一文字で使った『秘剣 光輪斬!』
が私が見た最後の剣かな・・・」

「『秘剣 光輪斬!』?」

「斜め上段から切り下げ鬼どもを一掃した剣であった」

「沙希殿!この剣は?・・・」

「沖田様が持っていた『鬼切り』だからこそ出来た剣です……でも」

と沙希が言い出した。

「武蔵殿は真つ当に剣の技を磨かれておられます。

それに引き換え私は鬼や妖しを葬り去るとはいえ

こそくな手段をあみ出してきたのではないかと思っっているのです」

「それはないとおもうぞ」

と声をあげたのは土方だ。

「我ら新撰組も大義名分を掲げて何人も人を殺めてきたんだ。

徳川家という御旗のもとにな、けれど勤皇の方にも大義名分があった。

その大義名分は天子様を引き入れられて政府軍となり、

徳川家は朝敵となつて追われる立場となつてしまった。

ええい！……言い方がわからん！……沖田！後を頼む！……」

「土方さん！……本当に口下手というか……」

近藤さんと一緒にもつと勉強をしたほうがいいですよ」

「何をいつてやがる……」

「口下手なのにその口の悪さ……天下一品だからな……」

まあいいでしょう。沙希殿、土方さんは同じだといいたいのですよ」

「同じ？……」

「はい、勤皇も佐幕も大義名分があつた。あとは徳川か朝廷か

錦の御旗がどちらになるか……ただ徳川は300年続き、

屋台骨が腐っていたんです。だから天子様をかついだ勤皇が天下をとつた。

剣客たちも同じです。先ほど沙希殿は剣客達は真つ当に剣の技を磨かれている。

と言われていましたが、何故剣を磨くのかといえば自分を守るためなんです。

自分を守るために相手を切る・・・つまり人殺しの技を追及しているんですよ。

それを思えば沙希殿のほうが分があります。

沙希殿は人を切るのではなく、妖しや鬼を退治する・・・そこが全然違う。

だから私は秘剣という立派な剣技をこそくな手段となんて言わないでいただきたい・・・」

沙希はじつと沖田を見つめた。

曇っていた自分の心が嘘のように晴れていくのだ。

平伏して言葉を添える沙希。

「土方様・・・沖田様・・・そして皆様。私めの心得違いどうかお許しください。

自らをおとしめるなはいつも言っている言葉なのに

自分自身がいつのまにかそうなっているのに気づかず恥ずかしい限りでございます。

これよりは気分をかえて明日の試合思い切りやりとげるしだいです」

「おお・・・よくぞ言ったあきあよ、これで明日の試合楽しみになったな」

「小沙希ちゃん！がんばってね！」
とは置屋の皆と座る幾松だ。

「沙希ちゃん！・・・小野監督がもうすぐくるからね」
「えっ？薫姉さん！・・・連絡しちゃったの？・・・」
「あたりまえじゃないの！こんな面白いこと黙っていちゃあ
後で凄く叱れるんだからね。それに私達こんな体でしょ。
まだ不安定な時期だから試合を見に行くこと出来ないの。
だからよ、小野監督に記録映画として残しておいてもらいたいから
・・・」

「なんだか私用で小野監督を使っているみたい」
「いいじゃないの、それに記録映画だけに終わるかしら」
「えっ？・・・それどういう意味？・・・」
「まあ、来てからの楽しみよ」

「小沙希ちゃん！」
「お婆ちやま・・・何？」
「うちらも見に行きまへん。ととても小沙希ちゃんの試合なん
て

もうドキドキして見れるものやおへん。
そやから小野監督の映画あとでじっくり見せてもらいます」
貞子の言葉に頷く高弟達。

「仕方ないでしょうね」
「うちらは見に行きますえ。お師匠ええですか」
「ああ、なんぼでも見ておいで、あんたら少々お稽古せんでもそん
なにかわりおへんから・・・」

「ねえ。今のお師匠の変な言い方うちら馬鹿にされてえへん？・・・」
「されてえへん、されてえへん・・・あんたら1日2日お稽古休ん
でも

なあんも変わらへんやないの」

「あつ・・・お姉ちゃんその言い方きついわあ・・・」

「おほほほ・・・舞妓ちゃんはいつの時代も同じでんなあ」

「あつ、幾松さん姉さんの時も同じでしたん？」

「へえへえ・・・同じでしたえ。特に花世ちゆう舞妓ちゃんはな・・・」

「なんやうち、時代変わっても同じや言われとる・・・」

「もう・・・あんたら次からきつちりお稽古するんえ。」

お休みして花世のアホうつつたらいけまへん！・・・」

「は～い、花世ちゃんのアホうつらんようにがんばります！・・・」

と大きな声をあげる舞妓達・・・こんなときには置屋の区別はない。

花江の言葉に元気良く答える舞妓達だ」

「おほほほほ・・・」

と笑い崩れる芸妓達、特に幾松の笑いが好ましい。

「花江ちゃん、いいましたなあ」

「はい、幾松さん姉さん」

「こうしてあなたのそばにきてなんぼもたたんけんど

始めは区別ついてたけど段々あんたが千代松に見えてきて今は区別つかんようになつてきたえ」

「えっ？ほんとうですか？・・・」

「ほんとうえ、あとは貫禄どすなあ」

「貫禄？・・・」

「へえ、うちが祇園を背おつとるんや。他の誰にも負けまへん・・・
いう貫禄どす。千代松はそうどした」

と幾松は花江にも祇園の女というものを教え込んでいくのだ。

そんな中、

「あのう、あきあさん・・・」

「なんですか、涼子さん」

と河合刑事に顔を向ける。

その手にはモバイルが乗っているのを見てはつとした。

「涼子さん・・・あなた・・・」

「すみません！・・・勝手に府警に連絡してしまいました。

試合のことはもう・・・誰かに話さずにはいられなくなって・・・

」

「沙希さん！涼子さんは悪くないんです。

わたしがうずうずしてモバイルを起動させてしまったんです」

「恵子さんは牛尾さんに連絡しようとしたのね」

「はい！」

「ご馳走様・・・」

「そんなんじゃないんです。犯人を捕まえたことで今日会うことができなくなっ

て・・・」

「へえ、今日デートだったんだ。ごめんね邪魔しちゃって・・・」

「もう、恵子！そんなことで顔を真っ赤にして・・・もう・・・」

礼子の背中に隠れてしまった恵子。

「これが二十歳を過ぎた女の反応かしら、まるで女学生だわね」

その声に全員が笑い出してしまふ。

「礼子さん、放っておきましょうよ。今が一番いい時期だし・・・」

「そうですね・・・でも手間がかかって仕方がないんです」

「それじゃあ、いいことがあるの。ちよっと来て・・・」

と緋鳥礼子に耳打ちする沙希。

「……あつ！……それって最高！……悪よのう沙希姫様は……」

とよくある台詞を述べた礼子になになに……と皆が聞きたがり、何を言われているか気になる恵子が

割り込んで聞こうとするが皆に邪険にされる図って最高に傑作だった。

それが落ち着き沙希は涼子に

「それで恵子さんのモバイルを取り上げて署長に連絡したわけですね」

「はい」
と今度は涼子が小さくなる番だ。

「それで署長はなんと？……」

「今、この様子も見ています」
と言って渡されたモバイルにニコニコ笑いながらの署長の顔が写された。

「やあ、あきあさん。最高ですねえ……今からワクワクドキドキですよ」

「どうしたんですか？署長……」

「どうしたのかですって……明日の試合ですよ、試合……」

「というと署長は今……」

「ええ、刑事部屋ですよ」

「でも、皆さんは？……」

「大八木以下刑事達はそちらに向かいましたよ」

「ええ〜・・・本当ですか?・・・」

「こんなこと、嘘を言ってもしょうがないですよ」

「もう・・・事が段々と大きくなっていくわ・・・」

「それは、仕方がないとあきらめなさい。」

だってあなたがですよ。天下の女優のあなたが昔から名前の知れた宮本武蔵と

試合をするなんて誰が思いつくんですか・・・誰も思いつく人なんていやしない。

だからですよ・・・だから、もう体が震えるほど興奮しているんです」

「でも、こんな試合・・・」

「あははは・・・いいじゃないですか、

ほとんどの者達が女優のあなたが出る試合です、誰も本当の試合とは思いはしない。

けれど知っているものもたくさんいる。その者達の興奮ってもう頂点ですよ。

それがこの京都でおこなわれるんです。刑事達の興奮も無理もない。

だから、私は放っておくことにしました。と言う私も明日絶対に見ますよ。それに・・・」

「それに?・・・」

「この騒ぎってもう京都だけに収まらなくなっていますからね」

「京都だけに収まらないって?・・・ええ〜まさか?・・・」

「そのまさかですよ。ちょうどこの事が判って刑事達が蜂の巣をつついたように

大騒ぎしている頃でした。飛鳥警視正が例の殺人集団のことで連絡されてきたのです。

京都だけでは収まらぬあの事件、

奴らを東京の警視庁・警察庁での取調べに変更してもいいかどうかをね。

私は二つ返事でどうぞどうぞといたしましたよ。

こんなことでややこしい事件の担当させられてはたまらない・・・
というのが実感です。

この試合が無事に終わった後ならばいくらでもお付き合いしますがね。

その私の返事が警視正の不信を買った・・・モバイルでの連絡でしたので

刑事達の騒ぎもいつそうに不信をあおった。

それは鋭い追及でしたよ。まるで何か悪いことをした犯人になったようでした」

「それはすいませんでした。日和子叔母様って私のことになったらどうも見境がつかなくなつて・・・」

「そんなこと誰だつてわかつている事です。

あきあさんが動けばハラハラドキドキ・・・心配するのって

婦警達の姿を見ていれば一目瞭然のことですからね」

「署長さんまでそんなこと言うのですか？」

「あたりまえです。私はあなたの大ファンですからね。

その家の女性達のように心配もさせられているんです。

ただ男であるがゆえにあなたに近づけない、だから部下をそこに預けて心配しているんです」

「ほら、ごらん、小沙希ちゃん。あなたのこと男はんもおなごも

何の区別もあらへんのどす。あなたを心配するんは・・・」

という声が聞こえた署長が

「今のは井上貞子先生ですね。相変わらず心配のお小言ですね」

クスリクスリと聞こえる皆の笑い・・・

これ以上また、小言を聞かされてはたまらない。

「日和子叔母様はどうされたんですか？」
と話を促すのだ。にやりにやりする武士達の笑いに
『フン』と鼻でだけかえす沙希。

「飛鳥警視正、あの大きな瞳をさらに大きくされたと思ったら、いきなりモバイルを切られたんです」

「えっ？・・・それでは・・・」

「そうです・・・あの交通課にいた3人の婦警・・・今では警視正が

同じ課に入れたようですが、その婦警達を連れてこちらに向かったそうです。

部下に調べさせましたが、今ではさすがに落ち着かれて警察庁や警視庁に

頻繁に連絡を入れて殺人集団お引取りという名目になったようですが、

その警視正の後を追うように警官達も京都に向かうというちょっとした騒ぎになっているようです」

「ちょっとした騒ぎって？・・・」

「どうもその警官達、この間の事件でこちらに来ていたようなんです。

そして、あのような騒ぎこれで終わるはずはないと
どうやら警視正の動きをそこいら中からアンテナを張り巡らしていた。

そして、警視正の動きに敏感に反応したんです。

彼らの京都に来る理由も『殺人集団』の移送となっています」

「『殺人集団』の移送って、ちょうどいいじゃありませんか」

「とんでもない！・・・その数約一個師団と同じですよ」

「一個師団って？・・・」

「約500人です……」

「ぷっ」

と噴出す沙希……この部屋にいる者達も同じだ。

「笑いごとじゃないですよ……けれど笑えますよね。」

あの集団自分たちをむかえにきた人数に仰天するはずですから」

「でもそんな人数道場に入れるのですか？」

「それは無理です。……こんな人数といってももっと増えるでしょうから……」

本当は試合会場を隣の高校のグラウンドに変えたいのですが……」

「

「高校のグラウンドですか？……いいでしょう、おまかせします」

「よかった！……実はもう押さえてあるのです」

「えっ？……もう？……」

「はい、膳は急げというでしょ」

署長の笑い声が座敷に響いた。

「署長さん！実をいうと心配は飛鳥警視正のことです。勝手なことをして何か罰でも……」

と心配する沙希に

「そんな心配もないようです。今、警視庁と警察庁から連絡があり警視總監と警察庁長官が明日この京都に入られるそうです。」

これで私は堂々とあなたの試合を見ることが出来ます」

「本当になんか事が大きくなっていくのね」

「こんなこと一生あるわけではないでしょう。あきらめて堂々と勝負をしてくださいね」

「あきあさん」

と夜なのに大きな声が響いた。

「あつ！・・・大八木君達が行ったようですね。

あきあさん、すみませんけどこのままモバイルを河合刑事に渡してください」

このまま・・・とはこの部屋の状況を後々まで見るということだ。

庭からドドド・・・とばかりに大八木を先頭に刑事達や警官達が入ってきた。

「大八木さん！夜ですよ・・・」

と注意をする沙希に

「あつ！あきあさん！・・・申し訳がありません」

「大八木さんどうしました？・・・」

「これは沖田先生！・・・結城先生も・・・いらつしやったのですか？」

「大八木さん！・・・今日は道場の日だったのですが・・・」

「申し訳ありません。あきあさんがこの日本を騒がす悪人集団を捕まえましたので署での取調べに手間取りまして・・・」

「あははは・・・いいのですよ。そのへんのことには判っています」

「けれど、あきあさん！凄いことになりましたね・・・」

「大八木さん！あなた達がいろんなところに連絡したのね」

「それは仕方ありませんよ。こんな前代未聞の試合なんて

一生も一生・・・見られることは出来ませんから・・・」

「一生も一生ですか・・・そうですね。

私が生きていた時もこんなことありませんでしたからね・・・」

「あおう・・・沖田先生！」

「なんですか？・・・牛尾さん」

「もしかして、あちらにおられるのが・・・」

「そうですよ。まあ、紹介しておきましょう。」

近藤さんと土方さんです」

「よしなに・・・」

と軽く挨拶するのを目を光らせるように見つめる警官達。

「近藤さん！・・・土方さん！・・・牛尾さんはね、

そこにおられる篠原さんの子孫なんですよ」

「ほう・・・」

という顔をする二人、対称に少しいがらっぱい顔の源太郎、

「この子孫め、元気の良さだけがとりえの男でね。

まあ、迷惑をかけるとおもうがよろしく頼みます」

源太郎の挨拶通り柔剣道もそこそこで取り柄といえれば元気の良さ・・・

その実は皆にかわいがられる誠実さがあるのだ。

源太郎もこう紹介していたが可愛くて仕方がない。

「あきあさん！・・・試合のこと聞きました。大変なことになりましたね」

と顔を真っ赤にして大八木が興奮しているのだ。

「大八木さん、試合をするのは私ですよ・・・」

「それはそうですけれど、ただ私はあきあさんにかんばってください
い

としか言えないので、その一言だけを言っておこうと思ひまして・・・
」

直情型の大八木らしい心配りの言葉だった。

その言葉に平伏した沙希

「大八木さん・・・ありがとうございます」

顔をあげてから今度は庭に居る警官一同に視線をはわせてから
「皆さん、ありがとうございます」

ともう一度平伏する沙希。

「がんばってください！」

と言った警官たちは互いに顔を見合わせてから照れたように笑う。

「今、署長さんから試合会場をなにやら府警の隣の高校のグラウンドに

かえるように言われましたが・・・」

「ああ、そうですね。・・・借りられたんですね。

これで2000人と言われる観客、もっと増えても安心です」

「えっ?・・・2000人ですって?・・・」

「最低ですよ・・・もっと増えて倍以上なるかもしれませぬ」

「だって東京の警視庁と警察庁から来るのって500人でしょ・・・」

「えっ?東京から500人もくるんですか・・・」

「ちよつと、大八木さん。これってどういうことですか・・・」

「いやあ、わたし達が連絡した仲間や団体の数が

2000人以上になってしまっていますね。どうしようかと悩んでいますよ。

そうですね、東京から来ますか・・・」

「あきれた・・・」

と肩を落とす沙希だが、

「大八木さん！東京からこられる目的は一応暗殺集団の引き取りだ
そうです」

と河合刑事にいわれて目を真ん丸くするとぶつと吹き出した。

「あははは・・・どうせ来るのはあの連中でしょう・・・」

「あの連中って?・・・」

「元方の事件の時に東京から来た警視庁や警察庁からきた連中です。

もう連日うるさく聞いてくるんですよ」

「えっ？聞いてくるって？・・・」

「何かなかったか・・・何かあったのではないのか・・・ってね。

・・・そうですか、20人そこそこの犯人に500人の警官ですか・

これは見ものですなえ・・・あはははは」

「大八木さん！・・・」

一段と高い沙希の声

「段々話が大きくなるっと思っっていたらあなた達があおっていたんですね」

「うっ！」

と思いつきり口を押さえると目を白黒させる大八木部長刑事。

その様子が可笑しいと失笑がもれるのだ。

「コホン」

と一つ咳払いをして

「さあ、今から試合会場に行って警戒だ」

とわざとらしく全員で庭から立ち去ろうとしたが

「大八木さんとやら、少しお待ちください」

と声がかかった。

「あのう御坊は？・・・」

「わしかわしは比叡山奥の院の蓬栄じゃ」

「あっ！比叡山のお上人様・・・」

「すまぬがこの男を比叡山につれてやってはくれまいか」

「お・・・お上人様・・・」

「天鏡よ、わし等は近くの檀家に泊まり、明日になれば直接会場に

むかう。

お前は比叡山にたち帰り、武者僧を引き連れて会場に向かうのじゃ。

そして試合会場を徹底的に磨き上げよ。

日本中の目が明日会場に集まると知れ！よいな、天鏡！」

「わかりました、お上人様。そういうことならこの天鏡におまかせあれ」

「さ、早ういけ！」

「は！」

と立ち上がった天鏡、

「早く行きましょう」

という大八木の言葉に頷くと急いで庭の下駄をはく。

「蓬栄よ、おぬし天鏡に良い仕事を与えたな」

「いつも影に日向になって懸命に立ち働いている男。ましてや天鏡にとっても妹の晴れ舞台となるのじゃ。

あの男に少しは責任ある立場を与えてやっても罰はあたるまい」

その言葉に沙希は目を閉じ、いつも誠実な天鏡の面影を追う。

「お師匠様、お客様です」

と高弟の案内で入ってきたのが

「あっ！監督！・・・」

薫がそう呼ぶ皆の良く知る小野監督だった。

そしてもう一人、東西テレビの沖社長を連れてきていた。

沙希はまだあまり話したことはないが顔はよく知っている。

二人ともまずは井上貞子に挨拶をする。
この家の長としての貞子の立場を思んばかったのことだ。

小野監督は振り返って沙希を見るとニヤリと笑った。

「君って女優は・・・事件屋であり、お騒がせ魔であり
そして、本当にこの業界の宝であることは間違いないね。
君の天才ぶりは女優としてはかりではなく、

今何をすべきかという時代にあった番組作りをもしてしまう天才か
もしれない」

「えっ?・・・どういふことなのですか?」

「タイミングが良すぎるんだよ」

「タイミング?・・・」

「そうさ、今日わしか沖社長に会っていたのは
あきあ・・・君をどんな形でテレビに出そうかと相談していたんだ。

ドラマではVテレビの二番煎じになるのはいやだし、
考えこんだ末、最終候補は舞に関することだった。
けれどこれはこれで難しい。

そんな時だったんだ、この話が飛び込んできたのは・・・わしは直
感したね・・・これだって・・・
だが、沖さんはまだ躊躇されている。なぜだかわかるかい?」

「いいえ、どうしてですか?」

「あっ!・・・それなら私判るわ」

「ほう・・・薫くんがね・・・」

「監督!・・・その言い方って私を思い切り侮辱してませんか?」

「あははは・・・ごめんごめん。あきあくんならすぐ判ると思った
んだよ」

「監督もこの子が自分のことになるとからっきしなのをご存知でし

「よう」

「ああ、そうだったね。では薫くん頼む！」

「沙希ちゃん・・・沖社長はね、あなたが試合をするほど強いのかって心配しているのよ」

「そうですか・・・やはり一般の人はこの人の外見に騙されているのですね」

「沖田さん！・・・それってけっこうな言い方ではありません？」

「あつ、すいませぬ。別に沙希殿をそれこそ侮辱したわけではなく・・・あわわ・・・」

「沖田！・・・上手の手からもれたな・・・わははは・・・」

「もう・・・沖田様も、土方様も・・・存じませぬ・・・」

ふつとそっぽをむく沙希の艶っぽさ・・・天人でさえも完全に固まってしまっている。

「小沙希ちゃん！・・・成功どすえ」

という声を出した幾松にピースマークを何度も出す沙希。

「沙希殿・・・今のは？・・・」

と頬を撫でながら聞く源太郎に

「へえ、うち幾松さん姉さんに教えてもらったんどす。ああいう風にすれば男はいちころだって・・・」

一度やってみたかつたんどすが中々機会がのうて・・・」

「で、あの二人がはまってしまったというわけですか・・・」

「へえ、ばつちりどした。きっと幾松さん姉さんも桂さんにやっっているんどす。間違いおへん」

「こら！・・・小沙希！・・・てめえ・・・」

幾松の怒りの声が飛んでくる。

「ひゃあゝ・・・桂はん、幾松さん姉さんあんな汚い言葉つこうて
いるんどっせ。」

怒っておくれやす」

祇園の女にとっては凄く勉強になる一場面だ。

「ねえ、瑞穂」

「なによ、杏奈」

「私も沙希にあんなことされたら、もうどうでも良くなっちゃって
なにもかもあげてしまふ気がする」

「私だつてそうよ。もう凄かったわね。男がいちころだつて言つて
たけど女だつてそうよね」

「ふゝ・・・あきあ君、君の演技力つて一段と凄みが増してきたよ
うだね」

「えっ？」

「見たまえ、男も女も君の前では形無し状態だ」

横のものにもたれ掛かって失神状態の婦警や看護師達。

席がざわついているのもしかたがない。

しかし、この中で他のことを考えている者が一人いた。

沖社長だ。彼はこの中で二人の人物に気をとられていたのだ。

「どうしました？沖社長・・・」

「あつ・・・いや・・・」

沖社長の様子に不信を抱きながらも言葉を続ける小野監督。

「薫くんが言ったようにあきあくんの实力を知って貰うために

私は沖社長をここに連れてきたんだ。もしやと思っていたが案の定
だった。

この間の事件以来ですなあ、坂本さん」

「小野さん、覚えていましたか」

「あたりまえですよ。幕末の偉人であるあなた達を忘れようがないじゃないですか」

「幕末の偉人？・・・」

以外に早く反応する沖社長。

「ええ、あなたは信じられないでしょうがここにいられる方はこの世の方ではないんです」

「この世の方ではない？」

と言ってから清明から順に紹介していく小野監督。

「おや？新しい顔ぶれですか？」

「小野さんのご存知のように沙希殿を守護するって大変ですからね。近藤さんと土方さんです」

「それじゃあ、新撰組の3巨頭が揃い踏みじゃあないですか」

「いやだなあ、小野さん。3巨頭だなんて。わたしはただのつかいっぱしりですよ」

「いやあ、沖田さんの悪口をいうと私は女性に袋叩きですからね」

「おい！沖田！・・・おまえいつから女泣かせになったんだ」

「もう、土方さん。いやですよ、小野さんがそんなことを言うから・・・」

「いや、新撰組では近藤さん、土方さんには悪いけど沖田さんが一番人気があるんだ」

「沖田さん、ほんまどす。若いし男前さんやし若こうして

胸の病でなくなつた・・・そやから胸がキューンとくるんどす」
と花世からの声だ。

「もう、いやですなあ。花世さんまで・・・」

と顔を赤くする沖田。

それが又可愛いと舞妓達きやつきやつと騒いでいる。

「けんど、別に近藤はんも土方はんも人気がないんと違いますえ」と無然としている二人に声をかける花江。

「人気はあるけど怖うおすんや」

「怖い?・・・」

「へえ、實際人を殺めはつたんは沖田はんが多かつたんどすやるが近藤はんと土方はんは新撰組のトップやおへんか。

殺すことを命令する立場におられはつた。そやから女の子達怖うおすんや。

今の子、お家でもお母ちゃんは大好きやけど、お父ちゃん嫌いや言う子多いんどすえ。

男はん好きになるんはまず優しさどす。厳しい男はん人気ありまへん。

ほんまはそんなこといけまへんのやるけど」

「なるほど、男の条件は優しさですか・・・」

沙希殿のように強さがありその中の優しさならわかるが優しいだけでは・・・なにか違うような気がする」

「沖田はんのそれ、当たつとります。最近おなごはんかしこうなりました。

優しいだけや厳しいだけの人好かれまへん」

じつと聞いていた小野監督、坂本竜馬を見ると目を閉じて頷いていますが、

話が終わると目を開け、小野監督を見てから

「さて、最後の二人を紹介しておこう。まずは桂小五郎殿だ」

「えっ？あの木戸孝允さんですか？」

「そしてその妻の幾松殿じゃ」

「お松様……」

と言ったのは沖社長のほうだ。驚いて皆の視線が沖社長に集まる。

その視線を気にしていたが

「少し待ってもらえませんか」

と言って背広の内ポケットから携帯電話を取り出しかけ始めた。

「ああ……わしだ。どうだ少しは気分がよくなったのか？……
そうか、少しの間我慢できるのか……それじゃあすまないが
運転手の吉田手伝ってもらって家のほうに来て貰えないか……
ああ、待ってる……」

そう言っただけで携帯をしまった沖社長。

皆に向けた笑顔は取り繕っているが緊張感が溢れているのだ。

少しして玄関の開く音……

「いけない！……」

と大きな声をあげた沙希が矢継ぎ早に命令を下した。

「看護師さん達、急いで玄関にストレッチャーを……」

「はい！」

と行って玄関に急ぐもの達、地下に急ぐ者達……

バタバタと駆け出している。

「明子先生！お願いします。澁姉は急いで検査室に……」

「わかったわ……」

と声をあげて二手に別れる医師たち……無論、高弟二人も看護師達
と

検査室外まで澁に付き添うのだ。

ストレッチャーが急いで玄関まで廊下を走り去ると

次は毛布をかけられた病人を乗せて明子達と滑るように走っていった。

立ちかける沖社長だが沙希がそれを止めた。

「沖社長！・・・奥様を殺す気ですか・・・」

と叱るように言う沙希に

「殺すだなんて・・・」

と言いかけたが沙希の両目に浮かぶ涙の粒を見て何もいえなくなる。

「ちよつと、沖社長はん。あんたの奥さん小沙希ちゃんに命を助けられたこと

感謝せなあきまへんえ。それとこの家の地下にある病院のこと、

言つて貰つたら困ります。わかりましたな」

貞子にこうきつく言われて頷く沖。

「沖どの、お主あきあに叱られたこと不満と思うだろうが

奥方の寿命がつきかけていたことは本当じゃ。

その奥方をこの家に呼び入れたお主の選択で奥方の命は救われた。

もし、お主が奥方をそのままにしておいたら、あきあは気づかぬ、

わしも気づかぬ。奥方の命そのまま尽きた。己の選択に感謝するこ

とじゃ」

清明に言われ身体がぶるぶる震えてとまらなかつた沖。

「沖社長、この地下の超近代的な病院施設は女性だけの病院なんです。ですから男子禁制なんです。だからこの先は行くこと出来ません。

ここでお待ちください」

「お待ちくださいと言つても君・・・」

「いいえ、もうすぐしたら元気な奥様が帰ってきます」

と薫に言われて黙るしかないが、落ち着けないのだ。

30分ほどたった時、半信半疑だった沖社長の目の前にあれだけ体の調子が悪かった妻の楓がにこやかに現れたのだ。

「おお・・・大丈夫だったのか・・・」

「大丈夫じゃなかったわ、けれどここの病院とあの温泉に助けられたの。」

・・・残念だわね、あなた。この温泉は女性しか効かないのよ」と楓に言われて目を白黒する沖。

「沖さん、残念ながらここは女性だけのものなので 我々男性には近づけないんです」

と小野監督にもいわれてようやく納得する。

「明子先生・・・診断は?・・・」

「そうね、普通の病院だったら入院させないでしょうね」

「入院させない?・・・」

「ええ、だって100%治らないでしょうから。」

胃と肝臓に病巣が広がっているし、食べる体力もないでしょうしね」

「では、この病院での診察は?」

「あの温泉に入ったことで、病巣の80%は消えています。」

あとは毎日の食事と温泉療法です。

だから2週間ほどの入院をしてから、時々通院するのはどうでしょうか」

「はい、お願いします」

と楓が自分で言った。驚くのは沖だ。だって妻が夫の考えを聞かなくて

自分で決めるなんてことは結婚以来始めてなのだ。

「では、今日から入院してください」

「けれど、準備はどうしたら良いでしょう」

「ほとんどのものは揃っていますから、看護師に聞いて不足分だけ用意してください」

「では、不足の分は娘二人に持ってこさせてよいでしょうか」

楓は看護師に必要なものを聞いてから娘たちに電話している。

「あなた、緑と茜が心配だから病院に泊まりたいというものだから地下の宿泊施設にお部屋を取ってもらいました。

しばらく不自由かけるとおもいますが、よろしいですね」

「ああ、いいとも・・・」

「それであなただけ・・・あなたの御用事はなんだったのでしょうか？」

「ああそうだった。驚くなよ」

と言ってから紹介するのは桂小五郎と幾松夫婦だ。

「ええ〜」

と言ってからしばらくして嗚咽がもれる楓。そんな行動に

「あら、どうしたんですか？」

と驚く幾松。

「幾松さん姉さん！その楓さんは幾松さん姉さんと桂さまの子孫なのよ」

「ええ〜・・・」

と叫んで楓を見る幾松。

「顔を・・・顔を良く見せておくれやす」

幾松が夢中で楓に言って、桂にしても立てひざになって幾松の後ろからのぞいている。

普通は互いに触れることが出来ない天人と現世の人々、沙希の真言によってこうして接触できるようになっていた。

幾松が楓の肩を抱き楓の涙に濡れた瞳と互いに見詰め合う。

「ほんに、うちの子孫・・・ねえあんた、うちの子孫なんどすえ」

そういつて楓を抱いたまま桂を振り向く幾松。桂はそんな二人を見つめこう言う。

「よかつたのう、幾松。こうしてわし達が生きてきた証・・・わし達の子孫が目の前にいる・・・」

『うんうん・・・』と頷く幾松、そんな二人に沙希が

「よかつた、幾松姉ちゃん。本当に良かった・・・」

としみじみそう言う言葉に実感がこもっているからはつとして顔をあげた幾松・・・。

「そつどす、お姉ちゃん。幾松さん姉さんや千代松さん姉さん、お園母さんや

祇園の人達が見守り育ててくれたうちと和姉の子供達が

無事に今の時代まで血を受け継ぎ無事に生き抜いてきているんどすえ」

「ええ〜ほんとうどすか？・・・和葉はんと小沙希ちゃんの子供達がねえ。

うち、よく抱かせてもらったんよ。

うんうん・・・和葉さんてね、この祇園になくはならないお人どした、

うちら芸妓や舞妓が病んだりするともう急いで駆けつけてくれて肉親にも及ばない手厚い看病をするんどす。

それはそれは仏様のような人どした・・・それが流行り病であつと

いうまに・・・

だから祇園中の女達が駆けつけあげたお葬式ってそれはそれは盛大どしたけど、

うちら悲しくてねえ、この祇園に女達の涙雨で洪水になりかけたという川柳も出来たほどなんよ」

「ねえ、幾松さん姉さん。後ろを見て！・・・何か感じまへん？」

と後ろにいる早瀬の女達の方を振り向かす沙希。

「えっ？・・・」

と言いながら振り向く幾松の目には・・・

「あっ！・・・」

という大きな声があがる。

「あんたは・・・あんたは・・・和葉さん・・・」

頭を下げてから幾松と楓の前に出てきて座る律子。

「よかった・・・よかった・・・和葉さん、小沙希ちゃんの時代に生まれ変わるってきいていたんどすけど、ほんまやったんやねえ」

「幾松さん。私には和葉だった頃の記憶って一つもないんです。

けれど今のあなたのお話を聞いてどういう人だったかわかりました。

教えていただいて本当にありがとうございます」

と挨拶する律子に何度も何度も頷く幾松。

「幾松さん姉さん、では紹介します。うちの子孫どす」

という貞子の隣に座っていた希美子と希佐が座布団から滑り降りてから幾松の前に進んで座る。

「結城希美子です」

と頭をさげる。そして

「娘の結城希佐です」

とだって希佐も同様に頭をさげるのだ。

「ようこまでりっぱに血が続いてきたんどすなあ」と自分達の子孫をも思っで感慨深げな幾松だ。

「幾松さん姉さん。希佐ちゃんはなあ、明日うちと試合するんどすえ」

「ええ〜・・・小沙希ちゃんとどすか？・・・この希佐ちゃん、そんなにお強いんどすか？」

「幾松さん、これを見てくれ」

と希佐に打たれたあとを見せる沖田だ。

「ひえ〜・・・それをこの希佐ちゃんが・・・さすが小沙希ちゃんの血をひくお子どすなあ。

希佐ちゃん、この沖田はんは新撰組で鬼より怖いいうて恐れられたおひとどす。

それを小沙希ちゃんに負けたんうち見てました。それは胸のつかえがスーと降りたもんどす」

「酷いなあ、それって・・・」

「いえいえ、うちほんまのことしかよういいまへん。

そやからいいますけど、希佐ちゃん、あんた沖田はんは勝った事自慢じていいんえ、

そやけどこの小沙希ちゃんは天狗のようなお人どす。

油断も隙もないんどすえ、そんな人に勝とうなんて思たらあきまへん」

「私勝とうなんて思いません。胸を借りて試合するだけでうれしいんです」

「おつおう、よう言いましたなあ。そのお心つもりなら

小沙希ちゃんを慌てさせることが出来ます。」

うちは剣術のことなんてわかりまへん、けど舞にかけては玄人どす。舞いも剣術もここは同じや思います」
と言って胸を叩く。

「お心一つで強うも弱うもなれるんどす。そやから何も考えずにドーンとやりなはれ」
そうはつぱをかけられる希佐、そしてさすが幕末で祇園の大看板だったと

その言動から納得する女達・・・

そんな席が騒がしくなったのは置屋の女将達が用意した御酒の爛と心ばかりの肴を芸妓と舞妓たちが運び込んだためだ。

膳に2本づつのる御酒、全てが配られたあと
「皆様のお膳に2本のっている御酒はそれぞれ甘辛2種になっているんどす。

それぞれ現世で売っている御酒やあらしまへん。

それはここに在る所だけにあるもんどす。

お飲みになられてお好きなほうを女達にいうてください」

と置屋の菊野屋の女将菊野がそういったのを合図に酌をされた酒を飲む男達、

いづれの酒も飲んだ経験のあるのは晴明だけだ。・・・だがその晴明にしてもため息をつきながら杯を煽るのだ。

「うまいのう」
その一言に実感がこもる。

一方の酒は飲んでいる武士達ももう一方となると何れも「うっ！・・・」

と声をあげてしまう。それほど鮮烈な味わいがあった。

2本とも始めて飲む近藤、土方、桂の3人も声をあげて杯を見つめている。

「驚いたぞ・・・沖田から話には聞いていたがこれほどは・・・」

「わしもいろんな酒を飲んできたが、酒を飲んで感動したのは初めてじゃ」

そういう桂だ。

現世に生きる宗太郎や三好屋にしてももう夢中だし、

小野監督や沖社長にしても顔を見合わせてから言葉も出やしない。

「酷いじゃないか」

と小野監督が声をだしたのはようやく落ち着いたのか

徳利1本を空にしたときだ。

「こんなにつまい酒がこんなところにあるなんて誰も教えてくれない。

なんか人生を半分損をした心地がする」

酒飲み和尚の峰巖にしたって

「地の酒が一番つまいとおもっていたが・・・この先ここより送ってもらうことは出来ぬか」

とさえ言っているのだ。

面白かったのは幾松だ。入院する子孫の楓どんなどころに入院するの

病室を見に行つて大感銘をうけたあと

座敷がそうなっているのどれどれと自分も酒に手をだして

「うっ」

と言つて声をあげたあと慌てて台所に走つていったのだ。

花世に聞くと台所で置屋の女将たちを相手に盗み酒をしているそうだ。

小沙希の様子がおかしいと思っていたのは何も貞子だけではなかった。

武士達も女達もあの幾松さえも台所で女将達と話をしながら時々座敷の小沙希の様子をチラチラと覗きにきているのだ。

晴明もあきあに視線を送っているが何も言わない。その心の動きが収まるのを黙って待っているのだ。

その沙希が自分で何かを悟ったように一つ頷いてから立ち上がった。

そして舞台の上上がったのだ。

皆は自然と居住まいを正して舞台の小沙希を見つめる。

何事かと台所にいた女将達も幾松も病室に落ち着いていた楓も病院に訪ねてきた娘二人を伴って座敷に入って座っていた。

シーンとした固唾を飲むという雰囲気のいわば客席にむかって声をあげた沙希。

「お婆ちやま、うちの今朝舞った三幕の舞・・・」

「へえ、樹沙羅はんの舞どすな」

「うち、あれで完成した思てました。けど今、あれの・・・あの舞はまだまだ未完成やと気づいたんどす」

「あの舞が未完成？・・・それどういことどすか？」

「へえ、舞の解釈の仕方が全然違っていたんどす」

「どうしてそう思いはったんえ・・・」

「へえ、それはあの事件からどす」

「あの事件?・・・」

「蓮昌尼様と高子様のお話からどす」

と言われて顔を見合す妙真尼と蓮昌尼。

「それ、聞かせておくれやす」

「へえ、今朝のうちの舞には男と女の愛は入ってました。というよりそれが主題の舞どした。

けんど違うんやないか・・・と気づかせてくれたんが高子様どす。

自分のお腹を痛めて産んだ子を放っておいても先妻の子を助けて・

・それは二人の命を助け、

希望を持つ大きな世界の中で二人を育ててほしいと言う高子様の願いどした。

そしてそれとは別に夢と希望に満ちた人生を交通事故というもので失い、

人生を呪い続けている姉に再び人生の素晴らしさを持ってほしいと願う

妹の肉親の愛がこめられてもいたんどす。

肉親の愛・・・それどした。その言葉がうちの舞の解釈をぐらつかせたんどす。

うちが那賀杜姫様ながとひめに語った樹沙羅には

男女の愛だけどした。けんどうよう思い出してみれば違どったんどす」

「なにが違どつたんえ、小沙希ちゃん」
声を飛ばしたのは幾松だ。舞に関しては夢中になる祇園の芸妓なのだ。

「へえ、樹沙羅がどうして鬼女になったかんどす。
遠い遠い過去のことどすから樹沙羅自身の記憶が混乱どつたんどす。」

そやからうち一つ一つ紐解いていきました。そして判ったんどす」

部屋にいるもの全員が身動き一つとれずに聞いている。初めて訪れた楓の娘、緑と茜ももう夢中になって聞いている。こんなところに・・・と驚いたあの天才といわれる女優『日野あきあ』
『あ
凄いい！と生唾を飲んでしまう光景だ、

「樹沙羅が人から鬼女になった理由が、子供が産まれた幸せの絶頂から

野武士に我が子を目の前で殺された地獄・・・」

「沙希ちゃん！・・・それって・・・」

「へえ、うちと薫姉さんが小野監督に撮ってもらった映画と全く同じなんです。

雪夜叉も我が子を殺され夜叉になった。樹沙羅も鬼女になったんです。

記憶が混乱してても肉親の愛はどこかにある思いました。

樹沙羅とうちが愛し合ったあと、うちに殺されるために襲い掛かってきた樹沙羅。

うちは眠って眠ってしかたなかったから・・・。

うちをぎゅっと抱きしめて眠らせてほしいというた後、

うち眠るまでの短い瞬間感じたことがあったんです」

「それはなんえ・・・」

「ああ、母さんだ・・・母さんが抱きしめてくれている」
それが全てだった。沙希の想いは女達の胸に染みていく。

「小沙希ちゃん！舞ったらええ・・・その想い舞ではきだしたらええ。ねえ、お師匠はん」
「え。ねえ、お師匠はん」
という幾松に頷く貞子。

「幾松ちゃんが言った通りどす。小沙希ちゃん・・・あなたの胸にあ

るもん全て吐き出しなはれ」
そういつ貞子に沙希は頷いた。

「うち、小沙希ちゃんの舞見るんは幕末の玉屋さんのところ以来ど
す。楽しみやわあ・・・」

そんな言葉を聞いて驚く緑と茜、そして母の楓に何事かささやかれ
て目が落ちそうに驚いている。

「うち、この舞完成せな明日の試合心から専念でけへん思てました。

けんど何とか出きそうどす」

と言って舞妓の衣装から能面をつけた真っ白な着物にかわる。
緑と茜には驚きの瞬間だ。

「ポン・・・ポン・・・ポポポン・・・」

鼓の音が響く稽古場、舞う沙希の一つ一つの滑らかな舞い姿が
客席の皆を幽玄の世界に引き入れていく。

以前見たからと余裕をもっていた幾松もそれどころではなくなつて
いた。

大きな目をさらに大きくし、身を乗り出すように見ているのだ。

一番驚いていたのは不世出の舞姫と言われていた蓮昌尼だ。

自分がいかに井の中の蛙だったかを思い知らされながら必死に・・・
いや、もう憧れの目で見ている。

目の前にいるのは神だ・・・舞の神が舞い降りている。

沖社長にしたってそうだ。音曲や舞の通だと言われていた自分が
いかに何も知らぬ素人なのかを悟った瞬間であった。

この人しかいない・・・この人を中心にこれからのこの業界が動
いていく・・・

そう確信した瞬間でもあった。

貞子や高弟達・・・紫苑にしたって今朝見たからと言ったって落ち着いて見れることが出来なかった。それほど沙希の舞は変化していた。

貞子の体が震えるほど身の内の興奮はあがっていく・・・紫苑は舞の中に彷徨い歩いている・・・

これは今朝の舞どころではなくなっていたのだ。

解釈一つ加えることでこんなに変わってしまうものか・・・
いかに自分達が安住の地で教えているのかが判ったのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
白い着物が真っ赤に染まっていた。

崩れるように座り込む沙希。

慌てて座布団とお茶を持って舞台にかけ上がる志保と勝枝。

「初めて同然の舞やさかい、つらおした」

そういう沙希にむかって

「ふくむ・・・あきあよ、お前の舞、神の領域に近づいたようだよ」
う

としみじみいった晴明の言葉が皆の心に広がっていった。

楓は自分を助けた人がこんな人だと知った喜び、

緑と茜は母に呼ばれた始めての場所で知ってしまった不思議の世界に戸惑いを通り越し、

ただただ二人硬く抱き合っただけと呆然とするのみだ。

「小沙希ちゃん！初めて同然の舞やゆつてあなたは凄すぎるんどす。その着物が真っ赤になつとるんは小沙希ちゃんの汗でっしやる・・・汗が真っ赤に染まるなんて冗談やおへん。そんなん出きる人なんかどこ探しても居やしまへん。」

うちら幕末の玉屋はんで小沙希ちゃんの舞をみました。それは凄かったです。

そやから舞妓ちゃんの中であなたの舞真似しようとする子いたんどす。けんどその子舞われへんようになってしもた。

ここにおられるお師匠のお母はん、それを聞いてえらい怒りよりましてなあ。

そやからうちら小沙希ちゃんの舞は絶対真似せんところって、みんなで誓い合つたんどす。

けんど小沙希ちゃんの舞はどうしても後世に伝えていこうって言うてたんどすが、

今、置屋のお母ちゃん達に聞いても小沙希ちゃんの舞のこと誰にもつたわつとらんかった。

そらそうどす、今の舞見てたら誰もどうも出来まへん」

「幾松ちゃん、あなたはやっぱりこの祇園の大看板を背負ってきたお人や。」

あなたの言う言葉いちいち頷けるんどす。

小沙希ちゃんの凄さ改めて目の当たりにしたけど、

今幾松ちゃんが言われたこと、今朝花江ちゃんもいとりました。

小沙希ちゃんの真似だけはするな！・・・これ舞妓ちゃん達、

肝に銘じて守らなあかん！・・・わかりましたな」

幾松は花江と顔を見合わせて笑いあった。

花江が祇園の大看板を背負う日は近い……。

「ふ〜……ため息が出てしまっね。君を見ていると……わしが君に対してメガフォンを振れる喜びはより一層大きくなるし、君の才能に凄みを増すのを見た驚きって正直予想を遥かに越えているよ。」

明日の試合を思うと一体どうなるのか……
今わしの体はこちんこちに凝り固まっているんだ。
あきあくん、久しぶりに君の横笛聞かせてくれないか。
悪いがリクエストとして『翔龍丸』でお願いするよ。
今の状態ではあの笛のほうがいいと経験が物語っているんでね」

沙希が体の前に両手の平を出すとその上に現れる『翔龍丸』。

「うっ」
と思わず声を上げるのは初めて見る数少ない人だ。
口に静かにあてると笛の音が静かに流れ出した。
笛の音は聞いている皆の凝り固まった力を抜き去り
ふんわりとした時の流れに身をゆだねさせていく。
土着した魂魄が蛍の光のように天に帰っていく。
星の瞬く夜の静かな光景であった。笛の音が止んだ……

「ふ〜」
と出るため息は音色に対する感動のためなのか……
それともただならぬ吹き手への賛辞なのか……

「あきあくん、今の音色はいつもと違ったが……」
「へえ、この曲はうちが清明様の元で修行をしていたときに
清明様がおつくりになった曲なんです。」

毎夜毎夜、清明様のお屋敷の木や草花の覆い茂った庭先で

清明様が杯を傾けながらうちが吹いていました。
自然の息吹きに聞かせなさい、そういつも言われていました」

「ほう、そういう曲なのか」

「吹き手が良いと酒がうまいのじゃ」

「でも、いつも清明様に注意されていましたよ」

「あははは・・・されど今日は文句はない。それだけあきあの腕があがったからのう」

「ちょっと清明様！小沙希ちゃんの腕があがったですって・・・
何を言ってるんですよ、小沙希ちゃんの横笛はもう名人ですって・・・」

「いいや、まだまだだ・・・」

「だって・・・」

「あきあの笛によつて、風が舞わぬ、草木が舞わぬ、花が舞わぬ。
自然があきあの笛によつて舞わなければならぬ」

「そんなことって・・・」

「あきあならできる筈じゃ」

清明のあきあに求めるものは高い。

「うち、これで明日の試合を何の心置きのう戦うことが出来ます
と舞妓の衣装に替えた小沙希が言う。

「くくく・・・」

と思ひ出したように笑い出したのは竜馬だ。

「竜馬様どうしたんどすえ？」

沙希が聞くと

「いや今、沖田と篠原の両君が明日の試合に意地の悪いことをした
のを思い出したキニ・・・」

「意地の悪いこと?・・・」

「そうだ・・・篠原くん・・・」

と呼ぶ竜馬に源太郎が苦笑いしながら

「沖田くん、奴は?・・・」

「いいえ・・・聞いていません。聞いているのは菩薩様と阿弥陀様です」

それならば・・・と話すのは

「明日の試合、沙希殿と希佐殿の試合を最後にしたのさ。

こんなときのこと現代の言葉で言うだろう・・・」

源太郎の言葉に反応した女達・・・

「メイン・イベント!」

「えっ?・・・じゃあ・・・」

「沙希殿がやつを相手にする試合は・・・」
「またしても」

「前座!・・・」
と答えるのだ。

「やつにはあっているのさ・・・だから沙希殿・・・思い切りやればいいさ・・・」

沖田も源太郎もひどいことを仕掛けたもんだ。

苦笑いする沙希に

「そうだ!・・・いかんいかん・・・明日の試合が終わるまで希佐は沙希太郎とは敵なんだ。

希佐!・・・これから道場に立ち返り鍛錬じゃ」
と立ち上がる結城弦四郎。

「はい!爺様!」

と言って希佐も立ち上がる。

「どつする沖田殿、お主は」

「そうですね、私との立合いで希佐殿にあの恐ろしい剣をのみ出された。

その責任もあるので・・・判りました、私もお供しましょう」

と立ち上がる沖田。

「わしらは後からゆるりに行く」

と近藤と土方。

3人が行ってしばらくしてから

「ところで・・・」

と小野監督が沙希に聞くのが

「わし達、まだあきあくんの試合の対戦相手を聞いていないのだが・

」

ということだった。

「武蔵様です・・・」

「えっ？武蔵？・・・あの宮本武蔵なのか」

と言った小野監督の声が震えだした。

「はい、二天一流の宮本武蔵様です」

という沙希に

「小野さん・・・」

と沖社長も震えがとまらぬ。

「み・・・宮本武蔵？・・・坂本竜馬様。これって本人なんですね・・・

」

そう聞き返さずにはいられない沖社長。

「そつだ、沖殿。でも、沖田は武蔵よりも沙希殿の方が強いといっ

ている。わしもそつ思つのだが・・・」

「日野あきあ君のほうが強い？・・・こ・・・根拠はあるんですか

？」

「沖田が天界にいる武蔵と剣を交わせたのだ。けれど武蔵のその凄い剣技に敗れ去った。」

だが負けたといってもその剣技に沖田に恐れはなかったと言っている。

相手の一日の長にやられたとも言っているのだ。

しかし、幕末の試合でその沖田が沙希殿に完膚までにやられた。

沙希殿と相對した恐ろしさで身動きができなかった。そう言っているキニ。

この試合わしもみていたので沖田が感じたとおриだと思っ」

「あきあくんってそんなに強いのですか？」

「ああ、強い。この晴明様に徹底的に教え込まれたのじゃ、

晴明様の亜流の兵法者に負けるわけがない。

それに心にあつた舞に對するわだかまりもすっかり無くなっているのだ。負ける要素などない」

そついわれた沖社長、少し考えていたが

内ポケットから携帯電話を出してかけはじめた。

「ああ、君か・・・明日の試合の中継はGO!だ。

ああ、聞いている。例の事件のとき比叡山の基地にいた君ならわかるだろう。」

・・・解説?・・・そつか、へたな人には頼むな。

スタッフはもう?・・・そつか集まったか。そつか、わかった。

ああ、小野監督にはお願いした。

カメラマンは・・・ああ、小野さんにいわれた・・・12人だ。信頼のおけるスタッフだ。へたはうたないだろう。」

と言ってから沖社長が読み上げる試合相手の名前に、電話の向こうから興奮した大きな声が聞こえてくる。

「・・・以上だ。ああ、信じないものはドラマとして見るだろ

う、CMは前後だけで中はなしだ」
と言って電話を切った。

「沖さん、じゃあ・・・」

「はい、GO!です。あとは小野さんよろしく」

「あきあくん、ステーションを24台だ。いいかね」

「24台ですか?・・・」

「ああ、12台は沖さんのところのTV中継用だが
あとの12台は映画の記録用として撮っていくんだ」

「映画の記録用?」

「そう、映画にするよ」

首をかしげるが黙っている沙希。

「それと、例によって瑞穂くんとゆりあくんをかしてくれるね。」

まゆみ社長・・・」

「OK!ですわ、小野さん・・・いいわね、瑞穂ちゃん、ゆりあち

ゃん」

「はい」

と二人立ち上がってお辞儀をする。

「あのう、よろしいでしょうか?」

と舞台上の沙希を仰ぎ見るのは河合刑事だ。

もうすっかり魅了されて明日の試合には絶対行くことを決心している。

「河合さん、判っているわ。あの事件の最後の核心ね」

「はい」

と返事をする涼子。

あきあには1を言っても10が帰ってくる。凄い人だ。

「沙希ちゃん!・・・それぞれ・・・私も聞きたかったの」

というのは大空圧絵だ。

皆も身を乗り出してくる。関係者も多く居るから……。

「どうして、カコちゃんや紫苑姉ちゃんが狙われねばならなかったのか……」

それは実は平安期から残されていた古文書にあったんです」

「古文書？……それは一体？……」

「不老不死の妙薬！……」

「不老不死の妙薬？……」

それはあまりにも突拍子もないお宝だったので皆の声が揃って出ってしまった。

眉につばをつけそうな話だ。

この話に精通していない小野監督、沖社長、そしてその妻の楓、娘の緑と茜は

婦警達に事件のことを聞きながら沙希を見ている。

「おほほほ……面白いでしょ。誰もこんな話を信じるわけない。けれど古文書というものがついてくると話が変わってくるのです。たとえば徳川家埋蔵金という話に絵図面のようなものがついてくると

俄然飛びついてくる山師のような人たちが現れるでしょ。

それと同じなんです。あまりにも滑稽なお宝だけど古文書があることだから、

調べてみるのも一興……と思ったのが綾小路家の御当主でした。

そして御当主は平安から続いたあの屋敷のどこかに

そのお宝があるんだと確信したんです。

喜びび勇んだ御当主がそれを最近雇い入れた執事に言ってしまった。

・

これがこの事件の発端なんです。

その執事こそ『殺人集団レッドアイ』の首領穴山大介でした。彼らは殺人だけでなくこれと思つた屋敷に入り込み、家・土地・財産というものを根こそぎ奪いとつていました。穴山はこれはしめたと思つたことでしょう。誰をも疑わぬ茫洋とした当主に膨大な財産・・・そして、どこかに隠されているお宝・・・不老不死の妙薬・・・と思わないまでもお金になるのだったら何でもよかつたんです。

庭師の穴山大介と御当主は屋敷の敷地を探しまわりました。一方で綾小路家自体を奪う算段をしていた穴山達は古くからいた女中達を事故や脅しで止めさせて、自分の部下達に入れ替えていました。

こつした穴山達の動きにいくら凡庸な御当主でも気づかぬはずはありません。でも、相手は殺人のプロです。御当主はあつというまに殺され、その遺体は裏庭にある古井戸の中に投げ込まれ、その上から瓦礫や土で埋められてしまつたんです。

こつして変装のプロの穴山大介が御当主に、穴山小介が執事に化け、部下がその雇い人達となつた綾小路家が誕生したというわけです」

「なんだか聞くだけで身震いがする事件だな。あきあくんが解決した事件の中でも特筆するものじゃあないか」と小野監督だ。

「はい、身震いするほどの悪辣さ、吐き気がするほど悪に染まつた一団といえるでしょう。有るか無いかの不安定要素のあるお宝についてはあとにまわして、彼らはまず土地・建物を手に入れ売り払う算段から取り掛かりました。

彼らの目的のもの・・・土地・建物の権利書です。

・・・を必死に探しました。でもどこにも見あたらないんです。偽の書類を作って土地と屋敷を売り払ったあと姿を消す。

と言つことも考えられましたが、彼らは普通の集団ではないんです。

契約書をかわして人の命を奪うのがあくまで本業の殺人集団です。

アシがつき易い詐欺は彼らの首を締めることになりかねません。それにもうかなりの投資をしまつています。

彼らはもうこの犯罪に抜き差しできなくなっていました。

穴山兄弟が恐ろしいのは部下の下克上・・・つまり造反でした。

この犯罪に失敗すれば自分たちは殺されて後に変わる者がいる。

常にその不安で変装をして部下の様子を伺っていたのです」

「悪い奴だけど、自分の部下さえ信じずそんな不安に毎日戦っていたなんて、なんだか可哀相・・・」

と言ったのがまだ小さいひづるだったので皆は少し驚いたが

「ひづるちゃん、その考え大事に大事に持っていてね。忘れちゃ駄

目よ」

という沙希の言葉に日頃の天敵ぶりを忘れてひづるに笑顔を向ける薫。

「一方、気位の高いお嬢様・・・と蓮昌尼様に評された紫苑姉ちゃんはどうしていたのでしょうか。」

日に日に心安い女中達が消え、目つきの鋭い者達に入れ替わっていく。

不安で不安で仕方なかったでしょう。

その上、いつのまにかあの茫洋とした父親が時折みせる鋭い目・・・

紫苑姉ちゃんはそこで父親が父親でなくなっているのに気が付いたのです。その恐怖したら・・・
でも、そこで姉ちゃんは突拍子もない行動に出たんです。

もともと、部屋に閉じこもって表に出ようとしなかった紫苑姉ちゃん。

これはお母さんが無くなってすぐに新しい母親を向かい入れたレジスタンスだったんですが、

それが功を奏したんです。今や誰も知らない娘の性格・・・気位の高いお嬢様・・・

険のある高い声で使用人を怒鳴り散らし、我儘放題でヒステリーをおこしたら止まらない。

そんなお嬢様像を悪人達に植え付けたんです。

そんな扱いにくいお嬢様を何故無事に放っておいたのでしょうか。

実はこの屋敷内に権利書がないと核心した穴山兄弟がその権利書をかすめとった人物から取り返すための人身御供といったら

わかってもらえるでしょうか。正当な跡取娘がここにいるぞ・・・とね。

勿論、更なる悪党がそんなことをしていても彼らにとっては思う壺です。

何しろ彼らは殺人集団なのですから・・・

本当は物静かで不器用で人との付き合いが苦手な・・・

およそお嬢様像からかけ離れていたのが紫苑姉ちゃんです。

それが普段に『気位の高いお嬢様』を見せ付けられていた、ただ一人の人物・・・そう高子様です。

紫苑姉ちゃんは高子様にとって手がつけられない我儘娘でした。

でも、高子様には旅の途中で病を発し、

行き倒れ同然に綾小路家の門前に倒れていたのを助けて
手厚く看病してくれた先妻の雪乃様には大恩がある身です。

雪乃様の命消え行く寸前の懇願に躊躇していた高子様でしたが、
両親はすでに無く、大好きな姉も人生を呪って廃人同然、
自分の幸福をあきらめていた高子様が雪乃様の言いなりになったの
は

当然といえば当然かもしれませんが」

そんなことがあったのか・・・と何も知らぬわが身の情けなさに
妙真尼に抱きつき再び泣き崩れる蓮昌尼。

「ただ一人、紫苑姉ちゃんの母恋しさによる引きこもり以外は平穏
な日々が続きました。

けれどある日、交通事故による昔から使っていた執事の死から綾小
路家に暗雲がたちこめらのです。

勿論、これは暗殺集団による謀殺でした。

喪があけたある日です。高子様が雇い入れた新しい執事を見た瞬間
です。

『いけない』・・・と瞬間に思うほど執事の目は悪に染まっていた
のです。

高子様は生前に雪乃さまに言われていたこと

『凡庸な男にはすぐに悪が近づきます。

その時は躊躇せず三下り半をつきつけ、例の物を持って屋敷を出て
身を隠しなさい

・・・を実行したのです。

高子様はそのようにして、呆然としている夫を放って置いて
その夜、蓮昌尼様の手引きで屋敷を抜け出しました。

もともと身体のお丈夫ではない高子様は気苦労のせいか
身体の調子が悪くなって相良病院に入院されました。

その上、「ご自分の命と引き換えのように玉のようなお子様を御産み
になって、

この世に血を分けた我が子をお残しになった・・・

その臨終の際の言葉・・・それは先ほど申したとおりです・・・」

「私・・・紫苑さんのことも何にも知らなかった・・・
無理解も無理解・・・あきれほどだったのね・・・」

「うちこそ・・・記憶がなくなる前のうちとはいえ・・・
母様のことなあんも判っていなかったんどすえ・・・」

「高子のごと母と言ってくれますか？」

「あたりまえです。・・・うちには母様が二人いて天から見守って
くれる。」

それにこんな大勢の家族があるんどすこれ以上の幸せ、あるもん
やおへん」

そう言つて蓮昌尼のそばにいつて固く手を握るのだ。

「以上がこの事件のあらましです」

と再び京都弁に戻つた小沙希に

「ねえ、沙希！」

と声をかけたのが京子だった。

「なによ、京姉！・・・」

「だって、まだそのお宝つてのを聞かせて貰っていないじゃないの」

「ああ、そうでした・・・」

と言ってからチラッと清明に視線を移してから

「じゃあ、そのお宝のこと清明さまにご説明してもらいますえ」

「おいおい、あきあよ。その不老不死の妙薬とはおまえに因があるのじゃぞ」

「そんなこと判っていますえ、けれど清明様がうちに黙っていたことも因があるんどす」

「判った判った、ではわしから話すがあとはまかせるぞ」

「へえ……」

どうやら、お宝とは清明と沙希が絡んでいると全員が見てじつと話が始まるのを待っていた。

「そもそもじゃ、わしは帝に京の守護を任されたことが因となった。

京を隅々から調べなおす、そんなことをせねばならぬのじゃ、
実を言うといやでいやでのう、屋敷で御酒を飲みながら草花を愛で
る……

そんな暮らしがたまらなくなつてかかった。

そう、あきあがわしの元にくるもつともつと前じゃった。

京を調べなおすといつても良く知る京じゃ。

その日、すぐに飽きたわしは式達が用意する御酒を目の前におき、
杯を取ろうとした時じゃ。

つれづれに出しておいた京の地図の下に日本の古地図があったのじ
ゃ。

それは誰が作ったも知れぬ古い時代から伝わったものじゃった。

わしはふと気づき大きな樽に水をはったものを式に持ってこさせ、
その横に置いた日本の古地図を水に写し取ったのじゃ。

なるほど日本は広がった。隠し金山やいろんな宝が眠っていた。
早瀬の隠れ里を見つけたのもその時じゃった。

そしてわしはふと気づき、京の地図をもってこさせた。いや、その地図はその時作られたものではなく

古から伝えられた京のあたりを詳細に書いた地図じゃ。

無論、平安京などなくただの山や川ばかりじゃがな。

・・・なるほどあった。平安京の地図と照らし合わせて見るとわしが良く知る屋敷の地下深く・・・そうじゃのう、

この平成の距離でいうと200mほどのう。

それは早瀬の里にあるものと全く同じだった。

わしはそれらを紙に写し取り術で見えなくして、押し入れ深くしまつておいた。

勿論こんなこと誰にも言わず秘中の秘としておいた」

晴明の説明はそこまでだった。

「晴明様が秘中の秘やいいはったけどうちが修行をしているとき、晴明様自身そんなこと露ほどもおほえてはおへんどしたえ。

でもどうしてそれが古文書として今の時代に伝わることになったかといえば

家屋敷にお宝を隠した文書・・・平安時代には銀行さんがおへんから

金銀財宝を壺にいれて家屋敷のあちこちに隠しとったんどす。

けんど物忘れするんは人間の常、誰もいなくなった家屋敷から金銀財宝が見つかるいうんはそのころもようあった話どす。

そやからお家の人忘れんように文書をつくりはった。

その文書を狙い財宝をかすめとる野武士どもが暗躍したんどす。

そやからうち、文書をつくって野武士をおびき出そうと、

古くなつた文書の紙に奇想天外で魅力あるもんを書いたんどす。

・・・その時はそうおもいましたんえ、

けんど今考えればあほなこと書いたもんやおもいます。

『不老不死の妙薬』やて・・・眉唾もんもええとこえ。

けんどそんな文書が盗まれたんどす。びっくりしまっしやる。

それもどす。3件両隣りがそれぞれ違う野武士におそわれたんどすえ、

どない思います？まるでコメディとするや・・・そんなあほなと・・・

うち呆然として身体動きまへんどした。

見張っていた今でいう警察官と野武士3組がそれぞれチャンチャンバラバラなんて

ほんま前代未聞どす。うち・・・なあんも考えられまへんどした。

後々になつてわかつたんどすが、野武士達全員つかまっていたんどす。

えっ？・・・うちどすか？うちなあんもしまへんどした。

途中でなんやあほらしなつてもて・・・」

聞いている皆がクスクス笑っており、武士達は呆れ顔だ。

今まで真剣な話だったのに、急にさばけた話になったからだ。

「けんどどすえ、不思議なんどす。なんにも無くなつてえへんのにうちの書いた文書だけがどこにもないんどす。

へえ、もう一生懸命探しましたえ。

うち、くびをかしげながら清明様のお屋敷に帰った時、屋敷内大騒ぎどした。

うちが飛び込んで来て屋敷内をあっちこっちひっかきまわして

出て行つたと宮中から戻つてきた清明様が式に話を聞いて、うちが何をしたかと調べてみた結果、

その昔、この京都のある屋敷の地下に隠されているお宝を記した紙・

それがなくなっている事に気づいたんです。

うち、清明様にえらい怒られました。

あの紙どうしたかと聞かれて判らないと答えたからどす。

実際そうどした。どこへ行つたかほんまに判らへんのどす。

うち一生懸命なんであの紙が必要だつたか説明しました。

清明様もう大笑いどした。うちもうこんなドタバタ嫌や言いました
が

式達を使つてもう一度文書を探させたんどす。

ほんとうに何にも出てきまへん。結局出てきたんがこの平成どす
と言つて袂から古い紙を出してきたのだ。

沙希はその紙を清明に向かって吹くと、ゆつたりと鳥が飛ぶが如く
清明の伸ばした手のひらに乗つた。

薄い古文書の中に『不老不死の妙薬』と確かに書かれてあるのを
清明が頭の上に掲げて皆にみせる。

清明が術をかけると、文字が書かれた反対側にくねくねとした
文字が浮かび上がってきた。

頭に掲げたその文字に女達が

「清明様！達筆過ぎて読めません」
と言われて

「ああ・・・これを達筆というのか、世の中変わったものじゃ
と嘆息するのだ。

そこには『綾小路屋敷地下』とのみ記されており

「元々わしが心覚えのために書いたものだからのう」
と言つ清明だ。

「その綾小路家の地下には、早瀬の里と同じものが・・・と先ほど言われましたが、じゃあ・・・」

「そのとおりじゃ、男には用のないもの・・・おなごにしか効かぬ温泉じゃ」

地下の温泉を知るもの全員が沙希をみる。

「しかし、この先の世に何があるのか判らぬのが人の世じゃ。だからわしは術を施した」

早瀬の女達、皆えっ？という顔をする。

「早瀬の女達にはわかっておろう・・・」

「そうなんです。清明様は綾小路家の姫に早瀬と同じ術を施した。

女しか生まれない家系・・・早瀬一族と違うのは細々とこの土地・建物だけを幾世代守りつづける役目を負った 女だけの家族を生まれさせたのです。

男は何故駄目なのでしょう。男は昔から、表に出て戦いに明け暮れています。

女は家を守ってきたのです。男は家を大きくも小さくもしますが、女は家の要なのです」

「なんだか悲しいわ」

早瀬の歴史を思っつて悄然とするのだ。

「紫苑姉ちゃん！・・・というのが綾小路家の家系なの。

雪乃様も高子様もそうして家を守って命を削ってきたわ。跡取の娘としてどうする？・・・」

と聞く沙希に

「どうするつたって、今のうちには覚えのないお屋敷のことです。

もしうちがその家を継ぐとしてもこんな悲しいこと早う終わってもええ思います。

今、発端を作った清明様も沙希もここにいます。

1000年の夢・・・そう1000年の間、夢を見ていたと思います。

それにうちの家はここです。ここしかあらしまへん」

そういう紫苑に沙希はにっこり笑い

「さすが紫苑姉ちゃん。そう言うとおもってました」

と言ってから

「ママ・・・希美子さん!・・・」

とこの地下施設の責任者と副責任者の名前を呼ぶ。

「なに?・・・沙希ちゃん!」

「何でしょうか、沙希さん!」

と返事する二人。

「綾小路家の土地・建物そしてそれに付随する美術品などを

警察の検証が終わり次第、府や国の適正価格で買い取ってください」

「買い取れたって、権利書がどこかにいって判らないんでしょ?」

と聞くママに

「いいえ、権利書はここにありません。そうですね、蓮昌尼様」

蓮昌尼は平伏し、沙希にいう。

「恐れ入りました。高子の臨終の時に預かって以来

肌身はなさず持ち歩いておりました」

「奴らに見つからぬよう肌に直接つける肌着の裏を細工して
持っていたのでしよう」

「恐れ入りました、その通りでございます」

「では、あとでママや希美子さん。そして妙真尼のばば様達と下の温泉に入る時に渡してやってください」

「温泉ですか？」

「平安期より古く湧き出ている女性しか効かない癒しの温泉です。あなたの身体で味わってください。」

そのあとは明子先生！蓮昌尼様の診断を頼みます」

「沙希ちゃん、判ったわ」

そして

「ママ・・・希美子さん・・・まだ頼みはあります」

「なんでしよう」

と嬉しそうに返事する二人。

これから聞かされることは予想がつく。

にっこりと笑いながら

「お二人ともわかったようですね。・・・そうです。

買い上げたお金を5等分して1/5は蓮昌尼様と妙真尼様の庵に寄進してください。

後を半分ずつ分割して紫苑姉ちゃんとカコちゃんの財産分けとして弁護士に管理してもらおうようにしてください」

「わかったわ、すぐにも美也子に弁護士を紹介してもらおうから・・・

」

「買った後の土地や建物はどうするんですか？」

と希美子の質問に答えて

「建物は壊します。さっき紫苑姉ちゃんが言ったように1000年

の間の夢を継ぐ

建物なんかいい方がいい……そう思うからです。その後に看護師さん達の寮と学校を作ります。

そしてその周囲は木々の緑がある公園……学生達が本を読んだり、おしゃべりしたり……そんな光景が見えます」

「いいわあ、それって……」
と看護師達から声が飛んだ。

「それから、まゆみ姉さん！」

「えっ？何なの？……」

「紫苑姉ちゃんは芸能人ではないんですけど
早乙女薫事務所でしたっかりマネージメントしてください。

このお姉ちゃんちょっと目を離すとんでもないことしかすんだから」

「こら！……沙希！……てめえ……自分のことにかこつけて
人を何だと思ってる……」

紫苑が初めて使う京都弁以外の言葉だが、

こんなに沙希を怒鳴る適切な言葉はないだろう。

つまり誰にでも自然に出てしまうのだ。

「ひ……酷い……うち、せっかくおねちゃんのこと思って……」

と泣く沙希に

「沙希……」

と沙希の言葉に引き込まれてしまう紫苑。

「紫苑ちゃん！・・・騙されるな！」

目の前にいるのは天才女優なのよ。人の心につけいることなんて朝飯前。

着物の袂で顔を隠しているけど舌を出しているわよ」「と怒鳴る薫だ。

沙希は袂を下ろすと

「チエツ・・・もうすぐだったのに・・・薫姉さん・・・酷いわ。せつかく紫苑姉ちゃんに今度の舞の琵琶の演奏を

お姉ちゃんのほうから手伝わせてって言わそうと思っただのに」

「そんなことしなくても演奏ぐらいやってあげるわよ」

「えっ？本当？・・・良かった。」

舞を舞いながら琵琶を演奏して謡を謡うってけっこう重労働なの・・・」

「えっ？そんなことするわけ？今度の舞の会・・・」

「そうなの、まあ今回は我慢するけど南座での本番では舞に専念したいから・・・琵琶は紫苑姉ちゃん、

謡いは麗香姉さん・・・と、やったね、カトチャン！・・・」

最後の言葉は何のことか判らなかつた紫苑であるが

ひびるが気の毒そうに紫苑をみながら

「紫苑姉さんも沙希姉さんの手の内なのよね」

「えっ？・・・やっぱり？・・・なんかおかしいなあって思ってたの」

「麗香姉さんもそう、昨日里に電話したら麗香姉さんて

もうガラガラ声なの、苦労しているんだわ」

「じゃあ、全部沙希の罠？・・・」

「そうとも言えないけれどお姉さん達で遊んでいることは確かね」

そんなこんなで沙希の1日は暮れていった。

第二部 第十五話

天人達が天に帰った後、芸妓や舞妓と置屋の女将達が三々五々に帰り始め、婦人警官達も堅苦しい制服を脱ぎ、あの温泉に入るため地下にある自分の部屋に立ち去った。

しかし、グズグズと引き上げるタイミングを失った河合涼子は誘われるままに府警の署長に連絡をしてこの家に泊まる許可を取った。

「そうすると思ったよ」

という署長の笑いで連絡を切った涼子は希美子に部屋に案内され、この後で婦警たちと温泉に入る約束をしている。

沖楓と二人の娘は父親を見送りに出たあと、お稽古場に戻ってきた。

舞妓姿で貞子達と話している沙希のそばをべったりとくっついて離れない。

父親の関係で数多くの女優を見てきた母子。日野あきあと言う名前は聞いていた。

ドラマも見た、けれどこんなに不思議な魅力のある女優に会うのは初めてだ。

自然と引き寄せられていくのは自然の摂理かも知れない。

それにこの人は何もかも開けっぴろげだった。

身体の秘密も、力のことも隠そうはしない。けれど周囲が庇ってしまふのだ。

姉たちに見つかった悪戯を子供のような言葉使いと仕草って、

まるで目の前でドラマを見ているようだ。天才女優と言われるのが良く判る。

どうしてここにいるのか不思議だった早乙女薫が追求した日野あきあの演技力、

判ったあとも『駄目どす、お芝居やって判っていてもどうにもならん、

呆れ果てた子どす』と紫苑姉ちゃんと呼ばれていた女性がため息まじりに話すのを聞いた。

そして、天才女優早乙女薫が日野あきの姉……いや叔母だと初めて知った。

実を言うと緑と茜は今日、父が連れ出した母の体調の悪さを大変気遣っていた。

そこにかかってきた母の緊急入院の電話、入院に必要なものを持ってきてほしいと母自身からかかってきたのだ。

母の元気な声と行くのが病院ではなくてあの人間国宝の井上貞子の家だと聞き、

何かの冗談かと思ったがそうでもない様子。とりあえずタクシーを飛ばして井上家の玄関に立った。

出てきた母を見て呆然の二人、家を出る時あんな青白い肌と生気のなさをしていたのにどうだろう、

目の前の艶々と輝くような肌と元気な笑顔……あつけにとられるとはこのことだ。

「では、案内します」

と医者だという女性に連れられて廊下を進む……今日は何かの宴会なのか、お稽古場のざわめきと

ちらつと覗いた華やかさ……舞妓さんや芸妓さん……

驚いたことに侍に扮した人や烏帽子姿の公達もいる。

そして、婦警の制服を着た女性も大勢いるのだ。首を振りながら廊下を進んだ。

そして行き止まりにある90°に右曲がりには作られている広い階段とスロープ。

階下を下りてみるとまるで別世界・・・真新しい病院施設だった。

こんなところにこんな施設が・・・聞くとこの設備は世界でも有数のもので

おまけに女性専用の病院で男子禁制というのだ。全く驚きを通り越してしまう。

おまけにこのオーナーがまだだ着々と次の段階に進もうとしているらしい。

母の病室も広くて清潔だった。そこで簡単な母の診断結果を聞く。ここに運び込まれたときはもう心臓が止まりかけていたと言う。

真っ青になる二人・・・けれど病巣の80%が消え去ったからもう大丈夫だけど、

長年の病歴のためここしばらく入院加療が必要だと言うのだ。病巣が消え去った???。言われることが判らない。

母の状態を見て信用はできるのだが全く理解が不能だった。

「沖さん、先に娘さん達と下に行きます?・・・それともそれは後に回して上に行きます?・・・」

女医の簡単な言葉も二人には・・・?・・・だった。

「先生!先に娘に温泉を味合わせてやりたいと思います。この子達も女性ですから・・・」

母の言葉ももう一つ判らない・・・ここは判らないことだらけだ。

「それじゃあ、私は上に先に行って置きますから後で来てくださいね。」

判らないことがあつたら出会つた看護師に聞くといいわ
と言つて出て行つた。

「さあ、行きましようか」

と母がにこやかに促す。嬉しくて仕方がないという様子なのだ。

「どこに行くの？」

「勿論、温泉よ」

「温泉？・・・こんなところに温泉があるの？」

「あるわよ、それも飛び切りのね。母さんがここまで回復したのつて温泉のおかげなの」

これも又、理解不能だ。だから母に従つて黙つてついていくしかない。

部屋を出ると先ほど来た反対方向に廊下を進むと途中で2機のエレベーターがあつた。

乗り込むとベットの二つ楽々と乗せることができるほど広いエレベーターに乗り込んだ3人。

母は『B7』のボタンを押す。それは音もないスムーズな動作で降下を始めた。

ドアがあくと目の前の景色がかわつていた。

まるで純日本式・・・というより時代劇で見る温泉の湯治場という方がいいだらう。

のれんをくぐると広い更衣室。母が隅にあるケースから出てきた着衣を娘に渡す。

全てを脱ぎさつてそれを着た二人。鏡に映つた姿に二人は真っ赤になつた。

真っ白なシースルーのその着衣は全裸よりも色っぽく恥ずかしい。

「さあ、入りましよう」

と母に促されて引き戸を開けるとそこは広い温泉・・・いや、広いというところではなかった。

まるで海水浴場のように広大な温泉だった。砂浜のように段々深くなる温泉、

深くといっても1m程か、子供用に浅いところもあるという。

肩まで浸かった温泉の温度は熱くもぬるくもなく身体にスーっとなじむ気持ちのいい温泉だった。

思わずすっぴんの顔をバシヤバシヤと洗ってみる。

ふっ気持ちがいい・・・と極度の近視でコンタクトをはめてなければ見えない目に、

隣の妹茜の化粧品で荒れた肌が・・・ええっ？・・・ツルツルだ！

そんなところまで見えてしまう・・・小さい頃からの極度の近視・・・

というより弱視で苦勞した思いが蘇ってきて・・・

「あら、どうしたの？姉さん・・・その目・・・」

と涙を指摘されたと思って

「あなたこそ・・・お肌の荒れが無くなってツルツルよ」

といいかえした緑。

それがとんだ誤解の上での言葉だと判ったのが母の言葉だった。

「よかったわね。あなた達・・・」

「えっ！・・・」

と顔を見る二人。

「緑！・・・コンタクトがいらなくなっただんじよ。それに小さい頃の目の上の傷が消えているわ。」

茜も化粧品で荒れたお肌がきれいになっているし、

あなたも小さい頃に負ったその腕の傷も消えているのね」

さあ、それからが大変だった。緑も茜も更衣室に飛んで戻り鏡で顔を見た二人、母の元に戻ってきて嬉しいと泣き出す始末。そして落ち着いた二人が見た母に変化が・・・先ほどまで真っ白だった髪の毛がなんと真っ黒に戻っているのだ。そのことを言うと今度は母が更衣室の鏡に見に行き、娘のところまで嬉しいと泣きじゃくって戻ってきた。あとで先生に聞くと身体の中の病巣が殆ど消え、その病巣による副作用で真っ白になっていた髪が元に戻ったということだ。

ここで沖緑と沖茜の紹介をしておこう。

緑は東西テレビの製作で働いている。最初社長の秘書にといわれたが柄ではないと断った。

それに緑の入社は父の預かり知らぬことだった。

知っていたのは妹の茜と母の楓だけで、父が知ったのは入社式の当日、社長の挨拶の時・・・

目の前に緑の顔があつたときの驚きつたら・・・突然知れ渡った社長の娘の入社、

秘書ではなく現場での辞令・・・現場サイドとしては少し煙ったいのだが、

緑は唯々諾々として働いていた。

茜は化粧品会社の美容部員である。

テレビ業界は嫌！・・・と、叔父が経営する化粧品会社に入社した人の顔を触るのが好きな19歳である。

茜が今注目しているのは日野あきは当然だが、その彼女に影のように寄り添って、

時々汗を拭いたり化粧を直したりしている女性・・・から目が離さ

ないでいた。

どこかで見た・・・と思っていた。どうにも思い出せない。だから隣でメモを取りつつけている女性・・・に聞いてみた。

「あら、あなた杏奈に興味があるの？」

「あっ！・・・いいえ、私美容部員だから同じような仕事をしていきますので」

「あなた美容部員なの・・・いいわ、紹介してあげる」といって

「杏奈！・・・」

と呼ぶ。手招きするこの女性に呼ばれて何事かと立ち上がって近寄ってくる。

「なあに、京姉・・・」

「この子があなたに興味があるんだって」

「私に？・・・」

驚いたように顔を見る。

「いえ、私同じような仕事をしていますので」

「仕事？・・・」

「美容部員です・・・」

つつけんどんな話し方だが少し興味をもったらしい。

「どこの美容部員なの？」

「K化粧品です」

「じゃあ、鮫島さんのところ？・・・」

「えっ！・・・部長をご存知なんですか？・・・」

「母のところに良くきていたからね」

「母？・・・」

「私の母、千堂ミチルなの」

「あっ！・・・」

「思い出した？・・・私、次女の杏奈、よろしくね」
そうだった、この人だ。

今ファッション雑誌にヘアメイクやアウター・インナーのファッションについて書いており、
日野あきあのことについても載せているので凄い人気なんだと思
出した。

本人の写真を載せることは好まないらしいので気づかなかったんだ。
でも・・・情けないや・・・

「ちょっと、杏奈。この子、あなたのこと見たことがあるけど
だれでしたと聞いてきたから杏奈を紹介してあげたの」

「また、そんなややこしいことを・・・私の名前を教えたらいいの
に」

「いやよ、そんなこと」

「また、どうしてよ」

「だって、人って反応がまちまちじゃないの、ねえ智子」

「そうよ、それをそばで見ているって面白いわよ。その証拠にこの
子、

杏奈の事がわかったとたん情けないとしょぼくれているでしょ」

「もう・・・いやあねえ、雑誌の記者って」

「違うわよ、あの子のそばに居たらどうしたってこうなるわよ」

「ふっ・・・」

とため息をついて

「また、沙希の影響ってわけ？・・・」
と舞台上の沙希を見る。

「あの子の悪戯や私達を巻き込んだのちょっとしたお芝居ってもう
ドキドキしちゃうもの。」

でもあの子の真似をしようとしても逆立ちしたって出来ないわね」

「あたりまえよ、沙希には誰もかなわないんだから・・・」

「ちよつと！お姉ちゃん達！・・・又、うちの悪口どすか？
うちなあんも悪いことしとりまへん・・・おとなしいもんどすえ」
と沙希の言葉が舞台から飛ぶ。

えっ？あんなところからここでの話が？・・・と驚く茜。

（もうダンボの耳みたい・・・ふふふ・・・）と笑っていた茜
に初めて沙希の声。

「その茜ちゃん。うちの耳ダンボやおへんえ」

（えっ？・・・）と茜はびっくりした。もしかしたら心が読まれた
？・・・真っ青になる・・・

「ちよつと、ちよつと茜ちゃん！うち、普通の人の心は読みまへん。

悪い奴、おなごを酷い目に合わせる奴しかそんなことしまへん、
そうせんとうちの心壊れます。心を読むということそれほど簡単な
ことやおへん。

茜ちゃん、力は普段は封印しとるから気にせんというて

「でも、どうして？・・・わかつたんですか？」

思わず聞いてしまう茜。

「茜ちゃん、あんななあ・・・なんぼ聞こえへんから言つて、
心で思つたことを口に出して動かす癖止めなあかんえ」

「沙希！・・・あなた、いつのまに！・・・」

「律ちゃん！どうしたの？・・・」

「薫姉さん！・・・この子ったらいつのまにか人の唇をよむ読唇術
を勉強しているのよ」

「へえ・・・でも、それって別に悪いことやおへん」

「でも、沙希がそんなこと覚えたら……」
「覚えたらどうするんですか？お姉ちゃん達、
うちのおれへん遠いところで悪口言おう思もったんですか？」

「そんなことするはずないじゃないの……」

「でも全く油断も隙もないんだから……」

というのを平然と聞き流し、他のほうを見て姉達を無視する沙希・

茜は目の前のそんな様子を見ていたら、可笑しさの方が先立ち、
もう仕方の無い人よね……と何もかも許してしまう……。そんな気持ちにさせられるのだ。

その時玄関から

「ただいま……」

と大きな声がして高弟達が出迎える暇もないほどバタバタと急ぎ足で廊下を歩いてくる数人の足音。

顔を覗かしたのが飛鳥日和子警視正達だ。

「おお～おお～……」

と声を上げて喜ぶ貞子に

「お母様、ただ今帰りました」

と挨拶する日和子。後ろには娘の京と泉、そして犬飼洋子と有佐ケイ。

一番後ろにはこの間、府警との間で活躍した森田亜紀、葉月礼亜、篠田由紀子が制服姿で座っていた。

「お婆様、帰りました」

と口々に挨拶するこの孫達にはもう貞子は手放した。

「日和子叔母様、お帰りなさい」

と舞台上から挨拶する沙希。その沙希に身体を向けた日和子、
「沙希ちゃん！・・・あなたとんでもないことになって・・・」
その後は言葉が続かない。

「沙希！あんたつてちよつと目を離すとわたし達の予想もしいこと
とをしないでかすのね」

「京姉！・・・うちなんにもしてまへんえ。今日もおとなしゅうにし
てました。

けんど事件はんのほうから、いやいやいやいうてんのにうちを引っ
張り出すんどす」

と言つて

「ふゝ・・・」

とため息をひとつ出す沙希。

けれど泉の目は鋭い。

「沙希！・・・影に隠れてにやつと笑うその表情、

本当にため息がつくほど嫌がっているのかなあ・・・」

「えっ？」

という顔で少し慌てる沙希。

「泉！よく言つたわ。さすが警視庁捜査一課の係長ね。沙希が慌て
た様子初めて見たわ」

と薫が手を叩きながら喜んでいう。

でもさすがに沙希だ

「いややわあ、泉姉。うち無理に笑つてるんどす。

日和子叔母様、勝手に警察庁から飛び出してこの京都にきやはった。

国家公務員いうたら日本中に移動は可能やけど、

警察庁いうたら許可がなかったら移動したらあかんはずどす

その日和子叔母様、京都の署長はんに聞いたら許可なしに飛び出し張った。

うちのためや・・・うちのために罰つけるんもいとわんと

この京都に来るんや思つともう嬉しゅうて・・・嬉しゅうて・・・」

とホロリと涙を流し、袂で涙をぬぐう沙希。

「けんど、叔母様に涙なんか見せるもんやない・・・心配してくださった叔母様に涙なんか・・・」

そうおもてうち無理に笑つとこ・・・笑つて迎えよう思つたんです。

泉姉！うちそんなわけで笑つたんどすえ。うれしがとんいわれるんは心外どす」

「沙希！・・・ごめん。私、やっぱり警察官ね。毎日悪い奴を追いかけているから、

そんな風にしか感じられなかったの」

と泉が謝り

「沙希ちゃん、ごめんなさい。私も女優だからそんな風にしか見えなかったの。

そうよねえ、こんな時にお芝居をする余裕なんてないものねえ」

とあの早乙女薫さえ謝っているのだ。

「凄い！・・・」

思わず小さな声を上げてしまう緑。緑は見たのだ。袂で涙を拭く振りをしてその陰で赤い舌を出し、

見ていた緑と目が合った沙希はにっこりと笑つてウインクをしたのだ。

全く・・・驚いた演技力だ。沙希の演技を見抜いた泉と薫なのに、さらにその上に行く演技力でとうとう二人を沙希の世界に引きず

りこんでしまった。
相手が一般人の泉ならわかる。けれどももう一人はあの天才女優早乙女薫なのだ。

もう呆然とする、TV局の制作だからたくさんタレントを・・・
そしてその演技を見てきた。

けれどこんな女優初めてだ。日野あきあことは聞いていた。
けれどその存在は霧のむこうで見えない。

誰もがその現場に立ち合えるわけではなく、限られたスタッフだけの特権だと言われていた。

緑はそんなこと嘘だ・・・と思っていた。誰かが作ったデマ話に違いない。

けれどこの間その日野あきあの現場にたちあつたスタッフに話を聞いたのだ。

「全てをいうわけにはいかないんだ。俺もまだまだ生きていきたいからね」

「なんだよ、それ」

緑と一緒に話をきいたスタッフの一人が馬鹿にしたように言った。

「嘘だと思ふならそれでいいよ。俺も話はしたくないんでね」

という彼に謝ってようやく聞いた話。

「あの人の演技を見たら、どんな女優でも素人とおもってしまっね。

だってあの早乙女薫が絶賛しているんだよ。日野あきあが演技をすると全て本物になる・・・ってね。

実際そうだったよ。俺もカメラを回しながら震えていた。

震えながらあの人の演技する世界に引き込まれていった。

まったく・・・カメラを回しながらドラマの世界にいるんだぜ。

だから、あの人の現場は決まったスタッフしか使わないんだ。

へたなスタッフいれたら、そのスタッフ自身仕事が出来なくなる」
そう聞いた。嘘を言う人でない。又、話を誇張する人でもない。

だから、緑は日野あきあという女優に興味をもった。

まだそんなには多くないけど彼女の出演する映画やTVのDVDや
ビデオを見まくった。

そして、先ほどのスタッフが言ったことが強烈に残っているのが

「おれ、Vテレビのスタッフに話を聞いたんだ。

Vテレビの例のドラマで名前だけが決まりまだ何も人格設定をされ
ていない時、

日野あきあが中心になってアドリブでドラマを1本作り上げたんだ
って。

だからおれ無理を言ってそのスタッフにそのビデオを見せて貰った
んだ。

社外秘となっているそのドラマ・・・

ほとんどがドラマの第一話に使われていると見る前に言われたドラ
マ、

それは俺たち制作スタッフにとって宝石のようなものだった。

見終わってから第一話と見比べてみた。90%が台詞も何もかもが
そのまま使われていたんだ。

脚本家の谷さんが俺なんかいらんじゃなかった泣いていたと
聞いたが、

その言葉ひしひしとわかったね」

と聞いたビデオ・・・強烈に見たくなった。

今日ここで見た不思議の力・・・特撮と思っていたものが全て本物？

・・・それを知ったショックも大きい。

そして、今だ。その演技力ったら・・・

「ねえ、凄いでしょ。沙希姉さんの演技力……」
と緑の後ろから声をかけてきたのは……あの天才子役天城ひづるだ。

何度かTV局で会ったから緑の顔を覚えているのだろう。

そのひづるが皆から離れところに緑を引っ張っていく。

そして、二人並んで舞台上の沙希を見つめるのだ。

「あゝあ、沙希姉さん、とうとう薫姉さんまで騙しちゃった」

「ねえ、どうしてひづるさんはひっかからないの？」

私は、偶然袂の後ろで舌を出しているの見ちゃったから」

「私？……私というよりは沙希姉さんがああして面白がって皆をお芝居に引き入れているのって子供と同じなの。」

もしかして沙希姉さんて私より子供っぽいかもしれない。

子供って子供同士のことが不思議と判ってしまうの。

だから、ああこれってお芝居なんだ、

皆をこっしてお芝居に引きづり込んで面白がってるって判るのよ」

「へえ……でも私の子供時代そんなことあったかしら」

「そうね。これって私だけなのかもしれない。だってそばに薫姉さんや庄絵叔母様……」

そして沙希姉さんがいるってそんな人他に誰もいないもんね」

「そうよねえ。……ところで、ひづるさん。あのときのビデオ持っている人知らない？」

「あの時のって？」

「ほら、Vテレビでドラマ撮ったでしょ」

「ええ、撮ったわ」

「その時にね、台本も何もないのに日野あきあさんが中心にアドリブで

ドラマを1本作ったというビデオよ」

「ふうん、やっぱりお姉さんも制作の人ね。あのビデオ見たいんだあ」

「そりゃそうよ、そのビデオ見た人ってもう凄いついていたしね」

「凄いい・・・というもんじゃなかったわ。やっている女優にしてから奇跡って思ってたもの。」

あきあ姉さんに引つ張られるというよりあきあ姉さんではなく星聖奈という主人公が目の前にいるのよ。

そして皆に魔法をかけたの。アドリブがポンポン頭に浮かんできて口を使って出て行くの。

ううん、あれは台詞じゃなかったわ。

会話そのものよ。あきあ姉さんが後で言っていたけど特別な術をかけてはいないって・・・

わたしもそう思うわ。

日野あきあが演技をすれば本物になるって薫姉さんがいつもそういつてるけど

あの時ほど実感したことはないわ」

「じゃあ、ひづるさんはビデオを・・・」

「私の大事な宝よ」

「見せてくれない？」

「いいわよ、私の部屋に来る?・・・」

「ええ、行くわ」

「じゃあ、約束してほしいことがあるんだ」

「なあに、約束って・・・」

「私のこと” ひづるさん” って大人のように呼んでくれるんはうれしいけどまだまだ柄じゃないわ、ひづるちゃんって呼んでくれる？」

「ひづるちゃん・・・これでいい・・・」

「これで緑姉さんとは仲良しよ」

と手をつないで立ち上がった。

その日は雲一つない真つ青の空だった。高校のグラウンドというのがこの字型に作られた8段という

コンクリートの観客席はこの試合の為のものと思われるほど

ピッタリで5000人を数える観客の8割方を収容してしまった。

2400人といわれる一般客は” 日野あきあ” の名前で来場したもので

これが本当の試合とは思う筈もなく

ドラマか映画の収録のエキストラと思っていたのである。

ただおかしいな？と思うことは時代劇なのにエキストラは現代の服装のままがよく、

そのエキストラの中にテレビのニュースで見る警視総監や警察庁長官の姿。

アイドルの岩佐メグ、中堅女優の糸川早苗やあのドラマで有名になった

若手女優達の姿があることであった。

そしてマスコミ関係の記者やレポーター達の姿も客席にあるのは稀有な様相を見せていた。

グラウンドには互いに睨み合うというより静かに見詰め合って座る、宮本武蔵と日野あきあ。

武蔵は濃い茶色地の着物に薄い茶色地の袴・・・同じ色の脚はんと襷掛け、勿論わらじをはいていた。

あきあは杏奈の手によって、白地の着物と袴・・・そして、やったことがないので

付いて来てもらった志保と勝枝によって白い襷掛けをしてもらった。

長い髪はポニーテールのようにし、前髪をたらしたまるで若侍だ。

しかし前髪にはいつもの赤い陣八、着物に隠れるが左手には赤い手甲がされている。

あとはたしなみ程度のメイクが杏奈の手によってされていた。

観客の中の600人はこれが本当の試合だと知る者・・・

あとの2000人はその人達からこの試合のことを聞かされて

駆けつけた半信半疑の者達だ。この中の殆どの者が剣道や柔道など武術に携わっているのだ

その真偽をたしかめてやろうと真剣な面持ちで見つめている。

警察庁長官、警視總監が隣り合わせに座っているが言葉をかわす様子がない、

・・・というよりもこのグラウンドで相対する両者からピリピリとした重圧感を感じているからだ。

そして、その隣の京都府警の署長もいつもの笑顔が出ない。

決してお偉方の隣にいるからではなくて、

これも武蔵とあきあからの重圧感に手に汗を握っているのだ。

その隣に座るのはあきあの入れ知恵でお偉方達のすぐ横に座らされることになった

西沢恵子と牛尾憲太郎だ。

最初はいやがった牛尾ではあったが今ではなんの緊張感もなくのんきに会場を見ていたが

恵子の方は最初のはにかみがあつたという間に消えうせ、グラウンドからの重圧に真っ青になつていく。

「ねえ、恵子を冷やかそうって思ったんだけどこれでは駄目ね……」

「ええ、あの二人普通に見つめているようだけど武蔵からの殺気というかあの気力……」

あんなのを受けたらわたし耐えられない。

けれどあきあさん、平気で受け流していらつしやる……凄いい！」

客席の一部から

「大八木に聞いてきたんだが女優だろ。あいつの言うこと信じた俺が馬鹿だった……」

「おい！お前には見えないのか……そして感じないのか、からの凄い気力と重圧を……」

それをあの女優であるあきあが受け止めているんだぜ」

「えっ？……本当だ、何故だ……何故あんな重圧に平気で座つていられる！」

そんな声が聞こえ始めた。

また何も知らぬ一般客の頭を茶色に染めた若者達グループからは

「なんだ、ワイヤーアクションをしないのか、

俺、香港でアクション映画の撮影現場を見てきたんだ。そりゃあ凄かったぜ。

日野あきあの撮影だからつてきたんだけれどなんだガツカリ……帰ろうかな……」

「じゃあ、帰れば……私あきあのファンだからね」

と冷たい返事の彼女に慌てる男・・・という図があちこちで見られるのは仕方ないところか・・・

「うち達、沙希姫様の試合なんてよう見とられまへん。帰って待っていますさかい、後でお話を・・・」

と帰っていく志保と勝枝と別れた杏奈は客席の最前列で茜と座った。

もしかしたら忙しすぎる自分の助手をすることになるかも知れない茜。

そしてその横にはひづると緑。

昨夜、ひづるの部屋でビデオをみせてもらった緑、

夢中になって2度、3度と再生し

「緑姉さん！まだ見るの？」

とひづるに叱られてしまったビデオ鑑賞、聞けば5度の再生、6度目をつとするとところをひづるが止めたのだ。

「凄い！・・・凄かった・・・まさに奇跡ね」

「そうでしょ、やっている本人達も口についてくる台詞や動作も自然そのままなの。

どこにも不自然さなんてないからあとで皆でビデオを見て啞然としていたわ。

平然としていたのが沙希姉さんと薫姉さんだけよ。

天才と言われる女優の実力差にはお手上げて・・・

メグちゃんなんか沙希姉さんにタイマンをはるうとしてたのが恥ずかしいっていつてたわ」

「ちょっと、ちょっとひづるちゃん。タイマンなんて言葉、誰に教えてもらったの？」

「勿論、メグちゃんよ。メグちゃんこのドラマに出る前にスケバン

役でドラマに出ていたから」

「もう・・・岩佐さんもこんな言葉教えるなんていけない子ね」

「緑姉さん、大丈夫よ。うちには本物がいるんだから」

「えっ？本物って？」

「これ、内緒よ。もしわかったら酷い目にあわされるんだから」

「酷い目？・・・」

怖そうに言つと

「違うわよ、叩かれたりとかじゃなくて、宿題を一杯出されるの」

「じゃあ・・・」

「そうよ、私の家庭教師兼マネージャーの律ちゃん先生よ。」

高校の時にバンを張っていて裏バン・総バンで活躍していたんだって、

勉強は常にトップなのにね・・・」

「そんな凄い人なの？・・・」

「そうよ・・・それに沙希姉さんの奥さんなの」

吃驚する言葉が次々とひびるの口から飛び出してくる。

「えっ？・・・今、なにを言ったの？・・・」

「だからあ・・・律ちゃん先生は沙希姉さんのお嫁さんなの!」

「えっ？・・・ええ・・・」

「なあんだ、緑姉さん知らなかったの？」

頷く緑に

「沙希姉さんってこのこと平気なのに他の人が隠そうとするの。」

えつとくく、知っているのに知らないようにすることってどう言っ
んだっけ・・・」

「えつとく・・・公然の秘密？・・・」

「うん、それぞれ・・・」

女の子のファンや記者さんは殆ど知ってるから話題にもしないんだ
って・・・」

「そうなの……でも、私知らなかった……」

「ねえ、緑姉さん。初めて知ってどう思う？」

「えっ？……どう思う？って……じゃあ、どうして女の子の格好をしているのかなって……」

ひづるは緑をマジマジ見て

「あっ！緑姉さん。勘違いしてる」

「勘違い？……何を勘違いしてるのかしら」

「あのね、沙希姉さんて男の子だけど女の子なんだ。

よく沙希姉さんと下の温泉にはいるんだけどおちんちんがあるだけで全部女の子だもん」

「ええ……それじゃあ……」

「うん、なんて言ったかなあ。ダン……えっとダンジョ……」

「男女両性具有……」

「そう……それぞれ……」

「だったら、妊娠している人って……」

「皆、沙希姉さんの子よ。9人の奥さんね」

「じゃあ、沙希さんって1度に9人の子持ちになるんだ」

「ううん、違うよ」

「違うって？……」

「沙希姉さんの子供って18人になるの」

「18人？……じゃあ、全員が双子なの？」

「うん、でも普通の双子じゃないんだって……」

「普通の双子じゃない？……」

「男の子と女の子の双子よ」

「でも、そんな双子ってざらにある……
はっ！……まさか1卵生双生児の男女の双子？……」

ひづるの頷きに信じられないものを聞いた思いの緑。

「全員？……」

「うん……でも、まだまだ増えるの」

「増えるってどれくらい？」

「わからない。だって女のお巡りさんだって看護師さんだって杏奈姉さんやケイトだって……」

私も大きくなったら沙希姉さんの子供産みたいもの……」

「一体……一体こいつでどうなってるのよ」

なにか大声で叫びたくなる緑。

「緑姉さんは早瀬一族って知らないでしょ」

と突然話が変わる。子供ながらのつたない話であったが

でもそれは緑にもわかる長く続いた女の悲しく苦しい物語であった。

身が震えるような堪らない寂しさに襲われた緑。この日本にはまだ

まだ悲しい一族があったのだ、

ただのほほん……と生きて来たものにはとてもわからぬことだった。

血が流れてなくても一族になれる。

女の悲しみ苦しみを知っていれば一族になれる……それを聞くと余計に悲しさが増す緑。

そして目の前にいる二人の姿……いわばどちらも悲しみの中にいる……そう見える緑。

「ただ今より試合をはじめます。……宮本武蔵殿……」

武蔵は立ち上がった後、自ら削った櫓の木刀を右手で振り上げ振り下ろす。

その空気を引き裂く音に一瞬に身を縮じ込ませる観客達。その音で「なんだあ?・・・」と顔を見合わせるのだ。ただの役者でここまでの手練はない。段々と勝負への予感がざわめいていた客席を黙らせていく。

「対するは早瀬沙希太郎殿・・・」
日野あきあこと、早瀬沙希太郎・・・立ち上がると雪駄を脱ぎ捨て真つ白な足袋だけになった。
木刀だけの沙希太郎に対して、持つは木刀だが腰には大小を差している武蔵。

「なお、勝負審判として桂小五郎殿・・・」
それだけ言つとホツと身体から力が抜ける天鏡・・・
周りにいる武者僧達もまるで自分がこの役を負っていたかのように崩れるように座り込んだ。
夕べいきなり言われた重責、沙希が頼んだというのだ。

いつも陰に居る天鏡お兄ちゃんに一度表舞台に立てたいという沙希の願い。
その願いにいきり立った天鏡だが武者僧達にはいやはや・・・泣きがはいることしきりだった。

これを見ていたのが朝早く撮影道具の点検に来ていた小野監督だ。
「天鏡くん、どうしてうまくやろうとするんだい?君はこんなこと初めてなんだろう?」

それを初手からうまくやろうだなんて欲深いもいところだよ。
失敗してもいいじゃないか・・・それをつつがなく終えればなおいい。

・・・身体のを抜いておけよ・・・
とボンと肩を叩いて撮影用具を見に行つたと言う。天鏡にとって素晴らしいアドバイスとなった。

つつがなく・・・つつがなく終わった呼び出しに立ち上がった二人を目に収める天鏡・・・

今度はそれこそ身体に力が入っていく。

「なんだい、宮本武蔵に今度は桂小五郎か・・・」

だいたい時代が違うじゃないか、ふざけるなといたいね」

と言いたい放題の若者だがこれがただの撮影じゃないと薄々わかってきた

周囲の一般客に睨まれるしまつ。

「なんだい、なんだい・・・」

といきがつた言葉を言っていたが仲間として来ていたはずの女の子に

「ばゝか・・・」

とそれぞれに言われて立つ瀬がなくなってしまった。

女の子にはどういいうわけかこの試合の意味がすでにわかっていたのだ。

「日野あきあつて凄い・・・」

「あの馬鹿が軽口いつているけど、この試合のこの雰囲気にあんた感じているの？」

・・・と聞きたいわね」

「男なんか放つときましようよ」

観客達の二人を見る眼がぐっと変わってきたのだ。

そして、この試合の解説を頼まれた荒巻重蔵十段と川原剛三十段・

今、日本の剣道界の最高峰として君臨する二人が

解説をと言ってきた東西テレビには固辞していたのだが

若いときからお世話になっている方からぜひにと頼まれ断れなくな

ったのだ。

たかが女優の撮影・・・そう見ていた二人が・・・その身体が固まったように動けなくなってしまうたのは試合場に出てきて座る二人を見てからだった。

「おい！・・・あれは・・・」

「ふむ・・・あの宮本武蔵と名乗る男から発せられる気力と重圧、とても常人のものではない」

「だが剛三よ、あの日野あきあという女優も只者ではないぞ。

あの武蔵の気力と重圧を柳に風と受け流しておる。あんなことができものか」

と言った時、二人の後ろから

「おほほほ・・・おぬしらには出来まい」

という声が出て

「なにをっ」

と振り返った二人、とたんに固まってしまった。

そこには二人の師・三橋清十郎十段が立っていたのだ。

小柄でひよろつとした体軀だが侮ってはならない、

その身体から片手上段の荒業が繰り出されると防ぎようがなかったものだ。

「失礼するよ」

と言って二人の間に腰掛けた先生、さすがに二人はガタつかぬが言葉は出ない。

この先生数年前に永眠されたのに・・・。

「そうわしの顔をジロジロ見るものではない。おぬし等の知る通りわしは天に上ったが、

この試合を見るために仏に断りを入れてきたのじゃ」

「先生！・・・」

「おほほほ・・・大の大人が泣くでない。隣の男が不思議がつておるうちに・・・」

「どうしました？・・・荒巻十段と川原十段」

いきなり袂から日本手ぬぐいを出して涙を拭きだした二人に解説スツツが不思議そうな顔をする。

「あの～そちらの方は？・・・」

「わしか、わしは三橋清十郎じゃ」

「三橋・・・清十郎さん・・・ええ～じゃあ数年前にお亡くなりになった・・・」

「ほほう～おぬし、わしを見ても驚かないようじゃな、さすれば平将門の時か藤原元方の時にその場にいたのか」

「はい、怨霊・藤原元方と日野あきあの戦いの時にその場にいました。

あきあの絡む事件に驚いていたら寿命がどれだけあっても足りないでしょうね」

「ほほほ・・・どうじゃ、剣の道知らぬ男でもこれほど豪胆になれるのじゃぞ」

「は・・・はい・・・」

と返事した荒巻重蔵、いきなり手ぬぐいを顔からはずして

「先生！・・・ではあの宮本武蔵は・・・」

「本物じゃ、天で修行した分生前より強いかもしれぬ」

「では、先生あの日野あきあという女優に勝てる通りはないのでは？」

「ふふふ、そう思うか？あきあ殿・・・いや天界では本名から沙希殿と呼んでいるが、

沙希殿と立ち会われたあの沖田総司殿が古今東西の剣客の中では早

瀬沙希殿が一番強い！

と断言しとられる事、おぬし達はどう見る」

「えっ？・・・沖田総司と・・・沖田総司と試合をしたのですか？」

「いやだなあ、沖田総司・・・沖田総司って人の名前をそう呼ばないでくださいよ」

「えっ？・・・」

と振り返ると若い侍が立っていた。

立ち上がるうとする二人に・・・まあまあと座るように促す沖田。

「あっ！沖田さん」

とスタッフから声、

「やあ、あなた達でしたか」

「はい」

「それじゃあ、教えといてあげましょう。

武蔵との試合より希佐殿との試合のほうが沙希殿は苦労すると思いますよ」

「沖田さん・・・じゃあ・・・」

「はい、三橋さんがこの間見ていた時よりも希佐殿の剣に鋭さが増しました。

なにしろあの弦四郎殿との立会いで3本に2本は取れるようになりましたし、

私との立会いではあの恐ろしい技の確立があげられましたよ。

いやあもう散々です。しばらくは私の右腕は使い物にならないですよ」

「むほほほ・・・これは楽しみですなあ」

「いやあ、わたしはこれでも希佐殿の立会い人ですからこれから敵情視察です。」

三橋さん、では・・・」

と去っていく沖田総司。

「おぬし達、今の沖田さんの言葉をどう見る」

「はい、沖田さんは一言も武蔵殿のことを言われませんでした」

「そうじゃ、あの人の眼中にはもう武蔵などいない。今あるのは早瀬沙希と結城希佐の試合だけじゃ」

「あの武蔵が恐るに足りないと思われる根拠がわかりせん」

「沖田さんは天界で武蔵と立ち会われているのじゃ。」

そのときの武蔵の剣を鬼のような剣技といわれた。

だが沖田さんには生前に立ち会われた沙希殿との立会いが頭から離れてはおらぬ。

身体が動けぬ恐ろしさといわれた。剣が見えないとも言われておった。

沖田殿の完敗であり、その夜身体の震えがとまらず眠れなかったは初めての事・・・」

「そんな・・・そんな剣士なのですかあのあきあという人は・・・」

「そうじゃ、わしがいくら東になってもかなわぬお人じゃ・・・」

「それじゃあ・・・」

この日本で一番強い・・・と言いかけるが

「剛三、お主が思うより遙か上のお人ぞ。この地球上で一番強い・・・そんなお方じゃ。」

なにしろ仏の力をうちに秘めておられる」

そついう清十郎の視線の先で武蔵と沙希の名前が呼ばれ、両者向か

い合ったのだ。

『こなくそっ』

武蔵はそう言い捨て櫂の木刀を上段に振り上げ、じりじりと沙希太郎との間合いを狭めていく。

沙希太郎は下段の構えから両者の間隔が狭まったことにより地擦りに構えを変えた。

そのとき武蔵が飛ぶようにジャンプし、木刀を振り下ろしてきた。

沙希太郎はそれを受けもせず、スーっと後ろに下がる。武蔵から言えば間合いをはずされたのだ。

武蔵は休まず木刀を斜めに振り上げ、横に振り払う。

間合いは瞬時に外され、武蔵の目からは沙希太郎の姿がまるで2重にも3重にもぶれてみえる。

静の沙希太郎・・・動の武蔵・・・そう思えたが、

次の一振りで沙希太郎の木刀に絡め取られるように武蔵の櫂の木刀は天高く飛ばされてしまった。

「凄い！・・・」

思わず声が出てしまう観客達・・・試合の緊張感で身体がどうにも出来ない。

次の瞬間、武蔵は腰の二刀を抜いたのだ。

右手に大刀、左手に小刀・・・その本身が陽にきらきらと輝いて美しい。

武蔵は大小を十字に交差し、沙希太郎の喉を目掛けて身体ごと突き進む。

沙希太郎の首を挟み込もうというのか……場内からの悲鳴があがった。

だが、身体中を縮めた沙希太郎は瞬時に木刀を後ろに投げ、その十字の交点を両手の平の横で挟み込んだ。これが二刀に対する白刃取りなのだ。

武蔵が引こうが押そうがびくとも動かない。

沙希太郎が折り曲げた足をバネにしてそのまま上に飛び上がると大小の刀が武蔵の手を離れて沙希太郎と共に宙にあった。それに向かつて青白い光が刀にむかう。

『パリン』という音がして武蔵の小刀が本身の中ほどから真っ二つに折られて

刃先がくるくる回り客席の前まで飛んできた。客達が覗いて見ればそれが光輝く真剣の刃とわかる。

沙希太郎は着地のあと再び後ろにとんだ。回転しながら飛んだ距離は約10m……

沙希太郎こと日野あきあがもう常人ではないのはあきらかだ。

これでこの試合のことがどういふものが判ろうはずだ。

「沙希殿！」

声と共に1本の刀が投げ入れられてきた。

”名刀菊一文字”……を宙でつかんで着地する。そこに宙で掴み取った大刀を持つ武蔵が襲い掛かった。

瞬時に飛び上がった沙希太郎が降り立ったのは……武蔵の大刀の峰の上だ。

”牛若丸の八双とび”宙で回転してそのまま降り立った。ゆっくりと菊一文字を腰に差した沙希太郎、

一方の武蔵の大刀、重さを感じずどう振っても沙希太郎が動かない。

武蔵の憤怒の表情は変わらないがその実、心の中が冷え切っていた。

背筋がぞつとして筋肉が硬直していたのだ。

実際こんな恐ろしい相手は初めてだった。できる事なら逃げ出したかった。

でも今まで築き上げてきた”宮本武蔵”という看板が許してはくれない。

戦って勝たなければならぬのだ。しかし、相手の剣がどうも見えない。この先の剣技も判らない。

もうどうしようもない立場にたたされていた。

「終わったな」

と坂本竜馬がつぶやいたようにもう試合は決していた。

だがやはり武蔵は武蔵だった。……大刀を地面にたたきつけた。

瞬間に飛んだ沙希太郎……今度は宙に留まり腰の大刀菊一文字を抜いた。

銀色に光る刀身を鍔元から左手の親指と人差し指で挟むとまるで見えない鞘を抜いていくのだ。

そこから現れた刀身は青白く光っている。

その大刀を斜め上段に構えた沙希太郎の口から『破邪！雷光剣！』と声があがった。

雲一つ無い空から雷が武蔵を貫くが武蔵もさるもの、右手で大刀を天高く掲げ、左手で拾い上げた櫂の木刀を地面に突き刺した。つまり右手から左手に電流を逃がしたのだ。

「さすがは武蔵殿、とっさの判断恐れ入ります。では次の剣技うけてそうらえ・・・」

中空から降り立った沙希太郎が次にくりだしたのは『秘剣・円月天空斬』

陽を背にした武蔵に対し、下段に構えた剣がゆっくりと回りだす。流れるような刀身の光が武蔵の目を捉えてまどろみの世界に誘い込んでいった。

「たあ〜！・・・」
という掛け声で武蔵の首筋を打つ沙希太郎。打ったといっても寸止めだ。

がっくりとくずれおち、膝をつく武蔵・・・

「それまで！・・・勝者、早瀬沙希太郎殿・・・」
桂小五郎が高らかに勝ち名乗りをあげた。

「む・・・無念！・・・」
と負けた武蔵を数人の武者僧達が会場横につくられた控室につれていく。

「ほうう・・・」
客席からなんとも言えぬ嘆声もれる。まるで白昼夢を見たようだ。つた。

観客が立ち上がり歓声と拍手そしてウエ〜ブが場内を包む。
テレビや映画で見たことがある剣術の試合・・・

でも今、目の前で繰り広げられた二人の試合は現実におこった……しかも真剣での試合だった。

どうして宮本武蔵がここにいいのか……そんな詮索はどうでもよかった。

二人で繰り広げられた本物の試合……それを見られた喜びは大きい。

「なあ、見ただろ……見ただろ……凄かったなあ。

武蔵のあんな凄い剣もそうだったけど、俺……あの小柄な沙希太郎の剣というか剣の技

……感動しちゃったよ」

試合前とは正反対の感想をいう若者に呆れ顔の女性達……。

解説の前半ををそれこそつつがなく終えた二人。

「先生！我々凄い試合を見せて貰いました。

今考えると剣道の最高位という位置にあぐらをかいていたような気がします。

これから精進します。見守っててください」

「判ったかな？……剣の道は奥深い生涯精進じゃ。

だが、お前たち決してあの方の真似だけはするな」

「えっ？……それは？」

「剣が握れなくなる。あの方には他にも舞という才能をお持ちだが、

京舞の井上貞子殿は弟子にはあの方の真似を禁じた。真似をすると舞えなくなるのじゃ」

「そんなことが……」

「別格なのじゃ。あの方はわれ等の遥か上におられる。

その方のまねをして失うものは大きいが得られるものは皆無じゃ」

「わかりました。先生のお言葉肝に銘じておきます」

「判ればそれでよい。よし、次じゃ・・・これは面白いのう・・・」

「えっ？・・・結城希佐という対戦相手ですか・・・」

「今年高校の部で初出場で並み居る強豪を討ち果たし、優勝しましたが、まだ高校生ですが・・・」

「ははは・・・おぬし達は何も知らされておらぬか・・・」

「えっ！・・・何でございましょう」

「結城希佐殿はのう、あの方の子孫なのじゃ」

「えっ・・・子孫？・・・先生！言われておられる意味がわかりませんが・・・」

「そうじゃろう・・・そうじゃろう・・・それが普通じゃ。

けれどこの世には不可思議で信じられぬことがおこりうる。そのことをよく覚えておくがよい。

あの方は数年前に仏の導きで平安の世に行かれた。

そこでの安倍晴明様の元で陰陽道を10年間にわたり修行をされたのじゃ。

されどこの平成に戻れば数分の時の不思議・・・

その上あの方のあの若さは鬼になった兄弟子を救おうと術を途中で止めて返りを浴びなされた結果なのじゃ。

誰よりも強くて誰よりも優しい・・・それがあの方なのだ」

「そういう人なのですか・・・」

「そして、ついこの間怨霊・藤原元方が復活する事件がおこった」

「えっ？・・・そんなことが？・・・」

「ははは・・・おぬし達ものんきよのう。あやうくこの京が焼き野原にされるところじゃった。

その上、幼き少女達が連れ去られ地獄の亡者どもに生気を奪われていた。

へたをすると晴明神社が焼き討ちに合い、

この京の結界が破れて朱雀門が開いていたのかもしれないのだ」

「そんなことがあったのですか・・・」

「それもだ、少女を連れ去られた親たちによつてだ。

子供をかどわかされた親が命令されればどのように動くかおぬし達も人の親だ。わかるであろう」

「は・・・はい・・・」

「元方を倒せるのはあの方だけだ。結局は使うことはなかったが元方を封印できる笛を求めて

あの方は幕末のこの京に陰陽の術でその笛を持つ坂本竜馬殿に会いにこられた。

そこで会われたのがあの方の奥方となる結城道場の娘なのだ。

そしてその血を継ぐ結城希佐・・・あの方の子孫になる」

「なにか、信じられませぬ」

「そうであるう、すぐに信じよといつても信じられぬがどおり。

だが、信じよ。信じられなくともよいが信じるのじゃ特に結城希佐という少女をな」

「わかりました。これからあの結城希佐という少女を常に見つめておけ・・・と言われるのですね」

「うふふふ・・・もう何もいうことはないのう。あとはこの試合を見るだけじゃ」

三橋清十郎はおのれの言葉を汲み取ったこの弟子二人に満足げな笑

顔を送り試合場を見つめるのだ。

一方蓬栄上人達とこの試合をみつめる妙真尼と蓮昌尼。特に蓮昌尼は舞以外のこういふ試合を見るのは初めてだった。昨日の沙希の舞い姿と重ね合わせて

(どうして出来る・・・こんなこと・・・)

貞子先生が沙希様のこんな姿を見るのはとても出来ないといわれていたが本当だった。

剣の舞という言葉とおりの戦っていても美しいお姿・・・でも私にはとても見ることが出来ない)

そう妙真尼にいうと

「あなたもですか私もですよ。とてもとても見ておれぬ」と言っただとところで沙希が武蔵に勝ってほっと一息をつくのだ。

「妙真よ・・・」

「はい、お上人様」

「お前たちが沙希の戦う姿が見ることが出来ぬということとはわたしにもようようわかることじゃ」

「お上人様もですか?・・・」

「そうじゃ・・・どういふわけか仏が導く沙希の前には修羅の道しかない。

とてもわし等には手伝えぬ。

沙希一人で切り開いていかねばならぬ。

わしみたいなシワ枯れ爺を肉親の爺と呼んでくれるあの子の優しさ。

その沙希に報いるのは見つめていくしかないのじゃ」

「お上人様・・・そのことはとてもわかるのでございます。

あのお方は身寄りのない私に・・・初めてあったそのときにはば様と呼んでくださいました。

どれほどありがたく嬉しかったか・・・隙間風の吹く寂しい身の上・・・
その心の中が一度に暖かくなった思い・・・初めてでございました」

「妙真様・・・それは私も同じでございます。

妹を亡くし、独りぼっちになった私・・・

仏の道に入ったとはいえ寂しい身の上には変わりはありません。

それをあの方は暖かく迎えてくれました。妙真様と庵を守りながら
もこの先、

その日その日にあの方の笑顔を見る楽しみ・・・こんなにありがたい
ことはありません」

「妙真・・・蓮昌・・・そんなお前達にこの先、どんな福音が待っ
ているかも知れぬぞ」

「福音？・・・蓬栄様！・・・それはどのような・・・」

「わははは・・・まあよい、楽しみに待っておれ」

それを聞いていた峰巖和尚も宋円和尚も楽しげに笑うのが印象的と
いえばそうなのだが・・・

観客席の一番端の目立たないところにいたのは早瀬の女達だ。

沙希が勝った時飛び上がって喜んだ女達、この後の試合のことを思
うと複雑な心境になるが

一先ずは安心して腰を落ち着けた。その中に京子や智子、ケイトと
いったマスコミ関係。

そしてその横に杏奈と並ぶ沖茜、ひづると並ぶ沖緑の姿があった。

「こんなこと・・・本当に見られるなんて思わなかった。どうして
こんなこと出来るの？・・・」

「それは沙希だから……この地球上で沙希だけしか出来ないことなの。」

他の誰が真似をしようとしても出来るものではないわ」

「どうして沙希さんだけが……」

「それは判らない……沙希にだって判っていないわ」

「私ね……タバから夢を見ているみたい。本当よ……」

茜が杏奈に向かって言った。

「私だって……昨日までママの身体のこと心配のしつづけだったわ。」

そのママを引つ張り出していったパパ、

どこに行くのも二人一緒だったけれどこんな時迄……って、パパのこと恨んでいたの」

と縁が続く。

「だからママから電話をもらったとき心臓が止まるほどだったわ。」

家を出て行く時と打って変わった元気な声で

『ママ、今から入院するから今から言うものを持ってきてちょうだい』

って……訳が判らないことばかりだった」

茜が言うのを

「ママに言われたものを用意して取り合えず茜とタクシーに飛び乗ったんです

その時は何も考えていなかったんですが、いざ着いてみると驚きましました。」

ママが『井上先生のところ』って言われたので、てっきり井上という病院かなって思ってきてみたら

京舞の井上先生のところじゃないですか、茜と顔を見合わせて『ええ？』って吃驚仰天……

玄関を開けるとそのママが出かける前と打って変わって
澀刺とした様子で立っているのを見て、もう言葉もありませんで
した」

「それだけじゃないわ、こんなところにママが入院？・・・って、
首をかしげながら連れて行かれたのが地下の病院・・・
なんか未来の病院に来たみたいだった。

ママの病室もそう・・・それにあの地下の温泉ったら・・・もう
驚きの連続よ・・・」
茜の声が少し大きくなる。

「驚きはそれでは終わらなかった・・・
あのお稽古場での出来事はそれ以上の驚きの連続でしたわ。
まさかわたし達のご先祖様に・・・いいえ、あんな有名な人たちに
お会い出来るなんて・・・」

「それにあの女優・・・日野あきあを目の前にあんな力を・・・
あんな芸を見ることが出来るなんて思っても見ないことだったわ」

「それに、今日でしょ。今の宮本武蔵との試合ってもう呆然でした」
「さあ、次よ。今日のメイン・イベント・・・希佐との試合だわ」

希佐は震えていた・・・武者震い？・・・いや、嬉しさの余りの
興奮によるためだ。

相手はあの宮本武蔵を破った……沖田総司が昔からの剣客で一番強いと言われた……その通りの人だった。

勝負は時の運とあの人は言ったが、武蔵にしたって実力の差がありすぎたのだ。

そんな人と渡りあえる……勿論、勝負なんて二の次だ。まずはあの人の剣から鍰鳴りをさせてみせる。

沖田総司から聞いたのだ。

あの人が幕末最後の日に門弟達につけた稽古、沖田でさえ背筋が寒くなったという。

門弟15人に汗もかかず息も上がらず、鍰鳴りさえしなかった。希佐の目的はただ一点……その鍰鳴りをさせることだった。

沖田の言う恐ろしい剣というがあの人には通用しないだろう。あの人の方が余程恐ろしい……。

その希佐の前で目を光らせる結城弦四郎。可愛くて仕方がない希佐ではあるが、

その希佐を見ていると、どうしてもあの日を思い出してしまう。

源太郎が教えてくれた『気孔』という術を使う舞妓のこと……

その術をもつと見たいがため道場を探しているという。

泥棒が吹っ飛んだというその術、

隣で聞いていた娘の和葉が『埒もない』と鼻で笑うが、

弦四郎にはその術も清水一家を片付けたというその舞妓の腕にも興味を持ったのである。

そしてその日、男姿で『早瀬沙希太郎』と名乗ったその人物から、弦四郎は並々ならぬ実力というより……

一目見た瞬間に……敵わぬ……と悟ったのだ。

強い……強すぎる……小さくてひ弱そうなその身体から

大きな岩が目の前に立ちふさがるような感さえ持った。

和葉がその体軀から侮ったようなそぶりなのを横目で見て

『あゝ娘もまだまだよのう』と痛感した弦四郎。

だがその和葉の様子がおかしくなったのは

『気孔』というものであの分厚い道場の板壁をぶち抜き、

立ち会った佐田の額を指で弾いただけで道場の羽目板に投げ飛ばして

おまけにあんな身体で30貫もある佐田を片手で軽々と運んだ様子を見てからだった。

急に身体が震えだし、目の焦点が膝においた手から上がらなくなつた。

早瀬沙希太郎の顔を見れなくなつたのだ。弦四郎にはそのわけが判らなかつたが、

ふと見ると覗き窓から和葉を見つめる視線に気がついた。祇園で名代の芸妓幾松だ。

弦四郎に気づいたのか『うちにまかせて・・・』というように目でものを言つてから

和葉の方に合図をおくつた。

立ち上がる和葉を見送る弦四郎・・・隣の源太郎の頬もふつとゆがむ。

こやつめ何もかも知っているな・・・そう思うが何も言えない。

結局、和葉は寝込んでしまった。弦四郎をも拒んで部屋にもいれてくれない。

夜驚いたことにあの玉屋の女将がやってきて、

娘の部屋に上がりこんで何事か話し込んでいるのが何かと気がかりだ。

女将が和葉をかかえるように弦四郎の部屋を訪れたのはしばらくしてからだ。

何事かと居住まいを正して聞くと和葉の婚礼のことだという。

しかも婚礼は今夜で、一夜限りの夫婦だというのだ。

『何事だ！』と血色ばむ弦四郎に青い顔をして頭を下げる和葉の横の女将が

「弦四郎はん、この婚礼あんたはんにもどうしても承知してもらわなあきまへん。

そうせんかつたら、お嬢さんの和葉はん喉をつきます。それほどのお覚悟をされているんどす。

娘はんを大事に大事に育ててきなすつた弦四郎はんにも言い分はある思います。

けんどそれを今生は黙って見逃しておくれやす」

「相手は……相手は誰だ！……」

「小沙希ちゃ……いいえ、早瀬沙希太郎はんどす」

いきなりの婚礼話に慌てていた弦四郎だが今日の道場での和葉の様子を思い出すと

それもありなんと思っただが、それにしても早すぎる婚礼話であった。

「こんな話信じられるかどうかわかりまへん。

けんどうちは信じます。あんなお人がこの世にいるのが信じられえへんからどす」

と少し禅問答じみてきたが、実は……と聞かされた話には弦四郎……肝を潰した。

そうだろう、あの早瀬沙希太郎が男と女の身体を持つ人間であり、この世でない140年先の時代から来たというのだ。

よく考えてみれば沙希太郎ほどの人物この世にいるはずはないと思えてくる。

「小沙希ちゃんは時の決まりでもう明日しかこの時代におられまへん。」

そやから今日しか婚礼があげられまへんのどす。夫婦の交わりは身体だけやおへん。

心の交わりがあつてこそそのもんどす。

そやから和葉はんにはじつくりと夫婦の時間を過ごしてほしいんどす」

そんな玉屋の女将のお園の言葉に弦四郎は

「和葉！・・・お前はいいのか？・・・もしやこのまま、後々一人で暮らさねばならぬのだぞ・・・」

一度嫁したのものには、もう良い縁談は来ぬ・・・そう覚悟しておるうな」

「父上！・・・私の夫は沙希太郎様しかおられませぬ・・・」

「そうか・・・そう覚悟しておるのならば、わしはもう何もいわぬ」

「は・・・はい！父上！・・・わ・・・私の我儘・・・」
と言つて平伏したつきり泣き出してしまった和葉だった。

そんな和葉にまさか子供が・・・しかも男と女の双子だなんて・・・

そして今、目の前で木刀を振る希佐・・・和葉の子孫なのだ。

今からする試合相手こそ希佐の先祖にあたる沙希太郎・・・どちらも勝て！とは思つのだが、

最強の剣士に対する希佐に日頃鍛錬していることもあり、どうしても思いがいくのは仕方あるまい。

「結城希佐殿」……

「早瀬沙希殿」……

「立会審判……桂小五郎殿」……

高らかに読み上げる天鏡の声、2回目ともあって伸び伸びと響く。

真っ白な剣道着と袴の結城希佐……防具は濃紺。

一方の沙希も剣道着と袴は同じ白だが、防具も白で統一している。

「始め！」

の声で互いの竹刀をあわせる両者……3本勝負だ。

構えを青眼に取る両者……足は止まったままだ。

必死の希佐の様子が伺える沙希は思わず面の下でふっと笑みを浮かべた。

しばらくすると希佐の足がじりじりと沙希の周りをすり足で動き始める。

両者の間に流れる涼風が心地よい。

やがて……ふっと再び笑みを洩らした沙希が構えを変えた。青眼から水月に……である。

とたんに希佐の動きが止まった。というより動けなくなったのだ。

希佐の喉元にあてられた切っ先がぐんぐんと迫ってきて、

それと共に沙希の姿が岩のように大きくなって圧倒されたのだ。

最初、希佐には沖田総司がいうように沙希と対して見て恐ろしいと

いう感じは受けなかった。

でも、まるで風の中に立つ柳のように柔らかな力強さは感じていた。ところがである……この圧倒的な力強さはどうだ……その恐ろしさに震えがきて止まらない。足が萎えて腰を落としそうになる……手が萎えて竹刀が手から落ちそうだ。

「沙希太郎め！希佐に手加減してやらぬのか」

「あははは……何を言う、弦四郎。その言葉お主が一番嫌いだろうに……」

さては孝行爺に成り果てたか」

「うっ！」

と言葉を詰まらせる弦四郎に

「しかし……」

と話を続ける源太郎。

「沙希殿、あの無音の術といい、この剣技といいどこまで強いのか……」

「のう、お主」

と竜馬の隣に立ったのは先ほどの試合で完敗した宮本武蔵だ。

「あの者、あんな技を持っているのか」

「これは武蔵殿、お主ほどの男が沙希殿の身目に惑わされていたとは思えぬが……」

「いや、そうではない。……が、そうであったのであろうな。

わしはあんなひ弱い者と思って対峙した……けれどとんでもなかった。

あの者……いや、沙希と呼ばれるあの者は羊の皮を被った狼というより化け物であった。

あんな恐ろしい目にあつたのは初めてだ」

「武蔵殿も沖田と同じことをいわれる」

「沖田？・・・ああ、あの若者か・・・あの男も強い。けれど沙希殿は別格じゃ・・・」

武蔵の表情から何かを読んだのか

「武蔵殿！・・・お主・・・わざと菩薩様に喧嘩を吹っかけて沙希殿と試合を？・・・」

「ばれましたか・・・やはり、お主も幕末の偉人といわれる人物だ。隠しきれぬのう・・・」

「もしや・・・仏もこのことを？・・・」

「知っておられる」

「やれやれ・・・知っておられてこの有様ですか。」

あとで沙希殿が知ればどのようなことになりますか・・・」

「竜馬殿！・・・内緒じゃ・・・内緒じゃ」

「あはははは・・・武蔵殿も沙希殿が怖いとみゆる」

一方解説席の荒巻重蔵十段と川原剛三十段は沙希の剣技を見て

「あの技は・・・」

と唸ってしまった。

「お主らも知っておろう、幻の技『無明剣』じゃ。型はいくらでも真似は出来る。」

しかし、心技体が揃わなければ出来ぬ技じゃ。ふむ・・・見事な・・・」

「だが、あの希佐という娘も見事な胆力・・・」

その希佐は、弦四郎に教えてもらった丹田に精神を集中してへこたれそうな気力をなんとか立て直していた。

剣を青眼から上段に構え、視線を沙希の足元におこうとしたが切っ先から視線が離れないのだ。

このままでは体力も気力も萎えてしまおうと思った瞬間に

「キエイ！」
と気合もろとも竹刀を打ち下ろしながら飛び込んでいた。でも、持っていた竹刀を巻き上げられ宙に高く飛ばされ、『胴』を奪われてしまった。

「一本！・・・早瀬沙希殿！」

さっさと椅子に座る沙希に比べ、希佐の動きがぎこちない。足も手も何もかもが重たいのだ。

竹刀を拾いようやく椅子に座った希佐、面を取って京に渡されたタオルで顔を拭くがどっと着物のうちに冷や汗をかいているのがわかる。

沙希を見ると面を外した顔は汗一つない。なんだか悔しさで一杯になった。

（よし、今度は何とか一泡かかせてみせるわ）
と勝たないまでも沙希に冷や汗ひとつかかせようと決心するのだ。

「2番勝負！・・・」
と桂が呼び上げる。

再び向かい合う二人・・・互いの青眼の構えは同じ・・・でも今度は沙希が動いた。
右上段に構えを変えたのだ。

希佐は青眼の構えを変えてはいない。

沙希が胴を狙って飛び込んできた。希佐が受けて小手をかえず。今度は沙希がその小手を竹刀で受け跳ね上げた。・・・と希佐の片手面が沙希を襲った。

いづれも決め手ではない。
でも、派手な打ち合いではじまったこの試合、客の興奮もいやがう
えに高まってきた。

希佐の飛び込み面・・・小手・・・胴・・・互いの竹刀の応酬に
希佐の汗が飛び散る。

しかし、どうしても沙希の竹刀から鏗鳴りがしないのだ。息があが
って呼吸が苦しい・・・

やっと両者が跳び下がり、間合いが開いた。

と、沙希が再び右上段に竹刀を持ち替えて希佐に向かって走って
くる。

（今だ！・・・）右下段に構えた希佐は地面すれすれに切っ先を
おき、跳ね上げたのだ。

そしてそれからの変化は疾風怒濤の感があり沙希の右肩に竹刀を打
つ！・・・

しかし、どういうことか・・・外されてしまい、その空を切る感覚
に『ドキッ』と心臓が波だった。

希佐には判らなかったが、沙希は希佐の竹刀を受ける瞬間に左方向
に直角に曲がってしまったのだ。

どうしてあんなことが出来る・・・。

あのまま通り過ぎれば沖田が言うあの恐ろしい剣で右肩を打たれて
いたのだ。

「あんなことされたら、もうどうしようもないじゃないか」
思わず叫んでしまった沖田の叫びに頷く武蔵達。

ガクツときた一瞬の油断、

右下段の構えから地面すれすれの切っ先を跳ね上げて変化をさせ、

右肩を打つ……一度見せた技をもう盗まれていた。

右肩を押さえながら膝をついた希佐……ようようと椅子に座り込んだ。

あとがない3番勝負……向かい合う両者には段違いの力の差があることはあきらかなのに

それでもなお観客はこの勝負に酔っていた。

毎日の鍛錬で鍛えていたはずの希佐の身体が限界を向かえ、

足や腰……青眼に構える手からも力が抜けて切っ先がフラフラと定まらない。

しかし、これからは希佐に与える沙希の愛情となった。

沙希の切っ先がピッタリと希佐の切っ先に引っ付く。

そこから流れ込んでくるエネルギー……そう希佐には感じられたのだ。

身体中に光がかけめぐる……さあ、私に付いていらしゃい……沙希に引き上げられ、まるで舞を舞うが如く剣技を披露する二人にその場にいる者全員が白夜に舞う蝶を見るが如く呆然とたたずみ、ただただ息を呑んで見つめるだけであった。

そして……向かい合う二人、互いに構えるは下段……そして、地擦りに変えた構えから

互いの竹刀が弧を描いていく。真剣のような光の美しさはないが描く弧の柔らかさがあった。

……『秘剣・円月天空斬』この剣技をあなたが引き継ぐの……というように

沙希に引かれながら弧を描いていくが沙希の竹刀が弧を描き終わった瞬間、希佐は地面に崩れ落ちた。

失神した希佐の顔・・・その表情はまるで母親に抱かれている赤子のようないたいけな笑顔があった。

はっと我を取り戻した審判の桂小五郎。驚いたように一瞬沙希を見つめていたが

「勝者！・・・早瀬沙希殿！・・・」
と勝ち名乗りをあげた。

「ほうう・・・」
まどろみから覚めた観客席の全員がため息をついた。それほど今の勝負に引き込まれていたのだ。

目の前では沙希が希佐をしっかり両手で抱き上げて客席に礼をする。そしてゆっくりとそのまま希佐の控室へと向かっていった。

夢から覚めた天界の武士たちではまず

「我等は天界の人間じゃ。だが今は全く別の世界であった。

沙希殿に引き込まれて我等全員が見せられた夢であったかもしれぬ。

けんどこんなことわしは現世におったときも経験しておらぬ」
武蔵が叫ぶ。

「私も武蔵殿と同じ気持ちですよ。
強いと思っていた沙希殿がこれほどの者とは、私や武蔵殿が敵わぬのもドオリですね」

「ふっ・・・ため息だけですよね、坂本さん。私には何もいうことありませんぜ」

「一番驚いていたのはあいつだけ。何しろ目の前で見せられていたからな。あっ、戻ってきたキニ」

「あゝあ、参ったよ、坂本さん。審判していて腰を抜かすなんざあ、赤っ恥というより腹切りもんよ。けれど、あの驚きつたらもう言葉にやあならん」
途中から慚然とする桂小五郎。

審判席でも言葉がなかった。

「ふゝむ・・・」

と言葉が出ぬ師匠の三橋清十郎。荒巻重蔵十段と川原剛三十段にしても圧倒的な実力差にもう呆然だ。

「先生！・・・これは？・・・」
と師の言葉を促す剛三

「わしの・・・わしの予想を遥かに超えた強さじゃった。

天空の剣・・・昔から密かにあこがれた天空の剣士、そう呼ばして
もらおう」

と言ったつきり黙ってしまった。

荒巻重蔵十段と川原剛三十段は結城希佐を育てる天界の武士よりもこの現世側の人間として結城希佐を育てあげねば日本の剣道界の繁栄はない、

と思うことはあたりまえであった。

あの早瀬沙希は別格として剣道界の頂点に立つべき若きホープが誕生したのは喜ぶべきことなのだ。

この若い芽をつぶしては剣道界は廃れるばかりだ。

育てあげなければ・・・それにはあの天界の武士達と話し合わねばならない。

希佐が目を覚ました時、上から覗き込んでニッコリと笑う沙希の顔があった。

いつものように舞妓姿の沙希に

「もう沙希さんの意地悪!・・・」

と胸に飛び掛って抱きつき、両手で叩く。

「あらあら、甘えたはんどすなあ? 皆さん笑つとりますえ」

と言っ言葉に

「えっ?・・・」

と声を上げて沙希の胸に顔を押し当てたまま片目で振り返る希佐。

そこには希佐が寝させられていた布団を囲むようにしてたくさんの人が見ていたのだ。

「きゃあ・・・」

と声を上げて慌てて布団の中に隠れてしまう。

この様子を見ていた女達や天界の武士達の笑いが響いた。

「希佐ちゃん、あんたずっと小沙希ちゃんに抱いて貰ったまま、ここまで帰ってきたんえ」

「ほんと、希佐ったら幸せそうに気絶して・・・」

と貞子と母にからかわれて

「嘘!・・・」

と掛け布団の中から声を上げる。

「希佐ちゃんったら、気失うとんのにうちに抱きついたまんま離れえへんのどす」

「ほんとに?・・・」

「へえ・・・その上、『お母ちゃんおっぱい』って言うんどすえ」と笑いながら言う小沙希。

「それ、嘘です、私そんなこと言いません!」

と怒って否定する希佐に

「へえ、今の嘘です・・・」

とすぐに嘘をばら小沙希。

「もう・・・沙希さんの意地悪！」

と再びそう小沙希に言っ掛け布団を頭のところまで引き上げる希佐。

「あのね、希佐ちゃん・・・希佐ちゃんに用がある言っってお客さんが来とるんどす」

小沙希の言葉に

「えっ?・・・」

と顔半分を掛け布団から出して居間の様子を覗く希佐。

確かに女達、武士達、僧侶達の中に混じって見知らぬ顔が3人、こちらを見ているのがわかった。

「希佐!・・・お客様からお話を伺うのに寝ていては失礼ですよ」と母の希美子がいうのを

「あつ、そのまま・・・そのまま聞いていただいたら結構です」と客の一人が言うのを

「いえいえ・・・」

と希佐を起こす希美子。さすがに武士の血を引く家系だ。礼儀は心得ている。

身体を起こして希佐はいつのまにか寝巻きに着かえさせられていたのに気づきハツとするが、

すぐに希美子が丹前を上から着せてくれたのでほっとして座りなおした。

「希佐ちゃん、・・・そこにお座りの3人の方がお客様どす」と居間の中央に座る3人の男性を紹介する。

「まずは真中におられる方が三橋清十郎様どす」

「えっ？・・・三橋先生といえは数年前にお亡くなりになったと・・・」

「へえ、三橋先生は確かに今は天界におられるお方どす」

「その方がどうして？・・・」

「希佐ちゃん！その訳は後二人のお方を紹介してからのことどす」

「えっ・・・あっ！はい」

「右におられるのが荒巻重蔵様。左におられるのが川原剛三様どす」

「えっ？・・・荒巻十段も川原十段も私にとって新聞や雑誌だけでお目にかかれる剣道界の最高峰のお二人です。その人達がどうしてここに？」

「その訳は三橋先生にお伺いしまひよ」

と言った沙希に三橋清十郎は座を一步進めて

「希佐殿には初めてお目にかかる。

ここにきた訳を話す前にまずはわしのことを話しておかねばならぬ。

希佐殿が先ほど言っておられたようにわしは今より5年前にこの世を去り、

そして天界に上がって知り合ったのがここにおられるお歴々だった。

そこで衝撃を受けたのがわしがやってきた剣道と剣術の違いじゃ。

近頃とみにささやかれるのが武道のスポーツ化じゃで、

猫も杓子もルールを作ってそれに縛り付けられておる。

そのおかげか剣道というものに魅力が無くなった。だから剣道の人口も少なくなる」

「三橋さん！」

と言葉を挟んだのは沖田総司だ。

「それは時代が違うから仕方ないんじゃないですか。

私もあなたから聞いた剣道というものをもう一つ理解していないがわたし達は自分の身を守るために剣を磨いていたんです。言わば人殺しのためです。

でもそういう危険がない現代・・・

スポーツがどうのルールがどうのというのが私にはわかりませんが剣を取る人が少なくなる・・・

当然だと思いますが」

「沖田さんが言われる通りで、今の状態で剣道の人口が少なくなるのは当然だと思う。

だが剣道界に身を置いてきた者にはとても我慢は出来ぬ。

同じ武道でも柔道のように今や世界に広がっており、

剣道も世界に・・・とは言わんがもっと日本で広がりを見せてほしい」

「三原です。今三橋先生の言われた通り剣道の人口が減少しているのは確かです。

高校の体育の授業で取り入れられているおかげで

少しでも剣道に興味を持つてくれる若者がいるのが救いといえは救いなのです」

「荒巻です。どうしてこれほど柔道と剣道に差がついたといえは、実力と人気を兼ね備えた者がいるかいないかの差だと思つのです。警察や自衛隊のように武道を身につけなければならぬ職業には柔道と共に剣道も採用されています。

柔道はオリンピック競技の種目として世界中に競技人口が生まれ、

剣道はそうでない。

関係者の努力に差はない・・・私はそう信じております。

でも柔道をしない人でも柔道家の名前は知っており、ましてや田村亮子の名前を知らない人は限りなく0%にちかいですよ。

一方、昔の剣客の名前は言っても剣道家の名前なんか一人も知らないはずですよ」

「必殺の剣技を持ち人気のある剣道家が現れればどれほど剣道界が活発になるか

そんな人物が現れるのをどれほど待ち望んでいたか・・・」
と言って三橋重太郎はギロリと鋭い眼光で希佐をねめつける。

「はつきりいえば剣道界にはそのような人物が今まで出てこなかったということですよ」

「そして、今日。我々の目の前に結城希佐さん、あなたが現れた。以前のあなたではない、早瀬沙希という稀代の剣客に秘剣を託された今のあなたがね」

「そうじゃ、あなたの身体に流れるのは早瀬沙希というお方の血・・・
だが、このお方・・・剣道界という世界には収まりきれぬ・・・
それは舞の世界でも同じですよのう・・・貞子さん」

「ほほほ・・・さすがは三橋はん、ようおわかりです。
小沙希ちゃんを自由にしようなんて思ったらあかんえ。
うちらみたいな平凡な人間なんかあつというまに吹っ飛ばされるんがおちや。」

小沙希ちゃんは見とくんが一番ええんどす。
それも近くにいたら巻き込まれるから、遠くから見ると安心です。

そやけどはらはらどきどきは変わりまへん」

「なんやお婆ちゃま・・・うち、随分な言われ方え」とぷつと膨れる小沙希。

「おほほほ・・・小沙希ちゃん。そんな膨れっ面してもあきまへん。あんたがそんな顔をしても陰でぺろつと舌を出して喜んでいるのうち随分見ているんえ」

「もう・・・お婆ちゃまったら・・・」

と拗ねる小沙希。皆大笑いだがこんな様子を初めて見る荒巻と三原・

あの凄い剣技の持ち主と目の前の舞妓姿の女性がとつてい同じ人物とは思えず啞然としていた。

「ねえ、希佐ちゃん。三橋先生達の言いたいことわかりますえ」

沙希の言うことに希佐は頷くと

「私に公武館に入れ・・・ということですね」

「そう、さすが希佐ちゃんどす。公武館に入って鍛えるってこと、うちもそれがええ思います」

「でも、道場や爺や沖田さんとは・・・」

「ふふふ・・・それは心配しなくてもええんと違います？」

希佐ちゃんには学校もクラブもそして道場もある・・・それ以外に公武館に入っているんな人達と剣をあわせることも出来るのんどす。

剣を振るのは何も強い人相手ばかりでありまへん。

弱い人相手に剣を振って何もならないという人いますけど、どんな強い人にも油断というもんがあるんどす。

プロの武道家が素人に刺されて亡くなった事もあるんは、相手を侮った末の油断やおもいます」

「ふむむ……弱い相手にも全力で戦えといわれるんですか？」と川原が聞く。

「へえ、たいていの武道家は弱い相手には大上段で相手を見下します。」

そやからそこに油断が出来、隙が生まれ格下のお人でも勝つことができるんどす」

と言つてから希佐を振り向き

「そやから希佐ちゃんにはそんな人にはなつてほしくないんえ。」

どんな相手にも全力でぶつかつていく、例え強うなつても……。ただただ剣を振つて鍛えるだけどす。

荒巻先生、三原先生……うちが希佐ちゃんに伝えたあの剣は今身体の中に眠つたままどす。

そやからいくらあの剣をしよう思つても今は出来まへん。

もつともつと厳しく、もつともつと鍛えなあの剣は身体からは出てきえへんえ。

目標はまだまだ遠おすけど、希佐ちゃん！がんばつておくれやす」
そついつてニツコリ笑つ沙希。

その沙希が推挙する公武館に目の色を変える武士達、

「うん……公武館ですか……興味がありますね」

と三橋清十郎が創立した公武館にただ一人言葉にして興味を示した
沖田総司。

「いつでも顔を出されてもいいんですぞ」

と沖田にむかつてそついつのは三橋清十郎。

「いやあ、止めておきましょう。どうもくせになりそうです。」

結城道場だけに留めておくほうが無難でしょうから……」
と宮本武蔵が三橋の言葉に身を乗り出しているのを横目にそう言っ
て笑う沖田。

「さて、小沙希ちゃん。これで舞に専念できる訳どすな」

「へえ、今週の舞の会は全力投球どす」

そう今回南座での沙希の舞のフィルムを撮影するには
舞に心じてのカメラの配置やアングルを前もって決めておかな
なくてはならない。

そのためのいわば予行練習を小さな劇場を借り切って催すのだ。

今回は麗香も紫苑も本番に備えて……というより殆ど初めて目
。

耳に聞くことになるので必死で覚えておかななくてはならないのだ
又、全てを一人でしなくてはならない沙希も大変なのである。

なにしろこの舞を知っているのはこの世で沙希一人だけなのだから
・。
・。

第二部 第十六話

元方の事件が終わった後も剣術の試合等、いろいろと忙しかった沙希、

ようやく落ち着き祖母に約束していた舞の映像化・・・これがあきあにとってドラマ以外の大きな目標となった。

早乙女薫事務所にとっても大きな仕事であり、

又、まゆみ社長も順子、律子というマネージャー達も

今は妊娠2ヶ月目という母体の不安定な時期でもあった。

まゆみ社長と順子マネージャーは東京事務所に詰め、

1週間に1度京都に検診に来ることを明子医師に約束させられているし、

律子もひづるのマネージャーとして又、家庭教師として

東京に詰めて京都にはまゆみや順子と同じ日にやってくる。

もちろんひづるが付いてくるのはいうまでもない。

大空圧絵には吉備洋子が、薫には司ゆりあが、あきあには瑞穂というマネージャーがついている。

つまり早乙女薫事務所のマネージャーが手一杯の状態なのだ。だが、世の中よくしたものだ。

飛龍高志、九条麗香という夫婦につく2人のマネージャーは元からいた女性マネージャーがそのまま続けることになった。

女性マネージャー達、個人事務所ときは先行きをとっても心配していたらしいが

今回の早乙女薫事務所に移ったことをとても喜んでいるのだ。

この女性達が初めて早乙女事務所に出勤した日、間仕切りしている

とはいえ

タレント事務所としてはあまりの広さに驚き、中で忙しく働いている女性達の多さにも肝をつぶした。

そして各人一人一人の前にある最新式のパソコンを操っているのは驚きだ。

「おっ？君達が？・・・」

と電話をしていた初老の男性が電話をおいて立ってきて、

「さあ、こちらにどうぞ」

とパーテーションで間仕切った応接室に案内された。

そこで渡された名刺には、

『株式会社 早乙女薫事務所メディア部門部長 城田幸三 』

と書かれてあった。

「あのう、質問よろしいでしょうか」

飛龍高志のマネージャーの志田貴恵が手をあげる。

「どうぞ・・・」

「このメディア部門というのは？」

「ああ、その前にこの事務所のこと説明しておこうか」といって居住まいをただす。

「この事務所の男はわしと、飛龍高志、片岡新三郎の三人だけなんだ。社長や早乙女薫、そして日野あきあ自身が男嫌いということもある

が特別な一族ということだけをいっておくよ。それ以上は女の君達が

社長達に聞くといい。

それとわし自身タレント業は全くの素人だから、君達に相談されても困るんだ」

と正直に話す城田に目をぱちくりする志田貴恵。

「あのう、私タレント事務所でこんなに大勢の女性達が働いているなんて今まで経験がないんですが」
と聞いたのは九条麗香のマネージャーの吉田礼子。

「ああ、彼女達はタレント部門ではない。わしのメディア部門の部下なんだ。

メディア部門・・・タレント事務所では聞かないと思うがこの事務所が入っている（株）オクトのある人物の開発するソフトや新しい通信機の
広告宣伝などすべてをまかされているのさ。

わしらが相手にする企業は警察庁、警視庁、アメリカのNASA、それと世界の各航空会社。しかもわし達は売るための営業は一切していない。

向こうからの発注だけで四苦八苦の状態なんだよ。これ以上の注文があるとお手上げになってしまう。

君達の事務所にいた女の子達も今日から出勤していて、今は向こうで研修中だけど、明日からは戦力になってもらうからね」

思わず

「よろしく願います」

とつい昨日まで同僚だった女の子達のため頭をさげる二人。

「城田部長。この会社のある人物といわれるのは？・・・」

「君なら判る筈だよ。飛龍君のマネージャーの君なら・・・ね」

「えっ・・・じゃあ・・・日野あきあ・・・」

「そうだよ。あきあが開発するソフト・・・通信機・・・そしてナビゲーターのROM、

これからもどんなもの開発するかわかりやしない。戦線恐々だよ」

「凄い！・・・」

女二人顔を見合わせて驚嘆している。

「今、社長以下タレント部門全員が京都に行っている。大変な事件が起こったためにね」

「それ、私も知っています。実はあの時私も飛龍の近くにいたんです。

奥さんのことも愛子ちゃん的笑顔もこの目に焼き付けています」

「実は私、志田さんに電話で呼び出されてTV局にとんでいきました。

一足違いで麗香には会えませんでした、

飛龍高志が日野あきあさんに涙をうかべて頭を下げるのを私見ました。

そこでずっと見つづけていました。日野あきあという天才を・・・」

「だから知っています。夜空一杯のあの恐ろしい男のことは・・・」

「私、次の日麗香から電話をうけました。彼女・・・ずっと泣きごおしで・・・

でも里の温泉で元気な身体をとりもどしたって・・・それだけいうのに・・・

それだけ聞くのに・・・もう涙が枯れるぐらい泣き通しました。

検査の結果癌組織きれいに消えていたって聞きました。

彼女のお母さん、もう里から離れないって言うから

せめて愛子がもう少し大きくなるまで待っていてちょうだいって説得するのに苦労したって言って笑っていました。

だから1ヶ月に一度里に里帰りするそう、私にもそうできるようスケジュールの調整頼むわね。

って最後に」

「君達、女性はいいなあ・・・でも女の悲しい歴史は聞いたかい？」
「ええ、男の理不尽な仕打ちの結果の女の血を吐くような悲しみは・・・」

「わしだって、男だよ・・・しかし、わしもここにきて考えさせられることが多くなってね。」

でもうらやましいよ。早瀬の里っていいところらしいなあ」

そんなとき、飛び込んできた女性社員により知らされた京都の事件の無事な解決・・・

いそいで電話をかける城田。

仕事の手をとめて歓声をあげる女性達に混じって貴恵も礼子も飛び上がっている。

話を戻そう。天城ひづるの母親の天城鶴世、父親の片岡新三郎につくマネージャー2人は

まゆみ社長と順子マネージャーが相談の結果、

ヘッドハンティング2名と一般公募2名の両面で募集を図った。

それがあたった。大きなタレント事務所にいた女性マネージャーが2人、

会社の方針との食い違いから嫌気が差して止めようと思っていたのだ。

一般公募の一人はタレントを目指していた女性が

その才能のなさから方向転換してマネージャーを目指すことになった。

どうしても芸能界から離れ難いからだ。もう一人はOLからの転身だ。

ヘッドハンティングされた女性マネージャー達は天城鶴世と片岡新

三郎の

女性マネージャーとして働いていた。

一般公募の女性達はその下でアシスタントについて日々勉強に明け暮れ、
そして今、その4人は仕事のやりがいから大きくはばたこうとしている。

これが東京事務所での出来事だった。

一方、京都では……………

『あきあの舞を映像化したい』という話を京都で編集作業にあたり
ていた

小野監督の元に話を持っていったまゆみ社長と順子、
一番最初に飛びついたのは小野監督と一緒にいたジョージ・ルーク
監督だった。

「私、『ステーション』からあきあの姿、今回も前回も見ていた・
・とても美しい動きだった。

手を動かすだけでもひきつけられていくんだ。

戦いの最中にあってもまるで幽玄な舞を舞う妖精みただったよ。

だから、あきあの舞のフィルム、私も撮ってみたい」

ということでは日米合作ではなく、日本製・アメリカ製という・
人種が違えば

あきあの舞を撮る視点も観点も違うだろう・

という小野監督の意見で同時に別々に撮ることになった。

場所は南座、観客を入れての撮影になる。

監修として歌舞伎役者で人間国宝で有名な尾上吉三郎に依頼した。

この人一倍、気難しいので有名な尾上吉三郎、果たしてあきあの舞
を見てどうなるのであろうか？

フィルムを撮る以上、その内容を知らなければ舞台装置や照明が
来ないという

南座からの舞台監督などの要請もあり・・・

本当は舞台装置も何も要らないのだがそんなこと言えるわけではない。

だから小さな劇場であきあの舞を見てから南座での本番に備える
というのが今日の舞の会だ。

でも相手は日野あきあなのだ。ただ単に舞を見せるだけということ
では終わらない。

あきあの舞を一度見てしまったら・・・どうなってしまおうのだろう。

その実例が観客席の一番前に陣取っている婦警達だ。

あきあの舞を見るまで舞そのものを見ること自体初めてだった婦警
達全員が、

勉強をしたのか日本舞踊の　流はXX流はなんていっばしの口を
聞いている。

でも話の後で言うことは皆同じだ。

「・・・でもね。確かにきれいなんだけど・・・あきあさんの舞
を見た後の胸が熱くなって、

・・・ぐっと締め付けられるものが感じられないの」

今回の事件で活躍した彼女達、京都府警の署長のいきな計らいで舞
の舞台を見られることになった。

無論、東京へ帰った3人の婦警達にも報告済みだが、

3人の口惜しがりようつたら並大抵ではなかった。

だから、南座での本番には彼女達の席をとり招待することを約束さ
せられたのだ。

そして……今日の小劇場の表には日野あきあの名前を出すと騒ぎになるということだ

『舞妓の小沙希・舞の観賞会』というポスターを会場入り口に張っておいた。

この劇場小さいといっても300名ほどのキャパシティがある。

その会場に開幕1時間前だというのに、客がもう7割方入っている。こんな状態は初めてなのだ。

劇場の支配人が場内を見回りながら客の顔ぶれの凄さに圧倒されている。

真中の席には京舞の家元で人間国宝の井上貞子が高弟を引き連れて陣取っていた。

横には結城希美子・希佐の母子と蓮昌と妙真の二人の尼僧、

相良明子、篠原良子は無論、東西テレビの沖幸造、楓夫婦と緑、茜の姉妹が座っている。

勿論、三味線屋の三好屋と職人の上原宗太郎親子の姿もあり、

そしてあの試合で知り合った荒巻重蔵と川原剛三もいた。

その下段には同じ人間国宝であり監修を務めることになった尾上吉三郎、

無論、小野監督とスタッフ達、そしてジョージ・ルーク監督と再び来日したスタッフ達もいる。

ルーク監督の姪っ子で一流の女流カメラマンであり、

ワシントン・ポストの名物記者であるケイト・マイアーも沙希との愛を体に刻み込んでから、

一度身辺整理のため帰国していたが予定通り来日して京都の地下に居を構えた。

というのも今度入社することになった早乙女薫事務所の京都支店を

つくることを

まゆみ社長にまかされていたのだ。

この京都に脈々と流れる歴史という風味にケイト・マイヤーという生粋のアメリカ人を足せばどんな事務所を選ぶのか……。

だがケイトは冷静だった。

普通のアメリカ人が選ぶのはうなぎの寝床みたいな京都の古くからの家だったが、

ケイトが選んだのは京都駅近くにある超近代的な商業ビルの5階だった。

どうしてここを選んだかとケイトに聞いて見ると

「これから世界を相手にする事務所がいまさら京都の古い家でもないでしょう」

と笑いながら言うのだ。

ワンフロアの半分を借りた早乙女薫事務所、それでも東京の本社より広い。

後は中身の充実だ。京都にはいろんな人種の人住んでいる。社員は日本人に決めることはない。

そういうまゆみ社長の言葉にケイトはあらゆる手を使って人を集めた。

結局、日本人10名に外人25名の35名が京都支社創業時の社員として決定した。

間仕切りをして、机が運び込まれ（株）オクトの静香専務により各人の机には最新式のデスクトップパソコンが配置され、

なおかつ、ノートパソコンとあのモバイルが各人に配られた。

京都事務所の社員達は日本人に関係なく近くの関西国際空港を使って世界に飛び出していかなくてはならない。

だから最低英語ともう1ヶ国語ぐらいは話せなくては入社はとても無理だ。

日本人にスチュワーデスや商社出身が多いのは当然といえる。

そのケイトが35名の京都支社の社員を引き連れて座っていた。

司ゆりあがケイトの横にしているのはいづれはメディア部門に移る事が決定しているが

当分はタレント部門の京都支社の人員として籍を移されたからだ。

ゆりあも京都の家の地下に・・・ケイトの隣に部屋をもらっている。

すっかり身体もよくなり、東京のスタジオであきあの作ったドラマの挿入歌の

レコーディングを手早く仕上げた九条麗香、母と娘の愛子と勿論その隣には夫の飛龍高志がいる。

今回、あきあに手伝って欲しいと言われた琵琶法師の謡は里でインターネットや

レコード会社のスタッフに調べてもらって判ったが、とても難しく困難なのだ。

あとは早乙女薫や大空庄絵は勿論、天城ひづるは歌舞伎役者の父と女優の母にはさまれて座っていた。

映画で共演した幸田朱尾達やドラマで共演している岩佐メグや糸川早苗もいる。

華やかなのが置屋『菊野屋』の舞妓や芸妓達だ。他の置屋の女将や芸妓達にうらやましがられたが、

「今日はリハーサルだから・・・ご免ね！」

と謝って出てきていた。この様子では南座での本番は祇園が空になってしまうことは請け合いだ。

他はテレビ局各局の社長や首脳が・・・そして番記者の顔もちらほら見える。

ちらほらというのは『舞を見る会』と名をつつた招待状・・・日野あきあとは書かず祇園の舞妓の小沙希と書いて、送ったのが番記者だけだ。

こうして番記者への日野あきあの挑戦が始まったのだ。

四方八方にアンテナを張り巡らせているあなた達ならば私がこの招待状に仕掛けた罠を見事見破って御来場くださるでしょう。

招待状の文面以外にこんな内容が含まれているのだ。

そしてその数少ないながらも不安げに来場してきた記者達、観客の豪華さに驚き、又その顔ぶれに自分の読みが当たったことを知った。

また、番記者の多くが来なかつた事で空いた席は入り口に小沙希の舞妓姿の写真と共に『舞のお披露目です。ご自由に御鑑賞ください』

と張り紙をして一般客を招き入れたのだ。

ふらつと立ち寄った人が客席を見て、吃驚したのはいうまでもない。

こんなに大勢の有名人が何故?・・・ただの舞妓の舞の披露だけではなさそうだ。

慌てて外に電話をして家族や友人を呼ぶもの、

又結構日本舞踊を愛好する人達もいて如々に席が埋まってくる。

また外人の観光客が多いこの京都、小沙希の舞妓姿に魅せられて、この会場に入ってくる団体客や友人連れもいる。

そんな外人達も物珍しげに観客を見渡してびっくりしたのが世界的な映画監督が二人もいたことだ。

今から何があるんだろう、と不安にはなるものの、異国での興味は

つきない。

開場30分前には全席が埋まり、10分前には立ち見が出た。

今ではすっかり着付けの技術も習得した杏奈の手によって舞妓の化粧や着付けをする沙希。

勿論、杏奈にとって師匠となる志保のお目付けがあつてのことだが……。

でも満足そうな志保の笑顔を見るともう立ち会う必要もなさそうだ。

時間となつた。……幕が序々にあがつていく。

舞台装置も何も無い舞台上にはただ1人、あでやかな着物姿の舞妓が座つて頭を下げている。

「きゃ〜！……小沙希ちゃ〜ん」

とはでな置屋の芸妓や舞妓の上げる嬌声に顔を上げてニッコリ微笑む小沙希。

その姿にオヤツと思つた一般客が多かつた。どこかで見覚えがあるのだ。

「ねえねえ、舞妓の小沙希つて書いてあつたけど、あれ日野あきあじゃない？」

「日野あきあ？……嘘だろう、日野あきあがこんなところで……」

と話すカップルの言葉を聞いた他の観客のざわめきが広がっていく。

又、日野あきあといえ最近剣の試合である宮本武蔵と戦つて武蔵を打ち倒したと聞いた。

眉唾ものだと思うが実際に試合を見たものに聞くとそれは凄いものだったと口を尖らせていうのだ。

テレビの中継もしていて高視聴率ときいたが

「おいおい、日野あきあつてあの早乙女薫が認める天才女優だぜ。剣の達人にみせるなんざあ、朝飯前だよ」

と信じない者達が大部分だ。結局目の前で見ていた人は自分だけの思い出として胸に刻んでいる。

そして今、舞台上の舞妓の姿にお互い顔を見合わせた一般の観客達、慌ててオペラグラスを取り出す人達もいて、その静かな中の喧騒が大きくなっていく。

だが………

「みなさん！」

といった小沙希の一声に一度に静まりかえる客席。

この声はやはり日野あきあ、
……やっと思いがいったが、席から乗り出した身体はもとに戻らない。

だってそうだろう。一般の人にはあきあの他の才能は現実に見たことがない。

……いや、一度だけあった。あきあがドラマの中で横笛を吹くシーンがそうだ。

でも素人でもわかる達者さ、吹き替えだろう。誰か横笛の専門家が吹き込んだものだろう……誰しもそう思うのが常識だ。

舞妓は普段から舞の稽古をしているのだから、こんな発表会をしても不思議がない。

でも日野あきあとはいえ女優なのだ。本当にこんな専門家や有名人を招いての

舞の発表会をしてもいいんだろうか……そんな心配をする一般客。

あきあの能力を知るのがマスコミ業界の中だけというのが逆の不思議さだ。

「今日はようこそ、うちのためにお越しいただき、ほんにありがとうございます
うさんどす」

と軽く頭を下げてから

「今日の舞は那賀杜ながとひめ姫様がうちためにつくってくれはった舞どす。

この舞のことを、少し皆様にお渡ししました『舞の栞』に書いてお
きました、

舞は日本の四季に合わせて4部構成になっているんどす。

主題は恋！この舞は現代に伝わっている日本舞踊とも京舞とも少し
違っているとは思うんどすが、

それはそれで楽しんでください。では、ふたときほどの夢をこゆっ
くり……」

といって頭を下げると場内がフェードアウトした。

そして暗くなった中から

「ジャン・ジャン……ジャン・ジャン……」

と楽器の音……琵琶の音色が流れてきた。パツとスポットライ
トが舞台中央を照らす。

その光の中にはちらちらと花びらが舞う桜の木が……

そして桜の木を背に座り込んだ琵琶法師が琵琶を弾き鳴らしている。

「嘘?!」

南座の舞台監督が体を乗り出して叫んだ。

フェードアウトして何秒もたっていないのに、舞台の空間はどうだ。

桜の木に敷き詰められた白砂、……どうしたら出来る?……こ
んなこと。

不思議な空間に・・・観客すべてがその空間の共有者となった。

「栄枯盛衰、桜華散るらん、人の心の奥には鬼が住むという・・・」

低いが良く通る声会場内にながれてくる。音響装置を使っていないがこの音量。

低いがよく聞けば男の声ではない。女のテノールといったところだ。

よくこんな声が出せる・・・九条麗香はそう思う。

里で聞いたあきあの体の秘密、そして幼いときに自ら死を選んだことを聞いた。

思わず腕の中の我が子と比較してしまい嗚咽を洩らしてしまった。だからあの声も自ら死を選んだ神の罰・・・そうあきあがいつていると聞き、

あきあの天使のような優しさの秘密を垣間見た思いた。平安時代の10年間の修行のことも聞いた。

あきあの天分もあつたろうが余程の厳しい修行をしたのであろう。だが、観客全てが心で考えられたのはそこまでだった。

・・・これは一体？・・・
今”舞の世界”に引き込まれていく・・・

紫苑は目の前で見る沙希の琵琶と謡に鳥肌がたった。

やはり沙希にはかなわない。本当の天才とはこういうものなのだ。こんな真似とうていできるものではない。・・・そして・・・

どうしてこんなことが？・・・舞台上がゆっくり回り出した。

この劇場に回り舞台があるとは聞いていない。

琵琶法師が桜の木の陰に・・・。

すると、その桜の木の陰から現われたのが狩衣姿の美しい公達、

片手に桜の小枝を持って舞う男舞……。

小枝には数片の桜の花びら。

だがどういいうわけかひらひら舞い落ちるのに枝からは桜の花びらが消えない。

すると一陣のつむじ風が……えっ？……つむじ風？……桜の花びらが会場全体に舞い上がり……そしてひらひら観客の頭や

肩に舞い落ちる。手の平に受け取る人もいたがスーッと淡雪のように消えた。

これは幻？……目の前の舞も幻？……それでもいい……
・
このままずっと見ていたい……この幽玄の世界に囚われていく……

どういいうわけか公達が舞うのは琵琶法師の琵琶と謡に合わせてだ。

舞いながら謡っているのか……いや、それでは琵琶は？いや、もう余計なことは何も考えまい。

舞は続いている。無駄な動きは一切ない完璧な舞。優雅でしかも切れ味が鋭い。

興味のない人も舞に囚われ……もう夢中になる。

外人も夢中だ。外国には誰もがバレエを鑑賞する素養が古くからあり、

舞もバレエに共通するものがある。

かえって外人のほうが舞いを見るのに適しているのかも知れない。

公達が桜の木の陰に隠れると入れ替わるように桜の精が現われ女舞に変わる。

始めは童子の姿だったが舞う内に少女に変わり乙女と成長する。

桜の精でも人と同じだ。その成長する姿が具象化されていく。

公達を見て恋を知り、乙女とかわった桜の精、その恋に身をこがれつつ花を咲かせ散らしていく。

振向きもしなかった公達もやがて桜の精の心を知り自分もいつしか恋の虜に・・・

でも人と桜の精が恋することは自然の摂理に反している。二人の想いは悲劇となった。

桜は益々元気に花を咲かせている・・・が、公達は床から起き上がれぬ病に。

これは桜の精という妖精に生気を吸い取られた結果だ。人と妖精は交じり合えぬ。

昼は眠り夜は家人の目を盗んで這うように恋人に会いに行く公達。でもそれもとうとう、明日をも知れぬ身に・・・。

ただ一人なのに・・・見える・・・二人の哀しい口付けが・・・

這ってでもきていた恋人がまだ来ぬ深夜、恋人の枕もとに座った桜の精、

その恋人の気配に薄っすらと目をあけた公達

「すまぬ、わたしはもういけないようだ。こうなったらわたしをあなたのそばで死なせてほしい」

と息も絶え絶えにいう。

「でも・・・」

「いいんです。それが私の幸せなんです。あなたのそばに永遠にいたい。」

寂しく一人で死んでいくのは絶対に嫌だ！・・・これが最後のお願いです」

そういうと最後の力を使い切って目を閉じる。『ハアハア』と息をするのも苦しそう。

桜の精は力を使って恋人を桜の木の下に運んだ。

そして、寄り添うとすでに冷たくなっていた恋人の上に覆い被さる。

そして慟哭の嘆きが……いつまでも……いつまでも……

激しい桜吹雪が舞台の上……いや会場内を包み込む。もう前も見えないほどの激しさだった。

そして……それがすーっと消えて行くと……舞台上では……

枯れ果てた桜の木とこんもりと盛り上った桜の花びらの山。

こうして桜の精の恋の一幕目の舞は終わった。

—————暗転—————

第二幕………夏

いきなり舞台上が屋敷の庭に変わった。こんこんと水を湛えた池の辺に立つ公達、

池には上空の満月が映っている。

(何?……舞台上に池だつて?……それに満月……?)

こんな短時間で舞台装置をかえられるわけではない。ああ……もう考えるのよそう。

今は舞台に集中だ。いままで多くの舞台を見てきたが、こんな舞台を見たことない)

小沙希扮する公達は懐から『緋龍丸』を取り出した。

満月に向かって眼を閉じ横笛を吹き始めた。その調べを聞いた瞬間だった。

口をポカンとあけてしまったのは今まであきあの横笛を直接聴いたことがない観客達だ。

あまりにも強烈過ぎた。

まさか？映画やドラマでも誰か横笛の名人が吹き替えをしていると思っていた。

だからまさか・・・なのだ。まさか本人が吹いていたとは・・・。

口をポカンとあけている尾上吉三郎にしたってそうだ。

歌舞伎の世界でも日本舞踊の世界でも過去名人という人は10指にあまる。

でもこんな舞を舞う女性は初めて見た。舞にしたって今まで見た事がない舞だ。

自分自身の舞の人生を振り返っても、人間国宝としても頂点に立った今にしても

この女性の前では素人同然なのだ。そんな自分が嘆かわしい。

いまさらながら京舞の井上貞子師匠にさっき言われた言葉を思い出した。

「吉三郎はん、うちもそうやったけど、あんたもや。・・・氣いつけなはれ、

いくら名人や人間国宝やいわれてもそんなもん二束三文になりまへん。

うちの小沙希ちゃんをみたらな。・・・見るんやったら肝を据えて見なはれ。

でないと自分が情けのうなる」

言われるとおりだった。あの女性は天から使わされた舞踊の神なのだ。

とても自分が監修だなんてそんな大それたことを・・・

自分こそ三顧の礼をして教えを請わなければならぬ。

だが、あれは教えられて舞えるものではない。あれこそ天女。自分
はもう見ているだけでいい。

そう……あの方の舞、一瞬でも見逃してなるものか……

観客達の思惑を別に、舞が再びはじまった。

舞台の景色が変わったのだ。遠くに笛を吹く公達の姿。

それを隣りの屋敷の境界線である塀から覗く1人の姫。

ここは昇格したばかりの右大臣の屋敷、越してきたばかりの広大な
庭、

右大臣の姫が庭を散策中、笛の音に惹かれてここにきたのだ。

笛の音も見事だが月の光に照らされた公達の美しさ、白い狩り衣の
よく似合う事。

恋もしたことがない姫が一度に恋焦がれてしまったのも不思議がな
い。

名が判らぬので勝手につけた字名が『月光の君』つきひかりのみ

こうして毎夜毎夜、恋しい『月光の君』を一目みんがため、姫の忍
び通いがはじまった。

だが、いくら姫が隠していても女官達にとっては手に取るような乙
女の恋。

毎日退屈な女官達にとってかっこうの退屈しのぎとなった。

昇格したばかりの右大臣、雇われたばかりの女官達に恩義はない。

ある日、女官が持ってきた手紙……どうして判ったんだろう……

月光の君からだった。

ギョツと胸に抱きしめ、慌て御簾の奥の部屋に駆け込む姫。

ニヤツといやな笑いの女官が後ろで覗く同僚達にうまくいったと合図をおくる。

手紙にはこう書かれてあった。

『わたしが庭での散策中……いつの日かあなたのこと気がついておりました。

その可愛い瞳のあなたにいつ声をかけようか……

毎日苦悶の日が続いておりました。……そうです、私の心の奥……

いつの日かあなたの面影ばかり追いかけていたのです。

しかし、平穏な日ならいざしらず……母が病に倒れお茶を断ち、魚などの生ある食べ物を絶っている身、

どうして女性のあなたに我が心を面と向かって打ち明けることが出来ましようか……。

こんなわたしがこうしてあなたに、わたしの気持ちを認めた手紙を差上げたのは
どうしてもわたしを知ってほしかったからです。

このまま何も知らないあなたを見つづけるなんて我慢できないのです。

私の気持ちを知ってもらった上で、あつかましいお願いですがわたしの願掛けが終わるまで毎日欠かさず私を見つづけてほしいのです。

いえ、決して声はかけないでください。全てを含んだ上の願掛けなのです。

わたしの願掛けが明けましたらあなたとの婚礼を帝に願い出る次第

です

かじこ
』

月光の君の手紙を持って舞い踊る姫、乙女の純粋な気持ちの可愛い舞、

だが悪辣な女官達の企みを思うと

暗澹たる空気が流れる観客席・・・舞の世界に引き込まれているのだ。

姫の純粋さが哀しみを倍増させていく。

姫の恋のしのび通い・・・、

月光の君の心・・・知らぬ素振りの彼の君の心・・・手紙の中にあり、

姫の恋心も手紙と共に膨らんでいく。

だが、姫の体は恋の負担に耐え切れなかった。

病を発しながらも、しのび通いは止めない。

やつれた身体を彼の君に見せぬよう、含み綿までする姫。

とうとう心有る女官が実は・・・と訴える出た。

怒り心頭の右大臣の父と嘆く母。聞きたくなかったと嘆く姫。

今ではあの手紙が姫の心のよりどころだったのだ。

あの手紙が嘘だったなんて・・・もうなんの希望もない。

女官を全て放逐した右大臣、里に帰った乳母を呼び戻し姫の看病を

・・・。

変わり果てた姫に呆然とする乳母。

だが、乳母が目を離した隙に月光の君を見ようと再び庭に出る姫。気づいた乳母があとを追いかける。姫は垣根のところまで座り込んで泣いていた。

「君が……月光の君が……この七日ほど姿がないの……」
そういつて乳母に訴える姫……。その可憐さに思わず姫の手をとってしまふ乳母。

「判りました。姫様。明日お隣で君の様子を伺ってきます」と約束する乳母。

「でもわたしは月光の君の本当の名前もしりませぬ。ですから、わたしのことは言わないで」

乳母は可憐な姫を抱きしめながら、こんな可愛い姫を騙した女官達も憎いが、

姫の心をここまで奪った男が憎い！……憎い！……月光の君が憎い！……

ええい！……一言いわずにおられぬものか。隣の屋敷を睨み付ける乳母。

その夜より意識が混濁し明日をも知れぬ重症に……。ひっそりと静まりかえり薬の匂いが充満する屋敷、陰陽寮の陰陽師達が姫の魂をこの世にとどめる為の術も施されている。

やっと落ち着いた屋敷に戻ったのは夏の暑い日ざしが姫の部屋の軒下まで照り付けてだした頃だ。

朝だというのに蝉時雨がうるさいほどだが魂魄この世に留めた姫の耳にはなんだか心地よい。

目の前に手をかざしてみるとあれだけ日に焼けて黒かった皮膚がもうすっかり真っ白になり、
やせ細った腕は痛々しいがなぜか姫のもつ雰囲気ガラリとかわったのである。

少女から大人へ……

そして恋を知ったことで乙女から大人の女性へと変貌していたのだから……。

「東雲、手鏡を出したも……」

と乳母に頼む姫。声ももうすっかり大人のたおやかさが漂っている。

「姫様！……それは……」

「ううん、いいの。……私が自分で仕出かした親不孝のあとをこの目でしっかり覚えていきたいの」

「わかりました、姫様。その前に少しお庭の風を身体に浴びてください。」

薬師様に部屋にばかり留めてはいけない。毎日自然の中に身をおいでください。と言われてますので」

乳母は姫の手をひいて、軒下に来ていた陰の中に姫を座らせた。
まだまだ暑い日ざしは身体に毒なのだ。

少し生暖かい風が今の姫には心地よい涼風に思える。

ニッコリ笑って庭先を眺める姫、

今までの少年のように走り回る姫はもうこの先あらわれることはない……。

すると・・・目の前の・・・庭先の陽炎の中から・・・黒い人影が・・・
ニツコリと笑いながら歩いてくる・・・そう・・・夢にまでみた月光の君だ。

「よかったですね・・・本当に・・・元気になって・・・」

そう言って姫の隣に座ると姫の片手を自らの両手でしっかりと重ねる月光の君。

「月光の君・・・」

「月光の君かあ・・・あなたにそう呼ばれていたなんて嬉しい限りですねえ」

「おおこれは、重盛様・・・」

「重盛様?・・・」

不信そうな顔で乳母を見る姫。

「そうですぞ、姫!この方は帝の5男坊の重盛様といわれますのじや」

「帝の・・・お子様・・・」

「あははは・・・姫。そんな目で見られるな。ただの5男坊じゃ。

だから、どこぞの養子に行ったとしてもどこからも文句は出ぬ。現に今も1件・・・」

「えっ?ご養子先が?」

「そうなんじゃ、右大臣の藤原道長と言われる方からな・・・」

「えっ?父が?・・・」

と言っただけはと気づく。

「わたしの・・・重盛様が・・・わたしの・・・」

「そうじゃ、だから姫よ。はやく元気になってくれ」

「重盛様、わたし嫌いなものでも身体に良いものは全てたべます。だから・・・だから・・・もう少しお待ちを・・・」
「姫よ・急いではならぬ。・・・気ままにゆっくりとじゃ。無理をすれば元の木阿弥じゃ」
「といって懐から横笛を出す。」

「わたしの可愛い姫、わたしは毎日ここにきてこの笛を吹く。陰陽寮の陰陽師にいわせれば、わたしのこの笛は退魔の笛というらしい。」
姫に巣くっていた魔・・・それらを消滅させてやる。
だから姫よ・・・時々わたしをその・・・月光の君と呼んでくれぬか」

ニツコリと笑った姫。

「いいですね。月光の君・・・いくらでもそう呼んで差し上げます。だってあなたはわたしにとって月のように素敵なお方」

陰からそっと覗いていた乳母の東雲、
ほっと一息つくがあの日のことを思い出しては笑いが止まらなくなる。

怒り心頭で隣に怒鳴り込んだ東雲が目にしたものは、
新しく雇い入れた料理人が間違つて卵を使った事により、
病床で唸りつづける重盛、その体が湿疹のため真っ赤に・・・2倍に醜く膨れ上がった身体。

「駄目じゃ・・・こんな姿隣の姫には見せられぬ。」

父の帝には許しを得ていた我が思い人・・・許してくれい・・・姫よ・・・許してくれい・・・」

もう大騒ぎだったのだ。もう最近の若者は・・・

と少し腹が立つがこの両想いを壊してたまるかと部屋にとびこんだ東雲、

オロオロする家人に命令するは

「早く大量に清い清水を・・・」

怒鳴るようにいうと慌てて家人達が飛び出していつて直ぐに用意された清水。

「さあこれを飲めるところまで飲んでくださいまし」

いきなり飛び込んできて怒鳴るように命令し、水の杯を渡された重盛、

膨れ上がった脛の隙間から見る東雲に・・・唯々諾々としたがった。

お腹が膨れるほど飲む清水。

・・・するとどうだろう膨れ上がった赤い湿疹からドロドロと灰色の液体が流れ落ちてくるのだ。

大きな盥を用意させ、その中で重盛を座らせ、これも清水で身体を拭く家人、

結局、清水を身体が受け付けず身体の湿疹がきれいに消えたのは明け方近くであった。

湯浴みし身体をきれいにした後、ほっと一息ついたとき思い出すのが先ほどの老いた女性だ。

「だれぞ、先ほどの女性こと知らぬか」

古くからいるこの屋敷の爺やが隣の姫の乳母だという。

「何？姫の・・・そうか、姫の乳母か・・・」

そうなればわしは姫に命を助けられたと同じ事・・・」

そういう重盛に

「申し上げます」

「なんじゃ」

「隣の姫・・・今病床におられ、明日をも知らぬ身・・・」

「なんだと！」

「はっ、以前知り合った陰陽寮におられる陰陽師の方に聞き申した」

「わかった。少し休ませてくれ」

「はっ」

と行って出て行こうとした家人達。

「待て！・・・爺やよ。お主は日が高くなってからあの清水を乳母殿に渡してほしい。」

そこでこう伝えるのじゃ。

この清水で姫の口を濡らしてほしいとな・・・そしてここからが肝心じゃ。

わしのこの退魔の笛、

姫に巣くう魔を退治するため隣との境の垣根の扉を開けてくれるよう頼むのじゃ。

わしが・・・わしが・・・姫の病・・・なおして・・・くれん・・・」

そういつて眠りについた。

こうして舞は最後の二人の夫婦の宴で終わりをつけた。ハッピーエンドで終わったこの第二幕、

舞の中からこの話が手に取るように観客達にわかったのは

全編に流れる謡と心の中に刻み込まれる一字一句の会話の不思議。

みんな、ホーっとため息をつき、前のめりになっていた体を背もたれに預けるのだ。

照明がついた。二幕と三幕の幕間は休憩となった。

その中で知った同士顔を見合わせたため息をつく、そんな様子があちこちに見られる。

「日野あきあって本当の天才ね。・・・こんな人が芸能界にいたなんて」

「おいおい、日野あきは早瀬沙希って名前であのゲームソフトを作ったし

いまだ世界で売れつづけているビジネスソフトを作っているんだぜ」

「全く・・・どうなっているのよ。彼女・・・」

そんな言葉がかわされる会場。

番記者といわれる記者達、顔を見合わせて

「おい・・・俺達、とんでもない人を相手にしているんだよな」

「お前・・・おじけついたのかよ。誰かにかわってもらうか？」

「馬鹿な！そんなもつたいないこと出来るかよ」

「あははは・・・そうだろう。おれはあの人になわなないってこともうとつくに悟っているんだ」

「だったら・・・」

「よく聞けよ。あの人、俺達に真剣に相手をしてくれているんだ。でないよ、こんな招待状出すわけないよ。この文面彼女が考えたんだ。

だから、こちらにも真剣に・・・必死にならないと失礼なんだよ」

「ねえ、高志さん。このあとの幕、彼女のそばで見えていい？」

飛龍高志は麗香の顔を見てその真意をくんだ。

「ああ、いいよ。しっかり見ているよ」

「うん、わかってる。あの謡の事、そばで見てもわからないと思うけど」

といて

「母さん、愛子を頼むね」

と腕に抱いていた我が子を母に渡す。

「麗香！沙希姫様のことしっかり見守っているのよ」
母はもうすっかり早瀬の女だ。

それに愛子までもがあきあのことをいうと本当にわかっているのかそれまでむずかかっていても急にニコニコし、言うことを聞く。
日野あきあという女性・・・ほんとうに天使だと実感する麗香。

舞台袖にいくと事務所の社長やマネージャー達がじっと舞台を見ている。

「どうしたんですの？」

「あっ麗香」

といてまゆみ社長が、舞台を指し示す。

舞台の中央部に舞妓姿のあきあが正座をして座っているのだ。

だがその姿の美しさ・・・芸能界でもまれてきた麗香だがこんなに自然でうつくしい女性の姿、

初めて見る。声も掛けられない。

そのとき

「麗香ちゃん！」

と声がかかった。振り向くと早乙女薫が椅子に座ってニコニコ笑って手を振って招いているのだ。

「どうしたのですか？薫さん。こんなところに座っているなんて」「ええ、ここで改めて沙希ちゃんの凄さを感じているところなの」「えっ？」

「だって観客席にいとどうしても身体に力が入ってしまうでしょ。」

それに今、一番身体に触りがあるからって先生にいわれて今皆でここに避難していたの」

「昨日検診日だったから、昨日皆こうして集まったのよ」

「えっ、では……」

「そうなの、私には羨ましい限りだけれど、本当にいい妊婦さんの隠れ家だわよね」

と言って入ってきたのが庄絵だ。

「妊婦さんて……」

「あら、聞いてなかった？……ここに座っている9名全員が妊娠しているのがわかったの、

皆2ヶ月だからまだ不安定な時期なのよ」

「じゃあ……」

とちらつと舞台上のあきあを見る

「ええそうよ。全員沙希ちゃんの子供……幸せそうでしょ」

よく見ると全員ニコニコしてとても幸せそうだ。

まゆみ社長なんか別人のように表情にあったキャリアウーマン特有の険がすっかり払われている。

「みなさん、お幸せなんですわね」

「そうよ、とつてもでもねえ……麗香ちゃん。これ世間には内緒よ」

「勿論、そんなこと言いませんわ」

「そうそう、あの場に居なかったから紹介が遅れているわね。私の姉で長女の真理、今早瀬一族の長をしているけど、現在は京都の貞子お婆様が決してはなそうとしないの。井上家のマネージャー兼あの施設のオーナーだし、舞妓ちゃんや芸妓さんのお琴の先生でもあるの。ママって呼んだらいいわ」

「本当にママって呼んでいいんですか？」

「いいわよ、麗香ちゃん。京都の地下には里のあの温泉もあるしあなたのお部屋も用意してあるのよ」

「えっ？私の部屋？」

「そうよ。麗香ちゃんとお子さんの愛子ちゃん・・・そしてお母さんのね」

「私・・・京都にくること多いです・・・」

「ええ、ホテルを取るなんてもつたいたいなことおやめなさい。

京都にはあなたのお家があるんですからね」

「嬉しい！・・・」

本当に飛び上がっている。

「でも旦那の部屋も・・・っていわれたら困りますけどね」

「わかっていますわ、ママ。こう見えて私も早瀬の女ですからね」

「おほほほ・・・」

と全員が笑う・・・なんだかホンワカとした良い雰囲気だ

「じゃあ、次紹介するね」

と薫が促す。

「次女となる姉、操よ。東京にあるレストランと里と京都の家の料理の総責任者よ」

「わたし、東京のレストラン何度も食事に行ったことがあります」

「よく覚えていますよ麗香さん。これからレストランに行ったらお金払わなくてもいいわ」

「でもそれでは・・・」

「麗香さんは早瀬が裕福なこと知っているでしょ。身内にはお金とらないわよ」

その言葉に主婦としてなんだか得した気分だ。

「こら！麗香・・・こんなところで食費の計算するな！」

という薫の怒りの声・・・でもニコニコした表情ではそれが冗談だと大判りだ。

「次はママの長女であのあきあの姉になる理沙よ。」

母も娘も同じ人の・・・しかも妹に・・・娘にあたる人の子供を産む。

一般の人からみると随分と淫らな関係にうつるけど早瀬の女は特別なんだからね」

「薫さん・・・いえ薫姉さん・・・そう呼んでいいですね」

「とても嬉しいわ・・・」

「私・・・里に行っているんなこと学んできました。」

その哀しい女の歴史・・・心がそわぬ相手の子供を産む・・・女にとってこんな嫌で哀しいことありません。

でもそうしなければ早瀬はなかった。それを思えば皆さんはとっても幸せですよ。

大好きな人・・・しかも二人といたくない特別な人の子を妊娠したのですから」

皆立ち上がって一人一人麗香に抱きつく

「麗香ちゃん、あなたはやはりわたしの大事な娘ですよ」

とママに言われ

「麗香姉さん、わたしあなたのファンでした。」

でもそれは外側の九条麗香という歌手でしかなかった。
今は・・・今は九条麗香という人間が大好き・・・」
と理沙に言われた言葉だ。

こうした本音を言われて面食らってしまったがこれが早瀬なのだ・
・
早瀬の女なんだと思うと胸が熱くなってくる。

「杏奈と紫苑ちゃん、いらっしやい」

と呼ばれて遠くから麗香を見ていた二人。薫に呼ばれて麗香の前にくる。

「こつちが千堂杏奈、私の末の妹の千堂ミチルの次女よ」

「えっ！あのミチルさんが薫姉さんと姉妹・・・」

「そうよ、杏奈は自分から進んで沙希ちゃんのファッション・コー
ディネーターになった

変わり者・・・今から思えば先見の明があつたといつていいわね」

「凄いわね、杏奈さんも」

「いいえ、沙希のおかげです」

「麗香ちゃん、こつちが紫苑ちゃんよ」

「紫苑ちゃん？」

「ええ、訳があつて今のところ紫苑って名前だけなの」

「訳があつてということとは、今は何も聞くなつてことね」

「さすが麗香ちゃん。その通りよ。でも紫苑ちゃんはあなたに凄く
役立つ人よ。」

紫苑ちゃんは琵琶と謡いの天才なの。沙希ちゃんに本当に似ている
しね。

今度の南座の時、沙希ちゃんを助けるために琵琶をひくことになっ
ているのよ。

それに、沙希ちゃんは東京でドラマ収録があるしいろいろと忙しいのは知っての通りよ。

だから麗香ちゃんの謡いは紫苑ちゃんに習うといいわ」

「本当？良かった。自分で練習するの、かなり辛いものがあったの」

「麗香さん、よろしゅう。お役にたてれば嬉しいどす」

「あら、紫苑ちゃん結構挨拶できるじゃないの」

「もう、薫姉さんたら・・・けど、うち麗香さんの大ファンどすえ」

その時、女達がぞろぞろとこの舞台袖に入ってきた。

「あら、どうしたんですか？」

「ちようどいいわ、あなた達もこっちへいらっしやい」

そうママに呼ばれた女達、

「あなた達、九条麗香さんは知っているわね・・・あっケイトは？」

「勿論、知っています。わたし音楽好きでCD一杯持っています。

来日して以来、初めて聞いたあなたの歌とても心に響きます。

とくに麗香さんのジャズナンバーのあのCD、我々アメリカ人にはたまりません。

あの歌にはソウルがはいっています。

あんな歌歌えるのはアメリカでも少なくなっているんですよ。

それに最近緊急発売されたあのシングルCDには

もう呆然・・・あれって・・・」

麗香は笑いながら、舞台を指す。

「えっ？・・・では・・・」

「そう、あきあが即興で作った私の娘への曲なの。

ここに居られるほとんどのの方がその現場で目撃されてますよ」

「じゃあ・・・」

「そうなんです。優しさにあふれ聞いている人に幼い頃の自分と親を思い出させる素晴らしい曲。」

現に一番最初にあのルーク監督が世界で売り出せばいいといわれたの」

「えっ？ジョージが？」

「ジョージ？」

「麗香ちゃん、ケイトはねルーク監督の姪なの。」

本人もワシントンポストでコラムを担当していた記者の上、世界に知られる女流カメラマンなのよ。」

でもそんな地位も名誉も皆捨てて

早乙女薫事務所の海外メディア部門・京都支社の総責任者になった変わり者よ」

「薫姉さん、記者は辞めたけどカメラマンは私のライフワークよ。」

止めたわけじゃないわよ」

「じゃあ、ケイトはあきらめずに沙希ちゃんを狙ってる？」

「ええ、狙ってるというのは少しオーバーだけど、

私のスチールカメラに沙希を生かしたいの。」

映像でのあんな魅力がだせるかどうかまだ自身がないんだけど」

「あきらめちゃ駄目ですよ。一生懸命やっていればいつか必ず・・・」

「ええママ・・・わかってるわよ」

「なんか、凄い人が集まっているんですね」

「そうでしょ・・・沙希ったらいろんな女性を引き付けてしまうの」

と理沙。

「希美子さん、希佐ちゃんと呼ぶ。」

「あなた達は九条麗香さんは？」

「ええ、よく知っていますわ。特に希佐が……」

「といって希佐の後ろに回ってその肩を押し出す。麗香の前に出た希佐は

「私歌手では麗香さんが断然好きです」

「ありがとうございます」

「ねえ、麗香ちゃん。この親子みてどう思う？」

「えっ……どう思うって……」

「といってじつと見る……よく見ているとこの二人の親子の面影がある女性にそっくりなのだ。」

しかも、その女性……今舞台にいる……はっとした麗香に

「どうやら判ったようね。そうなの、あなたが思った通りよ。」

でも、その後は想像を越える話になるのよ。」

この二人、結城希美子さんと希佐ちゃんはね。沙希ちゃんの子孫なの」

「ええ〜？……し……子孫？……」

「そう、沙希ちゃんが幕末に行ったとき結婚してできた子供の子孫……」

ねえ、希美子さん、希佐ちゃん。」

後ろに椅子があるから麗香ちゃんにあなた達のこと説明してあげてちょうだい」

と言ったとき天城ひづるが飛び込んできた。

「ひづる！どうしたのよ」

薫のきつい言葉にも

「わたし一人じゃないの。明子先生も一緒よ」

というところの女性が入ってきた。

「私の患者さん達がここに避難していると聞いてね」

「ちょうどいいわ、私たちの妹で九条麗香です」

と明子に紹介する薫。

だが

「誰が妹やねん」

とみんなにつっこまれる薫だった。

「ひづる！……もうすぐ時間よ。席に戻らなくては……」

「ううん、もう私の席はないの」

「席がない？」

「ええ、観客席がもう凄いことになっているの。」

だからお婆ちゃんやまが危ないし、顔がさすから皆のところに行っていないさといって

「わたしも貞子お婆様に『あなたの患者さん達が行っているから何かあったらいけないから見てきてちょうだい』と言われたのよ」と明子先生。

「観客席が凄いことって？」

と覗きにいくまゆみ社長。

「ちょっと……ちょっと……なんなのあれ……」

見てみるともう席は全て埋まり、舞台から客席まで2m程空いていたスペースも

いつのまにかパイプ椅子がおかれここもぎっしり……階段式になっている

歩廊も肩を押し合いして座り込んでいるし、一番後ろは何なのだ、もうドアはあけっぱなしで……というより閉められないのだ。

「もう驚きを通り越して・・・呆然ね・・・」
「舞が始まる前に電話していた相手が飛んできたり、あきあの招待状に気づいたり
同僚が呼んだりした番記者達がかけてくれたりでもうおおわらわらしいわ」

「あら・・・うちの旦那さん、あんなに小さくなっているわ。
母さんも愛子も・・・母さんと愛子だけでもここに連れてきたいわ」

「旦那さんのこと、いいんですか？」

「ええ、ここは男性は禁止よ。だから・・・」

「判りました、麗香さん。任せてください」
と出て行くゆりあ。

「ゆりあもすっかり早瀬の女になったわね」

「ええ、誰かさんの言うことをこなしていけば誰でもああいうふうになるわよ」

「漣！誰かさんて誰よ・・・」

「これ！・・・二人とも・・・」
と叱る真理に

「二人ともお腹の子供にさわることをしてはいけません。」

でもいるんな場合の検査の結果が得られれば、少し嬉しいかも」
という明子に

「ねえ、漣！・・・明子先生って・・・もしかしたらマッドサイエンス？」

「そう・・・いろんな学生が被害にあってね・・・」
という漣の言葉に真っ青になった薫。

「嘘よ・・・薫さん」

「だって先輩……」

「ああ、そうか……ちょっとだけね」

という二人の会話に顔色を何度も変える薫。

それを見たひづる

「薫姉さんで信号みたい」

と、いつて薫にひっぱられて膝に乗せられ体中をこそばされるひづる。

「ひゃっひゃっ……あはははは……」

と笑い転げるひづる。

「ええい！……二人ともうるさい！……」

とうとう順子が堪忍袋をきつたから、慌てておとなしくなる二人。

それを見てプツと吹き出したみんな。相変わらず元気だ。

「さあ、愛子ちゃん。お母さんですよ」

と、いつてゆりあが愛子を抱いて部屋に入ってくる。

麗香の母の直子も……

そして、驚いたことに篠原良子が西沢恵子とそして高弟の志保と勝枝までが入ってきた。

「はい愛子ちゃん。ママですよ」

愛子は麗香に身を乗り出すようにして抱きつくが、何か気になると見えてキョロキョロしている。

そして舞台の上の沙希に気がついたのか大きく腕を振るのだ。

それまで目を閉じて身動きひとつしなかった沙希が目を開けたかと思つと

スツと立ち上がってこちらを見るとニッコリ笑った。

近寄ってきて舞台の端に座り込んで愛子に指を握らせると『キャッ

キヤ・・・』と笑う愛子に

「愛子ちゃん。うちの舞どうどした？まだ難しおまつしゃる。

えっ？・・・二幕目のハッピーエンドが良かったって？

おほほほ・・・おしゃまな愛子ちゃん。三幕目は鬼女と旅のお坊さんの恋の物語なんです。

ちよつと怖いんですけど、とっても哀しい恋のお話なんです。・・・
よう見ててね」

と立ち上がってから

「お姉さん達・・・休憩時間少し長つとりましたけど、そろそろ
始めたい思います」

といって舞台中央に歩き出す。

そこにいた女性達、もう客席には戻れないのでパイプ椅子を出して
全員がその舞台袖で観劇することになった。

沙希が頭を下げると、スルスルと上がりだす幕・・・照明が消え、
スポットライトが沙希にあたる。

もし照明の部屋に誰かがいたなら腰を抜かすに違いない。

勝手にスイッチが入ったり切れたり、マジックというより魔法をみ
ているようなのだから・・・。

「みなさん、お待ちどうさん。少し長めの休憩のあいだ

こんなぎょうさんのお客はんに入っていたいてほんまありがとう
さんどす」

と言ってから驚いたのが同じ挨拶を流暢な英語で・・・そして、フ
ランス語で挨拶したことだ。

ポカンとしたのは舞台袖の女達だ。英語が流暢なのは知っている。でも、フランス語までなんて・・・

「ねえ、ケイト。沙希がフランス語が出来るなんて聞いていた？」

「いいえ、沙希が英語のなまりが話せるのは知っていたけどフランス語までは」

「えっ？沙希って英語のなまり話せるの？」

ゆりあが聞く。

「知らなかった？沙希はアメリカ中のなまりを話せるんだって、ジョージが言ってたわよ」

「ルーク監督が？」

「でもジョージも沙希がフランス語を話せるなんて知らないわよ」

「どうしてフランス語まで話せるのですか？」

一般の女性客からそんな質問が飛んだ。

小沙希はニッコリ笑ってこう答えた。

「へえ、うちらのお座敷、けっこう外人さんが多いんです。

お座敷いうたら、お酒飲むところとお思いの人多いんですが、それだけやおへん。

舞や音曲と共に会話を楽しんだり、お遊びして日ごろのストレス飛ばしてもらってます

言葉が通じな決して面白いところやおへん。

そやから、うちら舞やお琴、三味線と共に英語を習ってます。

うちがフランス語しゃべったんはただうちが語学がすきやからです」

とシラつと答えたが、ここにいるほとんどが舞妓の小沙希があの天才女優日野あきあと知っている。

それがこうして舞妓の小沙希として答えられるとどう言っているのか判らない。

黙ってしまった観客に小沙希はニツコリ笑って

「それでは残り三幕四幕の舞をお楽しみください。

それから4という数字が縁起が悪いんであと一つ、これはこの会場にいられる

人間国宝の井上貞子先生が過去井上家三代を通じて総仕上げされはった京舞で締めさせてもらいます」

といってフェードアウトした。

そして、いきなり出現したのはぼうぼうと伸び放題の野中の一軒家。そこから聞こえるのは

「ポン・・・ポンポポポポポン・・・」

と心地よい鼓の音で始まった。

「凄い！・・・やっぱり、小沙希ちゃんって凄うおす・・・」

「もう小沙希ちゃんてうちら舞妓の代表どす」

そついう菊野屋の舞妓や芸妓達の騒ぎが納まり舞が始まるのだが菊野はもう飛び上がりたいたい心境なのだ。

こんな子もう二度と現れない。幕末の大看板の幾松にも千代松にもそう評される小沙希なのだ。

それが仮とは我が娘・・・もうなんだかたまらない気分だ。

この三幕の舞・・・圧巻だった。鼓を打ち謡ながら舞う、美しい女。

先日、祖母達の前で完成した樹沙羅の舞・・・人と鬼の愛、肉親の愛・・・

さまざまとした情感が込められた悲しい舞・・・先日見たとはいえあの時より又、舞が進化していた。

最後に能面が割れ、僧侶と鬼女との永久の別れ・・・

鬼女樹沙羅の姿が観客の心に哀しい恋と共に残り

終了後にあの樹沙羅の姿が忘れられない、プロマイドがないのかと詰め掛けられて、

四苦八苦した瑞穂達、

今度南座で公演するこの舞をビデオとDVDで発売するからと説明して許してもらったほどだ。

物悲しい三幕目が終わった後はガラリと変わった御殿の中の女官の部屋。

そこには音曲はなかったが、高くて可愛い声の謡が流れる。

この声、この歌い方、もう一流のミュージシャンだわ。

そう麗香が思うほどの歌手としての才能。もう・・・日野あきあにはあきれるばかりだ。

四幕は女官の帝の語り部である斑鳩式部が夢の中で見聞きしたことを

書き記すにつれて夢かうつつか幻か・・・現世と見分けがつかぬほど

美しい殿御に心をひかれていく様子を意地悪な同輩との対立を

コミカルに入れての恋の物語、物悲しさの中にわらいがあり

外人をも笑い転げさすこの舞、もう才能の豊かさには参ってしまう。

四幕の終わった後、ようやく何も無い舞台で京舞が始まった。

何も無いと思ったのは早計で舞妓姿の美しい小沙希が

フツと手を出したところに現れた一本の桜の木が小沙希の身体を支えるのだ。

ひらひらと舞い落ちる桜の花びらの中小沙希の身体がとまった。

そして、正面を向いてお辞儀をする。

「ウオ〜・・・」

この劇場がゆれるような歓声は、外まで聞こえ何事かと中を見る人たちが多数いた。

そして、全員がスタンディングオベーション・・・貞子や高弟達・・・尾上吉三郎までもが立ち上がって拍手をしている。

その拍手の中、再び腰を折って挨拶をする小沙希。

音響設備も使っていないのに隅々まで聞こえるこの小沙希の声、舞台もこれからやれる実証だ。

「このたびのうちの舞の会、実は2週間後に行なわれます南座での公演

・・・といえますのはここに居られる二人の名監督、小野監督とそのスタッフのみなさん、

そしてジョージ・ルーク監督とスタッフのみなさんがそれぞれの視点でうちの舞を

フィルムに収められます。

だからうちの舞を知らなければフィルムに撮ることができんのどす。今日の公演はそういった意味での舞の会でした」

「はあい」

と客席からの質問だ。

「その南座での公演のチケットはいつ発売されるのですか？」

小沙希はチラッとまゆみ社長を見てから

「明日からです。出来るだけ足を運んで頂きたいので、この京都と大阪と神戸の三都だけの販売どす」

「その・・・フィルムを撮られるということは何か販売されるんですか？」

「へえ、ビデオとDVDです。
それも舞のフィルムということなので出来るだけ安く・・・いうんが
うちの希望です」

「はい！・・・あきあさん」

「へえ、でも今うちは舞妓の小沙希なんですえ」

「じゃあ、小沙希さんに伺います」

「へえ・・・」

「この舞の公演、南座で終わりなんでしょうか。東京でも・・・とい
うことは？」

「今のところ南座で終わりです・・・けんど・・・」
その後の言葉を皆聞き漏らすまいと耳をそばだてる。

「もし、求められればその限りではおへん。うち、舞が好きです。
とっても好きなんです。

けんどうちには同じぐらい大好きなこといくつもあるんです」
こういうと笑いが漏れる。

いくつもある？・・・ありすぎるのだ。会場のほとんどがすでに知
っている。

「記者の皆さんとの知恵くらべも面白おす。これからもうちの挑戦
受けてくれはりますか？」

「あきあさんの挑戦難し過ぎるんだなあ。もっとわかりやすく出来
ませんか？」

「へえ、けんど優しかったらみなさんわかってしまいます。そんな
ん面白おへん」

記者とあきあそんな面白いことやっていったのか。

「それって、不公平です」
若い女性から声が上がった。

「あきあさんと記者さんとでそんな面白いこと。一般の私たちも混ぜてください」

そんな声に一瞬目を白黒した小沙希だが

「うち、うちの番記者さんに追い掛け回されていたんです。

そんな番記者さんに敵討ちしとるんですえ」

「敵討ちはひどいなあ」
という番記者。

「うちの言葉がおかしやすか？・・・だったらごかんべんを。

別に番記者さんをどうのこうの言つつもりやおへん。

けんど追い掛け回されたり逃げ隠れたり・・・時々辛うなることあるんです。

これが芸能界にいるものの宿命言われたら終わりです。だからうち、考え方変えました。

辛い思っんもうちが受け身やからです。受身の变りには・・・それが挑戦なんです。

挑戦をしてからうち楽しゅうてたまりまへん」

「挑戦ってそんなんですけど・・・」
と客席に向かって言ったが

「私たちにも挑戦受けさせてください！」

「へえ〜っ？」
と驚く小沙希。

「番記者さんて、男の人が多いでしょ。だからあきあさんに負けるんですよ」

そんな過激な声が女性から出て目を白黒する番記者達。

「わかりました。記者さん達とは別の挑戦になりますけど、よろしおますか？

「そつどすなあ・・・その挑戦は今度始まるドラマの中で公表しますさかいよう見ておくれやす。

「そやけどこれが挑戦どす・・・なんて言いまへんえ。

「そやさかいドラマの前か、本編の中か、エンディングかよう見てないとわかりまへん。

「それと、挑戦権はおなごはんですけど。はつきりいって、うち男はんが大嫌いなんどす。

「ただ男はんが自分の彼女に答えてもらつ。これはOKどす」

「あのう・・・もしその挑戦に勝つたら・・・」

「そつどすなあ・・・うちと夜の食事会・・・これではどつどす？」

「あきあさん！・・・それ僕らもいいんですか」

「仕方おへん。けんど記者さんの挑戦はこちらから社にFAXどす。うんと難しゆうしてさしあげます」

「そんなあ・・・」

「あきあさん・・・さっきの男の人ですけど・・・」

「えっ？・・・ああ・・・男の人正解したら彼女同伴だったらOKどす」

話が変わった方向へいってしまったがもう満足して帰る客達を舞台上で見送る沙希に

小野監督とルーク監督がとんできた。

「あきあくん、君の舞の素晴らしさはようくわかったよ。カメラは据え付けて撮ろうかと思ったけど

君の舞にはやはり『ステーション』で取らなければその凄さが出てこないんだ。

貸してくれるね。『ステーション』6台と瑞穂くんを」

「ルーク監督は？」

「おお・・・わしも同じ理由で『ステーション』6台とゆりあを貸してくれないか」

「瑞姉・・・ゆり姉・・・そういうことなの・・・いい？」

頷く二人を見てから

「お二人ともカメラワークの計画書ができるだけ早う出してくれまへんか？」

「計画書？・・・ああ、そうか・・・それがなかったらいくら君でも『ステーション』は動かせないか」

ルーク監督も納得して小野監督と共にスタッフを連れて慌てて出て行った。

「沙希！」

と声をかけてから

「ちよつと、あんた達」

とガラガラになった客席に声をかけると固まって座っていた女性達が立ち上がった。

ケイトに声をかけられて小走りに近づいてきた女性達。

「沙希！今度出来た京都支社の海外メディア部の社員よ」

「じくろつさんどす」

という沙希に

「私この人のテレビ見ました」

というのをニコツと笑った小沙希が

「で、どうどした？ジヨシア」

「えっ？」

急に自分の名前を呼ばれて面喰らってかたまってしまふジヨシア・カーター。

「おほほほ・・・昨日言ったでしょ。この早瀬沙希・・・

日野あきあの前に出ると何も隠せないわよ・・・て」

「ええ、聞きました。でもこんなことって・・・」

「そんなに、怖がらないで・・・シンシア」

こんど固まってしまったシンシアが舞台上の沙希に視線を移す。

思わず引き込まれるその瞳の暖かさ、でもそこに小さな悲しみの色が・・・

「あっ！・・・違うの！」

「えっ？」

「わたし、少し驚いただけよ。決してあなたのこと怖がっていないわ」

「本当？」

「ええ、あなたの瞳見ていたら私、まるで心地よい春風の中に立っている様だったわ。

こんな経験初めて・・・。

日本で今『癒し』って言葉がはやっているけど私には判らなかつた。

けれどあなたを見て、その言葉ようくわかつたわ」

「ありがとう、シンシア。あなたのその言葉でわたしも救われます。ねえ、みんなも聞いて！・・・私けっして怖くはないのよ。

ただの普通の女の子だし、後で私のことそこにいるお姉さん達に聞いたらいいわ。

それに、私今18歳よ。名前は呼び捨てにしてちょうだい」

というのを聞いて何かほっとして肩から力が抜ける。けれど本当不思議な少女だ。

「この沙希が、今あんた達が扱っているソフトや通信機を開発した張本人だから判らないことあったら、どんどん聞くのよ。

私に聞かれても判らないってしか言えないから・・・」

といて皆を笑わず。押したり引いたり・・・さすがキャリアウーマンのケイト。

この10日間、とにかくあきあは忙しく立ち働いていた。神出鬼没ってこのことだろう。

マネージャーの瑞穂はもう後を追うだけで大変なのだ。

だから、今京都の家で謡の練習で明け暮れている九条麗香のマネージャー吉田礼子が

勉強のため瑞穂の下についているのだが、

とにかく瑞穂が帰ってきたら倒れるように寝てしまうのが礼子にはよくわかる。

京都なら温泉に入って元気を取り戻すのだが、東京ではそうはいかない。

が・・・あきあから元気が出るキスを受ける特典は物凄く嬉しい。

初めてのとき、キスを受けてくれたと崩れ落ちる瑞穂が急に元気になるのを驚いた目で見ていたが、
実際自分があきあからキスを受けてみるともう驚異だった。
その効果は抜群で元気が自分を引っ張っていくそんな感じだ。

京都でのあきあは本当に凄い。ついていくだけで大変だ。

家では舞を舞妓達と舞い、真理ママとの横笛とお琴の演奏をする。

撮影所には両監督から呼ばれてカメラアングルの打ち合わせと

『ステーション』を広いスタジオの中に出して総点検。

『ステーション』に乗り込んでの試乗、日本側6台とアメリカ側6台が

カメラマン等乗員全てを乗せて撮影所から飛び立つ。異次元からの撮影。

まるで人間業とは思えない瑞穂のスイッチング。あれもこれももう目を見張るだけで動けもしない。

『ステーション』南座で所定の位置についた。計画書通りに配置を変える沙希。

日本側とアメリカ側で『ステーション』同士、接触を心配して瑞穂にいうと

「ちょっと待ってね」

とってから目を閉じる瑞穂。

「ええ、今の質問は？……うん、わかったわ。そこまで考えていたのね、沙希」

と口に出してこういう瑞穂……まるであきあと会話をしているようだ。

「礼子さん。この日本側とアメリカ側のステーションの配置は

異次元でも違う次元にされているのでぶつかる心配はないんだって」

「えっ？今あきさんと会話されたんですか？」
と驚く礼子。

「ええ、どうしてこんなこと出来るのか判らないけれど、最初のドラマから何かあったら話し掛けも出来るし、話し掛けてくれるの」

「凄い！」

これ以上声が出ない。

『ステーション』の試乗は毎日ように行なわれた。

日本側の中央となるモニター室には小野監督が、別のモニター室にはアメリカ側のルーク監督が控えていた。

日本側の『メインステーション』には例のごとく瑞穂、アメリカ側には英語を話せ前回2回の怨霊との戦いに乗っていたゆりあがその任にあたっている。

そしてもう1箇所、京都駅近くの超近代的な商業ビルの5F、1フロアー全てを借り切り、ビルの真中のエレベーター部を挟んだ両側の廊下の

片側が早乙女薫事務所の海外メディア部門と役員室、応接室、会議室と間仕切っており、残りの廊下の半分は株式会社オクト・・・

つまりあきあが本名の早瀬沙希として働くパソコンソフト会社の京都支社で、

役員室、会議室、応接室を除いて全てを見渡せるフロアーには

たくさんパソコンが設置され新人達の入社を待っている通信機部門の部屋となる。

東京の本社では新しく開発した通信機やナビの対応はスペース的にも

人間的にもオーバーフロー状態でもうお手上げだった。

何か打開策をと探していた時の早乙女事務所の京都進出だったのだ。

「いい事務所を見つけたんですが広すぎなんです。

半分もあればうちの海外メディア部門は十分なんですが、……

知らない会社と同じフロアーというのは嫌なんです」

と言う言葉に飛びついたのが社長と静香専務だ。

さっそくまゆみ社長を案内に京都に向かった社長と静香専務、無論秘書2人も帯同していた。

京都駅で迎えたのはケイトだ。

ケイトの見事な日本語に驚く社長だったが、案内されたそのビルには目を見張った。

「ちようどいい……これは思い描いていたうちの支社そのものだよ」

さっそく即契約することになったが、

ビルの持ち主の会社がかかる間に早乙女薫事務所に案内された社長達。

研修中の入社したばかりの女性達の姿にはさすがに驚いた。

日本人もいるが80%は外人の女性だからだ。

おまけに日本語以外に2ヶ国語を話せるのが入社条件と聞く。

日本人も同じだ。2ヶ国語以上話せなくては入社できない
厳しい条件を突破してきた彼女達、きびきびして気持ちいい雰囲気
だ。

「静香専務そこをお願いがあるの」

というまゆみ社長にニツコリと笑うと

「それ以上言わなくてもいいわ。パソコンでしょ」

「ええ」

「彼女達、ここで仕事をするの？」

「いいえ・・・四分六分ぐらいになると思う」

「じゃあ・・・」

「ええ、ほとんど海外を飛び回っているでしょうね」

「では、ここにデスクトップと持ち運びできるノート・・・

それから相手に見せるあのモバイルがいるわね」

といつてから

「社長いいでしょ」

「ああ、急いでくれ！彼女達も慣れる必要があるからね」

「岡島さん、大崎さん。会社にある予備の台数を聞いて頂戴！」

「専務！発注する台数はどれぐらいしますか？」

「そうねえ・・・まゆみ社長、彼女達何人いらっしゃるの？」

「35人よ」

「35名か・・・ケイトもいるし・・・予備もいるでしょうから・・・

40という数字では縁起が悪いわね。・・・50にしてちょうだい。

あつちよつと待って。社長、うちもそれぐらいでよろしいでしょう
か？」

「ああ、ちょうどいいんじゃないかな。ノートパソコンも外で飛び
回るかもしれないから必要だしな」

「あつ、専務、モバイルですが改造したものは数少ないんですが」
「いいわ、モバイルはどれぐらい発注しても足りないから1000の単位で注文して

京都支社に入れるようにしてちょうだい。

モバイルを改造できる会社を今2、3社に絞っているところだから。

それまでは早瀬さんに改造してもらいましょ。

1000ぐらいの改造だったら半日もかからないでしょうから・・・

」

「わかりました。モバイル1000にディスクとノートを100台
ぶつですね」

「あつ、それと、サーバー2台ね」

「わかりました。岡島さん、あなたにはモバイルの発注を頼むわ。

わたしは会社に電話して予備の数をつかんでからディスクとノート、
サーバーの発注をかけるから」

「わかったわ」

といって二人して携帯電話を取り上げた。

こうして即契約をした社長達、社長は急ぎまかせられる会社の選定
を

警察庁とするため2人の秘書を連れてとんぼ返りだ。

残った静香はまゆみにきちっとケイトを紹介された。

「やっぱりあなたも沙希ちゃんに惹かれたのね」

「ええ、まだ私からは赤ちゃんの鼓動は聞こえないんですって」

「よかったわね」

「はい」

「ケイト、静ちゃんはね、沙希の会社の専務だけど平安時代は沙希

の姉上だったのよ。

言わば純粹の早瀬の女なの。

だからケイトも仕事を離れたらお姉さんって呼べばいいわ」

「えっ？いいんですか？」

「勿論いいわよ。それにそんな他人行儀な言葉使いもやめてね。

ねえ、ケイト。外人の人には名前にちゃんなんかつけると変な感じになるわね」

「ええ、わたしも呼び捨てにされたほうが・・・」

「じゃあ、ケイト」

「はい」

「沙希ちゃんのことだけど、私も主人がいるし会社もあるから、いつも沙希ちゃんのをばにはいられないの。

あの子のこと頼むわね。もういつも無茶をやって事後報告だからみんなの心が休む暇が本当にないのよ。ねえ、・・・まゆみ姉さん」

「わたしも東京と2重の生活だし、今はこんな身体だから無理が出来ないから」

「羨ましいわ」

「羨ましい？」

「ええとつても・・・私だって愛する旦那様がいるから出来ないけどもし一人だったら、

沙希ちゃんの胸に飛び込んでいるわ」

「静ちゃんも？」

「あたりまえよ、女ですもの。自分の赤ちゃんをこの手で抱いてみたいの。」

でも、仕方がないわよね。いくらがんばっても出来ないもの」

聞けば凄い内容の話だが、
ケイトも女として静香の悲しみが判るから傍によって固く抱きつく
だけだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして今、この株式会社オクトの京都支社の役員室・・・
この部屋にある社長、専務とともに並ぶ早瀬部長の机・・・
そして社長、専務秘書の机に並ぶ瑞穂の机、そして部屋の隅にある
応接セット。

沙希は机の上でパソコンを叩き、
瑞穂はノートパソコンに今日までの経過をメモ用紙から移しこんで
いた。

そして長ソファに座るのは礼子と杏奈・・・
特に礼子の目は長テーブルの上で忙しく働く工具に釘付けだったの
だ。

静香専務に頼まれたモバイル1000台の改造、
ここで専念ができないので余った時間をこの3日間に分けたのだ。
最後の10台が工具によって改造され、あとは沙希によってプログ
ラムを打ち込まれるだけになった。
それも、あれよあれよと見ているうちに改造が終わっていく。

「凄い!・・・」
あきあについてこの数日、
この言葉どれぐらい使ったかわからないほど信じられぬことを自分
に納得させていくのだ。

そして、それが起こったのは全てが終わり部屋を出ようと立ち上が

ったときだ。

ブラインドを下ろして室外の光をシャットアウトして室内の照明だけの中、

赤い小さな光の玉が窓を通り抜けて入ってきたのだ。

呆然と立ち尽くす礼子に

「大丈夫よ」

と礼子の肩を抱く杏奈、こんなこと慣れっこなのだ。

「あなたは良子様！」

まだ光の玉なのにそういう沙希。玉が十二単姿の女性に変わったのはその後だ。

「これは沙希姫様にはご健勝のことお喜び申し上げます」

「良子様・・・どうされたのですか？・・・将門様は？」

「主人は沙希姫様のご守護役、

とてもとても身体が休まらぬと申しまして、天で忙しく立ち働いております」

「あっ・・・それは・・・」

「沙希姫様、よろしいんですぞいます。もっと主人や坂本竜馬殿、
沖田総司殿や

他の方をもっと忙しくしてやってくださいませ」

「といっても・・・」

と口ごもる沙希に

「おほほほ・・・やはり、沙希姫様はおやさしいお方・・・」

沙希は照れながらも

「今日の良子様の御用というのは？」

「おう、そうでした。わたしにとって遠い昔の話でしたのでつい忘れておりましたが、先日はた織りをしていましてフツと思い出したことが・・・」
という良子。

「沙希姫様のために舞をおつくりしたのは那賀杜姫ながとひめと申されませんでしたか？」

「ええ、そうです。那賀杜姫様には大変お世話になっております」「やはり、そうでしたか。那賀杜姫はわたしの乳母の娘なのです。

主人が謀反をした罪で亡くなった後、私は乳母を連れて山裾野の庵に籠りました。

そこへ那賀杜姫は平気で乳母を尋ねてきたのです。

そこでいつもお名前が出たのは沙希姫様あなたのことです。

その頃は安倍晴明殿の弟子の安倍あきあという名でおられました。舞や横笛はこの世のものでないといつも言っていました。

でもあるとき、沙希姫様に那賀杜姫が作った舞をお教えしていたとき、

乳母が病気で寝込んでしまったことがあります。

那賀杜姫も庵に飛び込んできて必死に看病した結果、

病も峠を越してホツとして月明かりの中に出たときです。

その月明かりの中で舞を舞う那賀杜姫の姿・・・

那賀杜姫は私の姿を見つけてニコツと笑いながら舞を止めて私に近づいてきました。

『良子様、あなたにあの安倍あきあ様に4つの舞をお教えしたといいましたね。』

実はあの4つだけではまだ舞は不完全なのです。

最後の5つ目の舞を舞ってこそ、この舞が完成します。

でもこの舞、お教えしようかどうかまだ迷っています。

それにこの舞、あきあ様にお教えすれば私から離れてしまいます。

どうです、私が舞える最後の舞、見ていただけますか？』
私は凄く興味があつたので見たい・・・といいました。
でもそれからは・・・じつを言うと良く覚えていません。
凄く哀しみ喜びが回転するように次々と浮かんで消え・・・
心が熱くなつたのは覚えているのですが・・・」

「そうですか、やはり舞は不完全なのですか」

「知っていらしたの？」

「いいえ、知ってはいませんでした、疑ってはありました」

「えっ？」

「舞を舞っていて最後が何か尻切れトンボなんです。何の訴えかけもないといえましょうか」

「でも私が見たのは果たして舞だったのでしょうか」

「良子様、お願いがあります」

「えっ？なんでしょうか」

「良子様のその舞の記憶読ませていただけないでしょうか」

「舞の記憶？沙希姫様にはそういうことが出来るのですか？」

「はい」

と答えるのを少し躊躇していたが

「いいでしょう、でも他の記憶は・・・」

「判っています。私がほしいのは5幕目の舞のみでございます」

「わかりました・・・どうぞ」

という目を開ける。

沙希は近くに寄って九字を切り真言を唱えた。

礼子はこの様な沙希の姿を見るのは初めてだから握る手はもう汗でびっしょりだ。

「わかりました」

「えっ？もういいんですか？」

「はい！これで舞が完成できます。良子様、ありがとうございます」

「なんの、これしきのこと沙希姫様のお役に立てれば・・・おほほほ」

「とても嬉しいですわ」

「あっ・・・もうすぐ主人が帰ってくる頃です。もう帰らねば・・・」

と腰を折ると再び赤い光の玉に戻ると凄いスピードで窓から飛び出していった。

「せ・・・先輩・・・今のは？・・・」
と瑞穂に聞く礼子。

「えっ？・・・ああ、あの人はね。平将門様の奥様で良子様っていわれるの」

「えっ？じゃあ・・・」

「そうよ、沙希と戦ったあの首塚の主だった平将門そのひとよ。

でもすっかり心を入れ替えられて今では沙希の守護をされているの。でもあの沙希でしょ。将門さんも大変みたい」

「瑞姉・・・もう何を言ってるのよう・・・」
と言ってから

「これから帰るから志保さんにお稽古場使えるかどうか聞いてくれる？」

『あきあさんのマネージャーっていろんなことしなくてはいけないし

とんでもない世界をみななければいけないので物凄くたいへんだわ』
というのが礼子の感想だ。

あきあのマネージャーが出来ればどんな人のマネージャーもできる

というのが結論だった。

地下の温泉にゆったりとつかって、軽い食事をとってからお稽古場にあがった沙希、
瑞穂達マナージャーと杏奈も興味があるからついていく。

お稽古場には勿論祖母と高弟達、ママの真理と希美子、希佐の親子。そして九条麗香と紫苑が座っていた。

無論、その横には今日も通院と称して温泉に入ることと一目沙希姫様にと

妙真と蓮昌の二人の尼僧が来ていた。

特に蓮昌は温泉で身体が治ったことで貞子に請われて日本舞踊を教える・・・

ということになったが何しろブランクが長い。

だから今は高弟たちに手伝ってもらって必死に元に戻ろうと練習に励んでいた。

妙真にはその姿をみるのも楽しいらしい。そして入り口近くに座った瑞穂と礼子と杏奈。

舞台上上がった沙希が座って祖母に向かい合う。

「小沙希ちゃん、これからの舞は？」

「へえ・・・」

と話し出したのは先ほど聞いた将門の妻良子の話・・・

「その良子はんに話した那賀杜姫はんの5幕目の話。うち判るような気がするんです」

「さすがお婆ちゃま、そうどすえ」

「あ的一幕から三幕まではそれは素晴らしい舞どした。

けんど四幕の舞あれはいけまへん、まったくの尻切れトンボなんです

す。

けんどその尻切れトンボの四幕目が五幕目の序章だけとしたらなんかとんでもないもの見れるそんな気がするんどす」

「お婆ちやまのその期待破られることないとおもいます。

けんど、普通の舞や思つたら少し期待はずれどす。ある意味舞より凄いの……」

といつてから

「この舞、途中でどんなことあつても止めたらいけまへんえ」

そいつて立ち上がった。普通の浴衣姿があつというまに変わる十二単姿。

そして舞い始めた……ん？……それは舞というより流れる謡に合わす……

そう能のような動きなのだ。

コミカルな四幕目の斑鳩式部の女の内面をあらわすこの舞……段々と変わっていく

……変わっていく。

周りが暗くなり……真つ赤に光る目……長い髪が蠢き……鋭い角が前頭部より生えていく……。

語り部という立場で平気を装っていたが内面はドロドロとした醜い女の性が蠢いていたのだ。

嫉妬で女の幸せを憎しみの心で喰らい尽くす般若。

昼間の明るい語り部の斑鳩式部。夜の女を喰らう般若。

『両面宿那』……そう両面宿那という妖怪に変化したのだ。背中あわせで人の両面を表す。

平穩な語り部として帝の近くで暮らしていた女が同輩の小さな嫉妬から

自分の内部の暗い心に気づいていく。

明るく振舞い夢の中から恋を知り語り部として語っていくが・・・
夢でしか恋を知らぬ・・・

夢の中でしか殿御と話せぬ情けなさ・・・

語り部なのに現実に恋も語れぬ。

殿御と明るく語る女には地獄の業火のような嫉妬で焼き尽くせよと
狂い回るのだ。

両面宿那は夜、女を襲いその魂の中から恋の炎を喰らい尽くす。

都に流れる不穏な空気・・・追いかければ帝近くの御殿で消える不
思議。

鬼が徘徊する都の路地に待つ男達・・・いつれもが恋しい女達の魂
を喰らわれた男達。

今、姿をみて不用意に飛び出した・・・が、決して般若の顔を見て
はいけないのだ。

身体が固まり、魂を引き抜かれる恐ろしさ。魂を食われてしまえば
肉はチリと化す。

だがこんなこと、仏は黙って見過ごしにはしない。

恋人を失った悲しみで何気なく御殿を散策していた公達、

木立の中に踏み入ったとき、何やら書き物をしていた女性とめが合
つてしまつた。

「あつ！」

と言って手にしていたものを落とす女性・・・斑鳩式部であつた。

慌てて駆けつける公達・・・今宮中で売り出し中の文武両道の若者、

藤原家定であつた。

筆と紙を拾い上げ女性に渡す。どうしたわけか動かないというより動けない式部に家定が声をかける。

「どうしたのですか？」

「あつ……いえ、私……殿がたに話し掛けられること初めてなので……」

「ほう……あなたのような、美しい方が……」

「嫌ですわ……ご冗談を……私みたいな醜い女を……」

「醜い？……これは驚いた。あなたに向かつて誰がそういいますか？」

「えっ？……」

「私はいろんな女性を見てきました。あなたはその中でも3本の指に入る美しさだ」

「私が……美しい……？」

「誰があなたを醜いつていのですか？」

「あつ……いえ……同輩達が醜いものは早く去れ！……と」

「あつははは……それは皆あなたに嫉妬しているんですよ」

「えっ？……私に嫉妬？……でもそんなこと……」

「あなたが、自分で自信を持たなければどうするんですか」

「私って……そんなに……」

「そうですね、同輩の嫉妬をそのまま受け入れてしまつて自分をおとしめているのですよ」

「私、殿方とお話するの生まれて初めてです。」

「こんなことならもつと前から積極的にお話すればよかつた」

「今からでも遅くありませんよ」

「いいえ……もう遅いのです……あつ、家定様……一つお教え願えませんか」

「はい、なんでしょうか」

「先ほどおっしゃられた、3本の指に入ると言われたあとのお二方とは？」

「ああ、そのことです。一番目は私の母です。もう幼いときに亡くなってしまうわれたが、

子供心にわたしの母は仏のように優しく美しかった記憶があるのですよ。

……そして、もうひとり私のもとても大切な女性だった……」

「だった？……」

「ええ……くそつ……」

と木の幹を素手で殴る家定・

「殺されたのですよ……」

「えっ？……」

「ついこの間殺されてしまったのです……『西面宿那』という化け物に！」

呆然と立ち尽くす式部……そのあまりにも哀しい家定の後ろ姿に、はっと気づくと慌ててきびすを返して走り去った。

「あつ……もし……」

まだ名も聞かぬ女性……振り返るともう姿がみえぬ。

二人の運命の出会い、決して偶然とはいえぬ仏の厳罰、少しでも心引かれた二人がこの後対決することになるなんて……。

やめようとする式部の心に巢食う魔、

あまりにも人の魂を喰らう時の美味に心の籠が閉じようとはしない。

もう式部自身がどうにもならぬ心の中の魔の誘い……。

こうして最後の対決に向けての二人のつかのまの逢瀬が序曲となつて舞が進む。

そして、最後の舞は圧巻だった。背後に雷光の青白い光が剣を振るう家定……

相対する般若の両面宿那……この二人の影絵の対決の舞……

見ているものすべてが……あの会場にいた貞子たちが……言葉もなく呆然と見とれていたのだ。

舞っていた沙希自身も崩れるように倒れこむ。慌てて舞台に駆け上がる高弟達……。

抱え起こした沙希に

「小沙希ちゃん……うち、こんな哀しい舞見たの初めてです。

那賀杜姫はんが、あんたにこの舞最後の最後まで小沙希ちゃんに伝えようかどうかを迷っていたこと判る気がするんです。

那賀杜姫はん、小沙希ちゃんが急に消えてしまったこと本当はホツとしたんじゃないんですか。

そやから良子はんに舞を見せはった、まさか現代で良子はんが小沙希ちゃんに

その舞教えることになろうとは那賀杜姫はんも思ってはみなかったんです。

なあ、小沙希ちゃん。この舞どうするつもりえ」

「えっ？お婆ちゃま……それって……」

「小沙希ちゃん……この舞、舞うことやめまへんか？」

「お婆ちやま！……それはどういうことどす……」

「へえ、うちこの舞、心の底から舞ってみたい……そうおもつほど未だかつて見たことおへん舞どす。」

けんどのこの舞どこがおかしおす。人の理性を無くす舞……そう思われるんどす」

「やはり、お婆ちやま。お判りだったんどすね。」

うち、この舞を舞っていてようわかつたんどす。この舞には魔が取り付いているって……」

「えっ？魔が……それじゃあ……小沙希ちゃん！」

「いいえ、お婆ちやま。うち、この舞止めまへん。」

那賀杜姫様がうちのために作ってくらはった舞どす。」

その舞に巢食った魔、うちは許しまへん。きつちり形つけさせてもらいます。」

うち、今怒りで一杯どす。けんど怒りで対処したらうちの負けなんどす。」

そやから、うち今から比叡山で禅を組んでこよう思てます」

「小沙希ちゃんが比叡のお山で禅を組むのうち反対しまへん。」

けんど小沙希ちゃんの力に対抗できる魔……大丈夫どすか？」

「へえ、この舞うちの手の内にいれてきます。」

このままではうちの舞やいうて南座で舞うこと出来まへん。きつちり落とし前つけてきます」

「なんだかあきあさん……怖い！」

「そうでしょ。普段は優しすぎるほど優しいあきあだけどあきあを怒らして無事だった魔はいないの。」

怨霊だった将門様は心を入れ替えたし、あの元方は天で裁きをつけたわ」

「あきあさんて、凄いの一言ですね」

「だから判るでしょ。あきあのマネージャーをしていると気が休む暇がないって」

「ええ、身にしみて・・・」

「こら！・・・何を納得しているのよ！・・・」

あきあのその言葉になんだか久しぶりに、この稽古場に笑みがもれる。

こんな静かな比叡山にくるのは久しぶりだった。シーンとした奥の院に降り立った沙希は

「誰だ！」

と誰何された言葉に

「天鏡お兄ちゃん、私です・・・」

「おお・・・その声は沙希・・・」

「お兄ちゃん、お爺ちゃまは？」

「今、修業の坊主どもに般若心経を書かせて居られる」

「じゃあ・・・お邪魔じゃあ・・・」

「いやいや、沙希をこのまま帰らせてしもつたら怒られるのはわしじゃ」

「では・・・」

と奥の院の本堂に上がる沙希。

十数人の僧侶が武者僧達に囲まれながら熱心に写経をしており前で僧侶達に向いた蓬栄上人が厳しい顔つきで見つめていたが入ってきた沙希を見て

「おお〜」

と声をあげて一度に柔和な顔になる。

僧侶達は入ってきたのが女性だったのに驚き、

そこにいた僧侶全員が女人禁制のこのお山にニコニコとこの女性を迎えたのにはまた吃驚したのだ。

「お爺ちゃま、この間はご苦労さんでした」

「おほほほ・・・沙希よ。あんな凄い試合を見せられた我等、しばらくは呆然としておったわ。

その上、武者僧達もその話で寝る間もない有様じゃ・・・のう、お前達・・・」

「はい、宮本武蔵殿との試合もさることながら、

希佐との3番勝負・・・今思い出してもワクワクしますわい」

「沙希よ、わしはあんな晴れがましい場所は苦手じゃ。ほんに身体もやせこけてしまったわ」

大げさにいう天鏡にぷつと吹き出す武者僧達。

「あら、そんなことをいうとこれからも御指名しますわよ。天鏡お兄ちゃん！」

「さ・・・沙希・・・それだけはもう止めてくれ〜・・・」

悲鳴をあげる天鏡に噴出す沙希やお上人と武者僧達・・・

その様子に目を白黒するのは筆をもったまま見つめる多くの修行僧・・・

だが蓬栄上人はにこやかな表情を改めて沙希を見つめなおして言う。

「沙希よ、今日はお前から漂うその暗雲はどうしたことじゃ」

「はい・・・」

と答えたのは舞のこと。・・・

「その将門殿の夫人から伝えられた舞から魔を悟ったのか・・・」
「はい、その魔、しぶとく舞いにしがみつき舞を舞うものの生気を奪います」

「しかし・・・舞に魔が宿り、それに沙希の術に対等に戦える魔とは？」

「はい、早良親王の使い魔・・・」

「何！早良親王・・・あの崇道天皇のか・・・」

「そうです。ですが崇道天皇が蘇ったのかどうかはわかりません。ただ、私の舞にしがみつくあの魔は確かに崇道天皇の使い魔です」

「お上人様に伺います」

「なんじゃ、天鏡！」

「その崇道天皇のことお教えてください」

「その方も知らぬか・・・」

「お爺ちやま、私が説明いたします」

と振り返って

「平城京と平安京との間に長岡京という京の街が作られるとき造営工事を検分中の藤原種継が、

賊に弓で射られ翌日死亡するという事件が起きました。

取り調べの結果、家持・五百枝王・紀白麻呂・大伴継人・大伴永主・林稻麻呂らによる

皇太子早良親王を担いだ謀反であると断定されたんです。

早良親王は乙訓寺（現長岡市今里）に幽閉され、

抗議の断食をし、10日余り後、船で淡路に移送の途中、

高瀬橋（河内国、淀川の橋）のあたりで憤死し、淡路に埋葬されたのです。

792（延暦11）年6・10、陰陽寮で卜定したところ、

安殿親王の病が早良親王の怨霊の祟りと判明します。

又、延暦16年5月に宮中に怪異があつて、早良親王の魂鎮めが行われます。

延暦18年2月、賀美能親王元服の時、再び早良親王の魂鎮めをし、800（延暦19）年7月、怨霊鎮魂のため早良親王を崇道天皇と追称したのです。

しかし、天皇家に仇名す怪異が全て崇道天皇の仕業でないのはこの後、崇徳上皇という大魔王があらわれることでわかっています

「ふゝ・・・」

と天鏡は息を吐き、

「平将門といい、藤原元方といい怨霊相手に戦ってきた沙希にまだ戦いをせよと仏は言いますのか・・・」

嘆く天鏡に

「お兄ちゃん、崇道天皇が復活したかはまだ不明ですわ」

「おおそうか、では使い魔ごときに沙希が・・・」

「いいえ、崇徳上皇という大魔王はいますが、崇道天皇も又魔王に違いがありません。

使い魔とはいえその力、わたしもかなうかどうか・・・」

「何！そんな力を持っているのか」

「はい・・・だからここにきました」

「沙希・・・それは・・・」

上人の顔をじつと見つめ

「古に比叡の山奥に魔が住み着いていた洞窟・・・」

「沙希！どうしてそれを・・・」

「阿弥陀如来様にお聞きしました。そこでの修行死ぬほどつらい・・・
・そうも言われました」

「如来様のお言葉・・・聞いてやりたいがそうはいかぬのじゃ」
「お爺ちゃま、それはどういことですか？」
「行けぬのじゃ、そこに行こうとしてもいけぬ」
「それはいいのです。私にはこれがありますから」
と両手を差し出すとその掌30cm上にあらわれる龍の鱗。

『どっ』と驚く声の何も知らぬ修行僧達、
おどおどした目で回りにいる武者僧達に視線を向けるが素知らぬ振り
の武者僧達。

もっともつと驚けばいいのだ。

こんな力を持つ女性を目の当たりにする幸せは何ものにもかえられない。

「おお、それは緋龍殿の鱗・・・」

「はい、この鱗さえあれば闇に隠れている魔の洞窟にいけます」

「沙希よ、そこでどんな修行をするつもりなのだ」

「三日三晩の禅修業、・・・この間の禅で得た通力をもつと鍛えなおしたいとおもいます」

「沙希よ、通力もいいがお前の陰陽道の術でもかなわぬのか」

「いいえ、お爺ちゃま。私の術の力このようなことで使いたくないのです」

「はて・・・それはどういことかな？」

「はい、次元の異なった場所での戦いならいざしらず、この地での戦い私の術では強すぎるんです。

菩薩様に私の力を制御できるよう世界中の女性達のDNAに書き込んでもらって少しは弱くなった力、

でもその力、通力で見るととんでもない力・・・震えがきたぐらい

です」

「そんなにか」

「はい、でもそれはこの現世で力を使って戦う場合です。戦うことさえしなければ術は使えます」

「沙希よ、何かとんでもない事になっておるのじゃな」

「はい、まったくこんな力・・・人が持つものではありません」

「うおっほほほ・・・それは沙希じゃからそう思うのじゃ。

優し過ぎるほどの、おまえじゃから・・・のう天鏡よ」

「はい、強くて優しい、それは沙希だから他のものだったらこの世、どうなったかわかりませぬ」

「それ、買いかぶりっというものよ、お兄ちゃん。ねえ、武者僧のお兄ちゃん達・・・」

「いいや、それが沙希だからっていうのは、誰もが思うことだよ」

「もう・・・それなら、今度きたとき我儘いつちやうから」

「ああ、どんどん言ってくれ。お兄ちゃんなんでも聞いちゃうよ」という言葉に

「もう・・・」

といて膨れる沙希。

そんな沙希にお上人が

「沙希よ、そこにはわしらも行けるのじゃな」

「はい、でも洞窟の中には・・・」

「それはわかっておる。・・・わしは洞窟の前で読経をあげたいのじゃ。

そうすれば沙希と共に修行をしていると言つ気持ちになれる」

「けれど、お爺ちゃま、その身体で三日三晩の禪のつきあいは・・・」
「なあに、疲れれば休めばよい」
そういつて笑う蓬栄。

「その変わりつといつてなんじゃが、笛を聞かせてほしい」
「わかりました。それでは『翔龍丸』を・・・」
といつて立ち上がって本堂の縁に立つ沙希。

身の内から取り出した横笛『翔龍丸』を唇にあてる。
ゆっくりと・・・それは素晴らしい音曲がこの比叡のお山に流れていく。

それと共に小さな光の玉が数限りなく天に上っていく美しい情景。
この比叡山で初めて吹く『翔龍丸』によって古より留まっていた魂が
天に上っていくのだ。こんな情景見たことがない修行僧達だったが
自然と手を合わせて声を合わせての読経となって音曲とともに奥の
院に流れていく。
そして彼らは見たのだ。この少女の姿と重なって菩薩様の身姿が見えるのを・・・
勢い目を閉じ読経の声が大きくなった。

やがて笛の音が消える。清々しい風がこの奥の院の本堂に吹き込んでくる。

「おうおう・・・その退魔の笛のおかげでこの地に留まっていた御
霊が天に帰られた。」

「・・・沙希のおかげじゃ」
「いいえ、これは『翔龍丸』の力です」

「お・・・お上人・・・様に・・・お伺いします」
「なんじゃな」

「この方に・・・被さるように・・・仏様の身姿が見えたのですが・・・」

「ほう・・・お主たちにも見えたか」

「では・・・」

「そうじゃ、この沙希には仏がついておられる。さきほど見られたのは菩薩様じゃ」

「ヒエ〜〜・・・ぼ・・・菩薩様〜・・・」

「お爺ちやま、私その菩薩様に叱られましたの」

「何？・・・菩薩様にか」

「はい、あまりにも無理をいつから天から離れられないって愚痴られました」

「おほほほ・・・菩薩様も沙希には手を焼いておられるか」

「嫌な、おじいちやま」

「この様子を伺う僧侶達、奇異なというより驚きで肝をつぶしているのだ。」

「けれど、代わりに私を見守ることになった阿弥陀如来様に平安時代に消えてしまった『ましる』という私の式を

師匠の清明様を探すようにと言われたおかげで私のもとに帰ってきました。

大事な大事な私の友・・・もう凄くうれしくてかないませんでした」

「といって両手を前に持っていった。」

「ま・・・まで、お前の式・・・この結界のなかでは・・・」

「大丈夫です。『ましる』は私が聖結界を与えた式・・・」
「といってましるを呼び出した。」

真っ白な短い着物に赤い帯びの少女が光の中から現れた。

「ましろちゃん。ここに居られるのは私のお爺ちゃまとお兄ちゃん達よ。よく覚えていてね」

「ましろといいます。これからどうぞよろしゅうに」

挨拶が終わると

「ましろちゃん、その緋龍様の鱗を持って私をこの比叡山の魔の洞窟に案内してくれますか？」

「はい、たやすきこと。でもあきあ様、そこに行ったら・・・」

「あなたはお爺ちゃまのそばにいてください」

「でも・・・」

「いいえ、もし貴女の身にもし何かあつたら、私は動かせぬ」

「あきあ様・・・」

「だから私を自由に修行をさせてください。あなた達式はわたしの大事な大事な宝・・・」

首を折って両手を前につくましろ、あきあの優しさに何もいえなくなる。

その沙希の優しさ・・・いつものこと・・・といえばそうだが、

その優しさに微笑む仏が感じられるのだ。だから立ち上がると武者僧達に声をあげた。

「お主達何をしてる。急ぎ支度を・・・」

「はっ」

といて本堂をとびだしていく武者僧達。

蓬栄上人にとって思わぬことがあったのは直ぐのことであった。

修行僧とはいえ、全国に散らばる寺の跡取達。

厳しい修行をつけながらも、その身は常に気を配っていた。

武者僧達にもそう申し付けてある。その修行僧達が

「お上人様に申し上げます」

「なんじゃ」

「私もその読経に加えてください」

「私も！」

「私も！」

修行僧全てから声があがった。

「しかし、お前たちは……」

「いいえ、お上人さま。なにもせずこのまま修行を終えて寺に帰っても跡取だと大きな顔ができますが

一生悔いる事になります。聞けばこのお方は仏の力をうちに秘めるお方、

そんなお方の修行を少しでもお力になれば一生の思い出……なにとぞお許しを……」

蓬栄上人、沙希を見ると僧侶達を見て少し眼を濡らしている。

「五分後じゃ」

「えっ？」

「五分後にこの本堂の前に集まるのじゃ、遅れれば置いていく」

「はい」

と飛び上がって部屋を飛び出していく。

「お爺ちゃま……私って……わたしって本当に幸せ者ね。

こんなにみんなの優しさに包まれて……」

「なにをいうのじゃ、われ等こそ沙希に大きな優しさをもたらしている。

その優しさがあればこそ沙希は強い！誰にも負けぬ力が出るのじゃ」

「お爺ちゃま」

と蓬栄上人の背中に抱きつく沙希。

「うち、この修行・・・絶対やりとげるさかい、お爺ちゃまは無理しちゃあかんえ」

「わかった、わかったよ・・・沙希！」

この様子を本堂の陰から見ていた天鏡・・・『グスン』と鼻を鳴らしてから月を見上げる。

大きな目からは大粒の涙が流れていた。

緋龍様の鱗を片手に提灯を掲げて先頭を歩くましろ。

そのうしろには蓬栄上人の手を取る沙希が続く。あとは天鏡達武者僧と最後は修行僧達だ。

ましろがピタツと立ち止まって

「このモヤの先が魔の洞窟への入り口です。魔が張った結界がこのモヤです。

これから離れずわたしについてきてください。

そうでないところのモヤの中、迷子になってしまいます」

白いモヤをゆっくり進むましろ、あとを離れぬよう続く僧侶達。

どれくらい進んだのかパツとモヤが晴れる地点に進み行った。

「あきあ様、ここが魔の洞窟です」

「わかつたわ……ましろちゃんちよつと……」

と行ってみんなから離れたところで

「ましろちゃん、お願いがあるの」

「はい、なんでしょうか」

「わたしのお爺ちゃまの蓬栄上人様、元気なようであつてももうお年です。」

でも、私のためなら無理をされるのがあのお方です。

だからころあいを見てましろちゃん、お爺ちゃまを眠らせてほしいの。

そしてそのことはあの天鏡兄さんに沙希にたのまれたからって伝えておいて」

「判りました。……あきあ様……」

「なあに……」

「必ず……必ず……ご無事で……」

「判っているわ、私、今まであなた達の期待を裏切ることあつて？」

「いいえ」

「そうでしょ。それにわたしにはこれからも多くの使命が待っているの」

「わかりました、あきあ様。これからはもうグダグダ申しません。

ですから、3日後にはご無事なお姿を」

「はい」

と行ってニツコリと笑う。

ゴザをひき祭壇が作られる洞窟の前、全てが準備されたとき

沙希はみんなに向けて礼をすると洞窟へと進み、

2、3歩中に入るところを向き結界を張ってしまった。

走って洞窟に向かうましろ……だが結界に跳ね返えされてしまう。

それを見て沙希が何かを話していたようが最後には手を振って洞窟の奥に入ってしまった。

僧侶達全員が声を合わせての読経・・・荘厳な時がこの洞窟の周りに流れていく。

洞窟の入り口の壁に背中を付けて・・・時々洞窟の奥を覗く可憐な少女の姿・・・式とは思えぬましろの姿。

時は思えば思うほど中々進まない。時々小さな悲鳴が洞窟奥から聞こえてくる。

ドキツとして両手を結界につけて奥を目を凝らしてみているましろ。

聖結界の持ち主だからこそ沙希の張った結界に平気に触れられるのだ。

闇が明けようとするとき、少しづつ景色が変わってくるのに気づく僧侶達、

三日三晩の読経は途中から交代制に切り替えた。

これはましろの術によって蓬栄上人を眠らせたことがきっかけだった。

その後、天鏡に沙希の言葉を添え、お上人を術で眠らせたことを伝えてから

読経は昼夜おこなう必要はなく、体力を無くすから昼間だけでよるしいです。

という沙希の言葉をも伝えた。

こんこんと眠るお上人は木陰にひいたゴザの上の布団に寝かせてい

た。

どうしてこうなったかは天鏡とましろの言葉で全員に伝わっている。

「だがな、ましろ殿。沙希が言った昼間だけでよいということはいずれには出来ぬ。

お上人様が目を覚まされたらお怒りになるのは必定」

「ではどうするといわれるのですか？」

そつましろに言われて

「うゝん」

と唸ってしまふ天鏡。

「天鏡様、よろしいでしょうか」

と武者僧の一人が声をかける。

「なんだ」

「はい、沙希がいう昼間だけの読経は論外ですが我ら武者僧は18名です。

そして今読経をあげている修行僧も18名、

それを3組に分けてたとえば6時間おきに交代すれば・・・」

「なに・・・交代とな・・・うゝん・・・よし、すまぬがましろ殿、

お上人様をおこししてくださらぬか」

おこされたお上人・・・訳を聴かされての怒り並々ならぬものだ。

・・・天鏡は頭を下げるだけで叱られるまま。

そこに飛び込んできて天鏡の横で同じように頭を下げるましろ。

「それは何の真似だな、ましろ殿」

「天鏡様を・・・天鏡様を叱らないでください。

私のような式の言葉信じられないでしょうが・・・」

「待て！．．．ましろ！」

ビクンと飛び上がるような激しい怒りの言葉、
もっともつと縮こまってしまつましろ。

「今．．．．なにを言った．．．．何を言ったのだ．．．．」

「は．．．はい、．．．私のような式の言葉と．．．．．」

縮こまったましろの頭近くにお上人の足音、そこで座る気配．．．．
。恐ろしさに身が縮むとはこのことだろう。

「なあ、ましろや」

とうつてかわつて優しい言葉が頭の上から聞こえる。

そつと見上げるましろの目に慈悲深い上人の目がましろを見下ろしているのだ。

「わしが叱つたのはほかでもない。ましろが自分をおとしめたから
じゃ。

わしは式を．．．．沙希の式を一度も侮つたことなぞないぞ」

「あつ、．．．．はい．．．．お上人様．．．．私が悪うございました」

「判つてくれればそれでいい。ましろはよいこじゃ。

．．．．して沙希はなんといつていたのじゃ」

「はい、あきあ様はお上人様は元気なようであつてももうお年です。

でも、あきあ様のためなら無理をいとわないのがお上人様です。

だからころあいを見てお上人様を眠らせてほしい、といわれました。

そしてもうひとつ、読経は四六時中じゃなしに昼間だけでいいと」

「沙希らしいのう・・・天鏡、お前はとうするつもりであった」

「はい、いくら沙希の言葉とはいえ、昼間だけの読経は論外です。私にはどうしたらいいか判らなかつたのですが、

武者僧から人数を分けて読経すればよいのではという声があがりました」

(まあ・・・この人は・・・)

ましろにとってこんな馬鹿っ正直な人ははじめてだった。

「そうか・・・こんなこと考えるのが苦手な天鏡じゃからのう」

というお上人の声だが、天鏡を見つめる慈悲深い表情はましろが見ていてもなにか、

羨ましいほどの愛情が溢れていた。

「天鏡よ、今から武者僧を3組、修行僧を3組にわけて武者僧と修行僧を組み合わせる3時間毎に読経を変わらせよ」

「はっ」

「わしは後で沙希に怒られぬよう、もう決して無理はせぬ。

その代わりとって何じゃが、ましろよ、そなたに頼みがある」

「はい、お上人様、どのようなことで」

「読経している以外の僧侶達を眠らせてほしいのじゃ」

「はい」

「考えればこれは沙希の要望・・・決して無理はするな。無理をすればどこかが破綻する。

そう考えるのが自然じゃ・・・ましろの眠りはどうなのか？」

「いいえ、式に眠りはありません」

「無理はしていないのじゃな？」

「はい、決して……」

「それでは悪いが3時間経つ5分前に次のもの達を起こしてくれぬか。

そして、それまでの者達を眠らせてほしい。このもの達全員をましろに預ける」

それだけましろに責任が被さってきた。

でもこれだけ信頼されては、ましろにとって嬉しさのほうが先にくる。

先ほど天鏡がくれた『目覚まし時計』というものの、機能の講釈をうけて目の前に置いた。

『カチコチ』と時を刻む音が平安生まれのましろにとって、その物珍しい文明の利器が弾むような嬉しさを伝えてくる。

こうして時が流れていく。無理はしないと云ったお上人は自ら時がくれば床につくようになった。

僧侶達も大変だが眠りをとれば、もともと元気な若者達だ、唱える読経の声が洞窟奥の沙希に元気を与えているようだ。

もう洞窟からは沙希の叫び声一つ聞こえなくなった。

静まり返った洞窟は不気味だが、魔の洞窟の結界のようだった白いモヤはすっかり晴れ、

下界を望めば奥の院が目の下に見えていた。

そして、とうとう三日三晩の修行が終わる時が近づいた。1時間前には全ての僧侶をおこし、

こうして西から陽が上がってくる頃ついに沙希がはった洞窟の結界が消え去った。

まだ薄明るい光が差し込んだ洞窟に歩む足が見える……
そして皆はみた、

沙希の額に第三の目……アジナー・チャクラ天眼通が開いた沙希が洞窟を出たのを・

額の第三の目と共に二つの目が開いてニツコリと笑ったかと思うと、
その天眼通が閉じ跡形もなく消えうせたのである。

「あきあ様……」

ましろが走って沙希に飛びついたのだ。まったくそんな姿、
式とはいえぬ人間らしさが滲み出ていた。

でも皆は知っていた。お上人様の言われた事をきっちり守ってい
たましろが

言つに言えぬ苦しさ哀しさを漂わせていたことを……

「あきあ様、もうこんなことお辞めください」

「わかったわ……ましろちゃん。もう二度としないわ。ううん・

・する必要もなくなったの」

「えっ？」

「この日本に巢食う魔の要因……全て消し去ってやったわ」

「沙希よ……」

「お爺ちやま……」

「それはどういふことなのじゃ」

「はい、通力は修行によって飛躍的に伸ばされました。

その結果、今日覚めようとする崇道天皇の魔の要因を消し去りまし
た。

そして大魔王といわれる崇徳上皇も……人の手によって壊され
た封印……

そこから這い出た魔もその微かな痕跡を追って人に乗り移っていた

魔そのものを消し去りました。

これからのことはわかりませんが、今の世に出た魔は余程のことではない限り全て消え去りました」

「では、沙希の舞の魔もか」

「いいえ、やつは私がああ舞を舞わぬ限り出てこれないし気づきもしません。明日の南座の公演の中で対決します」

「大丈夫なのか？」

「はい、親玉が消え去った今、奴ははぐれ魔となりました」

「じゃが油断は・・・」

「はい、それも重々に。それに・・・この修行中、阿弥陀如来様が私のそばに・・・」

「なに？阿弥陀如来様が・・・？」

とお上人が叫んだとき沙希は沙希でなくなっていた。

1mも浮いた沙希の表情はそれはこの世のものでない微笑がうかび二重写しのように阿弥陀如来の姿が現れたのだ。もうみんな手を合わせて仰ぎ見るだけだ。

神々しいその身姿から声が漏れた。これは沙希の声ではない。

「爺よ・・・沙希の爺の蓬栄上人よ」

「は・・・はい・・・」

「そなたが沙希を思う心、そして式を思う心見させてもらいました。

さすがはこの比叡山での上人としての勤め、さすがですね。

天鏡達、武者僧よ、よくぞ兄としての心の支え勤め上げてくれました。そして、修行僧の若者よ」

自分達が役立つたかどうか判らない修行僧達・・・

「お前達のこの3日間は、これからのお前達に得難いものを残しているのですよ。」

そして、ましろよ。久しぶりですね」

「はい、・・・如来様にお聞きします」

「なんじゃ、ましろ」

「私は本当にあきあ様の御役に立っているのでしょうか？」

「仕方がないやつじゃ、ましろよ。」

お前がこんなにあきあの支えになっているのがわからぬか・・・お前達もじゃぞ、

あきあの身のうちにいる式神たちよ」

『ははあゝ・・・ガオウゝ・・・キエゝ・・・』

そんな声が沙希の体内から聞こえる。

「そなた達はあきあの宝じゃ、そしてこれからもあきあをしつかりと守るのじゃ」

そう言っつて消えていく。

地上に降り立った沙希・・・フラットしたがましろが支える。

「あつ・・・お爺ちゃま・・・これを」

とポケットからだす紙の束、

「なんじゃな・・・これは・・・」

「はい、明日の南座の公演のチケットです」

「わし達を招待してくれるのか」

「もちろんです。そこの修行僧の皆さんの分もあります」

『ウワ〜・・・』と思わず声をあげてしまつ修行僧達さすがは現代の若者だ。

『ジロっ』と見つめる蓬栄上人から思わぬ言葉が・・・
「せつかくの沙希の招待じゃ、いかねばならぬのう」といつてから

「修行僧のお前達は荷物をもつてこの山を降りるのじゃ」
「お・・・お上人様・・・それは・・・」
てつきり山を追い出されるとおもつたらしい・

「うおっほほほ・・・お前達は何を聞いていたのじゃ。
先ほど如来様が言われた事聞いていなかったのか？」

「いいえ、聞いておりました」
「では、わかるであろう。この三日間の読経の経験、お前達には得がたいものを得たはずじゃ。

これ以上のわれ等が行なうなまくらな修行は無駄じゃ。ただお前達に言うておく。

この沙希を知つた幸運を忘れるな。そして寺に帰つてもこの三日間のこと肝に叩き込んでおけ。

わしから言うのはそれだけじゃ。あとは天鏡・・・おまえの役目じや」

天鏡はこの三日間でこの地に増えた用具をかたづけさせている。

「ではましろちゃん、私の中に・・・」

「はい」

「待て！ましろ・・・わしがお前に言ったことゆめゆめ忘れるな」

「はい、お上人様・・・では・・・」

といつて沙希の身体に入つていく。

「それでは、お爺ちやま・・・帰ります。明日必ず・・・」

「おおう、皆を引き連れて必ずいくわ」

「峰巖和尚様も宋円和尚様もいらっしやるはずですから・・・」

「おおう、それでは旧交を温めずばなるまい」

「では」

といて飛び上がった沙希に

『ウオ~~~~』と声があがる。今まで見せてきた沙希の力の集大成のようになつた

飛行術・・・まさか、空を飛んでいかれるなんて・・・

修行僧に強烈な印象を残して沙希は去つた。

第二部 第十七話

家に帰り着いた沙希が最初に言った言葉が

「ああ、お腹がすいた」

だ。どれほど心配したのか、

祖母の泣き笑いの顔なのに最初にそんな言葉とは皆が怒ること怒ること……。

だが沙希には姉達を取り込む、一つの言葉を持っていた。

「ねえ、温泉に入りましょうよ」

だった。女性は温泉に弱い。おまけに沙希と一緒に入れるとするなら尚更だ。

いつもは一人の沙希に誘われたら怒りも萎んでしまう。

・
ついこの間見つかった綾小路家の地下200mに作った温泉施設・

・
そこから又、沙希の術によってこの地下の温泉施設に湯が引かれたのだ。

綾小路家の屋敷は全て取り壊され平地に整備され、

看護師寮や看護師学校の設計が女性設計士によって作成されようと
していた。

勿論、沙希の考えも考慮されているが看護師達がプロジェクトをつくって自分達の考え、

要望を建設の中に加えられていつている。地下の施設もわかりだ。

綾小路家の地下とこの地下とを結ぶ道路と動く歩道のような物の建設も考えられている。

それにこの源泉も澗と明子が徹底的に調べつくした結果、早瀬の里の温泉成分と全く同じものと判明した。

本当にこの温泉の効果つたら・・・この間、道でころんでしまった薫が・・・

助けられて地下の病院へ・・・

ちょうど来ていた明子が検査しても股間からの出血も激しい・・・

止める暇なく薫を抱きかかえて部屋を飛び出す沙希・・・

行ったのは地下の温泉・・・服をきたまま飛び込んだ二人。

追いついた明子や看護師達が見たものは・・・

沙希にお姫様だっこをされて服のまま温泉の中でニコニコ笑う薫の姿。

もう一度診察すればそんなことあったの？という平時の症状、流産の危機など一つも残っていない薫の身体、

そしてもう一つ・・・温泉に入るのもいいが飲むのも良いということも判った。

美顔にもいいし内臓にもいいとなると舞妓や芸妓達濃い化粧をする子達が

毎日のように温泉に入りに行くようになった。

飲み水代わりの温泉水もそのまま飲んでも生暖かいだけで

味も水道水と比較にならぬほど美味いとなると冷やせばいいし

お茶として使ってもおいしいのだ。

こうなると飲料水として洗顔水として東京の早乙女薫事務所や（株）オクトくやレストランに・・・

そして京都の家は勿論、京都支店にも毎日のように運ばれてくるようになった。

特に操の東京のレストラン、温泉水を置きだしてからいつのまにか女性客が増え、何回もお水をお代わりするようになった。

それというのもいつのまにか女性達の間であの水をのんだら肌もしっとりするし

ニキビも消えた。という噂が口コミで広まったからだ。

レストランの女性従業員や東京事務所の女性社員などもうすっかり飲料水はこの水しか飲まなくなったし、

京都支店の女性達もわざわざペットボトルで家に持ち帰るようになった。

外人の女性達は変な添加剤が入っている化粧水よりもこの水だけで化粧水代わりになり、

日焼けも防止できると発見して小瓶にわけて化粧品として使うようになった。

こうなると化粧代も減るし、もしかしたら営業をするたいへんな武器になると彼女達は計算するのだ。

このことはケイトやゆりあによって京都の家に伝わり、化粧をするのが商売の圧絵や薫、そして沙希や麗香、ひづるにも伝わって

化粧品として愛用することになった。

杏奈や里のメイクの女性も化粧が乗りやすいと喜んでいる。

勿論この家や地下で働く女性達にも伝わり、又舞妓や芸妓にも愛用するものが増えた。

こうした騒ぎをよそに明日行なわれる南座の公演、皆と温泉に入っ
た後、

三日三晩の修行の後の減ったお腹には贅沢過ぎる程の料理を残らず

平らげた沙希、
ほっと一息ついてから着替えにかかった。

杏奈に着付けてもらう舞妓小沙希の艶姿、お稽古場に礼をして入っていくのはいつものことだ。

「まあ、小沙希ちゃん。ここに座ったらええ」と自分の前を示す祖母。

「お婆ちやま、小沙希無事に帰ってきました」

「おお〜・・・おお〜・・・」

「今回の修行でもうち、たくさんの人に迷惑かけてきました。

だから、明日お爺ちやまもお兄ちゃん達・・・

それに手伝ってくれた修行僧のみなさんをご招待してきました」

「そうかえ・・・そうかえ・・・明日、会ったらお上人はん達にお礼を言うときますさかい」

「ありがとうございます・・・お婆ちやま」

「で、小沙希ちゃん。その格好・・・舞のお稽古でもするんかいな」

「ううん、明日の公演までうち、舞は封印どす」

「だったら・・・」

「へえ、よう考えたらうち明子先生とこも行ったことおへん。

それにこの京の街を歩いて回ったこと数少ないんどす。

お婆ちやま、夕方までに帰ってくるさかい、出かけてもええ？」

「しょうがない小沙希ちゃんえ、明日があるさかいゆっくりしたらええのに」

「ううん、うちじつとしてるの出来へんさかい・・・」

「そんなら、一つだけ言うこと聞いてちょうだい。誰かを一緒に連れていかな許しまへんえ」

「へえ、けんどのいるのは杏姉だけどす。瑞姉とゆり姉は撮影所に行つとるし……」

「ちようど、さつき京子はんと智子はんが帰つてきたえ」

「えっ?……京姉と智姉が?」

お稽古場の廊下に座る二人……ニツと小沙希に向かって笑う二人

「ひゃ……京姉も智姉もこの間の試合の時以来やおへんか」

「うん……ちよつとね……」

「それより、沙希。出かけるんでしょ。舞妓さんに案内される三人の旅行者……いいじゃない」

「でも京姉も智姉もマスコミには有名な女性え」

「そんなことどうにもなるわよ、一般の人さえわからなかったらいいんじゃない?」

「わかりました、ほなら出かけまひよか。お婆ちやま……行つてきます」

「早うお帰り……」

「へえ……」

という声を残して姿を消す。全く風のような子だ。

小沙希を先頭にその後ろを歩く杏奈に京子と智子……

そして、その後ろから番記者がゾロゾロとついてくる。

「ねえ、沙希……あれ!」

「へえ、判ってます。この間の舞の会よりうちのこと、もうばれてます」

「じゃあ……それだったら……」

「いいえ、記者はん達はうちに話し掛けてきまへん」

と、いって挑戦の話をする。

「へえ〜・・・面白いことやってんだ」

「へえ、そうです。今のうちに話し掛けることは挑戦権を失うことになるんです」

と言ってから素人の女性達に対する挑戦のことも話す。

「そんなこと・・・大変じゃないの？」

「うちにとって思わぬことでした。」

けんど景山プロデューサーや山内プロデューサーが乗り気になってしまわれて・・・思うたらうち大変なんです。

・・・ねえ、京姉と智姉・・・うちの手伝いやってくれまへんか？」

「えっ・・・私たちが・・・でもそんなことテレビ局にとって駄目じゃないの？」

「いいえ、うち一人で毎回そんなことできるはずはない・・・」

言うたら、君には素晴らしい力と共に素晴らしい家族がいるじゃないか・・・て言われて」

「それじゃあ・・・」

「へえ、京姉と智姉が頼りなんです」

「わかったわ・・・智子やろうか・・・」

「うん、沙希のためだもんね。でも杏奈は？」

「私？・・・私は駄目！実を言うと馬鹿な事引き受けちゃって・・・」

「杏姉はね、ミチル伯母様の関係でファッション誌に毎週記事を書いているのよ」

「ファッション誌ってどこ？」

と京子が聞く。

そういえばあの時忙しさにかまけて京子に相談しなかったあと思いうす杏奈。

「M誌です」

「M誌？うーん、あの雑誌の方針は結構固いし、
それでいて斬新なファッション性を追求しているから、
杏奈が記事を書いていくのっていいかもしれないわ」
「本当？」

「こんなこと嘘をいってもどうなるのよ」

「やっぱり最初から京子姉さんに相談したらよかったわ」

「相談て？」

「うん、城田さんに京子姉さんに相談しろって言われていたんだ
けど、

忙しさにかまけて忘れていたの」

「だからそれって・・・」

「うん、沙希に着せるお洋服をデザインした場合に作らせるメーカ
ーの選定なの。」

「今迄いろんなメーカーとお話したんだけどどこもピンとこなくて・
・」

「うーん、それは少し難しいわね。判ったわ、少し心当たりがある
ので調べてあげる」

「やったー、もう・・・もっと早く相談しとけばよかった」

と杏奈が喜ぶ。

「それじゃあ、今度は京姉と智姉の番ね・・・そろそろその屈託・
・うちに話しておくれやす」

「それじゃあ・・・」

「判っていたのね」

「あたりまえです。うちを誰や思うとるんですか」

「そうかあ・・・そうだね、沙希には何も隠せないもんね」

「わたし達・・・少し冷静になりたかったの」

「冷静に？」

「ええ、素晴らしいあなたに私自身相応しいかどうか……」
「でも駄目だったわ。沙希との距離なんて置くこと自体、我慢が出来なかった」

「それに……」

「それに？」

「妊娠のことよ。ここにいたら言いたくないことを言ってしまう自分が怖かったの。嫉妬に狂ってね」

「嫉妬？……うっぶ」

と吹き出す小沙希。

「沙希！」

「それ……どういうこと！」

と怒る二人に……

「言っただけじゃない！……」

とズンズン歩き出した小沙希。

顔を見合わせた二人だが、慌てて小沙希を追いかける。そして、その後を追う杏奈。

「ねえ、沙希！」

「それって、どういうことなの？……ねえ、教えて……」

やはり小沙希は二人より2枚も3枚も上だった。

「悪かったわ、沙希。謝るから……」

「ほんとよ。沙希……」

立ち止まった小沙希が

「本当ですか？……じゃあ、うちの言うこと絶対に聞くこと……」

・わかったとですか？」

「ねえ・・・それはどんなこと？」

人差し指で・・・こっちへこいと指し示す小沙希。

耳を持っていく二人に・・・そのうしろから杏奈が恐る恐る近づく。

すると微かな声で

「今晚、二人でうちの部屋にくること。約束しましたえ」

二人とも何のことかわからず呆然と立っていたが

「女好きのうちが、京姉と智姉を十分に可愛がってあげます。絶対約束破っちゃ駄目とすえ」

と言ってからさつさと歩いていく小沙希。もう顔を真っ赤にして顔を見合わせていたが

「待ってよ・・・沙希」

と走り出した二人。人事ながらなんだかドキドキする杏奈。

番記者の中の女性記者達、

それまで固かった先輩の女性記者が沙希の囁きで一瞬にして身体中真っ赤に染め、

女らしい柔らかかさの色気がムンムンとするのを不思議な面持ちで見ている。

小沙希に追いついた二人だがその腕をギュッと抱きしめながら歩きたいと痛切に思うが、

さすがはマスコミの世界で生き抜く二人だ。

後から来た杏奈の両側から腕を通し小沙希の後ろに続いていく。

「ねえ、京姉、智姉。あの事件でうちが得た通力のこと知つたらね

ますなあ」

「ええ」

「それでわかるんどすえ」

「なにが？」

「来年、大きなお腹で京都の家でふうふう言ってる京姉と智姉が・

・

「えっ……」

「本当？……」

「へえ、間違いおへん。男女の双子どす。そやから言つときます。正式ではおへんがお姉ちゃんはうちの妻にまちがいおへん」

「そう……そう思つてくれるの？」

「あたりまえどす……そやけど……うち……」
と何を言い出すかと思つたら

「うち……ハーレムの王様みたいどす」

「もう沙希つたら……」

「王様……結構よ。この先もわたしの旦那様だつたら……ね」

「それ……当たり前どす。妻として一生離しまへん」

「なんか……なんか……とっても嬉しい……」

「私も……」

「それと……」

「まだ何かあるの？……沙希」

「へえ、うちの血を引く子供は全て男女の双子이었습니다なあ」

「うん、聞いたわ」

「そんな妊娠患者がそこらに現れたら？」

「そんなのマスコミのえじきよ……はっ！」

「わかったようどすなあ……つまり、どこの産婦人科にかかってもいいなんてこと出来まへんのどす。」

そやから今日はうちの地下の病院に来てまへんどしたが毎日のように代診に来られる先生がいます。」

遷姉の先輩でこれから行く相良病院の副院長の相良明子先生どす。」

明子先生にはこの間？……」

「ええ。会ったけど話まではしなかったわ」

「だから今から顔つなぎなんどす」

「どうして？」

「お姉ちゃん達が早まったことせんように今から紹介しとくんどす」

「じゃあ……さっき言ったことって……」

「ほんまどす。だから身体をいとうてもらわなかなわんのどす」

もつと自信をもってふらふらするなという意図も含まれているのだ。

相良病院は大きく近代的な病院だった。

その中で舞妓姿の小沙希に通院患者や病院関係者が驚いて見つめる様は

普通の舞妓なら足が止まってしまうだろうが、小沙希は平気で笑顔で挨拶しながら歩いていく。

なんだか一度に病院内の雰囲気明るくなった。

こんなことあつというまに病院内に広がってしまう。病室から見学に出てくる入院患者……

「おい！あれって……普通の舞妓じゃないよ。」

おれファンだからわかるんだ。女優の日野あきあ……間違いないよ」

そんな声の流れ始めたこと知ってか知らずかエレベーターで2階……3階と上がる。4階についてドアが開くと

「あつ、沙希姫様」

と見覚えがある見習看護師が叫んだ。

「明子先生いらつしやいます?」

「ええ……」

といって連れて行かれたのが副院長の部屋だ。

ドアをノックして返事を待ってから少しドアを開けて

「明子先生……沙希姫様が……いえ早瀬沙希さんがお見えです」

「えっ?沙希ちゃんか?……入ってもらって」

弾むような明子の声に

「はい」

と返事をしてから

「沙希姫様……どうぞ」

と自分の立つ位置を変えてから小沙希を中に招き入れ、外からドアを閉めてから自分の用事を済ますために再びエレベーターのボタンを押す見習看護師。

中でどんな話がされていたのか……時が流れていく。

「じゃあ、明子先生。この二人の姉たちのことお願ひしますね」

「わかったわ……あんだ達、一ヶ月後から診察始めるからね」

「わ……わかりました」

「明子先生、ここでいいわ」

「玄関まで送るよ。さつき電話があつたでしょ。
あれ、日野あきあが来た……ていうんで病院内が大騒ぎになつて
いるって報告なの」

「じゃあ、迷惑だったのね……」

「そんなことないわ、婦長達がいうにはなんだか日頃の病院ではな
いって……」

鬱病の患者も……一言も話さなかつた患者もまるで子供のよう
に貴女の姿を追い求めているんだって」

「それじゃあ、病室で握手ぐらいしなくてはね」

「いいの？沙希ちゃん」

「ええ、姉たちがこれからもお世話になるんですもの」

といてエレベーターを使わずにわざわざ階段を下りていく。

まずは3階のナースステーションに入る。

見習看護師達は地下に住んでいるから小沙希、いやあきあの姿は見
慣れているが

初めて目の当たりに見るこの天才女優には言いも言われぬ不思議な
力を感じる。

笑顔で一人一人に握手をするあきあだが、

最後の一人に握手するとき さつと顔色が変わったのを明子も京子
や智子、杏奈も見逃さなかつた。

あきあは小さな声で

「この3階の婦長の荻野弥生さんですね」

いきなり自分の名前を呼ばれて戸惑う婦長。

「黙って私の言うこと聞いてください……」

あなたの娘のカナちゃんの目、このままいくら手術しても良くなり

ません」

「あ……あなたは！……」

「しっ……」

いきなり大きな声をあげた婦長に不信な目を向ける看護師達だが振り向いたあきあの笑顔でほっとあきあについての仲間達との話に戻る。

「一度だけ……一度だけわたしのいうこと信じて明子先生とカナちゃんを連れて

あるところに行ってください」

「あるところ？……で……でも……」

「いいえ、別にあなた達をとって食おうなんて思っていないから」

肩をポンポンと叩いて

「沙希ちゃんの言うこと聞けば……。荻野さん、……幸せね。

私のいうことも信じて今から早退して、カナちゃんを連れてきなさい」

「いいのですか？」

「良いに決まってるわ、さあ……。急いで……」

掴んでいたあきあの手を離して急いでナースステーションを出て行く婦長の姿、

早瀬一族の見習看護師達にはこのあとの展開判っていた。

その後は病室を一つ一つ回り患者達に握手をして回るあきあ。

副院長の明子と三人の姉そして担当の看護師がついてまわっている。

そして、ある患者の枕もとに立ったあきあ。交通事故で植物状態の

少女だった。

この部屋にいるのは父と母。聞けばもう3ヶ月もこの状態だという。

あきあは物言わぬ少女の手を自分の手で重ねて何やら唱えていた。そして、言ったのだ。

「岬ちゃん、もうそろそろ起きるのよ。お友達の秀花ちゃん達お友達が必死にお祈りしている。」

さあ、わたしの声が聞こえたら目をさまして」

この女優なにを言ってるの・・・そんな目をしていた両親・・・その時、信じられるものを見たのだ・

手がピクピクと動き・・・それにつれて瞼も動く我娘。

「岬!・・・」

近寄ろうとする母親を止めて、診察する明子。

「不思議だわ・・・意識がもう直ぐ回復するようよ・・・」

「先生!意識が回復したら岬は?」

「そうねえ、リハビリをして・・・それから退院だわね」

植物状態からあれよあれよと回復する様子・・・奇跡を見た驚きで身体が動かない。

ようやくあきあの手をつかんだ母親・・・なんとという温かさだ。

「あ・・・ありがとうございます。この恩・・・一生忘れません」

「お母さん。何も私の力で奇跡が生まれたものではありませんよ。」

岬ちゃんの生への執念と、お父さんお母さんの我が子を思う心がさせたんです」

と言っていたがこれがあきあのと知っているのは二人の姉と明子だった。

母親の手を振り切るように外に出ようとしたあきあに

「……お姉ちゃん……お姉ちゃん……舞妓のお姉ちゃん……」

と小さな可愛い声が聞こえる。

「なあに?……」

と再び枕もとで京子が用意した椅子に座って再び岬の手を持つあきあ。

「あたたかいわ……やっぱりさつきもお姉ちゃんだったのね」

「どういうことなの?」

「うん、さつきまでわたし眠っていたの。でも手が暖かいから目をさましたの。そうしたら……」

「そうしたら?」

「うん、神様が立っていたの」

「神様って?」

「阿弥陀如来様っていうの」

「それじゃあ、仏様ね」

「そう……仏様……」

「仏様に何かいわれたの?」

「うん、わたしを起こしてくれたお姉ちゃんて、日野あきあって女優さんなの?」

「そうよ」

「じゃあ、お姉ちゃんに阿弥陀如来様の言葉言っておくね」

「いいわよ」

「来年アメリカにお仕事に行くけど、そこでいろんなところがあるんだって……」

でも、それまではおとなしく日本でお仕事しているようにって

「わかったわ……」

「ねえ・・・お姉ちゃんて仏様にも無理言ってるの？」
「どうして？」

「だって、阿弥陀如来様言っていたもん。あきあを見守るってほん
と大変、

菩薩様が天からはなれなくなったのよくわかるって・・・」
「うつ・・・」

と言葉を飲み込むあきあ。

「ぷっ」

と吹き出すのは三人の姉と明子だ。

看護師と両親はこの展開に呆然と見ているだけだ。

「ねえ、岬ちゃん。もうお姉ちゃん行くね。他の患者さんのところ
にもいかなくてはならないから」

「あきあお姉ちゃん！他の人の所にもいくの？」

「ええ、行くわよ」

「じゃあ、知美ちゃんも助けてあげて」

「知美ちゃん？」

「うん、知美ちゃんて私みたいに寝てなかったから

私と阿弥陀如来様のこと聞いていたのに目を覚ますの嫌だって・・・

「どうして？」

「うん、知美ちゃんのお父さん、知美ちゃんの小さいとき死んじや
ったの」

「そうなの、じゃあ、お母さんと暮らしているんだ」

「うん、でもお母さんお仕事ばかりで知美ちゃんのこと全然心配し
てないって」

「子供のこと心配しない親っていないと思うけど」

「うん、私もそういったんだけど参観日にも運動会にも一度もこなかつたんだって」

「お母さんて何しているの?」

「うん、踊りの先生っていつていたよ」

「わかつたわ、岬ちゃん。知美ちゃんとお話してみる」

「本当?・・・あきあお姉ちゃんだったら安心ね」

「だから、今日はしっかり休むのよ」

「うん」

「そして、明日目を覚ましたらお父さんにもお母さんにも元気よく『おはよう』っていつのよ」

「うん、わかつた・・・」

という岬に右手の人差し指を額に当てて真言を唱えた。

眠りにつく岬の手を布団の中に入れてから立ち上がった。

「お父さん、お母さん・・・もう大丈夫ですよ。

あした岬ちゃんが『おはよう』っていつたらしっかり『おはよう』って答えてあげてくださいね」

「あなたって・・・あなたって・・・」

母親にはもう言葉も出ない。

「お父さん、お母さん。よかったですね」

とニッコリ笑うあきあ。

「あなたは・・・ほんとうに・・・」

という父親の言葉にかぶせて

「ね!・・・内緒にね・・・お母さん、お父さん・・・そうしててくださいね」

両親は顔を見合わせた。あきあのいうこと飲み込めたのだ。

「わかりました。けれど・・・これは大げさではありません。
あなたに何かあったら駆けつけるものが2人いると覚えていてくだ
さい」

「あまり大げさに考えませんように」
と行って部屋を出て2階に下りる一行・・・
担当の看護師が自分の持ち場以外の2階まで降りてくる。
どうもあきあと離れ難いようだ。その表情にある恐れと敬いは消え
そうもない。

「まいったわね。沙希ちゃんがいいたら医者なんていらないわ」
「いいえ、明子先生。私が助けられるのは天からの許可があった人
だけですわ」

「えっ？そうなの？」
「誰でもいうことはできないんです」
そういつて入る2階のナースステーション。

挨拶し終わった後病室を回るが・・・ここまでは何もなかった。
「沙希ちゃん、あの部屋よ」

明子が言った部屋の前にすっかりとやつれた一人の女性の姿が・・・
ササッと女性の前にいく沙希。長椅子に座って下を向いていた女性
がその足に驚いて見上げる。

「あっ・・・あなたは・・・小沙希さん・・・」
「あなたが知美ちゃんのお母さん、久美子さんね」

「はい」

「私の舞妓のときの名『小沙希』を知っているのは京舞を学んでいたのですね」

「はい、井上貞子先生には大変お世話になりました。でも若かったのですねえ。」

自分の可能性を見つけるって言うって先生の所を飛び出してしまつて……」

「あなたは知美ちゃんのため身を粉にして働いた。」

自分の流派を立てるために創意工夫を怠らなかつたけど、

それは全て知美ちゃんを育てるためのものだった。

でも知美ちゃんがこんな状態になつてしまつたあなたは舞を捨てたのね。」

そして病院代を稼ぐために2つも3つもパートで勤めることになつた」

「稼ぎは少ないけど、働いたらその分だけ入ってきましたから」

「知美ちゃんはお母さんの苦勞を知らないのね。」

参観日や運動会に来てくれなかつたこと、子供心にショックだったようですよ」

「それは……」

「いいえ、誰も悪くない。何も悪いことをしてなんかいない。」

ただ、少しの行き違い……それだけなのよ」

「うう……」

と泣き出す久美子。

「ねえ、久美子さんはうちのお婆ちゃんに頭を下げること出来る？」

「それは……できません。でもこんな……舞を裏切つた私を決して許してはくれません」

「じゃあ、約束して・・・わたしが知美ちゃんを助けたらおばあちやまに頭を下げるって」

「えっ？貴女が？・・・」

「京姉・・・」

と京子呼び何事か話す。

「わかった・・・まかしていて」

と喋って携帯電話を取り出して階下へ降りていった。

「明子先生！・・・いい？・・・」

「ええ・・・どうぞ」

と部屋のドアを開ける。担当の看護師も明子がいるから何も言わない。

枕もとに立つあきあ、九字をきつてから唱える真言・・・

あれよあれよというまに寝ている知美の頭の上の壁に大きな丸い鏡があらわれた。

あきあの真言は続く・・・鏡が液体のように変化し、

そして見知らぬ風景が・・・現れたのは今ベッドに眠る知美の顔だ。

「あっ・・・知美~~~~！」

叫ぶ久美子だが

「久美子さん、残念ながら向こうから久美子さんの姿は見えません」

「え~~~~」

と嘆く久美子だがしつかりと智子とその身体を支えている。

腰が抜けたように壁に背を預けているのは二人の看護師達だ。

「知美ちゃん・・・知美ちゃん・・・お姉ちゃんの声聞こえる？」

「うん、よく聞こえるよ。お姉ちゃん誰?・・・」

「知美ちゃん、さつき岬ちゃんのお話聞いていたよね」

「あつ?・・・舞妓のお姉ちゃん?・・・」

「そうよ、今度は知美ちゃんの番なの。岬ちゃんはこっちに帰ってきて今よく眠っているよ」

「えっ?・・・そうなんだ」

「知美ちゃんもこっちに帰ってこない?」

「ううん・・・嫌!」

「嫌?・・・どうして?」

「だって、そっちに帰ってもちつとも楽しくないし、

私のこと心配してくれる人って一人もないもの」

「お母さんがいるじゃないの?」

「お母さんって大嫌い!・・・お仕事が忙しいって知美と遊んでくれないもの」

「知美ちゃんのお母さんって何のお仕事?」

「踊りの先生なの」

「じゃあ、知美ちゃん。お母さんが踊りの先生辞めたこと知ってる?」

「えっ?嘘!・・・どうして?」

「踊りの先生って大変なの。一生懸命踊りのこと考えてお稽古して、

毎日毎日、踊りを踊らなければお弟子さんが集まらないのよ」

「どうして辞めたの?」

「だって知美ちゃんこうしてベッドに毎日毎日寝てるじゃない。

身体を拭いたり、おしめをかえたりってこんなことお母さんしか出来ないわよ」

「えっ？わたしおしめ当てているの？」

「そうよ、ベッドを汚さないように・・・お母さんも看護師のお姉さんも大変なんだから・・・」

「わたし・・・死んでもいいって飛び降りたのよ」

「えっ？自分で死のうと思ったの？」

「うん、私さえいなければ誰にも迷惑かけないって思ったの」

「ねえ、知美ちゃん知ってた？」

「何が？」

「あのね、自分で死んだ人は地獄に行くんだよ。」

そして死んでも死んでも地獄の中で生き返って痛い思いしながら永遠に繰り返すの」

「いやあ〜そんなの」

「でしょ・・・お母さんねコンビニやスーパーでレジのお仕事しているって」

「どうして？」

「知美ちゃん病院で寝たつきりじゃない。病院のお金って高いのよ。だから一生懸命働いて病院にお金を払いながら知美ちゃんのおしめ変えたりしてるの」

「私・・・私・・・」

「そうよ、このまま死んじゃったら地獄へいかないといけないし、このまま病院で寝ていてもお母さんにいっぱいいっぱい迷惑かけるの。」

「・・・知美ちゃん、ごめんね。怖いお話ばかりして。」

でも、このままでは皆不幸になってしまうわ。」

ねえ、お姉ちゃんを信じてこっちに帰ってきてくれる？」

「うん、わかった・・・でもどうしたら帰れるの?」

「私の言うことを聞いてくれたら帰れるのよ」

「ねえ、お姉ちゃん。私本当はお母さんの踊りとっても好きなの。お母さん、踊り踊れるようになるかな」

「うん、お姉ちゃんに任せてくれたら大丈夫よ。じゃあ、知美ちゃん目を閉じて・・・そうよ。」

そして、ゆっくり両手を前にあげるの・・・そうよ、そのまま。お母さんのお顔を思い出して・・・そうよ・・・」

そして、ベッドの少女が動く奇跡を皆が目撃することになる。少女のベッドで泣き伏す母の久美子。

「沙希・・・やったわね。」苦労さん

「沙希ちゃん、さすがね」

看護師達の大きな瞳が沙希をじっとみつめる。尊敬と恐れ・・・それは仕方がない。

その時、『コンコン』とドアが鳴らされ

「どうぞ」

という明子の声に入ってきたのは驚いたことに人間国宝の井上貞子だ。

「あっ・・・お師匠様」

と叫ぶ久美子を見無視して知美の枕もとに近づき高弟が持ってきたパイプ椅子に腰掛ける。

「この子の名前は?」

久美子の顔を見ず問い掛けた。

「知美いいいます」

「知美ちゃんか・・・いい名前どすなあ」
「とってから初めて久美子に目を向ける。」

「うち、正直いって砂をかけるようにうちの元から去ったあんたが
どうなるうとかまいまへん」
その言葉に頭をぐつと下げる久美子。

「けんど、こんな可愛い子、路頭に迷わしたらいかんのどす。
久美子はん、あんたもう一度修行しなおす気あるんどすか？」

「あつ・・・はい、死に物狂いで」

「うち、あなたの才能開花するん楽しみに待っていました。
けんど、これからは鬼になってあんたを鍛えます。志保はん達・・・
よろしおすな」

「へえ・・・」

貞子が立ち上がって出て行くこととするのを

「お婆ちやま・・・ありがとう」

入ってきて一度も見ようとしなかった祖母だが一瞬立ち止まって
「小沙希ちゃん、あんたって子は・・・ほんにうちの自慢の孫え」
と振り返らずに出て行った。

残った志保が全てをまかされたのだろう。久美子に声をかける。

「久美子はん、あんた今の家引き払いなはれ」

「えっ？家を？」

「へえ、今家の地下にはいろんな施設あるんどす。
病院施設や保養施設・・・それにあの温泉・・・」

明子先生、知美ちゃんうちに連れて行つたらいけませんやろか」

「そうねえ、超近代病院施設にたくさん看護師・・・

あの温泉に入ればリハビリも早く終わるわねえ。

明日は沙希ちゃんの公演があるから駄目だから今日にも連れて行きましようか」

「そつどすなあ、そう願えれば・・・けど今、澁先生里に帰っていませんえ」

「それは大丈夫よ、わたしが行くから」

ゆつくりと目覚めた知美が最初に探した母の手、

そして舞妓姿の沙希の手をとつてとつても嬉しそつだ。

でも久美子はあれよあれよと決まつていく話に呆然としている。

今の話からしてお師匠様の家はもう昔の面影がないように思われる。

あれから、1階まで病室を見舞つた小沙希達、大歓迎を受けて結局外に出た時は薄暗くなつていた。

番記者達も遠くから見ていてだけで何事もなくUターンだ。

沙希がレストランで食事をしているとき明子がワゴン車を運転して家に入つてくるのが見えた。

迎えに出てきた看護師達、知美をストレッチャーに乗せて久美子と共に入院施設へと運んでいく。

もう一つのストレッチャーには3階の婦長だつた萩野弥生の娘力ナが乗せられ、

弥生も一緒に病室に下りていく。きつちりとした検査も必要なのだ。最後に降りてきた明子についてきたのが3階と2階の担当の看護師達だ。

沙希達の話聞いていて我慢ならず明子についてきたと思われる。

沙希は自分の部屋でゆっくりしてから、祖母との舞い談義・・・コーヒを飲みたくてレストランに上がってくる

テーブルに座っていた萩野弥生が目敏く沙希の姿を見つけたのかとんできて手を握った。

「あきあさん・・・本当に・・・本当に・・・ありがとございまして。うちの子の目が・・・」
最後は言葉にならない。

「よかったわね・・・カナちゃん」

「お姉ちゃん、誰？」

「これ・・・カナ！」

「いいのよねえ、カナちゃん。でも見えるって素晴らしいでしょ」

「うん、ママってきれい」

「そうでしょ、でもねえカナちゃん、

完全に直るのはもう少し先だから明日からも毎日お風呂に入りに来ようね」

「うん、わたしここのお風呂大好き・・・」

「ねえ、弥生さん。この温泉って女性しか効かないの。

下の病院施設もそう・・・ここは女性だけしか診ない婦人科専門病院なのよ」

「私、驚きました。こんな花街にこんな超近代的な病院があるなん

て・・・それにあの温泉って・・・」

「驚いたでしょ。将来はみんなに知らせても良いかなって思っているけど今はね。」

・・・知っている人とか本当に困っている人なんかには紹介しているんだけど、

ここは無料だし他の人達のお部屋もあるから一変にどつとこられると困ってしまうのよね」

「私も、この子と一緒に入ったからよくわかります。看護師って肉体労働なんです。」

だから身体の部分がいけると支障かたしています。私も肩こりや腰痛に悩まされてきました。

でもあの温泉に入ったとたん、全てが消えていたことに気づいたんです。

それにこの子・・・見えるよって・・・」

再び泣き出しそうだったが
「ねえカナちゃん。カナちゃんは大きくなったら何になりたいのかな？」

「私、舞妓さん」

「えっ？舞妓さん？」

「どうして？」

「お姉ちゃんがとってもきれいだったから」

「ありがとう、でもおねえちゃん本当の舞妓さんではないのよ」

「えっ！違うの？」

「うん、お姉さん、女優さんなの」

「えっ？女優さん？」

そこへ

「沙希！・・・」

といって麗香が現れた。

「あっ」

といって立ち尽くす弥生。

そうだろう歌の天才がこうして天才女優のところに現れたのだ。

こんなチャンスもうないだろう。カナモ

「あっ、歌のお姉ちゃん……」

と飛び上がって喜んでいいる。目が見えているところからファンだったのだ。

先に用事を済ませてしまっるのが麗香だ。

「沙希！悪いけど追加になったあの5幕目ちょっと通しでやってほしいの」

一生懸命練習してみんなの前でも恥ずかしくない仕上がりなのだ。声がつぶれてもあの温泉水を飲めば直ぐ治ってしまう。

「うん、わかった。そうだね、カナちゃんあとで私の踊り見てくれる？」

「うん」

「弥生さん……これ……」

「えっ？これは？」

「明日の南座のチケットよ。カナちゃんを連れて見に来てちょうだい」

そういう沙希に麗香の無言の質問

「どうしたの？」

「麗姉、紹介しとくね。相良病院の3階の婦長さんで萩野弥生さん、それと娘さんのカナちゃんよ」

「本当に娘のことでお世話になりました」

麗香は座り込んでカナの手を握りながら

「この子、天使みたいでしょ」

「えっ……ええ……そうですね、私たちにとって天使なんですよ」

「おおげさよ、私って我儘者だから……」

「よくいうよ、その我儘だって自分のためじゃない。人の為の我儘だから、姉さん達良く言ってるよ。」

沙希に振り回されてばかりいるけど結局みんな人のためだって」

「辞めてよ麗姉、私恥ずかしいわよ」

「何言ってるのよ。あの温泉だって貴女が探したって聞いたわよ。私の健康だって……」

それをこれ以上いうと嗚咽になりそうだからそのまま言うのを辞めたが……。

「すみません。九条麗香さん。何かご病気だったのですか？」

「ええ、子宮癌……」

「子宮癌？……」

「それがあの温泉に入ることであれよあれよと消えてしまったの。癌も治るのですか？あの温泉……」

「でも、温泉に入ったからって寿命というのは延びないからね」

「沙希ちゃん！……」

と声がして上がってきたのは明子だ。看護師二人もついてきている。

「あっ！婦長さん……」

「きやつ……九条麗香だわ……」

全くのミ―ハーの看護師達だ。

「どうでした？知美ちゃん」

「大成功よ。温泉にいれたとたん喜んだ知美ちゃんが泳ごうとして自ら手足を動かすの。」

ねえ庄司さん」

「ええ私・・もうびっくりしてしまつて。」

おまけに私今朝切つた足の甲の傷が見る見る消えてしまつたんです」

「ねえ・・・婦長！・・・あの岬ちゃん、意識取り戻したんですよ」

「えっ？岬ちゃんが？」

「はい、そこで私見ました。」

このあきあさんが岬ちゃんの手を握つたとたん岬ちゃんの身体が動いたのを。

そしてまだ目もあけていない岬ちゃんがあきあさんの舞妓姿を知つていたり

仏様のことをお話したり・・・とにかく信じられない光景でした」

「私の担当の知美ちゃんもよ」

「知美ちゃんて・・・もう1年以上の植物状態の？・・・」

「はい・・・あきあさんが大きな鏡を壁に出されて鏡の向こうの知美ちゃんと話をされているのを診ました。

そして知美ちゃんを説得されてこっちに呼び戻したの皆あきあさんなんです。

そこで私思い出しました。あきあさんのドラマや映画・・・あれつて全部本当のことだったんですね」

「沙希ちゃん、あんな素敵なこと何も知らないこの子たちの前でしたら
驚いたりするのあたりまえでしょ。
あんた達、沙希ちゃんのやったこと皆に言いふらしたら駄目だから
ね。
まあ言っても誰も信じないけどね」

「沙希！・・・又やったのね」

「ごめん・・・」

「謝ることじゃないの、でも知らない人がみたらパニックになるで
しょ」

「はい」

と素直にあやまるあきあに

「凄い！これって感動・・・」
目を輝かす看護士二人。

「ただいま」

と相良病院の制服を着た女の子達が続々あがってくる。

「あら・・・あなた達・・・どうしてここへ？」

「私たちの家、ここの地下なんです」

「ええ・・・じゃあ・・・」

「私たち・・・卒業したら地下の病院に勤めるんです」

「明子先生・・・これはどういうことですか？」

「私が溇から預かった子達なの」

「溇？・・・預かった？・・・」

「溇っていうのはね、私の後輩なの。ただ一人私が認める天才医師
よ。

この日本で・・・いえ世界で手術で溇にかなう医者なんていないわ。

その滞から婦人科専門病院をこの花街につくるからって相談されたの」

「それでこの子達を預かって・・・先生も時々ここに代診ですか・・・そんなのズルイ・・・」

思わぬ言葉が弥生から漏れる。

「萩野さん・・・あなたは・・・」

「わたしだつてこの病院で働きたい・・・」

もしここで働けるんだつたら婦長なんて肩書きいらさないわ・・・」

「わかつた、けれどあなたが辞めてしまつたらうちの病院どうなるの？」

「その心配はいりません。キチツつとあとは育ててきました。」

そこにいる塩尻さんが主任に・・・そして、主任の大原さんが婦長に・・・

これが私の腹積もりでした」

「萩野さん、そこまで決めていたということは、あなたは・・・」

「ええ、カナのために目の大家という先生のもとでカナを見せるつもりでした。」

それが世界だつたとしても、とんでいこうと決めていました。

そうしたら病院を辞めなければなりません」

「あなたはもう以前からそんな計画持っていたのね」

「はい、だから塩尻さんにも大原さんにも厳しく教えてきたつもりです」

「婦長！・・・」

塩尻は恨めしそうに弥生をみつめる。どれだけ恨みに思ったか・・・辞めようとさえした。

酷い悪口も同僚達に数限りなく言ってきた。その婦長の心をしらす。
……自分が情けなくなる。

「塩尻さん、そんな顔しないで……私のことを思ってくれるなら
あなたは……今度は後輩達を伸ばしていく番よ……」

「婦長……」

「わかったわ。そこまで決心しているならもう止めない。漣にも推
薦してあげる。」

よく考えればあなたは向こうからこっちに移るだけだもんね」

「その話、了解よ」

と喋って顔を見せたのが漣だ。里から帰ってきたのだ。

「漣！……」

「漣姉……」

「漣姉さん……」

「弥生さんっていったわね。あなたがうちで働けるなら肩書きなん
ていらない、

って言葉気に入ったわ。

それに後輩を育て上げた実績も加味してね」

「あつ……はい……」

「浅香さん、高尾さん」

と呼ばれた二人の看護師、漣の隣に立つ。

「この子達、私と同郷なの。東京で私がクリニックを開いたときつ
いてきたのがこの二人。」

医学のイロハから教え込んだわ。でも私が教えたのは看護師としての
医学ではなかった。

東京で3人の小さなクリニックならそれで良かったかもしれないけど、
最近来た看護師達に混じって仕事をしてみて違和感が大きくなって
きたって
この間から相談を受けていたのよ。そして、結論を出したわ。医者
になるって」

「それって、素晴らしい決断だね。女医になってここに戻ってくる
のね」

「はい、どこまで出来るか・・・いいえ絶対に医者になるって決意
でこれから勉強していきます」

「そうねえ、まずは大学の医学部入学ね」

「はい、でも私たちの家はここです。
ですからこれからいろいろお聞きするかもしれませんが、よろしく
お願いします」

「弥生さん、そういうわけなの。肩書きなんていらなくていった
貴女の言葉に反するけど、総婦長になって私と先輩の片腕になって
くれない？」

「総婦長ですか？」

「うちに集まった看護師達優秀なんだけど、みんな若いわ。」

卓越した看護師の能力と人をまとめていく能力、誰でもなれるわけ
じゃない」

「それに・・・」

と言葉を挟んだ沙希、みんなの視線が集まる。

「いくら超近代的な病院施設といっても地下の施設は不自然よ。
今はいいかもしれないけれど、やはり患者さん達には自然の光、風、

空気が必要・・・

だから近い将来この近くに京都市に許される限りの高い病院を建てるの。

京都の風景に合う外観で内部は超近代的な婦人科病院・・・いいでしょ」

「沙希ちゃん・・・そこまで考えているの？」

「そうよ、澪姉。だから弥生さんの仕事って大変なの」

「えっ？わたしの・・・ですか？」

「そうよ、そんな大きな施設を考えると人を育てなければならなし、

病院そのものも考えていく必要があるわ」

「病院を考える？・・・」

「そう、この病院の強みはなに？」

「強み？・・・はっ！・・・」

「思いついたようね」

「あの温泉・・・」

「そう・・・あんな温泉、世界中を捜してもどこにもないわ。でも温泉は最終兵器よ。」

「・・・それまでは考えうるかぎりの医学知識で患者さんを治すよう努力すべきよ。」

温泉に頼っては駄目。・・・

なんだか言い方が難しくって判りにくくなっただけ・・・」

「沙希ちゃんの言いたいことわかるわ。常に患者さんに向き合うのは医者であり、看護師なのよね。」

そしてバツクに温泉があるという安心感は何か緊急のことがあっても、

慌てて判断が誤るってことが本当に少なくなるわ」

という澪に

「そうよね、そうなんだわ。要は温泉の使い方ね」

「そう、何でも温泉・・・なんてことになったら医者も看護師も
いないし

もつと最悪なのが患者さんよ。

温泉に入りさえすれば体の悪いところが消えてしまっつて知れば人
間なのよ。

少々危険な事もするし自信過剰になって身体に悪いことも平気です
るようになるでしょうね。

これ温泉が人にとって諸刃の剣になりかねないっていうこと」

「そうですね・・・そうかあ・・・あの温泉が人の運命さえ変えて
しまっつうのね」

・・・と考えこむ弥生に

「ところで・・・荻野さん！・・・荻野さんがまず最初にすること」
「私が最初にすること？」

「そう、まず5人の心から信頼出来る仲間をつくること」

「5人？・・・」

「6人では多すぎて駄目・・・4人では少ないから駄目、
5という数字は・・・五芒星というような五角形が最適なの。
・・・絆が強くて倒れない！」

「でも心から信頼出来る仲間って何年もかかりますよ、遷先生」

「これから5人全員なんて1年かけても出来やしないわ」

「だったら・・・」

「いるじゃない・・・」

「えっ・・・」

「あなたが古くから心を使って作った仲間がそこに・・・」

「塩尻さん・・・」

「別に今から5人を……この病院での看護師から作る必要なんてないわ。」

あなたの古からの……病院外の……仲間……口が固い必要はあるけどね」

「凄い……漣姉って薫姉さんと喧嘩している時と、まるで別人……」

「本当……天才って感じはするけどね」

「こら！沙希！……麗香！……お前達！……」

「キヤツ」

と二人で逃げる真似。

食事をしていた見習看護師、

いつものことただただ笑っているだけだが二人の看護師にとってなんだか

「凄い！……」

というだけの風景なのだ。……ところが……

「誰が漣と喧嘩しているって？」

という声……まずいと思った沙希と麗香、

恐る恐る振り返ってみるとキラキラした瞳の薫が立っていた。

「沙希ちゃん、私もう漣と喧嘩しないって決めたの」

隣のテーブルからゆりあが持ってきた椅子に座った。

「えっ？……どうして？……」

「これびっくりね……」

「どうして、あんだ達は……」

「だって、薫姉と澪姉の口喧嘩が見れないって……」
二人して声を合わせて

「面白くな〜い!……」

「おほほほ……もうそんな作戦にはこの薫様乗りませんよ〜」。
麗香ちゃん、愛子ちゃんを産んだあんなにはわかるはずよ。胎教に
悪いことしないって……」

「もう……そんな真剣にいわれたらからかい様がないわ」

「沙希ちゃん、その手にはのらないってこと……」
とって持っていた袋から出した毛糸の編物をはじめたのだ。

その姿を見て沙希と麗香は顔を見合わせて呆然としている。

そんな姿が全く合わないのが薫だと思っていたから。
そしてそんなこと絶対にしないと書いてもいたのだ。

「ゆりあちゃん、悪いけどうんと栄養のあるもの頼んでくれない?
・

でも辛いものとか塩をたくさん使ったお料理は駄目よ……」
そう編物を続けながら言う薫に

「は〜い……」

とって注文にいくゆりあ、もう慣れたものだ。

呆然としていたのは他にもいた。弥生と塩尻、庄司の両看護師だ。

「あんた達、ここで見たこと聞いたこと他で話したら駄目よ」
その言葉に逆に勇気を得た弥生。

「あのお、女優の早乙女薫さんでしょうか」
その言葉にテーブル越しに見つめた薫、

「そうよ・・・ところであなたは？・・・」

「姉さん、紹介しとくよ、今度うちで総婦長になる荻野弥生さん」
「姉さん？」

「そう・・・荻野さん、早乙女薫って私の直ぐ上の姉なのよ」

「えっ？姉妹なんですか？」

「そうよ」

「なんか、私夢を見ているみたい」

「もう、吃驚の連続よ」

二人の言葉に

「この子達は？」

「うちのところの看護師なの」

「その看護師さん達がどうして？」

チラツと沙希に視線を移したことで

「あっ！・・・沙希ちゃん、又やったのね」

明子が簡潔に訳を話すと

「ふ〜ん・・・そうなんだ。この間の事件でたくさんの女の子達の命を助けて今度またなんだ」

「この間の事件ってなんですか？」
と聞かれるままに

「このことあなた達が信じるか信じないか知らないけれど

京都府警の人たちや東京の警視庁・警察庁の警察官達・・・そして
マスコミ陣、

おまけにアメリカの映画のスタッフやアメリカの軍人達の大勢が目撃しているんだから・・・」

「薫姉！・・・」

「いいじゃない、この子達もう他人じゃないのよ。それにあなたのやったことなど」

本当に感謝している人たくさんいるんだから・・・
ゆりあちゃんもそうよねえ、般若童子の沙希に助けられているの

「えっ？・・・あの般若童子ってあきあさんですか？」

「よく考えてみてよ。あんなこと他の誰が出来るというの？
空を飛ぶのよ・・・沙希しか出来ないじゃない」

「あっ！・・・あの事件の時大勢の方が眠ったまま運ばれてきたの
って・・・」

「そう、沙希ちゃんが作った真言を認めた護符よ。

それによって警察の人達が悪いことをさせないよう皆を眠らせたの

「わたし・・・わたし・・・」

と立ち上がった二人、あきあのところに来て握手をねだる。

「どうしたの？・・・」

「あきあさんがあまりにも素敵なので辛抱ができませんでした」

「あしたから毎日ここに来てもいいですか？」

「いいけど、私いつもここにいるとは限らないわよ」

「そんなのいいです。ここに帰ってこられると思うとそれでいいで
す。」

それに温泉もありますし・・・」

「こんなに美味しいレストランがあります。ここで食べたら他では
食べられませんもの」

「あらあら、そんなこといたら・・・ほら」

ドドド・・・と出てきたのが白衣姿のシェフたち。全員揃って頭
を下げる。

「今のお言葉、これからの励みになります。ありがとうございます。ありがとうございました」
と、奥に引込む。

目を白黒さす塩尻靖子と庄司春江。

「ふふふ・・・驚いたでしょう」

「で・・・でも、みんな女性なんです」

「あたりまえでしょ、ここは男子禁制なのよ。でも・・・ただ一人をのけてね」

「ただ一人って？」

「今に判るわ、楽しみにしてなさい」

麗香が横目でくすつと笑うのを沙希が赤くなって下を向く。

見習看護師達は食事が終わって地下に帰っていった。

今はこの広いレストランにただ一つのテーブルに編物を続ける薫、その隣にマネージャーのゆりあ、明子と澪は話を続けてるし、塩尻靖子と庄司春江はもうぼくっとしている。沙希が舞妓と芸妓の舞の稽古のために

「あと1時間ほど待っていてね」

と去った後麗香の興味はもっぱら考え込む弥生に向けられていた。

いわば死線を乗り越えた麗香が以前と異なって人間というもの・・・

心の中のありように興味が惹かれるようになったの当然といえば当然だ。

一方の弥生、自分の娘のために一生を奉げようとした女の決意、

麗香が見ていても同じ女として母としてその哀しさが共感できるのだ。

だから、なんだか……この人いい……と実感させられる。

「弥生さん、あなた先ほどのたった一人の男性のこと考えているでしょう」

「えっ？……あつ……はい。でもここは男性がいるような雰囲気はないし、

ここにきてそんなに時間がたってませんから、まだ会ってないのかなあつて……」

「ううん、弥生さんはもうその人に十分に会っているわ」

「えっ？会っているんですか？……じゃあこの人って……」

「みんな知っているし、皆その人が大好きなの。」

私だって大好きな旦那さんがいるけど、私の命の恩人だし旦那さんと並べられるほど大好きよ」

「じゃあ……もしかしたら」

とチラッと麗香の隣の空いた席に視線をうつした。

「そう……それが正解よ。でも、今はそこまで。あとでゆっくり判るからね」

「でも……驚きました」

「そのこと知っている人多いのよ。でもどうしたわけか口にしないの。」

あの子と付き合ってみると、そんなことどうでもいいほど好きになるの。

そしてどうしてもあの子の赤ちゃんが欲しくなる。

どうやら弥生さんも初期の状態みたいね。

私だって旦那さんがいなかったら胸に飛び込んでいくもの。薫姉さ

んや澪姉さんみたいだね」

「えっ……じゃあ……」

「この皆が生きる世界ってモラルってものあるでしょ。」

でもここにいる早瀬一族にはそんなモラルはなかった。……

そんなモラルを守っていたらとつくに早瀬一族ってなくなっていたでしょうね。

過去昔々から血を流す戦いって男達だったわ。

それを無くそうと時の帝の娘沙希姫様に陰陽師の安倍晴明様が術をかけたの。

女しか生まれない一族……早瀬一族……がうまれたわ。

その後歴史でも男達が血を流す戦争は無くならなかったわ。

歴史の陰で泣くのは女。早瀬の女は男嫌い、女しか愛せない一族なの。

でも子孫を残すためにはそんな好きでもない男に抱かれなければならぬ哀しさ」

「そうして私たちが生まれてきたの」

「あら……薫姉さん、聞いていたの？」

「あたりまえでしょ。そんな大きな声で話されたらいやでも耳にはいつてくるわよ」

見ると皆の視線が麗香と弥生に集まっていたのだ。

「じゃあ、後は薫姉さんをお願いするわ」

「なによ……それ……」

「だって、いつも一族のこと考えると……哀しすぎるもの」

「荻野さん。私ね……八人姉妹の六番目なの。そして七番目がその澪よ」

「えっ？・・・じゃあ、姉妹というのは」

「本当よ。一番末っ子の八女はあなたも知っているでしょ。」

千堂ミチルよ。そして沙希ちゃんに影のように付いていた女の子がいたでしょ。」

彼女がミチルの次女の杏奈なの」

「えっ？あの有名なカリスマ美容師の・・・」

「それだけじゃないわ、上の五女は松島奈美って仕事は謎なんだけ
ど」

その娘奈緒は警視總監の秘書のエリート警視よ。」

そして四女はあなたも知っているでしょ。検事総長の牧美也子」

「えっ？あの有名な・・・ついこの間、殺人狂の犯人を取り調べて
自供に追い込んだって聞きました」

「あの事件はね、警視庁の婦警を狙っていると看破して刑事達をそ
こに向かわせたのがあの子なの。」

でもその時はあの子はこの京都での事件を解決しようとしていたけ
どね」

「そんなことできる・・・あ・・・いえ、あの人って・・・」

「そう、あの子には守護として平将門、坂本竜馬、沖田総司・・・」

「私の先祖の相良新次郎様もね」

「そんな人達があの子の守護されているんだけどでも」

そんな人達もあの子の行動には手を焼いているんだって・・・」

「凄い！・・・岬ちゃんが言ったことほんとうだったんだわ」

「塩尻さん、岬ちゃん、何ていったの？」

「あきあさんを見守るってほんと大変、菩薩様が天からはなれなく
なったのよくわかるって・・・」

阿弥陀如来様がいわれたって」

「どうお・・・信じられない話でしょう。でもそのうち嘘でないとわかるわ。

話を戻すね、えつと四女まで話したわね。三女は警察庁長官付き秘書官の

飛鳥日和子警視正よ。双子の娘もそれぞれ警視庁と警察庁の警部なの」

「じゃあ先ほどの殺人犯を捕まえたのは」

「そう、想像のとおり・・・あの子が予知した通りの罠にはまった犯人、

その犯人の頭の良さまで言っていたから、最初から美也子姉さんの取調べで犯人を追い詰めたのよ」

「でもそんなことまでわかるって・・・」

「そうねえ、でもあまり考え過ぎないでこう考えていてくれる？」

あの子には仏様がついていてくださるって」といつてから

「あとは次女の早瀬操・・・東京でも里でもここでもレストランをしているいわば一族のお料理番よ。

そして長女の早瀬真理・・・早瀬一族の現在の長、今ここで貞子お婆様のお世話と地下の施設のオーナーなの。

その真理の長女が早瀬理沙・・・週刊誌の女性記者。

次女が早瀬沙希、あなた達も知っているかどうか判らないけど、本名ではコンピューターの天才、今だに世界で売れつづけている

ビジネスソフトの開発、この間映画にもなったゲームソフト、そして沙希の声を使ったナビゲーシヨンの開発、一般には知られてないけど

通信システムを内蔵したモバイルの開発は今、警察や世界中の航空

会社、

そしてアメリカのNASAまで引き合いが来てるのよ。

おまけに日野あきあという女優の姿、私が『演技の神様』ついでいと認めるただ一人の天才。

あの子が演技すると全て本物になるの。

そしてどういわけか日野あきあになるといふんな事件が降りかかってきて、

周りにいる人たち右往左往するけど、皆楽しんでいるのがよくわかるのよ」

薫は編物をしながら話を続ける。

「あの子の話になるとつい長くなってしまふ。どうしてかね麗香ちゃん」

「みんな沙希の事が好きだからですよ」

「そうよねえ。・・・話を続けるわ。私たちの母は八人の子供を産んだの。

長女と次女の父は同じだったけど三女から八女までの父は全て違った。

母は長女を早瀬の長に次女には早瀬の料理番とするため里に残したけれど

三女からは全て里子に出してしまったの。

その時に交わされた約束は、母親は決して子供とは会わないということ。

もう一つは物心ついたら姉妹の存在を知らせ、力を合わせて早瀬を存続させていくことだったわ。

結局私、産みの母も父も知らないで育ったけれど、私に姉たちがいるって知ったの小学校のときよ。

ある雨の日に学校の玄関で雨宿りしていた時、傘を差しかけてくれたセーラー服のお姉さん。

ニッコリと優しく笑う綺麗な人だったわ。

そのお姉さんが長女の真理って知ったのがその日の夜、父と母がこっそりと話しているのを聞いたときよ。

私にとってそのショックだったらなかった、一晩中泣き明かしたといつてもいいくらい」

「そのときの気持ちって？・・・」

「ううん、今でもわからない、なんかごちゃ混ぜなの。

育ての父や母が私が物心がついた時と約束したのに何故知らせてくれなかったのか、

姉がいた嬉しさとその姉が産みの母と暮らしている悔しさ。その時から私、おかしくなっていたの。

少しした時、学校から帰ってきたら、表情を固くした母がジュースを入れたコップ2つをお盆にのせ、

『さあ、これを持ってお部屋に行きなさい』って言われると予感がワア〜と襲ってきたわ。

階段をなかなか上がれないほどの震えで何度も何度も足を止めたの覚えてるのよ。

自分の部屋なのにドアの前で固まってしまった身体。

するとスツと開くドアの向こうに真理の優しい笑顔・・・

私・・・何もわからなくなって真っ白な光の中にいたの。

気が付くと足元に落としたお盆と割れたジュースのコップ・・・

思いつきり真理に飛びつき部屋の中に押していった私。

ベッドの上に倒れた真理はランドセルを背負った私をしっかりと抱きしめていてくれたの。

思いつきり流した涙は以前の涙と違いなにもかも洗い流してくれて

いたのよ。

母も割れたコップを片付けてから二人がベッドに座り込んで楽しく話し込んでいるのを見て優しく微笑んでから静かにドアを閉めてくれたわ。

それからよ、私が人を大好きになったの。けれど男は大嫌いよ」といって話を締めくくった。

なんだか泣き笑いになっていたこのテーブル……

はっと表情を変えて

「ヤバイ!……」

といっってから編物を袋にしまつてゆりあに渡す

「ゆりあちゃん、お願い」

といっって袋をわたす。

なにが起こったのかわけがわからない弥生と2人の看護師。

「薫姉さん、……来たわよ」

小さな姿があがってきて

「あつ……みんないるわよ」

後ろを向いて大きな声をあげる女の子。

「あの子、あんなのだけど私にとって悪魔なの」と薫がいう女の子を良く見ると

「あつ……あれって天才子役の天城ひづるよね」

「そうよ、今やわたしにとって天敵よ」

「でも……起こって……」

という言葉を読み込む二人。

二人の言いたいことが判る弥生。

どうしてここにはこんなにも有名人がいるのか・・・ということだ。

ゾロゾロと上がってくる女性達、中には婦警の姿も数人いるのだ。あつ！・・・いた。またもや有名人・・・大空圧絵だ。

その人達が誰彼構わず話をするのだ。

圧絵が薫に話し掛ける。

「どうお？・・・大分進んだ？」

「圧絵さん・・・しつ！・・・」

というのを離れてみていたひづるの目が一瞬輝くのを弥生は見た。

そして、ニコツと満面の笑みを浮かべながら薫に近づいていく。

途中、弥生の視線を知ったのか一瞬誰だろうと不信げな表情を見せたが、それは一瞬のことだった。

弥生に対してピースをしてから薫のところ立つ。

よく見ておけということだろう。

「ねえ、薫姉さん。圧絵叔母さんに何を教えてもらってるの？」

「えっ？・・・別になにも・・・」

「えっ・・・そうなんだ。でも今、皆が圧絵叔母さんに習いものしているんだけど」

「いいえ・・・わ・わたしは別に・・・」

そうだ、今度のドラマのことでちょっと演技の相談が・・・」

「へえ～～・・・いまだかつて誰にも演技のこと聞いたことが無い早乙女薫という人が

演技の相談ねえ・・・」

声を一段と張り上げる。

弥生の目にはテーブルに座る見んなの耳が薫たちに集中しているのがわかる。

もうすでに笑い出したのがチラホラ……しどろもどろになる薫……この2人の対決はもう見えていた。

(この人達……って、とっても可愛い……) 名を成したこの2人の女優のアドリブ劇……とっても面白い。始めて見た三人も笑いをこらえるのに必死だ。

「ひづるちゃん、もうそのへんで許してあげなさい」

圧絵がストップをかける。そのときひづるが言ったものだ。

「ああ、面白かった」

背もたれに深々と座った薫。

「ねえ、ひづる。教えて……どうして私が編物してるの判ったの？」

「だって律ちゃん先生も圧絵叔母さんに編物教わってるし、他のお姉さんたちもそうだもん」

「まさか奈緒ちゃんも？……」

「そうですよ」

と持っていた袋から編物を出す。

「今、警視庁で婦警や事務職の間で編物が大流行なんです」

「それも奈緒警視が編物をやっているのを見たからなんですよ」

「警察庁でも今はやろうとしているそうです」

「あなた達！今は公私の私でしょ。その警視というのは止めて、私は姉でしょ。」

「あなた達も早瀬一族になっただんだからね」

と隣に座る三人に注意するのだ。

「私たち京都府警にもその情報は流れってくるし、婦警達は毎日温泉に入りに来ているでしょ、薫姉さん達が何をしているか、すぐ耳に入ってくるのよ。だからほら……」
と袋から編物をだす女性数人。

「もう、……こんなことになってるなんて……
律ちゃん！あなた、編物なんか絶対しない。服なんて買えばいいって言ってたじゃない」

「薫姉さん、律ちゃん先生はね。妊娠したことがわかったその夜、すぐに圧絵叔母様のところに編物を習いにおしかけていったの」

「律ちゃん！言うこととやること違ってない？」

「そんなこと言いましたっけ」

「赤ちゃんが出来たら絶対に赤ちゃん言葉で話さないって言ったのは？」

「赤ちゃんが一生懸命話そうとしているのに温かみの無い大人の言葉で話すなんてできませんわ」

「じゃあ、おしめなんて汚いもの代えるのは……夫の役目なんて言ってたのは？」

「赤ちゃんのオムツが汚れているのに代えないなんて愛情のないこと出来ません。」

それに私の赤ちゃんですもの、汚いなんてことあるはずないじゃありませんか」

「ふ〜参るわね。律ちゃんには……」

(なんだかとっても素敵な空気だわ)

と聞いているだけで心が弾んでくる弥生。

「ちょっと、面白い話してるじゃない」
と入って入ってきた女性四人。

「あつ、まゆみ姉さんに順子姉さん」

「静姉とケイトまで……」

「ええ、三人で新幹線を使って帰ってきたんだけど駅から見える
京都支社の部屋に明かりがついているじゃない。だから寄って来たの」

「よかつたわ、ちょうどケイトが明りを消して出るところだったか
ら。」

ケイトの車で帰ってきたってわけ。ところでオムツがどうしたの？
といいながらカバンから編物を出すまゆみと順子。

「あんた達もか……」
と薫。

「ん？……どうしたの？」

そこで、今までの経過が話される。

「ふふふ……あきれたでしょ。律ちゃんて妊娠がわかったとた
ん、
あれよあれよというまに考え方が180°変わってしまったんだも
の

わたしも旦那さんも開いた口が塞がらなかったわ。

だって今まで見も口にもしなかった食べ物が身体に言いと聞くとも
うガツガツですからね。

ひづるちゃんも大変よね。律ちゃんのマナージャーを受けなければ

ならないし家庭教師もね」

「ううん、そんなことないわ。成績とってもあがったの。この間のテスト全部90点以上だったもの。」

だから赤ちゃんに名前をつけさせてもらうの」

「えっ？名前」

「うん、双子の男の子は珊瑚ちゃんで、女の子は貴沙姫ちゃん。」

わたしが考えたのひらがなだったけど、漢字は律ちゃん先生が考えたの」

「あんだ達はもうそこまで考えているの？」

「ええ」

「じゃあ私もひづるにつけてもらおうかな」

と順子。

「ほんとう？」

「うん、その代わり男の子には女の子を大事にする優しい子、

女の子には力強く世の中を生きていく子・・・になるような名前ね」

「わかった、一生懸命考える」

なんだか優しい空気が流れるのを感じているのはここにいる女性全てだろう。

「さあ、そろそろいいか。荻野さん、塩尻さん、庄司さん立って・・・」

と三人を立たせてから

「みんな聞いて！」

と皆の視線が集まってから

「紹介するね。今、相良病院の3階の病室担当の婦長をしている荻野弥生さん。」

でも早々に向こうを止めて地下の病院の総婦長になられます。
かわりにここにはいないけど浅香さんと高尾さんは看護師を止めて
これから大学受験に備えます」

「ええ〜！初耳よ・・・大学受けてどうなるの？」

律子の声だ

「女医を目指します。だから律ちゃん、家庭教師頼むわね」

「え〜・・・やっぱり・・・でも、私東京と京都を行き来してるか
らいつもここにいないわよ」

「だからよ」

と静香を見る。

「静ちゃん、悪いけどあのモバイル2台かしてくれない？」

「いいわよ、そんなの。ずっと持っていたら良いわ・・・ケイト」

「OK！明日持って帰ってくる」

「さて、弥生さん。一言挨拶しておきなさい」

「はい、・・・今、紹介を受けました荻野弥生でございます。

私がここに来たきっかけは、

日野あきあさんが相良病院に来られて患者さん達のお見舞いにした
ことからなんです。

あきあさんと私握手した後、急に小声でこっぴどいわれたのです。

どうして判られたのか知りませんが『この3階の婦長の荻野弥生さ
んですね』

いきなり自分の名前を呼ばれて驚いてしまいました。

『黙って私の言うこと聞いてください。・・・あなたの娘のカナち
やんの目、

このままいくら手術しても良くなりません』と言われた時呆然とし

てしまいました。

実は産まれた時から弱視だった娘の目が急激に悪くなったことから休日には目の大家といわれる先生に娘を連れて診断を受けに飛び回っていたのです。

手術も受けました。でもこれと言った効果はありません。

でも私のこれからの人生、娘のために生きることを決心しましたので、

病院を辞める決意を固めて、婦長の跡を誰にさせるか決める必要がありました。

だから少し強引でしたが婦長・主任にと決めた人を育て上げる事にしたのです。

結局、1年かかりました。でも、今では安心して辞める事ができます」

「婦長！・・・」

塩尻の目が潤んで弥生を見つめている。

「そんな時なんです」

と言葉を続ける弥生。

「実は藁にも縫りたい心境だったのです。娘の目はもう見えていません。」

私は言われた通り夢中で病院を飛び出し娘を迎えに行っていました。後のことはもう無我夢中でよくおぼえています。

気が付いたのはこの地下の病院でした。そこで『あっ！』と声をあげそうになりました。

まるで未来の病院にきたような錯覚です。こんな設備見たことありません。

今まで相良病院の設備が一番と信じていた私にはショックでした。でもそんなこと考えるのはそこまででした。娘のカナのことです。まずは明子先生がその設備を使ってカナの診断をしました。

そして、『さあ、行きましようか』といわれました。いったいどこへ？

・・・質問する暇はありません。

娘を乗せたベツトが看護師2人に押されて診察室を出て行きます。あとに明子先生、その後ろからなんだか生きた心地しない、何故かそんな心境の私。

エレベーターに乗せられて・・・こんな地下にエレベーター？・・・不思議なことがいっぱいです。

地下七階・・・保養施設・温泉とエレベーター内に書かれたこのフロアー

初めて来た私にとってそれは時代劇で見た湯治場にきたような・・・タイムスリップした・・・と思われる場所でした。

更衣室で白いシースルーの浴衣に着替えた私に肌にされたカナを抱かされて、

『ゆっくり入ってカナちゃんの顔・・・特に目の部分をお湯で洗ってあげなさい』

なんのことが判りませんでした。信頼する明子先生のことです。言われるとおりに温泉につかりました。熱くはありませんが。

浸かってしばらくすると身体の中の温度がゆっくりと上がってくるそんな温泉でした。

私はいわれた通りにカナの顔を二度三度とお湯で洗いました。

すると・・・今まで閉じて開かなかった瞼がパチッと開いて大きな澄んだ瞳で

私を見つめて『ママ！・・・ママ！・・・見えるよ・・・見えるよ・・・私の目が見えるよ』

私はいつのまにかカナを抱きしめ泣いていました。大声をあげていたかもしれない。

気が付くと明子先生の声が聞こえます。

『はっ』と気づいて慌てて先生の方に湯の中を歩いていきました。カナの診察をしなければなりません。看護師達にカナを渡すと上がろうとした私に

『弥生さん、もう少しゆっくりと浸かってから病室に戻ってきなさい。』

あなた自身の持病のことゆっくり考えることね』

そんな言葉を残して明子先生は戻っていかれました。でも私の頭にあつたのはカナのことだけでした。

どんな気持ちだったのか今でもわかりませんが急に私の身体が冷え込んで

お湯の中に浸かってもブルブルと身体が震えてとまりません。

どれだけ経ったのでしょうか。気が付くと身体の震えもとまり、あれだけお湯に浸かっているにも湯あたりなんてしていません。

そこでふっと思いついたのが先ほどの明子先生の言われたこと。

私の持病・・・ん？・・・看護師は肉体労働なんです。

みんなどこかに持病を抱えています。私の場合腰痛と生理通と関節の痛み。

それが全て無くなっていました。

今日、シクシクと痛んでいた生理通・・・カナのことに夢中になつて痛みは感じていませんが、

それって精神的なことでは肉体的には寝込んでいたような痛み・・・

それが全てなくなっている・・・私は急いで着替えて病室に向かいました。

そこで明子先生に言われた言葉

『カナちゃんは全て異常なし、もう普通の女の子に戻っているわ。でも今日は一応入院してもらおうからね』

見せてもらった診察の結果、あきらかに違っていました。お礼をいう私に明子先生は

『お礼なら沙希ちゃんにいいなさい。あの子のおかげなんだから・・・』

とにかく、こんな良い出会いとこんな良い病院に入れたことに感謝いたします」

そう言つて頭を下げるとみんなから熱い歓声と拍手。

「婦長はズルイ・・・わたしもこんな病院に勤めたい」

「私だつて・・・」

「塩尻さん、庄司さん。あなた達にはまだ早い。」

しつかりとした看護技術を身に付けて後を育て上げたら考えてあげてもいいわ」

そんな言葉に黙ってしまった2人・・・でも

「私、それでもここの温泉には毎日きますから」

「私も・・・」

「それは自由よ、いつでも来たら良いわ。ねえ澗先生」

「そうねえ、来ていたらいろんな情報得られるかもね」

喜ぶ二人。

突然

「あっ！いけない！沙希姉さんがもう少ししたら皆にお稽古場に来てもらつて」

「もう・・・ひびるったら、そんな大事なこと・・・」

「ごめんなさい」

という事で立ち上がった皆・・・

「私たちも良いんですか？」
という塩尻看護師達を促して全員が稽古場に向かった。
一度地下1階の病院施設・・・受付と事務室のある・・・を通って
逆の階段を上がると一度に雰囲気が変わる。昔から続く京の伝統の
屋敷に入っていく。

長々と続く廊下、障子が開け放たれた大きな居間を過ぎると舞台の
ある部屋にたどり着く。

舞台には舞妓が一人・・・それを見上げるように老婆・・・
その老婆を取り囲むように年齢がバラバラだが十数人の同じ着物姿
で座っていた。

おまけにその中には二人の尼僧もいる。

離れて舞妓や芸妓達がこれは二十数人という多い人数で固まって座
って舞台を見ているのだ。

舞台の舞妓・・・日野あきあだった。

目敏く見つけた荻野弥生と塩尻靖子と庄司春江を手招きする。

舞台下まで行った三人に

「ここで少し待っていておくれやす？」

と言って皆が座るのを待ってから

「お姉ちゃん達にはもう紹介が終わってる思います」

皆が頷くのを見て、

「お婆ちゃま、今度地下の病院の総婦長になられる荻野弥生さんど
す」

「おお、ごくろつはんどす。うちら地下のこと何も知らへんけんど
仰山の女子はん一生懸命働いとられます。あんたは其中でもえら
いお人になる。」

けんど人は地位とかは関係おへん。人を動かすんは心どす。優しさど、厳しさ……相反する心どすけど人への思いは同じなんどす」

「そのお言葉、肝に銘じて働かせていただきます。京舞の家元で人間国宝の井上貞子先生」

「あなた、うちのことを知とるんかいな」

「はい、私……先生のお顔はテレビとかで拝見させていただきました。」

幼いときから日本舞踊が大好きで親に無理をいって娘時代まで習っていましたが、京舞にも興味を持って都おどりの日なんて無理に休みをとって見に行っていました」

「ほほう……そうどすか、これからあなたも地下で働くさかい時間があるときはここへ来てみてもよろしおす」

貞子の口利きだ。もう稽古場での見学はフリーパスとなった。

「お婆ちやま、この方達は明子先生の病院の看護師さんどす。」

塩尻さんは荻野さんの下で働いておられました。

庄司さんは知美ちゃんの出当の看護師さんどす。

お2人共うちのやったこと見ておられて、うちに興味をもたれて明子先生についてこられたんどす」

「お2人はん、小沙希ちゃんのやったこと内緒え」

「はい、判っています。でも温泉にはいったことで持病が治ってしまいました。」

これからも毎日温泉に入り来たいとおもいますが……よろしいでしょうか」

「そんなこと、うちの許可なんぞいりません。自由にきたらよろしおます」

「志保はん、久美子が来たら末席え」

「それはもう言っておきました。あつ来たようどす」

まだ洋装のままの久美子、廊下に座って深々と師匠に向かって頭を下げると膝行して末席に座った。

「麗姉！紫苑姉ちゃん！・・・」

と呼ぶと麗香と紫苑がいつ着替えたのか着物を着て舞台上がってその隅に置いた座布団の上に座る。紫苑が手に持つ琵琶はあの『朱雀』だ。

「小沙希ちゃん、大丈夫ですか」

「へえ、うち明日の本番で魔と戦おう思ってた。

けんど麗香姉ちゃんが五幕目を通してやりたい言われるんでほんなら今消してしまおう思ってます」

「はい」

と手をあげて質問する薫

「今のこと何のことですか、一向に理解できません」

という言葉に良子に教えてもらった五幕目をこの稽古場で稽古したことから

舞に魔がついていることを話す。そして比叡山での三日三晩の修行・・・思わず息を呑む女性達。

「魔王となった崇道天皇はうちが洞窟の中で消してやりました。

けんどうちの舞にしがみついる魔は使い魔からはぐれ魔になったんは知りません。

そやから明日消してやろうおもたんどす。

けんど謡を通しでやらしてほしい言う麗香姉ちゃんの希望かなえな
いけまへん。

魔の退治は明日から今日になっただけだす。

そやから皆にようみていてほしいんどす。いいんえ？花世ちゃん」

「ほんまはやってほしくないんどす。けんど明日が今日になるだけど
したら

うち、小沙希さん姉さんをよう見ときます。危ない思たらうち大声
で叫びますえ」

花世も必死になっている。

また小沙希さん姉さんは危ないことしはる、けんどこれ、止めて止
められるもんやおへん。

麗香も紫苑も緊張で固くなっている。

．．．．．そして、それが始まった。

小沙希の名は知っていた。飛び出したとはいえ自分を育ててくれた
師匠のことだ。

その師匠が小沙希という舞妓のことを特別視していることも知って
いた。

その小沙希が本当の舞妓でなく、日野あきあという女優だというこ
とは今日始めて知った事だ。

そして、そのあきあによつて娘が助けられ、師匠の元に戻れたこと
感謝してもあまりある。

そして、そのあきあの舞．．．はじめて見る舞．．．一体どういう
ものだ。

舞を始める前に少し騒いでいたようだが久美子の耳には入っていな
かった。

その目は一つ一つの舞の動きに吸い付いていく。これって．．．

全く次元が違いすぎるのだ。師匠は厳しい修行だと言った。けどこれはいくら修行しても手には出来ないもの。胸をときどきしながら……あこがれだけでただ見るだけ……だ。

謡は続いていく……そして、舞は終った。

その瞬間にバサバサと羽音が……

その黒い何者かに向かって小沙希の右手より光が飛ぶ。

そして、ゆっくりとその光の玉が降りて来た。

小沙希の目の前で留まったその中には……

「あっ！……インコだ！……」

と言われるくらいインコの姿に酷似した生き物が入っていた。

その姿……真っ黒なのである。

「ピーピーピー……」

と鳴く……やはり鳥？

「てつきり魔と思っていたんですが、あなたは魔ではないんですな。

その昔は天界で暮らしていたと思うんですがいかがですか？」

でもそれはあくまでも鳥として

「ピーピーピー……」

と鳴くだけだ。

「わかりました！」

と両手を差し出すと現れる1本の横笛。

「これは『翔龍丸』という退魔の笛・・・あなたが魔だつたら消滅しますえ
けんどあなたが天界にいたとしても今の姿やおへん。この笛聞いて元の姿に戻りなはれ」
という唇に当てる。

流れてくる曲・・・初めて聴いたものは身体の震えがとまらない・・・
日頃たまつた灰汁のようなものが消し去られて清々しい風が心の中を吹き抜ける。
そして、小沙希の姿に重なって菩薩様が笛を吹いているのが見えるのだ。

その菩薩様の肩には虹色の鳥の姿が・・・やがて小沙希が横笛から唇を離した。

「ほっ」

とため息をつく久美子や弥生達。
初めて聞いたものにとってこの尋常ではない笛の音は心を揺すぶり続けるのだ。

光の中の鳥は虹色に変化している。

「あなたは天界にだけ生息する金慶鳥、しかも菩薩様の愛鳥・・・」

「その通りじゃ、あきあよ」

「おお、その声は晴明様！」

あきあの声とともに庭から小さな光が一つ、
舞台の上で見慣れた安倍晴明。どっかりと座ってひづるを呼ぶ。喜んで跳んでくるひづる。

「あきあよ。その鳥は昔、不埒な魔が天界に忍び込み盗んだ菩薩様の金慶鳥」

「でも、どうしてなんどす？」

「天界のもの、身につければその力、仏と同じになる」

「えっ？」

「と信じられていたのじゃ。仏のものを身に付ければ実は魔が薄れる。」

善なる心が芽生えると思えばよい」

「では崇道天皇は・・・」

「その時は善なる心で逃がしてやったことだろう。」

しかし、一度魔に触れられたらその身体変色し、天界には戻れぬ」

「ではどうして私の舞の中に？」

「金慶鳥には通力があるのじゃ。」

細々とした理由はわからぬがこの舞にしがみついていると助かると思ったのじゃろう」

「ではこの間の舞でうちに戦いを仕掛けたのは？」

「間違えたのじゃ、気の小さい金慶鳥・・・天界から自分を連れ去った魔王崇道天皇・・・」

それより圧倒的な力のあきあを怖がって先に攻撃したのである。だからじゃ、あのようになんか小さくなっている」

「ふふふ・・・金慶鳥さん、あんたうちを魔王と間違えたんどすか」

光の中の金慶鳥、なんか小さくなって小沙希を見上げているのだ。

「さあさ、あんた離してあげるさかい菩薩様のところへお帰り・・・」

と光の玉を消す。

「チチチチ・・・」

と鳴きながら開き放たれた庭に飛び出すがどうしてか
また部屋に戻ってきて舞台の上の小沙希の肩にとまった。

「どうしたんえ・・・早う帰って菩薩様安心させてあげないかんのど
す」

その言葉に耳元で

「チチチチ・・・」

と何か話しているように見える。

「仕方のない鳥さんどすなあ、そんなこというと菩薩様、悲しまは
るえ・・・もうしかたおへん」

といって呪を唱える小沙希。

「さあ、これで話出来るようにしてあげました。みなさんにどうし
たらええか聞いてみなはれ。

・・・そうそう、あなたの名前は？・・・えっ？・・・チチ？なん
か判りやすい名前どすなあ」

と言ってから黙ってしまふ小沙希。

そして、甲高い声がこの稽古場に流れる。

「ミナサン、ウチノタメニ才騒ガセシテホンマニスンマヘンドシタ。

ウチ、チチイイマス」

「ひゃ・・・あの鳥さん、京都弁話しているわ」

と晴明の膝の上で叫ぶひづる。

「スンマヘン、ウチ・・・ウチヲ助ケテクレタオ方ノ言葉ガウツッ
テシマウンドス。

ソレニ・・・コノ小沙希ハンテ不思議ナオ方ドスナア。

・・・アツ、話オカシユウナツテシマイマシタ。

エトト・・・話戻シテヨロシオスカ？・・・（皆が頷いたのを見て）
・・・・・・・・

ウチ、天界カラ浚ワレタアト、ドウナルンカトオビエテイタンドス。

ケンド逃ガシテクレハツタンハ浚ツタ当ノ魔王ハンドシタ。

アツケニトラレタンドスケド、早ウ逃ゲナアカン思ウテ飛び出シタ
ンドス。

デモウチノ身体真ツ黒ニナツテイタンデ、コノママデハ天界ニ帰レ
マヘン。

ソヤケドコノママデハスグミツカツテシマウント違ウヤロカ・・・
ソウ思タサカイ想念ノ世界ニ逃ゲコンダンドス。

ソコツテヤヤコシイ世界ドシタ。イロンナトコ行ツタンドスケド、
コリヤカナワン思イマシタ。

ダツテ自分自身ガ判ランヨウニナツテシマウンドス。

デモタツタ一箇所ダケ明ルウテ温ツタカイ場所ガアリマシタンドス。

ソコニ潜リ込ランダラモウ我慢出来ン眠気が襲ツテキヨリマシタ。

マルデ真綿ニクルマレタヨウナ心地ヨイ・・・ホンマ素敵ナ眠ゴコ
チドシタ」

皆はその流暢なしゃべりと京都弁に驚きっぱなしだ。

「そこがうちの舞どしたんえ」

「へえ、スンマヘン。勝手ニ入ッテシモウテ・・・」

ケンドウチ一生懸命話ソウトシタンエ・・・デモ・・・怖カッタ・・・
」

「ごめんなさい・・・この通りどす」

舞台上の上に舞い降りた金慶鳥に両手を前について深々と頭を下げる
小沙希。

「ケド、アンサンミタイナオ方ガドウシテ？」

「へえ、舞っているうちにあんたから魔王の痕跡が匂ってきたんです。

それにあんた真っ黒でっしゃる・・・てっきり魔王の使い魔そう思
たんどす」

「ソウドスカ、キット魔王ニ捕マエラレタトキノ痕跡ドスナア・・・
コレデ訳ガワカッテ、ウチスツキリシマシタワ」

「うちは、まだスツキリしまへんえ」

「ドウシテドスカ？」

「なんであんた天界に帰らんのか」

「ナンデドツシャロ・・・アンサンカラ奇妙ニ面白イ匂イヲ嗅イダ
カライウタラ怒ラレマス？」

「怒りはしまへんけど、あんたのこと判ったら菩薩様は怒りはり
まっせ」

「あはははは・・・」

「晴明様・・・どうして？」

「そなた達の会話、面白いのう。こんなのは天界でも見られぬ」

「でも晴明様、どうしたら？」

「案ずるよりは産むがやすしじゃ。あきあ、阿弥陀様じゃ」
「というと舞台袖の方をみる。」

この部屋全員が見ることになった本物の阿弥陀如来だ。

ホノグラフのように見えるが立感的であり、銅像でないのは阿弥陀
如来様がニツコリと笑ったからだ。

「沙希よ」

「あつ、はい」

「あいも変わらぬのう」

「えっ？何がどすか？」

「沙希が動けば天も騒がしくなる。今も竜馬や総司達、守護の者たちが沙希を見守って戦々恐々じゃ」

「申し訳ありません」

「よいよい、沙希の行動に私心がないこと存分に心得ておる」

「は・・・はい」

「ところでチチ・・・」

「へエ・・・」

「菩薩様のところには戻らぬのか」

「スンマヘン・・・ウチ・・・ウチ・・・少シ時ヲオクレヤス。何レハカエリマス。

ケンド今ハウチ、コノオ方ノ行ク末ヲ見トキタインドス」

「そうか・・・やはり・・・沙希に会うと皆そうなる。不思議な人間じやのう。晴明・・・」

「はい、あきあは今までもいなかった・・・これからも絶対に産まれ出ぬ人間です。

今では陰陽の術はわたしをはるかに凌いでいるし、

この間覚醒した通力は今回の修行で魔王も大魔王も簡単に消し去る力を得ました。

でもこの二つの力はいづれも天界には預かり知らぬもの。

そして、これだけの女たちを引き付けるいうに言われぬ魅力・・・そして優しさ・・・菩薩様も阿弥陀様も認めぬわけにはいけません」

「やれやれ・・・晴明に叱られてしまったのう。まあよい、私から菩薩様に言い伝えておく。沙希よ」

「はい、チチを頼むぞ」

「判りました」

「チチ！」

「へエ」

「時を与える」

「アリガトウサンドス」

「成長してくるのだぞ」

阿弥陀如来様が消えられてホツとした空気が流れる稽古場に

「小沙希ちゃん！」

という貞子の声が流れた。

「へえ」

「その鳥さんどうするつもりですか？」

「さて、どうしますか・・・チチ、うちの身体の中には

4人の式神と江戸初期から生き残ってきた白虎丸という虎がいるんですよ。

そしてあとは笛の精の龍が2匹・・・チチはその者達と一緒にできるんですか？」

「イエ・・・ウチ八天界ノ鳥ドス。式神ト八相容レナインドス」

「そうですか・・・チチ、今この部屋にいる人にはいいんですが一歩表に出たらあんたはその姿と人の言葉を操ること知られたらあかんのどす」

「ソウナンドスカ・・・ジャアウチドウシタラ・・・ソウドス、ウチ姿消セルンエ」

といって姿を消してみせた。

「うーん、これならいいんと違いますやるか」

部屋の皆の顔を見る。全員が頷くのを見てほっと安堵の笑い。

「チチ、それでいいと思いますえ。けんど二つほど約束してほしいん
どす」

「へエ」
といて姿を表す。

「この家から出たら、うちがええ言うまで姿を表さないことそれと
この世界、

あんたが知る世界とは全然違うんどす。

見れば、チチは何にでも興味を持つ鳥さん思います。

あつ、それともう一つ外では声を出してうちに話し掛けない。

話し掛けるんなら声を出さずにうちの心に話し掛けることどす。い
いどすな」

「へエ、ワカリマシタ」

「わかつたんどしたら、床の間あの木に止まっていなはれ」

「へエ」

といて小沙希の肩から木に飛び移っていく。

そこに

「お待ちどうさまどす」

といて花江達がお膳を持ってお稽古場に入ってくる。

「ほんとはお稽古場ではこんなことしたらあかんのどすが、
お師匠さんの許可を得て、新しいお酒の試飲を晴明様に頼みたいん
どす」

「なに？酒の試飲？・・・わかった。ひづるはむこうに行つてな
さい」

といて舞台から降り膳の前に座る。杯に酒を受け一口飲み込む。

「うっ！・・・」

この間と反応は同じだ。

清明は

「何なのだ・・・これは・・・酒を含んだ口の中から鮮烈な香りが身体中を巡っている。」

・・・これはこの間飲んだ二つの酒とは似ても似つかぬ。

この芳醇な香り・・・これもいけるぞ。飲んだ後の清々しさは希有じゃが

酒をのんでこんな気持ちになったのは初めてじゃ

「そのお酒は・・・」

と声を出したのが操だ。

このおとなしい操叔母がこうした大勢の中で声をだす。驚きで目を白黒させる小沙希。

「そのお酒はあの温泉水を原料としてつくったものです。」

製作過程でいれるものは全て同じ・・・原料の水を代えただけでの違い。

作った杜氏本人も驚いています。

清明様、このお酒受け入れられるでしょうか

「それはわからぬ。わしは過去の人間じゃ、現代の人間とは食生活が違う。」

しかし、あきあに現代の酒を飲まされてきたがその中でもあの二つの酒とともに絶品だとわしは思う」

「ありがとうございます。帰って杜氏にこのまま続けるよう伝えます」

「操よ、設備を大きくしてたくさん作らぬほうがよい。このまま無

くなつたら次の年じゃ。
わしのよくな酒飲みにとってこの酒は奇跡の……いや幻の酒とい
つていい」

「おほほほ……操はん、晴明はんがここまで夢中になるんどすえ
自信をもってこれから作つていつたらええ」

「はい、お母様、判りました」

「それと小沙希ちゃん。五幕目の舞……見事どした。この間の舞
と比べて雲泥の差どした。

これは心の持ち様どす。前ときは不安感で一杯どしたが
今日の小沙希ちゃんは自信に溢れていました。これで小沙希ちゃん
の舞完成どすなあ」

「明日の公演自信を持ってやれます。お婆ちゃまありがとうございます
ます」

「それと麗香はん」

「はい」

舞台隅に座る麗香。

「麗香さんの歌、正直言つて聞いたことおへん。
けんど今回のことで麗香はんの謡、最初から聞いています。努力・
・実りましたなあ。

声に深みが出来て何倍も何倍も心に響いてきます。

小沙希ちゃんとの舞いにも何の違和感おへん。これからの麗香はん
のお仕事……楽しみどすなあ」

「お……お婆様、……ありがとうございます」

両手について頭を下げる麗香に満足そうに何度も何度も頷く貞子。

そしてもう一人

「紫苑ちゃん・・・やっぱりあなたは天才です。その琵琶の音、心に響いてきよります。」

麗香はんの謡を引き立てるんがあなたの琵琶です。

紫苑ちゃんの謡読みはうち聞いたことおへんがその琵琶どしたら、どんな人にも伝わる思いますえ」

「ありがとうございます、お婆様。うちこの琵琶でたくさんの人救います」

そして、その貞子が厳しい顔になって振り向くのは久美子にだ。

「久美子！あなた小沙希ちゃんの舞を見てどう思った？」

「もう呆然として見ていました」

「あなた、それだけですか・・・何にも感じえへんかったんですか」

「いいえ、この方の舞は誰にも真似が出来ないもの。

けれど舞への姿勢、取り組む心は感じて吸収できるもの」

「ふふふ・・・苦労はさせるものどすなあ」

「えっ？・・・」

「久美子はん、何か舞ってみなはれ」

貞子の言葉があらたまっている。

「あつ、はい・・・でもこんな洋装では・・・」

「小沙希ちゃん、頼むえ」

「へえ」

という久美子を手招きする小沙希。

腰を屈めながら高弟達の後ろを通り舞台上上がった久美子、

あがったとたんに着物に代わっているのに気づき両手で口を押さえ驚いている。

でも

「久美子はん、何を舞うんどすか」

といわれてはっとして我に返ってその場に座わりこんだ久美子。

両手をついて頭を下げた久美子。

「 を舞います」

急いで用意する高弟達

小沙希は舞台を降りて祖母の横に座る。そしてその隣に貞子が呼び寄せた蓮昌尼も座っている。

曲が始まり舞いだした久美子。

辞めていたとはいえ身体に染み付いた舞の血が曲をきいたとたん騒ぎ出したのだろう。

さすがに新しい舞の流派を立ち上げようとした久美子だ。

衰えてはいない。小気味いい舞の所作が気持ち良いぐらいだ。

小沙希が横目で祖母を見るとその表情に笑みが浮かんでいた。

舞が終わった。肩で少し息をしているようだがこれは疲れというより一種の緊張感からだ。

「久美子はん、そのまま少しお待ち！」
とってから

「小沙希ちゃん、ごめんやけどもう一度同じ舞を一緒に舞っておくれやす」

小沙希はニッコリ笑うと立ち上がって舞台上がる。

2人での舞、舞は同じだが内容はまるで違う。舞の素人達にもそれはわかった。

久美子は舞のプロだがまるで赤子。

小沙希の舞にどんどん引き上げられて行く。小沙希は舞の神なのだ。神と赤子ではかないようがない。それに人は神にはなりようがない。

舞が終わったとたん座り込んで小沙希を憧れの目で仰ぎ見る。
この間からの小沙希と舞った舞妓と同じ反応なのだ。

「どうぞす？久美子はん。小沙希ちゃんと舞った感想は？」

「もう何も言うこと出来ません。このお方は舞の神です。

だから私をあんな高みまでひきあげていただきました。

あんな舞わたしが一生かけても出来はしません。でも舞の心は私にもできます。

捨てたはずの舞の心、取り戻させていただいたことに感謝します」

「感謝・・・ええ言葉です。

久美子はんがうちを飛び出す前うちはあんたの舞いも才能も好きでした。

けんどあんたには感謝がなかった。そやから飛び出した。うちはそ
うおもうんです。

うちがさつき苦労はしてみるものいうたんは

苦労があんたのギスギスした角をとってくれていたんです。

それでもあんたはまだまだです。気いついておますか？

ここにおる女子はん達は皆、舞いに素人はんです。

けんど皆、小沙希ちゃんの舞の山見とります。

そやからあんたの舞きれいやな思うけど皆に感動与えることできま

へん。

小沙希ちゃんと久美子はんの舞った舞、みなはんそれは必死で見てもました。

あれはあんたの舞全然おまへんどした。皆小沙希ちゃんの舞どした。

久美子はん、中途半端は駄目どす。少しでも舞の心他の人にわからせるよう舞いなはれ。

小沙希ちゃんにはなられへんけど、近づくよう修行しなすんどす」

面映い小沙希だったが祖母の言いたいこと痛いほどわかるから今は何も言わない。

「蓮昌尼はんはどう思われます？」

と聞かれた蓮昌尼、さすがは若い時不世出といわれた舞姫だ。

「はい、久美子さんといわれるこの方の舞はまるで舞の教本を見ているようで

安心してみていられました。

けれど舞を離れていた私と同じように所々にある身体の揺れや物腰の崩れが目に付きます。

そして、一番いけないのは綺麗に美しく舞おうとしているところですよ。

だから舞の心や情感が全く無いというか・・・

まるで人形が舞っているようにしか見えてこないのです。

自分のことを棚にあげてきつく言ってしまうましたが、

まるで私自身を目の前で見ているようで・・・」

と言葉を結んだ。

この人は？・・・と目を見張る久美子。見栄え良く綺麗に舞おうとしたのは確かだった。

少し舞を離れていた所為かぎこちない所作になったのも確かだ。

それを見抜くこの尼さんは？……

「先生！……こちらのお方は？……」
と思わず聞いてしまった。

「久美子はんもよう知つとるはずどす。このお人はあの常盤桜蓮は
んなんどす」

「ええ〜……日本舞踊界で不世出の舞姫と言われた……あの
方……」

「先生！……そのことはもう言わないでください。私も井の中の
蛙でしたから……」
と袈裟の袂を振って恥ずかしそうにいう蓮昌尼。

「おほほほ……小沙希ちゃんを見てしまったら誰でもそう思いま
すわなあ」

「お婆ちゃまの言うこと聞いてたら、なんかうち幽霊か化け物みた
い」
とプツと膨れる小沙希に皆の笑い声が響くのだった。

「弥生さん、どうでした？」
と沙希に聞かれて、

「もう吃驚して……何もいうことできません」
といいながら芸妓や舞妓達にお酌をされている安倍晴明から視線が
離れない。

「小沙希ちゃん、明日の公演これで万全どすなあ」

「へえ、麗姉も紫苑姉ちゃんも良かったし、なんか緊張しますえ」

「沙希ちゃん、みんな期待しているからね」

と言う声がしてあらわれたのが

「あっ！日和子叔母さま」

日和子が祖母の前に座り

「ただいま戻りました」

「おお、おお、お帰り、遅そうおましたえ」

「はい、東京に行つてから用事を済ませて1日でとんぼ返りでした。

それから京都府警に寄っていましたから遅くなつてしまつて・・・
勝枝さん、志保さん、そして皆さん・・・ただいま」

「お・・・おかえりやす」

おじぎする高弟達・・・なんか凄い貫禄だ・・・

「沙希ちゃん、今日警察庁の私に警視総監から電話があつてね・・・
沙希ちゃんに謝つていてほしいつて」

「えっ？・・・長谷部の伯父様が？」

「ええ、あの事件で京都に出向いていた警察官達と京都府警の警察
官に

ポケットマネーで明日の沙希ちゃんの公演の切符を配ろうと京都府
警に頼んでいたの。

でも、あつというまの売り切れでしょ。それが出来なくて謝つてく
れつて・・・」

「でもあの時来ていたの凄い人数だつたんやおへんか」

「そうよね、京都府警を合わせると約600人以上かしら」

「ねえ、まゆみ姉さんそんなに早う売れたんどすか？」

「ええ、舞の公演つてそんなにないと思うけど、とにかく新記録だ
つて」

「じゃあ、前もつて自分達の切符とつていなければ、会場に入れ
なかつたの？」

「そうよ、私たちマネージャーは関係者となるから切符なんていら

ないけどもう大変な騒ぎらしいわ」

「塩尻さん、庄司さん。、あなた達明日の仕事の予定は？」

「えっと私は夕方からです」

「私もそうです」

「じゃあ、これ」

と一枚づつ切符を渡す。

「えっ？いいんですか？」

「いいんです、弥生さんにももう渡してありますから・・・

ねえ、お婆ちやま、久美子さんに切符は？」

「もう手持ちがおへんから小沙希ちゃんに頼もう思っていました」

「じゃあ、はい、久美子さん」

と渡された切符を大事に胸に抱く。

この切符がこれからの自分をつくる・・・そう信じている久美子だ。

その夜、約束とおり沙希の部屋を訪れて京子と智子。

沙希が2人を招き入れて、

顔を赤く紅潮させた2人が部屋を出てきたときにはもう2時間は過ぎていた。

「じゃあ、お姉さん達身体をいとうてください」

と言われると照れたように去っていく2人。

それから一時間後、沙希の部屋をノックする黒い影・・・

ドアが開くとニッコリと笑った沙希の笑顔・・・

「いらっしやい、お待ちしておりましたわ・・・日和子叔母様・・・

」

第二部 第十八話

第二部 完

9：30開演・・・12：00終演となる今日の公演。

2時間前にはマネージャー達が全ての準備を終えていた。

マネージャー達といっても瑞穂とゆりあは『ステーション』に乗り込むので

吉備洋子と吉田礼子（麗香のマネージャー）と志田貴恵（飛龍高志のマネージャー）の3人しかない。

だから京都支社の海外メディア部門の社員から10名が選ばれて臨時マネージャーとして手伝っている・・・といってもやる仕事はしれている。

沙希が作ったビジネスソフトとゲームソフト（妖・平安京 雪の章）と

ナビゲーションシステムのCD・ROMと急ぎ作られた舞のパンフレットを販売するためだ。

沙希は撮影所に行つて『ステーション』を万全に整えるために、二時間前に瑞穂、ゆりあと家を出た・・・もう舞妓姿になっている。

しばらくしてから

「あっ！うち忘れもんしてしもた。お姉ちゃん達先に行つていて・・・」

「わかった、すぐ追いついてくるのよ」「へえ」

ときびすをかえす沙希。

さすがに今日は番記者はいないようだ。
家の門を入ろうとした沙希、スツと寄ってきた二人の男達に囲まれてしまった。

「おまえが女優の日野あきあだな」

「へえ」

「間違いないのだな」

「へえ」

おや？今の言葉おかしい・・・実際は私のこと知らないのではと思う。

「ちょっと来てもらおうか」

「えっ？・・・どこに？・・・」

「兄貴！おかしな女だ、本当にこの女であっているんですか？」

「おう、間違いはない」

と内ポケットから写真を出す。沙希が上から覗くと何のことはないプロマイドとして売り出してる日野あきあの写真だった。

そこにさつと寄ってきた黒いワゴン車、弟分がドアを開けると

「乗れ！・・・」

と兄貴分が沙希の後ろから帯びをトンと押す。

「キャ・・・」

といて車に乗り込む沙希。でも心の中は正反対で

（むふふふ・・・なんだか面白くなりそう・・・あっそっだ連絡しとかなくっちゃ）

沙希が心の通信をするのは受けなれている瑞穂にだ。

（瑞姉！・・・瑞姉・・・聞こえる？）

(あつ？沙希・・・どうしたの？)

(ふふふふ・・・あのね、わたし男達に誘拐されちゃった・・・)

(えっ？・・・誘拐？・・・それって大変じゃない・・・男達かわいそう)

(何よ！・・・それ・・・まあいいわ。

急いで撮影所に行ったら皆を『ステーション』に乗せてくれない？

準備がおわったら・・・瑞姉・・・連絡して欲しいの。

すぐ飛ばすから・・・カメラマンの皆に十分に撮影していてちょうだいって伝えてね)

(わかったわ。こちらでももう撮影所の前よ)

(あつ、このこと家にいる日和子叔母様に伝えてから京都府警で待機してもらってね・・・)

逐一の叔母さまへの連絡はゆり姉にお願いするわ)

連絡が終ったことで腰を深く椅子にすわりなおす沙希。それを弟分が薄気味悪くみていた。

だって沙希の顔に笑顔が浮かんでいたからだ。

瑞穂とゆりあが駆け込んだスタッフルームに小野監督とルーク監督、

それと両国のスタッフがくつろいでいた。

「大変！監督・・・あきあが誘拐されました」

「あきあが誘拐？・・・どのバカがそんなことしたのだ」

「今はわかりません。車で運ばれている途中です」

「おおっ、犯人クレージーね。あきあにかなう人間なんていないのに・・・」

「ほほほほ・・・誰も心配しないんですね」

「あたりまえだよ。こんな茶番。あきあはどうしてる？」

「あっ・・・はい。面白がつてる・・・というより喜んでいます」

「そうだろう・・・そうだろう・・・」

「あきあを捕まえた男達、下っ端みたいなので親玉と陰で操ったものをおびき寄せるつもりです。」

それと・・・みなさんに充分に撮影させてあげると言っています」

「そうだ！・・・こんな面白いこと逃してなるものか。皆用意を早くしろ！」

飛び出していくスタッフ達・・・両監督は各々のモニタールームにかけこむ。

顔を見合わせる2人だがスタッフの後を追ってかけだした。

「ゆりあ、準備ができたらわたし、沙希に連絡するから

あなたは家にいる日和子叔母様にモバイルで京都府警に待機するよ
う言っておいてちょうだい」

「わかった」

「えっ？沙希ちゃんが誘拐された？・・・」

「ええ、それで日和子叔母様には京都府警で待機してほしいんです」

「ちょ・・・ちょっと待ってゆりあちゃん。どうして沙希ちゃんが誘拐されたままなの？」

「なんでも、沙希を誘拐した男三人つて下っ端らしいんです。

親玉と陰で操っているものを誘き出すっていつてます」

「わかったわ、京都府警での待機了解しました。

瑞穂ちゃんに言っつて沙希ちゃんにそう伝えておいてね」

「はい、わかりました」

とモバイルが切れた。

ここは居間だ。母とゆっくりくつろいでいた時にゆりあからの連絡だ。だから貞子も高弟達も聞いている。もちろんまだ早いし今日は休みの婦警達もいる。

杏奈は紫苑と南座へ行くので沙希の用意をしてさつき送り出したのだ。

だから今ゆっくりと居間で貞子達と落ち着いていた。

「しまった！」

と立ち上がった杏奈だが

「いいえ、もし杏奈がそばにいたらかえってややこしい状態になっているわ。

今みたいな余裕は沙希にはなかったと思う」

と日和子がそう言って杏奈をなだめた。

「もう・・・小沙希ちゃんはゆっくり出きへんのどすなあ」

「お母様は心配では?・・・」

「へえ、あきらめました。あの子がなにもせんでも事件があの子を引つ張り込むのは

うちらにはどうもできまへん。

あの子もどうもならんのと違いますやるか。

けんどしゃくなんは、こんなことになってうちらは心配せなあかん。

けんどあの子はシメシメいうて喜んでるそう思うんどす」

全くその通りだった。それも読める日和子には何もいえない。

「おば様! 私もいきます」

「母さん! 私もよ」

「仕方ないわね、緋鳥さん、京都府警の捜査課にモバイルは?」

「はい、この間の事件で配備されています」
「じゃあ、泉、モバイルで連絡して手の開いている捜査員を
会議室に集めておいてくれるよう連絡頼むわ」
「といって立ち上がると
「今からは公私の公・・・京都府警に行くものは制服制帽着用・・・
五分以内」
「と言うとさっと立ち上がって出て行く婦警達。」

残された女達とモバイル一台。薫が操作してゆりあを呼び出す。

「ゆりあちゃん、忙しいところごめんね」

「えっ・・・ええ・・・」

「今はどこ？」

「ええ、奴らの車の上空よ。どうも琵琶湖の方向に向かっているみたい」

「ゆりあちゃん、悪いけどこの映像と声をこのままモバイルに流しておけるの？」

「それは出来ますけど、お婆様には？」

「ふふふ・・・もうとっくにご存知よ」

「あっ・・・さっきの連絡のとき・・・」

「いいから、いいから・・・」

「わかりました」

とゆりあの映像が消え国道を走る黒いワゴン車の映像に切り替わった。

.....

「えっ？・・・あきあさんが誘拐された？・・・」

「どんなバカなんです？そいつらは・・・」

「もう・・・みんなそんなに心配しないんですね」

会議室にいた西沢恵子、ゆうべ夜勤であけてから牛尾刑事の母と待ち合わせして
南座に向かう予定だった。

「そりゃ心配してるさ。・・・でもあきあさんだぜ、武蔵よりも強い。」

犯人がどう料理されるか見ものだと思うけど」

「ふうむ、俺はそんな馬鹿野郎の顔早くみたくなった」
みんな勝手なことをほざいている

逆に考えれば沙希への絶大な信頼が捜査員全員から読み取れる。なんだか嬉しくなる日和子。

その時『ピー』となるモバイル。

捜査課と婦警達が持つモバイルがいつせいに開けられて通信スイッチが入る。

警察用は特別な場合をのけてどのモバイルでも見聞き出来るようになってる。

「今・・・」

とゆりあの声が聞こえる映像は停まったワゴン車に焦点があてられている。

「ゆりあちゃん、男達の顔が見えるようにできない？」

「わかりました、少しお待ちください」

というズームというよりカメラが男達に近づいたのだ。

「あっ！・・・こいつは・・・」

「知っているのか？小野！・・・」

呼ばれた小野刑事・・・あきあに助けられたあの事件・・・
目を覚ましたとき目の前に我娘が・・・だまって手を伸ばす小野に

飛び込んでくる娘。

ふと横を見れば我妻がニツと笑っているのだ。これは夢なのか・・・と思うほどのショックだ。

妻はもう意識もなく明日をも知れぬ身だったはずだ。

その妻の存在を頭から消し去って・・・娘のための父親の哀しい行動・・・

その妻が

「不思議なことがありましたの。三途の川の渡し場で・・・これに乗ったら苦しみが消える。

そう思つて片足を船に乗せようとしたとたん『明美さん』って名前を呼ばれたわ。

振り向いてみればもう場所が変わっているのよ。

お花畑の中で座っている私の隣にセーラー服のとても綺麗な少女がいるんだけど、

綺麗とおもつたのに顔がよく見えない不思議・・・その少女に

『明美さん、あなたは自分の痛み苦しみを無くすために

ご主人と娘さんを置いて逝ってしまったわね、それですか？』
つて言われたのよ」

「お前はどうか答えたんだい？」

「なにも好き好んで逝くんじゃないって答えたわ。

だって大好きな真吾さんと久子を置いて逝かなければならない哀しみ・・・

あなたにわかりますかって言っちゃった」

「彼女、驚いただろう」

「いいえ、わたしがこう答えるだろうって知っていたみたい。

彼女、顔がみえないんだけど『ふっ』と笑つたの。そしてこう言つたわ。

実を言うとあなたの寿命は切れているの。

けれど今度の事件を解決したお礼ということで菩薩様と阿弥陀如来様に

あなたの延命を決定してもらったわ。

最後まで反対された閻魔様にも何とか許してもらって、今私がここに

「何？・・・彼女がそうだったのか？」

「はい・・・」

「やはり・・・」

「あなたはその人を知っているの？」

「ああ、知っている。凄い人だ。あの人は生身の人間だけど凄い力を秘めている。」

君が会ったということその力わかるだろう。

実をいうとこの京都で藤原元方というところでもない怨霊が復活して小さな女の子を浚って生気を吸うという馬鹿げた行為に出たんだ」

「まさか？・・・あなた・・・」

「ああ、久子が奴に浚われて、とんでもない命令を受けた。娘を助けたかったら、晴明神社を破壊しろとな」

「それじゃあ・・・あなたは？・・・」

「いいや、すんでのところであの人に助けられた。」

あなたは娘さんに父親が悪事に手を染めたこと知られてもいいんですか？苦しむのは娘さんですよ。

と涙ながらに説得されたんだ。それからは覚えていない。たぶん彼女に眠らされていたとおもう」

「そうね、わたし見ていたわ。」

お坊様がその観音様の像をもってこられて久子の目の前でお経を唱えられたの。

すると像の中からあなたが現れてそのベットに寝かされたわ」

「じゃあ、そのお坊さんは？」

「すぐに帰られたの」

「久子は？・・・」

「私も見ていたわ・・・パパが観音様の像から出てきたのは・・・」

「じゃあ・・・」

「ええ、わたしもそのお姉さんにパパは久子ちゃんの目の前で起こしてあげるって言われていたもの。」

天鏡さんがよかったねって言ってくれたの」

「天鏡さん？・・・」

「ええ、身体がとっても大きいけど優しい目をしたお坊様よ。」

パパを起こしてくれたんだから・・・」

そんな病院での思い出がふっと思ひ浮かぶが恩人の（窮地？）だ。

「こいつら、橘組の構成員です」

「橘組？・・・あれは解散したんじゃ」

「はい、ほとんど正業についてたんですが、

一部のハネツ返りが芸能プロダクションに出入りしているんです」

「ちよつと待つて・・・」

とモバイルにIDを入れ替える。

画像に出てきたのはまゆみの姿。

「まゆみ社長、少し聞きたいんだけど」

「なんでしょいか？」

「あなたのところのプロダクション、

京都のプロダクションに何か申し込まれたりいやがらせを受けたことは無い？」

「京都のプロダクションですか？・・・そんなのありましたっけ・・・」

「まゆみ社長・・・」

と隣から順子の声が聞こえる。

「ほら・・・映画を撮っているとき、

なんかえらそうな男にあきあの移籍を申し込まれたことが・・・
なんか脅しのような言葉をさんざん並べていた・・・」

「ああ、思い出したわ。確か・・・プロダクション正三郎・・・っ
ていったっけ。

ちよび髭を生やした嫌な奴だった。

・・・あとで調べたらやくざや府会議員とつるんで売春みたいなこと
やっていること判ったから、

警察に調べた書類持っていくと脅しておいたの・・・じゃあ。あいつ
つらが

「そうみたいね、でもあの男達今日で終わりだわね」

「ねえ、飛鳥警視正。沙希ちゃん、楽しんでいるみたいよ」

「楽しんでいる？」

「ええ、車から出るとき一瞬だけ上空に向かってVサインしたも
の」

「ふっ・・・そうだったら、あの男達ただではすまないわね」

「どういうことですか？」

「あの子が真剣だったら男達の家族を考えて遊んだりしないけれど
楽しんでるなら容赦しないわ。

あの子正義感が強すぎるほど強いからね。さあ、早く出かけましょ
うか」

一方、楽しんでいると言われた沙希、男達の囲まれて家に入る。居間らしき部屋で古びた椅子に座らされる。

兄貴分が隣の部屋に入っていく、弟分二人が沙希の後ろで拳銃を構えているのだ。

.....

「見ただけは凄い場面だけど、せつぱづまった感じもしないし、何か滑稽に見えるのはどうしてでしょうか？」

「そりゃ、あきあの力を我々が知っているからだよ」

「あきあの真剣に笑いをこらえている様子をみていると可笑しくて.....」

「おいおい、瑞穂くん。とはいっても危ない場面には違いないんだからね」

「あつ.....あきあからの連絡です」

と静かになつてあきあの連絡の終了を待っている。

「終わりました」

「何といつてきたんだね？」

「はい、向こうの部屋には今入った男をいれて三人いるそうです。展開次第でやつつけるといっています。

ゆっくりする時間がないから遊びたいけどそれが出来ないのので悔しいって。

それから、京都府警の車はサイレンを消し来てこの家の周囲を取り囲んでほしいそうです。

というのはこの家の地下に十数人の女性達が囚われていて男二人が見張つているというあきあの報告です」

「なに！」

緊張が走った。

「瑞穂くん、急いでアメリカ側のゆりあくんに行って今の報告をこちらに向かっている飛鳥警視正に伝えてもらってこないか。」

そして、あきあに連絡して、うちとアメリカ側の『ステーション』を二台づつ

地下室を撮れる様に配置してほしいといってくれ」

「わかりました」

・・・・・・・・・・・・・・・・

パトカーで被疑者の家に向かっていたパトカー6台、後部座席に座っていた飛鳥警視正にゆりあからの連絡が入った。

「えっ？・・・それ本当のことね？」

「はい、今2台の『ステーション』が地下に配置されました。確かに男二人が牢の前で見張っています。」

女性達は身体中、傷だらけだし、下着姿でもその下着が破れて裸同然です。

カメラマンの人達、紳士のようにカメラは男二人を撮っているだけになりました」

「ありがとう、このままの撮影お願いね」というとモバイルを切り替える。

「佐藤さん、今の報告聞きましたね」

「はい」

「では、少し遅れてもいいですから何か上から羽織るものを手に入れてきて欲しいの」

「わかりました。確かこの辺りに制服を置いてあるところがあるはずですよ。」

白衣を12枚手に入れたらいいですね」

「ええ、それでいいわ。お金はある？」

「はい、それほど高くはないはずですから」

「サイズはいつでもいいからね。羽織って肌が見えなければいいから」

「わかりました・・・では」

再度モバイルの連絡先を切り替える飛鳥警視正。

「泉警部・・・あなた達をそこに待機させて正解だったわ」

「えっ、どういうことですか？」

「訳はすぐわかるわ、それより署長はそこにいる？」

「はい皆さんと一緒に・・・」

「じゃあ代わってくれない？」

「はい、すぐに・・・」

署長の顔が写った。

「何事ですか？」

「はい、どうもただの誘拐ではないようです」

と地下の女性達のことを話す。

「何！・・・地下に12人の女性が囚われているですと！・・・」

「はい、誰か撮影所に行つて撮影が終るのを待って、テープをビデオにしてもらってください。」

それと残っている捜査員にこちらに向かってもらえるようお願いします」

「わかりました」

と切って通信を切る。

会議室の中は大騒ぎとなった。2人の捜査員が飛び出していく。証拠となるテープをもらうため、撮影所に向かったのだ。残ったものも現場に向かうために飛び出していった。

「私たちも行つてよろしいですね」

と署長にいうのは飛鳥泉警部だ。

「でも車が・・・」

「いえ、東京から乗ってきた有佐巡査の車がありますので・・・」

「わかりました、じゃあ・・・お願いします」

「奈緒警視は残っていてください」

「私だつて・・・」

「いえ、今は大事な身体ですから」

そう言われると反論もできない。

「西沢さん、奈緒警視をお願いします」

時間があつたのでただ居残っていただけの西沢恵子、

「はい」

と返事をして4人を見送った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

沙希は少し演技をする必要を感じたので小刻みに身体を震わせてみせた。

（おやつ？・・・こいつ震えてやがる・・・なあんださっきまでは痩せ我慢か。

いい度胸の女だとおもつたのに。結局、女は皆同じか）

ドアがカチャツと開いて入ってきたのが、さっきの兄貴分と小太りのちよび髭の男だ。兄貴分が沙希の隣に立ち、ちよび髭男が沙希の前に座る。

「日野あきあくんだね？」

このねこなで声、気持ち悪い・・・こいつが視界にはいるだけ気持ち悪いわ。

こうなったら早くかたをつけてしまっただけだ。

警官隊も先ほどからじりじりして包囲しているのだから・・・。

「どうだね、今の事務所からうちに移籍しないか？」

「へえ・・・そしたらどんな特典があるんどすか？」

「特典？・・・さすがは現代っ子だな、そうだな毎晩俺達が順番に可愛がつてやるつてのはどうだ」

「あほらし、誰がそんな汚いもんいりますかいな」

「何！汚いだと！・・・」

「へえ、うち男が大嫌いなんどす。触られるのも嫌！」

「お前、レズなのか？」

「レズ？・・・男の口から出たら綺麗な言葉でも厭らしく聞こえるもんどすなあ。

それにあんたらは、下司なことしか言われへんのどすか」

「くそっ！、おとなしくしてればつけあがりやがつて！」

内ポケットに手をつ突っ込むと拳銃を取り出したが、その拳銃が天井に向かって飛び上がる。

弟分二人の内ポケットからも飛び出して天井に張り付いた。

「何なんだ！・・・これは唾然とする男達だが、沙希は怒りの頂点に達している。

男三人・・・兄貴分と弟分の二人の身体が吹っ飛ぶように壁にぶつ

かり大の字に張り付いてしまう。

「あ……兄貴〜」

「な……なんだこれは……しゃ……社長〜」

その社長も後ろ向きに倒れ……というよりも腰を抜かしていたのだ。

「ば……化け物だ〜……」

「失礼なこと、言いわんでおくれやす。うちは人間どす」といってからドアにむかって

「そろそろ出てきたらどないどす?……」

ええ、年した男はんがなにをコソコソしとるんどすえ。仕方おへんなあ……」

と指をくいつと曲げるとドアが『バ〜ン』と弾けとんだ。

立ち尽くす中年の男が見る間に持ち上げられ、地上1mの位置に横たえられる。

「あんたもな」

というとちよび髭社長がぐ〜んと引つ張られるように天井に張り付いてしまった。

「あんたら、うちが普通の女や思たんが間違いどしたなあ。

そのの府会議員の魚住はん。委員長いう役目をしてんのに何を馬鹿やっとするんどすか。

あっ、そうどすか、若いときからの女狂い……血迷ってしまわれましたなあ。

女性を浚ってきては言うこと聞かそうおもて薬漬けどすか。

可愛そうに……あの子ら心が死んでしまっはずどす」

「……わしは……わしは府会議員の魚住だ。こんなことをして

ただで済むと思っているのか」

「おほほほ・・・アホやなあ、魚住はん。あんた議員ゆうんそんなえらいもんや思つてますのんか？」

偉いんは一般の市民どす。市民の一票がなかったらあんたはただの悪党どす」

「なにをいうか、わしは市民のために一生懸命やつとるんじゃ」

「へえ」一生懸命女あさりどすか、あんたの浚つてきたおなごはんの半数はあんたの選挙区のおなごはんとはどういうわけどすか。それにあとのおなごはんの全部が京都に旅に来ていたお人どす。

楽しみできていたおなごはんを毒牙にかけたあんさん、うちゆるしまへん」

そういつて指を鳴らすと少し先がとがった鞭が出てきた。

その鞭が魚住の周りを飛び回ると魚住の悲鳴が部屋に響いた。

指を鳴らすと消える鞭、

「今の魚住はんを痛めつけるためにやったことやおへんえ。

ほんとはそうしたかったんどすが、うちはあんたと同じになるの嫌どす。

・・・魚住はん痛いどすやろ、この痛みよう覚えとくんどすなあ。

この痛み明日には消えてます。けんど嘘をついたら・・・考えてもあかんのどすえ。

・・・痛みがぶり返すんどす。そやから、あんたは取調べに正直に答えな悲鳴どすえ。

それともうひとつ面白いもん、見せてあげまひよか」

というテレビのスイッチが勝手に入り、

しかもそこには・・・自分達の姿が写っているではないか。

動かせる首でキョロキョロするがカメラらしきものはどこにもない。

「カメラ探しているんですか？・・・ふふふ、うちがそんな直ぐに見つかることしまへんえ。」

じつ言うど日本のカメラマン6人とアメリカのカメラマン6人がこことは違う次元から撮つとるんどす。

最初から映しているんどすえ。監督は世界でも有名な小野監督とジョージ・ルーク監督どす。

この映像が一般家庭にながれたら・・・。勿論、うちの力は消してからどすけど」

と言っているはいるが、その言っている意味が良く判らない男達。

「さあ・・・」

と九字を切り真言を唱えると沙希の身体から小さな光が飛び出してくて

わざとか男達をしげしげ見るようにぐるりと一周してから、沙希のところに戻り正体をあらわした。

大きくて真つ白な虎だ。

「ひ・・・ひえ〜」

そんな悲鳴が男達から漏れる。

「白虎丸！地下の男達二人を捕まえてここに連れてきなさい。女性達を驚かさないうようにね。」

懐に入っている拳銃からはもう玉を抜いておいたから大丈夫よ」

と右手の平からバラバラと玉が床に落ちる。

とんでもない女を・・・と思ってももう後の祭りだ。

「社長が悪いんだぞ！こんな女をわしに取り持とうとしたから・・・」

「そ・・・そんな！言ってきたのはそっちからじゃないですか」

こんな痴話げんかが始まった。

その時だ。ドドドドと多くの靴音が近づいてきた。

開け放されたドアから顔をみせたのは飛鳥警視正と泉と京、ケイと洋子の東京組と京都府警の刑事達が率いるヘルメットの警官達だ。

「沙希ちゃん、やったわね」

「沙希！よく我慢したね。わたしだったらこのこぶしでぶっ飛ばしてやったわ」

「泉姉だったらそう言うと思っていた」

「沙希！この男らこれで一生暗いところから出られないから一発こここでぶっ飛ばしておこうか」
と京もぶっそうなことを言う。

「ば・馬鹿な・・・一生暗い所だと？・・・べ・弁護士を呼んでくれ！」

すると洋子が

「あんた！何を馬鹿いつてんのよ。国家反乱罪に弁護士がつくと思っうの？何甘いこと言ってる！」

「こ・・・国家反乱罪？・・・」

「警視正、今のは本当なんですか？」

東京の女刑事の荒っぽい言葉に目を白黒していた京都府警の刑事、その中で捜査一課の大八木部長刑事が日和子にこう聞いた。

「ええ、このことは一般には知られていないけど、この間の京都の事件の後、

国会で決まったのよ。沙希ちゃんのこととは国家機密、この事は沙希

「ちゃんも今まで知らなかったのよ」

「いやだなあ、私が国家機密だって・・・」

「沙希ちゃん、こんなことする奴がいるのよ。」

普通の法律だったらこの男達、数年で出てくるわ。

そうしたらこの犯罪の傾向として又、再犯は確実ね」

「うーん、女性のことを考えるとそれも仕方がないか・・・」

「国家反乱罪・・・罪としてはどうなるのですか？」

と今度は牛尾刑事。

「うーん、超法規的罪状としか聞いていないわ。一生出られないのは確かだけど、

弁護士はつけられないし・・・あとは公安にまかせるしかないわね」

「公安？公安が出てくるのですか」

「そうね、国家犯罪なもの。ローラー作戦を実行してどんな小さな犯罪も見逃さないでしょうね。」

あと土地・建物や財産は全て没収というのは聞いているけどね」

聞けば聞くほどんでもないことをしたと悔やんでも悔やみきれない。

「わあ！」

と言う声で振り返ってみれば白虎丸が警官達の間をぬってのしのと歩いてくる。

口には気絶した男二人が襟首を鋭い牙にはさみこまれているのだ。沙希の足元にドンと置くとスツと光になって沙希の身体に入る。

「大八木さん。私、あの魚住という男にだけ経絡をつきました」

「あつ、じゃあ、東京の銀行強盗やあの殺人集団の首領達と同じ・・・」

「はい、嘘を言ったり考えたりすると身体中、痛みが走るようになっていきます。ええ、一生です」

「そうですね、でも明日には公安に引き渡すことになってしまいました」

「だからそれまでに調べてほしいことがあるんです」

「えっ？それは・・・」

「もう少し・・・彼女達が上がってくるまでもう少し待ってください」

そこに駆け込んできた佐藤婦警。

「遅くなつて申し訳ありません」

「いえ、いいのよ。それより早く地下へ・・・」

飛鳥警視正を先頭にかけていく女性達。

沙希は座ったまま動かないが

向こうの部屋から顔を出した小野刑事に声をかける。

「小野さん、その部屋に隠し剤が隠されています。よく探してください」

どきつとしたちよび髭社長が天井で目をキョロキョロと動かしているのだ。

「小野さん！」

「おおい！小野！」

と沙希を守るように立つ大八木部長刑事が声をあげた。

「何でしょうか」

「小野さん！照明器具の周りの天井板を破ってください」

「はい！わかりました」

と急いで引っ込んで約5分……

「ありました、ありました……器具がある天井板にびっしり乗っています。」

隣の天井板の一枚は取り外していた後が残っています」

「写真には撮ってあるのか」

「それは心配ありません。自分はいつもデジカメは携帯していますので」

「大八木さん！京都府警の刑事さん優秀ですわね」

「いやあ……」

とテレ笑いだだが部下をこう誉められて凄く嬉しいのだ。

「小野さん！……もう一箇所、調べて欲しいところが……」

「えっ？どこでしょうか？」

「これ、本当にありきたりどす。トイレの水槽の中なんどす。」

密輸した拳銃が五丁ナイロン袋に入れられて沈んでいますえ」

「拳銃が？……わかりました……」

ととんで行く。警官が数人後を追った。

「大八木さん、拳銃のことはあの二人には寝耳に水え。」

その壁の兄貴さんが拳銃二十丁の密輸を弟分二人に手伝わせてやったことどす」

「とんでもない奴らだ。女性の拉致誘拐の上のレイプ、覚せい剤の密輸と所持、

その上拳銃の密輸ですか。この罪だけでも無期懲役に近いのに国家反乱罪いう重罪が重なったらこりゃもう駄目だわ」

男達がつくりして言葉も出ない。

こうして晒し者のようにそのままの形なのは、

いくら重罪犯でも自分のやったことの反省を促すことだった。それが判っているから大八木部長刑事も何も言わない。

「押収しました」

と小野刑事が持ってきたのは一丁ずつ油紙に包まれ、ナイロン袋に入れられた拳銃、

一丁一丁に二箱づつの玉が入っている。

「こんな物騒なものを……」

といっただけはっとしてあきあを見る大八木部長刑事。

「確か先ほど二十丁言われましたね。ここに五丁と天井に三丁の合計八丁か……」

おい！浅沼！……あとの十二丁をどこへやった！」

「お……俺は……何も知らねえ」

兄貴分……浅沼公平はしらばっくれる。

「うふふふ……大八木さん大丈夫です」

と言っただけから鋭い目で浅沼を見る。視線を外そうとするが自由にはならない。

おまけに頭の中を何かが這いずり回っている気がする。

恐ろしい……恐ろしい……なんと恐ろしい女なんだ。

弟分たちもそうして眺めてから視線を外す。がっくりと首を落とす弟分。

「大八木さん、メモ用紙もってはいりますか？」

「あつ、何かわかったんですね」

といっただけ内ポケットから警察手帳をだして空欄のページを開ける。

そこに美しい文字でスラスラと書き始めたがピタッと止めてから

「浅沼はん」

と京言葉に戻って

「うちに恐ろしい女やて三回も思いましたなあ。鬼畜のようなあんさんにいわれとうない言葉どす」

読まれている・・・心を読まれているのだ。目を真ん丸くした浅沼だが

「そつどす、うちにはあんたの心の中すべて読めているんどす。けんどうち、こんな力普段は絶対使いまへん。自分で封印していません。

けんどあんたらみたいな悪党に対して封印を解くんどす」といってから文字を書き始めたが

「今、心を読まれんとこ思て他のこと考えようと思いましたなあ。

そんなことしても無駄どす。今あんたが売った先の人のデータが次々流れこんどります」

と言いながら書き上げた警察手帳を大八木に渡す。

「おお、判りましたか・・・こ・・・これは・・・」

「買った日付で名前と電話番号・・・そして屋号・・・一番最後は今隠している場所どす。

大八木さんが驚かれたんはその屋号どすな？」

「はい、この店のほとんどが昔からある京都の有名店です」

「ほんとお馬鹿さんばかりどす、京の伝統にあぐらをかきはって・・・

大八木さん、このお人達実は共通の趣味をおもちなんどす」

「趣味？」

「へえ、銃の愛好家の会員さんばかり・・・」

「えっ？銃の愛好家？……でもこんな本物持ったら……」
「ええ、やっておられるんどす。嵐山や日本海……銃を撃っているんどす」

「そんなことやられたら……」
「へえ、そやから今後そんなあほなことできんようにきついお灸をすえてやっておくれやす」

「わかりました。おおい、山下！お前先に帰って署長に報告してから礼状をとる準備をしておいてくれ。」

それとこれを捜査員にわたる数だけコピーしてな」
とメモしてもらったところを破って山下に渡す。慌てて飛び出していく山下刑事。

もう男達はだんまりだ。

いつのまにかいなくなっていた牛尾刑事が白衣の女性の腕を肩にまわして部屋に入ってきた。

それから次々と女性を助けて婦警や女性捜査官達がはいつてくる。椅子になんて座らせる状態ではないので壁にもたれさせて絨毯の上に座らせる。

そんな中、泉が世話をしていた女性が急に震えだした。

「く……くすりを……」
そんな声を出して床を這いずる。

痛ましそうな顔をして初めて椅子から立ち上がった女性に近づいて腰を落とした。

床に落ちた振袖を必死に掴む女性。

「可愛そう……こんな身体にされてしまいはって」
と青黒くなった腕の注射あとをさするのだ。

「大八木さん、何かナイロン袋みたいなあらしまへんか」

「ナイロン袋？何するんですか？」

「へえ、この女性達から覚せい剤抜いてあげるんです」

「身体から覚せい剤を抜く？・・・そんなこと出来るんですか？」

「へえ、前のうちには出来へんかったんですが、

この間の事件で得た通力で出来るようになったんです」

「あきあさん、これでよろしいか？」

と牛尾が持ってきたのは青いごみ袋。

「そつどすなあ、これでいい思います」

と、いつて立ち上がった沙希。

「今からうちの姿、変わりますけど驚かんでください」

と、いつて唱える真言・・・すると第三の目が開く・・・

その目から出た光が女達を照らすと一瞬にして光につつまれるのだ。

目を閉じたまま立ち上がる女性達・・・破れた下着が足元に落ちると

一瞬にして消えてしまう。そして身体を覆い隠す白衣も足元に落ちたその身体には

前ボタンの白いワンピースにかえられていた。

真っ白な純な姿・・・これは沙希の女性達へのプレゼントだ。

それからゆっくりその場で回りだす沙希、その目は閉じられた。

回転が次第に速くなり・・・沙希の姿が消える。

そしてその空間から現れた仏像・・・しかし、それは仏像ではなかった。

それは本物の仏・・・薬師如来の姿だ。

薬師如来は持っていた壺の蓋をとり、

黄色い粉を一つかみつかむと光の中の女性達の上に振りかけた。すると粉はまるで水の中に沈んでいくように光の中の女性の身体に消えていく……。

光の中の透明度が段々と白濁し……白濁というより真っ白になった時その空間が女性達を離れ、

ダンボールにセットした青いゴミ袋の上に移動した。

そして空間が圧縮されていくと下方から白い粉が袋の中に落ち、空間も小さくなっていく。そして空間が消えたときダンボールの青い袋には

ダンボールの1/4くらいの量の白い粉が入っていた。

「前！」

といって元の舞妓姿に戻った沙希。

「凄い！……」

そんな声があちこちから洩れる。早瀬の女達にしてもそうだ。

「これが彼女達の身体に入っていたんですか？」

「へえ、身体の隅々にあった薬をその影響力と共に粉として全てを身体から抜いてあげました。

どすから薬によって体や心が覚えていた記憶はもうありません」

「良かったわ、沙希ちゃん。覚せい剤を身体から消せて……」

「ええでも、彼女達の受けた心の傷は直せません」

「私、覚せい剤を抜いていただいたことで何とか生きていけます。

薬が切れた苦しみと薬をもらったあとの浮揚感……180°反対でしたがそれは地獄でした。

それを身体や心が覚えていないうれしさはもう飛び上がるほどです。ありがとうございます」

「沙希！さっきの仏様は？」

「薬師如来様どす。お力をお借りしました」

「とってから女性達を見る。女性達も自分を助けてくれた女性だ。縋りつくような目で全員が見ている。」

「大八木さん、先ほどうちが待つていてほしいと言ったこと今から説明します。」

「これから彼女達に聞くことをよく聞いておいてほしいんどす」

「わかりました。・・・おおい、皆・・・手を止めて集まってくれ」

「そう部長刑事にいわれて集まってくる刑事や警官たち。」

「何事か・・・とあきあを見つめる目・・・目・・・。」

「ねえ、あなた達に少し聞きたいことあるんどす。よろしいんどすか？」

「はい・・・」

「ごめんえ、あなた達がもしかして忘れようとしていたかもしれへんけど、

「彼女達の魂を天に帰してあげなくてはならないんどす。わかっておくれやす」

「女性達は下を向いたが」

「ええ・・・」

「とはつきり返事をした。」

「あの六人の女性達がどうなったか知っているのね」

「はい、男達があとで話していましたから」

「どこに遺体を埋めたって言うていなかった？」

「はい、．．．けれど、そうは遠くないところだと思います。」

男達が帰ってくるのにそんなに時間がかかっていませんでしたから」

「わかった．．．ではどうして殺されるようなことに？」

「赤ちゃんです．．．彼女達妊娠してしまったから」

そんな会話を聞く刑事たち．．．予想もしなかったことだけに聞いたシヨックは大きい。

男達を睨み付ける視線も多くなる。思いもしなかった言葉だけに．．．

「沙希ちゃん！今のは？．．．」

日和子の言葉に頷く沙希に．．．

「そんなあ．．．」

とつい声をあげてしまう有佐ケイ。

「じゃあ、彼女達のことを知ってる人．．．手をあげてほしいんです．．．」

そういうと恐る恐る手をあげる三人の女性。

そのうちの一人が消え入るような声で

「一人は．．．私の．．．私の姉なんです。」

私．．．姉を見殺しにしました。恨まれても仕方ないこととしてしまっただわ」

「石川綾美さん．．．あなたのお姉さん怒っていいへんえ。」

それよりあなたのこと心配で心配で仕方がないんです」

「え？．．．」

「逢わせてあげまひよか」

「え？．．そんなこと出来るんですか？」

「ええ」

というと壁際にむかって金色の光を掌から出す。

すると六人の女性が座り込んだ女性達を見ているのだ。

「きゃ〜」

「お姉ちゃん！．．．」

「先輩〜」

そんな叫び声上がる。

「うっ〜」

という声も晒し者の男の間から洩れている。

それだけではなく怯えまくっているのが刑事達に手にとるように判る。

目の前の女性達のことを思うと刑事といっても人間なのだ。今までの悪辣さが我慢できない。

ガタガタ手を震わせているものもいる。許されるならば今、思いっきりぶん殴ってやりたい。

そんな気持ちが判るだけに余計に女性達に対して優しい気持ちになつて

「あなたがお姉さんの文江さんどすえ？」

「はい．．．」

「妹さん、お姉さんが亡くなった事は自分のせいだと自分を責めておられるんどすけど、

あなたから声をかけてあげて．．．」

文江は座っている妹の綾美に精一杯の優しい笑顔をむける。

「綾美ちゃん、今はもうあなたに触れられないけど

出来るものならばあなたを思いつきり抱きしめてあげたい。

お姉さんね、死んだ後はずっとあなたを見守ってきたの。

自暴自棄になつていくあなた・・・見ていてとてもつらかったわ。でもこらえきれない哀しみを味わったあなたはこれから強くなるの」

「文江姉さん！・・・でも私こんな身体になつちゃったわ。肉体は治つても心は何もかも覚えているのよ・・・」

「綾美ちゃん・・・だから・・・だからこれからはそのお方についていきなさい。

そのお方は仏を内に秘めるお方・・・そのお方についていけば、きっとあなたは幸せになれる」

女性達が見つめる沙希はその素晴らしい微笑で女性達をみつめるのだ。

その微笑の前で女性達の心は癒されていく。

「沙希ちゃん、私残念だけどあなたの舞の公演にはいけないわ」

「仕方おへん」

「今、溼にも伝えておいたから待っていてくれるの」

「じゃあ、・・・」

「ええ、診察を終えたら、ゆっくり温泉に入れてあげるから」

「お願いします」

「沙希！そういうわけでわたし達もいけないからね」

「おば様・・・ましろちゃんを置いていきます」

というと沙希の身体から出てきた光が白い蝶にかわってからましろが姿をあらわした。

「ましろちゃん。この女性達の遺体の場所、わかりましたね」

「はい、間違いなく・・・」

「京姉、泉姉。このましろちゃんの案内でこの方達の遺体を掘り出

「してあげて」

「うん、わかった。ましろちゃん、案内をお願いするね」

「はい、まかせてください。泉様」

「あなた達を天に導いてあげる」

「といって沙希が真言を唱えてからしばらくすると窓から光が入ってきました。」

その光の中から月代をそりあげたりりしい若侍が出てきた。

「あつ、沖田様」

「沙希殿、先日会って以来ですか・・・」

「総司さまは昨日も希佐ちゃんのところか・・・」

「はい、どうも1日に一度剣を振らないと我慢が出来ませんから・・・」

「沖田さん！」

「ああ・・・大八木さん。どうです？喉のほうは？」

「いえいえ、なんともありません。でもさすが沖田総司さんだ。」

新撰組で何度も実践されたあの技、とてもかまいません」

「いやいや、私よりこの沙希殿ですよ。」

江戸の昔から強いと言われる剣豪の中であなたが一番強い！と私が言ったことから

あの日の試合になつて沙希殿は見事、武蔵殿を打ち負かされた。

そして希佐殿のあの恐ろしい剣技もかわされ、

おまけに一度見ただけのその剣技で希佐殿をも負かされた。

あなたの強さはそれは遙か上の我等が届かぬものでした。

幕末から貴女が帰られたあと近藤さんと土方さんが言っていました
つけ。

『わしは沖田君との立会いを見ていてつくづく立ち会わなくてよかった』

という近藤さん……ふふふ……あの口が悪い土方さんはねえ」

「どういわれたんどす?」

「『あんな化け物、もう出会わずにすむと思うとほっとする』。あははは」

「土方様と近藤様も、もう……」

「あははは……私が言ったこと内緒ですよ」

「でも今日、どうして沖田様が?……」

「ええ、今天界がバタバタしているから、手を離すことできないんです」

「えっ? なにかあったんどすか?」

「あなたのせいですよ」

周囲のもの皆が、目を大きくして二人を見ているし耳も澄ませて一心に聞いているのだ。

「わたしの?」

「ええ、実はあなたの力の素……あなたを存在させたのが誰かっ
てことが判ったのです。」

あなたの力の元……いやあなたのその存在自体が天界に預かり知らぬことでした。

不思議に思われた菩薩様がお調べになられたのです。

そして、ようやくわかりました。宇宙の意思……そのものでした。

この宇宙の創世記、たった一つの生き物……小さな微生物……それが人間の素でした。

星々が誕生し、時の流れとともに環境の変化があり、その変化が生物を産み出す。

人もそうして誕生しました。でも人が多くなればなるほど戦いがあ

り、

それと共に限りない欲を誕生させていきます。

欲が戦いを・・・そして、戦いが欲を産む。それが人間の血の輪廻です。

でも人間は愚かであり、しかしそうではない種もいた。それが女という生き物でした。

平安時代に安倍晴明殿が戦いを無くす為という術を一人の女にかけたのです。

女しか産まれぬ一族・・・女しか愛せぬ性・・・でも一族を絶やさないために

好きでもない男に身を与えねばならぬ哀しみ・・・こうして今の世まで続いた。

そうですね、お園さん

「はい、そのとおりです」

「このお園さんは平安期に安倍晴明殿に術をかけられた沙希姫殿を産んだ母でした。

その母が転生して幕末期にお園として生をうけた。

そして再び転生してこうして飛鳥日和子という沙希殿の叔母御としてこうしてここにおられる。

そして沙希殿は男として生を受けられ・・・」

えっという顔をする晒し者の男達・・・呆然と沙希を見るのだ。

「けれどその優しさのため男達から徹底的な制裁を受け、そして幼心に死を選ぶことになりました。

けれど死ねませんでしたね。残ったのは喉の傷・・・

それが沙希殿の女として転生するための一歩となった。

後年、沙希殿は早瀬一族の長の長女に逢い、長にも出会ったことが二つの性を持つ沙希殿の誕生となります。

長の自殺した次女・・・瓜二つだったその女性の名が早瀬沙希。その自殺も普通ではありませんでした。

仏に選ばれ沙希殿と合体するための死であり、覚醒した力を発揮できるようにするためでした。

でも沙希殿は成長しつづけます。通力というとんでもない力も得ました。

これ、全て天界にも預かり知らぬことなんです。

だから、菩薩様がお調べになった。そしてわかりました。

沙希殿は・・・いえ、沙希様は天界より遙か上・・・

いわば宇宙の大いなる意思がつかわれたただ一人の人間だったのです」

「総司様！うちその先は聞きとうはおへん。うちはふつうの人間です。

赤い血が通った人間なんです。いろんな力あるの仕方おへん、うちあきらめました。

それによしんばうちがその宇宙の意思とやらから産まれたとしても今は人間なんです。

もういわんといっておくれやす」

「わかりましたよ・・・沙希殿。さすが我ら天界の全てが惚れ込んでいるお方だ。

ふふふ・・・わたしはそう言われると思っていましたよ」

「もう、総司さま・・・」

と片手でぶつまねをする沙希、その場にいた全ての男女がいや、天界の総司までもがドキッと胸を熱くしたのだ。

この人と一緒にいる。浚われていた十二人の女性全てがそう決心した瞬間だ。

例え元に戻ったとして以前の自分ではない。
さつき沖田総司から聞いた早瀬一族になら私のいる場所があるに違いないのだ。

「では総司様、この子達を天に連れて行ってあげてください」
「はい」

と前に進むと

「もうお別れはすみましたか？」
「はい！」

と言う声に白い光が総司と六人の女性をつつみこむ。

そして総司が十二人の女性に

「さつき言い忘れましたが、早瀬一族は血の結びつきだけでなく、女の哀しみをもった女性なら温かくむかえてくれるそうですよ」と言ってから

「では、沙希殿」

と挨拶すると白い光が小さな光の集合体になり、
そして、バラバラになって窓から外に出て天に上っていく。

「おねえさん！・・・さようなら・・・」

「元気に生きていきます・・・」

窓に走りよってこんな声を張り上げる女性達・・・光はすでにもう消えていた。

「沙希！開演まであと30分よ」

「きゃっ・・・いけない・・・」

「パトカーで送らせましょうか」

「いいえ、今は事件の最中どす、個人の都合でパトカーを動かしてはいけません。」

うち、飛んでいきます」

「そうですね、そのほうが早いですね」

「じゃあ、沙希ちゃん。あの男達を」

「へえ」

という指を鳴らす沙希。男達は警官隊の間に次々とおちてくる。

とんでもない悲鳴をあげた魚住剛三・・・

「大八木さん、今の悲鳴どす。嘘を言ったら今の悲鳴あげるんどす」

「うあははは・・・痛いというのは気の毒だが今までの悪事を思えばまだまだ足りませんなあ。

・・・畑長さん、取調べはあなたの役目だがこれ若手だけでもやれそうだな」

「八木長さん、わしはこんな取調べは今だかつてやったことがないんだ。

この間の東京での銀行強盗の取り調べをわしが古くから知っている警部がやったんだが、あとで電話してきて

『こんな楽で面白く、そして小気味いい取り調べやったことなかったよ。

どうだうらやましいだろう』なんていわれちゃいましたね。

今畜生思いましたが、もう一生機会が無いと思っただけであきらめていました。

それがこの間の殺人集団です・・・だが又しても他の取調べでどうにもならなく

首領達を警視庁に取り上げられてしまいました。だから、今はもうワクワクしていますよ、

あんた方、娘さん達には聞かせたくない言葉だが取調べで徹底的に吐かせるからそれで許して欲しい」

捜査員達のこの事件へのやる気は凄いものだ。

だから、沙希は安心してこの現場を離れることができる。

「ましるちゃん、あとをよろしくね」

「はい、あきあ様。ご安心を・・・」

その言葉を聞くとニッコリ笑って1mほど浮き上がりそのまま窓の外まで移動する。

窓の近くにいた12人の女性達は窓をあけて表の沙希を見るのだ。

思いつきり大きく目を開ける馬鹿な男7人。

沙希は片手を少し振ると、飛び上がった。

歓声をあげる女性達・・・恩人であり、いまやあこがれとなった人を見送るつかのまの幸せなひとときであった。

沙希が南座に着いたのは開演10分前となっていた。

小走りで控え室に急いだ沙希を待っていたのは見知ったというより京都の家にいる女達であった。

廊下の両側に一列にならび拍手して沙希を迎える。

吃驚したのは沙希だ。

「どうしたんですか？」

「沙希ちゃんが来るのを待っていたのよ。」

家にいるよりもここでいたほうが良いと思って皆でそれぞれのモバイルを見ていたのよ」

「なあんだ、見ていたんですか？」

「あたりまえよ、最初の報告があったとき皆がいたんですからね」

薫がいう

「でも本当に心配したんだからね、沙希」と抱きついてそういうのは着替えもメイクもバッチリの麗香だ。

「ごめんね、麗姉・・・そして、皆ごめんなさい」

開け放たれた控え室の中では祖母が高弟達を連れてニコヤカに笑っていた。

廊下に出てきた祖母に抱きつく沙希。

「うち、小沙希ちゃんの強さが判っていたけどそれでも心配でたまりまへんどした。

今回のこと小沙希ちゃんを狙ったことどすから小沙希ちゃんのせい違います。

そやからいうて自分から喜んで事件に飛び込んでいくことはござんせん」

「ごめんなさい、お婆ちゃま」

「けんどうよう我慢しました。途中から小沙希ちゃんが怒りで男達をどうにかしてしまふ思て、それが気がかりで気がかりで・・・」

「うちが我慢できたの、あの六人の女性がうちに訴える目どした。男達への復讐なんかひとつもないんどす。

ただただ願うは後に残った女性達への無事と幸せなんどす」

「小沙希ちゃん!・・・あの子たちは？」

「ふふふ・・・お婆ちゃまはそういう思てました。

あの女性達はうちの病院は運ばれてくるんどす。

そやから澪姉はここに来てへん思うんどすけど」

「そういえば明子先生はさっきまでここにいたんだけど

悪いけど地下の病院に行かなければならないから沙希ちゃんに言っ

ておいてって帰られました」

「沙希ちゃん！弥生さんが『せっかくもらった切符だけど明子先生に付いていきますから、沙希さんに謝っててください』って明子先生の後を追ってかえっていったわ」

「謝るってそんなこと・・・さすがうちの姉ちゃんや思うて嬉しおす」

「じゃあ、もうすぐ時間やから席に行きまひよか」
と言って背中を見せて歩こうとするが一度止まると

「小沙希ちゃん、うちあんたがどんな生まれであつてもうちの孫どすえ」
と言つて歩き出した。後を高弟達を守るように歩いていく。

「沙希ちゃん、おばあ様はね、
沙希ちゃんが仏様よりもつと上の世界から来たと知つてショックだったの。
天界から使命をもつて送り込まれたと知つてもショックなのにより上からと判つたでしょ」

「そんなあ・・・うちはうちどすえ人間に間違いないんどす」
「うふふふ・・・お婆様はわかつたのよ。いくら偉いところからいつても」

沙希ちゃんは今以上でもないし、以下でもないわ。

お婆様の大好きな小沙希ちゃんに間違いないって・・・」
といつてから

「さあ、わたし達も行きましようか」
と薫も歩き出した。

「ねえ、律ちゃん先生。薫姉さんも言うときはきちんとこのね」と廊下にひづるの音が響いたものだから
キツとまなじりが上がった薫が振り返った

「こら！ひづる！．．．あんたこの早乙女薫を最近侮っているでしょ」
「ううん、そんなことないわ。女優として大尊敬しています。．．．けどそれ以外は．．．．．」
というだけで薫のそばをすり抜けると走り去る

「こら！ひづる！．．．それ以外はつてなによ．．．」
と走りかけたが回りのものが止める。

「ほんと薫姉つて子供みたい、妊娠中つてこと自覚がないのかしら」
「違うよ、沙希！．．．薫姉さん、あの囚われていた女性のことを知って本当に．．．
もの凄く怒っていたんだから。」

だから、彼女達の今後の生きる道をいろいろと考えていたみたい。でもその考えが上手くまとまらないので少しイライラしていたの。ひづるは子供心に薫姉さんの苦しみを知って、
ああしてわざと喧嘩をふっかけて気分を紛らわしているのよ」

「全く．．．お姉さん達つたら．．．」
そんな言葉にえっ？と思つて沙希を見たら大きな目が潤んで大粒の涙が頬を伝わっているのだ。

はっとして慌てて薫が消えた方向を見直す麗香、その背に
「グスン」

と鼻をならしてから

「うちお化粧をなおしてから舞台にいきますさかい、舞台の袖で待ってておくれやす」

そう言つて杏奈と共に控え室に入ってドアを閉める。

そうだった。

・・・一番苦しんでいるのは他人の苦しみや哀しさを自分のものとしてしまう沙希なのだ。

だからあの女性達きつと幸せになれる・・・だって沙希が付いているもの。

そして、わたし達早瀬一族がついているんだもの。

廊下を曲がって階段を上がろうとすると二つの人影・・・薫とひづるだ。

「ねえ、沙希ちゃん大丈夫だった？」

と心配そうな薫の顔。

「麗香姉さん・・・本当に沙希姉さん放っておいてもいいの？」

ひづるの心配げな顔・・・早瀬の女になつてほんとうに良かったと思つた瞬間だ。

「大丈夫よ・・・あの沙希がこんなことでどうなるもんじゃないわ」

「うん、そうよね」

「薫姉さんも、ひづるも沙希のこれからの舞をじっくりみとくのね。この前の時からいろんなことがあつたわ。

そして今日・・・女性達の怒り、苦しみ、哀しさを味わつたところよ。

今日の舞・・・それは凄まじい舞になると思つたの」「
といったところにバサバサという羽音・・・」

「あら、チチ・・・あなた今日どうしていたの？」

「へエ、ウチ。朝早ウ菩薩様ニ呼バレテ天界ニ行ッテイタンドス。ソシタラ、アンナ騒ギドスヤロ。」

シモタ思テモ後ノ祭リドス。

菩薩様ニモ今八帰ラヌホウガ良イ言ワレマシテ天界デ様子ヲ見テイタンドス。

ソシテ今、沙希ハンニ会オウ思テ部屋ニ入口ウトシタンドスガ・・・イケマヘン。

怒リト哀シサト苦シサガ結界ノヨウニナッテ、ウチヲ拒絶シトルンドス」

「チチも心配しないで、沙希は舞でそれらを出し尽くすわよ」といつてから大きな声で

「沙希！・・・時間よ・・・」
と叫んだ。

しばらくしてドアが開いたと思うと沙希が出てきた。後に杏奈が続く。沙希は笑みさえ浮かべている。

「あら薫姉もひづるちゃんも・・・チチまでどうしたんどす？」

「ウチドウシタライインドスヤロカ？」

チチがそつ沙希に聞く。

「うちも麗姉も駄目どすやろ、ひづるちゃんは式の結界で一番あきまへん。」

杏姉が一番いいんやおまへん？」

「へエ、ジャア」

と杏奈の肩に飛び乗るチチ。

「チチ！約束よ。まずは姿を消しなさい」

「へエ」
と姿を消す。

「それから声を出して話さない。もし話し掛けたかったら感応の術で杏姉の心に直接話し掛けなさい」

「へエ」
と杏奈に返事した。

「この子、今返事したわ」

「チチ、それでいいわ。家に帰るまでそのままよ」
「また返事したわ」

「じゃあ行きましようか」

途中で客席に向かう薫とひづる。

舞台袖から覗く客席はそれこそ立錐の余地も無い。

事件の余波で来れなくなった捜査員の席も、

さつき帰った明子と弥生の席ももうすでに埋められつくしている。

前の舞台を見た南座の関係者も予想を遥かに越えた客の入りなのだ

・・・・・・・・時間となった・・・・・・・・

「少し前説が長くなるけど」

と言う沙希に

「じっくり聞かせてもらうから・・・」

ニツと笑う麗香と琵琶を持つ紫苑に手を振ってから舞台中央に向かう。

勿論、照明スタッフはいない。・・・がスポットライトが沙希を当てている。

「ようこそ、みなさん・・・うちが小沙希こと日野あきあどす」
どよめく客席からの歓声・・・

「これからうちの舞を披露するんですけど、その前に話しておくことがあるんですけど」

えっ？という客席の声ならぬ声・・・。

「実は・・・」

と話し出したのが今日の誘拐だ。

え〜〜という声を出してシヨックを受ける一般客。しまった！と思うのが番記者達。油断したのだ。

ただ家を出て劇場に来るだけ・・・そんな間に何かが起こるはずも無い。

完全な油断でトップをとりそこねたのだ。それでもメモ用紙を出す記者達。

本当のことは話せないの、撮影していたスタッフに助けられたと小野監督とルーク監督に了承を得てそういう話に作りかえておいた。勿論、沙希を知る人にとっては陳腐な話だ。

けれど通報によって警官隊が踏み込んだ後、地下牢の存在を知り子分達を尋問して判ったのが浚ってきた女性が六人、

・・・その全ての女性がすでに男達によって殺されていると判ったことだ。

そして、男達を裏から操っていたのが京都府会議員議長という表の顔を持つ

魚住剛三と知って京都府民にはなおシヨックだった。

そつえばと思ひ出すのは女性に対する妙な噂・・・

でもそれは対立候補が流したものだと思ひ疑わなかった。

沙希の話が終って手を上げて質問しようとする記者達に

「うちの舞が終ったら質問を受け付けしますよって舞の公演を始めさせてください」

と先手をうつ。

その大きな拍手に記者はあきらめずにはいらなかった。

けれど舞が始まったらこっそりと表で情報を得ようと考えた記者、だがこの公演そんな甘いものではなかった。

「では今回の公演、前回のときと異なるんは謡と琵琶を別の方にやっていただく事になったからどす。

琵琶や謡をしながら舞うのは辛うおす。今回はもつと舞に専念できません。

それでは紹介します。九条麗香さんと紫苑さんどす」

みんな「えっ？」と声をあげる。全く思いも寄らぬ人選だ。

専門家を使うと思っていた。けれど売れているとはいえ普通の歌手なのだ。

果たして出来るのか？・・・そんな心配が先にたつ。

そして、琵琶を持つ女性は無名であるし、若い・・・若すぎる。本当に大丈夫なのか。

「では麗香さん。紫苑さん。用意を・・・」

麗香と紫苑は頭を下げてから花道に用意された座布団の上に座る。

そこをスポットライトがうつし出し、舞台上が真っ暗になった。

「ジャン・ジャン・・・ジャン・ジャン・・・」

と楽器の音・・・二つの琵琶の音色が流れてくる。

二人の天才が奏でる琵琶は奇跡のような深みを観客に与えている。パツとスポットライトが舞台中央を照らす。

その光の中にはちらちらと花びらが舞う桜の木が・・・

そして桜の木を背に座り込んだ琵琶法師が琵琶を弾き鳴らしている
だ。

「栄枯盛衰、桜華散るらん、人の心の奥には鬼が住むという……
……」

低いが良く通る声が会場内にながれてくる。

音響装置を使っていないがこの音量。女のテノールといったところ
だ。

これが九条麗香？ 思いも寄らぬ音量とこの声の艶はどうだ。

いままでになかった麗香の声質が会場に流れていく。絶対に凄い訓
練をしてきたのだ。

Vテレビの山内プロデューサーは何かワクワクしてきた。

この声ならばいままでやれなかった分野の歌が確実に歌える。喜び
が身体中を駆け巡っている。

そして……舞が始まった。……何なんだ？、これは……

前回、見ていた客も……いや二人の男女の人間国宝達もだ。

ただ呆然と舞を見ているだけ……こんなことが……今の舞……
……

前回と又、変わってきている。

進化……そう進化しているのだ……舞も……あきあも……
……

今回始めての客も沢山いる。……いろんな人から聞いて来たし、
評論も読んだ……でも、これは一体何？……聞きしに勝るとは
このことだ。

何だか、この公演での日野あきあに……この不思議な女優の舞を
見る喜びに……

身体が振るえ出す。……だってこれから一生見られぬかも知れない舞なのだ。

えっ？一生見られないだって？……いくらビデオやDVDが発売されたとしても、

……勿論買うが、……このビデオの中のあきあにしても……進化の通過点しかないのだろう……

それなら、その後のあきあを見たいと思うのもあたりまえじゃないか……

そうさ、今後も舞の公演をおこなってもらおう……

……第一幕が終了した……

さあ次はあの横笛だ。

あきあが今回取り出したのは『翔龍丸』つまり麗香の声を考えるの
ことだが

それが凄い効果を生み出した。

『翔龍丸』によって土着していた魂が除霊されて天に帰っていくのだ。

それは月夜に飛び立つ蛭みただった。

「ふくむ……沙希のあの笛の音……前とは違う。怒りがあり、苦しみがあり、哀しみがある。

じゃが、迷いはない。これは人間そのものじゃ。またまた、成長したようだぞ……宋円……」

「はい、峰巖様。……けれど沙希のこの笛の音、

きつと何かあったに違いありません。……余りにも……凄過ぎる……」

「宋円、お前も成長したようじゃのう」

「いえいえ、沙希のことを見ていれば、細々したことも判るようになります。」

峰巖様・・・二幕目と三幕目の間の休憩時間に早瀬の女達に聞いてきます」

「おう、そうしてくれ」

笛に舞に・・・二幕目も変わりなかった。

一幕目に衝撃を受けた観客達、どこが違うかと目を凝らしてみれば舞の所作・・・

は名人であるに違いはないが前回とは変わらない。

どこが違うのか？・・・それは舞姿から溢れるあるものだった。・・・

「これが・・・これが・・・舞の心・・・」

舞の心だけでここまで変わる・・・その实例を見せつけられた尾上吉三郎・・・

今までどれだけ舞に対しての取り組みが甘かったか実感できたのだ。

「先生！舞の心だけでこんな凄い舞が舞えるのですか？」

「馬鹿な・・・いくらわし達が修行してもあのお方の舞の1割にもいけぬ。」

この舞は見るだけでよい。真似しようとするな、真似をすると今までの修行が全て無駄になる」

「先生・・・そんなに・・・」

「そうだ！お前達にはあのお方の姿がどのように見えているか知らぬが

わしには舞踊の神に見えておる」

「舞踊の……神……」
弟子達……いつも厳しい師匠がまるで崇めるように見つめるこの
女性……

確かに舞を修行しているだけにその凄さがわかる。

「薫……確かに今日の沙希ちゃんは凄いつて麗香ちゃんと言っ
ていたそうだけど、それ以上ね」

「ええ、……わたしの両手ったら、握ったまま離れないの」

「見せてみなさい」

と手をとる圧絵……なるほど指が握ったまま固まっている。

圧絵はゆっくりと……そして優しくマッサージする、もちろん視
線は舞台に当てたまま……

しばらくするとようやくやく指の硬さがとれ、指が動くようになった。

「圧絵さん、ありがとう。もういいわ……片手さえ動いたらどう
にかなるから」

「どうしたのよ、薫。あなたらしくないわね」

「ええ、判ってるわ。でも沙希ちゃんのあの女性達への想いが今の
舞から感じられて、

もうどうしようもないの」

「圧絵はん……薫はん……小沙希ちゃんの舞……変わりました
ええ。」

もううちがどうのこうのと批評できる舞やおへん。

小沙希ちゃん、おなごはんの苦しみ・哀しみいう心の負担……自
分に取り入れとるんどす。

ほんで舞を舞うちゆうことによつてそんな負担、

全部消し去る……そんな舞……誰にも出来ることやおへん」

斜め上の祖母からの言葉で舞台に目をやる二人、
確かに舞姿からゆらゆらとかげろつのようなものが見えるのだ。

・・・・・・・・・・こうして第二幕目の舞が終わった・・・・・・・・・・

謡の麗香はあの温泉水で喉をうるおして、その疲れをとっている。
琵琶の演奏の終わった紫苑は舞台から下りた。

明るい照明の中、舞台上では沙希が舞妓姿に戻ってその中央で目を
閉じ正座して座っていた。

一般の客のほとんどが何をしているのか判らない。

かたまって座る僧侶達に判る沙希の禅の姿・・・

以前沙希の禅を見知っていた僧侶以外の・・・

修行僧達には、その禅の素晴らしさはまだ判らないとしても、

自然な形の圧倒される沙希の姿にはもう言葉もない。

蓮昌尼と妙真尼の二人の初めて目にする沙希の見事な禅の姿。

妙真尼は幾多の高僧の禅を見てきたがこのような見事な姿は見たこ
とが無かった。

蓮昌尼は先日の剣や今の舞・・・

そして禅と異なる沙希の姿に、もう呆然と言葉も無く見とれている
だけでもう心が浮き立っていく。

「峰巖様、聞いてまいりました。実は・・・」

と僧達が陣取る席の中で朝の誘拐劇での女達の悲劇を伝える宋円。

「何！・・・そんなことがあったのか」

「はい、私が聞いたのは沙希のマネージャーの律子殿でしたが

彼女達最初から一部始終を例のモバイルとやらで見ていたそうです。だから沙希の心の変化は手に取るように見て取れたと言っています。最初は楽しんでいたようですが、変わったのは女性達が軟禁されて男達に弄ばれたことが判った時で、それがピークに達したのは六人の女性が殺されていて埋められていることを知ったときと聞きました」

「ふむ、それが沙希の怒り、苦しみ、哀しみをさそったのじゃな。よし、今夜女達の法要を比叡山で出来るよう蓬栄に頼んでくる。

宋円はわしが持ってきた警策きんせきで沙希の禅を頼む」

峰蔵が立ち上がったあと、

宋円は渡された風呂敷包みから警策を取り出して立ち上がった。

舞台袖まで行くと見知った女達がじつと沙希を見詰めているのだ。

パイプ椅子に座っていた順子が立ち上がって

「宋円様・・・」

「わかつております・・・」

その言葉だけでいい。舞台中央に進む宋円。

こんな大勢の観衆の中で少しどぎまぎしたが、美しい禅姿の沙希を見ると急速に落ち着いてきた。

背後に立つ宋円・・・すると首を曲げる沙希・・・

警策を右肩に受けた沙希は首を戻すと頭を下げる。宋円も頭を下げた。

判らなかつた一般客のあきあの姿の意味がわかり、何だか座る姿勢

を正している。

結局沙希は六回警策を受けた。六回目の警策を打つ際に宋円もその意味を悟ったのである。

六人の女性に対する鎮魂だったのだ。

「ありがとう、宋円お兄ちゃん」

「朝のこと聞いたよ」

「うちの中ではまだ黒い炎がくすぶり続けているんです」

「黒い炎？」

「ええ、まだ六人の・・・残された十二人への想いが消えることがおへん。」

六人には怒りがおへんかった。ただただ残された十二人への想いだけどした。怒りはうちどす。

うちの怒りが女達への想いと重なってまだ消えてはいかないんです。けれど、うちこの後の舞にもっともっとうちと女達の想いを入れて舞うつもりどす。

宋円お兄ちゃん、見てておくれやす」

「わかった、充分に舞ってくれ。最後まで見届けるから」

コクリと頭を下げる沙希。

「今夜比叡山で女達の法要をするよ」

また、コクリと頭をさげる。

袖に帰った宋円、『パチパチ』と鳴る拍手・・・どうやら沙希が立ち上がったようだ。

「どうでした？宋円様」

「心配ありません、沙希自身の怒りは舞の中に消し去るそうですよ」

「そうですか」

「よくやった」

席に戻った宋円にその声をかける峰巖和尚。沙希の言葉を伝えると

「やはりな・・・優しいからのう・・・」

「はい」

「しかし、変わらず見事な禅だのう」

「はい、おかげで他の禅が堪らなく退屈になって・・・」

「ほう・・・」

「欠伸が出て、仕方ありません」

「わははは・・・おまえも言うようになったのお」

「峰巖様！始まったようですよ」

・・・第三幕・・・

背丈まで伸びる草・・・伸び放題の野中の一軒家。

そこから聞こえる小気味いい鼓の音

「ポン・・・ポンポポポポン・・・」

その広間で鼓を打ちながら舞い踊るのは妙齡の美女・・・鼓に合わせて謡がはじまる。

旅の若い僧が鬼女樹沙羅の館に迷い込んだことから始まるこの物語。

物語が進むにつれ客席に白いハンカチが翻っていく。ほとんどが女性達・・・

「樹沙羅が可哀想・・・」

「だってあいつ鬼なんだぜ、坊さんを食おうとしている恐ろしい鬼

なんだ」

「そうしなければならぬ樹沙羅の哀しみ・・・女にしか判らないわ」

樹沙羅に対する思い入れは前回同様女性に多い。

でも今の方が遥かに樹沙羅の存在が身近に思える。

・・・涙が溢れてとまらない・・・。

背景に流れる謡がなお樹沙羅の哀れを誘うのだ。

舞、鼓、謡・・・三位一体が奏でるこの舞は強烈なインパクトで客達にその存在を植え付けていく。

・・・
・・・
・・・

そして・・・能面が割れ・・・白い着物が赤く染まった・・・

前回でも樹沙羅のプロマイドをとという声が多かったが

今回でもそれ以上の問い合わせが多くなるだろう。

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

四幕目は少しコミカルだったが、えつという終わり方・・・なんかあつけない・・・

しかし、観客にとって初めて知ることになる五幕目の存在・・・

四幕目が序章でしかないのが何故か納得できる。

五幕目の存在を知るのが早瀬の女のみ

「おおい、瑞穂くん！五幕目のことなんか聞いていないぞ」

「すみません！五幕目を完全に手の内に入れたの昨日なんです……」
と五幕目の存在を知ることになったきっかけとそれから経緯を簡単に話す。

「なんと……将門さんの奥方が……」

「はい」

「そして比叡山での修行……そして今日の誘拐劇……あきあくん……」
やはりおとなしくは出来ない……そういう星の下に産まれついでいるんだなあ
と笑う。

「それで、監督。五幕目のことなんですが……」

「あきあくんにまかせるんだろ」

「えっ？どうして？」

「そんなこと読めなくてあきあくんには付き合ってもらえないよ。アメリカ側はどうなんだ？」

「今、ゆりあが説明しています」

そのとき『ピーピー……』

とモバイルが鳴る。手早くスイッチを入れるとゆりあの顔だ。

「あっ！……ゆりあどうだった？」

「ええ、OKよ！五幕目の『ステーション』の配置も全てあきあにまかせるって」

「じゃあ、あとはお願いね……」

「わかったわ……あっ、一言だけ……」

ジョージが『こんな素晴らしい撮影に参加させてもらって関係者に感謝する』って言っていました

と言ってモバイルが切れた。

「監督！・・・聞かれましたか」

「聞こえているよ。わしも素晴らしいフィルムができれば皆にお礼をいうよ」

「素晴らしいフィルムできるのはわかりきっていますわ、監督。

だって目の前に素晴らしい素材がいるんですもの」

「素晴らしい素材か・・・」

そうだな、世界のどこを探してもいるはずもないたった一人の女性だもんな」

「あつ！『ステーション』が動き出しました。アングルの方は監督におまかせします」

「わかった」

五幕目は四幕目と同じく音曲はない。

バックに流れる謡は最初の何分間は高低が全く無いそれは不気味なものだった。

斑鳩式部が立ち上がると照明が消える・・・真つ赤な二つの目が舞台の端から端まで宙を飛ぶ。

バックに点った照明がこの『両面宿那』をおどろおどろしく見せ、平面的な謡が舞というより『狂言』を表すのだ。

狂言が舞に変わるのは公達との出会いから・・・

公達の恋人を殺してしまった悔い、けれども『両面宿那』として魂をむさぼり喰う快感は人としての良心を無くしていく。

『両面宿那』 〓 斑鳩式部と公達の戦いは最後まで続いていったのだ。

……こうして全ての舞が終わった……

「ほ……」

と大きなため息が会場に流れると共に立ち上がった観客達、
歓声と共に拍手が鳴り止まない。何か別の踊りをと催促しているの
だ。

この間舞ったあの舞でも良かったのだがフト目に入った舞妓や芸妓
達……ニツコリ笑った沙希が

「花世ちゃん達……うちと『祇園小唄』踊りまへん？」

「えっ？……いいんどすか？」

客席で立ち上がった花世が嬉しそうな顔をするのだ。

「へえ、上がってきたなはれ……」

そう聞くと舞妓が全員立ち上がった。

ゾロゾロと舞台上がる舞妓達。

客席はあつげに取られていたが、これはこれで凄い演出だ。

これだけの舞妓達の京舞を見られるものではない。

「鳴り物はテープでもいいいんどすが折角の舞どす。芸妓のお姉ちゃ
ん達……手伝ってくれまへん？」

「うちら、小沙希ちゃんと同じ舞台踏めるんどすか」

「へえ……」

「けんど鳴り物のお道具がおへん……」

「うふふ……あれを見ておくれやす」

と指し示す舞台の後ろ……

スルスルと黒い幕が開いてバックの白い壁……と思つたら

桜の木々の前に三段の台座にそれぞれたくさんのお座布が……そ
して三味線がおかれている。

喜んで上がる芸妓達・・・置屋の女将達も

「しつかり・・・」

「がんばって・・・」

と嬉しそうに声援をおくっている。

すっかりと準備ができた舞台上

「今から舞うのは『祇園小唄』です。華やかな舞をご堪能しておくれやす」

そう挨拶した小沙希は舞妓達を前面に押し出し、中央奥に位置した。

「えっ？」

という顔をした観客達だが舞が始まってしまつてそんなのどうでもよくなった。

こんな大勢での群舞というのか・・・全く初めてだと言うのになんだろうこの舞は・・・何か凄い舞だと素人目にも感じるのだ。

「凄い！・・・こんな大勢の舞妓達がそれぞれ名人級の舞を舞っている」

「先生！・・・こんなことつて・・・」

「これは、あの方のせいだ・・・」

あの方がお一人で舞妓達一人一人を實力以上の世界へ引き上げている

「でも、そんなことが・・・」

「誰もが出来るわけじゃない・・・いいや、誰も出来はしない。出来るのはあの方だけだ」

と中央奥で舞っている舞妓に視線を当てる。

舞は終わった。続々と舞台を降りる舞妓や芸妓達、
まだ小沙希と一緒に舞ったことが無い舞妓達は・・・胸を押さえな
がら・・・
ため息をついてを名残惜しそうに小沙希を振り返りながら席にむか
っているのだ。

小沙希と舞った事で自分がどんな舞を舞ったのか自覚できたのだか
ら・・・。

観客達も凄く徳した気分だった。

この舞台で都おどりの再現？を見れたからだ。いやそれ以上だった
のだ。

舞台に一人立つ沙希にパイプ椅子を持って現れた吉備洋子、

「吉姉・・・椅子なんかいいのに」

「今日は大活躍でしょ、いいから座って記者会見なさい」
と、引いて袖に引込んでいくのだ。

椅子に座った沙希を見つめる観衆・・・誰一人席を立つものはいな
い。

「これからの時間・・・お約束通りの質問コーナーです」

「わたし達もいいんですか」

一般の観客なんだろう。

「へえ・・・かましまへん。どんなこともつけます。

けど、人には触れてほしゅうないことあるんは判りますえ、

今度の誘拐事件も今警察が捜査中なんです。話してもええ事悪い事
あります。

それを重々考えての質問受け付けます」

「はい！」

と手をあげる記者達。

「どうぞ」

と指名する

「日野あきあさん！・・・誘拐されたとわかったときどんなお気持ちでしたか？」

「そりゃ、怖おおした。震えあがってどうしよう思ったん覚えてますえ。」

けんど、うちには安心することあったんどす」

「安心すること？」

「へえ、この公演をビデオやDVDで売り出そうと小野監督とルーク監督が

朝からうちのことへリコプターで追っていたんどす」

「小野監督とルーク監督？・・・」

「へえ、日本とアメリカでは舞を見る感性が違うって

日本、アメリカそれぞれで別々に作るう・・・いうて別々に撮ってるんどす。」

それに監修はあそこにおられる人間国宝の尾上吉三郎先生どす」

「ビデオやDVDの売り出しは聞いていましたが、こんな凄い布陣だなんて聞いていませんよ」

「楽しみに待っていておくれやす。日本とアメリカどんなフィルムになるかとっても楽しみなんです」

「なんかワクワクしますね」

「けれどこの劇場、どこを見てもカメラがないんですけど」

「へえ、それがうちがお願いしたたった一つの条件どした。」

だってうちの舞の舞台にカメラマンの姿があつたんでは興ざめどす

しうちも舞に専念できまへん。

そやからお二人の監督さんに知恵絞ってもらいました。それで決まったんがCCDカメラ使ったことどす」

「へえ〜、CCDで撮影なんですか」

「へえ、そやからうち安心して誘拐されたんどす」

「えっ？・・・安心していたんですか？いい度胸だなあ」

「へえ〜・・・うちが度胸いいんどすか」

そんな会見で記者達の質問をうまくかわした沙希・・・
ようやくみんなに囲まれながら控え室に戻ってきた。

術を使えばよいのだが、普段は使わないようにしている沙希、
杏奈に舞妓のメイクをすっかり落としてもらってから大好きな黄色いパンツスーツに着替えた。

それから再び薄化粧をしてもらう。こんな時の沙希は本当に18歳
という少女の姿に変わる。

こう書くと静かな控え室と思うがマネージャー含め全員がいるのだ。

先に舞台を降りた麗香もキラキラとした瞳で沙希を見つめている。

舞台が成功したことでホツとし、今後の歌手活動にも凄い効果がある謡に喜びが一杯となっている。

そこに

「沙希ちゃん！・・・お客様よ・・・」

とひづるに手を引かれた薫が入ってきた。

その後ろに続くのは娘に庇われるように入ってきた中年の女性だ

「さあ、どうぞお母さん」

と自分が座っていた椅子を進め、

「琴美さんは、こちらにね」

と空いていた椅子に座らす沙希。

「えっ？」

と立ち尽くす琴美・・・どうして？・・・どうして、私の名前を？

・・・

自分の疑問をまだ口に出さず、沙希に視線をあてたままゆっくりと腰を落とす。

「吉姉！・・・コップにお水をお願い・・・」

吉備洋子の用意したコップは直ぐにテーブルの上に置かれる。

「琴美さん・・・お薬を・・・」

「えっ？・・・あつ・・・はい！・・・」

とバツクをあけて大切にちいさな布の袋から何種類かの薬を出す。

「お母様、もうすぐお昼の食前のお薬の時間ですよ。」

・・・さあ、お飲みになつて」

「あ・・・あなたは・・・」

呆然とした中年の婦人だが、沙希に何かを見たのかハツとして立ち上がろうとする。

沙希は手を押さえてニッコリと微笑んでから

「お母様、その先は口にしないで・・・」

婦人はしばらく沙希を見つめていたが、テーブルの上の薬をとったでもその手は小刻みに震えている。

案の定、その手から白い錠剤が落ちていったが沙希が空中で掴み取り婦人に渡した。

「琴美さん。あなた達はこの京都に人探しに来られたのね。」

アメリカに留学をされていたあなたはお母様からの手紙で急ぎ帰国された。

でも帰ってみるとお母様が心臓の持病で入院されていたのよね。

仕方なく一人で京都に行こうとしたけど、お母様は断固反対なされた。

だって、お母様は琴美さんのこと心配で心配でたまらなかったから。。。

だから、お母様はこういわれた。私が一緒に京都に行くことが出来なければ

絶対に貴女を一人でいかさない。あなたは一人でも行くことは出来たけど、

お母様を放っておいてなんかできなかった。親孝行のあなたにはね」

琴美は泣き出した。

「よほど我慢していたのね。思いつきり泣いてもいいのよ」

琴美を抱きしめた沙希に思いつきり抱きついた琴美・・・我慢をしていた分大声をあげて泣き出す。

みんなもつられてハンカチを出して泣いているのだ。

ようやく泣き声も落ち着いたとき

「ねえ、琴美さん！・・・お母様の身体心配よね」

「はい、ここで退院することは命を無くすことになるって言われて来ました。

一応は診断書とレントゲン写真は持ち歩いています」
とおおきなバツクを示した。

立ち上がった沙希は

「庄絵叔母様！」

「なあに」

「お母様は石川鈴さん、娘さんは石川琴美さん。いわれます。私撮影所に寄ってから帰りますから家に連れて行ってください」

「わかったわ」

「お母様は地下の病院で診察してからあの温泉にね。琴美さんも女性特有の持病もっていますから」

「といって部屋を出て行った。無論杏奈も続いていく。」

「あのう・・・」

と声をかける石川鈴にとって・・・相手はいわば若いときの憧れの人・・・

「あのお方は一体どういうお方なのでしょう？」

「そう思われるのはあたりまえね。ねえ薫」

「沙希ちゃんに、ああズバズバ言われると何も言えなくなるわね」
さつきまで気づかなかった・・・今、初めて気づいたのだ。

案内してもらった人があの天才女優早乙女薫とは・・・

そして、その横にニコニコ笑う天城ひづるまでいる、ここは一体？
・
・

二人の戸惑いと驚きをよそに

「さあ、引き上げましょうか」

と言う声で忘れ物の有無を調べるマネージャー達に

「先に帰っておくからね」

と声をかけると二人を真中に歩き出した。

タクシーを拾って家にたどり着いたのはそれから30分も経ってはいなかった。

「ただ今・・・」

その声に飛び出してくる高弟達・・・その後ろには三人の看護師の

姿、

「先ほど智子様から電話があつたんです。

庄絵様たちがもうすぐ帰りはるから、お客様のお二人をすぐに病院にとおっしゃられたんです」

「ありがとうございます、早く病院に連れて行けるので助かったわ。弥生さん、このお二人なの。よろしくね」

「ええ、わかりました。じゃあ、行きましょうか」

と言われて弥生と言われた看護師を先頭に二人の後には看護師が二人ついてくる。

この年代物の屋敷の中に本当に病院があるのか？

不安に思っている琴美の目に階段を下りたとたん思わぬ近代的な受け付けが・・・、

アメリカでも見たことがない超近代的なたたずまい。こんな病院はみたことがなかった。

「さあ、こちらにどうぞ」

と案内されたのがロッカー室だった。

「さあ、これに着替えてください」

琴美がよく見るとシースルーの頭から被る短い浴衣のような着衣だった。

顔をポツと赤くする琴美だが

「ここは女性だけの専門病院だから恥ずかしくないのよ」

と言ってから

「一応外にいるから着替え終わったら呼んでね」

と言って出て行く看護師。

母と顔を合わせてから服を全て脱ぎ去り、ロッカーに入れると

頭から被るシースルーの着衣。鏡に映るシースルーの下の乳房と黒い鬚りが恥ずかしい

用意が出来たと看護師を呼ぶと廊下に用意された移動式のベッド。乗せられた母に被された毛布、何だか少しホツとする。

「さあ、あなたも・・・」

「えっ？わたしも？」

耳元で

「少し恥ずかしいんでしょう」

といわれると顔が赤くなる。

仕方なくベットに乗って横たわるとさつと被された毛布に思わずため息が出る。

「あっ、これ、母の診断書とレントゲン写真です」

「わかりました、確かにお預かりしますね」

と言って看護師五人がつきそって廊下を少し行った先のエレベーターに乗せられた。

「地下二階で検診を受けてもらいますからね」

エレベーターから降りた地下二階も無機的な施設ではなく廊下の所々に

間接照明で陶器の花瓶に花が差してあるという女性らしい心使いがあちこちに施されている。

「お母様はこちらに・・・」

と入っていく母の検診の部屋の隣に入れられた琴美。

琴美自身に検診はあっという間に終わった。

「では廊下で・・・」

と言われて渡されたのが白いガウンだった。どこまでも行き届いている病院だ。

廊下の長椅子で待っていると、母が検診されている部屋のドアが開いてベットが出てきた。

母は変わらず毛布をかけられていて、おとなしくよこたわっている。この1週間の肉体の疲労と気疲れで、一度横になってしまつと起きられなくなったのか、ぐったりとなっている。

「あなたは、それでいいわね」

琴美の白いガウンを見て弥生看護師がいう

「えっ？」

「さあ、行きましようか」

「えっ？・・・どこへですか？」

「温泉よ・・・」

「温泉？・・・」

「そう・・・入ってみればわかるわ。わたし達も入るから・・・」

母を乗せたベットについていく琴美。凄く不安だったが何故か少し胸が躍った。

エレベーターに乗ると地下へ地下へと降りていくのだ。

地下七階の表示で停まったエレベーターのドアが開くとそこは別世界だった。

保養施設・温泉とエレベーター内に書かれたあつたこのフロアー

初めて来た者にとってそれは時代劇で見た湯治場にきたような・・・

タイムスリップしたような場所だった。

ドアを開けると広い更衣室になっていた。
そこに入った五人の看護師、ナース帽を外し、白衣を脱いで、下着までとって

全裸になるとそこに置かれていた琴美達と同じシースルーの着衣を被ったのだ。

そして看護師たちは母をかつぐようにしてからドアを開けた。

そこは広い広い温泉だった。

ゆっくりと肩までつかると

「さあ、お母様。これを飲んでください」

と看護師がもってきたポットからコップに注いだ水を渡す。

『ゴクゴク』と喉を鳴らして一気に飲んでしまった母、最近一度もなかった母の様子、

「あなたも飲みなさい」

と渡されたコップ、口をつけると休まずに飲まずにはいられない水だった。

「これ、この温泉と同じ物なの。でも飲料用として源泉から組んだものだからね」

と弥生看護師から聞くが

「琴美ちゃん・・・琴美ちゃん・・・私、何かおかしいわ」

「えっ？お母さん・・・どうしたの？・・・」

「わたし・・・なにか・・・身体中、元気が溢れている感じなの。心臓の痛みもないし・・・あつ足の浮腫みもないわ」

「お母さん！・・・それより・・・その髪・・・」

「えっ？髪がどうしたの？」

「お母さんの真っ白だった髪の毛が殆ど元の黒に戻っているわ」

「琴美ちゃんもよ。目の下の隈もなくなっているし吹き出物なんて少しもないわ。」

肌が輝いているわよ」

「看護師さん！これどういうことなんですか？」

「この温泉は女性にしか効かない癒しの湯なの。他の人に言ってもらったら困るけどね。」

でも癒しだけど不老不死と思っただらだめだからね」

「お母さんの髪も元に戻ったのもですか？」

「そうね、あとでもう一度検査しないとはっきりいえないけど

心臓病から波及していた浮腫みも白髪も心臓病が治ったことで全てが元に戻ったということかしら」

「お母さん……」

「琴美ちゃん……」

抱き合う親子だが

「抱き合うのはもういちどきちっと検査してからね」

そついう弥生看護師に頷くように温泉からあがる母子。

地下二階での検診を終えて

地下一階のロッカー室で着替え終わった二人が受付のところまで待っている。弥生看護師が

「こちらへどうぞ」

と案内されたのが小さな部屋だがやはり女性らしい気配りのある部屋だ。待っていたのは一人の女医、

「先生、お連れしました」

「あつ、どうぞ。おかけください」

腰掛けた二人に

「お母様はこれからの一週間入院できますでしょうか？」

「一週間ですか？」

「はい、今温泉に入ってもらったことで心臓病の80%が治つています。

でも長年の持病だったことで直ぐに完全に治ったとはいえません。再発のことも考えて一週間の入院治療が必要なのです。そして、月に一二度の通院もしてください」

「えっ？京都まで来なくてはならないんですか？」

「お家はどこですか？」

「東京なんです」

「東京ですか・・・じゃあ、あとで場所を書きますからそこに通ってもらえますか？」

「東京にもこんな施設あるのですか？」

「いいえ、うちの里があるのです。そこにはここの温泉と同じ温泉がありますから。」

「判りました」

「琴美さんはどこにも以上はありません。」

温泉に入る前は内臓がかなりわるかったようです。不摂生されていましたね」

「はい、すいません。留学先で一人暮らしだったので・・・つい・・・」

「外食ばかりだったようね」

「はい」

「駄目よ・・・バランスの良い食事をとらなきゃ」

「わかりました」

ドアがコンコンと鳴った。

「はい！」

というと琴美にとっては見知らぬ外人が入ってきた。

「ケイト、どうしたの？」

「うん、ジョージに用があつて撮影所に寄ってきたの。」

私、仕事で沙希の公演にいけなかったからジョージに様子を聞こう
って思ってたね」

「じゃあ、沙希が誘拐されたことは？」

「うん、聞いたし、編集前のテープを見せてもらった。」

よく沙希が我慢していたと思うわ。特に女の子達のこと」

「ストップ・・・その話はあとでね・・・」

それより紹介しておくわ。この子はアメリカに留学しているそうだから・・・」

「琴美ちゃん、この子はケイト・マイヤー。あのジョージ・ルーク監督の姪なの」

「ジョージ・ルーク監督ってあの映画監督の？」

「そうよ・・・」

「うわ・・・感激です」

「本人は女流写真家でワシントンポストの記者だったんだけど
そこを辞めて早乙女薫事務所の海外メディア部門の京都支社長とい
う経歴なの」

「ケイト！このお二人はお母さんが石川鈴さん、娘さんが石川琴美
さんっていうの」

「石川さんって・・・あの・・・」

と言いかけたが漣が黙るように目配せするのでその先は飲み込んだ。

ケイトは話を変えるように

「漣姉さん、沙希が帰ってきているの」

「わかったわ、じゃあ、お母さんも琴美さんも行きましょつか」
と言って立ち上がる。

ドアを出しなに

「弥生さん、明子先生にこのことを・・・」

「はい、わかりました」

「それと、電話したらみんなをね・・・」

「おまかせください」

居間にはすでに大勢の女性達が集まっていた。

そしてその中心にいるのは・・・

はじめてこの家が人間国宝の井上貞子のものだと気づいた。

その井上貞子と親しそうに話しているのは

今日舞いの公演をやった舞妓の小沙希こと女優の日野あきあだった。

石川母子には訳が判らない。この女性達の関係が・・・だ。

あきあが立ち上がった。

そして、貞子の方を向いて

「お婆ちゃん、初めから終わりまで話したほうがいいの？」

「小沙希ちゃん、あんたのこと最後までモバイルで見ました。

けど、遠かったりしていろいろ画面が変わったりして小沙希ちゃんの事

あんまりわかりまへんどした。

別に興味で見せてくれ言うのと違います。小沙希ちゃんが味わった心の内を知りたいだけです。

うちが感心するほど我慢しはった。その心・・・知りたいんです」

「わかりました、お姉ちゃん達もそれでいいんですね。・・・チチ！」

その呼び声に『バサバサ』と羽音がして何も無い空間から現れてあきあの肩に飛び乗った鳥の姿に肝をつぶした石川母子。

「驚いたでしょ、でもこんなことで驚いていたんでは沙希さんの傍

にいらねなくてよ」

と弥生が言ってから

「澗先生！このナースキャップ……」

「ああ、お部屋に行ったのね」

「はい、お部屋で留守番のカナの様子を見に行った時にこのナースキャップを見つけたんです」

「明子先輩と話がついて弥生さんは今日から正式にこの病院の総婦長よ。」

明日にでも相良病院の同僚達に挨拶しておくのね」

「はい、それと先ほど言われたこと全て完了しました」

「じゃあ、あなたもここにいてちょうだい」

「はい！」

石川母子……チラツとみた看護師に目をやると、

なるほどさつきまでなかったナース帽に三本の線が入っている。

けれど……視線をあのおきあに移すとあの鳥と話しているのだ。

……鳥は話すけれど会話は出来ないはず。

「あまり驚いていると心臓に悪いわよ。もっと楽な気持ちでみていなさい」

と注意をうけるがなかなか出来るはずはない。

「あの鳥はね、現世の鳥ではないの」

「現世の……鳥……ではない？」

もう一つ……意味がよく汲み取れない。

「あの鳥はね。金慶鳥といって天界に住む鳥なの。」

そしてあの鳥は菩薩様のいわばペットだったんだけど悪い奴に浚われてね……

逃げ込んだのが沙希ちゃんの舞の中だったのよ。

いろいろあったけどあの鳥……チチというんだけど……

沙希ちゃんのそばを離れるのを嫌がって、結局、今では菩薩様から

預けられているわけ・・・」

「なんだかよくわからないけど・・・凄い!」

「ここにいれば何でも平気になるわ。私だって、ここにきたの三日前だからね」

「三日前なんですか?」

「そうよ、わたしの娘の目をあの温泉で治してもらってね」

そんな話をしているうちに、あれよあれよと部屋の真中に枝がある細い木が現れた。

その枝に飛び乗るチチ、壁一面に張られたスクリーン・・・。

これ全てがあきあの陰陽師の術だと隣の総婦長から聞いた。

「チチ!・・・用意いい?」

「へエ・・・準備ハスベテ出来マシタ」

「じゃあ、データ送るね」

スクリーンに映った画像・・・それはあきあ・・・いや沙希の目を通しての画像だった。

.....

家の門を入ろうとしてスツと寄ってきた男達に囲まれる沙希。

「おまえは小沙希こと女優の日野あきあだな」

「へえ」

「間違いないのだな」

(おや?今の言葉おかしい・・・実際は私のこと知らないのでは?)

沙希の心の声が画面から聞こえる。

「へえ」

「ちよつと来てもらおうか」

「へえ・・・どこへ?・・・」

「兄貴!おかしな女だ、本当にこの女であっているのですか?」

「おう、間違いはない」

と内ポケットから写真を出す。沙希が上から覗くと何のことはないプロマイドとして売り出してる日野あきあの写真だった。

そこにさつと寄ってきた黒いワゴン車、弟分がドアを開けると

「乗れ!・・・」

と兄貴分が沙希の後ろから帯びをトンと押す。

「キャ・・・」

といつて車に乗り込む沙希。

でも心の中は

(むふふふ・・・なんだか面白くなりそう・・・あっそつだ連絡し
とかなくつちゃ)

(瑞姉!・・・瑞姉・・・聞こえる?)

(あっ?沙希・・・どうしたの?)

(ふふふふ・・・あのね、わたし男達に誘拐されちゃった・・・)

(えっ?・・・誘拐?・・・それって大変じゃない・・・男達かわ
いそう)

(何よ!・・・それ・・・まあいいわ。

急いで撮影所に行ったら皆を『ステーション』に乗せてくれない?・

・
準備がおわったら・・・瑞姉・・・連絡して欲しいの。

すぐ飛ばすから・・・カメラマンの皆に十分に撮影していてちょうどいって伝えてね)

(わかったわ。こちらももう撮影所の前よ)

(あっ、このこと家にいる日和子叔母様に伝えてから京都府警で待機している)

もらってね・・・逐一叔母さまへの連絡はゆり姉にお願いするわ)
連絡が終ったことで腰を深く椅子にすわりなおす沙希。

場面が変わって、男達の囲まれて家に入る沙希。居間らしき部屋で古びた椅子に座らされる。

兄貴分が隣の部屋に入っていく、弟分二人が沙希の後ろで拳銃を構えている。

ドアがカチャツと開いて入ってきたのが、さっきの兄貴分と

小太りのちょび髭の男だ。兄貴分が沙希の隣に立ち、ちょび髭男が沙希の前に座る

ここで沙希の目からという画像が変わった。きちつと沙希が画像の中にいる。

「日野あきあくんだね？」

(このねこなで声、気持ち悪い・・・こいつが視界にはいるだけ気持ち悪いわ。

こうなったら早くかたをつけてしまっただけだ。

警官隊も先ほどからじりじりして包囲しているのだから・・・)

「どうだね、今の事務所からうちに移籍しないか？」

「へえ・・・そしたらどんな特典があるんですか？」

「特典？・・・さすがは現代っ子だな、そうだな毎晩俺達が順番に可愛がってやるってのはどうだ」

「あほらし、誰がそんな汚いもんいりますかいな」

「何！汚いだと！・・・」

「へえ、うち男が大嫌いなんです。触られるのも嫌！」

「お前、レズなのか？」

「レズ？・・・男の口から出たら綺麗な言葉でも厭らしく聞こえるもんどすなあ。

それにあんたらは、下司なことしかいわれへんのどすか」

「くそっ！、おとなしくしてればつけあがりやがって！」

内ポケットに手を突っ込むと拳銃を取り出したが、その拳銃が天井に向かって

飛び上がる。弟分二人の内ポケットからも飛び出して天井に張り付いた。

.....

震える指でスクリーンを示し

「あっ！・・・あれ・・・」

と声をあげる琴美・・・

「凄いでしょ・・・あれが陰陽師の術なの」

冷静な婦長の声にゆっくりと指をおろす琴美・・・

その冷静さが移って急に心が落ちいてくる・・・

.....

「何なんだ！」

啞然とする男達だが、沙希は怒りの頂点に達している。

男三人・・・兄貴分と弟分の二人の身体が吹っ飛ぶように壁にぶつかり大の字に張り付いてしまう。

「あ・・・兄貴〜」

「な・・・なんだこれは・・・しゃ・・・社長〜」

その社長も後ろ向きに倒れ・・・というよりも腰を抜かしていたのだ。

「ば・・・化け物だ〜・・・」

「失礼なこと、言いわんでおくれやす。うちは人間どす」

といつてからドアにむかつて

「そろそろ出てきたらどないどす?・・・」

ええ、年した男はんががなにをこそそしとるんどすえ。仕方おへんなあ・・・」

といつて指をくいっと曲げるとドアが『バ〜ン』と弾けとんだ。

立ち尽くす中年の男が見る間に持ち上げられ、地上1mの位置に横たえられる。

「あんたもな」

というとちよび髭社長がぐ〜んと引っ張られるように天井に張り付いてしまった。

「あんたら、うちが普通の女や思たんがまちがいどしたなあ。

そのの府会議員の魚住はん。委員長いう役目してんのに何を馬鹿やつとるんどすか。

あつ、そうどすか、若いときからの女狂い・・・血迷ってしまわれましたなあ。

女性を浚ってきては言うつこと聞かそうおもて薬漬けどすか。

可愛そうに・・・あの子らの心が死んでしもつてはります」

・・・・・・・・・・・・・・・・

今の言葉になにか予感があったのか母が娘の手をがっしり握り締め
るのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・わしは・・・わしは府会議員の魚住だ。こんなことをして
ただで済むと思っているのか」

「おほほほ・・・アホやなあ、魚住はん。あんた議員ゆうんそんな
えらいもんや思つてまんのか。」

偉いんは一般の市民どす。市民の一票がなかったらあんたはただの
悪党どす」

「なにをいうか、わしは市民のために一生懸命やつとるんじゃ」

「へえ〜一生懸命女あさりどすか、あんたの浚つてきたおなごはん
の半数はあなたの選挙区のおなごはんとはどういうわけどすか。
それにあとのおなごはんの全部が京都に旅に来ていたお人どす。
楽しみできていたおなごはんを毒牙にかけたあんさん、うちゆるし
まへん」

そついつて指を鳴らすと少し先がとがった鞭が出てきた。

その鞭が魚住の周りを飛び回ると魚住の悲鳴が部屋に響いた。

指を鳴らすと消える鞭、

「今の魚住はんを痛めつけるためにやったことやおへんえ。」

ほんとにそうしたかったんですけど、うちはあんたと同じになるの嫌
どす。

・・・魚住はん痛いどすやろ、この痛みよう覚えとくんどすなあ。
この痛み明日には消えてます。けんど嘘をついたら・・・考えても
あかんのどすえ。

・・・痛みがぶり返すんどす。そやから、あんたは取調べに正直に
答えな悲鳴どすえ。

それともうひとつ面白いもん、見せてあげまひよか」

というテレビのスイッチが勝手に入り、

しかもそこには・・・自分達の姿が写っているではないか。

動かせる首でキョロキョロするがカメラらしきものはどこにもない。

「カメラ探しているんどすか？・・・ふふふ、うちがそんな直ぐに
見つかることしまへんえ。

じつ言うと日本のカメラマン5人とアメリカのカメラマン5人がこ
ことは違う次元から撮つとるんどす。

最初から映しているんどすえ。監督は世界でも有名な小野監督とジ
ョージ・ルーク監督どす。

この映像が一般家庭にながれたら・・・。勿論、うちの力は消して
からどすけど」

と言っているが、その言っている意味が良く判らない男達。

「さあ・・・」

と九字を切り真言を唱えると沙希の身体から小さな光が飛び出して
きて

わざとか男達をしげしげ見るようにぐるりと一周してから、

沙希のところに戻り、正体をあらわした。大きくて真っ白な虎だ。

「ひ・・・ひえ〜」

そんな悲鳴が男達から漏れる。

「白虎丸！地下の男達二人を捕まえてここに連れてきなさい。女性達を驚かさないようにね。」

懐に入っている拳銃からはもう玉を抜いておいたから大丈夫よ」と右手の平からバラバラと玉が床に落ちる。

とんでもない女を・・・と思ってももう後の祭りだ。

「社長が悪いんだぞ！こんな女をわしに取り持とうとしたからな
「そ・・・そんな！言ってきたのはそつちからじゃないですか」

こんな痴話げんかが始まった。

その時だ。ドドドドと多くの靴音が近づいてきた。

開け放されたドアから顔をみせたのは婦警2人（飛鳥警視正・有佐ケイ）と

女性刑事らしい3人（泉・京・洋子）だ。

あとは大勢の私服の刑事達とヘルメットの警官隊。

「沙希ちゃん、やったわね」

「沙希！よく我慢したね。わたしだったらこのこぶしでぶっ飛ばしてやったわ」

「泉姉だったらそう言うと思っていた」

「沙希！この男らこれで一生暗いところから出られないと思ったら一発ここでぶっ飛ばしておこうか」

と女性刑事（京）もぶっそうなことを言う。

「ば・馬鹿な・・・一生暗い所だと？・・・べ・弁護士を呼んでくれ！」

すると最後の女性刑事（洋子）が

「あんた！何を馬鹿いってんのよ。国家反乱罪に弁護士がつくと思

うの？何甘いこと言ってる！」

「こ……国家反乱罪？……」

「警視正、今のは本当なんですか？」

女刑事の荒っぽい言葉に目を白黒していた男の刑事が、制服の婦警（日和子）にこう聞いた。

「ええ、このことは一般には知られていないけど、この間の京都の事件の後、国会で決まったのよ。」

沙希ちゃんのこととは国家機密、この事は沙希ちゃんも今まで知らなかったの」

「いやだなあ、私が国家機密だって……」

「沙希ちゃん、こんなことする奴がいるのよ。普通の法律だったらこの男達、数年で出てくるわ。」

そうしたらこの犯罪の傾向として又、再犯は確実ね」

「うーん、女性のことを考えるとそれも仕方がないか……」

「国家反乱罪……罪としてはどうなるのですか？」
と今度は牛尾刑事。

「うーん、超法規的罪状としか聞いていないわ。一生出られないのは確かだけど、

弁護士はつけられないし……あとは公安にまかせるしかないわね」

「公安？……公安が出てくるのですか」

「そうね、国家犯罪なもの。ローラー作戦を実行してどんな小さな犯罪も見逃さないでしょうね。」

あと土地・建物や財産は全て没収というのは聞いているけど」

聞けば聞くほどんでもないことをしたと悔やんでも悔やみきれな

い。

「わあ！」

と言う声で振り返ってみれば白虎丸が警官達の間をぬってのしのと歩いてくる。

口には気絶した男二人が襟首を鋭い牙ではさみこんいるのだ。

沙希の足元にドンと置くとスツと光になって沙希の身体に入る。

「大八木さん。私、あの魚住という男にだけ経絡をつきました」

「あつ、じゃあ、東京の銀行強盗と同じ・・・」

「はい、嘘を言ったり考えたりすると身体中、痛みが走るようになっていきます。ええ、一生です」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「これ、沙希ちゃんが『般若童子』として東京で銀行強盗を捕まえた時の話なの」

「えっ！・・・『般若童子』があの方なんですか？」

「そうよ」

「そんなあ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「そうですか、でも明日には公安に引き渡すことになってしまします」

「だからそれまでに調べてほしいことがあるんです」

「えっ？それは・・・」

「もう少し・・・彼女達が上がってくるまでもう少しまってください」

い
」

そこに駆け込んできた婦警。

「遅くなつて申し訳ありません」

「いえ、いいのよ。それより早く地下へ・・・」

警視正を先頭にかけていく女性達。

沙希は座つたまま動かないが向こうの部屋から顔を出した刑事に声をかける。

「小野さん、その部屋に覚せい剤が隠されています。よく探してください」

どきつとしたちよび髭社長が天井で目をキョロキョロと動かしているのだ。

「小野さん！」

「おおい！小野！」

と沙希を守るように立つ刑事が声をあげた。

「何でしょうか」

「小野さん！照明器具の周りの天井板を破ってください」

「はい！わかりました」

と急いで引つ込んで約5分・・・

「ありました、ありました・・・器具がある天井板にびっしり乗っています。

隣の天井板の一枚は取り外していた後が残っています」

「写真には撮つてあるのか」

「それは心配ありません。自分はいつもデジカメは携帯していますので」

「大八木さん！京都府警の刑事さん優秀ですわね」

「いやあ・・・」

とテレ笑いだが部下をこう誉められて凄く嬉しいのだ。

「小野さん！もう一箇所、調べて欲しいところが……」
「えっ？どこでしょうか？」

「これ、本当ありきたりどす。トイレの水槽の中なんどす。
密輸した拳銃が五丁ナイロン袋に入れられて沈んでいますえ」

「拳銃が？……わかりました……」
ととんで行く。警官が数人後を追った。

「大八木さん、拳銃のことはあの二人には寝耳に水え。
その壁の兄貴さんが二十丁の拳銃の密輸を弟分二人に手伝わせてや
ったことどす」

「とんでもない奴らだ。女性の拉致誘拐の上のレイプ、覚せい剤の
密輸と所持、
その上拳銃の密輸ですか。この罪だけでも無期懲役に近いのに
国家反乱罪いう重罪が重なったらこりゃもう駄目だわ」

男達がつくりして言葉も出ない。

「押収しました」

と刑事が持ってきたのは一丁ずつ油紙に包まれ、ナイロン袋に入れ
られた拳銃、

一丁一丁に二箱づつの玉が入っている。

「こんな物騒なものを……」
といてからはっとしてあきあを見る刑事。

「確か先ほど二十丁言われましたね。ここに五丁と天井に三丁の合
計八丁か

おい！浅沼！……あとの十二丁をどこへやった！」

「お・・・俺は・・・何も知らねえ」
浅沼はしらばっくれる。

「うふふふふ・・・大八木さん大丈夫です」

と言ってから鋭い目で三人を見る。視線を外そうとするが自由にはならない。

がっくりと首を落とす弟分。

「大八木さん、メモ用紙もってはいりますか？」

「あつ、何かわかつたんですね」

といって内ポケットから警察手帳をだして空欄のページを開ける。

そこに美しい文字でスラスラと書き始めたがピタッと止めてから

「浅沼はん」

と京言葉に戻って

「うちに恐ろしい女やて三回も思いましたなあ。鬼畜のようなあんさんにいわれとうない言葉です」

目を真ん丸くした浅沼だが

「そつどす、うちにはあんたの心の中すべて読んでいるんどす。

けんどうち、こんな力普段は絶対使いまへん。自分で封印していません。

けんどあんたらみたいな悪党に対しては封印を解くんどす」

といつてから文字を書き始めたが

「今、心を読まれんこと思て他のこと考えようしましたな。

そんなことしても無駄どす。今あんたが売った先の人のデータが次々流れこんどります」

と言いながら書き上げた警察手帳を大八木に渡す。

「おお、判りましたか・・・ここ・・・これは・・・」

「買った日付で名前と電話番号・・・そして屋号・・・一番最後は今隠している場所どす。」

大八木さんが驚かれたんはその屋号どすな？」

「はい、この店のほとんどが昔からある京都の有名店です」

「ほんとお馬鹿さんばかりどすなあ、京の伝統にあぐらをかきはつて・・・」

大八木さん、このお人達実は共通の趣味をおもちなんどす」

「趣味？」

「へえ、銃の愛好家の会員さんばかり・・・」

「えっ？銃の愛好家？・・・でもこんな本物持ったら・・・」

「ええ、やっておられるんどす。嵐山や日本海・・・銃を撃っているんどす」

「そんなことやられたら・・・」

「へえ、そやから今後そんなあほなことできんようにきついお灸をすえてやっておくれやす」

「わかりました。おおい、山下！お前先に帰って署長に報告してから礼状をとる準備をしておいてくれ。」

それとこれを捜査員にわたる数だけコピーしてな」

とメモしてもらったところを破って山下に渡す。慌てて飛び出していく山下刑事。

そのとき若い刑事が白衣の女性の腕を肩にまわして部屋に入ってきた。

それから次々と女性を助けて婦警や女性刑事達がはいつてくる。

椅子になんて座らせる状態ではないので壁にもたれさせて絨毯の上に座らせる。

そんな中、泉が世話をしていた女性が急に震えだした。

「く……くすりを……」

そんな声を出して床を這いずる。

……
……
……

「お……お母さん……あれ……」

琴美の指し示すのは這いずり回っている女性……

「綾美ちゃん……」

「姉さん！……」

悲鳴のような声があがる。

身体を前に乗り出してスクリーンのほうに行こうとする琴美を

抱きしめる弥生総婦長、母の鈴にはさっき入ってきた明子が抱きしめている。

「お母さんも琴美ちゃんもつらいだろうけど……もう少し……もう少し……」

じっと見ていて……」

そういう弥生も涙声だ。

……
……
……

痛ましそうな顔をして初めて椅子から立ち上がって女性に近づいて腰を落とした。

床に落ちた振袖を必死に掴む女性。

「可愛そう……こんな身体にされてしまいはって」と青黒くなつた腕の注射あとをさするのだ。

「大八木さん、何かナイロン袋みたいなあらしまへんか」

「ナイロン袋？何するんですか？」

「へえ、この女性達から覚せい剤抜いてあげるんです」

「身体から覚せい剤を抜く？・・・そんなこと出来るんですか？」

「へえ、前のうちには出来へんかったんですが、

この間の事件で得た通力で出来るようになったんです」

「あきあさん、これでよろしいか？」

と牛尾が持ってきたのは青いごみ袋。

「そつどすなあ、これでいい思います」「」

と一瞬で立ち上がった沙希。

「今からうちの姿、変わりますけど驚かんでください」

と一瞬で唱える真言・・・すると第三の目が開く・・・

その目から出た光が女達を照らすと一瞬にして光につつまれるのだ。

目を閉じたまま立ち上がる女性達・・・破れた下着が足元に落ちると

一瞬にして消えてしまう。そして身体を覆い隠す白衣も足元に落ちたその身体には

前ボタンの白いワンピースにかえられていた。真っ白な純な姿・・・

これは沙希の女性達へのプレゼントだ。

それからゆっくりその場で回りだす沙希、その目は閉じられた。

回転が次第に速くなり・・・沙希の姿が消える。

そしてその空間から現れた仏像・・・しかし、それは仏像ではなかった。

それは本物の仏・・・薬師如来の姿だ。

薬師如来は持っていた壺の蓋をとり、黄色い粉を一つかみつかむと光の中の女性達の上に振りかけた。

すると粉はまるで水の中に沈んでいくように光の中の女性の身体にきえていった。

光の中の透明度が段々と白濁していく・・・白濁というより真っ白になった時

その空間が女性達を離れ、ダンボールにセットした青いゴミ袋の上に移動する。

そして空間が圧縮されていくと下方から白い粉が袋の中に落ち、空間も小さくなっていく。そして空間が消えたときダンボールの青い袋には

ダンボールの1/4くらいの量の白い粉が入っていた。

「前！」

といって元の舞妓姿に戻った沙希。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつ・・・あのお方は、神様なのですか？」

琴美はもう声も出せ泣いている。

「お母様！・・・私は人間よ・・・ただちょっとだけ力があるだけ

・

これから悲しいことも味合わなければならぬけど、心静かに見ていてくださいね」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「凄い！・・・」

そんな声があちこちから洩れる。早瀬の女達にしてもそつだ。

「これが彼女達の身体に入っていたんですか？」

「へえ、身体の隅々にあった薬をその影響力と共に粉として全てを身体から抜いておいたんです。」

「ですから薬によって体や心が覚えていた記憶はもうありません。」

「良かったわ、沙希ちゃん覚せい剤を身体から消せて・・・。」

「ええでも、彼女達の受けた心の傷は直せません。」

「私、覚せい剤を抜いていただいたことで何とか生きていけます。」

薬が切れた苦しみと薬をもらったあとの浮揚感・・・180°反対でしたがそれは地獄でした。

それを身体や心が覚えていないうれしさはもう飛び上がるほどです。ありがとうございます。」

「沙希！さっきの仏様は？」

「薬師如来様です。お力をお借りしました。」

とってから女性達を見る。女性達も自分を助けてくれた女性だ。縋りつくような目で全員が見ている。

「大八木さん、先ほどうちが待っていてほしいと言ったこと今から説明します。」

これから彼女達に聞くことよく聞いていてほしいんです。」

「わかりました・・・おおい、皆・・・手を止めて集まってくれ。」

そう大八木刑事にいわれて集まってくる刑事や警官たち。

何事か・・・とあきあを見つめる目・・・目・・・。

「ねえ、あなた達に少し聞きたいことあるんです。よろしいですか？」

「はい・・・」

「ごめんえ、あなた達がもしかして忘れようとしていたかもしれへんけど、

彼女達の魂を天に帰してあげなくてはならないんです。判かっておくれやす」

女性達は下を向いたが

「ええ・・・」

とはつきり返事をした。

「あの六人の女性達がどうなったか知っているのね」

「はい、男達があとで話してましたから」

「どこに遺体を埋めたって言うていなかった？」

「はい、・・・けれど、そうは遠くないところだと思います。」

男達が帰ってくるのそんなに時間がかかっていませんでしたから

「わかった・・・ではどうして殺されるようなことに？」

「赤ちゃんです。・・・彼女達妊娠してしまっただから」

そんな会話を聞く刑事たち・・・予想もしなかったことだけに聞いたシヨツクは大きい。

男達を睨み付ける視線も多くなる。思いもしなかった言葉だけに

「沙希ちゃん！今のは？・・・」

日和子の言葉に頷く沙希に・・・

「そんなあ・・・」

とつい声をあげてしまう若い婦警。

「じゃあ、彼女達のことを知ってる人・・・手をあげてほしいんど

す・・・」

そついうと恐る恐る手をあげる三人の女性。

そのうちの一人が消え入るような声で

「一人は・・・私の・・・私の姉なんです。

私・・・姉を見殺しにしてしまった。恨まれても仕方ないこととして
しまったわ」

「石川綾美さん・・・あなたのお姉さん怒っていまへん。

それよりあなたのこと心配で心配で仕方がないんです」

「え？・・・」

「逢わせてあげまひよか」

「え？・・・そんなこと出来るんですか？」

「ええ」

というと壁際にむかって金色の光を掌から出す。

すると六人の女性が座り込んだ女性達を見ているのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ね・・・姉ちゃん・・・・・・・・」

呆然として声が出なくなってしまう琴美。

「文江ちゃん・・・・・・・・」

鈴も・・・もう何もいえない・・・

でも娘の靈魂のなんとも言えない優しい笑みに目が離せなくなっ
ている

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ぎゃー」

「お姉ちゃん！・・・」

「先輩〜」

そんな叫び声上がる。

「うっ〜」

という声も晒し者の男の間から洩れている。

それだけではなく怯えまくっているのが刑事達に手にとるように判る。

目の前の女性達のことを思うと刑事といっても人間なのだ。

今までの悪辣さが我慢できない。ガタガタ手を震わせているものもいる。

許されるならば今、思いつきりぶん殴ってやりたい。

そんな気持ちが判るだけに余計に女性達に対して優しい気持ちになつて

「あなたがお姉さんの文江さんどすえ？」

「はい・・・」

「妹さん、お姉さんが亡くなった事は自分のせいだと

自分を責めておられるんどすけど、あなたから声をかけてあげて・・・」

文江は座っている妹の綾美に精一杯の優しい笑顔をむける。

「綾美ちゃん、今はあなたに触れることが出来ないけど

出来るものならばあなたを思いつきり抱きしめてあげたい。

お姉さんね、死んだあとはずっとあなたを見守ってきたの。

自暴自棄になっていくあなた・・・見ていてとてもつらかったわ。

でもこらえきれない哀しみを味わったあなたはこれから強くなるの」

「文江姉さん！・・・でも私こんな身体になつちゃったわ。

肉体は治っても心は何もかも覚えているのよ・・・」

「綾美ちゃん・・・だから・・・だからこれからはそのお方についていきなさい。」

そのお方は仏を内に秘めるお方・・・そのお方についていけば、きっとあなたは幸せになれる」

女性達が見つめる沙希はその素晴らしい微笑で女性達をみつめるのだ。

その微笑の前で女性達の心は癒されていく。

「沙希ちゃん、私残念だけどあなたの舞の公演にはいけないわ」

「仕方ないですね」

「今、溼にも伝えておいたから待っていてくれるの」

「じゃあ、・・・」

「ええ、診察を終えたら、ゆっくり温泉につけてあげるから」

「お願いします」

「沙希！そういうわけでわたし達も行けないからね」

「叔母様・・・ましろちゃんを置いていきますから」

というと沙希の身体から出てきた光が白い蝶にかわってからましろが姿をあらわした。

「ましろちゃん。この女性達の遺体の場所、わかりましたね」

「はい、間違いなく・・・」

「京姉、泉姉。このましろちゃんの案内でこの方達の遺体を掘り出してあげて」

「うん、わかった。ましろちゃん、案内をお願いしますね」

「はい、まかせてください。泉様」

「あなた達を天に導いてあげる」

といって沙希が真言を唱えてからしばらくすると窓から光が入って

きた。

その光の中から月代をそりあげたりりしい若侍が出てきた。

「あつ、沖田様」

「沙希殿、先日会って以来ですか・・・」

「総司さまは昨日も希佐ちゃんのところにな？・・・」

「はい、どうも1日に一度剣を振らないと我慢が出来ませんから・・・」

「沖田さん！」

「ああ・・・大八木さん。どうです？喉のほうは？」

「いえいえ、なんともありません。でもさすが沖田総司さんだ。

新撰組で何度も実践されたあの技、とてもかありません」

「いやいや、私よりこの沙希殿ですよ。」

江戸の昔から強いと言われる剣豪の中であなたが一番強い！と私が言ったことから

あの日の試合になって沙希殿は見事、宮本武蔵殿を打ち負かされた。

そして希佐殿のあの恐ろしい剣技もかわされ、

おまけに一度見ただけのその剣技で希佐殿をも負かされた。

あなたの強さはそれは遙か上の我等が届かぬものでした。

幕末から貴女が帰られたあと近藤さんと土方さんが言っていました
つけ。

『わしは沖田君との立会いを見ていてつくづく立ち会わなくてよかった』

という近藤さんと・・・ふふふ・・・あの口が悪い土方さんはねえ」

「どういわれたんどす？」

「『あんな化け物、もう出会わずにすむと思つとほつとする』。あ
ははは」

「土方様と近藤様も、もう……」
「あははは……私が言ったこと内緒ですよ」

「でも今日、どうして沖田様が?……」

「ええ、今天界がバタバタしているから、手を離すことできないんですよ」

「えっ? なにかあったんですか?」

「あなたのせいですよ」

周囲のもの皆が、目を大きくして二人を見ているし耳も澄ませて一心に聞いているのだ。

「わたしの?」

「ええ、実はあなたの力の素……あなたを存在させたのが誰かということが判ったのです。」

元々あなたの力の元……いやその存在自体が天に預かり知らぬことでした。

不思議に思われた菩薩様がお調べになられたのです。

そして、ようやくわかりました。宇宙の意思……そのものでした。

この宇宙の創世記、たった一つの生き物……小さな微生物……それが人間の素でした。

星々が誕生し、時の流れとともに環境の変化があり、その変化が生物を産み出す。

人もそうして誕生しました。でも人が多くなればなるほど戦いがあり、

それと共に限らない欲を誕生させていきます。

欲が戦いを……そして、戦いが欲を産む。それが人間の血の輪廻です。

でも人間は愚かであり、しかしそうではない種もいた。それが女と

いう生き物でした。

平安時代に安倍晴明殿が戦いを無くす為という術を一人の女にかけたのです。

女しか産まれぬ一族・・・女しか愛せぬ性・・・でも一族を絶やさないために

好きでもない男に身を与えねばならぬ哀しみ・・・こうして今の世まで続いた。

そうですね、お園さん」

「はい、そのとおりです」

「このお園さんは平安期に安倍晴明殿に術をかけられた沙希姫殿を産んだ母でした。

その母が転生して幕末期にお園として生をうけた。

そして再び転生してこうして飛鳥日和子という沙希殿の叔母後として

こうしてここにおられる。そして沙希殿は最初男として生を受けられ・・・」

えっという顔をする晒し者の男達・・・呆然と沙希を見るのだ。

「けれどその優しさのため男達から徹底的な制裁を受け、

そして幼心に死を選ぶことになりました。けれど死ねませんでした。

残ったのは喉の傷・・・それが沙希殿の女として転生するための一歩となった。

後年、沙希殿は一族の長の長女に逢い、長にも出会ったことが二つの性を持つ沙希殿の誕生となります。

長の自殺した次女・・・瓜二つだったその女性の名が早瀬沙希。

その自殺も普通ではありませんでした。

仏に選ばれ沙希殿と合体するための死であり覚醒した力を発揮でき

るようにするためでした。

でも沙希殿は成長しつづけます。通力というとんでもない力も得ました。

これ、全て天界にも預かり知らぬことなんです。だから、菩薩様がお調べになった。

そしてわかりました。沙希殿は・・いえ、沙希様は天界より遙か上・

いわば宇宙の大いなる意思がつかわれたただ一人の人間だったのです」

「総司様！うちその先は聞きとうはおへん。うちはふつうの人間です。赤い血が通った人間なんです。

いろんな力あるの仕方おへん、うちあきらめています。

それによしんばうちがその宇宙の意思とやらから産まれたとしても今は人間なんです。もういわんとしておくれやす」

「わかりましたよ・・・沙希殿。さすが我ら天界の全てが惚れ込んでいるお方だ。

ふふふ・・わたしはそう言われると思っていましたよ」

「もう、総司さま・・」

浚われていた十二人の女性全てが熱い視線で沙希を見ている。

「では総司様、この子達を天に連れて行ってあげてください」

「はい」

と前に進むと

「もうお別れはすみしましたか？」

「はい！」

と言う声に白い光が総司と六人の女性をつつみこむ。

そして総司が十二人の女性に

「さつき言い忘れましたが、早瀬一族は血の結びつきだけでなく、女の哀しみをもった女性なら温かくむかえてくれるそうですよ」「
と言ってから

「では、沙希殿」

と挨拶すると白い光が小さな光のの集合体に変わり、
そして、バラバラになって窓から外に出て天に上っていく。

「おねえさん！・・・さようなら・・・」

「元気に生きていきます・・・」

窓に走りよってこんな声を張り上げる女性達・・・
光はすでもう消えていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

娘の成仏する姿・・・あの娘が幸せそうに光になって天に上って
いく・・・

決して見たくなかった姿・・・でも一体あの微笑はなに？・・・
琴実にはとうてい訳が判らない姉の言葉・・・
あの人についていけば絶対に幸せになれるって・・・
もう呆然とスクリーンを見つめる二人の母子。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「いけない！沙希！開演まであと30分よ」

「きゃっ・・・いけない・・・」

「パトカーで送らせましょうか」

「いいえ、今は事件の最中どす、

個人の都合でパトカーを動かしてはいけません。うち、飛んでいきます」

「そうですね、そのほうが早いですね」

「じゃあ、沙希ちゃん。あの男達を」

「へえ」

という指を鳴らす沙希。男達は警官隊の間に次々とおちてくる。

とんでもない悲鳴をあげた魚住剛三・・・

「大八木さん、今の悲鳴どす。嘘を言ったら今の悲鳴あげるんどす」

「うあははは・・・痛いというのは気の毒だが今までの悪事を思えば

まだまだ足りませんなあ。・・・畑長さん、取調べはあなたの役目だが

これ若手だけでもやれそうだな」

「八木長さん、わしはこんな取調べは今だかつてやったことがないんだ。

この間の東京での銀行強盗の取り調べをわしが古くから知っている警部が

やったんだが、あとで電話してきて

『こんな楽で面白く、そして小気味いい取り調べやったことなかったよ。』

どうだうらやましいだろう』なんていわれちゃいましたね。

今畜生思いましたが、一生機会が無いと思ってあきらめていました。

それがこの間の殺人集団です・・・だが又しても他の取調べでどうにもならなく

首領達を警視庁に取り上げられてしまいました。

だから、今はもうワクワクしていますよ、
あんた方、娘さん達には聞かせたくない言葉だが
取調べで徹底的に吐かせるからそれで許して欲しい」

捜査員達のこの事件のやる気は凄いものだった。

だから、沙希は安心してこの現場を離れることができる。

「ましるちゃん、あとをよろしくね」

「はい、あきあ様。ご安心を・・・」

その言葉を聞くとニッコリ笑って1mほど浮き上がりそのまま窓の外まで移動する。

窓の近くにいた12人の女性達は窓をあけて表の沙希を見るのだ。

思いつきり大きく目を開ける馬鹿な男七人。

沙希は片手を少し振ると、飛び上がった。

歓声をあげる女性達・・・恩人であり、いまやあこがれとなった人
を

見送るつかのまの幸せなひとときであった。

.....

母の鈴は今ももう明子にすがり付いてタダタダ声を殺して咽び泣いている。

琴美に涙はない、今はただ日野あきあの優しい笑みを呆然と見つめているだけだ。

「お母様・・・琴美さん・・・あなたたちにとってとても悲しい映像を見せてしまいました。

でもこれはあなた達に強く生きてほしかったからです。慟哭はいつ

までも続かないのですよ。

そのあとにはきつと幸せが待っている・・・そう信じてください」といってから

「弥生さん・・・お願いします」

「はい、判りました」

といて立ち上がった。

もう一人看護師が後に続き、二人して襖を開けると・・・そこには十二人の女性が座っていた。

真中に座っていた一人の女性が飛び上がるように立ち上がって走ってきた。

「お母さん・・・琴美ちゃん・・・」

そういつて二人に飛びつくように抱きついた。

「ごめんね・・・ごめんね・・・心配させて・・・」

とうとう琴美の大きな目から大粒の涙が流れてきた。

「お母さん・・・身体・・・大丈夫なの？」

「ええ・・・ええ・・・さっきまで痛かった心臓が・・・温泉に入っ
て良くなったの・・・」

「そう・・・あの温泉に私も入ったわ。身体もしっかり良くなっちゃった」

身体という言葉にビクンッと身体を震わす母・・・」

清い娘の身体に悪魔が残した爪後・・・いくら拭っても心の傷は消えないのだ。

それが判っているだけに逆に自分を気遣ってくれる娘の優しさに余計に涙が止まらない。

「帰ろう・・・ねえ、お姉ちゃん・・・わたし達と帰ろう・・・」

「ごめんね、琴美ちゃん。お姉ちゃん帰れない。」

私・・・もう前のお姉ちゃんじゃないの。身体が綺麗になっても心が覚えているの。

・・・あの辛い時をね・・・
でも、あの方の傍なら私・・・救われるの・・・だから帰れない・・・」

その答えは予想出来ただけに強いて一緒に帰ろうとはいえなくなつた。

「じゃあ、私もこっちに住む」

「いけないわ。あなたは子供のころからの夢だった留学をしたばかりじゃない」

「でも・・・」

「琴美さん！・・・あなたの夢かなえてあげようか」

そういう沙希の言葉に

「えっ？」

と驚く琴美。

「琴美はん」

と声をかけたのが人間国宝の井上貞子だ。

「この小沙希ちゃんの言うこと素直にきいたらええ。

小沙希ちゃんはおなごの哀しみや苦しみ知ってしもたら我慢出来んお人どす。

そやからこうしてドンドンおなごはんが集まってくるんどすえ。

小沙希ちゃんにまかせておいたらよろし」

そういつてニコニコと笑うのだ。

「琴美さん・・・いいえ、琴姉と呼ばせてもらおうわね。

琴姉はアメリカのどこに住んでいるの？」

「ワシントンの市内です」

「ケイトのところは？」

「ワシントンの」

「えっ？それじゃ私の通っている大学の近くです」

「じゃあ、XXX大学なの？」

「はい」

「OK！後輩よ。沙希了解だよ」

「沙希ちゃん！その子潜在的に内臓が悪いの。だから食事はバランスを取ってほしいの」

「澪姉さん、そのことなら心配しないで。

家のママ、口やかましいぐらい食材の選び方がうるさいのよ。

琴美、あんたが行ったら絶対に嫌になって悲鳴をあげるくらいの食事バランスよ」

「それで決まりね。琴姉はアメリカに行ったらすぐに今のアパートを引き払って

ケイトの家にホームステイよ」

「待って、沙希！私・・・近々家に帰って必要な荷物を持って来ようと思ってるの。」

私、琴美のスケジュールに合わせるわ。一緒にアメリカに出発よ」

「あっ・・・はい・・・」

次々と目を見張る速さで物事が決まっていくこの現実についていけない琴美。

「それと大学行きながらのアルバイトは禁止です」

「えっ・・・でも・・・」

「よく聞いてください・・・早乙女薫事務所ワシントン支局社員石川琴美、

それが琴姉の身分です。勿論正式な社員です。でも条件が一つ、あくまで学業優先です。

ケイト姉さん、大学に赤点ってあるの？」

「勿論あるわよ。アメリカの大学のほうが入学してからが厳しいの

よ

「じゃあ、赤点を取ったら正社員の身分剥奪ね。アルバイトに降格よ。」

次の試験に赤点がなかったら身分復活。アルバイトにはボーナスがないから少しきついわよ。」

ケイト姉さんのママに監視お願いね」

「ママ、喜ぶわ。私最近ママの相手にならないから寂しがつているの」

「それと、ワシントン支局の仕事を教えてあげて」

「そんなに難しいことではないわ。日本からのデータをMOからD-ROMにして

ホワイトハウスや国防総省にもっていくだけよ」

「えっ?・・・ホワイトハウス?・・・国防総省?・・・」

一生入ることがないと思っていたアメリカの重要施設だ。びっくりして沙希の顔を見る。

一体この人達は?

今日会ったばかりでそう思うのはしかたがないだろう。

「アメリカに行く予定がたったら私に言うのよ」

「はい、じゃあお知らせしますから電話番号を・・・」

「電話番号?・・・ほほほほ・・・琴美!あんた何行ってるのよ。」

あんた達一応お母さんが一週間入院でしょ。当然あんたも泊まるわけ。

だったら毎日顔を合わせるでしょ」

「えっ?・・・じゃあ・・・」

「そうよ、ここににいる全員といつてもその希美子さんは違っけど他の全員は地下に住んでいるのよ」

「そうなんですか」

「じゃあ、次は綾美さんたち十二人の女性ね。貴女達はどうしても帰らないのね」

「はい、先ほど綾美さんが言われたとおりです。」

私達・・・もう前の私達ではないんです。身体が綺麗になっても心が覚えています。

・・・あの辛さはもう一生忘れません・・・でも、沙希さんの傍なら救われるんです。

・・・だから帰れません」

「わかりました。でも条件があります。私あなた達のお家の方を泣かせたくありません。」

きちつと伝えて許可をもらってください。

お仕事があります。地下の保養施設、看護師、パソコンのプログラマー、営業、

芸能部のマネージャー等です。家はこの地下です。

しばらくはあなた達は警察での用事がありますから帰られませんが後でお家の方と連絡しておいてください」

「もう、連絡は終わってます。ここは男子禁制ということもあって

結城希美子さんの所を家族に言っておきました」

「わかりました。・・・お母様・・・石川鈴さん」

「はい」

とさつきから下ばかりを向いていたが視線を沙希に向ける。

「綾美さんはここに住めます。お母様も東京の家を処分されてここに来られたらいかがです？」

「でも・・・」

「お母さん、沙希さんの言われるとおりにして・・・」

お母さんが一人にいると思うと心配で・・・心配で・・・」

「ねえ、お母さん。一緒に住もう・・・」

なかなか決心がつかないようだ。

「ねえ、お母さん」

と近づいてきて鈴の前に座って両手をとった沙希。

「綾美さんは早瀬一族になられました。」

平安時代から続く哀しい歴史は先ほど映像の中で沖田総司様が語られた通りです。

私は術の失敗で今は18歳なんです。一族になれば綾美さんは私のお姉さんです。

「……ねえ、綾姉！」

「私をそう呼んでくれるのですか？」

「あたりまえでしょ」

「嬉しい！」

「お母様、綾姉が私の姉ならばあなたは私の母でもあるのですよ。ねえ。お母様」

「あなたが……私の……娘……」

「はい、だから心配させないでください」

この言葉が鈴の気持ち突き動かした。

もう迷うまい。……うん……と頷くと鈴の娘と変わらない。

飛び付くように抱きついてきた

……背中をさする鈴の胸に熱い想いが溢れてくる。

ぎゅっと強く抱きしめると肩が濡れているのに気づいた。

驚いてゆっくり沙希の腕を引き離して顔を見てみると大きな瞳に涙が溢れているのだ。

今度こそ思いつきり抱きしめてあげる。この子は……この子は……私の子だ……

早瀬の女にとって幾度も見た情景だ。

いつも中心にいるのは沙希の姿、彼女がいたからこそまで人数が増え絆が強まった。

……彼女がいたからこそ新しい息吹が芽生えた。それもいくつも……幾人も……

沙希を知り……沙希の優しさに打ち震える喜び……

こうして闇がせまる頃、一人で飛び立った沙希の向かう先は比叡のお山。

宙でとまった沙希の足元に比叡の奥の院で流れる法要の読経の声、女性達への鎮霊の読経なのだ。男の身勝手な欲望で失われた大切な命。

生きていたら女としての幸せを手にしただろうに……

逆に命のタイミングで生き残った十二人の女性達、

当面の早瀬の庇護……けれど女性としての一本立ちはこの先絶対に必要なのだ。

沙希の掌にポツと浮かぶ『翔龍丸』。

沙希が吹くこの曲、天に届け！と……そして女性よ幸せに成れ！と

この比叡のお山の遙か上空から流れる横笛の音色は

この宇宙の遙か彼方まで流れていった。

この一年の沙希にはいろんなことがあり過ぎた。

先ずはドラマだ。半年ぐらいという予定が一年に延びたのは、あまりの人気番組になってしまったに他ならない。

日野あきあは無論のこと、ドラマ出演者全員が日本中に知られるようになった。

マネージャーがいなかった彼女達全員にマネージャーがつくようになり、

アイドルの岩佐メグはレコード大賞の新人賞のタイトルを取ったほどだ。

ドラマの人气が継続したのも特撮代わりの沙希の術によることも多かったが、

あの突然決まったあきあからの挑戦が大きかった。

挑戦は最初はあきあだけが苦しみながらやっていたが段々共演者やスタッフ達が面白がり、

途中からはCMの提供会社まで参加するようになっていた。

だから挑戦は一時間のどこで行なうのか知っているのは景山プロデューサーだけだ。

取聴者もドラマの面白さに加えこの挑戦に参加することで大人気となっていた。

平均の取聴率が35%を超えるお化け番組となっていたこのドラマ、

かなりの撮りだめをしていたが、最終回を迎えるのは早乙女薫のお腹が隠せなくなったからだ。

なんとか騙し騙し撮っていた早乙女薫自身がそんな撮影が苦痛となつてしまった。

だから、テレビ局の許可をとってその日に記者会見をしたのは、テレビ局ももう仕方がないとあきらめたのだ。

記者達、会見場に入ってきた薫を見て吃驚仰天……。

いつのまに……いつのまにあんなお腹が大きくなったのか……

あきあばかり追いかけていた失敗にほぞを噛んだ。当然集中するの
が夫の存在だ。

でもどういいうわけか男性記者たちの質問を邪魔するような女性記者
の子供に関する質問ばかり……。

いろんな女性達の質問に答えていた薫が最後に男性記者に向かつて
「私があなた達の質問を無視して女性記者さん達の質問ばかり答え
ていたのは何故だかわかります？」

「いいえ、随分ひどいなあつて思ってますよ」

「だって女性記者さん全員はこの子の父親が誰だか知っているもの
ねえ」

「ええ………本当ですか？………」

「ええ、男の方つて随分古い質問してるなあつて………」

「十ヶ月前ならわかるけどね」

「えっ？もう十ヶ月前から判っていたわけ？」

「あたりまえよ、でも直接聞いたわけじゃないわよ。

薫さんの言葉や行動みていれば直ぐに判ったわよ、
そして念のため薫さんに言ったらズバリだったわ」

「じゃあ、誰なんです？」

「そんなの言わないし、つまらない質問………だわよねえ………」

「ええ、・・・私もあの人の子供が欲しいです」

「いいわよ、あなたが女の哀しみと苦しみを知ったならばいつでもいらっしやい。」

でも、私もそうだけど結婚はできないからね」

「わかっています。あの方に結婚なんか求めませんわ」

「えっ？結婚しないんですか？」

「しないわよ。あたりまえじゃないの。シングルマザーよ」

こんな記者会見を開いた薫は一週間後、玉のような赤ちゃんを産んだ。

男女の一卵性双生児で、もちろん地下の病院でだ。

貞子や高弟達は、薫で五人目の出産だというのに

舞妓や芸妓達の稽古もまま成らないほど落ち着かない

菊野屋の女将菊野も分娩室の前で行ったり来たりで、

今日の薫を入れて、あと五人も続くと思うとため息が出てしまうが、

産まれたあとはもう天にも上る喜びが待っているのだ。

長椅子に座ってこんな様子の女将をあきれた様子でみつめる花江と花世。

注意をしようと口をあけかけた花世、その耳に『おぎゃあ〜・・・

おぎゃあ〜』

と大きな泣き声が聞こえてきた。

『ガバツ』と立ち上がった二人、菊野と抱き合って飛び跳ねた。

分娩室のドアが開いて、総婦長の弥生がニッコリと笑って出てきた。

それでも心配そうな菊野が

「弥生ちゃん・・・？」

「元気な赤ちゃんですよ」

「それで？・・・」

「ええ勿論、男の子と女の子の双子で薫さんも元気ですわ」

「は・・・花世ちゃん！このことを早うお師匠さまに・・・」

「へえ・・・」

と跳んで行く花世。

案内されて分娩室に入っていくと疲れきってはいたが

二人の子供を抱かされた薫が潤んだ目で我が子を見つめている様子になんか神聖な空気が漂ってくる。

見とれていると薫の素顔から流れる汗に、

慌てて風呂敷から間白いタオルを出し汗を拭いてやると、

「ありがとう、菊野母さん・・・」

このあまりに有名で自分とは十も年が離れていない薫に母といわれ、

「な・・・何をいわれるんです。母だなんて・・・」

「うっん、沙希ちゃんの京都の母さんなのよ。だったらこの子達のお婆様なの。」

ねえ、ぼくとあたし・・・早くおばあちゃんにいい名前をつけてもらおうね

「えっ？・・・名前？・・・」

呆然とする菊野・・・

「そうよ、ねえ。・・・』お婆ちやま、早うお名前ちゆけてちょうだい』・・・て」

「花江ちゃん、どづしよづ。・・・」

「お母ちゃん、何言ってるんどす。
小沙希ちゃんの子どすえ、うちらも手伝いますから、りっぱな名前
つけましょ」

「良かったわね、いいお名前つけてもらおうね」

傍にいた弥生のその言葉にもう我慢できず廊下に飛び出し、

長椅子に座り込んでオイオイ泣き出した。

しょうがないお母ちゃんや思うが、

薫や小沙希の優しさを思うとつい花江も菊野に抱きついて涙を流し
てしまう。

「どうしたんえ？」

と声がかかった。見上げると高弟達を連れた貞子が目を見張ってい
るし、

高弟達の後ろのほうで花世が目を大きくしている。

「あつ・・・お師匠様。薫はんが・・・薫はんが・・・

赤ちゃんの名前を・・・つけ・・・いわれるんどす」

その言葉でフツと明るい笑みを洩らした貞子。

「うちもどす・・・うちも真理はんに名前つけ言われて、

それはもう・・・寝ずに一生懸命考えたんどすえ。

菊野はん！あんたも寝ずに考えるんどすなあ。・・・それはもう必
死どす。

名無しの権兵衛なんてさまにならしまへんえ」

と笑って分娩室に入っていく。

「お母ちゃん・・・」

と飛びついてきた花世。

「うちらも手伝いますよってええ名前つけまひよ」

「へえ・・・お願いです」
といつてから

「そつや、うち身を清めてからええ名前つけさせてください・・・
いうて

お百度踏まなあかん・・・」
と立ち上がると足早に去つていく。

自分達のことすっかり忘れられた花江と花世。

「しょうがないお母ちゃんだこと」

と顔を見合わせていたが、急に

「きゃあ」

と声をあげて走り去る。競争になったのだ。

こんなことがこの月9回繰り返された。

まずは赤ちゃんの名前と名づけ親達・・・。

早瀬真理（母親） 早瀬舞「まい」（長女） 早瀬優希「ゆうき」（長男）

・・・ 井上貞子（京舞家元）

早瀬理沙（母親） 早瀬瑠璃「るり」（長女） 早瀬志希「しき」（長男）

・・・ 佐野四郎・静香夫婦（株・オクト 社長、専務）

早瀬操（母親） 早瀬心「こころ」（長女） 早瀬翔「しょう」（長男）

・・・ 蓬栄上人（比叡山奥の院館長）

早瀬律子（母親） 早瀬貴沙姫「きさき」（長女） 早瀬珊瑚「さんじゅ」

「（長男）

・・・ 天城ひづる（タレント）

結婚式は沙希がアメリカから帰ってからあげるが

子供のことを考えて出産前に籍だけは入れた。

小川智弘という男性の籍、早瀬沙希という女性の籍、
国の好意によって小川智弘と言う名前が消え去り

早瀬沙希という名前に変えられたのだ。

だから小川智弘と言う名はどこにも、もう知ることはできない。

早瀬沙希という名前で男女両方の籍を持つことになったのだ。

続けると

長谷川かおる（母親）長谷川愛「あい」（長女）長谷川博士「ひろ
し」（長男）

・・・東菊野（置屋菊野屋・女将）

浅香まゆみ（母親）浅香恵「めぐみ」（長女）浅香歴「れき」（長
男）

・・・峰巖和尚（龍雲寺住職）

山瀬順子（母親）山瀬静「しずる」（長女）山瀬岳「たけし」（長
男）

・・・宋円和尚（永龍寺住職）

松島奈緒（母親）松島奈知「なち」（長女）松島義正「よしまさ」
（長男）

・・・長谷部英俊（警視総監）

小谷澗（母親）小谷幸「さち」（長女）小谷涼「りょう」（長男）
・・・相良明子（相良病院副院長）

以上である。

18人も一度に言わば孫が誕生した井上家は”知っている”人た
ちから

送られてくるお祝いの品々に居間は占拠される始末だ。

比叡山からも蓬栄上人、峰巖和尚、宋円和尚、そして許されて天鏡の4人が僧侶ということもあり、男子禁制のこの病院施設に面会にこられたのは画期的な出来事だった。

4人を迎えたのは最近庵にいるよりここにいるほうが多くなった二人の尼僧、嬉々としながら迎えに出てきたのは次々と誕生する赤子を世話できる毎日で

張り合いがあることこの上ない。

朝のお勤めを手早く済ませ、いそいそとやってくる。

そして迎えられたこの4人・・・もう最初から表情が崩れっぱなしで

しまらないことしまらないこと・・・

一部屋一部屋訪れお祝いの品を渡していくが

赤ちゃんを抱かせてもらう喜び・・・自分のひ孫・・・甥っ子、姪っ子なのだ。

特に肉親がない天鏡にとってもう幸せの極地だ。

赤ちゃんを抱かせてもらっておいおいと泣くシーン・・・あきれはてるが

天鏡の気持ちを思うと見ているだけで胸が熱くなる僧侶達・・・尼達、女性達だ。

自分が名付け親になった赤ちゃんにはやはり気になると思え相好を崩す蓬栄、峰巖、宋円・・・天鏡にふと寂しさが襲ってくるのは仕方ない。

そんな気持ちができるだけにそつとしておいたが病室をでて帰ろうとした4人に

「あつ！天鏡さん！ちょうどよかったわ」

と声をかけられ振向くと、大原智子が立ち止まっていた。

と天鏡、その大きなお腹に目を見張る。

「智子殿・・・おぬし・・・」

「ええ、そうよ。沙希ちゃんの子供・・・あと3ヶ月いうところかな。」

私だけじゃないわよ。出産ラッシュ、第二段というところね」

「で、わしに用とは？」

「ええ、女の子は天鏡さん、男の子は武者僧さん達にね」

「えっ？智子殿言われる意味がとんと・・・」

「何いつてるの、名前じゃない。名前をつけてほしいって言うてるのよ」

「えっ？名前を？」

「そうよ。私も天鏡さんと同じで身寄りが一人もいないわ。」

そんな私がもらった幸せ・・・ひとかけらだけ天鏡さんにもわけてあげる。

天鏡さんが女の子よ、武者僧さんたちが男の子・・・間違えないでいい名前をつけてね。頼んだわよ」

と歩いて歩み去る。

呆然と立ち竦む天鏡・・・

「天鏡・・・良かったではないか」

「お・・・お上人・・・さま・・・」

「泣くな！・・・おまえにここで泣かれたら折角寝た曾孫達が起きてしまうではないか。」

泣きたければ武者僧達と一緒に泣けばよい」

大きな目から大粒の涙が流れ口をへの字に曲げて声を出さぬ。でも、どうも我慢が出来ない

「お・・・お上人さま・・・」

「ええい、お前の言いたいことぐらい判るわ。わし達3人ゆるりと帰る、お前は早く帰れ！」

天鏡は、蓬栄上人の顔を見てからペコリと頭を下げから一目散に走り去る。

「仕方のない奴じゃ」

「でも、いいお方でございます」

二人の尼も天鏡を見送りながらもその喜びが判り過ぎりほど判った。

妙真尼は松島奈美、蓮昌尼は鳴海京子に名付け親を頼まれたばかりなのだ。

大原智子が出産ラッシュ第二段といったがここで他に妊娠した者を紹介する。

大原智子と鳴海京子の妊娠は先に書いたが、

妊娠がわかったとたんのこの二人、

手を取りあつて飛び跳ねるその喜び方を明子にきつく叱られたの
言うまでもない。

あとは・・・飛鳥日和子。妊娠がわかったとたん真つ赤になって
恥ずかしがり、

娘の京と泉に抱きつかれての祝福に少女のように泣き出してしまっ
た。

名付け親は井上貞子の高弟、志保と勝枝だ。志保が女の子、勝枝が
男の子。

聞いたとたん震えながら辞退する二人に

「何を言つとるんどすか、日和子はんはあんたらにとって前世から
縁のあるお人どすえ。」

名前をつけるぐらいでガタガタすることあらしまへん」

と貞子に叱りつけられようやく承知したのだ。

しかし、名前が決まるまでの日々、この二人にとって苦しみの毎日
となる。

でもそれはとつてもとつても嬉しい毎日でもあるのだ。

松島奈美・・・この不思議な女性の妊娠は周囲にあつといわせ、真つ赤になって娘に報告したこの母、奈緒は『可愛い・・・』と思つた。

これで人並みの幸せが母に訪れたと涙を流しなから祝福した。

千堂ミチル・・・の妊娠には周囲も娘の杏奈にも啞然とさせた。

「いつのまに?・・・」

その言葉を吐いたまま硬直する杏奈にテレ笑いしたミチルが

「ごめんね、別に隠していたんじゃないんだけど・・・」

隠してない?・・・それが隠してない顔なのか・・・と頭に血が上り怒鳴りそうになったが

「でも、ほんとに幸せ・・・」

と喜んでいる母を見ているともう何も言えなくなった。

ただあの男勝りの姉、沙里奈にはどう報告しようかと悩んでしまう。

名付け親は姉薫と仕事の関係で親しい小野監督に頼んでいる。

そして最後の6人目はケイト・マイヤーだ。

妊娠がわかった時の喜びは日本人もアメリカ人も変わりはない。

ましてや結婚出来ないが大好きな人・・・この世で二人といたくない人との間に出来た子供だ。

ワシントンのママへの報告は微にいり細に入りなされた。

シングルマザーと聞いて納得がいかなかったママも

早瀬沙希という可愛い恋人のことを聞くにつれ驚きが大きくなっていった。

そしてケイトが送ってあげるといった沙希のドラマや映画のDVDを早く送って!

楽しみに待っているからと言って連絡を切ったのである。

名付け親はあとで判るから・・・と今は内緒にしている。

ここで話を戻す。天鏡の走り去る後姿を眺めながら

「しかし、ここは極楽じゃのう・・・のう峰巖・・・宋円・・・」
蓬栄上人が言うのを

「ふむ・・・沙希の優しさが満ち溢れておるのが感じられるわいと峰巖。

「お上人様、峰巖様・・・ここに女達が集まってくるのが判る気がします」

と宋円が言う言葉にニツコリと顔を合わせる二人の尼僧。

尼僧達に案内されて上に上がると

「何かあったんどすか?・・・天鏡はんが急いでお帰りになったよ
うどすが」

貞子が驚いたように言う。

「仕方がない奴でございましてのう・・・」
と先ほどの出来事を話す蓬栄上人。

「ほう・・・智子はんがなあ・・・」

「のう家元、お互い大変な孫を持ったが・・・幸せよのう」

「ほんに・・・ほんに・・・」

こうした刻がゆっくりと過ぎていく。

「ねえ、希佐ちゃん」

と編物をしながら隣りで双子の片割れの長女を抱く希佐に

「この里のことどう思つ?」

と律子が聞く。子供の首が据わってから京都からこの早瀬の里に帰ってきたのだ。

やはり京都で育てるより、この里の空気の良い環境で育てたかった母達。

今京都に残っているのは真理と漣の二人だけだ。

真理は貞子が離さないし、漣は病院という仕事があるから余計に離れることが出来ない。

琴乃と千佳が京大医学部に入学出来たとはいえ無論手伝うことなんて出来っこない。

だから子供の面倒を見てもらいながら医師として仕事を続けている。

こうして里の本家の居間……くつろげるような椅子に座る母達7人、

子供達は赤ちゃんベットの所で手足を元氣よく動かし、

そのベットの間をお梅やお篠そして有佐ひとえ達が歩き回って目を配っている。

何か年寄り達の元氣澆刺な様子がとつても嬉しい。

……と、この律子、自分の子供が生まれればこんなこと絶対しません！

と宣言していた事を平気で踏みにじるのを見て、みんな呆れ顔だったが、

そんなことだろうとも思っていた。

子供に対する赤ちゃん言葉なんて……オムツの交換は男がやるべきよ……

言った先から進んでオムツを変え、手にウンチがついたとしても

『あら、貴沙姫ちゃんのウンチくっちゃんいですねえ』と平気なのだ。

そんな律子をこの里に来て以来始終見ていた希美子、希佐の親子二人にとつてみれば

血のルーツともなる沙希と律子の夫婦のそばにいる幸せは言葉に出
来っこない。

「凄いところだと思います。日本にこんなところがあったなんて・
」

「でも、ここは女達の悲しい歴史が溢れているのよ」

「はい、お梅さんやお篠さんからもうるんなお話を伺いました」

「そうよ、そんな哀しい歴史の上に、今の素晴らしい里があるのよ」

「あら、珊瑚ちゃん。あなたのお母さん。とつてもらしくない話を
しているわよ」

「静香姉さん！」

「ふふふ・・・だつてね。あなたのお母さんはね、学校で常にトッ
プだったのに

鶴姫の律といって裏番、総番で暴れていたのよ。恐いでちゅねえ・
・・・」

「それ、この前聞きました。でも鶴姫の律というんですか？」
と聞く希佐に仕方なく

「若気のいたりだからね、もうそれ以上いわないでよ」
とつぶやく。

「私、律姉には完全に騙されていたからね」

「あつ！・・・沙希までがそんなことを言う」
と膨れる律子に

「沙希姉さん！駄目よ。律っちゃん先生にそんなこと言っちゃあ
と希佐の横に座って貴沙姫の相手をしていたひづるがそう庇う。

「ひづる！あんただけよ。私にそう言ってくれるのは・・・」
と言った先にひづるは手を合わせて拝むように

「律ちゃん先生！お願い！・・・今日提出の宿題あしたまで待つて・・・」

「こらっ！ひづる・・・又あなたサボったわね。そう・・・
そういうことで私を庇ったわけなの・・・」

と睨むその目の恐ろしさ、横にいた希佐までもが震えるぐらいの眼光だ。

番を張っていたのが真実なのはこれで納得がいく

飛び上がったひづるが沙希の後ろに隠れたのは正解だったようだ。

沙希の笑顔に怒りが消えた律子は

「わかったわ、もう・・・出てらっしゃい、ひづる。

その変わり明日の夕方までよ。

あつと、希佐ちゃんに手伝ってもらおうという考えはもたないことね

「ええ、そんなあ」

とひよいと頭を出したひづるに

「希美子さんと希佐ちゃんは今日京都に帰るの。

希佐ちゃんは学校があるし道場もあるから、

もう来られないけど希美子さんには高弟の人達を連れてきてもらうのよ」

「高弟の人達？志保さんと勝枝さんもくるの？」

「そうよ、お婆様の許可を得て交代でここに来るようになったの」

「お婆ちゃまは？」

「うん、途中の交代のとき真理ママを連れてくるそうよ。

でも、お稽古があるからお婆様は一週間いられるか・・・」

「そんなあ・・・もつとゆっくりしたらいいのに」

「そうね、高弟の人たちがいるから一ヶ月ぐらい・・・ど
うしたの？沙希」

「それ、正解よ。お婆ちゃまママのこともあり、

「ご自分の身体のこと考えて一ヶ月以上来るようになったの」「えっ？本当？」

「それに、菊野屋のお母ちゃんも我慢できなくなったようよ。毎日、お婆ちゃんまここに顔を出しているけど自分が名付けた愛と博士がいないし、

18人もいた子供達が4人でしょ。

たまらなく寂しくなったようよ。最近花江さん姉さん物凄くしつかりしてきたもんね。

私なんか花江さん姉さんを見たら『あつ！千代松さん姉さんって』間違えてしまうもの。

だから、置屋を花江さん姉さんに任せて里に来るみたいよ」

「じゃあ、花江さんって、名実共幕末の千代松さんみたいに祇園芸妓の大看板になるのね」
と薫。

「ええ、しばらくいなかった祇園に名華誕生ってところよ。

それに、お婆ちゃんまは花江さん姉さんに千代松さん姉さんの名跡を継がせようと考えているみたい。

そしてゆくゆくは真田屋の復活ね」

「何か祇園も華やかになりそうね」

と皆の編物に目を配る庄絵だ。

「ところでさ、沙希ちゃん。あと3日後でしょ、日本を発つのとまゆみ、

「ええ」

「マネージャーとして瑞穂とゆりあだけじゃ足りないって思うんだけど」
と順子。

「あれっ？言っていないかつたっけ。・・・静姉？」

「まだ誰にも言っていないわよ。」

「・・・あのね、沙希ちゃんから綾美ちゃんの移籍を申し込まれたの。」

「綾美ちゃんの？」

「でも、あの子・・・」

「そうよ、今やうちのエース。と言ってもあの12人のうち首一つ抜けているという状態よ。」

京都支社に入った50人のうちの12人は飛びぬけているもの。

全くコンピューターを知らなかった人がほとんど嘘みただわ。

たった8ヶ月でプロのプログラマーを相手にひけを取らなくなったの。

仕事に対するというより生きるという取り組みが他の人とは雲泥の差だわ」

「だって私のお姉さん達だもの。・・・ねえ、母さん！」

と子供達をあやしていた鈴に沙希が声をかける。

「何？」

「綾姉から連絡は？」

「ええ、電話のときは毎日1回だけだったけど私がモバイルを覚えてからは」

暇があつたらかかってくるの」

「綾姉がアメリカ行つたら寂しい？」

「そんなことありませんよ、京都もアメリカも一緒でしょ」

「これで決まりね」

とニッコリする沙希。

「でも、確かに今は手が足りないからの処置だけど綾美ちゃんの将来のためになるの？」

「確かにね、でも本人に聞いてみたら絶対にやりたいって」

「今はこんなだけけど律ちゃんが復帰したら？」

薫が心配するのだ。

「あら・・・私、復帰なんてしないわよ」

「え?・・・」

いきなりの告白に驚く女性達。

「このこと知ってるの、私の家庭教師の後任のゆりあと勿論、生徒のひづると瑞穂。静姉と沙希よ」

「それ、どういふことよ」

奈緒が聞く。

「私、考えたの。子供の手が離れるのって気が遠くなるほどの将来よ。」

薫姉さんも仕事に復帰するのって、いろいろと障害あるでしょ」

「それはまあ・・・」

「これからも沙希の子供は増え続けるわ。そうなったら仕事に戻るのが難しくなるってこと。」

だから・・・私、保母さんの資格を取って姉さん達の子供の面倒を見るの」

「律ちゃん・・・あなた・・・」

「でも、簡単ではないわ。東京と京都の2ヶ所に保育所があるのよ。」

私一人で出来ることじゃない。若い人雇う必要もあるし・・・

幸い鈴木さんが保母さんの資格持っているのよ。昔保母さんとして働いていた経験があるって」

「でも鈴木さん、せっかく里でゆっくりと身体を休めているのに・・・」

「私のことそんなに心配しないで・・・
それにこんな楽しくて夢のあることを取り上げないで・・・」

「鈴母さん心配しないでいいわよ。私母さんがいなければこんなこと決心してないから。」

京都は住みにくいし嫌な思い出があるけれどあの温泉があるから、母さんに京都の保育所をやってもらうわ」

「やってもらうわって・・・どこに保育園作るのよ」

「お隣さんが売りに出たの」と静香。

「お隣って・・・あんな大きな屋敷が？うちの2倍以上の広さはあるじゃない」

「そうよ、だからすぐに買っちゃった」

「えっ？もう買ったの？」

「その上、府庁に8階建ての病院建設の許可申請は出しておいたわ」

「建設許可って・・・どうして？病院の図面なんてまだでしょ？」

「沙希ちゃんに言われて何ヶ月も前から製作を依頼しておいたの」
皆の目が沙希を見つめる。

「半年位前かな、・・・日和子叔母様に連れられて

警察庁長官の長瀬の伯父様とお食事したことがあったの。」

その時相談を受けたのが或る大臣の母親のこと・・・
京都に住んでる母親はすっかりし過ぎるほどの賢夫人だったのだけ
ど

あるときころんで骨折したのを境に軽い痴呆症にかかってしまった
んだって・・・

その大臣は母親を東京に連れて行くこととしたのよ。

でも暴れて手がつけられなかったって言っていたわ。

だから眠り薬を使って東京に連れてかえったんだけど
狂ったようになってニツチもサツチもいかなかったって……、

仕方がないから再び京都の家に連れ帰ったそうよ。

長瀬の叔父様はその母親の家の隣が私達の家だって知っていたらしいの。

だから一度、その母親を見て欲しいって、別に見てどうのこうのいうわけじゃないが

様子をみてあなたの見た感想を知らせてほしいって……」

「で……どうしたの？」

と奈緒、相手が警察庁長官だけに気になるのだ。

「行ったわ……正式に尋ねていったの。」

お手伝いさんに案内されたのは庭を通った先……陽だまりの縁だったわ。

白髪頭の上品な老婦人がお茶を点てていらっした。

何ともいえないお顔をされていた……だからなのか、一度にわかったわ。

この人は正気だ……今までお芝居をされていたんだって。

それに、この人には定められた寿命がきているって……
寿命が来ていたらいくら温泉に入っても効果はないわ。

そして……どうしてなのかこの老婦人は御自分の寿命を知っていたの。

私も黙って老婦人の横に座って庭を見ていた。まるで別世界の静けさだった。

お茶の作法なんて知らない私でも精一杯の気持ちを込めて出されたお茶を飲んでいた。

それは自然の世界の中だったわ。一時間程二人は縁に座って風を見ていたの。

庭をゆるりと流れる風をね。

その間一言も言葉は交わしていなかったわ。

そして……いつのまにか、心の中で会話をしていたのよ……

『沙希さんっていわれたわね』

『はい』

『あなた達が今お家でされていること素晴らしいことね』

『ええ、誇りを持っています』

『あなたが今持っている、病院の構想もいいわね』

『はい、でも京都でしょ。中々いいところがなくて……』

『ここを……ここを……使いなさい』

『えっ?……そんなこと……』

『小さな町屋だけど、この隣も家の土地なの。』

『いいえ、今は誰も住んでいないわ。……続けておきなさい』

『はい、……えっ!……』

『すぐ取り掛かれるように何もかも続けて、進めておくのよ。』

私も隣の井上家に声をかけなさいって認めておきますから……』

あの老婦人は最後までお芝居を続けていらしたし、約束もきちっと果たされたの」

「沙希ちゃん、このことを長官に?」

「ええ、話して置いたわ。長瀬の叔父様はね、

10代のころ、昔で言う書生のような仕事で大臣の先代に使えいらしたの。

厳しい先代に何度も飛び出そうとしたって、笑っていらしたけど陰からの老婦人の優しい励ましがあつたからこそ最後まで勤め上げ

て今の地位にお付きになったのよ。

だから、正直にお伝えしました。

『やはり、そうでしたか』

と言われただけ。・・・

でも、長瀬の叔父様はその夜、きつと慟哭の時を過ごされたんだと信じてるわ。

だってお葬式の時お会いしたけど、もう平静でいらした。

私は信じるの・・・あの夜に長瀬の叔父様は老婦人のお葬式をされていらしたって」

見ると皆白いハンカチで目を拭っている。

「沙希！どうしてこんない話を今まで黙っていたのよ」

庄絵の声に

「だって、静姉に報告を受けた今日が私にとって

このお話の幕引きとなったからよ。あとは老婦人を思い出してあげるだけ」

「続きだけど、その病院の1階が受付と保育所なの」

「静姉！あとは私が言うわ。2階以上は病院施設だけど最上階はレストランよ。」

今のレストランのところを潰して駐車場までの範囲に4階建てのビルを作って

看護師さんたちや地下で働く人の部屋を作るの」

「今のところじゃ駄目なの？」

「だって、地下で働く人、地下に部屋があつたら自然を感じるなんて出来ないわ」

「そこまで考えているんだ」と理沙。

「それに地下の部屋もう一杯よ、保養にきても部屋がないってシヤ

レにならないわ」

「それで地下はどうなるの？」

と智子。もうすぐ産まれる子供のために皆に教えてもらって編物だ。

「新しい病院まで目一杯に地下を広げるわ。そして保養施設の部屋を増やすの。」

それにあの看護師さんの寮と学校の地下からの連絡道をもっと明るく広くしたいし、

地下の温泉設備にいろんな楽しい設備を加えてね」

「凄いわね。・・・」

「なんだか楽しみだわ」

「そういうことで私、早乙女薫事務所のマネージャーを廃業します」

「じゃあ、又新しい辞令を交付ね、・・・ね、静香専務」

「そうね、まゆみ社長」

「え〜？・・・だって・・・」

と驚く律子に

「何甘いこと言ってるの。せっかく雇って育てた人を辞めさせたくないのよ。」

それに、うちの会社の半分以上は女性なのよ。出産で辞めさすなんて出来るわけないじゃない。

子供がいて働けないって人の中には凄い人がいるかも知れないですよ

「あゝあ、それじゃ考えていた以上に大規模になってしまっわ」

「女性のためよ」

そんなこんなで話が落ち着いた時

「ねえ、ケイト。ママが来日するんでしょ」

「ええ、来なくてもいいって言ったんだけどね」

「じゃあ、琴姉をどうするの？」

「それがママの頭痛の種よ……いいえ、そんな意味で言ったんじゃないわ、鈴ママ」

「いいんですよ、ケイト。ちゃんとわかってますよ。原因はあの子の食生活ね」

「はい……ママが言っていたんだけど、琴美って食べれば食べられるのに、

自分から最後の最後まで食べないんだって。

食生活以外はもうとてもいい子なのについてママが言っていたわ」

「その頭痛の種私が解決してあげる。琴姉の大学が休みに入るんでしょ」

「ええ、その日がちょうどママが出発する前の日なの」

「じゃあ、琴姉にハリウッドの私のところまで来てもらって。臨時のマネージャーよ。」

「……だからケイト、どこかホームステイするところない？」

ホテルでもいいって思ってたけど、そんなところあつたら最高よ」

「沙希！いいの？……実は私その言葉待っていたの。わたしの叔母にあたる人に女流作家がいるの。」

彼女のところは豪邸なのに1人住まいなの。

勿論メイドは4人いるから生活の心配は何もないんだけど……

と段々と口が重くなっていく。

だが何も反応がないのを知って、恐る恐る沙希の顔を見る。

そして、『ハッ』として慌ててしまう。

これはいつものことだった。かなわない！……私の愛しい人！

沙希の顔に浮かんだ可愛い笑顔、それは何でも知っていますよ。と
いうような表情でもあったのだ。

「ケイトはその人に何かをされて怒って家を飛び出したのね」

「もう……沙希には何も隠せないわね。……そうよ、マチルダ
は……」

叔母はマチルダ・イルダってアメリカでも有名なSF小説作家なの。

本人いわく……だからストレスがたまって爆発するの……
悪戯って最高じゃない！……なんですって！。

でも悪戯される身になってごらんないっていうの。

ある朝、早くからある有名な政治家とインタビューがあったのよ。
だからさっそうと着替え、食事をとってからメイクにかかるうとし
たの。

……ええ、メイド達に何ともいえない表情が浮かんでいたのは覚
えているわ。

いぎ、鏡に向かうと吃驚仰天、中腰のまま立ち上がることも、座る
ことも出来なかった。

鼻の下から頬にかけて黒々と髭が書かれてあったの。

もうそれからは必死で消そうとしたわ、でも薄くもならない。

あとで聞けばそれは手品の道具で特殊な液を使えばずっと消せるも
のだったの。

そんなこと知らないからその液を持ってきた叔母さんを部屋から追
い出したのよ。

インタビューの日を延ばしてもらおうと相手に電話しても

『この日のインタビューは永遠に最後の機会だと思ってください』
ですって」

「それでどうしたの？」

「ええ、行ったわよ。こちらも意地もあったし……こんな大きな
マスクをしてね。」

でも会った早々言われたわ。『正式なインタビューなのに・・・マスクとは何事だ』
つてね。もう私もそのころにはどうなってもいいやと思っていたからすぐにマスクをとったわ。

相手の政治家私の顔をどれぐらいの時間をかけて見ていたのかな。それから大きな声を上げて笑いだしたのよ。

いつもいつもむっつり何を考えているかわからないような政治家がね。

私、もう呆然として相手を見ていたわ。

それがいつのまにか、自分でも知らない間に涙がながれていたの。政治家もそれをみてようやく笑いをおさめてくれたわ」

『すまん、すまん。レディを前にけしからん行為をしてしまった、赦してほしい。』

でも、それはどうしたんだ。君が自身でやるにはちと勇気がいる行為だが・・・』

私言っっちゃったわよ。叔母の悪戯の犠牲になりました・・・と、すると

『叔母さん？こんなことやれるのは私は1人しか知らない・・・まさか、マチルダ・イルダ！』

驚いたわ、まさかこの人まで叔母の事をつて

『そうか、ケイト・マイヤー・・・どこかで聞いた名前だと思っただよ。』

君がマチルダのところによく遊びに来ていたケイトだったのか。

覚えていない？確か3歳ぐらいのときかな木に登ったのはいいけど下りられなくなって泣き叫んでいたのを僕が助けたのを」

私呆然と相手を見ていたわ。だって今のは幼い頃の強烈なトラウマだったの。

だから今でも高いところは駄目。

助けて貰った男の人に抱いて貰いながら

『ありがとう・・・ハリー・・・』

『そう・・・そのハリーさ・・・よく覚えていてくれたね。嬉しいよ』

でもどうしてしばらくすると叔母のところに来なくなったの？と聞く

『つまらないことで大喧嘩をやらかしてね。それからとうとうこんな歳になってしまったよ』

寂しそうに笑っていたわ。2年前に奥様を亡くされているだけにね。

そんな時よ、時の歯車が噛みあつたのは、執事が

『旦那様！マチルダ・イルダ様がケイト・マイヤー様にこれを』
と持って小さなビンを持ってきた。

素早い反応で飛び出していったハリー氏が叔母を連れて部屋にはいつてきたとき

『叔母さん、この償いはしてもらいますからね』

『だって、ケイト・・・』

『いいえ、いい訳なんて聞きたくもないわ。』

結婚とまではいわないけれどハリーさんとお付き合いを再開しなさい』

えっ？と顔を見合わせる戸惑った二人の顔。

『私なのでしょ。私が原因だったのでしょ。二人の大喧嘩は』

薄っすらと思いつ出した幼心の嫉妬、そんなちっぽけなもの招いた人生の曲がり道。

でも再び訪れた交差点、軌道修正さえすれば同じ道を歩む事ができる。何かホツとした瞬間だったわ」

「じゃあ、今そのハリーさんと叔母さんは一緒に暮らしているのじゃないの？」

と京子が聞く

「いいえ、ハリーはワシントンに常駐よ」

「あら、寂しいわねえ。じゃあ、叔母さんもワシントンに？」
吉備洋子が聞く。

「あの叔母さんがハリウッドを離れるはずはないわ。映画好きにもほどがあるもの」

「ねえ、ケイト。マチルダ叔母様はどうしてファーストレディにならなかったの？」

「もう籍は入れてあるんでしょ」

「えっ！」

と声をあげる女達。

「じゃあ、ハリーって人、アメリカの大統領？！・・・」

「でも名前は？ケイセル・モーガン・・・どこにもハリーって出てこないじゃない」

と庄絵。

「ええ、その行動がどっしりしていたので『ハリー・アップ』
って

小さい時から言われてきたんだって。だからハリーは愛称なの。

本当に身近な人だけが今でもそう呼んでいるわ」

と言ってから

「沙希、叔母さんはファーストレディなんて柄じゃないって断りつ
づけているの。

これにはハリーも参ってしまったってね。でも、大丈夫よ。まかせなさ
いって言うておいたわ」

「えっ？」

「だからね、沙希。がんばって！」

「ええ〜、どうしてそうなるのよ」

「だって、世界中どこを探してもあなたしか頼る人いないんだもの。頼りにしてますよ。」

そのかわりハリウッドではどんな伝手やコネを使ってもいいからね。

あつ、そうかそんなものなくても沙希はだいじょうだよね」

「なんか良く聞いてみると酷い言われ方じゃない？」

「そんなことないわ、あなたに対しては誰でも思うことよ、ねえみんな」

周囲のもの全てが頷くのをみて

「もう・・・」

と膨れてみせる沙希。でも長続きはしない。

みんなの笑顔が温かく沙希を見つめているからだ。

こうして、アメリカに飛び立つ一行・・・

沙希、ひづる、瑞穂、ゆりあ、綾美、杏奈の6人・・・

女優日野あきあの人数としては少な過ぎるが、

それが良かったのか今のところ誰も気づいてはいない。

といってもファーストクラスにいるのだから。

沙希は始めファーストクラスなんて・・・

と渋っていたがこの話を強引に進めたのは航空会社の方だった。

あの有名な天才女優の日野あきあであり、画期的な通信システムを築き上げた

早瀬沙希が同一人物ともう世間には知られているのでどんな騒ぎになるか判らない

・・・というのだ。

しかし、飛行機内でのゆったりとした時間はすぐになくなってしまった。

これは沙希が事件屋といわれる由縁・・・沙希が行くところ何かがおこる。
だから随行するみんなももう呆れ顔。

ホノルル到着まであと1時間にせまったときにその事件がおこった。

大きな爆発音と共にいきなり飛行機の高度がガクンと落ち
乗客達の悲鳴があがった。パニックになる前兆だ。

機体から変な音が聞こえ始める。『ミシミシ・・・メキメキ・・・

機長が必死にアナウンスをしているが客を落ち着かせるには至らない。

空中分解寸前・・・そんな感じなのである。

「沙希姉さん！・・・エンジンから火が出てるよ」
窓の外を眺めているひづるが言う。

なるほど右翼のエンジンから激しい炎が噴出している。

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」
と九字を切り

「ナウマク・サマンド・バザラ・ダンカン」
と唱えると若干炎が弱くなったようだがこのままではどうしようもない。

「駄目だわ！ここからでは・・・」
といて『ファイファイ』と口で空気を吹くといきなり『般若童子』の
着物姿に変わった。

これを見ていた瑞穂が急いでカバンから風呂敷包をだし、風呂敷を

開けると般若面が出てきた。

瑞穂に渡された般若面を手にとった時、

「お客様！……」

と入ってきたパーサーの緒方翔……

さすがに真つ青な顔になっていたがこの部屋の様子に啞然となつて動けなくなる。

さすがに沙希

「うふふ……緒方さん。内緒よ。……そうそう、今日の機

長はあなたのお父さんのね」

「ええ」

まだ何も理解できないがとりあえずは返事をする翔。

「この航空会社にはモバイルがすでに支給されているはずだけど、お父さんは？」

「ええ、こんな便利なもの今までなかったのが不思議だって喜んで持っています」

「じゃあ、ゆり姉」

というとゆりあが沙希のモバイルを渡す。

「沙希！あなたの手に私達と何百人という人の命がかかっているんだからね。頑張つて！」

「判っているわよ。そんなこと……心配しないでここで見ていて……じゃあ、行ってくる」

といって般若面を被り、モバイルを片手にすくっと機体の壁をすり抜けたのだ。

「あつ！……」

手を口に当てたまま硬直する翔、

それはそうだろう今まで見たことのないこんな現象……

突然、不思議に出会ってみればこういう状態にはなるのは人として必然なのだ。

だって自分達だってそうやって鍛えられてきたのだから。みんなはとりあえず沙希のいた席に翔を座らせ落ち着かせた。

一方、機長室では

「メーデー……メーデー……」

と副機長がホノルル管制塔に向かって叫びつづけていた。

「あと一基のエンジンもこのままでは持ちません。どこかの海に着水するしか方法はありません」

でも海なんて着水すれば助かる見込みは0%となる。絶望感が漂ってきたとき

「緒方機長……緒方機長……聞こえますか？」

えっ？……と見詰め合う緒方機長と西田副機長、……そして後ろに控える機長候補生の緒方弓……

「は……はい……」

「緒方機長、ここですよ。右の翼にいます……」

この声は女の子の声……ふざけるな！と怒鳴りつけようとしたが

「お……お父さん……あれ」

このような場所での呼び方ではないがそれも気づかぬまま、弓の指差す方向にゆっくりと顔を向ける。

驚いたことに右の翼上に胡座を組んで座っている般若面の人間がいたのだ。

自分達はもう死んだのでは……とおもっほど意表をつかれた現われ方だ。

「これは夢でもなんでもありません。

この飛行機はあと10分ほどで残った一基のエンジンも停止します。

爆発したエンジンの火は全て消しましたので延焼はしないでしょ」

「そうですか・・・もう駄目ですか・・・」

「そんなに悲観しないでください。今からそちらにデータを送ります」

と、遠目だが凄いい勢いでキーを叩く般若童子、

機長、副機長のモバイルに大量のデータが送られてきた。

すると緒方弓の頭の中に

《弓さん、お父さん達がデータを整理している間、あなたに頼みたい事があります》

「えっ？頼みたいことって？」

《しっ！言葉に出さないで！心の中で話してください》

弓が前を見ると夢中になってモバイルから流れてくるデータを見ている二人。

《判りました》

《これは事故ではありません。エンジン4台のうち4台共に爆弾が仕掛けられていました》

《えっ？・・・そんなあ・・・酷い！》

《いまのうちに乗客の中で狙われてもおかしくない人物を客にはわからないよう調べてもらえますか》

《わかりました。添乗員に言つて・・・》

《いいえ、あなた以外・・・そうですねえ、あなたのお姉さんの翔さんと

二人で手分けして探してください。添乗員の方には話を聞くだけに

してくださいね》

《どうしてなんですか？》

《どうやら犯人は自爆テロをねらったようです》

《えっ？・・・では・・・》

《そう、犯人はまだ乗客の中に紛れ込んでいるんです。

・・・事は急を要しますが、秘密でなければならぬのはこのためなんです。

さあ・・・急いでください》

「いかがですか？緒方機長。このデータから燃料もエンジンもギリギリの選択として何とかいけないことはないでしょう。

ロス率も少しオーバー目にとつてありますから」

「でも・・・君。この先には何があるんだ？」

「異空間です」

「異空間？・・・馬鹿な！」

「亜空間といつてもいいです」

「そんなところがあるわけがない。

それにもしあつたとしても大勢の乗客を連れて行くことは出来ん」

「でも、機長！もう選択は二つしかないんです。死か異空間移送か

・・・」

「もし、そこへ入つたとしてそこから出れるのかね」

「はい、私を信じてください・・・」

「お父さん！・・・いいえ機長！私はこの方のいうことに従うべきだと思います」

と機長室のドアが開いて翔が言う。

「私もそう思うわ」

弓も翔の後ろから声をあげる。

「翔・・・弓・・・わかった。西田君もいいね」

「はい、機長！」

「じゃあ、私のあとに付いてきてください」

といって飛び上がり旅客機の前にでる。つまり計器を頼らずに有視

界飛行になる。

「おお」

という声をあげる他はない。こんなこと実際目で見ても信じられない。

だが緒方機長は乗客の安全を第一に考えこんな行動をとったが

これがよかったのか悪かったのか後から何を言われても申し開きはすまいと自分自身に誓った。

「ねえ、弓！あなたと私は一心同体の双子だからあなたにだけは般若童子様の正体を教えておくね」

「えっ？般若童子様の正体？」

「しっ！……これはお父さんにも内緒よ……実は……」
と耳に口を近づけて何事か囁く。

「えっ！……嘘！……」

《ふふふ……本当よ》

とその時、心の中に話し掛けてきた声に思わず飛び上がる翔。弓はさつきで慣れているから驚かない。

《これは三人だけの内緒話。だから悟られずに平然としていてね。

翔さん！》

「えっ……は……はい」

《駄目！言葉に出しては駄目！

大勢の人の命を救うためにはこの方法に慣れてもらわなければならないの》

《えっ！それはどういうことですか？》

いかに言葉を出さずに話をするのが難しいかこれでわかった。

《私がさつき、弓さんと翔さんに頼んだ事、成果があったみたいね》

《ええ……調べた結果、その方しか該当する人がいないので……

・

《そう、それが正解なの》

《えっ？判ったんですか？どうして？》

《あなた方の心を少し読ませてもらったから……》

《えっ？心の中を読んだんですか……酷い！》

《ごめんなさい！本当はこんなことやっではいけないんだけど……

どうしても犯人を確保しておきたかったから……あとでどんな償いでもします》

《本当？……》

《ええ……》

《じゃあ、友達になってください。そして、あきあさんのところに遊びにいつでもよろしいか？》

《えっ？……そんなのでいいの？……大歓迎よ》

《良かった、本当はあなたの事少し恐かったの。でもこうしてお話できてとっても嬉しいのよ》

《私もよ》

と弓も翔の手を握って話し掛ける。

《じゃあ、二人とも頑張つて！犯人はあの少女の両横の二人よ。

吐き気がするほど悪意の塊よ。神の手によって生まれ変われると信じているの。

馬鹿ね。自ら死を選んだらその先に待つのは無限地獄しかないというのに……》

《無限地獄？……恐ろしいわ》

《さあ、行つてらっしゃい。今度こそあなた達のお仲間全員でやつつけてね。

爆発物のリモコンはやつらが肌身はなさず持っているセカンドバッ

クの中だけど

もう爆発しないように線を切って置いたから安心していいわ。
じゃあね、異空間で逢いましょうね》

翔と弓は真つ青なつて震えている乗客の間で笑顔を絶やさぬ同僚達を集めた。

男性女性合わせて10名に今までの経過を話す。

「……………だから協力して捕まえて欲しいの」

「えっ？般若童子？……………」

「自爆テロなんですか……………」

驚く同僚達に奇跡が見えた。何も無い空間から白い紙切れが2枚ヒラヒラと落ちてきたのだ。

慌てて宙で掴んでみると全然読めない文字が書かれてある。

そして、そこにいる全員に聞こえる声で

「その紙、1年前にある事件で京都府警が使用したものです。

『半睡の術』といいます。相手を怪我しないように使われました。

犯人は憎いですが、周囲の人達でできるだけ気づかれないうちで使用してください。

犯人2人を眠らせてから少女……………いえ、　国の皇女は弓と翔！、

あなたが彼女をファーストクラスのあの部屋に連れて行ってください」

「でも、この紙……………」

「そうよね、いきなりそういわれてもね……………」

翔、弓の後頭部にその紙を押し付けて御覧なさい。

他の人は弓の後ろで支えてね」

実際やってみると弓が硬直してそのまま倒れてきた。顔を見ると眠

っているようだ。

「翔！紙を取って！」

すると身体がぐんにやりして同僚に身体を預ける。首を何度も何度も振っている。

「弓！どうでした？」

「いきなり寝てしまったんですね。もう何も判らなくなっ……」

「すみません、急いでください。犯人に異次元に入ったこと知られたくはありません」

何か聞いたそうな同僚に

「さあ、急いで！……」

と促す。今はいろいろと答えている場合じゃない。

どういふふうに……なんてのも考えられない。

こうなったら、いきなりの実行！……しかない。

飛行機が飛び続けているので安心したのか客達は平静に戻っている。

やるのは今しかない。客達が騒ぎ出す前に……

翔は2列の通路に6人づつ同僚達を分けた。

先ず両列に1人づつ笑顔で最後尾まで歩いていくよう指示をした。

そして、2人目……3人目……次だ……

翔と弓が目を合わせてから歩きだした。

目指すは座席の中央、真中の席……

髭を生やした男二人キョロキョロと周囲を見回している。

目が合ってしまった弓、ニッコリと笑ったつもりだが引きつっていたかも知れない。

いくら客室乗務員の制服に着替えたといってもパイロット候補生なのだ。

いきなり髭男に声をかけられた弓、

「何もなかったのですか？」

「はい、別に何も・・・」

と精一杯の笑顔で通り過ぎた。ほっと肩から力が抜ける弓・・・

翔に見られて気を引き締める。そう・・・今からなのだ。

先に行つた3人がこちらを向いている。心配そうな顔だ。

翔も弓も頷いてから振り返る。

5組目が歩き出した。タイミングを見て弓も翔も歩き出す。

翔は周囲に笑顔で歩いていくが、言わば素人の弓にはそれが出来ない。

視線は男に向いたままで表情も硬くなっている。

前から来る彼女達が男のところまで座りこんだ。打ち合わせ通りだ。

「お客様、お席の下に何か落ちてますよ」

「あら、お客様の席の下にも・・・」

そう言われれば首を下げる。

近くまで来ていた翔と弓。

「どうされたのですか？」

と声をかけて飛び込むように男達の首の後ろから持っていた紙を突っ込んだ。

ガツクリと眠り込む男達・・・一番後のパーサーの男性二人が男達を椅子に縛り付ける間に

「さあ、皇女様はこちらに・・・」

と立たせてファーストクラスに連れて行く。

ノックの音で待っていたようにドアが開く。

「さあ、どうぞ」

と3人を引き入れた瑞穂、

「皇女様は、こちらにお座りください」

と席に案内するゆりあ、席にすわったままのひづると同年代のよう
で

ひづるがにつこりと微笑むとつられて笑う皇女様。

どうやら友達としての挨拶が終ったようだ。

「じゃあ、お願いします」

と行って部屋を出た翔と弓、

『ほう・・・』とため息を吐くがまだまだ予断がゆるさないのだ。

急いで元に戻った二人、椅子に縛り付けられた男を見張るパーサー
に

「お願いします」

と声をかけてから前に進んだ。

何か言いたそうな同僚達・・・

その時、機長からの放送が始まった。

「お客様に申し上げます。この機はただ今から異次元に突入します。

この機はただ今から異次元に突入します。

お客様はしっかりシートベルトを締め、頭を下げてください」

そう言ったものだから客達が騒ぎ出した。大部分が

「おいおい、異次元だって？・・・この機長大丈夫なのか？」

と言う声なのだ。

このまま放っておけば客達が機長室に押しかけるということになり
かねない。

「弓は機長室に行つて！中に入ったらしっかり鍵をかけるのよ」
「わかつた」

と行って機長室にむかう弓を見送ってから、
問い掛けそうな同僚達を無視してマイクを取り上げた。

「お客様に申し上げます。お静かに御着席ください。ただ今までの経過をお話します」

といったものだから静かになって翔のほうを見つめる。

「この機、あるお方を狙った自爆テロの標的にされ、
4台全てのエンジンに爆弾が仕掛けられておりました」

「え〜」

という悲鳴ともなき声が巻き上がる。

目の前の老婦人が手をあげたのはその時だ。

「スチュワーデスさんにお伺いします」

「はい、なんでしょうか？」

お年なのによく通って素敵なお声！・・・一瞬、緊急時なのにそう思ったのだ。

「エンジン全てに爆弾が仕掛けられていたとしたら・・・」

「はい、ご想像の通りです。ただ今この機のエンジン、全て止まっています」

その言葉の効果は絶大だった。騒いでいた客の気力を奪った。がっくりと椅子に腰を落としたのだ。

「でも、スチュワーデスさんを見ているとあなたには強い気力を持つておられる。」

「ということは、先ほどの異次元というのは・・・」

「はい、本当のことでございます」

とってから機内の客席全てを見回した。笑顔さえ浮かべて

「日本に住んでいるお客様にはご存知のことだと思えます。」

今やとても有名な方・・・どういうわけかその方に救われました」

「その方って誰なんや・・・」

「皆様もよく御存知な『般若童子』様・・・」

「えっ？・・・般若童子だって？・・・」

客から驚きの声上がる。

そんな時

「お・・・おい・・・あれをみるよ・・・」

と窓の外を見るとまだ昼間だったのに・・・

これは光の壁だ。オーロラのようにいろんな色がこの飛行機を取り
囲む。

「きれい！・・・」

若い女性達が声をあげる。

一方機長室では

「し・・・信じられん・・・」

そう言う緒方機長。呆然と見つめるだけの西田副操縦士。

「あ！・・・あれ！・・・」

と叫んだのが弓だ。光のトンネルを通り抜けた今の光景っていつた

ら・・・衝撃！

・・・なんていえない。いやもう言葉になんてできないのだ

紫っばい小宇宙。

客達も窓に鈴なりになってその光景に釘づけだ。

「あっ！あんなところに人が・・・」

宇宙空間に立って、明るい太陽のような光の中に立って上を向いて
いる人影、

その人影が般若面をずりあげて叫ぶ声が皆の耳に聞こえた。

「野分……」

すると上の方から鈴の音が聞こえてくる。

窓の上を見ていた客の一人が

「あれって……」

と大きな声をあげた。

「何？…何？」

同じように窓から見ようとしていた客に向かって、

「あれって……ペガサス……」

「ペガサス？……そんなあ……」

馬鹿なと言いかけた客も口を閉じた。

ペガサスは舞い降りると般若童子に甘えるよう頭を下げ、胸元に鼻
ずらを押し付けていた。

「野分！そんなことするとくすぐったいわ」

「あのペガサス、野分っていうんだ。それに般若童子の生の声を俺
聞いちゃったよ」

何か嬉しそうだ。

一方、機長室でははしゃいだ弓の音が聞こえる。

「可愛い！……野分って般若童子様にあんなに甘えて……」

「野分！判ったから……それよりあなたに大切なお仕事なの……
いい？……」

首を振りながら前足で足元を何度も蹴る野分、わかったという動作
だろう。

ひらりと野分に跨った般若童子……鞍も何も無い裸馬に乗る般若
童子、

見る人が見ればその見事さに唖るに違いない。

「緒方機長！」

般若童子からの呼びかけだ。

「あっ・・・はい」

「ホノルル空港に連絡願います」

「でも、ここからでは・・・」

「はい、普通では無理です。今からこの世界からの通信窓をあけます」

といつて何か呪文を唱えるといきなり航空機の前に

丸い窓が開き現世のホノルル空港が見えるのだ。

緒方機長の連絡に驚き慌てふためいたのがホノルル空港の管制室だ。

何が異次元だ！馬鹿を言うのはいいかげんしろと通信を切り掛けたとき、

「すみません、この上空に何かがあります」

と言う声で慌ててレーダーを見る管制室長、

「本当だ！・・・緒方機長、君は本当に無事なんだな」

「はい・・・」

「じゃあ今の位置を報告したまえ」

「はい・・・」

といつて報告された位置。

「間違いありません。いまの位置レーダーと合致します」

すると別の声が聞こえた

「緒方機長！あとは私が話します。代わっていただきたいのですが・

・・・

「君は誰だ！」

「それは直接会えば判るでしょう。それより警察の出動をお願いします

ます」

「警察の出動？」

「はい、この機がこうなったのも4台のエンジンに爆弾が取り付けられていたからです」

「爆弾！・・・そいつは・・・」

「はい、そのためエンジン全てが止まっています」

「そんな状態でここまできたのか」

「はい、話を戻しますが、原因はこの機に乗っておられる 国の皇女を狙った自爆テロなんです」

「自爆テロ！・・・」

「はい、でもこの機の乗務員の皆さんの力で犯人2人を拘束しています」

「犯人を捕まえているのですか・・・」

言葉使いが変わった。この普通ではありえない人物と交わす言葉、この見事な英語にしても・・・だ。

「じゃあ、リスター管制官。この機の誘導をお願いします」

「えっ？どうして私の名前を？」

「それは後で・・・」

「管制官、緒方です。この機の設定全て止まっていますので般若童子・・・いえ、あの方とこの後の誘導を全ておまかせします」

「わかった」

と重々しい言葉が聞こえ、二人とのやりとりが始まっているのを機長の椅子の背もたれに身体を預けて聞いているのだ。

「弓！」

「はい」

「あの人はどういう人なんだ？」

「知らないわよ」

「いや、小さい頃からお前の好奇心の強さはいやと言っただけ味わっている。」

そのお前がこうして平然と聞いているんだ。

だから弓は般若童子の正体を知っている……そう思っているんだ」

すっかり見透かされている父に

「わかったわ、確かにあの方が誰なのか知っているわ。だけど……」

「

「いや、私が知りたいのはそんなことじゃない、

どうしてモバイルをあんなに手早く使えるのか……

どうしてあんなに英語を器用に話せるのか……」

「えっ？器用に？」

「弓は気づかないのか？あの人英語……最初は普通だったんだ。

でもあのリスター管制官にちらつと話の中に出た東部なまり……よく聞いていなさい。あの二人、今は完全に東部なまりで話し合っているんだ。

リスター管制官は自覚はないと思うよ」

「凄い！……やっぱりあの方は天才なのね。いいわ、教えてあげる。でもここだけの話だからね。」

あの方はうちの会社によってファーストクラスに……いわば押し込められたの。

超有名人だから会社としても騒がれるのは困るのよ。

でも、今回の事件で会社の思い通りにはならなかったみたいね。けれど、あの人も騒がれるのって本当に嫌いみたい。

だって『般若童子』なんて隠れ蓑使っているんだから……」

いつのまにか機長室にはいつてきた翔が

「事件が起こったとき急いでファーストクラスに行って注意しておこうと思ったの。」

ドアを開けたら本当、信じられない光景だったわ。般若面を持ったあの人が立っていたの。

あの人、私の顔を見たときたん機長がお父さんだと知ったみたい。

そして、あのモバイルを持っているかどうか聞いて、持っていると言ったら

御自分もモバイルを持ってこの機の壁をすり抜けて表に出てしまったわ。

あとはお父さん達が見聞きした通りよ」

「わかった、『般若童子』はあの人なんだな。もうこれ以上は詮索しない。西田くんもいいね」

「判ってます。こんな経験二度と嫌ですけど、こんな非常識な体験、貴重でした」

「緒方機長！」

という声……

「はい！」

「今、ホノルル空港に到着しました」

「えっ！……着いたのですか？」

「はい……今から異次元から現世へ皆さんを航空機もろとも移します」

とって呪文をかけると、いきなり小宇宙が消えて真っ青な空が現れた。歓声を上げる客達……

「翔さん！まずはお客さんたちを下ろしてください」

「わかりました」

翔は急いで乗務員達に声をかけてドアを開ける。そこまで階段が来ていた。

軍隊が周りを取り囲みその中に警官隊のパトカーが混じっている物々しい警戒だ。

もちろん救急車が沢山待機している。

これは肉体の怪我というより精神的に障害を受けやすい人のものだ。安心したとたん立てなくなる人もいるのだから……。

航空会社や旅行会社の社員達が階段の下でむかえに来ている。

順序よく降りていく客達……階段から降りたら夢中で周囲を見回している。

無論、『般若童子』の姿を探している……命の恩人をだ。

でもどこにもいない……ただ大空高く翔んでいくあのペガサスの姿が一瞬……見えただけだ。

客達が全て降りた後、警官隊が乗り込んでいく。

そして、二人を確保して降りてきた警官隊……の、うしろからゆっくり姿を現したのが沙希達一行とひづると手をつないだ 国の皇女だ。

沙希が階段上から階下を見たとき、警官の一人が犯人の背から封印の紙を抜き取るのが見えた。とたんに下を向いていた首が上を向き

男の視線に皇女の姿を見たのかニヤリと笑って警官を突き飛ばして階段を上がってこようとしていた。

「撃つのは止めて！」

と軍隊と警官隊にいうと胸の前に手を上下に丸くすると現れた青い

玉・・・

「ゆり姉！」

「わかった！・・・」

と、いつてカバンから細長い金属の棒を出した。

その間に沙希は男に向けて青い玉をぶつける。

身体を折って地面に叩きつけられたが、男はタフだった。

けれど沙希にはかなわぬと思ったのか、滑走路の方向に逃げ出した。

「沙希！・・・」

とゆりあが投げた金属棒を空中で掴み取った沙希。くるくる宙を回転しながら

男の走る前方に降り立った。

軍隊も警察官もこの少女のアクションに呆然だ。あんな階段の上から20mも回転しながら着地する。

こんなアクション誰に出来るのか。男は沙希に身体の神経のツボを突かれて悲鳴をあげて倒れた。

まるで白昼夢だ。少女が立ち上がり、皆に向けた笑顔は緊張を一度に解きほぐす効果を持っていた。

又、沙希が男の襟首を掴み軽々と引きずって来るのを見て言葉も出ない様子だ。

これを見ていた乗務員達・・・

「ねえ、あれって日野あきあじゃない？」

「そうよ、絶対そうよ」

「じゃあ、あの人のドラマって・・・みんな本物？」

「あのドラマに出ていた異次元って私達が現実に見たのと同じだったじゃない。」

「いうことはあの『般若童子』さまって日野あきあつてこと?」

「ねえ、みんなこの事は内緒だからね。誰にもいうんじゃないわよ」

と翔が口止めを忘れない。

沙希は呆然とする警官に男を渡し、軍隊の前に行く

「ルーカス大佐ですね」

「はい！私はあなたのこと知っています。キヤメオン大佐から報告受けました。」

日本に凄い女性います。女優でしかもコンピューターの天才・・・そして不思議なパワーの持ち主・・・でも私は信じませんでした。でも今日からは違います。あなたは驚異です」

「そんなことありませんわ。私は普通の女の子ですよ」

「おお、これは失礼しました。もういいません。で私になにか?」

「はい」

「といって皇女をひびるにつれてこさせる。」

「あの男達の狙いはこの皇女でした。」

皇女のお父上が身体を悪くされ国の秩序が悪い者たちに乱されてお

り、行き先を憂えた彼女が前に知り合ったアメリカ大統領に救いを求めてきたのです」

「ふむ、・・・わかりました。ホワイトハウスまで我々が安全にお送りします」

「よろしく願います」

皇女はひびると別れたくなかったようだが、自分の大切な使命を思い出して、

寂しそうに胸の前で手を振ってルーカス大佐についていった。

沙希はこうして皇女を送るともう一度警官の前に行って

「あのう、一番偉い方は？」

と尋ねた。本当は沙希には判っていたが全く何も知らぬ警官達にいらぬ面倒をかけたくなかったからだ。

一人の背の高い警官が出てきて

「私だが・・・」

といった。

「先ほど私が倒したあの男に東洋でいうツボをつけておきました」

「ツボを？」

「はい、これからは本当の事しか言えなくなります。嘘をついても考えても駄目です」

男が何かいったのか？考えたのか？

鋭い悲鳴が『ギャ〜・・・』とあがった。

「あのとおり、痛みで悲鳴をあげます」

「判りました。爆弾の入手先を取調べで聞こうと思っておりますが、
そうですか・・・痛みで嘘か本当かわかりますか・・・それはいい
・・・」

こうして、職員達に連れられて税関ゲートにむかう。

手続きをしてゲートを出るとこれから3日間のハワイでの休養だ・

とウキウキしていたが、どっと記者達に囲まれてしまった。

「あら、あなたたちは・・・」

「そうですね、ここにいる全員があの時比叡山にいたんです」

「私、昔の私に戻してもらって、セーラー服を着て作戦に参加して
いました」

「だから、気を使わなくてもいいですよ」

「私、何も無いのに術を使わないわよ」

「そりゃそうですね。でも、今日は良かったですよ。あんなの見せられたらはじめての者にはシヨックだ」

和やかな会見を終ってタクシーでホテルにむかった。

1週間のハワイでのリフレッシュ休暇は終わった。ロサンジェルスマでの空路も無事に到着し、

アメリカ本土の土を踏んだ一行の迎えはハワイで会った日本の記者達とアメリカの記者達だった。

記者会見まではいかなかったが、日本の記者達の歓声に比べてアメリカの記者の沙希を見る眼の冷たいこと。

「あきあさん！こいつらに言ってくださいよ。ビシツと・・・」

「いいじゃないの。これからの仕事で如々に知ってもらえば・・・」

「あきあさん、優しいからなあ・・・」

「あれ！・・・ミランダ！・・・」

飛びつくように抱き合う二人。

「ミランダ！、軍隊をどうしたの？」

「あれから私たち、急遽本国から呼び戻されて訓練の毎日だったわ。

そして軍隊から命令されたのがSPなの」

「でも、どうして？」

「ホワイトハウスから・・・つまり大統領からの直接の命令なの」

「命令って？」

「アメリカ合衆国に貴女がいる間、あきあはVIPなの。だから私たち貴女のSPよ」

その言葉で態度が一変したアメリカの記者達、日本の記者も仲間の通訳で驚きの色だ。

「VIP?・・・SP?・・・だつてそんなの・・・」

「あなたが私たちの力なんて必要がないのは十二分に判っているわよ。」

たとえばアメリカの軍隊が総がかりでかかってもあなた一人にかないつこない。

でも、これはアメリカがあなたに対する精一杯の儀礼なの。それに私たちあなたのそばにいたい」

「私達つて?」

その声を聞いてミランダは一步下がると、

その後ろにバラバラと走ってきて横一列並んだきちつとスーツを着た

見覚えのある女性5人。一斉に敬礼して挨拶する。

「ミランダ・クリスティ以下5名!ただ今よりミス・サキの警護にあたります」

といつて前もつて訓練を積んでいたのだろう、沙希一行を6人で取り囲む。

「さあ、いきましよう」

と言つて空港を出て行った。

「おい、どうして彼女にSPがつくんだ?」

「おいおい、何も知らないであきあさんの取材にきたのかい?」

「急に上からの命令でね・・・でも、上も何も知らないぜ」

「じゃあ、知っているのは大統領近辺のお偉方なんだろうな」
「なんだいそれは……」

記者の周りにアメリカ人記者が取り囲みメモを始めている。

それぞれ英語が堪能な記者の周りに集まっているが

沙希の力のことは上からの命令で言うわけにはいかない。

そんなこと言わなくても充分にアツピールできる沙希の実力なのだ。

「彼女は日野あきあというスクリーンネームを持つ天才女優なんだ。

あのジョージ・ルーク監督が去年からあきあを追い掛け回してね。

今回ようやく、あきあ主演の映画をとることになったんだよ」

「えっ？あのルークが？……」

「そういえばジョージ・ルークが1年前から頻繁に日本に行っていたんだ。

取材したら『いやあ、小野監督と将来の映画のために台本を書いているんだけど

まだ発表なんかできないくらい彼と衝突をくりかえしていてね』なんて言われたよ。

チクシヨウ！うまくかわされていたのか……」

「あきあは小野監督の秘蔵っ子なんだよ」

「そんなに、彼女は……」

「ああ、彼女は背が小さくて幼いけど、それに騙されてはいけない。

彼女が演技すると本物に成るんだ」

「そんな女性なのか……」

「凄いだろ、でもそれだけじゃないんだ。

本名の早瀬沙希ではコンピューターの画期的なソフトを製作しているよ。

君達も知っているだろう、あのビジネスソフト……」

「えっ！……あれはマイクロソフトのように世界に凄い勢いで広がっているぜ。」

ま……まさか……」

「そのまさかだよ。彼女が作ったんだ。その他、映画の元になったゲームソフト。」

それに画期的な通信システムが彼女によって作られたんだ。

一般には販売されないからわからないだろうけど、

あのNASAや軍隊それに世界中の航空会社が

目の色を変えて彼女に来てもらおうと必死なんだ」

「彼女って一体どうなっているんだ」

「だから、大統領が彼女にSPをつけたんだろうよ」

話しているうちになんだか自分の事のように嬉しくなってしまうのだ。

一方空港から出た沙希達、

「ねえ、私達が行くところハリウッドなのよ」

「わかっているわ、マチルダ・イルダのところでしょ。」

「えっ？……あっ、そうか、ケイトから連絡あったのね」

「さすが、サキね。その通りよ。それともう一つファーストレディのこと頼むわって」

「もう……そんなに頼まれたってこれだけはマチルダの心の中なのに……」

「私だってそう思うけど、それでもサキは約束守ると思うわ。ねえ、皆！」

「あたりまえよ！サキに勝てる人なんてこの世にいるはずないじゃ

ないの」

5人が声を揃える。

「もう・・・みんな・・・」

「沙希！あきらめなさい。あなたのこと良く知る女性がこれだけいるんだもの」

瑞穂にもそう言われてしまう沙希。

初めてこんな雰囲気味わう綾美はもうついていだけで必死だ。でもあこがれの人の素顔をこの何日も見つけつけてきてつくづく幸せだと思うのだ。

「あつ！きたきた」

と言われて振り返ると目の前に停まったのはマイクロバス。

「うわ！・・・皆で乗るんでしょ。嬉しい！」

とはしゃぐ沙希。こんな姿をみると思いつきり抱き締めてしまいたい女達だ。

このマイクロバス、見た目は普通の車に見えるのだが・・・、それを口に出そうとすると

「さあ、先に乗って・・・」

と車に乗せられ直ぐに車は出発した。

「悪いわね、この車のこと誰にも聞かれなくなかったからね。

あなた、初めて見るわね。なんて名前なの？」

「綾美・・・石川綾美・・・といいます。

1年前男達に囚われていたのを、沙希ちゃんに助けられたんです」と正直に答える。

「そうか、あんたも地獄を見てきたのね」

ミランダ達には判ったようだ。

「この車はね、警護用の特別仕様なの。特に窓やボディは機関銃の

「玉なんて通さないわよ」

「マイクロバスなんて目隠しに最適ね。ファーストレディを乗せる車としては・・・」

「やっぱり沙希には何も隠せないわね」

ハリウッドまでは20数キロ、約30分の道のりだ。空港を出てから15分、

するといきなり『ピーピー・・・』とコンソールボックスから

甲高いデジタルの音が鳴って赤いパイロットランプが点滅している。

「何かあったようね。ジル！スピーカーを・・・」

「はい」

運転席の女性が黄色いスナップスイッチを入れる。

「プスツ・・・プス・・・う！・・・」

2発のサイレンサーの音と叫び声。

「お前達それ以上抵抗すると、この女ぶっ殺すぞ！・・・早く金を出せ！」

「どうやら、強盗のようね」

といいながら呪文を唱えて『般若童子』の着物にかえた沙希。

「サキ！頼むわ！ここからだといくらがんばっても10分はかかるわ」

「判ってる！」

「沙希！・・・これを」

と渡された般若面をかぶって天井を通り抜けた。

「ダイアナ！運転変わって！・・・ジルったら目を開けて気ぜつしている」

気絶は大げさだが呆然としていたのは現実だ。

助手席に追いやられたジル・・・はっと気がついて後部座席を振り向いて

「い・・・いまのは・・・」

「救いの女神よ・・・、それに彼女のこと内緒だからね。

これからは、アメリカ合衆国の最高機密になるから話しちゃ駄目よ」

「でもつくづくあきれれるわ、沙希ったら本当に事件屋なのね」

とゆりあが英語でいうと

「違うよ、事件が彼女を呼び込むのよ。きっとこれからもいろいろあるわよ。

でも、あの格好はアメリカじゃあ受け入れにくいわ。何か考えなくっちゃあね」

「私、スーパーガールがいい。サキはいろいろな顔を変えられるから映画のスーパーガールそのものになれるわ」

「スーパーガールかあ、それも面白いわね・・・といってなんかいられないわ。

ダイアナ！あと何分ぐらい？」

「あと5分ぐらいよ」

車は凄いいきおいで走っていく。

少し時間を戻して・・・

沙希が家の上空についたとき、沙希の耳にはまだサイレンサーの音が聞こえている。

そのまま屋根からスーツと下りていき、戦いの場の真中に降り立った。

降り立ったといっても1mは宙に浮いている。

男達は5人、黒いマスクに黒装束という昔ながらの強盗の姿だ。

中年の女性一人を人質にしており、相対するのは女性3人。物陰に隠れて銃をかまえているが、あと女性二人が足と腕を撃ち抜かれて

酷い出血で蒼白な表情で気を失っているのだ。

だが、いづれも呆然と宙に浮かぶおそろしげなマスクの人物を見ていた。

その人物は倒れている二人に交互に黄金色の光を浴びせる。

すると不思議が・・・遠目に傷が塞がるのが見えたのだ。

その後ほっとしたように強盗団に相対する。

先に動いたのは強盗団だ。

「お前は誰だ！」

「おほほほ・・・馬鹿な男達だのう。人質を取って逃げられると思うのか。」

早く人質を放して投降せよ」

「なにを！それでもそんなことをいえるのか」

と人質を取っている強盗が銃を人質に押し付けるのだ。

「なんだ！・・・そんなことか」

と指を曲げると強盗の身体が固まって横向きになって宙に浮く。

人質は丸い結界の中に入れられてふんわりと女性達の方に浮いていく。

「ジェシカ！・・・マチルダを頼むわ！」

いきなり名前を呼ばれて驚いたジェシカだが言われたとおり丸い結界がスツと消えて

マチルダを物陰に隠す。

「くそ！・・・やれい・・・」

サイレンサーが火を噴いた。

「駄目だ！」

と目を閉じた女性達だったが

「おほほほ・・・」

という笑い声に目を開けた。・・・こんなこと・・・

拳銃の弾がその奇怪な人物の前に浮かんでいるのだ。

指を鳴らすと『パラパラ』と床に落ちていく。

「こ・・・この野郎！・・・」

持っていたライフルを逆さにもって殴りかかろうとした強盗、

そのまま上に引っ張りあげられる。指を離そうとしてもはなれない。

「バイバイ・・・」

という声にふつと見てみるとあの恐ろしげな人物の手に青く光る玉が見えた。

「はあっ！」

と言う声に上下半身が重なったように折り重なり、窓を破って外に飛び出した。

「ミランダ！その男を拘束して！・・・」

「わかった！・・・サキ！・・・これを・・・」

と外から飛び込んできたキラキラ光る金属。

ひゅっひゅっ・・・と指を曲げると二人の強盗が固まって浮き上がる。

こうなってはもうどうしようもない。

「あとは、お前だけだ。どうする？」

「どうもこうもあるものか・・・」

といって玉切れの拳銃は放って懐からサバイバルナイフを出した。

「ほう……ちょうどよかった。お主にはこれからの捜査に役立つ
データーが豊富に持ち合わせているようじゃ。嘘をつけぬようわた
しが引導を与えてくれん」
と、いつてストンと床に降り立った。

その頃にはミランダ達や瑞穂達をスピード違反車と違って追いかけてきたパトカーの警官、
訳を聞かされて慌てて呼び寄せた警官たちの大勢がこの奇妙な戦いを見ていた。

強盗の親分が振り回すサバイバルナイフを振り回すのをかいくぐるたびに

「うっ！」

と苦しげな声をあげるのは強盗のほうだ。そして最後に

「ギャツ……」

と声をあげて気絶してしまった。

もう常識では考えられぬシーンの連続……声もあげられないのも仕方がない所だ。

「サキ！やったね」

「ええ」

とマスクを取ったその顔は……東洋のこんな若い少女だったのか……

「皆、紹介しておきます。早瀬沙希……スクリーンネームは日野あきあ……

もうすぐジョージ・ルーク監督の撮る映画の主演女優です。警察署長はいますか？」

「はい、私ですが……」

濃い髭の大男だ。

「あなたの署ではかなりの発注数ですね、あのモバイル」

「あたりまえですよ、どこの天才がつくった……あっ！……まさか……」

「そのまさかよ。それとパトカーにつけるナビゲーションシステムもね」

「一体どうなっているんですか？この人は……」

「そんなのわからないわ、でもさっき見たでしょ。サキのあの不思議なパワーを……」

「はい、全く……信じられないものを見た驚きは今も続いているんですよ」

「すみません！こいつら3人下ろしてくれませんか」

その声で指を鳴らすと『ドン！』と床に叩きつけられる3人。

「こら！……起きろ！」

とひっぱりあげると

「ぎゃあ〜」

と悲鳴をあげる強盗団の親分。

沙希に気絶させられてもマスクのままだったのでマスクを引き剥がす警官。

それでも

「ぎゃあ〜ぎゃあ〜……」

と悲鳴をあげる

「署長！こいつ手配犯ですよ。かなり悪辣な奴で何人もこいつのために命を落としています」

「署長さん、今の悲鳴を覚えていてください」

といつてから沙希は嘘がつけなくなった体質のことをいう。

「ほづ、そうですね、嘘をついたら今の悲鳴ですか。」

「おい！皆聞いたか、これは面白い取調べになりそうだ」

「署長！そいつらに重大な罪をつけるのわすれないで！」

「重大な罪ともうしますと？」

「勿論、ファーストレディを襲った罪よ」

「ファーストレディ？」

「あら！知らなかったんですか？マチルダが大統領夫人なの・・・」

「

「えっ？大統領夫人？・・・」

警官達・・・今日は何度呆然としたらいいのか。

「ほんと・・・本当なんですか？」

「ええ、そうよ。私達6人はこの沙希のSPだけど、彼女達はファーストレディのSPなの」

強盗団に撃たれた二人が頭を振りながら立ち上がる。自分の血で衣服が真っ赤になっていた。

「すみません。油断していました」

「いいのよ、こんな突拍子もない奴らが飛び込んでくるとは思わな
いものね。」

まあ命が助かったのはサキのおかげだと感謝しなさい。サキがいなければ失血死だったんだからね」

「はい・・・ありがとうございます」

頭を下げられた沙希。

「そんなこといいのよ。幸い二人とも玉が抜けていたからよかつた
わね。」

もう傷は消えているけど流れ出た血液はもどらないから・・・
ねえ、ミランダ。彼女達着替えさせて病院で輸血できないかしら」

「わかったわ、ダイアナ！この二人を病院に連れてってちょうだい。その時にサキのこと教えてあげてね」
出て行く3人を見送ったあと、ミランダは署長と話しながら出て行った。

沙希はいつからか自分をじっと見詰める視線に気が付いていた。今は背後からの視線だ。くるりと振り向いて見つめる先にはマチルダの姿があった。

今まで見つめていた証拠にはふつと首を下げた動作が見えたのだ。沙希はふつと笑みを浮かべて足を進めた。一二歩後ろに下がるマチルダ。

それが2度3度続き、とうとう部屋の壁に遮られてそれ以上は下がれなくなった。

沙希はそんなマチルダの心の中が手にとるように判った。

マチルダはSF小説作家である。豊かな空想力で小説を書いている。

でも、それはあくまでも小説の中だけだ。普通の生活となれば全くの常識人なのだ。

UFOも信じなければ幽霊なんて・・・とてもとても・・・
そういう性質だからこそ冷静な目で空想の世界に入っていけるのだ。

でも、今見てきた出来事は遙かにマチルダの空想の範囲を超えていた。

だから・・・怖いのだ。沙希の摩訶不思議な力がとてつもなく怖いのだ。

沙希は思い切ってマチルダに飛びつき抱き締めた。そして、耳元でいきなりこう囁いたのだ。

「マチルダ叔母様、ケイトのお腹の中の子は私とケイトの間で生まれた子供なのよ」

ケイトのお腹の中の子供が誰の子かは話していない。だからその効果は抜群だった。

マチルダの身体がビクンと振るえる。

そして、その驚きに沙希を怖がるという気持ちがどこかへ飛んで行ってしまった。

（まさか・・・こんな若い少女が男？・・・）

「そうよ、私は男・・・でも半分だけよ・・・あとの半分は女・・・」

この身体は作るうとして作ったもんじゃないわ。いわば宇宙の意思なの」

沙希はこの頃には宇宙の意思を受け入れていたのだ。

「あなたがケイトの・・・夫？・・・なの？・・・」

コクンと首を振るそんな子供じみた動作に何か母性本能を感じてしまふマチルダ。

「ねえ、あなたサキというのね。・・・あなたって一体どういう人？」

「私もマチルダって呼んでいいの？」

「ええ、いいわ」

「じゃあ、どこか静かなところでお話ししましょうか」

「そうね、2階へ行きましょう」

「はい・・・あつ、その前に窓を直さなくっちゃあ」

「えっ？・・・窓を直すって？・・・」

「危険要素は一つでも消しておかなくちゃあね・・・ミランダ！」

「何？・・・サキ」
とドアの向こうから顔を覗かせる。

「私達、女性陣2階へ行くけど、その前にこの壊れた窓を直していてもいい？」

「あつ・・・ちよつと待って」

とドアの向こうに消える。

しばらくしてから

「サキ！、もう写真撮ったからいいって、それと・・・」

といってメイド姿の女性4人が姿を現す。

「この人達地下に押し込められていたの。」

もう尋問も終わっているから、一緒に2階へ連れて行ってちょうだい」

「じゃあ、女性陣を全て連れて行ってもいいのね」

「OKよ。それにダイアナ達が戻ってきたら2階に上げるからよろしくね」

「わかったわ」

二人の言葉のやりとりに黙っていたメイドたちが

「奥様！・・・申し訳ありませんでした」

「何を謝ってるの！あなた達の命が助かったと判かってホツとしているのに」

「あ・・・ありがとうございます」

「じゃあ、マチルダ。窓を直すね」

と行って九字を切る。アメリカ人にとって東洋の不思議な魔術だ。特に何も知らないメイド達にとってそれは驚くような奇跡だった。

真言を唱えるとまるでビデオを逆回ししているような映像で

壊れた窓が元に戻っていく。あつというまだった。

急いで窓に駆け寄り寄る女性達。

どこにも割れた様子もない。それは本当に奇跡だった。

こうして奇跡を目に前で見た女性達、2階で聞く日本の女性達の悲しい歴史……

同じ女性として国は違えどその哀しさが心に響いてくる。

沙希の幼き頃の厳しい生い立ち、力が覚醒したがそれを使うのは人のためだけ、

何度も戦いに望むサキ。アメリカ軍隊の兵士だった6人の女性。

その目で……身体で味わった不思議の世界……話はつきない。

「おはよう……という時間じゃないみたいね」

「そうよ、沙希。もうお昼よ」

といいながらも綾美も起きるのが遅かったみたいでこの2階のダイニングで食事中だった。

「瑞姉達は？」

「もうとつくに起きて昨日の現場をみてくるって」

「もう、好奇心旺盛なんだから……」

「あら、そんなこと言っているのかしら。一番の好奇心の持ち主は沙希って皆言ってたわよ」

「そんなことないわ、私のはただの野次馬よ」

「沙希のは野次馬って言わないわ、大勢の人を助けるために必死になるのって」

「もう、そんなこと言わないで……」

「沙希！照れてる？」

「もう……」

「ところで、お昼からどうするの？」

「うん、ジョージの事務所に行って挨拶しておこうと思って・・・」

そんな話をしてから1階に降りる沙希と綾美。でも1階までの階段の途中で皆が座り込んでいた。

「どうしたの？」

沙希の声に

「刑事さんの邪魔をしないよう表にいこうとしたのよ。でも止められちゃった。表を見なさいって」

マチルダの説明で窓の外を見ると

「うわっ、凄い人・・・」

パトカーが止まっている間に人が鈴なりになっている。

「あれ、すべてマスコミ関係者よ」

「じゃあ、マチルダ！・・・ばれちゃったの？」

「何言ってるのよ、あれは沙希！・・・あなたによ」

「私？・・・あっ！・・・夕べ日本の記者さんたちが・・・」

「いろいろ、しゃべっちゃったみたいよ・・・ほら」

とゆりあが沙希に新聞を渡す。

「あゝあ、映画のこともコンピュータのことも書いてあるわ。」

「こりゃ、1度は会見しなくちゃね」

「でも、大丈夫？ホノルルの飛行機の自爆テロの事件を解決したのばれない？」

「うん、日本の記者さん達、その点は黙っているみたいよ」

「あら、ホノルルのテロのこと新聞で見たけど、あれを解決したの沙希って聞いていないわよ」

「うん、あまり自分のこと話すって、嫌だったから……」
「だから、黙ってた？そうねえ、

サキのいろんなこと知らなければただの事件として見逃していたんだけど、

よく考えればあんなの出来るのってサキしかいないものね」といってから

「ねえサキ！私、あなたのドラマと映画見たい。何とか成らない？」

沙希は困った顔をしたが

「あるわよ。ドラマと映画のDVDが、もしものために持ってきているの」

とゆりあが言った。

「でも、お昼からジョージの事務所に持っていくので夜でいい？」

「OKよ。夜が楽しみだわ。ねえ皆で見ましょ」

マチルダがニッコリと笑う。

「さあ、会見でもしてきましようか」

と行って立ち上がる沙希。

「マチルダ！左側の空き地あれ使ってもいい？」

「いいわよ、あれは誰のものでもないの。本当は小さな公園だったんだけど

管理する人がいなくてね。荒地のようになってしまったの」

「じゃあ、使うね」

と階段を下りる沙希。

「あら、沙希。おはようつていう時間じゃないわね」

「いいわよ、わたしだって今起きたところだから」

「どこへ行くの？」

「記者会見をしてこようと思って・・・今のままじゃ收拾がつかないでしょ」

「そうね、じゃあちよっと待って・・・」
とSPの隊員を呼ぶ。

「さあ、これでいいわ。私達、沙希のSPだということを忘れないで・・・」

と沙希を囲むように配置が終る。

「私、みんなの事SPだなんて思っていないんだけどなあ」

「ありがとう沙希、とても嬉しいわ。でもこれは政府の命令なの。

それに、大好きなあなたに少しの危険をも与えたくないの。

これが私達のあなたに対する”想い”よ」

「仕方ないか・・・でも、危なくなったら私が守るからね」

「もう・・・立場が逆なんだから・・・」

こうして表に出る沙希達、

その姿を見た記者達が静止する警官を押しつけて近づいてこようと
するのだ。

「止めてください!」

そのピンと張った声に一瞬に止まってしまふ記者達。

「凄い!・・・」

多くの記者達の足を止めてしまうその声!さすがに女優!と感嘆す
るマチルダ。

我慢できなくなって窓からこの様子を見ていたのだ。

「警官の方はタベから一睡もしないで捜査をされております。

その警官の方達の迷惑にならないで!・・・」

と言ってからニッコリと笑う。その笑顔に

「おお……」
とつい声をあげてしまう記者。

「10分間だけ会見します。お隣の空き地スペースにおいでください」

慌てて空き地に走り出す記者。

その傍若無人さに腹を立てていた警官も沙希の見事なマスコミの裁き方に

思わず拍手したくなっていた。

だから彼らは記者を遠巻きにして会見の様子を見ようとしていた。

この東洋から来た女優……どんな会見をするのか、とても興味が
あるのだ。

「どうしたんですか？昨日の空港では少なかったのに」

「あつ……いえ、昨日のことは忘れてください。

本社からの連絡が混乱していて、

あなたから目を離すなという連絡が来たのが今朝早くだったのです
よ」

「あら、どうして？……私になか悪い事したのかしら？」

「いいえ……でもそれがはつきりしないんですよ。

ただあなたから離れるなというだけだね」

「あきあさん！これでは日本と同じですね」

「もう……又追いかけて？」

これは日本語だったのでアメリカの記者からどういったのかとおお
きな声で質問があった。

「このあきあさんに張り付いていた記者達が大勢いたんだよ。

毎日が追いかけてこでさ……でもあきあさんは神出鬼没でくほと
んど捲かれていたよ」

「それは、日本の記者がだらしなかつたからじゃないのかい」

「それは侮辱だよ・・・とにかくこの人は女優だけあって変装の名人なんだ。

目の前を通られてもわからないぜ」

「変装の名人？・・・」

思わぬ言葉に振向いて日本の記者達を見ていたアメリカの記者、思わず沙希の顔を見てしまう。

「あゝあ、せつかくアメリカでは自由だと思つたのに・・・

いずれにしてもこれから毎日、皆さんと追いかけてこですな」

本当かな？という記者達、でもこの女優、凄い魅力があることは確かだ。

話を聞くだけで魅了されていく。

「あのう、聞いてもよろしいか？」

男に混じる数少ない女性記者、その中でも一番若いのだろう。

「あら、あなたはニューヨーク生まれね」

あきあの言葉にえっ？と驚く記者。

「どうして判るのですか？私今まで誰にもそんなこと言われなかつたのに」

「そりゃ判るわよ。あなたの言葉にある東部のニューヨークなまりでね」

「なまり？ええ・・・私なまりがあるんですか？」

「あのう、聞いてもよろしいか？・・・これ今あなたが言った言葉そのままよ。

あのう、聞いてもよ（ろ）しいか・・・これ、わかる？」

「いいえ、わかりません」

「これはあなたのお隣の記者さんのアラバマなまりよ」

「あっ！」

思わず声をあげてしまう記者。

いつ判ったんだろう・・・首を捻る。

「ふふふ・・・あまり考えさせても悪いわね。

さつき、警官の人に『会見を！』って叫んでいたでしょ。あれでわかったの」

「ええ・・・たったそんな短い言葉で判るものですか」

「だって、私女優ってお仕事してるでしょ。観察力がつい鋭くなっているのよ」

何だかごまかされているような気がしないでもないが・・・

「それで質問ってなんですか？」

「あのう、見た目凄く幼いんですけど今のお年は？」

「ナインティーン・・・19よ」

「えっ？19歳・・・わたしより5つも下だわ。・・・学生ですか？」

「いいえ、社会人よ。大学は5年前に卒業してるの」

「5年前って・・・14歳・・・凄い！・・・」

なんだか口がこそばゆくなる瞬間だ。

でも正直にいえるわけない。

「19歳でジョージ・ルーク監督の主演女優ですか・・・信じられないなあ・・・」

「止めてくれないか、私の大事な主演女優を脅すのは・・・もっともこのアキアに敵う人間って誰もいないがね」

「ジョージ！……」

といて飛びつくあきあ。

このごろでは小野監督とジョージ・ルーク監督には肌が接触できる
ようになつたのだ。

「アキア！1ヶ月ぶりだね。でもしまったと思つてるよ。

今回も日本に行くべきだったと反省しているんだ。

つまらん用事で日本にいけなかつたからね。

一緒だつたらホノルルでのあんな面白い事件、取り逃がすことなか
つたんだ」

「ジョージ！」

「判つてるよ。これ以上はいわない。そのかわり今日からいいね」

「しかたありませんわ」

「あとう……」

と記者。

「ルーク監督とこの東洋の女優あきあが映画を撮るつてことが本当
だと

わかりましたが、ホノルルでの面白い事件つてなんですか？」

「それを取材する力が新聞記者として一流かどうか決まるんだ。

ほら、日本の記者達が笑っている……

一般には駄目だけど、マスコミにはアキアのこと教えてあげてもい
いんだが

これ、一つのゲームとして充分に楽しんでくれないか。

それとこのアキアには発表してもいいものと駄目なものがあるんだ。

……発表してもいいものは君達記者の競争だが、

発表して悪いものは日本でもそうだったがアメリカでも同じで、

国家機密として言論は規制される。

それを破るものはFBIや警察に追いまわされ一生暗い所だと思っ
ていたまえ」

「それは・・・」

驚いた記者達が顔を見合わせている。

「それ以上は今話さない・・・さあ、会見は終わりだ」

その声に皆、バラバラと走り出した。これからは情報合戦なんだろ
う。

「ジョージ、いいの？あんなこと言って・・・」

とゆりあがいうが

「大丈夫さ、・・・彼らは馬鹿でない」

表では警官たちが立ち番しているが

家に入ると事件があった1階の居間にはもう誰もいない。

不信な沙希達の様子に

「終わったから、今皆帰ったところよ」

「じゃあ、表の警官達は？・・・」

「ボディガードよ・・・いらないうって言ったんだけど

これはハリウッド署の義務だからあなたが断ることは出来ませんで
すって・・・

いらっしやい、ジョージ・・・」

「久しぶりだね、マチルダ」

「ジェーンは？」

「今、パーティの準備をしてるよ」

「パーティ？・・・」

「そうだよ、アキアがこのアメリカに来てくれた歓迎パーティだよ」

「えっ？私の為に？・・・そんなあ・・・」

「いやかね」

「ううん、嬉しい！・・・」

「ミランダ！君達も来るんだよ」

「私達、沙希のSPですから、当然お伺いしますわ」

「マチルダ、君もだよ。当然、君のSP達もメイド君達もね・・・」

「でも、ジョージ昨日あんなことがあったから、誰もいないというのは・・・」

「マチルダ、大丈夫よ。

昨夜こんなの作ってみたんだけど・・・」

「作ったって・・・サキ、あなた・・・」

「うん、だから私の部屋にあったラジカセ分解しちゃったけれど・・・、

それに部品もかなり足りなかったから、一応試験版ね。

マチルダ・・・パソコンある？」

メイドに用意させたノートパソコンを今のテーブルに置く。

それにケーブルでサキが試験版という装置をとりつける。

本当に目を真ん丸くするうちにコマンドプロントにデーターを打ち込んだサキ。

「じゃあ、装置を立ち上げるね」

すると液晶部に表れたのは上部からの家の図面だ。

1F、2F、3Fと3つの図面になっている。

「これって・・・家？」

「ええ、スイッチを入れたら、その家の図面を表示できるの。」

だからこの装置一つあればどんな家にも対応できるわけよ。ひづる

「ちゃん、ドアを開けてみてくれる？」

「うん、わかった」

「ドアまで走って行ってドアを開けようとするが開かないようだ。」

「沙希姉さん。このドア全然動かないよ」

「そんな・・・私やってみる」

「ミランダがドアまでいく。」

「そんなあ・・・びくともしないわ。1mmだって動かないもの」

「じゃあ、これではどう？」

「画像上の同じ場所をクリックする。」

「あつ、開いたわ。・・・何？これ・・・」

「あつ！昨日の署長さんだ！」

「ちょうどいいわ、ミランダ！署長さんに1度ドアを締めるから表からドアを開けてみてくださいって言ってくれない？」

「沙希の言ったことが実行され、ドアが開かないことをドアを叩いて知らせる署長。」

「沙希がドアの画像をクリックすると開くドア。」

「これは一体どうしたんですか？・・・」

「これ、昨日あれから沙希が作ったんですって」

「昨日作ったあ？・・・」

「でもこの装置では金属探知までしかできません」

「金属探知？・・・」

「ええ、署長さんが外で取っ手を握ったでしょ。」

「それによって署長さんのもつ金属を探知したんです。」

「この小さな点はその洋服のバッチ・・・これは形でも判るように拳」

銃です」

「これは一体何なんですか」

「携帯できる防犯システムです」

「防犯システムですと？・・・ちょ・・・ちょっとまってください」

といて飛び出してから制服姿の婦人警官をつれて戻ってきた。

「これはうちの警察署の科学担当のエリザベス・ターナーといいます。」

科学的なことやパソコンに関してうちの署のエースなんです」

「エリザベス・ターナーです。ベスって呼んでください」

「ベス！よろしくね。早瀬沙希よ。サキって呼んでね」

ベスは沙希の手元の機械を見る。

最初は首をかしげていたが見る見るその目を大きくして

「しょ・・・署長・・・これって・・・」

「昨日あの事件のあとに考えられ作られたそうだ」

「そんなあ・・・何時間もかかってないじゃないですか」

「でもこれはラジカセの部品を使っただけだから能力的にはここまです」

「署長！この人と私ではランクが違いますよ」

「ベス！そう言わずにこの人に付いていて、その装置のこと吸収してくれ。」

その防犯システムは証言者の安全を守る我々の秘密兵器になるんだから・・・」

「わかりました。・・・ねえ、サキ。その原理は？」

とベスが聞く。

「これはニュートリノを使っているの。ニュートリノの自在性を使ってバリアを発生させるの」

「ニュートリノってあなたが開発したこのモバイルと同じ?・・・」

とゆりあ。

「そうよ。同じ原理よ」

「あっ!これって・・・」

とゆりあが持つモバイルを指差すベス。

「署長これって、今度うちが導入しようとする・・・」

「そうだよ、そのモバイルもナビゲーションシステムもサキが作ったものなんだ」

ベスはじつと沙希をみつめて

「あなたって本当の天才だね。ねえ、署長しばらく休暇ください」

「休暇ってベス・・・」

「私、この人のこともっと知りたいんです」

「仕方ないか・・・君は言い出したらきかないからな。」

「じゃあ、そのかわり色んなことを吸収してくるんだぞ。そして、毎日の報告は忘れるな!」

「はい!署長。ありがとうございます」

「そうそう、取調べのことを報告に来たんだ。」

「サキ、君の言うとおりだったよ。尋問していたうちの刑事があとで言ってたんだ。」

「こんな簡単で、こんな面白い取調べって始めてだつて。」

「マチルダさん・・・その取調べでわかったのは、やはり女だけが住む家を」

物色していたそうですよ。でも、これからはその防犯システムがあれば安心ですね」

「ベス！」

「何？・・・サキ」

「これ、すぐ集まるかな」

「これって？」

「だから、この装置の部品よ」

「こんなにくさん？」

「一応4台分かな」

「わかった」

「お金ある？」

「これぐらいわね」

「じゃあ、レシート持って帰ってきてね」

「わかった」

「あっ！・・・もう一つ。私達これからジョージのお家に行くんだけど場所わかる？」

「わかるわよ。アメリカの誇りですからね」

「じゃあ、ジョージのところまで待ってるから・・・」

「じゃあ、行ってくるわ」

「沙希！・・・静姉に言っておかなくてはね」

と瑞穂・・・ゆりあが皆に通訳する。

「やっぱり言わなきゃ駄目かなあ」

「あたりまえよ。これまで沙希が開発したものの全部が凄い販売量だったじゃない。」

それに今度の防犯システムって一般向けでしょ。ねえゆりあ、皆に感想を聞いてくれない？・・・」

「わかった・・・」

今、瑞穂がこの防犯システムって今までに沙希が開発した物の中で

より一般的だから、
今まで以上の販売数になるって言っているんだけど、皆の意見聞かせてくれます?・・・」

「私、昨日あんなことがあったから余計思うの、これって絶対売れるって」

「わしもそう思うよ。これまでアキアが開発してきたのってソフトウエア以外は全て専門分野ばかりだったが、これは違う。これが発売されれば、買う人達ってこのアメリカでも凄い数になるだろう」

「ミランダはどう思う?」

「そうね、これがあれば確実に強盗が減るでしょうね」

「私達、夜中とても怖いことがあります。でもこれがあったら・・・」

「私もそう思います」

「ね!・・・沙希」

「わかった」

とモバイルを起動する沙希。

『ピ・・・』

と言つ音で直ぐに液晶に写る静香の顔。

「あつ!沙希ちゃん。あなた行った早々、また派手にやったわね」

「えっ?・・・ええ・・・」

「あなたのことだから大丈夫だけど皆心配したんだからね」

「じゃあ、お婆ちゃまは?」

「そりゃ、毎日テレビでやっているから知っているわよ」

「それじゃあ、お婆ちゃまに小沙希は無事だからって言っておいてくれる?」

「わかったわよ。心配しないで・・・で、今度はなにをやったの

「？」

「判るの？」

「判るわよ、沙希ちゃんがそんな顔していたら……あつ又何か開発したのね」

「ええ、……あつと、後は瑞姉に聞いてくれる？」

とモバイルをさつと瑞穂の前に移動してしまった。

「こらっ……沙希……」

ぺろつと舌を出す沙希。

そんな沙希を見るとなにもいえなくなってしまう瑞穂。

「しょうがないわね、こんなときの沙希って本当に子供なんだから」

といつてから

「静姉……実はね……」

と防犯システムのことを話す。

「えっ？……そんなことがあったんだ。

でも、その装置をつくる会社をさがすって時間がかかるわよ。

沙希ちゃん、そこにいるんでしょ。代わってくれる？」

モバイルを沙希のほうに向ける瑞穂。

「静姉！あのね、アメリカの分だけでもアメリカの会社で作らせてもいい？」

「アメリカで作るって？」

「ええ、今度大統領に会うからそのこと頼んでみようと思うの」

「大統領に頼む？」

「ねえ、マチルダ。ハリーに聞いてくれるでしょ」

「そうねえ、こんな小さな装置だけど作るとすれば

大きな工場を持つ会社になるでしょうね。」

それにセキュリティのしつかりした会社でなければね」

「わかったわ、私は何をすればいいの？」

「今、琴美ちゃんが早乙女薫事務所のワシントン出張所ということ
で働いてもらっているんだけど、

それを発展させてオクトのワシントン支社として人を増やしたいの。
でも誰でもというわけにはいかないわ。

信頼できる人でなければ・・・ケイトがそこにいればなあ・・・」

「いるわよ・・・ケイトなら」

「えっ？」

「ハイ・・・沙希！」

「あっケイト・・・」

「あなた、またはでな事をしたものね・・・あははは・・・

いいのよ、そんな顔をしなくても・・・話はきいたわ、信頼できる
女性ね。

心当たりはあるけど、沙希が動けばいろんな女性が集まってくるじ
ゃない。

だから、ジョージが映画を撮り終わるまでこの話ストップしとくわ」

「ケイト、その兆候は大有りよ」

と瑞穂がモバイルを持ち上げてミランダに渡す。

「あっ！・・・ミランダ！」

「ハイ！・・・ケイト」

「あなた、そんなところに・・・どうして？」

「私達、あれからホワイトハウスによばれて、訓練を受けてから今
は沙希のSPよ」

「へえ、SPになったの？だからこの間、沙希の事をいろいろ聞い

てきたのね。

「でも沙希のSPって・・・」

「そうよ、敵う相手じゃないわよ。でもお手伝いはできるの」

「ミランダがそんなこと言って、沙希をつけあがらせないでね」

「判ってる。沙希って身体が先に動くのよね・・・だから・・・」

「えっ・・・なにかあったの？」

「ええ、昨晚マチルダの家が強盗団に襲われたの」

「えっ？マチルダが？・・・それで？・・・」

「勿論無事よ、心配しないで。沙希が飛び出していったの。」

走っているマイクロバスから・・・あの恐ろしいマスクを被ってね」

「ケイト！・・・」

「あっ！マチルダ・・・よかったね・・・無事で・・・」

「ええ・・・でも私最初はサキのこととっても怖かった・・・怖くて怖くて堪らなかったの」

「それはマチルダが常識人だったからよ。常識人だから素晴らしいSFが書けるのよ。」

だから、沙希の常識外の不思議なパワーには拒否反応をしたの。でもどうして沙希を受け入れられるようになったの？」

「それはケイトなの」

「えっ？私？・・・」

「ケイトのお腹の子がサキの子だってサキ自身が教えてくれたの。それは衝撃だったわ。だってこんなにきれいで女らしいじゃない。それが貴女の子の父親だなんて

頭の中が混乱しっぱなしでどうしようもなかったの。

でも、サキが女性達を集めて平安という1000年前からのサキの

一族のことから

話してくれたわ。それはショックと言うより女性の哀しみや苦しみを私達にも感じさせてくれたの。

昔ウーマンパワーって流行ってたけど、あれは男達と同じランクだったわ。

でも女性が力を持って戦争を無くすことは優しさが必要なんだって、つくづく感じたわ」

「優しさは強さなの。強さといっても硬質なものでなく柔軟なものでなければならぬわ。

沙希の力の元は優しさだってこちらにいる全員が知っているけどね」

「ケイト・・・わしだよ」

「あつ！ジョージ・・・どうしてそこにいるの？」

「昨日の事件のこと聞いたのと、ジェーン達がパーティの準備をしたから沙希達を迎えにきたのさ」

「みんな、せいぜいジェーンのおいしい料理を楽しんでね。

私はこれから京都に帰って診察なの・・・じゃあね」

モバイルが切れると皆立ち上がった。

第三部 第二話

「ジョージ、遅かったじゃない」

「ああ、いろいろあつてね。直ぐには帰られなかったよ」

「スタッフの人達や他の人達はもう集まっているわよ」

「そうか、じゃあさっそく始めようか」

「ええ・・・あなたがサキね」

「はい、ジェーン叔母さま」

と喋って抱きついた。驚いたジェーン、初めてあつたのにこの自然な抱擁・・・

「まあ・・・あなたは・・・私が思っていたとおりの人ね。」

あなたの映画楽しみだわ。・・・ところでケイトのお腹、大丈夫？」

「ええ、今も連絡してきたところなんです。とても元気ですわ」

「そう、産まれたらケイトの赤ちゃん見たいわね」

「少し大きくなったら連れてきますね」

「お願いね・・・」

パーティ会場に入っていくと大きな拍手があがった。

ジェーンと手をつないでいる沙希。ジェーンの目は間違っではないなかつた。

始めてみた沙希のビデオ、感じた大女優の感触。

この子から感じるパワーって凄い！・・・そして身体から溢れるこの温かさは・・・

手を離したくない・・・というより、ジェーンはそばにいたかつた。

これは人と人との絆から生まれる温かさだ。
ケイトが日本に残った気持ちはもう充分にわかった。

そしてパーティが中盤に差し掛かったときジョージが突然立ち上がった。

「諸君！食事も飲み物も楽しんでいただいたものと思う。

そこでこれから、あるフィルムを見せる。これはこの1年間封印していたものだ。

このフィルムはこれまで公開していないし、これからも公開するつもりはない。

けれど小野監督とこれを編集しているとき約束したんだ。

1年経った時、ただ1度だけ自分の心安いものだけに公開しようかね。

幸いこの中で活躍するサキ・ハヤセことアキア・ヒノがここにいる。

アキアは私がこの1年懇願し続けてようやく私の映画に出てくれる女優なんだ。

もう映画なんかいい・・・と思われる方は帰ってもらってけっこうだ。

それ以外の方は腰を落ち着けて見てもらいたい。

ただ一つだけ、このフィルムを初めて見る方には随分と奇想天外に見えると思うが、

これが本物だと私は知っている。私と日本へ行ったスタッフ達も知っている。

ミランダ！君たち6人は軍隊の兵士だったこの時、この場所にいた・・・勿論知っているね」

「ええ、知っております。我々も作戦に参加しましたから・・・」

「杏奈とひづる！君達は知っているかね」

ゆりあの通訳によって

「わたしもひづるも、あの時京都の家で沙希の帰りを待っていましたから」

「諸君、この子は日本で天才子役と認識されている女優だよ。」

綾美、君はあの随分後でサキと知り合ったから勿論知らないね」

「はい、でも私は沙希に命を助けられました。だから沙希の全てを信じます」

「そうだね、・・・今聞かれた通りだ。無論信じるなんてこれっぽちも言わないよ

ただ感じてくれればそれでいい・・・じゃあ、始めるよ・・・」

スルスルと降りてきたスクリーンに映し出された映像・・・いきなり、恐ろしい化け物に襲われている2機のアメリカ軍のヘリコプターから始まった。

「俺、この時こんな現実離れたことに身体も心もついてはいけなくて呆然としていたもんだよ」

「俺だって、同じさ・・・機銃の玉なんか跳ね返されたからな」

飛んで来たセーラー服の少女・・・

「あの沙希の姿には化け物の時よりも驚いたね」

「あのスーパースーパーガールはって思ってしまったもんなね。」

今では慣れたからあのパワーを見せられても驚ろかなくなっているけど」

フィルムは次々と思わぬものを見せ付けていく。
少女を助けようとして化け物に背後を撃たれた沙希の姿に
思わずギョツと沙希の手を握ってしまうジエーン。
綾美にとつても初めてみるフィルム、
沙希が撃たれたときは目の前にいるとわかっていても思わず身体を
硬くしてしまう。

天からやってきた侍・・・人形のような沙希の身体が徐々にもどる
シーン、

杏奈とひづるにとつてショックなことだった。

あの日帰ってきたとき平気な顔をしていた沙希・・・こんなことが
あったなんて・・・
真っ青になる杏奈とひづる。

沙希の額に第三の目が現れたときにはもう息を呑んで見つめる他仕
方がなかった。

それに空中から降りてくる球には呆然とする。そこから出てくるス
タッフ達。

これだけは説明するジョージ。

「これは『ステーション』といってカメラを乗せ撮影するものだ」
「駅?・・・」

と言う声に

「いや、宇宙ステーションに意味がもつとも近い。

これは、アキアが作ったもので動力はない。アキア自身がそのパワ
ーで飛ばすものだ。

異次元という隣の次元から撮影出来るので障害は一切ない

何かとんでもないことが言われている。

「それ、見れますか？」

「アキアどうかね」

「はい、あとでなら」

「わかった・・・それでいいかね」

「はい」

一時停止されていたフィルムが再び回り出す。

セーラー服という高校の制服に着替える女性達。

バスでついた先で衝突する女子学生同士の喧嘩。

喧嘩といつてもテニス部の喧嘩、

殴りあうんじゃないテニスボールを打ち合つての喧嘩なのだ。

・・・それらの様相がガラリとかわつたのは

「みんなあそこよ・・・あの一箇所に思いつきりボールを打つてえ・・・」

と空中に向かつてただ一人打ち込んだ少女・・・沙希だった。

それを聞き・・・見た両校の少女達、

思い切つて空中にボールをラケットで打ち込み始めた。

・・・空中にボールがたくさん集まり、怒つた男の映像が現れては消える。

今度表れたときはキリリとした少女が眉を吊り上げての怒りのボールが

男の目に当たり、『ぎゃあ！・・・』と叫んで消えた。

やがて集まつたボールのところから小さなヒビが無数に入つて、ついには『パリン・・・』と割れて中の大きな木が一瞬にして枯れ、

よく見ればその木に嵌め込まれてたくさんの少女が眠っていた。

駆け出したセーラー服の少女達・・・

よく見ればここにいるミランダを先頭に女性兵士達6人が走っている。

さすがは兵士、あっという間に木にとびつくと上へと上っていく。次々と木の中から引きずり出される幼い少女達、

・・・横付けにされたバスに急ぎ運び入れていく。

そしてここにいるアキアは額と手首になにやら嵌めて上空を睨む姿、それは美しく凛々しかった。

先に、少女達を乗せた2台のバスが発車し、次には多くのパトカーと大きなバスが

横づけにされセーラー服の少女達と警官たちの戦いがはじまった。

警官たちのへたさ加減が笑いを誘う、しかし少女達の本気が男達に乗り移ったようだ

手荒にバスに乗せられた少女達の悪態が空高く響きわたった。

一方空高く飛び上がったアキアは光のトンネルの中に飛び込んだ。

それは美しい光景だった。でも、それを抜けると・・・息を呑む。

こんな美しい小宇宙が・・・そこに立つアキアの姿・・・

この少女・・・人か・・・或いは女神なのか・・・

少女から飛び立つ一匹の蝶、目の前で可愛い少女と変化する。

その後に表示された3人の女性戦士と白いタイガー・・・これは・・・一体なに？・・・

蝶は戻ってきてアキアと話してから再び蝶に戻りアキアの身体に張り付き、

周りを警戒していたものも身体の中に戻っていった。

そして、現れた男とアキアとの戦い・・・緊迫感はあるが誰の目にも

アキアの存在感が男を大きく上回り、やがて小さな昆虫に姿をかえ

て

こそこそ逃げ出していくのを持ったロープが男を捕まえてしまう。まるでアメリカンコミックに出てくるあのヒロインが持つロープのようだ。

捕まった男が現れた男の娘と中年の婦人の説得により

アキアによって呼び出された2匹のペガサスに乗って贖罪をするため天に上っていった。

こうしてフィルムが終った。

みんな無言だ。・・・だが一人立ち、二人たち・・・こうして全員が立ったとき、

歓声とともに起こる拍手の渦。

サキは繋いでいた手の持ち主、ジエーンに促されて立ち上がる。

そして頭を下げるとまたまた盛大な歓声が沸き起こった。

そして、

「わたしにはこのフィルムが本物が作り物か、そんなのどうでもよくなったんだ。

わしの驚きはこのフィルムを見た瞬間に起こったよ。

そして、宙に立つ君から光輝くエナジーを見たんだ。

そんな女優・・・今迄見たことも会った事もない。

いくら過去の大女優といわれる人でもそんなものなかったからね。

ジョージが去年から君を追い掛け回していた理由はこれでわかった。

アキア・ヒノ、よくこのハリウッドに来てくれました。感謝します」

ジエーンからこの人がハリウッド最大のプロデューサーである

アレックス・ゴードンだと教えてもらい、
微笑みを浮かべることで完全に虜にしてしまったといっている。

次々と握手攻めにあい、それが終ると

「アキア、いいかね」

「はい！」

「じゃあ、内庭に行こうか」

内庭は木に囲まれているから何処からも見られる恐れはない。

「瑞穂！・・・」

瑞穂は持ってきたカバンの中から透明のケースを差し出すと、
沙希はその中の球を一つだけを出して瑞穂に返した。

沙希の手に乗った一つの玉、周囲の皆は息を飲んで見守っている。

手を下ろしても球はそのまま宙に浮き、まるで手品を見ているよう
だ。

沙希が九字を切る様子はまるで忍者の魔術か？・・・

真言を唱えるとその球は100フィート（約2m）ほど浮き上がり、

直径120インチ（約3m）の球体になってから地上に降りてきた。

「えっ？・・・何？これ！・・・」

大きな声が部屋の方から聞こえた。

「あっ？ベス・・・あれ、買ってきてくれた？」

「もちろんですよ・・・でも、これって・・・」

驚いた顔のベスに近寄り

「私が教えてあげる。沙希！そちらのほうを・・・」

「わかった。ゆり姉お願いね。ベス！あとでね」

といってジョージに近寄っていく。

「諸君！試乗OKだ。定員は5名……」

「ジョージ！今日はカメラはないが、

デジタルビデオカメラを持ってきているんだ、映してもいいかな」

「どうぞ……」

ニヤニヤ笑うジョージ。

「あと1名だけど……」

「ジョージ！私も乗ってもいい？」

「あつ、コーディネリア……いいけど、その格好は……」

「格好なんて、どうでもいいじゃない」

と喋ってかがみ込むと、そのロングドレスをビリビリ破り、歩きやすい普通のスカートの下にしてしまった。

今アメリカの女優といわれる、コーディネリア・ビーナス、最初ルーク監督はアキア・ヒノの相手役に……と、コーディネリアに白羽の矢をたてていた。

でも、主演でない上、ポツと出の日本の女優なんて……とハリウッド女優のプライドが許さず、即断つたのだが……よく考えてみるとルーク監督が1年近く自分の映画の主演にしようと獲得に粘っていた女優だ。

気になって……気になって……我慢が出来ず……あらゆる手を使って調べてきたが、或る程度までは調べがかったのだが

それ以上はどうしても判らない、不思議なのだ。だからとうとうパーティーにも出席してしまった。

「来ると思ってたわ」

とジェーンに言われる始末だ。

沙希が来てからその話し振りや行動を一心に見つづけた。

驚いたことにその言葉・・・完璧だった。いや完璧以上だ。相手の言葉の端にある、なまりを見抜き相手と同じなまりで話すアメリカ人であつてもとても出来るものじゃない。それに、見れば見るほど吸い込まれるように魅せられていく自分が怖かった。

温かく優しいその微笑みは自分の頑なな心を溶かしていくのだ。

だから・・・この『ステーション』というものに乗り込んでみる。

「よし、いいだろう。アキア！頼む」

「はい、では私もドレスでは恥ずかしいから」

と口笛ひとつで黄色いパンツスーツに衣装をかえた。

「おお・・・」

というなんともいえぬため息がでる。

「じゃあ、ジョージ、いつてくるわ」

といつて飛び上がったのだ。

これにはもう震えがくるほどの衝撃となった。

「あれは、スーパーガール・・・」

「本物だあ・・・」

「ゆりあ！あれにも確か・・・」

「ええ！追尾装置がついているわ」

「OK!・・・」

ひづるも杏奈も瑞穂のそばにとんでいく。

内庭にある白いテーブルの上に置いたモバイルを器用にあやつる瑞穂、

「あら、もうこんなところまでいつてるわ」

皆が覗き込む。このモバイルのこと自体なにも知らない。

「これは、アキアが開発したモバイルで、追尾装置として今の『ステーション』を追っているんだ。

他には通信装置としてもつかえる。

地球のどこにいても同じ状態で話しができるいわばテレビ電話だよ」

聞けば聞くほど、なんとという少女なのだ。

「今度、大統領とNASAと国防総省、そして軍隊と警察のトップ達が

あきあと話し合いがもたれるんだ。

そして、昨日このマチルダが強盗団に襲われたの知ってるね。

勿論助けたのはアキアだけど・・・それをきっかけに又、アキアが大変なもの発明したんだ」

「大変なものって何だ？ジョージ・・・」

「あとで見ればわかるさ。ベス！アキアに頼まれたもの揃ったのかい？」

「ええ、間違いなくよ」

「じゃあ、君たちに用事がなかったら世紀の発明が見られるよ」

「あなた！」

「なんだいジエーン」

「なんだか私、嬉しくて嬉しくて・・・サキが自分の本当の子供に思えて・・・」

「そう言ってみるといいよ」

「えっ？・・・」

「ママって呼んでくれて・・・」

いや、言わんでも君のこと”ママ”って呼んでくれるかも知れないよ」

「そうかしら」

「そうだよ」

「あつ！・・・帰ってきた」

先に『ステーション』がスーと衝撃もなく着地した。

『ステーション』のドアが開いて5人が出てくる。

でも皆が空を眺めているのを見て自分達も眺める。

星空に開いていたトンネルを閉じているアキア、

それが終わるとそのままスーツと地上に舞い降りて来た。

着地したあと真言を唱えて小さくすると瑞穂が開いていたケースに入れた。

とたんにとびつくように抱きついたのはコーデリアだ。

「ねえ！ジョージ！私、アキアと一緒に映画に出たい」

皆は驚いてしまった。こんなこと一度も言っただ事がない大女優がだ。

「コーデリア！日本で天才女優と言われるカヲル・サオトメがアキアを評して

こんなこと言っているんだ。

アキアには『演技の神様が宿っている』って・・・又、こつも言っている。

アキアが演技をすれば全て本物に成るってね。

一度こんなこと目撃したよ。

あるドラマがあつて人物設定だけは決まっていたが台本も何もなかった。アキアは主演の女の子。

競演の女の子はデビューしたての若い女優の子ばかり。

そんな中でアドリブで……というより主演の女の子そのものにな
って

ドラマを進めていったよ。こちらがドキドキするほどエキサイテイ
ングだった。

女優達もアキアにひきづられて芝居を続けドラマを完成したんだ。

「監督！そのときのフィルムって……」

「持つてるよ。大事な宝だからね」

「見せてもらえますか？」

「ああいいよ。でも、アキアが防犯システムを作り終えてからだ。
いいね」

「防犯システム？何ですか？それは……」

「見てればわかるよ」

「じゃあ」

といて思いつきアキアにキスをするコーデリア、

だがいきなり目が点になって一瞬気を失ったようになった。

足がアキアの腰をはさんでいたものだから、力が抜けてお尻から落
ちようとするのを

予想していた瑞穂と杏奈が後ろから受け止めた。

『はっ』と大きな目を開けて

「何なのよ……これ。私の身体パワーに溢れているわ」

「よかったでしょ、あきあのキスの効果……」

「キスの効果？」

「私達、疲れた時とか一日の初めに沙希にキスしてもらったのよ。

そしたら効果抜群！力が満ち溢れてくるの。」

でも残念ね、沙希は大の男嫌いだし、女性しか効果がないからね」

男達の表情がとたんにガツカリとなるのだから面白い。

「あははは、男かたなしだね、でもアキアを襲ってどうにかしようとしても駄目だよ。」

アキアに匹敵する強い人間ってこの地球上にはいないし、
「．．．それにアキアは神の子なんだから．．．．．」

「パパ．．．．．もう、いいでしょ、私のことは．．．．．
それに、アキアはスクリーンネームよ。今はサキって本名で呼んで
よね。」

「．．．．．ねえママ．．．．．さあ、早くお部屋にはいりましょう
．．．．．」
とジェーンと腕を組んで部屋に入ってしまった。

ジョージは星空を眺めていた。

「パパ．．．．．パパ．．．．．」

高校を卒業しても甘えてジョージの周りを離れない次女、
2ヶ月後に交通事故であっけなく死んでしまうなんて．．．

でも、今次女・ライアの顔を思い浮かべようとしてもそれが出来な
いのだ。

思い出そうとしても出てくるのはアキア．．．いや、サキなのだ。

「．．．愕然とする．．．．．そうか．．．そうだったのか．．．．．」

今、はつきりと判った。さっきの『パパ・ママ．．．』という声、
甘えたようなあの声．．．．．サキにはいろんな面がある。

だから気が付かなかった。似ている．．．いや瓜二つとっていい
．．．ライアだ！

「どうした！ジョージ．．．中に入らないのか」

「アレックスか．．．いやね．．．．．」

とライアとサキのことを話す。昔からの親友で何でも話せる相手だ。

「ジョージ、それはさつきサキにパパって呼ばれたからだよ。それと彼女はジョージにとってかけがえのない女性だ。

・・・パパか・・・羨ましい父親だよ、お前は・・・。
・・・さあ、早く入ろう、世紀の発明を見逃してしまつぜ」

部屋に入って二人が見たものは今まさに蓋を閉めようとするサキの姿だった。

「え？もう終つたのかい？」
驚く早さだ。

「見る見る間に出来上がっていくの。早送りしているフィルムを見ているみたい」

「サキの手つてまるで神の手みたい」
コーディネリアとベスの言葉だ。

「ママ！ノートパソコンある？」
ママと言われてビクツとなるジェーン・・・
慌てて持つてきてサキに渡すが横に座ってサキを見つめる。
その目から限らない愛情が溢れていた。

ケーブルをつないでパソコンを起動させコマンドプロンプトにプログラムを打ち込み、そのプログラムを装置の方に写しこむとアプリケーションを立ち上げた。
1階、2階、3階の平面図が液晶に映像として表れた。

「パパ、ママ、家からどれ位の位置で検知したらいい？」

「検知って？」

「家から人や動物を検知する距離を設定するのよ」

「じゃあ、100フィートかな」

設定し終わると

「あのね、これバリア発生装置なの」

「バリア発生装置？」

「ええ、ニュートリノを使つてのね」

バリアの強さはロケット砲を打ち込まれてもビクともしないでしょうね」

「何かもうゾクゾクするよ。君達は日本でこんな凄いものいつも見ていたのかい？」

とアレックスがスタッフに聞いている。

「とんでもないですよ。こんな凄いものの連続なんですよ」

「小野監督のスタッフに聞いたんですけど映画の撮影中に警察さえ知らなかった

犯罪を察知してアキアが解決したそうですよ。」

スタッフ達はそれを手伝うのとても楽しかったって言ってましたよ」

「皆、事件がどういうわけか、アキアに吸いつけられるように寄つて来るって、

事件屋のアキアって呼んでいました」

「それに、今回も日本を発つてまだ1週間も経っていないでしょ、それなのにもう2件ですよ。事件を解決したの」

「2件？わしはマチルダのところの事件しか知らないよ」

「ほら、あつたでしょ。ホノルル空港での航空機爆弾事件」

「ああ、客達が未知の世界にいつていたってあれか・・・」

「はい、あの航空機に乗っていたんですよ。アキアが・・・」

「そうか・・・あんなこと出来るのアキアしかないもの・・・」

「でどうでした？『ステーション』の乗り心地と異次元の感想は？」

「おお、あれはクレイジーでエキサイティングだったよ。

『ステーション』を出て小躍りしたかったのに次々というんなことがあっただろう」

「アキアといるとそうなんです。とても展開が早いし、次々と思わぬことがあるから自分が味わったこと忘れてしまっんです。

そして夜、ベッドの中でふと思い出すんです。そして飛び上がってしまう。

いかに自分が凄いことを体験したか・・・」

「よし、今度の撮影・・・わしも毎日見に行くからな」

「おいおい、アレックス。毎日撮影を見に来るつもりか
ジョージの言葉に

「あたりまえじゃないか、わしは長年映画にかかわっているがこんなワクワクする撮影って初めてだよ。わしの楽しみ取り上げるなよ、ジョージ」

「わかった、わかった・・・それより、見てみるよ」

見ればサキは4台目を組み立てていた。

「サキ・・・」

と声をかけようとするが

「駄目だよ今は、なにを言っても聞こえていないんだ」

「凄い集中力だね」

こんなベスの声もサキの耳には届いていないようだ。

「ねえ、ジョージ、絶対に共演お願いしますね」

「わかってるよ、この役は君しかないのね。君に断られても心配していなかったよ。」

「だってサキに会えば君がサキとの共演を承諾すると信じていたから」

「あゝあ、ジョージの思い通りってわけね。断った後のパーティの招待状も・・・」

突然だった。

「パパ・・・ママ・・・メイドの皆も毛根のある髪の毛を一本もらってもいい？」

「そんな言葉に驚く皆・・・」

「髪の毛を？・・・どうするんだい？」

「うん、家の鍵になるの」

「言っている意味が良くわからないんだけど・・・これでもいいかい？」

「ありがとう、パパ」

サキは装置に取り付けた本のようなものに毛根の部分を挟み込んだ。

『ピー』という音が鳴ると挟み込んだ髪の毛を取り出し、その表面をティッシュでふき取る。

「ねえ、サキ！・・・それは？」

「うん、DNAを覚えさせているの」

「DNAを？・・・あれって10日ぐらいかかるんじゃないの？」

「ええ、通常はそれだけかかるでしょうね。でもこの方法を使うと約1分ね」

「1分！？」

こうして作業が進んでいった。

「サキ！あなたのもね」

というジェーンに

「えっ？」

と驚くサキ・・・でもゆっくりと自分の髪の毛を抜く。

「パパ、この黒い板に利き腕の人差し指の指紋を押し付けてね。

ママも・・・メイドの皆もね」

最後に自分の指紋を押し付けてから”Enter”を押した。

「これでいいわ、スイッチを入れるね」

携帯用という長方形で薄型の箱、そのサイドについているスイッチをONにする。

立ち上がりは『ウーン・・・』という音がするが直ぐに音は小さくなる。

そしてそのままノートパソコンを再起動をさせた。

ノートパソコンが立ち上がると

「じゃあ、テストね。スタッフの誰か玄関のドアを開けてくれない？」

「僕が行って来る」

と小走りで走っていく。

「駄目ですよ、ビクともしません」

あきあは映像の玄関のドアをクリックする。

「これでは？」

という言葉に

「あっ！簡単に開きました」

「じゃあ、離れてドアの様子をみてください」

と再び玄関のドアをクリックする。

「あっ！勝手にドアが閉まりました」
とこちらを向いて言い玄関のほうに戻ってから、皆のほうに戻ってきた。

「今は最初の状態と同じです。ドアの遊びもなくビクともしません」

「じゃあ、メイドさんの誰かテストしてくださらない？」

顔を見合わせてが

「皆でいつてきます」

といって走っていく4人。

そして

「あのう簡単に開きますけど・・・」

「じゃあ、誰か表に出て同じこととしてちょうだい」

結果は同じだった。自由にドアの開閉が出来るのだ。

サキはニツコリ笑って皆に言った。

「成功だわ」

皆が一斉に声をあげようとするが

「少し待ってください。最後の感知テストです。えっと・・・」

と壁際の飾り戸棚の上の錠をみつけると

「ひづるちゃん、お願い。あの錠を持ってきてくれる？」

ひづるは通訳するゆりあのそばを離れないのだ。

「うん、わかった」

戸棚の上の錠をとってきたひづる

「はい、沙希姉さん」

「ありがとう」

と礼を言ってから

「誰か、この錠を胸ポケットに入れてから表に出て

150フィートほど離れてからゆっくりと家のほうに歩いてきてください。

こちらからストップと言ったら立ち止まって家までの距離を目測でいいから

あとで教えて欲しいの」

「じゃあ、俺が行ってくるよ」

と言ってあきあから鍬を受け取って胸ポケットに入れると玄関の方に歩き出す。

「誰かメイドさん付いて行ってあげて」

その声で背の一番高いメイドが玄関に走っていった。

「いいですかっっていわれてます」

「OKよ」

液晶パネルを見ていたサキが

「ストップ！」

と声をあげた。

「しばらくそのままにしてもらって・・・」

「わかりました」

「これ、わかりますよね」

皆が覗くと家の外になにか赤く光るものがあった。

サキがそれをクリックすると液晶パネル一杯に人の形の画像が現れ、胸ポケットに位置に

赤く光る鍬がその形ですぐにわかった。

そして

「これ、ベルトのバックルね。これは小銭かな。・・・もういいわよ」

と声をあげた。

「この画像を保存出来るの、そしてあとで警察に提出が出来るのよ」
戻ってきたスタッツが
「100フィートほどでした」
と聞くと
「設定通りでしたね」

「凄い！・・・何だか呆然よ」
コーディネアがつくづくとサキを眺めるのだ。

「サキ！」
「はい、パパ」
「さっきの感知システムだがあれ金属探知だね」
「はい」
「他にも何か出来るのかい」
「ええ」
「なに！出来るの？」

「データさえ入れれば、爆発物・・・」
「爆弾も探知できるのか・・・」
「そして、これもデータさえいれれば、ウイルス・・・」
「ウイルスって？」
「風邪のウイルス・・・」
「風邪も・・・かい」
「はい、ウイルス性の病気ならデータさえあれば探知できますけど・・・」
ウイルスによっては人の差別になることがあります。だから風邪だけにしました」

「サキは優しいからなあ・・・」

「オプシオンとしていろいろシステムに加えられるけどそうしたら・・・」

「そうしたら？」

「人が家に住めなくなるの」

みんな顔を合わせてから『ぷっ』と噴出す。

この発明されたシステムが物凄いだけに、そんな些細なことに笑ってしまう。

「ゆりあ！」

「はい・・・」

「これ早く静香に報告しておいたほうがいいね。」

その間に例のフィルムを用意しておくから・・・」

「わかりました。瑞穂・・・」

とさっそく瑞穂がモバイルを取り出すと静香を呼び出した。

「静姉、昼間の防犯システムのことだけど・・・」

「なあに、瑞穂ちゃん」

「沙希が正式な形で完成させたの」

「もお・・・といっても沙希ちゃんだから仕方がないか。それでどんなの？」

液晶パネルの前で沙希の発明物を見せる瑞穂。

「ふうん、思っていたより小さいわね、それで内容は？」

瑞穂は沙希に聞いていたこの装置の出来る内容を話す。

「それって凄いわね。それさえあれば空き巣の被害なんて無くなっちゃうわよ」

「静姉！・・・これって凄いことになるわ」

「それ、1台デモ機としてこっちに回せる？」

「ええいいですけど」

「じゃあ、明日もらうわ」

「え？明日？・・・日本時間でいっても・・・」

「違うわよ、明日直接受け取るといってるの」

「直接つて・・・ええ・・・」

「そうよ、私も会社の責任者として会議に出席することになったの」

「会議つて？」

「アメリカの時間で明後日よ。沙希ちゃんの第一秘書でしょ。しっかりしなさい」

「すいません。これから気をつけます」

「私これから空港に向かいますから・・・」

「瑞穂ちゃん！別に叱ったわけじゃないんだからね・・・じゃあ・・・」

「と言ってモバイルが切れた。」

「ふっ・・・」

「ため息をついた瑞穂。確かに旅に出て浮かれてしまったのは確かだ。そんな瑞穂にジョージが」

「瑞穂！君がサキの第一秘書だったのを忘れて情報を教えてなかったわしが悪かったよ」

「もちろんゆりあの通訳だ。」

「明日・・・」

「あっ！少し待ってください」

「とバックから手帳を出してペンを構えてから」

「どうぞ」

「とジョージを促す。」

「ジョージはニヤリと笑ってから」

「明日、サキ達はテキサスのうちの牧場に行くんだ。目的はサキが今度の撮影に乗る馬を探しに行くことと、明後日はそこで大統領達と会議にはいる。1日で終るか2日かかるかは会議の内容次第だそうだ。」

それが終わればサキはそこで最初の撮影に入る。ハリウッドでの撮影はそれが終わってからだ」

「ジョージ！私も行くわよ。テキサスに」

「だって君の出番はハリウッドからだよ」

「いいのよ。わたしはサキの女優としての姿をしっかりと見ておきたいの」

「私もいくわよ」
とベス。

「一応私にはサキの科学の知識を吸収するって役目があるからね」

「でも、何日もテキサスに行かなくてはいけないんだよ。君のご両親には……」

「あら、コーデリアならいいの？」

少しジョージは言葉をつまらせながら

「え〜と……」

「ジョージ、私から言うわ……いないの!」

「えっ?……」

「私には身寄りというものが一人もいないの」

「じゃあ……私といっしょじゃない」

「えっ!」

「私、孤児院で育つたの、だから今は警察の寮よ」

「しかし、まいったな。一体どういふんだらうね」

「それ、どういふこと?」

「サキもなんだ」

「えっ？」

「私片親だったんだけど大学のもうここまで育てたんだから、もういいでしょって母に捨てられたの」

「でもサキに女の哀しさというのかな、

そんな運命の女性達がサキが何かをするたびに集まってくる。

ここにいる瑞穂もゆりあも綾美もそうなんだ」

「私、父を殺され、私自身も目も見えず下半身も動かずで車椅子生活だったのを

沙希に犯人を見つけてもらい、私自身の身体も治してもらったんです」

「私も、姉が殺されているいろいろ調べていく内に私自身どうにもならなくなつて

死のうとビルの11階から飛び降りたんです。それを沙希に助けてもらつて……」

「私だつてそうです。悪い男達に捕まつて監禁され辱めをうけた上一緒に捕まつた姉までもが殺されてしまつたんです」

「私には判るわ。そんな女性達がサキのそばに集まるってこと……」

「私にだつて……」

二人の女性の必死な目は、微笑むあきあに向けられていた。

なんでも受け入れてくれるなんともいえぬ温かい雰囲気はこれからの二人の運命をかえていく。

「ねえ、ママもメイドの皆もいくんでしょ。……ヤッター……」

ミランダ達もでしょ」

「あたりまえじゃない。私達あなたのSPよ……」

はしゃぐあきあを見ていると嬉しくなつてしまふスタッフ達、

「おいおい、テキサスでも絶対何かあるぜ」

「おれもそう思ってるよ。楽しみ楽しみ・・・」

「今回は女性スタッフも行くんだろ。へたをすれば皆アキアに夢中になっちゃうぜ」

「うゝむ、まあいいや。こっちは一般観客になって楽しませて貰うから・・・」

「さあパーティの最後となるのは、コーデリアからリクエストがあったサキのドラマのフィルムだよ。」

このフィルムには小野監督から通訳してもらった字幕を入れておいたからみんなにもわかるだろうね」

そのフィルム、確かにこのまま放送しても良い出来だった。

これが本当に全編アドリブ？と思ってしまっ。

このドラマにはサキ以外に注目させられる女優が2人いた。

一人は子役、演技もこれは・・・と目を見張るものだ。

でも、どこかで見た顔だと思って、同僚に話し掛けたとたん視線の端に入ったのは、

えっ？と思って見直すとやはりそうだ。ヒヅル・アマギ・・・目の前にいる少女だ。

そして、もう一人・・・この女優が発散する一種の匂い・・・そうコーデリア・ビーナスと同種のものだ。

ドラマが終わった。歓声と拍手がなりやまない。

このドラマでもサキは不思議な魔術を使っていたが

映画に関わる者としてある意味こちらのドラマのほうを注目してしまっ。

コーデリアもそうなんだろう、椅子に深く腰をかけて右手親指の爪を噛んでいた。

しばらくしてから

「ねえ、ジョージ！これ、あとでコピーしてください？」

ジョージはニヤツとして

「ああ、いいよ」

なんか自分のかけた罠に引っかかってシメシメという雰囲気だ。

「コーディネリア！君はこれを見てどう思った？」

「ええ、サキのぞつとする演技、日常の生活を演ずるほど難しいものはないわ。」

サキの演ずるあの星という少女にはどこにもサキはいなかった。

星という少女が生き生きと描かれていたわ。

恐ろしい女優だわ。私達とはランクが違いすぎる。

アキアが演ずると本物になる・・その言葉通りね。

だから、サキのこと私が論じることはいわ。私が必死で見つけたのは2人の女優よ。

他の若い女優は論外ね」

とバツサリと切り捨てる。

「一人はこの子よ」

と隣に座っていたひづるを抱き寄せ髪の毛をクシャクシャとなでる。

ひづるにしてもこの薫と同じ匂いの女優に何をされても嬉しそうだ。

「監督！今度の映画この子を出せないの？」

「初めから私のキャスティングに入ってるさ」

英語が判らないひづるにはなにを言っているのかわからないが自分のことを言われているのは判るようだ。沙希の通訳がはいるものおじしないひづるだがさすがに映画出演には驚いたようだ。

「ひづる！私の映画に出てみるかい？」
沙希のほうを見て通訳の言葉を聞き、再びジョージを見て眼を輝かして頷いた。

「ひづる、君は英語が話せない。だから事故で障害をおって歩けない、話せないの

二重苦の少女の役が君だ。身体だけの演技だから難しいよ」

「やります！……やらせてください……」
やはり天才子役といわれる少女だ。演技に対する思いはとうてい普通の女優に持ち得ないものだった。

「よし、これでキャスティングに関して1つのハードルをこえたな」

「監督！……もう一つ、私あの女優と勝負をしたい」

「なに！……カオルとか……サキ、カオルの状態は？」

「ええ、赤ちゃんも首は据わったし、今年の暮から活動をはじめます」

「そうか、じゃあ来年がいいかな、一度カヲルに聞いてみてくれな
いか？」

「判りました、時間的に帰ってからでよろしいね」

「ああいよいよ。コーディネリア、私がメガホンをとれるかどうか判ら
ないがシナリオを書いてあげるよ」

「やりい〜」

コーディネリアが片手をあげた。ひづるの目には益々薫の顔が重なって
見える女優だ。

「さあ、お開きにしよう。明日は皆でテキサスに行くんだから遅れ
るなよ」

そういわれて笑顔で帰っていくスタッフ達、

「ねえ、ジョージ、私決心したの。ワシントンに行くことにしたわ」

「ほう、やっとかね」

「でも、サキの撮影が終ってからよ。私あの子の撮影をずっとみて
いたいの」

「マチルダ！君もか・・・ということかな」

「えっ？」

「ジェーンがいうんだよ。本編は絶対見るけど、撮影の過程も見て
いたってね」

「あのジェーンが？」

「そうあのジェーンがね。」

いつも本編さえみてれば撮影なんか見ることは無いっていつていた
くせにね」

「やっぱりママって言われたことが嬉しいのね」

「わしも嬉しいよ」

「パパって言われたの、そんなに嬉しいんだ」

「あたりまえだよ、死んだライアに呼ばれた気がしてね。」

ジェーンなんかニューヨークにいるの長女のジェシーを呼び寄せる
って今電話してるよ」

「ジェシー・・・久しぶりだね。もういくつになっただの？」

「ちょうど30だよ」

「結婚はまだでしょ」

「ああ、男なんかと行ってバリバリ働いているよ。
でもそろそろ転職しようかなって言ってるんだ」

「転職？・・・じゃあ、ちょうどいいじゃない」

「ああ、サキのワシントン事務所って言っていたね。でもそれは本
人次第だよ。」

「ふふふ・・・私予想できちゃっもんね。

ジェシーはテキサスからニューヨークに帰るときつと転職しているわ。

そして、来年。ジョージはお爺ちゃんになっているの」

「お爺ちゃん？・・・まさか・・・いやそれもありえるか・・・

いや、そんな期待をしてて外れたらがっかりだもんね・・・」

自分が言ったくせに、そんなジョージにあきれかえるマチルダ。

「ジョージ！あなたは本当にお馬鹿さん・・・でも応援してあげる」

「ジョージ！」

と電話を置いたジェーン。

「どうだった？」

「OKよ、最初は渋っていたけど、今仕事は暇だからって・・・」

「そんなに仕事が暇なのか」

「馬鹿ね、あなた。あの子のいつものことじゃない」

「いつものこと？・・・あっ、そうか」

「ねえ、なんなの？」

「いえね、マチルダ。ジェシーのくせなの。

最初は渋ってから言い訳するのは、物凄く興味を持った証拠。

全く素直じゃないんだから。誰かさんにそっくり・・・」

こんな3人以外、帰る準備が終わり・・・

サキはこの家のメイドたちとマチルダの家のメイドに囲まれて何か話しているし、

そのサキを目の端に捕らえてベスと一緒にマネージャーたちを捕まえて

薫の情報を得ているコーディネリア。

「薫姉さんってね、二重人格なの。演技しているときは惚れ惚れと

見てしまうのに

普通の際は馬鹿というか子供っぽいというか・・・このひづるが天敵なの、

ひづるがチクリチクリと苛めるんだけど、そのときは気がつかないことが多いけど

気がついたらひづるを追い掛け回してお姉さんに怒られてシユンとするくせに

お姉さんがいないと又、追いかけてこの喧嘩よ。どうして、あんなことするの？ひづる」

「だって、面白いもの。女優だから世間の常識知らないって言われるの腹がたつけど、

薫姉さんは天然よ。けれどお芝居をしているときはもう全然駄目！たちうちなんて出来ない」

「ねえ、さっきから姉さんって言うているけどなぜ？」

「私の場合は年を若く見せるため姉さんて言え！って言われているの」

「ほほほ・・・たいへんな人ね」

「そう思うでしょ。でもコーディネリアも薫姉さんと同じ匂いがあるもの」

「なんですって」

とまなじりをあげる。

「ほらその顔、ほんとうにそっくり・・・」

「えっ？本当？・・・」

と、とたんに柔和な作り笑顔をつくる。

「ねえ、カオルっていつ結婚したの？」

「結婚？・・・してないわよ、そんなもの」

「えっ？してないの？・・・じゃあ、父親って・・・」
困ったような顔をした瑞穂、ゆりあ、綾美、杏奈・・・でもゆりあは思い切って

ベスとコーデリアの耳を引き寄せて何事か話した。

「ええ〜」

と大きな驚きの声を出した二人、慌てて周囲を見渡したが皆話しに夢中で気がついていないようだ。

「それって、本当に本当のことなの？」

声を潜めて聞く。

「あたりまえよ、こんなこと冗談では言えないわ」

「じゃあ、あの人って・・・」

二人の耳に囁くゆりあ。

目をキラキラと輝かす二人。

「お二人さん、もう夢中じゃない」

そういうゆりあに

「あたりまえじゃない。こんなこと、私の人生に訪れた最大のチャンスだわ。で今何人の？・・・」

「ええ、9人のお姉さん達が出産したわ。もうすぐしたら6人が出産よ」

「じゃあ、あなた達は？」

「日本に帰ってからね」

「ふ〜ん、いいんだ」

「9人の出産だけど赤ちゃんは18人だからね」

「えっ？・・・というのは双子？」

「そう、しかもありえない筈の男女の一卵性双生児ばかりよ。

どうやら、昔からそうみたい」

「もう・・・わからない。ことばかり・・・あなた達一夫多妻制

?・・・」

「うちの一族ってそんな簡単なことばかりではないの」

「というと?・・・」

「こんなところで話せるような簡単なことではないわよ」

「うちには沙希お姉さんの子孫がいるわ」

「子孫・・・うん、わからないことばかり・・・」

「そうだ!私、急いで家に帰ってテキサスへ行く支度とお泊りの用意
してくるから」

「詳しいこと教えてくれる?」

「仕方ないわね」

「ベスはどうするの?」

「お泊りセットは車に用意してきたけど・・・そうだ、私も家に帰
って旅行の準備を加えてから、
タクシーで行くことにする」

「と言って二人、挨拶もそこそこに飛び出していった。」

「やれやれ、今日は寝れないね」

「綾ちゃん、先に寝てもいいからね」

「いいえ、私も詳しいことは聞いていませんので一緒に聞きます」

「じゃあ、ひづるだけ寝ちゃいなさい」

「待って、瑞穂・・・ひづる!今日は勉強する時間なかったよね」

「う・・・うん・・・」

「この旅行中に出していた宿題は?」

「ま・・・まだ、1ページも・・・」

「折角、最後の宿題と違って律姉がつくった宿題だからね。」

「今日寝る前に1ページだけでもしなさい。明日の朝、提出よ」

「うへえ、律ちゃん先生より厳しい・・・ねえ、瑞姉は?」

「残念でした。もう3ページ仕上げたからね」

「瑞穂！・・・偉そうなこといわない。今日見てみたら正解率60%よ。」

これからは80%の正解率とってもらうからね」

「みんな大変ね・・・」

と思わず言ってしまった綾美にゆりあはジロリと見つめて

「綾ちゃん！・・・あんたも他人事ではないはずよ。」

日本を出るときに言ったわよね。今度帰ってくるときには日常会話が出来るようになってますって。

でも日本を出てから綾ちゃんを見ていたら、

普段でも少し引つ込み思案なのに益々その症状が酷くなっているわよ。

ここには先生が一杯いるし、恥ずかしがらずに話し掛けたらきつと話せるようになるから・・・」

「あつ・・・はい・・・」

「凄い！・・・ゆりあ先生、律ちゃん先生より怖い！」

「私だつて必死なんだからね」

「は〜い」

そんな様子をニヤニヤ笑うのは何の心配もない杏奈だ。

その夜、沙希は帰ってきてから防犯システムを取り替え調節も全て終えてから

2階の自分の部屋に引つ込んだ。さすがに昨日からの事件やパーティーで慌しく、

明日のことを考えれば早く寝たほうが得策だった。

1階はコーデリア・ビーナスとエリザベス・ターナーが来たことでマチルダを含めて瑞穂、ゆりあ、綾美、杏奈とで何かを話しているようだ。

ひづるは沙希の隣のベットですでに寝てしまっている。

沙希が見ているとひづるは子供なりにけっこう気を使っていたようだったが
映画出演が決まった今、女優としての心構えが復活したようで何か嬉しい。

「そうだ」

とベットから起きだしてモバイルを持って廊下に出た。

廊下の端に行つてモバイルを起動させる。

「薫姉・・・」

「沙希ちゃん！・・・どうしたの？もう寝る頃じゃないの？」

「ええ、これが終わったらもう寝る」

と言つてから、

コーデリア・ビーナスがあのだらまのビデオを見てから 薫に挑戦してきたのを話した。

「コーデリア・ビーナス・・・聞いているわ。

ハリウッドの天才女優・・・ふふふ・・・相手に不足はないわ。

沙希ちゃん、その勝負受けたつと言つて頂戴！

来年なら私の体調も復活よ。それにルーク監督のシナリオなら文句は無いわ。

誰がメガホンを握つても負けないわよ。そうそう、沙希ちゃんはどうするつもり？」

「私？わたしは二人の邪魔をするつもりはないわよ。出演はしません。

そのかわり、スタッフとして映画に参加しようと思っているの」

「本当？」

「ええ」

「なんか、めっちゃくちゃ楽しみ・・・」

「よかった、じゃあ、ジョージにそう伝えておくからね。・・・薫姉・・・」

「何よ・・・」

「愛と博士は元気？」

「ええ、元気よ。今菊野母さんが来てくれているの。」

置屋は花江ちゃんに任せて安心だからって・・・」

「ごめんね、こんなとき皆に子どもを任せてしまって・・・」

「何をいうの、私達沙希ちゃんの子供を産む事が出来て凄く幸せなのよ。」

人生こんな幸せはないわ。それに沙希ちゃんが世界に出て行ってくると私達の自慢なの。」

自慢の可愛い旦那さん・・・だから、がんばって・・・」

「うん、わかった」

とっても嬉しい激励をもらった沙希、ベットに入ったとたん睡魔に襲われて眠りに入ってしまった。

ロサンゼルスからジョージの持つ専用機でテキサスに向かった一行、

ようやく牧場上空に差しかった。

「ねえ、下に見えるテキサスのこの広大な土地が全てパパのものなの？」

沙希が聞く

「ああ、そうだよ。これから着陸する飛行場もすべてさ」

「うわあ〜〜凄い！・・・この牧場にいる馬って多い？」

「そりゃそうさ、馬も牛もこの牧場に見合う数はいるよ」

「その中で私専用の馬をみつけるのよね」

「ああ、すぐリタイヤしてしまうような馬では駄目なんですね」

「ねえ、沙希姉さん。私も馬に乗りたい」

「いいよいいよ、ひづるもいづれ馬に乗る役がくるだろうからね」
ルーク監督も今回のひづるの役では出来ないがいづれはと思っ
ている。

「やあ、アン！」

「お帰り、ジョージ」

「アン！紹介するよ。サキ・ハヤセ・・・スクリーンネームはアキ
ア・ヒノといって

今度の映画に主演するんだ」

「へえ、ジョージが夢中になっているって女優さんね。でも少し小
さいんじゃない」

「といって取り付く暇もない。何か機嫌が悪そうだ。」

「パパ、早く馬が見たい」

「ああいいよ。厩舎はあそこだから」

サキにそう言ってジョージは他の皆を連れてに家に向かった。

厩舎に入ると若い牧童達がニヤニヤ笑ってサキを迎えた。

「ちょっと馬を見せてくださいね」

「といって牧童達にいうと

「どうぞどうぞ」

とニヤニヤ笑いは止めない。

馬を見ながら厩舎の奥に移動するがこれといった馬がない。

影のように寄り添う巨漢の牧童・・・一番柄の悪い奴だ。

奥の薄暗い馬房の中をチラと見た瞬間、背後から襲ってきた牧童を
一瞬にのってしまったサキ。

その巨漢の襟首を片手で軽々持ち上げみんなのところに戻る。

薄暗い中から出てきたサキにニヤニヤ笑いが凍りつき真っ青になつていく。

アンもすべてを見ていたのでもう啞然としている。

腕っ節で鳴らした男だ。それを気絶させ、しかも150kgはゆうにある巨体、

それを片手で軽々と持っているのだ。あんな小さな体で。

「サキ！どうだった？」

「パパ、この男が指示していたわ」と干草の上にドーンと放り出した。

「どうということなの？」

とアンがジョージに説明を求める。

「この間から頻繁に馬泥棒にあつていただろう。だから犯人を見つけてくれるようサキに頼んだんだ」

「えっ？この人に」

まだアンはあきあに対して何か偏見を持っているようだ。

「こんなことつてサキしかできないわよね」

「残念だけど私、管轄外だから逮捕ができない」

顔を覗かせたのはコーデリアとベスだ。その後ろからは瑞穂達やスタッフ達がいる。

カメラマンはどこかでこの様子を撮っていたのだろう。

いないのはジェーンとマチルダ、それとメイド達だ。

「アン！サキにはね凄いパワーと真実を見抜く鋭い目を持っているんだ」

「凄いパワーと鋭い目？」

思ってもいない言葉がジョージから聞くがアンには不可解な言葉。

「パパ！ 私はただパパに頼まれたからだよね」

「そうだよ、サキ」

「だから、私のことを言うのはもうよして！」

「ごめん！もういわないよ」

その時3人の牧童が傍にいた馬に飛び乗り逃げ出した。

そんなこと、牧童の目の動きからサキにはとっくに判りきっていた。

「パパ！馬と鞭を借りるね」

「あつ！その馬！一番足が遅いのよ」

と叫ぶアンに

「大丈夫よ、アン。見ていてくれる？この馬の隠れた能力を見せてあげる」

といって馬の後ろからすつと飛び乗りそのまま立ったまま手綱を持つ。

立ったまま馬に乗るなんてまるで曲芸師だが、サキは凄いスピードで馬を走らせていく。

まるで宙を飛ぶように。

あきあの鞭が唸った・・・これは馬に対してではなく卑劣な馬泥棒に対してだ。

「凄い！あの子があんな早く走るなんて・・・私の目って節穴ね」

車の中でアンが叫んだ。勿論スタッフはサンプルを開けて撮影を開始している。

「あつ！飛んだわ」

後部座席にいたコーディネアの大きな声だ。全く信じがたい光景だった。

その瞬間、牧童達が馬の上から落とされていたのだ。

「サキ！」

「パパ！・・・この子本当に凄い子だわ。素直だし、調教をつめば

ビッグタイトルも夢じゃあないわ」

「だったら、サキの専用にすれば」

「いいえ、私どうしてもあの一番奥のあの子にもういちど逢いたい。ねえ、いいでしょ」

「ああいいけど、……一番奥といえば……」

「レッドのことよ」

横からアンが口添えする

「レッド？」

「うづん、仮の名前よ。癪症で手のつけられないじゃじゃ馬娘。

だからこの先どうしようか決め兼ねているところなの。

「……ねえ、私もそばで見えていい？」

「いいわよ」

結局、馬泥棒を警察に引き渡す時捕らえた肝心のサキは

電球1個の薄暗い馬房の中でレッドと語り合っていた。

それをじっと見つめるアン、そのそばにはコーデリア、ベス、瑞穂、

ゆりあ、綾美、杏奈、ひづる……それに、ジェーンとマチルダま
でいる。

勿論撮影は続行中だ。

「ジョージはこんなところも撮るの？」

不満を訴えるアンだが

「サキのすべてを撮るのが私の使命なんだ。

実はサキ達をどうして日本まで迎えにいかなかったのか、
悔やまれて仕方ないんだ」

「えっ、どうして？」

「だって、あのホノルルでの飛行機事故……」

「まさか……あれって……」

「そうだよ。解決したのはサキなんだ」

「そんなあ・・・彼女って神？」

「ああ・・・神から力を授けられているただ1人の人間かな。

それに彼女は超天才でもあるんだ。あの有名なソフトは知っている？」

「勿論よ、私も使っているわ。えっ・・・まさか・・・」

「そう、彼女が作ったんだ。そしてこの飛行機事故でも活躍したモバイルも・・・」

「一体どうなってるのよ」

「だからだよ、こうして一瞬も気をゆるめないうで撮影しているんだよ」

「わかったわ。あんな大きなことが出来るサキが、馬1頭の為に何が出来るか、

最後まで見届けてやるわ」

といてこうして馬房の中のサキとレッドを見つづけて3時間、ひとときたりともあきはこない。これはもう立派な映画にさえなっていた。

アンも知っている天才女優のコーデリア・ビーナスも

その目を大きくして一瞬も見逃すまいと必死で馬房内を見つめている。

最初は馬房内を暴れ回ったレッド・・・サキは怖くないのだろうか平然としている。

おまけにレッドはサキを傷つけようとはしなかったし、次第におとなしくなっていた。

壁際にもたれて立てた膝に頬をおきながら、・・・例えば

「ねえ、お母さんに逢いたい？・・・いいわねえ、レッドは。

私はねえ、本当のお母さんに捨てられちゃったのよ」

サキの光る涙をレッドがぺろりとなめ取る。

「あつ、ごめんね。この話をしちゃうと涙がとまらないんだ。でもレッド、私恨んでなんかいないわよ。ここまで育ててくれたんだもの。感謝でいっぱいだよ」
と喋ってグスンと鼻をすすする。

見ている女性達の目からは涙が止めどもなく流れている。隣りではゆりあがサキの英語を訳している。

馬との会話・・・実際にやっていたかどうか・・・でもレッドが身に受けた怪我とか毎日の行動を、言葉にするサキ。すべて本当のことだった。これって・・・

「えっ？・・・今朝、お母さんの声を聞いたの？哀しげな泣き声？・・・」

うん、わかった。私は絶対にお母さんを見つける・・・」
と喋って九字を切る。

アンには東洋の不思議な魔術にしか思えなかったが・・・

「『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』」
と九字を切り

「ナウマク・サマング・バザラ・ダンカン」

真言を唱えると小さな光の玉が4つサキの体の中から飛び出し体中を飛び回っていたがやがて着物姿の女達3人と大きな白虎があらわれた。

「玉藻、葛葉、紅葉・・・そして白虎丸。聞いてのとおりじゃ。急ぎこの馬の母を捜して欲しい。どうも気になる。」

馬の聴覚はどのあたりまで聞こえるのか判らないが・・・」

「はっ、主殿！」
喋って消え、光の玉が外に飛び出していった。撮影隊も光の玉は追うことはできぬ。

驚いていたのはアンだけではない、初めて式神を見た女性達だ。

撮影隊のスタッフ達は慣れているので驚きはない。
茫然自失・・・心ここにあらず・・・という女性達。

「何よ・・・あれ・・・何なのよ・・・」

コーデルリアの声だ

「式神っていうの」

ゆりあが女性達に説明する。

「式・・・神・・・？」

「ええ・・・日本古来からある術・・・西洋でいう魔術かな・・・

鬼という化け物をまだ小さな時から捕まえ、服従させ・・・そして成長させるの。

今の3人は今から約1000年前に安倍晴明という日本最大の術師が育てあげて

サキが受け継いだの。勿論日本古来の術といっても使えるのはサキただ1人よ」

「あなた達、こんなの見てよく平気ね。私まだ足がガクガクしているわ」

「慣れているもの」

「慣れているったって・・・」

「あの子とても優しい子よ。人が大好きなの。でも悪に対しては容赦しない。

だから体が最初に動くの。

いつも事後承諾で私達ハラハラしどおしよ。

コーデルリアもベスも昨日からサキのある一面を見てきたから少しはわかるでしょ」

「私にはサキの心は良く判りますよ」

とジェーン。

「私もよ。サキは優しすぎるの。身体が最初に動くっていったわよ

ね。

それは女性達に余計なもの見せたり聞かせたりするのが嫌だからじゃないの？

嫌だからこそ出来事を収めてしまっただけ見せないのよ」

ゆりあから通訳を受けた瑞穂、

「あっ！」

と声をあげた。

「マチルダの言うとおりかもしれない。

沙希って、何もかも終わった後報告をするでしょ。

そのときお姉さん達に叱られても『ごめんねさい』って謝るだけで1回も言い訳したことがないわ。

あれって私達に嫌な思いをさせない為じゃないのかなあ」

「私も・・・私もそれならわかることいくつもある」

という杏奈・・・ゆりあはそれを女性達に通訳する。

「そうでしょ・・・本当にあきあの優しさって素晴らしいわね」

「とても信じられないけど、彼女の優しさって馬にも判るのね。だってあんなこと出来るはずないもの」

目の前の馬房の中がすっかり様変わりしているのだ

干草の上に横たわるレッド、その鼻っ面のところにサキも仰向けに横たわっている。

「馬はね、とても警戒心が強くて臆病な動物なの。

それなのに会ったばかりのサキに対して、

あんなあけっぴろげな態度をするなんて常識ではとても考えられないわ。

例えば、馬と話が出来たとしても、心が通じたとしても、判り合えなければならぬの。
そんな多くのハードルをこんな短時間に超えるなんて・・・奇跡としか言えない。
神?・・・そうあきあが神なら判る気がする」
なんか言葉の端々にあきあが出てくるアン。アンの行く末は・・・判りきつていることだ。

「疾風?」

とそんな名前がポツリとあきあの口から洩れる。

「レッド!・・・ハヤテ・・・これがあなたの名前よ。いいでしょ。アン!」

「ハヤテ?おかしな名前ね。まるでインディアンの名前みたい。どんな意味があるの?」

「アン!・・・アメリカのインディアンはね、昔々日本からやってきたという説があるの」

「へえ・・・それで?」

「ハヤテは、疾風怒濤という言葉に出てくるんだけど、凄まじき風が通り過ぎる様を表しているの」

「ふうん、風があ、レッドが待っていたような名前ね・・・いいじゃない」

その時、

「主殿!この先の谷底にこの母馬らしき姿が・・・」
という声が聞こえてきた。

「何!」

とって立ち上がるサキ。

「ハヤテ！行くよ」

と馬房から馬を出す。遠くから見ていた牧童達も少し後ずさったが「皆も来てくれる？」

という言葉に頷くと自分達の鞍を取りに走った。

「サキ！鞍は？」

「いらない！」

と行って裸馬のハヤテの上に跨った。

「さあ！いくわよ！」

と馬に乗る牧童達に声をかけると走り出した。

女性達は車に走った。

「凄い！……さつきも凄いと思ったけれど鞍もつけずに裸馬であんな走らせ方をして……
どちらも信頼しないと出来ないわ」

一方

「恐ろしい女だな」

「ああ……俺達をこんなに引き離してしまうなんて。しかも裸馬だぜ」

「俺達には無理だ……次元が違う」

牧童達はあきあきを追いながら話をするがもう完全に息が上がってしまっている。

「もう駄目だ！」

速度をゆるめる牧童……

「あの女……化け物だ」

恐れるが故に敬う……彼等にはサキは伝説のヒロインとなった。

西部開拓以来現代にあらわれた英雄としてこれから彼等によって語り継がれていくだろう。

「ジョージ、もう私・・・彼女についてなにもいう資格はないわ・・・でも・・・」

「おっと・・・アン！それをいっつこなしだぜ、ここを止めるってことは・・・」

「だって・・・私・・・」

「いいや、君には大事な仕事がある」

「大事な仕事？」

「ああ、彼女に付いてきたマネージャー達、何も女優だけのマネージャーではない。

・・・さきほどいったね。あきあはコンピューターソフトを作った天才と」

「ええ」

「明日、ここに大勢の合衆国の重要人物が押しかけてくるんだ。

本当はホワイトハウスでする予定だったんだけど、今は物騒な世の中だ

急ぎよここに場所を変えた。アン・・・ハリーもくるんだ」

「えっ！大統領も・・・」

「ああ・・・だから警護の軍隊もくる」

「凄い！・・・それもサキに逢いに・・・あっ・・・あそこ
にサキが・・・」

分かれて乗った女性達も車の中から必死にサキを目で追いかけていた。

車を崖淵に寄せると沙希の傍に近づく、牧童達が恐々と崖から下を

眺めているのに

沙希は平然とギリギリに立って下を見ているのだ。

「沙希！……」

「アン！……遅かった。もうハヤテの呼びかけにも何も答えな
い……」

沈んだ声でいう。

「あいつら、ここまで執拗にハヤテのお母さんを追い詰めたの。許
せない……！」

「旦那、あつしらロープをとってきやす」

「待て！……そんなもの何もいらぬ……サキ！」

沙希は頷き、傍にいた綾美に

「綾姉……これを……」

と鞭をわたすと、このきりたった崖から飛び込んだ。

一瞬ドキッとした女性達だが、大きな声をあげたのはアンだけだ。

「あつ！……サキ……」

「ねえ！……ジョージ！これ、どうということなの？」

アンはジョージの腕を持って何度も振りつづける。

「アン！……落ち着くんだ。ジェーン！アンを頼む……」

「アン！よく見て！他の女の人は皆落ち着いているでしょ」

「私！……よく判らない……」

一時的なショックだろう。

「アン！……ほら、あがってきたわ」

「えっ？」

崖の下から光が上つて来る。

体から光を発した沙希が3人の女と1匹の白虎が囲んだ1頭の馬の

屍を

崖から離れた平地に横たえたのだ。

「では、主殿！」

といって4つの玉が沙希の体に消えていった。

何も知らぬ牧童達、もう腰が抜けてしまったように座り込んでいる。

一方ハヤテは母の亡骸を前にして

「ヒヒーン……」

と一声いかなかっただけで、あとはまるで子犬のように母の亡骸に鼻ずらを押し付けているのだ。このあまりの光景に涙が流れてとまらない。

発光をつづける沙希はずっと般若心経を唱えていたのであるが、ここぞと真言にきりかえる

「オン・アブラウンケン、オン・バサラダト・バン。

オン・アミリタテイゼイ・カラ・ウン。オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ。

マカボダラ・ダラマニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン」

するとどうであろう亡骸も光だし、輝く光の粒子の中で亡骸が消滅した。

残ったのは変わらず光り輝く沙希とその手の平に浮かぶ小さな玉・

「ハヤテ！これがお母さんの魂よ」

という玉がハヤテの回りを飛び回る。

「ハヤテのお母さん……とっても嬉しそう」

と声にだしたひびくるの感想があたっているようだ。

我が子の無事を知って喜ぶ母・・・。
やっと沙希の手の平に玉が戻った時、沙希はまだ明るい空に向か
って叫んだ。

「野分~~~~・・・・・・」
その声は天に届いた。

『シャン・シャン・・・シャンシャン・・・』
と鈴の音をさせて1頭の真っ白な天馬が降りてくるのだ。

「ひえ〜・・・ありやペガサス・・・」
まったくありえないことなのだ。

沙希の横に舞い降りたペガサスは沙希に鼻ずらをこすりつける。

「野分！この間はあるがとうね」
沙希がいうが、さすがにこの状況ではいくら慣れたといってもマチ
ルダ達は

沙希の全てを知っているわけじゃない。

落ち着いていたのは日本人とミランダ達だけだ。

アメリカ人の女性達、胸で十字を切ったり、手を前で合わせている。
そんな状態でゆりあの通訳を聞いているのだ。

「ふふ・・・くすぐったいわ、野分。・・・でもね、そんなに頻繁
に呼ぶことできないから・・・」
わかったわかった・・・じゃあ、次回からそうするわ」
それを見ていたハヤテ、嫉妬したのか自分も野分の間に割って入っ
て沙希に鼻ずらをこすりつける。

天馬と現実の馬にこうせまられて戸惑う沙希。

「もう・・・あんた達、いい加減にしなさい！」

と沙希に叱られてしょぼんとするが、ライバル現ると思ったのかし
きりにハヤテを気にする野分。

「野分！あなたが生きていたのは1000年前、今は天上でのお役目、
ハヤテは現世にいきっているんでしょ。そんなあんた達が喧嘩してど
うするの！」

見ているこちらが噴出しそうな喧嘩の仲裁。

そんな言葉につい『プツ』と噴出してしまふ。

他の者達も通訳されたこんな言葉にホツと身体力が抜けてしまふ。

「ねえ、聞いて・・・野分、これはあなたのお役目なのよ。この魂
はこの子の母親なの。」

この子を守るために人の目をひきつけてここまで逃げてきたの。

人の手によって殺されたようなものよ。でも母は我が子の無事だけ
を喜んでいるの。」

野分、天に連れて行ってあげて・・・お願い・・・」
大きくいくども首を振る天馬・野分。

その目から出る光線を受けた母の魂、その姿も又、天馬となって出
現したのだ。

母にすがろうとするハヤテ、でももう触れることはかなわなかった。

『クーン』と泣く我が子に大きく首を振って、右足で力強く地を蹴
る母の天馬。

元気でいなさい、天からいつも見守っていますよ。そして、この人
に一生ついていきなさい。

こうして2頭の天馬が天上にかけのぼっていく。こんな光景一生見
られるものではない。

なのに、よく落ち着いてこの光景が見られるものだ。

でも彼女達の目から涙が流れているのを見つめると
アンの理不尽な腹立ちは自然と消えていく。

沙希は崖に立つて遥か下から吹き上げてくる風よ天まで届けと言っ
ように

『緋龍丸』を口に当てた。素晴らしい音色が天に上っていく。

これは娘を守るため命を落とした母馬への鎮魂の曲なのだ。

アメリカの女性達にとって生まれて初めて聞く日本の横笛だけれど
音楽には国境はない。

その素晴らしさが判るのだ。

そしてこの吹き手のただ事ではない才能が・・・

「ねえ・・・パパ！」

「なんだ、サキ」

「ここからしばらく行ったところに直径6mほどの丸い岩があった
でしょ。・・・あれ何？」

「さあ、西部開拓以前からあったみたいだったけど・・・それがど
うしたんだい？」

「あの岩に蹴りをいれてもいい？」

「蹴り？・・・蹴りつて足で蹴るアレかい？」

「ええ・・・実を言うと私の心の奥の奥で黒い炎がちよろちよると
燃えているの。」

このままにはしておけない、早く消さないと取り返しがつかないの

「黒い炎？・・・それは馬泥棒のことかい？」

「ええ、それもあるけど、あの飛行機事故を仕組んだ自爆テロのこ
とも・・・」

自爆テロというけれど自分で死を選んだ以上行くのは地獄、ある宗教は殉教は天国にいけると間違った解釈をしているの。自爆テロは何も知らぬ人を巻き添えにした自殺ではなく殺人そのもの。

そんな殺人者が天国にいけるわけがない。

だからそんな人は今ごろ無限の苦痛の続く地獄で苦しみつつづけているわ。

そんな教えを説いた宗教家達も・・・」

「そんなこと、いつも考えているのかい？」

「私、宗教家ではないわ。そんなものになろうともおもわない。

でも人って弱いもの。なにかにすがりついて生きていくのが人なの」

「わかったよ、好きにすればいい」

「本当？」

「つていつてから30分もしないうちに準備ができた。

あともう少しすればこの薄暮の中照明がなければ撮影出来なくなる。

『監督！こちら準備OK！です。・・・Qをもらえますか』

無線からスタッフの声が聞こえる。あの大岩の横45°地点に

カメラマンや大勢のスタッフに囲まれて日本とアメリカの女性達や牧童達もいる。

「ようし、10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・

5・・・

4・・・3・・・ハイ！スタート！」

右後方から土煙がこちらに向かってくる。

「あつ、あれは・・・」

沙希は馬上でじっとしてはいなかった。

まさか……馬上で体操競技のように自ら回転して岩に近づいていく。

「ハア~~~~」

という声でハヤテを飛び越え

「トオウ……リヤ~~~~!!」

という気合で蹴りを入れようとしていた。

『ドォーン!!』

地響きのような凄まじい音が監督達の位置まで聞こえる。

「えっ?……『ドォーン!!』だって?」

と顔を見合わせるスタッフ……

ハヤテの手綱をひきこちらにむかってくる沙希。そして大きな声でこういったもんだ。

「あ〜っスツキリした!!」

その声でか、あんな大きな岩の塊が土にというより芥か埃に姿を変え、

そこにはもう何も残っていない。

沙希を迎えたスタッフ達、恐れというものを越してしまつて

沙希の最後の言葉に対する可笑しさのほうが強まって大声で笑っている。

「もう……無茶苦茶ね……」

アンにしてもそれしかいう言葉がみつからない。

「あきれるっていつてもいいけど、何かたまりにたまつたうっぷんが爆発したって感じね

。でも・・・ハデだわねえ」

「コーディネアが言う。」

「こんな凄いこと。人間がやれるって範囲を超えているわ。」

「この間、サキはこの地球上で一番強いって言っていたけどこれで実感できるわね」

「マチルダ！・・・これを見てあきあの怖さがぶり返した？・・・」

「

「いいえ、こんな常識離れの力見せられても、一欠けらもそんな思
いないわ。」

「どうしてかしら？・・・」

少し戸惑うマチルダにジェーンが笑顔で

「ねえマチルダ、皆も・・・あきあのこんな人間離れのした力、い
ろいろ発明する能力、

空を飛んだり、拳銃の玉を止めたりの凄い力も、彼女の一部でしか
ないのよ。」

「彼女の最大の武器って判る？」

「ゆりあが口を開きかけたが、ジェーンが『シッ』と口を封じる。」

「貴女達には判っているわよね。だから今は・・・ね」

「ジェーン、私には判っているわよ。判っているから怖さなんか感
じないの。」

「最初の怖さはサキのこと全然知らなかったからね」

「OKよ。マチルダ」

「私も判っているわ、ジェーン。あんな誰にも到達出来ない凄い演
技力、

あれがあるからよ。だから、あきあは人間が大好きなのね」

「ジェーン、私もよ。マチルダのところであんなことがあったあと
何時間も経たないうちに『防犯システム』という私には今世紀最大
と思ってるけど」

そんな発明したのもこれがあるからよ」

「私達もですよ」

とミランダ。SPとして沙希に影のようについていたが今、やっと落ち着いて沙希を見守れるようになったがまだ肩で呼吸をしている。

「私達、日本で味わってますからね」

「じゃあ、あとはアンだけね」

そのアンにコーディネリアが助け舟をする、

「アン、あの馬房でのあきあの姿を思い出しなさいよ。

人と馬とのつながりは誰よりも貴女が敏感なはずよ」

うーんと考えこむアン・・・でも何か気がついたのか『優しさ・・・』と口につく・・・

「わかったようね、そう優しさなのよ。

平凡な言葉だけど常に優しさを持つて出来ることじゃないわ。

でもサキは違うわ。常に人に対する優しさを持っている。そんなのつて出来るわけないわ」

「だから、わたしも常識にかからない力を見せられても怖くはないの。

いつもサキの心にあるのは優しさだもんね。

日本の家族達はあの力の元は優しさだつて信じているんだつて・・・

「

「今日、なんだか私、人の見方が変わった気がするの」

「だからよ、だからあなたの力が必要な・・・」

そうゆりあに言われたアン。

「わたしの力つて?・・・」

「私達、沙希を中心に集まった家族なの。血のつながりなんて関係

ないわ。

でも、私達、沙希の一挙一動にハラハラしているのは確かよ。
だから、沙希がこの先どういう行動をするのか見守っていかなければならないの」

「判ったわ、私が入っただけで何が出来るかわからないけれど・・・

」
「そんなこと、気にする必要はないわ」

「もつと彼女の事教えてくれる？」

「いいわよ」

とそつと肩に手を置くと皆も寄ってきた。

広大な土地にある、大きな屋敷、帰ってくるとメイドが迎えた。

マチルダのメイド達も手伝っているようだ。

「ごめんね、サキについていたらこんな時間になってしまったの」

「いいえ・・・あのう、ジェシー様が帰られました」

「えっ？もう帰ってきたの・・・」

と小走りに2階が上がっていくジェーン。

「旦那様！日本からたくさんのお荷物が届きました。それからお客様も」

「ワシントンからコトミ・イシカワという若い女性も来られています」

「わかった！」

といつてからジョージはスタッフ達に振向くと

「皆にはいつもの部屋が用意されている。取り溜めしているフィルムはあとでチェックする。」

「食事が用意できたら呼ぶからそれまでゆっくりするといい」といつてから女性達には

「さあ、お嬢様方はどうぞ」

と屋敷内に案内する。

居間で出迎えたのは笑顔の見知った顔、静香だった。

「静姉！」

とその胸に飛び込む沙希。

「沙希ちゃん。外国へ出た早々、凄い活躍だったわね」

「えっ・・・でも・・・あれは」

「いいのよ。わかっているから・・・でも凄く心配しちゃった」

「ごめんなさい」

「でもねえ、詳しく伝えてくれる人達がいたから、安心したのよ」

「詳しく伝える？」

「ええ、さあ入っていらっしやい」

と声をかけると隣りへのドアが開いてニコニコ笑いながら緒方翔・弓の双子姉妹が入ってきたのだ。

「翔！弓！」

と二人に抱きつく沙希。

「沙希ちゃん！翔ちゃんね、今では早乙女薫事務所の東京の海外メ
ディア担当なの」

「えっ？じゃあ・・・」

「帰ったその日に航空会社を退職しちゃった。沙希がこれからどんなものを開発してもいいわよ」

「まあ・・・嬉しいわ」

「弓ちゃんはね、臨時だけど翔ちゃんの補佐なの」

「沙希！ほんとうはあんたのそばにいたいんだけど、

この手でジャンボを飛ばせて見たいという夢は捨てられないの、だから少し待っててね」

「何をいつてるのよ、弓は夢を追うべきよ」

「ありがとう、そのかわりその他の時間は早乙女事務所の臨時社員

「よ」

「だってそんなこと・・・」

「いいの、これはうちの会社の上の意向でもあるの」

「上の意向？」

「ええそうよ。早瀬沙希が新しいものを開発したらいの一番にしろせること。」

つまり態のいいスパイよ」

「スパイ？・・・弓が？・・・うふふふ・・・」

「もういやになっちゃうな。そんなに笑うことかな」

「それが沙希だからよ」

「そうだそうだ」

という声が隣りの部屋からした。

「泉姉！・・・京姉！・・・」

入ってきたこれまた双子に飛びつく沙希！

「泉ちゃんと京ちゃんはFBIの研修なの。明後日からニューヨークよ」

「また沙希ったら、はでなことやらかしてさ」

「ほんとう肝を潰したよ」

「そうか、警察庁に入電が一番早かったんだよね」

「だから、母が真っ青な顔で知らせてきたんだ。」

そのときは機体が行方不明のときだったから・・・あのとき異空間にいたんだろ？」

「そうなの。異空間の中でホノルル空港に着けようとしていたの」
「でも無事でよかった。・・・」

そうそう、希佐がもうすぐしたら休みに入るのでこちらにくるそう

よ。

社会勉強と英語の実習をかねて」

「本当？・・・大歓迎よ」

「こら！ひづる！・・・」

といわれて飛び込んでくるひづる。

「京！泉！・・・私ね、沙希姉さんと同じ映画に出ることになったの」

「やったじゃない」

「うん」

「さあ、最後の一人よ。・・・入っていらっしやい」
ドアが開くと

「まあ、琴美ちゃん！」

と綾美がとんで行った。

「琴姉！」

と沙希も琴美に抱きつく。

「なんだか壮観だわね、双子が3組だなんて」

「でも、皆初めて会ったのにそんな気持ちがないのはどうして？」

「そうよね、私もそう思うわ」

話し合うアンとコーデリアとベス。

「さあ、沙希ちゃん。私達の新しい姉妹を紹介してくれる？」

「えっ？静姉、わかるの？」

「そりゃわかるわよ。皆同じ目をしているもの」

「やっぱり静姉ね」

紹介の間、お互いなんだか照れくさそうな顔だ。

ベスは双子の京と泉が同じ警察と聞いて他人とは思えない。二人が

FBIに研修に来たと聞いて

「羨ましい・・・」

と呟いたバス、それを聞きとがめた京と泉

「バス！今羨ましいといったね」

「ええ、言っただわよ」

「私、四六時中沙希についていられるあなたの方が余程羨ましいわ、ねえ泉」

「そうよ、日本にいてもそんなに長くそばにいられないわ。沙希ってとんでもなく忙しいもの」

「ほんとに?」

「そうよ」

「コーデリア・ビネス。日本でも貴女の映画はよく見ていたわ」

「ありがとうっていふべきかしら」

「その、悪ぶって言う口ぶりって本当にそっくりね、薫姉さんと・・・」

「カオルと?・・・」

「そうよ、演技で勝負はいいけど普段では喧嘩しないでね。姉妹なんだから。コーデリア・姉・さ・ん」

「姉さん?」

「そうよ、国籍は違うけれどここにいる皆、家族なの。・・・わかるでしょ」

「家族・・・」

と言いながらも唇がぶるぶると震えだした。

そして手で口を押さえながら部屋を飛び出していく。

「翔ちゃん!」

頷いた翔が後を追いかけていく。

「あなた・・・」

ジェーンが部屋に入ってきた。後ろに背の高い女性がついている。

「パパ！」

その女性がジョージに抱きついた。

「ジェシー！・・・よく帰ってきたね」

「ええ、ここにくるの久しぶりだわ」

と言ったが、大勢の女性達の姿には戸惑っている。

「わしがジェシーを紹介したいが、どうも男のわしには居心地が悪いんだ。」

すまないがスタッフの所に言っているからジェーン後を頼む」
と言って部屋を出て行った。

「ふふふ・・・あの人らしいわ」

といつてから、皆のほうに振向く。そして

「サキ！・・・いらっしやい」

とんできたサキに

「この子は・・・」

というジェーンを

「ママ・・・いいの。お帰りなさい、ジェシー姉さん」
と言ってから抱きついた。

ジェシーにとっては思わぬ出来事で身体が固まったように動かない。

ママのジェーンが言っていたサキはこんな子なのか・・・

パパが追いかけていた女優はこんな子なのか・・・

私より全然小さいのに何？この存在感は・・・圧倒される。

ニューヨークでキャリアウーマンとして働いてきて

いろんな大会社のオーナーに会ったがこんな迫力のある人は一人も
いなかった。

こんな小さくて幼い少女なのに・・・

こうして、目の前の私に微笑みかけるその表情にフツと既視感が芽

生えた。

何だったんだらうと目を閉じて自分の心を覗く。すると『姉さ〜ん・・・』という声とその微笑と共に蘇ってきたのだ。

死んだライアの顔がそこにあつた。でも、その顔が目の中のサキと重なり合い

ふっ消えてしまいサキの顔になってしまった。それからはいくら思い出そうとしても出来ない。

死んだはずの妹のライアがサキとして生まれ変わったとしか思えなくなつたのだ。

サキが飛びついてその口にキスしたときはそんなときだ。

ふんわりと温かいものが口の中に入ってきて、それ以外のものが口から入っていき身体中に広がる。

いきなりだったので驚きもあつたがそれ以上に身体が自由が利かなくなつて、

腰から落ちていく、でもこんなこと慣れつこの瑞穂やゆりあ、さつと椅子をジェシーの身体の後ろに置いたのだ。

椅子の上で元気に飛び起きたジェシー。身体中に満ち溢れるパワーに目を真ん丸くして

「どうして?・・・」

「ね、驚くでしょう。沙希ちゃんのキスの効果」
いない翔の代わりに弓が通訳する。

「どうしてか不明なんだけど、沙希ちゃんとキスをするるとどんなに疲れていても

凄い元気をもらえるの。だから私の会社の女性達も沙希ちゃんとのキスを楽しみにしているわ」

「姉さん、紹介するね……………」
と皆を紹介した沙希。

「ねえ、姉さん。お仕事代わるの？」

「誰に聞いたの？」

「パパとママが話しているの聞いちゃったの」

「実をいうとね、もう辞めて来ちゃった」

「えっ？…もう辞めちゃったの？」

「うん、もう今の仕事は引き際になって思ったの」

「ジエシー…あなたそれでいいの？」

とママのジエーン。

「うん、しばらくは自分がこれから何をしたいかよく考えてみる」

「ねえ、ジエシー。あなた、明日の会議に一緒に出てくれない？」

静香が弓の通訳で言う。

「会議？…会議って？…」

「沙希ちゃんが開発したり、発明したものをNASAやペンタゴンが直接本人に話を聞きたいって言うてきたの」

「えっ？それって凄いことよ」

「それに、アメリカやヨーロッパの各航空会社のトップが集まるらしいわ」

「まるで国際会議じゃないの」

「そう思うでしょ。おまけにね、ホワイトハウスからトップがね…」

「」

「ホワイトハウスのトップ？…まさか大統領が？」

「そのまさかよ」

「それって、皆サキに会いにくるっていうわけ？…」
まじまじと沙希をみてしまう。

そんな凄い子が私の妹？…なんだか飛び上がる程、嬉しくなってしまう。

「おまけにね、沙希ちゃんったら、昨日とんでもないものを発明したらしいの」

「とんでもない発明?・・・」

「さあ、沙希ちゃん。私にも見せてくれるんでしょ」

「うん・・・綾姉・・・」

「沙希、・・・はい、これ」

長方形の小さな装置を2つ、沙希に渡す。

「ありがとう、・・・ベス!ノートパソコンは?」

「OK!これよ」

ノートパソコンに装置をつけて起動させてから

ジェーシーの髪と指紋を覚えさすと再起動させてから防犯システムを起動させた。

液晶パネルには1F、2F、3Fと地下の1室、それと大きなというより広い会議室の映像が現れた。

「ママ!この会議室へはここからと、飛行場から入れるのね」

「さすがはサキ、よくわかったわね」

「ママ、このドアに警報とカメラは?」

「勿論、あるわよ」

「よかった・・・じゃあ、始動させるね」

その声で静香はいろんなテストをした。興味を持ってジェシーも付いていく。その結果静香は

「これ完璧ね。これなら売れると思う。ジェシーはどう思う?」

「さつき沙希が言っていたけどいろんなオプションをつければ家に住めなくなるって・・・でも今のままで十分だと思う。」

これだけでいろんな町に行っても安心して住めるわ」

「もし、あなたがこれを販売するとしたら?」

「え〜と・・・あっ、明日の会議がチャンスよ。」

これをホワイトハウスやペンタゴンにつけて貰えば・・・

サキ！ペンタゴンのような大きな建物でもいいの？」

「大丈夫よ、その代わりノートパソコンは止めてデスクトップで大画面にしたらOKよ」

「じゃあ、ジエシーその方針でこれからやってくれる？」

「やって・・・って・・・ええ？・・・」

「そうよ、（株）オクトのワシントン支社の責任者として

この防犯システムをアメリカ全土に販売してほしいの。
ねえ沙希ちゃん。これの偽物って作れるの？」

「出来ないでしょうね。この中に特別なチップが付けられているのよ。」

それは決して現世では手に入れられない物。

代用しようとしても、同じもの同じようなものはこの世界にはない
の

「えっ？それではあの・・・」

「そう、あの世界の材料なの。それにこの装置から外してしまったら、

自壊するでしょうね、モバイルと一緒によ」

「わかったわ。・・・ジエシー、やってくれるわね」

「ええ、出来るかどうか判らないけど・・・」

「琴美ちゃん、いらっしやい。・・・ジエシー、この子は「トミ・
イシカワ、XX大学の学生なの」

「XX大学？・・・ケイトと同じ大学じゃないの」

「はい、私ケイトの家に下宿しているんです」

「じゃあ、ケイトとケイトのママ、元気？」

「ケイトは今日日本にいます。ママも昨日、日本に立ちましたよ」

「日本に？・・・どうして？・・・」

「ケイトはね、もう二ヶ月もすれば赤ちゃんが産まれるんです。」

だから、ママが日本に行つたんです」

「ええ〜？・・・そんなの聞いてなかつたわ」

「ジェシー、詳しいことはあとで教えてあげます。

とにかく明日、この装置の発表しなければならぬから準備が大変よ。

沙希ちゃん、これの名前とかマニュアルは？・・・」

「名前はBBX・・・Bボックスと考えただけど」

「BBX？どつという意味なの？」

「ブラックボックスにかけているの」

「ブラックボックス？・・・あつ、そうか・・・じゃあ、マニュアルは？」

「今、つくるわ。瑞姉！・・・」

瑞穂が持つてきたノートパソコンを起動させると・・・

そのキーボードを叩く早さつて・・・あつというまにマニュアルが完成した。

「凄い！・・・」

ジェシーがはじめて見たサキの能力。

「さあ、これから町の人を呼んでのパーティよ」

とジェーンに言われて慌てて立ち上がる女性達。

「さあさ、皆様のお部屋はこちらですよ」

とメイドに言われて各部屋に通された。

沙希は杏奈と同じ部屋になっていた。

バスをつかつて汗を流し、メイクも杏奈がバッチリ決めた。

ドレスは柄でもない杏奈に断つて、黄色のパンツスーツで階下を下りていく沙希。

「やっぱり沙希ちゃんはそのなのね」
と静香に少し咎められてしまう。

「これからハリウッドで主演する女優がドレスも着れないでどうするの？」

「といって再び2階にひっぱりあげられ、その間あだこつだと翔や弓、

ジェシーやベス、コーデリアにまで持ってきた衣装のチェックをされてしまう。

結局、背中と胸がたつぷりあいたピンクのドレスがいいとなり、着替えさすとさすがに女優、女性達もボウツと見取れるほどの可憐さだ。

実際、下に降りていくとみんなの目が釘づけになったのはいうまでもない。

これがあの大岩に蹴りをいれ、芥か埃にしまった同一人物とは全然思えない。

パーティは有名なジョージがこの町に帰ってきたことでこの町の町長や警察署長など

お偉いさんも大挙しておしよせてきたため、大きなものとなってしまった。

やはり注目されたのは沙希だ。

東洋の日本からやってきた女優・・・小さくて細いのに何故か威圧感がある。

町の娘達も最初は恐々話し掛けたが、その優しい笑顔に魅せられてしまうのだが、

やはり中には馬鹿な女がいる。

「ふん、何さ、あんな女」

と歯牙にはかけないふりでじつと影から見ている女のいやらしさを持った女が。

だがそんな女もあとで

「未編集だが・・・」

と断って今日1日の沙希のフィルムを見せられたあとは何もいえないようになっていた。

特にあの大岩を蹴りつぶしたあと

「ああ、すっかりした」

といった言葉のあとには・・・。監督はこのフィルムが真実かどうか最初からいわなかった。

だが、町の皆は通ってきたのだ。あの大岩があったところを通らずにはこの屋敷にはこられない。

また、通らずにはこの周辺一番の大きな隣り町にはいけないのだ。

道の真中にあつた大岩を大回りするのが毎日の習慣であつた。確かに今日の夕方まではあつた。

そして、ここに来しなに習慣的に大回りをしようとして気づいたはずなのだ。

そこにあつた筈の大岩がなくなりスッキリしてしまったのが・・・

どうしたのだろう、不思議なんだが・・・みんな自分の目が信じられなくて何も言えないでいた。

それが氷解したのだ。

こんな可愛い可憐な少女が、自分の心にたまつた灰汁をはきだすために

大岩に蹴りを入れてつぶしてしまった。

信じられないが信じられた。何だか笑えてくる。

「カラミティ・ジェーンのようなお方じゃのう」

「カラミティ・ジェーン？」

「お若いお人にはご存知ないかもしれん。西部開拓史に名を残す女

傑じゃ。

カラミティ・・・つまり疫病神のようなじゃや馬なんじゃが拳銃を片手に西部をあばれまわったのじゃな。

じゃがこの東洋のカラミティさんはどうやら拳銃なんかいらないうじゃ。

素手で充分のようですのう」

一方初めてサキの不思議な術と力を目の当たりにしたジェーン、『アワアワ』と口が上下し、目は信じられないを見た驚きに大きくなっている。

なのにサキの手をがっしりと握ったままだ。

そのとき、慌しくスタッフの1人がこのシネマルームに駆け込んできた。

ジョージ・ルーク監督に耳打ちするスタッフ。

「何！本当か」

「はい、予定が早まったそうぞ」

「わかった。みんなに準備をしておくように」

「はい」

と走り出るスタッフ。

立ち上がったジョージは

「みなさん！今日は本当に楽しかった。ほんとうはもっと時間をかけて

試写したかったがどうやらワシントンのほうからお偉方が、

明日の会議の下準備のために予定を早めてくるようぞです。

来てしまったらあなた方の行動が制約されます。さあ、お早めにお帰りください。

・・・今夜は本当に楽しかった」

と挨拶するとみんないっせいにたちあがった。

そして拍手をし、沙希の回りにむらがつて握手を求め。
でも沙希はみんなにとびついて頬に口付けをした。
そんな行動ひとつで客にどんなに幸せを与えたのか。やはり沙希は
女優だった。

つぶさに観察するアンとジェシー、不思議なことに見ていて見飽きることはない。

全ての客が帰ったあと、大きく伸びをした沙希

「さてとパパ、お客さんは地下からね」

目をむくジョージ、

「さすが、サキだよくわかったね」

「だって、人の気配って隠せないもの」

「サキにはかなわん」

「もう用はないんでしょ」

「ああ、明日のためによく休みたまえ」

「じゃあ・・・あつ、BBXの会議室のドアを

クリックするか誰かにドアを開けてもらってね・・・おやすみ！」

朝早くからバタバタとヘリコプターの羽根の音でうるさい。

『コンコン』とドアがノックされる。

「はい、どうぞ」

と声をあげるサキ。

入ってきたのはミランダ達6人のSP達だ。

「サキ！もう表は大変なことになってるよ」

「さっきからヘリコプターが飛び回っているようだけど」

「大統領専用機『エアフォース・ワン』が飛行場に到着したからなの」

「じゃあ、地下の会議場には？」

「すでに入っている人もいるわ。マチルダが大統領と逢っているわよ」

「大変！・・・静姉は？」

「朝早くからジェシー達会議に同席する人たちと資料を整えていたわ」

「それなら、早く起こしてくれたらいいのに」

「昨日もサキは大活躍だったから、ゆっくり寝かせていてって言われたからね。」

でも、もう起きる時間よ」

飛び起きたサキは手早く支度をする、SPに囲まれて階下を下りる。

「あっ・・・サキ！一緒に朝食を取りましょう」

とマチルダが声をかける。

食堂に入るとジョージが一人の男性と向かい合って朝食を取っていた。

「やあ、サキ！おはよう」

「おはようございます。パパ」

「パパ？・・・」

その紳士が不信そうな顔をしている。

「紹介するよ。わしの娘のサキだ」

「娘？・・・」

「ああ、そっだよ。サキ・・・」

「いいえ、パパ」

と言ってから

「お顔はよく存じてしますわ、大統領。でも、今の時間はハリーって呼んでもよろしいでしょうか」

「何！・・・その名前を知っているのは・・・」

「はい、ケイトから聞いておりますわ」

「そうか、君なのか、サキ・ハヤセ。君のことはよく聞いている。

しかし、実物を見たショックは大きいな、こんなに幼く見えるとは・・・」

といて立ち上がって手を出す、サキはその手を取ってスカートを
持つと腰をかがめた。

目上のものに対する欧米の正式な挨拶だ。

大統領はSPの一人に何事か耳打ちをした。

しばらくして3人で歓談中、

「あっ、この方です。私を助けていただいた方は」

という声が聞こえた。

その声に振向くと、ホノルル空港で分かれた皇女が立っていた。

「あっ！・・・皇女様・・・どうして？・・・」

「まだ、国情が不安定で、よからぬ考えを持つものたちがまだ大勢
いるのでね。

しかし、聞いていた通りの女性なんだな、サキは」

そこに政務次官が入ってきて、

「大統領！そろそろお時間です」

「皆集まったのかね」

「いいえ、それが・・・」

「どうしたんだ、はつきり言いたまえ」

「それが、思わぬ人数が・・・というより、こちらが考えていた人
数より」

遙かに多くなっています」

「それでは席とかは？」

「はい、仕方がありませんからもう一段増やしまして席も詰めてもらいました」

「そんなにか・・・」

「はい、それもあのモバイルが目当てです」

「そうだ、君に紹介しておこう。今言ったモバイルの開発者だ。

サキ・ハヤセ・・・あのソフトの開発者でもあるんだ」

「えっ？この少女が？・・・」

ニツコリと微笑む少女に驚きが大きくなる。

「ロバート・オーエン政務次官だよ」

握手する二人だがこんなことをサキが言い出した。

「ロバートあなた、お財布があなたの座っている席と席の間に挟まっているわ。」

早く取ってきた方がよくてよ」

えっ！とサキの顔を見るが、はっと顔色を変えて内ポケットを探るが見当たらない。

この不思議な光景を目にしていた大統領、直ぐに声をかけた。

「何をしている！早く見てきなさい。そしてその結果を直ぐに私に知らせるように」

話に聞いていたサキの不思議な力の第一弾だ。それを見定めようと
する大統領。

「さあ、行こうか」

大統領が声をかけると立ち上がる全員。

一緒に歩くサキに大統領は

「サキ！・・・マチルダから君に助けられたことを聞いてるよ。

ホノルルのことも、ジョージから馬泥棒のことも聞いている。」

そんな功績の素晴らしさに言葉一つで礼を終わらそうとはしていないよ」

「ハリー、お礼なんていいわ。ただ一つだけお願いがあります」

「お願い？・・・なんだね。それは・・・」

「大統領が知っておられる電子機器の会社でセキュリティがしっかりして、

最も信頼がおける会社を紹介してほしいんです。

いいえ、大きなところよりも小さなところのほうがいいんですけど」

「電子機器の会社？・・・どうしてかね」

「ええ、あとでわかります」

「ベス！頼んだわね」

「ええ、わかってます静香」

「モバイルの使い方は？」

「もうバッチリよ」

「じゃあ、行ってくるわね」

後を見送るのは、ひづる、コーデリア、ベス、

泉、京、杏奈、マチルダ、ジェーンだ。

あと全ての女性がサキ側の社員として会議に出席する。

なるほど会議室はぎっしり満員だった。

サキの座る左横に瑞穂、その横にゆりあが座る。右側にはジェシー、

その右にはアン、

そしてその右側には両側に弓と翔を座らせた静香と翔の隣には綾美と琴美が座っている。

全員がノートパソコンを机に出しているのが壮観だ。

会議が始まる前にサキに挨拶に来たのはNASAのジョン・ロバー

トとスコット・アルダだ。

「サキ、お久しぶりです。やっとアメリカに来てくれましたね。」

「日本に帰る前に絶対にNASAにきてくださいね。」

あなたが来るのを心待ちにしている職員がたくさんいるのですから」

「はい、必ずお伺いします」

慌てて入ってきたオーエン政務次官が大統領に密かに耳打ちする姿が見られ、

はつとして驚いた目で沙希を見つめる大統領・・・そしてオーエン政務次官。

・・・こうして会議が始まった。

驚いたことにまず、大統領が声をあげる。

「国際会議に劣らぬこの会議、これからの時間を有意義に過ごすため、諸君の活発な意見を期待する。」

まずはサキ・ハヤセ・・・立ってくれないか」

その声に立ち上がったサキ・・・それを見て『おお〜』と声があがった。

「子どもじゃないか」

そんな声が聞こえる。

「まずは彼女のプロフィールだ。シヨウ・オガタ、頼む！」
前もって頼まれていたのか翔が立ち上がった。

「サキ・ハヤセ、ただいま19歳です。日本のコンピューター会社・オクトの開発部長で、

サキが最初に開発したのは今世界でもまだまだ売れているあのビジネスソフトです」

「ウオ」
と声上がる。知らなかったのだ。

「そして、いろんな事件があつてその必要性から開発したのがモバイルを使つての追尾装置で、計算上10光年先までの追尾が可能です。

通信装置も事件を解決する必要性から開発したものです。以上がサキの功績ですが、
彼女には別にスクリーンネームがあります。

アキア・ヒノ・・・日本で天才女優と呼ばれた彼女がこのアメリカに來たもう一つの目的は、
ジョージ・ルーク監督の映画に主演するためです。以上がサキ・ハヤセのプロファイルです」
といつて座つた。これ以上は言えないのだ。

「では、サキ。モバイルの説明を頼む」

大統領の言葉にサキは立ち上がつて一番下に下りていった。ついていくのは瑞穂とゆりあだ。

モバイルの説明は簡潔に行なわれた。
追尾装置、通信装置とも初めて目にする者にとってそれは素晴らしいものだった。

「実を言いますとこのモバイルを作つたのは警察官である私の姉に依頼されたからです。

現場での指紋を採取したときに警察のメインコンピュータと接続すれば

その場で犯罪歴のある指紋の持ち主が判るようになっていきます」

そんな経歴から作られたのかと初めて知る。それからはモバイルの

実演となった。

モバイルを起動させてからケーブルを繋いだ。
すると会場中のノートパソコンに映像が映し出された。

「では、今から接続します。接続場所は日本の京都です」

『ピー』と音が鳴ると画面にケイトの姿が現れた。

「サキ！遅かったじゃない」

「ごめん！今モバイルのデモ中なの」

「デモ？・・・じゃあ、人がいるんだ」

「うん、沢山ね・・・ほら」

「な・・・何？・・・これって、国際会議みたいじゃない」

「大統領も来てるわよ、ほら・・・」

「あつ・・・ほんとだ、やあ、ハリー・・・」

「ケイト！・・・元気かね」

「ええ、今食べては寝て、適時の運動だからおかげさまで私の身体
5キロも太ったわ。

あつ・・・ママも私の出産のために来てくれたの。とにかく元気な
赤ちゃんを産むわ」

「ああ、わかった。君の赤ん坊、楽しみにしているよ」

「ええ、ハリーも名前のことよろしくね」

「OK！わかったよ」

「サキ！もういいんですよ」

「うん、ありがとう」

「じゃあね」

視線が大統領に集まっているのを知ると

「すまない、私的なことでモバイルを使って・・・あれは妻の姪だね。
・・・

しかし、こんなに鮮明できれいな画像なのか、サキ」

「はい、追尾装置は10光年といいましたが通信装置もカメラももつと性能が上がれば、

地球から月、地球から火星とその距離がもつともつと伸びるはず」

「しかし、実際目で見てこんなに性能が良いとなると、

君たちNASAもペンタゴンもそして、各国航空会社も飛びつきのもあたりまえだろうな」

「大統領！それだけではありません。我国のFBIや警察、軍からも購入要請があるので」

「予算というものがあるから、購入要請そのものを全て聞くわけにはいかないが、

サキ！・・・この装置の複製はつくれないと聞いたが、それは？」

「はい、この装置には特別なチップが埋め込まれています。

それに一つ一つ番号をつけ、この装置がいつ製造されどの会社に販売されたか

判るようになっていきます。

そして、実をいいますと装置に取り付けているこのチップには透明なカバーが付いていて、

その役割はチップを触れなくするためのものです。

チップを装置から外そうとするとカバーを外さなければできません。

そのチップは手でも工具でも、少しでも触れれば自壊します」

「触れたら駄目ってことか、でもそんなものがよく取り付けられたものだな」

「チップは電気を通すまでは普通の石なんです。物理的には実に不安定ですが、

このチップがなければニユートリノを取り入れることが出来ません」

「そのチップがそんな凄い役目をしているのか・・・その石の出所は？」

「・・・と聞いても秘密だろうが・・・」

「いいえ別にいいですよ、と言っても普通の方にはとてもいけないところですよ」

「行くことができない？」

「はい、現世ではないのですから」

「現世？」

「つまり、この地球上のものではないということですよ
また突拍子もないことを・・・と笑う人が多かった。

「まあ信じる信じないは勝手ですが・・・」

大統領は真剣だった。この少女が嘘などいわないと報告があったし
違う世界のこととも報告があった。

「そこへ、私を連れて行くことができるかね」

「はい、でも全く同じ場所でもなくてもよろしいですか」

「えっ？そんなにある？」

「はい、異次元は無限ですよ」

「すぐに、と言えば？」

「いいですよ」

「時間は？」

「5分か10分・・・」

「よし、今から15分休憩します。その間に私達とその世界を見たいと思うものは一緒にどうぞ」

「大統領・・・それは・・・」
「心配なら君もついてきたまえ」

.....

家から大勢の人間が出てきたので吃驚している兵士達、
その中に大統領がいるのを見て、目を大きくしながらも敬礼をする。
軽く敬礼を返しながら

「さあ、どうするんだね」

「はい・・・瑞穂さん」

と公式の場での呼び方をしてから

瑞穂が出した新旧のケースを見て九字を切り、真言を唱えた。

東洋の魔術だ・・・初めて見るものにとって立ち竦むほどの衝撃だ。

ケースから飛び出した24個の球が大きくなって地面に着地する。

皆その周りを恐る恐る見ていたが、
朝から沙希を撮影していたカメラマンやスタッフ達が真っ先に飛び
込んだ。

慣れているとはいえ彼らの行動は見ていたものを刺激する。

「1台の定員5名です。この装置は日本で幾度も活躍したカメラマ
ン達を乗せ

隣の次元から撮影出来る『ステーション』と呼ばれるものです。

映画やテレビ・・・このアメリカではパバ・・・

いいえジョージ・ルーク監督のスタッフの人達はよくご存知です」

「ジョージ、そうなのか」

「ええ、私のこれから撮る映画はこの『ステーション』がなければ成立しないと考えてください」

「わかった、・・・乗るものは乗る、乗らないものは会議室に戻っていたらいい」

「といって自ら『ステーション』に乗り込んだ。」

人数の関係で瑞穂とゆりあは見送りだ。あとのものは全て乗り込んだ。

「じゃあ、瑞姉・ゆり姉、行ってくるね」

24個の『ステーション』が飛び上がり空中に消えた。

そのあと沙希が飛び上がって宙高くに光のトンネルをあけるとその中に飛び込んでいった。

呆気にとられていたのは警護の兵士達、

「俺達、夢でも見ているのか？」

「あれってスーパードール？」

兵士達はそれからはずっと空を眺めている。

「ねえ、瑞穂！大変な会議になったわね」

「国際会議ってテレビのニュースでしか見たこと無いけど全く一緒だわね」

「でも、これからあのBBXの発表でしょ。」

ただでは終わらないと思っていたけど、この調子では今日で終わるのかどうかね」

それから、しばらく経ってから24台の『ステーション』が降りてきた。

着地すると皆目を輝かして出てくる。

そして全員で宙を見上げる。遙か高い空で光のトンネルを閉じる沙希、

そして地上に舞い降りてきた沙希に大統領ががっしり握手をする。

「とても貴重な体験だったよ。私にはこんなこともう無いだろうがサキが報告通りの女性だと実感したよ」

その周りで大勢の人が拍手をしている。

その後、再び会議室に戻る一同・・・

途中で、サキの後ろから抱き付いて頬にキスしたのがジェシーだ。

「サキ！今はこれで我慢しておくわ、あとでキスをお願いね。」

貴女のことは夕べ聞いたけど、それだけでなかったみたい。

パパはよく知っていたみたいだけど、こんな乗り物のこと聞いていなかったもの」

「ジェシー、もっともつとあなたが知らないことが一杯あるのよ」と静香。

「本当？・・・教えてくれる？」

「いいわよ。サキちゃんったら自分のことを話しながらないから私達が教えてあげる」

「静姉！・・・」

「沙希ちゃん！ジェシーはあなたのお姉さんのよ。自分の妹のことを知るので当然でしょ」

沙希は何も言えなくなる。

そんなこんなで会議室に着いたときには全ての客が着席し、サキを待っていたのだ。

全員が着席し終わると

「有意義な休憩だったと思う」

とまずは大統領の言葉だ。

「複製も出来ないことを体験したことで、この装置を信頼できるところがわかった。」

次は購入の仕方なんだが、サキ!」「

「はい、それはオクト・コーポレーションの専務であるシズカ・サノに説明してもらいます」

「はい」

と喋って立ち上がった静香。

まずは通訳として翔が立ち上がった。

「シズカ・サノと申します。オクト・コーポレーションは

先ず今は日本の東京にある本社、京都にある支社だけです

今回ワシントンにワシントン支社を立ち上げることになりました。

場所やテレックスが決まったら受付時に書いていただきました皆様の会社に

手紙かメールを送らせていただきます。

責任者は・・・ジェシー立って・・・ジェシー・ルークです」

「ジェシー・ルークです。このたびオクトコーポレーションのワシントン支社に着任しました。

これからは皆様の窓口となります。よろしく」

「では琴美さん、立って」

と琴美を立たせると

「コトミ・イシカワといます。彼女はXX大学の学生ですが

これまでもホワイトハウスやペンタゴンに日本からのデータや書類を

持っていったので顔を覚えている方もおられるかもしれません。

これからはジェシーと共に仕事をやっていきます」

「コトミ・イシカワです。これからよろしくお願いします」

そう言つと皆が座る。

「以上モバイルに対する議事を全て終ります」
とロバート政務次官が宣言した後、大統領が手を上げた。

「サキ！先ほど言っていたね。電子機器会社を紹介してほしいと・
それはモバイルではないのだね」

「はい、私がこの装置を思いついたのが、つい2〜3日前なんです。
いくら嚴重に鍵をかけても襲われるときはどうしようもありません。
だから作ってみました。BBXといいます」

その時ドアがノックされ、緊張の面持ちで入ってきたのがベスを先
頭に泉と京だ。

それぞれが何かを持っている

「皆、ついてきて」

と沙希に言われて下方まで階段を下りていく。

テーブルにおかれた装置にいろいろと配線する沙希。

「3人共、ここにいてね」
という

「これが今回開発したBBX・・・防犯システムです。

これ1台でペンタゴン位の広さはバリアで囲めます」

「そのバリアとは？」

「はい、実際にこの映像を見てください。

このBBXは、昨日よりこの建物の防犯システムとして起動させて
います。

1F〜3F、と地下の1室とこの会議室の映像が判ると思います。

今、このマウスのカーソルの位置、ここが空港からのドア、

つまり、あの開いたままのドアです。今、ドアを閉めて見ます」

クリックすると皆の目にドアが自然に閉まるのが見えた。

「これで、ドアが閉まりました。どなたかドアを開けてみてください」

力自慢の男が2〜3人、力まかせにドアを押すがビクともしない。

「駄目だ！・・・動きもしない！」

「ではこれでは・・・」

とドアをクリックすると、取っ手を持って少し押すだけでドアが開く。

「それでは、先ほど聞かれたバリアのことですが。

SPの男の方、どなたか表からこのドアに向かって拳銃を発射してください。

それとその様子をビデオカメラで、特に弾道を中心に撮ってほしいのです」

SP2人がドアの外に出て行くとドアが閉められた。

「OK？」

という声に

「OK！」

と答える沙希。

『バキューン』という音が2発してから、かなり時間がたってから、

「OK！」
という声が聞こえる。だが少し声が震えているのがあきらかだ。ドアが開くと

青ざめたと言った方がいいだろう、そんな顔色のSP2人が入ってきた。

「巻き戻しをして、まずは大統領に見せてください」

サキの言葉にビデオを大統領に渡すSP。

受け取った大統領は驚いた顔でビデオを見る。

「こ・・・これは・・・」

と言葉を洩らしてからは真剣な顔になって2度3度と繰り返し見ている。

そして、『ふー』とため息をつき沙希のほうを向くと

「サキ！君って人は・・・この装置にはまだいろいろあるんだね？」

「はい」

「じゃあ、最後まで見させてもらおうよ」

「わかりました。ベス、大統領からビデオもらってきてくれる？」

ベスが持つてきたデジタルビデオカメラからメモリを抜き取りパソコンにセットする。

各パソコンに映し出された映像は、2人SPと大統領を驚かせたものが写っていた。

拳銃から発射された拳銃の弾は目にはとまらないがドアに突き刺さった弾の様子が見える。

そしてある瞬間にぼとりと下に落ちる。ドアには何の痕跡も写っていないかった。

「これは何も手を加えないスピードの映像ですが、・・・少しお待ちください」

と何やらキーボードで打ち込んでいく。その速さっていったら

「おい、彼女目を閉じてキーを打ってるぜ」

という声があちこちから聞こえる。

サキのこんな行動でさえ、つい目が釘付けになってしまうのだ。

「さあ、これでいいでしょう」

と再びパソコンに映し出された映像は・・・拳銃から発射され

た瞬間の玉がズームされ、

一体どれぐらいスピードが落とされたのか回転する弾と空気の接触面から煙が立っているのが見える。

そしてドアに当たったと思ったのは間違いで

ドアの表面の何かが玉を受け止め、その回転を巻き込むように停止させると

元に戻る。そこから玉が下に落ちるのが見えたのだ。

もう一度巻き戻しして、あるところで一時停止すると

「これは先ほど聞かれましたバリアを説明できるいい場面です。

このドアの表面にあって、拳銃の弾を巻き込んだもの・・・これがバリアです」

皆この映像を食い入るように見る。

「質問します。拳銃を止めたバリアはどこまでの強度があるのですか？」

「そうですね、ミサイルとまではいいませんがロケット砲ぐらいは平気です。

でも一般の家にロケット砲まで打ち込まれるってことありませんよね」

「ロケット砲ですか、・・・凄い！」

家人には出入りが簡単にできるデータ覚えさす付属部品の説明にはあっけにとられる警察関係者。泉も京も同じだ。

「DNAの検査が1分ですって？・・・沙希！あんたがなにをやったか判ってるの？」

「えっ？だって家の人が入りするのに簡単に出来るよう、そして

安全を考えて

ダブル・セーフティにただけよ。音声でもよかったけど少し不安定だし、

指紋だけだと複製の指紋で鍵を開けられてしまうから、誰にも複製が出来ないDNAを取り入れたの」

「沙希がやったことって、これからの犯罪捜査を50年も100年も進めたのよ。」

これ大げさではないわよ」

「沙希！それってモバイルにつけられないの？」

京が聞く。

「つけられるわ。プログラムを組む必要があるけど……」

「それ、どれ位で出来るの？」

「うん、3分ぐらいかな」

「3分？……ぜひやってほしいわ？」

「どうしたの？そんなに急いで」

「うん、私達これからFBIの研修でしょ、どうしても持っていくたいの」

「しょうがない泉姉と京姉なこと……」

この日本語の会話は翔や弓、そしてゆりあによって同時通訳されていた。

「ウオツホン……」

とわざとらしいセキをしたのが大統領だ。

「サキ！BBXの説明は後でゆっくりと聞かせてもらおうとして、

先にそのモバイルの改造を済ませてもらいたい。……なあ、みなさん」

その声に頷く出席者達。どんな小さなことでも見ていて退屈ということはない。

ジエシーもパパが映画に主演さそうと1年間がんばっていたことがよく判る。

こんなに人を引き付けて魅了する女性は今まで見たことが無い。天才女優といわれるこのサキが妹だなんてもう嬉しくて堪らない。

「はい、これ」

と自分達のモバイルをサキに渡す泉と京。

サキはB B Xを端に寄せて2台のモバイルを机の上に乗せた。

もの凄いスピードで打ち込まれるプログラム・・・1台が終わり、2台目・・・

言われた通り3分で終わった改造。

全てを設定し終わると

「このデスクトップのあるこのアイコンがDNAの検査をするアプリケーションなの。」

これをダブルクリックするとダイアログが出てきます。

泉姉、京姉、毛根のある髪の毛をぬいてくれる？」

抜かれた髪の毛をスキャナーに作られた2つの枠の中に別々に置いて蓋を閉める。

しばらくして表れたのがチェーンのようにつながったDNAだった。

「右が泉姉で左が京姉・・・どう、そっくりでしょ。」

さすがは双子だけど、こうして重ねてみるとほんの少しだけ違うでしょ。」

「凄い！何か神秘ね」

「そして、これをハードに保存しておけるの。」

あとは、毛根がついたスキャナーと蓋の裏面を必ずアルコールで拭き取ること」

「それは、指紋の時と同じだから必需品として持っているから。」

じゃあ、沙希！・・・もう時間だから行くね」

「うん、がんばって！」

「帰りに寄るから」

と言って部屋を出て行く

目で追った出席者達、泉と京の姿が消えると一様に『ふう』とため息をついた。

そして、沙希に視線を戻すと何か次への期待が膨らんでいくのだ。

「それでは話を元に戻します。このBBXのバリアと鍵のことを知ってもらえたと思います。

ではこのBBXの最後の能力をお話します。すいませんが、もう一度SPの方をお願いします。

そのドアから150フィート離れて立つてください。いえ、ドアは開けておいてけっこうです。

OKといえればゆっりと進んでください。STOPと言ったらその場で立ち止まってください。

よろしいですね。では始めましょう」

「OK！」

「STOP！」

その声と共に画像に写ったのが赤い円だった。

「この円は人です。そしてこれをクリックすると・・・人の画像にかわります。

SPの方の左胸に赤い銃の形・・・そしてこれはベルトのバックルですね。

これは鍵・・・もうお判りですね、これは金属探知なのです。

・・・SPの方！戻ってください」

入ってきたSPに対して

「この画像の赤い印が、あなたの持つ金属を探知したものです。こ

れで間違いありませんね」

S Pは慌てて服の上から銃をさぐり、ズボンのポケットに手を突っ込んで確認する。

「はい、間違いありません」

「これで、判ってもらえたと思います。

このバリアからどれぐらいの位置で探知するかは0～300フィートを10フィート間隔で

設定できるようになっていて、今は100フィートの設定にしています。

この探知システムは今は金属だけですけど、

データさえ入れるなら爆発物や風邪等のウイルスの探知も可能です・・・以上です・・・」

「諸君はどう思うか知らないが、わたし自身はB B Xのほうに触手が動く」

「いや、我々は両方共です」

「我々もです」

「あとう、一つお伺いしますが」

「はい、どうぞ」

「空港に取り付けるといことは、可能でしょうか」

「はい、勿論」

「空港外300フィートから空港内全域までを探知するのですよ」

「装置はこのままで使えます。ただ組み込まれるプログラムは全て代えなければならなうでしょうね。

そうですね、空港ですか・・・一般の家しか考えていませんでしたけど

空港とか公共施設のほうが危険ですよね。わかりました。

ベス、また部品を買って欲しいんだけど・・・」

「ほほほ・・・わたしの予感が正しかったようね。たくさん買い込んでいて正解だったわ」

「ベス！」

「はい、これ」

と渡した紙袋。

「うわあ、こんなにたくさん。さすがわたしの姉さんね」
ベスもサキに姉と呼ばれる嬉しさはたまらないのだ。

「じゃあ、10分待つていただけますか」

「えっ？・・・10分で出来るんですか？」

「はい」

と言う声にざわざわする出席者。

けれどその言葉が嘘でないのがすぐに判ることになる。

その手際、手早さ、まるでフィルムの早送りをみているようでとにかくあきないし、

時間の経つのなんかあつという間だった。

最後のネジを締めている沙希に

「それでもう終わりなんですか」

と質問が飛ぶ。

「ハードはこれで終わりですけど、あとはプログラムを入れれば完成です」

でもそのプログラムを入れる・・・という行為にしても出席者達を釘付けにしてしまう沙希はやはり天才女優であった。

「これで、完成です。一応BBXとの違いをつけるため仮にBBX

「?という名前にします。」

ちようどこの空港はジョージ・ルーク監督専用であると共に国内便の発着空港ですので、

テストを兼ねてここで起動させますが見学されますか?」

「勿論です」

「ジェシー姉さん、パパを呼んでくれる?」

「判ったわ」

と部屋を飛び出して行ったジェシーだが結局ジョージが一行に追いついたのは飛行場の中だった。

大統領機が着いているということで警備が厳重な中、その大統領の目の前でBBX-?をセットする沙希。

警備室のデスクトップのパソコンにワイド画面の大型液晶モニターを

壁にかけることから始まったこの設置は

まるでSFの映画をみているようで皆の目を釘づけにしている。

この様子を撮影しているジョージのスタッフを見て

会社の幹部達に説明するより見せるほうが早いと会議の記録を申し込む出席者が続出していたのだ。

全てのセットが終わったあと、

モニターに映し出された飛行場に大統領にゆずられたBBX-?の起動の権利。

大統領がマウスをクリックしたとたん・・・皆は見た・・・

飛行場の平面図に青白いバリアーが張られていくのを・・・全ての設定が終わると

「うお〜」

と出席者の歓声上がる。

大統領は立ち上がった沙希にがっしりと握手をする。
その様子を撮影するスタッフ達……と持ってきたデジカメで
撮影をする出席者達もすっかりこの天才少女にとりこになっ
た。

「まるで奇跡をみているようだ……」

というロバート・オーエン政務次官に

「ロバート！ホワイトハウスにかえったら主だった高官達を集めて
くれないか、

それとテロの標的になる要人達の家や飛行場等の公共施設などをリ
ストアップしてほしい」

と頼んでから

「サキ！君に頼まれた電子機器の会社はまかせてもらっていいよ。

その会社の作業員達の身元調査もセキュリティの問題も我々が責任
を持つからね」

その二人に会議の出席者達は

「大統領！私達は早く国に帰ります。

少しでもテロの恐怖を無くすことが出来るこの機械を政府や会社の
皆に知らせなければなりません。

ミス・サキ！私達はあなたを国賓として我国に御招待いたします。

早く映画を取り終えて我国へのご訪問お待ちしております」

と各国の代表共同じコメントを残して帰っていった。

大統領も

「サキ！……こちらの受け入れ準備が整ったら連絡するからすぐ
飛んできてくれるね」

沙希が頷くと

「ジョージ！……映画の撮影をとめてしまっけどいいね」

「わかってるよ……そのときは遠慮なしに連絡するといいよ」

大統領はSPに囲まれ、タラップにあがると見送る沙希に手を振って専用機に乗り込んでいった。

飛行機が雲間に消えてしまつと誰ともなく

「ふ〜・・・」

とため息をついてしまつ。

「今のつて現実だわよね・・・なんだか映画を見ているようだったわ」

と話すのは最初からモバイルで会議の様子をジェーンやマチルダ達と見ていたコーディリアがいった。

「コーディリア！今のつて言ったね。」

わしは昨日からそうだよ。目の前で映画を見せ付けられていたようだった。

50年以上も映画作りに参加していたのに目の前の出来事にワクワクしたり、

女性のように涙を流したりまるで初めて映画を見る子供のようにだった。

こんなこと初めてだ。つくづく彼女に出会ってよかったと神に感謝するよ」

「ほんとうね。だってサキがそこにいるだけでまるで台本がない映画だもの。」

スタッフや共演者が揃うのは3日あとでしょ。

1週間後からのクランクインは勿論だけどそれまでも彼女から目が離せないわね。

ジョージが四六時中彼女を撮り続けるのがよくわかるし、

撮り続けるスタッフ達に見逃すなつてはっぱをかけた気持ちね」

とそう言いながらも視線は沙希を捕らえて離さない。

二人だけではない・・・ここにいる全員がそうだった。

第三部 第三話

いよいよ週明けには共演者や残りのスタッフ達が勢揃いし、クランクインするという緊張感が漂う週末……

でもこうしてBBXの作成作業に没頭する沙希を取り囲んで見守っている

別の意味で撮影がもうすでに始まっており、沙希の動きに引き付けられている自分達を発見する。

午前中に町中や隣町まで足を伸ばしてベスが買いあさってきた部品を使って

BBXとBBX-?の制作を続ける沙希は、ただそれだけで完全に皆の目を奪い、まるで主演女優としての演技を披露しているのだと思ってしまうのだ。

見る見る間に完成していくBBX・BBX-?の総数はもう既に25台づつ。

そのうちの各10台は静香達が日本に持ち帰り、残りの各15台はジェシーと琴美がニューヨークに支店を構えた時にジェーンが送ることになっている。

ついでにこの2人の当面の暮らしはアパートになるがケイトのママが日本から帰って来しだいママの家に落ち着くことが決まった。

そういう訳で今日は朝から沙希がBBX制作にかかっている横で、静香を中心に緒方翔、弓の姉妹、ジェシーと琴美の5人が

ニューヨーク支店を立ち上げてからの人事のことや、取り扱う商品の説明、そして各商品の英語でのマニュアルづくり等を事細かく打ち合わせていた。

広い居間なのでこの家に滞在する他の全員が興味深々に立ち会っており、

その視線がどうしても沙希に集まってしまつのは仕方がない。

沙希がドライバーを置いて椅子の背もたれにもたれ掛かって大きく伸びをした。

「サキ！終わったの？」

ジェーンが声をかけると

「ええ、ママ。．．．だから外でハヤテと遊んできてもいい？」

と沙希が聞くのを

「それより沙希！．．．あんだ夕べ台本もらつたんでしょ」

とコーデリアが横から口を挟んだ。

その言葉をゆりあの通訳で聞いたひづるが

「コーデリア姉さん！．．．心配しなくてもいいわよ。

沙希姉さんなら台本なんて一度見るだけで全部覚えてしまつんだから．．．」

と言つのを目を丸くして聞く全員。

この農場で初めてルーク監督がこの1年獲得に奔走していた噂の日本女優を

目の当たりにした女性スタッフ達、その不思議な雰囲気を引き付けられ、ただただ見守るだけだ。

「それよりさ、サキ。これを見てくれない？」

とベスが取り出した1本のビデオ、

「何よ、それ……」

「いいから、いいから……」

と居間のテレビに映しだされたそのビデオは

あのスーパーマンのいとこだというスーパーガールの物語……

「このビデオがどうしたつていうの？」

「ミランダ達に聞いたんだけどサキが正体を隠して人を助けるのってあの恐ろしいなマスクを被ったことですよ。」

あれじゃあこのアメリカではとうてい受け居られないわ。

だからサキ！今度からアメリカでは何か起こったときはこのスーパーガールになつてちょうだい」

「えっ？……私がスーパーガールに？……」

「そうよ、それが一番いいの……そう思うでしょ、コーディネリア！」

「ベスの言う通りだわ。……ねえ、サキ！早く変身してよ。私……もうワクワクものよ」

「もう……しょうがないお姉さん達なこと」

といつて周囲を見ると全員がこれからおこることを期待するような視線を沙希に向けているし、

沙希自身だつて内心面白がっているのだ。

「やれやれ……」

と沸き立つ心を抑えて沙希は立ち上がつてからもう一度テレビ画面に目を移す。

スーパーガールに目を移してから唇を尖らして、立てた右手人差し指に2回3回と息を吹きかけると

沙希の姿がいきなりテレビの中のスーパーガールの姿に変わった。

金髪の碧眼で美人というより可愛いその姿・・・
青いレオタードの胸の部分には赤い”S”のマーク、
赤いミニスカートに赤いブーツ・・・そして真っ赤なマントは
スーパーガールそのもの・・・なんだかまぶしい・・・

「うわあ・・・本物だわ。これって映画じゃないのね・・・」
と声をあげ飛び跳ねるスタッフの女性達。

「こんな姿になればどうしても飛んでみたくなっちゃう・・・」
といって表にかけ出る沙希・・・皆も・・・一人残らずその後を
追ったのはいうまでもない。

テレビのスーパーガールのように空に飛び立った沙希を

それとばかりに車と用意してあったヘリコプターに飛び乗って追
いかける

カメラマンやスタッフ達・・・

おとなしく家で待つのは嫌なのだがスタッフに託したモバイルでこ
の様子を見る事にした女性一同。

「沙希ちゃんの行く先々には、きっとドキドキする事件が起こるの
よね」

そう静香が声をあげたがアメリカにきた早々におこった事件を思う
と成るほどと納得せざるをえない。

そして例外なくそんな出来事がへりに乗るスタッフが持つモバイル
から映し出されてきた。

この町の横を通るハイウェイ・・・その道路をぶっ飛ばす1台の車。

よく見るとその後ろからサイレンを鳴らして、3台のハイウェイパ
トロールカーが追っていく。

二ニューズでよく見るカーチェイスをやっているのだ。

追われる白い乗用車は前を走る車を走行車線・・・
追い抜き車線と急ハンドルでかわしながら逃走しているので
モバイルから映し出されるその映像にハラハラしながら息を飲む皆

祈りも空しくとうとう事故がおこってしまった。

逃走車に前に割り込まれた車が慌てて急ブレーキをかけた結果、
ガードレールに車体をこすりながら火花をまき散らし、
そして2回3回と横転して崖下へ落ちていく。

そんなドキドキする映像の中に飛び込んできたのが

赤と青のコントラストの衣装の・・・そうスーパーガールだ。

3台のうちのパトカー1台だけが逃走車を追いかけていき、
あとの2台が急停車して事故をおこした車の運転者を助けるために
警察官4人が崖下に降りようとしていた。

早く助けなければガソリンに引火して大爆発を起こしてしまう。

そんな警官達の目の前にスーパーガールが現れ、

それはそれは現実としてありえない奇跡を目撃にすることになった。
警官達は顔を見合わせて呆然と固まる。

逆さになった車のドアを人差し指を曲げるだけで『バーン！』と吹き飛ばし、

その中からブロンドの髪から血を流した女性を助け出して抱きかかえながら

警官に向かって飛んできた。

「伏せて！・・・爆発するわ！」

というスーパーガールの大声に慌てて地面に伏せる4人の警官。
・・・そして同時に車の大爆発が起こった。

『バラバラ・・・』と車の破片が道に散らばり落ちる音がする。

しばらくしてゆっくりと顔をあげる警官達が目にしたものは

燃え上がる炎と負傷した女性を抱えたスーパーガールが警官達のそばに膝をおろしている姿だ。

そして金色に光る半円の透明なバリアが自分たちを被っていた。

スーパーガールが指を鳴らすと金色のバリアが消え、

「もう立ち上がっていいわよ」

という声に恐る恐る立ち上がる警官達。

後続の車もそれぞれハザードランプをつけて停まっています、

今は目の前の様子を車中の人々は興味津々というより、茫然自失という感じで見ている。

「あつ！・・・早く救急車を・・・」

と警官の一人がスーパーガールが抱きかかえているブロンドの女性を見て

慌ててパトカー近くに伏せている仲間の警官に叫んだ。

額から流れる血や反対に折れ曲がった足・・・その怪我の酷さを知ったからだ。

パトカーに走る警官・・・その後ろから

「その前にコップはありませんか？」

「コップ？」

スーパーガールの言葉に何をいつているのかと不信げだった警官達だが

そばに停まった撮影スタッフの車からスタッフの一人が走り寄って来た。

「これを・・・」

と紙コップをスタッフから渡されたスーパーガールは紙コップをジツと見つめた。

すると不思議なことに空のコップの底からブクブクと透明な液体が湧き出てきたのだ。

スーパーガールは満タンになったそのコップをブロンドの女性の口に当てて飲まそうとするが

事故の大怪我で失神しているせいで何の反応もない。

そこでスーパーガールはコップから半分ぐらいを口に含み

失神している女性に直接口付けをして液体を飲ませようとした。

しばらく無反応だったが唇を合わせあっているせいで苦しくなったのか

無意識にゴクゴクを喉が2回ほど鳴って液を飲み込んだ。

するとどうであろう・・・血が流れ出していた傷がみるみる塞がっていき、

へんな方向に折れ曲がっていた両足が正常な形で治癒していく。

これを目撃した警官や野次馬達はもう呆然自失・・・十字をきる人もいた。

驚かなかったのはスタッフ達だけだ。

「誰か下に敷くものを！」

というスーパーガールの声に今度は警官が真っ先に反応した。

パトカーのトランクをあけて2枚の毛布を取り出し、急いでスーパーガールに渡す。

1枚の毛布は地面に敷きその上にブロンドの女性を寝かせるともう1枚の毛布を彼女に被せる。

そして立ち上がったスーパーガールは警官に

「これで大丈夫です。けれどもかなりの出血をしていますので

救急車がきたら輸血をするよう言ってください」

「わかりました・・・で、あなたは？」

「これからあの車を追いかけます」

「サ・・・いえ、スーパーガール！・・・

ヘリからの無線ではまだカーチェイスが続いているそうです！」

大きな声がスタッフの乗る4WD車から聞こえてきた。

「判ったわ！」

と行ってスーッと飛び上がっていく。・・・もう口が開いたままだ。

ただスタッフが乗った車だけは見逃さないように真っ先に走りだし、

・・・そしてこの一部始終を見ていドライバー達が慌ててその後を追いつめた。

こんな・・・こんな・・・不思議でワクワクするものを見逃してなるものか。

逃走車は盗難されたものだった。

金欲しさに車を盗んだ若者だが、その運転の腕はたいしたものだ。

パトカー1台の追跡だけではどうにもならなく、

応援を呼んだがまだ姿を見せないし、

100mほど先を走る逃走車とパトカーの間隔が縮まらない。

そのパトカーの上空を物凄い勢い・・・弾丸のように飛んで行くスーパーガール。

ずっと逃走車を追いかけていたヘリコプターからは

眼下のスーパーガールと逃走車の様子が手を取るように見える。

無論この様子は映画カメラに映され、モバイルからも家に待つ女達に映像が配信されているのだ。

スーパーガールは逃走車より約100m前方に飛び去るとスピードを落とし

地上2mほどのところでUターンすると逃走車に向かう。

慌ててジグザグに運転を始めていたが時既に遅く、

スーパーガールの手から出た青い光線が逃走車を包み込みこんだ。

すると『ガクン』と急激にスピードを落とした逃走車は

腰に両手を置いて立っているスーパーガールの前にゆらゆらと進んできた。

それもそのはず地上1mの空中に浮き上がった逃走車が

それまでの速度の惰性で急激に止まれず

空気抵抗でスピードを落としてせまってきたのだ。

バンパーに左手を添えて完全に停止させたスーパーガールは

右手の親指の爪を弾くと車の4本のタイヤのナットが全て回り始め、

地上に落ちるとそれと共に4本のタイヤ共車から外れた。

ゆっくりと地上に降りる盗難車。運転席の犯人は逃れようと必死になつてドアを押していたが

スーパーガールが犯人に向かって手を上げると

まるで透明のロープに縛られたように身体を硬直させて運転席の背もたれに身体を倒した。

そこにパトカーの警官達がかつけ、

前方からも多くのパトカーのサイレンと赤と青のパトライトが見えるし

後ろからは競り合うようにして野次馬と化した車の群れが追いついてきた。

「さあ、メグ。犯人を引き渡すわね」

とスーパーガールが指を鳴らすと運転手側のドアが『バタン』というように開き、

犯人の男が横倒しのまま宙に浮いて出てきた。

『メグ』と呼ばれた婦人警官が一瞬驚いた目でスーパーガールを見たが

それより目の前の起こる衝撃的な出来事に目を奪われてしまい、いきなり自分の名前を呼ばれた不思議は忘れてしまった。

運転席から出てきた犯人は地上1ヤードの宙をうつ伏せにされて、その上後ろ手の姿勢で自分の方に向かってきたのだ。

まるで水面を進む流木のようなようだ。目の前に来て慌てて背中腕に手錠をはめてホツと息をつく。

何やら大きな仕事を終えたような心境になっていた。

スーパーガールはにっこり笑うとそんなメグ・レバン婦人警官に

「じゃあ、後はよろしくね」

と言って飛び立つ。あっけにとられて見上げる警官たち……

そして野次馬の群れ……

こんな地方の話だけれどアメリカ中の……

いや世界中のセンサーシヨナルな話題になるのは時間はかかるまい。

ルーク監督の家の庭に降り立ったとき、沙希の姿は元に戻っていた。

でもモバイルの中継のおかげで家に残っていた者全てが庭に出て沙希を出迎えたのはいうまでもない。

「サキ！……派手だったわねえ……」

「私、スーパーガールが誰かってわかっているのにまるで映画の世界に引き込まれていたわ。」

映画の製作に関わっているのにまるで素人ね・・・」

「サキ！これって・・・大変なことになると思うわよ」

「大変って？・・・」

「だって、ありえないことが起きたのよ。この町に世界中の目が集まると思うよ。」

それにきつとあらゆるマスコミが集まってくるに違いないわ」

「私、いけなかつたかなあ・・・」

「ううん、そんなことない。だって、サキがいなかったら

あの被害を受けた女性はきつと死んでいたでしょうね」

「そうよ。サキは気にすることないよ」

「そうね、あの女性はスーパーガールに感謝しているわね」

「まあ、何にせよ。この小さな町に世界中の関心が集まるって

かってなかったことだし、わしも望んでいたことなんだ」

「どういうこと？・・・パパ」

「サキ！わしを知る限りこの町には観光名所なんて呼べるものはないんだ。」

テキサスのひとつの町というだけでは人を呼ぶことはできない。

だからわしはここで映画を撮って少しは町の為に役立とうと思ったんだよ」

「へえ・・・そうなの」

広い居間のソファに座ったサキを中心にこうして話に花を咲かす映画のクランクインまでのゆったりとくつろげる残り少ない時間。

今夕から集まってくるであろう共演者や他のスタッフ達全員・・・

それを思うとこうして間近でサキを見つめられる幸せ・・・

少しでも長く……と思うのは至極当然のことだ。

こうして皆が見つめるサキは本当に開けっぴろげだ。

その陰りのない優しい笑顔は男女の関係なく引き付けずにはいられなかった。

この場にいる幸せは何物にも変えられない。

そしてこれから共有できる時間に一体どんなことがあるのか
わくわくドキドキ感が段々と大きくなってきた。

そして夕方になった。飛行機や車で出演者達が除々に集まってくる。

そんな彼らの目に入ってくるのが裸馬に乗り凄いスピードで

走り回ったり曲乗りをする少年のようだが栗色の長い髪が流れるようにたなびく少女の姿……

全く……立ち止まったまま動けなくなってしまふドキっとする光景だ。

少女は木に手綱をかけ庭と牧場の境にある少女より背の高い垣根を
一瞬に飛び越えて走りよってくる。

目を丸くするのは沙希のことを何も知らぬ彼ら達……。

「なあに？パパ？……」

「サキ！……皆揃ったようだから戻っておいで……」

「はい」

と返事をしてから小指を口に入れて『ピー』と鳴らすと

大人しく繋がされていた若馬が首を勢い良く振って手綱を木から放
すと

垣根を飛び越えて少女の元にやってきた。

それはそれは映画の世界にいる彼らにとっても見ほれてしまう鮮や

かさだ。

少女はヒラリと若馬に飛び乗ると手綱を操り再び垣根を飛び越える
と厩舎の方にかけて行く。

本当に絵になる……そんな思いが誰も胸に焼き付けられた。

「あの子が？……」

そんな囁きが広がっていく。

結局、今日初めてあつた彼ら彼女らに正式に主演女優のサキ・ハヤ
セ、

……アキア・ヒノを紹介したのはゆっくりと各々の部屋で体を休
め

色とりどりのドレスやタキシードに着替えた皆がパーティー会場と
なる大広間に集まった時だった。

人が持つ嫉妬やあらゆる欲望が渦巻き……鋭い眼光が周囲を飛び
交う緊張感……

アキア・ヒノを知らぬ人たちが持つ当然の心理といえよう。

けれどサキを良く知る人たちは皆知っていた。

パーティーの終わる頃にはそんな心理なんて霧散しているだろうって
ことを……

黒いタキシードに身を包んだジョージ・ルーク監督と

腕を組んで出てきた先ほどの少女……がパーティー会場に入っ
てきた。

薄いピンクのドレスがその可憐さを引き立て、

背の低さなど微塵にも思えなくなるその圧倒的な存在感……

そしてその表情に浮かぶ優しい笑顔が皆を温かく包んで離さなくな

る。

後ろに続く皆も知る監督の妻、ジーンとその娘ジェシーが監督の腕から少女を奪い去り、
しつかりと腕を組み片時も離さないし離れもしない。

苦笑いを浮かべながらも皆にアキア・ヒノを紹介するルーク監督。

「ここにいるほとんどの者は知っているが今日初めて会った者に紹介しておくよ。

私がこの1年間懇願してようやく願いがかなって私の映画に主演してくれることになった

日本の女優アキア・ヒノ……本名サキ・ハヤセだ。アキア……

」

とルーク監督に促されて

「アキア・ヒノです。これからクランクアップの日までお世話をかけると思いますが

よろしく願います」

と挨拶した沙希……と、その身に針のように降り注ぐ鋭い視線……

……

でも良く見ていると沙希がとっても面白がっているのがよくわかる。

ルーク監督の下には女優や男優達が挨拶に集まってきた。

そんな彼ら、そばにいる沙希に対してはお愛想ともいえる笑いをしたり、

『フン』と鼻であしらう若き女優達……

こうして輪の圏外から見ている沙希を良く知る者達にとって、

沙希の誰にも比較出来ぬ才能を思うと、

そんな共演者達の態度が馬鹿馬鹿しく本当につまらない人間に思えてくる。

だからかいきなりコーデリアがツカツカと彼らを分け入って行き、「ねえ、ジョージ。サキの紹介ってこんなの意味ないわよ。」

それより今日まで撮影していたサキのフィルムを見せてくださらない？」

「わかってるよ、コーデリア！わしだってこんな茶番面白くないからね。」

面白がっているのはサキだけだろうよ」

と二人してふりむくとジェーンとジェシーに両腕をとられてニコニコと笑っている沙希がいる。

本当に楽しそうだ。

そんな沙希を見てみると溜まった鬱憤がいきなり消えうせる。コーデリアにとって本当に恋しくて可愛いハンサムガールだ。

そんな沙希にルーク監督は

「サキ！今から君の今までのフィルムを皆に見せるよ」

「だってパパ・・・それって・・・」

「いや、君が反対してもサキを知ってもらうにはこれが一番だからね。」

それにこれから始まる撮影の現場をスムーズにしたいんだ」

「わかったわ、パパ・・・」

「スタッフ達が今準備しているから、それまでの間サキの笛を聞かしてくれないか」

「横笛を？・・・」

「そう、出来れば『ショウリュウマル』で出来ないかな」

「いいわよ、パパ・・・じゃあ、ママもジェシー姉さんも座っていて・・・」

その声で壁際に置かれていた椅子を瑞穂とゆりあが持ってきて二人を座らせた。

この様子を何事かと今日来たばかりの共演者とスタッフがジッと見つめる。

沙希が両手の平を上に向けて前に伸ばすと忽然と現れる1本の笛・

「ええ〜?!・・・」

と声をあげる何も知らぬ共演者とスタッフ達。後ずさる者、立っでいられなくて座り込んでしまう者・・・でもこんな様子を見て沙希を良く知る多くの者たちはニヤニヤ笑っているだけだ。

サキを知らぬ者が最初に持つ驚愕と恐れ・・・

でも沙希のことを知れば知るほど沙希に夢中になっている自分に気づく。

これは日本でもアメリカでも変わらない。特に女性達にはもうたまらない存在なのだ。

沙希は目を閉じ、静かに唇に笛をあてた。

そこから流れ出した笛の音・・・聞いたとたん、ゾゾと血液が引き、

そして凍るような感覚が全身を覆い震えが止まらない。

一体これって・・・いずれも生まれて初めて味合う感覚なのだ。

特に音楽担当プロデューサーは初めてであったこの天才にもう夢中になっってしまった。

窓の外では暗闇の中で小さな光・・・たくさんの光がまるで蛍の光のように天に上っていく。

土着の魂が天にかえっていくのだ。

笛の音が細く細く消えていった。

シーンと静まり返るパーティー会場・・・と突然皆が立ち上がった。

不思議そうに周りを見回し・・・そしていきなり盛大な拍手が持ち上がった。

沙希はその場で何度も何度もお辞儀をする。

ニコニコ笑うその笑顔・・・初めて真剣に沙希を見詰める者たち・・・

まずはその笑顔に参ってしまった。

「監督！・・・この女性は？・・・」

とルーク監督のところへ急いで近づいてきたのは今日来たばかりの共演者である男優トム・ヨークだ。

彼は映画や舞台で活躍する名バイプレーヤーだ。

アメリカインディアンの父と香港の母との間に生まれたハーフといわれている。

「どうしたんだい？・・・トム」

「いえ監督、この女性のこと知りたいんです」

「サキのことか・・・サキのことは先ほど紹介しただろう」

「いえ、この女性をもっと知りたいんです」

「それを知ってどうするんだい？」

「いえ、私の祖父に聞いたスー族に伝わる伝説のことを思い出したんです」

「伝説？・・・君のおじいさんって確か・・・」

「ええ、スー族の酋長でした。高齢ですが今も健在です。」

このテキサスの山奥で隠居生活をしています」

「伝説って？・・・いやその話は後でだ。」

なあ、皆聞いてくれ！・・・今のはサキのパワーと才能の一端だ。

今からフィルムをみせる。スタッフ達が毎日サキをとりつづけているノンフィクションのフィルムだ。

それを見てこの映画を降りるといえば引止めはしない。
帰ってもらって結構だ」

その時ルーク監督の背後から

「あら・・・」

と声が聞こえた。皆が視線を向けると白いつば広帽子にシックな薄いピンクのツーピースを着た
清楚な女性が立っていたからだ。

「あつ、君は！・・・」

「パパ、いいわよ」

と言ってツカツカとその女性に近づいていく沙希。その女性の前で
スカートを持って腰をかかめる。

ケイセル・モーガン米大統領と初めて会った時と同じだ。

そしてフランス語を知るものには判ったが

沙希が見事なフランス語で挨拶をすると女性は一瞬驚いた顔をした
が、

「おお」

と行って大きな笑顔で沙希に抱きついてキスをする女性。

沙希も負けずにキスをかえず。

そして沙希は女性の後ろのほうに声をかけた。

「沙里奈姉さん、始めまして・・・」

と日本語で言ってから振り返って杏奈に声をかける。

「杏姉！沙里奈姉さんよ！」

「ええ〜！・・・」

と行って声を上げて前に出てくる杏奈。

この様子はゆりあと翔と弓が英語で通訳しているから皆奇異な目で
見つめている。

さすがに3人ともフランス語が出来ないので沙希と女性の会話は不明だ。

女性の後ろからショートカットの女性が現れた。

「杏奈?・・・」

「あつ!沙里奈姉さん!」

走ってきて飛び込むように抱きつく杏奈。

しばらく抱き合っていたが沙里奈が両手で杏奈の肩を持って顔が良く見えるよう二人の間隔をあける。

「杏奈!あなた変わったわね。きれいになったわ。」

目も生き生きしている・・・余程毎日が張り合いがあるようね」

「ええ、毎日が楽しくて仕方がないの。でも姉さんもきれいになったわ」

「杏姉!」

「なあに、沙希!」

「沙里奈姉さんの積もるお話はいっぱいあるでしょ。」

あとで私もお話に加えてね・・・さあ、あちらでお話してきて。

私はこの方を皆に紹介するから・・・」

「わかったわ、じゃあ後でね」

そんな二人に不振そうな顔をする沙里奈・・・

そんな沙里奈をパーティー会場の隅に連れて行く杏奈。時々

「ええ〜・・・妹?・・・そんなあ・・・父親?・・・」

チラチラ沙希を振り返りながら杏奈に連れて行かれる沙里奈。

につこりと笑いながら沙希は二人を見ていたが

その笑顔で今度はパーティー会場を見回した。

「皆さん、ご紹介します。フランスの天才女優のソフィー・ジュラ

ンさんです。

彼女は若いころからトップモデルとして活躍され、

現在は女優に転向されたことは皆さんもご存知だとおもいます。

そして、フランスのジュラン首相のお嬢様としても良く知られています」

そう話を切ると皆立ち上がって拍手をする。

ルーク監督が寄ってきて握手をするとソフィーが抱きつく。

そしてすぐに沙希の手を握ってから皆に礼をするのだ。

ソフィーも会ったばかりなのに沙希に何を感じたのか……。

沙希がソフィーをジェーンとジェシーのところに連れて行き紹介すると

4人仲良く腰をかけて歓談するのにそんなに時間はいらなかった。

「さて、皆。試写の準備が出来たようだ。

撮影したノンフィクションだ。どうしてそんなことをするのか今は判らないだろうが

フィルムを見てもらえば納得するとおもつ。

トム！君の質問の答えもこのフィルムの中にある。じゅあしばらくの間よろしく」

それはこのテキサスに飛行機が着いたところから始まった。

薄暗い厩舎の中だが、奥に進むアキア。その後ろからこっそりと近づく大男。

見ている皆に最初から手に汗を握るシーンからはじまった試写。

大男が飛び掛る瞬間、

「きゃあ！」

「ああ……」

と悲鳴がパーティー会場から上がる。

だがアキアの強烈な肘鉄と首投げで大男が気絶すると

「おお……」

と言って拍手が起きたが片手で軽々と大男の襟首をつかんで運んでいくのに

至っては声を飲み込んでしまった。でもそんなことはただの序章でしかなかった。

フィルムが進むにつれ沙希の両側に座るソフィーとジェシーは握った沙希の手を固く握ったままもう離そうとしない。

フィルムはどんどん進む。無論撮影したすべてを試写しているわけではない。

でもアキア・ヒノを知るには適切なものだった。

そしてレッドの母を見つけるためにアキアの体から現れたシキという東洋の神秘。

ノワケと呼ばれるペガサス……本当にSFを見ているようだ。

その中で笑ったのはあの大きな丸い岩をアキアが蹴りつぶしたあとだ。

「あ……スッキリした……」

その行為がとんでもなく凄いものだったから余計に笑えた。

驚きはまだ続く。

アキアの作った素晴らしい機器を手に入れるために集まっていたいろん

な国の人々、
モーガン大統領がいたのにはもう声も出ない。
そして休憩時間での『ステーション』とよばれる乗り物……

「うわ〜」

という声が上がったのは、アキアが飛び上がった瞬間だ。

「スーパーガールだ！」

そんな声上がるのは当然だった。

そして

「あれは絶対に買っわ」

とパーティー会場から声が湧き上がったのはBBXの紹介があったときだ。

飛行場にバリアーが張られたときは最高潮にもりあがった。

このはしょった1時間の試写の時間、皆どっと汗をかき疲れきってしまった。

でも、最後に見せられたフィルムの中身には体が全く動かなくなる。今まで見た以上の衝撃だった。

アキアがスーパーガールに変身して交通事故の女性を助けたり車泥棒を捕まえたのだ。

シヨックだったのは足が折れ曲がったあんな凄い怪我をスーパーガールが

飲ました液体できれいに治したことだ。本当に神を見ているようだ。

試写が終わってパーティー会場に照明がついても誰も声を上げるものはない。

完全に固まってしまっている。

仕方がないのでルーク監督が立ち上がってスクリーンの前で声をあげた。

「諸君に知ってもらえたと思う。」

これがわしが1年前から求め続けた天才女優アキアのノンフィクションのフィルムだ。

真正正銘であることはアキアを知るスタッフ達が証明してくれる。

どうしてアキアを撮り続けているかは日本でもそうだったが

どういうわけかアキアが動くとき事件に巻き込まれるんだ。

アキアが事件を呼ぶのか、事件がアキアを呼ぶのか・・・両方だろ
うなあ。

だから手を惜しみなくスタッフを動員してアキアを撮り続けている」

「ジョージ！ということとは、これからも何かあるってことですか？」

「そうだ！これからも手をゆるめないで撮影していく」

「監督！俺、応援するよ・・・いや、出来れば何か手伝わせてほしい」

「なんだ君達もなのか」

「あたりまえじゃあないですか。こんなワクワクすること生まれて初めてですよ。」

彼女と共演するのも、こうして映画の撮影と一緒に出来るのも幸運
としかいえません・・・

でもそんなに事件って・・・大丈夫なんですか？」

「フッフ・・・心配ないよ。君達、アキアが合衆国に来てどれぐら
い経ったと思う？」

まだ2週間も経っていないんだよ。その間に大きな事件が2件だ・・・

「パパ！私のこと言うのその辺でやめて！」

「そうはいかない、サキ！・・・
明日のクランクインからクランクアップまではここにいる全員が家族なのさ。」

いい映画を撮るためには隠し事はしない。これがわしの映画作りの信念なんだ。」

だから君の事は全て知っておく必要がある。それに私が選んだ俳優やスタッフ達だよ。」

君のこと公表したりしない」

「そうだよ、アキア。心配しないでいいよ」

「そうよ、約束するわ。それより映画作りがんばりましょうよ」

「わかったわ、パパ・・・そしてみなさん・・・」

「それで2件の事件で何ですか？」

「1件目はいまだにニュースでやっているハワイの飛行機爆発事件さ」

「ああ・・・異次元へ行つて助かったというあの事件ですか・・・」

全くの眉唾物つて思っていたけれど、そうかアキアだったら・・・

「それで監督！もう1件は？」

「そこにいるマチルダの屋敷が強盗に襲われたことさ」

「あの事件もですか？」

「そうだよ、そしてマチルダの周りにいるのはマチルダのSPだ。ちなみにアキアの周りを囲むのはアキアのSPなんだよ」

「アキアのSP？・・・」

あつ、そうか。大統領もアキアに会いにくるぐらいの素晴らしい発明があるからか・・・。

でも、監督！SF作家のマチルダ・イルダにSPってどういうこと

ですか？」

ルーク監督はニツコリと笑って

「マチルダがファーストレディだからさ」

「ええ〜?!・・・」

と立ち上がるのは何も知らなかった者達だ。スタッフもほとんどの者が知らなかった。

呆然とマチルダを見ていたが、そのうち自然と拍手が起こりだす。マチルダも立ち上がって皆に礼をかえす。

「でも明日のクランクインって・・・何だかワクワクするよ」

「アキアがいるし、その上ファーストレディか・・・凄いなあ」

「監督！」

「何だい、コーディネリア？」

「明日のクランクインの日に例のあれをやってみたいんです」

「例のあれ？」

「ええ、女優だけのドラマづくりを・・・」

「ほう・・・で、どうするつもりなんだい？」

「やってもいいなら、心づもりを話しますけど・・・」

ルーク監督はニヤリと笑って

「いいよ、わしも見てみたい」

「じゃあ、あのビデオをもう一度見せてもらえますか？」

「すぐに準備するよ」

「OK！」

と言って立ち上がったコーディネリアが

「何をするかはこれからジョージがビデオを見せてくれるわ。それを見てから詳しく話すね」

「いいよ！準備できたよ、コーディネリア」
「じゃあ、お願いね」

女優達でつくったドラマがこうして上映された。

”天聖ルナ”英語の字幕が始まったこのドラマ、監督とコーディネリアだけの話で始まった上映会は何も知らぬ俳優達に不信感を与えていたがそれは最初だけでドラマの中に引き込まれていく。

日常の学校生活・・・主役の『レイナ・ホシ』がいきいきと描かれていた。

そして彼ら彼女らは知った。ここにいるアキア・ヒノのとてもない才能を・・・

その上あと2人の天才の演技にも引き込まれていく。

上映が終わった。監督がスクリーンの前に立ちこつ言った。

「諸君！今みたとおりだ。アキアの背筋の凍るような演技を知ってもらえたと思う。」

けれどこのドラマが女優達だけで、しかもシナリオなしのアドリブだけで演じられているといえはどう思う？」

「アドリブだけで？・・・そんな馬鹿な！」

「これ、りっぱにドラマとして成立しているじゃないですか、それを女優だけで？」

「わしは、この目で見たんだ。

アキアが若い素人同然の女優達をドラマの世界に引き込んでドラマを完成した。

ヒヅル・アマギ立ってくれないか」

隣にいる緒方翔に通訳されてひづるが立ち上がった。

「ここにいるヒヅル・アマギは日本で天才といわれる子役だ。彼女はこのドラマに出ているし、明日からの映画にもキャスティングされている。

ヒヅル！君はこのドラマに出てどう思った？」

「わたしは奇跡だとおもいました。でもあきあ姉さんのことを思えば当然だったんです。

だってあきあ姉さんのこと日本では『演技の神様がついている』とか

『日野あきあが演技をすれば全て本物になる』って言われているんですもの」

「その通りなんだ。皆にはアキアの震えるような演技力を知ってもらえたと思う。

その上彼女は日本の舞の名人でもあり、わしらはそれを撮影した」「日本のダンス？・・・監督！そんなこと聞いていませんよ！」「コーディネアが目を光らせて聞く。

何しろサキと知り合ってからもう彼女に夢中なのだ。だから何もかも知っておきたい。

「すまんすまん。何しろサキにはいろんなことがありすぎるので全てを1度に伝えることは不可能なんだ。わしらは・・・」

「わしら？・・・」

「わしとスタッフのチームという意味だよ、なあ」

「はい！もうそれはそれは凄い経験をさせていただきました」

「あんなこと2度とないと思ってましたけど、

さすがはアキア！もう毎日毎日が充実して・・・たまらないッス」

スタッフ達が口々に言う。

「わしらチームはアキアのマイを日本の小野監督のチームとは分かれて撮影したのだ。」

つまり日本とアメリカとは見方感じ方が違うだろうということと別々に撮影したんだよ」

「監督！それって……」

「ああ、日本ではもう販売されている。世界ではもうすぐだ。そしてわしはまだサキには言っていなかったが

このアメリカでマイを踊ってもらいたいと思って1日だけカーネギーホールを押さえてあるんだ」

「うお……」

とうなり声があがる。

「監督！チケットの販売は？」

「それはまだだよ。……サキ！君には内緒にしている悪かったと思っっている」

「パパ！そんなこといいの。でもこのアメリカで舞えるの？」

「ああ、そうだよ。」

でもそれを早く発表すればツアーを組んだ日本からの客に全てのチケットを奪われかねない」

「ジョージ！そんなに？……」

「そうだよ。だからまだ発表しないしチケットも販売しない」

「そんなプレミアチケットあるんだ……絶対ゆずってよね、ジョージ！」

「判っているよ、ここにいるもの優先だよ」

「やった〜」

という叫び声。

「それではコーデリア、後はまかせるよ」

「ええ、わかったわ」

と立ち上がった。

「皆！・・・今ビデオを見てもらって判ったと思うわ。

いくらアキアに引つ張られたとはいえ相手はまだ素人同然の若い女優よ。

私達はハリウッドで、舞台でもまれてきた女優よ。

負けるなんて出来ない。ねえ、そう思うでしょ」

「そうよ、私にもプライドがあるわ」

「私だって・・・」

「ソフィーはどうなの？」

「私、フランスの女優代表として負けるなんて出来るもんですか」

「私もコーデリア・ビーナスの名前にかけて『ティーチャー』役のカオル・サオトメと勝負よ」

「あら、私もよ」

とソフィー。

「アキアと勝負をしないの？」

「だって勝てっこないもの。アキアは別格よ。」

この子と勝負しようってこと神と勝負しようってことと同じだもの」

「ソフィーもわかっているわね」

「私はあの子と勝負するわ」

「私もよ」

と女優達が指さすのは天城ひづるだ。

こうしてアメリカの女優達に指摘されるひづるも天才と言われる女

優だ。

不敵に笑いを浮かべてかかっていたらっしやいと女優達を眺める。

「サキ！あなたにお願いがあるの」

「なあに、コーデリア」

「勝負の舞台として都会のカフェを設定したいの。

あなたのその不思議なパワーでその舞台を出せる？」

「カフェ？・・・いいわよ」

「OK！じゃあ、私の考えをいうわね。

今言ったように場所の設定はニューヨークのカフェ。

各々が人物設定をしてジョージに知らせておくこと。

この舞台上がれるのは女優だけよ」

「ねえ、コーデリア！私も口をだしていい？」

「サキ！何かいうことある？」

「その舞台もう少し細かい設定をしていい？」

「何か考えがあるの？」

「ええ、一人男優さんに手伝ってほしいわ」

とパーティー会場を見渡す。

「トム！あなたに手伝ってほしいんだけど」

「わたしが？・・・別にいいけど」

「じゃあ、トムがそのカフェテリアのオーナーで私のパパよ。

私は高校に行きながらお店を手伝ってウエイトレスをしているの。

そして皆はそのカフェに良く来る顔見知りのお客ってのはどうお？」

「いいわね、それ。演技がやりやすくなったわ」

「おいおい、俺達も手伝えないのか」

「えっとそれは・・・」

口ごもるコーデリア。

「手伝えるわよ」

という沙希に皆の目が集まる。

「その前にこの舞台上に上がる女優さん！手を上げて！」

女優全員が手を上げた。

「OK！16人ね。ひづるちゃんは父親の転勤で初めてアメリカにやってきて

まだ英語を話せない留学生ね。だから日本語でいいわよ。通訳はゆり姉！お願いね。」

ひづるちゃん以外の私も入れての15名と男優さん15名とペアになるのよ。

男優さんの数のほうが多いので喧嘩しないようにクジ引きよ。

そしてどの女優さんとペアになるのかもクジで決めるの」

「それからどうするんですか？」

なんかワクワクする。

「勿論、男優さんは舞台上に上がることはないわ。

ただ舞台上の女優さんと電話でやりとりをするだけ。

電話の内容は仕事の話でも良いし、デートの話でもいい。

女優さんがその場の心の状態で話をするから電話が続くようにしてほしいの。

男優さんに話の内容を選択する権利はなし、

だから彼女の話の内容を把握しなければ話は続かないわよ。

女優さんは電話の話が続かなくてもそのまま話をしていいけど、

ルーク監督とゴードンプロデューサーが駄目だと判断すれば

その女優さんは舞台を退かなければならない・・・これでどうお？」

「もう・・・サキって本当に天才ね。・・・ねえ皆、今のサキの話でいい?」

「OKよ・・・」

「いいわよ」

男優達がクジ引きに一喜一憂している間にジエシーとソフィーの間に座る

沙希のもとに杏奈が沙里奈を連れてきた。

「沙希!」

「なあに?杏姉・・・」

「沙里奈姉さんが沙希に話があるんだって?」

「沙希って呼んでもいい?」

「あたりまえじゃないの、あなたは私の姉さんなのよ」

「姉さんって言うてくれるの?」

「ええ」

といて立ち上がって沙里奈に沙希が抱きついた。

横で通訳する緒方弓も明るい笑顔で二人を見つめている。

ドアのノックの音で目覚めた沙希が

「うーん」

とひと息、伸びをすると

「どうぞ」

と声をかける。

入ってきたのはミランダ達6人のSPだ。

「おはよう沙希！」

「おはよう、皆！」

「昨日は大変だったわね」

「皆もそうじゃない？」

「私達は昨日は完全に傍観者だったわ」

「たまにはよかったでしょ」

そういう沙希にミランダは

「沙希！久しぶりに元気をちょうだい！」

「いいわよ」

と両手を広げる沙希。

その上から覆い被さるようにミランダがキスをする。

元気になったら交代だ。

「沙希！入るわよ」

と声をかけて次に入ってきたのは

杏奈と沙里奈の姉妹だ。

部屋の中の様子を見て

「あらあらやっているわね」

といって笑うのは杏奈だが沙里奈は驚いて体を固くする。

沙里奈もパリに長年住んでいるが頬やおでこにキスするのは常識だが

恋人でもないのにましてや女性同士？でこうして目の前で濃厚なキスを見るのは初めてだ。

「次は私ね」

とツカツカと寝ている沙希に抱きつく杏奈。

「今日1日の元気をちょうだい」

といってキスをするのだ。

不思議な事に昨日の疲れで目の下に隈をつくっていた杏奈なのに

急に元気に跳ね起きた杏奈にはもう疲れの象徴などどこにもなかった。

そこにあるのは晴れやかな笑顔だけだ。

「さあ、姉さんも沙希に元気をもらいなさい。パリからの旅の疲れなんて消えてしまっわよ」

と杏奈に言われ沙希に近づいていった。

「あら、皆早いわね」

という声で沙里奈が振り返ると昨日紹介されたコーディネリア・ビーナスが

数人の女性を連れてたっている。

その中に沙里奈がファッションアドバイザーとして雇われているソフィーもいた。

コーディネリアはニッコリ笑うと

「サリナだったわね。早く沙希にキスをして元気をもらっちゃいなさい」

といわれてベッドの中で両手をあげている沙希に抱きつく。

おずおずとしたキスだったが、いきなり口から何かが入ってきてシヨックで体の力が抜けてしまった。

けれど何秒もたたないうちに沙里奈の体の細胞一つ一つが活性化されいきなり飛び起きた。

「なによ！これ・・・」

沙希と初めてキスしたものと同じく発する言葉だ。

「どうお、沙希ちゃんのキスって凄いでしょ」

と言ったのは沙希の姉のジェシーや緒方翔・弓姉妹、瑞穂、ゆりあ、綾美・琴美姉妹

そしてひづるも連れて部屋に入ってきた静香だ。

静香と緒方翔・弓姉妹は今日日本に帰国するはずだったが、今日のシナリオのないドラマを見たくて急遽変更して明日の帰国となった。でも翔はワシントン支局の設立の手伝いも兼ねて夏休みにアメリカに勉強に行く予定の希佐と化粧品会社をやめて本格的に杏奈の手伝いをする事になった茜を引き連れて来週にも再渡米してくることが決まっている。

ジェシーと琴美はシナリオのないドラマを見てからすぐにもワシントンに行くことが決まった。

支店事務所の確保とB B XとB B X - ?を製作する会社の選定をホワイトハウスと共に行う必要が昨日ホワイトハウスから入った電話で決定したからだ。

「ねえ、コーデリア姉さん。あの人達も連れてきてあげたら？」と静香が言ったのは昨日来た女優達のことだ。すでにスタッフの女性達は次々とこの部屋に入ってきていた。

「そうね、誰か呼んできて」とスタッフに頼んでから

「さあさ、終わった人は出て行く。下で食事の用意ができたそうよ。

こんな人数だから順番に食事を終わらせて・・・ってジェーンが言っていたわ」

こうして沙希が食事にありつけたのはそれから30分は経っていた。

「さあ、ここだよ」

とルーク監督が撮影隊を連れて行ったのはルーク監督の牧場から10マイルほど離れた山の裾野に広がる小さな牧場だった。

「ここが主人公とその姉妹の住む家だよ」

「うわ〜」

と喜んで走って行って舞台となる家に飛び込む沙希、そんな子供のような動作に

見ている皆もなんだかおかしくなっつてつい笑ってしまうシーンだ。

「沙希姉さんらしいわ」

ポツンというひびくのを聞いたコーデリアが隣に立つゆりあに目を合わせる

すぐにひびくのを言葉を訳した。

「ねえ、ひびく。サキっていつもあなの？」

「ええ、私も子供だからサキ姉さんの子供っぽい悪戯にだまされることはないけれど」

家族の皆は本当に大変なの。ねえゆりあ姉さん」

「そうなの、コーデリア。この前言ったけれどサキって何かやっても事後報告だし、

又巻き込まれる事件って信じられないほど凄いものよ。

だからなのか時々皆を自分の世界に引きずりこんでうつつぶんばらし。

私なんてイチコロ。あの天才女優といわれる薫姉さんも簡単に引っかかってしまうのよ」

「聞いているだけで大変な子よね」

「コーデリアもサキに踊らされないでね」

「わかった用心しておく。皆にもそういつておくわ」

「サキ！もう直ぐマスコミの連中が今日のクランクインにやってくるから」

カフェの舞台を出しておいてくれないか」

「わかったわ、パパ。急いでカフェテリアを出しておく。

そして、今夜にでも消せば明日からの撮影に邪魔だから

美術のスタッフが徹夜で解体したといえ言訳は通じるでしょ」

「さすがはサキだ。何もかも承知しているな・・・あはははは」

「もうパパったら」

とルーク監督を睨むがそんな行為も可愛くてしかたがない。

ここまでくると沙希に反感を持つものはいない。

特に女優達は今朝の沙希のキスの洗礼を受けて以来夢中になっていて

ひと時も沙希を見過ごすまいと必死に目で追いかけている。

これからどうなるのかとドキドキしながら見守っているのだ。

沙希がフーと息を吹くといきなり何も無い空間にログハウス風の建物が現れた。

「うお・・・」

という声があがる。

皆は恐る恐る建物の中に足を踏み入れてカフェの中を眺めた。

カウンターの向こうからコーヒーの良い香りがしているのが不思議だ。

いきなりあきあがカウンターの中に入った。

とたんに薄いブルーのワンピースに変わる。白いエプロンをしているから

ウエイトレスの制服なのだろう。

昨日あきあに初めて会ったスタッフや男優女優達・・・

話を聞いたりフィルムを見せられたりしていたが、こうして實際目の前であきあの不思議な魔術のすさまじさを見せられると

もう呆然として言葉も出ない。

あきあは沸騰した湯をサイフォンに入れてから

「ねえ、パパ！」

とトムに声をかける。

一瞬ビクツとしてから呆然と沙希を見ていたトム・ヨーク、でもさすがは名バイプレーヤーと言われた男優だ。

あきあを見て自分を取り戻しニッコリ笑うとカウンター隅にあった濡れタオルを手に取ってカウンターを拭きだした。

「ねえ、パパったらあ・・・」

甘えた声でトムを呼ぶあきあ。

「リズ！そんな甘えた声を出しても駄目だよ。どうせ小遣いを上げてくれという催促だろ」

と言いながらあきあ・・・いや、リズの顔を見ずにカウンターを拭き続ける父親のジム・・・のバークレー父娘の会話だ。

「もう・・・」

と喋ってしばらくコーヒーサイフォンを見ていたが上目遣いでニヤリといたずらっぽく笑う。

その目の前のシナリオのないお芝居についてワクワクと見つめてしま
う全員。

なるほど凄い演技力だ。それが一番判るのがトム。

あきあの・・・いや、演技の上のリズ・バークレーはいまや自分の
本当の娘なのだ。

それがピンピンと伝わり、その演技に引き込まれていく自分・・・
これはもう次元が違う演技力・・・全く恐ろしい。

「ここまででいい？監督！」

と声を上げたあきあにルーク監督は周囲を見回し、ニヤリと笑って
から

「あきあ・・・」

と声を上げた。

「まだ駄目だよ。皆まだ納得していない。もう少し続きをみせてく
れないかな」

「そうよ、サキ！中途半端はいけないわ」

コーディネリアだ。

「OK！」

といってクルリと向こうを向き、すぐにこちらに振り向くと
もうあきあがリズに変わっていた。雰囲気が全然違う・・・。

コーヒーサイフォンから温めたカップにコーヒーをつぐリズの閉ま
った口からペロリと舌がでる。

「ねえ、パパ。私が入れたコーヒー飲んでみて」

「リズがくれたコーヒー？・・・何か後が怖いなあ」

「いやな、パパ」

と言いながらカウンターにコーヒーカップを置くリズ。

「あら？、まただわ」

「なにが？」

と隣に立つソフィーに聞くコーデリア。

「彼女の口から舌がペロつと出るのよ」

「ふうん。それってくせかな」

「くせ？」

「そう、サキにはそんなくせはないけれど・・・」

「だったらそれって・・・」

二人は顔を見合わせて

「リズのくせ？・・・」

呆然とリズを見つめなおす。

「どお？コーヒーは・・・」

「ふうむ、とつてもうまいよ。・・・でもこの味は・・・」

「うん、さすがパパね。・・・これママの味よ」

「ママの味って・・・リズ！、お前・・・」

「ええ、ママの味って知らないはず・・・パパはそう思っているでしょ。」

そうよね、パパもママも私がいたのでは生活が出来ないからって幼いときから私は寄宿舎生活・・・時々会いに来てくれるけど、とうとう3人で食事を囲むってことなかったわ。

ママが死んだときだって私の生活は変わらなかった・・・

結局パパが迎えに来てくれたのはママの葬儀のあとよ」

「仕方なかったんだ・・・いきなり交通事故でママが天国に召されるなんて・・・」

だからパパは自分でもどうしていいのかわからない・・・混乱していたんだ」

「心配しないで、私パパのこと判っているんだもの」

「本当かい？リズ・・・」

「ええ、パパ！子供って・・・特に女の子ってとっても鋭いのよ。親の心子知らずっていうけれど、本当は逆だわ。・・・ハイ！」
とカウンターの後ろから出してきたのは古びた1冊のノート。

「何だい？それは・・・」

「ママのレシピ帳よ」

「カレンのレシピ帳？・・・」

「そうよ、ママがお店に出すように考えていたケーキのレシピ帳。ママの遺品を捜して出てきたの。」

一番最初のページにママのコーヒーの入れ方が書いてあるわ」

メガネをかけてノートを読み始めたジム。

そんなジムに

「ねえ、パパ。私欲しいドレスがあるんだ。買ってもいい？」

「ドレス？いくらするんだい？」

「100ドルよ」

「100ドル!？」

と一瞬間を上げてリズを見たが、ノートを見つめなおして仕方ないかとワイシャツの胸ポケットから100ドルを渡す。

「ありがとう、パパ」

といいながら100ドルにキスをするリズ。

「それともう一つ、明日休むからね」

驚いて顔を上げるジム

「休むからねってリズ!・・・明日どこへいくんだ!」

「ふふふ、買ったドレスを着て勿論、ダンとデートよ」

「ダンとデート・・・待て!リズ!男とデートってまだ早い

！そんなこと許さん！

「……金を返せ！」

「きゃはは……もう遅いわ、パパ」

と笑いながら走り出るリズ。

シーンとするカフェの中……やがて

「うわ……」

という叫び声とともに拍手がおこった。

ジム役のトムはがっくりとカウンターの椅子に腰を落とした。

トムのマネージャァーが冷たいお絞りを渡す。

「監督！アキアに関することで昨日聞いたことって全て本当だったよ」

「あっはははトムも胃を脱いだようだね」

「降参ですよ。今は冷や汗タラタラってところでしょ。とにかく少し休憩させてください」

「OK！いいよ。……おーい、サキー！」

カフェのドアから顔を出した沙希。

「なあに、パパ！」

「これからの皆の演技、フィルムに残すから『ステーション』を12台出してくれないか。それと瑞穂とゆりあ、NO1に乗ってくれるね」

頷く二人。

「じゃあ、瑞姉」

と小さなプラスチックのかばんを瑞穂から渡された沙希は表に持つて出る。

当然全員が表でまたも沙希の不思議を目撃することになる。

もう驚きの連続だ。声が上がってくるのも仕方がない。

ふっと消える『ステーション』の姿、その時マスコミの車がつめかけてきた。

「間一髪セーフか」

と隣のアレックスにいうルーク監督。

「良かったじゃないか、ジョージ」

「そうだな・・・、これから楽しみが一杯だよ」

とアレックスの肩を叩くジョージ。

「あつ、アキア・ヒノ！」

と叫んで駆けてくる記者達、その数200人以上・・・

さすがにジョージ・ルーク監督のクランクアップの日だ。

「監督！ 凄いメンバーですねえ、コーディネア・ビーナス！・・・あなたもですか」

「あつ、ソフィー・ジュランもいる」

と叫ぶように大声を上げる記者達の両手にはメモとペンがある。

「皆さん、どうしたの？ そんなに汗をかいて・・・」

「いやあ、今日がクランクインの日だと知っていましたから」

監督の家に行ってみればもう誰もいないでしょ。もう慌てましたよ」

「どうしてこんなに早いですか？」

「ひどいですよ。今日は大切な日じゃないですか」

非難するような目がつい、あきあに向けられる。

「あら、私のせいじゃないわよ。でもあの記者会見の時に言ったはずよ。」

今日から追いかけて・・・」

「じゃあ、あれって冗談じゃなかったんですか？」

「あたりまえよ。でも第一弾は時間に遅れなかったことで皆さん合

格ってどこかしら」

「やれやれ、合格点ですか……フー……これから大変だ……」

「ふふふ……あの人達、サキが相手で勝てると思っっているのかしら……」

「私関係者で良かったわ。これから毎日こんな面白いものが続くと思うと……」

フフフ……」

「ソフィー……あなたも……ってことかしら
とココソコ話す二人。」

「さて、今日は皆さんアキアから合格点をもらったということであ面白いものを見せてあげよう」

「面白いもの？……」

「ドラマだよ……シナリオのないドラマ……」

「シナリオのないドラマ？」

「そうだよ、女優達一人一人が主人公になる」

「それって……」

「そう、我国では初めての試みだよ。諸君達もここにいるスタッフ全員も……」

俳優達でさえもね。……いわば奇跡への挑戦なんだ！」

「それ、俺達が見られるんですか？」

「そうだ。だから一つ約束をしてほしい」

「約束って何ですか？」

「声を上げるな！……ということだ。ドラマの世界に入らなければ芝居は出来ない。」

それだけ神経を使う。

大げさに言えば全身全霊を傾けなければドラマの世界に入っていけ

ない」

「それと建物の中には入らないこと」

とこれはあきあ。

「でも、中に入らなければ・・・」

「大丈夫、この建物の向こうとあちらは筒抜けになっているから・・・」

「」

「ええ〜」

と思う関係者だがあきあの言葉に走っていった記者達数人が

「本当だ！中が見えているぞ！」

という言葉で全員が走っていく。

どうやら良い場所をとるために急いだのだろう。

振り向いた沙希がスタッフや俳優達皆に『パチッ』とウインクをする。

（ああ、あきあはあの不思議なフォーンスでこのカフェを改造したのだ。全くなんて子なのだ）

そう思うのは当然であった。

「さあ、みなさん。準備しましょう」

と言って着替えとメイクにロケバスの中に入っていくあきあ。

結局、女優達がカフェに登場したのは30分後だった。

各自いろんな洋服やメイクを決めている。

ただあきあだけはエプロンをつけたウエイトレスの制服のままだ。

「じゃあ、登場するタイミングは打ち合わせ通りね」

「OK！判ったわ」

女優たちの返事にまずはあきあが舞台上がる。

そして、この舞台、記者達に・・・

いや、ここにいる全員にとって一生忘れることがない伝説の舞台となった。

.....

記者達、もう目が点になったままだ。

いや舞台上にいた女優達、脇役の男優達にとってさえも夢のような時間だった。

日常の世界を演じることほど難しいものはない。

それを誰もが信じられぬほど自然な演技をしていた。

いや、これが演技というもののか・・・。

天才といわれるコーデリア・ビーナスにしてもフランスの新星ソフィー・ジユランにしても

今までいろんな演劇や映画に出演してきた女優・男優達もこんなこと初めてだった。

これは目の前にいる東洋から来たこの少女のような女優によって

この世界に引き込まれた結果だとわかっていた。

全くなんという女優なのか・・・女達は男達の目さえなければ目の前にいる女性に飛び掛って、

朝のようなキスをせがみたいと言う欲求を抑えこむのに身を震わせていた。

「OKだ！・・・凄かったよ。なあアレックス」

「ああ、わしはこの場にいる幸運を神に感謝するよ」

といいながらルーク監督とゴードンプロデューサーが入ってきた。

「私達もですよ。ねえマチルダ」

「私、映画がとても好きだったけれどこんな初めてよ。ここにいてよかった……」

カフェの片隅で椅子に座ってみていたジーンとマチルダがそういう。

「私達、映画の撮影って初めてなんです、こんなこと時々やっているんですか？」
という緒方翔。

「とんでもない、私達だって初めてよ。」

これも皆、サキ……いいえアキア・ヒノという天才女優のせいよ」

「そうよ、私も自分自身こんなこと良く出来たと思っっているわよ」とソフィー。

「私、この舞台にあがるまでドキドキだった。こんなことできるのかと思っただね」

でも1歩踏み込んでしまうと不思議、次から次から言葉が浮かんでくるの」

といいながら女優達、もうあこがれの目であきあを見続ける。

「ねえ、あなた達の感想も聞きたいわ」

と記者達に目を向けてそう言ったのはコーデリア。

「もう、呆然自失ですよ」

「わし、皆の実力を過小評価しとったみたいじゃのう」

「そんなことないわ。私達の実力ってあなたの思うとおりだと思うわ」

「えっ？……じゃあ……」

「そうよ、あなた達が追いかける女優が私達の能力をより高く引き

あげてくれたのよ」「
と言うコーデリアの視線の先には皆に囲まれているあきあの姿。

「私、選ばれてこのハリウッドに来られた喜びは言葉につくせません。」

でもこの映画の主演にアキア・ヒノがおられた幸運はいくら神に感謝しても感謝しきれないのです。

これで私に目標が出来ました。彼女です・・・彼女が私の目標です。

とてもとても彼女のようにはなれませんが・・・」

ソフィー・ジユランがこういうのだ。

女優や男優達はそれぞれ違う考えはあろうが想いは同じだ。

「さあ、記者の諸君！私が何故この1年間、
彼女を私の映画の主演にと懇願し続けたかがこれで判ってもらえ
と思う。」

今これを見たことで諸君達はこれから競って毎日のようにこの現場
に来るだろう。

そこでこれから言うことを守ってもらいたい。これはわが国の超法
規的決定事項だ。

ここで見聞きするものの中で公表してはならないものがある」

「超法規的決定事項？」

「公表できないものがある？」

「それはどうということですか？」

「私から聞くより直接ある人物から聞いたらいい・・・

シズカ！頼んでおいたこと用意できているかい？」

「ええ、勿論！」

「数は足りるんだね？」

「300台持つてきたから大丈夫よ」

翔の通訳でそう答えると瑞穂達、女達の手によって1台1台記者に配りだした。

「これは見たとおりモバイルです。ですがこれはある人によつて発明された画期的なモバイルです」という静香の言葉を翔が通訳する。

「これがですか？」

「ええ、このモバイルを求めて先日、各国の航空会社と米国のトップが集まって国際会議が開催されました」

「国際会議？・・・そんなこと知らされてないぞ！」

「それは当たり前のことです。テロの危機が叫ばれている現在、国際会議のことを公に出来ないのは皆さんにも判る筈です」
「そう言ったのは緒方弓だ。」

「じゃあ・・・」

「ええ、大統領も来られていたのです」

ザワザワとその場の雰囲気騒がしくなる。

「すいません、その発明した人物とは？・・・」

「それは私の口からいうより、ある人から聞いてください。
そして今配ったモバイルは皆さんの会社がお買い上げになったものですから」

自由に使ってもらつて結構です。さあ、モバイルの使い方はベスの役目よ」

「OK！わかつたわ」

ロス婦警であるベスが皆の前に立ち、少し早口だがはっきりと隅まで聞こえる声で説明を始めた。

ザワザワしていた記者達の話声が急に引き静かになった。

記者達は一言も聞き漏らすまいと必死に聞いているのだ。

「……以上です。操作は難しくありません。」

では、実践のため今から言うIDを打ち込んでください。

なお、このIDは今回だけのIDです。次に打ち込んでも繋がりません。

念のため……では、いいですか」

とベスが言うIDを打ち込む記者達。

そして

「あっ！」

という声がそこら中からあがった。

自分の持つモバイルの液晶画面に映ったその人物とは大統領だったからだ。

「マスコミの諸君！今、君達の思っていない展開になって驚いていると思う。」

こうして君達と会話ができるのも……」

「えっ？会話って？」

記者の中の一人が叫んだ。

「君はXX社のウイル・カーソン君だね」

大統領は先ほどモバイルと共に配られ、自分がサインをして胸につけた名札を見て言った。

この名札が明日からこの現場に入れる証明書となる。

「あっ！……ハイ！……」

慌てて返事をするカーソン君。

大統領はニヤリと笑ってから

「このモバイルのおかげで私はテロの恐怖に犯されることなく諸君と自由な会見が出来るようになった。」

自動に設定していれば声を出した一人一人のモバイルに映像が切り替わるのだ。

今指先一つで今壇上にいるベスからのモバイルの映像で固定もできる。

そうすれば今までの記者会見と同じだ」

「凄い！」

「こんなものが発明されていたなんて……」

「そう思うだろう……私だってあの国際会議で知ってからなのだ。

そして諸君も薄々判ったと思うが、これを発明したアキア・ヒノに感謝したいね」

大統領の言葉で、やはり……と舞台上で俳優やスタッフ達に囲まれている

アキア・ヒノに視線がいく。

こんな可愛く可憐な少女に見える女性が？……と誰しもが思うことなのだ。

「このモバイルの別の機能のことを少しだけ言っておく。

約10光年先までロケットの追尾装置として使える。

NASAはこれからこのモバイルを使うことが決定しているから諸君もそのモバイルで宇宙からの光景を見ることができ」

大統領の話にはもう啞然として言葉も出ない。

「このモバイルはアキアが日本である事件に遭遇してその必要性から発明したと聞く。

そしてあきあは私の妻が強盗にあったことからある発明をした。

私自身としてはこのモバイルよりも凄いと思う」

記者達は騒然とする。

「大統領の妻ですと?・・・」

「ファーストレディじゃないですか」

どうして今まで黙っていたのか・・・それより知らなかった自分に腹が立つ。

「あははは・・・」

「あははじゃあ、ないです!」

とつい記者達から文句が出る。

「アイム・ソーリー」

と謝ってから

「妻は今諸君の目の前にいる、SF作家のマチルダ・イルダだ。

マチルダとは幼馴染であり、最近あることで再会して結婚したんだ。

マチルダの意向もあり今まで黙っていた。

マチルダとの結婚発表はいま少し待っていてもらいたい。

ルーク監督の映画撮影が終了してマチルダがワシントンに来てから結婚発表だ。いいね・・・」

「わ・・・わかりました」

記者達はそういう他はない。その約束を破ればもうこのアメリカにいられない。

いや、この地上で安住の地そのものがない。

「それでは、大統領が凄いと云った発明品というのは?」

「それは後でルーク監督にこの間の国際会議の様子を撮ったフィルムを

見せてもらうんだな。・・・それは物凄いものだ」

そう大統領がいうことで期待が高まる。

「その発明品のことはどんどん書いてもらっていい。」

これは宣伝という事ではない。このアメリカ国民にとって素晴らしいものだ」

と言ってから表情を一変させ厳しい顔で

「これからが肝心なのだ。実を言うとこの記者会見を開いたのも諸君にこれから言うことをよくわかってもらうためだ」といって言葉を切った。

記者達は大統領が何を言うのか息をのんで身構えをする。

「諸君がこれから目にする事と耳に聞くこと全て真実だと断言する。

アキアは神に選ばれたただ一人の人間で、この地球上でどんな男や女より強い女性でもある。

ただアキアの持つパワーやフォースというものは一般に知られたら困るのだ。日本でもそうだった。

アキアの事を知るのは一般の人間よりも君達マスコミのほうが多い。

そのマスコミが協定を結んでアキアの力のことは秘密としていた。

このアメリカでも同じだ。いや世界中でもこれから同じとなる。

もしそのことを書いてしまったらCIAやFBI、KGBやイギリス情報局・・・

各国の情報網でいくら逃げても安住の地はないものと思ってもらって良い」

それは凄い内容だった。

言論の自由と声をあげたかったが、もうCIAやFBIの目が光っている。

そう思っていていだろう。

「アキアのパワーの一端は彼女が日本を飛び立ってすぐに発揮された。

あのハワイでの爆弾テロ・航空機爆弾テロ、妻の家への強盗団襲撃。そして諸君がもっとシヨッキングだと思うのはあの車強盗を捕まえたスーパーガールのことだ」

記者達は大きな声をあげて全員が立ち上がった。

実をいうと皆このテキサスに乗り込んできたのはジョージ・ルーク監督が

恋焦がれた日本の女優を主演にして撮影を開始するという話題を追つての事だったが

最初聞いた時は眉に唾をつけた噂話・・・テキサスにスーパーガールが現れて

車強盗のカーチェイスに巻き込まれ重症を負った女性をそのパワーで治療し

車強盗をも捕まえたという事件を調べて記事にするよう会社の上層部から強要されたからだ。

今の今までエープリルフルにはもう過ぎた話題・・・誰かの冗談が膨らんだからだと思っていた。

確かに大統領の口から聞くと本当のことだと思われるが自分の目で確かめなければ信じられない。

記者達の心を読んだ大統領が

「私の会見はこれぐらいにしよう。あとは諸君の自分の目で確かめることだ」

と言ってモバイルを切った。

その場の雰囲気騒然となった。

「ルーク監督！今の大統領の言葉はどういうことなんですか？」
そう声をかけるものがいた。

「それは今から諸君が目にしてその体で味わうことなんだよ。だが公表は絶対避けなければならない。わかったね・・・約束だよ。

もし、それが破られるようなら大統領が言ったように安住の地はない！」

そう言つて記者達を見渡してから

「サキ！そろそろカメラマン達をおろしてくれないか」

「はい、監督！」

と答えた沙希だが自分の事を公に話されることが本当は嫌で嫌でたまらない。

それが判る女達は沙希を守るように取り囲んでいた。

沙希が五芒星を宙に描き真言を唱えると何もない宙から丸い物体が12個あらわれ

スーっと着地したのだ。

何も知らぬ記者達は実際目の前で目撃すると震えが来て止まらなかった。

その丸い球体から撮影器具を持って降りてきたのはスタッフ達だ。

「今見ての通り私のチームは先ほどのドラマをこの『ステーション』と呼ばれる乗り物に乗つて

撮影していた。

『ステーション』はここにいるアキア・ヒノが発明した乗り物だ。動力はなくこのアキアのフォースで全てを動かす。

それも異なつた次元からの撮影なので障害物はない」

記者達にとつていくら世界のジョージ・ルークといつてもにわか信じられない話だ。

「異次元ですつて・・・」

思わず苦笑する記者。でも監督の思わぬ言葉で皆が立ち上がった。

「話で聞くよりもその身で体験する方がいいだろう。アキア……頼む」

「はい！パパ」

とゆりあが持つてきたケースの改造型に真言を唱えると

飛び出した12個の球体が宙に浮き、大きくなって降りてきた。

24台の球体を指差して

「2回に分けての乗り組みOKだ。1台の定員は5名……さあれッツゴー！」

まるでアリの子が群がるように『ワツ』と『ステーション』に走る記者達、

あっというまに24台のステーションが埋まってしまった。

残念そうに外から撫でる残された記者。

「皆離れなさい！……アキア！」

「はい、じゃあ行つてきます」

24個の球体『ステーション』と共に飛び立つあきあの姿に

「ほ……本当だ！……アキア・ヒノがスーパーガール！」

宙で消えた『ステーション』とあきあの跡を呆然と見つめる残った記者達……

もうすぐしたら自分もあれに乗れる……そう思うとワクワクとしてみよう。

・ 第一陣が戻ってきたのは、それから30分も経つただろうか……

それぞれがとんでもない体験をしたという表情で降りてきた記者達・

・
入れ替わるように残っていた記者達が乗り込むと人数の加減で空いていた『ステーション』を見て

「監督！俺も乗っていいですか？」

「私だつて！……」

男優も女優も、そして初めてであるスタッフ達もルーク監督の表情を見て

急いで『ステーション』へと走っていく。

精神的な疲れなのかどつきかりと椅子に腰掛けた第一陣の記者達ももう呆然と

飛び上がる『ステーション』とアキアを見上げながら

「なあ……俺達、本当に凄い事を経験したんだなあ」

「ああ、二度とあるまいよ」

「俺、今日からアキアを追いかけるぜ」

「でも、日本の記者達がアキアは神出鬼没だつて言っていたぜ」

「それはそれで面白いさ。今日初めてアキアの演技を見ただけだ

あのぞつとする演技で俺達にどのようにして対応するのか味わってみたいんだ」

「きつと苦労すると思うよ」

「あつははは……苦労というよりもわし達じゃあ相手になるまい」

「アラン、それでもいいさ。あんな女優、俺の記者生活で初めてなんだ」

「記者生活で初めてだつて？……そうではあるまい。

わしは50年映画や舞台を見てきたがこんな女優はいなかった……

いや女優というより人としてだ。

先ほど大統領がアキア・ヒノは神に選ばれたただ一人の人間で

どんな男女より強いと言っていたがまさにその通りじゃろって」

「俺だってそう思うぜ」

「奇跡のような演技力……」

『全身全霊を傾けなければドラマの世界に入っていけない』
と、ジョージが言っていたがこれもアキアがいてこそじゃ。

アキアがいなければいくら天才コーネリア・ビーナスでもあんな演技は出来まい」

「アラン、俺はそれよりこれだ」

と大事に持っているモバイルを示す。

「いくらエジソンだってアインシュタインだってこんなもの発明する頭脳はない。

それにあの『ステーション』……凄すぎるぜ。

彼女がいなければ異次元？……あんなもの絵空事だと思っていた。

それを体験するなんて今の今まで夢にも思っていなかった。

それにだ、大統領の最後の言葉……このモバイルよりも凄い発明
？……

もう何も考えられないほどドキドキものだぜ」

「わしは仕事ばかりして家族に捨てられた哀れな男じゃ。

この先のことを思うとやりきれなさ募るばかりじゃったが

そんなわしにも光が現れた。決心した……わしは彼女を見続ける
……」

「ああ、俺だってそうだ。この間日本の記者が言っていた。

アキアのことにはマスコミで協定を結んであることを隠しているって
……

何を馬鹿な！……と思っていたが事実だった。彼女のあのパワー

のことは絶対に書いてはいけない」

「そうじゃ、世の中には悪い奴が五万といる。アキアを利用しようとするかもしれん。」

まあ彼女に勝てる奴なんていないがどんな卑劣なこともしかねん。天才女優・・・ソフトの開発・・・それだけで充分じゃ」

「アラン!・・・帰ってきた!・・・」

見上げる真つ青な空から24個の球体が静かに下りてくる。その上空ではトンネルを閉じるアキアの姿が小さく見えた。

『ステーション』から出てきた乗員達がアキアの姿を追いかける中、地上に立ったアキアを女優やスタッフの女性達・・・

どういうわけか女性記者達も嬌声をあげてアキアを取り囲んでいる。そして女優達がまず一人一人アキアにキスをせがみその背後からは2、3人の女性スタッフが女優を支える・・・そんな光景が順番に繰り返され、女性記者達までもがその輪に加わっているのだ。

キスを終えた女性記者達の驚いたような目・・・、多くの男性達はその輪から1歩も2歩も離れてただ見つめるだけ・・・
こんな稀有な光景がそこにあつた。

結局騒ぎが収まったのはそれから30分も経つた頃か、全員が落ち着きを取り戻し・・・まずは記者達から声があがった。

「アキア・ヒノ・・・」

「アキアでいいわ」

「OK！アキア・・・君のおかげで大変な体験をさせてもらった」

「アキアに礼かい？・・・」

「ジョージ！そうじゃよ。わしらにとってこんな奇跡の体験二度とはないじゃろうて」

「ルーク監督！聞きたいことがあります！」

「何だい？」

「先ほど大統領が最後に言われたあの・・・」

「アキアが発明した凄い発明品のことだね」

「はい！・・・そうです」

「では・・・」

と手に持つ1本のテープ。

「このテープはこの間の国際会議の様子を映したものだ。会議の様子
子が全て入っている。」

諸君の期待をするものは後半だ・・・後半からでいいかい？」

「いいえ、出来れば最初から・・・克蘭クインの日になんです
が・・・」

「ははは・・・いいよ。最初からこのことは予想できたからね。撮
影開始は明日からだよ」

ルーク監督はそう笑ってからあきあに向かつて

「アキア！これだけの人数が入るシアターを頼むよ」

「判ったわ、パパ」

アメリカ人から見れば東洋の神秘的な呪文である真言があきあの口か
ら出ると

突如として周りの世界が変わった。

『はっ』と息をつく間も無く映画館の観客席に座る自分を発見する全員。

「パパ！いいわよ」

と言う声でルーク監督はスタッフ達にフィルムの上映を命じてからあきあを取り囲む全ての女性達に少し苦笑いをしてから座り込んだ。

場内が暗くなり上映が始まった。

国際会議というからどんなものかと思っていた記者達、

本格的・・・というより普段の会議でもこんなに？・・・

と思うほどの多くの各国代表の人数を見て驚きの声をあげてしまう。

フィルムは進む・・・記者達は後半に期待をしていたがその期待は大きく外れた。

実をいうと最初から夢中になってしまったのだ。

モバイルの説明は先ほどロス市警のベスという婦警から受けたが、でも映像を伴うあきあの説明のほうがとにかく判り易かった。

そして後半の映像・・・それは大ショックだった。

はつきりいうとあのニューヨークを襲った激動のテロの1日・・・記者としてというよりこのアメリカに住む一人の人間としてあの日依頼の衝撃だった。

BBX・・・あきあが作ったその機械がつくるバリア・・・

SPの一人が放った拳銃の銃弾をそのバリアが巻き込み、

ドアを傷一つつけることなく廊下に落ちた衝撃の映像・・・

それが記者達に生唾を飲ませ、息をする行為さえも奪い去ったのだ。

大統領の言ったモバイルよりもこのBBXのほうに食指が動く・・・
納得の言葉だ。

驚きはこれで収まらない・・・DNAの検出がわずか1分だって
?・・・

ドアを開けるキーの一つとしてのDNAの採用。

犯罪事件にも関わる事が多い記者達にもそれがどんなことなのか充
分に・・・

判りすぎるほどわかった。

犯罪捜査がこれで五十年も百年も進む・・・

あきあが日本から来た双子の姉達にあのモバイルにDNA検出ソフ
トを入れる

場面を映像の中にみた記者達はもう呆然として動けなくなる。

この一人の少女のような女性一人の為に世界が大きく変わった・・・
その瞬間に自分達は立ち会ったのだ・・・喜びと不安がどっと押し
寄せてくる。

不安?・・・女優や男優達、芸能界に準じる者達が持つ不安とは
・・・
今まで自分達が生活の基盤として生きてきたこの世界が一人の女優
・・・
のために大きく変化していく不安感・・・。

記者達の持つ不安とは・・・たった一人の女性の存在が大きく社
会を変えていく不安感であった。

もしもその生き方が変わってしまったら?・・・

アキア・ヒノ・・・サキ・ハヤセが悪い方に変わったら・・・

いや彼女を利用する人間達が現れたら?・・・ゾクと身震い

が襲った。……
今にしてこの場にいる人達にわかるのだ。
アメリカ・いや日本が彼女の力を隠さなければならぬのは不安
感が大きいのだ。

自分達でさえそう思うのに国の上層部がそう考えるのは普通だと思
う。

見ていると目の前の少女……何もかも開けっぴろげだ。
だから周囲の者が守る必要がある。これが大統領がこうして記者達
を巻き込んだ意義であった。

映像は終わった。……立ち上がったルーク監督がスクリーンの
前で

「フィルムは以上だ……もうこれ以上何もいう必要はないと思う。
諸君が公表してもいいのは、アキアの女優としての存在とBBXの
発明だけだ」
とだけ言っであきあに合図を送る。

たちまち元の牧場が変わる不思議……でももう驚きはない。

昨日のことで延びてしまったクランクインが今、目の前で始まるこ
としていた。

朝早くなのに映画のスタッフ以外にあふれるような報道陣達……
昨日よりも増えたようだ。

昨日からの記者達の中には目を真っ赤にしている者も数多く見られ、
そばによると皆酒くさい。

記事を送ってから相当飲んでいたらしい。

昨日のショックを思うと酒びたりになるのは正常な反応なのだろう。

そんな皆もこの瞬間・・・固唾を吞んで見守っている。

この牧場の東の小高い山に顔を出した朝日の中から、
小さな土煙の影が現れ・・・その影が山の斜面をすべり落ちるよう
に駆け下りてきた。

馬に乗った栗色の髪の少年・・・いや、それは良く見るとボーイ
ツシユな少女だ。

少女は牧場の垣根などの障害物を飛ぶように駆け抜け、
朝日に映える少女の表情は喜びであふれていた。

少女は馬から飛び降りると手綱を我が家の前のケヤキにかけ、大急
ぎで家の中に走りこんだ。

こうしてジョージ・ルーク監督待望の映画「スカイ・ブルー」のフ
ーストシーンが
フィルムに収められた。

主演のスカイ・ブルーには勿論アキア・ヒノが、
ママのアレン・ブルーにはアカデミー女優のシャロン・ムーアが
女優志望の長女アンジー・ブルーにはコーデリア・ビーナス。

社交界デビューを夢見る次女のケイティ・ブルーはソフィー・ジュ
ラン。

そして、生まれながらに歩くことも話すこともできない
四女のシンディ・ブルーにはヒヅル・アマギ。

スカイの相談役として暖かく見守る牧童役スー・アカエにはトム・
ヨークが扮している。

女優への夢を捨てきれず一人ハリウッドに残った長女アンジー。

でも度重なる挫折に耐え切れずドラッグに走ってしまう。
そんなアンジーを心配して生まれ故郷でもあるハリウッドに戻って
くる三女スカイ。

偶然が偶然を生みスカイの卓越した運動能力を見たハリウッドのプ
ロデューサーが
スカイをスタントマンに抜擢、大成功を収める。

誰にも真似が出来ないスタントに世間は驚き脚光を浴びるスカイ・

でもそんな生活は長続きはしなかった。

仲間からの嫉妬、スキヤンダルと闘、

そして死の寸前までいった大怪我で再起不能に陥るスカイ……。

そんな不遇の時代のスカイを支えたのは家族の愛だった。
特にドラッグから抜け出したアンジーと物言えぬ妹シンディの
スカイへの手厚い看護は頑なだったスカイの心を癒していく。

第二の故郷であるテキサスの小さな農場……

アンジーとシンディと共に戻ったスカイ……。
を待っていたのは先に戻って暖かい家庭を作っていた
ママのアレンと次女のケイティだった。

この小さな牧場での久しぶりのママと四人姉妹の明るい笑い。

こうして映画は牧場での四人姉妹達、各々のエピソードを交えなが
らも

スカイは愛していた四女シンディの死から奇跡への復活に向かって
いく。

数年過ぎ、ブルー家はニューヨークのシアターの席に座っていた。
目の前に流される映画はクライマックスへと向かっていく。

高層ホテルの火災でホテルのマナージャーに扮するアンジー、客を逃がした後、思わぬ突風に火があおられた火の勢いが逃走口を遮断したのだ。

・・・手に汗を握るシーンになった！観客達、息を飲んで見ている。

『バタバタ・・・』というヘリの音と共にスルスルと降りてきた一人の災害救助隊員

・・・スカイは映画の中でもアンジーの妹役なのだ。

あれからまずアンジーが女優として開花し、

その後を追うようにスタントをやめたスカイが一から女優を目指したのも妹のシンディの死が大きかった。

スタントの出来るただのアクション女優ではない本当の女優への階段を一步一步登っていくスカイ。

ようやくこうして姉妹揃っての映画出演となった。

一人の男を巡っての姉妹の葛藤・・・男のエゴで捨てられた姉妹の嘆き・・・

キャリアアウーマンとしての姉の生活と死の危険を顧みない災害救助隊員の妹との

対比をいろんなエピソードで飾ったこの映画、今クライマックスに向かった。

ヘリからの1本の命綱・・・大きく風にあおられてその抵抗で

『ピシッ』とワイヤーの細い線の1本1本が次々と切れていく。

ヘリから大声で引き返すように怒鳴る同僚・・・

歯牙にもかけない妹の災害救助隊員は姉レイの救出のためにその命をかけていた。

大きくしなつた命綱が『プチッ』と切れたとき妹タミーは姉のいる小さなバルコニーに向けて宙を飛ぶ。

息詰まる瞬間だ！だが、強い風がタミーを押し戻し69階下の地上へと叩きつけようとする。

でも彼女の生への執着心は思い切り伸ばした右手にビルからはみでたバルコニーの手摺の僅かな感触を与えた。

その瞬間『ぐっ』と握る右手・・・とその右手にかかる体重……。

『ふっ……ふっ……』

浅く早い呼吸が命の証をタミーに与えた。

今度は左手を伸ばして手摺をつかみ、

『ググツ』と両手の肘を曲げて懸垂をしながら右肘を大きく曲げて手摺の上に押し上げるとバルコニーの中に飛び込んだ。

そして、仰向いて倒れこみ何度も大きく息をする。

ふっと伸ばした左手に人の肌が……

『はっ』と飛び起きて目に入ったのは失神している姉レイの姿……

。慌てて抱き起こして

「レイ！……レイ！……姉さん！……しっかりして！」

何度も何度も身体を揺すった！

薄っすらと目を明けるレイ……

「タミー！……タミー！なの？……」

意識が戻ったレイは妹タミーの姿に驚いた。

彼女は……彼女は……互いに恋愛相手と同じであることに気づき、

相争い傷つけあってその結果敗れたタミー……彼女はこの地を去ったはずなのに。

「姉さん！……貴女を死なせはしない。私の命に代えても姉さ

んを助ける！」

そう大きな声で叫ぶタミ……

「タミ……あなた……」

姉妹の心に出ていた氷の壁が解け始めた一瞬だった。だが……

「パリン！……」と大きな音がして窓ガラスが弾け飛び、
猛火が二人を襲ってきた。

バルコニーの端まで逃げる二人……

猛火は二人をジワジワと死への淵へとおいやる。

タミは腰にぶら下げていた救助用の小道具を素早くレイに装着すると

今度は自分の背中に負うのだった。ちょうど赤子を背負うように……

「姉さん！私にしっかりと捕まっているのよ」

そう言いながらタミは肩にかけていたロープをしっかりと結わえ
もう片側を自分の腰に結びつけた。

この火災の状況から抜け出すにはもう時間がなく、たった一つの方法しかなかった

幸い出火はこの階より3階したからだ。

4階下では消防隊員が必死に消火作業をしているのはわかっていて

このロープは目測の判断で5階下までの長さはある。

顔が焼けるように熱い。時間の猶予はもう1分もない。

タミは姉レイを背負ったまま、バルコニーの手摺を乗り越えた。
その時、猛火が二人のいた空間を襲った。

タミーは飛び降りたのだ。救助の為のたったひとつの方法……奈落の底の死へむかって……。ただ、信じていた。この命をつなぐロープを……

身体の中を通りすぎる風……血液が逆流する……。まるで夢？

『ガクン』いきなり現実にもどされた瞬間、

ビルの谷間から吹き上げる強風にあおられてまるで糸の切れた凧のように

四方八方に振られつづけている。

タミーは上をみるとバルコニーを覆うようにビルの中からの火の勢いは続いている。

手摺に結わえられたロープが『チリチリ』と焼け始めているのだ。

1秒をも争う瞬間なのだ。

タミーは身体を一杯に使って大きくスイングさせる。

風の抵抗が強い！・背負ったレイの体重が思つような行動にうつさせない！

……が必死でスイング続けた。

窓ガラスがもう目前だ……。中ではこの救出劇を知った消防隊員と

レスキュウの隊員が固唾を呑んで見守っている。

タミーは足に結わえてあるサバイバルナイフを手にとった。

これは今までいくどもタミーの命を救ってきたいわば相棒なのだ。

二人が一番ビルから遠のいたとき『カク』と何ミリか身体が下がった。

もう後はない。……この瞬間だ！……
一番窓に近づいたときタミーは頭の上でサバイバルナイフを一閃した。

レイは聞いた……。『バリン……。』ガラスが割れた音を……。勢い良くマットの上で跳ねる自分の身体を……。そして大勢の歓声を……。レイの頬を涙が一筋流れ……。失神した……。

こうしてクライマックスを終えてビル火災現場を遠のいていく映像……。『END』マークがスクリーンの中心から大きくなってラストを飾る。

観客から大歓声と大きな拍手……。立ち上がり挨拶をしてママを抱きしめる三姉妹……。今度は映像の中のスクリーンの『END』マークが飛び出してこの映画の『END』マークとしてラストを飾る……。これがルーク監督の今回の映画だった。

克蘭クインの初日、愛馬『ハヤテ』にまたがって生き生きと牧場を駆け回る

あきあ……。皆の目はその行動にもう釘付けだ。

報道陣はもとよりスタッフや共演者達、特にコーディネリアやソフィー……。それにママ役のシャロンにしたって

目の前のあきあが繰り広げるシーン一つ一つに夢中になってみているのだ。

こんなことアカデミー女優としてプライドの高かったシャロンには考えもしなかったことだ。

最初はこの東洋から来た少女のような女優には鼻にもかけなかった。

でもあの不思議な術を見たり、毎日撮られ続けているノンフィクションのフィルムをみたり

・・・いやこの女優に関する事を見たり聞いたりするうちに・・・そして彼女とのキス・・・これはもう驚異としかいいようもない。

アカデミー賞をとったアクション俳優の夫を持つ身だが

いまはそんなことどうでもいい、まるで乙女のようにもう夢中なのだ。

こうして映画の撮影が進んでいくが、なにしろあきあのことだ。撮影がスムーズに進むわけではない。

今後、果たしてあきあにふりかかる事件とは・・・

第三部 第四話

撮影は順調に進んでいく。

日本からも翔が希佐と茜を連れて渡米してきており、撮影をしばらく見てからワシントン支社に行くという。

テキサスからハリウッドに戻っても何事も無く撮影は進んでいった。

でもそれは嵐の前の静けさ・・・であった。沙希は沙希なのだ。とんでもない事件が待ち受けていた。

ハリウッドに戻ってあきあの男嫌いと身体秘密が女優や女性スタッフ達に知れ渡ると女優達の間で連日、あきあを呼んでのパーティーが開かれるようになった。

あきあの酒の弱さを知っても容赦が無いのがハリウッド女優である。あきあに酒を勧めることなくそばにいただけでも満足するので、困った顔のあきあだが相手の気持ちや思っているとどうしても断り切れな

い。

パパのジョージやママのジェーンに相談しても

「サキ！私達はサキのことが皆に受け入れられているのが嬉しくてたまらないんだ」

とって笑顔でパーティーに送り出すのだ。

そんなある日、ちょうど撮影が昼の食事時間にかかろうとした時、真っ青になったジェーンが走ってきて

ちょうど出番が終わってカメラの映る自分の演技を確認していたあきあに抱きついた。

あきあの腕の中でブルブル震えているジェーンに横にいたジョージが慌てて立ち上がって

「ジェーン！・・・どうした！・・・」

そういうルーク監督を

「パパ！」

と呼んで沈黙させ、胸の中で震えているジェーンが握っていた携帯電話を急いで耳に当て、

「ハロー・・・」

と呼ぶ。

携帯の向こうから聞こえてきたのは

「こちらはワシントン州立病院のERですが、あなたは？・・・」

「私はジェーン・ルークの妹でサキといいます」

「ああ、妹さんですか」

「はい、姉の・・・姉の容態は？・・・」

「今、手術を行っていますですが予断は許さない状態です。」

一緒に運ばれてきたコトミ・イシカワ・・・彼女も容態は同じです。

出来ればご家族の方にすぐにもこちらに来ていただきたいのですが・・・」
と最後に言いにくそうに言葉が消える。

それで二人の状態がどういうものなのか把握できた。緊急を要するのだ。

「あっ！・・・少々お待ちください・・・」

といきなり女性の声に代わって、男性の声に・・・、

「ハロー」

その声は思いもよらぬ人だった。

「ロバート……ロバート・オーエン政務次官……」

「ミス・サキ……良くわかったね……」

「ええ……でも、どうしてあなたが？……」

「いや、そのことは君と会って直接話す。今は二人の身体のことだ。大至急、君にこちらに来てほしい」

「わかりました。直ぐに飛んでいきます」

「じゃあ、待つてる」

それだけの会話だったが、その切迫した状態に心がはやっていく。

電話を切った沙希がジェーンを両手で支えながら、

「ママ！……ジェシー姉さんと琴姉は絶対に助ける。心配しないで！」

「サキ！お願い……ね」

「パパ！私……今から行くわ。だからお仕事のこと……」

「仕事のことなんて考えなくていい……とにかく直ぐに行ってくれ。」

「……そして、二人を助けてくれ。わしらも後からワシントンに向かう」

「はい……」

といて表に飛び出そうとする沙希だったが

「待って！……沙希！……まずはこっちよ！」

と瑞穂が隣のスタジオを示す。

「判った、瑞穂」

と隣のスタジオに走りこむ沙希。見学にいた全員が後に続くこととするが

「ストップ!」

と扉の前で押しとどめるコーディネリアとベス。

「この向こうは男子禁制よ。男性の入室は絶対ダメ!・・・判った?」

「そんなあ・・・」

という声が聞こえるが

「いいこと、いくらサキのことを知っているといっても男性にサキの全てを見せるわけにはいかないの」

「じゃあ、私達は?・・・」

「女性記者ならOKよ!」

とニッコリとして女性達を通すベス。

不満をあげる男性報道陣だが、構わずスタジオに入り後手で扉を閉めるコーディネリア。

「うわ・・・」

と声を上げる女性達。

コーディネリアとベスが沙希取り囲む女性達をかき分けて進むと前に見たシキと呼ばれる女性3人と一匹の白い虎の姿があった。

そして今、サキの身体の中から、あのヒズル・アマギの洋服のエンブレムから

二匹の蝶がヒラヒラと舞い降り、日本の和服を着た二人の少女の姿になったのだ。

サキの日本語と重なってゆりあの同時通訳の声がスタジオに響く。

「直ぐに病院に行って二人の姉の命を留めてほしい」

その声でその姿が小さな5つの光の玉となって壁をすり抜けていった。

「あ〜」

と初めての不思議の体験が悲鳴となってスタジオに広がる。

「じゃあ、サキ！あなたも急いで！」

というコーデリアの声に

「ええ」

と言つて唇の前で右手人差し指を2度3度左右に振るといきなり

沙希の身体がブロンドの碧眼で美人というより可愛いその姿に変身。

青いレオタードの胸の部分には赤い”S”のマーク、赤いミニスカ
ートに赤いブーツ……

そして真っ赤なマントはスーパーガールそのもの。

「うわゝスーパーガールだあ……」

「話に聞いていたけど目の前でみると……もう信じられない……

」

「感激！……感激！……大感激よ」

「普通の時だったら、とつても嬉しいんだけど……」

「そうよ、早く行って……」

女性達の声に後押しされてスーパーガールはスタジオのドアを開け
た。

「おお……」

男達の悲鳴とも言えぬ叫び声があがったときスーパーガールは両足
を揃えて飛び上がった。

男達の頭上を飛んでいくとスタジオのドアから飛び出し、上空高く
飛び上がった。

その後を追つて一番に飛び出したのはいつも沙希に張り付いてフィ
ルムを回しているスタッフ達だ。

追いつけないのは当然だが早くワシントンに行って沙希を撮り続け
る役目が彼らにはあった。

又、モバイルでこの様子を残った者達に知らせる役目も持っているのだ。
何しろ女優達やスタッフの女性達、一人残らずモバイルを持っているのだから。

スタジオ外ではスーパーガールの姿を見た一般の客や他の映画のスタッフや俳優達が空を指差し、
口々に何やら叫んでいる横を後を追うスタッフ達が駐車場に向かう。

そして………

ここはワシントン州立病院、手術室の横で壁にもたれて立っている男がいた。

そしてその男から離れているが3人の屈強な男が周りを油断無く見張っている。

今、あの手術室の中では二人の女性が最高の医療スタッフ達の手でその命を繋ぎ止めていた。……ジリジリするような時間が過ぎていく。

1時間が過ぎた。本当は最初運ばれてきたのは隣の建物のERだったが

彼女達の持っていたバツクの中にあつた手帳に大統領の名前があつたことから

慌ててホワイトハウスに連絡があり、
大統領の命を受けてロバート・オーエン政務次官がこうしてここにいるのである。

心はせくがどうにもならない。

そのとき廊下の向こうの端から4人の女性が走ってくるのが見えた。壁から離れて良く見ているとそのうちの二人には見覚えがあった。

（そうだ・・・あの女性達・・・あの会議で会った

ミス・サキの双子の姉達・・・そうFBI研修に来ていた日本の捜査官・・・）

あとの二人は見覚えはなかったが身元はわかっていた。

当然SPに止められた4人だったが

「その女性達はいい」

というオーエン政務次官の声で目の前にやってきた女性4人。さすがに双子の女性の顔色は真っ青だ。

「ミスター・オーエン・・・で、どうなんですか？」

つたない英語だが意味はすぐに理解できた。

「まだ、手術中だ。途中出てきたナースに聞いたが二人とも内臓の損傷が激しいらしい」

と正直に話す。

「ああ〜」

といったつきり項垂れて長椅子に座り込んでしまう二人。

痛ましそうに見つめるオーエン政務次官・・・。

でも気を取り直して見知らぬ二人の女性に目をやる。

「君たちは？・・・」

「はい、私は・・・」

と背の高い金髪の女性が素早くバックの中から黒い身分証をだして

「FBI捜査官のカリア・ファーガソンです」

「私は・・・」
とブロンドのファッション誌のモデルのようなもう一人の女性が
「CIAのエバ・クリスです。・・・すいません。こちらの油断で
二人の身が・・・」
と言葉も出ない。

「そのことは後で・・・今は二人の手術の成功を祈るだけだ」
と二人の女性に椅子を示し、再び壁に身を預ける
双子をはさんで椅子に腰掛ける二人の女性・・・。ジリジリするよ
うな時間が過ぎていく。

・・・そして、いきなり天井を通り抜けて廊下に降り立ったのは・
・・・スーパーガールだ！

何も聞かされていない二人の捜査官は口をあけたまま固まってしま
っている。

「沙希！」

双子の姉達の言葉に

『シッ』

と人差し指で言葉を封じてしまう。

S P 達はこの間のことで慣れているんで慌てることはない。

マントを翻してオーエンの元にやってきたスーパーガール。

「その姿で？」

というオーエンに

「ええ、今はこのほうがいいでしょう」

と笑うがその視線はオーエンに当てられたままだ。

オーエンから何もかも読み取ったスーパーガールは静かに手術室の
ドアに手をかけた。

廊下にいた者達の視線に入ってきたのは

部屋中央に並べられた二つの手術ベットに向かい合う医療スタッフ達……

周囲に並べられた医療器具がものものしい。

「あなたは！……」

ドアが開けられる気配でこちらを見たナースが大きな声をあげた。振り向く医療スタッフ達……が固まってしまった。

その間を掻き分けながらスーパーガールは進み、

素早く見つけた戸棚のビーカー……が右手を伸ばすとその手の中にいきなり現れた。

小さな声で何かを唱えるスーパーガール。

ビーカーの底から湧き出す透明の液体。それを口に含んだスーパーガールは手術ベットに横たわる

姉達に次々と口を押し付け液体を飲ませていく。

それはそれは厳粛な光景となった。……ただ……そのあと……

奇跡を目にすることになった医療スタッフ達……勿論、あの二人の捜査官も例外ではない。

手術中の臓器が見る間に回復していき、

メスで切り開けられた皮膚が傷ひとつないきれいな肌に戻っていく。

医師もそんな光景を目を真ん丸にして思わず1歩下がりがり

補助のナースにぶつかると……という状態があちこちに見られた。

ありえないことを目の前にすると愕き慌てるということより、

こうして固まってしまおうというのが本当らしい。

「先生達！あとの処置はお願いね」

とニッコリ笑うとそのまま飛び上がり天井をすり抜けていった。

しばらくの沈黙のあと

「キャ〜・・・」

という若いナースの叫び声で阿鼻狂乱・・・というか何と言ったらいいのか・・・。

その1時間後、この病院のVIPが入院する病室に二つのベッドが運びこまれ、

傷が完全に治ったとはいえ失血した分の輸血と事故のショックでまだ目覚めない二人の病人を4人の女性と一人の男性が見守っていた。

事故が仕組まれた事を考えれば部屋に誰も入ってこられないよう面会謝絶にし、

SPの3人が部屋の外で油断無く見張っているのはこの段階では大袈裟と思われても仕方はあるまい。

「サキはどうしたのかな？」

ロバート・オーエンがポツリと言った。

「あの子なら今・・・」

とジェシーが眠るベッドの横で腰掛けて青白くほっそりとした手を握る泉が顔をあげた。

「現場に行つたんです」

同じく眠る琴美の手をにぎっていた京が答えた。

つたない英語ながらもさすがにFBIに研修にきた双子だ。

ロバート・オーエンの言葉にそう答える。

「現場？」

「二人の身体をこうして治療したことで安心して現場に行つたんだと思います」

「だからどうして現場なんか？」

「あの子がいろんな事件を解決したのはご存知ですか？」
「聞いてはいるが詳しくは知らない」

そこで双子は過去の事件を簡潔に話した。
話ながらも泉と京は沙希を心に想い、沸きたつような気持ちが強くなってきた。

そんな女心は何も知らない二人の女性捜査官にもピンピン伝わってくる。

実をいうと始めはほとんど眉唾物の話から捜査に投入された二人の捜査官。

FBIとCIAと属するチームは違うが同じ州ということからいろんな事件の捜査の段階で顔を会わせてきた二人、ライバル心はないが負けたくないという気持ちは強い。

そんな二人が啞然として言葉がでなくなったのが天井を通り抜けてきたスーパードールの登場からだ。

それからあれよあれよという間に時間が過ぎていくがそんな実感は今はない。

フワフワとした雲のジュウタンの上にいるかのようだ。

手術で開けられた皮膚や折れ曲がった手足が自然と治癒していく奇跡・・・

それを当たり前のように眺めているこの日本人の双子とロバート・オーエン政務次官・・・
あんた達は一体何者なんだ！・・・ってそう大声で叫びたい。

その時、『コンコン』とノックの音、
「はい！どうぞ」

という返事とともにドアが開いて入ってきたのは

背の低い東洋系の美少女・・・その少女がかもし出すその雰囲気・

・
何なんだ！この少女は？・・・

犯罪という殺伐とした世界でいろんな人種、

人間にかかわって来た二人にとつて初めて会った天使？

・・・二人に対してニツコリと笑ったその笑顔ったら・・・

『ドキン！』一拳に心臓の鼓動がはねあがってしまった。

もうそれからはドキドキと心臓の高鳴りの連続だ。

十代の乙女に戻ってしまったように・・・二人は今動けなくなった。

「沙希！」

と声を上げる泉と京。

「どうお？」

並んだ二つのベットの間に入って寝ている二人の額に両手を当てる。

「可哀相に・・・怖かったよね」

そついつて静かに額を撫でる。病室に暖かく爽やかな空気が流れてくる。

二人の捜査官の心に何か不思議な既視感が浮かび上がってきた。

そつ、幼い頃ママに抱かれていたあの感覚だ。

自然と微笑みが浮かんでくるが自身には気づいていない。

「ロバート・オーエン政務次官！」

「ロバートでいいよ、ミス・サキ」

「わたしもサキで良くてよ、ロバート」

「じゃあ、サキ。今までどこに行っていたんだい？」

「私、姉さん達が襲われた現場に行っていたの」

「現場に？・・・で、何か判ったのかい？」

「ええ、犯人達は」

「犯人達？・・・じゃあ、複数の人間がやったのか」

「そうみたい。姉さんの車を前後左右から取り囲んで何キロも連れ回したの」

「どうしてそんなことを？・・・」

「姉さん達を殺そうというよりも、恐怖を味あわせることが目的よ」

「恐怖を？」

「そう・・・短い時間だったけれど怖かったでしょうね。私・・・絶対に許さない！」

キツと前を見つめるその顔・・・美しいだけによりいっそう・・・壮絶な美しさがそこにあつた。

『ゴクツ』と喉を鳴らしたロバート

「で、目的は？」

「当然、アメリカでのBBXの権利です。」

そして最終的にはBBXを手中に収める気なのが判りました」

「誰なんですか？」

沙希はその質問に答える前に

「ロバート、私やってもいいですか？」

「何をです？」

「犯人達を捕まえることです」

「犯人を？」

「ええ・・・私一人でもいいんですけど、出来ればキャリアとエバに手伝ってほしいんです」

えっ？という顔の二人。

どうして名前を知ったのか？自己紹介をした覚えはないのに。

「沙希！私も行く！」

「私も」

泉と京が叫んだ。

「駄目よ！泉姉も京姉もジエシー姉さんと琴姉のことパパやママ達
が来るまでここに居てほしいもの」

「でも・・・」

「泉姉、京姉・・・病院に収容されたつといてもまだまだ油断
はできないのよ」

「どうということ？」

「殺したりはしないだろうけどこちらを脅迫するため、
いろんな悪戯をしかけてくるかもしれないってということ」

「わかった！沙希！・・・安心して。二人は私達が守る！」

「さすがに泉姉と京姉だわ」

そう言って二人の捜査官と病室を出て行く。

赤いBMW、運転するのはCIAのエバ・クリス、

後部座席でじつと前を見てなにやら考え込んでいるのは沙希だ。

隣のFBIのキャリアはそんな沙希をじつと見つめ

（この少女は一体何者？・・・あのオーエン政務次官が

『サキ』と呼ばれたこの少女と話すのに何か畏敬のようなものがあ
ったのはなぜ？・・・）

車内の沈黙はエバによって破られた。

「ねえ、あなた。この車をどこに走らせたらいいの？」

「このまま真っ直ぐ走らせてください」

「真っ直ぐたって……ねえ、目的地はどこなの？」

一瞬の間が空いて沙希の口から発せられたのは

「クルーズ！」

その言葉の効果は絶大だった。

「ク……クルーズ！……」

「だって、あそこは……」

「そう、アル・カポネの直系のマフィア最大のエドガー一家が束ねるバーよね。」

ギャンブル、ドラック、売春……何でもありの巣窟」

「クルーズは私達でもそう簡単には手が出せないのよ」

「ええ、知ってる」

「だったら……」

「でも、姉達をあんな酷い目に合せた犯人達は許せないもの」

「許せないって、あなた……相手は屈強な男達よ」

「判ってる……エバもキャリアもなかったら車に残っていてもいいのよ」

「車に？……何を言うの！私はFBIの捜査官よ」

「私だってCIA……今までも命がけの事件の捜査をしてきたんだから」

「だったらついて来てもいいわ。でも私から離れては駄目よ」

「あなたって……一体何様なのよ」

「そうよ、勝手に私達を連れてきて私から離れては駄目だって……」

「だって、エバとキャリアと一緒に来てもらったのは私がやりすぎないよう見張ってもらう為だから」

「やりすぎ？・・・わからないわ、言っていることが・・・」

「私、男は嫌い・・・特に女性をあんな風に怪我をさせる男って虫唾が走るくらい大嫌いなもの」

と沙希が吐き捨てるのを

「あなたってレズ？・・・いいえ、そもそもあなたは誰？」

「そうね、自己紹介していなかったわね。

私はサキ・ハヤセ、スクリーンネームはアキア・ヒノ・・・一応女優よ」

「女優！・・・」

カリアは隣を・・・エバはバックミラーで、この幼い美少女を驚いた目で見つめる。

まさか・・・思わぬ美少女の言葉に啞然としていた。

「詳しくは今日一日、一緒にいたら私のこと知ってもらえると思う」

と言うと口を閉ざしてしまった。

あきらめて運転席のエバを見るカリア・・・

仕方ないかと肩を窄めるのはさすがにアメリカ人だ。

車は繁華街の一角に止まる。

まだ昼間だから人通りは少ないし、ネオンという装飾品が点灯していないので

華やかさはなくうらぶれた町並みがただそこにある・・・という風景だ。

3人は車を出ると10段ほど階段を上がった両開きのガラス戸がある

『バー・クルーズ』の出入り口を見上げた。階段を上がるようにする

沙希に

「ちよつと待つて！」

とエバとカリアがバツクの中から拳銃を取り出すと両手に持つ。

「そんなもの必要ないわ」

「冗談じゃないわ、こんな危険な場所、身を守るためには絶対必要よ」

「大体、こんなところにくるの気が触れたとしか思えない。いいから私達の言う通りにしてちょうだい」

語気強く言うのは何も知らぬ二人には当たり前なのだ。

二人は沙希より先に階段を駆け上がるとドアの左右に別れ、壁に身を預けると拳銃を持つ腕を折り曲げて

耳のところに位置すると開いた手でドアを両側に押し開けた。

薄暗く細長い廊下の両側の壁に二人の捜査官は身を預けてジリジリと進んでいく。

二人の調子に合わせて沙希は進んでいく。

一番奥にあるドア・・・鋼鉄製のドアで目の高さに覗き窓があり要塞を思わせる強固さだ。

ゆっくりとドアノブを回すカリアだが、こちらを振り向くと首を振る。堅固に施錠されていた。

沙希は両手でエバとカリアをドアから離れるように指示をした。

二人の捜査官は何をするんだろうと壁側に身を置いたが頭から？マーカーが飛び出ている。

廊下の真ん中で両手を下ろして自然体に立っていた沙希がゆっくりと右半身に構えなおす。

そして右手を上げて、開いた手のひらをドアに向けると

「はあ〜！・・・」
と声をあげた。

するとどうだろう・・・二人の捜査官の目には青白い閃光が手のひらから飛び出したかと思うと、

あの分厚い鋼鉄製のドアが『バア〜ン』とホール側に飛び散ったのだ。

一体なにがあつたのか・・・目の前で見せられたエバにもカリアにも訳がわからなくて、
生まれてはじめての経験だが腰が抜けてしまつて下半身がいう事が聞かない。

だから四つんばいのままソロソロと廊下を進み
ドアがあつた空間から首を出してホール内を覗いた。

このホールも照明が少ししか点灯していなくて明るくはないが沙希の後姿はよく見える。

不思議はその沙希の体の周りを赤、青、黄と小さな光が飛び回っていることだ。

「・・・」
と沙希がなにやら言った。

姿をあらわす一人の少女、

「・・・」
また沙希が何か言った。

するとその少女がエバとカリアに近寄ってきて二人を立たせてから壁に寄りかからせて座らせる。

その上で手のひらを二人に向けると何やら金色の壁が空間にできた。

二人の身を守るためのバリアーだ。

「そのバリアーの中には危険はありません。しばらくそこから様子を見ていてください」

と見事な英語で言った。二人は知らなかったがこの少女はましろであつた。

英会話力は沙希に習つて一生懸命勉強した結果だ。

エバとキャリアはFBIだ・・・とも、CIAだ・・・とも、頭にはなかった。

この常識外の出来事をじつと見ているだけだ。

そうでないと言も判らない事で狂乱してしまいそうになる。

二人には気づかなかつたが、

ホールの反対側から奥の部屋から飛び出してきた男達が手に武器を持って近づいてきていた。

女に対しても何の容赦もない男達だ。

「お前達だな！私の姉さん達をあんな目にあわせたのは」

「姉さん？・・・何を言つてやがる」

「お前達が車で困んで事故を起こし瀕死の重傷を負わせた女性達だ」

「ああ、あの女達か・・・」

「へへへ・・・ねえ兄貴！泣きそうなああの女の顔、今も思い出してたままないぜ」

「許せぬ！」

「へえ・・・そんなに怒るなんて、何かあの女達死んだのか」

「いいや、私が助けた！」

「助けた？」

「変な女だ」

「ねえ、兄貴！頭がおかしな女だけど別嬪だぜ、高く売れるんじゃないですか」

「ふふふ、俺もそう思う。それにほれ、もう一人の女も別嬪じゃないか」

「じゃあ、兄貴！」

「ああ、やれ」

「皆！捕まえる！」

そういうと飛び掛ってきた。でも、マフィアの下っ端といえども所詮はただのチンピラだ。

その道の達人である沙希にかなうはずもない。次々と倒されていく。

でも仲間を呼んだのか裏の部屋から男達が現れた。

男達の手握られた銃……じりじりと近寄ってくる。怖くはないのだろうか？

沙希は平気な顔で立っているのだ。いや、笑顔さえ浮かべている。

「くそっ」

と一人のチンピラの銃が火を噴いた。それに合せて次々と拳銃が撃たれたのだ。

思わず目を閉じる二人の捜査官。だが、一瞬の間が空いて

「あははは……おほほほ……」

沙希の笑い声が響いた。

恐る恐る目をあけると

自然の形で立つ沙希の体の周りに何やら小さなものがたくさん浮いている。

よく見ると拳銃の弾だ。思わず金色のバリアーに顔を押し付けてしまふ。

『パチン』と指を鳴らすと『バラバラ』と弾が床に落ちる。

もう一度指を鳴らすと沙希の体から三人の着物を着た女性と1頭の白いタイガーが飛び出したのだ。

先の少女と共に男達に襲い掛かった。

「うわ〜」

「ぎゃ〜」

男達の叫び声と拳銃の音がホールに鳴り響いた。それも一瞬に静まった。

振り向いた沙希の顔には笑顔があり片手を挙げると金色のバリアーが消え、

先ほどの少女が二人を立たせてくれる。

ふらふらと立ち上がった二人、1ツ歩踏み出すのに足元がおぼつかない。

何なのだ・・・これは一体・・・夢？・・・いや、そうではない。

こうして手を持ってってくれる少女の少し冷たい感触は生身のものだ。

立ち上がって判るホール内の壮絶な有様。

あちこちに散らばる男達・・・それに天井や壁に張り付く男達の体・

・・・ん？・・・天井・・・壁？・・・

思わず目をこすってみる。これって現実？・・・呆然と立ち尽くすエバとカリア。

「主殿！」

と紅葉が何やらかついで奥から戻ってきた。

テーブルの上に寝かせるとチャイナ服を着た30過ぎの女性だった。

「こやつ、少々手強かったので手荒いまねをいたしました」と床に座って報告する。

「紅葉さんは大丈夫だったのですか？」

「私は大丈夫です。でもこの女……」

「どうしたのですか？」

「泣きながら歯向かってきたのです」

「泣きながら？……わかりました。後は私に任せてください」

「ははあ」

と言って頭を下げる。

「じゃあ」

と沙希が声を上げると3人の女性と1頭の白い虎が小さな光の玉と変わり沙希の体の中に消える。

「あきあ様……私は？」

ましろが英語で言った。

「ましろちゃん、あなたはこの女性を車に乗せてそばに付いていてくれる？」

「はい、わかりました」

と答えると軽々と女性を抱えホールを出て行った。

「サキ！あの少女って……」

「あの子は私の友達なの。詳しくは私のそばにいたら判るってことぐらいしか、今は言えない」

というとき、後ろを向いて倒れている男達のほうに向かった。

「うん……」

倒れている男達が気が付いて首を振ったり、立ち上がるうとしていた。

慌てて拳銃を構えようとするエバとキャリアに

「いいのよ、彼らって今までの彼らじゃないから」といってニツコリ笑う沙希。

正気を取り戻した彼ら、でもどこか表情が違う。チンピラの顔ではない。

呆けたように沙希を見ていたが

「さあ、あなた達。これからは生まれ変わったの。仕事を探しなさい。

勉強したければ大学へいくといい。さあ、おいきなさい」

男達は立ち上がると

「はい！」

と大きな声で返事をして走ってホールを出て行く。

「ちょっと、ちょっと。どういうことなの？これって……」

「私、彼らの悪心を取り除いてやったの。

世の中の仕組みやしがらみから悪の道に入ってしまったけど、彼らは正業に就くと思う」

「悪の心を取り除く？……そんなことできる筈ないじゃないの」

「でもエバ、彼らがここから出て行くときの表情って本物だと思うわ」

「といってキャリアは沙希に向き直ると

「あなたって、神？」

「ううん、人間よ。……ただ少し力があるだけ」

と言ってこの問題はここで打ち止めというように天井と壁に張り付いている10人の男達を見て

「ただ、彼らは姉達に行ったことを思うと許せないの。彼らに罰を与えてやるわ」

「サキ！リンチは駄目よ！」

「そんなことしない。でも彼らは一生嘘がつけない身体にしてやるの」

「嘘がつけない？」

「そうよ、今から少し変身するけれど驚かないでね。私は私なんだから」

といつて何やら呪文のようなものを唱え始めた沙希。よく見ているとその額が割れて目が現れたのだ。

その目から出た紫色の光線が男達を照らした。金縛りにあつたように身体が動かない2人の捜査官。

啞然としていた男達だったが、

「ううっ」

とうなつたかと思うと失神してしまった。

気が付いた時は天井からも壁からも男達は下ろされており、ホールの真ん中で後ろ手錠をかけられて座らされていた。

「これで、いいわ。後はエバ！キャリア！連絡をお願いね」

エバとキャリアの目にはもうあの恐ろしい額の目がなくなっており、魅せられていた沙希の笑顔にホッと一息つくのだった。

「ねえ、サキ。嘘の付けない体ってどういうこと？」

FBIの支局に携帯で連絡を終えたキャリアがそう沙希に聞く。

「嘘を言っても考えても体中に失神するような痛みが走るの。

だから彼らへの質問は彼らの体の状態で嘘か本当か全てわかるのよ」

「本当？面白そうな取調べになりそうだわ。そんな取調べやってみたいな」

「やってみたらいいじゃない」

「いやよ、今はサキのそばにいるほうが何万倍もいい」
「キャリアもエバもこうして沙希と会って半日も経たないうちに離れられなくなってしまったようだ。」

駆けつけたFBIや警察に男達を引き渡した沙希達は再びキャリアの車に乗り込んだ。

今度はエバが助手席に座り、後部座席はあのチャイナ服の女性を真ん中に

左右から沙希とましろが挟んで座っている。

沙希の指示で走り出した車は市街地に向かう。

「うん」

「どうやら女性が気が付いたようだ。」

「はっ」

と気が付いた女性・・・最初は呆けていたがこの場の状態に気づいたのか急に暴れ出した。

でも相手は沙希とましろである。勝てるはずもない。

静かになった女性に対し助手席のエバが尋問するが女性はなにも答えようとほしない。

「ちょっと待つて!」

と言ってエバの言葉を封じてから沙希は女性の顔をじっとみる。そしてその口から驚くべき言葉が発せられた。

「チェ・エドガー、エドガー一家の一人息子で去年亡くなったケイシーの奥さんね。」

香港マフィアのスー家の長女であるあなたが駆け落ちまでして、ケイシーと連れ添ったのに、ケイシーをマフィア同士の抗争で殺されてしまった。

でもそれはあなたのせいだとエドガー一家のドンである義父のアルはそう思い込まされているわ。

ケイシーとの間にできた子を人質同然にとりあげられ、あのクルーズのオーナーママに据えられた理由は、あなたの拳法の腕を利用できるのが目的だけど、

最大の理由は息子を死に追い遣ったと思っている義父のあなたへの罰。

あなたの子供は今、命の瀬戸際にいるわ。どうしてその腕に抱いてやらないの」

目を真ん丸くして、恐れるように沙希を見つめるチエ

「子・・・子供を殺すと言われて身動きができないんです。

ジャクリー又は先天的に心臓が弱いんです。

それに今、いろんな疾患を併発していてベットからもう動けないんです」

そついうと涙をぼろぼろと泣き出した。

「だからなのね、嫌で嫌でたまらなかった売春やドラックに手を染めたのも

自暴自棄になっていたあなただったから・・・。

だから死んじゃおうと涙を流しながら殺されようとしたのよね」

女性同士ならわかる女性の心理なのだ。

「わかったわ、あなたもジャクリーも助けてあげる」

「助けるって？・・・でもどうやって・・・どうしようないじゃないですか」

「どうしようもあるの。私を信じて・・・としか言いようがないけどね」

と少し笑う。

「だったら義父も義父も助けてください。義父は弱愛していたケイシーを亡くして気が狂いました。」

ケイシーも父が好きだった・・・本当は父子の心は繋がっているんです」

「わかっているわ。エドガー一家はもともと売春もドラックも扱っていなかった。

ドンが息子が死んで気が狂っているうちに手下の誰かが一家を牛耳ろうと仕組んだものよ」

「サキ！・・・それって・・・」

「ええ、エドガー一家は今や誰かの手によって奪われようとしている」

車は市街地を通りお城のような広大な屋敷の一角に止まった。

さすがにマフィアのドンの屋敷だ。門の横にはカメラが設置されて屋敷の警備は万全だった。

けれど沙希はカメラを無視して、車の窓を開けて手のひらから青白い光線を出して門をぶっ飛ばした。

「さあ、行って」

沙希の言葉に

「行かっていったって・・・こんなの、いくら命があっても足りないわよ」

とブツクサ言いながらカリアは車を敷地内に入れた。

大きな洋館の玄関前に車を止める。バラバラと男達が飛び出てきて銃を構えて車を取り囲んだ。

「カリア！トランクを開けておいて！」

と言ってドアを開けて出て行こうとする。

「トランク?・・・ちよつとちよつと・・・サキ!」
最後は悲鳴のようなカリアの叫び声。

後ろ手でバイバイするようなちやめつけたっぷりの沙希のジェスチャー・・・

チエは初めてのことだからこんな無謀な沙希の行動に目を丸くするだけで固まってしまっている。

ドアの横にスクツと立った沙希が

「出迎えご苦労」

と言って右手を天に真つ直ぐに上げた。

男達は何をしているのか判らないから油断無く拳銃やライフルを構えている。

沙希が呪文を唱えると車の下の地面に光の五芒星が出現した。

沙希の手が下から上を示すと、その光の五芒星が浮き上がっていく。

光が車を覆い尽くすと、五芒星が3Mほど浮かび上がって再び沙希の腕が天を示すと光の上昇が止まった。

「ええい!」

沙希の気合が周囲に響き渡る。するとどうだろう男達が宙に浮き上がったのだ。

車の周囲を取り囲んでいた男達も、庭の監視塔にいた男達も、屋敷の1, 2, 3階の窓からライフルで狙っていた男達も、屋上にいた男達も、この術から逃れた男はいない。

男達は全て地上から5Mほどのところで全て集められ宙に浮いているのだ。

車にいたエバもカリアもチエも車外に出てきて呆然と宙を見上げて

いる。

手下達の手から離れた銃やライフルやサバイバルナイフも……
機銃さえある。

車のトランクに飛び込んできてうず高くつまれるが、
入りきらないものはトランクそばの地面に集められ
あの金色のバリアで覆われてしまった。これで何者にも取られる心
配はない。

「これは屋敷中にある武器よ」

と包丁や果物ナイフさえある。

「あなたは……あなたは……」

香港では信じられている魔術の一端を目の当たりにして
チエの沙希を見つめる瞳には恐れや怯えというよりも不思議な喜び
が湧き上がってきた。

そのチエの手をしっかりつかんでいるのはましろであった。

ましろもチエの心がわかっているらしくしっかりと……そして暖
かく手をつかんでいるのだ。

「白虎丸！」

と呼ぶと沙希の体内から白い光が飛び出してきて、あの白い虎に姿
を変える。

『ガオウ〜』と一声吼えてから沙希の下ろした左手に頭をすりつけ
て

『クウ〜ン』と鳴いた。まるで猫だ。

その様子でいかにこの恐ろしげな虎がいかに沙希を好きなのかがわ
かる。

「案内を……」

というとき白虎丸が2歩3歩先をノシノシと歩き出した。

でも時々沙希の姿を確認するように立ち止まったりしている。姿は恐ろしげだがその様子が可愛い・・・と、3人の女性はこの虎が大好きになってしまった。

屋敷の奥の奥、あるドアの前で白虎丸は止まって後ろに続く沙希を見上げた。

「ここなのね」

その言葉に

『クウーン』と啼くと座ってしまう。

「よくわかったわね、あなたはここで見張っていてね」

そういつて一度振り返ってから女性達に笑顔を見せるとキツと表情を引き締めてからドアをあける。

ブーンと薬品の匂いが香ってきた。部屋も温度を少し上げているらしくあたたかい。

部屋には白い上っ張りを着た医者と白い制服を着た看護師がベット横で静かに立っていた。

ベットの向こう側では年取った一人の男が患者の手を取って泣いていたのだ。

後ろからチエが

「お・・・お義父さん！・・・ジャクリーヌは・・・ジャクリーヌは・・・」

「チエか・・・す・・・すまん。わしがついていながら たった今・・・ たった今じゃ・・・息を引き取ったのは・・・」

「ジャクリーヌ！・・・」

ベットに飛び込むようにして飛び掛ったチエは大きな声で泣き裂けんでいる。

まるで気が狂ったようだ。掛けられた布団を引き剥がし、その手で

娘をさすっていた。

「先生！」

と医者に向かつて沙希が話をする。枕元にあつた水差しを取り上げ、

「この水差しの中の水を調べてくれませんか」

「水を？・・・」

「ええ、これ万が一つも間違いはなく鉛が含まれている可能性が大です」

「鉛？」

「ええ、即効性はありませんが取り続けていると鉛中毒になり死にいたると言う毒。」

ましてやジャクリー又は心臓に疾患がある娘さんです」

「わかりました、調べてみましょう」

という医者に水差しを渡すと

「ましろちゃん！その男を捕まえて！」

と声をあげた。

「は！」

といってベットの反対側で壁に寄りかかり薄笑いを浮かべていた背の高い痩せた男にとびかかるましろ。

男がいくら喧嘩が強くてもましろにかなうはずもなくあっさりと組み伏せられてしまった。

「エバ！その男に手錠を」

という沙希の声に即座に反応するエバ、もう慣れたものだ。

「白虎丸！」

とましろが呼ぶとドアの向こうからノシノシとあの虎が現れる。

「この男を！」

というましろの言葉に『ガバツ』と後ろ襟首に噛み付き座り込んだ。

これでもう男は身動き一つ出来なくなった。

「じゃあ、こいつが・・・」

ドンのアルとチエが叫んだ。

「何もかも、チエに対する横恋慕が生んだこの男の計画なの。エドガー一家の乗っ取りのためケイシーを殺したのもこの男、チエを手に入れるため、ジャクリーヌを殺し、その後でアル、あなたまでも殺そうとしていた・・・恐ろしくて陰険な男よ」

「畜生！」

といつてチエは振り向きながら飛び掛ってその長い爪で男の喉下を掻き裂こうというのだ。まるで手負いの山猫のように。

「やめなさい！チエ。それにまだ間に合う」

「間に合う？」

何やら胸騒ぎをおこすような沙希の言葉。

「ベットから少し離れてください」

そういうと沙希はベットの足元に回りこんだ。

九字を切り呪文を唱える沙希の姿はまるで東洋の魔女だ。

いきなりジャクリーヌの頭の上に丸い鏡が現れた。

そこに写るのは少女の後姿、その後姿に向かって

「ジャクリーヌ！」

と沙希が呼びかけた。

振り向いた少女は・・・そうここに眠るジャクリーヌそのものだった。

「お姉さんは誰？」

「私？・・・私はサキ・ハヤセっていうの」

「サキ・ハヤセ？・・・」

「サキでいいわよ」

「私どうしたの？」

「ジャクリー又はね、悪い奴の手によって死んじゃったの」

「そう、死んじゃったの・・・」

と寂しげな影が幼い顔を覆う。

「でも安心して」

「えっ？」

「ジャクリー又はね、悪い奴に無理に死なされてしまったただけでまだ寿命が来ていないわ」

「寿命？」

「そう、人にはねそれぞれ寿命があるの。」

ジャクリー又はの場合はね、うんとお婆さんになるまで死んじゃあいけないの」

「死んじゃあいけない？」

「そうよ、神様が決められた寿命がくるまで自分で死んじゃったら恐ろしい地獄というところになってしまうの。そんなの嫌でしょ」

「うん、嫌！」

「じゃあ、戻ってきなさい。ここにママもいるし、爺のアルもいるわ」

「うわー、ママもいるんだ」

「そうよ」

「あっ！」

「どうしたの？」

「帰り方が判らない」

「大丈夫よ、お姉ちゃんの言つとおりにしてね」

「うん」

「まず目を閉じて」

「うん」

と鏡の中の少女は素直に目を閉じる。

これを見ている周囲の者にとって、奇跡としかいいようがない。

エバもカリアもただただ祈るだけだ。アルは初めて会ったこの少女に対し神の姿を重ねていた。

チエは・・・チエは、もうサキの足元にひれ伏すように膝まづいて
いる。

ジャクリーヌが生き返ったらサキのために命を捧げる気なのだ。

医者は・・・看護師は・・・目の前に繰り広げられる信じられない

光景・・・

おざなりのキリスト教徒だったが、これはもう・・・

「うん」

ベットのジャクリーヌの身体が動いた。

「先生！」

という沙希の言葉に手を震わせながら診察していく。

「もう大丈夫です。すぐに目覚めます」

「あ・・・ありがとうございます」

と沙希の足元に膝まづいて礼をいうチエ。

「でもまだ、心臓疾患が・・・」

という医者に

「その心配もいりません」

と言ってから

「ましろちゃん！」

「はい、あきあ様」
と沙希の手にコップを渡したのはさすがだ。

沙希の持つコップからブクブクと液体が溢れてきたのはそう時間がかかっていない。

でもそれを見ていたエバとカリアにとって先ほど見たスーパーガールの姿が重なる。

（そんなあ……）と思うのだが、こんなことできるのは二人といない、

沙希だから……沙希だからこそスーパーガールと納得してしまっただ。

そしてこの先も沙希のそばから離れない……とあらためてそう決心する。

コップの液体を気が付いたジャクリーンに飲ませた沙希は残った液体を庭にばら撒く。

ここにいる医者に検査させないためだ。

「チエさん、今の液体で心臓疾患は少し改善されましたが完全ではありません。」

「どうです？ジャクリーヌの健康のために日本に行ってきませんか？」

「日本に？」

「ええ、日本の京都に私たち女性だけの病院があります。スタッフも全て女性です」

「そこでだったらジャクリーヌの身体を完全に健康にしてあげられます。いかがですか？」

アルのほうに振り向くチエに

「チエ！わしはあの男に騙されてお前をないがしろにしてきた。」

おまけにお前が愛するわしの息子も永遠に取り上げられてしまった。これは神があんな男を信じたわしへの罰なのだ。

行つてきなさい日本へ、そして元気な孫の顔を取り戻してほしい」「わかりました、私・・・日本へ行つてきます」

「決まつたわね・・・それじゃあ、改めまして・・・チエ姉さん」「えっ?」

「京都の病院に行くつてことは私の家族になるつてことと同じなのよ。チエ姉さん」

「姉と呼んでくれるの?」

「当たり前じゃない。誰がなんと言おうとあなたは私の姉さんよ。それに日本に行つたら判ると思うけどチエ姉さんの姉達や妹達がたくさんいるから楽しみにしていてね」

「何だかうれしい。ねえジャクリーヌ」

「ママ!私も日本に行くの楽しみよ」

「そうだ、ましろちゃん。こちらにいらっしやい」

「はい、あきあ様」

「あなた、ジャクリーヌが日本に発つまで世話をしてくれない?」

「はい、でも・・・」

「私のことは心配いらなから。」

それにもう大丈夫だと思つけどどんなはねつかえりがあるかも知れないから

ジャクリーヌを守るつてことあなたの使命よ」

「私の使命ですか・・・わかりました」

という和白い蝶に姿をかえ、ジャクリーヌの髪の毛に止まつて髪留めに姿をかえた。

えっ?・・・という顔をするがもうここまでできたら驚きはもうない。

「そうだ！・・・ねえ、アルパパ」

「アルパパ？・・・わしをそう呼んでくれるのか？」

「あたりまえよ、チエ姉の義理とはいえ父親なんだから妹である私にとって父と呼んで問題ある？」

アルは強く首を振る、思いもしなかった嬉しさが胸にせまる。

幸せがこんな突然訪れるなんて・・・昨日まで・・・

いや、先ほどまで一欠けらもなかったことだ。

この幼さが残る東洋の少女が目の前に現れるまで・・・
彼女によつて夢でも見ているように次々と嬉しい出来事が持ち上が
つていく。

それに・・・それに・・・アルパパなんて・・・
先ほどまでのやつれた面影が嘘のように若返るのを自覚できる。

「アルパパ！もう悪いことはしないでね。手下の人たちも正業に就
かせて」

「わかった、もともとわしの代ではマフィアというだけで
人に後ろ指をさされることはしたことはないんじゃ。」

ケイシーが亡くなってからじゃ、何もかも嫌になつてあの男に家業
をまかせつきりにしたのは・・・」

「うん、判つてる。私、アルパパを信頼している」
そう言つたときだ。

『パタパタ』とヘリコプターの音がしてきた。

それも一機ではない・・・二機・・・いや三機・・・か。
機影がこんもりした庭の木々から姿をあらわした。

庭の上空でホバリングするとヘリコプターからロープが下ろされスルスルと人間が地上に降りてくるのがみえる。

この部屋にいる皆はもう目を丸くして見ている。沙希にしてもそうだ。全く予想もしていなかった。

一番大きい機体のヘリコプターが地上に降りてきた。いつのまに集まったのか庭にはたくさん車が止まっていた。ほとんどが軍隊の車だ。軍人達が整列している。

「あつ、あれはロバート・オーエン政務次官……えっ？嘘っ！……」

エバが驚いた顔をして窓にしがみついている。

沙希が窓をあけてベランダに出ると向こうでも気がついたらしくヘリコプターを降りてきた皆が手を振っている。

「なんだ、皆来たんだ」

そういうと沙希は皆の方に走っていった。

「沙希」

「あきあき」

「サキ」

「アキアキ」

日本の、アメリカの、姉妹達が沙希に飛び掛る。

今日の昼に別れたただけなのに、こうして沙希の姿を見ると涙が出るくらい嬉しい。

「ジェシー姉さん！琴姉も……もう大丈夫なの？」

「サキが助けてくれたんだって？ロバートから聞いたわ」

「沙希！又あなたに助けてもらったのね」

ジェシーも琴美も沙希の正面からと背中から抱きついて泣いているのだ。

「もういいよ、姉さん達。こうして元気な姿が一番だからね」といつてから

「ハリー、忙しいでしょうに。ここまで来ていただくなんて・・・」

「いや、サキ！今日は幾度心臓が口から飛び出したかわからないよ。」

君の顔を見るまでは安心出来なかったからね」

「すいません」

「サキ！」

「あつ、ミランダ！」

「今からサキの警護の任務につくからね」といつて6人のSPが敬礼する。

「でもどうしてここが？」

「沙希が持つモバイルが居場所を教えてくれたのよ」

「瑞姉！・・・杏姉も沙里姉も綾姉もゆり姉も・・・翔姉も茜姉もひづるちゃんも

希佐ちゃんも・・・皆いるんだ」

「わしらもいるよ」

「あつ！パパとママ」

とジョーンとジェーンに飛び掛る沙希。

「ああ、サキ・・・ありがとうジェシーを助けてくれて・・・」

「あたりまえだよ。姉妹だもん」

「ウオホン！」

という咳払いで振り向くとアルが立ってまぶしそつにこちらを見て
いる。

「サキ！こんなところで立ち話もなかるう、皆さんを部屋に……」

「判ったわ、アルパパ」

その沙希の返事に驚く全員。

アルパパ？……沙希が家族として迎え入れるのは心から信じた人
だけだ、

ましてや相手は男であるマフィアのドンアル・エドガー……
でも彼に向ける信頼した沙希の笑顔は皆の警戒心を解いてしまった。

部屋にいたエバとキャリア、そしてチェとジャクリンは部屋に入っ
てきた顔ぶれを見て吃驚仰天だ。

大統領はいるわ、アメリカの誇りである映画監督のジョージ・ルー
クもいる。

そしてあの天才女優のコーデリア・ビーナス……

そして海外の芸能ニユースでよく見るフランスのジュラン首相の娘
で

フランスの天才女優といわれるソフィー・ジュランもいるのだ。

何という顔ぶれなのだ。この人達全てがこの少女……サキのため
に来たというのか……
凄い！としか思えない。

「皆！紹介するね。アルパパ……マフィアのエドガー一家のドン
よ。

でもアルパパは私に約束をしてくれたの。悪事には決して手を染め
ないって。

もともとパパは悪いことをしたことはないの。

でも長男のケイシーが殺されてから何もかも嫌になって
手下の男に家業をまかせてしまったってわけよ。

でも全てはその手下の男の罠だったのよ。あら・・・あの男は？」

「FBIとCIAが身柄を引き取りにきたから今引き渡したところ
よ。

あの男はいろんな悪事をしていて、刑務所で一生を暮らすことにな
るでしょうね」

「そう、・・・で今発言したのはFBIのキャリア・ファーガソン
捜査官、

こちらはCIAのエバ・クリス捜査官よ」

「皆さん、よろしく」

緊張一杯の挨拶だ。

チエやジャクリーンに姉妹達を紹介すると

皆、チエやジャクリーン又のそばに集まり談笑をはじめた。

こうして和気あいあいと時間が過ぎていく。

「ハリー、あなた私に何か言いたいことがあるんじゃないの？」

その沙希の言葉に皆ピタツと口を閉ざして

部屋のコーナーにあるソファに向かい合って座る沙希と大統領を見
る。

実を言うと全員がこんなところまで大統領自身がくることに驚きと
いうか不信感を隠せないでいた。

「サキ！少しだけ待ってほしい」

といって口をへの字にして閉ざした。

時間が刻々と過ぎていくが皆は咳音一つたてずただ二人を見つめていた。

『コンコン』とドアがノックされ、ロバートが入ってきた。額に刻み込まれた深いシワでその深刻さがわかる。

ロバートから大統領に渡されたメモ書き、

大統領は一度目を通すとポケットからライターを取り出し、その紙片に火をつけ灰皿の上に置いた。

大統領が燃えるのを見ながら

「サキ！事は容易ざるものとなってしまった。頼む！」

といって沙希にむかって頭を下げる。

「ハリー……いえモーガン大統領！私に指示してくださいればよろしいだけですわ」

「ありがとう、サキ！君はそう言ってくれろと想っていたよ。実は……」

「待つて！……ここで話してもいいの？アメリカの大事でしょ？」

「構わないよ。ここにいるのは全員が君の家族だ。そうだろう……サキ」

頷く沙希に

「だけど今からいうことは口外は禁止だ。約束できるね……」

大統領の言葉に全員が頷くのを見て、再び話し出した。

「実は3日前に宇宙空間で船外活動をするためのロケットを打ち上げたことを

諸君は知っているとと思う。

そのロケットが船外活動中に連絡を絶つたのだ。船になんらかの故障が発生したと思われる。

ただ『燃料が……燃料が……ない』という乗組員からの報告が最

後だった」

その事件が沙希とどうつながるのという皆の表情・・・

「つまり私に救助に行けと?・・・」

「あっ!」

と叫ぶ姉妹達・・・

「ハリー!娘にそんなことをさせるっというのか?」

ジョージがそう叫んだ。

「私も反対よ、サキをそんな危険な所にやることなんて・・・」

ジェーンが沙希の背中から抱きついた。

「宇宙船には6人の乗組員が乗っているのです。」

そして彼らは救助を待っている・・・判ってください」

「でも・・・でも・・・それでも嫌!」

とベット脇からチエが立ち上がって叫ぶように言う。

「私、サキとは今日初めて逢いました。そしていろんなことがあつて

姉って呼ばれるようになったんです。

嬉しかった・・・この子が産まれた時と同じぐらい嬉しかったんです。

短い時間でしたけれどここにいる姉さん達や妹達にサキのことを聞きました。

実際サキの不思議なパワーをこの目でも見ました。

だからサキしかこの役目を果たせないことも判ります。

それであつてもそんなところへサキを行かせるなんて嫌です!」

「わしもじゃ」

とアルが言う

「今日初めて逢っただけなのに、わしをこの地獄のような生活から救い出してくれた。」

優しい子じゃ・・・おまけにパパと呼んでくれる。わしの寂しい生活に光を与えてくれたのじゃ。

サキとはここでずっと一緒に暮らしていけるわけじゃない。

日本に帰っても、よその国に行っても同じ地球上じゃ我慢は出来る。

しかし、行くのは宇宙じゃ。わしらの手が届かないところなんじゃ。

そんなところに平気な顔をして見送る親がどこにいる！」

と大統領に怒りをぶつけた。ジョージ・ルークはそんなアルの肩に手を置いた。

黙って聞いていた沙希が立ち上がった。

「パパ・・・ママ・・・アルパパ・・・チェ姉・・・そして姉さん達・・・私行きます。」

6人を救いに行きます。そして彼らを家族の元に返してあげるんです。

この仕事は私にしか出来ません。私にしか出来ないのならばやるしかないじゃないですか。

無論、無事に帰ってきます。どうか行かせてください」と言って頭を下げた。

シーンと静まり返った部屋の中・・・

「そう言つと想ったよ、サキ。行って来なよ。そして無事に帰ってきて」

と行って沙希に抱きついたのはコーデリアだ。さすがに頬を濡らしている。

姉たちに取り囲まれた沙希に

「日本の首相には連絡しておいた。君によろしくって伝えておいてくれと言われたよ」
大統領がそう言った。

「ねえ大統領。NASAに行くんでしょ。私たちも絶対行くからね」

「あははは、そういうと思ってあの大きなヘリにしたんだ」

結局残ったのはアルパパとチエとジャクリーヌと翔だ。

屋敷はCIAとFBIが警護するし、

ジャクリーヌの心臓疾患を思うと日本に行くのは早いに越したことはない。

チエとジャクリーヌに翔が付き添うことになった。

沙希のことを思うと後る髪をひかれるとはこのことだろう。

だが3人はパスポート取得のために大統領専用車に同乗した。

パスポートは大統領の一声ですぐに発行されるし、

そのまま乗ることになった航空機もVIP待遇で日本までいけるから

ジャクリーヌの身体の負担も軽くなるだろう。

NASAの基地に降り立った沙希は出迎えの中に

ジョン・ロバートとスコット・アルダの姿を見つけて手を振る。

2人ともヘリコプターのローターが止まるのを待って走り寄ってきた。

「Oh!・・・サキ！お待ちしておりました」

と握手をするのだ。スコットはこの女だらけのグループに顔見知り

を見つけて抱きついた。

「ジョージ！ジェーン！・・・あっ、ジェシーも来たのか」と一人一人に抱擁する。

「大事な娘を危険な場所に行かせるんだ。見守るためについてきてどこが悪い！」

ジョージの機嫌はすこぶる悪い。

「まあまあ、あなた。今度のことは別にスコットのせいではありませんよ」

「いいや、責任はある。大体NASAの連中がしっかりしないからこんなことが起きるんだ」

ジョージの剣幕にたじろぐスコット。

「ふふふ、スコット！今度のことでは私、仲裁には入らないわよ」とジョージとスコットの間でおこるちよつとしたトラブルにいつも仲裁に入るのがジェシーだったのだ。

「だって、大事な大事な妹なのよ。こんな危険なことをやらせるホワイトハウスもNASAも私は気にいらぬわ」

ジェシーも怒り心頭だ。あの事故で沙希に命の瀬戸際で救われたことで

心の思いは沙希に傾いているのをもう止められないでいた。その視線はいつも沙希を見続けている。

「さあパパもママもジェシー姉さんも、もうその辺でお止めになつて」

とがんじがらめにされたスコットを救いだしたのは沙希だった。

「スコット叔父さん！」

叔父さんと呼ばれてビクツと身を震わせたかと思うと突然破顔した。叔父と呼ばれて物凄く嬉しくなったのだ。

「私、これからどうしたらいいの？」

「ああ、そうだね。ジョン！」

と同僚を呼ぶ。このグループの輪の外で戸惑いながらもついニヤニヤとしていたジョン・ロバートが飛んできた。

「君が立てたスケジュールをサキに聞かせてやってくれないか」

「判った！サキ。君は今からこのNASAのトップと会って貰わなければならぬ。

その上で宇宙飛行士に必要な訓練を受けてもらう。

事故機の事故の状態はわからないが、もし空気発生装置の故障も含まれるなら

残量を考えて48時間以内に救出しなければ彼らの命はない」

「48時間？」

「そうだ、打ち上げは明日の早朝になった。何もかもが初めてのことでだか訓練も手探りなんだ。

とにかく時間がない。

サキには気の毒だが自由は拘束され、分刻みのスケジュールになる」

「そんなこと何の苦痛でもありません。

あなた達の言うとおりしますからどんなことでも言ってください」

トップとの会見は緊張感の中で開始された。

軍人からの叩き上げでこうしてトップになったオルガー・ヒューストンは

幼さを残した美少女のサキが堂々と話すことに感銘を受けた。

大変なことが待ち受けているのに笑顔を絶やさぬ。

決して馬鹿ではない・・・いやむしろこのNASAで採用したモデルをこの少女が開発したという。

おまけに不思議なパワーを持つ少女のことは大統領からも折り紙つきなのだ。

会見の最後にはもうすっかり緊張感も解け、なごやかに終了した。

沙希は早速スコットとジョンに案内されて訓練センターに向かった。

両親と姉妹達とは会見前に引き離され、皆は広報室というところで沙希の様子をTVで見ている。

訓練センターの前で沙希は20数名の軍人達と今回同乗する乗組員6名に紹介された。

彼らは一様にこの少女の幼さに驚き、そして小馬鹿にしたような笑いを浮かべる。

でもスコットにしたってジョンにしたって沙希のことは良く知っている。

いわばここにいる全員・・・いや、世界中の軍隊がかかってはしないのだ。

だから言った。

「諸君！あと15分で訓練を開始するが、道場で少しサキの身体をほぐしてやってくれないか」

皆えっという顔をするがすぐにニヤニヤ笑いに変わる。

こんな突然現れた少女に何が出来んだ・・・と勢いこんでいるのだ。

だがスコットもジョンも顔を合わせてニヤニヤ笑いだ。結果が知れているからね。

白い道着であらわれたサキに、このNASAで一番力が強く身体もでかい軍曹が立ち向かった。

でも1分も持たなかった。

あのでかい体をサキが片手で持ち上げ道場の壁板に投げ飛ばしてしまっただ。

軍曹は一瞬に失神した。

「諸君！時間がない。全員でサキと戦うんだ」

そんなジョンの言葉に皆は顔を上げたが今の強さを見てそれもありなんと全員で飛び掛っていく。

だが全員がかかっても3分も持たなかった。

皆、畳の上で倒れこんで荒い息をしている。その強さって……よく知っているスコットやジョンにしたってもう呆然だ。

同乗する6人の乗務員はというと全員壁にもたれかかって口をアワアワと動かしているだけだ。

「諸君！後から聞かせて悪いが、

サキはここにくるまでに一人でマフィアを一つぶつ潰してきたそうだ」

倒れこんでいる軍人の一人が声を上げた。

「そんなの酷いですよ。そのことを知っていれば戦わなかったのに」

「あははは、悪い悪い。でも君達はサキの見目に惑わされていたんだからね。

だから一度その身でサキの強さを味わっておくといい……と思うんだ。

これからはもつと慎重になるだろうよ。それに言うておくけどサキは大の男嫌いなんだ。

サキをどうのこうのしようと思ってても今味わっただろう、誰にも負けない強さって」

もう誰もサキを軽んじる事はしない。スコットとジョンの目論見は成功だ。

サキにはいらぬことに神経を使って欲しくは無かった。だからの道場での試合だったのだ。

サキもそれが良くわかっていただけに何も言わない。

一方の広報室に押し込められた皆は沙希の行動に一喜一憂だ。

特にその目で沙希の素手で戦うのを見たことがないアメリカでの姉達はもううつとりだ。

「ねえ、パパ。サキってあんなに強かったんだ。凄い！」
とうつとりとしている。

「ああ、最強だよ」
というジョージにむかって

「うふ・・・」
なにやら意味ありげな笑いをうかべる。そんなジェシーに戸惑うがさすがは母親のジェーンだ。

「ジェシー！まさか・・・あなた・・・」

その言葉にジェシーはママを真つ直ぐに見て頷いた。

「私サキに抱かれたわ。あんなに可愛い妹なのに・・・我慢ができなくなったの。」

そして今日ね。お医者さんにいわれたの。妊娠してますって。

まだまだ初期の段階だから小っちゃん小っちゃん赤ちゃんだけど私この子達がたまらなく愛しいの」

「知っているのは？」

「FBIの研修に行ってしまった。イズミとケイだけよ。」

妊娠が判った時、イズミに言われたの。ケイトに連絡しなさいって」

「で、連絡したの？」

うんと頷くと

「一度日本にきなさいって」

「日本に？」

「そう、日本のお姉さん達や妹達が子供を産んだのは京都の病院よ。

男女の一卵性双生児なんてありえないから、どこの病院でもってこ
とはいかないでしょ。

だから一度日本で診察してもらって先生にアメリカのお医者さんを
紹介してもらいなさいって」

「じゃあ、いつ日本に行くつもりなんだ？」

「うーん、実を言うと迷っているの。この事件が終わってからすぐ
に行こうかと

思ったんだけど、コーディネリアはまだまだ撮影が残っているんでしょ

「コーディネリア？コーディネリアって・・・えっ、まさか・・・」

「そう、私とコーディネリアとベスの3人よ」

この話は全員が聞いていた。話の途中から輪になって囲みだしたの
だ。

「うわ〜」

と言ってコーディネリアに飛びつくひづるや瑞穂、バスにはゆりあや杏
奈が飛びついている。

よほど嬉しさを我慢していたのだろう、2人とも泣き出した。

結婚は出来ないとはいえ、2人とも孤児として育った身だ。

家族が出来た嬉しさはもう何ものにも変えることは出来はしない。

この輪から離れていたのは沙希と今日あったばかりのエバとカリアだ。

沙希と離れがたくなってついこのNASAまで付いてきてしまった。でも皆がこうして騒ぐのはわからない。あのコーディネリア・ビーナスや

さつき紹介されたサンフランシスコ市警の巡査のエリザベス・ターナーが泣いているのだ。

判らないことばかりだ。でも、あとでゆりあに教えてもらった沙希の身体の秘密、妊娠した3人が羨ましい。嫉妬さえ覚える。

一方沙希は訓練着に着替えて訓練用の装置の前に立っていた。

6人の乗務員はそれぞれ器具で身体を動かしていた。

さすがは長年訓練してきた技術だ。すっかり手の内に入れている。でも沙希の目から見ればまだまだ甘いと言えた。

乗組員と次々と交代する沙希。それからの時間って沙希の独断場になった。

呆然とするスコットやジョン、6人の乗組員、そしてスタッフや医療スタッフ達、全く・・・全く・・・何と言うことだ。

この装置の能力を100%出せたのならこんなことが出来るのか・・・

沙希は次々と訓練を行なっていくがこれは全て予想を遙かに超えた運動能力を示したものだだった。

アメコミでいえばヒロイックファンタジーの世界だ。

躍り上がったのは医療スタッフ達だ。こんな人間みたことはない。検査だつと勢い込んだがスコットが止めた。

「沙希を検査なんかしても無駄だよ。無駄だからしなくていい」

沙希と同乗する乗組員達・・・船長のビル・トーマス、一人娘のいる優しい父親だ。

操縦士のシイナ・エバンス結婚したばかりの優しい奥様。

副操縦士のジム・アムルは恋人がいるまだ25歳の黒人青年。

船外活動をするセリナ・イボンは1歳の子供がいるシングルマザーで、

船内で研究活動をするウエス・タッチとクロウ・エドバンスの2人は将来有望な若手学者だ。

出会い時のいろんな悪印象は消え去り皆と仲良くなった沙希、その沙希からこの先重大な使命を負わされているという気負いは微塵もない。

笑顔が素晴らしく素敵なナイスガールだった。

皆沙希の幼さから自分の娘や妹のように思えてしまう。

軍人達とも仲良くなった。特にあの軍曹・・・レイ・カルホーンは大きな身体に似合わず沙希に猫のように引っ付いて離れない。印象はまるで比叡山の天鏡のようだ。

分刻みのスケジュールだったはずなのに2時間も経てば

もう沙希に行なう訓練は全てなくなっていた。そんなこと初めてのことだ。

そこでNASAの技術者達が沙希を会議ホールに連れ込んでしまった。

沙希の開発したあのモバイルに関する講義を受けるためにだ。

NASAの人間が全て集まったのではないかと言うほどホールの中は盛況であった。

その片隅には沙希の家族達が手に手にモバイルを持っている。それを目を丸くして見ているのはエバとカリアだった。このモバイルのことは耳にしたことがある。

いつ捜査員達に配給されるのか心待ちにしていた。

それがどうだ会場にいる全員が・・・沙希の家族までがモバイルを持っている。

そして知った・・・このモバイルを開発したのが沙希だと・・・この少女は一体どうなっているのだ、

少し離れているが同乗する6人の乗組員や軍人達も技術者に混じって会場にいる。

彼らにしたって沙希を知ったことで会場に紛れ込んだのだろうか。口をぽかんと開けて壇上の見つめるだけだ。

沙希は技術者達の質問に的確に答えていった。言葉につまることもない。難しい計算もすぐに答える。

いかに頭脳も優れているのかこれでわかる。一人の若い技術者が手を挙げた。

「今日初めて貴女にあつたが、いかに優れた人なのかよく判った。

そんな貴女だ、このモバイルを日々進歩させない筈はない。

もし良かったらどんな新しい機能をつけたか教えてください」

その質問に会場の全ての人が思わず身体を乗り出す。

「えっと・・・新しい機能はただ一つだけです」

と言って言葉を切った。

沙希は会場内にいるはずのスコットとジヨンの姿を探し・・・見つけた。

スコットとジヨンは沙希の物言わぬ表情にただ頷いた。

沙希もそれを見て自身も頷いたことから口を開く。

「その機能とは私の双子の姉がアメリカにFBIの研修にきています。」

その姉達の要望によって私の作った装置の機能をモバイルにも応用したんです」

「その機能とはなんですか？」

今度は別の学者が質問する。

「DNAです」

「DNA？」

「はい、DNAを検査する機能です」

「それはどういった機能です」

「はい、姉達は警察官です。このモバイルを開発したのも姉達の要望でした。」

現場で指紋を検出したらすぐに本庁のスーパーコンピューターに連動して

犯人を割り出せばすぐに逮捕できるといわれたのです。

そのモバイルに私が作った装置の鍵となるDNAを検査出来る機能をつけました」

「すいません！そのDNAを検査できる機能ってどんなものですか」

「そうですね、それじゃあ言葉で説明するよりも見てもらいましょうか」

「見るって……今ここで？……それってどれくらいかかるんです？」

「そうですねえ、3分待つて貰いましょうか」

「3分？……たった3分でいいんですか？」

「はい……すみませんがどなたか工具を……」
顔を見合わせていた研究員が慌ててホールを飛び出していった。

「ベス姉！」

沙希の呼びかけにベスは紙袋を持って立ち上がった。
心得たものだ。沙希との息はぴったりと合っている。
サキの必要な部品類の調達は全てベスの役目となっていた。

用意された工具と部品を手取る。改造するのは一番前の席に座っていた学者のものだ。

ノートパソコンも接続ケーブルもテーブルに乗っている。

沙希が工具を持つと……早い、早い……モバイルに部品をつけるや

もうネジを締め出した。『ゴクツ』誰かが唾を飲み込む音がする。
そして、接続したノートパソコンに何かを打ち込み始めた。

早い……早い……

「おい、見てみる彼女、目を閉じてキーを叩いているぞ」
そんな声があちこちからあがっている。

『パタン』ノートパソコンの蓋を閉めた。

「えっ?……もう終わったんですか?」

頷く沙希に研究員は『ガタン』と腰を下ろしてしまふ。

啞然として言葉が出ないのだ。

「こちらにプロジェクターはありますか?」

その言葉にもう研究員達は急いで立ち上がって準備にかかる。言葉がでないから行動に移すだけだ。

プロジェクターにモバイルを接続した沙希はスクリーンに

モバイルの液晶を映し出す。

「このアイコンがDNAの検査をするアプリケーションです。これをダブルクリックするとダイアログが出てきます。

「すいません前の席の2人。毛根のある髪の毛をぬいてくれます？」
沙希は渡された髪の毛をスキャナーに作られた2つの枠の中に別々に置いて蓋を閉める。

しばらくして表れたのがチェーンのようにつながったDNAだった。

「右と左・・・チェーンが全然違うのが判るでしょう」

「そんな馬鹿な・・・DNAの検出がわずか1分ですか。

これでは犯罪捜査や医学の分野が50年も100年も進んだことになる」

その言葉、今ホールの片隅にいるエバもカリアも捜査官だから身にしみてわかる。

あのDNA検出もモバイルもあの可愛い沙希の手によって生みだされたってこと初めて知った。

特にFBIのカリアは今聞いた双子の捜査官って誰だか知っているイズミとケイのことだ。彼女達が持っていたモバイル・・・こうして作られたんだ。

羨ましい・・・いやモバイルのことではなくて沙希と姉妹だということが・・・

そんなエバとカリアに声をかけた日本の女性がいた。確かサキの姉であるユリアという女性だ。

「あなた達も沙希のこと好きになったんでしょ」

直にそんなことを聞かれて吃驚してしまった。

「えっ？わ・・・私・・・」

「いいのよ、正直に言えば。私達ってね、沙希を好きになった人ってすぐにわかるの。」

私だって好きで好きでたまらないもの。だから日本に帰ったら沙希に子供をつくってもらおうの」

「えっ？子供って？沙希って女性でしょ」

「ふふふ、聞いていなかった？ジェシーもコーディネリアもベスも沙希の子供を妊娠したって」

「えっ？」

とって見るのはジェシーとコーディネリアとベスだ。

「ねえ、沙希って・・・」

「不思議でしょ、あんな可愛い少女なのに1箇所だけ男なの。だから私達沙希に子供を授かるってわけなの」

「ねえ、あなた達って一夫多妻制？」

「ううん、ちょっと違うの、本当はね一言では言い表せない。

だって1000年もの女の悲しい歴史があるアマゾネスよ」

「アマゾネス？」

「そう女だけの一族、女しか産めない一族だったけど

1000年たった今、沙希があらわれたの。沙希は神の子。

沙希が授けてくれる子供は全てが男女の一卵性双生児なの」

と言ってから、指差すのは希佐だ。

「彼女わかる？沙希に良く似ているでしょ。」

彼女はキサ・ユウキっていうんだけれど彼女は沙希の子孫なんだ」

「子孫？・・・うん、全然意味がわからない」

エバもカリアも頭を捻っている

「沙希は神の子って言ったでしょ。だからある事件を解決するため
に

140年前にタイムスリップしたの。そこで結婚して出来た子供の
子孫がキサというわけ」

「もう・・・頭が混乱する」

「だからさ、沙希のことはゆっくり教えてあげる」

壇上では沙希が困りきっていた。自分のモバイルの改造を依頼する
声が相次いだのだ。

「ベス姉！あと部品はどれぐらい残っているの？」

「そうねえ、あと10台分ぐらいかな」

「判った」

と言って会場を眺める。

「今聞いたとおり部品は10台分しかありません。

そして、誰のものを改造するのか私には決められません。

ジョン！スコット！あなた達におまかせします」

と言われて困ってしまったのは指名されたジョンとスコットだ。

仕方がないから各グループごとに代表を決めた。

すったもんだでようやく10台のモバイルが沙希の目の前のテーブ
ルに集められた。

そこで沙希は不思議なことを始めた。空中に手で何やら書き始めぶ
つぶつとなにやら言っている。

そこで不思議が起こった。

工具箱からドライバーが飛び出し、モバイルの蓋を開け始めたのだ。

全員が椅子から飛びあがり、目を丸くしながら急いで壇の前に集ま
ってきた。

壇上が上がって沙希の横でみている者もいる。モバイルは次々と改

造られていった。

改造されたものから沙希はノートパソコンに繋ぎソフトを打ち込んでいく。

1台3分、10台で30分・・・ですべてが終わった。

改造されたモバイルを渡された学者、研究員、軍人、パイロット達それこそ頬をこすりつけるようにモバイルを撫でている。羨ましそうにするほかの者達。

「今のは何だったのです？」

そんな質問がでたのは静かになったタイミングを合わせてのことだ。

「オンミヨウジュツといいます、日本に1000年前から続いているいわば魔術です。」

科学の先端に行くNASAでこんな話はなかるうと思いますが、これは事実です」

「魔術？・・・あなたは魔術も使えるのですか？」

「人にはいろんな顔を持っています。私もそうです。」

アキア・ヒノというスクリーンネームを持つのは女優という一面です。

サキ・ハヤセではこうしてモバイルを作ったりゲームソフトの開発が仕事です。

又、アキア・アベノという名の私は皆さんは信じられないでしょうが

幽霊や化け物と戦っています。いろんな一面を持つのが私です。どうです、怖いですか？」

シーンとする会場に少し寂しそうな表情の沙希だが

『パチパチ』と拍手が広がっていくのにパツと明るい笑顔が広がっていく。

やはり沙希には笑顔が似合う。

日本でいうと歌舞伎で見栄を張っている・・・そんな姿が重なる。

「やはり、サキは素敵な女性だ」

スコットは立ち上がり、拍手をしながら隣のジョンにそう言った。

こうして慌しかった1日が過ぎていく。

NASAでの早朝、VIPの部屋のベッドの中、沙希を挟んで眠る2人の女性・・・

エバとカリアだ。昨日逢ったばかりなのに今朝こうしてベッドで朝を迎える。

別に淫乱なのではない。考えて考えた上の仕儀だった。人と人の出会い・・・愛を知ってそれを高めるのは時間ではない。いわば感性の問題なのだ。

2人にとって沙希との出会いは驚きの連続であった。超人的な武技、不思議なパワー、NASAで知った頭脳・・・どれもこれも捜査官として働いていた世界とは別次元の出来事だった。

そして知った。沙希のすべてを・・・沙希の笑顔の下に隠された寂しさと悲しみ、

それは人としての苦悩であった。でもそれだけではない。

それを知ってもあまりある・・・心のそこからあふれ出る優しさ・・・

・2人はそれを知ってしまった。

心のタガがはずれたように沙希への想いが堰を切って流れ出した。こうして2人は沙希の部屋をノックしたのだ。

沙希の全てを教えてくれたゆりあの後押しがあつたのも支えになつた。

「あら、遅かつたじゃない。エバ姉さん、カリア姉さん・・・」
沙希は知っていたようだ、でも2人はどれだけ苦悩したかわからない。

姉さんと呼ばれるうれしさがあつたが、何だか悔しくなつて2人して沙希に飛び掛つていった。

でもこんな小さな身体なのに、こんなに細い身体なのに2人を支えて揺るぎもない。

思い切り交互にキスをした。崩れ落ちる身体・・・そして、細胞一つ一つに

凄いエネルギーが染み込んでいく・・・ゆりあに教えてもらった通りだ。

飛び上がった2人が目にしたものは、ベットの真ん中で横たわる沙希の姿。

2人は服を脱ぎ捨てながら、まるで女ヒョウのように沙希に飛び掛つていく。

2人は28歳と30歳だ勿論初めてではない。その2人がまるで処女のように沙希に翻弄される。

めくるめく快感の中、改めて沙希の凄さを知つた2人・・・失神する寸前、沙希と交わつたどの女性も感じたように子供が出来たことを知つた。

時間となつてホールに降りていく3人。沙希はまだスッピンだ。

慌てて化粧をしている2人の捜査官にゆりあが聞いた。

「どうだった？」

椅子に座つて杏奈に化粧をされる沙希を横目に

「凄かった・・・あんなの初めて・・・」

「私・・・何もいえない。」

とにかくユリアが教えてくれたサキの男って強烈過ぎて何も覚えていないもの」

「でも妊娠したのって判ったんでしょ」

頷く2人に

「じゃあ、こちらにいらっしやい」

とホールのコーナーのところの椅子に座っていたジェシー、コーデリア、ベスの

3人のところに連れて行った。

「おはよう」

「おはよう・・・あら、どうしたの？」

2人の捜査官の表情に『幸せ』というものを目ざとく見つけたベスが言った。

「あつ、まさか・・・」

とコーデリアが立ち上がった。

頷いた2人に

「昨日、サキの部屋に行ったの？」

「で、どうだった？」

コーデリアは2人に腰掛けるように指示し、自分も腰をおろす。

「凄かった・・・」

「あんなの初めてよ。女でよかったって何度思ったか知れない」

「私、聞いてられない。5人で相談してね」

とゆりあが皆のところに行ってしまった。

「あのく、ゆりあは？」

「あの子はまだ、日本に帰るまで我慢しているみたい」

「そうなの」

「で、どうする?」

「私、まだまだ撮影があるし、これから大事な場面だからね」

「だったら、どうしよう。出来れば皆で行きたいからね」

「行きたいってどこへですか?」

とエバが聞く。

「勿論、日本へよ。・・・あら、聞いていない?」

額く2人に

「ジエシー教えてあげて」

「わかった」

といって

「実はね、いとこのケイトから聞いたの。ケイトってもうすぐサキとの子供を産むんだ。」

そのケイトがね、日本に来て診察を受けなさいって」

「日本で診察を?どうして」

「サキとの間に産まれる赤ちゃんは全員が男女の一卵性双生児なの」

「男女の一卵性双生児?」

「そう、これってありえないことなの。もし、近くの産婦人科で赤ちゃんを産んだとしたら?」

「まさか・・・」

「マスコミの餌食が研究材料よ」

「嫌よ、そんなの」

「だからさ・・・だから日本に来いって。」

そのの先生ってサキの叔母さんに当たる人だけどサキの子供を産んでいるんだって。

それにその病院って女性専用の総合病院で設備は世界一って自慢

してた」

「ねえ、さつき全員って言ったよね」

「そう、今産まれているのって9人のお母さん。だから18人の赤ちゃんよ」

「凄い！」

「もうすぐ産まれる人って6人よ」

「じゃあ、子供は30人になるんだ」

「違うよ、もつともつと増えるわ。だって私達・・・」

「あつ、そうか・・・ここにいる全員でも10人だもんね」

「子供達の親戚が40人も50人もなるの?・・・凄い！」

「一桁違うんじゃないの」

「えっ!100人以上?日本とアメリカでそれだけの親戚?」

「フランスも・・・かもね。だってソフィーもサキを狙っているもの」

「ふふふ、凄いこと教えてあげようか。」

「9人のお母さんの中にサキと正式に結婚する奥さんがいるの」

「奥さんが?」

「まだ結婚式をあげていないけどね。リッコっていうんだけど、

そのリッコ、1000年前はサキのお姉さんだったの。」

そしてサキが140年前にタイムスリップしたの聞いたよね。」

そこで結婚したのカズ八っていうんだけど、それリッコの前世だった」

「じゃあ」

「そう、リッコはサキと結婚するのは決まっているの。神様が決めたのよ。」

だから私、リッコを羨ましいとは思わないわ。私だってサキの妻に違いないもの」

「妻かあ・・・そうね、私だって妻だよね」
「そうよ」

「うわゝ嬉しい」
まるで少女達の集団だ。

その集団に声をかけた男がいた。ジョージだ。

「コーディネリア！君に報告することがあるんだ」

「報告？」

「そう、今ハリーから連絡があった。今日のことを心配してな。それと撮影の再開を1ヶ月ほど伸ばさなければならなくなった」

「撮影を延ばす？」

「ああ、日本の首相から連絡があったそうだ。」

フランス、オランダ、ベルギー、イタリア、スペイン、イギリスと大至急の招待があったそうだ。他にもたくさんの方からの招待が来ているが

1ヶ月以上も撮影を伸ばされたら堪らんからな。

今回はそれだけの国に絞ってもらった。それ以外は撮影が終わってからだ」

「凄いわ！それって」

「勿論、モバイルとBBXのことだ。VIP待遇の招待だよ」

「私も付いていきたいけど・・・ねえ、皆。この間に日本に行かない？」

「ねえ、パパ。それっていつから？」

「今日無事に終わったら2〜3日後だよ」

「じゃあ、私達同じ日に日本に行こうよ」

「私、休暇届け出してくる」

「私も」

「パパはどうするの？」

「わし？わしは勿論随行するさ、スタッフ達と一緒にね」
「フィルムに取ってくるの？」

「ああ、楽しみにしててくれ。あのサキのことだ、
ヨーロッパでも平穩無事なことあるわけないしな」

「サキのフィルムのヨーロッパ編ね。楽しみだわ」

「だからその間にミオにきちんと診察を受けてきなさい」

「ミオって沙希の叔母さんで女医さんよね。判ったから心配しない
で」

これで5人の日本行きは決まった。

サキは呼びに来たNASAのスタッフに連れられてクリーンルーム
でまずは除菌だ。

地球のウィルスが地球の外でどんな変化をするか判らない。

宇宙服に着替えて部屋を出る。

待機室にはもう6人の乗組員が座っていた。

スコットもいる。ジョンもいた。

沙希が入っていくと皆立ち上がった拍手で迎えた。もう悔りなんて
ない。

そして、全員が宇宙船に乗り込んでカウントダウンが始まった。

「60、59、・・・10、9、・・・3、2、1・・・」

エンジンが点火され轟音と共に猛烈な炎と煙が排出され、
ロケットの機体が徐々に浮き上がっていく。マスクミヤ見ていた一
般客が歓声をあげた。

そんな中で祈るように見送るのが沙希の家族達だった。

（絶対に無事に帰ってきてよね）と祈る言葉は皆同じだ。

マスコミはこの急に決まった打ち上げを疑っていた。
ついこの間、打ち上げたばかりなのに又今日の打ち上げだ。
それにこの間のロケットの情報が入ってこない。

マスコミ用の広報室、

「よお！」

と言って自社のブースに入ってきたのは昨日まで急に病気になった
記者の代わりに

ルーク監督の撮影に取材に行っていたアラン・ベーコン記者、

そこで凄い体験をしたことはおくびにも出さずにこやかに挨拶する。

昨日急に撮影が中止になり、午後になって当分延期と聞いたのでN
ASAに戻ってきたのだ。

「又、打ち上げがあつたんだって？」

「今、終わったところさ」

「でもどうしてなんだ？4日前に打ち上げたばかりじゃないのか？」

「そうなんだ、でもそれが不思議なんだ。昨日から船からの情報が
入ってこない」

「情報が入らない？最後の情報は？」

出てきたメモを読み上げるが

「チエツ」

と舌打ちした。

「これじゃあ、何も判らない」

と言って集まってきた若い記者に声をかける

「今日打ち上げた乗組員のデータは？確かNASAからは回って
きているよな」

「えっ？・・・はい」

と渡された読み上げたアラン記者、

「あっ」

と喋って立ち上がってしまった。

「サキ・ハヤセ？・・・この名前は？・・・」

「そうでしょ、俺達NASAで取材しているけど、そんな名前聞いたことがないですよ」

「おい！写真は無いのか！写真は？」

「俺のデジカメに入っています」

とカメラを渡す。写真に写っている一番前の少女は・・・

「俺・・・知ってる・・・」

「知ってるって？サキ・ハヤセをか」

「ああ、昨日までルーク監督の撮影に取材に行ってたの知ってるだろ」

「前評判の高い映画だろ」

「その主演の女の子さ」

「そんな馬鹿な！そんな女の子がどうして宇宙船に乗るんだ？」

「いや、彼女ならやりかねん」

そんな話を聞いていた若い記者が

「俺、昨日ルーク監督が軍隊のヘリから降りてくるのを見ました」

「何？そんなこと初めて聞いたぞ・・・おい！」

「いえ、ルーク監督以外数人のスタッフと女性が10数名だけでしたから、見学に来たんだと・・・」

「馬鹿やろう！お前それでもブン屋か！」

「俺もルーク監督見ましたけど」

「いつだ！」

「さっきです」

「どこでだ！」

「上の階のVIPの広いほうの部屋です」

「よし、おい！取材だ」

とさつき怒鳴られたばかりの若い記者に声をかける。

「他の者はNASA中を取材しろ！昨日から変わったことが無かったかを徹底的に聞きだせ。

・・・いいか、くれぐれも他社に気づかれるな！」

と言って2人飛び出して行った。

広いほうのVIPルーム・・・A室と呼ばれる部屋だ。

アラン記者は『コンコン』とおざなりなノックをしてサッとドアを開けた。

そこは図々しい新聞記者だ、ズカズカと部屋の中に入っていく。

しまった・・・という顔のルーク監督だがさすがは老練の監督だ。

さっと表情を消す。

「何だね、君は」

「私はA社の新聞記者でアラン・ベーコンといます」

「新聞記者？・・・わし達はただ見学に来ただけなんだ。取材を受けることは何もないよ」

「撮影を延期してまでですか？

何もないのにコーデリア・ビーナスやソフィー・ジュランを連れてまで見学に来ますか？

・・・実を言うと私は昨日まであなたの撮影に付き合っていたんです。

伝説になっているクランクインのあの日も私はあの場所にいました。

だから判るんです。今日打ちあげたロケットの乗組員に彼女が乗っ

ています。

「一体このN A S Aに何があったのですか？」

「そうか、アランはあの時あの場所にいたのか。・・・よろしい、お聞かせしよう。だがあの時大統領から聞いたよね。

彼女のこと発表してもいいこと悪いことがあるってこと覚えているかい？」

「はい！私もまだまだ生きていたいですからね。君もいいね。

さっきの女の子のことは公表は出来ない」

「どうしてですか？」

「合衆国の最高機密だ。いや、今に全世界の機密になる。そうすればもう逃げも隠れも出来なくなる」

「そんなあ・・・そんな女の子なんですか」

「そつだ。俺もこれには大賛成なんだ。

へたなことをしたら世界が減じる。そう思っている」

若い記者は『ゴクツ』と唾を飲み込んで何もいえなくなる。

「そうかあ、では君には何も隠せなくなったね。でも私が勝手には話せない。

少し待っていてくれないか」

「わかりました。楽しみに待っています」

「えっ？では昨日宇宙船が行方不明になったのですか？」

A室のソファにアラン記者とその上司、ソファの後ろには同社の若手の記者が3人立っていた。

向かい側にはN A S Aのトップであるオルガー・ヒューストンとスコットとジョンがいる。

ルーク監督はソファの後ろに並べられた椅子の真ん中で

妻のジェーンと娘のジェシーに挟まれて座っていた。その周りには女性達が座っている。

「そうなんだ。手を尽くして探したんだが全然見つからない」

「大変なことじゃないですか」

「ああ、乗組員の6人が生きているのか亡くなっているのか判らないんだ」

「だからサキ・ハヤセを呼んだのですか？」

「ああ、だが最初は私は信じなかった。

でもここにいるスコットとジョンがサキ・ハヤセをすぐに呼べと言った。

その上、ホワイトハウスに事故のことを連絡した時、即座にサキ・ハヤセの名前が大統領から出た。

サキ・ハヤセって誰だ？・・・だが、昨日初めて逢って得心したよ。これは大変な少女だってね」

「あははは、でも正解ですね。これは彼女しかやり遂げることが出来ないでしょうね。

ねえ、ルーク監督？サキ・ハヤセは宇宙空間でも活動出来るんですかね」

「ああ、出来るんだ」

「宇宙空間での活動？なんだねそれは・・・」
と聞くオルガー・ヒューストン。

「いやだなあ・・・あれ？・・・知らなかったんですか？

あのスーパーガールがサキ・ハヤセだったこと」

「何だって！あんなのデマではなかったのか」

「アラン君、そのことを知っているのは映画関係者と君達マスコミだけだ。」

おっとホワイトハウスの関係者もだ」

「ジョージ！どうしてそんな大事なこと黙っていたんだ」

「こんな大事にせず、サキに救い出させようっていうんだろ」

「そうだ、こんなに時間をとらなくても、彼らの命を救える」

「実を言うと、昨日のホールでの講演が終わったあと、サキは飛んだんだよ。」

嘘だと思っならここに座っている女性達に聞けばいい」

「飛んだあ？・・・」

「そう、夜空に向かって飛んでいった。なあ・・・」
頷く女性陣。

「どうなったんだ・・・」

「どれぐらいだったかなあ、3時間か4時間か」

「ちょうど3時間だったわ。パパ」

とジェシーが言った。

「わしらはサキの話を聞くために集まった。全員だ。」

あとはわしが下手な話をするよりコーデリア、君が話さない」

「はい」

と言って立ち上がった。

「サキは宇宙空間に出てから、ようやくと故障した宇宙船を見つけた時には、

たっぶり1時間はかかったそうです。それほど宇宙は広いって言うてました」

「それで乗組員は？乗組員は無事なんですか？」

ジョンが聞く。

「かなり疲労されていたといっていました。事故の原因は隕石との衝突です。」

衝突で開いた壁の穴は彼らが補修していましたが、船体にかかりのダメージを受けているそうです。

電気系統が駄目になったことで空気の発生装置が作動出来ていません。

それと壁が破れて空気が流出したことで、生命を維持するための空気量の余裕はあと2日だそうです。」

「あと2日……、少しは時間ができたな」

「それとエンジンの修理が必要だそうです。修理の上で空になった燃料を補給すること」

「スコット、今聞いたことをどれぐらいで修理できそうです」

「わかりません。故障がどれぐらいのものか……」

それに宇宙空間での修理です。地球上でいくら訓練していてもその通りにはならないことは判って貰えるとおもいます」

「やはり、サキ・ハヤセ一人が頼りか」

オルガー・ヒューストンはその言葉を吐いてしまった。

「でも」

とソフィーが言いながら立ち上がった。

「サキが言っていました。自分ひとりで助け出せるならすぐにやるって」

「お嬢さん、それはどういうことかな」

「はい、サキはこう言っていたんです。」

宇宙空間なら宇宙船ぐらい簡単に一人でも運べる。

でも大気圏に入ったときのパワーは私でもかなわない。

へたをすれば宇宙船もろとも焼き尽くされてしまう。それほど凄いパワーですって」

「そうか、大気圏突入の時か」

「サキだって人間なんです。怪我もすれば血も流します。スーパーガールだから無敵だなんて思わないでください」

「わかった、もっと慎重に考えてくれってことだね」

「はい」

と返事をするのは女性全員だ。

「所長！」

と飛び込んだのは管制員の一人だ。

「今、大気圏を出ました」

「わかった」

と立ち上がった。そして皆を見て

「君達も来るかい」

「はい」

と立ち上がって管制室に向かう。

管制室の中は数十人の男女がコンピューターに向かって働いていた。

その慌しさはよくテレビや映画で見るシーンと酷似していた。

邪魔にならないよう皆が入れられたのは一番後ろにあるガラス張りの部屋だった。

一番前の壁には大きなスクリーンが3つ並べられており、

一番真ん中は大画面がその左右のスクリーンはそれぞれ画面が4つづつに分けられていた。

管制官達の耳にはヘッドフォンが口元には小さなマイクがセットされており何やら話し続けていた。
画面が切り替わった、船室内が映された。

「船長、運行状況はいかがですか？」

「全てが順調です」

「故障船の方は？」

「はい、今はこの船の前方1kmのところにあります。微かですが目視もできます。」

それに故障の原因もどこがどのように故障しているかも聞いております」

「聞いていている？誰からですか？」

話しているのはスコットだ。何もかも承知の上なのに・・・

やはりルーク監督の義理とはいえ弟だ、しらばっくれるのも良く似ている。

「彼女ですよ」

と言って船内カメラの斜め上方を見た。

すると一瞬画面が青一色にかわるが、それは直ぐにマントの色だとわかった。

船長の前に座り込むとその人物があので映画で見たスーパーガールなのだ。

管制官達に衝撃が走り、ザワザワと騒ぎ出す。

「画面の中にサキ・ハヤセがいないが彼女はどうしたんだ」

「サキですか？サキはご存知のようにコンピューターの専門家です。」

だからスーパーガールに真っ先に故障船に運んでもらいました。

今電気関係、コンピューター関係の修理中です」

どうやら口裏を合わせている。

「もう修理にかかっているのか」

「はい」

「向こうの乗組員とは連絡がとれないのか」

「これもスーパーガールにいわれたんですが、

空気発生装置が故障しているため空気の残量が残り少ないそうです。

だから彼女が言っています。乗組員全員を眠らせた」と

「眠らせた？」

スーパーガールが話しだした。

「眠らせることによって空気の吸収量は少なくなります。

早く空気発生装置を直すことに越したことはありませんが
もしものことを思うと安全率を高めなくてはなりません」

「安全率ですか？」

「ええ、何事も考え付く限りのことをやるのが大切です」

「それで今後どのように故障を修理するのですか？」

こちらでもいろいろ考えたのですが、地上での修理と宇宙空間での
修理とでは

自ずから違ってくる。安全でしかも早く修理する方法があったら
教えてください」

「私が昨夜この宇宙空間に来て一番印象に残ったのは思った以上に
隕石群が多かったことです。

地球の周囲では引力の影響なのか隕石が吸い込まれるように大気圏
に突っ込んでいきます。

だから私は故障船を地球からの影響がない今の場所に停止させまし
た。

その上でもしものことを考え、バリアを張っています」

「バリア？・・・あなたはそんなことも出来るのですか？」

「いえ・・・その・・・」

「あははは、あなたのその恥ずかがり方は誰かさんとそっくりだ」
「えっ？誰かさん？」

「その人の名前は言わぬが花ですよ」

「からかわないでください」

「これ以上いうとあなたは消えてしまいそうだ・・・では聞きます。

これからのようにされるつもりですか？出来れば地上からもお手伝いしたい」

「わかりました。では、エンジンの専門家を出来るだけ多く集めておいてください。

セリナのこと信頼できないのではありません。ただ、どんな故障か判らないのです」

「わかった、至急手配しよう」

「といって近くの管制官達に合図する、慌てて2人が飛び出していく」

「今からここに船を停止させます」

「停止？どうして？故障船までは・・・」

「大気圏から離れたくないのです」

「でも、さっきあなたは・・・」

「すでにこの船にバリアを張っております。その上で私は故障船をここまで運ぶことができます」

「えっ？運んでくるんですか？」

「真空内ではそんなに難しくはありません。船を2隻並べます。その上で各々の船を囲んだバリアを1つにします」

「バリアを1つにする？・・・では」

「そうです、船外での修理はバリア内ですので安全です」

「バリアが消えることは？」

「ありません、私自身が消さない限り。そして、これ出来るかどうか分かりませんが」

この大気圏の近くに船を置いた訳・・・ここから空気をバリア内に注入してみようかと思えます。

これが成功すれば宇宙服を脱いで地上と同じ修理が出来、時間が大幅に短縮できるのです」

皆、目を真ん丸にして聞いていた。そんなことが出来るなら救出は成功だ。

でもそんな常識外・・・いやとんでもない出来事なのだ。

それを今、ここで見られるなんて・・・皆腰を下ろしてじっと画面を眺める。

「アラン君、今のを君はどう思うかね」

「こんなの見られる幸運一生ありませんよ。」

でもそれ以上に彼女の力のこと絶対に漏らしてはいけないと改めて思いました」

「そうよ、絶対に絶対によね」

「はい、あなた達が彼女を思う気持ち良くわかります」

「あら、どうして？」

「あんな場面を見せ付けられればね」

「いやだ、わかっていたの？」

「あからさまだったじゃないですか」
そこで

「あははは」

と笑ってごまかした。

「では、行って来ます」

と立ち上がって壁に進むとふっと消えてしまった。壁を通りすぎた

のだ。

驚かないのは沙希の家族だけだ。

乗組員さえも慌てて窓の外を見ている。

シイナとセリナはデジカメをもって展望室に飛んでいった。

やがて窓から覗いている乗組員の目に点のようだった故障船がぐんぐんと大きくなってきた。

この船とやらんだかと思うとスーパースーパーガールがぐつと引く。ゆつくりと手を離れたらもう動かない。

スーパースーパーガールが2隻の船の間で片手を挙げて何かを言っている。すると瞬間的に金色のバリアが2隻を囲んでしまった。

スーパースーパーガールは宙から何か取り出した。モバイルだ。それを乗組員に示している。

慌てて全員がモバイルを取り出して操作した。

船内の映像を見ていた地上の管制官達もモバイルを取り出した。操作をすると鮮明な画像が映る。

「これまでは順調です。今からバリア内への空気の注入をおこなってみます」

といって連絡を絶った。

見ているとバリア内の大気圏側ギリギリに位置し、手を組んで何やら言っている。

そのうち『プシュー』と音がして何やら流れ込んでいるようだ。

空気なのか・・・やがて終わったのか再びモバイルで連絡がくる。

「終わりました。成功です」

「えっ？バリア内では呼吸ができるのですか？」

「はい出来ます。ただ空気濃度がチヨモランマの頂上ぐらいしかありません。」

これでは酸素ボンベなしでは高山病にかかる恐れがあります」

「そうですか」

とガツカリするが、

「そこです。昨夜作ってみました」

「作った？・・・なにをです？」

スコットも家族達もドキドキしだした。

沙希のことだから又、とんでもないものを作ったのに違いない。

「セリナ！その座席の間に黄色い袋があります。出して見てくださ
い」

セリナは黄色い袋を取り出した。

「これですか？」

「中身を出してください」

袋から出てきたのは白の衣装とベルトだった。

「それはセリナ用に作ったエアパックです」

「エアパック？」

「衣装は行動的にするためレオタードにしました。

材料はNASAの宇宙服の素材を使っているので太陽光を遮断しま
す」

説明はあとで・・・とにかく着換えてください。シイナ！手伝って
あげて」

2人は袋の中身を持って展望室に上がる。

やがて降りてきたセリナを見て男性達は

『ピーピー』『ピューピュー』と口笛や指笛を吹いて囃し立てる。

首から下は全身のレオタードで足もレオタードの中にローヒールが
仕込まれている。手は指先も隠している。

「どうです？」

「何だか裸みたい」

「恥ずかしい？」

「いいえ、私バレエをしているからこんな平気です」

「よかった。じゃあ、その少し太めのベルトを試してみて」

「こうですか？」

白いレオタードに黒いベルト、コントラストがばっちりだ。

「ベルトの横の赤いボタンを押して見て」

赤いボタンが押されると皆あつと声を上げた。

首の周りから出た透明なものが顔全体を覆った。ヘルメットだ。

「そのヘルメットの右の耳のところにあるボタンを押して見て」

ボタンを押すとサツと目の辺りが黒く変わった。

それは目を守る黒い偏光レンズだ。

「次は緑のスイッチを押して！」

スイッチを押すと微かに『ウー』と唸る音がした。

でも何も変わらない。不振げな目でモバイルの液晶画面のスーパー

ガールを見る。

「何も変わらないように見えるけど、セリナの身体を今バリアが覆ったの。」

例え拳銃でセリナを撃つても身体を傷つけることなんか出来ないでしょうね

それと共にベルトにつけられた空気発生装置が作動しているから、真空では言いませんが、今の濃度の薄い空気の中では平気です」

「どうして真空の中では駄目なんですか？」

「駄目ではないかもしれませんが、昨夜慌てて作ったから自信がないんです」

「ただそれだけ？」

「はい、自分の自信がなければ他の人に危険な事をさせることができ

ません」

「マア・・・あなたって本当に天才ね」とセリナが言った。

スーパーガールは照れながら話を続けた。

「今、セリナの声はヘルメットの中の受送信装置がモバイルと連動しています。

ベルトの白いスイッチを押すとモバイルの連動を止め、直接人と話が出来ます。

たとえば2人の船外活動の時間が便利です。黄色いスイッチを押すと両方出来るようになっていきます。

ベルトの横のレバーは今まで押したスイッチのロックが上で解除、下でロックがかかるようになっていきます。

最後です。残った腕時計型の装置を左手に嵌めてください」

「これは？」

「バッテリーパックのインジケーターです。

残量が少なくなればアラームがなります」

「バッテリーってどれ位持つの？」

「今のところ4時間です。もっといいバッテリーがあれば10時間は持つようになると思います」

セリナの準備が出来た。いよいよ船外活動が始まる。

エアロックの部屋でエアが抜かれた。ドアが開き船外へ出る。

セリナにとって2回目の乗り組みだった。前回は船外活動をしたが訓練をつんだといっても冷や汗ものだった。

でも今回は違う。エンジンの修理なのだ、実戦といってもいい。けれど不思議な気持ちだった。こんな軽装な宇宙服は初めてだ。

動きやすい・・・とにかく身体が軽いのだ。目の前にスーパーガールがいる安心感なのか。

さつきはとにかく吃驚した。大気圏に出たとたん

「今から変身するから驚かないでね」

と言ってスーパーガールに変わってしまった。幼い時から大好きな映画だった。

何回見たかわからない。

それがあのかのままの姿で目の前にいる。宇宙空間でなければ腰を抜かしていただろう。

そして今セリナ自身が着込んでいるこの服・・・もうたまらない。シングルマザーの自分だけど自身のジェンダーが変わってしまったのか。

女性を好きになるなんて思ってもみなかった。自分に勇気があれば告白できるだろうか。

セリナは首を振った。

駄目だ！駄目だ！今は修理に集中だと故障船のエンジン部に泳ぐように飛んでいく。

でもこのセリナの気持ちに気づいたものがいた。

基地のガラス張りの部屋でこの様子を見ていた女達だ。

「ねえ、あの子」

「うん、きつとそう」

「ほつとく？」

「あの人、1歳の女の子のいるシングルマザーだって・・・だからほつとけない」

「どうして？」

「えっ？」

「どうしてさ、サキの周りにあんな人ばかり集まるの？」

「あのね、サキって肉親がないの。子供の頃から悲しい運命ばかり

り。

だから5歳の時死のうとして喉をナイフで刺したの。あの声はその
ときの後遺症だって。

母親からは大学のとき捨てられたのよ。だから肉親の情ってわから
ないの」

「サキってそんな育ちをしてきたの？」

「あんな明るいの」

「ハヤセのアマゾネスとの運命の出会いでかわったのよ」

「大嫌いな男を捨て女として生まれ変わったの。神様が引き合わせ
てくれたそうよ」

「神様が？」

「そう、でもサキは神様よりもっと上から生れ落ちたの」

「神様より上？」

「そうこの宇宙の意思そのものだって」

「何よそれ」

「神様がそういつていたもの」

「神様が？」

「そうよ、私達だって何回も会ってるよ」

「そんなこと聞いてないよ」

日本人の姉妹達を囲み聞き耳を立てるアメリカの姉妹達。

わたしも近いうちにはと思っているソフィー、サキのヨーロッパ招
待には付いていくつもりだ。

「神様にあつたって本当に本当？」

「そうだよ。その神様をサキったら慌てさせているし、
それに昔の偉人たちがサキの守護をしているの。」

でもその人たちもサキは右往左往させているもの。

本当私達にも事後承諾だし、うちのお婆様も泣いているわ」

「お婆様？」

「そう日本の人間国宝よ。京舞というダンスの先生」

「あなた達にもグランマザーにあたる人。日本に行ったら会えるわ」

「京舞ってジョージが言っていたでしょ」

「パパが？」

「サキに舞わさせる為にカーネギーホールを借りているって」

「あっ！そうだった。私絶対見る」

目の前の管制室では集まったエンジンの技術者達が食い入るように作業を眺めていた。

時々、喉を鳴らす不埒な男もいた。作業を進めるセリナの身体がちよつとした身体の動かし方で

時々妙に色っぽく映るのだ。わざとしているじゃないかと思うくらいだ。

わざとしている・・・その通りだった。スーパーガールに見せつけていたのだ。

女性相手では勝手が違うからどのようにならいいのかわからない。告白もできない。なんだか恥ずかしさでヘルメットの中の顔が真っ赤になった。

偏光レンズで見えないのが幸いだ。

「セリナ！」

ドキツとする。手に持ったスパナを落としてしまいそうだった。

「これから皆をおこしてくるから、スーパーガールは消えるね」

「消えるって・・・」

「心配しないでスーパーガールが消えるだけで、私は消えないよ」

「中での修理のほうは？」

「それはほとんど昨日のうちに終わっているの」

「ほとんど?」

「ええ、空気発生装置の部品がどうしても手に入らなくて直せなかったけど今は大丈夫、

基地から持ってきたから」

「じゃあ、後はエンジンの故障だけ?」

「そう頑張ってるね」

「うん。やってみる」

くるつと後ろを向いたスーパーガールが

「ねえ、セリナ。私あなたが好きよ」

「私・・・」

「言わなくてもいい、あなたの想い私にはわかっているから。

私にはね、基地に帰れば今5人の妻がいるわ。

彼女達は来年には10人の子供を産むの」

「えっ?子供が??」

「そう、わたしは90%は女性だけど後の10%は大嫌いな男なの。

その男の部分には使命があるのよ。1000年続いた女の悲しい一族。

女しか産まれない為、一族を末の世に引き継ぐためには

嫌いな男に身を任さなければならなかった。そうして1000年女達の血は生き延びて来た。

そこに私が現れたの。私は一族を繁栄しなければならぬ。

血を流して戦いに明け暮れる男達の世を・・・

戦争というものをなくすため子供を産ませなければならぬ。

いいえ、血のつながりだけではないわ。

女の苦しみや悲しみを背負っている人は誰でも一族になれるのよ。

今日本には9人の妻と18人の子供がいるし、もうすぐしたら6人

の妻が12人の子供を産む・・・
産まれる子供は例外なく全員が男女の一卵性双生児。私はそんな一族の人間よ」

「私・・・私・・・それを聞いても・・・あなたが死ぬほど好き！好きで好きで・・・もう死んじやいたいくらい」

「わかったわ、じゃあ帰ったら私の部屋に来て・・・」
頷くセリナに

「早い時期にアリサに逢わせて・・・妻となったセリナの子だったら、私はアリサの父親よ」

そう言つてスーパージャーガルは船の中に消えていった。

ヘルメットの中で頬を伝わる涙・・・アリサに素晴らしいプレゼント。

大きくなつたらどう言おうかと悩んでいたのが嘘のようだ。

素晴らしく優しい人だから、アリサを抱いて喜ぶ姿が浮かんできた。

つい

「うふふふ」

と笑つてしまう。

そして、ハツとして気がついた。

白いボタンを押し直しモバイルとの通話ができるようにしてロックをかける。

あの人が素早くロックを解除し白いボタンを押しての2人だけの会話・・・

誰にも聞かれてはならない。

基地の女達には判りすぎるほど判っていた。エンジンを直しながらスーパージャーガルと何やら会話。

でもセリナの身体が何もかも語っていたのだ。

「ねえ、あの人も一緒に日本に行くことになりそうね」

「いいじゃない、賑やかで」

「不思議よね、普通こんなこと嫉妬しなければならぬのに・・・」

「そうよね、でもサキの子供を産める喜びってそんな変なもの吹き飛ばしちゃうものね」

「いいなあ、私も早いこと抱かれちゃったら良かった」

「よく言うよ。今度のヨーロッパへの招待、ソフィーがサキを独り占めじゃない」

「そうはいかないわよ。あのサキのことだからどんな事件に巻き込まれても不思議じゃないもの」

「そうよね。サキって平穩無事なんてことあり得ないもの」
これはカリアだ。サキを知ったのは昨日なのに大事件が2件だもの。

・・・本当に大変な子だ。

セリナの作業は中々進まなかった。真っ黒に焼きただれた部品・・・
これがなくてはどうにもならない。

モバイルへの報告はもう済ませてある。地上では大騒ぎだろう

「どうお？」

そう言って小柄な宇宙服が寄ってきた。

サキだ。正体が判っているセリナの心臓が一度に跳ね上がった。

もう乙女のようにサキを見るだけだ。駄目だ！この人には何も隠せない。

「大丈夫？・・・セリナ！」

最後のはしっかりしろっというサキの励ました。はっと自分を取り戻す

「この部品がなければどうにもならないの」
と手の中の黒く焼きただれた部品・・・それはまるで忍者の十字手裏剣のような形をしていた。

「ちょっと待って・・・その部品ってどこかで見たわ」

「えっ？本当？・・・ねえ、どこで？」

「うん・・・」

「ねえ、サキ。思い出してよ」

セリナはサキを呼び捨てにしているのに気づかない。

「はっ」

と顔を上げた沙希・・・思い出したのだ。

急いで沙希はモバイルに乗ってきた船の船長を呼び出した。

「船長！座席のところに黒いリュックがあるんだけど」

すぐに見つけたらしい

「これかい？」

とモバイルに映す。

「それです、それです。それに部品がはいっているんです。

出来ればそのままこちらに渡して欲しいんです」

「わかった。エアロックに入れておく」

「ねえ、サキ！・・・一体どういうこと？」

「うん、昨日ある作品を作ったときね。いろんな部品を持ってきたの」

「それじゃあ、何のことかわからないわ」

「その作品っていわば試作品でしょ。なにかあったらいけないと思って備品倉庫からガメてきたの」

「ガメてきた？」

「うん、その辺に合った部品を手当たり次第にリュックにいれて持

ってきたの」

「それがこれ？」

「廊下を歩いていたら研究員の人に聞いたら、
備品倉庫の係りの人ってビスの一個一個を台帳に控えているんだっ
て。」

時間がなかったから断っていないんだけど帰ったら怒られるかなあ」

2隻の船内も地上の管制室もこの沙希の言葉に腹から笑い出した。

一分の隙のない備品倉庫の苦虫を噛んだような係りの顔と

そんな男の元からたくさんの部品をようも黙って持ち出したと
喝采したいのとそのギャップに可笑しさが倍増したのだ。

「ねえ、どうかオルガー所長。地上に帰ったら係りの人に怒られな
いように出来ないでしょうか」

「あははは・・・サキ！あなたは凄い人だ。それと共に人としての
素晴らしさは驚嘆に値する。」

きつとぴったりそのものの部品を持ち出したのは運が良かった、
偶然だと言う人間がいるかもしれない。だが、サキの今までの功績
を考えると

あなたをどうのこうのと言えるものではない。きつと神がついてい
る神の子だ私は思う。

科学の先端をいくNASAの責任者の私が言う言葉ではないかもし
れないが」

こんなこと言われるのは苦手な沙希だ。だからリュックをひっくり
返して

宙に浮く多々の部品から目当ての部品を取り出して

「はい」

とわざと明るくセリナに渡す。

早速セリナは部品を取り付け、ばらしていた部品を次々と取り付けていく。最後のネジを締めて修理が終わった。

「じゃあ、セリナ燃料をいれようか」

「わかった」

2人して船底の外側にとりつけられていた細長いタンク型のカセットをはずした。

こういうときは引力がないのが便利だ。軽がると持ち運びが出来、燃料用のノズルに差し込んだ。

『プシュー』と音がして燃料が入っていく。

空になったカセットは宇宙のゴミとなる。だから2人で太陽にぶつかるように狙いを定めて押した。

沙希の術によりバリアーを通り抜けて真っ直ぐ太陽に向かった。

帰りはサキは故障していた船に乗り込む。

まだ安心は出来ない。大気圏突入を無事に果たして基地に着いたとき喜びの声を上げるのだ。

セリナとハイタッチで分かれた。船内の座席に落ち着いたサキ。モバイルに向かって言った。

「さあ、帰りましょう」

第三部 第五話

基地は大歓声に包まれていた。

2隻の宇宙船はドックの中に入れられ、これから調査と整備をすることになる。

モバイルで見ている限りヒロインはスーパーガールだったが勿論、この中に姿はない。

このヒロインが誰だか知っているのは1部の人間だけ、ただ一緒に打ち上げられたクルー達が

沙希を取り囲んでお祭り騒ぎをするのは異様なことだ。

それともう一人セリナに技術者達が群がる。

地上からの命令でエアージャケットを着換えないでそのまま地上に降りて来ていた。

早速ベルトの機能を調査している。

「あとでいいだろう」

とセリナを救い出したのはジョンだった。

彼らから逃げるように沙希の元へ走ったセリナは沙希に抱きついた。

皆が見ている前だったが我慢が出来なかったからだ。

恥も外聞もなくキスをする。そして腰砕けになるのはいつものことだ。

後ろから支えたのは杏奈と沙里奈。元気一杯で立ち上がるのも変わらない。

皆驚きで見ているだけだ。女同士の濃厚なキスも何の嫌らしさを感じない不思議な光景だった。

オルガー所長が沙希に固い握手を繰り返す。余程嬉しかったのか。これを見て推理すればサキのやったことを・・・そしてあのスーパージェイルの正体が誰なのかは自ずから判ることだ。

故障船のクルー達は精密検査のため入院することになったが救出船のクルーと沙希は簡単な検査で無罪放免となった。

沙希のヨーロッパへの招待はジョージから伝えられ、

「何だかこれからも忙しくなるわね、パパ」

沙希はそう言ったただだが、この旅行を楽しみにしたようだ。

「サキ！お願いがある」

「なあに、叔父さん」

スコットがサキの前に来て言った。

「君のことだから、何も言わなくても判ると思う」

「セリナに作ったエアパックのことね」

「そうだ、君はまだ自信がないと言った。じゃあ、自信があるように作り直してくれないか」

「いいわよ、でも今日は駄目！先約があるから」

「先約？」

「ええ、セリナの手料理をご馳走してもらったの」

スコットもモバイルの画面からセリナの気持ちが変わっていたから

「そうか、じゃあ明日必ず」

「わかったわ」

「それと完成したエアパックは、このNASAで作らせてほしいんだ」

「そうね、あんなのどこでもって言うわけにはいかないものね」

「サキ！出来れば今、契約とかの問題でシズカと話したい」

「わかった・・・瑞姉！」

と瑞穂を呼んでモバイルを受け取り、静香専務を呼び出した。

「沙希！・・・もうあなたって人は・・・」

「えっ？」

「モバイル・・・見ていたわよ」

「本当？」

「ええ、沙希の様子を聞こうと思ってスイッチをいれたとたんですよ。」

もう皆、パニックッてしまつてあちこち連絡したあげく

こちらでモバイルを持っている人全員が見ていたみたいなの」

「でもIDが・・・」

「ううん、どうしてか判らないけどIDなしに見れたわよ」と

沙希が振り返るとゆりあの通訳で内容が判ったのか

ジョンとスコットがニヤニヤと笑っている。

「叔父さん！」

とブツと膨れる沙希、皆を心配させないため黙っていたし、

わざとIDを使って通信していたのに・・・NASAがやったのだ。

モバイルを持っている全員が見れるように。

「だって仕方がないじゃないか、クルー達の生命の危機はなかったし、

この救出劇を見る為に君を知っている・・・

モバイルを持つ者だけに見えるようにしたんだ。

こんな素晴らしいものを見られる特権って必要だからね」

「お婆ちゃんに叱られちゃう」

「小沙希ちゃん！言うことはそれだけですか？」

「えっ？」

吃驚した沙希の顔に

「小沙希ちゃんの驚いた顔・・・うち、少し溜飲が下がりましたえ」

「お婆ちゃん！」

「おほほほ・・・それぞれ、その顔・・・可笑しおまっせ」

「だって、そこって・・・」

「ほれ・・・」

とモバイルで周囲を見せる。高弟達や真理ママ、希美子や看護師の
弥生等

家族達が全員揃っているのだ。

「みんな！」

「沙希！見たわよ・・・」

全員が声を揃えて叫んでいる。

「じゃあ、そこって京都の家？」

「そつよ」

という声にかぶさって

「ハイ！」

と言う声が聞こえた。モバイルが顔を映す。ケイトだ。

「サキ！あんたって相変わらずだね。というより派手だったわねえ」

「ケイト！お腹は？」

「あと2〜3週間ってとこかな」

「私帰れないけど、ごめんね」

「なにを言ってるのよ、そんなこと心配しないで・・・」

はいはい、ママ・・・人が話しているのよ、邪魔しないで・・・わかったわかった。

サキ！ママが代わってくれって」

「ママが？」

「ハアイ、サキ、あなたを映画やテレビの録画でみたけど、こうしてお話するの初めてだから、何だか緊張しちゃうわ」

「どうしてよ、ママ！私もママの娘よ。娘に対して緊張したりするのっておかしいわよ」

「サキって本当、話に聞く通りの子ね。嬉しい・・・」

「ねえ、ママ。後で連絡するからゆっくりとお話しましょ」

「わかったわ」

「静姉と代わってくれる」

画面が静香の顔を映す。

「沙希、何事？」

「あのね、モバイルで見たと思うけどセリナの着ていたエアパックのことで

スコットが話があるって」

「わかったわ、代わって・・・」

モバイルをスコットに渡すと沙希は大きく伸びをした。

周囲は家族達を取り巻いており、皆話を聞いていた。

エアパックを外して技術者に渡したセリナはもう着換え終わり沙希の横にいる。

姉妹達がニヤニヤ笑っており、カアツと頬を赤らめ恥ずかしがるセリナを好ましく見ていた。

モバイルでの打ち合わせはスムーズに終わり、契約と調印は静香自身、

ワシントン支局の立ち上げに来る時に行なうことになった。

「ねえ、静姉。私この2、3日のうちにヨーロッパに1ヶ月行くことになったの」

「それは聞いているわ。政府の方から連絡があったから。」

それとさつきモーガン大統領から連絡があったわよ」

「えっ？大統領から？」

「日本の家族に沙希の功績を称えてのお礼なの。」

それと何でもヨーロッパからアメリカに帰ってきたとき称号を与えるって聞いたわよ」

「えっ、恥ずかしいなあ、称号だなんて・・・もうハリーったら」

「あははは、仕方ないよサキ！あんたはそれだけのことをしたんだから」

と横からケイトが顔を出して言う。

「あつ、そうだ。私がヨーロッパに行くときに5人・・・いえ、6人のお姉さんと」

私の娘が日本に行くからよろしくね」

「そのことはジェシーから聞いているから、心配しないで」

「沙希！言うのが後になっただけ、今日無事にチェとジャクリーヌが着いたから」

「じゃあ、2人は？」

「今、下の温泉に翔ちゃんが入りにいつてる」

「ジャクリーヌの体のことくれぐれもよろしくね」

「そんなこと気にせずきちんと仕事をするのよ。」

変なことに巻き込まれてはだめよ。もし、そうになったら逃げることね」

「はい」

ぷつと膨れてスイッチを切った。

「もう、私を子供扱いにして・・・」

「あははは・・・サキ！子供のほうがまだ扱いやすいと思うよ」

「もうパパツたら」

いっそうにホッペを膨らませるサキに皆大笑いだ。

その中で一人戸惑っていたのがセリナだ。

こんな子供のようなサキがあんな凄い人間だとどうしても結びつかないのだ。

けれどこんな可愛らしさにキュンと母性本能をくすぐられたのも本当だ。

「ねえ、セリナ」

と声をかけたのはセリナも知っているハリウッドの天才女優コーデリア・ビーナスだ。

「あなたも私達と日本へ行くのよ」

「日本に？どうして？」

「今日、サキを泊めるんでしょ」

ビクツとして真っ赤になる。頷いたのはしばらく時間がたったときだ。

「サキと寝たらよくわかると思う。ねえ、エバ」

「教えてあげるけど、もうそれは凄いんだから・・・」

「そんなに？」

言葉だけでもクラクラしちゃう。

「最後、気が遠くなる時に出来たって確信するの
何を？つと聞かなくても判る、妊娠のことだ。」

「だからね、6人で行くの」

「じゃあ、さつき私の娘って言ったのは？」

「あなたの1歳の子供のことじゃない」

ぐつと来た。

「優しいでしょ、サキって……」

唇を思いっきり噛み締める。でないと嗚咽がもれそうだ。

帰りに基地内のスーパーに寄る。沙希とする買い物。

こうしていると沙希って本当に子供っぽい……というより子供そのものだ。

スーパー内を走り回ったり、お菓子をほしがったり、試食品は必ず食べている。

ちよつと目を離すといなくなる。

何をしているかと思うと子供達と仲良く遊んでいるのだ。

どうしても宇宙でのあの沙希とは結びつかない。

車に乗る頃はもうへトへトに疲れてしまった。

けれど何故か心地よい疲労だ。

家は少し基地から離れた大きな家だった。

「ただいま！」

「お邪魔します」

と2人して買い物袋を持って玄関に入る。

出迎えたのはセリナの両親だ。

ママがアリサを抱いて、パパはニコヤカに出迎えた。

「パパ、ママ……ただいま」

素早くパパの頬にキスし、ママにもキスをしてアリサを抱くセリナ。

こうしてみたらとても素敵な家族に見えるが、

家の中の空気が鈍よりと澱んでいるのを沙希は見逃さなかった。

「サキ、父のデИБよ。そして母のマーガレット。

彼女はサキ・ハヤセ、素晴らしい人よ」

「ようこそ、来てくれて嬉しいよ」

というデИБにサキから抱擁する。マーガレットにも同じだ。目をパチクリして驚いている。初めて会ったのにこんな抱擁。こんな少女には初めて会った。

サキは気にせずセリナの抱くアリサに向かい合った。すると

「きやつきゃ」

サキに向かって笑いながら大きくジェスチャーをする。

「まあ、この子は・・・こんなこと初めてよ、サキ。

人見知りか激しくて困っていたのに」

「別に人見知りじゃなくてよ、セリナ。・・・アリサはね」

と両手を出すと身を乗り出してサキに抱かれにきた。

「アリサは、必死に話しかけていたんだけど

誰も真剣に聞いてくれなかったのだからと拗ねていただけ・・・ねえアリサ」

3人は呆然とこの少女と小さな赤子を見ていた。

サキが言ったことでアリサがサキの頬に『プチュ』とキスをしたのだ。

「ねえ、アリサ。私は誰？」

すると即座に

「ちやちや」

と言ったのだ。

「じゃあ」

とセリナをさして

「この人は？」

「マンマ」

ママといったのだ。

セリナの目から涙が溢れる。

「この人は？」

デイブを指差す。

「ジ・ジ」

「この人は？」

「バ・バ」

このアリサの反応に3人は大騒ぎとなった。初めて意味の判る事を言ったのだ。

デイブとマーガレットはサキを改めて見て

「サキ・ハヤセ、あなたは不思議な人だ」

といった。

「私は普通の女よ。ねえアリサ」

するとアリサがサキに向かって何かを言っているようだ・・・いやそのように見えた。

「駄目ですねえ、アリサは。そう、判ってもらえなくて癩癩をおこしたの」

「サキ！アリサは何て言ったの？」

「悪戯をしたの。誰も判ってくれないって癩癩をおこしてね。

ねえデイブ、アリサを許してくださいね」

「アリサを許す？」

なにを言っているのかわからない。

「アリサがあなたの大事なパイプをホラ、

暖炉の隅の小さな穴・・・あの中に隠してしまったの」

「パイプを？」

と言って立ち上がって暖炉の隅の穴の中を懐中電灯で照らした。

「あっ！」

立ち上がったデイブの右手にはパイプが握られている。

「本当でした。あなたのいったこと」

「アリサは嘘はいいませんわ。

ただただママとジジとババにアリサ自身を見ていて欲しかっただけなんです」

アリサはサキに一生懸命何かを訴えている様子だ。

「ねえ、アリサ。それってとても大事なことよ。わかった。ちょっと待ってね。

うん、いたわ。

・・・よし、これでママとジジとババに以前の笑顔を取り戻してあげられる」

もう2人は本当に会話をしているんだと納得してしまう。

この子は天使・・・3人の目にはサキが背中に大きな真っ白い翼がある天使に見えるのだ。

「じゃあ、アリサ。ママと仲良くしてもいい？」

・・・うん、弟と妹よ・・・仲良くしてね。うわあ、うれしい・・・

じゃあ、いいもの聞かせてあげる。日本の横笛よ」

と行ってアリサをセリナに渡す。そして掌を上にとすると忽然と現れる1本の横笛。

『翔龍丸』だ。

こんな信じられない現象に思わず固まってしまふパパとママ。セリナは慣れているので平然としているがアリサは喜んでいる。ゆっくりと唇をつけると静かな曲が流れ出した。

生まれて初めて聞く音色、東洋の曲のようだがだが聴いたこともない3人に・・・

いや4人の心に深く深く入り込んでくる。素人にも天才だと判る吹き手、

セリナもパパもママも知らず知らずのうちに涙を流していた。

これは・・・神だ・・・デИБとマーガレットは十字を切った。曲が消える・・・窓の外は小さな光が無数に天に昇っていった、

「セリナ！この人は？・・・」

「天使よ・・・神の子でもあるの。そして私の大切な人」
その言葉でこの少女とセリナとの関係がわかった。

「だが、この人は女性だよ」

そんなパパの言葉に

「うふふふ」
と笑う。

「パパとママ・・・正直に言っわ。私、今日この人に抱かれるの。そして来年にはこの人の子供を産むわ。」

男女の一卵性双生児よ。アリサの弟と妹」

2人は立ち上がってしまった。なんとこの美少女が・・・

サキが言う

「デИБ！・・・マーガレット！・・・聞いてください。」

日本で1000年続くアマゾネス・・・

男の世を・・・血の歴史をやめさせる為に創られた、

女しか産めぬ女だけの悲しい一族、それが私が属するアマゾネスの一族・・・

血を残すため嫌な男に抱かれて子孫を残し、

1000年も続けた歴史、そして私が生まれました。

私90%は女だけど10%は男なんです。

今日本には子供を産んだ妻が9人、子供が18人、

別に妊娠している妻が6人います。このアメリカに来て5人の妻が
できました。

私の子供は不思議なことに全て男女の一卵性双生児なのです。

私は・・・私は女性が大好きです、女性しか愛せないのです。

そんな私ですが・・・セリナが好きです。大好きなのです。愛して
いるんです。

セリナを妻に迎えることを許していただけないでしょうか」

セリナはそつと手をサキの上に重ねた。

頬を流れる涙をそつとわが子・・・アリサが拭ってくれる。

生まれて初めて味わった人のぬくもり・・・サキからほんのりと流
れてきた。

「わからん！わたしにはわからん。しばらく考えさせてくれんか」

パパは2階に上がってしまった。

「サキ・ハヤセ」

「サキでいいです」

「わたしは貴女の味方ですよ。私も女ですからね」

「ありがとう、ママ」

そういうサキを驚いたように見るマーガレット。

「セリナは妻だけど、姉でもあるの。」

それが我一族の掟、だから妹である私にとって貴女は私のママなの
よ」

戸惑いはあったもののこの子は私の娘・・・

そう思うとたまらなくなつて腕を回して抱いてしまう。

家族のぬくもり・・・そう忘れていたあの半年前の悲しい夜から・・・

。

「ねえ、サキに美味しいものを作るからアリサを見ていてくれる？」

とアリサを渡される。

「ねえ、セリナ。大丈夫？」

とアリサを抱いてセリナに聞く。

「酷い！・・・まあ見ていなさいって」

と言うハナから

「ママ！手伝って」

という。やつぱりと言う顔でアリサと顔を見合わせた。

きゃっきゃ、きゃっきゃと喜ぶアリサ。

しばらくしてキッチンから

「サキ！」

とサキを呼ぶセリナの大きな声。行ってみると腰に両手を置いて何やら怒っている。

「こら！サキ！・・・これは何よ！」

と買った物袋を指差す。

「お菓子ばかりじゃない。スーパーで駄目だっていったでしょ」

「ウエーン・・・ごめんなさい」

と首をひっこめて謝る。

「ほんとにあなたって・・・しょうがないわねえ・・・ねえママ」

マーガレットは可笑しそうに大声で笑い出した。

「どうした」

と2階から降りてきたタイプがマーガレットの笑い声でキッチンに顔を出した。

サキがいたのにドキツとして、顔をそらすようにしてマーガレットを見る。

「だってパパ、

サキってスーパ―であれだけ駄目っていたのに隠れて・・・これを見てよ」

とバサッと買い物袋を逆さにする。

山のようなお菓子の山・・・これはもう・・・あきれてサキの顔を見ざるをえない。

両手を腰に置いて怒り心頭のセリナ、首を縮めるように謝るサキ・・・

たまらなくなつてデИБも笑いだした。

デИБもマーガレットも笑っているのに調子にのつたか

「ねえ、パパ！聞いて聞いてセリナ姉さんて酷いのよ。

私が買い物籠に入れているのに次から次から棚に戻しちゃったの！いつのまにか笑い声が止まっていた。

デИБとマーガレットとセリナの驚いた顔がサキをみつめる。

さつきから幾度驚かせられたのだろう・・・これは・・・テストだ。

半年前に死んだ筈のテストだ。いまの話し方・・・お菓子好き・・・テストそのものだ。

でも・・・

「どうしたの？ママ・・・パパ・・・セリナ姉さんまでも」

「あなた誰？・・・サキ？・・・もしかしたらテスト？」

「私・・・私はサキよ。テストはここ」

と左の掌を開けると小さな赤い光が1フィートほど浮かび上がった。

「これがテストよ。・・・ねえ、テスト。姿を現して・・・」

ぼんやりと人の形にかわる。

サキよりも少し若い可愛い少女だ。

何か言っているようだが声が聞こえない。

サキが人差し指噛むと小さな血が出てくる。

それを口に含んでふつと振り掛けると

「パパ、ママ、セリナ姉さん。会いたかった。

いつもいつもそばにいるのに気づいてもらえない。・・・悲しかったわ」

「テス！」

3人の叫び声・・・テスに抱きつこうとするがすり抜けてしまう。

「パパ！ママ！哀しまないで！・・・パパ達の悲しみに私、天に上れないの」

「わし達のせいでお前は神の元にいけないのか？」

「そうよ、私は寿命だったの。すぐに天に上るはずだったけど
パパとママの悲しみのバリアでこの家に閉じ込められてしまっ
たの」

「そうか、わし等のせいだったのか」

「ううん、それでも嬉しかった」

「寂しい思いをさせたのね」

「そうでもない。アリサがね。いつも遊んでくれたのよ。ママ」

「アリサが？」

驚いたようにセリナがいう。

「子供には私達のようなものが見えるのよ」

「じゃあ、スーパーでのサキって」

「ふふふ・・・プリンセス・サキって天然なの。

さつきは私に感応されたけど、わざと自分を解放されていたもの」

「プリンセス・サキ？」

「そうよ、現世の人には判らないけど
プリンス・サキはこちらの世界では最も有名なお方なの。
だって神の力が宿っているお方だもの。
ねえ、パパ。セリナ姉さんがプリンスの奥様になるのを許してあげて。」

だってプリンスの奥様になるって凄いことですもの」

「ありがとう、テス。あなたの力添え凄く心強いわ」

「何をおっしゃいますプリンス・・・やはり貴女は噂通りのお方・・・」

プリンス・・・お願いがあります。私を・・・私を天にお導きください」

「わかったわ・・・もうお別れはいいのね」

「はい、パパ、ママ、セリナ姉さん、アリサ。天でみんなを見守っています」

サキの真言が始まった。

すると表が明るくなって誰かが窓から入ってきた。

「マア・・・あなたはマリア様・・・」

テスが言っのを聞いてお顔を見る。こんな奇跡起こるものじゃない。

思わず胸で十字をきって両手を合わせる。

「マリア様・・・あなた自身がこられるなんて」

「おほほほ、プリンスのことは日本の仏から聞いております。

だから私は貴女がこの国に着てからの事つぶさに見ておりました。

さすがにプリンス、ハワイでのあの事件から今日までそれはそれは大活躍、

こちらの貴女の守護の者右往左往で今は倒れこんでおりますわ」

「私の守護者？」

「一番位の高いのがエブラハム・リンカーンですの」

「えっ？あの偉大な大統領の？・・・そんなあ」

「何をおっしゃいます。プリンセスはこの宇宙そのものが使わした、たった一人の人間、神よりも位が高いのですよ」

「それは言わないでください。私は普通の人間です。

身体には赤い血が流れている普通の人間なのです。

力があるのは人を助けるために必要と思うようになりました。けれど特別な目で見られるのは嫌です」

「おほほほ、やはり貴女は噂通りのお方・・・

これ以上の長居はご迷惑でしょうから私は消えます。

ではまいりますようか」

とテスを促した。

「プリンセス・サキ・・・パパやママ、そして姉をお頼み申します」

といて体が光り、小さな光の集合体になり、その光が窓を通り抜け

天に上っていく。見たこともない・・・恐れ多い出来事だった。

3人は表に飛び出して天を見ていた。そのうち星の一つがキラリと輝いた。

3人が戻るとサキはアリサと遊んでいた。

こう見ると本当普通の人間だ。でもさっきのことを思うと恐れと敬いがあった。

「やめて！そんな目で見るのは・・・私はパパとママの娘よ。本当の娘よ」

といてデイブの肩に顔を寄せる。

次にはマーガレットの胸に顔を押し付けて泣き出した。

「そうねえ・・・そうよね。あなたは娘・・・何と言ってもママがお腹を痛めた娘だわ」

「そうだな。サキは私の娘だ。本当の娘なんだ。その娘を俺が守って何が悪い！」

とパパがサキの頭をくしゃくしゃと撫で回す。

「もう、やめてよね。サキは私の妹だけど旦那様でもあるんだから」

とパパとママに訴えるセリナ。

「あら、セリナ姉さんがパパとママに嫉妬してる」
からかうサキ。

「サキがそんなことを言う・・・わかった！」

とキッチンへ消える。

次に両手にお菓子の山を抱えてゴミ箱に捨てようとする。

「ひゃくやめて！大事なお菓子を・・・」

とアリサをママに預けてセリナに飛び掛って、お菓子を取り戻そうとする。

まるで子供の喧嘩だ。パパもママもニヤニヤ笑って止めようともしない。

アリサは紅葉のような手で拍手をしていた。

深夜2人はベットのの中にいた。アリサはママが預かっている。

稚拙な性戯しか知らなかったセリナにとって本当の女になった瞬間だ。

津波のような怒涛の絶頂感がセリナを襲い翻弄した。

地の底に引き込まれていような感覚・・・

味わったことのない幸福感が自身を支配する。

その瞬間に誰もが感じる妊娠を確信したのだ。

朝、家の中がバタバタしていた。

パパとママがこの年になるまでどこにも旅行をしたことがないと知って

サキが旅行をプレゼントした。

セリナ達と日本に行けというのだ。無論、パパは京都の家には泊まれない。

でも近くにホテルがある。骨休めにはもってこいだ。

基地に戻ると皆が待っていた。一緒に日本に行くジェシー達にパパとママを紹介するセリナ。

無論大歓迎だ。パパとママも嬉しそうに笑っているが、その顔ぶれの豪華さには驚いていた。

サキは技術者たちに研究室に連れてこられていた。

レオタードはマネキンに着せられ、ベルトもインジケーターも付けられていた。

昨日からこのエアークックを研究していた技術者たち、

図面もないこの装置の精密さにはお手上げの状態だ。

ようもこんな物、無の状態から作れたものだ。

彼女の頭の中を調べた方がいいのかも知れない

この見本を一から全てを解析するには技術者達、昼夜の勉強が必要となるだろう。

サキが持ち出した部品は全て備品倉庫に戻されていた。

倉庫の係りがサキの前に立ったときはどきりとした。

「これが所長から渡されたフリーパスのカードだ。

これさえあれば基地内はどこでも入れる。備品倉庫さえもだ。

ただし、部品を持ち出すときは必ず書類に書き出すこと。いいね」

ブスっという回れ右という号令がかかったようにして出て行った。

「はい」

と返事をするサキは申し訳なさそうに首を縮めたままだ。

サキの昨日の功績が大きかっただけにこの姿とのギャップに技術者たちは、

腹を抱えて笑いだした。

エアパックの改造はサキが備品倉庫の部品を探すことから始まった。

時間がなくてあまり能力のない部品を使っていたことで、

自信がなかったエアパックも最先端の部品を使うことでぐんと能力が向上する。

バッテリーパックも倉庫で眠っていた10時間以上使用可のものを見つけることができた。

ただサキの後ろでの係員が目を光らせていたのには参ってしまった。

一緒に付き添っている技術者達にはクスクス笑われる始末だ。こうして手じかに部品があったことで短時間で改造を終えた。

「あとは真空の中での実験だけですな」

「はい、早速準備をしてデーターを取ることになります」

「じゃあ、後はよろしく」

「あのー、モバイルのバージョンアップ早いところお願いしますね」

「わかりました。あっ、それからエアパックのレオタードですけれど

縫製は全て衣装部のサリーおばさんが全てやってくれましたから

彼女に聞けばいいです。レオタードにしたのはただの私の趣味ですから」

「いえいえ、僕達もそれに準じますよ。あんな素敵なものありませんからね」

と握手をして開放された。セリカは無論姉達も何人かは付いて回っていたので

話を聞いていたセリナに腕の皮膚を捻られてしまう。

「サキつたら・・・あれってあなたの趣味だったの？」

「そうよ、だって素晴らしいじゃない。」

セリナ姉さんて生身もいけどレオタード姿って目が眩む眩む」

「私凄く恥かしかつたんだからね」

「でもバレエをやっているから平気って言っていたじゃない」

「嘘よ、あんな場所でそう言うしか仕方ないでしょ」

「本当にセリナ姉さんて外面がいいんだから」

「こら！サキ！」

「キヤー姉さん達、セリナ姉さんが苛める」

と姉達の間を走り回る。そのにぎやかさに姉妹達は大笑いだ。

サキは走り回って少し離れたところでセリナの方に向き直ると

「セリナ姉さん！レオタード姿って格好よかつたわよ。」

私スーパーガールのレオタードの下のおとこの部分が反応するのを抑えるのに必死だったんだからね」

と言ってクルリと振り返って廊下の端で待つ家族の方に走っていった。

「もうサキつたら、しょうがない子」

「セリナ！あんたも私達と同じね。サキの子供っぱさに引つ張りまわせれるのは」

「だって・・・」

「でも、気をつけなさい。少しでも油断するとあの子のお芝居にひつかるから」

「お芝居？」

「そうか、セリナはサキの一面しか知らないのね」

「ええ、コンピュータの天才ってことと不思議な魔術を使うことぐらいしか・・・」

「それはあの子の一面でしかないの」

「コーディネリアがそう説明する。いくら宇宙馬鹿の世間知らずのセリナでも」

このハリウッドの天才女優のことは良く知っている。

そのコーディネリアと姉妹になるってことサキを愛することと生まれた家族の絆なのだ。

人をこうして引きつけるサキって凄いつて思ってしまう。

「あの子がどうしてこのアメリカに来たと思う。

まさかNASAの招待だけって思っているんじゃないんでしょうね」

「えっ？違うの？」

「違うわよ。あの子の別の一面ってね。アキア・ヒノというスクリーンネームを持つ女優よ」

「女優？サキって女優もしているんですか？」

「ただの女優ではないわ。とんでもない天才女優よ」

「でも天才はコーディネリア、あなた・・・」

「違うわよ。私なんて足元にも及ばないわ。きっとあの子世界を制するわよ」

「そんな子なの？・・・」

頷くコーディネリア・・・何か泣きたくなかったが、いやいやと首を振る。

「違うわー！」

「えっ？何が違うの？」

「私がセリナに言いたかったのはそんなことじゃないの」

「えっ？」

「サキには気をつけて」

「どうして？」

「これ、日本のお姉さん達に注意されたんだけど、

サキって天才なだけに自分のお芝居に引きづり込んで喜んでいて

「お芝居に引きづり込むって？」

「日本の家族でカオル・サオトメという日本で天才女優のお姉さんがいるの。」

そのカオル姉さんがいつているらしいけど、

お芝居って判っていてもどうにもならないって、

どうしてもかなわないって言っているのよ」

「まあ・・・」

「サキって子供でしょ」

「うん、昨日よくわかった」

「えっ？」

「昨日ね、スーパーにサキと一緒に買い物に行ったら

あの子ったら買い物籠にお菓子をこれでもかって入れているから私片っ端から棚に戻してやったの。」

でも帰ったらお菓子の山よ、隠れて買って来たって」

「大変な子よね」

へりの出発まで時間があるのでサキとルーク監督はワシントンへ帰るため、

所長達に挨拶に行っているので、

楽しそうに話をしているコオーディアとセリナの周りに

姉妹達やアリサを抱いたママとパパが椅子を持って集まってきた。

そこで

「ねえ、ひづる。あなただけサキのお芝居に引っ掛からないって聞いたけどどうして？」

と聞く。ひづるはゆりあの通訳で答える。

「サキ姉さんて子供なの。私より子供なのかもしれない。

子供のことは子供が良くわかるの。でもこれって誰もじゃないわ。私の周りには大女優の庄絵おば様も薫姉さんも沙希姉さんもいる。そんな人って誰もいないでしょ。だからかもしれない」

「ひづるはね、セリア。天才子役よ」

「天才は沙希姉さんよ」

「ううん、あなたも天才に達しないわ。今度の撮影で良くわかったもの」

とコーデリアは隣にひづるを呼んで抱き寄せる。

「沙希姉さんのお話ならこんなことがあったわ」

と警察官の姉にお芝居を見破られたことがあったけど、それ以上のお芝居でその姉とおまけに早乙女薫まで騙したしまった。

気づいたひづるに誰も判らないところから舌を出してウインクまでした

話を聞かせた。

「ふー・・・大変な子ね」

「でも、騙したといっても悪意はないからね」

とゆりあがひづるの言葉足らずのところをカバーする。

「わかっているわよ。ただ面白がっているだけでしょ」

「うん」

「ねえ今の聞いたでしょ。私達も気を付けるのよ」

「わかった」

「充分過ぎるほど気をつけても、沙希によって舞台上の上に向かって
いるわよ」

杏奈がいう。目を白黒する沙里奈、初めて聞いたのだ。

「でも、どうしてあんな凄い子が産まれたのかしら」
ソフィーが言った。

「あっ・・・それ・・・」

とつい口についてしまったセリナ。

「どうしたの？」

と聞くので話しているものかどうか迷ってしまい、
両親を見る。パパが目を閉じて聞いていたらしいが
目を開けるとセリナを見て頷き、

わしに任せておけというように口を開いた。

「セリナが話すよりわしが話したほうがいいだろう。」

実際この目で見たことだが今でも自分の目が信じられないのだ。

私の娘・・・セリナの妹でテスというのだが

長い間の病気が悪化して半年前にとうとう死んでしまった。

それ以来、家の中が悲しみにで暗く沈み込み笑顔がなくなった。

何をしても楽しめない。昨日だってセリナの大事な日だったのに、
基地にくることなく、家の中に引っ込んでいた。

そんなときだ、セリナが東洋の少女を連れてきたのは。

サキ・ハヤセ・・・不思議な少女だった。

家の中のどんよりとしたものが、

あっという間に消えうせキラキラした光が家の中を照らしているん
だ。

セリナとお菓子の取り合いで平気で喧嘩をしているし、
セリナの下手な料理の腕もからかいもしている。

初めて来た家で遠慮もせず昔から住んでいたように自然に振舞っているんだ。

おまけに孫のアリサと会話をしている不思議・・・でたらめな会話ではない。

アリサが癩癩を起こして隠したわしのパイプのありかも教えてくれた。

そして・・・そして、わし達が悲しみの檻に閉じ込めていたテスの魂を

わし達に逢わせてくれたんだ」

「パパ、後は私が話すわ」

とセリナが引き継いだ。

「テスの魂を天に上らせるわ・・・とサキが不思議な呪文を唱えたら、

家の中に現れたのがマリア様だったの」

「マリア様が？」

と立ち上がったのは東洋人以外だったのはやはり宗教の違いか？

皆が驚いたように立っていたが相手はサキである・・・

さもありなんと徐々に椅子に座っていく。

「もう目を疑いました。でもテスが一番驚いていました。

だってそうでしょ。マリア様が自らテスを迎えに来ていただいたんですもの。

でもマリア様はサキと話をすることが目的だと言っていました」

「サキと？」

「話をする？」

みんなの目が日本の姉妹達を見回す。

ゆりあが言った。

「日本の姉妹達は今の話を聞いて誰も驚いていないでしょうね。実は仏・・・日本の神がサキに逢いに毎日のように来られるのです。時には叱りに・・・時には文句をいいに・・・だつてサキつたらいるんな事件に巻き込まれるでしょ。その都度サキの守護者や神が忙しく働かされ身が持たないって。それとサキつたら自分の力は強すぎるから弱くしろつて世界中の女性のDNAにサキの力を制御できるよう振り分けさせたんです」

「じゃあ私達にも？」

ゆりあは頷いてから

「それも1度ではないです。都合4度・・・

さすがに神はもうこれ以上はできないつてあきれ果てられました」

「なんか無茶苦茶ね」

「でもサキらしいつて言えばサキらしいわ」

「それから？」

セリナに続きを促す。

「不思議なのはマリア様がサキに対して敬語を使っていたのです」

「サキに敬語を？」

「どうして？」

「それは、エーと・・・」

何か恐れ多いので言葉が出てこない。

「宇宙の意思そのもの」

えっ・・・とセリナはゆりあの顔を見る。

ゆりあはセリナに対して頷いてから

「神は調べられました」

「えっ？」

「サキの力の源・・・それは天上でも預かり知らぬことだったの。だから調べられた。」

そして判ったのはサキは宇宙その物が産み出したただ一人の人間だった」

「嘘・・・」

皆言葉が出ない様子だ。

「でも心配しないで、サキはそんな生まれよりも・・・誰よりも人間でありたいと思っている子よ。」

だってそうでしょ。私達の妹であるとともに私達の大切な旦那様よ。そうでしょ。」

皆の身体からスツと力がぬけた。そうなんだサキはサキよ。

「あははは、そうだ、サキはサキなんだ。」

どんな生まれであっても皆のサキには違いがないんだから」と声が聞こえた。

「ジョージ！」

「サキは？」

「所長や技術者たちが離さないんだ。わしだけ途中で抜け出してきた」

「でもへりの時間が・・・」

「おっつけ戻ってくるだろうよ。君達、サキの話で盛り上がったいたんだろ」

「ええ、今サキと神の話をしていました」

「わしも日本で何度も仏を見たよ」

「仏？」

「日本の神のことだよ。それとサキを守っているのは侍だった」

「あつ！マリア様がそのこと言っていました」

「マリア様が？」

「ええ、サキのアメリカでの守護者様の中で一番位の高いのは、あのリンカーン大統領ですって」

「何！・・・リンカーンが？」

「はい、でもサキの為に皆右往左往して倒れこんでいると言われました」

「あははは、流石にサキだアメリカに来てても変わらないね」

へりが着いたのは、へりが出発したところ・・・アルパパの家だった。

一行を迎えたのはアルパパは勿論、メイドや執事・・・

そして、あれは誰？・・・翔？弓？

サキは走って抱きつく。

「弓姉、元気だった？」

「私って判ったんだ流石にサキね、会いたかったわ」

「でもどうしてここへ？」

「翔に聞いてきたから・・・後のことは」

「後は？」

「内緒！・・・でも沙希のことだから」

「ううん。私、力を完全に制御できるようになったの。

だから、その気にならなければ何もわからないのよ。

嫌でしょ？思っていることいわれるの」

「そうね、私達は慣れたけど始めての人は驚くでしょうね」

「だったら、成功ね。じゃあ皆に挨拶してくる。その話、後で聞くからね」

沙希はアルパパに飛びついた。

「アルパパ！無事だったわよ」

「おおう・・・良かった良かった。」

しかし、サキの活躍は見ていたから安心していった

「えっ？」

「ユミがサキ達と入れ代わりにここにきたから、

あの子の持っていたモバイルと言っていたか、あれで見ておった」

「ユミ姉のモバイルで？」

「そうじゃ、ユミも優しい子じゃて」

サキはメイド達や執事にも挨拶をする。

するとだ・・・あのベランダから何人もの男達に囲まれて歩いてくる男がいた。

「ハリー！」

と言って走っていく。

そして、大統領の手前で立ち止まり、スクツと立って敬礼をした。

「モーガン大統領！サキ・ハヤセ任務を無事果たし、ただいま帰還しました」

と挨拶した。サキは知っていた。サキを危険な任務にやる大統領の苦しみ、

ケイトの子供の父親だから余計であった。だからわざとこういう行動をしたのだ。

大統領もサキの心を知ったのだろう。自分も気をつけし敬礼する。

「危険な任務の達成、ご苦労！」

と言って敬礼を解く。2人して向かい合って笑顔を浮かべる。

皆は2人を囲んでこれを眺めている。

セリナやパパとママは沙希に対して大統領自身がこうして出迎え、挨拶するのを驚きの目で見ていた。

「サキ！君がヨーロッパから帰ってきてからと思ったが私の気持ちがい慢が出来なくなった。

正直こんなことできみが行なった功績のお返しが出来ると思っていない。

だがアメリカの市民としてどうしてもこれを受け取ってもらいたい」

と隣のSPに渡された勲章を沙希に手渡し、

「そして、アメリカの名誉市民の資格をを与え、永久にこれを守るものとする」

とケースに入った四角い箱を沙希に渡した。

「大統領ありがとうございます」

「おお、受取ってもらえるのか」

「はい、喜んで」

という女性達が歓声をあげて沙希に飛びついていく。

「さあ、ハリー。我々男達は部屋にもどろつ」

眩しげに女達を見ていた大統領もジョージの言葉に従う。

「ジェーン・・・アルもデιβもマーガレットも部屋でゆっくりと休もう」

ジョージはジェーンの手を取った。

部屋の中ではメイド達と女性達が用意した椅子に全員が座った。

大統領の指示で屋敷の全員が集められた。メイドも執事も庭師も例外ではない。

じっと大統領を見つめる目、目、目。

部屋の四方の壁のところには、大統領と沙希のSP達が油断なく警戒している。

「私はここに早くに来てアルと話し合った。アルのエドガー一家はアメリカ最大のマフィアだ。だから私はいろんな情報機関を使って調べた。その結果アルがこの一家を動かしている頃は悪事には一切手を出していない。」

それどころか新進の会社の長として組織を動かし、人を動かしての正業についていた。

だがアルは長男を亡くしてからやる気をなく、人まかせにしてしまった。

アルは私に言った、これからも会社をやる気はない。

出来れば誰か後身に譲りたい・・・と。サキ！

君がやれるとこんな素晴らしいことはないんだが君を一つの会社に縛り付けることなんて不可能だ」

大統領の言葉に皆クスクスと笑い声を上げる。

「だから私は考えた。チエとジェシー、コトミ、ベス、そして先ほど紹介されたセリナ！君はまだ宇宙飛行士に未練はあるのかい？」

「未練がないと言えば嘘になります。けれど今回の飛行で私はサキに手助けを

されてですけど何だか全てを出し尽くした。そう考えています」

「わかった。じゃあ君もだ。君達5人で会社を継いでほしいんだ。

そして君達が計画していたオクトの支社、ここでは駄目なのかい？」

「えっ？でもそうしたらこの計画凄く大きなものになってしまいます」

「大きくなってもいいじゃないか。人が足らなかつたらいれればいい」

い。
女性ばかりの会社・・・結構じゃないか。身元調査は我々がする。
会社の運営・・・サキの開発したものではありません。一般には出せないものも
ある。
ちよつと隠れ蓑になっていいんじゃないかな」

「サキはどう思うの？」

「とつてもいい計画だと思う。姉さん達が力を会わせて創るんなら
私全力で応援するわ」

「わかった。サキがそういうなら私にも依存はないわ。皆はどうす
る？」

「わたしもOKよ」

「私、警官辞めるの署長が許してくれるかな？」

「ベス！それは心配ない。君はもうすでにこのワシントン市警に身
分を移されている」

「えっ？本当ですか？」

「黙ってしたけれど悪かったかな？」

「いえ、いいんです。でも私警官は辞めたくありません」

「じゃあ、警官をやりながらでもいいじゃないか。

良いか悪いか判らないが警官を隠れ蓑にすればいい」

「えっ？それでもいいんですか？・・・何だかスパイみたい」

「あれ？ベス姉って何か楽しんでいない？」

「誰だつて、サキに影響されればこうなるわよ」

「あれ？それっ酷い！」

「といってプツと頬を膨らませる。まるで子供だ。皆の笑い声が部屋
に響く。」

「さてとこの話はここまでだ。何か聞くこと無いかい？」

「私……」

と手を挙げてサキが発言する。

「出来ればここに保育所を作ってほしいの」

「保育所を？」

「ええ、来年にはお姉さん達に子供が産まれます。

子供から手が離れるって気が遠くなるほどの将来です。

子供にも寂しい思いをさせたくありません」

「サキって、そんなことまで考えているんだ」

「あたりまえよ」

「でも、そんなこと出来るの？」

「出来るわ。今アリサを抱いているママ……

マーガレットママが保育士の免許を持っているの。

日本でも妻や母が保育所を作るうとしてるわ。

ママも日本に行ったらそれを見て来てほしいの。

そして帰ってきたらママもパパもここに越してきてほしい」

えっ？と言う顔で2人はサキを見る。

「セリナ姉さんもその方がいいでしょ。アリサのこともあるし」

セリナは急いで両親を見る。

「私、大統領に言われたこと、少し躊躇したのはアリサのこともあるけど」

パパとママのこと心配だったからよ。ねえそうしてちょうだい」

パパとママは顔を見合わせていたが、パパが口を開いた。

「ママは保育所か……じゃあ私はここの警備でもするか」

うわ〜と両親に抱きつこうとしたセリナだが、

さっす行動して真っ先にパパとママに飛びついたのはサキだった。

出遅れたセリナ、立ち尽くしてしまふ。

「こら！サキ！」

ママの腕から振り向いたサキ

「えへへへ、セリナ姉さんに勝ったわ。1番よ」

大統領もこのサキの子供っぽさにあきれてしまい、笑い出すしかなかった。

「じゃあ、保育所の件、

一人では手が回らないだろうから何人かの保育士を見つけておくよ」

「お願いします」

と耳を擦りながら頭を下げる。

セリナに耳を抓まれて自分の椅子に座らされたのだ。

「じゃあ、後一つ。

この本館の左右にある両方の建物の地下の部屋をもっと広げてCIAとFBIの支局をつくらうと思う。

これはアルを警備すると共に

ジェシーとコトミの今度のような事件を起こさないためだ。

・・・サキはどう思う?」

「私自身だったら嫌ですが、姉達を守るためだったら何でもやってほしいです」

「そうか、サキの許可を得て心強いよ」

「あとで地下を広げることやってみますので出来れば図面を用意してください」

「サキ！君はそんなことも出来るのか？だったら支局の立ち上げはすぐ出来るんだね」

「ええ、今晚にも引越しはできます」

その通りになった。

あれからすぐに用意をされた図面を片手に地下を広げるサキ。初めてそんな光景を見たCIAやFBIの局員達はもう目を白黒だ。そこにはエバもカリアも顔を見せている。先ほど大統領から名前は拳がらなかったが、後で大統領から、ここに越してきての警固の役目を負った。会社の手伝いをしながら姉妹達の警備に当たる。ベスとは逆に会社の社員が本当の身分の隠れ蓑になるのだ。

サキのヨーロッパへの招待は2日後の9時に出発となった。ジェシー達はその5分遅れで日本に発つ。そして日本に行く一行人数が増えた。

ジェシー、コーデリア、ベス。エバ、カリア、セリナそれとアリサ。セリナのマーガレットママとデイブパパ・・・そして、ジョージがヨーロッパに

サキについていくのに自分は留守番？そう思うとジェーンは我慢が出来なくなった。

サキに付いていく事は出来ないが、ジェシーと一緒に日本には行ける。

ケイトにも会いたくなかった。そのケイトのそばにはマーサがいる。ジョージに言うとき笑って

「行っておいで、京都の家の温泉に入ってくるといいよ」といってくれた。

サキとは笑顔で別れた。サキはいわば仕事だ。

ソフィー、瑞穂、ゆりあ、綾実、琴美、ひづる、希佐、杏奈、沙里奈、茜・・・

そしてジョージとスタッフ達、計16名のグループとなっていた。学校のある希佐は途中で帰国することになる。

一方、日本に近づいた航空機のVIPの部屋、合衆国が用意してくれた席だ。

ドアをノックする音で本を読んでいたジェーンが顔を上げて返事をする。

部屋に入ってきたのは操縦士の制服を着た今日早く出て行った筈の弓であった。

「まあ、ユミ」

と立ち上がったジェーンの気配に気づいたのか音楽を聴いたり映画を見ていた皆が顔を上げる。

「ユミ！格好いいじゃない」

「ありがとう」

「まだ日本に着かないんでしょ」

「ええ、もう少しよ」

「じゃあ、どうして？」

「皆に日本に着いてからのスケジュールを言いに来たの」

「スケジュール？」

「ええ、空港には姉のシヨウが迎えにきているわ。」

私は報告とか着替えとかがあるので後から追いかけるからね」

「後はシヨウにまかせたらいいのね」
とコーデリア。

「心配はコーデリア姉さんね」

「私？」

「コーデリア姉さんは日本でも良く知られているからファンに気づかれてしまうわ」

「大丈夫よ、その時はその時。臨機応変にいきましょう。私こそ」

するの嫌だから」

「ふふふ、その反応ってまるでカオル姉さんね」

「そのカオルに会うの、一番楽しみ・・・」

空港に着くと弓から翔に交代する。こういうときは双子はいい。姿形が全く同じだから、そのままの流れで行けばよい。

フラッシュが焚かれた。空港に常駐する芸能記者達が10人ほどコーデリアを取り囲んだ。

「コーデリア・ビーナス！貴女が来日なんて。アキア・ヒノと共演じゃあないんですか？」

「ふふふ、そう見てもらえたら嬉しい！」

「えっ？」

「私の名前はコーネリア・ピーチ。日本でなんというのかしら・・・
そうそう芸名なの」

「芸名？」

「今度彼女を私共のTV局が『ソックリショー』に招いたの。

芸能記者のあなた達がこうして間違えるって、彼女の優勝間違いな
いわね」

翔が煙に巻く。

「チエ！そっくりさんか」

と離れていく芸能記者と野次馬達。

翔と2人でニヤニヤ笑いながら空港を出てタクシーに乗り込んだ。

新幹線に乗り込むと翔をコーデリアが隣に座らせる。聞きたいことがあったから。

「シヨウ、ありがとう、あなたって有能なマネージャーも出来るわね」

「ありがとう・・・それで？聞きたいのはそんなことではないんでしょ」

「ええ、チェとジャクリーヌはどうしているの？」

「京都の地下の病院で入院しているの」

「入院？酷いの？」

「違うわ、地下のお部屋でも良かったんだけど、

入院させたほうが目が届きやすいでしょ」

「地下の病院？」

「そうよ、私達のグランマザーの家の地下に

最新式の設備を持った女性専門の総合病院があるのよ。行ったら判
るわ」

「でもそこってそんなに凄い医療スタッフが揃っているの？」

「専門の先生・・・ミオ先生一人よ」

「先生が一人？」

「そう・・・それと毎日掛け持ちの女医さんも一人来ているわ」

「そんな病院・・・」

「あら、馬鹿にしてる」

「だって・・・」

「誰もそう思うよね」

「えっ？違うの？」

「ええ、行つて見たらよく判るわ。そこは女にとって天国よ」

「何よ、それって」

「女性にしか効かない温泉があるの」

「温泉？」

「そうよ、怪我や女性特有の病気なんてすぐ治っちゃうの。

サキがスーパードールになって自動車事故の女性を治した不思議な
液体・・・。

「コーディアもテキサスで見たでしょ」

「あっ！」

と声を上げたのは今の話を聞いていたエバとカリアだ。

「どうしたの？」

「ジェシーとコトミを治したあの液体……」

「ジャクリーもだったわよ」

「そう、その温泉をサキは魔術で出していたの」

「じゃあ」

「そうジャクリー又の心臓病は完治しているわ。

でも毎日のように温泉に入りに行っているの」

「なにか、凄い予感……」

「さあ、もうすぐ京都よ」

今度はエバに貸してもらったサングラスで顔を隠していたので
マスコミやファンに囲まれることなくタクシーに乗り込んだ。

タクシーに乗っている時間はそんなに長くはなかった。

タクシーが着いたところは彼女達にも珍しいこれが日本……とい
うような風景だった。

この家の地下に病院が？……又、不安が彼女達を押し包む。

門を入ると大勢の着物を着た女達とオフホワイトの制服を着たナ
ス達が待っていた。

翔が皆を見てから声をあげた。

「今からグランマザーに來日の挨拶をしてお姉さん達6人は検
査入院します。

ジェーンママは地下にお部屋をとってあるから、ゆっくりしてくだ
さいね。

ディブパパはごめんなさい、地下には行けないのです、男子禁制で
すから。

ここから見えるあのホテルにお部屋をとってあります。

マーガレットママはご自由にしてください。

地下にもホテルにも泊まってもらって結構です」

一行はまず靴を脱ぐのに驚いた。そして座敷の畳にもっと驚いた。グランマザーは白髪の小柄な人だったけれど凜としていて凄く貫禄のある人だった。

その周囲には同じ着物を着た女性達が取り囲んでいる。

この女性達は弟子達と聞いた

そこにきれいに着飾った若い女性が10人入ってきた。話に聞いたマイコ達だ。

デИБとマーガレットは女性達の稽古を見ることにして後の皆は地下に向かった。

座敷に座れない二人にコウテイと呼ばれる弟子が持ってきた椅子に2人は座る。

一方あの『オケイコ』ルームから細長い廊下を通って行き止まりに90度のコーナーがあり

そこを下りていくと病院の受付があった。

その病院はアメリカ人の7人にとっても見たことがないような驚くばかりの設備だ。

看護師達が忙しく働いており待合で待っているのは女性ばかり・・・

まるでおのぼりさんになったような気分がする。

そこにニコヤカに一人のナースがやってきた。ナースハットに黒い線が入っていた。

「この人がこの病院で一番偉いナースよ。そしてあなた達の姉妹でヤヨイという名前なの」

「ヤヨイといいます、よろしく」

流暢な英語で答える。

「あとは弥生さんにまかせてもいい？」

「翔ちゃんは？」

「上にディブパパとマーガレットママがいるの。ついていなくっちゃ」

「わかったわ。でもママには後で診察と温泉に入ってもらってね」

「うん、わかった」

と皆に胸のところまで手を振ってから上に上がっていく。

「では行きましょか」

と皆を案内する。

「この階の手前の病室、6つ共皆埋まっっていて皆の病室は奥になっているわ」

「埋まっっているって・・・もしかしたら・・・」

「そうよ、サキの奥さん達・・・つまり皆のお姉さん達よ」

「後で挨拶しても良い？」

「うん、いいわよ。でも今日すぐでなくてもいいでしょ」

奥の部屋のみんなの病室は、それはそれは女性らしい、行き届いた病室だった。

皆は荷物を置き、リラックスした格好に着換えて廊下に出てきた。

今からジエーンママの泊まる部屋を見に行くのだ。

廊下の真ん中に並んだ2基のエレベーター、ベットが2つも入る広さだ。

地下4階に降り、ドアが開くと若い女性が一人待っていた。

「この人がママのお世話をするこの4階の係りのマキさん」

「マキといます。よろしくお願いします」

この女性もハキハキして気持ちがいい女性だ。

「ここがお部屋です」

入ってみるとシングルベッドが隅にある何か心地よい雰囲気を迎えてくれる。

ママは荷物を置いてジェシーに手伝ってもらって軽装になった。

「さあ、行きましようか」

どこへ？とは言わない。判っている・・・温泉だ。

再びエレベーターに乗ると地下7階に降りていく。

エレベーターを降りると何か不思議な空間だった。

日本らしいといえはいいのか。仕切られた空間に入るとなにやら白い服を渡される。

それはシースルーの短い服だった。着てみると何故か頬が赤くなるほどエロティックだ。

でも女性だけなので度胸を決めて着換えた。

入口をくぐると目を見張るほど広い温泉で、

入ってみると湯温は熱くもなくぬるくもなくちょうどいい塩梅だ。

「ママ！足はどう？」

弥生が声をかけた。

「えっ？・・・あっ！足が痛くない！」

「ママ！その髪の毛」

と驚いたジェシーの悲鳴に近い叫び声。

ジェーンも心臓に持病があり薬の副作用で髪の毛が白くなっていたのだ。

それがどうだろう、短時間のうちに髪の毛が黒く戻った。病変が改善したのだ。

これは皆が目撃したことだ。

ジェーンは急いで更衣室に戻って鏡を見て涙を流した。

女性自身、切り傷や女性特有の病歴を持つのは不自然ではない。

それがきれいに治ったとしたらどうだろう・・・皆の驚きは頂点に

達している。

「あつ！お姉ちゃん達だ！……ママ！……ママ！……ママ！……」
と叫ぶ女の子の声。

離れたところから小さな女の子が手を振っている。ジャクリーヌだつた。

「ジャクリーヌ……あの子あんなに走って……」

ジャクリーヌが死の床に横たわっていたのをセリナ以外全員が知っていた。

それがあんなに元気に走っている。しかもそんなに日が経っていないのに。

ジャクリーヌの後ろから白いシースルールの女性が近づき、

途中でジャクリーヌの手を繋ぐと一緒に走りだした。

「エバ！キャリア！ジェシー！ベス！コーデリア！」

皆の名前を呼んで温泉に飛び込んだ。浮かび上がって皆に抱きつく。

初めてあつたセリナに戸惑った顔をしたが

「チエ！この子セリナっていうの、宇宙飛行士だったのよ」

「えっ？もしかしたらあのレオタードの？……それならあなたのこと知っているわ」

「そう、あれは私よ」

「昨日モバイルで見っていたわ。あなたサキに抱かれたのね」

「ええ、あの晩……」

「あの時点で一緒に見ていたグランマザーや姉妹達みんな言っていたわよ。」

あなたはサキに抱かれるって」

「うわ、判っていたの？」

「当たり前よ、あからさまだったじゃない、あなたの身体って器用

よねえ。

身体でしゃべるんだから」

「いや、恥ずかしい……」

「オツホン……」

頭の上から声があるので見上げてみたらアリサを抱く白衣の女性が立っていた。

「あっ！ミオ先生！」

この人が？……皆の視線を感じたのか

「コホン」

とセキを一つして

「セリナ！アリサは小児喘息を患っているでしょう」

「あっ、はい」

「ここに連れてきて本当に良かったわね」

と看護師のヤヨイに水筒を渡す。

ヤヨイはそれをセリナに渡して、

「この水筒の中、この温泉水なの。勿論飲料用に源泉を汲み上げたものよ。

だから安心して飲ませてあげて。水をほしがったらいくらでも飲ませていいから」

ためしにセリナが飲んでみると……美味しい！。

少し冷やしてあるから飲みやすい。もう一杯飲んでみた。

「あっ！」

というコーデリアの声、

「セリナ！あなたの顔の吹き出物、きれいに治っているわよ」

「えっ？嘘……」

と更衣室に飛んでいく。抱いているアリサが邪魔で見えにくいが本当だ。

きれいに治っている・・・いくら宇宙飛行士といっても女に変わりはない。

諦めていた顔の治癒に涙が出てしまう・

「もつと飲みたかったら、病室の冷蔵庫の水を飲むんだね。これと同じものだから」といってから

「弥生さん。もうすぐ明子先生の回診だから上にいきなさい。あんた達もすぐに病室に戻ってベットに横になって安静にしておくこと。」

回診が終わったたらあんた達の検診だからね」
口調は荒っぽいが身体から優しさが溢れている。

「ママは私が検査するから、あとで上に来てくれる？
そう受付の横の診察室よ。ママの身体のことサキからの連絡がはいっているからね」

ジエーンは思わず

「ありがとうございます」と頭をさげる。

「これから日本にいるときはいつでもこの温泉に入りになれるから早くあがりなよ」
と行って出て行く。

残った女達、そそくさと温泉から上がる。

更衣室の鏡には来た時と同じだが中身が全く変わった別の人間が写っている。

輝くような健康体と美しさに溢れているのだ。

いつも自分の顔を見続けているコーデリアにはわかる。

自分が5歳も10歳も若返っている。本当の健康ってこういうものなのか。

「私、ここに来て良かったと思っっているわ」

「本当よね」

「あのミオ先生って凄い先生なの！」

「そうなの？」

「ええ、世界でも5本の指に入るほどの天才医師なんだって」

「それ、誰から聞いたの？」

「アキコ先生よ、産婦人科の先生だからあなた達の主治医になる先生よ」

「私達の主治医？」

「アキコ先生の本当の病院はこの近くの大きな病院でその副院長よ。」

「かけもちでここにきているの」

「そんな偉い先生がどうして？」

「遠い過去でサキと因縁があったって聞いたわ。それにミオ先生の先輩なんだって。」

「アキコ先生が唯一天才って認めるのがミオ先生って言っていた」

「でもそんな先生がどうして私達の主治医じゃないの？」

「ミオ先生は産婦人科は素人だからよ。」

「性に合わないからって勉強しなかったんだって。」

「でもアキコ先生も凄い先生に変わりはないんだからね」

「うんわかった・・・ねえ、ミオ先生ってサキの叔母さんなんですよ」

「よ」

「しっ」

「と言ってから声を潜めて皆に輪にならせる。」

「そんなことミオ先生に聞かれると怒られるわよ」

「どうしてさ」

「サキの姉だと言えって」

「ほほほほ・・・何かそれいいわ」

「そうでしょ、それにね、又面白い話があるの」

「なによそれ、ねえねえ教えて」

「でもあなた達、これから検査なんですよ。」

検査が終わって先生の許可を取って、この上のレストランにおいてよ。

そこにいる私の情報教えてあげる」

「レストラン？そんなのがあるの？」

「あるわよ。そこってね、私の産まれた香港にも美味しいお店はたくさんあったし、

アメリカでも旅行で行ったフランスにもイタリアにも美味しいお店はたくさんあったわ、でもここはもう別格よ。

シェフ達は女性ばかりだけどそれはもう美味しいんだから。

初めて食べたとき、いいえ今でもその美味しさにはため息が出るほどよ」

「そんなに？・・・うわっ楽しみ・・・」

結局、レストランに皆が集まったときは1時間が過ぎたときだ。

階段を上がると広くてシックなレストランだった。

ここも又、女性らしさが溢れていた。

テーブルには、チェとジャクリーヌとジェーンママとマーガレットママと

驚いたことにディブパパの姿があったことだ。

確か男性禁止だった筈だが・・・不審そうな皆の顔に

「グランマザーに言われたんだよ。確かに地下には入ってはいけ
ないが、
せつかく遠いところからきたんだから腹一杯に美味しいものを食べ
なさいとね。」

さすがに表から入ってきたけどね。」

さあさ、みんな座りなさい。わしはもう腹が減って死にそうだ」

皆が腰を落ち着けると

「私もご一緒してもよろしいでしょうか」

そこには私服に着換えたヤヨイが娘を連れて立っていた。

「あつ、ヤヨイ。・・・どうぞ」

「ヤヨイ、その子は娘さん？」

「ええ、娘のカナといいます。さあカナご挨拶しなさい」

「私の名前はカナ・ハギノです。年は6歳です。」

お姉さん達も叔父さんも叔母さん達も遠いところからお疲れ様でし
た」

一生懸命覚えたのだろう。たどたどしい英語ながらそう挨拶した。

「まあ。カナ！あなたの英語ナイスよ」

と言ってコーデリアがとんできてカナを抱きしめる。

「でもどうして私達のこと、お姉さんて呼ぶの？」

私達あなたのママとそんなに年が違わないでしょうに」

「だって、カオル姉さんが・・・」

「それってカオル姉さんのせいなんです？」

「誰のせいだつて？」

と後ろから声が聞こえた。

「あつ！薫姉さん！」

振り返って見ればスラツとした女性・・・

よく見ればビデオで見たカオル・サオトメだ。

「あなたがカオル・サオトメね」

「貴女がコーディネリア・ビーナス・・・よく映画を見ているわ」

「私もサキと一緒に出ている貴女を見せてもらったわ」

目と目があつて火花が散つているようだ。

皆はドキドキして2人を見ている。

それと不思議なことにカオルが英語を話していることだ。

それをヤヨイが言うと

「脳ある鷹は爪を隠すつてね、知らない振りをしていたほうが得で
しよ」

「皆を騙していたの？」

「とんでもない、黙っていただけよ」

「じゃあ、サキは？」

「あの子には何も隠せないじゃない。勿論知っているわ」

「もう、2人して・・・」

2人は英語で会話をしているから意味は判る。

「大変な人ね、あなたつて・・・ねえ、カオル姉さん」

「そちらこそ、コーディネリア」

「ねえ、その子つて」

「ええ、サキとの間に産まれた子よ」

「名前は？」

「この子は娘でアイというの。彼女が抱いているのは息子でヒロシ
よ。」

そして彼女は・・・

「あれ？アカネじゃない」

「そのアカネの双子の姉でミドリというの」

「どうして？・・・サキに関係のある人って双子ばかりじゃない」

「そういうあんた達も来年には双子を産むのよ」

「あっ、そうだったわ」

というセリナに

「あなたね、セリナって・・・その子がアリサね」

「どうしてわかるの？」

「サキから報告がきたこともあるけどここにいる全員が宇宙でのことを見ていたの。」

私達ってサキを想う人って判るのよ。それにあんなにあからさまだったじゃない」

「えっ、みんなにも判っていたの？・・・ああ、恥ずかしい」

「でも、ストレートな感情表現って私好きよ。セリナ・・・」

「ありがとう、カオル姉さん」

「ねえ、あなた達アマゾネス『ハヤセ』のこともっと詳しく知りた
い。」

ある程度は聞いてきたんだけど」

「聞いたって、サキに？」

「ううん、ヒヅルに」

「ヒヅルに？」

「いけなかった？」

「あの子、碌なこと言わなかったでしょ」

「うん、言った。天然だとか世間知らずだとか」

「そうでしょ、ヒヅルは私の天敵なの」

「天敵？」

「そう、そして私にとってあの子は悪魔よ」

「でも、女優として尊敬しているようよ」

「それくらい、思ってもらわなくちゃ。私はサキ以外の誰にも負けるつもりはないの。」

あなたにもね、コーデリア」

「私だって、あなたには負けない。あの勝負の話聞いているでしょ」

「ええ、来年ルーク監督のシナリオで勝負だって。でもあなた来年は・・・」

「だから、1年延ばしてもらって2年後に実現しましょうよ」

「いいわよ、実はこの話オノ監督に話しておいたの。」

そうしたらオノ監督も是非参加したいって」

「あのオノ監督が？」

「そうよ、サキだって」

「えっ？サキも出演するの？」

「ううん、2人の邪魔はしたくないからスタッフとして参加するんだって」

「凄じじゃない、この映画って。今からワクワクする」

「ねえ、明日撮影所に行ってみない？」

「撮影所に？」

「明日、オノ監督がサキの舞のDVDを編集し直すのに撮影所に来るの」

「サキの舞を？」

「ええ、どうしても時間の都合でカットした部分があって、

お母様・・・いえグランマザーが文句を言ったの。

マイの記録は全てを残さなければ意味がないって。

でもオノ監督って、サキの映画やTVを撮ったことでも忙しくなったから、

編集が今まで延びてしまったというわけ」

「行く、行く・・・絶対行く」

「私達も行くわ、連れて行って」

「じゃあ皆で行きましょう」

パパがホテルに帰った後、温泉に入るからとマーガレットママが後に残った。

皆がもう一度入りに行くから一緒にと誘われたからだ。

といのはただの言い訳に過ぎず、

男のパパがいたら自由に娘の病室や地下を歩けないからだ。

先ほど一瞬の挨拶だったけど、

ここに保育所を作るスズママを紹介された。

アメリカに帰つての保育所作り、

サキに言われてきただけに絶対に話を聞きたかった。

彼女とはまだ日に余裕があるのでゆっくりとお話しましょと別れた。

どうせこの建物にいるので顔を合わせる事があるだろう。

温泉は聞いた以上の効果をマーガレットに与えた。

腰の痛みや霞み目は全て一瞬に消え失せ、肌のくすみも消えうせ若返ったと感じた。

身体に不安があったから躊躇していた保育所の設立、自信が出てきた。

こんな効果のある温泉、身近にある日本の家族って全く羨ましい。

隣に居たジエーンが

「ケイト！・・・マーサ！・・・」

と声を上げた。

見るとお腹の大きな娘を母親が付き添っている。

2人ともブロンドのヘアーなので噂に聞いたケイトと母親のマーサだと気づく。

「ジェーン・・・あつ、ジェシーもいる」

大きなお腹のケイトがドシドシとゆっくりと歩いてきて温泉に入ってくる。

「お久しぶりねジェーン、ジェシー、来日していたのね」

「もっと早く顔を見せに行こうって思ってたけど、

ミオ先生とアキコ先生が寝ているところだから後にしてって」

「そうなの、こんな大きなお腹でしょ。少し動いても疲れる疲れる。

だから毎日食っちゃ寝、食っちゃ寝で15ポンドも太っちゃった」

「ケイト、いつ産まれるの」

「あと、10日かな、でも初産だからいつ産まれてもおかしくないから

気をつけるようアキコ先生に言われてる」

「私もジャクリーヌのときは予定日より20日も早かったわ」

「私がアリサを産んだときは10日も遅かった」

「人それぞれなのよね」

そういつたときバタバタとシューズの音・・・一人のナースが温泉の入口に顔を見せ

「婦長！ミチル様に陣痛が始まりました」

大きな声で叫んだ。

「判ったわ、アキコ先生は？」

「今、分娩室に」

「すぐ行きます」

と上がりかけたが

「チエ姉さん！ジャクリーヌは私の部屋でカナと遊んでいますから」

「わかったわ、もうすぐしたら迎えに行くから」

弥生が更衣室で着換えているのを見ながら

ケイトは何事か考え決意の表情を表した。

「どうしたの？」

「母になる決意を子供に誓っていたの」

「えっ？」

母のマーサが不審そうにケイトの顔を見る。

「今更って思うでしょ。でも今までの私ってただ想像してただけなのよね。」

でも同じ頃妊娠したミチル姉さんが今、分娩室でうんうんと唸って苦んでいるわ。

苦しみの先に母になる幸せ・・・それがもうすぐ私の番になる・・・

そう考えると心が浮き立ってくるの」

皆がケイトに抱きついて、そして大きなお腹をさする。

来年は自分達がこうなるっ実感する。

「さあケイト、病室に帰らなければアキコ先生に叱られるわ」

「うん、皆、先にあがるわね」

「私もついていくわ。あなた達もまだまだ先といってもすぐにその日が来るわ。」

そろそろ病室に戻りなさい」

とケイトとマーサについてジェーンママも温泉を出る。

入れ替わりに次から次へと女性が温泉に入りしてきた。

「きやつきゃ」

と騒いでいる女の子達や老婦人達もいる。思い思いに温泉を楽しんでいる。

その内、若い女の子のグループがこちらを見て何か騒ぎだした。

外人が珍しいのか？・・・いや、そうではない。

温泉には白人や黒人の姿もあり、親しそうに声を掛け合ったりしている。

その内彼女達、今入ってきた2人の白人女性に声をかけてこちらを指差してなにやら話している。

2人の女性もこちらをじっとみて、飛び上がって叫んでいる。どうやらコーデリアのことが判ったらしい。

彼女達が走って来た。女の子達もその後ろからついてくる。

「やはり・・・ミス・・・コーデリア・ビーナスですね？」

こんなところで会ったのが嬉しかったのか

目の前で拍手をしながら飛び上がって喜んでいる。

「ぶしつけでご迷惑ではありませんでしたか？」

もう一の白人女性が遠慮がちにそうあやまる。

女の子達は彼女達の後ろで抱き合って喜んでいた。

日頃のファンのことを思えば憤ましい彼女達の態度にコーデリアは好感を覚えた。

「いいのよ、どう？そこで少しお話ししない？」

「本当にいいんですか？じゃあ」

と休憩が出来るよう温泉の横に作ってある芝生の上で輪になって腰を下ろした。

「先に私達のことお話しなければ失礼ですよね」

と言って

「私はサンフランシスコから来た、シンディ・ウィリアムスといいます。

別に目的もなく日本に旅行に來ただけでしたが、

このキョウトの素晴らしさに圧倒されて暮らし初めてもう5年です。

その間に仕事はいろいろしてきました。でも入社 conditions はすごく厳しいけど、

給料とかの待遇面が吃驚りするほど良い今の会社を知って応募しま

した。

幸運にも就職出来た会社がカオル・サオトメ事務所です」
目がキラキラと輝いている。余程張り合いがあるのだろう。

「私の名前はジョシア・カーター、ニューヨークから彼を追って日本に来ました。

3年ほどトウキョウに彼と住んでいましたが、
結局彼に捨てられて傷心旅行でキョウトに来たのです。
そこで知り合ったのがシンディでした。

そしてシンディの紹介で同じ会社に就職できました。
彼に捨てられた時は不幸のどん底でしたが今はもう最高に幸せなんです」

「どうして？」

「サキ・ハヤセに逢ったからです。彼女は私の憧れです」

「私達のことは？」

「知っています。私もいずれは・・・と思っています」

「そうね。きつと想いは達成出来るわ」

「はい」

「それで、貴女達は？」

「私達、サガラ病院にナースの勉強に行っています。アキコ先生のところですよ。」

住まいはこの地下にあります」

「じゃあ、貴女達はアマゾネスの一族？」

「はい、私達の産まれたところはハヤセの里です」

「あなた、英語が上手ね」

「6年間、ニューヨークに留学していました」

「そう、その若さで大変だったわね」

「私、少し聞きたいことがあるの。いい？」

「なんでしょうか？」

「シンディが言っていたわね。カオル・サオトメ事務所って、それはあのカオル・サオトメのところ？」

「はい、でも私達は芸能部門で働いているのではなく、海外メディア部門と言ってアメリカ以外の国にオクトの製品を紹介しています。」

全てサキ・ハヤセの作った商品ばかりです」

「じゃあジェシー、あなたのとこと同じじゃない」

「そうよね」

「えっ？ジェシーって・・・あのルーク監督の？」

「そうよ。私がジェシー・ルーク、

アメリカに帰ったらオクトのワシントン支局を立ち上げるの」

「それ、聞いています。BBXのアメリカ向けの商品を製造販売するって」

「わたしの両親に言ったら、絶対買っって心待ちにしています」

「ジェシー、責任重大ね」

「責任の重さに押し潰されそうよ。」

帰ったら大統領の口利きの会社を何社も見に行かなければならないし」

「へっ」

「へっってベス、エバ、キャリア、セリナ！あんた達も手分けするのよ」

「こりゃ大変だ！」

「大変だつて？コーデリア！あなたも無関係じゃないんだからね」

「どうして？」

「CMはあなたの事務所が一任されるのよ」

「ええ、そんなの聞いていないよ」

「聞いていないって、あなたが社長でしょ。ワンマン経営の・・・」

「ジェシー・ルークって私達の所長にそっくり」

「所長って？」

「ケイト・マイヤー所長です」

「ケイト？・・・それは、あたりまえよ」

「あたりまえ？」

「ケイトとジェシーはいとこだもの」

「えっ！そうだったんですか」

女の子達は留学していた子から通訳してもらいながらコーデリア達の話面白そうに聞いていた。

「今日、東京から皆来るから早く帰ってくるんえ」

とグランマザーにそう言われて薫がみんなを連れて家を出る。

抱いていた子供を見送りに来た菊野と鈴に渡すと

2人の子供の頬にキスをしてマイクロバスに乗り込んだ。

「ねえ、カオル！あなたが子供に対する愛情って物凄く感じるわ。

これってサキの子供だから？」

「それもあるけど、子供がこんなに可愛くて愛しいものだなんて、子供が産まれるまで感じなかったの。

お腹にいる間も私の分身って思っていたけど今ではそれ以上よ。

私の命以上のもの・・・あの子達に何かあれば私は生きていけない」

「そうなんだ、それを聞いて私、女優としてのライバル心もそうだ

けど

9ヶ月後にはあなたに負けない子供を産んで見せるって決心したわ」

「コーデリア！それこそ母親になる心がけよ。

これミオに聞いたんだけど、サキから連絡があっただって」

「サキから？」

「うん、検査ではまだなにも異常がないと思うけど

私の耳にはお姉さん達のお腹から二つの鼓動がはっきりと聞こえます。

妊娠したのは間違いがないから、

まずは母体が健康であることを調べてください』・・・って」

「それ、本当なの？」

「ええ、サキには神よりもっと上からの力が覚醒しているのよ。

その気になれば世界中のことを居ながらにして把握することもできるけど、

そんなことサキは大嫌いなもの。

常に『私は人間だし、人間でありたい』と言っているから」

「サキは優しいから」

とセリナが言ったが、急に表情をくずして

「ねえ、カオル。それよりさっき言ったこと本当？」

・・・私達のお腹から二つの鼓動が聞こえるって」

「本当よ、サキは嘘をつかないわ。

だからあんた達、子供のためにもサキのためにも健康でいなければならぬの。

特にエバとカリア！」

「はい！」

と素直に返事する2人・・・とにかくカオルは年上だし凄い貫禄なので

反抗なんて出来っこない。

「聞いたら特にエバとカリアは危険な仕事をしているじゃない」

「いいえ、帰ったらジェシーの下で働くことになっています」

隠れて姉妹達の警護をする・・・なんて言ったら、もの凄く怒るに
違いない。

「とにかくあんた達はサキの妻であることもあるけど私の妹
・・・家族でもあるんでうすからね。

守るものがたくさん出来たんだから、フラフラしない！」

と叱咤する。カオルの優しさが心をつつ。

しばらくシーンとしていたが

「ねえ、聞きたいことがあるんだけど」

「何よ」

「さっきさ、ミオがって言ったでしょ。先生と言わずに」

「それが？」

「向こうで、ミオとカオルがサキの叔母さんって聞いたけど」

「叔母さん?!」

キツとした目でコーデリアを睨む。

さすがのコーデリアも『ブルツ』と身体を震わせてしまう迫力だ。

これで、叔母さんって呼ばせない理由がわかった。

「誰に・・・」

「えっ？」

「誰に聞いた・・・」

「ひづるが言っていたの」

「あいつ!・・・」

と言って唇を噛む。こんな様子を見てカオルは怖いけど、
ひづると戦わせてみたい・・・誰もが思った瞬間だ。

「それで?・・・」

と一瞬にして立ち直ったのか、気分を平静に保ってそう聞く。さすがに天才女優だ切り替えが早い。

「ミオと私のことが聞きたい?」

頷くみんなに

「ミオは私の妹よ。父親が違うから異父妹かな」

「父親が違うの?」

と時計を見て

「まだ少し時間があるから、ついでに言っておこうかな、私の姉妹のこと」

みんなは黙って聞いている。

「私達の・・・アマゾネスの『ハヤセ』のこと聞いたんでしょ?」

「ええ、聞いたけど」

「ハヤセ一族はね。言葉では言い表せない悲しい女の一族よ。

女しか産まれないので一族を世の末まで残すには、

嫌いな男に身を任せなければならなかった。

そうしなかつたらハヤセ一族ってとくに消えてしまっているわ。

どうしてこんな一族が世に出てきたかと言うと、

過去の昔から血を流す戦いって男達のせいだった。

それを無くそうとサキの前世のプリンセスが

サキの魔術の師のセイメイ・アベノが術をかけて出来た一族なの。

こうして女しか生まれない一族、女の悲しさの一族が出来たわ。

その後歴史でも男達が血を流す戦争は無くならなかった。

歴史の陰で泣くのは女。ハヤセの女は男嫌い。女しか愛せない一族なのよ。

でも子孫を残すためにはそんな好きでもない男に抱かれなければな

らない哀しさ。

そうした苦悩の中で私達は生まれてきたわ。

長女のマリ・ハヤセ・・・アマゾネス『ハヤセ』の現在の首長、
今ここでグランマザー・サダコのお世話と地下の施設のオーナーな
の。

そのマリの長女リサ・ハヤセ・・・週刊誌の女性記者。

マリの次女がサキ・ハヤセ、私達の旦那様ね。

そして一族の次女のミサオ・ハヤセ・・・

トウキョウでもここでもレストランをしているいわば一族のお料理
番よ。

三女は警察庁長官付き秘書官のヒワコ・アスカ。

双子の娘もそれぞれ警視庁と警察庁の警部なの。

その双子にはあんた達も会っているでしょ」

「じゃあ、イズミとケイ？」

「うん、そう」

「でもどうしてラストネームが違うの？」

「養女に出されたからなの」

「養女に？」

「私達、8人姉妹の長女のマリと次女のミサオ以外の姉妹達は全て
養女に出されたの」

「何か震えが来るぐらいの悲しい一族ね」

「それでね、養女に出される条件は、親には会わさないこと。

でも姉妹達には物心ついたときから会わせるということだったのよ」

「それって、何だかわかる」

「じゃあ言ってみて」

「姉妹で力を合わせてハヤセというアマゾネスの一族を守り立てる・

「そうでしょ」

「大正解よ。でも初めて姉妹と会ったときの
言いも言われぬ悲しみや喜びというのは判らないでしょ」

「そうね、そんなこと想像も出来ない」

「そうでしょ・・・あつ、どこまで言ったつけ。そうそう、三女
までね」

女達は口を閉じた。こんな・・・こんな絵空事みたいな話現実にあ
るんだ。

でも女達の悲しさ苦しさが判る・・・私達だって女なんだから。

一人、男でバスの後ろで聞いているデイブパパ・・・

マーガレットはアリサと共に家で留守番だ。

・・・いやあの保育所の話、

積極的に実現する為に同じ目的を持つスズに話を聞こうとしていた。

あんなマーガレットは久しぶりだ。セリナがお腹に出来るまで

キャリアウーマンとしてバリバリ仕事をしていた昔のマーガレット
に戻ったようだ。

若さを取り戻し、肌も艶々していた。なんだか心が躍ってくる。

それにしても今聞いた女の歴史・・・デイブにも悲しすぎる話だ。

「四女はね。日本の検事達のトップ・・・検事総長のミヤコ・マキ。

五女はナミ・マツシマ・・・

正直言つてこの姉って何をしているのか私だってわからない。

ただ世間の裏の世界に通じているらしいわ。

六女はこの私、カオル・サオトメはスクリーンネームで本名はカオ
ル・ハセガワよ。

そして、七女がミオ・コタニ・・・知っているとおりの世界でも屈指
の天才女医って

呼ばれているけど、私にとってただの喧嘩相手よ」

「あっ、それひびるから聞いている」

「またあ？・・・ろくでもないことを言っていたんでしょ」

「それは、まあ、おほほほ・・・。」

でも、これからはあなたとひびるの間には入らないからね」

「どうして？」

「そばで見えていたほうが面白そう・・・あっ、ミオ先生との間にもね」

「もうあんた達は・・・これじゃあ、サキとレイカと同じだよ」

「同じって？」

「ミオと私の喧嘩をそばでニヤニヤ見ているし、それにけしかけるのよ」

「どうして？」

「ミオと私が、仲良くしているなんて面白くないなんて・・・」

「それ、いえてる・・・」

「ねえ、レイカって？」

「そうか、あんた達はまだレイカに会ってないんだ。」

えーとあんた達の中では一番年が若いから妹になるわね」

「じゃあレイカって？」

「私達の家族よ。それとレイカはレイカ・クジヨウといってね。」

今の日本の音楽シーンのトップに行くシンガーなの」

「ちょっと待って！レイカ・クジヨウ・・・私知っているわ」

「どうして？」

「知っているどころか彼女のMDを持って宇宙に行ったの。」

彼女のソウルって最高よ。こんな人が日本に？って思っていたもの。

じゃあ、彼女が妹？・・・やった〜嬉しい！」

セリナが椅子の上で跳ねている。

「それじゃあ、セリナのプレゼントになったのかな」

「プレゼント？」

「今から行く撮影所でレイカとも待ち合わせしているの。」

トウキヨウから帰ってきたけど時間がないから直接撮影所に行くって

「そうなの。直接会えるって素敵！」

「じゃあ、最後になるけど八女はミチル・センドウといって

日本でも有名な美容師なの」

「ミチルって名前は聞いたわ。確か昨日、陣痛で分娩室に入ったって

とベス。

「そうよ。今朝双子が産まれたわ」

「そうなの。じゃあ帰ったらあってみたい」

「いいわよ、ミチルも喜ぶわ。」

それにあんた達ミチルの子供には会っているものね

「会っているたって、今産まれたばかりじゃない」

「違うわよ。長女のサリナと次女のアンナによ」

「ええ……ミチルってあの2人のママなの？」

「そうよ」

「それ聞いて本当に家族になったんだとを感じるわ」

「どうして？」

「アメリカでも知らないうちに家族に囲まれていたんだと実感できたから」

「私もそう思うわ」

工バの言葉にカリアも賛成する。想いはみんな同じだ。

車は撮影所の門をくぐり、本館の玄関前に横付けされた。

車を降りてくるマネージャーの緑と早乙女薫を先頭に出てくるのが外人ばかりなのに道行くスタッフや俳優達、驚きで目を丸くしている。

早乙女薫がこんなことをするのが珍しいのだ。

でも目ざといスタッフが横の同僚に

「おい！薫さんの横の外人であのコーデリア・ビーナスだぜ」

「嘘！・・・あつ！本当だ・・・サイン、サイン」

「馬鹿！横にいるのは薫さんだぜ。へたをすればどんな報復を受けるか」

「報復？どんな・・・」

「そうか、お前は薫さんと同じ仕事をしたことがなかったな」

「ああ、一度もない」

「薫さんの報復つて別に物を投げたり叱ったりしないんだ」

「じゃあ、大したことないよな」

「それが甘いつて。薫さんは報復する相手に向かって・・・」

ただそいつに対して演技をするんだ」

「そんなこと」

「甘い甘い。工作中だぜ。そんなこと思ってもいないのに

いつのまにか芝居の中に引っ張り込まれて、泣いたり笑ったりしているんだ。

大勢の前で笑ったり泣いたりしてみろ、

ああこいつ報復を受けているんだって判ってしまっし、

実際演技なのか現実なのか区別がつかなくなる。

精神障害までは追い込まないが、

ノイローゼということになって病院へ放り込まれてしまっんだ」

「大変じゃないか、それは」

そんな噂が流れる中、薫達は『小野組』の部屋を訪れていた。

「あら、小野監督は？」
打ち合わせをしていたらしいスタッフの一人が立ち上がった。
「あっ！薫さん！監督は今、上に呼ばれて席を外していますがおっ
つけ戻ると思います」
「そう、じゃあ少し待たせてもらおうかしら」
「いいですよ．．．あっ、ちょうどその会議室に麗香さんがお待ち
になっています」
と反対側のドアを示す。

「そう、麗香が来るほうが少し早かったみたいね。
じゃあ、皆！入っていらつしやい」

その声で入ってきたのは外人ばかりだった。
スタッフ全員が立ってしまった。別に外人が入ってきて驚いたの
ではない。

「薫さんが英語をしゃべっている．．．」
しかも片言ではない。流暢なしゃべりだ。

「皆！このことは内緒よ、特に芸能記者にはね。でないと．．．」
「でないと？」

「お仕置きよ！」
皆の顔に怯えが走る。あの報復のことを思い出したのだ。

「それと、彼女がここにいることもね」
と隣に行つて肩を抱くのは．．．
「ええ．．．コ．．．コーデリア．ビーナス！」
あっけにとられている。

「監督が来たら、皆を紹介するからね」
と会議室から顔を出してそういうとドアを閉めた。

さあ、スタッフ達は大騒ぎになった。

「どうして、コーディリア・ビーナスが？」

「今、ハリウッドであきあと共演しているんじゃないのか」

「わからん・・・それより、早く監督を呼んでこい」

若いスタッフが飛び出していく。

「そつだ！・・・コーヒー・・・コーヒーだ！」

「食堂のは駄目だ！近くの喫茶店の美味しい奴を頼め！」

「幾つ？」

「判らん！どうせ経費で落ちるんだろう。俺達のもいれて30だ」

大騒ぎの中、小野監督が走って帰ってきた。

「どこだ！」

「会議室です」

ドアをノックすると

「どつぞ」

と言つ声が聞こえる。

ドアを開けると正面にニコヤかな薫の姿があった。・・・その隣には

アカデミー賞の授賞式のプレゼンターとしてアメリカに行ったとき
1度だけ

挨拶をかわしたことがあった、あの時と変わらぬコーディリア・ビー
ナスの姿だ。

それにセリナが麗香の隣に嬉しそうに座っていた。

「ミスター・オノ！あの時以来ですね」

と握手を求められた。

「覚えていたんですね」

さすがに世界のオノだ。流暢に英語を話す。

「あなたとカオルのことルークから聞きましたよ」

「ちょうどそのことでお話があります」

「そうですか？・・・でも少し待ってください。その前に大事なお話があります」

「言ってから、薫君、君達にも関係があるんだ」

「私達にも？・・・なんででしょう？」

「勿論、スタッフにも関係があるから部屋に入れてもいいかね。

通訳を頼んで彼女達に・・・」

「いえ、私が通訳します」

「言つて、コーディネリア達にも関係のある大事な話があることを英語で伝える。」

「薫君・・・君は・・・」

「英語を話せるってこと言わなかっただけよ。」

「話せないって言ってないでしょ。だから嘘をついたことにならないわ」

「君つて、やはりあきあに似ているね。段々手に負えなくなる」

「違うわよ。逆よ。あきあが私に似ているのよ。」

「でも私、あんなに酷くないわよ。私だってあきあには手に負えないもの」

「ねえねえ、何を言っていたの？あきあって聞こえたから

サキのこと言ってたんでしょ」

「仕方がないから説明をする。」

『Oh!』と言つてから否定してくれるのかと思えば、皆ニヤニヤ笑っているだけだ。

「私達だってサキには手に負えないもの」

スタッフ達も壁際に並んで聞き耳を立てている。

カオルは話を変えるように

「監督の大事な話を聞く前に彼女達を紹介しておくね。

コーデリアのことは皆も知ってるの通りよ。じゃあ、ベス！立って」と立たしてから

「エリザベス・ターナーよ。職業は元はサンフランシスコ市警の警察官、

今はワシントン市警に移動になったの」

「ベスよ、よろしくね」

と言って座る。

「じゃあ、エバ！」

呼ばれた女性は背は低いがまるで野生のピューマのような精悍さが伺える。

「彼女はFBI捜査官のカリア・ファーガソンです」

ただ頭を下げただけだったが、女性スタッフ達にはまるで宝塚の男役のように

見えてうっとりしている。

「じゃあ次はエバね」

立ち上がった女性・・・まるでファッション誌のモデルのようだ。

「彼女はエバ・クリス、CIAの捜査官よ」

FBIといいおまけにCIA・・・彼女達の経歴って一体何なのだ。

「沙希と彼女達とは事件が起きた時に知り合ったのよ」

『やはり！』と沙希を良く知っているスタッフ達にはその一言で納得してしまう。

「次はジエシー・・・立って」

ジエシーは小野監督に親しげな笑顔で立ち上がった。

おやつと言つ顔でじつとジェシーを見つめる小野監督。

「彼女の名前はジェシー・ルーク・・・」

「あっ！」

と声をあげる小野監督。

「監督、そうよ。彼女がルーク監督のお嬢さんなの」

「君がああジェシーなのかい？」

「そうよ、叔父様。私、変わったかしら」

「ああ、女らしくなったよ。あの頃は男みたいな格好だったじゃないか」

「もう10年以上も前よ、私だつて変わるわよ」

「はははは、そうか・・・もう10年にもなるのか。で、今は何をしているの？」

「監督！それは私の役目よ」

とオノ監督を睨む薫。

「あつ、ごめんごめん。じゃあカオル君、お願いするよ」

「彼女はね、アメリカに帰ったらワシントンで会社を立ち上げるの。」

その会社の主流がオクトのワシントン支局なの」

「じゃあ」

「そう、サキが開発した商品の製造販売よ」

「ああ、あきあ君がアメリカで発明したつてあれか」

「それがメインだけど、あのモバイルやナビゲーションシステムもね」

「頑張れとしか言えないけどね」

「それで充分ですわ」

ジェシーが座った後もうセリナしか残っていないので呼ばれる前に

立つ。

「彼女はセリナ・イボン。彼女のこと知っている人は？」

誰も首を傾げて答えない。名前から有名な人はいない・・・だろう。

流石はオノ監督だ。素性が一目でわかったと見える。ニヤニヤ笑っている。

「麗香はどう？セリナに覚えはない？」

さっきは名前だけの紹介だけだったから、知っているかどうかは判らない。

うくとセリナを見ているうちに、どうしてか沙希の顔が重なった。とたんにはっとして立ち上がる。

そしてテーブルの反対に周り、両手の親指と人差し指で長方形の枠を作り、

その中にセリナを当てはめる。

じっと見ていてゆっくりと手をおろした。顔には笑顔がある

「どうやら判ったようね。じゃあ、麗香。セリナの職業を言って見て」

「宇宙飛行士よ」

宇宙飛行士？・・・皆が顔を見合わせる。どうしてこんなところに宇宙飛行士が？

「どうしてわかったの？」

「なんとなく見覚えがあったの。でも顔じゃないわよ。身体つきなの。」

それにどうしてか沙希の顔が被さってくるのよ。

だから手で画面を作って確認したというわけ」

「その画面がモバイルの画面というわけね」

「そうよ、だって身体であんな告白する人って始めて見たもの」
カオルの通訳で顔を真っ赤にして腰を下ろした。

横にいるコーデリア達がニヤニヤしながら顔を覗き込む。

「最後に」

薫は日本語で言ったが、スーッと立つと微動だにしない。さすが軍隊出身者だ。

「デイブ・イボン・・・セリナの父です。」

これからはジェシーの会社で警備を担当します」

という敬礼まではしないがきりつとした礼をした。

「それでは、カオル君、君達とスタッフの皆に報告すると共に
ヨーロッパに行くスタッフを選抜する」

「ヨーロッパ？」

「選抜？」

「どういうことですか？・・・話が見えませんが」

カオルも通訳をしながらヨーロッパというから沙希と結びつけてドキツとしたのだが、

何を言うのかオノ監督の言葉を待つ。

「実は今朝ルーク監督から連絡があった」

「パパから？」

「そうだよ、君のパパから連絡があったんだ」

「それはもしかしたら」

「君達の頭に浮かんだのは正解だよ。アキアのことだ。」

今はフランスにいるがイタリアに渡った3日後にバチカンで

ローマ法王と謁見することになったんだ。

これはバチカンからの発表でローマ法王自身が謁見することを熱望されたそうだ」

「ローマ法王が？」

キリスト教では一番位の高い方だ。その人がどうして？

熱心ではないがキリスト教信者には変わりないコーディネリア達・・・
もう声がでない。

「だから上に言ってヨーロッパに行く許可を得てきた。
幸いニュース番組を撮るという口実でヨーロッパに行けることにな
った。

出発は2日後だ。わしを入れて6名、どうしてもそんな人数になつた
かと言えば

アメリカ側がルーク監督を入れて6名だから数を合わせたただけだ」

「そのスタッフ達はサキの専従班なんです」
とコーディネリアが言った。

「専従班？・・・それは何だ？」

「パパツたら、サキが動くと事件を呼ぶって言って
サキを四六時中专従班が撮り続けているんです。

勿論、ライブシーに影響がないようにですけど」

「ジョージはサキ達がアメリカに来るときにどうして日本からつい
て来なかつたって
凄く後悔しています」

「ああ、ハワイでのテロ、航空機爆発未遂事件のことだろ」

「それだけじゃないんです。叔母のマチルダ・イルダへの強盗事件
がありました」

「そんなことがあつたんだ」

「ですから、次の日から専従班を作つてフィルムを回してきたんで
す」

「それから何かあつたのか？」

「ええ、私とベスはその日から目の当たりにしました。

それはもう、あきれるほどいろんなことがあつたんです」

とコーディネリアが言った。

「そんなに？」

「ええ、馬泥棒を捕まえたり、大きな岩を蹴りつぶしたり話だした
らきりがありません」

「私、そんなの見たことないわ」

「当たり前じゃないの。そんなフィルムを見ることよりも

エバもカリアもセリナも大変な事件や事故を実体験済みじゃない」

「それはそうだけど私に会う前のサキのこと見てみたいもの」
セリナの言葉にエバもカリアも頷いた。

「わしもそのフィルム見たくなつた。ヨーロッパでジョージに録画
を頼むよ」

「監督！それよりヨーロッパへ行くのつて誰か発表してくださいよ」

スタッフが訴える。

オノ監督の口から発表された5名の人選には悲喜交々だったが
結局はスタッフが納得出来るものだった。

選から漏れたスタッフは

「あきあの行動は絶対に見逃すな」

とはっぱをかけることを忘れなかった。

「では、行こうか」

「どこに？」

「勿論映写室さ」

「いいんですか？ヨーロッパへ行く準備をしなくても」

「準備？・・・そんなもの半日もあれば充分さ」

「でも機材とか・・・」

「それはスタッフが全てやってくれるさ。

私が信頼するスタッフは優秀だからね」

コーデリアはオノ監督と話をしながらこの人の映画に出たいと強烈

に思った。

「監督！お話があるんですけど」

「何だね」

「私とカオルとの映画の話、聞いていると思いますけど」

「ジョージがシナリオを書くってあれかい？」

「カオルから監督も参加されると聞いています」

「ああ、ジョージに会ったら参加を申し込むつもりだよ」

「その話、一年伸ばしてほしいんです」

「どうして？」

実は・・・とお腹をさする。

驚いたようなオノ監督の顔だがすぐに察したようだ。

「アキアの？・・・」

頷くコーデリアに

「じゃあ、ここにいる全員が？・・・」

全員の返事を見て

「アキアめ・・・なんという羨ましい奴！」

監督の吐く言葉に

「か・ん・と・く！」

という非難の声

急いで話を変えるオノ監督。

「そうだ！コーデリア！」

・・・君の喜びにつけ込むようで悪いんだが・・・あっ、ここだと
と映写室のドアを開けてみんなをそれぞれの椅子に案内する。

レイカの横にカオルが、その横にコーデリアが座りその横にオノ監督が座って

話を続ける。他の皆は2列、3列と別れて座って、

監督がコーディネリアに話す内容を聞いている。

「実を言うとコーディネリアに出てほしい企画があるんだ。勿論、主演だよ」

「でも、監督。私さきほど言ったように」

「だからだよ。それにこんな偶然って本当にあるんだね」

「えっ？」

「だから、現実にお腹が大きくなる今の君に出てほしい企画があるんだ。」

映画のあらすじはニューヨークでキャリアウーマンだった君が、知り合った日本の商社マンと愛し合い2人だけの結婚式、そして妊娠・・・けれど君のお腹が目立つ頃、

夫は会社の出張で日本に帰ったんだけどいつまで待っても戻ってこない。

このままでは一人で子供を産むしかない。
会社に聞いたが返事があやふやで埒があかない。
そこで君は日本に夫を探しに行くことになる」

「何だか面白そう・・・でその続きは？」
とカオルが聞く。

「日本に来て判ったことはいつのまにか夫が会社を辞めていたことと、

夫がトウキョウから遠く離れた地方の出身者だったことだ。

君が日本の汽車に乗り、夫の故郷にやってくる。

そこで君が知ったのは夫が広大な土地を持つ名家の跡取りだったことだ。

父親が亡くなり、跡を継がなければならなくなった夫、

その夫に逢いに家を尋ねていった君は当然の如く追い返されてしま

う。
でも村に仮住まいをした君を最初は物珍しげに見ていた村人達も

君の天衣無縫な明るさで次第に心を通わせていき、
そして村人の助けで君は夫に逢うことになる」

「それで？ねえ、監督！その先は？」

「6人姉妹の3番目の長男という夫は姉達の監視の中自由になれな
かったが

アメリカ人とはいえ跡取りの正式な妻とお腹の子のことは無碍には
出来ず

家には入れたがアメリカ人である君の合理的な精神と

日本の伝統を頑なに守る旧家の姉妹との考え方の違い・・・

病弱な母親がはらはらする日米の対決となるんだ」

「この話、面白いわ。続きは？」

「いや、その後の話は出来ていない・・・というより無理に作らな
い」

「無理に作らない？・・・どうして？」

「この先はコーディアのアメ리카での生活観、

そして日本に住む女優達の生活観・・・

その違いをリアルに表現するためにシナリオはつくらないんだ」

「シナリオはなし？・・・じゃあ、あのTVの・・・」

「君はあれを見たのか」

「ええ、ジョージに見せられたわ。だから今撮影中の女優達でやっ
たの」

「ほう、君達だけでやったのか」

「はい、ジョージがフィルムに撮ってあるわ」

「それも録画してもらうことにする。で、アキアは？」

「勿論、サキがいなければ成立しないわ。・・・じゃあ・・・」

「そうだ、アキアには5人姉妹の5女をやらしてもらうが、あくまで
も脇役だが長女にはカオルだ」

「私が?・・・でも私も脇役・・・よね」

「そうだ。それも重要なね。主演はコーデリア・ビーネス・・・この映画が2人の前哨戦だな」

「いいわ、私絶対にやりたい。・・・でも監督!シナリオがないって」

「そう何もなかったら話が進まないかとんでもない方に行ってしまう。」

「だからエピソードだけは作っておこうと思う」

「何か力が入りそうね」

「監督!さっき私に言いましたよね。・・・だから出てほしいって。」

あの言葉の意味が引つかかって・・・」

「ああ、あれはね。君のお腹が目立つ時に映画を撮りたい、と言う意味だよ」

「お腹が目立つとき?」

「ああ。シナリオの無いリアルな映画だから、お腹に詰め物をした女優なんて撮りたくない。」

君が妊娠したと聞いたときは天の啓示だと思ったね」

「でも私の妊娠のこと知ったのは、そんなに時間が経っていないでしょ。」

「どうして?・・・この企画そんなに前から?」

「実をいうとね、アキアが渡米する前に2人で映画のことを話す機会があったのさ。」

そしたら彼女がこんな話、面白いとは思いませんかって言い出したんだ。

その上で近い将来、ハリウッドの女優さんの主演で出来たらいいですわって言うんだよ」

「じゃあ、この企画ってアキアの原作？・・・」

「ああ、そうだよ。わしは彼女の作った話をただそのまま伝えただけだよ」

「アキアったら、そんな話一言も言わなかったわ」

「わしもさつきまではただの話だったんだよ」

「この映画、私も出たい」

と言い出したのはレイカだった。

「レイカ！あなたは・・・」

「いいえ！確かに私のスケジュールって今、一杯です。

でもお話を聞いてこれ、絶対に出なければ一生後悔するって思いました。」

礼子！いいわね」

とマネージャーの吉田礼子に言った。

「仕方ないわね。・・・私も今のお話を聞いていて

必ずあなたは出演するって思ったから仕方ないわね。

そのかわり克蘭クインまでとアップからのスケジュールは、きつくなるからね。わかってる？」

「それぐらいの事わかってるわ。監督！いいですよね

「あははは、君にはかなわん。

でもどうせ夫婦で出演することになるからマアいいか」

「夫婦でって？・・・まさか」

「ああそうだよ。コーデリアの夫役はレイカ、

君の夫であるタカシ・ヒリユウを考えている。

アキアが現場にいるのなら変な役者はいれられないからね」

「うわゝあの人喜ぶと思います。」

最近アキアとの仕事がなくなって刺激がないって毎日ぼやいていますからね」

「あははは、彼らしいね」

「ということは監督にはキャストが？」

「ああ、アキアが話すのを聞いていて、

すぐに映像の中で動き回る女優や男優達の姿が見えたんだよ」

「では？」

「カオル！君の思っている通りだよ、アキアがキャストされる以上何も知らない者を多くは入れられない。だから今までに共演した者を使う」

「監督！ニューヨークの話もあるってことは、

ハリウッドの俳優も使うんですか？」

「そうだよ、ニューヨークでのロケでは君の家族や友達、

2人のマンシヨンの住人等いるんな人が出てくる」

「じゃあ、今撮影に参加している連中を使ってあげてください。

アキアと同じ映画に出れるなら地の果てまで飛んでいく連中ですか
ら」

「ジョージに頼もうと思っていたんだが・・・それはいいな」

「はい」

と嬉しそうに返事をして椅子に背もたれに身体を預けた。

聞いているアメリカの姉妹達もドキドキしながらじつと聞き耳を立てていた。

「ではキャストのことわかっている人だけでも教えて・・・」

「いいよ。勿論主演はコーデリア・ビーナス！・・・君だ。夫には
タカシ・ヒリユウ。」

彼の姉妹達には、長女がカオルくんが、

次女にはTVで一緒だったサナエ・イトカワを予定している。

そして三女は君だ、レイカ」

『やった〜』というように右手で拳をつくり真上に振り上げた。

「四女はメグ・イワサ、五女は勿論アキアだ」

「ヒヅルは？・・・ヒヅルは出ないんですね」

カオルの嬉しそうな顔にオノ監督は

「君の天敵のヒヅルかい？・・・あははは残念だな、君をがっかりさせて。」

実を言うと主演はコーデリアだが、ヒヅルもそれに準ずる大事な役になる」

「大事な役？」

「それは言わない。」

いくら出演するっていつても、君達にも謎がある方が楽しみじゃないか」

「それはそうですけど」

とぷつと頬を膨らませるカオル。

「君にとっては悪魔のようなヒヅルでも、

この映画はコーデリアとヒヅルが要となるんでね」

「ふふふ・・・私、ヒヅルとの共演も楽しみ、

あの子のことは今、撮影中だからよくわかってるつもりよ」

「それじゃあ、君達が見たがっているアキアのフィルムを見せるよ。」

これは市販のDVDと同じものだ。時間を合わせるために少し切つてあるが、

貞子師匠のクレームによって全てを見れるように

始めから終わりまでの編集をしなくてはならなくなった。

わしはコンピューター処理というものは判らない。

だから昔からのフィルムを切ったりつないだりの編集方法をとっていた。

麗香君、君の謡の箇所を1箇所だけ切ってつないだところがある。良く聞いておかしかったら言ってくれないか。

修正するか、もしくはもう一度録音してもらわなくてはならない。あとの最終処理はコンピュータ技師にやってもらうつもりだよ」

「じゃあ」

といて場内が暗くなりスクリーンに舞妓姿のアキアの姿・・・

「うわ〜綺麗！」

「ファンタスティック！」

という声が飛び交う。

始めて見る舞妓姿はこの異国の妻達の目にどう見えているのか？・・・
ただうつとりと映像に引き付けられていく。

第一幕の桜の精の恋物語、第二幕の男女の恋・・・

前にも書いたが外人のほうがバレエやダンスを観劇する素養はできている。

そんな彼女達もサキの舞う恋の激情に身体が痺れてしまった。

その上、三幕のあのマイは一体何？

恐ろしげなマスクが割れ、白いキモノがレッドに染まった。

あれは血の色・・・別にCGではないし、小道具なんかじゃない。

あきあのことだ、マイに魔術なんて使う訳なんかない。

全て本物なのだ、

オニという化け物と人との狭間を心に込めてマイをマツた結果が今フィルムの中に全てある。

「サキって恐ろしいわね」

とコーデリアが薫に言う。

「恐ろしい？」

「ええ。私は一応演劇のプロよ。でもそのプロの私が今こうして

素人みたいにサキのマイを見た喜びでもう体が震えてしょうがないの。

ジョージがカーネギーホールで一日だけサキのマイのショーを計画しているのって判るわ。

私、猛烈にサキのマイを肉眼で見たくなった」

「私だって」

「私もよ」

「わしもそつだ」

振り向くとみんなの目がキラキラと輝いている。

デブパパにしても身を乗り出してみている。

こうして四幕、五幕が終わりフィルムを試写が終わった。

「小野監督！1箇所・・・いえ2箇所、不自然なところがありました」

と麗香が言う。

「判った・・・で、どうする？」

「こんな大事なフィルムを機械的な修正なんてされたら・・・

私、我慢だ出来ません、だから・・・」

「だから？」

「もう一度録音していただけませんか？それも録音スタジオみたいなところでなく、

舞台のあるお婆様のところで紫苑の琵琶の演奏をつけて・・・」

「わかった、でもわしも時間は今日しかとれない。どうだろう、今からでは？」

「今からですか？・・・判りました。電話してみます」

と後ろの席からマネージャーの礼子に渡された携帯電話。

「もしもし、紫苑？私よ、麗香・・・うん、元気だよ・・・うん、うん・・・」

実は紫苑にお願いがあるの……」
と話をする。

「わかった。じゃあ、すぐ行くね。あつ、それからあの舞台で着ていた着物を着るから、
着付けを志保さんに頼んでくれる？……わかった。じゃあ」
と言つて電話を切つた。

「よし！それじゃあ、おゝい！録音係り！機材を車に積めろ！」
といつてから、コーデリア達を眺めてから

「そういつわけだから、
わし達は貞子師匠の家に行くが君達は京都見物でも何でもしてたら
いい」

「嫌よ！京都見物なんて明日からも出来るじゃない。

こんなチャンスもう無いんでしょ」

「ああ、無いだろうな」

「じゃあ、私帰る！……ねえ、皆はどうする？」

「私だつて……観光なんてするより家や病院で皆と話す方が面
白いじゃない。

ねえパパは？」

「わしだつて、あのレストランでゆっくりとコーヒーを飲んだり、
皆と話をしたり……そして、マイを見る。

わしにとつて、この日本でしか味わえない至福の時なんだ」

「じゃあ、決まりね。帰ろう！」

皆が立ち上がった。

家に戻るとオーナーのマリとコウテイ達、
そしてナースのヤヨイまでもが迎えに出てきていた。

「麗香様！」

「志保さん、お願いできますか？」

「へえ、じゃあ急いで……」

「はい」

と2人で先に家の中に入っていく。

オーナーのマリはそれを見送っていたが、すぐに振り向くと

「お帰りなさい。皆さんお疲れになったでしょう。」

さあ、お上がりになってごゆっくりなさって」

と見事な英語で言うのだった。

全くこの家の人達は……とため息をつきながら靴を脱ぐ。

身近にこれだけ会話が出来る人がいるって……

日本に来る前に日本人は英語は勉強しているが

英会話が出来る人は少ないって聞いてきたのは全く嘘みたいだ。

「やあ、真理さん」

「これは小野監督。お話は聞いております。さあお上がりになってください」

「わかりました。おゝい！機材をおろして運び入れてくれ。車は駐車場にな」

と言ってから、真理の後に続く。礼として貞子に先に挨拶しなければならなかった。

異国の妻達は看護師のヤヨイに

「一度病室に帰って気楽な服に着換えてきてください。」

今は健康体ですけど、やはり締め付けられる服は駄目ですから」

「はい」

と言って素直に従って地下へと向かう。

楽な服に着換えると皆は集ってから一階のマイの稽古場が上がっていった。

そこには大勢の女性達が思ひ思いの格好で座っていた。華やかな舞妓達、

ナース姿の女性達、紺色の制服の女性達、聞いてみると婦人警官だという。

ベスにとって国は違うが同僚に会ったと言う気安さがある。

オノ監督のスタッフ達は舞台下で忙しく機材の設定をしている。

コーデリア達は邪魔にならぬように

ジェーンママとマーガレットママとデイブパパが座るパイプ椅子の横に、

出来ていた空きスペースに腰を下ろした。

皆の後ろにはシヨウとヤヨイがパパとママ達の後ろにはユミがそれぞれ通訳のためにスタンバイしている。

日本の着物に着替えたレイカが舞台上上がる。

後ろからマンドリンのような楽器を持って続くのは

先ほど電話で話していたシオンという子だろう。

そういえば撮影所で見たフィルムの中にあの子が映っていた。

「じゃあ、1回テストするよ」

と舞台後ろの壁につけられた大きなスクリーンに映像が映された。それと共にシオンの楽器から『ジャジャーン』と不思議な音色がこの部屋の中に鳴り響く。

低いテノールの歌が流れ出した。

一度聞いたがこうして新たに、しかも肉声で聞きなおすと

体中の血がゾゾゾと逆流する感じた。歌詞は日本語だから判らな

いが

このレイカが日本のトップのシンガーというのが納得出来る。宇宙にレイカのMDを持っていったセリナなんか大きな目を開けたまま固まってしまっていた。

「よし、ストップ！」

オノ監督の声で演奏と歌が止まった。

「二人ともさすがだね。映像とのズレは後で直そうと思ったけれどそんな手をかける必要もないね」

「ちよつと、ちよつと二人とも」

とグランマザーが声をあげた。

「二人とも前のときよりズツとズツと味わいがあったって深みもあるんどっせ。」

またまた成長されましたなあ」と感心しきりだ。

二人ともコウテイに出されたジャパンテイで喉を休めていたがグランマザーの言葉に

振り向いて頭をさげている。

「凄い！凄い！レイカも凄いけど、あのシオンも天才ね・・・」

私本当にここに来てよかったって思っている」

それを聞いていたジェーンママが

「私もセリナの言うこと賛成ね。いつもハリウッドは

凄い人ばかりがいる凄いところって思っていたけど

ここはそれ以上のところね。ママもずつとここで住みなくなっただわ。

それにあの温泉ってアメリカに無いし」

「私もハリウッドとこのキョウトと掛け持ちしようかな。

ジェーンママが言うようにハリウッドにはここの温泉がないものね。

あの恩泉水の化粧水とミネラルウォーターは
大量に送ってくれるように頼んだけどね」

「えっ？そんなのあるの？私聞いてないわよ。コーデリア！」
ベスが大きな声で言いかけたが慌てて小声で文句を言う。

「あらあら、ベスは何にも聞いていなかったの？

サキ達がアメリカに来たときから持っていたのに」

「だってあの化粧水アメリカの有名メーカーの化粧ビンだったし・

・
確かに無臭だったからおかしいなって思ったけど」

「ベスはそこが甘いだよ。私、すぐに遣わしてもらったの

。私アメリカのメーカーものが一番だって思ってたけど
でも。次の朝ビックリよ。

肌の潤いってもう・・・それはそれは頬に手を当てるとプルンプル
ンして

手のひらにくつつくのよ。だからアンナに言って少し分けてもらっ
たの。

その時アンナに聞いたたら日本にいけばいくらでもあるわよって、そ
れも無料だよ」

「それって、温泉に入ったときのよ様な効果があるの？」

とセリナが聞く。

「後は私が話しましょうか」

とシヨウウが言った。

「あれは添加剤なしの真正正銘100%のここの温泉水なんです
。私も使ってみてビックリした一人です。

姉妹達に聞けば、化粧水なんていくらでもあるから自由に使いなさ
いって」

「ねえねえ、さっきのことどうなの？」

とセリナがせつつく。自分の荒れ肌を一瞬にして治した温泉だ。

「それは温泉に生きるウイルスの期限が1週間だからそうです」

「1週間?・・・1ウィーク?」

「そうハヤセの里から送られてきて皆が使うようになってくるときってもうそんなに期限がないでしょ。」

それに皆はここで直接温泉にはいつているから、

もう化粧水の効果は判らないっていつています」

「ふくん、ウイルスの賞味期限かあ、それでもあんな効果があるって・・・」

「そうですね。ウイルスがいなくなっても普通の化粧水の何倍も効果って、

調べられたミオ先生もアキコ先生も驚いているんです」

「これ市販されているんですか?」

「ええ、市販分はわざと1週間過ぎてから販売されます。」

だって奇跡のような温泉効果を世間に知らせること出来ませんもの」

「そうねえ、そんなことすれば世界中の女性がパニックになってしまっわね」

「でも市販されている化粧水・・・」

グランマザーの名前をとって『サダコ』って言います・・・

凄く評判がいいんです。

東京のミサオ叔母様が出しているレストランに化粧水ではないんですが

ミネラルウォーターをお客様に出しているんですが、

それはもうお代わりがひっきりなし、

空のペットボトルまで持つてくる豪の女性もいるんです」

「そうよねえ、水っていつてもあんなに美味しいんだものね。その上に効果があったら評判よねえ」

とエバが言うのをチラツとジエシーを見て笑うシヨウ。それをさすがに見逃さなかったコーデリア。

「あんだ達！何をこそこそしているの？」

「ふふふ・・・」

と横から笑い声がする。ユミだ。

「シヨウ！ジエシー！コーデリアに隠れて何かをしようとしたあんだ達が悪い」

そういつとジエーンママと顔を見あわせ笑っている。

舞台ではオノ監督とレイカとシオンがまだ打ち合わせをしていた。

「さあ、シヨウ。言っちまいなよ」

とユミがいう。

「そうね。ジエシー・・・どうしようか」

「まあ、ここまで判ってしまったらしょうがないか」

「どうということなの？ジエシー」

カリアが聞く。

「実はね、サキ達とテキサスで出会った最初の日だったの。

シズカに頼まれたのはサキが作った製品ばかりではなかったわ。

シズカはアメリカの女性に多いそばかすや肌荒れに

この化粧水がどうかと思っていたらしいの。

だから大量にアメリカに化粧水を持ってきていた」

「あら私、そんなの聞いていない」

「だってコーデリアに言ったら、

あんたはたくさん化粧水を取り込んでしまっしょ」

「まあ・・・そうだけど」

皆クスツと笑う。

「まず、あなたが使ってみなさいってシズカに渡された化粧水。寝る前に化粧を落としてから使ったの」

「うん、それから？」

皆の顔がジェシーに寄っている。

「朝、起きてまず手のひらを頬に当ててみたの、もうビックリ・・・
手のひらに肌がくっついてプルンプルンいつているの。」

鏡を見てもう一度びっくり、ファンデーションで隠していたけれど私、

そばかすで一杯だったの。

それが小さいころからの私の悩み・・・

それがどうお、全部といわないけれど少なくなっているのよ。

私、ママとシズカを呼んだわ。

ママは私を見て『まあ』と言ったつきり固まってしまったわ」

「それはそうよねえ、小さいころから素顔を見ているわたしにはもう別人だったわ」

「シズカは『どうやら効果があったみたいね』ってニッコリ笑うの。シヨウが通訳だったから、そこにいたわよね」

「ええ、でも私が見た限りそばかすってそんなに目立っていないかったと思いますけど」

「ね、私の素顔を始めて見た人もそう言うわ。
長年鏡を見続けた私にはもう半分に減った・・・としか見えなかった」

「でもさあ、昨日温泉に入った時、ジェーシースツピンだったでしょ。」

そばかすなんてあった？」

「へへへ・・・化粧水を使い続けたおかげで全部消えたの」
「全部消えた？」

「じゃあ、昨日温泉で私の肌が綺麗になったでしょ。」

あれと同じ効果がウイルスの消えた化粧水でもあるっていうの？」

「そう、不思議だけどね」

「凄い！私友達に勧めるわよ。悩んでいる人つてとんでもなく多いわ」

「どうお？売れると思う？」

「そりゃ売れるわよ。それにミネラルウォーターだつて売れると思う」
「う」

「実をいうとね、今度立ち上げる会社のメイン商品にしようと思つてるの。」

それだつたら、女性ばかりの会社つておかしく見えないでしょ」

「いいわね、でも化粧品会社にするの？」

「ううん、扱う商品つて化粧水に限定できないでしょ。」

化粧品を扱うのに免許がいるなら取つてもいい。

でも会社の名前は『オクトコーポレーション』、

結局はサキの作った商品が会社の利益のほとんどだと思つから」

「それはそうよね。サキのBBXつてきつと売り出したとたんに品切れになるような商品よ」

「それが頭が痛いところなの」

「なるようになると思つわ。」

でもさ、あんた達はとんでもなく忙しくなるのは火を見るよりあきらかだね。どうする？」

「帰つたら、まずは女性達の面接をしなくてはならないわ。」

ホワイトハウスからは何人かの面接依頼が来ているし」

「えっ、もう？」

「そうよ、あんた達にも面接官を頼むわよ」

「うへえ、面接をやるつて考えもしなかった」

「しっ……始まるわよ」

夢を見ているような時間が過ぎていった。

1幕を終わったら収録は終わりだったが

グランマザーがそれを許さなかった。ここまで見たのだ、

最後まで見せてほしい……と言うのだ

そりゃそうだ、誰だってそう思う。2幕が終わり3幕……

面が割れ、白い着物が真っ赤に染まった。

「あれって、サキの汗だそうですね」

シヨウが言った。

「真っ赤な血の色はサキの汗？……」

頷くシヨウに

「そんな馬鹿な……汗が真っ赤な血の色に変わるなんて……」

コーディネアの声にグランマザーの声が飛ぶ。

「なあなあ、コーディネアはん。あなたの言うことうちにはわかりません。」

けんどあんたが言いたいことわかりませ。

今見たこと疑うておりますやろ。へえ、うちだって最初はそうどした。

この舞台上で、小沙希ちゃんが最初に舞って見せてくれたんどす。

流した汗が真っ赤な血に変わったんどす。

そんなこと嘘やおもても、自分の目の前で事が起こったんどす。

信じられまへんどしたけど、ほんまやったんどす。

こんなこと誰だって出来るもんやおまへん。

小沙希ちゃんやからこそ出来た……うちそう思います」

納得出来ないが、グランマザーの口から出た言葉、コーディネアには納得できた。

再度始まったフィルム・・・華やかな舞妓達の舞で終わった・・・皆沈黙だった。
頭の中にヨーロッパの異国でニコリと笑う小沙希の顔が浮かび上がってくる。

そのときだ。

「ハロー・・・誰かいませんか？」

と庭先から声が聞こえた。

慌ててコウテイの一人がカーテンを開けるとガラス戸の向こうに背の高い黒人の女性が立っていた。

黒人と言ったけどよく見ると白人とのハーフかクォーターか

白人が少し日に焼けたぐらいの肌の黒さだ。

「ナタリー！」

と言って立ち上がったのはミオ先生だ。

あのいつも落ち着いているミオ先生があんなに慌ててガラス戸を開けた。

あっ！裸足で庭に飛び出して二人で抱き合って飛び跳ねている。

みんな呆然とこの様子を見ていた。

コウテイの一人が慌てて玄関から庭に回ってサンダルを渡した。

足の裏を払ってそれを履くミオ先生。

しゃべり続けているのが玄関に回ってもその声が聞こえている。

みんなあっけに取られて誰も声を上げる者はいない。

オノ監督だってスタッフ達だって機材を片付ける手を止めてこの様子を見ていた。

廊下に顔を見せると女性の肩に手を置いて、皆に紹介するように1ツ歩前に押し出すと、

「皆、紹介するよ。私が留学したとき、高校生の時1年間と大学の

1年間、

そしてインターンの時の3年間。

私は彼女の家にホームステイしていたの。

名前はナタリー・ウッズ、今はワシントン州立病院で産婦人科の副部長しているわ」

「産婦人科の？・・・というと私達の？」

「そういうこと。ナタリーはあんた達の主治医になるの。だからこの日本まで来てもらったというわけ。

ちようど5名の患者達が入院していて、

今まさに新しい命を誕生させようとしているわ。

それを手伝ってもらって慣れてもらおうと思ったの」

「慣れるって？・・・ミオ！私だってもう千人以上この手で取り上げているのよ」

心外だというようにミオに文句を言うナタリー。

「でもね。ここにいる妊婦さん達の赤ちゃんの誕生の仕方って普通の人と若干異なるの。

ねえアキコ先輩」

「そうよ、私だって始めてマリさんの赤ちゃんを取り上げた時には本当に肝を潰したもものね。

それもマリさんだけじゃなかった。サキちゃんの子供を産んだ全員なの。

それはそれは厳かだったわ」

二人の女医の言うことに外人妻達何やら凄い予感がする。

その時だ。玄関の戸が開く音がして

「ただ今」

と行ってドヤドヤと廊下を歩いてくる音がしたる。

『ガヤガヤ』ととにかく煩い。

顔を見せた全員が静々とグランマザーの前に座った。

グランマザーはもう零れ落ちそうな笑みで一杯だ。

コウテイ達も、もうニコニコ顔だ。

「お婆様！ただ今、戻りました。

これより少しお騒がせするやもしれませんが、よろしくお願いしませぬ。

「何をいわはるんや、皆自分の家に帰ってきただけやおへんか。

遠慮なんか・・・何を言うとするんどすか」

笑いながらもそう叱るグランマザー！

「それを聞いて安心しました。志保さん勝枝さん、そして皆さん、ただ今」

「おかえりやす」

コウテイ全員が頭を下げるがもう満面の笑顔だ。

するとくるつと振り返って

「みなさん！、ただ今！久しぶりの我が家です。

ゆっくりと生き抜きますから皆さんもよろしくね」

と挨拶する。見た目若いのに何だか気おされるような凄い貫禄だ。

「あの人がサキの正式の奥さんになる、リッコさんなの」

「へえ・・・でも何だか凄い貫禄ね」

「あの子、子供が産まれて変わったからね」

とミオ先生。

横から

「ヒヅルがここにいたら言うでしょうね。

さすが元スケバンのリッツチャン先生ねってね
とカオルが座りながら言う。

「スケバン？」

聞きなれない言葉に聞きなおすエバ。

「常に成績がトップなのにスケバンとして暴れまわってらしいわ
「暴れまわる？」

「あの子にはどうしても耐えられなかったことに遭ってから変わっ
たんだって。

それまで誰にも優しい子だったのに、

男を毛嫌いするようになって町のチンピラや不良学生を
叩きのめしていたって聞いたわ」

「オウ！それなら判る。正義のヒロインよね。でも先生って？」

「あの子がハイスクールの時から、ジュニアスクールの子の家庭教
師をして

最後には日本で一番のそして一番難しい法科に入れたの。

そしてサキがアメリカに行く前迄ヒヅルとミツホの家庭教師をして
いたわ。

今は医者を目指そうとしている二人の女の子の家庭教師よ」

「サキの正式の奥さんって判るような気がするわ」

「それでもサキは遙か上に行く気かん坊だからね。あんた達も妻と
して自覚するのよ。

戒めって大事だからね」

「カオルだって妻でしょ。他人事みたいにいわないで
とコーデリアが言う。

「だってサキって私には手に負えないもの」

「私だってそうよ。」

私あのマフィア最大のエドガー一家の悪い奴を叩きのめす現場にい

たんですからね。

私だってCIAで命を何度も落とすような・・・アワワワ」
と口を押さえるエバ。さつきカオルに言われたこと思い出したのだ。
慌てて口を閉じるが遅かった。
冷たい目をしたカオルがエバをジッと見て言う。

「それから?・・・」

どんな悪党との戦いで窮地に陥った時よりも、今の方が恐ろしい。
隣のキャリアが気の毒そうにエバを見ている。

「いいから、言って御覧なさい」

言葉が無茶苦茶冷たい。

「私だって・・・CIAで・・・命をかけた戦いって・・・幾度も
経験したけど・・・」

あんな戦い方って前代未聞、恐ろしくて腰が抜けました」
最後は早口で言い終えた。

「ふん、腰が抜けたの。それから?・・・」

「これが力の違いだって実感しました。

男達を叩き伏せましたが誰一人、傷一つ付けなかったのが不思議で
した」

「不思議だった?」

「ええ、でもサキと一緒に時間が長ければ長いほど

その笑顔と優しさで不思議だったことが判かったんです。

だからでしょうか、もうその時にはサキと別れる事が出来なくなっ
ていました」

「そうよねえ、それで誰しもサキに惹かれていくのよね。不思議を
もう一つ言つと・・・」

「それ私にも判る」

「じゃあ、コーデリア!言って御覧なさい」

「サキ一人の旦那さんにこれだけの妻達なのに誰も嫉妬するものは

いない」

「そう、正解よ。でもこれだけは私判らない。いくらハヤセの女と言っても、女は女よ。」

嫉妬は女の専売特許だけど誰一人いないのよ」

「それはきつとあれよ・・・」

「あれって何よ。はつきりいいなさいよ。コーディネア！」

「サキって旦那さんが偉大だから・・・」

サキを独り占めなんて出来ないよ。恐れ多いもの」

「そうかもね・・・いいきつとそうよ」

とベスが言う。

「そうね。サキだからってことか・・・」

ねえ、サキの奥さんになれた私達って幸せなんだよね」

「おまけに姉って呼んでくれるし」

とセリナ。

「それに凄い人」

とベス。

「天才女優だし、天才発明家・・・」

とカリア。

「不思議な魔術を使う魔女」

とエバ。

「可愛さ100%」

これはジェシー。

ジェーンママもマーガレットママもデイブパパも横で笑っている。

「姉さん、もう一つ忘れてるわよ。」

サキの中の10%の男ってそれこそ超ど級ってことを」

これはミオ。横でナタリーが目を大きくして聞いている。

「そうね、それに妊娠は100%」

とコーデリアが笑う。少し照れ笑いだ。

ナタリーはそんな彼女達を見て驚きで一杯だった。

確かにミオから・・・彼女から・・・

いつの日だったかアマゾネスのハヤセのことは聞いていた。

シヨックを受け一晩中泣き明かしたことがある。

親友の血族の悲しい歴史・・・嘆き悲しむことしか出来なかった。

そんなある日、と言っても最近のこと、

ミオから電話があつて『やってみてほしいことがある。

勿論、産婦人科に関するのだが詳しくは直接説明したい。

だからすぐにでもジャパンに来てもらいたい。

飛行機のチケットは、すぐにも届くはずだからそれが届き次第、

バック一つでいいから飛んできて・・・』

それだけ言つと電話が切れたのだ。

一体何？数年も連絡が無かつたくせに、この強引さは相変わらずだ。

でもミオに頼まれると嫌とは言えない。だからこうしてジャパンに
来た。

初めてのジャパン、初めてのキョウト、そして初めてのジャパニー
ズハウス。

なのにこれって一体何？・・・数人いた男性は帰っていった。

残るはこの広い部屋に沢山の女性だけ。

もう余りアメリカでも見られなくなったナースの制服を着たたくさ
んのナース達。

日本の伝統の着物を着たあれがゲイシャガールなのか。

そして紺色の制服・・・あれは一体？・・・

そうか、日本の映画で見たことがある。確か警察官だ。

さまざまな職業の女性達・・・そして・・・そしてコーデリア・

ビーナス！、

いくら世の中のこと知らない朴念仁のナタリーでも知っている有名なハリウッドスター……

そんな彼女がどうしてここに？……えっ？……まさか？

……慌ててミオの顔を見る・

ミオもそんなナタリーの心の内を読んでいた。

「ナタリー！あとで皆を紹介するわ。その時に全てを話してあげる。でもたぶんナタリーが思っている通りだよ」

とミオが言った時、『パタパタ』と足音。廊下から姿を見せた若いナースが

「ミオ先生！アキコ先生！ヒワコ様とケイト様が産気づかれました」

勿論、シヨウとユミの通訳付だが、その言葉に部屋中が騒然となった。

ミオは急いで立ち上がると大きな声で

「アキコ先輩！……ヤヨイさん！あなた達はヒワコ姉さんを頼みます。」

ナタリーはケイトを……私が介助にまわるからね……」

部屋を飛び出す二人に

「さあ、ナタリー……ここはあなたの腕の見せどころよ」

訳もわからぬままミオに腕をつかまれて部屋を出て行くナタリー。

部屋にいた4〜5人のナースが後を追っていく。

ジェーンママと抱いていたアリサをディブパパに渡したマーガレッ

トママも

黙って部屋を出て行った。

4人のコウテイ達も後を追う。

「ねえ、私達も行かない？」

「ええ」

と真つ先に立ち上がったのはジェシーだ
慌てて6人が立ち上がり、後を追いつ出した。

「これこれ！あんだ達！」

グランマザーがそう叫んでいるが、日本語だからコーディネリア達には判らない。

でも言いたいことは伝わってくる。

『これこれ、あんたら！あんたらが行つても邪魔になるだけで何にもならしまへんえ。』

ほらほら、そんなに走つて・・・もつと自分の体大事にしなはれ！』

そう言っているのだ。サキの妻となったが故にそこまで身を案じてくれる。

くすぐつたくて心地良い。

特に身寄りの無いコーディネリアとベスにとって産まれて初めて味わえる家族の味だ。

自然と頬を冷たいものが流れてくるのは仕方がないだろう。

昨日教えてもらった分娩室の前には、ママ達とコウテイ達が心配そうに立っていた。

お産は病気的一种なのだ。医療が発達した現在でも100%安全だとは言えない。

特に年を取つた女性達はそんな例をその目で幾らでも見てきている。

ジリジリするような時間が過ぎていった。

そして皆が耳を澄ませ部屋の中の様子を聞き耳たてている時だった。

一人の若い看護婦が出てきた。

「皆さん！ヒワコ様とケイト様の強いご希望です。」

どうか部屋の中で私達を見守っていてほしいと……」
そして外人妻達に向き直って、

「これは皆様方が来年経験されることなのです。その目でしっかりと見ていて欲しい。」

ケイト様がそうおっしゃっています」

この言葉はシヨウとユミの通訳で小さな声だがしっかりと彼女達に伝えられた。

頷くコーデリア達……。

防菌の白い上つ張りと大きなマスクと帽子……を着てから静かに分娩室に入る全員。

入って見て判る部屋の広さ……経験済みのセリナが

「まあ……」

とと言ったきり言葉にはならなかった。

聞くと普段は真ん中に仕切りがあり二部屋の分娩室になっているが、

今回は二人の意向によりこうして仕切りが取り払われ、

広い分娩室の真ん中に二つの分娩用のベットが並べられていると言
う。

二人の悲鳴のような叫び声が部屋中に響いている。

4人のコウテイ達がそれぞれのベットで二人の顔の汗を拭いている
ナースを見て

二人づつに分かれてナースからガーゼを取り上げた。

慌ててアキコ先生を見るナース達……

チラッとこの様子を見て軽く頷くと安心して忙しく働くナース達に
加わっていく二人のナース。

コウテイ達は二つのベットの患者達の顔の両側に回り、交代で顔の

汗を拭いている。

敬虔な部屋の中・・・

筋が伸びエバとカリアなんか胸のところで十字を刻んでいる。

危険な仕事を厭わないこの二人が経験する初めてのお産のシーン、神に祈るなんて生まれて初めてだ。

それはいきなりだった。ヒワコとケイトの二人が同時に

「ウグッ」

と叫び声が途切れた。

「あっ！頭が出てきた・・・もう少しよ、がんばりなさい！」
そんなアキコ先生の叱咤が飛ぶ。

ケイトの脚の真ん中にいるナタリーの緑の手術衣と帽子、白いマスクから出ている大きな目が一層大きくなった。

それは信じられぬものを見た驚きだった・・・

脚の間から立ち上がったナタリーは光に覆われていた。

その両の手には光り輝く小さな赤ん坊がいたのだ。

ヒワコのお産に立ち会っているアキコ先生だってそうだ。

二人の光輝く赤ん坊が部屋中を明るく照らしている。

赤ん坊達の泣き声が聞こえない。

でも、無事なのは元気に手足を動かしていることから判る。

二人の赤ん坊はナース達に渡され、きれいに拭かれている。

「さあ！ケイト！・・・女の子は無事に産まれたわよ。次は男の子、がんばって！」

今度はあつというまに男の子が産まれた。

一度産道が開くと二度目は最初ほど酷くは無い。

光輝く4人の赤ん坊・・・それはとても不思議な光景だ。

でも部屋中がとても暖かい……それは幸せな心地よさでもあった。

ナースから二人の光り輝く赤ん坊を渡されたベットで横たわる二人の母……

このことは聞いていたのだらう慌てることなく愛しげに赤ん坊を抱いている。

それからが大変だった。

肝を潰したというより固まってしまったのはナタリーや外人妻達だ。

あれは日本の姉になるヒワコの枕元に忽然とか神々しい姿が現れたのだ。

「菩薩様！」

と声をあげて頭をさげるミオ。

そして、ケイトの枕元には……

「あつ！マリア様！」

とセリナが思わず声をあげる。

その声で体が一瞬硬直するが十字をきるのは生まれてから身に付いた習慣なのか。

ナタリーも外人妻達も手を胸前で両手を硬く組み、膝を曲げて祈っていた。

日本の仏と西洋の神は静かに厳かに二人の母が抱く光り輝く双子の額に

両の人差し指をあてる。

ゆっくりゆっくりと光が仏と神によって消えていく。

やがて双子達の光は消えた。

マリア様は母となったケイトに優しく微笑みかけ、

「我が娘ケイトよ、よかつたですね。おめでとう。

母となった喜びと幼子への慈しみが手に取るように感じられます。

これからもあなた達のこと見守っておりますよ」

といつてから外人妻達に見て優しい笑みを向けられ、

「我が娘達、次はあなた達が元気な子を産むのですよ。

見守っておりますからね。

そう言つてから力チ力チに体を固まらせているナタリーに向かって

「ナタリー、あなたはもう一人ではありません。

この先あなたには素晴らしい未来がまっています。

このまま真つ直ぐに歩いていきなさい」

といつて消えられた。

ナタリーと外人妻達は床にお尻を落として泣き出してしまった。

『マリア様』に出会つた喜びなのか驚きなのか本人達にもわかつていない。

ただただ目から溢れ出た涙と嗚咽がとまらなくなっている。

やがてそれも癒えた。

顔を上げると『ボサツ』と呼ばれた仏が神々しい笑顔で

「マリア殿のいわれたこと、心に留めておきなさい。

そしてサキ殿と出会つた幸運を忘れないでおきなさい。娘達よ」

日本人には日本語、アメリカ人には英語・・・で心の中に語りかけられたのだ。

神や仏が消えた分娩室にはしばらく静寂の時間が流れた。

やがて『ホー』と一斉に大きな吐息が漏れた。緊張感が解けたのだ。

そして皆の顔に笑顔が溢れていく。
我先にベットの上の双子達に群がっていった。
『ワイワイ』とさえずるのは日本人もアメリカ人も同じなのだ。

こうして1ヶ月に及ぶ妊娠に対する検診や心構えなどをすっかり日本
本で学び、

そしてアマゾネス『ハヤセ』の一員として・・・

家族の一員として心から楽しかったといえる日本滞在が終わった。

特に天涯孤独だったコーデリアとベスにとって

生まれて初めての家族というものを味わえた嬉しさはもう口では言
い表せなかった。

特に昨夜行われた送別パーティの中でグランマザーに抱きしめられ
て

「コーちゃんもベスちゃんも、うちの孫なんえ。

それにここも京の家もあんだ達の実家なんどす。

毎年帰って来るんえ。約束どす」

と言って抱きしめられ、子供のように大きな声で泣いてしまった二
人、

今ではこの二人が孤児として孤児院で育ったことは、ここにいる全
員が周知のことだった。

グランマザーからコーちゃんと呼ばれるようになっていたコーデリ
アもベスにしても

他のアメリカの妻達も、3人のママもディブパパもおまけにナタリ
ーまでも

日本語は解せないが、グランマザーの話すほんわかとした京都弁だ
けは、

通訳なしでも判るようになっていた。不思議なことだ。

産まれて間もないが、6人の母達は我が子を連れてしばらく早瀬の隠れ里に帰るといふ。

鈴ママも菊野屋の女将も付いて行くらしい。

それを聞いたグランマザーも骨休みに里へ帰ると言い出した。

そうなれば高弟達も全員とはいかないが半数は付いていくことになった。

こうして話は大きくなり、

二人の尼のように地下で働く女性達も里には行ったこともない者もいるので

バス1台ではまかない切れなくなって、バス2台をリースした。勿論、運転手は里の女性だ。

アメリカ人達は目を輝かした。

里のことはアメリカで何度も何度も聞かされていからだ。だから本当に行って見たかった。

でも帰国があと1週間とせまったのであきらめていたのだ。だから、里に帰るといふ話に飛びついた。

妻達も主治医のナタリーもママ達も明子でさえ

あまけにこの頃には温泉等の場所は規制されたが、

デイブパパは地下のマーガレットママの部屋で泊まれる等地下の病院施設や地下の施設での行動がゆるやかになっていた。

今まで僧侶達の出入りもあり、デイブパパの人柄もわかり、おまけに産まれて来る子供の半数は男児ということもあり、

1000年続いた早瀬の『男子禁制』という規則は考えざるを得なくなつたのだ。

大勢が帰ってきたので里の中は活気づいた。

初めてここを訪れた者達は一様に驚きで一杯になる。

季節外れの満開の桜・・・

春のような風の中に舞う桜の花びら、でも桜は枯れはしない。
花が散った後から芽が出て花が咲く。自然の摂理がここでは通じない。
心地よい風が頬をうつ。
初めて里を訪れた翔や弓にしてもあまりのことに身動きすらで出来ないで居た。

「これってサキだわ」

桜の木の下でステップを踏みながらコーデリアは踊っていた。
サキとダンスをしているかのように。

「本当・・・サキに抱かれているみたい・・・」

ベスもセリナもカリーナもエバもジェシーも・・・
チェとジャクリーヌでさえ手を取り合って踊っているのだ。

ママ達やデイブパパ、日本の姉達はそんな彼女達を笑いながら見ている。

「さあさ、あなた達長い間バスに揺られてきて疲れたでしょ。
少しお部屋でゆっくりとしてから皆で温泉に入りますよ」
そういうマリの言葉にほっと肩から力が抜ける初めてここを訪れた者達。

ハヤセのアマゾネスの聖地なのだ。緊張するなというほうがおかしい。

特に故郷というものを持たないコーデリアとベスにとっては、
ここが生まれて初めての持った故郷となる。

こみ上げて来るものがあっても不思議ではない。
いち早く気づいた翔と弓が二人の肩に手を回し『トントン』と二度
三度軽く叩く。

そんな二人にそっと頭を預けるコーデリアとベス。

それを見届けたかのように薫風が皆を包み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1920t/>

まほろばの虹

2011年5月20日12時29分発行